

横島MAX(よこしまっくす)な魔法科生

ローファイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

横島最強!!

横島変態!!

横島のための横島による魔法科高校です。

魔法科高校の劣等生の学校生活にGS美神の横島を入れてみました。

久々にGS美神読んで、なつかしのギャグを試してみたくて超思い付き書いていたのですが、皆さんのおかげで完結にいたしました。めちゃやっちゃまった感が半端ないお話です。

横島は原作終了後かなりの修行の末最強となっておりますが、とある事情により、性格は過去のアシユタロス編前後の変態なままになっています。

102話までを第一部

103話から最終話までが第二部です。

第一部と第二部ではお話の内容がかなり異なります。いうならば明と暗です。

第一部は横島と達也たちの交流がメインです。

第二部は来訪者編を下地に横島の過去や横島という人間についての話がメインとなります。(二部は暗い話や悲しい話などもやついた話も含まれます)

入学編

：横島は実力をすべて隠し、ただの変態扱いされております。

九校戦編

・横島は実力を隠しておりますが、それでも機転と持ち前のギャグ技で切り抜けていく話です。

夏休み編

・横島と妙神山、氷室家との交流、そして、第一高校の友人との友情を育むシーンが書かれております。

横浜騒乱編

・大亜連合との戦いに巻き込まれて行き、横島の実力が徐々にバレ始めるお話です。

喪失編（前・後）

・前編、横浜事変後、横島が行方不明になる。そんな時の知人・友人達のお話です。

・後編、行方不明になった横島は記憶喪失になっていた。異国の地USNAでかつての仲間と一人の少女と出会うお話です。

来訪者編

・USNAで発生した異形の者との戦いは日本へと舞台を移し、達也達は異形の者との戦いに身を投じる。異形の者との戦い、それは横島自身の戦いでもあった。

GS美神からは、妙神山の方々と過去のおキヌちゃん。第2部からは、ドクター・カオスとマリアが参戦。

魔法科高校の劣等生からはほぼすべてのメンバーが出る予定です。

魔法科高校の魔法理論は大好きなのですが、横島にはも一部適応（九校戦時）それ以外の横島の技は適応されてません。

横島アンチ若しくは、最強司波達也が好きな方には、全然向いてません。

しかも、全員何故か横島に対しては激しいツッコミや魔法による攻撃をされ、横島は何時もオチで酷い目に合ってます。大概是本人が発端ですが……

さらに第2部に入り、横島に好意を抱く少女達が徐々に増えてきております。

上記のような感じでよかったですら見て下さい。

目次

横島入学編

1話	横島華麗に参上!!	1
2話	横島、1年E組に溶け込む!!	6
3話	横島、深雪に会うも、差別を知る!!	12
4話	横島、達也に調べられる!!	20
5話	横島、ナンパのお礼を言われる!!	24
6話	横島、生徒会室で過ごす!!	29
7話	横島、再び見習いになる!	37
8話	横島、風紀委員の仕事をこなす!!	44
9話	横島、自分の能力について考える!!	52
10話	横島、日常生活に影が忍び寄る!!	56
11話	横島、差別について思う!!	61
12話	横島、遂に動く!!	65
13話	横島、現状を掌握する!!	71
14話	横島、真由美と摩利を驚かす!!	77
15話	横島、自身の立場を知る!!	86
16話	横島、しぶしぶ了承する!!	91
17話	横島、横島はやっぱり横島である!!	96
18話	横島、達也にますます疑われる!!	103
19話	横島、珍しく真面目に勝負!!	110
横島九校戦編		
20話	横島、ライバル出現!!	118
21話	横島、デートとは涙!!	123
22話	横島、九校戦の補欠メンバーに選ばれる!!	130

23話 横島、九校戦の競技をちよつとやってみた!!

横島、九校戦の会場にのり込む!!

横島、静かに怒る!!

横島、無情にも時流れる4日〜6日目!!

横島、九島烈に過去の話を聞く!!

横島、皆に謝る!!

横島、達也達の試合を見る!!

横島、九校戦9日目、闇に踏み込む!!

横島、敵の巢に現れる!!

横島、事件の闇に踏み込む!!

横島、軍の行動に疑念を持つ!!

横島、説教を垂れる!!

横島、後始末をする!!

横島、本戦モノリス・コード1回戦出陣!!

横島、本戦モノリス・コード2回戦にでる!!

横島、本戦モノリス・コード3回戦にでる!!

横島、モノリス・コード束の間の休みをとる!!

横島、九島烈と昼食をとって、準決勝にでる!!

横島、本戦モノリス・コード決勝戦開始!!

横島、本戦モノリス・コード決勝戦中盤に!!

横島、本戦モノリス・コード決勝戦終焉を迎える!!

横島、九校戦終了、それぞれの思いに!!

横島、閉会式でダンスを踊る!!

side story

side story 氷室絹その1

265

258

250

244

239

234

229

223

215

210

206

201

195

190

185

181

176

170

165

159

155

150

143

135

	side story	氷室絹その2	270
	side story	氷室絹その3	274
	side story	氷室絹その4	282
	side story	氷室絹その5	287
横島夏休み編+SIDE STORY			
横島、	妙神山にひさびさに帰る!!		292
横島、	妙神山にひさびさに帰る!!その2 (プレッシャー)		295
横島、	妙神山にひさびさに帰る!!その3 (静まる)		298
横島、	相談に乗ってもらおう!!		303
横島、	氷室家に帰省する!!		308
横島、	氷室家に帰省する!!その2		315
横島、	氷室家に帰省する!!その3		320
横島、	南国の別荘地へ!!		328
横島、	水着の品評会をする!!		334
横島、	達也と共にボディを曝す!!		342
横島、	南国の島で楽しむ!!		346
横島、	南国の海を楽しむ!!その2		351
横島、	エリカの悩みを聞く!!		356
横島、	夏の思い出をもう一つ!!前		360
横島、	夏の思い出をもう一つ!!後		365
横島横浜騒乱編			
横島、	二学期が始まる!!		373
横島、	次期風紀委員長と会う!!		378
横島、	引継ぎ事項にされる!!		386
横島、	嵐の予感!!		393

横島、花音から厄介ごとを押し付けられる!!	399
横島、術具の販売店に行く!!	402
横島、氷室姉妹と思わぬところで合う!!	407
横島、喫茶店で休憩する!!	414
横島、怪しいおっさんと会う!!	421
横島、囲まれる!!	427
横島、フエイ兄弟と戦闘突入!!	432
横島、戦闘終了し事後処理をする!!	439
横島、悩む仲間を知る!!美月そして雫…	444
横島、変だよ横島!!前	452
横島、変だよ横島!!後	458
横島、雫の思いに戸惑う!!	466
横島、3人に修練をつける!!	473
横島、特殊鑑別所に行く!!	481
横島、取り調べられる!!	488
横島、人喰い虎と対峙する!!	493
横島、武術を使う!!	499
横島、事件の事を達也と語る!!	506
横島、つかの間の日常を!!	510
横島、遠方に派遣される!!	517
横島、京都に行く!!	522
横島、十師族の話題にされる!!	529
横島、真夜と会う!!	537
横島、急変する事態をまだ知らない!!横浜事変その1	547
横島、封印を解く!!横浜事変その2	554

横島、強敵再び!!横浜事変その3 | 560

横島、主役不在で戦闘開始!!横浜事変その4 | 569

横島、恐るべしフェイ兄弟の実力!!横浜事変その5 | 577

横島、つかの間の安堵!!横浜事変その6 | 584

横島、大亜連合超兵器の恐怖!!横浜事変その7 | 592

横島、遅れたヒーロー!!横浜事変その8 | 599

横島、防御に徹する!!横浜事変その9 | 607

横島、『救済の女神』の再来!!横浜事変10 終結 完 | 613

横島喪失編（前）

103話 横浜事変その後 その1 | 622

104話 横浜事変その後 その2 | 629

105話 横浜事変その後 その3 | 635

106話 横浜事変その後 その4 | 640

107話 真実が語られだす。 | 647

108話 横島倒れる | 653

横島喪失編（後）

109話 ヨーロッパの魔王見参!! | 662

110話 横島Re:スタート? | 670

111話 記憶喪失、過去の横島少年、煩惱と文珠 | 675

112話 アンジー・シリウス登場!! | 684

113話 アンジェリーナ・シリウス | 692

114話 リーナと横島 | 698

115話 横島対テロリスト | 705

116話 天災錬金術師ドクター・カオス | 711

117話 日本政府が動く | 719

1 1 8 話	横島がいない第一高校	726
1 1 9 話	横島がいない第一高校、横島は何処に？	733
1 2 0 話	記憶と辻褃	741
1 2 1 話	横島捜索網進展	747
1 2 2 話	ダラスの殺人犯	754
1 2 3 話	侵入者	759
1 2 4 話	魔神ネビロス	765
1 2 5 話	横島とカオスとマリア 横島喪失編完	770
横島来訪者編		
1 2 6 話	横島、来訪者に戸惑う!!	779
1 2 7 話	横島、恐怖の来訪者現れる!!	788
1 2 8 話	横島、小竜姫の来訪を受ける!!	794
1 2 9 話	横島、平穩は訪れない!!	800
1 3 0 話	横島、まだ噂の留学生を知らない!!	809
1 3 1 話	横島、友人達と留学生!!	816
1 3 2 話	横島、遂に見つかる!!	823
1 3 3 話	横島、友人達と話す前に!!	829
1 3 4 話	横島、友人と久々に顔を合わせる!!その1	836
1 3 5 話	横島、友人と久々に顔を合わせる!!その2	844
1 3 6 話	横島、達也と久々に語る!!	853
1 3 7 話	横島、知人に連絡をする!!	861
1 3 8 話	横島、真由美と連絡する!!	866
1 3 9 話	横島、事態が動きだしている事をまだ知らない!!	872
1 4 0 話	横島、藤林響子と交渉する!!	879

1 4 1 話	横島	吸血鬼事件を知る!!	888
1 4 2 話	横島	吸血鬼の来襲!!	894
1 4 3 話	横島	実習棟での攻防戦!!	902
1 4 4 話	横島	とりあえず帰ってきました!!	908
1 4 5 話	横島	皆を説得したい!!	917
1 4 6 話	横島	しぶしぶ提案を受け入れる!!	929
1 4 7 話	横島	レオに会いに行く!!	936
1 4 8 話	横島	USNA軍と交渉する!!	943
1 4 9 話	横島	千葉家に行く!!その1	952
1 5 0 話	横島	千葉家に行く!!その2	963
1 5 1 話	横島	千葉家に行く!!その3	973
1 5 2 話	横島	ついに来たバレンタインデー!!その1	981
1 5 3 話	横島	ついに来たバレンタインデー!!その2	990
1 5 4 話	横島	ついに来たバレンタインデー!!その3	997
1 5 5 話	横島	ついに来たバレンタインデー!!その4	1007
1 5 6 話	横島	ついに来たバレンタインデー!!その5	1014
1 5 7 話	横島	七草家に呼ばれる!!その1	1022
1 5 8 話	横島	七草家に呼ばれる!!その2	1028
1 5 9 話	横島	七草家に呼ばれる!!その3	1037
1 6 0 話	横島	七草家に呼ばれる!!その4	1045
1 6 1 話	横島	達也の心労を知らない!!	1052
1 6 2 話	横島	自宅に帰る!!	1062
1 6 3 話	横島	リーナ・真由美・達也に知られる!!	1071
1 6 4 話	横島	七草双子姉妹に再び会う!!	1081
1 6 5 話	横島	自宅で空気が読めない!!	1090

166話	横島	妙神山、氷室家と用事を済ます!!
167話	横島	六道家再び!!前
168話	横島	六道家再び!!後
169話	横島	女子会で噂される!!
170話	横島	雫に知られる!!
171話	横島	エリカに強力な霊具を渡す!!
172話	横島、	リーナと達也に霊具を渡す!!
173話	横島	悪霊退治順調。歩く厄災来襲!!
174話	横島	達也に気づかれる!!
175話	横島と達也	とリーナ!!
176話	横島	新たな決意!!
177話	悪魔の謀略!!	①悪魔の誘い
178話	悪魔の謀略!!	②悪魔の罠
179話	悪魔の謀略!!	③悪魔の招待
180話	悪魔の謀略!!	④悪魔の目的
181話	悪魔の謀略!!	⑤横島到着
182話	悪魔の謀略!!	⑥横島忠夫 その1
183話	悪魔の謀略!!	⑦横島忠夫 その2
184話	悪魔の謀略!!	⑧横島忠夫 その3
185話	悪魔の謀略!!	⑨怒りの鋼鉄女神
186話	悪魔の謀略!!	⑩再びのピンチ
187話	悪魔の謀略!!	⑪横島復活!!
188話	悪魔の謀略!!	⑫悪魔の最後
189話	横島	皆に語る!!その先は……
190話	横島	横島と師!!

191話 横島 戦いの終わりに安堵する!?

192話 横島 平和な日常!! (ほぼ最終話)

横島入学編

1話 横島華麗に参上!!

「い☒ーやーー!!」

「また貴様か!!」

「なんで俺なんつか!! 冤罪だ!!」

「こんなことを仕出かすのは貴様しかない!!」

「違うのに、違うのに、ホント俺じゃないのに!! シクシクシク」

「問答無用!!」

「こんなんばつかし!! もういやじゃー!!」

バンダナを頭に巻き付けたこの高校の男子生徒は、校内廊下を逃げながら顔をぐしゃぐしゃにし、涙ながら冤罪だと訴えたのだが、追いかける快活そうな美女は、そんな訴えなど聞く耳を持たず容赦なく、その男子生徒に制裁の名のもとに攻撃を繰り返している。

そう、魔法という名の異能の力による攻撃を……

国立魔法大学付属第一高校、通称魔法科高校と呼称される学校だった。

かつての超能力や異能の力を体系化したものを魔法と呼び、その魔法を扱う魔法師を育成を目的とした国策機関がこの魔法科高校である。

バンダナを巻いた男子生徒は泣きわめきながら器用に女生徒が繰り出す攻撃をかわしていたが、ついに屋上に追い詰められていた。

「違うんやー、ワイじゃないのにー!!」

「往生際が悪いぞ!! 横島!! お前の手に持っているものはなんだ!!」

男子生徒を追い詰めた女生徒の腕には風紀員会の腕章がはめられていた。

「……パンティー」

そう、彼の手には女性用の白いパンティーがしっかりと握られていた。

もはや言い逃れはできないであろう。

女生徒は魔法を放つ構えをする。

「違うんやー、犬が啜えていたんやー!!」

涙と鼻水を垂らしながら、フルフルと首を左右におおきく振りながら、この期に及んで言い逃れをする。

「言い訳はいい、思い残すことはあるか」

女生徒は横島と呼ぶ男子生徒を睨み付け、にじり寄る。

しかし、横島と風紀委員の女生徒の間に一匹の小さな犬がトコトコと歩いてきた。

その犬は女生徒の方を首を傾げながら見る。

その犬の口には女性用のパンティーが数枚啜えられていた。

「……………」

二人の間に、静寂の時が風と共に流れる。

横島と呼ばれた男子生徒は

「違うと聞いたのにー!!……冤罪だ!!」

女生徒は

「……疑って悪かったな」

どこか横柄だが素直に謝罪をした……したのだが。

横島はさつきまで涙と鼻水を垂らしていたのに、今は手のひらを返

したかのように、高圧的な態度に出る。

「謝ってすむなら、警察はいらんわー!!」

「ならば、どうすればいい?」

「フハハハハッ、じゃあ大人しく、体で払ってもらおうか!!」

横島は両手を前に出して、手のひらで、にぎにぎと怪しい手つきをしながらそう言い放った。

女生徒からは明らかに怒りのオーラが出ていた。

「ほーう。いいだろう」

横島はそれを肯定と捉えたのだろう。

「……横島いつきまーすっ!!」(横島ダイブ)

横島はそう叫びながら、女生徒に向かってカエルが跳ねるが如く飛びついていったのだが……

バキ!!

女生徒のひじ打ちが顔面にクリーンヒット。そして床に叩きつけられる。

「フベっ」

横島は情けないうめき声を出し床に転がった。

「ふん、体で返してもらったぞ」

その女生徒は泣く子も黙る。第一高校3年生風紀委員長 渡辺摩利だった。

彼女に対しこんな所業に出るのは過去にも今にも横島だけである。

横島忠夫

第一高校1年生2科生、しかも入学してたった3日で、このありさ

までである。

横島は、入学早々、女生徒に声をかけまくって……いや、ナンパをしまくって、それを目撃した風紀委員長の渡辺摩利に拘束され、そして、説教のフルコースを浴びた。

次の日は、女生徒から更衣室の覗魔がたと通報で、摩利は駆けつけのだが、ボロボロの横島がそこにいた。すでに女性陣から制裁という名の暴力を受けた後だった。

そして、その次がこの下着ドロ騒動だったのだ。

実は覗きもたぶん？ 冤罪だった。何故か横島は疑われるのだ。

横島の行動は何処かいつも挙動不審なためなのだが……

横島は10秒でダメージから復活して
寝ころんだまま。

「純白の白……意外だ!!しかし、これはこれで……」

横島は摩利のスカートの中を覗いていた。

摩利は目を細め、そのまま足で横島の顔を踏みつける。

「ほう、まだ懲りないようだな」

「しまったー!!心の声が漏れてた!!たまたまなんやー!!堪忍やー!!」

横島は顔を踏まれながら許しを請う。

横島は思ったことがつい声に出して漏れてしまうのだ……要するにあほなのだ。

そして、横島は興奮したり、ピンチになると出身地の関西弁になる性質がある。

摩利は横島の顔を踵でグリグリと踏みつけた後。

「今回はこちらにも、落ち度があった。この辺で許してやろう」

摩利はそう言うと、踵を返し、パンティーを啜えた犬を追いかけ、屋上を後にする。

横島は顔に靴跡をつけたまま起き上がり、

「どちくしよー!!、何にもしていないのにこの仕打ち!……:……しかし、純白の白か……え(良)かったなー」

そんな事を嘆いていた横島だが、摩利のスカートの中身を思い出したその顔は、あほ丸出しのにやけ顔だった。

横島忠夫……一見、スケベで、あほそうな少年なのだが、彼はかつては知る人は知る超一流の霊能力者だった。

この現生では、誰の記憶にも記録にも全く残っていない。

2095年からさかのぼる事大凡100年前、確かに彼はこの地球を魔神から救った真の英雄だったのだ。

2話 横島、1年E組に溶け込む!!

昼休みの終わりかけ、1年E組に横島は戻って来た。その制服は少し汚れていた。

さつきまで、下着泥犯人と間違えられ、風紀委員長の渡辺摩利に追いかけてまわされていたのだ。

そんな横島に声をかける気さくな男子生徒がいた。

「横島、昼休憩どこに行ってたんだよ。一緒に飯に誘おうとしたのによ」

「風紀委員長に追いかけて回されてたんだよ。冤罪でだ。ちくしょー!! おかげで昼飯にありつけなかったぞ」

「お前、完全に、風紀委員に目をつけられたな、入学初日にあんなだけ大々的にナンパしてりやあな」

横島に話しかけたこの男子生徒、西城レオンハルトと言う。顔立ちも堀が深く、名前から日本人以外の血が入っている事は分かる。横島にはレオと呼ばせている。

入学初日に席が横の横島に声をかけたのである。ナンパ騒動を起こしている横島に、まだ声をかけてくれる様な気さくな少年だ。

「そうだ。横島、紹介する」

レオは席を立ち、ある少年の前まで横島を連れて行く。

「達也、こいつが、今日話していた面白い奴だ。横島って言うんだ」

達也と呼ばれた整った顔立ちの少年は席を立ち、自己紹介をする

「司波達也だ。よろしく」

「俺は横島忠夫、なんだこのクラス。イケメンしかないのか?……ちくしょーなんだかともちくしょー!!」

司波達也の顔を見て、横島は雄たけびをあげながら涙するのだ。

レオは達也に

「な、面白い奴だろう?」

「面白い? まあ、変な奴だがな」

達也は無表情ながらそう言った。

その横で話していた女生徒二人は、その輪に入って来た。

「あつ、1年の女子全員にナンパした奴じゃん!!」

快活そうな女生徒はそう言った。

「うん、私も声かけられた」

眼鏡を掛けた大人しそうな女生徒は横島の被害者らしい。

「美月は声かけられたんだ」

横島はすかさず、まずは快活そうな女生徒に声をかける。

「ボク、横島!! 元気そうなお嬢さん!! よろしく!!」

「わたしは、千葉エリカよ。よろしくねナンパの横島くん」

続けて美月と呼ばれた大人しそうな女生徒に横島は声をかける。

「ボク、横島!! 眼鏡が似合うお嬢さん!! よろしく!!」

「柴田美月です。その、お手柔らかに……」

エリカは横島に質問をする。

「横島くんはなんで、1年生全員に声をかけたのに、私にはナンパしなかったの?」

「ガサツそうだったからじゃねえか?」

レオが横からちやちやを入れた。

「あんたに言われたくないわよ」

エリカはレオに反論する。

「三分の一位に声かけたんだけど、風紀委員長に捕まっちゃまって、校内でナンパ禁止になった。くそー、あの鬼めー俺の青春かえせー！！」

横島は説明をするが、後半は心の叫びだった。

エリカはそれを聞いて笑っていた。

「プツ、鬼だつてあの女にお似合いね。横島くんあんたと気が合いそうね」

エリカは風紀委員長の渡辺摩利を知っている様だ。しかも嫌っている様相だ。

「みんな、次、魔法稼働実習よ、早く移動しないと」

美月はここにいる連中に次の授業が実習室であることを伝える。

1年E組の午後からの授業は魔法稼働実習だ。

魔法の術式稼働によって機器を制御する実習だ。

それぞれ、順番で実習を受けて行く。

横島は順番待ちの間、キョロキョロとしている。前にいるレオに小声で質問する。

「レオ、これってどうやって動かすんだ？」

「はあ？」

「だから、何をどうしたらいいのかさっぱりだ。教えてくれ」

「お前、何言ってるんだ？」

「いや、だからわからないんだって」

「お前CADを起動させたことないのか？」

「CADって？あの端末みたいな奴だな」

「おい、まじかよ……お前、なんでこの高校に入学できてんだ？」

「俺もわからん」

「はあ？」

「いいから、教えろって」

「……サイオンを注入して、起動させるんだ。後はお前の演算能力次第だ……」

「……サイオン……あ？霊力か……サイオンを込めればいいんだな、演算能力って？まあいいか、なんとかなるだろ」

横島は、現代魔法の知識は全く持ちあわせてないのだ。

「おいおい、霊力って大時代的な……まあ、いいや俺がやっているのを見ておけ」

レオは自分の番が来て制御しだす。

横島はレオが術式稼働機器を制御している所をじっと見ていた。

「まあ、こんなもんか」

レオは終了しようだ。

横で見っていたエリカはレオにちやちやを入れる。

「あんたって本当におおざっぱね」

「うるせー……次、横島やってみろよ」

「よっしゃ!!」

横島は気合十分だ。

「そんなに気合い入れなくたっていいって、リラックスだ」

レオはそんな横島にアドバイスを入れる。

なんだかんだとレオは面倒見がいいみたいだ。

横島は制御盤に手を触れる。

「フハハハハハッ 霊力注入!!」

横島は直ぐに調子に乗る性質があるのだ。

バチバチバチバチバチーーン
ズドドドドーーン!!

機器はスパークして、制御を失い爆発を起こしたのだ。

横島はモロに爆発を食らう。

「ぎゃーーー!!」

「おい!!横島大丈夫か!」

「横島くん!」

レオとエリカは心配そうに横島に近づく。

横島は立ったままだったが、丸焦げになって、プスプスと煙を上げていた!!

「こんなばつかりーー!!なんでじゃーー!!」
顔をぐしゃぐしゃにしながら涙をまき散らした。

「……なんか、大丈夫そうね……」

「……そうだな」

あんな状態だが、元気そうな横島をみて、エリカとレオは呆然としていた。

この後の授業は当然中止となる。爆発した機器は、故障と見なされた。

……
実際には過度のサイオンいや霊力の異常な注入によるものだが

横島自体は無傷だった。

横島は生来の耐久力と回復力でノーダメージだが。頭の天辺から足元までギャグで出来ているため、なぜか丸焦げになってしまうのだ。

しかし、実習服はボロボロとなり、買いなおす羽目になった。

3話 横島、深雪に会うも、差別を知る!!

横島はレオの誘いで、達也たち一行と共に下校することになった。黒髪ロングヘアの美少女が廊下で待っていた。

「お兄様、お待ちしておりました」

「待っててくれたのか、深雪」

「あら、お兄様こちらの方は」

「こいつはクラスメイトの……」

達也は妹の深雪に横島を紹介しようとしたのだが、達也と深雪の間に素早く入り込んだ。

「ボク、横島！可愛らしいお嬢さん!!」

横島の目はキラキラと輝いて、深雪に自己紹介をする。

「横島さんとおっしゃるのですか？私は司波深雪、こちらのお兄様の妹です」

深雪はそんな横島に動じることなしに自己紹介に入った。

深雪が達也の妹と知り。横島は達也の両手を取ってぶんぶん振り、もちろん目はキラキラと輝いている。

「お兄様と呼ばせてください!!妹さんの事はこの不肖横島忠夫にお任せを!!」

「やると思った」

エリカは呆れたように首を振る。

「落ち着け横島」

達也はそういうと、横島の手を振りほどき、頭にチョップをかます。

「へへ」

横島は頭を押さえ悶絶する。

「面白い方ですね」

深雪は微笑みながら横島をそう評した。

「深雪、面白いんじゃないくて、ただのアホよ」

エリカは深雪にうんざりした顔で言う。

隣で美月が「たはは」と苦笑する。

レオはその光景をみて、大きく笑っていた。

深雪と合流した一行はそのまま学校の校門を抜けようとしたところ声がかかった。

「司波さん、僕らと一緒に行くこう」

男女7人のグループが近づき、一番前の男子生徒が深雪にそう声を掛けた。

肩の校章から1科生と分かる。

深雪は戸惑った表情をしていた。

そんな深雪に達也は尋ねる。

「深雪、クラスの友人かい？」

「はい」

声を掛けた男子は、達也を睨んだ後、深雪に言う。

「司波さんは、ぼくらと一緒にいるべきだ。彼らと一緒にいるべきじゃない。ウイードなんかと」

それを聞いたエリカは憤慨した様子で、その男子生徒の前に出て強い口調で言う。

「なによ、あんたたち、深雪は私たちと帰っているの!! 邪魔するつもり!?!」

大人しそうな美月も前に出て

「そうです。兄妹仲良くしているのを、あなたたちは何のいわれがあつて、裂くんですか!」

レオも続き、男子生徒にガンを飛ばしている。

その後ろで、横島は平然としている達也に質問した。

「これ、なんでケンカになつてんだ? ウィードって何?」

達也は珍しく呆れたような顔をして、横島を見て説明をする。

「ああ、お前も俺も2科生だな。彼らと深雪は1科生だ。この学校では1科生と2科生では差別意識がある。2科生は補欠、劣った存在だと。ある意味、魔法科高校は魔法の強さが優劣をきめるからな」

「ふーん。でなんで2科生が劣ってるんだ?」

達也は横島が意味をよく理解ができていないのだろうと思い、説明を続ける。

「入試で魔法の実技試験があつただろう。あれでこの学校における魔法の力の優劣が決まつたんだ。例えばペーパーテストが優秀でも魔法の力が弱いものが2科生になる」

「あんなんでねー、お前の方がよっぽどあいつらより強いのにな」

その横島の言葉に達也は驚きと共に警戒心を高めた。

そんな達也をよそに横島は平然と眼前の出来事について、指摘し

た。

「達也ー、なんか小競り合いが始まったぞ、許可なく魔法使うと、厳しい罰則とかあるんじゃないか？」

エリカとレオがこちらに突つかかかってきた男子生徒と何やら、小競り合いをしていたが……

相手側の数人が魔法を使おうとしていたのだ。

達也は魔法を使おうとしている連中の魔法展開式を読み取り、それを反転ジャミングし起動式を潰す。一見簡単そうに見えるが、まず数万ワードはあるだろう展開式を瞬時に読み取ることはほぼ不可能な代物なのだ。それだけでも達也の優秀さが分かる。

相手側の奥で、女の子が魔法式を起動展開させようとしているのが分かったが間に合わない。

達也は、展開後の対処を瞬時に思考する。

しかし、魔法は起動しなかった。

奥の女の子の前にいつの間にか横島がいたのだ。

「ボク、横島!!可愛らしい君!!今からお茶でもどう!?!」

横島は魔法を発動しようとしていた女の子の手を取り大きな声でそう言って、ナンパを始めたのだ。

小競り合いをしていたエリカとレオは毒気が抜かれたように、膝をかくつと落とし、呆れた表情で横島を見る。

エリカたちと対峙していた。1科生の生徒達も、振り返り横島を驚愕の表情で見ている。

エリカが場の変な空気を崩すように叫ぶ。

「横島ーーーー!!こんな時に何やってるの!!」

達也は最大限の警戒をした。

さつきまで横にいた横島が、達也が気づかないうちに、向こうの、しかも魔法を発動しようとした女の子の所にいたからだ。達也は九重道場で体術や気配察知を高レベルで取得している。その達也が横島の行動を感じ取れなかったのだ。

横島にナンパされた女の子は混乱していた。

魔法を発動しようとしたら、急に眼前に男子生徒が現れて、自分にナンパをしだすのだから。まだ混乱から覚めていない様子だ。

横島の行動で、小競り合いその物が止まった。

その間に、騒動を嗅ぎ付け、あの風紀委員長、渡辺摩利がやってきたのだ。

「お前たち!!そこで何をやっている!!」

その後ろに、小柄な美少女がついて来ていた。

彼女はこの学校の生徒会長、七草真由美だ。

「魔法を使おうとしたのではないか?」

摩利は小競り合いをしていた1年生たちにそう質問したが……

摩利はいまだ、ナンパを続けている横島を見つけて、歩み寄り腕を取る。

「また、貴様かー!!入学初日に横島、貴様は校内でのナンパは禁止にしたはずだぞ!!」

「あれ?摩利さん?なんでここに?」

摩利に、横島は無様なうめき声と共に地面に叩きつけられる。

「ふべっ」

「おい、こいつを拘束して風紀委員室に連れていけ!!」

摩利が後ろに向かってそう叫ぶと、後ろから同じく風紀委員の腕章をした。男子生徒が来て、倒れている横島を拘束して、この場から連れ出していた。

横島はなんだか騒がしく叫んでいた。

「いややー、説教はもういややー!! どうせ連れていかれるんやったら、柔らかい腕がいいんやー!!」ごっごつした男の腕なんかいややー!!」

その様子を呆然と、小競り合いを起こした1年生連中は見ていた。
……達也以外はだが

摩利は連れていかれる横島を一瞥してから、振り返って1科生達を見据える。

「で、お前たちはどうなんだ?」

達也はとっさの言い訳を放った。

「森崎家のクイツク・ドロウの教えを乞うていたのですが、真に迫っていたもので、つい白熱してしまっただけです。」

森崎とは、一番最初に突っかかってきた男子生徒である。

後ろにいた生徒会長の真由美が摩利に不問にするように言う。

「摩利、実際に魔法を発動していないのだからいいじゃない?」

「……まあ、いいだろう……お前たち、自衛目的以外で許可なく魔法起動させることは、校則違反だ。気を付ける様に、解散!!」

摩利は、1年生達にそう言って、事を終息させる。

生徒会長の真由美は達也と深雪に近づき話しかける。

「また、会いましたね。生徒会のこと、深雪さん、達也さんも今度、生徒会室に来てもらえませんか」

深雪は戸惑った表情をして達也を見るが

達也が代わりに答えた。

「お伺いさせていただきます」

摩利はさっきの出来事にまだ、納得がいつてない用で、司波たちに説明を求める

「しかし、実際、起動展開式を確認していた。これはどういうことだ？」

達也が簡潔に答える。

「起動式を発動前に潰したんです」

「どうやってだ？」

摩利は疑問を口にする

それに対し深雪が達也の代わりに自慢げに答えた。

「お兄様は、相手が発動する起動式が読めるんです。読み込んだ起動式を反転させ、相手にぶつけることにより、魔法が発動しないのです」

摩利と真由美は驚愕な表情を浮かべた。

「起動式が読める？……本当にそんなことができるのか……まあいい」

「それはすごいわね……」

「はいー」

深雪は達也の代わりに笑顔で答えた。

この騒動は終息したのだが……

しかし、達也の中で、横島に対する見方が変わった。

行動は突拍子もなく、バカのように見えるが、あの奥で魔法を発動しようとした女子を止めたのだ。

あれは偶然ではないと達也は判断した。

あそこに移動する経緯も達也には見えなかった。少なくとも魔法を発動した形跡はなかった。

言動も気になっていた。「お前の方がよっぽど強いのにな」

俺の事を知っている奴かそれとも何らかの組織の監視役か？など、横島に関する疑問は次々とわいてくるのだった。

一方、横島というと、縄でぐるぐる巻きにされたまま。正座をさせられ、摩利からだけでなく、2年生の風紀委員からもくどくどと説教を受ける羽目になった。

「うおーーーーーん。なんで俺だけなんじゃーーーー不公平だーーーー!!」

横島の涙ながらの叫びは誰にも届かなかった。

4話 横島、達也に調べられる!!

司波達也は自宅で調べものを行っていた。

学校内で気になる生徒がいた。今日知り合ったばかりだが、達也にとって疑問や疑惑に思う点がいくつも出ていた。

そう、その人物とは横島忠夫だ。

達也も初めは横島をただ単にバカな奴だと思っていた。

しかし、深雪のクラスメイトとトラブルを起こした時、横島の動き、そして言動が達也にとって普通ではなかった。いや、警戒に値する異様な感じがしたのだ。

達也以外はそれに全く気付いていないのだが。

達也自身も強力な能力や戦闘能力があるため、それに気づいたのだ。

そして今、達也は横島に関するネット上の情報や機密関連の情報を搜索しているのだ。

第一高校の経歴には

横島忠夫 15歳

両親無し、身内無し

保護者：氷室蓮

出身中学：福島県の村立中学出身

入試成績などもハッキングした結果。

魔法関連の科目は壊滅的な点数だ。

一般教養については、トップクラスだ。

魔法実技については、測定不能と出ていた。

これはかなり不可解である。

(実際には横島が霊力を込めすぎて壊してしまっていたからなのだが)

しかも、こんなアンバランスな成績で入学できたのはおかしいの

だ。

しかし、達也が注目したのはそこではなかった。
保護者の名前である。

保護者は氷室蓮：氷室家の15代当主の名前なのだ。

氷室家は魔法師にとって特別な意味を持っている。

魔法師にとって氷室家は治癒魔法の大家として名を知らないもの
はないのだ。

しかし、十師族の派閥や伝統派にも、かと言って国家機関にも所属
していない。

交流もほとんどない。謎に包まれた隠された名家でもある。

その氷室家の中でも、13代当主、氷室絹は魔法師だけでなく、日
本国民のほとんどの記憶に残っている。また、彼女を題材とした映画
すらあるのだ。

氷室絹1977年～2058年

類稀な治癒能力と精神コントロール能力を有した日本が誇る世界
最高峰の古流魔法師（しかし本人は霊能力者であると語っている）

第3次世界大戦時、当初電撃的に仕掛けられた当時の首都東京に敵
兵10万人規模の上陸を許し、一時的に占拠されたのだ。

しかし、氷室絹単独で直径120kmに及ぶ範囲で戦略級魔法を展開
敵国兵士のマインド（精神）を戦闘不能状態まで落としたのだ。

奪われた首都は容易に取り戻すことが出来たのだ。

それだけではない、その範囲で傷ついた住民の活力を上昇、さらに
治癒及び治癒能力を促進させたのだ。

魔法の効果は判明したのだが、実際何の術式なのかどのような魔法
なのかは全く持って不明である。

氷室家は元々外界とは関係を絶っていた。戦時中である国が戦争
参加を促しても、参加することは無かった。

そんな氷室家が閉ざされた門戸を開き横島をこの学校に入れたのだ。

裏取引があつてしかるべきだと誰でも思う。

十師族または国は氷室家と関係をつけたいだろう事は容易に想像できる。

横島がどんな人間だろうが、成績だろうが、入学はさせたのだろう。

氷室家の人間であれば、現代魔法では知られていない。若しくは凶れない、何かを持っていてもおかしくはないのだろう。

横島自身なんらかのBS（固有・異形）魔法師である可能性も高い。

達也はそう結論づけた。

達也自身が分解・再構築を有するBS魔法師なのだ。その代償は他の魔法が著しく劣化することになったのだが。

達也はその他の情報とを照らし合わせ、横島が達也達を狙う組織の人間ではないと結論をだし、ホッと息を吐く。

しかし、氷室家とのつながりがある人間という事で、得体のしれなさは大きくなった。

敵ではないが、得体のしれない奴。

これが今日調べ、達也が結論付けた結果であつた。

達也は横島にむやみやたらと警戒する必要が無くなったのである。注視は必要だが警戒するまでではない。という事だ。

後日、達也は武術の師匠である九重八雲にも相談をするが同じような見解であつた。

実際には横島は氷室家の親族でも、氷室家の霊能力者でもない。氷室家は保護監督者であつて、魔法や霊能力において、何も共有してい

ないのだが、それは誰も知る由もない。

横島は実際に氷室家に居たのはたったの1ヶ月間だけであったのだから……

経歴のほとんどが偽装であることも付け足そう。名前と保護監督者以外はすべて氷室家が手をまわした偽装である。

5話 横島、ナンパのお礼を言われる!!

あの一科生との騒動翌日の放課後

横島は達也、レオ、エリカ、美月と昨日と同じメンバーで帰宅することになった。

どうやら、横島はこのグループに溶け込めたようだ。

教室を出ながらレオは横島に質問をした。

「横島、昼休みまた居なかったな、どこに行っていたんだ？」

横島は項垂れながら言う。

「……いうなレオ、昨日俺だけ、風紀委員室に連行されただろう。あの後、説教のフルコースだ。しかもペナルティーとして昼休みの風紀委員会の雑用をやらされたんだよ!! 今日から1週間だぞ!! ちくしょーあの鬼委員長め……ちよつとスタイルがいいからって!!」

この話に風紀委員長渡辺摩利のスタイルとか関係ないが、横島にとってはかなり重要な案件なようだ。

達也は冷静に答える。

「お前の自業自得だ」

横島は達也に叫ぶ。

「くそっ!! お前らだけ先帰りやがって、俺が何をしたって言うんだー!!」

「あの、ナンパしてました」

美月は横島におっかなびつくり答えた。

「あんた、あの状況で普通する? ナンパ? 状況を考えなさいよね」

エリカは呆れた様に首を振る。

「そこに可愛い女の子がいるのに状況なんて関係あるかー！ー！！」
横島は誰に言うでもなくそう叫んだ。

「まあ、横島らしいな」

レオがそう締めくくって笑っていた。

一行は教室を出ると、案の定。深雪が待っているのだが、深雪は二人の女生徒と一緒に待っていた。

昨日の騒動で1科生側にいた。深雪のクラスメイトだ。そのうちの一人は横島がナンパしていた女の子だった。

面々はそれぞれ深雪に挨拶をした。

「お兄様、お二人は昨日の事で是非、お兄様にお礼を言いたいと……」

左右にお下げをしている女の子、横島がナンパした女の子だ。

「光井ほのかと申します。お兄さんが、あのように言ってくれたおかげで、お咎め受けずに済みました。ありがとうございます」

その隣の小柄な、眠そうな目の女の子が続いて紹介とお礼をする。

「北山雫です。昨日はありがとうございます」

「お兄さんはいい、同級生なんだ名前と呼んでくれ。それとお礼なら、そこの横島に言ってやってくれ、実質騒動を止めたのは奴だ」

達也は二人にそう言って、横島を指す。

達也がそう言うと、二人は横島を見る。

ほのかは一瞬ビクツツとして雫の後ろに隠れるが、雫は横島を見据えていた。

「ボク、横島!!可愛らしい君たち!!よろしく!!」

相変わらずの横島節だ。

雫が先に横島にお礼を言う。

「昨日は、ほのかを止めてくれて、ありがとう……ほら、ほのかも」
雫に言われ、ほのかも、おっかなびっくり前にでるが、昨日のナンパのせいで怖がっている様だ。

「あの……その……」

深雪とエリカがフォローを入れてくれた。

「ほのか、横島さんは悪い人ではないわ」

「そうそう、取って食べたりしないから……ただの、あほなだけだから」

エリカのはフォローと言うより、悪口になっていた。事実だけに誰も否定しない。

何故か横島の方から謝ったのだ。

「ただ、可愛いからナンパしただけなんだが。いやー怖がらせて、ごめんな!!」

横島がそう言うとはのかは落ち着いたのか、ようやく話す事が出来た。

「いえ、こちらこそ、ありがとうございます。ちょっと……かなりびっくりしましたけど」

「おい、横島の奴があやまったぞ!!」

「うわ、なに、そっちの方が気持ち悪いんだけど!!」
レオとエリカに酷い言われようである。

そしてこの一行は校門を出て下校する。

途中、ファーストフード店で買い食いをする。

達也が深雪のCADを調整しているという話題になった。

「お兄様が私のCADをいつも調整してくださるのよ」

深雪はみんなに自慢するかのよう言う。

「達也さん、そんなことまでできるの？CADの基本設計やOSの仕様を熟知しないとできないのに凄いですね」

美月がCADの調整できる凄さを説明してくれた。

「なら、私のCADも調整してよ」

エリカが達也に悪戯っぽく言う。

達也は至極真面目に言う。

「無理だ。エリカのそんな特殊な形状のCADデバイスなんて、調整できないな」

「へー達也くんこれがCADって分かったのか」

そう言うときエリカは昨日の小競り合いで出した警棒を出す。

レオはそれを見て。

「それ、CADだったのか、サイオンをずっと放出するの大変じゃないのか？」

横島はボソツと言う。

「なるほどな、神通棍みたいなもんか」

エリカは驚いたような表情をしていた。

「あんだ、なんでそんな古い事知ってるのよ？意外ね。そうよ神通棍をモデルにしているのよ。」

でもあと一歩ね。振り出しと攻撃の瞬間だけサイオンを放出するだけでいいから。少ないサイオン量で使えるわけ、後は兜割りの要領でほら」

エリカはそう言っつてその警棒状のCADを振る。

「エリカ。兜割りつて、秘伝とか奥義に分類される技術じゃないの？
その方がサイオン量が多いよりも、すごいと思うのだけど」

深雪はそうエリカに言っつた。

美月は深雪とエリカの会話を聞いてそう言う。

「うちの高校つて、一般人の方がめずらしいのかな」

雫がその美月に対しぼそりと言う。

「魔法科高校に一般人はいない」

「ここにいるぜ、一般人!!」

レオがそう言っつて横島の背中を叩く。

「いてーな」

「横島はまだ、CADがうまく使えないのよねー、昨日なんて実習
機器を爆発させちゃったんだから」

エリカは悪そうな笑みでそう言う。

「しかたねーだろ。使っつたことなかったんだから」

横島は拗ねた様に言う。

エリカは全員の意見の代行として言う。

「あんたは、なんでここ（魔法科高校）にいるのよ!!」

6話 横島、生徒会室で過ごす!!

達也と深雪は生徒会室に向かっている。

今日の朝、通学中に生徒会長の七草真由美と出会い。昼休みに生徒会室で一緒に昼食をすることを約束したからだ。

達也と深雪は生徒会室の重々しい木製扉をノックして中に入る。

「いらっしやい、二人とも」

生徒会長の真由美が達也と深雪に声をかけ、大きな重厚な木製テーブルの空いている席に座るよう勧める。

真由美以外に、達也たちの前に、会計の3年生市原鈴音、風紀委員長の3年生渡辺摩利、書記の2年生中条あずさが座っている。真由美は生徒会長として、上座に座っていた。

「まずは、食事のメニューを決めませんか」

中条あずさが達也達にメニューを差し出す。

生徒会室には自配機が備わっていた。名前の通り、自動で料理を調理、配膳する機械だ。

「精進料理を」

「私も同じもので」

達也と深雪はそう言った。

それを聞いて渡辺摩利が

「だそうだ。横島」

「へーい」

横島がだるそうな返事と共に奥から出てくる。

深雪は驚いたような表情をする。

「なぜ、横島さんが？」

それに摩利が答える。

「こいつは、ナンパのペナルティーでコキ使っている」

「鬼」

「なんか言ったか？」

「何でもないっす」

横島は拗ねたような言い方をして、自配機を操作しだす。

料理が出来るまでに、お互い紹介をし合う。

生徒会のメンバーはこの場にいる真由美を筆頭に、市原鈴音、中条あずさ、そして今はいないが、副会長の2年の服部刑部となっている。ちなみに、風紀委員は生徒会とは別組織である。

紹介が終わったところ。

「へーい、お待ちー」

横島が、各人にそれぞれの前に、自配機から出てきた料理をプレートに乗せ置いていく。

摩利だけは、自前の弁当だった。

その後、ポットからお茶を入れて行くのだった。

「横島くんごめんね。わたしたちの分も」

真由美が笑顔で横島にお礼を言う。

「真由美さんのためだったら、この不肖横島、いつでもお申し付けくださいー」

目をキラキラさせながら、ポーズを決める横島。

「横島さんも食事にしてください」

鈴音が横島にそう言った。

「鈴音さんのお優しいお言葉、横島感激です！」

やっぱり、目をキラキラさせて、ポーズをとる横島。

「司波君の横、空いてるから、どうぞ」

あずさが横島に空いている席を指してそう言う。

「あーちゃん先輩ありがとうございます!!」

あずさに対しては目をウルウルさせて泣き真似をする横島。

そして、横島は摩利をジトツとみて、後ろを振り返り

「ぺっ!!」

唾を吐く真似をするのだ。

それを見た摩利は目を細め、横島を睨み付ける

「ほーう、貴様は放課後も奉仕活動をしたいようだな!!」

「摩利さん冗談っすよ。たはははははっ!」

横島は手のひらを返したような態度を取り、乾いた笑いをする。

雑談がてら食事が終了すると。

横島はそれぞれのプレートを回収し、自動洗浄機の中に入れていく。

横島は紅茶を入れ、各人に配っていく。

「横島くんの入れてくれた紅茶おいしいわね」

「そうですね」

「おいしいです」

「意外な才能だな」

真由美、鈴音、あずき、摩利がそれぞれ横島を褒める。

「お兄様本当においしいです」

「……ああ……」

司波兄弟もそれを認めていた。

「まあ、昔散々こき使われたんで」

真由美は本題を切り出す。

「深雪さん。生徒会に入っていたただけませんか？毎年、新入生総代は生徒会役員になっていただいているのです」

しかし、深雪は困った顔をしていた。

そして、深雪は達也こそ、生徒会役員にふさわしいと説いたのだ。入試の成績は兄の方が上だと。

しかし、鈴音が、2科生の達也が規定で生徒会役員になる事ができない事を伝え。

達也も深雪を説得する。

しづしづ、深雪は生徒会役員になる事を了承する。

しかし、風紀委員長長の渡辺摩利がここで唐突に言う。

「風紀委員には2科生や1科生の規定はないぞ……まだ、生徒会からの推薦枠は誰も決まっていないはずだぞ」

そこから、達也は真由美と摩利、そして、深雪に風紀委員入る事を猛烈にプッシュされるが、受けることはしない。

昼休みが終わりに近づき、達也はホッとするが……

真由美と摩利が放課後に説得の続きをするらしく、深雪、達也に生

徒会室に来るように言った。
達也はしぶしぶ了承した。

この件に一切関係ない、横島も摩利に

「おい、横島、貴様も放課後來い」

「えーなーなぜ？」

「いいから、来い」

「理不尽な!!」

何故か横島も放課後、生徒会室に行く羽目になった。

放課後、生徒会室に向かって歩く、達也、深雪、横島がいる。

「なんで、俺まで」

横島はぶつくさ文句を垂れある。

「お前、渡辺先輩に気に入られてるんじゃないのか？」
達也は平然と言う。

「あほか？あのDSの女王様だぞ!!虐げられているの間違いじゃねーか？」

横島は達也にうんざりした表情で達也に言い返す。

その様子を見てクスクスと笑う深雪である。

一行は生徒会室にノックをし入っていった。

「おう、来たか」

「いらっしやい」

摩利と真由美が挨拶する。

達也と深雪も挨拶を返す。

摩利は横島にそう言ったが、表情は優しげである。

「横島、お前に奉仕活動を言いつける……また茶でも入れてくれ」

「結局雑用係っすか？」

「そう言うな、お前の茶は結構うまいからな、後で風紀委員会本部にも来い」

横島はしぶしぶと言う感じで部屋の奥に行き、ポットでお湯を沸かし、紅茶のセットを用意しだす。

すでに、慣れ親しんでいる感じがしないでもない。

深雪は真由美とあずさに生徒会について説明を受けるようだ。

摩利は達也に

「早速だが、風紀委員会本部に行こうか、実際何をしているか見てもらった方が分かり易くて速い。丁度この部屋の真下だ。何故か直接階段でつながっている」

そう言いながら、生徒会室の奥へと達也を誘導するが。

そこに昼間いなかった男子生徒が奥から出てきた。

そして、達也を睨みながら

「渡辺先輩。かの1年生を風紀委員に任命するのは反対です」

彼は生徒会副会長の2年生服部刑部との紹介だった。

それを聞いた真由美と摩利は服部を説得させようとするが

服部は尚も反対意見をぶつける。

「風紀委員の本来の任務は校則違反者の摘発と鎮圧です。魔法力の乏しい2科生では、風紀委員は務まりません。この誤った登用は後々、

会長や委員長の体面を傷つけるでしょう」

「待つてください、僭越ですが副会長、兄は確かに魔法実技試験の成績は芳しくありません。それは実技テストの評価方法と兄の力が適合していないだけなのです。実践ならば兄は誰にも負けません」

深雪は兄の評価を悪く言われ、居てもたつてもいられない様子で、服部に言い返していた。

「司波さん、魔法師は事象をあるがままに、冷静に判断しなければなりません。身内に対する鼻屑は一般人ならやむを得ないでしょうが、魔法師を目指すものは身内鼻屑に目を曇らせる事のないように心がけなさい」

服部は、そう深雪には優しく諭した。

しかし、深雪には逆効果の様だった。やはり、兄についてはどうも感情的になりやすい様だ。

「私は目を曇らせたりしておりません。お兄様の本当の力を持ってすれば……」

深雪がそう言い掛けたところで、達也は深雪を手で制した。

達也は意外な事を服部に提案した。

「服部先輩、模擬戦をしませんか？」

予想だにしなかったその提案に、真由美も摩利も呆気に取られていた。

「思いあがるなよ。補欠の分際で」

服部は身を震わせながら、怒鳴り上げる。

遠くにいたあずさや鈴音はそれに気づき、彼らに注目する。

横島は最初っからその様子を何気なしに見ていた。

「あるがままの対人戦闘スキルは戦ってみたいと分らないと思いませんが……深雪の目が曇ってない事を証明しましょう」

達也は淡々とそう服部に言うが、どうもこの兄も、妹の事になると、血が上るらしい。

「いいだろう。身の程を弁える必要性を教えてやる」

服部はそう達也に凄む。

真由美はそこですかさず宣言する。

「私は生徒会長権限で、2年B組服部刑部と1年E組司波達也の模擬戦を認めます」

摩利も宣言した。

「風紀委員として、この模擬戦を課外活動であると認める」

そして、30分後 服部副会長と司波達也の模擬戦が演習場で始まるのであった。

横島はと言うと、こいつ等、なんで戦うのが好きなの？なんて思っていたのだが……

7話 横島、再び見習いになる！

達也はCADの使用許可と自身のCADを取りに行っていた。その後、深雪と横島と合流する。

横島も摩利に勉強になるから見ておけど、見学するように言われていた。

横島はだるそうに言う。

「お前見た目によらず、ケンカっぱやいんだな」

深雪は項垂れて

「わたしのせいでこのような事に……」

「いいんだ深雪」

達也はそう言つて、深雪の頭を撫でる。

「どうせ見学するなら、お姉さま方のくんずほぐれつを見たいっ!!」

横島は相変わらずのエロ目線だ。

達也は冷静に答える。

「お前はそればかりだな」

演習場に入り際横島は小声で達也に言った。

「達也、弱いものイジメも程ほどにな……」

達也は一瞬目を大きくして横島の後ろ姿を見た後、険しい目付きになつていた。

既に、演習場には生徒会の面々と服部が準備を完了していた。

横島はつまらなさそうに壁に寄り掛かる。

達也は自身の銃型のCADを取り出す。

達也のCADは特化型だ。魔法のバリエーションは少ないが、スピードに優れている。

ちなみに、汎用型のCADは、魔法のバリエーションが多く、多様に優れると言った利点がある。

処理能力が低い達也にとっては特化型CADは相性がいいのだ。

そして服部と達也が対峙する。

摩利がまずはルールを説明する。

直接攻撃、関節攻撃問わず相手を死に至らしめる。回復不能なダメージを与える。肉体的損壊をさせる等の術式は禁止。一方が負けを認めるか、審判が戦闘続行不能と判断を下した場合勝敗を決するとの事だった。

そして摩利がコールする

「試合開始」

服部が腕のCADを操作し達也に狙いを定めた。しかし、達也は服部の視界から消え後ろを取ったのだ。そして銃型CADを服部に構え。術式展開

服部はその場で倒れ、動かなくなる。

その間、試合開始からたった5秒だった。

生徒会の面々は驚きの表情を浮かべていた。

摩利も例外ではない。深雪と横島以外は…

「……勝者、司波達也」

横島は見ていた。

達也が古式歩法を用い。幻惑しながら相手の後ろを素早く取り、C
ADから、波状の威力の低い衝撃波を3連発飛ばし、丁度、服部に当
たる瞬間、3発の波が重なったのを……

「……………」

横島は生徒会の面々が驚きで動きが止まっている間、服部を壁にま
で運んでもたれかけさせていた。

そして、生徒会の面々と摩利が、次々と今の試合について、驚きと
共に達也に質問攻めをする。

達也は横島が見た情景と同じ事を説明をしていた。

横島は気になる人物の名前が出たことに耳を向ける。

その話とは、達也が九重八雲の弟子だという事だ。

そんなところ、服部がようやく目を覚まし、立ち上がる。

深雪には謝罪をしたが、達也には一瞥をくれただけで、そのまま演
習場から出て行った。

達也はその服部の様子に意にも介していない様だ。

そんな興奮やまない中、摩利は達也と横島を本来の目的である。風
紀委員会本部に連れて行く。

さっきの試合後、摩利は達也の意思に関係なしに、風紀委員会に就
任させる気満々である。

しかし、達也はその風紀委員会本部に入り啞然とする。
いろんなものがごった返し、物置の様になっていたのだ。

達也はかなり潔癖症なのか、摩利にそう言った。

「何ですか、この状態は……まずは、片付けさせてください」
そんな達也を見て摩利は言った。

「そんな顔をするな、流石にこの状態で新人を入れるのも、悪いと思っ
てな、それで横島に片づけるのを手伝わせるつもりでいたのだ」

「ケツ、結局雑用っすか」

「ほう、いいのか？その代わり、1週間のペナルティーを4日に変更
してやるぞ」

「頑張らせていただきます!!」
手のひらを返すのが得意な横島である。

ゴミや押収品やら、CADやら書類の山やらを3人で片づけていた
ところ。

達也は軍事用のCADを見つけ摩利に疑問を投げかける。

「なんで、エキスパート仕様のCADがこんなところじゃ？」

「たぶん押収品だ」

「……」

達也は呆れている様だ。

そんな中、

「おおつ、神通棍か——懐かしいな」

のんきそうな横島の声を聞いた摩利は

「そんなものもあつたな。わたしが風紀委員に入る前からあるらしいぞ、まあ、そんな骨董品、起動できる奴は今までいなかったがな、大方壊れているのだろう」

そう言ったのだが。

ブーン

横島が握る神通棍が握り手から青白い光が発せられ棍に刻まれた術式文字をたどり先端まで登る。そして、棍全体が強い光に包まれ、徐々に収束していった。神通棍が起動したのだ。

「おつ使えるじゃないっすか、壊れてないっすよこれ」

摩利は振り返り、その光景を見て、固まっていた。

達也も同様だ。珍しく驚きの表情をしていた。

横島は神通棍を一振りしてから……

「まあ、まあつてどこかな」

そう言つて起動を解除して、神通棍から光が消え去った。

「お……おまえ、何をした？」

「へ？いや、なんかまずつた？」

「おまえ、それを起動出来るCADを持っていたのか？」

「横島はCADが使えないはずです」

「……なんだと……」

二人が横島に険しい表情をしながら近づいてくる。

「へ？なんだ？」

そんな二人の表情をみて、今度は横島が困惑する。

「……………横島、それをもう一度起動してみろ」

「はあ、こんなんでいいっすか？」

ブーーーーン

横島が手にした神通棍は青白い光に包まれ起動した。

横島が難なく神通棍を起動する姿を見て摩利は狂ったように笑い始めたのだ。

「ははっ………ははははははっ、ふははははははっ」

「摩利さん大丈夫っすか？」

「これが笑わずにいられるか………やはり、氷室ということか!!」

摩利が笑ったかと思うと急に真剣な顔になり、強い口調で横島に言う。

摩利は、横島が氷室家から来たことを知っていた様だ。

困惑気味の横島を見て達也は険しい表情で言った。

「お前はその霊具をCADもなく起動式も展開せずに起動させたんだ」

「はあ？何言ってるんだ？達也」

横島は達也が言った意味を理解していなかった。

「横島!!お前は毎日、放課後ここに来い!!」

「えー!!昼休みの4日間でさっきいって言ったじゃないっすか？この鬼ーーーー!!」

「それは、訂正する。毎日ここに来ることを義務付ける」

「権力の横暴だ!!」

横島は涙をちよちよきらせながら抗議する。

真剣な顔をして摩利は横島と達也に言い含めた。

「横島、人前でもう、これを動かすな」

「達也くんも、これは内密だ」

達也は平然と答える。

「分かりました」

しかし、横島は全然納得がいていないようだった。

「ちくしょー!!」一般人は権力には勝てんのか!!鬼ー悪魔ー!!」

この後、達也はなし崩し的に、風紀委員に就任させられることになる。

横島はと言うと、風紀委員（見習い）という訳がわからない役職を拝命することになるのだった。

8話 横島、風紀委員の仕事をごなす!!

「諸君、今日から新入生部活動勧誘週間だ。部活勧誘のデモンストラーションの為に各クラブはCADの貸し出し許可を得られている。また、毎年の事だが、どこの部も新入部員獲得のために必死である。必ず、荒事が起きる。もし危険行為が行われた場合速やかに対処しろ。危険な状況になる可能性がある」と判断した場合は注意喚起を行え、以上だ」

風紀委員長、渡辺摩利は風紀委員会本部で全風紀委員を集め、そう告知した。

摩利は続けて。

「今期の新入生からの新戦力を紹介しておく。1年A組森崎駿 1年E組司波達也、そしてもう一人は、私が特別枠で取り付けた見習い枠。1年E組横島忠夫だ」

上級生の風紀委員のメンバーはざわめく

「いいすか?」

「辰巳、発言を許可する」

摩利は同じ同級生のがたいがいい男子風紀委員に言う。

「その二人は、紋無しだ」

3年の辰巳鋼太郎は紋無しとは、達也と横島を指したのだ。

2科生の制服の肩には校章のエンブレムが入っていない。その為、2科生の俗称として使われている事が多いのだ。

摩利は自慢そうに辰巳に言う。

「そんな料簡では足元を掬われるぞ、実際昨日、その司波に、正式な模擬戦で服部が足元を掬われたところだ」

「まじか、あの服部が…そりゃ期待できそうだ。悪かったな司波」

辰巳は司波を評価し、謝罪した。

「もう一人は……ああ、雑用係とでも思ってくれ、近くに置いておいた方が面倒がない」

摩利は横島を見てそう言った。

風紀委員の上級生は、横島を見て、それぞれため息を付く。
なんば、チカン、変態野郎だと間違いないと思っっている事だろう。

摩利は宣言する。

「それでは、各人出動!!」

そして、各人は風紀委員の腕章を付け、部屋を後に出て行くのだ。
しかし、横島だけ残っていた。横島も一応風紀委員の腕章は付けているが。手書きで見習いと書きなぐった紙切れをゼロハンテープで張っていた。

「はー、めちゃくちやだー……俺は何をすりやいいんすか？」

無理矢理に風紀委員見習いという。わけわからない役職を付けられた横島はうんざりした表情で摩利に問うた。

実は見習いなどと言う制度はこの学校は無い。

摩利が生徒会に対し、仮試験中として申請したのだ。

正式に実施には、生徒会の承認と校内投票の過半数が必要だからだ。

よって、正式な風紀委員ではないため、CADの携行も認められないのだ。

まあ、ろくにCADも使えない横島には全く関係ない話だが……

「フッフッフ 丁度お前にいい仕事がある……」

摩利は横島に不敵な笑みを湛えながら意味ありげな事を言ったの

だった。

それから3日後の放課後。

風紀委員本部には風紀委員メンバーの3年生辰巳鋼太郎と2年生沢木碧が一足先に、巡回から戻り、風紀委員長の渡辺摩利に本日の活動報告に来ていた。

「辰巳鋼太郎、報告します。注意喚起3件、逮捕者0 以上」

「了承した」

摩利はそう言う。

辰巳は続けて

「あの1年……逸材だな、剣術部の桐原を取り押さえただけでなく、剣術部の連中全員を手玉に取ったらしいじゃないか。あれで2科生とは何もんだ？」

摩利は自慢そうに言う。

「だから言っただろ」

「最初は、あの服部を倒すなど半信半疑だったが、納得だ」

そう言って、辰巳は摩利の前から一步下がる。

続いて2年生の沢木が摩利の前に立つ。

「沢木碧、報告します。注意喚起3件、逮捕者1名、すでに連行し、CADは没収しました」

「了承した。その件、懲罰委員会に掛け合うかはこちらで検討する」
摩利はそう返答する。

沢木も摩利に言う。

「あの1年、何者ですか？」

「司波の事か？まあ、みな驚くだろう。あれが奴の真の実力だ」

「いえ、あのナンパ野郎……横島です」

「何かやったのか？」

摩利は険しい表情になる

「いえ、水道管の修理、家庭科室のガスコンロの修理、茶道室の障子の張替え、第2武道室の床の修繕。さらにハチの巢の除去まで、すべて完璧に難なくこなしております」

「……なんだそれは？奴からそんな報告を受けていないぞ。そんな仕事を奴には回していない。ただ奴には、クレームが上がったところに行き、その内容を庶務課に報告に上げると雑用を言いつけただけなのだが……」

「どうやら、クレームがあつたところに行つて自分で直してしまうよう
うで、庶務課事務員からかなり喜ばれ、受けもいいそうです」

「その庶務課の受け付けは……美人なのか？」

「はい、学内でもファンがいるそうです」

「……………」

摩利は額に手を当てて、ため息を付く。

「いや、そこじゃないんです。奴はCADの携帯を許可されてません。その噂を聞き、CADを不正に使用し魔法での修繕をしたのだろうと思ひ。確認に行つたのですが、普通に工具を持って、器用にプロ顔負けのスピードで直していくのです……あいつは本当に魔法師なのですか？」

沢木はその時の様子を思い出したのだろう。感心した様にそう言つた。

「……わたしにもわからん。ただ器用な奴ではある。はあ、そうか分かつた」

摩利は頭を抱えながら、そう言つて沢木を下がらせる。

そこへ、風紀委員会本部にノックして、事務員姿の美人が入つて来た。

「緊急事態なんです」

「何か？」

摩利が答える。

「実はたった今、部活棟の、女子シャワールームの温水管が破裂して、騒ぎになっているの、だから、横島くんがこちらにいないか……」

タイミング悪く横島が戻ってくる。

「横島ーもどりました」

めちやくちやだるそうに、そう言つて入つて来た。

その美人事務員が横島に駆け寄つて、横島の手を握り

「横島くんいた！部活棟の女子シャワールームの温水管が破裂して……」

とそこまで言ったところで

「愛子さん!!女子シャワーールールーム!!……この横島、超得意分野です!!必ずやなんとかしてみせましょう!!」

横島は目をキラキラさせながらその美人事務員に言い切った。

「ふはははははははっ……待っててね!!おねえちゃ……んたち……!!」

横島は顔を上気させ、興奮した様子で叫びながら、脱兎のごとく、部屋を出て行った。

「待て、横島!!」

摩利がそう叫んだ時には、もう部屋から出て行っていた後だった。

「いかん!!貴様ら追うぞ」

摩利は、辰巳と沢木にそう言って、勢いよく部屋から出て、横島に追いつこうとする。

「くそ、もう見えない。なんて早い奴だ!!」

摩利たちは加速術式魔法を使って追いつがったが横島の姿は見えない。

女子部室棟の前までくると

「キヤ……チカン!!」

「へんた……い!!」

「死ね……!!」

女子生徒の叫び声やら怒声やら、爆発音やら、魔法による作動音などが聞こえてきた。

「……遅かったか……お前たちはここで待ってろ」

摩利はそう言って、辰巳と沢木をその場で待たせ、女子部室棟に

入っていった。

しばらくすると、摩利が女子部室棟から出てきた。
プスプスと煙が上がった物体を引きずって……………

その物体……横島はどこどころ凍っていたり、焦げていたりして
いる。頭であろう場所は煙が上がっていた。

「辰巳、沢木こいつを保健室に連れて行ってやってくれ、此方の監督不
行き届きでもあり、一概にこいつだけが悪いわけではないしな……」
摩利は二人にそう言っつて、横島を地面に置く。

しかし、横島は

「くそーーーーー!!何にも見れなかったのに!!それなのにこの仕打ち
!!」

ビョーンと撥ねる様に上半身を起こした。ボロボロだが復活し
たようだ。

「温水管を修理に来ただけなのに!!何て凶暴なんだ!!シャワールーム
に入っただけで!!しかも、あいつら全員服着てんの!!何が
キヤーーーだ!!こんちくしょーーーーー!!」

横島は雄たけびをあげていた。

その様子に辰巳と沢木は驚いていたが。

「貴様は、何をやってるか!!」

摩利は横島に拳骨を脳天に突き刺した。

「ぐはっ」

横島はその場に倒れ、結局、辰巳と沢木に風紀委員会本部まで連行
されていた。

その後はやはり、摩利による説教フルコースを浴びる。

横島の女子シャワールームへの侵入について、横島が温水管の修理の依頼を受けたことから、双方行き違いによる突発的な事故という事で処理をされ、罪は不問となった。

もちろん横島は、皆が居なくなつた後の女子シャワールームの温水管修理を、摩利の監督の下で行つたのは言うまでもない。

9話 横島、自分の能力について考える!!

「ふーっー今日もいい仕事したな……俺って昔と同じことやってないか？」

横島は独り言ちる。校舎の壁タイルの剥がれを直していたのだ。

横島は風紀委員見習いになって1週間たっていた。

ようやく騒がしかった新入生部活動勧誘週間が終わる日でもあるのだが、ラストスパートなのだろう。

何時にも増して、勧誘が激しいのだ。

横島には関係ない話ではある。

風紀委員といっても、横島がやっている事は、ほぼ雑用だ。

本来、庶務課などが担当するような仕事なのだが、横島としては庶務課の美人受付と話せるとあって、結構ノリノリでやっている節があるのだが。

横島が、ひと仕事を終え構内のベンチで新入生争奪合戦を何気なしに見ていると、不意に横島の袖を引っ張る生徒がいた。

その女生徒は挨拶もなしに不意に横島にこう言ってきた。

「横島さん、前から聞きたいことがあった」

「へ？なに？雫ちゃん今日は一人？」

そう深雪と同じクラスの1科生、北山雫が話しかけてきたのだ。

普段は幼馴染の光井ほのかと一緒にのだが今日は一人らしい。

雫は横島の横に座り、眠たそうに見える目で聞く。

「あの時、ほのかの魔法をどうやって止めたの？」

「へ？何の？」

雫は1科生と2科生で騒動を起こした時、ほのかが魔法を放つ瞬間に横島がほのかの手を取ってナンパした時の話をしているのだ。

雫はジトツとした目で横島を見て続きを言う。

「わたしは近くにいたから、よく見えた。ほのかの魔法は術式起動直前まで行っていた、それなのに発動しなかった。術式が壊されるのではなく、消えたように見えた」

「そうなの？」

横島は首を傾げて言う。

「普通じゃ有り得ない。ほのかも術式を解除したつもりは無かった。あそこまで展開したものを破棄するのも難しいと思う。だとすれば、横島さんがほのかの手を握った時に何かしたとしか思えない」

この北山雫という少女は冷静に観察する能力が備わっている様だ。

横島は珍しく困ったような顔をして、真面目な話をしだした。

「どう説明したらいいのかわからない。ただ、俺が使っているのは霊能力……じゃなくて古式魔法って分類される魔法らしいんだ。後あんまり大ぴらにしたいくないんだけど、俺の保護者は氷室なんだ。こんなんで許してくれないかな？」

真剣に聞いてきた雫に対して、横島は無下にはできなかつた。

実際には横島の霊力そのものを流し込んで術式その物を修正液の様に上書きして消したのだ。

お分かりの人は居るだろうが、横島の必殺技の代名詞、ハンズ・オブ・グロリーの応用だ。

物質そのものだけでなく、霊力や霊装、結界、さらに神や魔神などの高次元体まで切れる万能な霊波刀なのだ。しかも自分の意志でどのような形状にも変化させることが出来るのだ。

雫は最初はその眠そうな目を大きく見開いていたが……納得してくれただろう。

「わかった。やっぱり、横島さんはスゴイ人だったんだ。教えてくれてありがとう」

雫はどうやら、あの事件の時から横島がただものではないのではないのかとずっと思っていたらしい。

普通なら、横島のバカであほで、スケベなところしか見ないのだが、冷静に物事が見れる雫ならではだろう。

「横島さん、話、また聞きにきていい？」

「たはははは」

乾いた笑いで返事をする横島

雫はその笑いを聞いたあと了承を得たと思ったようで、校舎の方へ戻っていった。

「うーん、霊力そのまま使うとやばいか、やっぱCAD使わないとダメそうだな。誰に習えばいいんだ？」

横島は独り言ちる。

横島は分かっていた。突出した能力や特殊に過ぎる能力は、争いの種になる事を……そして悪意の渦に巻き込まれることも……

自分の霊力は随分と抑えているつもりだが、この時代では特殊に過ぎる能力らしいのだ。先日の神通棍を起動したときの摩利や達也の様子からもわかる。

横島は元来争いを好まない性格だ。しかし、過去では、周りの状況がそれを許してくれなかったのだ。

横島は空を見ながら、ため息を付き、ベンチから立ち、風紀委員会

本部に戻って行った。

10話 横島、日常生活に影が忍び寄る!!

「この頃、達也の奴、兄妹揃って昼こねーな」

レオはそう愚痴る。

「どうせ、昼休みも生徒会長と風紀委員長に呼ばれてるのよ」

エリカは少々とげのある言い方で返答する。

今は昼休みの食堂で食事中だ。

ここでは、レオ、エリカ、美月、横島に、今はほのかと雫が同席している。

「で、あんたはどんなのよ、横島。あんたも一応風紀委員でしょ?…
プツ、見習いだけど」

エリカはそう横島に聞くが最後は自ら笑いをこらえていた。

「フン、風紀委員?ただの雑用係じゃ!!あの鬼委員長め、ちよつとスカートの中覗こうとしただけで、ぶん殴るわ、延々と説教されるわ、スタイルがいいからつて、ちくしよー!!」

この横島と言う男、どこに行つても、変わらない。本能の赴くまま動いている様だ。

席にいる全員呆れた顔で横島を見る。

「よく、警察に突き出されませんね」

美月が正論を言う。

「まあ、横島だからな」

レオがそう笑って締めくくる。

「そう言えば、達也さん。放課後カフェで2年生の女子生徒と一緒にいるのを何回か見ました」

美月が次の話題を切り出す。

「私も、見た見た！あれ、剣道部の壬生先輩!!結構美人!!」

エリカも美月に同調する。

「え?」

ほのかはそれを聞いて、項垂れていた。

ほのかはどうやら達也に気があるようだ。

剣道部副主将の2年生壬生紗耶香、2科生である。剣術部主将の2年生桐原武明と武道場の使用をめぐるトラブルになり、達也に助けられたのである。それがきっかけで何やら達也に相談するようになったのだ。

「なんだー。達也の奴、風紀委員の仕事をさぼって、デートか?はあ羨ましい限りだぜ」

レオはここにいない達也に向かって愚痴をこぼす。

「達也くんモテそうだもんね。あんたと違って。……深雪が怒ってなければいいんだけど」

エリカはそんなレオに向かって意地悪い言い方をする。そして、ここにいない深雪に対し、憂いていた。

「横島さん、どうなの?」

雫は同じ風紀委員に出入りしている横島に問う。

「ああ?うーん。あれはどっちかと言うと、壬生先輩から達也に迫っている感じだな。くそー、剣術小町かーいいなー、一度手合わせ願いたい!!」

何の手合わせだとツツコミたい所だが、周りは横島の言動の趣旨を理解しているためここはスルーだ。

「横島、私が相手してあげてもいいわよ、ボコボコにしてあげるけど」
エリカは半目で不敵な笑みを浮かべ、横島を挑発するような言い方をした。

「えー！ーエリカはいいよ。なんか汗臭そうだし」

横島はウンザリした表情をして、ろくでもない事を言う。

「なっ！！汗臭くないわよ！！」

エリカは顔を真っ赤にしながら激怒し横島に右のストレートを顔面に喰らわす。

「ぐぼぐ」

横島はそのままテーブルの上に撃沈

全く持って、デリカシーのかけらも持ち合わせていない奴である。

「今のは横島さんが悪い」

雫が眠たそうな目でそう言って締めくくった。

その頃生徒会室では、真由美、摩利、あずさ、そして、達也に深雪が昼食を摂っていた。

最初は、壬生紗耶香と達也の噂話に花を咲かせていたが。

達也は風紀委員の仕事の話をし始める。

「風紀委員は点数稼ぎのために、取り締まっているとの見解があります」

「それは、勘違いだ。風紀委員会はまったくの名誉職だ。成績や内申には影響されない」

摩利は反論する。

「ただ、風紀委員は学内での影響力は非常に高い役職ではあるわ。少なからず反感は出るのは仕方がない事よ」

真由美は風紀委員の立場についてからの見解を言う。

「何者かが印象操作を行っている可能性があります」

達也はそこで、本来言いたかった趣旨を言う。

「そうね。それは以前から探っているのだけど、その人物が分かれば解決が出来ると思うの」

真由美は生徒会でも達也の指摘について、既に行動を起こしている事を話す。

「いえ、それを裏で操っている組織を壊滅しない限りは無理でしょう」

「それはそうなんだけど……」

真由美はその意見に対し、言いにくそうに答える。

「例えば、反魔法活動政治結社ブランシユ」

達也はこういった。

「なぜそれを」

「それは情報規制されてるのになんで」

摩利と真由美は達也がブランシユを知っている事に驚く。

反魔法活動政治結社ブランシユ

表向きは、「魔法による差別の撤廃」をスローガンに市民活動を行っている組織だ。

しかし、裏では、魔法による利権や特許を盾に利益を得ている。反魔法主義を掲げながら、魔法自体を食い物にしているのだ。その為にはテロも辞さない典型的なテロ組織だ。

しかも、この組織を利用し、さらに大きな利益をもたらそうとしている者も存在する。

どこの時代にも、こういう組織は生まれるのだ。

「ブランシユの下部組織、エガリテが学校で暗躍している可能性がある」と推測します」

達也はきつぱりとそう言いきった。

真由美、摩利は達也の言動に対し、驚きを隠せない様相だ。しばし、口を開けることができないでいた。

1-1話 横島、差別について思う!!

昼休憩を久々にいつもの面々がそろろう。

今日は深雪、エリカ、美月、達也、横島、レオと座っている。

「聞いてよ深雪ー!!横島の奴が酷いのよ!!」

「どうしたのエリカ」

「わたしの事、汗臭い女って言うのよ!!」

「それは謝ったじゃねーか?あれは言葉のあやつていうか……」

そう、横島は先日の昼休憩時、エリカにかなり失礼な事を言っていた。あの後、一緒にいた面々から、横島は散々怒られたのだ。結局横島は土下座をして、許しを請うのたのだ。

「横島さん、エリカは汗臭くないですよ、とてもいい匂いがするわ」

そう言って、深雪はエリカの制服の上着を片方めくり、胸元をはだけさせて、鼻を当て、匂いを嗅ぐしぐさをする、深雪は若干天然な部分があり、その仕草は煽情的でもある。しかもエリカは結構、胸が大きいのだ。上着がないとかなり目立つ。どうやら着やせするタイプの様だ。

「ちよっ深雪、何を!」

エリカは顔を真っ赤にして抗議して、急いで胸元を戻す。

ブシューーーーーー!!

深雪の仕草とエリカの胸元を見た横島は多量の鼻血が噴き出す。

隣に座っていたレオと達也は驚いて、横島の横から飛びのいた。

「はあ、はあ、はあ、……なかなか、いいもの持っているなエリカ!!」
鼻血を出しながら、爽やかスマイルの横島は手をエリカに突き出しグツトのサインを出す。

「見たわね!!」

顔を真っ赤にしてエリカは横島にビンタをする。

横島はそのまま、エリカにビンタで張り飛ばされるが……

床に張り倒された横島は天井を見据え、鼻血を垂らしながら、目を大きく見開き大きく呟くのだ。

「あれは大きかった、あれはえ（良）がった!!」

流石のレオもこの横島には引いていた。

その日の授業が終わった直後。

『学内差別を撤廃する有志同盟です』

構内放送で突如としてスピーチが流れた。

2科生への差別について、とうとうと語っていった。

エリカはこの放送を聞いて、事件性がある事を察して風紀委員の達也に言った。

「達也くん、行かなくていいの?」

達也はその放送に耳を傾けたままだが、エリカ同様、事件性を感じていた。

「いや、まだ招集が掛かっていない……しかし時間の問題だろう」

そうしているうちに、達也の携帯端末にメールが入った。

「お呼びがかかった。行ってくる」

そう言って達也は教室を急いで出て行った。

一方同じ風紀委員の……といっても、見習いの横島にはお呼びが掛からなかったようだ。

「見習いのあなたは行かないの?」

エリカは横島に意地悪そうに言う。

「ああ、俺に呼び出しは無かったし、達也が行けば大概は大丈夫だろう。しかも生徒会や風紀委員の先輩たちもいるしな」

何時になく真剣な面持ちの横島だ。

そんな横島はエリカとレオと美月を順番に見て聞く

「この放送で言っている事って、実際どうなんだ?」

真面目な顔をしている横島に面々は驚いていたが

「まあ、負け犬の遠吠えに聞こえるわね」

「1科生の奴らの中には、ムカつくやつもいるのは確かだ、あいつ等がかつてに差別しているだけの事だ」

「確かに、言っている事に、事実もあるのだけど、この放送はちよつと」

横島の問いにエリカ、レオ、美月はそれぞれ答える。

皆一様にこの放送に否定的な意見である。

横島がこんなことを面々に言った。

「そうか、お前ら強いんだな」

横島は過去に差別の問題に直面していた。

今ではおとぎ話の世界の話になるが、妖怪・妖魔と人間の差別だ。当時横島はこの問題を解決を行うため究極の手段に出たのだが、こ

れはまた後日語るとする。

この事件は生徒会と風紀委員会により、終息したのだが……

生徒会長七草真由美の提案で、生徒会と2科生との公開討論会を明日の放課後行うことになったのだ。かなり急な展開である。

12話 横島、遂に動く!!

放課後、生徒会と2科生による公開討論会が始まろうとしていた。

横島は摩利に風紀委員として、構内の巡回を命じられた。

今回の様に巡回を命じられたのは初めてである。さらに、神通棍の携帯をするようにとの事だった。

生徒会及び風紀委員はもしかすると、何か事件が起こる可能性があるかとふんでいた様だ。

横島は悪意の渦の様なものを感じていた。

きつとよくない事が起こるだろうと横島は思っていたのだ。

食堂で、雫とほのかが座っているのを見つけた横島は、雫たちに話しかける。

「雫ちゃんとはのかちゃんとは部活行かなくていいの?」

雫とほのかはSSボード・バイアスロン部と言う部活に所属していた。

「今日、この討論会があるから、休みって言われた」

「私たちカフェに寄ろうとしたのだけど、いっぱいだったからこっちに来たの」

食堂に備え付けられている大型ディスプレイを指し、雫とほのかが答えてくれる。

大型ディスプレイには、今日の公開討論会の映像が流れている。すでに始まっている様だ。

普段から、放課後のこの時間帯の食堂はすいているのだが、より人が少ない。

広い食堂には、横島たちを含めても20人いるかいなかだ。

「横島さんは？」

「一応、風紀委員で、巡回なんだけど、ちよつと休憩」
そう言つて、雫たちの前に座る横島。

「もう、横島さんは不真面目ですね。達也さんに言いつけちゃいますよ」

ほのかは最初は横島の事を怖がっていたが、何度も接するうちに打ち解けてきたようだ。

「たははははっ、ちよつとぐらい、いいじゃん。ほのかちゃん」

「横島さん。だったら、ちよつと話を聞いてもいい？」

雫は横島にこういった。雫はこの頃、横島に会うと、古式魔法やそれにまつわる伝承を教えてほしいと聞いてくるのだ。ほのかも、横島が古式魔法を使えることを知っている。雫が親友のほのかだけには話したいと言つたので、横島は、あの1科生と2科生の時のナンパの当事者である。ほのかだったら仕方なしと、了承していた。

最も、横島にとつて話しても差支えの無いような物ばかりではあるが、雫にとつて新鮮であつた様だ。

横島は雫とほのかに対しては妹みたいな接し方をしていた。

昔のおキヌと同じ様な感じである。

横島は大型ディスプレイの公開討論会を見ていたが、生徒会長の真由美の独演会の様相をきたしていた。

「さすがだな、真由美さんは……いい指導者になれるな」
そんなことを独り言ちていた。

横島は急に立ち上がり、周りを見渡す。

「横島さん？」

雫とほのかは急に立ち上がった横島を見る。

すると、大きな爆発音が外から聞こえてきた。

それと同時に、食堂内に黒い服を着た連中が食堂の正面入口から3人入って来た。

それぞれ、手にはサブマシンガンを携帯していた。

横島はそれを見た瞬間、正面玄関の方へ高速で走って行く。手にした神通棍を稼働させ、青白い光を纏わせながら。

黒い服を着た連中がサブマシンガンを構え乱射する瞬間。横島はサブマシンガンを神通棍で次々と真つ二つに切ったのだ。

そして、横島は、サブマシンガンを構えた黒服の連中に驚く間も与えず、次々に顔に手の平を当て、全員崩れるように倒していった。横島は霊気を流し込み気絶させていったのだ。

雫とほのかは横島の急変と侵入してきた男たちに困惑した。一瞬の出来事だったのだが、二人はその様子を見る事が出来ていた。

食堂にいた他の生徒達はその異変に気付いていない。遠くで鳴る爆発音を探るように皆一様に食堂から外を見ていたからだ。

そして、正面入口の正反対にある食堂の裏側入口からも、黒服を着た連中が4人入って来た。

4人共サブマシンガンを持ち構えを取ろうとしていた。

流石に食堂にいた何人かがそれに気づき叫び声を上げる。

雫もそれに気づき魔法を展開しようとしていた。CADがないた

め、起動も遅くなる。

黒服の連中はその魔法を起動しようとしている雫に気づき、サブマシンガンを集散的に放った。

雫は自分の魔法の発動の方が遅くなる事を理解し、身構える。

そして、ほのかは雫のピンチに気づき、雫を抱きよせたのだ。

ほのかも雫も自分たちがマシンガンの餌食になると感じた。

ほのかは目を閉じその刹那を待ち。雫は弾が自分に当たる瞬間まで目を離そうとしなかった。

しかし、サブマシンガンの弾は雫たちには到達しなかった。

横島が雫達の目の前に一瞬で現れ、神通棍を神速で振り、マシンガンの弾をすべて床に叩き落したのだ。

人間離れたスピードで移動し、神通棍を振ったのである。その光景は雫の目に焼き付いていた。

そして、横島は左手に半透明の六角形の盾を形成し投げる。

六角形の盾は高速で回転しながら意思を持ったように、次々とサブマシンガンに襲い掛かり切り落とす。

黒服のうちの一人が腕を前に伸ばす。

すると、あたり一帯がキーンとした高音が鳴り響く。

魔法を無効化するキャストジャミングが発動したのだ。

しかし、六角形の盾は消えることはなかった。そして4人の黒服の連中の丁度真中ぐらいに飛び込み爆発を起こした。その衝撃で4人は倒れた。

それにより、キャストジャミングの効果は消え去った。

ほのかが目を開けたときには、サブマシンガンを持った黒服の連中は全員倒れた後だった。

しかし、ピンチは続く。外から、ロケット砲が食堂に迫って来ていた。

それに気づいた生徒が叫び声を上げる。

横島はすでに動いていた。

手に数枚の札を載せていた。その札は光を帯び、自分の意思を持ったように次々と手の平から食堂の四隅に飛んで行き、壁に張り付いたのだ。

そして一言

「結界」

横島はそう呟く。

ロケット砲は食堂の窓ガラスを突き破って爆発した。しかし、そこまでだった。

窓ガラスから中には見えない壁があるかの様に、そこで爆発を起したのだ。

食堂の内部には爆発の衝撃や、爆発音は届かなかった。

横島は啞然とその光景を見ていた雫とほのかに優しく語る。

「雫ちゃん、ほのかちゃん食堂に結界を張った。ここにいる限り安全だからここを離れないで、他の子たちにもそう伝えて」

そう言って、横島は食堂を猛スピードで、出て行った。

ほんのわずかな時間の出来事に、雫もほのかも困惑していたが、雫が立ち直り、食堂にいた恐慌をきたしている他の生徒達に事情を説明し、落ち着かせて行った。

しかし、横島が起こした出来事を見ていたのは、雫とほのかだけだった。それだけ一瞬の出来事だったのだ。

13話 横島、現状を掌握する!!

食堂を後にした横島は、霊力を少しずつ高め、解放していきながら猛スピードで屋上へと登って行った。

横島は走りながら状況を整理していた。

公開討論会の前に摩利から事前に、『学内差別を撤廃する有志同盟』についてレクチャーを受けていた。

彼らはテロリストとつながっている可能性が高いという話と、彼らは一様に目印として、白地に青と赤を縁取ったリストバンドをしているとの事だ。

そして、何らかの行動を起こす可能性があるとの事だ。例えば生徒会長の真由美を人質に取る。学内でクーデターを起こすなどが、考えられるとの事だ。

風紀委員会はその為、人員をこの公開討論会に割き会場を警備を厚くしていたのだ。

しかし、実際どうだろう。

先ほどの食堂を襲撃した黒服たちは、一様に殺傷を目的とした武器を持っていた。中には魔法を使えるものもいたように見受けられた。しかも明らかに学生ではない。

これは学内の抗争ではない。

明らかに、学外からの戦力が襲撃してきたのだと、そして、生徒達を殺傷することに躊躇が無かった。高い練度を持っている様には見えなかったが、何等かの訓練や指示を受けている様であった。

魔法を展開しようとした雫に銃撃による集中砲火がそれだ。

先制による乱射そして、魔法師に対しての集中砲火による各個撃破。魔法師に効果的な攻撃……それが黒服たちが行おうとしたことなのだろうと。

武装した黒服たちは、『学内差別を撤廃する有志同盟』とつながりがあるテロリストなのだろうと横島は判断した。

しかし、横島は黒服のテロリスト達の目的までは現状ではわからなかった。

ただいえることは、この展開は風紀委員長の摩利も生徒会長の真由美を想定していなかったという事だ。

完全に裏をかかれている状況だ。

横島は屋上から周りを確認する。

敷地内のあらゆる場所で銃撃や爆発が起きていた。

先制攻撃で学内は恐慌状態に陥っている様だ。

ケガ人も多数見受けられる。

「くそっ」

横島は両手を合わせゆつくりと、手のひらを離していく、すると掌との間に、半透明の六角形の盾が次々と現れる。

横島は六角形の盾が12枚出来上がったところで一斉に放ち、四方八方に飛んで行く。

横島は目を瞑り霊力を高め、精神を集中させる。

そして、意識を構内全体に向け、学内にいる人間の全ての位置を掌握した。

横島は黒服の武器にターゲットを絞る。

黒服たちの練度は低い様だが、組織だった動きをする。対魔法師の戦術がある程度レクチャーを受けているのだろう。効果的にマシン

ガン、ロケットランチャーの攻撃で、学内を蹂躪していたからだ。
これさえ何とかすれば、学生だけでも対処が可能だと横島は判断したのだ。

12枚の六角形の盾……サイキックソーサーはまるで意思があるかのように正確に黒服たちの武器だけを狙い、次々と破壊する。

横島は、その間も構内の人間の動きを見る。

公開討論会の会場と生徒会や風紀委員、司波兄妹は全員無事の様だ。エリカやレオ、美月の存在も確認した。どうやら全員、今のところけがもなく無事である。横島はホッと息を吐く。

更に注意深く確認していくと、
黒服たちの中では霊力が高く、明らかに戦い慣れた動きをする一団を把握した。

その一団は他の黒服とは違った動きをしていた。何処か目的地があるかのように迷いなく移動している。

こいつ等が指揮官若しくは今回の騒動の本命か!?

横島は目を開き、屋上から助走をつけ、大きくジャンプをする。

魔法科高校第一高校襲撃……こんな大胆な計画を持ち掛けられた。傭兵団である彼らは今ここにいる。

最初は成功する見込みが薄いと感じていたが、雇い主は資金力と頭脳を持っていた。捨てても痛くない狂信者の様な捨て駒もいた。そして、成功報酬はかなり魅力的な金額であったのだ。

そして、彼らは、このテロに参加した。
狂信者どもに武器の扱いを教え、捨て駒の様に使う。

危険な魔法師の卵は一か所（公開討論会）に集める事にも成功していた。

そして、構内のかく乱作戦も順調に進んでいた。

後は、第一高校の手薄になった図書館を掌握し、お宝（情報）の力ギを持った人間を手引きするだけだった……

そして、物陰に隠れていた傭兵団10人は図書館にいる学生を一気に蹂躪するつもりで、図書館前の広場に飛び出そうとした。

「どっせえー……い!!」

一団の前に男が空から降って来たのだ。変な掛け声と共に。

第一高校の制服を纏っていたが……肩のエンブレムには校章が入っていない。2科生俗に言う劣等生だ。特徴的と言えば頭にバンダナをしている。

そう、横島忠夫が降って来たのだ。

傭兵団は一瞬驚いたようだが、直ぐに立て直し、それぞれが武器を構える。

横島はといえば。

「ち……ちよつとまって……!!足が……!!腰が……!!」
着地した衝撃で涙をちよちよ切れさせながら蹲っていた。

やはり、横島。こんな時でも締まらないのである。

一瞬傭兵団は呆気にとられていたが……
リーダーらしき男が命令する。
「撃て」

そして、傭兵団は横島めがけて、マシンガンやらを集中砲火。

しかし、弾は横島に届かない。

「待ってって言ったじゃねーか!!」

横島は左の掌を前に付きだしていた。

丁度横島が隠れる大ききの半透明の盾がそこにあつた。弾はその盾にすべて阻まれていたのだ。

それを見た傭兵団の一人がキャストジャミングを発動させた。

しかし、半透明の盾は消えなかった。

傭兵団は驚きを隠せないようだったが、彼らはプロだった。マシンガンを撃ちながら散開して、挟撃する手段を取ろうとしたのだ。

しかし横島は、半透明の盾をその場に残し、傭兵団の前から消えたのだ。

傭兵団は横島を一瞬見失うが後ろを振り返り、再びマシンガンを構える……

振り返った先には横島がいたのだ。

高速移動し傭兵団の後ろをとっていた。その横島の右手には神通棍が握られていた。

傭兵団はマシンガンを構えていたのだが……武器はいつのまにか、すべて真つ二つに切れていた。

さらに、時間差を置いて、傭兵団のメンバーが一人、また一人と次々と倒れて行く。リーダーらしき男を残して……

その惨状を見たリーダーは恐怖を覚えたのか、叫びながら逃走を図るが……

横島は、神通棍を地面に突き刺し。

「土角結界!!」
と唱える。

逃げようとする傭兵団のリーダーは動けなくなっていた。

足元から、石化しだしたのだ。

見る見るうちに下半身、上半身まで石化が進む。

そして、頭だけ残した状態で……

傭兵団のリーダーは恐怖で声も出ずただただ顔だけを震わせていた。

「うーん。お姉ちゃんじゃないのは残念だが……おっさん。聞きたいことがあるんだけど……いいいな」

横島は最初はおちやらかした風だったが、最後には凄んでいた。

14話 横島、真由美と摩利を驚かす!!

横島は、現在、図書館近くの物陰にいる。

土角結界で拘束した傭兵団のリーダーを脅し、情報を聞き出していた。

目的は、図書館にある魔法大学の研究データにアクセスするためとの事だった。

傭兵団はその為に雇われ、テロリストの訓練や戦闘のレクチャーなども行い、今回のテロ行為に参加し、アクセスキーを持っている人間の手引きをする事であった。

彼らの雇い主については、ブランシュというテロリストなのだが、本拠地や指導者の名前などは、全く知らないようであった。

一応、嘘がないか、霊視で確認したが同じであった。

傭兵団の連中を縄で拘束し、その辺に転がしておく。一応、リーダーだけは、直近の記憶を消しておいたようだ。

横島は、認識障害と人払いの結界を解く。予め傭兵団と接触の際、張っておいていたのだ。

そのおかげで、他生徒から戦闘自身は見られずに済んでいる。戦闘を行った傭兵団も横島の印象は曖昧になるであろう。

横島は意識を集中し、構内の状況を把握する。

サイキックソーサーによる重火器の破壊により、学生側が態勢を立て直し、乱戦模様だが、押している様だ。この調子であれば、状況が終息するのも時間の問題だろうと横島は判断した。

横島は既に図書館に入り込んだ連中を確認していた。

その排除に向かうつもりであったのだが……

エリカと達也それと深雪がこちらに向かって走って来ていた。
どうやら、達也達も図書館に向かっていたらしい。

「横島ーーーー!! あんた、大丈夫だったの!?!」

「逃げるのだけは、大得意だ!!」

エリカに向かって横島は胸を張ってとぼけた事言う。

続けて横島は達也達にこんなことを聞く

「あの黒い服の連中はなんなんだ? いったい?」
「どうやら、最後までとぼけるらしい。」

「テロリストだ」

達也は端的に答える。

「テロリストたちの目的が図書館のメインコンピュータの様です」
深雪が補足してくれた。

「横島、この辺の状況はどうなっている?」

達也は横島に聞く。

「図書館に、摩利さんが言っていた赤緑白のリストバンドをした学生
と黒い服の奴が何人か入っていったぞ」

横島は先ほど、霊力で図書館の内部状況を把握していた。

「そうか、お前も来るか?」

「達也くん、横島がいても足手纏いなだけよ」

エリカは意地悪そうに横島を見ながら達也に言う。

すると横島の携帯端末にメールが来ていた。

摩利からである。至急保健室前に来てくれとあった。

「達也すまん。なんか、摩利さんからお呼びが掛かった」

「気にするな。元々3人で行くつもりだったからな」

達也は横島が神通棍が使い、さらに氷室家の人間であるため、少しでも戦力になると考えていた様だ。

今の達也は、まだ横島に対しての認識はその程度であった。

「横島、敵にあつても逃げんのよ!!」

「横島さんではお気をつけて……」

エリカと深雪、それぞれ言い方は違うが、横島を気にかけている様だ。

「そつちこそなー」

図書館にいる連中は戦闘レベル的に低そうな連中であつた。

達也が居れば十分だと横島は考えていた。

横島は、保健室に向かう。

既に戦闘は散発的となり、終息に向かつて行っていた。

横島は途中、食堂の前を横切る際、様子を見たが大丈夫そうである。結界を解いておく事にした。

保健室近辺までくると、廊下でケガ人が手当を受けていた。

「横島、来たか、話がある」

横島を廊下で見つけた摩利は強引に横島を引っ張り、保健室準備室に連れて行つた。

「どうしたんです。怖い顔して？俺なんかやつちやった？」

保健室準備室を開けると真由美が座っていた。

準備室に入り、扉を閉めたとたん。

「横島、頼む。重傷者が出ている。此方にも救急隊が向かっているのだが、間に合うかどうか……」

摩利はそう言う。

「横島、お前は氷室家の一員なのだろう。治癒魔法でなんとかならないか？」

「横島くん、治癒魔法がとても貴重であることは重々承知しているわ、しかも、氷室家であるのであればなおさら、秘術であることも……でも、生徒が命の危険にさらされているの、お願い。どうか、助けて下さい」

そう言っつて、摩利と真由美は横島に頭を下げる。

氷室は治癒魔法が優れていると知られている家系だ。氷室出身の横島にも治癒魔法が多少なりとも使えるものと考えて当然である。

どうやら、真由美も横島が氷室家から来た事を知っていた様だ。

実際には、学園から知らされていたのは、生徒会長の真由美と、風紀委員長の摩利、そして、十師族の次期当主である部活連会頭の十文字克人だけなのだ。

「いやだなー、摩利さんも真由美さんも頭上げて下さい!!俺みたいな奴に頭下げないでください……まあ、そんなに期待しないでくださいよ」

「すまない」

「ありがとう横島くん」

そして、準備室から保健室につながる扉を開けながら摩利はそう言った。

「保健室に重傷者が居る。後は頼む。何かあったら呼んでくれ」

多分、横島に考慮してそのように言ったのだろう。高位な治療は秘術に当たる。それは他人に見せていいようなものではないためだ。

魔法による治療に摩利と真由美は立ち会わないようにしてくれただの。

横島は頷き保健室に入る。

そこには息絶え絶えの血まみれになった生徒が男女8人、ベットに寝かされていた。

大やけどや四肢の一部が欠損している生徒もいた。

横島はまずは札を出し、部屋の四隅に飛ばし壁に張り付かせる。保健室内に治癒促進に特化した結界空間を作りだす。

これで、今すぐの命の危機は脱することが出来る。

横島は一人一人、直接治療を行っていった。

四肢の一部が欠損した生徒をみる。欠損部もそこに氷漬けで置いてあった。それを取り出し、霊気を送って、接合させていく。

内臓が破裂している生徒には、手を触れ、霊気を送り修復させていく。

大やけどを負った生徒には全身に気を送り、皮膚を生まれ変わらせていく。

破片などが多量に突き刺さった生徒は、霊気で異物を包みながら抜

き、傷口に触れ修復させていく。

次々と治療を行っていく横島

この光景をもし見られていたのなら、大変なことになっていただろう事は想像にたやすい。

その間わずか20分もかからなかったのだ。

横島が治療を終えた後、漸く救急隊が来た様なサイレンの音が遠方で鳴りだしていた。

準備室からノックの音が聞こえ、摩利から声が掛かる。

「ようやく、救急隊が来た。横島、重傷者の状態はどうだ。持ちそうか？」

「入っていいですよ。終わったんで」

「終わった？」

摩利はドア越しで疑問の声を上げながら、真由美と共に保健室に入る。

摩利と真由美は保健室に入り、次々と、生徒の状態を見て行っていたのだが、一人また一人と見て行くにつれ、二人は驚きの表情を大きくしていく……

誰もかれもが、安定した寝息を立て眠っている。しかも、あるものは千切れた四肢が元通りに、大やけどは元に、破片が刺さっていたものは無くなり、元通りになっていたのだ。

「よ……………横島くん……………これは？」

「……………なんてことだ……」

驚愕の表情で横島の顔をみる真由美と摩利、驚きのあまり言葉がう

まく出ない様だ。

真由美と摩利は救急隊が来るまで命を損なわないようになれば程度に思っていたのだ。

それが、見事に元通りに回復していたのだ。

しばし、驚きが静寂が支配する。

横島は、二人の驚きの表情が理解できていなかった。そして、しばしの沈黙の意味も。

「二応、致命傷や大きなケガは治しましたが、細かいのは治癒促進します。後は体力の回復を待つだけですかね」

もしかしたら、容体の説明を求められていたのだと思っただらしい。

「いや、あれだけの傷をどうやって……いや聞くまい。流石氷室と言うところか。お前の突拍子もない犯罪まがいの行為には何時も驚かされていたが……今回程驚いたことは無いぞ。逆の意味でだ。ありがとう。助かった」

摩利は、一度目を瞑り、横島に礼を言った。

「凄い、凄いわ横島くん。本当にありがとうございます」

真由美は横島の手を取って興奮気味に喜びを表現していた。

「そっ・そうすか？」

横島はいまいちピンと来ていない様だ。

文珠が使えたのなら横島にとって、生きてさえいれば、一瞬で修復可能だからだ。

興奮気味に喜びあっている摩利と真由美だったのだが……

「困ったぞ。これをさすがに伝えるわけにはいかんぞ。もちろん治療された本人にもだ」

「うーん。横島くんが氷室家出身である事は学園長からなるべく内密にと釘を刺されているし。そうね。元々大した怪我じゃなかったっていう事にしましょうか?」

「いや、しかし、横島の貢献は多大だ」

「だったら内々で、何かお礼を、うーん、私たちにできる事で……横島くん何かして欲しいこととかある?」

真由美はそう横島に聞いてしまった。

「……し……して欲しい?、はあ、はあ、はあ、はあ、真由美さんが……」
何故か興奮しだす横島。

「いかがわしいことは無しだ!!」
摩利はそんな横島に釘をさす。もうすっかり横島の性格を把握している様だ。

「ま……まだ、何にも言っていないっすよ!」

「お前のスケベ顔を見れば言わずともわかる!!お前と言う奴は凄いなだか、バカなのかわからん奴だな」

呆れる摩利。

「うーん……!?じゃあ!!真由美さんとデーパートお!!」
やはり横島である。突拍子もない提案をしてきた。

「おい、横島!!」

それに噛みつく摩利。

「いいわよ。そんなことくらい」

しかし、真由美は平然と了承したのだ。

「へ？まじ？..」

横島は、まさか要求が通るとは思っていなかったようだ。

「真由美、横島を調子にのらすな」

「もちろん、摩利も一緒よ!!」

「おい、待て真由美!!」

「ヒヤッホー!!デート、デート!!真由美さんとデート!!摩利さんとデート!!」

横島は体全体で喜びを表現した。

救急隊員が重症患者の収容の為、保健室に真顔で突入してきたのだが……

ベットに寝ている8人の患者の前で、喜びのダンスを踊っている横島と、口論している真由美と摩利の姿があった。そんな緊張感のかけらもない状況に、救急隊員は一様に呆れていたのだった。

15話 横島、自身の立場を知る!!

横島が治療を施した生徒は、すでに致命傷となる様な大怪我はすべて回復している。駆けつけた救急隊員は緊急性はないと判断し、他にケガをしている生徒を搬送していった。

保健室準備室に戻り、摩利と真由美は横島にお感謝の礼を言う。

「横島、今回は本当に助かった」

「横島くん、本当にありがとうございます。生徒から犠牲者が出ずにすみました」

「たははははっ、デートは約束ですからね!!絶対ですよ!!嘘ついたら、自配機にヤモリを混ぜてやる!!」

「やめておけ!!……お前は、全然かわらん」

「いいじゃない摩利、悲壮感や偉ぶられるよりはずっと……」

摩利と真由美はそう言って笑っていたが、直ぐに生徒会長と風紀委員長の顔に戻り。

「摩利、私は皆を落ち着かせるため、放送室にいくわ。あなたは?」

「どうやら、戦闘も終息してきたようだ。捕縛者も多数出ている。私は巡回し、負傷者、捕縛者や被害状況の確認を行う……警察やマスクミも来るだろう。そちらは学校側が対処するだはずだ」

「横島は、休憩でもしていてくれ」

「では」

そう言って、保健室準備室を後にする摩利と真由美である。

彼女たちは、こんな混沌とした状態の中でも、自分がすべき事を、冷静に判断し実行することが出来るようだ。普通の生徒では無理な話である。彼女たちは非常に優秀なのだ。

残された横島は、取り合えず図書館に行った達也達の元に向かう事にする。

達也が居れば、戦闘自身は問題ないと横島は判断していた。

あの、喧嘩つ早さと、重度のシスコンで相手を殺さなきゃいいのだがなどと、達也の相手の方を心配している様だ。

構内を軽く走りながら、図書館に向かって行く。

既に戦闘の気配は構内にはない。後は真由美達や学校側が後処理を行っていくのだろう。

走っている横島に女生徒が声をかけた。

「横島さん、いた」

雫とほのかだ。

「探しましたよ、横島さん」

「横島さん、ちよつと来て」

ほのかと雫は横島を探していた様だ。

そして、雫に袖を引っ張られ、人通りのない校舎裏に連れていかれた。

「え？なに？雫ちゃん？」

横島はされるがままに連れていかれたのだが、

横島は今さらながら考えていた。雫たちを助けた際の行動についてだ。やり過ぎではなかったが、能力を見せてしまったからである。どう説明しようか悩む横島のだが、まあ、結論からすると、なるようになるかと思っているようだ。

横島の能力で記憶を消す事は簡単なのだが、彼女らにそのような事をする事自身、毛頭無いのだ。

「横島さん、助けてくれてありがとうございます」

「ありがとうございます」

雫とほのかは頭を深く下げる。

「たははははっ、あの時の事内緒にしてくれない?」

横島はストレートに食堂での戦闘の件を隠してくれるようお願いする。

しかし……ほのかは申し訳なさそうに話す

「すみません。横島さん。雫にそう言われてただけで、うっかり食堂の人に口をすべらせてしまいました」

雫は、以前横島が古式魔法（霊能力）を使えることを内緒にしてほしいと前に言っていた事を覚えていてくれたのだが、まあ、横島があの時にそう言うようお願いをした訳でもないため仕方がない事である。

「でも、だいじょうぶ」

雫はそう言う。

「へ?」

ほのかは雫が大丈夫だと言った意味を語りだす。

「私が横島さんが助けてくれたことを言ったら、口々に、

『あの変態が??無理無理』

『なんば野郎が??ないない』

『チカンの人でしょ??見間違いでしょ?』

そう言っつて、皆さん口をそろえて信じてくれないんです」

「……………なんでじゃー!!」

「結局、私とほのかが撃退したことに勝手になった」

雫はこういつて締めくくった。

そう、横島はある意味学内で有名人だ。入学初日にナンパを全校女子にしたとか、女子更衣室覗きを成功させたとか、下着泥常習犯だとか、そのペナルティで学校修繕を行っていたとか、更に、CADもろくに使えない一般人もどきだとか、横島がした事以上に悪評が広がっていたのだ。まあ、半分は正解なのだが……

この学校には入学の時から差別がある。1科生と2科生……劣等生と、しかしこの頃はさらに追加されていた。この学校の差別は、1科生<2科生<横島と……。2科生の下に横島が追加されたのだ。横島をよく知らない大多数はそう思っている様だ。普段の横島の行動から見れば妥当な評価だろう。

幸いと言うか、横島の普段のバカな行いのおかげで、横島の過剰な能力はバレずに済みそうなのだ。

でも雫は、横島の顔を見て言う。普段雫は、顔色をほとんど変えないのだがこの時は口惜しそうな顔をしていた。

「わたしは悔しい。本当は横島さんがすごく強くて、優しい人なのに……」

そう言っつて横島の袖を引っ張る。

ほのかもそれに同意して頷いていた。

「雫ちゃん、ほのかちゃん。ありがとう」

横島は屈託のない笑顔でお礼を言う。

「でも、横島さんも悪いんですよ。普段から真面目にしていけないから……その女の人にすぐ声かけるとか……」

そう言ったほのかと一緒に雫はジトツとした目で横島を見る。

「はっはっはっはー、この横島忠夫!!女の子がいるのに声をかけないなんてそんな失礼な事はできない!!いやあってはならない!!」

そう宣言する横島。

横島の頭の構造は常人には理解できないだろう。

「横島さん、最低」

引き続きジトツとした目で横島を見る雫。

「でも、あの時びっくりしました。あんなの初めて見ました。でもなんで隠しているんですか?」

「うん、凄かった。何をしたのか今だに理解できないけど」

「いや、別に隠しているつもりは無かったんだけどね。学校に入ったら、俺の能力ってちよつとおかしいのかなーって思い始めて、表沙汰になったら、家(氷室家)に迷惑かかるかもしれないし、魔法とか関係なしに、雫ちゃんやほのかちゃん達と普通に学校生活したいなと思っただけだから」

ほのかと雫の質問に対し横島は苦笑しながらそう言った。

横島は能力を特別隠したいか思っているわけではない。ただ、再度巡って来た学校生活を楽しみたいだけなのだが……周りの環境が今回も許してくれそうもない。

携帯端末にメッセージが届く、また摩利からだ。生徒会室に来るよ
うにとの事だ。

「うちの鬼ボスから連絡だ。人使いが荒い……行くね。雫ちゃん、ほのかちゃん黙ってくれようとしてありがとう」

横島はそう言って、その場を後にした。

16話 横島、しづしづ了承する!!

横島は摩利に呼び出され生徒会室に赴く。

「横島、入りますよ」

生徒会室には、生徒会長の真由美、風紀委員長の摩利、部活連会頭の十文字克人、そして達也に深雪、なぜかこの場に、レオとエリカが居た。

「待っていたぞ」

「横島くんお疲れ様、これで揃ったわね」

「摩利と真由美が生徒会室に入って来た横島に軽い挨拶をする。

横島は余りこの場に関係なさそうな二人に問う。

「エリカとレオはなんでここにいるんだ？」

「よお横島、大丈夫そうだな」

レオからは普通に挨拶が返って来た。

「わたしが逆に聞きたいわ。なんであんたが呼ばれたのか」

エリカは、横島がここに呼ばれた理由に付いて聞いたのだが、当の横島も知らないのだ。

真由美が代わりに答える。

「それはわたしから説明するわ」

真由美は横島を見ながら語りだす。

「横島くんにはまだ話していないから、最初から話すわね」

「今から、この学校襲ってきたテロリスト『ブランシユ』本部に乗り込んで壊滅させに行くわ」

「なっ!!何故!!」

横島は珍しく真顔で声を大きくする。

「当校の生徒が、曲がりなりにも、彼らのテロ行為に参加していました。現在の予想では、洗脳またはそれに近い、催眠魔法などが使用された可能性が高いの」

「そんなのは軍や警察に任せれば……」

「聞いて横島くん。洗脳または催眠魔法を施した人物の拘束をすれば、当校のテロに参加した生徒も、罪が軽くなる。若しくは、問われないかもしれないの」

「……………」

「このままだと、当校の生徒が不当に逮捕され、テロリストはトカゲのしっぽ切を行い。まんまと逃げられてしまう。そしてまたどこかで同じことをする。そんな事は許容できないわ」

「だからと言って、真由美さんたちが対処しなくとも」

「ここで達也が横から入って来た。」

「行くのは、俺と深雪、十文字先輩とレオとエリカだけだ」

横島は達也達に聞く。

「達也が提案したのか?」

「そうだ」

平然と答える達也

「エリカとレオも危険だと分かってか？」

「そうだ」

「そうよ」

レオとエリカは当然の様に返事をする。

「お前ら、なんでそんなに戦いが好きなんだ？」

呆れるように言う横島。止めることを半ば諦める。

「そこで横島、できれば、お前にも加わってほしい」

摩利が横島にブランシユ本部壊滅に参加するように言う。

「なんで、横島が!!それこそ危ないわよ!!」

何故かエリカが怒ったように摩利に反論した。

「横島すまん」

摩利は横島に先に謝ってから皆に話す。

「横島は治癒魔法が使える……」

エリカは驚いたようだが摩利にまだ噛みつく

「……だからって……無理矢理」

摩利はエリカの言葉にかぶせる様に、最後まで話を続けた。

「横島は……氷室家の人間だ。これはこの人間以外口外無用だ」

「嘘!!」

「まじかよ!!」

「本当ですか?お兄様」

エリカ、レオ、深雪は驚きの表情をあらわにしていた。

「氷室家って……横島が……あの救済の女神の氷室?」

「たははははっ、なんかそうらしい」

横島は当人の事のはずなのだが。氷室家の家人である自覚は少ないのだろう。実際は違うのだからなおさらである。

「そうらしいって、あんたなんで言わなかった……まあ、私も千葉家だから……」

エリカはそう横島に言いながらも自分が実家の事を皆に言っていなかった事を今さらながら思い出す。

「なるほどな……あの異常な回復力はそういう事か……なんか納得だ」

レオは納得している様だ。数々のケガ、しようもない事が発端の自業自得のケガが直ぐ治る所を見てきたからだ。

しかし、皆は勘違いをしている。横島が氷室だからではなく、横島が横島忠夫であるからだ。

焦げたり、爆発に巻き込まれたりしても、瞬時に治るのは天性のギャグ体質と回復力があってのものだからだ。

横島は苦笑いしながら、同行する事を承認するが、最後は横島節である。

「まあ、こんななって俺だけ行かないってのもなんだし……但し、男は治さん!!ケガを治すのは深雪ちゃんと……一応エリカだけだ!!達也とレオは睡付けて治しておけ!!」

「一応って私もちゃんと女扱いしなさいよね!!」

そんなエリカの叫びをよそに十文字克人が宣言する。

「裏の駐車場に車を用意してある。準備次第出発だ」

17話 横島、横島はやっぱり横島である!!

十文字克人が運転する軍用車風の車には、達也、深雪、レオ、エリカ、横島それと何故だか2年生剣術部主将の桐原が乗っていた。

ブランシユ本部である。山間の廃工場に向かっている。

「俺と深雪が正面から突入します。十文字先輩と桐原先輩は、裏口から侵入してください。エリカ、レオは外で暴れまわって、敵をおびき出してください」

達也は大まかな作戦を皆に説明する。

「了解だ」

「フン」

「わかったわ」

「OK達也!!」

十文字、桐原、エリカとレオは了承の返事をする。

そして横島に対しては

「横島は……エリカとレオの邪魔にならないところで待機だ」

「なんで俺だけそんな役回り?」

「お前はケガ人が出た時の為に居なくちゃならない。レオとエリカ、横島が狙われないよう気を付けてやってくれ」

「わかったわ、横島大人しくしているのよ!!」

「まかしておけ、大人しく俺の活躍っぷりでも見ておけ!!」

エリカとレオは達也に返事をしつつも、横島に大人しくしておくよ
う言いつける。

「…お、おう」

目的の廃工場が見えて来た。

結界の様な防御魔法が掛けられている様だ。

レオが車に乗りながら、防御魔法を解除する。

「パンツァー………!!」

車を止め急いで、全員所定の位置に付き、動き始める。

巡回していたテロリストをエリカとレオが倒しにかかる。

エリカとレオの交戦により、敵が集まってくる。その隙に、達也と深雪は正面入り口から、十文字と桐原は裏口から廃工場の建物に入っていた。

横島はと言うと……

車の横でしゃがんでその様子を見ていた。

横島はすでに、廃工場の中の状況を霊力を拡張して確認していた。

学校に襲撃した黒服連中とあまり変わらないレベルと判断していた。

達也と深雪、十文字クラスだと余裕だろうという人数と戦力だった。

自分の出番はないだろうと……

「結構やるなエリカ!!」

横島はエリカが複数の敵にCAD型の特殊警棒を振るっている姿を見てそう評した。

「エリカの奴いい尻している!!太ももが見えんのが残念だ!!結構胸もあるしな!!」

「うおっ、胸結構揺れるな!!真由美さんも結構すごいし、美月ちゃんも

結構なもんをもってるが、エリカの奴もなかなかー!!いやーしかし」

但し、評価の対象は戦闘ではないのは、横島ならではである。

「ぐへへへー」

エリカを眺めてゲスな笑いをする横島。しかもすでに鼻血をちよろっと出していた。

そんな横島にエリカの声が飛んでくる。

「ごめん横島!!」

すると、エリカが払った敵の刀が横島の頭上から落ちてくる。

「ぐわっ……フー危なかった」

間一髪よけた。

その横島をみてエリカは少し心配そうにする

「大丈夫横島?……あんた鼻から血出ているわよ。当たった?」

「い、いや、これは違って……だ、大丈夫だ」

横島は自分で出した鼻血を腕で拭く、心配そうにしてくれるエリカに対し、良心の呵責をおこしていた。

横島が頑張っているエリカをエロい目で見た報いなのだろう。

横島は、廃工場の屋上から人が出てくるのを確認した。

どうやら狙撃目的の様だ。エリカやレオは、遠方のしかも上に対しての攻撃手段を現状ではほぼ持っていない。

横島はエリカとレオが見えない位置から、屋上の人間に向け指を激しく動かし、印を結ぶ。

「生を受けるものよ眠れ」

小さく唱える。

すると、屋上に出てきた数人の人間は銃を構える前に倒れ眠る。

「まあ、こんくらいはいいいな」

横島は独り言ちりながら、また、車の横まで来て、レオとエリカが見える位置にもどるのだが……

横島が使う陰陽術は、現代の魔法の常識を覆しかねない様な代物ばかりなのだ。

横島の常識では大した術ではないのだが……やはり、ギャップが激しい様だ。

横島は、廃工場内の状況を霊力で確認していると、一気に10名近く、生命力が落ちて行く敵の集団があった。致命傷を与えたのだろう。それはどうやら深雪の魔法による物だ。

「あの妹はなにやってんだ？」

横島は、まだ直ぐには死なないだろうが危険な状態だろうと判断する。タイミングをみて、敵を助けに行こうと考えていた。

しかし、しばらくすると、その敵集団が一気に生命力を回復させたのだ。そこにいたのは達也だった。

「あいつ、裏技隠してやがるのか？うーん、回復と言うよりも、修復？元に戻したみたいな感じだったな……どうやったんだ？」

流石の横島も達也の再成（デイバイン・レフト）について、正確に理解できていないようだ。

「あいつ、何でもありだな……」

横島はそう言うが、横島こそ何でもありなのだが……やはり、自分の事を良く理解していない横島である。

しばらくして、達也、深雪そして、十文字、桐原が車の所まで戻って来た。

首尾よく作戦が成功に終わった。

ブランシユ日本支部のトップを捕らえたのだ。

そして、それぞれが労をねぎらうのだが。

「横島はなーにもやってないけどね!!」

エリカは横島に意地悪な顔をして言う。

「エリカ、横島さんが来て下さっただけでも、安心して戦闘が出来るのではなくて」

深雪はそうフォローを入れてくれた。

「そうだぞエリカ!!俺は何もやってない訳ではない!!みんなの雄姿をここに収めていたのだ!!」

そう言つて、横島は携帯端末を前に掲げる。

「ちよつと見せなさいよ!!」

エリカは横島の携帯端末を奪つて操作する。

「あっ!!」

「あーーーーー!!私のお尻ばかり写して!!」

エリカはさらに過去のファイルまで開こうとする。

「ああ!!それは見ちゃダメーーーーー!!」

めちやくちや焦る横島。

「何これ、女子の写真ばっかり、しかもきわどいショットで写して!!なにやってんの横島!!こんなもんはこうよ!!」

エリカは横島の携帯端末を空中に投げ、特殊警棒で打ち砕いた。

「あああああ!!ボクの大事なコレクションがーーーーー!!」

横島は涙と鼻水を同時に吹き出し、粉碎された携帯端末の所まで行き、地面に両手を突く。

「横島!!覚悟はいいわね!!」

「横島さん、流星にこれは許容できません!!」

「エリカ!?深雪ちゃんまで!」

2人は鬼気迫る形相で横島に迫る。

そして、横島は二人から魔法やら、打撃やらの攻撃を一身に受けた!!

「ぐぼっ!!がべ!!うへー!!」

呆れた顔でそれを見る、達也と十文字。

桐原は鋭い目つきでエリカの制裁を「いい攻撃だ」とほめる始末。そして、レオは大きく笑っていた。

「ーーーーーやあーーーーー!!こんなんばっかしーーーー!!」

横島の叫びはどこまでも響いた!!
やっぱり最後まで締まらない横島である。

18話 横島、達也にますます疑われる!!

魔法大学付属第一高校のテロリストによる襲撃事件は、ブランシユ日本支部壊滅をもって解決をした。

事後、警察の事情聴取や軍の介入などはあったが、生徒独力で解決に至っている。

幸いにも生徒側に死亡者及び重度のケガ人は出なかった。(横島が重傷者を治したのだが)

テロに加担した生徒は、ブランシユ日本支部の支部長。司甲の洗脳魔法によるものと結論になり、1週間の謹慎処分了事が済んだ。

構内、校舎はいたるところで戦闘の跡が見受けられるが、既に工事業者が入り、徐々に復旧していつている。

あれから1週間。ようやく校内も落ち着きを取り戻し、授業も通常通り再開される。

横島というと、相も変わらず風紀委員の仕事の一環として、構内の修繕やらをやらされていた。

学校内での横島の立ち位置は以前と変わらず、なんば、変態、チカンの横島、2科生より下の扱いレッテルはそのままだが。本人はまったく気にしていないのだ。

そんな横島の周りでも変化したことがある。

横島の腕の風紀委員の腕章に、見習いと書いた紙がなくなった事。

これは、ブランシユ本部壊滅戦に参加した事による功績が認められ、生徒会、部活連、風紀委員会一致で決定された。また、学校の事務職員からの強い推薦があったとも。

事件以降、雫とほのかが横島と一緒にいることが多くなった。どちらかというところ、横島の後ろに雫とほのかがついて行っている感じである。

真由美や十文字からもよく声をかけられるようになった。

1年E組の連中とは相も変わらずだ。

少なからず横島を認めている人間が増えているのだろう。

しかし、そんな中、達也はますます横島に疑いの目を向けていた。あの学校襲撃事件後達也は、構内の状況と事件の考察を行っていた。

不可解な点が出てきたのだ。

一つは、テロリストが携行していた銃火器がすべて、使用不能にされていたこと、その上ほとんどが、真つ二つに切られていた。その切り口は鋭く、金属同士の摩擦跡などは一切見られない。

警察の調書をハッキングした達也は、テロリストの証言から、銃火器が急に割れたと……

達也が警察の調書をハッキングして分かったことだが、傭兵が混ぜていたということが判明する。

しかし、その傭兵は誰にやられたのかが、当の本人が覚えてないなど、あやふやな証言しか書かれていない。

もし、練度の高い傭兵であれば、学内でも対応できるのはほんの一握りの生徒だけだろう事と達也は考察するが、そのような事があれば、話に上がっているはずだった。

食堂の被害状況についても達也は疑いの目を向けていた。

窓は、外から爆破したような跡はあったが、中は全く無傷だ。どのようなにしたらあのような現象になるのかが今のところ達也にも見当がつかない。

さらに、床にめり込んでいた弾丸だ。ある特定の場所だけ100発近い弾が床にめり込んでいた。

しかも、弾丸の先からめり込んでいるのではない、いろいろな角度でめり込んでいたのだ。

報告ではほのかと雫が撃退したとあるのだが、彼女らの能力で可能なか達也は疑いの目を向けていた。

そして、その場に横島がいたとの証言もあったが、横島が何かをしたという証言や報告は全く見当たらない。

達也は考察する。

通常の判断なら上記だけの情報から、横島が何かしたという確証は全く持てない。

そもそも、横島が何かしたという前提が間違っているのではないかと思うほどだ。

しかし、横島の言動、そして、ほのかの魔法を止めた動き、神通棍を難なく起動できること。これらが、達也の頭から離れないのだ。

さらに、かなりの重傷者がいたと証言があつたが、実際には重傷者無し、死亡者無しだ。

横島が治癒魔法を使った可能性が高い。

達也は、真由美や摩利の態度から、これはほぼ確定だと判断していた。

どのような、治癒魔法かは達也にも現状では判断はできていない。

これだけだと、横島は氷室家の治癒魔法師とだけしかわからない。

確かに、横島の行動を見る限り、危険人物ではないのかもしれない。しかし、得体のしれなさは益々、増すばかりだった。

達也は思う。

達也と深雪の生活空間で、不安要素はできるだけ取り除きたい。

ならば……

横島は学校を後にし、一人暮らしをしている。マンションに帰らずに、山岸の殆ど人が立ち入らない公園に入っていく。

「で、何の用だ。達也？一人とは珍しいな」

横島後方の暗がりから達也が現れる。

「尾行に気付いていたのか？」

「お前、わざとわかりやすくしただろう」

「……………」

「で、話を戻すが何の用だ？男にストーキングされる趣味は無いぞ」

達也の顔は真剣そのものだ。いつもに増して迫力がある。

「単刀直入に言う。横島……お前は何者だ？」

「自己紹介はとっくに済んだはずだが？」

「……………何の目的であるの学校にいる？」

「俺は、ただ学校生活を普通に過ごしたいだけだ」

「……………テロリスト襲撃の際、お前は何をした。テロリストの銃火器の破壊、アレが無ければ、学校や生徒は多大な被害が出ていた。しかし、そうはならなかった……お前がやったんだな？」

「知らないな」

「もう一度言う。お前は何者だ」

「じゃあ、逆に聞くぞ。お前こそ何もんだ？お前だって色々隠しだてしてそうだが？」

横島は若干ムツとした感じで達也に言い返す。

達也の視線に殺気がよぎる。

「……横島、俺と勝負しろ。俺が勝ったらすべて話してもらおう」

「はあ、なんでそうなるんだ？本当に戦うの好きなんだな……まあいいや、じゃあ俺が勝ったら、お前も教えろ」

「……いいだろう」

「……その木の上のおっさん、審判頼んでいいか？」

横島は不意に後方の木の上に向かって声をかける。

「あれ？バレてたの」

すると、木の上から、スツと人が下りてきた。

「ああ、何回かつけていたのは知っていた。で、どうなんだ？おっさん」

「知っていたのなら、もっと早く言ってくれよ。恥ずかしいじゃないか……審判の件はOKだ。達也君もそれでいいね」

木から下りてきた人物、作務衣姿の剃髪。忍術使い、九重八雲は達也に向かって軽い調子でそう言った。

「ん？グルかよ」

「いや、俺は先生に頼んだ覚えはない」

達也は一瞬驚いた表情をしたが直ぐに元の冷静な顔に戻る。

「いやー、僕の方は個人的な興味で君を付けていただけなんだ」

九重八雲は答える。

「まあ、いや、達也、ルールは服部副会長との方式でいいか？」

「いや、どちらかが倒れるまでだ」

「おい、冗談はよせよ」

「回復は可能だ」

「そうかよ」

横島は呆れた様子にいう。

「危なそうだったら僕が止めるよ。まあ、実際止めれるかは分からないけどね。場所は提供しよう」

軽い口調で九重八雲は言う。

「めんどうだから、ここでいいや」

横島はそう言って、札を4枚出す。

それに反応して達也は自前のCADシルバーホーンを構える。

横島は手を前にやり達也を制する。

「いや、周りに迷惑かからない様にする術だ」

そして、半円を描くように腕を振って札を投げる。

札は四方の木に水平に飛び木の幹に張り付き、一瞬光る。

「結界」

横島は呟く。

結界によって、内部からの攻撃が外に影響に出ないようにしたのだ。

それを見た九重八雲は表向きは平静を保っていたが、内心は驚愕していた。

「うーっ、ルール変更しない？体術での勝負ってことで」

「先生、ルールの変更は無しです」

達也は八雲にそう言ったのだが、八雲はやれやれといったふうな表情を浮かべる。

「横島いいか？」

達也はシルバーホーンを構える。

「ああいぞ」

横島は右手に札を構えた。

八雲はしぶしぶ勝負開始の合図をする。

「仕方ないか。じゃあ、両者礼……………仕合開始!!」

19話 横島、珍しく真面目に勝負!!

山岸の公園。2人は対峙していた。

横島は数枚の陰陽術の札を右手の指に挟み、達也はシルバーホーンを構えている。

八雲は勝負開始の合図をする。

「仕方ないか。じゃあ、両者札……………仕合開始!!」

横島が先に動く。

右手の人差し指と中指に挟んでいた札1枚を、達也の頭上に向かって素早く投げつける。

達也はシルバーホーンを構えるとはほぼ同時に、頭上の札は霧散する。

達也のBS魔法『分解』、物質を分解する『ミスト・デイスパーション』により、札自体が分解したのだ。

横島は札から小さな雷光を顕現させ、達也を行動不能にするつもりであったのだが……………、顕現させる前に横島が右手指に挟んでいた札が分解する。

「うわ、なんだそりゃ? 札が分解した?」

横島はそう言いながら、先ほどの札を囀に、すでに別の札を左手で達也の足元に投げ放っていた。

札は地面に張り付き、拘束術式が光を放ちながら顕現しようとしていたが……………

それも達也の分解魔法により阻止される。

起動術式自体を分解する『グラム・デイスパーション』を発動したのだ。

「なんだ？起動中の術も分解できるのか……やっかいだな！」

横島は手にした札から直接火の球を飛ばす。

それも達也は冷静に対処し、火球を分解。

「なんでもありだな、その魔法!!」

達也は火球を分解したと同時に、横島に向かって突っ込んでいく。

横島はバックステップをし、達也から間合いを取ろうとするが、達也は緩急織り交ぜた歩法でフェイントを仕掛けながら、加速魔法を起動し、一気に横島の後ろを取り、横島に蹴りを入れると同時に、シルバーホーンを構え振動系の魔法を起動した。

横島は後方から飛んでくる達也の蹴りを、右腕で捌きながら体の向きを入れ替え、達也が構えたシルバーホーンの前に札をかざし封印術式を発動させ、振動系魔法を無効化させる。

「お前の札は万能なのか？」

振動系魔法を無効化された事を悟った達也は、横島にけん制の前蹴りを放ちながら尋ねる。

「どっちがだよ!!たくつ、札をまた作らなきゃならんだろ!!」

横島はそう言いながら、左手の札に術式を発動させ、達也に向かって突風を吹かす。

達也は横に飛んで突風を避けるが、その隙に横島は達也から間合いを取り、4枚同時に札を達也に向かって投げつける。

2枚は札のまま分解され、残り2枚は雷光を発し達也を襲うが体術で回避に成功した。

「かかった!!」

横島がそう言うのと達也が避けた先で、地面から氷結の術が起動し、達也の足を覆う。

予め札を設置していたのだ。

しかし、達也はそれも分解してみせた。

お互いの距離が10メートル程離れる。

一進一退の攻防である。

「達也、お前その魔法って、なんでも分解できそうだな……………」

「お前の札も万能だがな……………」

「達也、まだ何か隠しているだろう?」

「お前もな」

「じゃあ、そろそろ出そうかな」

お互い攻撃の構えに入る。

達也はシルバーホーンを横島に向け、横島は右手に4枚の札を挟み構える。

両者タイミングを計っている様だが。

横島が達也に声をかける。

「達也、先に謝つとくぞ」

直後、一瞬何かが光ったように達也は見えた。しかしそこまですた。

達也はその場に足から崩れるように倒れ気を失った。
横島が何らかの攻撃をしたのは間違いないだろう。

しかし、横島はその場から一步も動いていない。
ただ、その左手には光る剣が太陽の様に煌煌と輝いていた。

横島の必殺技の代名詞、栄光の手『ハンズ・オブ・グローリー』

九重八雲は声が出なかった。

それどころか、身動すらもできなかったのだ。

余りの速さに、その瞬時に達也の身に何が起こったかが理解出来なかったのだ。

八雲には、達也の体に一瞬、光が貫通したように見えたのだが……

その実は、横島は光の靈剣ハンズ・オブ・グローリーを発現させ、達也のいる距離まで瞬間的に伸ばし、神速で振りぬき、達也を切り裂いたのだ。

だが、斬ったのは達也のサイオン、要するに靈気だけで、達也に切り傷や外傷はない。

達也のサイオンは一気にほぼ0まで落ち、自己修復術式も発動出来なかったのだ。

いや、体が傷ついているわけではないため、発動しなかったのかも
しれない。

横島は、ハンズ・オブ・グローリーを解除する。

完全に地力の差が出た結果だった。

横島は、達也の能力を探るべく試すように戦っていたのだ。

横島は一息ついて、さっきの口調とは打って変わって九重八雲に言う。

「いやー、すみませんね。なんか付き合わせちゃって。蓮さん（氷室15代当主）になんか不都合な事があれば、あなたに頼れって言われてたし……。あなたが九重八雲さんでしょ？」

九重八雲もさつきとは口調をかえ、丁寧な言葉遣いになる。

「しがない寺坊主です……。こちらこそ失礼した。あなたを探るような真似をしてしまった。15代目から何かあったら、助けてやってほしいと頼まれたのですが、その必要はなさそうですね」

「俺、年下なんで、そんな改まってもらっては困るんですが」

「この結界も見事、そして、その技は何ですか？氷室の秘術ですか？いいものを見せてもらいました。靈気……。サイオンだけを見事斬って落としましたね。内包する靈気も凄まじい」

「それが分かるあなたも、かなりの腕前だと思いますが？」

「達也君もなかなかのものだと思うんだが、まだまだ修行が必要のようだ」

「いや、達也の持つてるものって、もともと1対1は向いてないんじゃないですか？後、何となく軍人の様な匂いもするし……」

「そこまでわかって……。あなたの事は詮索するなと15代目に釘を刺されましたが、俄然興味がわいてきました」

「取り合えず達也を起こしますか」

そう言って、横島は達也を仰向けに寝かし、靈気を注ぐ。

しばらくして達也が目を覚まし体を起こす。

「俺は負けたのか？」

八雲が答える。

「達也君の負けだね。完膚なきにね」

「俺はどうやって負けたんだ？」

達也は自分がどう負けたのかが分からなかった。一瞬目の前が光った様に見えただけなのだ。それを横島に聞いた。

「まあ、それは企業秘密だ」

横島は適当に誤魔化した。

「そうか、負けたのか……」

達也は呆然自失とまではいれないが、負けた事にショックを少なからず受けていた様だ。

「上には上がいるってことだよ達也君。君らしくないね。相手の情報を良く調べずに戦うなんて。まあ、今後も精進して修行をしまえ」
八雲はうんうんとうなずきながら、達也を諫める。

「俺なんて、人生の半分以上負けだぞ!! 1回や2回どうってことないって。要は死ななきゃ何とかなるもんだぞ」

横島も一応、達也を慰めている様だ。

そして横島は言う。勝負に勝った時の条件を。

「じゃあ、約束だ。教えてくれ」

「……分かった。約束だ……俺は……四……」

達也は自分の家の事を語ろうとしたのだが……。

「CADの使い方と中身の選び方を教えてくれ!!」

その言葉に重ねる様に横島は、達也と思っていた事とは異なる内容を言ってきた。

「お前は何を言っている」

「教えてくれと言うのが俺の条件だ!!だからCADの使い方教えてくれ。いやーこのままだと、流石に落第しそうだしな。理論とかもさっぱりわからん」

横島は笑いながら言った。

「……………」

「うん？俺はお前と違って、別にお前が隠したい事を知りたいとは思わんど。人それぞれ知られたくない事の二つや三つあるもんだ」

横島は達也にそう言って次々と語っていく。

「まあ、なぜあの学校に居るのか聞いてきたが教えてやる。……………さつきも言ったが、学校生活を楽しく送る。これが本当に俺の一番の目的だ。大切な人の願いでもあったんでな」

「あとは、俺は横島忠夫。霊能力者であと、陰陽師でもある。これはなるべくオフレコに頼む。現代魔法はからきしだ。あと、氷室家かな……………。趣味はナンパだ!!それといいエロ本とエロ画像をどこで入手するか教えてくれ!!」

「そんなものは自分で探せ……………。俺は司波達也だ。魔法師としての適性は低いけど、戦闘力にはそこそこ自信があったのだが……………負けたな。それとBS魔法師だ。内容は言えんがな……………。魔工技師を目指している」

達也はそんな横島を見上げ呆れた様に言うが、横島が改めて自己紹介したこと自身も答えた。

「で、どうなんだ？CADの使い方教えてくれ!!落第かかってるんだ」

「わかった。勝負に負けたからな……………」

「そう言うわけでよろしくな達也」

そういつて座っている達也の手を引っ張って立たせる。

「ああ。しかし、次は負けるわけにはいかないな……」

「次か……。なしの方向で!! まあ、どうしても言うんなら、深雪ちゃんとデートを賭けて!!」

達也はこれでもかと言うぐらい横島を睨む。

「う……シスコンめ、冗談だつて!!」

「……いずれ、お前の強さの秘密を暴いてやる」

「まあ、好きにやっちゃってくれ」

横島はウンザリと言う。

八雲は二人の若人を見て頷いていた。

「うんうん、若いっていいね」

横島九校戦編

20話 横島、ライバル出現!!

とある休日

「元気そうな彼女!!ボク横島!!今からお茶しない!？」

「その美人おねーさん!!ボク横島!!カラオケでもどう!？」

「おしとやかそうなおじょーさん!!ボク横島!!一緒にご飯食べない!？」

このにやけ顔の少年、朝から彼是100人以上の女性に声をかけている。もとい……下心丸出しのナンパを繰り返している。

もちろん全部すげなく断られている。まったく相手にされていない感じである。

彼はそれでもめげずに同じような切り口で女性をナンパし続ける。学習能力があるのだろうか？

しかし、その少年の直ぐ近くにも……

「その君!!かわいらしいね!!ボクの道場で鍛えてみない!?話はそこの喫茶店で!!」

「小柄な君!!ぜひボクの道場に來たまえ!!体が元気になるよ!!話はそこの喫茶店で!!」

「お嬢さん方!!簡単にダイエットが出来る方法を教えてあげる!!話はそこの喫茶店で!!」

作務衣姿の剃髪の中年にかかろうかと言ういい大人が、詐欺まがいなトークでナンパに精を出していた。このおっさんも彼是100人以上声をかけている。しかも若い女性……いや明らかに、20前後より下の少女にだ。

しかし、上の少年同様全くと言って、相手にされていないのだ。

そして、お互い目が合う。

「おっさん!!邪魔なんだけど!!そこにいとナンパが成功しないから、どっか行ってくれ!!」

「横島くん!!君!!ここはわたしの縄張りだよ!!君こそ、下心丸出しのナンパなんてやめてどっかに行ってくれないか!!」

そう、国立魔法大学付属高校1年E組 横島忠夫と司波達也の武術の師匠であり、有名な古式魔法の使い手、忍術使い九重八雲が、八王子駅前でいがみ合いながら同じ場所で下手くそなナンパをしていたのだ。

お互いにらみ合い。

「ふんっ!!」

そう言っつてそっぽを向く。

お互いよく似ている。下手なナンパとめげない精神、そして子供っぽい事である。

エリート校の生徒と、有名魔術師だと言うのだが、そんなそぶりは全くない。

そして、お互いナンパを再開する。

「その君!!ぜひボクの道場に……」

八雲がとある女性に声をかけようとしたのだが……

横島が割って入って来た。

「おっさん!!そのポニーテールが素敵なお姉さんは俺がさつき声を掛

けたんだ!!手を出すなよ!!」

八雲に対し凄いい言いがかりをつける。

「何言っているんだ横島くん!!君は相手にもされてなかったではないか!!だからボクがおいしくいただこうというわけだよ!!」

八雲は横島にゲスな返しをする。

「世の中の女はすべて俺んのじゃーーー!!」

横島は叫ぶ。内容は最低だ。

横島と八雲は互いの額が付くかというぐらい顔を近づけ、睨み合う。

しかしそんな事をお構いなしに、そのポニーテールの女性は二人から離れて行き、若い男に声を掛けた。

「待ったー?」

「いえ、藤林さん。自分も今来たばかりです」

横島と八雲はポニーテールの女性が声を掛けた男の声に反応して顔を向ける。

「ああ!!」

そう、司波達也がそこにいたのだ。

2人に気付いた達也は

「横島に師匠?ここで何をしている?」

しかし二人とも肩をプルプル震わせて

「くそっ!!お前ばっかりモテやがって!!不公平だ!!」

「師匠を差し置いて……………達也君……………君は道場クビだ!!」

言いがかりも甚だしい。

ポニーテールの女性、いや、この状況をキョトンとした目で見ていた藤林響子は達也に質問をする。

「達也君、お知合い？」

「……まあ」

そんな返事しかできない達也。

確かに、二人の変態と知り合いとは、言いづらいだろう。

八雲が達也と話す響子を見て

「ん？……ボクとしたことが」

「なんだ、おっさん？」

「あの女性は弟子の顔を立てて達也君に譲るとするよ……」

八雲は手のひらを返したように、師匠ズラをする。

「なんでだ!!達也の奴にいいようにされていいのか？」

「ボクの目は曇ったようだ。ボクは14歳から22歳までの女性がターゲットだ。24歳まではギリOKなのだけど、彼女は三十路に近い」

めちやくちや失礼な事を本人の目の前に言った。しかも、八雲は自分がロリコンですと宣言までしたのだ。

「おっさんロリコンかよー!!しかし!!甘い!!あのお姉ちゃんは、年はそこそこ言っているかもしれないが、美人でしかもスタイルもいい!!肌の手入れも頑張っている感じもいい!!男性経験も少なそうないしな!!そこがまたいい!!」

横島も最低である。本人の目の前でもはやデリカシーがないどころの騒ぎではない!!

「横島くん、年増の処女なんて、面倒くさいだけだよ。ねちっこくなるし。その点、若い処女はいい、みずみずしくて、爽やかだ!!」

……このロリコンはげ。警察に突き出した方がいい様だ。

「年いっても、心が若いんだよ!!だから、ポニーテールが似合うんだ!!ああ見えて多分奥手なんだよ!!夢見ているんだよあの年でも!!だから可愛いんじゃないか!!」

横島は褒めているつもりなんだが、本人の前で年、年と連呼しすぎだ。

藤林響子は下を向きプルプルと震えながら奴らの最低トークを聞いて我慢していたのだが……

バシツ!!

ハゲの頭は近くの壁にめり込む。

ゴスツ!!

バカの頭は地面に突き刺さった。

ハゲとバカの末路である。

頭を壁と地面にめり込み。ピクピク痙攣している二人を後にし、

「達也君行きましようー!」

響子は笑顔で達也に言う。

「……はい」

達也は若干ひきながら返事をする。

2人に制裁をくらわした藤林響子と引き気味の達也はこの場から去っていった。

壁から頭を抜いたハゲと地面から頭を引っこ抜いたバカは

「今日はもうやめておこうか」

「そうっすね」

お互い目線が合い。固い握手をかわしたとか……かわさなかったとか……

21話 横島、デートとは涙!!

「デートしてくれるって言ったやないかー!!嘘つきー!!」

「また、今度な」

摩利は淡泊に答える。

「デートしてくれなきゃやだー!!デートオ!!デートオ!!デートオ!!」

横島は風紀委員室本部の床で仰向けに寝っ転がって、子供がダダこねる様に、手足をジタバタと振る!!

「ええーい、うっとおしい!!今は真由美も忙しいのは、お前もわかっているだろう?」

「そうやって、はぐらかすつもりだ!!いつもいつもそうだ!!女なんて!!女なんて!!どちくしょー!!」

横島は飛び起き、叫びながら洪水の様に涙を流し、風紀委員室本部を勢いよく出て行った。

横島の様子を見て、摩利はため息を付く。

今は6月下旬。あの事件から2ヶ月は経とうとしていたのだが、今だ横島と真由美と摩利のデートの約束は果たされていなかった。

確かに、真由美も摩利もあの事件以降、事件の後始末などで、忙しくそれどころではなかったのだが、最大の理由は、摩利自身が全く気乗りしないからだ。

しかし、今、横島の機嫌を損なうわけにはいかないのだ。

現在、生徒会、部活連と夏に行われる九校戦に出場する選手とサ

ポータスタッフの人選に右往左往している。

九校戦とは、全国9つある魔法大学付属高校で年1回行われる魔法を駆使した競技大会の事だ。

その九校戦のサポートスタッフに真由美が横島を推薦しているのだ。

サポートスタッフは主にCADの設定や戦略サポートなのだが、横島の場合は、間違いなく治癒魔法目的だ。もし、競技中に大怪我をして出れなくなるような事態に陥っても、横島が居れば選手を回復させ、競技に復帰させることが出来る可能性が高くなるからだ。

「真由美の奴、とんでもない約束してくれたもんだ」

風紀委員室本部で一人、深くため息を付く摩利だった。

その週の休日

横島は真由美と摩利と出かけている。待望のデートである。

横島は摩利とひと悶着あった後、生徒会室の真由美に直訴したのだ。

すると、意外にも真由美はあっさりOKした。

どうやら、渋っていたのは摩利だという事が分かった横島は、摩利にネチネチと「委員長がそんなんでいいのか」「普段はえらそうにしているのに人の約束は破る」やら、責めたてていた。

摩利はそれでも首を縦に振らなかつたのだが、真由美が来て、摩利を説得し、摩利もしぶしぶ了承したのだ。

真由美は、薄いピンクを基調としたワンピース姿。胸の真中には大きな赤いリボン。

摩利は、緑色のタンクトップにジーパンとラフな恰好だ。

横島と言えば、赤のTシャツにジージャンとジーパン姿。頭には赤のバンダナのおなじみの姿。

真由美と摩利の後を、少し離れて歩いている。

しかし、横島の両手と背中には多量の女性用の服やら小物の買い物袋が担がれ、持たされていた。

「横島くんが居てくれて、助かったわ。こんなにとくさん買い物が出たのは久々ね。やっぱり男の子ね」

真由美はそう言って振り返り、横島に笑顔を振りまく。

「う……う……真由美さんに喜んでもらって、光栄です」

横島は苦笑気味で、目じりには涙が溜まっていた。

真由美の横では、摩利は必死に笑いをこらえている。

まさしく、デートと言う名の荷物持ちさせられている横島。

100年前とやっている事はほぼ変わらないのだ。

隣れ横島。

そんな3人の遙か後ろに、彼女らを付ける一団が居た。

「くくくくつ、横島……ぷくくくくつ」

エリカは腹を抱えて笑いをこらえているのだが、完全に漏れている。

「エリカちゃん笑い過ぎよ……プクツ」

そう言う美月も笑いをこらえている。

「笑ってやるなよ。……横島……は我慢だ」

レオは横島の姿に憐れみを感じ同情する。

「いいな、私も買い物に付き合ってほしい」

雫もどうやら、横島に荷物持ちをしてほしいらしい。

デートのうわさを嗅ぎ付けたおなじみのメンバーが後を付けてき

ただ。

「お兄様、横島さんは力持ちなのですね」

深雪はズレた事を言う。

「言ってやるな深雪」

流石の達也も横島に同情している様だ。

「達也さんも休日には、その…深雪以外の女の人とでかけられたりするんですか？」

「ほのかは達也に危険な質問するのだが……」

「ほのか、何を言っているの？お兄様がそんなことをするわけないでしょ、私以外の女の人となんて……」

達也のかわりに答える深雪の笑顔はめちゃくちゃ怖かった。

ほのかはその迫力にたじろいでいる。

達也はこの場は沈黙を守っていた。

「深雪、笑顔が怖い」

雫が深雪に指摘しこの場を納める。

そんなことも知らずに買い物続ける。真由美、摩利、横島。

真由美が次の店に入っていく、摩利もついて行く。

横島は近くのベンチに座り休憩をしていた。

「はあ、はあ、くそ、せつかくの美女2人とのデートなんや。こんなことでへこたれるわいやないで……デートはOKしてくれたんや!!それはキスはOKという事や!!やっちゃやる!!絶対やってやるでー!!」
心の声が完全に雄たけびに代わっている横島。

そんな横島の目の前で突如として光がスパークした。

「ぐわっ」

そして、横島の座るベンチが振動して、倒れる。

「げへっ」

横島は荷物を持ったまま、ベンチごと背中から後ろに倒れる。おまけに、横島の頭に、街路樹の木の枝が降ってきた。「痛たた……いったいなんなんだ？」

どうやら、横島たちを尾行していた。ほのかと雫が魔法を横島に対して発動したようだ。

その様子を見た、エリカと美月はまたもや爆笑していた。

「ほのか、雫なんでそんなことを？町中では魔法は禁止よ」

深雪はほのかと雫に注意をするのだが。

「なんとなくムカつく」

「うん」

雫とほのかは返事をするが反省はしていない様だ。

横島はベンチを戻し、多量の荷物をベンチに置く。

真由美が先に店をでて戻ってくる。そして横島に

「この帽子どう？似合ってる？」

買った帽子を横島に品評してもらいたいようだ。

「よく似合ってますよ。真由美さん」

「ありがとう。そうだ横島くんは何か欲しい物とかないの？なんかお礼してあげたいんだけど」

横島は思う。キターーーー!!チャンス到来!!今は二人きりだ。摩利さんも今はいない!!

「お礼だなんて……ただ……」

横島は目をキラキラさせながら、真由美の手を取って、口をとがらせ、不意にキスをしようとしたのだ!!

ズキューーン!!

「はあああーーーーーん!!」

横島はそのまま前のめりに倒れピクピクする。

「え？…どうしたの横島くん？」

急に倒れた横島にびっくりし、心配する真由美。

摩利も横島の叫び声を聞いて店から出てくる。すると真由美の前で前のめりで倒れ、けつに傘がささって痙攣する横島を発見する。

「おい!!大丈夫か!？」

「たは……たははは!!だ……大丈夫です」

そう言って横島は、けつからスポッと傘を抜き、立ち上がる。

横島は思う。誰が一体？

尾行する一行は慄いていた。

今のは、雫が近くにあった傘を投げ、ほのかが魔法でコントロール。雫がすかさず加速させたのだ。

見事なコンビネーションだった。その距離50メートルは在っただろう。

皆は思う。この二人には逆らわないでおこうと……

この後も、真由美、摩利、横島のデート？は数々のトラブルに巻き込まれる。

但し、横島限定だが……

横島が、隙を付いて、真由美や摩利にキスをしようとする度に、何か起きるのだ。

ある時は、水道の水が横島めがけて放たれ、びしょびしょに、ある時は、建物の上から、横島めがけて、植木鉢が落ちるなど……

そして、夕刻

「横島くんありがとうね。こんなに荷物もってもらって、やっぱり男の子ね。わたしも横島くんみたいな弟がほしかったわ」

そう言っつて、真由美のお迎えの高級車と共に、真由美と摩利は帰っつて行っつてしまっつた。

横島はポツンと取り残され、膝をガクツと折れ、地面に付き、夕日に向かつて涙を洪水の様に流していた。

「どーせ!!こんなこっつたらろうと思っつたー!!」

そして、横島の叫びは夕日と共に消えて行っつた。

尾行していた一行は

エリカと美月は終始爆笑!!

雫とほのかはこの結果に満足そうである。

深雪は女性連中が楽しんでるのを見て、微笑んでいた。

そしてレオと達也は

「達也……明日から横島に優しくしてやろうな」

「……そうだな」

22話 横島、九校戦の補欠メンバーに選ばれる!!

1年E組体育授業、サッカー。

「達也!!」

「ナイスだレオ、吉田行くぞ!」

「……」

レオから達也、吉田幹比古にパスが渡り、最後は幹比古がシュートバシユー

見事ゴールを決める。

試合終了後にレオ、達也、幹比古がお互い挨拶をする。

「俺の事はレオと呼んでくれ」

「僕の事は幹比古でいいよ」

「OK、俺の事も達也と呼んでくれ」

なかなかフレンドリーな挨拶だ。本当にここは日本なのだろうか？

いつの間にもやら名前を呼び合う仲間になったようだ。

そこに隣のグラウンドで同じく体育の授業を受けていた。エリカと美月が輪に入ってくる。

「アレ? 幹じゃん」

「僕は幹比古だ!!……エリカ、なんて格好しているんだ、何か履きなよ」

エリカと幹比古は知り合いの様だ。しかし、幹比古はエリカの格好に驚いていた様だ。

この学校、運動着は上下共に長袖のジャージなのだが、何故かエリカは下のジャージをはいていないように見える。

「これ、ブルマよ。由緒正しき、昔の体操着らしいのよ」

エリカは自分の姿を男性陣に見せつける。

レオと幹比古は顔を赤くしていたが、達也は平然としている。

「だからってそんな恥ずかしい恰好を!!」
幹比古はエリカに抗議する。

「由緒正しい真の体操服だ!!吉田!!」
そこに横島登場!!

そして、横島は幹比古を含めた男性陣に熱く語りだしたのだ。

横島は手の平を広げ、エリカのブルマを指す。

「ブルマは青春そのものなんだ!!いいか吉田!!運動するため以外の一切の機能を省くそのスタイル!!一見パンツにも見えるが。重圧な素材!!見るものを魅了してやまないその姿!!」

横島は目を見開き叫んだ。

「そして、ブルマは素晴らしいものを引き立てる!!フトモモをだ!!!!!!
(だだだだあエコーが掛かる)」

横島はぐつと手を握り、両腕を胸にやってから、オーバーアクションで、自分の尻と胸をポンと叩きながら説明する。

「この学校の制服は露出度は低いが、尻が強調される素晴らしい制服だ!!さらに、上着を脱げば、胸も何故か強調され!!揺れも感じられる!!上着からのチラリズムも最高だ!!」

横島は下を向き肩をプルプル震わせる。

「しかし……足りんのだ!!」

そして、涙を流し語る横島。

「フトモモが!!完全にスカートに隠れてしまっている!!これが俺の唯一の不満だー!!」

そして目を見開きブルマを称賛する。

「ブルマは最高だー!!シリとフトモモのラインがクッキリだ!!」

感極まったように、涙をちよちよきらせる横島。

「お前ら男だったらわかるだろ!!チチ、シリ、フトモモ!!この三種の神器を!!」

そして、ここまでを一人で男性陣に熱く語る横島は、エリカに振り

返り、エリカの肩を掴む。

「エリカ!!・・・素晴らしい!!まさしく体操服のあるべき姿だ!!」
キラキラした目に爽やかな笑顔をして、グットのサインを出す横島は、鼻血が垂れていた。

レオ、幹比古、美月は顔を真っ赤にしていた。

エリカは羞恥心か下を向いてプルプルと震えていた。

「くっ!!エリカーーーー!!フトモモ触れさせてくれーーー!!」

横島はついに、暴拳に出る。エリカの太ももに両手で触ろうと、飛びついたので。

「誰が触らせるか!!この!!超絶変態!!」

ゴスツ

「グバツ」

エリカに思いっきり上から殴りつけられる横島は地面に這いつくばった。

しかし今日の横島は一味違う。

そこから直ぐに復活し

「なら、ブルマをくれーーー!!」

「いい加減にしろ!!」

エリカと幹比古から蹴る殴るの暴行を受ける横島。

毎度懲りないのである。

これが横島と吉田幹比古の衝撃のファーストコンタクトとなった。

放課後、横島と達也は、部活連の会議室に呼ばれる。

そこには真由美率いる生徒会のメンバーと十文字が率いる部活連のメンバーさらに、摩利が居た。

真由美からここにいるメンバーに宣言する。

「司波達也くんをエンジニアとして、九校戦に参加させます」

しかし、達也を良く知らない生徒は2科生だからと反発するが、達也を知っているメンバーから説得が始まる。

実際に、CADの調整を行うところを見せ。

最後は中条あずさが達也のエンジニアとしての力量を説明し納得させた。

次は横島の番である

「横島忠夫くんをサポートメンバー特別枠で、九校戦に参加させます」

しかし、誰の反発も無いのだ。このサポートメンバー特別枠、確かに正式な九校戦のメンバーだが、要は、雑用係だ。本来はもしもの時の補欠枠としてもうけたものなのだ。1科生としては、この枠には不名誉と思いついたくはないのである。

だから、反発は無い。

横島はやる気なく質問する。

「なんすか？また、雑用係つすか？」

摩利が横島にそう言う。

「そう言うな、お前の茶は結構うまいからな……リフレッシュできる」

横島はウンザリした表情を見せる。

「やっぱ、雑用係じゃないっすか」

真由美も横島を笑顔で説得する

「横島くんが来てくれるだけでも、私はうれしいわ」

「くっ、もう騙されませんよ!!」

「どうやら、この前の真由美とのデートで学習したようだ。」

鈴音とあずさも説得に入る。

「横島さん頼りにしてますよ」

「横島くん力持ちだし、居てくれたら助かります」

「わーーーーーかりました!!この横島忠夫にお任せあれ!!」
チヨロすぎる。とことん女性に甘い横島である。

真由美、摩利、十文字の本当の思惑は、横島が回復魔法の使い手であるという事だ。もし選手がケガをしても、回復でき、競技に引き続き参加できる可能性が高くなるからだ。

こうして、達也と横島は九校戦のメンバーとなったのだった。

23話 横島、九校戦の競技をちよつとやってみた!!

横島は九校戦メンバーに選ばれた。しかし補欠枠の雑用係だ。事前に何かしないといけない事は一切ない。

大半の手配は生徒会と部活連で全部やってしまっている。

横島が居るとかえって邪魔なのだ。

達也はCADエンジニアとして忙しくしている。自分が受け持つ、1年生のメンバー、何故か全員女子だが、競技種目に合わせたCAD調整と戦略打ち合わせなどを行いコミュニケーションを取っている。しかも、放課後の訓練にも参加している。

横島の知り合いでは、1年生で選手として深雪、雫、ほのかが参加する。

生徒会メンバーと風紀委員会のメンバーは全員参加する。それだけの実力者が選ばれているからだ。

「横島さん、週末の休日、練習に付き合ってくれない?」

雫はほのかを率いて、暇そうにしている横島にそう言って誘う。

「え?俺でいいの?俺、九校戦の競技とか全然知らないんだけど」

横島は、メンバーと言えども九校戦の競技すらまともには知らない。ましてやルールなど全然だ。

「うん、横島さんがいい」

雫はそう言った。

横島は休日特に用事が無かったため、了承したのだ。

横島は今、北山家、雫の別荘に居る。

雫とほのかの練習に付き合うためだ。

雫の父親は大企業を経営者だ。

要するに物凄い金持ちなのだ。

別荘には広大の土地とスポーツ施設が併設されていた。

「雫ちゃんってお嬢さんだったんだね……」

横島は別荘と前に広がる土地を見て、遠い目をして言う。

今回、雫が参加する競技はスピード・シューティングとアイス・ピラーズ・ブレイクだ。

スピード・シューティングとは要するに魔法を使ったクレー射撃だ。

アイス・ピラーズ・ブレイクは、対戦形式で固定された位置から相手の陣地にある12本の氷柱を魔法で先に崩した方が勝ちという競技だ。

ほのかが参加する競技は、バトル・ボードとミラージ・バット

バトルボードは3キロの人工水路をサーフィンボードに乗って、魔法を駆使して、先にゴールした方が勝利だ。

ミラージ・バットは空中に浮かぶホログラムの球をスティックで打ち消していく競技、複数人同時で行い。制限時間内に、多く打ち消した者が勝利する。

雫はまず、スピード・シューティングの練習に入る。

何故か、それ用の競技場所がここに設けられていた。

雫は達也が調整したライフルを模したCADを使い。赤と白の皿が次々と射出される中、標的の赤皿だけを魔法で確実に割っていた。

どうやら、調子がいいようで、赤のみを100枚割って、パーフェクトを出す。

「どう？横島さん」

「凄いね雫ちゃん、俺呼ばれた意味あるの？」

傍で見ていた横島はそう答える。

雫は顔を少し赤らめ頷き、横島にもスピード・シューティングを勧めめる。

「横島さんやってみる?」

「ええー俺はいいよ?CADもやつと達也に教わって、二工程の魔法が出来るぐらいだし」

横島はこの頃、達也が時間が空いた時に現代魔法について教わっていた。

「別に、古式魔法を本番でも使ってもいいはずだよ。今ここには私とほのかしかないし」

雫は横島にやってみてほしい様だ。

「じゃあ、ちよつとだけ」

横島は、雫と入れ違い、射撃位置に立つ。

「始めるね」

雫が宣言する。

赤と白の皿が次々と射出される。

横島は、サイキックソーサーを両手で2つ投げ入れる。

そして、2つのサイキックソーサーは、赤い皿だけを縦横無尽に動き確実に切っていく。

サイキックソーサーは一度に複数の皿を割る事はできない。1つでは対応しきれないと見て、2つ出したようだ。

難なく赤の皿100枚を割り、パーフェクトを出す。

それを見ていた雫とほのかは驚き、目を丸くする。

「やっぱり横島さんすごい。でも、それって魔法?」

「……あんな魔法、見たことも聞いたこともないんですが」

雫はサイキックソーサーをあ的事件で見っていたが、ほのかはあの時、目を瞑っていて、まともに見るのは今回が初めてである。

「うーうーん?魔法?うーうーん?必殺技かな?」

横島も魔法か?と聞かれ困っていた。

次にほのかのミラージュ・バットこれも競技場所があった。

ジャージ姿のほのかと雫は、魔法を駆使し、ジャンプしながら、プログラムで出来た光の球を次々と打ち消していった。今日は練習とあって、本番の4分の1の時間でやっていた。

雫はほのかの練習相手として入る。

ほのかが僅差で勝利。

横島は二人を拍手で迎える。

「ほのかちゃんも雫ちゃんもすごいね」

「横島さんも一緒にやってみます？その方が私も練習になりますし」
ほのかが横島に提案する。

「せっかく来たし、練習相手になるぞ。負けても恨みっこなしで!!」

そう言つて、横島も参加する事になった。

横島は、ジャンプするのだが、空中で方向転換し、1回のジャンプで3〜4個の球を消していく。

そして、終了。

横島が大差をつけて勝利で終わる。

ほのかも雫も疲れが見える。

この競技一見単純に見えるが、魔法発動を常時行うため、マラソンと同じくらい消耗するのだ。

「そう言えば、横島さん。CADも使わずにどうやってジャンプしているんですか？それも古式魔法の一種何ですか？」

ほのかは単純に疑問を横島に問う。

「魔法？うーうーん。魔法じゃないかな？」

横島はほのかの質問に困っていた。実際はただ単に横島の基礎能力なだけだからだ。

「滞空時間が長くて、空中で方向転換ずつとしてたけど、どんな魔法なの？」

今度は雫が質問をする。

ジャンプした後、方向転換する魔法は存在するが、横島のように滞空時間と鋭い方向転換は消耗するだけでなく、技術的に難しいのだ。

「うーうーん。魔法なのかな？うーうーん？体術的な技術だと思う」

横島は答えに窮する。これは、斉天大聖老師から学んだ。空中戦における体術の一種なのだから……答えられるはずもない。まあ、横島の場合本気をだすと、空中を飛ぶことが可能なのだが。

「横島さんが九校戦出たら、全部優勝できるんじゃない?」

「わたしもそう思う」

雫とほのかは顔を見合わせながらそう言った。

次は、雫のアイス・ピラーズ・ブレイク

しかし、流石にあれだけの、巨大な氷柱を用意するのは、難しい。今回は急に来たこともあって、用意はしていなかったのだ。

魔法で生成するのも、得意では無ければ、巨大な氷柱を一人で作るのも苦勞をする。

よって、広々とした場所に氷柱がある場所を紐で表示し、仮想して行う事になるのだが、

それを横島に雫とほのかが説明すると。

横島は雫とほのかに

「ちよつと待ってて」

そう言つて、仮想氷柱を設定している場所の地面に何やら棒で描き出した。

そして、横島は何やら唱える。

そうすると、みるみるうちに、綺麗な四角の高さ4メートルの氷柱が地面から生成していった。

「こんなもんかなー?」

驚きの顔をする雫とほのかに横島は声を掛ける。

「……………」

氷柱をものの5分で仕上げたのだ。

そして、残りの11本は、札を取り出し、何やら唱え、設定してい

る地面に置いていく。

すると、先ほどより速いスピードで一気に、すべての氷柱が出来上がっていくのだ。

その光景をみた。雫とほのかは驚きのあまり、絶句している。

「これで練習できるかな」

横島は雫とほのかに声をかけるのだが……

「……ちよつと待って…横島さん何をしたの？」

雫がようやく声をだした。

「ん？これは答えられる！陰陽術だ！氷結の術を設定し直して、規格サイズの氷柱を作ったんだ。まあ、氷結結界に近いのかな……まあ、そんな感じ」

「そんな感じって、聞いたこともないのでですけど、氷結結界とは？氷結の術？」

ほのかは混乱している。

「横島さんには常識がまったく通用しない」

雫はそう締めくくる。

そして、雫は練習に励むことが出来た。

雫の振動系魔法でどんどん壊していく。

横島が氷柱をまた、再生していく。

雫は、息が上がっていた。

横島が氷柱を全て再生し終わると、

「横島さんが次やってみて」

「俺？俺はいいよ。これは雫ちゃんの為に作っているわけだし」

「参考にしたいから」

「じゃあ、わかったー一回だけな」

そう言って横島は雫と入れ替わりで定位置に付く

「横島さん、さっきの盾みたいなの以外でやってみて、なんか凄そうなのが見たい」

雫は横島にそう言った。どうやらサイキックソーサー以外がご所望の様だ。

「じゃあ。説明しやすい陰陽術で」

横島はそう言つて、手の指を高速で動かし次々と印を結んでいく。

そして、横島は唱える。

「罪深き業火の炎よ、来たれり、龍炎陣」

ゴオオオオオ!!

すると、氷柱12本あるエリアに一瞬術式方陣が現れた後、一気に青い炎に包まれた。

そして、氷柱はすべて、一瞬で蒸発した。

「……………」

雫とほのかは目が点になる。

「これは範囲指定型の陰陽術だ!!複数の術を組み合わせ、効果的に霊力と神炎を圧縮させ威力を上げた術なんだ。まあ、ミソは複数の術の掛け合わせかたかな?」

横島は聞かれもしないが一応説明した。

横島は二人が全く反応が無い事に気づく

「あれ?……………なんかまずった?」

漸く雫は声を出す。

「……………横島さんは九校戦でなくて正解だと思う」

ほのかもそれに続く。

「うん……………競技じゃなくなっちゃうね」

この後、休憩をはさんで、ほのかはミラージュ・バット、雫はアイス・ピラーズ・ブレイクを中心に練習し1日が過ぎて行った。

バトルボードは流石に再現が難しいため、練習はできなかった。

ほのかと雫は今日の横島の術の数々を見て改めて思う。

「横島さんって何者なんだろうね？」

「うん、でも、横島さんはいい人だから別に気にしない」

横島、九校戦の会場にのり込む!!

九校戦、正式名称は全国魔法科高校親善魔法競技大会、全国に9つある魔法科高校による。魔法を使った競技大会。毎年、軍の施設である富士演習場南東エリアで実施される。

現在、第一高校の九校戦参加者は、バスなどの移動手段で、会場へ向かっている。

選手や作戦スタッフはバスで、エンジニアなどは作業車で移動している。

横島は、一応選手枠の補欠なのだが、何故か作業車に乗っている。

横島は隣に座っている達也に不満を漏らしていた。

「達也……俺つて一応、選手枠だよな……」

「補欠だがな」

「なぜ俺はバスに乗らせてくれないんだ」

「渡辺先輩が配慮してくれたのだろう。俺もお前も、2科生という色眼鏡で見られているからな」

「じゃあ、なんで俺がお前と一緒に作業車なんだ!!エンジニアスタッフのお姉さま方は別なんだよ!!」

「それを俺に言わせるか……お前を女性と一緒にさせると危険だからだ」

「不公平だ!!なんで、こんなムツツリ男と一緒に居ないといけないんだ!!お姉さま方とキャツはウフフな世界はどこに行ったんだ!!」

「……お前のそう言うところがだ……」

達也はウンザリした表情で言う。

達也は横島と一緒にさせられた意図を感じざるを得ない。こんな横島の面倒を見ると。

しょうもない会話をしていた横島の顔が真顔に突如としてなる。

達也もその意図に気が付く。

対向車線を走る車が事故を起こした様だ。しかも、此方の先発している選手が乗るバスに突っ込む勢いだ。

横島は座席から立とうとするが、達也がCADを取り出し構えたのを見て、座りなおす。

事故を起こした車は、そのままバスに突っ込むかに見えたが、選手の乗るバスから放たれた魔法で車は衝突する前に止まった。

「達也……事故じゃないな……狙われたな」

「そのようだな」

横島と達也は意見が一致する。

横島は、車に乗っている人間の意志を感じ、達也は、車が事故を起こす過程で車から発した魔法を確認してそう結論づけた。

此方にはケガ人などは出なかったが、事故の処理をする為、一時この場で足止めをさせられる事になる。

横島と達也は外で事故車の状況を確認していた。

「達也……過去に、こんな事は在ったか？」

「俺の知る限りではないな、しかし、有ったとしても、隠蔽するだろう」

「……そうか」

横島はそう言っただけ空を見上げてから、ため息を付く。

無事、九校戦スタッフの宿泊場所となる。軍の宿泊施設に到着する。

軍の宿泊施設とはいえ、海外からのVIPなども想定され、会議場やらも施設内にあるため、ちよつとした高級ホテルの様相を呈していた。

横島と達也は、機材などを運び入れる。その横に兄大好き深雪が並んで歩く。

「深雪、達也くん、横島、久しぶり！」

「皆さん、こんにちは」

宿泊施設のロビーに私服姿のエリカと美月が居たのだ。

曲がりなりにも軍の施設である。一般客は通常入る事は出来ない。

「エリカ、美月どうやって？」

「私のコネよ！コネは最大限に利用しないとね」

深雪の質問にエリカはそう答える。

エリカの実家、千葉家は百家本流の家系にして、陸軍や警察に魔法、剣術指導を行っている。そのため、軍や警察に強い影響力を持っている。

「先に行っている。横島行くぞ」

達也は深雪たちにそう言うと、横島を連れ、荷物を運ぶ。

「相変わらず、つれないな達也くんは……」

「お兄様と横島さんは仕事があるから」

軍の宿泊施設の大会場で、九校戦の開催イベントが行われている。会食を兼ねた交流会と簡単な決起式の様相だ。

全国9つの魔法科高校の選手やスタッフが一堂に集まっている。

達也は壁沿いで一人、会場の様子を見ていたのだが、不意に達也は会場の女性給仕スタッフに声をかけられる。

「お客様、お飲み物はいかがですか？」

「エリカ……そんな恰好で何やっている」

会場女性スタッフはエリカだった。メイド風制服を着こんで、飲み物が入ったグラスを置いた銀色の盆を持っていた。

「ア・ル・バ・イ・トよ。美月、幹もレオも居るわ。美月とレオは裏方」

エリカはそう答える。

するとそこに、執事風制服を着こんだ吉田幹比古が、達也達に歩いて近づいてきた。

「エリカ、酷いよ。僕も裏方って言ったじゃないか」

「ちよつと手違いよ」

「エリカ、幹比古。似合っているぞ」

達也はそう言っつて、二人を諫める。

「横島は？」

エリカがこの場に居ない横島に付いて質問する

「横島は雑用と言う名の拘束をされ、部屋に閉じ込められている……。会場には来ていない」

達也はそう答えるが、少しは同情している様だ。

まあ、横島の性格上この場に来ること自体、第一高校の恥をさらすことになるのだから、上（摩利）の判断は妥当なのだろう。

「なんか、酷い扱いだね」

幹比古はそう感想を漏らす。

「まあ、横島だから、しかたないんじゃない？」

エリカも不快な顔をしながらそう言う。

会場にアナウンスが入る。

「開催に当たって、九島烈様からご挨拶があります」

九島烈、日本魔法師会の長老的存在であり、魔法師としても世界でも指折りの実力者である。また、「トリック・スター」の異名を持つ十師族九島家の前当主である。今だ強い影響力を誇示している人物だ。

会場の一同は、会場の舞台に全員注目する。

しかし、会場全体の照明が切れ、真っ暗になる。

会場はざわつく。

パーーーーーパラパラパーーーーーパーーーーーパーーーーー！！

舞台から何故かトランプペットの音色が会場に響く。

そして、何が起きたのかわからず、ざわつく会場の中、舞台の中心にスポットライトに照らされ、一人の人物が登場した！！

「全国の皆さんこんにちは！！……このボクは、第一高校のエース……」

何故かタキシード姿に右手にはトランプペットを持った横島が立っていた！！

そして、目をキラキラさせ最大限の爽やか笑顔で、マイクの前で語りだしたのだが……

「横島ただ……ブツ！！」

横島が自己紹介に入った瞬間

「あんたは何やってんのよ！！」

エリカが銀色の盆を横島に向かって投げつけ、頭部にクリーンヒット！！

第一高校の摩利を含めた風紀委員会の面々が飛び込んできて、横島を取り押さえる。

「まだ、自己紹介終わってないのに！！全国のおねーちゃん達にまだ、アピールがー！！」

取り押さえられた横島は、そんなことを叫びながら、舞台裏へ、引つ張られていった。

会場一同が静まり返り啞然とその様子を見ていたが、それがざわつきに変わり、そして横島の所業をバカにしたような声が次々に上がり

始めた。

摩利が懸念していた。第一高校の恥を見事にさらしてしまった!!

そこに、九島烈が舞台の中心に現れる。

「はっはっはっはー、私は会場の君たちを驚かせようと、ちょっとした魔法を弄したのだが、見事に彼に出し抜かれた。久々に痛快な出来事である」

九島烈は高らかと笑いながら、語りだす。

「君たちの中で、最初のトランペットの音色で、警戒をしていたのは会場で5人しか見受けられない。その人物はなかなか見どころがある。……しかし、彼の登場で、即対応できたと思われる人物はいなかった……もし、彼が、自己紹介ではなく、攻撃魔法を放っていたのなら、全滅になった可能性が高い。この私も含めてだ」

一息ついて

「彼は、私の労した魔法とはいいがたい手品の様なものを最大限に利用して、会場の全員を出し抜いたのだ。しかも、魔法を使わずにだ。これはどういうことかわかるかね」

九島烈は会場を見渡す。

「高出力の魔法より、工夫した小さな魔法、さらに、相手の魔法を利用した策の方が、これらを超えた事になる。

今大会で、大きな魔法より、策を弄し、工夫した物を見せてくれることを期待する」

そして、会場から拍手が起こり、九島烈は舞台から降りる。

一方横島と言うと、第一高校が専有している小会議室で、正座をさせられ、風紀委員会の面々に説教を喰らっていた。

「仕方がなかったんやー!!全国のお姉ちゃん達に会いたかったん

やー!!」

横島は涙をまき散らしながら訳が分からない言い訳をしていた。

横島、静かに怒る!!

九校戦、初日が終了した。

本日は、本戦のスピード・シューティングが開催され、前評判通り、第一高校生徒会長の七草真由美が見事優勝。「エルフィン・スナイパー」の通名は伊達ではないのである。

一方横島は

「シクシクシクツ、堪忍やー、もうせえへんから、ここから出してー!!」

軍の宿泊施設の地下にある。拘束室に監禁されていた。

摩利は横島が騒ぎを起こす可能性が高いため、交流会に出さないよう、適当な仕事を言い渡し、部屋から出られないようにしていたが、何故か横島は出てきて、最悪な形で、第一高校の恥をさらしてしまったのだ。

横島の性格を把握している摩利ならではの対応ではあったのだが、横島の能力についてはまだ、把握していない様だ。

摩利は横島にしこたま説教を喰らわせた後、しばらく宿泊施設内での謹慎処分を言い渡すつもりだったのだが、会場(軍)の警備担当が訪れ、横島の身柄を要求してきたのだ。

彼らにすれば、九島烈から、痛烈に批判されたと思われるも仕方がない状況だ。横島の行動は、会場全員の命を下手をすれば、握っていた事になるためだ。ここは仮にも軍の施設なのだ。「悪ふざけでした」では済まされない。彼らのプライドもある。しかも、護衛対象である、九島烈自身を危険にさらした事になるのだから。

摩利は、一言二言、警備担当に横島の身柄要求は不当だと抗議したが、横島自身に非がある事は明らかなたため、不本意ながらも了承せざるを得なかった。

九校戦が2日目終了した。

本戦のクラウド・ボールが開催され、またしても、真由美が見事優勝。真由美の能力の高さがうかがえる。

一方横島は

「シクシクシクツ、ワイが何をやって言うんやー!!ただ、自己紹介しただけやったの!!」

やり方がまずかったのだ。ここはギャグでは済まされないのだ。

まだ、拘束室に監禁されたままである。

真由美や十文字克人、摩利が抗議に来たのだが、了承が得られなかった。

横島が拘束室は牢獄と違い、他の宿泊室の部屋とさほど変わらない。一般の部屋より、少し豪華な作りになっているぐらいだ。食事も飲食も普通に出来る。

しかし、監視カメラ等は取り付けられ、扉は外からしか開けられない。監視員も外にいる様だ。

そして、尋問は長時間にわたって行われる。

答えは出ない。当たり前だが横島には人を害する悪意が全くないからだ。

九校戦が3日目が開催。

バトルボード女子決勝戦。

この競技は人工水路をサーフボード状の物の上に乗る、ゴールを目指す。水面に干渉する魔法は使用可能だ。

第一高校では摩利が進出している。

去年は摩利と第七高校の選手とで争い、摩利が優勝している。今年も同じ組み合わせとなり、注目の試合となっている。

何時もの面々が、客席で固まって試合を観覧している。

「シクシクシクツ、せっかく摩利さんの水着姿が拝めると思ったのに、なんで、あんな露出の少ない恰好なんだ!!」

軍に監禁されているはずの横島が現れた!!

どうやら、摩利の水着姿を見たかった様なのだが、残念ながら、競技用水着はウエットスーツの様なものだ。横島のあてが外れたようだ。

そう言っつて、レオの隣に座る横島。

レオが横島に疑問を言うのだが……

「横島、お前、軍に監禁されてたんじゃないのか？出してもらったのか？」

「いやー、摩利さんの水着姿が見たくて、抜け出した!」

平然と言う横島。

美月は心配そうに問うた。

「それって、大丈夫なんですか?」

エリカも心配しているくれている様だ。

「よく抜け出せたわね。後でまた怒られるわよ!!」

「たははははっ、バレたらバレた時だっつて!」

マイペースな横島である。

「……横島……渡辺先輩や真由美さんに後で謝っておけよ」

達也は横島に呆れたようにそう言う。

「わかってるって」

バトル・ボード決勝が開始!!

摩利が水面を揺らす魔法をかけ、他の選手の出鼻をくじく。

摩利が先行し、先ほどの摩利の魔法を回避した七校の選手が追いつかる。

最初の90度のコーナーに差し掛かる。

そこで事故が起こった。

スピードに乗った七校の選手が、コーナリングが出来ず。コーナー

を減速中の摩利に衝突したのである。摩利は衝突して七校の選手を抱き留めながら、競技用の防壁に激突したが、その壁すらぶち破り、観客席の壁にまで到達し、倒れた。

摩利も七校の選手も動かない。

その様相に会場に悲鳴が上がる中、横島は真つ先に摩利と七校の選手の元に駆け付けた。

達也もその後が続いていた。

横島の見立てでは、七校の選手にはケガがなく気絶をしているだけのようなのだ。摩利が壁の激突の際、かばっていたためだ。

摩利の方は明らかに重症だ。骨が何本か折れている様だ。意識もなかった。

横島は、摩利を前で抱きかかえ、医務室に向かう。その際も横島は霊気を流し、悪化や痛みを和らげるようにしていた。

真由美も駆けつけ、達也と共に、横島の後に続く。

その際の横島の顔つきはいつもと違い、真由美でさえ、声を掛けるのをためらうようであった。

横島は真由美に

「真由美さん、治療を行います。ベッドをお借りします。部屋には誰も入れないでください」

そう言って、処置室のベットに摩利をそつと下ろす。

「わかったわ」

医療スタッフもいたのだが、少し外に出る様をお願いし、しづしづ医療スタッフも一時的にその部屋を出て、七校の選手の方にかかる。

横島は摩利の骨折箇所の治療を行う。

摩利は意識を取り戻し、真剣な顔の横島の顔を目の当たりにし、弱々しく声をだす。

「……そんな顔もするんだな。……私はどうなった？」

「もう、大丈夫ですよ。今は眠っていてください」

横島は、優しく摩利にそう言うと、手のひらを摩利の前にかざす。

摩利は再び眠りについた。

摩利の治療に5分とかからず、処置室から出てくる横島。そこには真由美や達也だけでなく、軍の人間が複数いた。横島を再び拘束するためだ。

監禁していたはずの横島が、いつの間にか、TV中継で映っていたのだ。警備の人間も驚いていたに違いない。

横島はまずは真由美に笑顔で言う。

「摩利さんはもう大丈夫です。今日は休ませてあげてください。後、着替えをしてあげてくださいね」

「わかったわ、直ぐに手配するわ。……横島くんありがとう」

そう言って、処置室に真由美は入っていった。

今度は達也の耳元まで顔をやり

「達也、摩利さんや七校の選手に魔法をかけた奴は間違いなく居なかった。俺には二人とも自分で魔法をかけた様に見えた。理由は分からん。後は頼んだ……」

横島はそう言った。

達也も見えていたが、摩利が七校の選手をかばう際、不自然に水面が揺れていた。それで大きく摩利はバランスを崩したのだ。達也はそれは、他の場所から、誰かが摩利に対して、妨害したのだと認識していたのだが、横島の言で、その説は消えた。

達也は横島に一言

「後は任せろ」

そして、横島は軍の人間に自ら歩み、拘束され、連れていかれる。

横島、無情にも時流れる4日〜6日目!!

九校戦、4日目新人戦

本日から4日間は新人戦と呼ばれ、1年生が出場する競技が行われる。

本戦と同じ競技だが、競技ポイント加算は本戦の半分である。

競技はスピード・シューティングが行われ、女子では雫が圧倒的大差で優勝している。

その頃横島は

「ポニーテールが似合うお姉さん!!軍の人だったんだ!!ボク横島!!よろしく!!」

「わたしは、藤林響子よ。そうね、こう見えて一応軍人よ。よろしくね、ナンパの横島くん」

響子は笑顔を作っていたが、内心苦手意識を持っている。以前、横島に町中でナンパされた時に、九重八雲と共に、年齢の件でこれでもか、と言うぐらい悪口を並べられたからだ。

横島自身はかなり褒めていたようなのだが……

藤林響子は今、横島が拘束されている部屋に居る。

独立魔装大隊の上司、風間少佐から、横島の監視及び情報を聞き出す任を受けたからだ。

響子は横島の尋問を始めた。

「それで、横島くんはどうやって、この部屋から抜け出したの?」

横島がこの部屋から抜け出し、摩利が参加したバトルボードの会場に現れたのだ。

監視カメラの映像は、響子自身が解析したのだが、不明な点が多い。

どうやって、扉を開けたのか、扉前の監視員が張っていたのだが、気づかれないようにどうやって、

この場を後にしたのか……

さらに、監視カメラの映像では、バトルボードの会場に横島が現れた時間帯にも拘束室内で横島の姿が、映し出されていたのだ。

要するに、横島がどうやって抜け出したのかさっぱりわからなかったのだ。

「普通に扉から出たんですが。それよりお姉さんは、今、彼氏居ますか？」

「い……いないけど」

響子は頬が引きつるのを感じるが、笑顔を無理矢理作る。

「よっしゃ!!じゃあボクなんてどうですう!!」

「……話を戻します。鍵がかかっていたと思うんだけど、どうやって開けたの?」

「扉押したら開いたつす。それよりお姉さんは、今晚暇つすか?」

「ごめんね。仕事があるの……」

響子は内心、この少年を殴りつけたい衝動に駆られていたが、ここは我慢する。

「えー、軍って酷い所つすね。夜まで仕事させるなんて」

「軍務だから、仕方ないのよ」

「えー、夜更かしは美容の天敵すよ!!今から、ちゃんとケアしないと」

「……あなたのせいなのだけど」

響子は我慢をしていたが、ボソツと言ってしまった。

「?……まあ、お姉さんは可愛らしいし、そんなことしなくても大丈夫か、じゃあ今度一緒に食事でも」

「……可愛らしい……」

響子は何故か顔を赤らめる。

この頃、周りにあまり褒めてもらえない機会がめっきり減ったのと、年下に面と向かって言われたことが要因の様だ。

終始、陽気な雰囲気横島に対し、響子はなかなか話を前に進めないでいる。

どうやら、横島の方が一枚上手の様だ。

九校戦、5日目新人戦

大会が進んでいく中、横島は相変わらず拘束されたままだ。

今日も藤林響子の尋問が続くのだが、成果は得られなかった。

九校戦、6日目新人戦

ほのかが新人戦バトルボードで優勝する。

達也が立てた策が見事はまった結果だ。

アイス・ピラーズ・ブレイク決勝は深雪と雫の第一高校同士の試合になった。

高出力魔法による打ち合いになる。

雫がフォン・メイザーを発動。

対する深雪はニブル Heim からのインフェルノへの連携で雫を圧倒し、深雪の優勝となる。

順調にポイントを加算していく第一高校は優勝確定と思われた。

しかし、ここで予期せぬ出来事が続く。

2年男子が謎の腹痛で全員病院送りとなり、リタイアしたのだ。

そして、摩利が9日目のミラージュ・バットで登録されていたのが、抹消されている事が判明。

3日目のバトル・ボードの事故で、出場が出来ないと判断され抹消されていたのだ。

この事を抗議したのだが、運営委員会は安全第一だと言いはり、そのままにされた。

きな臭いどころの話ではない。

そこで、真由美達は、ミラージ・バットの本戦に摩利の代わりに深雪を投入することを決定。

最終日の本戦は、十文字、辰巳、服部の編制であったが、2年の服部が謎の腹痛でリタイアしたため、代わりの人員を補充しなければならなかったが、まだ、決めかねていた。

横島は第一高校が何らかの悪意によって窮地に立たされている事はまだ知らされていない。

横島、九島烈に過去の話聞く!!

九校戦、7日目新人戦

ミラージ・バットでほのかが他を圧倒し優勝。

どうやら、横島のアドバイスが多分に生かされた様だ。

男子のモノリス・コードで、事故が発生。

第一高校の出場選手チーム全員が重傷を負い、病院送りとなる。

相手チームの過剰魔法攻撃によるものであり、明らかに反則行為である。

しかし、相手チームは過剰な攻撃魔法をCADに組み込んでいないと主張。

もはや、第一高校を狙った悪意ある何者かの仕業としか考えようがない。

大会委員会に十文字克人は駆け込み、メンバーの変更と、新人戦モノリス・コードの明日への試合振替を要求する。

この状況を見かねた九島烈の口添えもあって、了承されることになった。

第一高校の新人戦モノリス・コードの代役として、達也、レオ、幹比古が選ばれる。

達也がレオと幹比古を巻き込んだのだ。

その日の少し前の時間に遡る。

横島がいる拘束室に響子の上司である独立魔装大隊の隊長、風間玄信少佐が訪れていた。

響子が横島から情報を得ることが困難だと判断から、直接乗り込んできたのだ。

「私はここにいる藤林響子くんの上司で、軍から大隊を任されている風間玄信です」

風間少佐は横で立って控えている響子を指しながら自己紹介を始めた。

「横島忠夫です。俺はなんで、拘束されたままなんですかね」

「君が素直に真実を話してくれたら、解放するのだが……」

「まあ、悪ふざけが過ぎたのは、こっちが悪いのだが、俺みたいな一介の学生にする事ですかね？」

「一介の学生ね。君は自分の立場と言うものをわかっていない。君は氷室家の人間だ」

「その前に、第一高校の学生なんですが、そんなに家名や出生が大事なんですか」

「氷室家は今だ国や軍に関わって来ていない古式魔法師の大家だ。どんな魔法を持っているのかもわからない。嚴重な扱いをするなど言うのが無理と言うものだ」

「だったら、特別扱いでここを出してもらえないっすかね？」

「ふむ、君は響子くんから聞いていたのと大分、印象が違うね。軍人の私と話しても、物怖じ一つしない」

不意にノックの音になる。

「九島だ。入らせてもらおう」

そう言つて、九島烈が拘束室に入って来たのだ。

風間少佐と響子は面喰った様な顔をしていたが、風間少佐は九島烈に話しかける。

「閣下、なぜこのようなところに」

九島烈は空いている椅子に座る。

「君こそ、このようなところに何をしている」

「彼を尋問していたのですが……」

「なぜ、そのような事をする必要がある。わたしは、彼が競技に出ない事に不思議に思っていたが、まさかこのような事になっているとは、直ぐに彼を解放しなさい」

「閣下、しかし」

「自分たちの能力不足を棚に上げ、彼を責め立てるのは筋違いではな

いか、彼は実質何か不都合な事でも起こしたのか？」

「……いえ、なにも」

「では、直ぐ解放しなさい。わたしは彼が競技に出るところが見たいのだ」

「……了解しました」

風間少佐と九島烈の会話を聞いていた横島は

「じいさん。助けてくれるのはありがたいんだが、俺、補欠だから、競技でないんだけど」

九島烈はそれを聞いて、声を大にして笑う。

「はっはっはー、また一本取られた。……君が競技に出ないとは、世も末か……。ついでに、わたしとここで昔話に付き合ってもらっても良いかな？……少佐いいな」

そして、横島と話をしたいと申し出る。

横島はそれを了承した。

「ああ、助けてもらったし、いいぜ、じいさん」

「横島くん、この方はな」

それを聞いた風間少佐は横島のじいさん呼びをたしなめようとしたのだが

「良い」

九島烈は手を当て、それを一蹴する。

その間に響子は3人にお茶を用意した。

「で、俺と話したい事って？」

「ああ、君は氷室家の家人と聞いたのでな」

「じいさんも、氷室家の事かよ」

ウンザリ顔で横島は言うのだが

「いや、わたしは、13代目氷室絹殿に会った事が数回あってな」

そして、九島烈は語りだす。

横島はその話に興味を持ち、顔がほころんでいた。

風間少佐と響子もその話に興味深々であった。

「40数年前の事だ。当時、一部の軍が暴走して、氷室家を襲撃した事

件があつた。魔法師一個大隊を送り込んだのだよ。しかし、それがもの見事に撃退され、全員無傷で拘束されたのだ。しかも、絹殿はそ奴ら全員に正座をさせ、説教をしたという事を聞いた時、私は胸が踊るような気分であつたことを覚えている。

その時、私が、この事件の鎮静化を図るために、氷室家とのパイプ役を務めたのだよ。

当時の絹殿はすでに70を超えている年齢ながら、可愛らしい方であつた。その人が屈強な軍人相手に立ち回り、正座をさせ、説教をさせる姿を想像しただけで、笑いが止まらない。

ある時、絹殿に何故国や軍に協力しないのか？と聞いてみたのだ。『霊能者は戦争するための道具ではありません。ましてや、人を戦争の道具や人形のように扱う軍や国、師族に従うなんてことはあり得ません』

わたしはさらに質問をした。軍や我々（師族）が居ないと、国を守れないではないかと、

すると絹殿は『あなた方の在りようをすべて否定するわけではありません。国防としての軍は必要だという事は、理解しているつもりです。真に国難が襲ってきた時、それだけでは足りないのです。国難に立ち向かう真の勇者や英雄はあなたたちのやり方では生まれえないからです』

その答えに私は、確かに軍や我々（師族）ではあなたの様な英雄たる戦略級魔法師は生まれえないかもしれないが努力をしている。いつかは生まれるだろうと言つたのだが、

『何を勘違いしているのか分かりませんが、私は英雄でも何でもありません』

私は謙遜しているものだと思つていたので。絹殿は間違いなく、『救済の女神』と言われる英傑なのだから。すると絹殿は私に問うた。『勇者とは英雄とはどういうものだと思いますか、九島さん』

悪や敵に立ち向かう力を持った者と私は答えたのだが

『私が知っている英雄とは、力が無かろうとも、自分の100万倍は在ろうかと言う存在に、知恵や策を用い、そして何物にも負けない精神

で、立ち向かうそんな人物です」

私はそんな人間なぞ、居ないと答えた。

『そうかもしれない。しかし、私は信じているのですよ。魔法や霊力があるうとなかろうと、人は知恵や勇氣、そして精神力で苦境を乗り越えられると』

絹殿は笑顔で、何故か顔を赤らめならそう言った事が印象的であった。

私は先日、君が見せた悪ふぎけ、いや、何かをしたいという欲求と言うのだろうか。

絹殿が言いたかった事は、固定概念にとらわれ、力だけを追い求めた組織に、君の様な人間を輩出する土壌はないという事を言いたかったのだらうと、いまさらながら思う。

今の魔法師協会は、まさに固定概念の塊の様な組織だ。これではいつかは、現状で対処しきれない大きな問題があった時には、手遅れとなってしまう。

その時に君の様な人間、あと……君と同じ学校の司波達也くんだったかな……彼のような人材が必要だと感じるのだよ」

九島烈は最後にそう言って締めくくる。

横島は絹の話のため、終始嬉しそうに聞いていた。

「じいさん、買いかぶりすぎだ。達也はともかく俺は、ただチャランポランなだけなんだけど」

横島は照れたように言う。

「閣下、貴重なお話をしていただきありがとうございます。耳の痛い話ですな」

風間少佐はそう言って頷く。

「横島くん、長きにわたり拘束してすまなかった」

そう言って風間少佐と響子は頭を下げる。

「響子さんみたいなの、可愛らしいお姉さんとずっと話せたし!!それはよかったんで……だったら、この会場に取り巻く悪意を排除してくだ

さい」

横島はそう言つて、拘束室を後にした。

横島が最後に残した言葉に、九島烈は口元をほころばせる。

響子は驚いたような顔をし、風間少佐は鋭い目つきをしていた。

横島、皆に謝る!!

「すみませんでした!」

横島は第一高校が専有している作戦会議などを行う小会議室に入ると同時に、声を大にし頭を下げた。

小会議室で打ち合わせをしていた。真由美、摩利、十文字の他の面々は横島の方に振り返り、みな一様に、動きを止める。

「俺の勝手な行動で、皆さんに迷惑をかけました」

そして、一同はまるで別の生き物を見るような面持ちでその様子を声も発せず見ている。真面目な顔で頭を下げている光景は、普段の横島から想像もできない状況であったからだ。

真由美はそのショックからいち早く脱して声を掛ける。

「い……いいのよ、ようやく解放されたのね」

十文字もそれに続く。

「さすがのお前も反省をしたという事か」

摩利は横島に歩み寄り、顔を近づけ声を掛けた。

「お前が居なかったら、今頃まだ、病院のベッドの上だったろう。迷惑をかけた。すまなかった」

真由美は横島に椅子に座るように勧め、話をする。

「横島くんそこに座って、横島くんが軍に捕まっていた間の話をするわ」

真由美は今まで第一高校に起こった出来事を話していく。

2年男子全員が謎の腹痛で病院送りになった事。

摩利が、ミラージ・バットに出られなくなり、代わりに深雪が出場することになった事。

今日、新人戦モノリス・コードで事故が起き、1年生3人が病院送りになり、代わりに達也、レオ、幹比古が明日、振替で出場することになった事。

「そうですか……そんなことに」

横島は申し訳なさそうに言う。

十文字は横島に言う。

「そこでだ。最終日の本戦モノリス・コードで欠員が出来た……お前が解放されたのなら出場してもらおうと考えていた」

「なんで俺ですか？」

「辰巳や他の風紀委員の連中が推薦していた。本気で逃げた時のお前の逃げ足に誰も追いつけないと、さらに、耐久力も高いとも言っていた」

確かに、横島は校内で問題を起こす度に、風紀委員に追いかけ回されていたのだ。しかも数人がかりでだ。それでもなかなか捉えることが出来なかったのだ。さらに、数々の制裁と言う名の暴力を受けても、直ぐ復活するタフさも要因らしい。

「俺はCADを……ちよつとした魔法もようやく展開できる程度ですよ」

「九島老師ではないが、お前のその突拍子もない行動力に期待している」

「……分かりました。微力ながら力にならせて下さい」

横島は了承し、珍しく殊勝な事を言う。

また、それに対し、みな一同、横島をジッと見て、驚いたような顔をしていた。

摩利はその横島に恐る恐る聞く。

「……その、お前は本当に横島か？」

「何か変ですか？俺だって、たまには真面目になるときだってありますよ」

そんな横島を見て、会議室内では乾いた笑いが起こる。

横島は、小会議室を後にし、達也の部屋を訪ねていた。達也の部屋では何時もの面々が顔をそろえていた。

「ようやく、お出ましか」

「横島大丈夫だった？」

レオとエリカである。

「横島さん、無事そうで何よりです」

「元氣そうだね」

美月と幹比古も心配してくれていた様だ。

「横島さんに私の試合見てほしかった」

「横島さんに教えてもらった方法で上手く行きました」

雫とほのかは横島に試合を見てほしかったようだ。

「横島さん、皆、心配していたんですよ」

「やっと思われたか」

最後に深雪と達也だ。

「たはははっ、いやーすまん」

横島は頭を掻きながら軽く謝る。照れている様だ。

「ほんとよ、あんたが軍に捕まったって聞いて、流石に退学かもって思ってたわよ」

エリカはそう言う。本気で横島を心配していた様だ。

「いやー、まさかこんなに長くなるとは、軍ってギャグが通じないんだな!!」

「お前のギャグはヘビーなんだよ」

レオはそう言っただきく笑っていた。

横島は一科生の活躍組を見渡し労った。

「雫ちゃんにほのかちゃん、深雪ちゃん大活躍だったんだって、おめでとうさん」

「うん、ありがとう」

「ありがとう」

「はい、ありがとうございます」

雫、ほのか、深雪それぞれが返礼する。

横島は男性陣に向かって聞く。

「ところで、お前ら、明日モノリス・コードに出るんだって？」

「ああ、欠員が出てな」

「俺も、幹比古も達也の巻き浴いだ」

「まさか、見学に来たのに、試合に出ることになるなんて」

達也、レオ、幹比古はそれぞれ、それについては何か言いたげではあったが、ししぶしぶ受けた感じだ。

「どんな競技か知らんがお前らだったら余裕じゃね？」

横島は適当な事を言う。

「競技内容を知らないのか？お前も出るんじゃないのか？本戦に、」

達也は横島にそう言った。達也は横島がモノリス・コード本戦に出る事を事前に聞いていたようだ。

「はあ？横島がでるの？あんた大丈夫なの？」

エリカがそれを聞いて横島に問うた。

「なんかそうらしい」

「魔法でしか、相手を攻撃できないのよ。あんたクラスで魔法一番下手くそじゃない」

エリカは横島に呆れた様にそう言った。横で聞いていた雫はピクツとして、何か言いたそうにしている。

「げっ、魔法使って攻撃って、危ない競技なのか？」

「おいおい、そんなのも知らないで受けたのか？」

レオも呆れた様に言う。

「……達えもーん！！教えてーん！！かっこよく受けますって
いっっちゃたよーん！！」

横島は涙ちよちよきらせながら達也にすがりつく。

「……わかったから放せ、俺たちも明日に向け作戦会議する。お前も聞いておけ」

達也はため息を付くが、結局は横島に教えるようだ。

この後、達也、レオ、幹比古の明日の新人戦モノリス・コード作戦会議に横島も参加することになった。

横島、達也達の試合を見る!!

7日目の夜、明日の新人戦モノリス・コード作戦会議を終えた後。達也と横島は宿泊施設の外、人気のいない林の縁にいる。

しばらく、沈黙を守っていたが、横島から話しかけた。

「達也……摩利さんの事故の件何かあったか？」

「すまない。現状ではどういう現象が起きたかしかわからない」

達也は美月や幹比古の意見を聞きながら、いろいろと動き回っていたのだが、事象は分かったがどういう方法で妨害したのかがわからなかったのだ。

「妨害工作が色々打たれている様だが。誰が犯人なのかわかるか？」

横島は第一高校に対する数々の妨害を行ったのは同一犯だと考えていた。

「……………」

「軍事機密か？」

「……………」

達也は横島の問いに内心驚いてはいたが、平然を装う。

「拘束中に、風間さんと響子さんに会った。多分お前のお仲間だろう？別に誰かに言うつもりはない」

「……………ああ」

達也はゆっくりと返事をする。達也は自分が軍の関係者であることを認めた。

「お前、いいのか？あの人たちに俺の事詳しく話していないだろう。陰陽術が使えるとか」

風間少佐や響子の口ぶりから、横島が陰陽術を駆使して戦えることを知らないようだったからだ。

「特に必要とは思われなかったからだ」

「そんなことは無いだろう。あの人たち氷室家に興味深々だったぞ。まあ、お前がそう言うならいいんだが……」

横島は達也を見やって呆れたように言う。本来横島の情報を達也は上司である風間少佐に報告しなければならぬはずなのだ。

「……ノー・ヘッド・ドラゴン……大陸系のシンジケートだ。今回の一連の事件の黒幕と目されている」

達也は、ゆっくりとした調子でその名前を言う。

「おい、ばらしても大丈夫なのか？」

「お前が知っていても、特に何も問題ないだろう」

達也は平然とした顔でそう言った。

しばらくの沈黙の後、横島から話を再開した。

「俺は現代魔法の事はよく分らないが、俺にはあの二人が自分で自分自身に不利な様に魔法を発動させた若しくは発動が失敗した様に見えたんだ。CADに細工なんてされてないだろうか？」

「CADは基本的に各学校で管理している……さてよ、競技前に短い時間だが一度チェックされるな」

達也は競技前に、CADの安全チェックを行う過程を思い出す。

「ならチェックされた後に再度、確認できるか？」

「自分で組んだプログラムならわかるのだがな、再チェックする時間もほとんどない」

「となると、達也が分かるのは深雪ちゃんのCADだけか……じゃあ、元のプログラムと変更された箇所が分かる魔法みたいなものはないのか？」

「巧妙に隠されたらわかりかねるな」

「仕方ないか、判断が付かなかった場合、俺が悪意あるかないかで判断するしかないさそうだな。まあ、多少厄介だがやってみるか」

「そんなことが可能なのか？」

「まあ、見せられたものじゃないがな、最終手段だと思っていてくれ」

横島はそう言いながら、苦笑いをする。

「じゃあ明日は頑張れよ」

「ああ」

2人は宿舎に戻っていく。

九校戦8日目新人戦

モノリス・コード

3対3で行う競技だ。相手陣地にある石碑に隠された512桁のコードを読み取る。または、相手の選手を魔法で全員行動不能にする
と勝利である。競技場所は林、廃町、草原ステージの設定があり、ラ
ンダムで場所は決まる。但し、殺傷力の高い魔法は禁止である。

達也、レオ、幹比古たちは順調に勝ち進む。

その中でも、幹比古の活躍は目覚ましい。多様な古式魔法を駆使し
て勝利に導いていく。

横島はエリカや美月と観戦していた。途中で雫とほのか、深雪が合
流する。

横島は幹比古の幼馴染のエリカに話しかける。

「幹比古やるなー!!あいつすごい?くない?なんで2科生なんだ?」

「うーん。幹はね。自分に自信がないだけで、実力はあるはずなの
よ」

エリカはためらいがちにそう言った。

「ふーん、しっかし達也の動きも、他の連中とは段違いなんだが!!」

横島は今度は達也を褒める。

すると深雪が嬉しそうに答える。

「そうなんです。お兄様は九重八雲先生に師事しているので、体術も
凄いです!!」

「レオは……まだ、活躍の場はなさそうだな、これって正式メンバーの
奴より凄くないじゃない?」

「そうかもしれないですね。なんていうか連携が整っていて、効率が
いいというか」

ほのかが横島の問いに答えてくれた。

「うん、全然いいと思う」

雫もそう答える。

そして、第一高校対第三高校の決勝戦開始前

横島は第三高校の一条将輝を見て

「なんだあのイケメン!! あんなに女の子の黄色い声援がー!! イケメン死すべし!! 死すべし!! ……お前ら!! あんな奴に負けんじやねーぞ!!」

「二条さんって、十師族の次期当主ですよ。負け知らずとか、勝ってほしいけど、勝つのは難しいかも……」

美月が横島に説明してくれる。

「クリムゾンプリンスとか呼ばれてるしね」

エリカが美月の説明に補足する。

「プリンスだとー!! イケメンなくせに強くて、権力まであるのか!! 卑怯じゃ!! 男の敵ー!!」

「お兄様の方がかっこいいです!!」

深雪は誰とでもなくそう言った。

「いや、何て言うか達也って、地味目なんだよな、あ的一条って奴は派手なイケメンオーラバリバリなんだよ!! 同じイケメンでもそこが違う!!」

横島は間違った事は言っていないのだが、それはブラコンを患っている深雪には危険な言動である。

「お兄様が地味…お兄様が地味…お兄様が地味」

深雪の周りから冷気が流れ何故か同じ言葉を繰り返している。はつきり言って怖いのである。

「深雪落ち着いて、横島さんが言っている地味って言うのは誠実って意味だから」

ほのかがすかさずフォローを入れてくれた。

「そうよねほのか!!お兄様は誠実なの!!」

深雪はさつきと表情は打って変わって明るくなる。

横島はほのかに感謝するべきである。一つ間違えば氷漬けにされただろう。

そして、決勝が開始された。

一条と達也が一对一对峙、後は2対2で対峙している。

「おおっ、なんだアレ、達也の奴、魔法起動前に、魔法式を壊しているのか?あの一条つてイケメンもどんだけオールレンジで魔法展開できるとだよ!!」

「横島さんは、あの起動式の展開が全部見えるんですか?」

美月は横島に質問する。

「へ?一応見えるけど」

「横島、目はいいいみたいね」

エリカがそう横島に言った。

高速に展開する魔法の攻防を把握できていることを二人は指していた。

一条と達也の攻防が佳境に入る。

達也は一条に向かって走りながら、魔法式を壊していくが、追いつかなくなっていた。

幾つかの魔法は体術で避けながら、それでも進んでいく。

しかし、一条将輝は殺傷能力の高い攻撃を発動してしまった。

達也はギリギリ避けるが、その衝撃で体ごと吹っ飛ぶ。

それを見た横島は一瞬、助けに行く体勢を取ろうとしたが止めた。

達也の体が明らかに内臓まで損傷していたレベルではあったが、一瞬で修復したのを見たのだ。

横島はこの状況を、ブランチユ日本支部を襲撃する際に確認していた。あの時は他人の体ではあったのだが。

横島はこれは、回復ではなく、修復だと感じた。

そして、修復した達也は一気に距離を詰め、一条の耳元で指を鳴ら

す。

衝撃波が生まれ、一条はそのまま脳震盪で倒れる。その衝撃波は観客席にも届いた。

達也自身も耳から血を流していた事から、自身にも影響が出た様だ。

後は残りの2対2で対峙している戦闘域。

第三高校の一人は吉祥寺真紅郎。基本コードを発見した天才魔法師。

しかし、幹比古は古式魔法を縦横無尽に展開し、天才に土を付けた。残りの一人は、レオが倒し、試合終了。

第一高校、即席チームの勝利である。

そして、3人は肩を寄せ合い、観客席の方へ戻ってきたのだった。

横島、九校戦9日目、闇に踏み込む!!

新人戦モノリス・コードに見事即席チームである。達也、レオ、幹比古が優勝候補を破つての勝利に、第一高校の選手、スタッフともに沸いていた。

簡単な飲み物と簡単なお菓子だけだが、プチ祝勝会が開かれた。2科生である彼らだが、今は参加者全員祝福をうけるのだった。

九校戦9日目 本戦ミラージュ・バット

達也と横島は、事前に真由美達にCADに細工がされている可能性を指摘し、ミラージュバットに参加する深雪と3年生小早川景子のCADと一緒に大会運営委員にチェックに出すことにした。

本来は試合ブロック毎に個々で大会運営委員会のチェックに出すのだが、不正を暴きやすくするためだ。

小早川景子のエンジニア3年生平河小春と深雪のエンジニアの達也、立ち合いとして横島がCADを大会運営委員に持って行く。

運営委員が、CADをスキャンする機器で、小早川のCADを先に通す。特に変わった様子はない。

次に、深雪のCADを機器に通す。

達也が突然、運営委員の胸倉を掴み、地面にたたきつけた。

「舐めた真似をしてくれたもんだ。深雪の身に付けている物に、細工をするなど……言え、誰に言われてやった」

達也の目は明らかに殺気を帯びていた。

運営委員は恐怖の様相で、声も出ない。横にいた平河小春もそれに驚いた顔で慄いていた。

「達也、やはりなんかあったようだな」

横島は達也の行動を止めるつもりはない様だ。

達也は幾分か殺気が薄れ横島に答える。

「ああ、間違いないウイルスに似た何かを入れられた」

「何を騒いでおる」

九島烈がこの場におつきの護衛と共に入って来た。

「じいさん二日ぶり!!」

横島は陽気に挨拶をする。

「九島閣下、当校の選手のCADにこの男が不正なプログラムを紛れこませたので、尋問しておりました」

達也は、簡潔に九島烈に事の成り行きを説明した。

「ふむ……確かに、異物が入っているな……電子金蚕だな、プログラムを狂わす代物だ。昔我が軍はこれに苦しめられた」

九島烈は達也から深雪のCADを受け取り、目視で確認し、そう答えた。

「じいさん、やるな、見ただけで分かるのかよ。こつちも見てくれ」

横島はそう言うと、小早川のCADを呆然としている小春の手から取り、九島烈に渡す。

「うむ、こちらも同じだな……そのものを引き捕らえろ。……横島くん、司波くんだったかね、アレがよくわかったな」

九島烈は不正を行おうとした委員を部下に連れて行かせ、横島と達也に話しかけた。

「自分が組んだCADなので、異物が入ればわかります。横島がその可能性について、予め指摘していたので、注意も出来ました」

達也はそう説明した。

「ほう、流石だな……予備のCADがあるだろう。それを使うといい。こんなことが起きたのだ、検査を通さなくて良い」

九島烈は関心しつつも、速やかに事態を收拾する。

「ありがとうございます」

「助かったよ、じいさん」

達也と横島は九島烈に礼を言う。

平河小春はその様子を呆然と見ている事しかできなかった。

本戦ミラージュ・バット開始

何時もの面々は、固まって観戦していた。

「あれ？深雪飛んでない？」

「飛んできますね……」

「飛んでる」

「うん、空中を飛んでる」

エリカ、美月、雫、ほのかは、目を見開き驚きその光景を見ていた。

この競技、通常ジャンプして、空中に浮かぶホログラムの球をステイクで消していくのだが、深雪だけが文字通り空中を飛び回り、次々とホログラムの球をステイクで次々と消していく。

「おいおい、じょうだんだろ？」

「飛行魔術なんてあったらどうか？」

「くつ、スカートの中身はタイツだとお!!なんでじゃ!!」

レオ、幹比古、横島も驚いていたが、一人だけポイントがずれていた。

会場の全員が目を見開き驚いていた。

飛行魔術自体、実用レベルで現段階で存在しないのである。

開発者は間違いなく、達也だ。トールラスシルバーという偽名を使い、数々の魔法を生み出していたのだ。しかし、その真相は、学校内では深雪以外誰も知らない。

結果は深雪の圧勝で終わる。

そして、決勝。

深雪が圧倒的な差で優勝する。
ジャンプと飛行では、もはや試合にならなかった。

この試合だけでなく、全試合で達也が関わったCADは間違いなく一級品であった。

他のエンジニアとの差をまざまざと見せつけた結果となった。
ゆえに、達也本人の意図しないところで禍根を残すことになった。

決勝戦の間、横島は観客席に居なかった。

「厳ついおっさん、こんなところで何やってるんだ？」

横島はスーツ姿の無表情の巨漢に対し、話しかけていた。

「……………」

その巨漢からは返事はない……しかし、横島めがけて、いきなり殴り掛かって来た。

横島はそれを素手で受け止める。

「おっさんスゲーパワーだな、普通の人間だと即死レベルだ」

横島は開いているもう一方の手のひらを巨漢の顔に当て、靈気を放出し、氣絶させた。

「なんなんだ？まるで感情の起伏が無い。感情を司る気も発していない」

横島と対峙したのは、ジェネレーターと呼ばれる強化人間だ。感情をなくすことで、安定した魔法展開と戦闘ができ、死を恐れることなく命令に服従する。非人道的な手段で生み出された一種の生体兵器だ。

この恐るべき生体兵器を送り込んだのは、第一高校に妨害工作を行っていた。ノー・ヘッド・ドラゴンの東日本支部だった。

彼らは、この九校戦を利用して、大きな金額を動かす賭け事を行っていたのだ。

その胴元となっていたのだが、第一高校が優勝すると、大損が免れない状況だったのだ。

そこで、最初はバレないように、事故などに見せかけ、第一高校の選手を排除したりしていたのだ。

しかし、そんな妨害に屈せずに勝ち続ける第一高校に業を煮やし、段々と妨害手段がエスカレートしていったのだ。

そして、遂に、第一高校が今日のミラージ・バットでほぼ、優勝が確定してしまい。最終手段を用いたのである。ジエネレーターを使い会場に居る人間を虐殺。それによって、大会自体を中止に追い込もうと考えたのだ。

2体のジエネレーターを虐殺に向かわせたが、1体は今、横島が撃退。もう1体は、現在会場の外で、何者かと戦闘を行っていた。

横島は気絶している巨漢に札を取り出し向ける

【影】吸引

横島がそう言うのと巨漢は札の中に吸い込まれていった。

「あっちの方は大丈夫そうだな。軍の人もなかなかやるようだし」

横島は異様な感覚とわずかな殺意を感じ、この巨漢の元に来たのだ。もう一つの存在を感じていたが、それは、他の人が対処してくれたようだ。横島は、その周囲に響子の気配を感じていたため、軍の人間が収めたと判断していた。

「うーん、どうっすかな」

横島は真剣な顔をし、一人ごちる。

横島、敵の巢に現れる!!

九校戦9日の夕方、横島は十文字、辰巳と、小会議室で明日のモノリス・コード本戦の作戦会議に参加している。昨日達也達の新人戦作戦会議に参加していたかいがあってか、スムーズに話は進んでいた。

その頃達也は、独立魔装大隊のメンバーと行動を共にしていた。

独立魔装大隊がノー・ヘッド・ドラゴンが送り込んだジェネレーター（強化人間）を捕縛したことで事態は動き出す。

ノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部が、この九校戦に関与し、大量虐殺行為の未遂を行ったとして、壊滅を決定したのだ。

既に、ノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部の場所を特定。襲撃の準備にすでにとりかかっている。

達也も、独立魔装大隊所属、大黒竜也特尉（軍所属時の偽名）として、この作戦に主戦力として参加する。

達也は珍しく怒りをあらわにしていた。

深雪との生活を害する存在は達也にとって排除する対象であり、まして、今回は間接的ではあるが深雪自身も害意をもって狙われたのだ。その怒りは、ブランシユの時とは比べ物にならない。

達也と響子はペアを組み、九校戦会場から東京のノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部付近まで車で移動し、彼らは狙撃ポイントとなる高層ビルの屋上に着く。

その間、他のメンバーは東日本支部を包囲監視または、有線設備の破壊工作などを行っていた。

そして夜半、ノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部壊滅作戦が開始される。

達也は、戦闘服に身を纏い。戦闘用のサングラスをし、シルバーホーンをノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部の会議場に向けて構える。

その会議場は達也が居る高層ビルの屋上の二階層下に位置し、若干見下ろす形になる。その距離は約800mと離れている。

現在、会議場には東日本支部の幹部5人と護衛のジェネレーター5人が居る事が確認されている。

そして……。

達也はシルバーホーンを構え、遠距離からの魔法を発動させ、まずは護衛のジェネレーターの一人を見せしめに、分解魔法『ミストディスプレイジョン』で分子レベルまで一瞬で分解し消し去った。

会議場の幹部は何が起きたのかわからず混乱する。

当たり前の話だ。ジェネレーターとは言え、人一人が、目の前で突然霧の様に消え去ったのだから。

達也は、会議室の通信機器と回線をつなぎコールする。

幹部の一人が、通話をオンにし、達也の声が会議室に響く。

「ハロー、ノー・ヘッド・ドラゴン東日本支部の諸君」

「何者だ!!」

「富士（九校戦）では世話になったな、ついてはその返礼に来た」

達也は芝居じみた言い回しで、通信越しに挑発していた。

そして、また一人のジェネレーターが達也によって、霧となり消える。

幹部連中は窓に向かい、テーブルなどを倒し、盾とするが、窓越しに襲撃者（達也）を確認することはできない。

幹部の一人がジェネレーターに達也の位置を確認させる。

するとそのジェネレーターは窓の外の高いビルの上を指さす。

そのジェネレーターは、またしても、達也によって分解され、霧となり消え去る。

その光景に幹部連中は恐怖するも、残りのジェネレーターに達也を処分するように命令する。

「お前ら、あいつを殺れ!!」

しかし、ジェネレーターは

「不可能です。有効距離外です」

と攻撃が届かない事を無表情で説明する。

そして、説明したジエネレーターも達也によって、容赦なく霧にさせられる。

「道具に命令するんじゃないやなく、自分でやったらどうだ？」

今の達也は饒舌だ。怒りが声に現れている。

幹部の一人が呟く

「……デ、デーモンライト……まさか、沖縄の悪魔か」

達也が3年前参加した戦闘で、分解・再成を駆使して、大亜連合を壊滅に追いやった時に恐怖の権化として付いた通り名だ。

幹部の一人が逃げ出そうと一つしかない扉を開けようとしたのだが、一向に開かない。

魔法ですでに部屋は孤立状態となっていた。どうやら、一切の外部への通信もつながらない様だ。

「無駄だ。俺がお前らを逃がすと思うか？」

今の達也の声は幹部にとって恐怖の対象の何物でもない。

しかし……

バン!!

開かないはずの扉が開き、外から人が入って来た。

「ちわー!!…三河屋でーす!!」

この場の雰囲気即していない陽気な声がかたまする。しかも、そのお約束のギャグは古すぎて誰もわからないだろう。

幹部連中は啞然と入って来たその男、いや少年を見た。

「抜け駆けはするいぞ!!俺もパーティーに混ぜてくれ。いいだろ？」

赤いバンダナにジャージ姿の横島が現れたのだ!!

達也は、一瞬目を大きくするが、鋭い目つきに戻る。

達也の近くで、会議室内をモニターしていた響子は驚きを隠せないでいた。

幹部連中は啞然としていたが、一人の幹部が横島が開けた扉から逃げだそうとする。

達也はシルバーホーンを構え、逃げようとする幹部に「ミストデイスパージョンを発動させた。」

しかし、幹部は霧にならなかった。

横島は幹部の前に立ち、達也の方へ向かい右手で六角形の半透明状の盾を掲げていた。

明らかに、その盾『サイキックソーサー』で、ミストデイスパージョンを阻止したのだ。

その様子には達也は内心驚いていたが、表情は眉を顰めるに留める。

「達也、せっかちな俺も混ぜると言ったんだ。……いや、後は俺にやらせろ」

横島は最初は陽気そうに言っていたが、最後は顔つきが鋭くなる。

「横島、なぜここにいる？なぜ邪魔をする？」

達也は苛立ちを隠そうともせず、横島に幹部をかばった理由を聞く。

「悪いな達也」

横島はボソツと小さな声でそう言ってから、声を大にして唱える!!

「結果!!」

横島、事件の闇に踏み込む!!

九校戦9日目ミラージ・バット決勝戦後

横島は会場から離れた林の中で外界と遮断する結界を張り、捕らえたジェネレーターを封印札から解放する。

ジェネレーターは横島の術により、身動きが出来ないでいる。

「おっさん何者なんだ?」

横島はジェネレーターに感情が動く気をほとんど感じられないでいた。

「……………」

「悪いが、ちよつと見せてもらおうな」

横島はそう言つてジェネレーターの額に手をやると、手が鈍く青白く光る。

横島はジェネレーターが持っている記憶を覗き見ているのだ。

ジェネレーターがどのようなようにして生まれたのかを垣間見ている。

魔法師の感情と意思を薬物と脳手術で奪い去り、安定した戦闘力を発揮できる生体兵器として、改造されたのだ。

しかも、このジェネレーターは元ノー・ヘッド・ドラゴンの上級構成員だったようだ。

「……………胸糞悪いことしやがる」

「……………こいつらがノー・ヘッド・ドラゴンの幹部か……………」

「第一高校への数々の妨害はこいつ等で確定かな」

「しかしこんな奴らに、後れを取るか?今の日本の軍も警察も大したことないな」

「??……………なるほどな……………しかし、これは……………」

横島は何かに気付いたようだ。

「こいつら、踊らされている可能性が高いな……………」

横島は疑問に思っていたことが一つ一つ解決していくようであった。

九校戦、この会場に入る前、バスに車で事故に見せかけた自爆テロにあつた時から、疑問に思っていた。

その後の競技中の摩利の事故。

そして、森崎達1年生のモノリス・コード正式メンバーの事故。

2年生の集団腹痛。

CADへのウイルス混入。

どれをとっても、大会が中止になってもおかしくない事態だったが、続行されていた。

本来なら、最初のバスの事故で、大幅に大会延期になってもおかしくない。

十分な検証も行わず、単なる事故として処理をされていたのだ。横島や達也は故意であることは、現場の検証担当官などに話しているのだ。

しかも、その後の事故や事件は、聞き取り取り調べや十分な検証などもほとんど行わない状態で試合が続行している。何故十分な取り調べや安全性の再チェックなどをしないのか？

仮にもこの会場は『軍』の施設である。

万が一など有ってはならないのに、このありさまだ。

しかも、自分に対しての、長きにわたる拘留も不可解だ。九島烈が来なければ、九校戦終了まで拘束されたままだっただろう。それは何故か？

そして、ジェネレーターである。ジェネレーターは2体いたのだ。

しかし、軍が関与したのは1体のみ、横島が対峙したジェネレーターは放置されていたのだ。

警備がずさんどころの話ではない。下手をすると、わざと一体を放置したと見える。横島が駆けつけなければ、会場に死人が多数出たであろう。何故警備を強化しないのか？それともワザと放置したのか？

横島は、この後、明日のモノリス・コードの作戦会議に出なければならぬ。

一旦、思考を止め。ジエネレーターを封印札に戻す。

横島はモノリス・コードの作戦会議中も思考を巡らせていた。

不可解な事はこのほかにも多数ある。

達也が選手でもないのに、モノリス・コード新人戦の代役として、許可が下りた事。それに伴い、試合が次の日に延期された事。これ自体異例らしい。

摩利が、参加許可が下りないのに、なぜこの時ばかりと、何故許可が下りたのか……

何者かの意図が見え隠れしているようで仕方がなかった。

横島はある答えを出していた。

軍は、第一高校への妨害を意図的に放置した!!

しかし、それはまだ結論には至っていない。何がしたいがためにそんなことをするのかがまだわかっていない。

モノリス・コード作戦会議が終わり、その疑問に答えてくれるかもしれない人物の所に横島は忍び込んだ。

「誰かね」

「わるいな、じいさん、俺だ」

横島は九島烈が宿泊しているVIPルームに忍び込み、それと同時に、外部と遮断する結界を張っていた。

「横島くんか……この結界も見事なものだ。護衛の者も気づいていないだろう。……わたしに何かようかね？」

「じいさんが元軍のお偉いさんだと聞いた」

「そうだ」

「これを見てくれ……」

横島は封印札を出し、ジエネレーターを放出した。

「その術は？……うむジエネレーターか」

九島烈は札から人が出てきた事に驚いたが、出てきた人がジエネレーターであったことにも驚きを隠せない。

「今日、会場付近で暴れようとしたため俺がとらえた……しかも、もう一人同じような奴がいたが、軍の人間がとらえた様だ……じいさん。こいつ等は感情を奪われている。軍でもこんな人道に反した事をやっているのか？」

「私が知る限りでは、今は、やっていないはずだ」

「じゃあ、ズバリ聞く、達也のあの感情の薄さは、軍でこいつみたいになにかされたのか？」

「……軍ではない、これ以上は私の口からは言う事ではない。察してくれ」

「では、達也は軍に、無理やり戦わせられているわけではないんだな」

「そう、理解しているが……戦わせるよう働きかける様には出来る」

「なるほどな……じいさんも食えないな」

横島は、九島烈が言いたい事を理解していた。戦わせるよう達也を仕向けることはできるといふ事だ。

「じいさんは今回の一連の事件をどう思う？じいさんは関わってなさそうだが」

横島は暗に、軍がこの事件にかかわっているといふ事を九島烈に問うたのだ。

「君が思っている事と多分同じだろう」

「よくわかった。もし、軍にいちやもんつけられて、対処しても大丈夫かな？」

「存分にやりたまえ」

九島烈は口元をニヤリと綻ばせた。

「どうやら横島と九島烈はこの場では利害が一致したようだ。」

要するに、達也を軍の思う様にさせたくないという点だ。

今の横島は達也が四葉家の人間であることは知らない。

九島烈は達也が四葉の人間で更に、軍で戦略級魔法師として、使われている事を知っている。

達也一人で日本内情のパワーバランスが著しく偏る事を良しとしていなかった。

「ありがとうな、じいさん、この礼はいつかする」

「よう」

横島は九島烈の返答を聞かずして、窓から出て行った。

横島、軍の行動に疑念を持つ!!

横島は達也の部屋に訪れたのだが部屋には居ない様だった。

達也の居場所を靈気で探るが近辺には見当たらない。もしやと思
い他の靈気を搜索するが、響子やジェネレーターに対処した軍の面子
も見当たらない。

もう少し広域で探ると、響子と共に移動している達也を確認する。
高速道路を使用して移動していた。向かう先は東。

「もしや……あいつらを捕まえに行ったのか？しかし、動きが早すぎ
る」

横島は達也達がノー・ヘッド・ドラゴンの連中を捕縛しに行ったの
ではないかと想定するも、その動きが早すぎる事に疑念がぬぐい切れ
ない。

横島は取り合えず様子を探るために達也達を尾行することにした。

横島は隠密性を優先すべく、自らに認識阻害の術を使い、高速道路
の裏側を猛スピードで走る。文字通り、逆さまになってだ。

逆さまになり走りながらとある人物に電話をする。

「もしもし、横島っす」

「横島くん、まだ、決着はついていないよ!!」

九重八雲は電話に出るなり、そんな事を言ってきた。

10人ナンパを成功させた方が、八王子駅前でナンパする権利をが
得られるという勝負を横島と行っていたのだ。しかし、今まで1人も
成功していない……いつになる事やら……

「いや、八雲さん今日は真面目な話です」

「珍しいね。なにかな?」

「達也が所属している軍の部隊についてです。どうせ、調べてるんで

「しよ？」

「うーん、個人情報はおちよつと」

「どつちかと言うと、知りたいのは軍の方です」

八雲は端的に語りだす。

国防陸軍第101旅団、独立魔装大隊に所属、旅団長は佐伯広海少将。3年前に設立した旅団であり、当初から、達也が組織の枠組みに組み込まれていたと。それが独立魔装大隊である。その隊長が風間少佐という事である。

独立魔装大隊の役目は新装備のテスト実験部隊であり、機密性が非常に高い部隊との事だ。

「八雲さん、達也は何故、その年で軍の枠組に入れられたんです？」

「沖縄海戦って知っているかい？達也君はどうやら、義勇兵として参加したようなんだ。そこで大暴れしてね。『沖縄の悪魔』なんて呼ばれてたらしいよ。後は推測でしかないんだけど、敵国の船団を撃沈したのも、彼じゃないかって……それが元じゃないかな」

八雲は、自らの推測も兼ねて、説明をしてくれた。

「そうですか……その旅団長はどんな人かわかりますか？」

「うーん、才女って言われてるね。世間一般では、十師族批判派の最右翼らしいよ」

「なるほど、じゃあ、国内における戦闘行為の権限は旅団長にあるんですか？」

「いや、戦闘行為がすでに始まっている場所についてはそうだけど、こちらから仕掛ける場合は戦闘する場所によるけど、基本的に、地域の司令及び首長及び大規模になると防衛大臣の許可がないと厳しいんじゃないかな」

八雲の説明を受け、横島は益々軍に対して疑念を持つ。

「ノー・ヘッド・ドラゴンについては知ってますか？」

「ほう、知ってるよ。大陸系シンジケートの一つだね。違法物を日本でも売りさばっているね、まあ、どちらかと言うと闇商会みたいなもんだよ。この頃は日本ではその商売の方も上手く行っていない様だよ。他の組織が入り込んで、シェアを奪われているみたいだからね」

八雲は興味深そうな声を上げた後に、横島に軽く説明するが、こんな裏の情報をどこから仕入れているのかは疑問である。

「八雲さん、ありがとう」

「で？見返りは？」

八雲は情報の見返りを要求してきた。

「あのナンパ勝負の人数を10人から9人に減らしてあげますよ！」

「それだけかい？まあ、いいや、どうやら達也くんが関わってそうだしね」

「終わったら事のあらましはお話します」

「なるほど、いい情報である事を期待するよ」

横島は通話を終わらせ、走りながら思考を巡らせる。

やはり、軍が絡んでいる事は間違いなさそうだと。

この件で達也は軍に利用されている、今追っている達也達の目的がノー・ヘッド・ドラゴンの組織壊滅ならばなおさらだ。予め、ノー・ヘッド・ドラゴンを壊滅するために、各所に許認可を得ていたと考えるのが普通だ。そうでなければ、隠密とは言え、テスト実験部隊が何の許認可も無しに急に軍事行動に移るには無理がある。

軍は飽く迄も組織だ。思い付きやその場の衝動などで動けるはずがない。

更に、独立魔装大隊と言う組織が、そろって、九校戦の会場に居たのもおかしい。

軍のスカウトマンが居てもおかしくはないとは思うが、師団のしかも隠密性が高い下部組織がメンバーそろえて、会場にいる。この事は尋常ではない。しかも、大々的に警備に参加しているふうでもなかった。隠密に何かをしていたというところだ。ノー・ヘッド・ドラゴンが仕掛ける妨害阻止。いや、コントロールだろうか。

そして、そのターゲットとなったノー・ヘッド・ドラゴンだ。九校戦を賭け事に利用し、胴元が有利にするために、妨害工作を行うなど正気の沙汰ではない。国策の中心である魔法師育成の為の機関だ。さらに会場は軍が管理している施設でだ。何をとち狂ってそんな暴

拳に出たのかは分からないが、商売がうまく行っていない事に付け込まれたと考えるのが妥当だ。

軍のシナリオがだいたい見えてきた。

「くそつたれ、どこの時代でも、一緒ってわけか……」

横島には100年前の出来事が、今の現状に重なって見えていた。

達也達の移動が停止し、そして、襲撃の準備にかかっている。

横島も達也達に遅れ現場に到着していた。

達也と響子以外に、軍らしき人間が8人見られる。

その8人はある建物を包囲監視、隠密侵入しだしていた。

横島はターゲット（ノー・ヘッド・ドラゴン）が居ると思われる建物内に軍の人間にバレないように侵入、各所に札を張る、または、札を式とし放ち、情報収集を行っていた。

横島が建物内の人間の位置などをある程度把握した。直後、達也による戦闘が始まった。

達也は、ターゲットと思われる人物がいる部屋の内部にいる10人の内の1人を魔法で消した。

「くつ、いきなりか？躊躇がない!!」

横島は、達也が攻撃している階層の部屋付近まで急ぎ近づき内部の状況を確認するがその間も、人の霊気が消えるのを感じていた。

達也は、相手を饒舌に脅しながら、人間を消していく、相手を人間とも思っていないかのように。

横島は考えが甘かったと今さら認識した。

軍は、達也は、全員抹殺するつもりだ!!

捕縛など元々考えていない!!

これは一方的な殺戮だ!!

そして横島は、殺戮が行われている現場に足を踏み入れるのだつた。

横島、説教を垂れる!!

「結界!!」

横島は声を大きくして唱えた。

達也は、会議室とつながっていた通信が遮断され、会議室の窓から中の様子が見れなくなった。まるで、霧がかかっているかの様だ。

達也の近くで、会議室内をモニターしていた響子は困惑しながら達也に言った。

「会議室内の映像ロスト……復旧できないわ。完全に切り離された。どういう事?」

藤林響子少尉、『電子の魔女』の二つ名で呼ばれる電子・電波魔法を駆使して、高度なハッキングや情報収集、かく乱を得意とする強力な魔法師だ。

その、響子を持ってしても、横島の結界の中を探る事は出来ないのだ。

達也の術式解体『グラム・デモリッション』では距離が足りず、術式解散『グラム・デイスパージョン』では、横島の結界が読めないため、発動が出来ない。

事実上、今の達也には手出しが出来なくなっていた。

しばらくすると、会議室から青白い光が漏れると同時に圧倒的な存在感が達也と響子に襲ってきた。

横島の圧倒的な高濃度の霊気が漏れ出したのだ。

達也は何とか踏ん張り、立っていた。

「くっ……何が起きている」

達也の隣で直接内部をモニターしようとしていた響子は座り込み震えだしていた。

「な……なに……これ」

一方会議室の中では、

「これで邪魔は入らない」

横島は高レベルな結界を張り、会議室とその外とを完全に遮断した。

幹部達は達也の恐怖から脱してはいなかったが、虚勢を張り横島に怒鳴る。

「……貴様は何者だ!!」

「正義の味方かな？あんたらに聞きたい事があるんだけど？」

「14号殺れ!!」

残ったジェネレーターに幹部の一人が命令する。

ジェネレーターは日本刀を構え、魔法を起動、刀身に『高周波ブレード』を展開し、横島に迫る。

「人の話聞けって。俺、一応あんたらを助けたんだけど」

横島は高周波ブレードが振り下ろされる前にハンズ・オブ・グローリーを発動させ、ジェネレーターを神速で横薙ぎにする。

ジェネレーターはそのまま倒れるが傷一つしていない。横島は霊気のみを切り、行動不能にしたのだ。

それを見た幹部連中は一齐に横島に向かってマシンガンなどを放つ、中には魔法で貫通力を高めた弾や破碎の魔法が付与されたものも混じっていた。

「話しに来たんだって!!」

横島は霊圧を一段上昇させ、弾丸が横島の前に迫ると、その場所だけ一瞬サイキックソーサーと同じような盾が展開し弾丸を次々と防いでいく、横島の前の床には多量の弾が落ちて行った。

それでも、幹部連中は次々と弾丸を横島に浴びせて行く。

「ほんま、アホやな!!」

横島は霊気を一気に解放し、さらに霊圧を高めた!!

横島の周囲から青白い光が漏れ出している。どうやら、外部遮断の結果の外まで影響が出ていた様だ。

幹部連中は横島の圧倒的な霊圧を目の当たりにし、マシンガンのなどの銃器を床に落とし、恐怖で体が震え、次々に膝をついて行き、完全に戦意喪失状態になった。

横島は高めた霊気を納め話し出す。

「俺は話を聞きに来たんだ。それとも、さっきの奴に霧みたいに消されたい？」

幹部たちは全員項垂れていた。

それを肯定と取った横島は……

「全員正座!!それと、九校戦に関与した理由を洗いざらいしゃべってもらおうか!!」

幹部たちはもはや横島に逆らうつもりは毛頭なく、素直に従い正座をしていき、今回の関わったすべての事を話し出した。何故か全員敬語になっていた。

幹部たちが話した内容は、横島がとらえたジェネレーターから得た情報と横島の推測した通りだった。

九校戦を賭け事に利用し、その胴元になっていたのだ。自分たちが利益を存分に得るため、第一高校の妨害を行っていたのだ。ジェネレーター以外にも内部協力者を得たり、構成員を何人も送っていたらしい。

「で、第一高校の優勝がほぼ確定したから、ジェネレーターとやらに命令して観客虐殺、そこで大会中止にして、チャラにしようとしたんだな……お前らほんとアホだな。そんなんだから、商売敵にいいようにやられるんじゃないのか?……あーそれと虐殺命令した奴はだーれだ?」

横島は、呆れた様に見やりながら、確認を取り、最後には二やりとして、そう聞いた。

5人の幹部の内4人が1人を見やる。

「おい……お前らも同意したじゃないか」

「俺は嫌だったんだ。足が付く可能性が高いと言ったじゃないか」

幹部同士が言い争いになっていた。

「全員同罪じゃ!!」

横島は、幹部5人に拳骨をかましていく。

最早いままで威張りくさっていた幹部の貫禄は横島の前ではなくなり、しゅんとなり父親に怒られる子供の様になっていた。

「おかしいと思わないのか?なんで九校戦を元に掛けをした?誰が言い出した?」

横島は溜息を付きながら質問をしていく。

5人の幹部はお互いの顔を見回しだした。

「お前じゃないのか」

「いや、お前だよな」

「そう言えば、お前だったはずだ」

「違う、誰だったか」

お互い犯人を擦り付け合っている。

横島は呆れた顔をして

「あのなあ、お前らの誰かが入れ知恵されたんじゃないのか?客とか同業者の知り合いとか?」

幹部連中はお互い顔を見合わせ、思い出したように喋りだす。

「そう言えば、あのブローカーだったか」

「ああ、最近顧客になった奴だ」

「そうだったな」

横島は呆れを通り越して、憐れみの目で幹部連中を見る。

「お前ら……それって、敵対組織の奴か国の公安や軍の連中じゃねーのか?」

幹部連中は憤り始めた。

「くそ!!騙しやがって!!」

「舐めた真似を!!」

「バカにしゃがって!!」

「バカなのはお前らだ!! 騙される方が悪い!! はぁー」

横島は幹部連中に怒鳴りつけ、深いため息を付く。

怒鳴りつけられた幹部連中はまたもや、しゅんとなる。

最早、何の威厳もない幹部連中は道化もいいところだ。

横島はある可能性を考えている。

軍が関与していた事は確定している。しかし、このシナリオを描いた奴が他に居て、軍の上層部がそれに乗った可能性もあるという事だ。

そいつは相当頭が切れ、さらに軍の内情にも詳しいという事だ。現状では横島はそれが誰なのかも見当もつかない。

「で、お前らどうする? このまま開放すると、軍のさっきの奴に消されるし。それとも警察に突き出した方がいい?」

幹部の一人がそんな事言った。

「金ならある!! だから助けてくれ!!」

「ここから突き落とされたい? その方がいいかもな? 俺なんか何回やられたか……よく生きてたな俺」

横島は遠い目をしてそう言った。横島は色々な高所から美神に突き落とされた事を思い出していた。

美神は関係ないが一番高いところでは宇宙から落下した経験があるのだ。

「まあ、悪事がばれたんだ、警察行って、罪でも償ってくれ」

横島はそう言って、幹部連中にこの後二三情報を聞き出し、何かを書かせる。そして、幹部連中とジェネレーターを何処から出したかわからない長い紐でひとくりに縛りあげ、吸引札を取り出し「影吸引」

と唱え、幹部連中を札に封印する。

「さて、脱出か……クッククー」

横島は悪い顔して笑う。

達也は遠距離魔法はあきらめ、先行していた独立魔装大隊のメンバーと合流して幹部達が会議をしていた部屋の前に到着した。

その時、横島が張った結界がスツと消え、中に入る事が出来たが、中はもぬけの殻になっていた。

幹部連中も横島も残っていたジエネレーターも綺麗さっぱりなくなっていた。

しかし、小さなメモ用紙が一枚残っていた。

そこには二文字 「スカ」と書かれていた。

横島、後始末をする!!

九校戦9日目深夜1:00、横島が宿泊している部屋に風間少佐と響子が訪れた。

外では独立魔装大隊のメンバーが、他の学生にわからないよう待機している。

「横島くんいるかね?」

風間は扉の外からノックをし、横島に呼びかける。

「……深夜になんすか?」

しばらくして、眠そうな横島が扉を開け返事をした。

「ちよつといいかね」

「なんすか?怖い顔して、明日試合があるんで寝たいんですけど」

横島は不満そうな顔をして答えたのだが、風間と響子は強引に横島の部屋に入ってきた。

横島はしぶしぶ、空いているベットに座るよう風間と響子に促した。

「横島くん。尋ねたい事がある。今日の20:00〜21:00頃君は何をしていたかね」

「……え?なんでそんな事を」

横島は答えることを躊躇する。

「いいから答えなさい」

強い語調で風間は横島に言う。

「……飲み物買いに行つて……なんか一年生女子が大浴場がどうのこうのって言つてたのを聞いて後をついて行つたら、深雪ちゃんと雫ちゃんに氷漬けにされました」

「……少尉?」

風間は横島の言動について、響子に確認した。

「間違いありません」

響子は目を伏せて答える。

宿泊内の監視カメラではその様子が一部始終映し出されていたのだ。

「何なんすか？2人して人の恥をそんなに晒したいんすか!!」

横島は目に涙を溜めながら憤った様に言う。

「……単刀直入に言う。我々の部隊は、昨日20:00から、とある作戦を実行していた。その作戦現場で君を見たという人間がいるのだよ。あろうことか作戦の妨害をしたというのだ」

風間は鋭い目つきで横島を見据えて言う。

「何それ？俺、居たつすよ、雫ちゃんだつて深雪ちゃんだつて知ってるはずなんです、見間違いじゃないつすか？」

「見たのは……ここに居る響子君だ」

「やつぱ見間違いじゃないつすか？風間さんが響子さんを夜遅くまで仕事させるから疲れてるんすよ。ブラックもいいところつすよ……だから、彼氏も……」

横島はウンザリした表情でそう言った。

「コホン」

響子は横島が余計な事を言いそうになったので、咳払いをしてそれを止める。

「はあ、また、証拠もなく、俺を冤罪で拘束するつもりなんすか？」

横島は拗ねた様に言うが、前回拘束されたのは過剰だったかもしれないが、冤罪ではない。

「……君を見たっていう人間はもう一人いる。君を良く知る人物だ」

「軍属に知り合いなんでいいんですが？誰つすか？」

「それは機密事項だ」

達也の事なのだが、戦略級魔法師として軍に所属している事は、国家機密扱いなのだ。

「まあ、どっちにしろ、俺じゃないつすよ。人の目なんて、あんまりあてにならないつすからね。どうしても俺だつていうんなら、証拠とかあるんすかね？」

横島はウンザリした表情をしてそう言った。

実際、風間達には確たる証拠がないのだ。

作戦時の宿泊施設監視カメラには横島が確実に映っている。しかも証人付きでだ。

更に、響子がノー・ヘッド・ドラゴンの会議場をモニタリングしていたデータには横島の音声はおろか映像にも一切写っていない、逆に横島が関与していない証拠しかないのだ。

それで、直接横島に尋問しに来たのだが……話が平行線のまま。

「違うと言うのだね」

「だから何度も言っているじゃないですか？俺、明日っていうか、今日試合なんですけど、もしかして嫌がらせですか？これも第一高校への妨害工作の一環？」

横島は痛烈な皮肉を風間に浴びせたのだ。

「……深夜にすまない事をした。明日の試合頑張ってくれたまえ」
そう言つて風間と響子は横島の部屋を後にする。

横島は、布団を被つて床に就く。

ニヤリ

作戦時にここに宿泊施設に居た横島は、横島の分身だ。

齐天大聖老師、孫悟空の弟子、老師の得意技は髪の毛で意思のある分身体を多数つくる事。横島はまさしくその技を行ったのだ。横島の場合、数体作るのがやつと。加えて、まれに綺麗な横島や、スライムみたいな横島が出来上がる事もある始末。今回はちゃんとした横島だったのだが、ちゃんとしたものだけに女子が行く風呂について行ってしまい、深雪たちに氷漬けにされるアクシデントに見舞われる。何とか耐久値内で収まったようで、分身体が元の髪の毛に戻ることもなく、横島も内心ホツとしていたのだ。

捕まえたノー・ヘッド・ドラゴンの幹部連中は警視庁の前にコソつと放置。丁寧に自分で書かせた罪状付きで、もちろん認識阻害の術で横島に対しては印象が非常に薄い状況になっている。

横島の部屋を後にした風間少佐は、横島の監視体制の強化を図るよ

うに指示するが、翌日九島烈にしこたまその件で説教を受けることになる。横島がコソつと事のあらましを密告したのだ。

横島は九島烈と九重八雲には情報という手土産を忘れず持って行っていた。

ノー・ヘッド・ドラゴンの総裁やら重要人物の名前についてである。両名共、いい手土産だったと言っていた。

翌日の早朝、朝のトレーニングをしている達也を横島が捕まえ、人気のない場所に行く。

横島から達也に話を切り出す。

「達也……お前、なんで軍なんているんだ？お前利用されているとわかってるだろ？」

「お前には関係ない……昨日なんで邪魔をした？」

「何のことだ？って言いたいが……邪魔するつもりはなかった、その、お前が人を殺るのを見るのが嫌だなんて」

「なんで俺にかまう？」

「わからん……逆になぜ俺の事を洗いざらい軍に話さない？」

「深雪がお前の事を気に入っているからな」

「とことんシスコンだな、お前」

「……俺には力が必要だ。だから、軍に入った。ある程度の事は織り込み済みだ」

「おまえ、十分に強いだろ？この前、俺と戦った時も、なんか力が出し切れていないようだったし、封印か？なんかそんな感じがした」

「いや、足りん」

「はあ、俺の余計なお節介ってことか、悪かったな……詳しいことは聞かんが、協力できることがあれば言ってくれ……」

「……後で俺の所に来い、CADの最終調整をしてやる」

「ああ、助かる」

この二人、性格は合わなそうなのだが、なぜだか奇妙な信頼関係はあるようだ。

そして、九校戦10日目を迎える。

横島、本戦モノリス・コード1回戦出陣!!

九校戦10日目

本戦モノリスコード予選1回戦

第一高校VS第九高校

フィールドは森林

第一高校は十文字と辰巳、そして横島のチームだ。

十文字は予選開始直前に横島の背中を軽く叩いて言う。

「相手は格下だ。お前の実力も見ておきたい、予定ではかく乱がお前の役目ではあったが、アタッカーとして、モノリスを制圧してこい」

「マジっすか!!」

「ああ」

辰巳が横島の肩にポンと手を置き。

「後ろには俺と十文字がいる。まあ、俺たちだけでもどうにかなる相手だから、気にせずやってこい」

さりげなくフォローを入れる。はつきり言ってその行動は男気溢れるイケメンである。

「ううう…失敗しても怒らないでくださいよ」

横島は自信なさげに言う。

「ああ、行ってこい」

ウ—————ウ

そして、開始のサイレンが流れる。

十文字と辰巳は自陣のモノリスの前に待機。

横島は林の中に走っていく。

第九高校の選手は一人がディフェンス。二人はアタッカーだ。

観客席では、いつもの面々がかたまつて観戦をしている。

珍しく美月から達也に話しかける。

「達也さん、横島さんのCADは達也さんが調整したんですよね」

「そうだ」

「でどうなんだ？横島の奴、いけそうなのか？」

レオが達也に質問する。

「正直、あの設定で何ができるのかは、わからん。横島が行使できる魔法は三種類のみだ。しかも一つは全く役に立たない。実質二種類だ、それも本来モノリスコードに向いていない」

淡々と説明する達也。

「実質二種類ってそれはまた、少ないわね。まあ、横島の実力じゃ、そんなもんかな…それでも少なくとも大丈夫なのそれ？」

エリカが心配そうにそう言う。

「まあ、何を仕出かすのか、見てのお楽しみだ」

達也は珍しく、少し笑ったような表情をした。

ほのかが中継を見て

「横島さんだけが先行したみたいですよ。先輩たちはモノリスの前で待機みたいですね」

「おい、大丈夫かよ？横島にアタッカーって、あいつが攻撃したりしたところなんて見たことないぞ」

レオは驚いたように言う。

「横島さんなら大丈夫」

雫はそう締めくくった。

そんな話をしている間に、第九高校のモノリスが開いたのだ。

「何だど？どこだ？」

第九高校のディフェンスの生徒は驚いている。モノリスは20メートル半径から、特定の魔法を行使することで開く、そして、そこに表示されたパスワード512ワードを読み取り、腕にはめている専用機器で打ち込んで送信することで勝利となる。

また、全員戦闘不能にしても勝利となる。

第九高校のモノリスの周りは約20メートルギリギリ林から開けた場所にあるのだが、モノリスの周りにいるはずの、アタッカーの姿を確認できないでいた。

横島は今回、陰陽術や霊力を使うつもりは全くない。CADに組み込んだ魔法と基礎能力（抑え気味）だけで競技を行うと決めていた。

しかし、第九高校のディフェンスは気づけない。彼は見当違いに、モノリスの半径20メートルギリギリ付近の林の中を注視し、横島を探していた。モノリスコードで着用する服は、黒と灰色の戦闘用スーツだ。開けた場所では丸わかりなのだが、林の影などに隠れると見えにくいことを踏まえた索敵である。

しかし、観客は気づきだしていた。

何故か笑いがあちこちで起こりだす。

「プププププ、横島!!なにアレ!!」

エリカは爆笑している。

「エリカちゃん、笑ったらだめよ、プクツ!!」

美月も笑っている。

観客から見るとモノリスの周りで、高さ50センチ程度のこんもりとした生垣にあるような低木が、ディフェンスの視界を背にして、そこそと、モノリスの周りを動き回っているのだ。

そう、横島の得意技の一つ完全擬態だ!!

何故か美神や女性陣にはバレるが、男には絶対バレないのだ!!

横島はサツキらしい木の枝を背中にいっぱいくっ付け、丸く蹲り気配を消して擬態していた。結果、背中から見ると、見事にこんもりとした低木が生えているように見えるのだ。移動中は真正面から見ると体育座りしている様相なのだが、その状態で機敏に動く事ができるが故の秘技だ。ディフェンサーが振り返ると視界の真正面に来ない場所に移動しジツとする。ディフェンサーの注意がモノリスから外れると、モノリスのコードを読み取るために、モノリスの前までくるのだ。それを繰り返していた。

ウウウウ

ウ

そして、試合終了のサイレンになる。

「ふはははははははっ、勝利!!」

横島は試合終了とも高笑いをして、立ち上がる。背中は木の枝葉がびっしり、頭の左右には枝が刺さっていた。

「うわわ!?!」

第九高校のディフェンサーからすると、急にそこに人が現れたように見え、驚く。しかも珍妙な格好をしたやつだ!!

勝利宣言をした葉っぱ星人いや横島は、珍妙な格好のまま、呆然と見ている第九高校ディフェンサーを背に悠然と会場控室に戻っていく!!

横島、本戦モノリス・コード2回戦にでる!!

九校戦10日目

本戦モノリス・コード予選2回戦

第一高校VS第七高校

障害物が何もない草原と荒野と起伏が激しい丘のフィールドだ。

試合開始直前に十文字は先ほど同様横島の背中を軽く叩き言う。

「横島、さっきの試合はよくやった。今回の相手も大したことは無い、お前はデیفエンスを試してみろ、近くで俺が待機する。危なくなれば出るから思う存分やってみろ。辰巳、オフエンス・アタッカーは任せただぞ」

男気イケメン辰巳は横島の肩にポンと手を置く。

「了解だ。横島期待しているぞ」

「またっすか」

横島は渋い顔をしていた。

ウ————ウ

開始のサイレンが鳴る。

辰巳がアタッカーとして先行し、十文字は近くの起伏の激しい丘の窪みへと行く。

モノリスの周りを取り残された横島は、魔法を行使してその辺の石と木の棒でスコップを作る。

横島の使える魔法の一つは物体の相対位置を固定する魔法だ。まあ、簡単に言うくと物と物の位置を固定する魔法で硬化魔法の基本である。横島はそれを『接着魔法』と呼んでいる。その魔法を器用に使うと木と石をくっ付け、スコップを作ったのだ。

横島の凄いところはこの単純な魔法を物体の質量が小さければ最大100程度同時使用でき、持続性も高く、5〜10m離れた場所の物にも質量によるが展開可能なのだ。

そして、そこから早い。モノリスの周りに3個、そして、モノリスに離れた場所に2個、あつという間に大きな穴を掘っていく。昔流に行ったゲーム、ミスタードリラーやロードランナーも真っ青だ。

手際よく、枝と草をまぶし、上から土を被せ、生草を植えて落とし穴の完成!!短時間に作ったのだが、完成度が非常に高い。

横島は、達也から借りている。短銃型の特化型CADを使い、自陣のモノリス周辺の地面の数か所に魔法を打っていく。

そして、横島は自陣のモノリスの物陰に隠れる。

この状況は観客席には丸見えである。

この状況を見た観客席にいる何時もの面子達は

「……横島さん器用ですね。魔法をあんな風に使うなんて」

美月は横島が簡易スコップを作る過程を褒めていた。

「土掘るの早くねえか?あいつ、手慣れているのは気のせいかな?」

レオは横島の手際の良さとスピードに呆れ半分、驚き半分であった。

「横島、落とし穴って……そんなのに引つかかる奴いないから」

エリカは呆れた様に言う。

「いや、なんかの魔法を地面のうち込んでいたし、何か考えがあるんじゃないかな。あれは条件発動型の術式か何かかな?それだと結構難しいんじゃないのかな?」

幹比古は横島のフォローしながらも疑問の声を上げる。

「いや、違う。あれは、俺が使い物にならないと言った魔法だ。魔法が発動している様に見えるだけの何も意味を持たない魔法だ、特に困難なものでもない」

達也は幹比古の疑問に淡々と答える。

「横島はなんでそんなことするんだ?」

レオは意味のない魔法に付いて疑問視する。

「そう言えば、お兄様、横島さんがスコップ作成に使った魔法は硬化魔

法ですね。同時に多数展開しながらも継続性が高いようです」

深雪は横島の魔法展開数が多い事と、行使の持続時間が長い事を指していた。

「ああ、横島は物覚えは悪く、まだ単純な魔法しか使えないが、一度覚ええると、同時に多量に展開でき、起動スピードがやたら速い、持続力もなかなかのものだ」

珍しく横島を褒める達也。

「へえー、あの横島がね」

エリカも少しは感心している様だ。

「遠距離から魔法で横島さんが直接狙われたら、不利じゃないですかね」

美月は現状の横島の戦況について、述べている。

「横島さん、絶対なんか企んでいる」

雫がそう締めくくった。

第一高校のモノリスに第七高校のアタッカーが一名近づいてきた。その後遅れてもう一人続いている様だ。

第七高校の先発してきたアタッカーはモノリスの周りに誰もいない事に気づき、警戒しながら近づく。モノリスまで40m程近づいた時、モノリス右側の物陰に人の腕が見えたのだ。

第七高校の先発アタッカーはその事に気づき、モノリスの右側に回り、魔法を放つ算段をする。

一気にその位置から、右側に足を踏み入れる。

ズボ!!

「うが!!……なんだこれ!!」

先発アタッカーは見事落とし穴に落ちたのだ。

横島は落とし穴まで走って近づく。

「ふははははっ!!平安京エイリアンの術じゃ!!そしてこれでも喰らえ!!」

すかさず『接着魔法』を放ち、相手アタツカーの落とし穴に落ちた体勢で接触している右手と右足の戦闘服と、左手と右肩の戦闘服と、そして、相手の左足のブーツと右足のブーツを接着させる。

これでこの選手は身動きが完全に取れなくなった。

横島はまず、モノリスの裏で気配を消し隠れ、落とし穴がある距離まで相手が来た時に、体の一部をワザと見せ、相手の動きをその距離に留める。そして、見せる方向により相手が動く方向を微調整して、落とし穴に落とし穴としたのだ。

そして、後に続いてきたアタツカーは横島が、先発のアタツカーを倒している隙に、横島に魔法で氷の礫を放つ。横島は横に飛びのいたが、それを喰らったようで、そのまま先発アタツカーが落ちた落とし穴に覆いかぶさるように倒れる。

後発のアタツカーは横島が倒れるのを見て、モノリスへ急ぐが、モノリス周辺では何らかの魔法が現在も稼働しているように見える。それを大きく回避し、警戒しながら周囲を回る。

ズボ!!

「うげ!!……なんでこんなところに!!」

後発のアタツカーも見事に落とし穴にはまった。

そして倒したはずの横島が現れた!!

落とし穴に落ちた後発アタツカーを見下げて高笑いをするのだ。

「ふははははッ!!お前らあほだな!!横山先生の三国志でもちゃんと読

んどけ!!横島流八門金鎖の陣なんちつて!!」

そして、接着魔法でさっきの要領で後発アタッカーを拘束する。

そう、横島の得意技の一つ、死んだふり!!

後発のアタッカーの攻撃を寸で避け、倒れて、死んだふりをする。

そして、モノリスに誘導し、モノリス周囲の見せかけだけの魔法の警戒心を利用し上手く使い、落とし穴へ誘導。しかも見せかけ魔法は、何れかの落とし穴に最終的に到達するように設置されていた。

まさに、その狡猾さは三国志の並居る軍師のようだ!!

横島はこの布陣で2人同時に来た場合も想定していた。3人同時来た場合のみ、1人倒して、十文字に助けを呼ぶ算段であった。

そして……

ウウウウ——ウ

アタッカーを務めた辰巳が相手のディフェンダーを倒し、試合終了了。

エリカは、観客が思っている事を代弁してボソツと言う。

「勝ったんだけど……なんだろう。この素直に喜べない感情は……」

横島、本戦モノリス・コード3回戦にでる!!

九校戦10日目

本戦モノリス・コード 予選3回戦

第一高校VS第四高校

町中の戦闘を想定した廃ビルが立ち並ぶフィールドだ。

十文字は試合開始前に布陣を説明する

「このフィールドは見通しが悪く遭遇戦になる可能性が高い。敵か相手のモノリスを如何にして先に見つけるかがポイントになる。辰巳と横島、相手のモノリスを搜索しつつ、敵の行動を把握し、連携し、遊撃またはモノリス制圧をしろ。俺はこの場で待機、ディフェンダーだ」

辰巳は横島に今回の役割と作戦について簡単に説明する。

「了解だ。横島、まずは別行動で搜索だ。モノリスは廃ビルのどこかにある可能性が高い、くまなく探せ、モノリスまたは敵を発見した場合はまずは俺に連絡しろ、モノリスを発見した場合は、二人で制圧にかかる。敵に遭遇した場合、状況によっては敵に先制攻撃をかけ、敵を無力化してもらおうぞ」

「俺の魔法、先制に向けてないんですが……」

十文字はまたもや横島の背中を軽く叩き言う。

「横島、先ほどの試合は予想外の働きだった。今回も何とかしてみせろ」

先ほど同様、男気イケメン辰巳は横島の肩にポンと手を置く。

「お前のその頭を使えばできないことはないだろ？」

「……了解っす」

横島は突っ込みたいところは多々あったのだが了解した。

ウ———ウ

開始のサイレンが鳴る。

横島と辰巳は自陣のモノリスがある廃ビルから別々に飛び出し、それぞれ別の廃ビルの中に入っていく。

観客席からはこのフィールドは見えにくい。モノリス周辺の様子はあらかじめ設置しているカメラで確認できるのだが、映像を中継しているドローンが建物内をすべて撮影することはできないからだ。

戦闘が行われている現場等は可能だが、ドローンでわざわざ選手を追跡すると、その行為により、場所が他選手にバレかねないからだ。通常は上空で待機しているため、どこの廃ビルに入ったか程度は判明する。

何時もの面々が観客席から見ている。

先ほどに比べ、まだ予選なのだが観客が増えている。

「さつきより観客多くなってるね」

ほのかはあたりを見渡し誰となしに言う。

「偵察だろう。第一高校は服部先輩から横島に選手を変更しているからな。補欠だった横島のデータは、他校も持つてはいないだろう」
達也は淡々と答える。

「それだけじゃないみたいですよ。楽し気な雰囲気があります」

美月も観客を見渡して言う。確かに、偵察の人間も居るだろうが、それ以外にお気楽に試合を見て楽しもうという雰囲気の間人も多いようだ。

「まっ、横島の奴が2試合とも変な試合したからね。噂になっているみたいよ」

エリカは呆れたようなしぐさをする。

「確かに、面白い試合だったけど、相手の学校からするとたまったもんじゃないよね。何が何だかわからないうちに試合が終わっちゃうんだから」

幹比古は先ほどの横島の試合を思い出しながら言う。

「達也、俺たちもこのフィールドを体験したが、遭遇戦になる可能性が

高いよな。横島は見る限り、隠密性の高い戦闘スタイルのようだが、ここでは不利じゃないのか？」

レオは今回のフィールドに付いて、遭遇戦の横島の不利について言及する。

「確かにそうだが、横島のもう一つの魔法が役に立つかもしれない。まだ開発設計途中だったのだが、横島はそれをあえて選択した。意外と高度な術式なのだが、使いようが難しい上、何せ地味だ」

達也は同意するが、もう一つの魔法が有用だと主張する。

「お兄様、地味とは、どんな魔法なんですか？」

「条件発動型遅延術式なのだが……設置型の魔法とでもいうべきか。あいつの発想が面白くてな、ついつい一緒になって開発していたのだが、展開したい場所に術式を打ち込む……それだけでは発動しない。設定した質量を感知した場合のみ、術式が起動する魔法だ。ただ、今の段階では、起動しても、魔法師に起動したことが伝わるだけの魔法だ。さらに言うと、起動してしまうと、普通の魔法と同じく起動術式が展開されるため、引っかけた術者にもバレてしまうのが難点だ。優位性として、起動するまで、そこに魔法がある事がわからないという事だ。」

しかしながら、発動しても、術者の位置までは分からないため、この魔法に引っかければ、こちらが相手より先に位置を把握できる」

達也は深雪の質問に対して、なぜか珍しく饒舌に説明する。どうやら、この魔法に関しては、達也自身も思うところがあるようだ。

「それって新しい魔法ってこと？」

雫は達也に聞くが

「多分、それは古式魔法と同じだね。陰陽術式を刻印した場所に、誰かが踏み入ると発動するみたいなイメージだね」

幹比古は達也の説明に補足する。

「そうだ。古式魔法をベースに現代魔法の解釈で作成している」

達也は幹比古の説明に頷く。

「横島らしい魔法ね」

エリカがそう締めくくった。

観客席でまたもやクスクスと笑いが起きる。

上空から映し出された映像に奇妙なものが、こそこそと廃ビルと廃ビルの中の道路付近で動いているのだ。

そう、段ボール箱が道端をコソコソ移動しているのだ。間違いなく横島が被っているのだろう。

段ボール箱は日陰と障害物を縫う様にコソコソと移動しているのだが、時々止まり、段ボール箱に足が生え（を持ち上げ）キョロキョロと周りを見渡していた。

横島は某ゲームの様に段ボール箱を使い、隠れながら搜索しているのだろうか……。

その様はまさに珍妙と言うしかないだろう。

そして、段ボール男はこそこそと3階建て程度の小さな廃ビルの中に入ってしまった。

しかし、その様子を第四高校のアタッカーは遠くから確認していた。

一人のアタッカーに応援要請し、この小さな廃ビルを2人で囲む。

1人は廃ビルに入り、横島を搜索またはあぶり出す役目。

1人は外で待機し、横島が逃げ出したら、迎撃、横島の位置を把握したら合流して二人で襲撃する戦法だ。

この小さな廃ビルは各階広い部屋が2部屋しかない。

1Fで部屋を搜索、何も無い部屋がある。外に待機していた選手も窓ガラスが無くなった窓から中を確認。中には何も無い。誰もいないようだ。

2Fにそつとのぼる。2部屋あるうちの片方は扉があるが少し隙間が空いていた。

そこからそつと覗くと、横島が被っていた段ボール箱を発見する。

一度、その場を離れた四校の生徒は外で待機するもう一人のアタッカーと連絡を取り、扉からと窓からとで挟撃する作戦を立てる。

そして、実行……

まずは扉から勢いよく開け、広範囲に火炎系の魔法を部屋一面に放つ。

そして、扉から中へ、窓から中へ部屋に突入するが……

勢いよく窓から入ったアタッカーは窓枠に足を取られたまま、そのまま、顔から床面に落ちる。

それでノックアウト。

扉から入って来たアタッカーは仲間の倒れる様子を見るも、「ドジめ」と心で罵りながら、横島を探す。段ボール箱はさっきの攻撃で燃え盛っている。横島はどこにもいない。

しかし、段ボール箱直ぐ近くに横にロッカーがあった。

「そこか……!!」

アタッカーは叫びながら、空気弾の魔法をロッカーめがけて放つ。ロッカーは真ん中あたりでペシヤリとへこむ。その様は、中に人がいたならひとたまりもないだろうことを容易に想像させる。

「ふはははははっ!!残念!!ここだ!!」

天井から突如として声が降って来た。

気づいた時には既に遅し、接着魔法で扉から入って来たアタッカーは拘束された。

横島は文字通り天井からぶら下がっていた。自らの体を接着魔法で天井のコンクリートとくっつけていたのだ。

横島の作戦はこうだ。

搜索するのが難しいのであれば、おびき寄せればいい。

段ボール箱を被り、わざわざ建物の外を移動。遠距離攻撃的にな

らないように物陰に隠れながらだ。さらに、アピールするためにはわざわざ、段ボールを被りながら立ち、キョロキョロと周りを見渡す。そして、誰かにバレたと分かると、廃ビルへと逃げ込んで罫を仕掛ける。

横島の基本能力で自分に向けられる視線などは分かかってしまう。

このロッカーがある2階の部屋を選び、窓枠と窓周辺の床には条件発動型遅延術式と接着魔法を組み合わせた『ホイホイ魔法』（または『粘着トラップ魔法』と横島の中では読んでいる）を展開しておく。この魔法は接着魔法を条件発動させたものだ。但し、土の上などで発動はできない。ある程度質量を持った物ではないといけないため、建物内ではすこぶる有用な魔法だ。

誰かが、この魔法をかけた物の上に乗ると接着魔法が発動してくっ付いてしまうのだ。

窓からは入った四校の選手は窓枠の接着魔法に足を取られ、床に落ち自滅したのだ。

しかし、横島は知らない。普通魔法をこのようにして、二つ組み合わせるにはCADに細かな設定をしなければならぬ。または、構築自体は大幅にいじる必要性がある事を。

段ボール箱などに隠れているイメージを植え付けていたため、ロッカーなども相手からすれば隠れている場所の対象になるだろう。そちらに気を取られることを予想し、扉や窓から死角となる天井に張り付いていたのだ。

そして、扉から入って来た選手がそつちに気が向いて無防備になった所を接着魔法で拘束。

まんまと、第四高校の選手はおびき寄せられ、横島の罫にはまっただという事だ。

「ふははははっ!!大漁じゃー!!……辰巳先輩こっちは二人仕留めたっす!!」

横島は、ひとしきり高笑いした後、辰巳に連絡をした。

「横島、ナイスだ。こちらもディフェンダーを仕留めた!!」

横島は予め四校の二人がこの小さな廃ビルに集まった時点で、辰巳に連絡しており、辰巳は敵を警戒せずにモノリス搜索に全力を上げられたのだ。

ウウウウ———ウ

試合終了のサイレンが鳴る。

観客はざわめきだす。

横島の戦闘中の映像は映し出されなかったが、戦闘直後の映像は流れていた。

横島が高笑いしているそばに、戦闘不能になった二人の四校の生徒が床に転がっている。

横島はまだ、一年生、さらに無名の補欠だ。

それを、四校の上級生、しかもそこそこの名の知れた選手を手玉に取ったのだ。

何時もの面々はその映像を見てしばし沈黙をしていた。

「横島さんって、本当は強いんですかね？」

美月が最初に声を上げる。

「……そんな、はずは……」

エリカは下向き加減にそう言うが……前の映像が事実を物語っている。

「横島さんは強い」

雫は自慢そうに言う

ほのかはそれに同意して隣で頷いていた。

この後予選4戦目は行われたが、横島デیفエンダーで十文字、辰巳がアタッカーだが、横島は全く動くことなく。

十文字と辰巳で試合を終わらせた。

そして、予選四戦全勝で終わらせた。第一高校は4校による決勝トーナメントに駒を進める。

その前に昼休憩が入るのだが……

横島、モノリス・コード束の間の休みをとる!!

九校戦10日目日本戦モノリス・コード

第一高校は四戦全勝で予選通過、決勝トーナメントへと駒を進めた。

決勝トーナメントは昼休憩を挟み、午後から開始される。

予選を終えた十文字、辰巳、横島は第一高校の試合準備用に設営しているテントに戻ってくる。

「みんな、お疲れ様」

「順調だな」

真由美と摩利がテント入り口まで出迎える。

「ああ」

「まあ、当然だな」

「たはははははっ」

十文字、辰巳、横島はそれぞれ返事をする。

「それにしても、横島くん、すごいわ。上級生相手にあそこまで戦えるなんて」

真由美は横島に近づき、手放しに褒めていた。

「たまたまつすよ」

「なんともお前らしい戦いぶりだったな……よくやった」

摩利も真由美の後に続き横島を褒める。

「摩利さんに褒められるとは!!」

横島は摩利を意外そうな顔をして見る。

「私だって……褒めることぐらいあるぞ」

摩利はそういいながらも、気恥ずかしそうにする。

「失礼する」

意外な人物がここに訪れる。

十師族の長老的な存在である九島烈が部下を引き連れ、テントの入

り口に現れたのだ。

「ご無沙汰しております。九島閣下このような所にどのような御用ですか？」

真由美はいち早く気づき挨拶をし対応する。

テント内で作業をしていたスタッフは立ち上がり、畏まって一斉にお辞儀をする。

「良い、作業を続けたまえ……横島君に会いにきたのだが、彼は居るかね」

九島烈はスタッフに声を掛けてから、真由美に振り返る。

「よお、じいさん!!」

皆、緊張している中、横島はいつもの調子で返事をしながら、九島烈の前まで来る。

「横島君、先ほどの試合は実に見事であった。……昼食をと誘いに来たのだが良いかな？」

横島は、九島烈の誘いを受けていいものなのか真由美と十文字の顔を伺う。

「せっかくのお誘いなのだから、行ってらっしゃいな」

真由美は横島の意図を読み、快諾する。

「開始30分前までには戻って来い」

十文字もそう言って許可をする。

「そういうわけで、じいさん許可はもらったが、ちよつと待ってくれ、さつと着替えてくる」

横島は返事を待たずに併設している更衣室兼シャワールームに駆け込んでいった。

「宿泊所のロビーで待っておると彼に伝えてくれ」

九島烈は真由美にそう言って、第一高校のテントを後にする。

一方いつもの面々は宿泊施設のレストランで昼食を取っていたのだが……。

「さっきの試合、横島さんはどうやって相手を倒したんですかね」
美月は誰となしに質問する。

「あいつは直接の攻撃手段はないからな、どうやったかわからないが、突拍子もない方法だろうさ」

レオはそう言つて美月に答え笑つていたが、結局のところわからないというのだ。

「美月はその方法を聞いているのよ。この脳筋」

エリカはレオに呆れたように言う。

「なんだと!! だったら、お前には分かるのかよ!!」

レオは悪口を言われ、カツとなり反論する。

「それは……その……、達也君パス」

エリカも分からないため、達也に振つた。

「いや、詳細は俺にもわからないが、横島は、敵を誘き寄せ、罠に掛けたということだ」

達也にも横島がどうやって二人を倒したのか大まかにはイメージできていたが、詳細まで予想ができないでいだ。

「なんというか、戦い慣れているというか、相手の隙をうまく突くのがすごくうまいね」

幹比古は達也の説明を補足する。

「でもお兄様、横島さんに倒された第四高校のお二方は、結構名前が知られている方です。そう簡単に、隙を突けるものでしょうか?」

深雪は疑問を投げかけるが、答えが出なかった。

「横島さんは強い」

間をおいて、雫がなぜか自信満々にそう言い切る。

「横島が強いねー、イメージないわー」

エリカはため息をつきながら言う。確かに横島の普段の行動からは、強いというイメージは普通はわからないだろう。

「でも、事実、上級生を、しかもそこそこの名を知れた人を一人で二人も倒しているんですよ」

ほのかはエリカに事実を突きつける。

「予選だけで、5人も倒してる。弱いわけがない」
雫もほのかの援護射撃をする。

「手段は……そのユニークですけどね」
美月は控えめにそう言う。

「ユニークって、まあ、横島っぽい戦い方だけど、でも、なんて言うの、あんなのでよく勝てるというか……」

エリカは、どうも、横島の強さを認めたくないようだ。

「強さにもいろいろあるということだ。横島が見せたのはその一つだろう」

達也はそう結論付けた。

宿泊施設の第一高校が専有している小会議室で、真由美、摩利と十文字が昼食後に話し合いをしていた。もちろん横島についてだ。

真由美が十文字に質問をした。

「十文字君、その、横島くんはどうなの?」

「どうとほ……」

「横島くんは活躍しているのだけど、その、勝ち方があまりに突拍子過ぎて、どう評価したらよいのか……」

真由美は横島の実力はどうかと聞いていたようだ。戦い方がトリッキーすぎて、どう評価していいものか、答えが出ず質問したようだ。

「ああ、そのことで、予選を見ていた卒業生やら教師やらが、横島の戦い方に否定的でな、第一高校らしくない等と、言ってきている」

摩利は真由美の言に続いて、横島の戦いに否定的な意見が多数寄せられている事にも言及した。

「……放っておけ、そんな了見では横島に全員足元をすくわれるのが落ちだ」

十文字はため息をついた後、鋭い目つきで、真由美と摩利を見据え

る。

「どういうことだ？」

摩利は十文字の言葉に疑問を返す。

「七草、渡辺、お前たちに先ほど横島がどうやって、四校の奴等を倒したか分かるか？」

「……分からないわ」

「……想像もつかん」

真由美も摩利も先ほどの試合で横島が四校の二人を倒したかが分からなかった。

「恐らく、観客、会場の人間、誰にも分からないだろう。もしかすると倒された本人も分からない可能性もある。ただ分かっていることは、奴は、四校の連中を誘き寄せ確実にしとめたということだけだ」

十文字は真剣な顔で言う。

「十文字君は横島くんからさっきの試合について聞いていないの？」

「詳しくは聞いていないが、奴は軽口で、面倒だから、誘き寄せて罠に嵌めた。大したことなくて助かったと言っていた。四校の連中は魔法師として、そこそこの実力者だった。それを、そう言っただけだ」

「それは本当か？」

摩利は驚きの声を上げる。

「横島がそう言っただけなのは理由がある。奴が何をもって戦っているかを注目すべきだ。一試合目にしろ二試合目にしろ、観客には喜劇のように見えたようだが、奴は実に実戦的な行動をしていた。一試合目は、隠密機動により、潜伏、擬態によって、相手にまったく悟られずにモノリスを制した。二試合目は守護するモノリス周囲に罠をはり、陽動、偽報をもって撃退している。三試合目は、陽動からの罠だ、他にもあるかもしれないがな。そして、いずれも魔法をほとんど使用しないで完遂している。戦術レベルではすさまじい成果だと言ってもいい。奴は頭を使って戦っている。魔法の優劣でまったく戦っていない」

十文字は横島の試合風景を後で十分に確認し、分析したのだろう。

一騎当千を旨とし、戦場を常に意識する十文字家ならではであろう。
「……………」

「奴がもし敵であったのなら、やられていたのはこちらだったのかもしれない。戦いは魔法の優劣だけでは決しないといういい手本のような奴だ。学校の連中や今の魔法協会の連中に見せてやりたいぐらいだ。

……今まで魔法の能力ばかりに目が行っていた。今後は横島が示した戦術論、司波が表したエンジニアの重要性、これらにも力を入れるべきだな」

十文字は真由美と摩利にそう語った。

「そこまでか」

摩利は十文字が横島に対しての高評価に多少なりショックを受けている。

「そうね。何とかしないといけないわね」

真由美は横島と達也の活躍を思い出し感慨深そうに言う。

「それはそうと、十文字君、こんな話をして悪いのだけど、父や十師族のお歴々から、十師族の戦い方を示せと言われていた。一昨日の達也君が十師族の一条君を倒したのが影響しているのだと思うわ」

真由美も眉をひそめながら言っていた。

「……………くだらん。が無視するわけにもいかんか」

横島、九島烈と昼食をとって、準決勝にでる!!

九校戦10日目

本戦モノリス・コード

午後からの本戦決勝戦トーナメントが始まるのだが、現在はそれまで昼休憩となっている。

横島は九島烈に誘われ、宿泊施設のレストランと連動しているプライベートルームに招かれ二人で昼食をとっている。

「横島君、試合の半ばで、年寄りのわがままに付き合わせすまない」「じいさんにはいろいろ助けてもらったし、言いつこなした」

九島烈には、独立魔装大隊が作戦展開していたノー・ヘッド・ドラゴン壊滅作戦に横島が横やりを入れ、現場を掻つ攫つた後の始末をしていた借りがあるからだ。その後、手土産の情報提供事で貸し借りは無しにはなっている。

「君の試合を観戦し徐々に爽快な気分を味わい、こらえ性も無く訪ねたのだ。どの試合も見事であった」

「たははははははっ」

横島は気恥ずかしそうに笑う。

「三試合目の建物内の戦闘は、私の見解では、君は第四高校の選手を室内に誘い込み、窓際に居たものは罠にはめ気絶、君のそばにいたものは、偽装か何かの後、拘束ではなからうか」

九島烈は試合終了後の映像から、窓際で気絶したものが受け身や身構えもせずに気絶していた事から横島本人を確認せずに倒されたと判断。もう一人は、悔しそうな表情をしながら、拘束されていた事、そして、現場の狭い空間での出来事から、そう判断したようだ。

「おお!!じいさんいい線いってるな。大体そんな様な感じだ。誘き寄せて、罠を張って誘い込み、勘違いさせて、油断したところを拘束。一人は最初の罠に引っかかってくれたし、もう一人は勘違いを誘導したんだけど、それにも引っかかってくれたってところ。全部初手で引っかかってくれるから、楽だったかな」

横島は九島烈の見解に同意しつつも、大凡の内容について説明し

た。

「はっはっはー、そこそこの名の知れた選手だったのだが、君には物足りなかったようだ。こうでなくてはならない。そもそも、この競技戦はお互いの魔法向上の場であると同時に、実戦の場を模したものだ。特にモノリス・コードはその意味合いが強い、実戦では魔法の力よりも、相手に勝つためにどのような手段を取り勝つかの方が大事なのだ」

九島烈にとって横島の答えは満足の行くものだったようで、多少なりとも饒舌になっていた。

一息つき九島烈は横島自身について質問した。

「君は、氷室家の戦い方とはずいぶん異なるようだと思うのだが？」

「氷室家は神主や巫女が引き継ぐものだが、ここ最近には巫女が主流だからな、俺は男だし、自由気ままってな感じだ。一時期師事していた人の影響が大きいかな」

横島自身は氷室家についてはそれ程詳しくはない、適当にはぐらし答える。

一時期師事していたというのは、もちろん美神令子の事ではあるのだが……

「ほう、では君は高校と大学を卒業後は氷室家から出ることも考えているのだろうか？」

九島烈はどうやら、今回横島との昼食会はこの質問をすることが本命だったようだ。

横島が氷室家から出る事ができるのか、もし、可能なら、自分の陣営に引き込みたいのだ。

「大学？いやー実はそこまで全然考えてなかった」

「君は魔法師になるのではないのかね？」

九島烈は珍しく、狐につままれたような表情をしていた。

「うーん、そう聞かれると困るな。魔法師養成のための学校なんだけど、魔法協会と国がうるさく要請するから俺が来たみたいなものだから、ぶっちゃけ学校行くなり別にどこでもよかったし……まあ、この学校来てよかったよ、友達も出来たし、じいさんにも会えたしな」

「うむ。もし、何か入用や困ったことがあらば、私に連絡しなさい。協力は惜しまない」

九島烈は出来るならば、横島をある程度まで勧誘するつもりでいたが、横島自身何も決めていない、しかも根本的な問題で魔法師になる事すら考えていないようだった。今は変に刺激せず、繋がりが出来ただけでも良しとしようと思ったのだ。

そうして、九島烈は連絡先を横島に教えた。

「ありがとな、じいさん。昼飯もおごってもらって、そろそろ時間だから行くな」

「良い」

横島は九島烈に軽くお辞儀をして、プライベートルームを後にする。

九校戦10日目日本戦モノリス・コード決勝トーナメント

準決勝、第一高校VS第五高校

草原と森林が混在しているフィールドだ。

十文字は試合開始前に辰巳と横島に頭を下げた。

「すまないが、今回は俺一人で敵を倒す」

辰巳はやはり男気イケメンだ。十文字の肩をポンと叩き一言だけ言う。

「いいぜ、大将は十文字だ」

「ふー、また、無茶言われるかと思った」

横島はホツとした表情をしていた。

「で、どうすんだ？大将」

辰巳は作戦について十文字に聞く。

「防御陣を組む、森林が邪魔をして、お互い出方がわからないが、モノリスに固まっていれば、敵からやってくるのは必定だ。俺がモノリスから少し前で待機、辰巳と横島はモノリスの左右に控えてくれ、もし

後ろから来ても、俺の方に誘導してくれ」

十文字は、十師族の力を示すために、全員単独で撃破するつもりでいるらしい。

「了解だ」

「了解つす」

ウ————ウ

試合開始のサイレンが鳴る。

第一高校の自陣のモノリス前方50mは草原になっており開けている。当初の作戦通りモノリスから前方40m先に十文字、モノリス左右20m圏内に辰巳、横島と待機する。

しばらく、静かな時が流れる。

すると、第五高校の選手が三人一斉に林から飛び出し、十文字目がけ、空気弾、風の刃や炎球などの魔法を放つ。

十文字は身動きせずジツとし、相手の魔法の攻撃を全てを受けたのだが十文字は傷一つ付いていない。

十文字の目の前には分厚い透明な障壁が顕現し、それがすべての魔法を防御した。

十文字家が誇る、絶対防御の魔法『フアランクス』実際には何重もの防御層で成り立っているのだ。

十文字は相手の攻撃を一身に受け、相手が今の攻撃は有効ではないと判断し、次の魔法に切り替え、CADを操作する際に、フアランクスを展開したまま、猛然とタツクルをかます。

フアランクスを前面にしたタツクルを喰らった選手は、吹き飛び、

そのまま戦闘不能となる。

まるで、大型トラックに吹っ飛ばされた様だ。

そして、他の選手は魔法を次々に十文字に放つが、全てフアランクに阻まれる。十文字はじりじりと間合いを詰め、相手の魔法操作の隙を付きタツクルをかます。

そうやって、残りの2人を倒していった。

第五高校の選手は、攻撃のみに特化し、三人で一人一人撃破していく作戦だったのだろう。十文字が辰巳や横島と一人離れているの見て、最初のターゲットにしたのだろうが、相手が悪かった。十師族の一角を担う次期当主が相手なのだ。魔法の能力の差が如実に出た試合であった。

ウウウウ――ウ

試合終了のサイレンが鳴る。

圧巻な試合であった。

十文字克人は十師族の力を見せつけるという要件を見事にこなし、圧倒的な力の差を見せつけ勝利した。

「……辰巳先輩、俺たちって試合に居る意味あるんすかね？」

横島は辰巳に愚痴をこぼしていた。

「意味はあるさ、スピードを活かし翻弄されたり、モノリスの占拠を主眼とする戦闘になると、一人ではどうにもならないだろう。しかしながら、いつみても圧倒的だな」

男気イケメン辰巳は、チームの必要性を説きながらも、十文字のその圧倒的な力も認めていた。

横島、本戦モノリス・コード決勝戦開始!!

九校戦10日目日本戦モノリス・コード決勝トーナメント

決勝、第一高校VS第三高校

荒野が広がるフィールド、平坦な土地で草などが多少生えているがそれ以外何もない。お互いのモノリスが初めから遠目で見えている状態だ。

十文字は試合開始前に布陣を説明する

「見ての通り何もない平坦なフィールドになっている。立てられる作戦も少なく、お互い戦闘を行い、決着をつけるスタイルとなる事が多い。全員で自陣のモノリスの前方で待機し相手の出方をみてからでも対応可能だ。」

しかし、第三高校は速さと攻撃手段の種類に定評があるメンバーだ。翻弄されるな。横島は常に辰巳との連携を意識しろ、お前が困で辰巳がトドメを刺す形に持って行け」

辰巳は横島の肩にポンと手を置き、十文字の説明の補足をする。

「十文字だったら、一人で三人の相手をして大丈夫だ。しかし、横島、お前はガチな勝負での攻撃手段はないからな、俺と連携を取って、敵を倒しに行くぞ。基本的にはお前は自由に動いていい、俺がお前に合わせてやるから、大丈夫だ。」

辰巳はさりげなくかっこいいことを言う。やはり、男気溢れた男前である。

「う、ううう、辰巳先輩頼りになるっス!!」

横島はワザとらしく、涙を出すふりをする。

しかし、実際に心の中では涙が出る思いだった。

思い起せば、こうやって誰かに自分の為に大丈夫だと面と言われたことが無いのだ。

ウ———ウ

決勝の試合開始のサイレンが鳴る。

十文字、辰巳、横島は自陣の前方に歩いて行く。大凡相手のモノリスまでとの間の3分の1程度の距離の自陣側に待機。

第三高校の三人も同じような立ち位置まで歩んでいき、距離は離れているが、お互いが対峙する形となった。

そして……

第三高校が先に動いた。

第三高校の三人は一斉に横島達が待機している場所にかんりのスピードで一直線に向かってきた。

十文字は腕組をした状態で、辰巳と横島は十文字の斜め後ろで身構えながら前に進み、迎撃を行う様相だ。

第三高校の一人がかなり遠距離から魔法を放つ準備をする。

この距離でなんとか迎撃できるのは辰巳ぐらいである。辰巳も魔法で迎撃する準備を行っていた。

そして、第三高校の一人が魔法を放つ、しかし、放った光球は横島たちの手前に着弾するコースだ。狙いが外れたかと思った矢先、光球は弾け、あたり一帯を激しい閃光で覆いつくした。

「くっ!!」

「しまった!!」

十文字と辰巳は腕で目を防御したが間に合わず、目がくらむ。

目をくらませながらも十文字は片手で絶対防御『フアランクス』を前方に辰巳、横島の範囲まで広げ展開し、相手の攻撃に備えた。

横島はというと、サツと十文字の背中に隠れてちやつかり難を逃れ

ていた。

しかし、目を眩ました隙に攻撃を仕掛けてくると思われた第三高校の三人は、横島たちに目もくれずに、魔法で大きくジャンプし飛び越え、第一高校のモノリスに更に加速魔法でスピードを上げ向かって行く。

「奴ら全員モノリスに向かっちゃいました!!」

横島は十文字と辰巳に状況を大声で報告する。

「横島!!お前は目が大丈夫のようだな!!あいつらに追いついて何でもいい邪魔をしろ!!俺も後で追いつく、辰巳は目が戻ったら、相手のモノリスを狙え!!」

十文字は目を抑えたまま、横島と辰巳に指示を出す。

「了解っす!!」

「くそっ了解だ!!」

横島とまだ目くらましから回復していない辰巳が返事をする。

横島は返事と共に猛スピードで自陣のモノリスに向かって走り出す。

この状況を観客席で見ている。いつもの面々は

「やられたな、こりややばいんじゃないか?」

レオは誰ともなしに言う。

「ああ、完全にしてやられたが、まだ挽回できる」
達也が答える。

「横島だけは、目くらましを回避したみたいね」
エリカは珍しく真面目な顔で話している。

「横島さん、第三高校の方々を追いかけて、自陣のモノリスに向かって走ってますが、間に合いますかね」

美月は横島が自陣に向かって走り出したのを見て心配そうに言った。

「多分、間に合うよ。モノリスを開いた後、512ワードを読み取って、各人が装着している専用端末で打たないといけないから、結構あれって時間かかるし、打ち終わるまでには追いつくと思う」

幹比古は自身モノリス・コードに出ていたため、美月の問いに答えることが出来た。

「間に合ったとしても、横島には攻撃手段がないわよ、どうすんのよ？」

エリカは試合のライブ映像で走っている横島を目で追いながらそう言った。

少しの沈黙の後。

「横島さんだったら、きつとなんとかする」

雫は何時もの眠たそうな無表情ではなく、心配そうな顔で言う。

「おい、まじか…横島の奴、あいつらがモノリスに着く前に追い付いちまうぞ!!」

レオはライブ映像で走る横島と第三高校の選手との距離が徐々に縮まっていく様を見て驚きの声を上げる。

加速魔法を使い軽やかに、進んでいく第三高校の選手たちに対し、横島は土煙を上げながらドドドドドと足音をたて猛然とダツシュをかまし追いつがっていた。

その様子、無骨な横島の走りを見たエリカは

「あんな、変な加速魔法見たことないんだけど？それより、横島って加速魔法使えたっけ？たしか、CADには三つしか魔法の設定してないのよね？」

驚きと疑問が混在したような表情をしていた。

そう、横島は魔法など使っていない。あれは齊天大聖老師に修行を付けてもらう前の横島本来の走り方だ。霊力が発現していなかった時代から、幾度となく妖怪妖魔に追い掛け回され、そして、お姉ちゃんに触りたい一心で走り、さらに、チカンと間違われ（実際のぞきは何度もしたが）女性に追われ、死ぬ思いで身に付けた横島流の走りだ。（ギャグ体質の為の走りだと言ってもいいのだろう）

「……横島独自のBS魔法か古式魔法か何かだろう」

達也は言い淀みながら、フオローを入れる。

「古式魔法にあんなの在ったかな？」

幹比古は首を傾げる。

「やっぱり横島さんは凄い!!」

雫はさっきの心配顔から、明らかにうれしそうな顔になっていた。

横島、本戦モノリス・コード決勝戦中盤に!!

ドドドドドと足音を立て土煙を上げながら猛然と追いつがってくる横島に、第三高校の選手たちは、あと少しで第一高校のモノリスにたどり着くというところで気が付いた。

「もう、追いついてきたぞ!!なんだあの速さは!!」

「目くらましが効いてない奴がいたのか!!」

「ん……あいつは壇上の恥さらしの補欠じゃないか!!」

加速魔法で進みながら、後ろを振り返り、何故か笑いながら走っている横島を確認した。

「ふはははははっ!!この横島、お邪魔虫扱いはよくされるが!!邪魔をしろとは!!ふはははははっ!!超ー得意だ!!」

猛然と土煙を上げ走る横島は一通り笑った後、悪い顔になっていた。

第三高校の選手たちは

「あいつは、攻撃魔法はないが、近づくと何されるかわからない。遠距離魔法で仕留めるぞ」

「これ以上は近づかせない……お前はモノリスに行け!!」

「わかった!!」

一人は第一高校のモノリスにそのまま進み。後の二人は加速を緩め魔法攻撃を開始する。

一人は空気砲をオールレンジに横島の周囲7〜8か所から発動させ、もう一人は横島の正面に風の刃を3連続で広域に放つ。

横島は魔法が発動されると分かると、土煙を上げながらジグザグに走り、魔法が放たれた瞬間、スピードを緩めず右に大きく旋回し、全ての魔法攻撃を避け、さらに加速し大回りでモノリスに向かう。

そして、モノリスにそのまま進んだ第三高校の選手より先に、モノリスの前に到着し、彼らの侵攻を阻んだ!!

そして、片手に達也から借りた短銃型CADを構え第三高校の選手たちに啖呵を切る。

「ふはははははっ!!この横島、逃げも隠れもするが、卑怯な事に関しては誰にも負けん!!」

カッコよさげな事を言っているが、内容は最低である。女性ファンはあきらめた方がいいだろう。

「この補欠の分際で……」

「冷静に成れ、奴は極端に短い距離でしか魔法が使えない、さらに見晴らしの良いフィールドだ、罨も張っている様子もない。遠距離から一気に決めるぞ」

横島と第三高校の選手たちの距離は約30m、この状況では中遠距離攻撃がない横島の不利は否めないが、時間を稼げれば横島達の勝ちだ。十文字が目を回復させ、横島に合流するか、辰巳が目を回復させ、第三高校のモノリスを解除すればいいのだが……

ただ、その時間が問題だ。どう考えても、少なくとも3〜5分以上は一人で乗り切らないといけない。障害物も隠れる場所もないこの場所だ。

この状況を観客席で固唾を飲んで見守る。何時もの面々……

「やばいわよ!!横島!!」

「がんばって、横島さん」

エリカとほのかは声を上げていたが、他の皆は黙って見守っていた。

そして、横島が動く、

「はっはっはっーお前ら、モノリスには攻撃できんやろ!!」
そう言つて、横島はモノリス物陰にこそそと入り、盾にした。
さつきあれだけ啖呵を切ったのに、もう逃げと隠れの一手だ!!
いや、啖呵通りと言つていいのだろう。

しかし

モノリスの物陰に隠れる横島の後ろ頭上に魔法が展開され、空気砲が幾つも横島めがけて飛んできた。

「ぐぼぼあ!!」

横島はびよーんと不格好に頭から横に飛んで避ける!!

「ず…ずるいぞ!!正々堂々と勝負しろーっつて、ぐへっ!!」

そんな横島のどの面下げて言う叫びもむなしく、次々と火炎、氷結、土石、空気砲の魔法が飛んできた。

「ぐわー!!まったー!!」

横島は大げさな避け方で、ビヨーンと跳ねたり、横に頭から突っ込んで飛んだり、地面をゴロゴロと転がったりしながら土埃を舞わせながら、次から次へとくる魔法をすべて避けて行った。

そんな調子で1分が経過する。相手も焦れ出していた。

観客席も横島の涙をチョコチョコきらせながらの不格好な避け方を見て、最早、風前の灯火と思つていたのだが、戦闘が始まって一分が過ぎた頃から、ザワツキ出していた。

第三高校が放つ魔法は精度が悪い訳ではない。どちらかという優秀な部類に入る。しかも最大同時に12の魔法が横島に迫るも、それを全て避けていたのだ。

しかも、魔法を使わずに、とても効率がいいとは言えない避け方で…

学校指定の観客席では真由美や摩利、生徒会の面々や部活連の幹部がその様子を見ていた。

「……な、なんで、あれで避けれるの?」

真由美は混乱しながらも、横の摩利に聞く。

「信じられません。目の前の事実を目を疑いたくなります」

何時も冷静で表情に出さない鈴音もこの時ばかりは驚きの表情をしていた。

「なぜかわからんが、奴は避けるのがうまい。私たち風紀委員のメンバーで追いかけて回し、魔法を放つても奴を捉えきれんのだ。しかもスピードは誰も追いつけなかった。信じられないだろうが事実だ」

摩利は淡々と横島が風紀委員に入る前や、問題を起こした時の対処を思い出しながら説明するが、最後はため息を付いていた。

横島はモノリスの周りをまわる様に避けていた。必ず相手が一斉攻撃をする際にはモノリスの陰に隠れる様に移動し、さらに相手の視界を遮るように、ワザと土埃を上げていた。状況によつては土を掴んでワザと視界を遮っていたのだ。

……観客も、選手もわからないだろうが、その間も横島は、左手で持っていたCADで魔法を絶えず発動していたのだ。

当の第三高校の選手たちは、当然焦りだす。このまま一向に当たらなければ、十文字が加勢に来る。または自分たちのモノリスが辰巳に制圧されるからだ。

「おい、お前は、モノリスの制圧をしろ!!後は俺たちで、あのうぎったい補欠野郎をけん制する」

「了解だ!!」

第三高校は横島を倒してからのモノリス制圧から、横島をけん制しながらのモノリス制圧に作戦を変更する。

そして、横島が魔法をモノリスの周りで避けている真下、第三高校の一人はモノリス解除に必要な20m半径内に勢いよく入って来よ

うとした……

バタツ

「うおっ!？」

モノリスを解除しようとした選手が勢いよく躓いたが、何とか踏ん張り、四つん這いになる。

「ふははははっ!!引つかかった!!」

横島はその瞬間を狙った様に次々飛んでくる魔法を避けながら、倒れた選手に一瞬で近づき、接着魔法で四つん這いのまま体の部位の相對位置の固定を行い、動けなくした。

「やーい!!魔法を撃てるものなら撃ってみろ!!お仲間も巻き添えを喰うぞ!!」

横島は四つん這いの状態で固定された選手の前でしゃがみながら、残りの二人に大きな声で言う!!

そう、人質をとったのだ!!

観客、そして、それを見ていた何時もの面々は思う。

「どぎたねーい!!」と

横島、本戦モノリス・コード決勝戦終焉を迎える!!

横島は、モノリスを制圧しようとした選手が躓いているところをかさず接着魔法で拘束し、人質に取ったのだ。

そして、残りの選手に、魔法攻撃の停止を訴えた。

「やーい!!魔法を撃てるものなら撃つて見ろ!!お仲間も巻き添えを喰うぞ!!」

残りの第三高校の選手は口々に抗議をする。

「人質など卑怯だぞ!!」

「卑劣な、正々堂々と戦え!!」

「卑怯で、結構、メリケン粉!!人質に取られる方が悪いんじゃない!!」

横島はそう言い切った!!

殆どの観客も、その行為を見て、卑怯だと考えていた。

しかし肝心なところを皆見逃している。どうして、モノリスを制圧しようとした選手が躓いたのかを……

横島は、攻撃を避けながらCADを発動させ、接着魔法を荒地に生えているわずかな草と草を繋げ足罾（輪っかを作り足を取る罾）を作成、わずかに露出している岩にたいして、ホイホイ魔法（条件発動型の接着魔法）を仕掛けていたのだ。

派手に避けたり、土埃を立てたのはそれを偽装するためでもあった。

しばらく沈黙していた第三高校の人質に取られた選手は叫んだ!!
「俺の事はいい!!こいつを倒せ!!」

それに呼応した残った第三高校の生徒は

「くっ、分かった!!お前の骨は後で拾ってやるぞ……この悪党め覚悟しろ!!」

最早、横島は悪役となっていた。

オールレンジ攻撃魔法が横島と人質に放たれる。

「え?まってー、ほげーっ!!」

横島は寸での所で避けたが、人質はまともに喰らいノックアウト。

「お前ら!!血も涙もないのかー!!」

横島は残りの二人に叫ぶ。

「お前が言うなー!!」

オールレンジ攻撃魔法を放った第三高校の生徒は怒鳴り返し、横島に向けた魔法を放つ。

最早この駆け引きに入った段階で横島のペースに完全になつていった。

横島はそのまま猛ダッシュで、怒鳴り返した選手に迫り、魔法を回避。

相手選手は近距離用の魔法に変更しようとするが既に手遅れ、横島の接着魔法の範囲内に入っていた。まずは、腕にはめたCADと操作する手を固定、その後、左右のブーツを固定し、転ばしてから、各所接着固定し拘束する。

もう一人の選手は横島と仲間の位置が近かったこともあり、魔法攻撃をすることが出来なかった。

横島はその選手に振り返り見据えるが、ホツとした表情をし、肩を撫でおろし、戦闘態勢を解いた。

「横島、よくやった!!」

十文字克人がその選手の真後ろに居たのだ。

そして、フアランクスを展開して、タツクル。

隣れ、その選手は一番のダメージを受け空中に飛んで行った。

これで相手選手全員行動不能となる。

「ふー、遅かったつすよ!!」

横島はわざとらしく疲れたようなしぐさをして、十文字に不満を言う。

「すまなかった」

十文字は素直に横島にお詫びの言葉を言う。

「たはははははっ」

横島は照れ隠しで笑った。

ウウウウ———ウ

そして、試合終了のサイレンがなる。

第一高校の勝利、そして本戦モノリス・コードの優勝だ!!

ヒュ———、ボスン!!

「ふぎや!!」

しかし、ここで終わらないのが横島である。十文字が吹っ飛ばした選手が空中から落下し横島に直撃したのだ。

カエルが押しつぶされたように倒れ、横島は試合終了後にノックアウト!!

その様子を見て十文字は一言

「……すまん」

横島は、十文字に背負われ、途中で辰巳と合流し、観客席の下にある控室へと連れていかれる。

観客席からは他校の生徒や一般観客から横島に向け、心ないヤジが多数飛ぶ。

「卑怯者!!」

「魔法師の面汚し!!」

「とつとと帰れ!!」

観客席にいた何時もの面々は、顔を顰めていた。

「何よ!!横島はよくやったじゃない!!」

エリカは憤り、ヤジを飛ばす観客に噛みつく勢いだったが、レオが珍しく制していた。

「言わせたい奴には言わせておけ」

雫は静かに怒りをあらわにし、視線で人を殺す勢いだ。

ほのかもプリプリと怒っていた。

他のメンバーも同じ思いの様だ。

横島はヤジで気が付き、十文字の背から下り、下を向きながら十文字と辰巳に向かって謝る。

「すみません。俺ってこんな戦い方しかできないんですよ」

辰巳はそんな横島を見て、観客に向かって憤り何か噛みつきこうとしたが、十文字が腕で制す。

そして……

「観客の皆さんに問う!!我々の試合で、何か言いたいようだが!!個人に向け大勢が一斉に物を言うのはどうかと思う!!この者はルールに従って、試合を有効に進め勝利に導いたのだ!!賞賛こそされるのが道理!!何か言いたいものは十師族次期当主、十文字克人が受ける!!」

普段寡黙な十文字が大声で観客に向かいこう言い切ったのだ!!

観客は静まり返る。

そこで、パチンと指を鳴らす音があたり一帯鳴り響いた。

そして、指を鳴らしたと思われる人物に全員が注目する。

「いまの試合は、今までになく高度かつ実戦的な試合だった。観客の皆様には理解が及ばなかったのは当然な事です。少々私から説明しよう」

九島烈はマイクを受け取り、そう言ってVIP席から立ち上がり説明しだした。

あの指を鳴らし、注目を浴びるのも何らかの魔法なのだろう。

まずは、初手の第三高校の目くらましを褒め、第一高校が油断していた事を指摘した。

横島がモノリスの前で見せた回避行動は不格好だったが、モノリスや土煙を盾にし、最小の防御範囲で避けていた事を称賛。そして、その間に罠を仕掛けていた事も説明する。焦れて出てきた第三高校の生徒が罠にかかり、人質をとった下りからは……

「彼は実に実践的であり安全かつ人道的な行為を行った。もし、これが実戦であれば彼は味方が不利な状態でも、相手を殺さずに捉え、人質という交渉カードを手に入れたことになる。しかも、ルールの違反をせずにだ。実践ではこのまま、交渉に入り、お互い傷つけあわずに、休戦になる可能性もある。」

この試合、途中からは、第一高校側から見れば、自陣を防衛にいかにも援軍が来るまで持ちこたえるかの試合様相になっていた。人質はそのための時間稼ぎでもあった。彼が、相手の選手と話せば話すほど、時間が稼げる。これほど、有効な時間稼ぎはないだろう。

そして、それを実践し、実現できる能力が彼にはあったという事だ。その事が今回の大きな勝利の要因でしょう」

九島烈はそう言って締めくくり席に付いた。

その後、会場からは、パラパラと拍手が沸き上がり出し、最終的には大きな拍手と変わった。

十文字、辰巳、横島は居たたまれなくなり、そそくさと、観客席下の控室に入っていった。

「十文字先輩、助けてくれて、ありがとうございます」

「辰巳先輩も、かばってくれようとしてくれて、ありがとうございます」

横島は控室に入ると同時に、十文字、辰巳にそれぞれ、深々とお辞儀をしてお礼を言う。

その横島の右目には涙が溜まっていた。

横島は、過去、このようにして、誰かにかばってもらった経験がほとんどない。

大概は自分で解決するか、諦めてきたからだ。

「当然の事だ。試合ではお前に迷惑をかけた」

「実際よくやったよ、お前は」

十文字は表情を変えずに答え、辰巳はイケメンスマイルで横島の肩をポンと叩き答えた。

横島はこの学校に来てよかったと実感したのだった。

横島、九校戦終了、それぞれの思いに!!

本戦モノリス・コードを優勝し、第一高校は九校戦総合優勝にも輝いた。

十文字、辰巳、横島は、試合控室から、第一高校のテントに戻ると、真由美や生徒会、摩利、部活連の幹部に出迎えられ、労いの言葉をそれぞれから受ける。

横島は宿泊所の自室に戻り、シャワーを浴び、帰り支度をしていたが、何時もの面々が部屋を訪ねてきた。

「横島さん、優勝おめでとうございます」

「横島、意外とやるわね」

美月は微笑み、エリカは珍しく横島にニッコリとした笑顔に向けていた。

「横島やったな!!」

「横島が戦えるなんて知らなかったよ、おめでとう!!」

レオは横島の背中をバシバシ叩く、その横で幹比古が何故か握手を求めていた。

「横島さん、おめでとうございます」

「横島、お前らしい試合だったな」

深雪は可憐にほほ笑み、達也は相変わらずの仏頂面だった。

「横島さんだったら勝てると思ってた」

「横島さん、本当におめでとうございます」

雫とほのかは嬉しそうに挨拶をする。

「いやーっはははははっ」

横島は照れ隠しで後ろ頭を掻きながら笑う。

レオは横島の首に腕を回し若干意地悪そうな笑顔を向けていた。

「おい、お前、なかなか体が動くじゃないか？俺たちに隠していたのか？」

エリカはレオに呼応して、怒ったような態度で横島に迫る。

「そうよ、横島!! あんたなんであんなに速いのよ!!」

レオはさらに横島に顔を近づける。

「ん? 何を隠してる? …… 偶然じゃ片づけられねーよな? 何せ、あの数の魔法を無傷で避けてるんだからよ、どうなんだ?」

「あは、あはははははっ」

横島は困ったような笑いをする。

「そうだよ、リラックスして戦っていたように見えたし、ああいうのに慣れてるんじゃないか?」

幹比古もレオ達に続く。

横島は観念して、

「一応、俺も氷室家の人間だから多少はな」

「氷室家って、もしかして救済の女神の氷室ですか?」

美月は恐る恐る聞き返した。

「たはははははっ、なんかそうらしい」

一番驚いていたのは幹比古だった。

「え——————横島が、あの氷室!!」

幹比古は横島の両肩を掴んで、思いつきり揺すっていた。

「救済の女神のおおお!! 古式魔法とか秘伝とか秘術とかあるんだよね!! 今、見せてよ!!」

「ゆ…揺らすな、く… 苦しい幹比古……」

「幹比古、落ち着け、秘伝や秘術を教えられるわけないだろう」

達也は暴走しだした幹比古の背中をポンと叩き、落ち着かせる。

「ごめん、横島」

幹比古はハッと正気に戻り、横島に詫びを入れる。

「……救済の女神……」

美月は遠い目をして、顔に両手をあてがい、顔を若干上気させ、クネクネしていた。こつちも違った意味で暴走していた。

「どうやら、氷室絹の熱烈なフアンの様だ。」

「氷室家の横島さんか……」

雫は改めて、何か思うところがあるようだった。

「深雪たちは知っていたの？」

「ほのかは深雪たちがあまり驚いていないのを見て聞いた。」

「ごめんなさい。ブランチシユの日本支部を制圧しに行つたときに、生徒会長から聞かされたのだけど、機密事項らしくて、口止めされてたの」

深雪はほのかや雫を見て、そう説明した。

「機密事項なんだ!!知らなかつた!!」

横島は深雪の説明を聞いて、驚いていた。

「なんで、あんたが知らないのよ!!私も、今の今まで忘れてたわ、あんたが氷室の人間だつて事……普段のあんたからは想像できないしね」

エリカは呆れながらも、改めて横島が氷室家の人間だという事を再確認し複雑な表情をしていた。

「いや、別に皆に隠していたわけじゃないんだけど、氷室家の看板に泥を塗る様な事ばかりしていたし、言いにくかつたのは確かだな、ごめん」

横島はそう言つて、知らせていなかった。幹比古、美月に謝つた。

確かに、横島が起こす騒動は氷室家の看板というより、イメージが崩れるようなものばかりだ。

「まあ、氷室家つて言つても末端みたいなもんだから、俺。横島だし、今まで通りで、よろしく」

横島はそう言つて苦笑いをする。

「まあ、氷室つていつても、横島だもんな!!」

「横島だし!!」

「横島さんだし!!」

「うん、横島さんには変わりない!!」

レオ、エリカ、雫、ほのかが口々にそう言う。

横島が氷室という事実を新に、または、改めて受け入れてくれたよ
うだ。

しかし……

「さ……サインくだちやい、さい!!」

「教えて、いや、ちよつと見せてくれるだけでいいんだ!!古式魔法!!」
美月と幹比古は暴走したままだった。

一方、第一高校を代表する真由美、摩利、十文字の三人は小会議室
に集まっていた。

「いろいろあったけど、総合優勝できてほつとしたわ」

真由美は柔らかい表情で二人にそう言った。

「まだ病院にいる二年男子と一年の森崎達には、俺から報告しておく」
十文字は、その色々あって、病院送りになった生徒達を気遣ってい
た。

「しかし、今回いろんな意味で一番やらかしてくれたのは、奴だな」

摩利は溜息を吐きながらそう言う。もちろん横島の事を指してい
た。

「まあ、確かにね。軍に捕まってしまうなんて。でも、あれは横島くん
がすべて悪いわけではないのだけど」

真由美は横島が、初日から7日目にかけて、軍に不当に拘束された事
を言っていた。

「それと、わたしが、こうしてピンピンしていられるのも横島が回復魔
法を施してくれたおかげだしな」

摩利は横島にバトル・ボードの事故で追った重傷を回復してもらっていた。

「後は今日の試合だな、あいつのおかげで、優勝が出来たと言っても過言ではない。第三高校の先手の目つぶしを喰らったのは、俺の油断だった。あれを挽回出来たのは、横島のおかげだな、服部ではああは行くまい。あれ程のピンチの中、冷静に試合を運び、勝利に導いていた。あいつはピンチに慣れている。いや経験が豊富なのかもしれない」

十文字はいかつい顔で淡々と話す。

「横島くんが、あそこまで出来るなんて、正直言つて予想外だわ」

真由美は先ほどの試合の横島の活躍についてそう言う。

「ああ。しかし、奴の身体能力が高いのは分かっていたのだが、こう、まざまざと見せられるとな。やはり、氷室家の人間だということなのか」

摩利は風紀委員の活動中や横島を追いかけ回していた時に、たまに見せる身体能力について思い出していた。

「先ほどの試合は大方伝え聞いていたのだが、そこまでか」

十文字は先ほどの横島の活躍を直に見ていない、試合終了後に本人の報告と周りから聞いていた内容のみであった。

「ああ、第三高校の魔法師の断続的な攻撃を一人でかわしていた。避け方は不格好だったがな」

摩利は横島のかわし方を思い出しながら、苦笑する。

「あの、追い付いた時にスピードもかなり出ていたわ。その走り方は変だったのだけど……相手の攻撃を回避するのも、あのスピードも何らかの魔法なのかしら？」

真由美も横島が第三高校の選手を猛追している姿を思い出していた。

「ん、なんにしろ、横島が戦力になることが分かった。奴は戦術レベルでは高等な事をサラッとやってのける頭を持っている。度胸もいい。奴は今ある自分の状況下で最大限のパフォーマンスを常に出せるという事だ。奴自身の身体能力が多少いいのはおまけの様なものだ……下手をすると将来、奴の指揮の下で戦いに赴く日が来るかもしれ

ん」

十文字の中での横島の評価はうなぎ上りの様だ。

真由美も摩利も、多少横島の評価を変えなければならなかったが、十文字程ではなかった。

横島の評価は女性にはどうしても普段の横島の態度がマイナスに働くため、高評価を得られない。

宿泊施設のVIPルーム

九島烈と独立魔装大隊、風間少佐が対談をしていた。

「司波達也の事だが、彼は強力すぎる。私なら良いように差配できる。」

九島烈はこう切り出した。

「閣下もご存じなのでしょうが、彼は今、我々の隊に所属しており、戦略級魔法師、大黒竜也を名乗っております。彼の力は彼個人で抱え込むには責任が重すぎる。その負担を我々で共有して今に至っている次第です」

「十師族内のバランス、いや日本内部の軍事バランスを大きく揺さぶる存在だ。片方だけに力を持たせると、いざという時には、機能しなくなることもある。四葉（十師族）に力が偏りすぎている」

九島烈は達也と深雪が四葉家本家の血筋である事を知っている。四葉の現元首、四葉真夜は九島烈の弟子でもあるからだ。無論、四葉家の力も十分知っていた。

「彼は、四葉から借り受けている様なものです。私の一存ではどうにもなりません」

「うむ、なんともしがたいな……。少佐、手綱はしっかりと握っていたまえ」

九島烈は苦笑しながらそう言う。

「はっ」

「閣下、此方からも質問をよろしいでしょうか？」

今度は風間少佐から話を切り出した。

「良い」

「氷室家の横島という少年の事ですが、彼は何者ですか？」

「何者とはどういう意味かね？」

「彼の存在で我々は混乱しております。神出鬼没で行動に一貫性が全くない。しかも、知恵もかなり回るようで、我々を出し抜くほどに……」

九校戦の開会式の騒動から、軍で拘束、監視をしていたが、彼には効果がなく、いつでも出られる事、さらには、ノー・ヘッド・ドラゴン壊滅作戦でも現れ、邪魔した事だ。やはり、ここでも彼に出し抜かれていた。この事については、公には彼は関わっていない事になったが、独立魔装大隊は彼が関わっていたと今も疑っている。

そして、横島が出演している試合を見て、それがほぼ確信に変わる。「彼の何の事を言っているのかわからないが、彼は素晴らしい素質を持った少年だ」

九島烈は、風間が言っている事を理解しつつ、とぼけていた。

実際、横島から、ノー・ヘッド・ドラゴンの事の顛末を聞いていたのだ。

「閣下は、横島さんと親しげですが、お知り合いですか？」

風間少佐も、九島烈がとぼけているのを知りつつ質問を続ける。

「いや、彼とはここで会ったのが初めてだが、シンパシーとでも言うのだろうか、彼とは非常に馬が合う。今後は茶飲み友達になってもらうと思う。彼からすれば、じじいのお節介に付き合わされるだけかもしれないが」

九島烈は最後までとぼけるつもりでいるようだ。話した中身は半分は合っているのだから、信憑性は高くなる。

「そうですか」

「少佐、一応、釘をさしておく。彼は氷室家の人間である。彼には手出し無用だ。少佐の時代では実感はわからないかもしれないが、私が先日話

した通りだ。氷室には手を出すべきではない」

九島烈は40年ほど前の軍の暴走で氷室家を襲撃した時の話を、横島と風間少佐と響子に話したのだ。それを元に、横島に手を出すなど釘を刺し、警告をしたのだ。

「承知しました」

風間少佐は九島烈には了承をしたのだが、後日、達也と響子を呼び出し、横島の監視をするよう命令を出したのだった。

横島、閉会式でダンスを踊る!!

九校戦閉会式

開会式同様盛大に執り行われるのだが、閉会式では毎年恒例イベントがある。生徒同士の交流目的という名目で、クラシック音楽に合わせダンスを踊る。まさに、昔の西欧貴族のパーティーの様相をきたしている。

この機に、男子はお目当ての女子にダンスを踊ってもらえるようアピールをする。

女子も同じなのだが、男子からダンスを誘わないといけない暗黙のルールが存在するため、アピールを露骨にしなければならぬ。

横島もこの閉会式にはしぶしぶ参加している。

横島は最初は辞退するつもりだった。九島烈の演説、説明で多少理解は及んだとはいえ、卑怯者のレッテルはそうそう外れるものではない事を横島は過去の経験から知っているからだ。

しかし、真由美や摩利が、モノリスコードの優勝者なのだからちゃんと出る様にと、さらに雫、ほのかが半ば強制的に出るように促したのだ。

会場の壁際で達也と横島は並んで、閉会式パーティーの様子を眺めていた。

「達也、なんか視線が痛いんだが……」

「……当たり前だ、お前は悪い意味での注目の的だからな」

「はあ、やっぱ、来るんじゃないかった。こんなんじゃないナンパも出来んし……」

すると、第三高校の制服を着た身長差のある二人が近づいてきた。

クリムゾンプリンス一条将輝とカーディナルジョージ吉祥寺真紅郎だ。

「あつ爽やかイケメン!!」

横島がそう反応した。

そんな事を気にせず一条将輝は達也に近づき、鋭い目つきで目を合わせる

「司波……次は負けない」

「ああ、こちらもな」

達也はそれに答えた。

吉祥寺真紅郎は横島を見上げ。

「あなたが横島忠夫でいい？」

「ん？なんだちびっ子」

「し……失礼な。君には見事にやられたよ。次は事前準備を密にして、どんな状態でも対応できる作戦を立てる。次は負けないよ」

横島に対し人差し指を立てそう言った。

どうやら今日の第三高校の決勝戦。目つぶしからのモノリス強襲は吉祥寺真紅郎が立てた作戦だったらしい。

「ん？何のこと？」

「しらばつくれるつもり？まあいい、君が第一高校のブレーンだという事は分かっているから」

盛大に勘違いしている様だが吉祥寺真紅郎はそう言って、一条将輝の後ろに戻った。

そこに深雪がやってきて、

「お兄様、また、このような場所で……あちらにいらして下さい。横島さんですよ。」

達也の手を取り、会場の中頃を指した。

「司波さん」

深雪を見てさつきとは違い表情が柔らかくなる一条である。

「あら、一条さんもいらしてたんですね。お邪魔でしたか？」

「邪魔だなんて……え？お兄様って、兄妹？」

一条将輝は深雪と達也を交互に見て、困惑の声を上げる。

「そうだ。似てなくて悪かったな」

達也は一条の意図を汲みそう言った。

すると、会場にはクラシック音楽が流れだす。

会場の中央のテーブルが掃かれ、ダンスが出来る空間が作られていた。

「深雪、折角だから、一条と踊ってきたらどうだ？」

達也は深雪にそう言った。

それに驚いて反応したのは一条だった。達也の顔を確認してから

……深雪を見ていた。

一条は若干顔を赤らめていた。

「では、一条さん」

深雪はそんな一条に声を掛ける。

一条将輝は上ずった心を一度落ち着かせ、

「司波さん、僕と踊ってください」

そう言って、片膝を付き、王子様がお姫様を誘うようなしぐさをする。

自然とそのしぐさはなじんで見えた。

「まあ、一条さんたら、よろしくお願いしますね」

そう言って、一条に深雪は答え、手を取り、二人は中央のダンス広場に行く。

それを見た横島は嘆きの叫びをあげる。

「なんだあのイケメン!!爽やかに、女の子を誘って!!羨ましすぎる!!」

そして、どこからか出したかわからないが、藁人形を手にし、五寸釘で刺した!!

「なんだかとっても、ちくしょー!!イケメン死すべし!!死すべし!!」

そして、会場の柱に藁人形に刺した五寸釘をガンガンと打ち付ける

!!

遠くから深雪の声が聞こえた。

「一条さん大丈夫ですか？」

一条は胸を抑え苦しそうにするのだが、冷や汗をかきながらも笑顔で深雪に大丈夫だと言っていた。

どうやら、横島が釘を刺したのは呪いの藁人形だったようだ。しかも効果は絶大だ!!

「……おい横島、お前のそれ、どういう理屈かわからんが一条が苦しんでいるからやめておけ」

その様子を見た達也は呆れた顔をしながら、横島を止めに入る。

「お前たち何をしている?…ん?その趣味の悪い人形はなんだ?」

摩利がそんな達也と横島に声を掛けた。

一緒に真由美もいる。

「たはははははっ」

笑って誤魔化す横島。

「優勝の功労者が2人でこんな端っこで、何をしているのかしら」

真由美はいたずらっぽい笑顔で二人に言う。

そして、摩利は横島の前にスツと手を出す。

「??」

横島にはその意図が分からない。

「あら、美女二人が居るのにダンスも誘っていただけなのかしら」

真由美は首を傾げながら、微笑んでいた。

「いや俺は……」

「えっ俺っすか?ダンスなんて踊ったことないっすよ」

達也と横島はそれぞれ、拒否しようとしたのだが。

「私が教えてやる」

そう言って摩利は、横島の腕を強引に引つ張って会場に中央に連れて行く。

「え？ちよ？摩利さん？」

可愛らしく頬を膨らませ上目使いで達也の顔を見上げる真由美。

「わかりました。では、俺と踊っていただけませんか？」

達也はフウとため息を付いた後、手を前に出し真由美をダンスに誘う。

真由美は笑顔に戻り

「喜んで」

そう言った。

ダンスを誘われた横島はたどたどしいステップを踏みながら、摩利とクラシックな社交ダンスを踊る。

「ふむ、そうしていると、そんなに顔は悪くないな、まあ、達也くんや一条くんには劣るがな」

「ほっといてください。あいつらがイケメンで俺は普通っすから」

「そうか？顔はさておき、いい男だと思うぞ」

「摩利さん!!……ボクはボクはもう!!」

そういつて、ダンスをしながら摩利に飛びかかろうとする横島。

「そう言うのはいい!!」

摩利の右ストレートが横島の顔面に入る。横島の扱いは手慣れたものだ。

「ふぼっ!!……はい」

「まったく……今回はいろいろすまなかったな、そして、私を助けてくれてありがとう」

摩利は珍しく照れたような笑顔を横島に向けてた。

そして、音楽は一旦停止。

摩利は手を振って、横島から離れて行った。

「摩利さん……」

その横島の裾を後ろから誰かが引つ張っていた。

横島が後ろを振り向くと

「ずるい、私も」

雫が横島を見上げてそう言った。

「え？ダンス？」

「ここでは、それ以外有り得ない」

横島の手を取る雫。

そして再び音楽が流れ、ダンスについていくのがやつとの横島と嬉しそうに雫はダンスを踊っていく。

その後横島は、ほのか、深雪、真由美とそれ以外に、他校の知らない奇特な女子とダンスを踊っていった。

閉会式が終わった後、横島は、宴会場ホールのバックヤード裏口にいる。

宿泊施設で宴会のアルバイトをしている皆を待っているのだ。

「横島、なんでここに居るんだ？」

裏口からレオは横島に声を掛ける。

レオの次に幹比古、そして、エリカと美月が出てくる。

「いや、ちよつと待ってた。土産、パーティーからくすねてきたものだけだな」

横島はそう言って大きな風呂敷を掲げて見せる。

横島はパーティーで出された料理を大量にタッパに詰めていた

のだ。

「おお、腹減ってたところだ!!」

「横島にしては気が利くじゃない」

「ぼくもお腹がすいていたし、助かるよ」

「ありがとうございます」

「お疲れ様だ」

横島はそう言って労をねぎらう。

横島はレオ、エリカ、幹比古、美月でレオ達の部屋で、プチ宴会をこの後開いたのだった。

横島はこうやって、友と過ごせる時間を何よりも心地よく感じていた。

Side story
Side story 氷室絹その1

2045年 1月 福井県某郡氷室村

ここに約350年歴史を持つ神社の神主として、代々この土地を守って来た氷室家がある。

その13代当主、氷室絹 69歳 未婚である。

69歳と言う年齢に即せず、背筋が伸び、凜とした佇まいをしながら、顔や仕草は可愛らしい。

霊能者として卓越した能力を持っていた。

主な霊能力は、治癒能力、精神制御である。極めて高い能力を要していた。

世界中が戦争機運に染まりつつこの時代。日本国も氷室絹の能力に目を付け出頭するよう、何度も打診をしていた。

しかし、それに応えることは無かった。

そして、彼女の最後の仕事として、姉の孫を14代目後継者として、修行を日々執り行っていた。

彼女はこの頃、同じ夢を繰り返し見ていた。

ある若い男の夢である。

夢の中のその人物は顔がなく、誰なのか絹自身わからなかった。

しかし、その人物が絹を呼びかける声は彼女は心が締め付けられるような思いになり、目が覚めると涙で枕が濡れていた。

(…………おキヌちゃん)

しかし、絹はその人物が誰なのかわからなかった。

懐かしいその声色…………どこかで感じる安心感を与えてくれる声に

……

そして、肌身離さず首にかけていた和を思わせるネックレスを胸元にぎゅっと握る。

すると心はいつも落ち着いていた。

そのネックレスは不思議な色の珠が三つ通されていた。お守り代わりにずっと持っているものだが、誰にももらったのか、いつから持っているのか記憶にない。ただ、大切なものだという事は漠然と感じていた。

2045年 7月

ついに第3次世界大戦が勃発した。

日本も現在、積極的な参戦は控えていたが、国内は参戦ムードに包まれていた。

2046年 1月 氷室絹70歳

14代目の修行も佳境に入っていた。絹は漸く最後の務めが終わりが近い事にホツとする。

絹はあの夢を見る間隔が狭くなってきていた。

その夢の中で、茶色いレンガ壁のビルがよく出るようになる。

私はあそこを知っている。絹は日に日にその思いが強くなっていく。

ついに絹はあの茶色いビルで夢に出る若い男の人と過ごしたと漠然と思う様になってきた。

あのビルがどこにあるのかわからない。しかし、自然と足は東京に

向かっていた。

絹は家人にも言わず、着物姿で一人で東京に出ていた。

東京駅に着き、ふらふらとあてもなく、歩いていたのだが、いつの間にもやら、古びれたビルの前に立っていた。そこはすでに、見るからに人が住んでいる様子はない。

ツタが生え、ところどころ崩れかかっていたいるが……夢で見た。あの茶色いレンガのビルだった。

絹はそのビルを見たたん。なぜだか涙が止まらなくなっていた。

お守り代わりのネックレスを握りながら、絹はしばらく、そこにたたんずんでいた。

しかし、突如として、爆発音が鳴り響き、火の手が東京湾の方から上がっているのが、絹の位置からも見えた。

絹の靈感が伝えた。敵意が海からこの東京に向かってきているのを……

茶色いビルを後にし、大通りに出る。人々が逃げまどい。他国の軍人と思われる勢力が次々と迫っていたのだ。

そして、他国の軍人は容赦なく、逃げ惑う人々に銃声を浴びせる。その光景は、まさしく地獄絵図であった。

自分の目の前で、他国の軍人たちは、小学校低学年ぐらいの子供たちに対しても、銃を構えていた。

絹はそこに割って入り、結界を張り、子供達を含めた20人の集団を銃弾から守った。

軍人たちは、それを見て、増援を呼ぶ。

その間、絶え間なく銃弾を浴びせられていたが、絹の結界は傷一つ付いていなかった。

敵勢力の魔法師集団が増援に来て、絹に集中砲火を浴びせる。

絹の結界は削られ、徐々に威力を落としていく。しかし彼女は、気力の限り、結界の維持を最優先にし、今だ持ちこたえていた。

絹と子供たちと一般人含め20人は、この時敵兵500人に囲まれ、攻撃を受けていたのだ。

絹の霊力も尽きようとしていたが、最後まで彼女は諦めなかった。そして、結界がついに綻びる。

(おキヌちゃん!!)

絹は突如として夢で出てくるあの男の人の声が聞こえた気がした。

すると。

肌身離さずかけていたネックレスの珠が輝き、文字が浮かび上がる。

一つは 護

一つは 和

一つは 思

そして、絹を中心に直径120キロにも及ぶ現在でいる戦略級魔法が展開したのだ。

絹がもつ和の精神を持って、護る思い。そのまま、絹の能力を拡張し、展開したのだ。

目の前の敵兵は、戦意が損なわれ、座り込み動けなくなっていた。

その戦略級魔法は絹を中心に120キロ圏内の敵はすべてマイン

ドダウン。そして、住民の治癒回復促進。マインド回復。今までにな
い破格の能力が発動したのだ。

これが大国の電撃攻撃から国を守った。救済の女神として絹を一
気に有名にさせた事件だった。

絹は戦略級魔法発動と共にある記憶が頭の中に津波の様に入って
来た。

自分が昔、幽霊であった事。

あの茶色いレンガのビルで、美神令子の元で働いていた事。

そして、あの夢で絹を（おキヌちゃん）と呼ぶあの男の人を

あの優しい笑顔で絹を呼ぶ横島忠夫の事を！！

絹はそこで気を失う。

Side story 氷室絹その2

絹は気が付くと、氷室家の自室に寝ていた。

家人に、寝ている間の事を尋ねる。

絹はあれから、10日程寝ていたという事。

東京から大国の敵兵力を追い払った事。

それをなしたのは絹が放った。戦略級魔法だという事。

あの時、無我夢中だったが、急にネックレスの珠が光……

絹はそこまで思い、胸元のネックレスを見る。そこにあつたはずの不思議な珠は3つとも無かった。

絹はそして思いにふける。

あの時、自分に流れ込んだ記憶の事だ。

19歳までの記憶とは全く違うものだったのだ。

確かに、あの茶色いレンガのビルはあつた。

あの記憶が正しいのであれば、ネックレスの珠は、横島が生成した文珠だ。

あの時感じた霊気は確かに、横島の霊気だと感じた。

しかし、この記憶の齟齬はなんだと言うのだ。

絹はじっくり考えることにする。

美神令子……20世紀末から21世紀初頭に活躍した魔法師だ。

今までの記憶では、絹と美神令子に接点はない。

流れ込んだ記憶では絹と横島と言う少年は、美神令子の元で働いていた。

美神令子について、家人に調べさせたところすでに故人であつた。

海外で結婚し、かなりの資産家としても有名だったららしい。

そして、横島忠夫についても調べさせた。

しかし、そのような人物は記録にも記憶にも残っていないのだ。

横島の両親は存在していたようだが、息子はいないとの事だ。

絹の六道女学院の友人に聞いても、そのような人物は知らないとの事なのだ。

記憶の最大の齟齬は

美神、横島、絹はGSスイーパーとして、妖怪や妖魔、幽霊と戦っていたことだ。

現代に、そのような非科学的なものは存在しない。

そして、横島が多大な犠牲を払って魔神アシタロスを倒したことも、記録や記憶にも残っていない。魔神と言う存在。または、神と言う存在すらも今は想像上の物とされており、現存はしないとされている。

絹は、もしかしたら自分の頭がおかしくなったのではと思う事もあった。

しかし、文珠の輝き、そして記憶の横島は、確かに居たと感じる。

ちよつとスケベだが、あの優しさとぬくもりを感じるのだ。

あの記憶が正しければ、辛い過去を乗り越え、横島と絹は最後恋人関係であった。自分が最初でそして最後に愛した男性だと。

更に、氷室家があるこの氷室村は強力な結界で守られていた。

絹はその結界が横島の文珠の霊気と全く一緒である事を感じていた。

横島の存在は確かにある。そう確信した。

絹は……友人、知人、家人に聞いても何も答えが出ない。

ならば……あの記憶の神……小竜姫は……

そして、絹は旅に出る。

あの記憶を元に……妙神山へ

妙神山なる山は地図上に存在しない。記憶の中で、妙神山に行くには強力な結界、異界の門を通らなければならない。

大体の場所は覚えている。

山麓を彷徨う事10日、絹はわずかな靈気の揺らぎを感じた。

その揺らぎからは、わずかだが神聖な気を感じることが出来た。

昔、感じたことがある靈気だ！

絹はここが妙神山と現世をつなぐ結界、異界の門と確信する。

結界を解く術を試すが異界の門に通じる結界は反応すらしない。

現生で絹は最高峰の靈能力者であるのにもかかわらずだ。

絹はここで悲痛な思いで呼びかけた。

「小竜姫様!!きぬです!!お願いいたします!!どうか話をお聞かせ下さい!!」

しかし、返事は帰ってこない。

絹はこの場所で、三日三晩正座をし、呼びかけたのだ。

絹の体力は徐々に落ちてきていた。高位の靈能力者とも言えども絹は御年70才だ。

絹は泣き崩れる様に願う。

「小竜姫様!!横島さんがどうなったかだけでもいいのです!!お教えください!!」

そして……

絹の前の何も無い空間が、揺らぎ穴ができ、その穴が徐々に大きくなつていくのだった。

人が入れる位の大きさに穴が広がった時、人影がこちらに向かってくるのを絹は感じた。

赤い髪のおめかしい恰好をした少女が現れた。

龍の角が両耳の後ろ辺りから伸びていた。

「お久しぶりですね。おキヌさん」

その少女は絹の50年前の記憶のままであった。

絹は泣きながら、やっと会えた目的のその少女に言う。

「ありがとうございます。小竜姫様」

そして小竜姫は目を伏せて言う。

「……わたしは人間が嫌いです」

「……私は人間が嫌いです。彼を裏切った人間が嫌いです」

「小竜姫様……」

絹は知っている。戻った記憶の中で、横島に人々はひどい仕打ちを行っていたことを……。そして絹自身にも……。

「……あなたは別です。最後まであの人を信じてくれました」

「ついて来てください」

小竜姫は絹を異界の門に誘う。

異界の門に入る際、弱々しく、

「何もできなかった私をもっと嫌いです」

そう言った小竜姫の表情に影が落ちる。

絹は小竜姫の後をついて行く。異界の門を抜けると、見覚えがある風景が見えてきた。

妙神山の全貌が見えてきたのだ。正確にはその修験場なのだが。

山門の左右の扉にはそれぞれ鬼の顔が嵌まっている。彼らは生きており、この修験場の門番の役割をしていた。

「ほう、久し振りだな人間」

「小竜姫様が下界から、人を入れるのは50年ぶりか」

絹は門の鬼にそれぞれ会釈をして、小竜姫の後に続く。

小竜姫は絹に湯あみを勧め、絹は了承する。

絹はここ2週間風呂すら入っていないありさまで、巫女服も大分傷

んでいた。

湯あみの後、客間の和室に通され、食事が用意されていた。

「まずは、食事をとってください」

「あの……横島さんは……」

「後でお話します」

絹は早く聞きたいのを抑え、食事をとる。

その間二人には会話が一切なく、静寂がその空間を支配していた。

絹が食事をとり終え、一息ついたところで、小竜姫は正座のまま、深く、畳に額が付くほど、頭を下げた。

「小竜姫様、なにを……」

「申し訳ございません。私がつと、彼の事を気づいてあげればこのような事にはなりませんでした。曲がりなりにも、彼の姉弟子を名乗っておきながら、何もできませんでした」

絹は小竜姫の突然の謝罪に困惑する。ましてや彼女は力を持った本物の神である。

そして、小竜姫の態度から、横島は既に故人になってしまったのではないかと悟る。

「小竜姫様、私は何も知らないのです。できれば、横島さんの事をお教え願えませんか？」

横島が故人だとしても、絹は真実を知りたかった。

「本来、下界の者に話すことはできないのですが、貴方なら……その資格は十分あります」

小竜姫は一度目を瞑り、語りだす。

「おキヌさん。あなたは彼の文珠を使いましたね……」

「はい」

「推測ですが、それであなたの本来の記憶が呼び戻ったのだと」

「では、この記憶が真実なのですね」

「そうです」

「おキヌさん。あなたは今お幾つですか？」

「お恥ずかしながら70まで生きながらえております」

「今の下界の様子はどうか？以前と様変わりしてませんか？」

「はい、妖怪、妖魔、幽霊などが存在しません。さらに神の存在すら稀薄です」

「そうです。あなたのお知合いでも、いらっしやらない方がいるのではないですか？」

絹は小竜姫の問いに対し頷く。絹は記憶が戻ってからというもの、過去に出会った人々を家人を使って捜索したのだが、存在すら確認できなかった人たちが横島以外にもいた。

「はい、ピートさんやシロちゃんやタマモちゃんも存在のかけらも見つけられませんでした」

「この現世には、妖怪、妖魔、幽霊は存在しません。魔族、そして神す

「らも、一部を除き現れないでしょう」

「では、どこどこ？」

「分離したのです………世界を分離させたのです」

「……………」

絹は気づく、それは横島がなしたのではないかと……

絹の記憶では、横島は妖怪と人間の間を取り持ったために奔走していたのだ。

その時の横島は19歳〜20歳。それは絹と横島が恋人どうしであつた期間でもある。

「それをなしたのは、一介の人間である横島さんです」

続けて小竜姫は語る。

そして、絹は驚愕な事実を知ることになる。

横島は妖怪と人間との世界規模での戦争が避けられないことを悟り、世界各地を巡り世界分離を行う準備をしていた事。

今を生きる、人間、妖怪、妖魔、幽霊などすべて、存在をそのままにした状態での分離は不可能と思われたが、横島はアシユタロス戦で宇宙の卵に触れている。それをヒントにした……

いわば、宇宙の卵に現世をコピーし、そこに生きるものすべてを分別したのだ。

そして、宇宙意思による反動力を抑えるため、疑似世界を分ける際、スライドさせるように、ずらしていったのだと。

絹はそこで疑問に思う。

一介の人間が、あの魔神アシユタロスでさえ、なしえなかつた事が

可能なのかと。

その絹の疑問を見透かしたように小竜姫は言う。

「当時の横島さんの霊力は、私を大幅に超え、師匠である斉天大聖老師と同格でした」

絹は驚きに一時思考が止まる。

小竜姫は一息つき続きを語りだす。

横島はその際一番最初に行ったことは、横島の存在のすべての記憶、記録の消去。

近しい人間には直接文珠で行ったとの事だった。その一番最初が絹だったと……

神と魔族の介入を防ぐために、一時的に世界の時を限りなくゼロに近づけさせた。

そして、世界分離のために、疑似宇宙の卵を生成、世界を術式で覆う。その際使用した文珠は888個。それを同時にコントロールし、徐々に分離させたのだと……

そして、最後の仕上げに、世界への外部からの神や魔族による介入をできなくするために、さらに宇宙意思の反動を抑えるために、自身自身の生命、魂、存在そのものを利用し、分離した世界そのものを封印しようとしたのだ。自身を犠牲にしてまでも。

この方法は横島の存在が斉天大聖老師と同格だからこそ無し得られる。そこまでの存在だと、もはや、世の理の一部となり、完全に消し去ることができないからだ。

自らが結界となり、永遠に世界を外界から守り続ける。それが、横島が最後に取る手段だった。

そこで、絹は疑問に思う。この話の出所はどこなのだろうと、本人しか知りえない話が混ざっているからだ。

小竜姫は直に語る。

「彼は、世界分離まで、成功させました。後は、彼自らの存在を犠牲にして、最後の封印を施すはずでした。しかし、封印の最中に最高神様の介入により、止められたのです」

そして、最も絹が聞いたかった事を小竜姫は言った。

「彼は生きてます」

「!?小竜姫様!!横島さんはどこにいますか!?!」

「彼に会うことはできません」

「なぜですか!!」

語気を強くする絹

「彼は天界の咎人です。罪を償うために、囚われております……何も
ない世界、精神だけがただ覚醒している世界。そんな場所です。そこ
で罪を償っており……神すらも発狂するのではないかという
場所です」

「なぜ、横島さんが!!」

そこで小竜姫は語気を強くして言い出す。

「彼は世界を救いたかった!!地球で生きるものすべてが平等に生きる
世界にしたかった!!ただ、それだけだったのに!!……」

「しかし、彼は世界の本来ある理を歪めてしまったのです。それは天
界の規定により罪……」

「今のこの地球は横島さんの犠牲により、人間は生き延びました。妖

怪と人間が戦争を起こした場合、あの時点で人間が滅ぼされる結果になつていたでしょう。

それなのに、人間はおろかにも!!また戦争を起こし!!争い!!戦い!!傷つけあう!!……………彼がなしたことはなんだったんでしょか……………」

小竜姫はそして涙する。

「私は、彼に気付いてあげなかった。私は彼と実質3年も一緒に修行に励んだというのに」

「老師様も今もなお落ち込んでおられ、あれから外にも出られておりません」

「……………横島さんの罪は許されるのでしょうか?」

「神族、魔族共に彼の罪を軽減させるよう嘆願がありました。また、彼は功績を多数残しております。少しは短くはなりましたが……………彼の刑期は後50年」

「それでは横島さんはもう……………」

絹はその後の言葉が出なかった。絹は横島と会うことがかなわないう事。それと横島が刑期を終える前に寿命が尽きてしまう事を……………」

小竜姫は絹の意図を読み

「横島さんの肉体は当時のままです。ある意味封印と同じです。おキヌさんも体験していると思います」

絹は約350年前に生まれ、53年前に封印を解かれ、蘇った人間である。

横島の場合それだけではない。霊力の大半を失敗した封印に持っていかれたとしても、魂の力は通常の人間を大きく上回る。実際に18歳から外見は変わっていないのだから。

絹はここにきて初めて笑顔を出した。目には涙が浮かばせながら。

「そうですか……。会えないのは非常に残念でありませんが……。生きていてくれただけでも……」

「そうですね。きっと彼の事です。『あー死ぬかと思った』とか言っって飄々と出てくるかもしれないですね」

小竜姫も絹の前で初めて笑顔を見せる。

「そうかもしれませんね」

そして、彼女らは50年ぶりの再会と共にこの後、お互い好意を寄せる横島について、一晚中語ったのである。

Side story 氷室絹その4

2058年2月氷室家

絹は床に臥せていた。

自身の寿命が尽きかけていることを悟る。

絹は、小竜姫と再会してから、年1回は妙神山に足を運んでいた。

そのたびに、横島の話で盛り上がるのだ。

そして、日記をつける様になった。日記と言うより、横島に対して日々を綴ったものだ。

絹は横島との出会いを振り返る。

360年前、強大な妖怪から、この村を守るため、自ら封印の要になるため死を覚悟した事。

それからは記憶も何もなくなり、地縛霊として、300年間過ごした事。

65年前、この地で彼と奇跡的に出会った事、彼は幽霊だからと言って、蔑んだり、差別をしなかった。一人の女の子として接してくれた。

現世に人として蘇った時の事。彼はただただ、私に生きてほしいと願っていた。

魔神アシタロスとの死闘を終え、平和となったと思っていた。

しかし、彼だけが、人知れずその裏で苦しんでいた事、戦っていた事。

私の前から急に彼が居なくなつた事。それまで、彼が一人で自身と敵と戦っていた事を知らなかった。

そして、私は悪意をもつて攫われ、彼が一人戦っていた事を初めて知りショックを受けた事。

彼をおびき出すための餌にされ、酷い拷問を受け続けた事。

彼が、こんな私の為に助けに来てくれた事。

私の為に泣いてくれた事。

彼とこの地で1年間過ごした事。何にも代え難い幸せな記憶。

彼はその間でも、人と妖怪とのとりなしに奔走していた。私ははそれをただただ見ているしかできない自分の無力さを感じない事は無かった。

そして、再び彼が記憶と共にいなくなった。

それから、この地でどこか心に穴が開いたような虚無感を感じながら、過ごしていた。

2058年3月

立つこともままならず、床に臥せっている絹に來客があった。

「おキヌさん、何か彼に言伝はありますか」

「小竜姫様、わざわざ、お越しいただきまして……」

「いえ、いいのです。あなたはわたしのお友達なのですから」

「ありがとうございます」

「彼がこちらに戻ってきたら、これを渡してください」

絹は枕元に置いてあった。封筒を渡す。

「わかりました」

「寄り道せず氷室家に必ず寄る様に言ってください」

「わかりました」

「あなたに会えて、幸せだったと伝えてください」

「わかりました」

「小竜姫様、後はよろしくお願いいたします」

「良い夢を……」

この3日後に氷室絹は静かに亡くなった。

『救済の女神』その死に多くの人が嘆き悲しんだ。

2095年1月

横島は、予定より2年早く、刑期を終え肉体と共に復歸した。

最高神からは、天界にとどまるように、強く乞われていたのだが、横島は人界に戻る事を望んだ。

刑期を満了したと知った小竜姫は天界に横島を迎えに来る。

「小竜姫様、心配おかけしました」

横島は深く頭を下げた。

「本当ですよ……よく戻って来てくれました」

小竜姫は涙目で答えた。

「あれから、何年経ちましたか？」

「大凡100年です」

「……そうですか」

「取り合えず、妙神山に帰りましょう。老師様も首を長くして待っていますよ」

小竜姫は横島を伴い妙神山に戻る。

妙神山では斉天大聖老師が出迎えに門の前まで出てくれていた。

「このバカ弟子が……なぜ、わしに相談しなかった」

「師匠、すみませんでした」

横島はその場で土下座をする。

「いや、よく戻った。……力は大分落ちたようじゃな」

「封印でほとんど持ってかれましたから」

「一から鍛え直しじゃ、器の方は当時よりも大きくなっている様じゃし、鍛えがいがあるわい」

斉天大聖老師は嬉しそうに言う。

久々に再会した師弟の会話の間に小竜姫が入ってくる。

「老師、彼は疲れているはずですよ。少し休ませてやってください」

「すまなんだ。つい修行が出来ると思ったら、はしゃいでしまった」

そして、久々に師弟3人で食事を取る。

食事の後、横島は小竜姫に連れられ、妙神山の頂上までくる。

小竜姫は横島が聞きたいと思っっている事を先に話した。

「下界は貴方の思惑通り、人間社会と妖怪、霊、妖魔達と完全に分離し

別世界を形成しております。かなり安定しており、最高神様も、宇宙意思の反動は少ないだろうとおっしゃってました」

「そうですか」

「しかし、貴方の思惑から外れた予想外な事もあります。形成された世界は確認しましたが2つではなく3つです」

「……やはりそうですか」

横島はそのイレギュラーについても予想をしていたようだ。

「貴方もわかつていたのですか？」

「はい、最高神様に気付かれた事に少し焦りまして、世界を分離中に残ったかけらの様な気配を感じたのです」

「そうですね、あなたはもはや、私など手の届かない高見まで登っていったのですね」

小竜姫は伏目がちにそう言う。

「……一人よがりな事をなそうとし、結局周りに迷惑だけをかけてしまいました」

「貴方の心は優しく、温かい。それが故、苦しんだのです。……もう、いいではありませんか」

小竜姫は横島に微笑みかける。

しばし、神と人の姉弟子は、山頂から何もない地平線を並んで眺めていた。

静寂の時を終え、小竜姫は横島に話しかける。

「横島さん。おキヌさんからの伝言です」

「え？おキヌちゃんから？いや……完全に記憶をけしたはず」

「貴方の文珠を使い、記憶が戻ったのです」

小竜姫は笑顔で言う。

「いや、そんなはずは、……かなり強力な暗示までかけたのです」

横島は動揺していた。

「愛の力ですかね。少し妬けます」

「しかし」

まだ、納得いつていない横島。

『『あなたと会えて幸せでした』……と。彼女が37年前、亡くなる間際の事です』

横島の目から、涙がゆっくりと流れ落ちる。

「彼女は70歳で記憶が戻り、ここに悲壮な覚悟で尋ねてきました」
「……………」

「知っていますか？おキヌさん。この現世では、『救済の女神』なんて呼ばれているんですよ。それだけ多くの人を救ってきたのです。貴方と一緒に……………」

「おキヌちゃん……………」

「貴方の事を思い出したのはおキヌさんだけです。この現世、貴方の人間の知り合いはすでに故人でしょう」

「そうですか」

「それと、これを渡すように言われておりました」

「手紙……………ですか」

横島は小竜姫から一通の封筒を渡される。

「そして、氷室家に必ず来るようにと……………寄り道はしないようにとも言っていましたよ」

そう言っつて小竜姫は横島をここに残し先に、修験場に戻っていく。

そして横島は封を開ける。

Side story 氷室絹その5

横島は今、妙神山の山頂にある岩の上に座っている。

小竜姫から、絹の手紙が入った封筒を渡された。

表には横島忠夫様と墨で書かれた達筆だが本人の優しさがにじみ出ている字であった。

裏には、絹と名前のみ書かれていた。

横島は封筒を開け、手紙を読む

大好きな横島さんへ

貴方がこれを、読んでいるという事は、私は先にあの世に旅立っている事でしよう。

私は記憶を取り戻し、横島さんが生きているのに会えないという事を知ったあの時、私の喪失感は何とも言われぬものでした。しかし、貴方が生きていると言うだけでも、満足しなければならぬのですが、こればかりはぬぐえません。

記憶が戻ってからの毎日は貴方の事を考えなかった時はありませんでした。

幽霊の私と一緒に過ごしていただいた日々はただ単に楽しかったのです。幽霊である事に関係ないように、振舞う横島さんに、私はその頃から恋心が芽生えたのかもしれない。

そう言えば、貴方のアパートによく勝手に入って、掃除、洗濯、炊事までやってみましたね。当時は意識していませんでしたが、まるで通い妻のようだったと。

私が入り込んで、現世に戻った時は、貴方は強くなり、何時も私を守ってくれていました。知っていましたか？あの頃の私は完全に横島さんにまいてしまっていたことに……

しかし、横島さんは私に振り向いてくれることはありませんでした

た。あくまでも妹のような扱いで、当時はそれが悲しくて、泣いていたこともありました。

ルシオラさんが現れ、私は平静を装うとしましたが、私の心の中にはいつも黒いものが渦巻いていました。私が一番最初に貴方を好きになったという自負がありました。貴方に告白をできずにいたあの時の私は、今にしてみれば、全ては貴方の懐に踏み込めなかったために、ルシオラさんに先を越されたのです。

当時の私を叱りつけてやりたい思いでした。

アシユタロスとの死闘でルシオラさんを亡くし、心に傷を負った貴方に私は何もできませんでした。

私は怖かったのです。貴方はルシオラさんの事を諦めていなかった。私だけでなく、美神さんもわかっています。しかしながら、そんなあなたに何かを言って拒絶されるのが怖かったです。

あの頃から貴方は余り笑わなくなり、

そして、私たちの前から突如いなくなりました。

当時の私は後悔と自責の念で押しつぶされそうでした。

私はあの組織に捕まり、真実を知りました。貴方がアシユタロスとの闘いの後、人知れず戦っていた事を、知りませんでした。美神さんも知らなかったことだと思えます。

あの組織から、貴方の事を聞かれましたが、一切言いませんでした。数々の辛い事をされましたが、きっと貴方が助けに来てくれると信じていました。

貴方は助けに来てくれました。そして、泣きながら私を抱きしめてくれました。

その後、貴方と氷室の家で過ごすことになり、毎日が幸せでした。貴方が近くに居る。そして、私に微笑みかけてくれる。最上の喜びです。

その間も、私に隠して一人で戦っている事は、分かっていました。それでも、貴方が私の元に帰ってくる。そして、一緒に居られる。過ごした時間は短かったのかもしれませんが、私は幸せでした。心残りは私が貴方の心を助けて差し上げられなかった事です。

私は貴方が自分の命を投げ打って世界を分離し救った事を小竜姫様から聞き、心が割けるような思いがしました。貴方は世界を救いました。

しかし、貴方自身は救われてはいないので。

私自身でこの手で貴方を救って差し上げたかった。

最後に、横島さんをお願いします。

一切のしがらみが無くなったこの世界で、学校に行つて友達や恋人を作ってください。

私は、バカやって、騒ぎを起こし、少しエッチで、優しく、それでいつも笑っているあなたが大好きでした。

貴方は、アシユタロスの戦いでいろいろ失くし過ぎました。

あの時をもう一度取り戻し、自分の為の人生を楽しんでいいはずですよ。

私は貴方と過ごした時間は多くはありませんでしたが幸せでした。

次は貴方が幸せになってください。

私が唯一愛した貴方に幸せが来るように、来世から祈っております。

氷室絹

読み終わった手紙は横島の涙で濡れていた。

横島は妙神山にて、斉天大聖老師の元修行を再開する。

精神世界で、体感時間を約半年。実質は1週間程度。

元の霊力には到底及ばないが、不測の事態に対処できる程度は霊力は戻っていた。

そして、老師と小竜姫に頭を下げ、下界に下りる。

教師は、口惜しそうにしていた。横島が必ず戻ると約束をしたため、しぶしぶ了承したのだ。

横島は真つ先に氷室家の戸を叩く。

氷室家では横島なる少年が来ることを、13代目氷室絹から伝え聞いていたが、半信半疑ではあった。身なりから、名前に至るまで、伝え聞いた通りの人間が本当に現れた事に驚いていた。

15代目氷室蓮は絹の遺言に従い、横島を家族として迎える。

蓮には夫と、中学生と小学生の二人の娘がいる。14代目も隠居したとはいえ、離れて暮らしている。家人も多数いる。

横島は何不自由なく暮らすことが出来た。

横島は、絹の手紙通り、高校に通う事を決心する。

蓮も遺言に従い、横島が高校に通えるよう手配を進めていた。

この頃、日本はここ数年、他国からの、侵略行為を受けたり、小競り合いが絶えない状態であった。

氷室家にも、再三要請が来る。

しかし、国は強硬手段を取ろうとはしない、絹が存命の際、強硬手段を取り、一個大隊を送り込んだのだが、結界に阻まれ、さらに、絹の術で全員捉えられ、正座で延々と説教をされた苦い経験がある。その当時説教された人物の中で、今は軍の中枢を担っている者が何人も残っている。

要請も、蓮の娘を国立魔法大学付属学校に通わせるようにと緩やかなものである。

横島にとつて、学校はどこでもよかったため、代わりに行くことを蓮に伝える。

蓮は横島に頭を下げる。

そして、横島は国立魔法大学付属第一高校に入学することになった。

「どうするかな、前の俺はどんなだったんだっけな？」

横島は実質、現在20歳。容姿は18歳のままだが、精神だけを言

えば、120歳はとうに超えている。

18歳未満の横島と言えば、とんでもない性格の横島だ。

今の横島は、誰が接しても、好青年然とした人物だ。それだけ苦勞してきたのだろう。

絹の遺言を守るため、18歳未満の時の自分を再現しようとしていた。

横島は思い起こす。

「うわっ、こんなだっけ？酷いな。おキヌちゃんはこの時の俺のどこが良かったんだろう？」

頭の中の記憶を術でそのまま、読み起こし、脳内で再生させていた。「おキヌちゃん……俺はやり直せるかな……にしても昔の俺は酷いな。これはないよな、しかし」

横島は葛藤するが、17歳前後の精神状態になる自己暗示をかける様にする。発動条件は、氷室村の結界の外及び妙神山以外の場所。そして何れは自己暗示無しでも、横島は青春を取り戻せるのだろうか？

そして……横島は東京に出る。

(……横島さん頑張って……)

横島夏休み編＋SIDE STORY

横島、妙神山にひさびさに帰る!!

今は第一高校は夏休みの真っ最中である。

横島は九校戦が終わってすぐ、5か月ぶりに妙神山に戻る。

険しい山々の奥、妙神山への異界の門がある結界の前。

「開門」

横島がそう唱えると、何も無い空間から徐々に人が入れる程度のトンネルが現れる。

横島は異界の門であるトンネルに入ると、現世では異界の門が閉じられる。

それと同時に横島が自身に掛けた暗示や封印が解けていく。

「ふう」

横島は体が軽くなるのを感じつつ、自分の状態を確認するかのよう
に体を動かす。

しばらく歩き、妙神山、修験場の山門にたどり着くが……

「横島ーーーー!!」

「横島殿ーーーー!!」

妙神山修験場の守護する門番の鬼、右の鬼門と左の鬼門であるが、
彼らは横島を確認すると何故か涙を飛ばしていた。

「遅いぞ!!」

「よく戻られた!!これで助かった!!」

彼らは涙を流し、横島の戻りを歓迎している様だが、何故かボロボ
ロであった。

「ただいま、鬼門。なんで2人してボロボロなんだ?」

横島は妙神山と氷室村に居る間は以前の好青年に戻る。

「お主が帰ってこないからだ!!」

「その通りですぞ!!」

「ん？話が見えないんだが？」

そう言つて、あたりを見渡すと、修験場自体もところどころ、壊れていたりと、全体的に破壊の痕が目立っていた。

「まさか、何者かの襲撃でもあったのか？」

横島は身構えるが、そのような殺気や邪気は感じられない。

「違う。小竜姫様だ!!」

門鬼たちはハモる。

「…………お前たち、もしかして、小竜姫様の逆鱗にふれたんじや？」

横島が言う逆鱗とは、小竜姫の背中にある人形態でもわずかに残る鱗の部分である。

そこを他人に触れられると、龍と化し、暴れだすのだ。

「恐れ多くてそんなことできるか!!」

「そうだ!!横島殿じゃあるまいし!!」

昔、小竜姫と会ったばかりの横島は間接的にだが、逆鱗に触れ、この修験場を破壊するまで暴れさせたことがあるのだ。可愛らしい見た目と相反し、彼女は怒らせてはいけないのだ。

「じゃあ、何があつたんだ？」

鬼門たちは代わる代わる語りだした。

「小竜姫様はお主がここを出て行ってから、しばらくはいつも通りだったのだが、1ヶ月ぐらいたった4月の後半位から、元気がなくなられてな、ぼーっとしておられることが多くなったのだ」

「われわれも心配はしていたのだが、どうすることも出来ん」

「そんな時に、ヒヤクメ様が訪ねてこられたのだ」

「ヒヤクメ様は元氣のない小竜姫様を見かね、ある霊具をお渡しになられたのだ」

「千里眼のイヤリングを……」

「それで、横島の私生活を確認できるとヒヤクメ様が言っていた。今の妙神山は完全に現世と分離しているため、小竜姫様の霊力やここに

ある霊具では現世の状況は確認できなかつたのだ」

横島は話の途中だが疑問を口にする。

「ヒヤクメ様も余計な事を……結局、小竜姫様は千里眼のイヤリングで俺の私生活を見ておられたのだな？それと、この修験場の破壊とどう関係があるんだ？」

横島は昔はヒヤクメ様もため口で呼び捨てをしていたのだが、現在は敬意をもって接している。

「その、横島殿の私生活を最初の頃はそれは嬉しそうに見ておられたのだが、何故か急にお怒りになられたりするようになられた」

「終いには、『無礼千万!!あの赤髪の小娘を滅してまいります』『かの学校には私自ら天罰を下してまいります』『年上だからとて限度がある!!かのおなご共に天の報いをうけさせてやります』『誰を嘲笑したのか!!神をも恐れぬ愚か者共に天罰を!!』などと言って、下界に物凄い剣幕で、行かれようとしたのを、毎度我らと老師様で何とか思い留めてもらうのだが、その時の余波でこのありさまだ」

「最近では『なんと惨い、拘束するなど……もはや、現世も終わりです。我が業火を持って彼の地を灰にしてまいります!!』と息巻いておられたのをやつとの思いで我らで止めたところであったのです」

鬼門たちは最後は、疲れ切った様相で語っていた。

「……………」

横島はそれを聞いて血の気が引いて行くのを自分で感じていた。

彼らや斉天大聖老師が小竜姫を止めていなかったら、第一高校がある東京八王子、さらに九校戦の会場である富士山麓は灰になっていただろうことは容易に想像が出来るからだ。

「…………お前たち、本当に苦労したんだな…………すまなかつた」

横島は鬼門たちにそうして頭を下げるのだった。

横島、妙神山にひさびさに帰る!!その2 (プレッシャー)

横島は山門の鬼門達から話を聞いた後、修験場に併設している母屋に、玄関を恐る恐る開け入っていく。

「た……ただいま戻りました」

「あら、横島さんお早いお戻りですね」

奥から小竜姫がニッコリとした笑顔で出迎えにきてくれたのだが、何故かその笑顔が怖い。

「ご、ご無沙汰しております小竜姫様」

横島はびくびくしながら挨拶をする。

「お茶を用意しますので、お上がりになって、居間で待っていてください」

そう言つて小竜姫はニッコリとした笑顔のまま、奥に戻つていった。

横島は笑顔のプレッシャーを感じながら、和室となっている居間へ上がり、正座をして小竜姫を待つ。

小竜姫はお茶が入った湯呑を運び、居間のちやぶ台の上に乗せ、横島の前にだし、対面に座つた。

「はい、どうぞお上がりください」

横島は、湯呑を取るが、その手は震えていた。

小竜姫のプレッシャーにより極度な緊張状態に陥り、喉も乾いていたため、お茶を取るが、手の震えも起していた。

「い、頂きます」

「ぶふおっーゴホゴホゴホッ」

横島はお茶を拭きこぼし、せき込んだ。

お茶がやたらと濃く、渋すぎたのだ。

それを見た小竜姫はニッコリとしながら言う。

「あらあら、どうしたのですか?」

「……たはっ、たははははっ、いや、急いで飲んだんで、せき込んじやいました」

横島は思う。このままではまずい、打開策はないのかと!!

「いけませんね。慌てて飲むからですよ」

その間も笑顔を絶やさない小竜姫。

「しよ、小竜姫様、お土産を持って参りました」

横島は持つてきていたリュックサックの中からゴソゴソと綺麗に包装された小箱を小竜姫の前に出す。

「あらまあ、ありがとうございます。てっきり私の事なんか忘れて、下界の女性と仲良くしているのだと思っていました」

「そ…そんな事は在りません。たはははははっ」

横島は小竜姫のプレッシャーで胃に穴が空く思いがしていた。

「開けてもいいですか」

「ど、どうぞ」

小竜姫は少し機嫌が直ったのか、プレッシャーが若干和らいだ。

小箱を開けると、白い花が三輪あしらった質素だが美しい髪飾りが入っていた。

「まあ、素敵です!!似合いますか!!」

小竜姫はそう言うのと右耳の前、龍の角の前辺りに、飾り付ける。

小竜姫からでるプレッシャーは完全に収まり、嬉しそうに横島に髪飾りを見せる様に、首を傾げる。

横島はその様子にホッとす。

深雪が付けている髪飾りを参考に小竜姫に選んで買っておいただ。

実際に良く似合っている。

「小竜姫様の赤い髪によくお似合いですよ」

「……赤い髪……」

横島の赤い髪という言葉にピクツとし、小竜姫から再び圧力が生ま

れる。

横島は冷や汗をかきながら

「しよ、小竜姫様、厠に行つて参ります」

そう言つて居間から逃げるように出て行く。

「ふー、小竜姫様、何かよくわからんが、相当お怒りだな。どうしたものか」

横島は厠で小用を済ませ、独り言ちる。

すると、廊下の物置の中からガタガタと音がする。

横島は、物置を恐る恐る開けると、どうやら大きな樽の中で音がしている様だ。

樽を開けると

「わしゃくもう飲めんぞく、ヒック、あれ？横島？ヒック」

べろんべろんに酔いつぶれた斉天大聖老師が樽の中に入っていたのだ!!

「し、師匠!」

横島は慌てて樽から老師を抱き起し、廊下に下ろしたのだが。

「あらあら、老師、こんなところで寝ては風邪をひきますよ?」

小竜姫がいつの間にか後ろにいた。

「もー、飲めんぞく小竜姫くヒック」

「布団でちゃんと寝て下さいね」

小竜姫はそんな老師を布団でぐるぐる巻きにして、再び物置に放り込んだのだ。

お分かりであろうが、小竜姫が斉天大聖老師を酔わせて、拘束し、物置に放り込んでいたのだ。

小竜姫は横島に振り向きニッコリ。

「さあ、横島さん早く戻りましょう」

「たははははっ」

顔面いっぱい冷や汗を掻き、横島は思う。

俺、生きて学校に戻れるのだろうか?

横島、妙神山にひさびさに帰る!!その3（静まる）

修験場に併設している母屋の居間でちやぶ台を挟んで、横島と小竜姫は正座をしている。

今は小竜姫の時々お茶をすする音だけがこの空間を支配している。

横島はその小竜姫の無言のプレッシャーで既にノックアウト寸前まで精神がすり減っていた。

そして……

「横島さん、いいですか」

小竜姫はそう言うのと、目の前のちやぶ台を横に避ける。

「は、はい！」

横島の返事は上ずる。

「横島さんは下界に何をしに行かれたのですか」

「が、学校に通うためです！」

「それは、わかっております！」

「はい！」

「失礼だと思っていたのですが、あなたの事が気になり、見ておりました」

小竜姫はヒヤクメから借りた、千里眼のイヤリングで横島の私生活を見ていた事を言う。

「いやー、お、お恥ずかしい」

「しかし、何なのですか？」

「あの、何か問題でも……」

小竜姫はスツと立ち上がり、キツとした目で横島を見下げる。

「問題だらけではありませんか!!」

「はい！」

小竜姫は再び正座に座りなおす。

「あなたは仮にも、英雄なんですよ。しかも今では神の一員にもなるうかという立場なのです!!それを自覚してください!!」

「すみませんでした!!」

横島は見事な土下座をする。

「分かっているのですか？わたしはあなたを下界に下りるのを断腸の思いをして!!許可したのは!!殴る蹴るの暴行を受けたり、悪逆な罵りを受けたり、酷い扱いを受けたりする為ではありません!!」

「はい!!」

「本当にわかっているのですか？」

「はい!!」

「これでは、先に逝ってしまったおキヌさんは浮かばれません!!」

「はい!!すみませんでした!!」

横島には謝りの一手しかなかった。

小竜姫は謝り続ける横島を見て、溜息を付きボソっ小さな声で言う。

「……私の気持ちもわからないで……」

そして、一呼吸おいて声を大にして言う。

「やはり、行かせるべきではありませんでしたね!!あのような人間達の所へ!!確かにあなたは自己暗示で、以前のあなたに戻っているように見えますが、邪気や邪念は全く感じません。私は見ていました。貴方が、突拍子もないことをしている裏には、優しさや、さりげないフォローをする為だったという事を、仲間思いで優しいあなたのままです。なのに!!あの人間どもは!!」

怒りのボルテージがどんどん上がって行くようであった。

小竜姫は何かを思い出したかのように

「やはり、貴方の為にも、あの者どもを滅する必要があるようですね」
そう言つて立ち上がり、帯剣している剣を抜き、キラッと輝かせていた。

「しよ、小竜姫様あ!?何を!!」

横島は慌てて、小竜姫の剣を抜いた手を取り、止めに入った。

「ええい、離しなさい!!私の大切な弟子(あなた)が、あのような悪辣なもの共に汚染されようとしているのです!!そのような事は看過できません!!」

「小竜姫様!!」

横島は小竜姫を止めるため、手を掴みながら、後ろから抱きしめる。
「な……な……」

小竜姫は横島のその行為でボンと顔を真っ赤にし、剣を落とし、横島に抱き着かれたまま力なく立ち尽くす。

「小竜姫!!そこまでじゃ!!」

布団です巻きにされてたはずの斉天大聖老師が現れ、小竜姫に一喝したのだ。

小竜姫は慌てて、横島の手を振りほどき、居住まいをただし、老師に言う。

「しかし老師!」

「もういいだろう。小竜姫、お前もわかっておろう」

老師は小竜姫にそう言って諫める。

続けて横島に愛おしそうな目をして語り掛ける。

「横島よ、察してくれ、小竜姫もわしも寂しいのじゃ、本当はお前を下界に行かせたくないのじゃ、100年も待った小竜姫やわしらの事も考えてくれんかのお」

横島は片膝をついて

「……申し訳ございませんでした。わがままを聞いていただき、下界に下ろしていただいたのに、長い間音沙汰もなく」

「これからは、毎週とはいきませんが、月に1〜2回は戻り、奉公させていただけますので、どうかお許しください」

横島は自分の考えの無さで、このような事態に陥ったことを反省しつつ、自分の事をこんなにも思ってくれている二人に心の中で感謝をする。

「うむ……よかったな小竜姫よ」

老師は横島を見て、頷き。小竜姫を見やった。

「老師……、お茶を入れなおしてきます」

小竜姫は顔を赤くして頷きながら、居間を後にした。

横島はちやぶ台を元の位置に戻し、老師と横島は対面で座る。

「ところで横島よ、今後の予定はどんな感じじゃ？」

「一週間は、此方にご厄介になろうと、できれば、一週間全部とはいきませんが、少し修行を付けていただければ、その間、この建物修復もいたしますので」

「ふむ、精神世界での修行と、そうじゃな、久々にわしと本気で一本せんか？」

「……い、いや、そこまで回復していませんよ。それはまたのお預けにしていただけませんか？」

「ふむ、そうじゃのう、残念だが、お主が元の力が戻るまで待つとするか、さすれば、何本も勝負ができるからの……楽しみは後で取っておくかの」

老師は残念そうな顔をする。老師はこの千五百年の間で、本気力を振るったのは、100年前の横島との修行の時だけであった。

小竜姫が戻り、ちやぶ台にお茶をだし、横島と老師の間に座る、今はすっかり何時もの柔和な小竜姫に戻っていた。

「横島さん、今、学校は夏休みなのですよね。どのくらいいられるのですか？その他のご予定は？」

「こちらには一週間、氷室家にも行かないといけないので、あちらにも一週間、学校の友人に海へ誘われているので、そちらに3日予定しています」

横島は雫から、海の別荘に招待されていた。ほぼ強制的に……有無も言わずに。

小竜姫から、再び圧力が生まれる。

「……そう、ご友人と海に行かれるんですか？女の方ですかね……へろさぞ楽しいのでしょうかね」

「いや、あの、女の子もきますが、同学年の……」

横島はそのプレッシャーに慌てふためく。

横島、相談に乗ってもらおう!!

横島は齊天大聖老師と精神加速世界で2ヶ月間、現実換算で約3日。主には魂の力を高める修練と靈力の強化の修行を行った。

肉体的な修練は横島は人知れず日常生活で行っているが、久々に小竜姫と劍の手合せ及び型合わせを行っている。横島は、自らの体術と劍術の型を確かめる様に次々と技を放ち、小竜姫もそれに合わせ、劍技で相殺して行く。傍から見ると、街が一つ廃墟になる勢いで戦いが繰り広げられているように見える。体術の切れ、劍技一振り一振りが鋭く凄まじい威力なのだが本人たちは、演武の様な感覚で行っている。

次の手を阿吽の呼吸で、お互い読み切り対処しているのだ。

「靈力も大分戻って来たようですね。技の切れはやはり、流石です」

「いえ、小竜姫様こそ、100年前に比べ、鋭さが増している感じですよ」

「弟子に、抜かれっぱなしというのも、癪ですからね」

小竜姫は微笑みながらそう言うって修練を終了し、深く息を吐いた後、お互い礼をする。

劍技では小竜姫がまだ上に行くが、総合力では横島が圧倒的に有利となる。

技の数だけでなく、横島には数々の陰陽術を駆使して戦う事が出来るからだ。

ちなみに、全盛期の横島は靈力や魂の力が齊天大聖老師と同格まで上り詰め、小竜姫の手の届かない存在とまでなっていた。

「お昼にしましょう、何か食べたいものはありますか?」

「俺も手伝います」

傍から見れば、仲の良い姉弟に見えるのかもしれない光景だ。

昼食を済ませ、老師、小竜姫、横島はちゃぶ台を囲み、お茶をすすつ

ている。

横島は急に真剣な顔をして、話を切り出した。

「実は、お二人に聞いて頂きたい事がありました」

「なんじゃ？」

「俺が今通っている、高校は魔法……いや、霊能力を科学体系化し、活用する学校なのです。下界では、霊能力者という呼び名は捨て、今は魔法師と呼ばれています」

横島はそう語りだし、現在の世界情勢や、魔法師の役割などを説明する。

「お主の話を聞くと、魔法師とは戦闘、戦争に特化した霊能力者のように聞こえるが……」

「はい、その印象は拭えませんが」

「お主が望んだような世界にはなかなかたどり着けん……、そして、攻撃対象が妖怪妖魔から、同族になったわけか」

「元々、戦争は昔からありましたから、そこまでは思っておりませんが」

「まあ、お主からすれば、複雑な気分であろう。人間は有史以来戦いの歴史でもある。形が変わろうとも、争いは収まらんだろうな」

老師はしみじみとそう言った。

小竜姫は口を挟まず、それに同意するかのように頷く。

「こちらが本題なのですが」

横島は少し話づらそうにする。

「俺が通っている高校が、この短期間で、2度も争いに巻き込まれました。今までこのような事は無かったらしいのです」

「ほう」

老師は相づちをうつ

「俺があそこにいる事で、戦いの渦を呼び込んでしまったのかと……、それは無理矢理世界を作り替えた俺への宇宙意思の反動ではないかと……」

横島は話ながら、声のトーンが低くなり、最後には俯き加減になっ

ていた。

「あなたの所為ではないです!!」

間髪入れず小竜姫はそう力強く言った。

「ふむ、お主がそう考えても無理もないが、最高指導者が宇宙意思の反発はほぼないと言っておる。あつたとしても、数万年単位での長いスパンで緩やかなものだろうと。それ程、この世界は安定しているのじゃ。主も霊力を抑えて下界に下りておる。問題ないはずじゃ」

老師は、ゆつくりとした口調で諭すように横島に話した。

「そうですね、ならいいのですが」

横島は、それを聞いて少しは安心したのか、声のトーンは戻っていた。しかし、疑念は拭えないでいる様だ。

「まだ、お主が下界に下りて、半年じゃ。こう言う事は、世界中で起こっているかもしれないし、何かの予兆でそのような事が起こっているやもしれん。何でも自分のせいにするのはお主の悪い癖じゃ、お主はどんと構えておれば良い、もしそうじゃったら、此方に帰ってくれば良いだけの話じゃ」

老師の言葉は暖かい。

「そうですね。下界に居る必要はないのですから、あなたは、ここにいつでも帰ってくればいいのです」

小竜姫は横島には帰ってきてほしいという思いが強い様だ。

「……ありがとうございます」

暖かい二人の言葉に横島は涙が出る思いであった。

しばらくの沈黙の後、横島はさつきとは打って変わって、明るい声で言う。

「そう言えば、師匠にお土産をお渡しするのを忘れてました」

そう言って、居間を後にし、与えられた自室に、老師のお土産を取りに行った。

横島がここに帰ってきたとたんに小竜姫の騒動に巻き込まれ、渡すタイミングを逸し、そのまま、日にちが過ぎてしまった様だ。

「師匠、お土産です。開けてみてください」

老師は箱を開け、それを取り出す。

「何じゃこれは、変わったサングラスじゃの?」

「いえ、師匠の好きなゲーム機です」

横島が持ってきたのは、今巷ではやっている。フルダイブ型のゲーム機だ。

脊髄から脳のパルス信号を交換することで、ゲームの中に入ったかのような体験ができる代物だ。

「ほう!!これがゲームとな!!どうやってやるんじゃ?」

老師はゲームと聞き、目をキラキラさせている。

この老師、ゲームには目が無い、放っておくと、三日三晩サルの様にゲームをし続けるのだ。まあ、實際猿神なのだが。

「これをサングラスと同じようにかけると、ゲームの中に入ったようになるんです」

「真か!!ではさつそく……ん?本体をコンセントに……これは何処に挿すんじゃ?」

サングラス状の端末は本体と無線通信でつながっているため、煩わしいコードなどないのだが、本体は……

老師がコンセントの他に通信コードを触っているのを見て

「……しまった!!師匠すみません。ここってネット環境無いですよ
ね」

「ネットとはなんじゃ?」

「ですよー、すみません。それネットがつかないと動かない
です」

横島は、やってしまったというような顔をして、老師に謝る。

ネットの存在自体無い世界なのだ。電気は辛うじて自家発電がある
様なのだが……

「小竜姫!!ネットとやらは無いのか?」

「ねつとですか?横島さんねつとって何ですか?」

横島は、ネット環境の事やら、情報化社会の話しやらを二人に説明

する。

「ほう、そのような面白きことになっておるのか、便利な世の中よの……ふむ、霊能力など、もはや必要ないのかもしれないの」

老師は文明の発展と共に霊力の存在が希薄になって行く様を感じ、しみじみと言う。

「そのネットやらがつかねければ、いつでも、横島さんと顔を見て連絡がつけられるのですね」

小竜姫は、ネット社会についてよりも、その利便性について気づいたようである。

「すみません。今度来る時までには、何らかの対策を考えてきます」

横島は陰陽術式を駆使して何とかできないものか、頭を回していたが、直ぐには思いつかなかった為、来月までにじっくり考えることにした。

「頼んだぞ!!横島」

「横島さん、是非に!!」

老師はゲームがしたいがため、小竜姫は横島といつでも連絡を付けたいがために、ネット環境の導入に積極的なようだ。

下手にこの神々にIT革命をもたらすと、とんでもない事になる可能性があることに、この時の横島は気づかないでいた。

横島はこの後は、陰陽術や分身の術を駆使し、修験場の修復、残りの一日はゆっくりと体を休め老師と小竜姫にしばしの別れに惜しまれながら、下界へと戻っていった。

横島、氷室家に帰省する!!

横島は妙神山を後にし、直接、電車とバスを乗り継いで氷室家本家のある氷室村を目指した。

氷室村は山間の村ではあるが、比較的大きな湖が真ん中にあり、その周囲に集落を形成している。

主な産業は農業と林業その加工業である、その他に人骨温泉というマイナーだが天然温泉があるのみ。産業としては発展しにくいものの多分に氷室家の恩恵を受けているため、村自体は質素な田舎の村だが財政は大いに潤っており、インフラ設備は整っている。村を周回する無料バスなども回っている。

氷室家は村の4分の1の土地を擁し、湖の畔にある氷室神社から山を4つと開けた盆地を擁している。

観光地の一つとして、湖の畔にある氷室神社（通称下氷室神社）は参拝客が見られる。しかし、本来の氷室神社は山の中腹付近に建っており、通称として奥氷室神社と言われている。こちらは氷室家の人間しか立ち入ることが出来ない。

横島は湖畔の下氷室神社と奥氷室神社の丁度中間にある蓮が住んでいる母屋に向かってバスを降り向かって歩きたどり着く。横島は下界に下りてから、高校に入るまでこの地で2ヶ月過ごしたのだ。

氷室家の敷地は湖側では、塀が設けられており、門を通って入らなければならぬ。門番が数人滞在しており、敷地警護をしている。横島は既に家人として認められているため、顔パスなのだ。

「ただいま、戻りました」

横島は玄関をガラリと開ける。

「あれ、お兄ちゃん？帰って来たんだ!!お父さん!!横島のお兄ちゃんだよ!!」

氷室家現当主、氷室蓮の次女、彩芽がアイスを片手に奥から出てきた。

現在地元の小学校に通う6年生12歳。ショートカットの元気いっぱい少女だ。

「彩芽ちゃんは相変わらず元気だね」

横島がそう言うと、ニヒヒという笑顔で返してきた。

彩芽の声に、続いて、片手に扇子を持ち、眼鏡をかけた知的なイケメンが出てくる。

蓮の夫で、氷室敦信。年は蓮の一つ上現在37歳だ。元々は東京出身なのだが、恋愛の末、婿養子となり氷室家に上がったのだ。ペンネーム速見信彦の名で歴史小説家として著名人である。

ちなみに霊能力はない。

その風貌と相まった落ち着いた渋い声色で、横島に家に上がるように促す。

「横島くん、お帰り、さあ上がりなさい。部屋はそのままにしているよ」

「ただいま、敦信さん。これお土産です。ところで蓮さんは？」

「彼女は今奥院（奥氷室神社）に行っているよ。夕方には戻ってくるはずだ」

「でしたら、まずは13代目の墓参りに行って、その足で奥院に行きま

す。14代目にも挨拶したいので、早速行ってきます」

横島はそう言つて、そのまま奥院へ登って行く事にした。
14代目氷室恭子は蓮の実の母だ。現在は隠居して奥院の母屋に夫ともに住んでいる。

氷室恭子は、最初っから当主になるべく修行をした人間ではない。普通に高校に通っており、17歳まで霊能力の修行をしたことが無かった。絹が一族の中で霊能力が高く、適正だと思われた彼女に修行を付け、当主にしたのだ。そのためだろうか、他の一族の巫女さんと違い随分とあか抜けている。

「あたしも行くー！！」

彩芽は横島について行くこうとするのだが。

敦信がそれを止める。

「彩芽、あそこは危ないから、また今度にしなさい」

「大丈夫だよ!!あたしだって修行してるんだからそれぐらい……」

「宿題は済ませたのだろうね?」

敦信は眼鏡を一瞬光らせ、彩芽にそう言った。

「ギクツ、いやー、アレ!?ちよつとお腹がいたくなっちゃった」

そう言つて彩芽はしずしずと自室に戻ろうとする。

「ごめんね。彩芽ちゃん今度一緒に行こう」

横島は自室に戻ろうとする彩芽に声を掛けた。

彩芽は振り向かず手をスツと上にあげる。了解の意味だろう。

横島は早速、13代目当主、100年前に自分の恋人だった氷室絹の墓参りに行く。

墓は、奥院からさらに二つ山を越えた所の崖に中頃にある。こんな、人が普通に来れない危険な場所にあるのだ。

そう、ここは絹が350年前、厄災を封印するために人柱となり氷漬けになった場所だ。

そして、約100年前に横島が幽霊だった絹を氷漬けとなっていた肉体に戻し、復活した場所でもある。

横島は墓前に手を合わせる。

「おキヌちゃん戻ったよ。いろいろあるけど、学校は楽しく通っているよ」

しばらく手を合わせたのち、横島はここを後にして奥院へ向かった。

氷室蓮は、氷室恭子と他の一族を含む巫女数人と、奥院にある離れでとある作業をしていた。

護符や無印の札を作成していた。

氷室家は全国の古式魔法師に対し強力な護符や霊符や札等の霊具を製造販売しており、大事な収入源となっているのだ。

氷室家の一族が霊木を育て、墨を作り、紙を鋤いて和紙を作成。そして、仕上げに巫女自ら霊力を込めて術式を書くのだ。特に蓮や恭子が作成した札や護符は効果が高いのだ。

そうして作成された護符などの霊具は質も高く、高い効果を発現できるとして一種のブランド化しているのだ。

蓮は霊符等の札の作成の手を止め、横で同じく作業をする恭子に声を掛ける。

「お母さん、どうやら忠夫さんが帰って来たようです。絹様のお墓からこちらに向かっているようです」

「蓮ちゃん、わたしも忠夫ちゃんの霊力を感じたよ」

恭子は蓮に同意する。

親子は氷室村の結界に横島が入った段階で感じ取っていた。

氷室家15代目現当主氷室蓮、36歳

お淑やかな印象の和風美人であり、年齢は10は若く見える。視界に入ったら思わず振り返ってみてしまうぐらい色気も多分にある。おっとりした柔らかい口調が特徴で、何時も笑みを絶やさない。

14代目元当主氷室恭子 59歳

可愛らしい印象のある女性で、蓮同様におっとりとした喋り方をするのだが、口調は子供っぽいため全体的に若い印象を受ける。ちなみに彼女が氷室絹最後の直弟子である。

「忠夫ちゃんの為に、料理をいっぱい作ってもらおうかな。おい麻弥ちゃん、夕飯は豪華にお願い!!」

現在、恭子の元には一族や村から、巫女修行に來ている門下生が20人ほど、また、恭子の身の回りの世話をする人間が常時5〜6人母屋に居る。麻弥はそのうちの一人だ。もちろん、麻弥自身恭子から手ほどきを受けている霊能力者だ。元々、代々当主が住んでいたのはこの奥院の母屋で、本家宅となる。平屋だが大邸宅となっていた。

蓮は、現在は家族だけで新たに建てた家で過ごしている。横島は始めの頃は本家宅で生活していたが、後半は蓮の家で生活していた。今では娘二人いる家に横島が入っても不都合がないと判断されている。「蓮ちゃん、敦信くんや、要ちゃん、彩芽ちゃんも来るように言っておいて」

恭子は蓮にそう言う。どうやら、横島の帰省を理由に宴会でもするようだ。

横島は奥院に顔を出す。

巫女さんの一人が離れまで案内をしてくれた。

しかし、離れの作業場から、先に恭子と蓮が出てくる。

「恭子さん、蓮さんご無沙汰しております。ただいま戻りました」

横島は頭を下げ挨拶をする。

「忠夫ちゃんお帰り〜」

「忠夫さん、お帰りなさい」

「忠夫ちゃん母屋に行こうか、蓮ちゃんも……」

本家宅の居間で、大きなアンティーク調の座卓を挟み、それぞれ座る。

家人がお茶と菓子を出す。

恭子から話を切り出した。

「忠夫ちゃん、魔法科高校ってどうだった？」

横島は恭子の質問の意味を汲み正確に答えて行く。

「そうですね。魔法師育成の学校という名目通り魔法訓練に特化した高校ですね。やはり、戦闘を意識した魔法がメインでしたね」

「ふーん、やっぱそうなんだ」

「で、どうなの？その霊能力レベルって言うか、魔法の力って」

「学校のトップクラスや十師族の家系の方々の霊力は強かったですね」

「わたしや蓮ちゃんと比べればどう？」

「うーん、一人とんでもないのが居ますが、それを除けば戦闘において遅れをとる事は無いと思います。まだまだ実戦未経験な人間ばかりですからこれからどうなるか分かりませんが」

「軍とかは見てきたの？」

「一部、接触は在りました。独立魔装大隊という部隊です」

「あー、佐伯広海少将のどこか、でどんな感じ？」

「練度は高いですね。霊力レベルだけで言うと、恭子さんや蓮さんの方が高いですが、戦闘になると分かりません」

「そうなるよねー、絹様がいたから前はどうかになったけど、私たちだけでどうなるかは心配だよ。そうならないように政治的な駆け引きで何とかするしかないか」

今まで、沈黙を守っていた蓮が口を開く。

「もし、要が魔法科高校に入るとどういう不都合が出そうですか？」

「まずは、CADを扱わないといけない事ですかね。俺はそれに結構手間取りました。まあ、要ちゃんの霊力と資質だと、まずトップクラスの実力になるのは間違いないですが、問題はその校風ですね。俺が行っている第一高校は能力や家系の差別意識が非常に高い学校です。要するに昔の貴族社会を見ているみたいな感じ。要ちゃんの性格だと反発しちやいそうです」

「そうですか」

蓮は目を一度瞑って返事する。

「あと、政治の世界と一緒に学生のうちから自分の派閥に取り込もうとする動きとかもあります。それは高校内だけでなく、軍等からもあるようです」

「忠夫さん、本当にありがとうございます。本来なら要を行かせなければならぬのに代わりにお願いいただきまして、感謝のしようがありません」

蓮は横島に頭を深々と下げるのだった。

「いえ、見ず知らずの俺を信じていただいているのに、これくらいの事は」

横島は照れたように返事をする。

「はいはい、難しい話はこれでお終い！今日は宴会だね」
そう言って恭子はこの話を締めくくった。

横島、氷室家に帰省する!!その2

横島が氷室家に帰った夜、14代目氷室恭子の提案で本家宅で横島帰省を着に氷室家家族及び本家の家人を含めた簡易な宴会を開催することになった。

門下生に家人達や蓮が料理や大広間で宴会の準備をしだしていたので、横島は準備の手伝いをしようとしたが丁重に断られた。特に何かをすることもないため、大広間でポツンと座って準備の様子を眺めていた。

夕方に差し掛かった頃。

「ふーん、横島くん帰ってたんだ」

「お兄ちゃん、さつきぶり」

「こんにちは、要ちゃん、彩芽ちゃん」

蓮の娘姉妹が大広間にやって来ていた。

「別に、こんな田舎にわざわざ帰ってこなくてもいいのに」

要はそう言って、横島からプイッと視線を外す。

氷室要（かなめ）地元の中学に通う3年生、今年高校受験を控えている14歳。母親の蓮に似て見た目は落ち着いた雰囲気しており、顔立ちは美少女というより美人である。一見大人びて見えるのだが、性格はキツイ。その性格が災いして孤立しがちであったが、今はそうでもないらしい。

下氷室神社で手伝いをしていたのか服装は普段着ではあったが、腰まである長い黒髪を後ろで束ねていた。

「えーーーーー、お姉ちゃん『横島くんいつ帰ってくるかなー』とか夏休みに入ってからずっと言ってたじゃん」

彩芽は口を尖らせ姉にそう言う。

「そ、そんな事言っていないわ」

「えーーーーー、今日だって『早く帰ってこないかなー』て呟いてたじゃん!!」

「ち、違うわ。それは生徒会の用事でメールを送っていて、それが返ってこないからよ」

二人は顔を突き合わせると、要は顔を赤くして彩芽を睨み付け、彩芽は頬を膨らませて要を見据えていた。

「まあまあ、二人共」

横島は仲裁に入ろうとしたのだが、

「あなたは口を挟まないで」

要が横島を睨み付け一喝する。

「あー、わかった!!お姉ちゃんそれってツンデレって言うんだよ!!」

そこで彩芽は爆弾発言をしてしまう。何か閃いたという顔をしながら言ってしまった。

「ち、ち、違うわ、何言ってるのかしらこの子は」

そう言って、要は彩芽の両頬を抓って横に伸ばす。

「いひゃい（痛い）いひゃい」

そこに二人の父である。敦信がやってくる。

「二人共何をしているのかね」

彩芽は要の手を振り切って父親の後ろへくっつく。

「お父さん、お姉ちゃんがイジメるの!!」

「この子が変な事を言うからよ」

要はそう反論する。

「二人共、お母さん達の手伝いをしてきなさい」

敦信は持っている扇子をカチンと閉じ、そう言っこの場を収めた。流星は父親である。

「わかったわ」

「はーい」

2人はそう言っ、台所の方に向かう。

「すまないね。横島くん」

敦信は横島の横に座布団を置き座る。

「いえ、たははははっ」

「こうやって娘たちが元気でいられるのも君のお陰だ」

「俺は大した事してませんよ」

「君が家に来てくれて本当に良かった」

敦信は改めて横島に頭を下げていた。

話は3月初旬に戻る。

横島が氷室家に来て1ヶ月が過ぎた頃、氷室家14代目恭子がいる本家宅で過ごしていた。恭子はすんなりと横島を受け入れたのだが

15代目蓮の家族は違っていた。蓮とは頻繁に顔を合わせ徐々に打ち解けていたのだが、二人の姉妹はどちらかと言うと、急に誰とも知らない男の子が家族を名乗って自分の家に土足で入って来た事に、明らかな敵愾心をもって接していた。

この時横島が霊能力者である事は宿す霊気から分かっていたのだが、実力等は把握できていなかった。

その日の真夜中、本家宅に蓮が慌てた様相で来た。

「お母さん!!要が居なくなっただの」

恭子は深夜を過ぎていたのだが、胸騒ぎがしていたため起きていた。

「落ち着いて、要ちゃんの霊力の感知は?」

蓮は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「……感じられないの」

恭子は真面目な面持ちをしていた。

「蓮……経緯を話しなさい」

蓮によると、

夕食時には別段変わったところが見えなかった。

真夜中に家の玄関が開く音に気付いて玄関に行くと、扉が開いたままであった。外の周囲を見回しても特に何もなく、周囲に人が居る気配や霊気も感じられなかった。

一応念のために娘たちの部屋を覗いてみて、要が居なくなった事に気が付いたのだ。

要の霊気を搜索するがまるで、感じられなかったとの事だ。

それに近いことが大凡1年前にも起きていたのだが、その時は直ぐに見つかった。

場所は奥院（奥氷室神社）の祭壇の前で倒れていたからだ。

それからは何事もなくこの1年間過ごしてきていた。

蓮は既に奥院の祭壇にも行つて確認していた。

下水室神社には敦信が確認を行っており、既に居ない事が分かっている。

恭子は泣き出しそうな自分の娘（蓮）を見やりながら考えを巡らせていた。

そんな時、横島が顔を出した。

「何かありましたか？」

「あら、忠夫ちゃん起きちゃった？」

恭子とはぼけた声色でそう言った。

「横島さん……要が居なくなつたの……お願いします、探してくれませんか？ 絹様の遺言の方であれば……」

蓮は藁をすすがる思いで横島にそう言ったのだ。

「蓮！ 忠夫ちゃんはお客人よ!!」

恭子は蓮を叱った。

「要ちゃんが……」

そう言うのと横島は目を瞑りその場で抑えていた靈気を解放しだした。

要を探すための精神を集中させ、意識を氷室村全体に向ける。

横島から放出される靈気の大きさに恭子と蓮は驚き、つい横島に向かって構えてしまった。

「居ました！ 大丈夫。ケガとかもなさそう」

横島は目を開け、恭子と蓮にそう言った。

蓮はホツとしたような顔をしていたが、恭子は驚きの顔をしたままであった。

「忠夫ちゃん……あなたは、やはり」

「おキ…13代目のお墓の前です」

横島は、要が13代目の氷室絹の墓の前に居ると言う。ここから山二つ越えた崖の中腹の横穴にあるのだ。闇に閉ざされた真夜中の山で通常行ける場所ではない。

「なぜ、そのような場所に……」

恭子は考えをまとめようとしていた。

「俺が連れ帰ってきますから待っていてください」

恭子と蓮の前で横島は玄関を出て絹の墓のある方角へ走り、暗闇の中へ消えて行った。

横島、氷室家に帰省する!!その3

氷室恭子と蓮は本家の玄関前で要を連れもどつてくると言っていた横島の帰りを待っていた。

この騒ぎに家人も気づき、本家には明かりがともり、恭子の後ろにも数人控えていた。

横島が出て行つて10分、暗闇から本家玄関前に人影が上から降つてくるように現れる。

「よつと」

横島が、要を前に抱きかかえ現れたのだ。

蓮はぐつたりと目を瞑つたままの要を確認すると駆けつける。

「要!!」

「蓮さん大丈夫です。気を失っている様ですが、容体には問題ないです」

横島は蓮に要を見せる様に中腰の体勢になる。

要は規則正しい息づかいで眠っているように見える。

「忠夫ちゃん、ありがとう。取りあえず要ちゃんを寝かせないと……麻弥ちゃん、客間に布団を用意して、それと桶に水も、足が汚れている様だから」

恭子は横島に礼を言つて、家人に要を寝かせる用意をさせた。

「……横島さん、ありがとうございます」

蓮は横島に礼を言いながら、要の額を撫でる。

「ええ、とりあえず、連れて行きますね」

横島はそのまま、本家の客間に要を運び布団の上に優しく下ろす。後は蓮や家人が見てくれるだろう。横島はそのまま客間を後にする。

恭子はその横島を奥氷室神社の祭壇の間へ、誘い話をする。

「忠夫ちゃん、要ちゃんの事、本当にありがとう」

「いや、少しでもお役に立てて良かった」

「実はこんなことが去年もあったの」

「そうですね。俺が要ちゃんを見つけた時には特に何者かも居ませんでしたし、要ちゃん以外誰か居た形跡もありませんでした。自身で行った可能性が高いです」

「そう、私も去年その事があって、いろいろ調べただけど、よくわからなかったの。ただ、去年の事が起きるちよつと前から要ちゃんの霊力が急激に上昇しだしたのが原因で、その影響で何かの記憶混濁、または霊力の残滓に無意識に寄せられたものだと思っていたの。その後1年間何も起こらなかったしね」

恭子は横島に去年、要に起きた事を話した。

「そうかもしれないね。ここは霊脈が集まっている場所でもありませんし、霊気も程よく濃いです」

横島は恭子に同意した。

恭子は改めて横島を見据える。

「晩年、絹様はよく昔の話をして下さったの。自分は結婚はできなかったけど、好きな人がいたと、のろけ話を聞かされたわ。その人ともう一度会いたいっておっしゃってた」

横島は恭子が急に絹の話題を出し、その内容に顔を伏せてしまった。

「忠夫ちゃん……さつき、あなたが解放した霊気、この氷室村を覆っている結界と似ていたわ、ううん。同じと言っていい程よ」

「……俺は……」

横島は言い淀む。

「絹様が語ってくれた好きな人にちよつと似てるかなって。気にしないで、恭子おばあちゃんの戯言よ……はいはい、この話はお終い」
そんな横島を見て、恭子は何時もの笑顔で話を終わらせた。

翌日

要はまだ目を覚まさない。

昨夜から蓮は要につきつきりで見守っていた。

その日の夜

蓮と朝から見舞いに来ていた敦信、彩芽が心配そうに見守る中、要は息づかいが荒くなり苦しみ出したのだ。

「お母さん!!要が!!」

蓮は要が何かの霊障なのではないかと、色々と霊気を操り、調べたのだが答えが出なかった。その矢先に起こったのだ。

恭子は要に手をかざす。

治癒の力で収めようとしたが、治る気配がない。

そこで、横島が客間に呼ばれる。

家族だけの、しかもこんな緊急事態に、横島が呼ばれたことに、彩芽はいい顔をしていなかった。

「なんで、その人を呼んだの?」

「彩芽、そんな言い方はよしなさい」

敦信は彩芽を諫める。

「忠夫ちゃん、貴方なら何かわかるのでは?」

恭子はそう言って横島に要の枕元の場所を譲る。

「すみません。蓮さん、敦信さん。ごめんね彩芽ちゃん、ちよつとお姉ちゃんに触れるね」

そう言って横島は、右手で要の額に触れる。

横島は静かに霊気を解放し、要の記憶を探ろうとした。

「??」

しかし、横島の頭に入って来たイメージは明らかに要の物ではなかった。

そして、ポツポツと横島は語りだす。

「過去世……前世の記憶」

「350年前……」

「引き寄せられる、霊気の残滓」

そして、横島は、恭子と蓮、敦信、彩芽に向かい語る。

「要ちゃんは前世の記憶に引きずられています。このままだと、赤ちゃんの精神が持たないどころか、崩壊すら有り得ます。赤ちゃんの霊気が高まり、前世の記憶が流れ込んでいるようです」

蓮はフツと気を失うかの様に敦信に倒れかける。彩芽は涙目になり敦信にしがみ付く。

「……忠夫ちゃん、何とかならない?」

「何とかしてみます。近い事は経験があるので」

横島はアシユタロス戦後、能力アップを図るため、自分の前世の記憶を記録として、手に入れたのだ。しかし、あの時は文珠があつた。

横島が見た要の前世とは、この地に、氷室神社を立てた氷室家初代当主の奥方だ。

最初は初代当主かと思った。初代は当時、名の知れた陰陽術師だったからだ。だが違っていった。

奥方とは350年前この近辺一帯を支配していた城主の姫君だ。顔面凶器姫、岩をも簡単に砕く腕力はゴリラ以上、意思の力と行動力はランボーも真つ青だ。しかし、心が非常に優しい姫で、絹の親友でもあつた。しかし、自分の代わりに絹が自ら人柱にかつて出て帰らぬ人となってしまうため、(実際は肉体は残ったのだが)その後悔の念は凄まじいであろう。そんな思いと、要の霊力が呼応した可能性が高い。

「うーん」

方法としては二つある。

一つは、横島同様、過去の記憶を記録として自分の中に収める。これは凄まじい精神力が無いと過去の記憶に支配されかねない。

もう一つは、その記憶……過去世を呼び戻さない様に封印だ。しかし、要も霊能力者である。霊力の成長と共に、その封印の効果が薄れる事もある。

「封印しかないか……」

横島は、封印を行うための陰陽術式を頭に描いて、構築していく。

「札と墨をお願いします」

恭子にそう言っつて、無印の札と書くための墨を用意してもらった。

横島は指を噛み、墨に自分の血を混ぜ、すらすらと札に術式を書いて行く。

札を手のひらに乗せる。札は自分の意思を持った様に光だし、手のひらから飛び出し、部屋の四隅の柱に張り付いた。

「結界」

横島は小声で唱え、部屋全体に結界が効果発現する。

100年ぶりに陰陽術を使用し、成功したことにホツとし安堵した表情する。

「眠れし過去の荒ぶる記憶よ戻りたまえ」

要の額に手をやり、長々と術式を唱えた後、そう締めくくった。

最後に、額に一枚の札を張る。

しばらくすると、要の息づかいが戻っていた。

横島の術儀の見事さに驚愕の目で見ていた恭子。その行動を心配そうに見ていた蓮、ジツと見据えていた敦信、父親にしがみ付く彩芽。彼女らに横島は向き直る。

「上手く行ったようです。今は流れ込んだ記憶を元に戻すためにしばらく時間がかかります。4時間……明日の朝には終わるでしょう」

横島は恭子、涙目の蓮、敦信に感謝の言葉を何度も受けるが

「いやー、俺みたいな奴を受け入れてもらってるんで、俺の方が感謝

したいですよ」

そう言つて、照れたように笑っていた。

翌日、術後もよく、要はケロツとした顔で目を覚ます。

その後、要の事もあり、蓮の家族に受け入れられていったのだ。

今は、氷室家大広間で宴会が繰り広げられている。

横島は、隣に座っている要の右手にビー玉サイズの丸い水晶が一個はまっているブレスレットを見やり、声を掛ける

「封印は解けていない様だね」

「うん」

要は恥ずかしそうに返事をする。

その水晶はもし封印が解けた場合に緊急的に術式が展開し、記憶の混濁を防ぐ役割をする。

「いいなー、私もそれ欲しいな、お兄ちゃん私にも作ってよ!!」

横で彩芽が横島にもものほしそうに言う。

「彩芽は必要ないでしょ」

横島の代わりに要が答える。

「えー!!お姉ちゃんばっかりずるい!!」

彩芽は頬を膨らます。

「いやー、そう言えばお土産買ってきたんだった。後で渡すね」

横島は二人にも土産を買ってきていた様だ。

そうして、宴会も終わる。

氷室家に滞在していた間。横島は畑仕事を手伝ったり、霊符や札作

成の手伝いをしながら、要や彩芽に陰陽術の手ほどきを少々行っていた。

そして、横島は東京に帰る日。

「お世話になりました」

「忠夫ちゃん、仕送りはいらないうって言ったけど、お札とか作ってもらってるからその代金だけでももらって行ってよ」

恭子は横島にそう言った。

「いや、大丈夫ですよ。一週間もお世話になっていたし」

横島は、自分で生計を立てていた。お札を作成して月に何枚か売っていたのだ。

しかし、それが後に騒動の種になるのだが……

「あのね。忠夫ちゃんの護符なんて、ものすごい能力だから、高——
——く売れるの!!だから、その分はちゃんと渡すから、振り込むから番号教えて」

「……分かりました。ありがとうございます」

蓮は横島が次に帰ってくる時期を聞く。

「忠夫さん、次は冬休みかしら?」

「はい、そのつもりです」

敦信は横島にそう言う。

「秋に一度戻ってきたらどうだね。ここら辺は紅葉が綺麗だ」

「お兄ちゃん、今度のお土産は六本木の甘いスイーツよろしく!!」

彩芽である。

「別に居ても居なくてもいいけど、秋に帰ってきてもいいんじゃない」
要は何故かツンとした雰囲気と言う。

彩芽は横島の耳元まで顔を寄せ。

「ツンデレだね」

そう言った。

「聞こえたわよ。彩芽」

「お姉ちゃんが怒ったー!!」

横島はそうして、東京に帰るのであった。

横島、南国の別荘地へ!!

残暑ではあるが太陽の日差しはまだキツイ。吹き付ける風に潮の香り、そして、水しぶきが舞う。横島は今、船の上に居るのだ

雫の実家、北山家が所有する小笠原諸島の小島、いわゆる無人島にあるプライベートビーチ付きの別荘に、これまた北山家が所有するクルーザーに乗り目指している。

そう、雫の誘いで、何時もの面々とで二泊三日の夏の思い出作り、北山雫主催の超豪華旅行なのだ!!

何から何まで北山家にお世話になりっぱなしなのだが……

「流石に、海の照り返しや日差しで眩しいな」

レオが横島に爽やかな笑顔で話しかける。

「確かに、眩しい!!」

横島もレオの言葉に同意しているのだが、レオとは明らかに見ている方向も、意味合いも違っていた。

「フトモモが眩しいぜ!!エリカグツジヨブ!!」

エリカのショートパンツからすらりと伸びた足、いや適度に引き締まったフトモモを見ていたのだ!!

「横島は相変わらずだね。本人に聞こえたらまた殴られるよ」

隣の幹比古は、そう言っではいるが楽しそうだ。

レオ、横島、幹比古と、クルーザーの前甲板前方で思い思いの方向を向きながら話していた。

「レオ、幹比古ちよつと耳を貸せ」

横島はしゃがみ小声で、そう言っつて、二人にもしゃがむ様促す。

そして、三人はいわゆるヤンキー座りでコソコソと話し始めた。

「おいおい、流石にまずいんじゃないか?」

「そんなことしたら殺されちゃうよ」

「お前らそれでも男か!!」

ここからは何時もの横島トークがさく裂する。

「いいか、お前ら、女の子が海へ誘い、男の俺たちが一緒に来ても嫌がらないという事はだな、俺たちの事を受け入れてくれているという事だ!!そして、真夏の海という場所では、大自然を感じる青い空と広大な海が自然に開放感を誘い、人の本能は野生に帰って行くのだ!!そんな彼女らは倫理観が薄れ、多少な破廉恥な行為に及んでもきつと許容してくれる!!いや、もしかしたら、いい関係になれるかもしれない!!それに、お前らは何故か最初っからバレることが前提で話しているが、バレなきやそもそも誰も被害は被らないのだ!!」

そう、俺たちの心のリビドーが満たされるだけの行為!!男ならこのチャンスを逃す手はないはずだ!!」

横島はそう言って、レオと幹比古にのぞきを提案していたのだ!!

まさに悪魔のささやき、いや心の雄たけびだ!!

「ゴク」

2人の生唾を飲む音が聞こえる。

「ゴソゴソ何話してるの?」

雫がいつの間にか三人のそばまで来ていた。

3人は慌てて立ち上がる。

レオと幹比古は明らかに目が泳いでいる。不自然に「海が綺麗だ」とか言って、この場を離れて行こうとする。

「たはははははっ、男同士のたわいもない話だよ」

横島は悟られまいとして雫にそう言う。

雫は無言で横島の顔をジトとつとした目でしばらく見据えていた。

「……な、何かな?雫ちゃん」

横島はその視線に耐え切れず、雫に話しかける。

「横島さんこれを付けて」

雫は手に持っていた。金属製のブレスレットを横島に渡す。

「これ何?」

「いいから、付けて」

雫は先ほどと同様に、ジトツとした目で横島に訴えかける。

「わ、わかった」

金属製のブレスレットは、半分に割れるようにできており、右手首にはめる。

カチリ！

何故か、ブレスレットからはカギが掛かった様な音がした。

「へ？」

「達也さんが横島さんにこれを付ける様をお願いしといてくれと言われた。私は必要ないって言ったのだけど、エリカも必要だと言っていた」

雫はそんな事を言う。

「どういう事？なに？」

「横島さんが女子が使う大浴場や更衣室に近づいたりすると、警報が鳴る仕組みになっている。覗き防止だって言う。横島さんはそんな事しないって私は言ったのだけど……」

雫は眉を少し下げ、悲しそうな表情で横島を見ていた。

横島は引きつった笑顔で

「……そ、そんな事するわけないじゃないか、な……なに言ってるんだろな達也とエリカは！たは、たははははっ」

横島は心の中で、二つの感情が動いていた。

達也「……………!!余計な事するな……………!!なんて事しやがる!!」

くっ、雫ちゃんの信頼が痛い!!そんな目で見ないで……………!!

悲しそうな表情をまだしている雫を見て、横島は罪悪感に苛まれて答えていた。

「だ、大丈夫、そんな事しないし、気にしてないから」

横島はどうも妹扱いをしている雫に弱い様だ。これがエリカだったならば、罪悪感に苛まれることなく事を実行に移していただろう。

雫はその言葉を聞いて安心したのか表情をやわらげる。

「そう、良かった。ちよつとこっちにきて」

そう言つて横島を引つ張り、どこかに案内するようだ。

横島は雫の表情を見てホット肩を撫でおろし、雫のなすがままにさせ、操舵室までついて行く。

操舵室に入り、雫は服装から明らかに船長ポイ人の前まで横島を連れていき、いきなり横島を紹介しだした。

「この人が、横島さん」

「横島忠夫です。つて、誰？」

「私は、雫の父、北山潮だ」

「雫ちゃんのお父さん!? 学校では何時も仲良くさせてもらってます」

「君が噂の横島くんか、雫がいつも世話になっているそうだね……?？」

北山潮はそう言いながら横島の顔をまじまじと見ていた。

「お父さん？」

そんな様子を見て、雫は父親に声を掛ける。

「いや……君の顔を見て、ある人物を思い出していたんだよ。私の仕事から話題になる人物で、日本でも指折りの商社、横島カンパニーの初代社長横島大樹氏なのだが、君にちよつと似ているかなと思つてね。血縁者か何かかな？」

北山潮はそう言った。

横島カンパニー、現在日本でも屈指な商社100年前、夫婦二人三脚で一氣に大企業まで立ち上げた会社だ。もちろんその夫婦とは横島の実の両親、横島大樹と横島百合子である。しかし、この世界では横島夫婦には子供がいない事になっている。忠夫という息子は存在しないのだ。

このような場所で突然自分の実の父親の名前が話題に上がり、横島は動揺を隠せないでいた。

しかし、横島は息子を名乗るわけにはいかないのだ。

「……す、すみません。そ、その、俺、自分の両親を知らないんです」

「お父さん!!」

雫は父を一喝する。

雫は横島がこんなに動揺しているところを見たことが無かった。

「すまない。悪気はなかったんだ。つい、興味本位で初対面の君に失礼な事を聞いてしまった。この通りだ」

北山潮は素直に頭を下げて謝罪する。

「いえ、いいんです。……ちよつと聞いてもいいですか、その横島社長つてどんな人だったんですか？」

横島は気持ちを落ち着かせ、北山潮に話を聞く。

横島は現世に戻ってから、自分の両親については一切調べてこなかった。いや、調べるのが怖かったのかもしれない。自ら、相手の気持ちを一考せず縁を絶ち切ってしまったのだから、同様に、昔の友人についても意識的に調べることはしなかった。

北山潮はそれを聞いて楽しそうに語りだした。

「横島氏は戦う経営者という異名が付いていてね。特に誰も手をつけようとしないう紛争地帯の利権などをまとめるのが非常にうまく、ゲリラや独裁国家なども渡り合える交渉術をもっていた。

それで一気に大企業まで会社を大きくしたんだ。一説によると魔法師だったと言われている。ゲリラ勢力を一人で壊滅させたとか、襲撃して来た独裁国家の軍隊をすべて返り討ちにしたとかそういう噂が絶えないんだ。真偽のほどは定かではないがね。

それと同じぐらい、プレイボーイだったという話もあって、世界中に愛人とその子供がいるとかいないとか。

まあ、奥さんの百合子氏も凄まじい方で、敵対するライバル会社をことごとく返り討ち、彼女の前にライバル会社の幹部はひれ伏す羽目になるんだ。会社運営自体は主に百合子氏がやっていたらしいしね。

既に1世紀前の話だけどね。ただ彼らの、経営戦略は見習うべきところが多分にある。私も学生時代は彼らに憧れたものだ」

「あは、あははははっ、すごい凄い人たちですね。貴重なお話、ありがとうございます」

横島はその話を聞いて、涙が出るどころか、おやじやおふくろらしいやと、相変わらずな感じの二人にうれしい気分の方が勝っていた。

「そうそう、私は君に会いたかった理由がもう一つあるんだ。私も雫の影響でモノリス・コード好きになってね。モノリス・コードの大会のツアーを組んで観戦する位なんだ。君の試合の映像も見たよ。九島閣下の解説付きでね。まれにみる試合展開に流石の私も度肝を抜かされたよ。君がものすごく頭の回転の速い人間だという事は試合でよくわかった。あんな戦術や工夫、咄嗟に出るものではないよ」

北山潮は横島の試合に感心していた様だ。

「たははははははっ、そうっすか？」

横島は先ほどの動揺が薄れてきて、何時もの口調に戻って来ていた。

「まあ、これからも、雫の事をよろしく頼むよ」

そんな事がありつつ、クルージングで東京から4時間。目的の小笠原諸島に連なる小さな島に到着した。

横島、水着の品評会をする!!

小島に付き早速、荷物を別荘に置きに行く。

同行してきた北山家付きのハウスキーパーの黒沢女史が案内する。

黒沢女史は20代中頃に見え、雰囲気は厳しそうなメイド長の様な感じだ。服装は夏に合わせた地味目の普段着の様だが……

横島は既に声掛け（ナンパ）済みであったが、すげなく断られていた。

雫はその時、横島の後ろをピッタリ張り付いて、ジトとした目で見ていた。

ちなみに、雫の父、北山潮氏は、仕事があるらしく、クルージングだけして、待機していたヘリで帰って行った。

男たちは当てがわれた別荘の部屋に付き荷物を置く。

「スゲーな、これ丸ごと個人もちかよ」

レオの素直な感想である。

「さすがに島一つは凄いよね」

幹比古も同意見だ。

「ああ」

珍しく達也もこういう話題で返事をしていた。

「さつさと着替えて行こうぜ」

レオは待ちきれないと言わんばかりに早速水着に着替えだした。

「……………ところで達也、なぜ別荘に入る前から俺の後ろにずっと居る？」

横島は今さらながら達也が横島の後ろにずっと張り付いて歩いてここまで来ていた事を言っていた。

「お前を見ておかないと何か仕出かすかもしれんからな。……分かってるだろうが、今、深雪たちの部屋になど行こうと思うなよ」

達也は横島に若干殺気が混じった低い声でそう言った。

「くそ、こんなブレスレットまで、ご丁寧に用意しやがって、信用無いのかよ」

「無いな。お前は九校戦の時に、深雪たちの後を大浴場までついて行くとしたらしいな」

達也の声色は真剣な雰囲気を出し、殺気が見え隠れしていた。「いや、何だ。あれは偶然歩いていたら、そうなっただけ……なんていいわけは通じない？」

そう、あの時の横島は分身体だった。軍から偽装するため髪の毛から作った横島の分身は深雪たちの後を大浴場までついて行ってしまった。ある意味事故なのだが、横島は慌てふためくように言いわけがましく言うのだが、達也には通じない。

「まあいい、余計な事はするな」

「わーかったって」

横島と達也はそんな会話をしながら着替えて行く。

男どもはビーチに着くが、まだ女性陣はついていなかった。

レオは早速準備体操をしながらしていた。ガッツリ泳ぐ気満々だ。

既に浜辺にはパラソルが数本立っており、シート、ビーチチェア、サマーベットがセッティングされていた。

黒沢さんが既に用意をしていたのだろう。手際がいい様だ。

横島、幹比古、達也は取り合えず、ビーチチェアに座り女性陣を待つ。

「レオって、あれだな、なんか元気あっていいよな、頭は小学生のままだなきつと」

横島は準備体操をするレオを見やってそう言う。

「まあ、そうだね。でも、横島も泳ぐんでしょ？」

幹比古も横島に同意見だったようだ。

「幹比古、折角美人ぞろいの同級生の水着姿をみるチャンスだぞ、そん

なこととしてられるか!!」

「横島ってそればかりだね」

「むははははっ、幹比古ー、俺の見立てでは美月ちゃんが一番ボインだぞ、きつと!!」

横島は自分の胸のあたりで大きなスイカを二つ下から持ったようなしぐさをしてそう言う。

「な、何言ってるんだよ」

幹比古の顔がほんのり赤くなる。

「幹比古くんは純情だなーっはっはー!!」

横島は既に変なテンションですでにMAX状態だ!!

「おーいお前ら!!泳がねーのか!？」

レオが海辺から大声で叫ぶ。

「後で行くよ!!」

幹比古は大声で返事をする。

「先行ってるぞ!!」

レオはそう言っ海に入る。

女性陣の音が後ろから聞こえてきた。

横島は椅子をクルリと別荘側に向け座りなおす。

横島の興奮状態はMAXになって行く!!

ここからの解説は横島が行っていく。

まずはエリカだ。

昔の学校指定の女子スクール水着に似た黄色地のワンピース風の水着だ。

手足が長い彼女とボディーラインが引き締まって見える水着と相まって、絶好のプロポーションでの登場だ。

「フトモモが眩しい!!やるなエリカ、そのボディーライン、結構ボンキュボンっだな!!」

続いて、その横で達也に向かって手を振る深雪だ。

大きな花がプリントされた水色のワンピース。色白の彼女と華奢な体つきから、起伏はエリカには遠く及ばないが、どこかの妖精かエルフの様な印象を受ける。

「うーん、美しい!!触るのがもったいない様な綺麗さがある、まだ成長しきっていないその肢体はこれからを妄想させてくれる!!」

隣で達也が横島を睨み付けていたのは言うまでもない。

その後が続いて来たのは美月だ。

細かな水玉模様をあしらったセパレートのだが、何故かビキニに見えてしまう。V字カットされた胸元は、豊かな胸のボリュームで凄じ事になっている。肩幅や腰幅が狭いため、正面からのボディラインはそれほどでもないが、?せすぎていないため逆に艶めかしい!!

思わず立ち上がる横島!!

美月のエロボディを見て、横島の何らかの機関が再稼働し始めた!!

「グレーーーーーイトウ!!やはり見立て通り!!すんばらしーーーーーいい!!幹比古見ろよ!!歩くだけで揺れてるぞ!!バインバインだ!!すんげーーーー揺れ幅だ!!何だあれ!!めっちゃ柔らかさそうだぞ!!ムフフフフツツ!!」

今日最高潮のテンションの横島だ!!

ギューーーーーンと横島の中で謎機関のゲージが勢いよく上がって行く!!

横の幹比古は何故だか、顔を真っ赤にして、海の方に走り出して、飛び込んでしまった。

「横島のアホーーーー!!」

「幹比古ーーーーおーーーーい!!なんだ?どうしたんだあいつ?」

「横島、ほつといてやれ」

達也は幹比古に同情しながらも冷静にそう言った。

続いて、ほのかだ。

紫地のセパレートワンピースのワンショルダーに腰にはパレオを巻いている。しかし、胸に圧倒される!!豊かなバストながら、体の線は細く、腰つきも良い。いわゆるモデル体型だ!!バストのポリウレームは若干負けているが、起伏だけで言う和美月を上回る!!

「グハッ!!なななな何ーーーーー!!着やせするタイプか!!この横島一生の不覚!!しかしなんだ、美月ちゃんとは違う揺れ方だ!!ハリがあると言うかなんとかズンズンって感じた!!クビレとお尻にかけてのラインもグレイト!!ひゃーーーーーほーーーーーう!!」

横島のテンションは振りぬけそうになっていった!!

それと共に横島の謎機関のゲージがギョングン上がって行く!!

そう、それは大人になり、好青年となった横島が過去に置いて来てしまった煩惱パワーだ!!

若かりし頃の横島（童貞横島とも言う）は煩惱パワー、わかりやすく言うとエロパワーを蓄積させていくことによって膨大な霊力を生み出していたのだ!!

そのゲージが美月のオツパイミサイルで復活し、ほのかのダイナマイトボディでぐんぐん上昇しているのだ!!ただいま90%近くまで上がっている!!

「今日は来てよかった!!わが生涯に一片の悔いなし!!」

横島は目に涙を溜め、力づくよく拳を握り、つい有名な名言を使ってしまうていた。

煩惱ゲージはさらに上がり100%ギンギンに近づく!!

そして、ほのかの後ろをちょこんとついてきている雫だ。そのまま横島の目の前までくる。

白地のワンピースにピンクのフリルがふんだんに使用されている水着だ。華奢すぎる体形は、なんというか、行ってはいけない世界の住人になりそうな雰囲気だ。可愛らしい。この言葉ぴったりと合う。正直、体形は彩芽ちゃんと変わらない。

「あーーーーー落ち着いた!!うん、可愛らしいね〜」

横島は再び椅子に座り、目を細めて、何かほのぼのとしたものを見ている様な目で雫を見ていた。

鼻血が何時噴き出てもおかしくないぐらいのテンションだったが、雫のお陰で元に戻っていた。

それと共にヒューーンと一気に煩惱ゲージが下がり、再凍結してしまった。

女性陣はビーチに付くと横島と達也が座っている横のパラソルを占拠し、荷物を置く。

横島は椅子を元の方向に戻し座りなおす。

女性陣は達也と横島の前まで来て、全員真正面に立って居る。

「どうよ、達也くん、横島!!」

エリカが胸を張って水着を見せつける様にした。

美月とほのかは少し恥ずかしそうにしているが水着を見せようとする。

「どうですかお兄様!!」

深雪は達也に向かい、クルリと回り、水着を見せる。

雫は何時もの無表情ではあるが、水着を見せたいようだ。

達也は流石に気恥ずかしいのか視線を外し

「いいんじゃないか」

と一言。

達也も幹比古同様この場から逃げたい気分の様だ。意外と純情なところがあるようだ。

しかし、横島は違う!!

「エリカ!!健康美溢れるその姿にフトモモ!!100点だ!!」

「深雪ちゃん!!めっちゃ綺麗だ!!なんていうか、ずっと見ているも飽きない!!」

「美月ちゃん!!スゲー艶めかしい!!その揺れるチチからも目が離せん

!!素ん晴らしい!!」

「ほのかちゃん!!凄いい!!もはやそのボディラインはモデル顔負けだよ!!グレーーーートオ!!」

「雫ちゃん!!雫ちゃんは……うん!!可愛らしくていいよ!!」

横島は水着を褒めずに、それぞれ自身を褒めていた!!

雫だけ何故か微妙だったのだが。

エリカがのしのしと横島の前まで来て、頭を叩く。今の横島にとってそれさえもご褒美なのだが。

「水着を褒めろと言ったのよ!!何を褒めてんのよ!!」

「エリカ!!それは違うぞ!!水着なんかよりも、君たちの方が素晴らし
いと言っているのだ!!」

しよせん水着など引き立て役にすぎん!!それがわからないで
かーーーーー!!」

逆切れをする横島!!

横島にそう褒められて、雫以外、モジモジとしている。

「あの、褒められるのはうれしいのだけど、そうストレートに言われる
と恥ずかしい……なんていうか……」

ほのかはボディラインを隠すかのように手を胸などにやってモ
ジモジとし横島にそう言うが、逆に色っぽくなっている感じである。

美月と深雪も同じく腕で胸を隠してモジモジしていた。

「このスケベ!!言い方がやらしいのよ!!」

エリカは顔を赤らめてプンスカしている。

全く持ってその通りである。

セクハラもいいところだ!!

そんな中、雫が座っている横島の前で少し前かがみになり、ジトツ
とした目で視線を合わせ抗議する。

「私だけ、なんか違う……」

横島は何故か孫を見るおじいちゃんの様な目で、目を細め

「雫ちゃんは、可愛いよ。欲望にまみれた大人の心を洗ってくれるよ
うだ」

そう言っつて、雫の頭にポンと手をやった。

雫は無表情ながら納得のいかないような顔をしていた。

女子陣は雫に感謝しなければならぬ。

横島が煩惱ゲージをMAXにしてしまえば、水着など着けていても意味がない。

横島の煩惱パワーと妄想力、高まった霊力とが相まって、壁があるうが服を着て様が、欲望が具現化し、全て透けて見えてしまうのだ!!
たった一枚の布切れでしかない水着など、煩惱の権化と化した横島には無いのと一緒なのだ!!

雫のお陰で煩惱ゲージは凍結。よほどの刺激が無いと復活はしないだろう。

横島、達也と共にボディを曝す!!

横島は女子の水着品評会?を行っていたが、横で座っていた達也はその場から逃げる様に、

「泳いでくる」

と言つてパーカーを脱ぎ上半身を曝す。

大人に比べれば多少線は細いが、見るからに鍛え抜かれた鋼の様な筋肉、引き締まった肉体が現れた。

「た……達也くん、それ」

エリカは達也の体を見て緊張感がにじむ声を出す。

ほのか、美月、雫もエリカがそのような声を上げたことに気が付き、達也の体を驚きと困惑の表情で見ていた。

確かに、達也の鍛え抜かれた肉体は称賛に値し、年頃の女子には眩しく見えるのかもしれない。しかし、エリカたちの緊張感はそこではない、引き締まった肉体と筋肉には多数の小さな切り傷や、刺し傷、細かなやけどの跡がみられたのだ。

体を鍛えるだけではこうはならない。実際に斬られ、刺され、焼かれた様な、さながら拷問などを受けた様にも見えるのだ。

「……………」

その場は沈黙が支配する。

「……………すまない、見ていて気持ちいいものではないな」

達也は慌ててパーカーを取り、再び着ようとする。

「おう、すげえな、お前隠れマッチョかよ!!レオよりすげーんじやねーか?何、その傷、北斗神拳伝承者かお前は?……………!?もしかして中二病的なあれか?フハハハハハッ!!……………アレ!」

横島は、そんな達也に空気を読めないような発言をするが、これは横島流のフォローだったのだが、不発に終わったようだ。

そんな中、深雪が達也の右腕に縋りつき、抱き寄せた。

「大丈夫ですよ。お兄様、その傷一つ一つがお兄様が誰よりも強くあるうとした証なのですから、見苦しいなど、深雪は思いません」

「私も思いません」

ほのかは顔を若干赤くして強くいって、一步達也の前に出る。

それに雫と美月は頷く。

「ごめんね。達也くん驚いちゃって、かわりに私のもみ・せ・て・あげるー！」

エリカはおどけた様子にし、水着の肩ひもを親指で上げて見せた。

「マジ!!エリカ——ごつつぁんです!!」

またも空気を読まず、エリカにとびかかかかる横島!!

「あんたに言っていない!!」

エリカの肘打ちが横島の顔面にヒットし、そのままベチャつと砂浜に這いつくばる。

「グボツ!!」

その様子を見て、女子メンバーは苦笑い。

何時もの調子の横島の行動で重かった空気が完全に戻った。

「イテテツ、たははははっ」

横島は直ぐに復活しムクつと起き上がる。

「でっ、あんたはどくなのよーどうせ貧弱坊や何でしょうけど」

エリカは横島に向かって片目だけ細め腕を組んで、意地悪そうに言う。

「貧弱坊やで悪かったな!!」

「横島さんも、見せて……」

「そうですよ、自分だけ見せないってずるいです。私たちも恥ずかし

かったんですからね」

雫とほのかは横島に上のパーカーを脱いで、肉体を見せるように促す。

エリカは横島のパーカーを思いっきり引っ張り、はぎ取った。

「見せなさいっての!!」

しかし、パーカーの下には男性用上下水着が着用されていた。

「ふははははっ甘いぞエリカ!!」

「それも脱げっての!!」

エリカは上水着を引っ張り、前のファスナーを下げようとするが、横島が抵抗する。

「いーいやーいー、痴女や!!痴女がここにいるー!!」

ほのかと雫も加勢して、横島の両腕を取り、エリカがファスナーを下ろし、上水着をはぎ取った。

横島の肉体は、達也の様な鋼の筋肉は無かったのだが、しなやかで柔軟な筋肉が理想的に付いており、これもまた、鍛え抜かれた男の体であった。一朝一夕で出来るものではない。

横島の肉体には傷一つない、横島の超回復のお陰で、傷は直ぐ元通りになるためだ。

しかしながら、一か所だけ傷が残っている。その場所だけは、なぜだか残ってしまった。今は巧妙に隠している。

「えっ？」

エリカは素っ頓狂な声を上げる。

美月も深雪も驚いた顔をしていた。

どうやら意外だったようだ。

両腕を抑えていた、ほのかと雫はまじまじと横島の肉体をみる。

雫においては、横島のしなやかな筋肉をペタペタと触り、そして若干顔を赤らめその感触に満足そうに頷いていた。

「そんなマジマジと、見られると恥ずかしいんだけど」

エリカはこの時始めて気がついた。横島の体は剣術などをするために理想的な肉体をしている事に、しかも、何年も訓練して初めて出来る肉体をしていたのだ。剣術家の家系で育ったエリカだから分かったのだ。

「横島、お前も人の事言えんな」

達也はさっきの仕返しとばかりそう言った。

さつきとは違った変な空気が今流れていた。

そんな中、美月は感心したように横島に話しかける。

「横島さんも鍛えているんですね……やはり氷室家の修行って厳しいんですか？教えてください!!と言うか、15代目蓮様と14代目恭子様のサインもらってきてください!!」

最後は美月の氷室絹マニア魂が発動して暴走していた。

「たははははっ、美月ちゃんさすがに当主のサインとか難しいけど、氷室絹さんの小説を書いた速水信彦先生のサイン付き本をもらってきただから、2学期始まったら渡そうと思っただけ、その時にね」

氷室家に帰省時に15代目蓮の夫、敦信（ペンネーム速水信彦）にサイン付き本をお土産にもらっていた。

美月は目をキラキラさせ、横島の両手を雫とほのかから奪って、握りブンブンと振る。

「ありがとうございます!!横島さん!!私は素晴らしい友達に巡り合えて幸せです!!次は是非、一般非公開の奥氷室神社の砂を!!」

美月はもはや、肉体とか筋肉とか関係ない世界で暴走していた。

美月のお陰で、変な空気は元に戻り、難しい顔をしたエリカも毒気を抜かれた様に呆れ何時もの表情に戻っていた。

横島、南国の島で楽しむ!!

女性陣は砂浜の浅瀬で腰まで海につかり、バシヤバシヤと水を掛け合ってはしゃいでいた。

もちろんその中に楽しそうに横島も自然と混ざっていた。

達也はと言うと、女性陣が遊んでいる近くで海の上で仰向けになって体を任せプカプカと浮かせ漂わせていた。これが達也流の海での遊び方なのか、心身ともにリラククスさせるためのものなのか、それとも修行の一環なのかはわからない。

レオと幹比古はいつの間にか、沖の方へ遠泳を敢行しているようで、最早砂浜からは確認できない。

女性陣と横島は、最初の内はただ単に水のかげ合いだったのだが、エスカレートして魔法を使った水の飛ばし合いになっていた。最終的には女性陣5人VS横島の凶になり、一方的に水魔法攻撃をその身に受けるのであった。

ドビューン!!

バシユーン!!

「ぐわっ!うわっ!たっただ、たんま!!グボボツ!!」

横島は魔法で放たれた、レーザーの様な水流を一身に受ける。

ズバババババーン!!

「イタタタッ、ちよ、ちよと待って!!」

マシンガンの様な水弾が横島を襲う。

ズオーオーオー!!

「ぐはっ!ゴボ!!ゴボボボツ」

横島は魔法で生成された渦潮に呑み込まれていく。

ドバーン!!

ドドーン!!

「グホーっ!!ぎゃー!!す!!」

横島は魔法の水柱が下から突き上げられ、空高く飛ばされ、そのあと水面に落下。

バシャーリーン!!
プカーパー

横島は一度海に沈み、うつ伏せになって浮かんでくる。

「だ、大丈夫ですかね?」

「やりすぎちゃいましたか?」

「あれ?やりすぎた?」

「大丈夫ですか?横島さーりん」

「横島さんならきつと大丈夫」

美月、深雪、エリカ、ほのか、雫はドザエモンの様に海に漂っている横島を見て、それぞれ心配している様だが雫だけは妙な信頼感があるようだ。

横島はしばらくして、ガバッと起き上がり、

「大丈夫ちゃうわーりん!!おかしいやないかーりん!!なんで、ただの水遊びが命がけになるんやーりん!!女の子と男の子の水遊びというのはな!きやつはウフフな世界になるはずなんやーりん!!そんで、あつ、とか言いながら、ボディータッチ!!合法的に女の子の肌に触られる場なんやーりん!!これなんやーりん!!」

女性陣に涙をチョチョきらせながら喚く。何時もの調子の横島。全然大丈夫そうである。

砂浜のビーチパラソル付近から、凜とした通る声で黒沢女史が声を掛ける。

「そろそろ休憩してはいかがですか、冷たいものをご用意いたしました」

女性陣と横島、達也も海を上がり、ビーチパラソル付近に用意されたテーブルの上の飲み物を思い思いに取り飲み始める。

「この後、達也くんも一緒に遊ばない?横島だけだと、張り合いがないし」

「お兄様も一緒にどうですか」

エリカと深雪は休憩後、達也を誘う。

「後でボートで沖にでません？楽しいですよ」

「うん、あつちに、木製の手漕ぎボートが二艘ある」

ほのかと雫がボートで遊ぶことを勧める。

「ああ、後でな」

達也はそう言つて了承した。

暫くすると、レオと幹比古も遠泳から戻つて来た。

幹比古はゼエゼエと息を切らしているが、レオは全然へっちゃらそうである。

「お前ら、何やってんだ？まじ泳ぎか？」

そんな二人を見て横島は言う。

「おう！横島もどうだ？楽しいぞ。幹比古も結構泳げるみたいだな」

元氣いっぱいに答えるレオ。

「ぼ、僕は遠慮しとくよ、流石に疲れた……」

レオと対照的に幹比古は泳ぎ疲れている様だ。

「いや、俺も遠慮しておく」

「なんだ？ひよつとして泳げないのか？俺が教えてやろうか」

レオは横島に向かって、海の男の様なスマイルで言う。

「いや、違うから……お前に言つてもなあ、まあいいや、俺は浜で遊ぶわ」

横島は、女の子と遊ばずにどうするとレオに言おうとしたのだが、無駄だろうと思い、言わずにいた。

「そうか？だったら、もうひと泳ぎしてくる」

レオはそう言つて、飲み物を飲んだ後、直ぐに海に走り、泳いで沖に出て行った。

「……元氣な奴だな」

「……そうだね。僕もついて行くのがやっとだったよ」

沖に泳いでいくレオを見て、横島と幹比古は呆れるように言つていた。

休憩後、

木製の小さな手漕ぎボートで沖に出ることになった。

美月と幹比古は休憩するとの事でビーチパラソルのサマーベットで横になっていた。

美月と一言二言、話していた様だが、幹比古は視線を美月からずらし顔が真っ赤になっていた。

二艘のボートは

横島が漕ぎ手で、雫、エリカ

達也が漕ぎ手で、ほのかと深雪

と分かれて乗り込む。

最初は並んで沖に向かっていたのだが、達也のボートがスピードを上げ先に進む。

「横島、もっと速く!!」

エリカは何故か対抗意識を持ち、先に行く達也のボートを見て横島に言う。

「疲れるし、ヤダ」

「私も横島さんが早く漕ぐとこ見たい」

「いいじゃない、雫もこう言っているんだし」

「はー、しっかり掴まってるよ」

横島は溜息をついてから猛スピードでオールを漕ぎだす。

「フンフンフンフンフン!!」

ボートの前底が浮き上がり、モーターボートの様な推力で加速し進みだした!!

ズバババババババー!!

追い詰められた横島はママチャリでさえ、自動車並みのスピードで走ることが出来るのだ。このぐらいの事は何なりと出来てしまうのだ。(大いにギャグ補正が働いているのだが)

「わっ!!」

「何？速!!」

雫とエリカは急な加速に驚くが、楽しそうだ。

そして、達也達のボートを抜かしていく。

「おっ先—————!!」

エリカが抜き際に達也達に声を掛ける。

「達也さん!!」

「お、お兄様!!」

ほのかと深雪もそれに対抗意識を持ったのか達也に速く行くようにと声を掛けた。

達也もそれに応じようとするが、普通この世界で手漕ぎボートを漕ぐ機会などめったにない。手慣れて漕ぐ横島に追いつくハズが無い。

しかし、そこは魔法でカバーをする。ボートの船体下に表面張力増加魔法とそして加速魔法を使い、勢いよく追いつがって行った。

横島、南国の海を楽しむ!!その2

横島組、達也組のボートは猛スピードで競争しながらしばらく進み、二艘は並走したところで漕ぐのをやめる。ふと見ると小島のビーチがかなり小さく見えるところまで来てしまっていた。

「はー！ー疲れた!!」

横島はそのまま後ろに倒れ、仰向けになる。

「横島さんありがとう」

「はー！ー楽しかった!!」

横島の正面で並んで座っている雫とエリカは楽し気にそう言った。

「高校に入って、こんなに楽しく過ごせるなんて思ってもみなかった」
エリカはこんなことを言い出していた。

「私も、魔法の事だけを考えて学校生活をするんだと思っていたから、今は楽しい」

雫は無表情ながら、エリカの話にのり、同意した。

「あんたはどうなのよ?」

「俺か?……俺は楽しいかな、可愛い女の子いっぱい居るしな!!」

「あんたはそればかりね」

「俺のモットーは楽しく過ごす事だからな!!」

「あんた見てたら、悩んだりしているのが馬鹿らしくなってくるわ」

「なんだ?エリカでも悩んだりすることあるのか?」

「あるわよ!!……まあ、人並みにね……」

エリカはそう言い返すが、後半は声が小さくなる。

「まあ、誰だって大なり小なり悩みの一つや二つあるか」

「横島さんはあるの?」

雫は横島に質問を返す。

「そりゃある!!……このノゾキ防止用ブレスレットをどうやって外そうかとか?」

横島は深く考えるようなしぐさをして、答えたのがこれである。

「あんたって、全然ぶれないわね」

エリカは呆れた様に言うが、どこか楽しげだ。

暫く、ボートの上で、海の上を漂い。思い思いに風景などを見たりして楽しんでいたのだが……

バシャーーン!!

達也達が乗るボートが突如転覆したのだ!!

「はっはっはー!!!驚いたか!!……やり過ぎた?」

沖まで遠泳をしていたレオが密かに達也達のボートに近づき、水面から急に現れ脅かしたのだ。

それに驚いたほのかは、急に立ち上がり後ずさったため、小さなボートはバランスを崩し転覆したのだ。

達也、深雪、ほのかは海に投げ出されるが、達也は魔法『水蜘蛛』を発動して水面に立ち、深雪は、ジャンプして転覆したボート上に立つ。

ほのかはそのまま、海に投げ出され……浮いてこない。

「ほのか!!ほのかは、泳げないの!!」

雫はその様子を見て、普段の彼女には考えられないぐらいの大きな声で、達也達に叫び、そして、自らも海に飛び込んだ!!達也はその声に反応し、海に潜ろうとする。

しかし、ほのかが海中から勢いよく飛び出てきた。

いや、横島がほのかを肩車をして、海から飛び出してきたのだ。そして転覆したボートの上にそのままバランスを取り着地。

「おっと」

横島は雫が声を上げる前に海に飛び込み、海中でおぼれているほのかを助けだしていたのだ。

しかし、状況を見た達也はサツとほのかから視線をずらし、後ろを

向く。

レオは、ほのかを凝視しポカーンと口をあけたまま顔を真っ赤にし、片鼻から鼻血が垂らしていた。

横島はそんな反応をする男性陣に疑問を持ちながら、

「お前らどうした?……ほのかちゃん大丈夫?」

そう言つて、肩車をしているほのかに視線を移そうと、上を向こうとする。

「ダメ!!」

ほのかは横島の頭を無理やり、両手で押さえつける。

そう、ほのかのセパレートの上水着が、濡れた拍子か、横島が勢いよく海から飛び出した拍子かで、外れて、その豊満なバストがあらわになっていたのだ!!

深雪はほのかを凝視しているレオに向かって叱りつける。

「西城さん!!」

レオは海面で鼻を抑え慌てて後ろを向く。

「横島さんのバカーーー!!」

ほのかは涙目になって片腕で胸を隠し、片方の手で横島の頭をポカポカと叩く。

「痛い、痛いってほのかちゃん?ど、どうしたの?」

横島はまだ気づいていない。

雫が泳いで、転覆したボートに近づき、海面を漂うほのかの上水着を回収し、横島の目の前に掲げ、そして、深雪に渡す。

「あっ!!たはははははっ!!……ごめん。ほのかちゃん」

ようやく状況が分かった横島は、頭をポカポカ叩かれながら謝る。

深雪から水着を受け取り、ほのかは素早く着用する。

エリカがボートを漕いで、転覆したボートの真横まで付けていた。

横島はほのかが頭を叩くのをやめたため着用が済んだと悟り、エリカが居るボートにほのかをそつと下ろした。

男連中は転覆したボートを元に戻し、全員ボートの上に正座。女子陣はエリカが乗っていた方のボートに乗って、男性陣を見据える。

ほのかはと言うと泣いている様で、雫が慰めていた。

「なぜ、俺まで」

達也は隣の横島に聞こえる程度の小声で愚痴をこぼしていた。

「あほ、悪くなくても、男が悪なのだ」

横島は、小声で達也に返す。何をしてもいつも怒られている横島は慣れたもんである。

「お兄様？何かおっしやいましたか？……お兄様も同罪です。見たんですから」

深雪はどうやら達也の小声の愚痴が聞こえて様だ。その視線は冷たい。

深雪の声に反応して、ほのかは涙ながら言う。

「グスツ、達也さんも見たんですか……グスツ」

「……すまん」

達也はもはや意見などいえない状況だ。

「まあ、圧倒的にレオが悪いのだけど……」

エリカはレオを睨み付ける。

「すみませんでした!!」

レオは潔く謝る。

「やーい、怒られてやんの」

横島は小声でレオに子供じみた事を言う。いつも横島が一人怒られているのだが、今回は仲間がいる事で、心に余裕があるようだ。

「横島さんもです。ほのかの水着が流されているのを確認しようと思えばできたはずですよ」

深雪は横島にも、底冷えする目線を送りそう言った。

「……すみません」

「そうね。男連中にはちよつとしたペナルティが必要ね……」
エリカはそう言つてニヤつとし悪そうな顔をだす。

今、二艘のボートは沖から浜に向かつて移動している。
メンバーはこうだ。
涙が止まらないほのかと慰め役の雫と深雪。
そして、もう一艘はエリカと横島だ。

達也とレオと言うと……

「お兄様と、西城さん頑張つて!!」

「うん、頑張つて」

深雪と雫がレオと達也に声を掛ける。

「うらーーーーー!!」

「なぜ、俺まで」

レオと達也は海につきかり、ほのかたちのボートの後方を掴み、一生懸命バタ足をしている。

いわば、人間エンジンと化していた。

これがエリカが考えたペナルティなのだが、横島はほのかを助けたのとはのかのバストを見ていないという事で許され、エリカと共にボートに乗り、普通に漕いで戻って行くのであった。

横島、エリカの悩みを聞く!!

ほのかのポロリ事件で、制裁を受けるレオとそれに理不尽にも巻き込まれた達也は、ほのか、雫、深雪を乗せたボートを沖からビーチまで、バタ足で押して進んでいた。

一方、エリカを乗せたボートは横島が普通にオールを漕ぎビーチに向かっている。

「あくあ、達也も災難だな、深雪ちゃんって結構嫉妬深いって言うかなんていうか……エリカが言い出したんだからな」

「私だって、ちよつと悪ふざけが過ぎたと思っっているわよ。最終的にレオだけが被るもんだと思っただけだし、深雪がね……」

そう、この件で深雪が達也を許さなかったのだ。冷気がこちらにも漏れ伝わってくるほどで、取り繕う事が出来なかったのだ。

「ま、これもいい経験だ、俺が何時も受けている仕打ちがどれだけ理不尽なのかわかっただろう」

横島はシレつとこんなことを言うが、ほぼ発端は横島であることが多いのだ。

「ほとんどあんたが原因でしょ!!」

エリカの言はもつともである。

「あのさ……さつき悩みでもあるのかって聞いたわよね」

珍しくエリカは横島に何か聞きにくそうにこんな言い方をする。

「なに？変なもんでも食った？」

何時もらしくないエリカに横島におどけてみせる。

「違うわよ!!……普段のあんた見てるとつい忘れちゃうけど、氷室家の人間なのよね」

「前も言ったが俺は末端だぞ。氷室と名乗っていいのかもわからんレベルだ」

「でも、氷室家とか、私が千葉家だったりとか、十師族の人間にも、歯

牙にもかけない感じじゃない？二科生だからってなんにも感じてない様だし、なんで平然としていられるの？」

何時もの元気なエリカ口調と違いトーンが低い。

「何言ってるんだ？」

「私が千葉家だって言っても動じないし、あの九島烈にだってため口だし」

「レオだって達也だってみんな、別に気にしてないだろう？」

「どうやらエリカは家の事で思い悩んでいるようだ。」

千葉家は剣術の大家であり、軍や警察にも指南し、政治的影響力も非常に高い。

そんな千葉家なのだが、エリカが千葉の名前を名乗りだしたのは極最近なのだ。エリカは俗に言う愛人の娘だった。

生れた時から千葉家の別邸で過ごし、複雑な家庭環境の中過ごしてきていたのだ。

「そうなんだけど……氷室家でのあんたはどんなかんじなの？」

「どうって言われてもな……親戚の人？って感じかな。自分の両親を知らないしな。特に不都合を感じたこともないし、みんな優しいしな。と言うか俺は他の家がどんなのか知らないからわからん」

「横島……両親知らないって……あんたってほんと肝が据わってるのね」

「エリカだって相当なもんだぞ。戦闘に出てもへっちらそうだしな」

「私は父親に認めてもらうために一生懸命剣術に励んできたの。だから、高校に入っても誰にも負けなかつもりでいたのだけど、達也くんや深雪たちを見ていると……その自信もね。」

最初はある見た時はただのバカだと思っていた。何時もバカの様な騒ぎを起こして、魔法も全然使えないし、氷室家って名乗っても、態度は全然変わらないし氷室家でも下っ端なんだって、だから心の中で見下して、自分自身を安心させていたんだと思う。

でも、違ってた。九校戦で見せた横島の力は本物だった。魔法が全く使えなかったのに、戦闘に使えるまで努力してた。そして、その体。

一朝一夕で出来るような体じゃない。コツコツと真面目に修行を積んできて鍛えないとそうはならない。

何があっても動じない。何言われても、バカにされても本気で怒ったところなんて見たことが無い。何でいつも平然としてられるのかって、そんなに強くいられるのかって、最近の横島を見てると特にね」

エリカは表情には影を落とさず、横島に弱音を吐いていた。

同じ二科生であるレオや幹比古も九校戦で活躍し、いまままで下に見ていた横島がかなりの実力者だと今はわかり、何もできていない自身と千葉家の中での自分の立場とで思い悩んでいる様なのだ。

「エリカが何に悩んでいるのかピンとこないが、エリカだって十分強いと思うぞ。実戦だったら学内でも10本の指に入るじゃないか。

あと、俺は強くないし、悩みだつてそれなりにある。それを補うために体鍛えている様なもんだ。

うーん。うまく言えんが、強さにはいろいろある。エリカはエリカの強みを鍛えたらいいんじゃないか？」

「……………」

「さっき、学校が楽しいって言っていたよな？」

「それはそうなんだけど」

「それだけ心に余裕が生まれているってことだ。だから悩みも出てきたんじゃないのか？」

「ふふっ、まさか、横島に悩みを聞いてもらう日が来るなんて、出会った時には思いもよらなかつたわ。少し楽になった。ありがとう……後は自分で考えてみる」

エリカは気恥ずかしそうに横島に言う。

「たはははははっ、全然解決になつてないと思うけどな！どう見たって俺が一番悩み相談に向いてなさそうだぞ。まあ、愚痴くらい聞いてやってもいいけどな」

横島もついで、語ってしまった事に気恥ずかしさを覚えた様だ。

「そう言えば、あんた一度私と手合せしなさいよ!!あんたのその体、剣術か武術をやっている様な体つきよ」

エリカは思い出したように横島に言う。

「えーいーいよいよなくて、エリカ一回でも負けたらめんどくさそうじゃん」

「何よ、あんた言うじゃない？これでも千刃流剣術印可なのよ!!」

エリカは何時もの元気が戻ってきたようだ。

別荘に戻り、それぞれシャワーを浴び着替えを済ませ、夕食の時間まで部屋で休憩していた。

「達也、災難だったね」

幹比古は達也にそう言った。

「ああ、横島の気持ち少しわかった気がする」

達也は時に女性陣（主に深雪）が感情に任せ理不尽な行為をすることをこの時、十分理解したのだ。

「ほんとだぜ」

レオも同意するのだが。

「お前は違うだろ」

「レオは自業自得だね」

達也と幹比古は間髪入れずレオに突っ込む。

「ところで横島は？」

「なんか先に行くって外に行っただぞ」

レオはそう答えた。

夕食はビーチでバーベキューなのだが、まだそれまで時間がある。

横島は外に行き、島の岬の先端で夕日を眺めていた。

（ルシオラ、俺、ちゃんと生きていけそうだ）

横島、夏の思い出をもう一つ!!前

横島は岬の先端で夕日をしばらく眺めていた。

「横島さん……あの……」

雫はそんな横島の後ろから声を掛ける。

雫は、ほのかを慰めた後、横島が外に出て岬の方へ歩いて行くのを見かけていた。

バーベキューの準備がもうそろそろできそうだったため、横島を呼びに来たのだが、夕日を眺めている横島の目は誰かに話しかけている様に見え、大人びた雰囲気醸し出し、声を掛けるのを躊躇させるようであった。

「ん？雫ちゃん」

振り返った横島は何時もの、優しい気な感じであった。

「横島さん、その、さつきは、また、ほのかを助けてくれてありがとう」

さつきの横島の雰囲気にもまれていたが雫は深く頭を下げていた。

「たはははははっ、大した事はしてないよ」

横島は照れたように答える。

「でも……うん」

雫は、さつきまでの横島の雰囲気が気になって仕方が無かった。先ほどの横島の目は何処に向いていたのか、その先に何を見ていたのかを……

「そろそろ、夕飯かー、バーベキューだったね。肉っ肉っー腹減ったし喰うぞ！雫ちゃん行こうか」

そう言っつて、雫の頭をポフッと手を軽く置き、前にでて別荘に戻って行く。

雫は先ほどまで無表情ながら不安そうな顔をしていたが、横島が手を置いた後の自分の頭を撫でながら嬉しそうに後について行くのだった。

「ごめんなさい!」

雫が横島と共にビーチのバーベキュー場に戻ってくると、ほのかが横島を見かけるなり、勢いよく頭を下げた。

「ん?」

「助けてもらったのに、その、頭を叩いてしまった」

ほのかは若干顔を赤らめながら、申し訳なさそうに横島に言うのだが

「そんなの気にしなくてもいいのに、別に痛くなかったし」

横島は全然気にしていない様だ。

「でも……」

「いいって、悪いのはゼー……んぶ!!レオだ!!」

そう言い切って、横島はレオに向かってビシツと指をさす。

「もう、勘弁してくれ、まじで悪かったって!!」

レオはげんなりした顔をして、横島の言葉に反応する。レオはビーチに戻って来てからも、ほのかに謝り続けていたのだ。

「たはははははっ!!」

疲れ切った顔をしているレオの様子を見て大きく笑う横島。

その後はプチバーベキュー会場は明るい雰囲気に含まれる。

その日の夜22:00

「達也ー、俺も大浴場で入りたいから、この警報機ブレスレット取ってくれよ。今だったら女子連中はいないしいいだろ?」

横島は達也にそう言った。

実はこの警報機ブレスレットがあるために、横島だけ大浴場で風呂に入っていないのだ。個室のシャワーで済ませていたのだ。

「ダメだ」

「えー、なんでだよ。大浴場つてすげー豪華なんだろう？折角の旅行なのに俺だけのけものかよ」

「達也、いいじゃない？もう女子も使わないだろうし、横島だけ可哀そうだよ」

幹比古が横島のフォローに入ってくれた。純粹に可哀想だと思っ
ている様だ。

「こいつは何しでかすかわからん」

達也は断固として拒否をする。

「今日の仕返しかよ!!俺だけ無罪放免だったからって、……俺が普
段喰らっているあの理不尽さがちよつとはわかっただろ？ちよつと
は俺を労われ!」

「……………」

「達也、妹が居るからってそこまで警戒するなよ、俺も一緒に行くから
許してやれよ」

レオもフォローに入り、横島と一緒に大浴場に行く事を提案する。

「チツ」

しかしそんなレオの親切心に横島は何故か小さく舌打ちをする。

「……………」

達也は一瞬訝し気な顔をするが

「僕も行くからさ、……それだったらいっそ達也も一緒に来ればいい
じゃない。皆で行った方が警戒せずに済むし、楽しいよ」

間髪入れず、幹比古がレオの意見に乗って、全員で行く事を追加提
案をした。

「はあ、わかった」

達也もそれではやく了承し、横島の右手にはまっている警報機付
きブレスレットのカギを外す。

横島は、ブレスレットを外しながら一瞬イラついたような顔をして
いたが、その後、何か閃いたような顔をしたあと、何故かニヤつと口
を歪ませた。

「おう、レオも幹比古もサンキュウな!!達也は、今度覚えてろよ!!」
そう言つて、タオル等を用意する横島。

「おおおお!!すげー豪華!!何だこれ、室内なのに露天風呂みたいになってるぞ!!」

横島は脱衣場からガラリと扉を開け大浴場に入り、歓声をあげる。広々とした浴場は、まるで高級旅館並みに広い。しかも室内なのに岩がゴツゴツとした露天風呂調、浴室の真中には大きな岩山が出来ており、そこからお湯が流れてきている。

そして、窓の外は一面パノラマで星の海が広がり、星光と月の光で薄っすらと海が煌めいて見えた。

もちろん外からは中が見えない様マジックミラーとなっている。

「ふー、やっぱいいよね。ここって天然温泉らしいよ」

幹比古は湯船につきりながら、横島に話しかける。

「おい、泳ぐなレオ」

達也は、子供の様にはしやぐレオに注意する。

「はっはー!俺たちしかないからいいじゃねーか」

そして、4人は浴槽の真中の岩山を背に、外の景色を並んでみている。

「綺麗だね」

幹比古である。

「幹比古ー、そう言うことは女の子に言えよ……たとえば美月ちゃんとか!!」

横島はふーとおっさん臭く、声を上げながら、幹比古にため息交じりに言った。

「なな、なんでそこで柴田さんが出るんだよ」

幹比古は顔を赤くして抗議する。

「いや、例えばだっついていったらどろ?幹比古は分かりやすいなー」

横島は、半目で幹比古を見やって言う。

「何が分かりやすいんだ?」

レオはこういう話にはとことん鈍感なようだ。

「……レオ、お前はもつと大人になった方がいいな」

達也は冷静にレオにそう言った。

「たくっ何なんだよー」

レオはふてくされた様に言う。

「でも、みんなで来れてよかったよ。北山さんに感謝だね」

幹比古はシミジミそう言っている。色々あつたがなんだかんだと楽しんでいた様だ。

「だな、いろんな意味で思い出になりそうだ」

レオはそう言う。今日やらかしてしまったこと、ほのかのバストをモロ見てしまった事は思い出として残るだろう。と言うかレオだけ役得である。

「ふっふっふー忘れられない思い出はこれからぞ、ちよつとしばらく静かにしてくれ……」

横島は不気味な笑みをしながら意味深な事を言う。

「「……………」」

暫くすると……

「フフフーン♪フフフーン♪」

すると、脱衣場から鼻歌が聞こえてきた。しかも女性の声でだ!!

どうなる男性陣？

ピンチとなるかそれとも天国となるのか？

横島、夏の思い出をもう一つ!!後

横島たち4人は浴槽の真中の岩山を背に、外の景色を眺めながら語り合って居たのだが……

「フフフーン♪フフフーン♪」

脱衣場から鼻歌が聞こえてきた。しかも女性の声でだ!!

「な?」

達也はいち早く気づき、声を上げるが、横島に口を押えられる。

そして、横島は指を立て口にあて、シーと静かにするようにレオ、幹比古、達也に言う!!

では説明しよう!!

横島は、バーベキューの時に雫と黒沢女史の会話をその横島ドスケベイヤードで聞いていたのだ。

横島は知った。ハウスキーパーの黒沢女史が、片付けなどの仕事が終わった後に大凡22:30にここ（大浴場）を使用する事を。

そして、達也に腕輪を外すよう要求、確かに女子連中はここを使用しない。しかし横島のターゲットは初めから黒沢女史だったのだ!!

本来単独で行く予定だったのだが、レオ達の介入でご破算になるかと思われた。しかし、それさえも利用したのだ。さらに、男子全員道連れにし、図らずとも密告出来ない状況を作ったのだ。

風呂に行く男子たちの最後方に付き、他の男子共が脱衣所に先に入ったのを見計らって、女風呂と男風呂の入口にかかっていた。男、女と書かれた暖簾を一瞬で入れ替えたのだ。

そうこれは、横島が考えた覗きに行くのがダメだったら、自然に見えるちやう状態を作ったらいんじゃない?作戦だったのだ。

横島脳内変換で黒沢女史ならば、しがらみ無しとの判断をしたのだ!!

そして、小さな声で男連中に言う。

「お前らに大人の女性の素晴らしさを見せてやる」

「ゴク」

生唾を飲む、レオと幹比古。

達也は今さら出て行く事も出来ず、観念し岩山の陰に隠れた。

「見つかったも堂々とするのがコツだ。そうすればきつと受け入れてくれる。相手は大人だ!!おこちゃまな女子連中とはわけが違う。一緒に混浴が出来るつてもんだ。ふはっ!」

横島の目は既にスケベな目に代わっていた。

ガラリと浴場の扉が開き、黒沢女史が入って来た。

しかし、湯気でよく見えない。

先にシャワーで汗を流す様だ。シャワーから出る水の音が浴場内に響き渡る。

レオは、既に鼻血がちよびつと出ていた。

幹比古は顔が真っ赤だ。

達也は気配を消して岩山に隠れていた。

横島は鋭い目つき……いや、鋭いエロ目線で状況を見据える。

ついに黒沢女史が湯船に近づいてくる。

横島の目は充血しグビビと物スゴい眼力でその瞬間を見ようとしていた。

そして、湯気が晴れる!!

………が

そこには顔はキツ目だが美人顔、髪は肩まで伸ばしている。

しかしその下は、女性特有のバストはなく、ボディビルダーのようなマッチョな肉体……胸筋がピクピク動き、腹筋は8つに見事に割れている。

そして、さらにその下には、そそり立つバットと球が2個備わっていた!!

黒沢女史ではなく黒沢氏!!

お姉さんではなくおネエさん!!

胸のポリウムは巨乳ではなく胸筋!!

そして、凶悪な巨大なバットとゴールデンボールを二つ備えている

!!

男性陣は全員石化する!!

ストーン横島!! 風神像風!!

ストーンレオ!! 雷神像風!!

ストーン幹比古!! 考える人風!!

ストーン達也!! 大仏風!!

「アレ? 先客?」

黒沢氏は石化した様に固まっている横島たちに近づく。

歩き方はクネクネしているが、鋼の様な筋肉がそれをより一層シユールに見せる。胸筋は常にピクピクと動き、下半身の凶悪なものはブルンブルン左右に振れている!!

「あらやだ? みんないたのね? ……ポツ、みんないい肉体(からだ)しているじゃない!!」

ガシャーーン!!

そして、全員岩が砕けて様に崩れ去る。

「アレみんなどうしたの?」

横島がいち早く精神的ダメージから復活して、

「たはっ! たはははははっ!! しっつれー! しましたー!」

横にいるレオと直ぐ後ろに居る幹比古の腕を引っ張り、ピューーと脱兎のごとく浴場から脱出。

バターーンと扉を閉め。パンツだけ履いて、すっぽんぽんのまま固まったレオと幹比古の腕を取り引っ張りあげる。

後ろではマツスル黒沢に、岩山の裏で隠れ固まったままの達也が見
つかったようだ!!

「あら、司波くんも居たの……あら、いい体ね……!!おネエさん
にちよつと付き合いなさいよ!!」

「うぐわー!!」

達也の叫び声を始めて聞いた横島!!

「す……すまん達也あ!!お前の犠牲は忘れない!!」

そして、ビューンと脱衣場をすっぽんぽんレオと幹比古をたなびか
せ、風のように走り抜け、居室に戻る。その間エリカに遭遇した様だが、
気にはしていられない。

部屋に入り、勢いよく扉を閉める横島。

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ、あ……危なかった」

レオと幹比古をベットのの上に放り投げ、

その衝撃で二人は意識を取り戻す。

そして、ベットの縁に座り項垂れる二人。

横島は二人にタオルを投げ渡す。

取り合えず二人はタオルを腰に巻いた。

「な……なんだったんだ……」

レオは青ざめた顔をしている。

「う……う……うえ……」

幹比古は泣きそうな顔をしながら、えづいていた。

「たはっ!たはははははっ!!まあ、こういう事もある!!」

横島は乾いた笑いをしながら、二人の肩をポンと叩き慰めようとす
る。

「横島、さすがにしやれにならん」

「なんてものを見せるんだよ」

レオと幹比古は憔悴しきった顔で横島に抗議をする。

「な……なんか、すまん」

素直に謝る横島。

パターン!!

勢いよく扉を開く、達也が戻って来たのだ。

「ぜえ、ぜえ」

「お……おまえ大丈夫だったか?」

横島は達也に声を掛けるが返事が無い。

達也は全身ずぶ濡れで、腰にタオルを巻いているだけの状態だ。

達也は下を向いたまま、スタスタと自分の荷物の所まで行き中身を漁る。

その様子は何故だか声を掛けられないぐらい殺気立っていた。

カチャリ

達也はスツと立ちあがり、振り向きざまに自前のCADシルバーホーンを横島に向かって構える。

くわつと目を見開き!!

「よくも、よくも……横島……勝負だあ!!」

あの達也が叫んだのだ!!目は充血し、血走っていた!!

よく見ると、達也の頬や首筋と胸筋にキスマークがついていた!!

「お、落ち着け達也、置いてきたのは謝る!!いや……まさか!」

「横島……!!」

血走った目で横島にじりじりと迫る達也!!

「本当にお前……すまん!!お前が無抵抗にされるがままになるなんて……ポラギノール(痔の座薬)いるか?」

「俺にはそんな趣味ない!!レオと一緒にするな!!」

達也は真っ向から否定したが……何故かレオも巻き合いにした。

レオは下を向き、プルプルと震えだし、そして、ノロノロと立ち上がり服を着る。

「フン!!女なんか興味ないな風に装いやがって、そっちかと思われても仕方ねーぞ!!実はムツツリのくせに!!」

達也はもはや言葉も出さず。

シルバーホーンから魔法を放つ!!

シユウ!!

横島自慢のしましまトランクスが霧と化し消え去った!!

「……死にたいらしいな!!次ははずさん!!」

「何しやがる!!本当の事言われたからって!!童貞ムツツリキング幹比古の次位ムツツリだぞ!!このムツツリ地味メンめ!!」

横島は達也と言い争いしているはずなのだが、幹比古を何故か巻き込んだ!!

幹比古は、凶悪な笑みを浮かべながらノロノロと服を着る。

「一緒にするな!!許さん!!覚悟しろ!!」

「ちよつとイケメンだからって!!いいだろう!!返り討ちだ!!」

横島はそう言つて、窓から外に飛び降り、達也はそれを追いかけて、ビーチで戦闘が始まったのだ!!

ちなみに横島はスツポンポン、達也はタオル一枚腰に巻いてるだけだ。

ズバーーーーン!!

ズババババーーーーン!!

そんな中、

レオは、服を着おわると、自前のCADを装着!!

幹比古も服を着おわると、自前のCADと呪符を取り出す!!

「あいつら許さん(許せない)!!」

そう言つてレオと幹比古も窓から飛び降りて、戦闘に参加!!

ガゴーーーン!!

バシ!!

スガーーーン!!

ボスン!!

「変態が!!」「この皮被りヘタレ!!」「脳筋子供男!!」「地味ムツリ!!」「万年発情男!!」「草食系ムツリ!!」「空気読めんダメ男!!」「重度のシスコンにロリコン!!」

4人の男たちは、聞くに堪えない暴言を吐きながら、魔法の応酬戦!!

そして、翌朝

朝早く、まだ女子陣が寝ている中エリカは一人ビーチに行き、剣術の練習をしに行こうとしていた。昨日横島に相談し何となく答えが見えてきたからだ。

それに、昨日裸の横島とレオと幹比古を見た気がしていたのだが、そんな事はみんなには言えず。遊び疲れて良からぬ妄想を抱いてしまったと思い。羞恥に苛まされよく眠れなかったのだ。

しかし、ビーチに行く道程で、幹比古がボロボロになって倒れており、次にレオがこれまたボロボロの状態でヤシの木に持たれかかっていた。二人共意識が無い様だ。

そして、その先には……

「…盛りのついた…サル島」

「この…地味ーヘンドリックス」

悪口なのかもよくわからん暴言?をお互い吐きながら、意識ももうろうと素手で殴り合っている達也と横島がいた!!彼らは一晩中ケンカをしていたのだ!!

いたのだが……彼らは!!

横島……スツポンポン!!

達也……腰にタオル!!

(イケメンはどんなに戦闘が激しくてもタオルは腰から外れないのだ!!)

エリカは顔を一気に真っ赤にして!!

「いやー……」

今まで聞いたこともない女の子らしい叫び声をあげ、持っていた訓練用の重めの木の棒を二人に投げつける!!

「ゴスツ」

両者の頭にクリーンヒット!!

そして、ダブルノックアウト!!

この、くだらない戦闘(ケンカ)はこうして幕を引いたのだった。

その後、彼らは全員、いみじくも黒沢氏の手厚い看護を一日中受ける羽目になる。

女子からは、ケンカの原因を聞かれるが、誰も頑なに答えない。

そして、彼らは何故だか皆スツキリした顔をしていた。

こうして2泊3日の内1日を無駄にし、旅行は終焉をむかえ、彼らの夏は終わった。

彼らは(横島以外)思う。

(二度と覗きはしないと!!)

しかし、ひと夏の思い出と作りとしては十分すぎる成果を上げた!!

そして、男たちは殴り合い互いを認め、旅行前より良好な関係を築いて行くのだった。

横島横浜騒乱編

横島、二学期が始まる!!

夏休みが終わり、2学期初登校日

横島は教室に入ると何時もの光景と違い、人だかりが出来ていた。人数からする他のクラスからも来ているのだろう。

「ウィーンスって、なんだか人がいっぱいだな」

横島はそんな感想を漏らしながら席に付こうとする。

「あっ!」

「横島だ!」

「横島くん、おはよう」

普段あまり話さないクラスメイトや他クラスの生徒が横島が教室に入ったのに気づき、声をかけられる。

「おう! って何これ? なんかあんの?」

横島は返事をしつつ、教室にあふれんばかりの生徒がいる事に疑問の声を誰と無しに上げる。

人だかりの一部が横島の周りに来て、まくしたてる様に、それぞれ一斉に色々話かけてくる。

「九校戦見たぞ!!」

「おまえ、強かったんだな!」

「感動したぞ!!」

「二科生でも、九校戦でも戦えるってことをお前ら4人が証明してくれた」

「一年の一科生男子は全然活躍してなかったからな、鼻っ柱折れただらう!!」

「爽快だぜ!!」

「たははははっ」

状況がいまいちつかめない横島は愛想笑いをしながらキョロキョロと周囲を見渡し、疑問に答えてくれる人を探す。

「エリカ、何これ？どいう事？」

人だかりの隙間からエリカを見つけ、説明を求める。

「どうもこうもないわよ、九校戦であんたたちが活躍したから、二科生の間で朝からお祭り騒ぎなのよ、こっちの人だかりの中に達也くんや幹、レオが居るわよ」

エリカも若干ウンザリしたような顔をして横島に答える。

「なるほど!!それ程でもある!!ふはははははっ!!」

横島は直ぐに調子に乗る癖がある。

直ぐにホームルームが始まり、集まった生徒達はそれぞれの教室、それぞれの席に付く。

各授業の合間の休み時間も、彼ら4人には人だかりが出来、昼休みさえも人が集まって来て、一日中バタバタとし、お互い話もできない状況であった。

放課後、達也と横島は風紀委員会へ、深雪は生徒会、他の面々は部活等に行き、それぞれの活動が終わった後、学校近くの行きつけの喫茶店で集まる事になっていた。

喫茶店には横島と達也が最後に到着し何時ものメンバーが全員そろった。

「たはははははっ、ごめん、まった？」

「すまん。遅くなった」

「今日はなんだか大変だったね」

「クラスは九校戦の話題でもちきりだった」

「そうね」

ほのかと雫、深雪もどうやら、クラスで九校戦の話で、いろいろと聞かれたりと大変だったようだ。

「深雪たちもなんだ。うちのクラスも酷かったわよ、ひっきりなしに人が来て騒ぐもんだからいい迷惑だったわよ」

エリカはウンザリした顔をしていた。

「仕方ないよエリカちゃん。うちのクラスは4人も九校戦優勝者がいるし、しかも、二科生で初めてうれしいから余計に」

美月は苦笑いをしながらそう答える。

「まあね。でもほぼお祭り騒ぎだったわね」

エリカはジューズの氷をかき混ぜながら言う。

「うーん、私たちはそこまでじゃないかしら」

深雪はエリカ達にそう言った。

まあ、深雪の場合は、一科生という事もあるが、美人ぞろいの深雪たちのグループには気軽に話しかけにくいという事もあるだろう。

「あんたさつきから浮かない顔して、さすがの横島もウンザリってわけ？」

エリカはさつきから黙っている横島に話を振る。

「……一つ疑問がある」

「何？」

雫が相づちを打つ

「なーーんで、達也やレオや幹比古たちは女の子ばかりに囲まれていたんだ？なーーんで俺だけ男ばかりなんだ？」

横島は純粹に疑問に思った事を口にした。

そう、達也、レオ、幹比古達は、スマートな勝ち方をし、新人戦モノリス・コード優勝をしている。

しかも彼らのビジュアルもある。達也は地味目だがイケメンだ。レオは快活なイケメン。幹比古は草食系イケメンなのだ!!そんな彼らが、二科生でしかも、第一高校として絶体絶命のピンチに急遽出場することになり、サクセスストーリーさながらに九校戦に勝ち進み強豪を破って優勝までしたのだ!!同学年の二科生女子だけでなく、一科生女子もこの手の話に騒がない訳がない。昼休みには一年生だけでなく、上級生からも声を掛けられる始末。

一方横島と言うと、話しかけてくるのはほぼ男。横島は不細工とまではないかないが、彼らに比べればビジュアル的に劣る。しかし、そこ

ではない、横島の戦い方に問題があるのだ。笑いを誘ったり、無様だったり、卑怯だったりと（本人は至って真面目にしていたのだが）泥臭く、とても女の子受けするものではない。逆に言うところ、玄人好みをする戦い方なのだ。

同学年の二科生男子からは圧倒的な支持を受けるが、女子からはほぼ声を掛けてもらえない状況だ。

昼休みや、放課後に至っては、運動系の部活のゴツイ先輩方から引つ切り無しに勧誘され、さらに悪いことに、一部の一科生からは魔法師らしくないと絡まれる始末。

横島はさらに続けていう。

「風紀委員で俺と達也が一緒に巡回してるってのに、達也は上級生のお姉さま方に囲まれて、キャピキャピした甘い空間を……俺にはゴツイ、マツチヨメンなお兄さま方に、囲まれ、もわっとした空間になる……なぜだ!!同じ九校戦優勝者なのにこの違い!!顔か?顔なのか?イケメン優遇なのか!!何が実力主義だー!!不公平だ!!」

最後には何時もの雄たけびに変わっていた!!

魔法の実力主義であって、色恋沙汰とは無関係であるが、横島にとっては一緒の様だ。

「へえー、お兄様はお仕事をなさらずに、女性の方々と過ごされていたのですか……」

深雪は抑揚のない声で達也にそう言う。そして、ひんやりとした冷気が深雪から放たれた。

「横島……違うぞ深雪、九校戦について聞かれただけだ」

達也は横島にひと睨みしてから、深雪に言い訳じみた説明をする。「まあ、横島だからしかたないんじゃない?と言うか幹もレオもずーっと鼻の下伸ばしてたしね。全くだいご身分よね」

エリカは横島にそう言いながらも、幹比古とレオに皮肉を言う。

「誰が鼻の下伸ばしたって?」

「そ……そうだよ!!」

レオと幹比古は反論するが、幹比古は思い当たる節があるようだ。「横島さんの事は私が分かっているから……見る目が無い人が多い」

雫はそう言ってフォローをする。

「ありがと。雫ちゃん」

横島はわざとらしい涙目でそう言った。

「今日はマジ、バタバタだったからな。これ渡したかったんだ。海の時言っていた土産。ほれ」

そう言って、女性陣には氷室神社の色違いのお守りを全員に配った。中には水晶の欠片が入っており、実は横島は多少の治癒回復効果を付与させていたのだが本人たちは知らない。

女性陣はそれぞれ礼を言う。

「あー、美月ちゃんにはこれね。速水先生サイン入り氷室絹さんの本」

美月は目をキラキラさせて、受け取った本を頬でスリスリしていた。

「ありがとうございますう！一生の宝ものにします」

口元が緩みよだれが垂れかけている。

「お前らはこれだ」

どうやら、よくあるお土産のお菓子の様だが

そこには『人骨饅頭』とでかでかと書かれていた。

「物騒な名前のお土産だな、おい」

「えー氷室家の護符とか札とかないの？」

「……」

レオ、幹比古はお気に召さない様だった。

「言うと思った。まあ、騙されたと思って食ってみろ旨いから」

男性陣はそれを受け取り礼を言う。

こうして、横島たちの魔法科高校での2学期が始まったのである。

横島、次期風紀委員長と会う!!

二学期が始まって、2週間目

風紀委員では活動開始前の定例会を行っていた。

「この9月で私と辰巳が風紀委員会を辞任する。よって、10月から新たに2名任命されるのだが、先に1名慣れてもらうためにも来てもらっている。2年の千代田花音だ」

摩利はここにいる風紀委員8人にそう宣言する。

「千代田花音です。」

ショートヘアのボーイツシユな少女が摩利の横で挨拶をする。

「10月からは、この千代田を委員長に就任させるつもりでいる。色々教えてやってくれ」

摩利はそう言つて、花音の肩をポンと叩く。

千代田花音の千代田家は魔法師百家本流の一つであり、固有魔法である振動系魔法の地雷原は対陸上兵器に絶大な威力を持っており、その分野において十師族をものぐとも言われている。

花音本人も、九校戦でアイス・ピラース・ブレイクで優勝している実力者だ。

ただ、難点なのは、短気で大雑把なところがある。姉御肌なのだが、摩利と違い細やかな気遣いや、短絡的で長期的な展望を見るのが苦手なのだ。

しかしながら、摩利も花音を可愛がっており、花音も摩利を慕っている間柄でもある。

ちなみに、花音には許嫁がいる。同学年の五十里啓、草食系イケメンだ。2人がそろそろとラブラブ空間が形成され、他者が入る余地が無くなってしまう。

「では、出勤だ……達也くんは残ってくれ」

摩利はそう言つて、定例会を終わらせる。

他の風紀委員メンバーが本部室を出て行った後、
達也は風紀委員長のデスクまで行く。

ちなみに横島はこの定例会に出していない。既に横島には仕事の予約が入っておりそっちに行っていたためだ。

「達也くん、さっきも紹介したが千代田花音だ」

摩利は横で立っている花音を見やり達也に再度紹介する。

「1年E組司波達也です」

「千代田花音よ。司波くん、摩利さんから色々聞いているわよ」

達也は花音の含むような言に、何を聞いているのか気にはなっていたが、ここでは言及しなかった。

「達也くん、風紀委員の仕事に付いて花音にレクチャーしてくれ、しばらくの間教育係を任命する」

摩利は達也にそう言ったのだが

「えーっ、摩利さんが教えてくれるんじゃないんですか？」

花音は間髪入れず抗議する。

達也は達也でため息を付いていた。

「なんで俺なんですか？」

「達也くんは優秀だ九校戦での活躍をみただろう？説明も理論付けて行え校則にも詳しい。検挙率も言うことないが問題行動の遭遇率も高い。私が行くと生徒達は問題行動を起こさないからな」

摩利は花音にそう説明する。

摩利はある意味有名人である。学校内では生徒から恐れられている存在なため、生徒は委縮して問題行動を自粛してしまうか、摩利の前では回避してしまうのだ。

「……分かりました」

「なーるほど……まいつか、司波くんよろしくね」

そうして、達也、花音の二人は校内巡回に出動する。

「巡回ルートなどは特に決まっています。全部回る必要もありません」

ん。人によっては同じルートを毎日回っているようです」

「ふーん」

花音は摩利に言われた手前、後輩の達也の説明をちゃんと聞いている様だ。

「よう、司波！お前いつも隣にいる女が違うな」

「そんな事言ったら失礼よ、桐原君、千代田さんには五十里君が居るんだから」

剣術部主将、桐原武明と剣道部主将、壬生紗耶香である。

彼らは、ブランシユ襲撃事件の後、関係が進展し付き合っている。

「ふん、まあいいわ」

花音は桐原の言葉に反論したかったが、紗耶香のフオローで気分が良くなったようだ。

「なんで、司波が千代田と一緒に居るんだ？」

「桐原先輩、千代田先輩の教育係に任命されたんです」

「という事はあれか、渡辺先輩の後釜か。渡辺先輩も面倒見がいいって言うかあれか？宝塚みたいなものか？」

「へえー、聞き捨てならないわね。私と摩利さんが百合だっというの？」

花音は桐原の冗談を真に受けて、怒りを噴出させ、サイオン粒子を放出させていた。

「ちよ、百合なんていってねーぞ」

「問答無用!!」

花音は桐原に怒りに任せ魔法攻撃をしようとした。

達也は溜息を付きながら、花音の首筋を突いた。

「ひゃっ」

花音の魔法式は霧散し、顔を恍惚とさせながらも、振り返り達也を睨む。

達也は、今日の早朝訓練で九重八雲に快樂のツボなるものの点穴術を習ったのだ。

その効果靨面であったことに、達也自身も驚いていた。

「風紀委員が自ら問題を起こしてどうするんですか」

達也は花音を見据えて冷静にそう言った。

「だって…」

「だってじゃありません。そんな瞬間湯沸器みたいに短絡的でどうするんですか…今後は慎んでください」

「分かったわよ」

花音は口を尖らせそう言った。

達也は再度溜息をつき、やれやれという表情をする。

次に校舎外回りを巡回していた。

「あつ！あれは不審者で間違いないわね！よーし！」

そう言つて花音はCADを操作しようとした。

花音は不審者らしき人物を見つけたのだ。

屋上からロープを垂れ下げ、自らを括り付け、宙吊りになり教室内を覗き見ている様相の男子生徒を……

「待ってください」

達也はそんな花音を制した。

「今度は何？」

花音はそんな達也不満そうに見やる。

「……あれも風紀委員のメンバーです」

達也は頭痛がする様な仕草をしながら説明する。

「えっ？だって明らかに不審者じゃない……とつちめないと」

「あれは多分、事務方の職員の依頼で校舎の雨樋を直しているんです」

「はあ？なにそれ、風紀委員の仕事？」

「いや、奴は例外なんです」

「なにそれ？」

「……話せば長くなるのですが……奴が……横島です」

達也は説明するよりも、本人の名前を言った方が早いと判断したのだ。

「はあ？横島ってあの横島？」

「たぶん、千代田先輩が思っている横島で合ってます」

「えーーーーーっ彼、風紀委員会のメンバーなの？そんなの聞いてないわよ!!」

横島は学内でもいろんな意味で特に女子にとってはマイナスイメージで有名人である。

「……」

達也は悟る。摩利が故意に花音に横島の事を言っていない事を……

「横島って、あれよね!!チカン、変態、ナンパ野郎って噂の!!」

「まあ、その……その評価は間違っています。確かに横島はそう噂されてますが、そこまでひどくありません。たぶん……今も、真面目に修理をしているはずですよ……」

そう言っている達也は自信がなさそうだ。

そんな宙吊りの横島は達也に気が付いたようだ。

「おっ達也か!!ぐふふふふっ、今日の仕事はラッキー!!ここから、茶道部の着物美人見放題!!」

何時もの横島である。

「……お前は真面目に仕事しろ!!」

「そんなものはとっくに終わってるっての!!」

横島は既に依頼を受けた修繕は終わっていたのだが、茶道部を鑑賞するため宙吊りのままでいたのだ。

「やっぱり、覗きじゃない!!覚悟しろ!!」

花音は魔法を横島に向かって放つ。

横島は宙吊りながら、器用にそれを避けていた。

「うわっ、なんだっ、ぐわっ!!」

達也は額を抑えてうんざりした表情になる。

横島は器用に避けていたのだが、魔法が横島をつりさげている紐に当たり千切れる!!

「なんでじゃー！ー！！」

ボトツ

横島は三階の高さから花壇の合間のコンクリート床に頭から落下。

「司波くんやば！！やりすぎちゃった！！」

「先ほどいいましたよね、短絡的な行動はしないで下さいと」

「そんなのは後でいいわ彼を保健室に！！」

「大丈夫です。無傷です」

達也は冷静に言う。

「えっ？だって」

横島はガバッと起き上がり、達也達に近づいて行く。

「大丈夫ちゃうわー！ー！！」

「ええ？」

めちやくちや元気そうな横島を見て驚く花音。

「横島、その仕事が終わったなら、お前も巡回でもしてろ」

達也は驚く花音を横に、普通に横島と会話をしていた。

「ったく、こんな目にあわせたこの美人ねーちゃんは誰？」

「ち……千代田花音……よ」

花音は動揺しながら自己紹介をする。

「お前は聞いていないかもしれないが、渡辺先輩が9月で引退して、その後釜になる2年の千代田先輩だ」

「まじか、摩利さん辞めちゃうのか……あの純白の白がもう拝めないのか……で、えーと千代田先輩が後釜って？」

「ああ、10月から風紀委員の委員長になるのだが、何せ未経験者のため、俺がしばらくの間教育係に任命された」

横島はその間、花音を下から上へと舐めるように見る。そして……
「ボク横島！！よろしくお願いします！！お茶くみからお着換えのお手伝いまで何でもできます！！」

花音の手を掴み何時ものナンパ口調でそう言った！！

「え……えええ……??」

花音は急な横島の行動に面食らっている。

「横島、言っておくが、千代田先輩は五十里先輩の許嫁だぞ」

達也と横島は九校戦の時、サポートメンバーとして五十里啓とはちよくちよく話す仲になっていた。

「なにー！ー！あの、何もしませんでした顔の草食系ナンバー1イケメンが!!こんな美人の許嫁だとー！ー！ー!!くそ、人畜無害な顔してるのに、やる事やってやがったのか!!」

横島は吠える!!しかも内容はゲスそのものだ!!

「な……なななに言ってるのよー！ー！ー!!」

花音は顔を真っ赤にして、恥ずかしさと怒りで我を忘れて、魔法を横島に放つ!!

横島の立っていた地面が爆発した様に弾け、横島は吹っ飛んで行った。

「やっぱ、こんな落ちかー！ー！ー！ー!!(かー!かー!かー!エコーが掛かる)」

「はあ、はあ、はーまたやっちゃった!?!」

「千代田先輩、もう何回言いましたか?短絡的な行動をしないようにと。これでは先が思いやられます」

達也は冷静に花音に注意をする。

「あの、その……彼は大丈夫なの?結構キツイ魔法はなっちゃったけど」

あの魔法を喰らった横島の心配など一向にせず注意する達也に向かって花音はモジモジしながら問いかける。

「大丈夫です」

達也は自信を持ってそう言った。

花音の放った魔法は、自動車が吹っ飛ぶレベルのものだったのだが

……その程度で横島は傷一つつかないと達也は確信していた。

「そ……そう、想像以上の現場だわ……わたし、やっていけるかな」

横島、引継ぎ事項にされる!!

10月1日次期生徒会会長信任投票により、中条あずさが無事?信任を得ることが出来た。

信任投票のほすが何故か、深雪や達也にも票が上がっていた事は内密である。

新体制の生徒会執行部は

会長 中条あずさ

副会長 司波深雪

書記 光井ほのか

会計 五十里啓

と言うメンバーで運営される。

前副会長の服部刑部も会長候補ではあったが、部活連の会頭に就任する事になった。

現在、生徒会室の会議室で新旧の生徒会会長及び風紀委員会委員長、部活連会頭が集まっている。

会議室の重厚なテーブルに七草真由美、渡辺摩利、十文字克人と旧メンバー並び対面に中条あずさ、千代田花音、服部刑部の新メンバーが並んで座っている。

各トップのみに引継がれるある重要事項についての会議が開かれる。

新たなトップのメンバーは緊張した面持ちで座っている。最重要事項の引継ぎだと聞かされていたからである。

そして真由美が畏まって話を切り出した。

「今日みんなに集まってもらったのは、ほかでもないの。とある事項について引き継ぎを行なわなければなりません。校長やその上の意向で、学内でも一部の教職員と私達だけにしか、知らされていません。口外無用に願います」

続けて摩利は緊張した面持ちの新メンバーにそう言った。

「落ち着いて、冷静に聞いてくれ」

摩利は花音を叱りつける。

「だって……」

花音は叱られしょんぼりするも納得がいつていない様だ。

「摩利、そのくらいで許してあげて、誰だって驚くわ。普段の彼だけにね」

真由美は摩利と花音を見やって仲裁をした。

服部は驚愕した顔から普段のきりつとした顔に戻り質問をする。

「氷室と言っても、彼は末端で氷室の技術や魔法を引き継いでいないのではないでしょうか、聞くところによると、入学当初は魔法もろくに使えなかったと伝わってます」

真由美はその質問に答える。

「最初は半信半疑だったのだけど、今は横島くんは間違いなく氷室の人間だと私たちは確信しているわ。4月末に当校がテロリストに襲撃された際、生徒に重傷者が出なかったと報告したのだけど、それは表向き。実は8名ほど瀕死の状態だったの。大やけどを負ったり、四肢が千切れていたり、内臓破裂など悲惨な状況だった。救急隊の到着も遅れてもうダメかと思いつながら、最後の頼みの綱として横島くん、救急隊が来るまで持たせてほしいとお願いしたの。そしたら彼、20分もかからずに、どうやったのかはわからないけど、千切れた四肢を元通りに、焼けただれた皮膚を再生させ、内臓も治したの。しかもその後断続的な魔法の行使もせず、一回の治療で完璧に治してみせた。氷室の秘術に当たるとして私たちは治療に立ち会わなかったけど、摩利と一緒に術後を確認したわ。あの治療スピードに治療状況。彼は間違いなく学内……いえ、私の知る限りでは世界でも稀にみる最高峰の治療魔法師よ」

新メンバーは驚きで声が上がらなかった。

通常、治癒魔法と言うのは、断続的に魔法を行使しないと、元の状態に戻ってしまうからだ。

「…………そんな凄い治癒魔法聞いたことがないのですが」

あずさがやつとそれだけを声にした。

摩利が真由美の補足として自分の体験を話す。

「私は直に体験した。九校戦バトル・ボード決勝の事故の時だ。本来は数か所骨折して、内臓にも骨が刺さり重体だったようだ。私自身もそれを感じていた。その時も横島は5分もかからずに治癒してくれたいらしい。私が目を覚ました時には、体は怠かったが、傷も骨折も無くなっていた。あれは多分氷室家に伝わる秘術なのだろう」

「……………」

新メンバーは沈黙し顔を青くしていた。

さらに摩利は先の服部の質問の一部に答える。

「確かに横島は、入学当初は魔法が全く使えなかった様だ。CADの起動の仕方也不知道なかつた様だしな。しかし…………奴は現代魔法が使えないだけであつて、古来からの古式魔法いや、法術、陰陽道とでも言うのだろうか、奴は扱えたはずだ」

その話には、新メンバーだけでなく、十文字も真由美も驚いていた。「摩利、それはどういう事？」

真由美はその話を摩利から聞いていなかった様だ。

摩利は続きを話す。

「私が、無理やり奴を風紀委員に入れ込んだのは、奴が突拍子もない事をしてかすのを監視するためでもあつたのだが、決定づけたのは、丁度入学して1週間ぐらいの時だ、奴にペナルティーで風紀委員本部の掃除をさせていたのだが…………卒業生の誰かが置いていった霊具…………神通棍と言うものらしいのだが、今まで誰も動かせなかつたものを、奴はCADも使わず、起動式も展開せずに当然の事の様に見現させた。これは達也くんも見ていた事だ。あの時はただただ驚き、他の目につかない様にといい思ひだつたのだがな……………」

「…………起動式を展開せずとはどういうことですか!!」

服部は体を震わせまくしたてる様に摩利に聞き直す。

「それは……私にもわからん」

十文字は服部に話しかける様に言う。

「服部、その様な物は奴の一要素に過ぎん。九校戦モノリス・コードの映像をお前たちと一緒に確認しただろう。奴は魔法が無くとも強い。決勝戦で見せたあの戦闘がすべて物語っている。何よりも精神力と頭の回転は凄まじい。」

七草と渡辺には言っていなかったが、あの後俺は何度も映像を繰り返し見た。奴の戦略眼と戦術も凄まじい事が改めて分かった。奴が動き出したら、既に全員が奴のペースに陥っていたのだ。

更に後で、横島と横島のCADを調整した司波に聞いたのだが、奴のCADにはたった三つしか魔法式が入っていなかった。それも、とても戦闘に向いているように思えないものが三つだ。

基礎固定魔法一つに、魔法を行使したように見える魔法、それと、触れると術者に知らせるだけの条件起動遅延型術式だけだ」

その話に驚いたのは摩利と真由美だった。

「なんだとーそれは本当か!？」

「たったそれだけで……本当なの?」

「ああ、奴はどんな状況だろうが、手札が少なからうが、不利だろうが、勝つためのシナリオを瞬時に作っていたのだろう。」

七草の指摘していた奴のあのスピードと反射神経は魔法で強化したものではない。それと映像を繰り返し見てわかったのだが、オールレンジ攻撃を受ける際、奴は攻撃魔法を目で確認していない。全て後ろに目が付いているかのように攻撃を避けていた。

渡辺の話聞いて確信した。奴は古式魔法いや、古来あったとされる体術や秘術を行使した可能性もある。そういう修練をしたうえで基礎能力なのかもしれん。何れにしろ氷室にはそれが体系として残っているのだと、そして、渡辺が言うその神通棍なるものなどの攻撃手段もあったはずだが、奴は、現代魔法のルールにのっとり敢えて使わなかったのだろう。

奴は氷室の末端ではない。上位、いや最高峰に属する古式魔法師だ

と……逆にそうであってほしい。奴が末端なのであれば、十師族総出でもかなわないかもしれん。」

十文字はそう言って締めくくる。

「そんなとんでもない奴がなんで二科生なんか……」

服部はそう言ったが途中で気が付いたようだ。

「今の審査の方法が合っていないってことなのだろう？」

摩利は服部が深雪に言われた事を言った。

「そうなのね……やはり彼は最初つからかなりの実力者だったのね」

真由美はしみじみと言う。

「摩利さん……私どうしたら……ただでさえ司波くんが居るだけでも大変なのに、横島くんまでそんなだったら……」

花音は涙目で摩利に訴えかけた。

「頼りがいがあっていいじゃないか。まあ、普段はアレだがな」

摩利は花音をそう諫める。

「……あの、横島くんの事を秘密にするのはいいのですが、彼をどのよ
うに扱ったらいいのでしょうか」

あずさは質問する。

「普段はいつも通りでいい。何かあったら、頼れとしか言いようが無いな。達也くんもそうだが、横島も頼りになる。普段はあんなどんでもない奴だがな」

摩利はあずさにそう言った。

「ううううっ、啓に言ったらダメですか？私だけで秘密にするのは無理です。グスッ」

花音は涙目で訴えかける。

「横島くん聞いたのだけど、深雪さんとほのかさんは知っているらしいの。仲いいじゃない彼女ら、あと生徒会では知らないのは五十里くんだけだから、横島くんに聞いてみたら、別にいいですよって、軽く言ってたし……」

真由美は事前に横島に引き継ぎの話をしていた様だ。

「うううっ、良かった。七草先輩ありがとうございます」

「はあ、奴は事の重大さに気付いていないのか？」

摩利は呆れている様だ。

「そこが、奴の底が知れんところだ」

十文字が頷きながら言う。

「そうか？あいつは普段は本能の赴くまま行動しているように見えるが……」

摩利は普段の横島を思い起こしながら言う。

「フェイクかもしれん」

十文字は語気を強くして言う。

「どうやら、十文字の横島を評価は少し過剰なようである。」

まあ、実力的には間違っではないのだが、普段は摩利の言う通り本能で動いている。

「取り合えず横島くんについて、これで引き継ぎ完了ね」

真由美はそう言って肩の荷が下りた様に言った。

「……………」

新トップメンバーはそれぞれ思う。今後どうやって横島と接すればいいのだろうか……聞きたくなかった事実だと。

横島、嵐の予感!!

何時もの面々がそろって何時もの喫茶店で放課後を過ごしていた。

「えー……っ!!達也、論文コンペティションの代表に選ばれたの!?!」

幹比古の驚きの声が喫茶店にこだまする。

「幹、驚きすぎ……でも凄いわね達也くん」

エリカは幹比古にツツコミを入れつつ、達也にしみじみと関心する。

「本当に凄いですね」

「達也さんさすがです」

「うん、凄すぎ」

「お前、何でもありだな」

美月、ほのか、雫、レオも驚きと関心の表情を浮かべていた。

深雪はそんな達也を嬉しそうに見ていた。

ただその中で一人だけ、リアクションが違う奴がいた。

「……何それ?……ロンブー、コンパ!?……ずるいぞ達也!!くっ……お前一人でおねーちゃん達を独占するつもりだな!!そうはさせせん。俺も参加させろ!!」

思いつきり勘違いしている横島がいた。

「お前は何を言っている?」

達也は冷静に横島に突っ込む。

「コンパだろ!!おねーちゃんと男共がイチャイチャして、くんずれほぐれつするためのパーティーだ!!旦那や恋人に黙って参加してもOK、不倫にならない!!そんな、うらやま……まったく、けしからんレッツ、パーティーだ!!」

横島の脳内ではコンパと不倫パーティーの違いはないらしい。

「はあ、まーた横島の病気がはじまったわね」

エリカはこの頃横島の妄言に慣れてきて、スルーする技術が身に付いていた。

「ほのか、コンパって何？」

雫は純粹な疑問をもつてほのかに質問する。

「え？そのそれは……」

ほのかは顔を赤くして答えに窮していた。

「お兄様、横島さんがおっしゃっているコンパとは何のことでしょうか」

その横で深雪も達也に質問していた。

「お前が知らなくても問題ないことだ」

達也はそう答える。

ほのかもそれを真似て雫に答えた。

「雫はまだ知らなくても大丈夫なことよ」

深雪も雫も、はてなマークが浮かぶような顔をして頷いていた。

「どうやら、この二人は純粹培養されて育つたため、少し世事に疎い様だ。」

達也はウンザリした表情で横島の為に説明しだした。

「論文コンペ：正式名称は全国高校生魔法学論文コンペティションだ。年一回、魔法学や魔法工学の分野での研究成果を発表する場だ」
それに幹比古が補足する。

「そうなんだ。沢山の大学や企業、研究機関などが見に来ていて、優勝すると機関誌やネイチャーなどにも大々的に載って、優勝でなくても価値ある研究成果だとわかると、いろんなところから引っぱりだこになるんだ!!」

達也が再び話し出す。

「第一高校からは、3年の市原先輩の論文を軸に、2年の五十里先輩と俺とがその補助で参加する事になった。問題は毎年、その研究成果を狙う輩が出るため、今の時期から学内の監視やらが厳しくなる……おい、お前も今日風紀委員で千代田先輩が言っていたのを聞いていたんだろう？」

「へ？たはははははっ、そう言えばそんな事も言っていたような……」

横島はどうやら真面目に聞いていなかったらしい……花音が話している間、花音は美人なのになったく色気が無いのはなぜなのかを、

あーでもない、こーでもないと言っていると真剣に考えていたのだ……本人にとってはほっておいてほしい事なのだが……

花音から、風紀委員と部活連から、論文コンペ参加者にしばらくガードが付く事が通達されていた。

市原鈴音には、服部刑部と桐原武明。五十里啓には、もちろん恋人で風紀委員長の千代田花音一人。達也には……必要ないと判断されたのだ。

横島を達也に付けようとしたのだが、達也が断った。まあ、達也には横島を付けると、かえって邪魔されるだけにしかないが。

「その論文コンペに達也が参加して、忙しくなる事は分かった。その、ガードって、たかだか高校生の論文がそんなに価値があるものなのか？」

「ああ、場合によっては新技術の基礎になる事もあるから……」

「まじかー、お前ら頭いいんだな!!……そんな重要な事だったら、プロの魔法師や軍が徹底的にガードすりゃあいいのにな」

横島は何気なくそう言ったのだが……

「うーん、確かにそうだな」

「横島にしては正論よね」

レオとエリカは真剣な面持ちで答えた。

他の面々も何か考え込むような表情をしていた。

「アレ?なんか俺余計な事言っちゃった?」

「どうやら、そうらしいな」

達也はそんな横島を見やりながら、ため息を付いて言った。

そして、エリカがこんなことを言い出した。

「達也くん、私たちが自主的にガードしてもいい?」

「なぜそんな事を?」

「いいじゃない」

エリカの目は真剣そのものだ。

「まあ、邪魔にならないようにな」

達也はその目を見て、諦めた様に言う。

「わかったぜ」

レオがそれに返事をする。ガードする気満々の様だ。

結局、この論分コンペ開催までの間。レオとエリカは達也の周りをつろつき、自主的にガードをくださったのだった。

その晩

「いやー悪いね。わざわざ来てもらって」

「いいですよ。八雲さんには、九校戦の時は助けてもらいましたし」

「いやいや、横島くんからもらった情報は実に良いものだったよ。ボクのクライアントも大喜びだった」

横島は九重八雲に呼ばれ、彼が住職を務める九重寺に訪れていた。寺に併設している。茶室に二人向かい合い座っている。

「ちよつと横島くんに頼みたい事があつてね」

八雲がそう切り出した。

「何でしょうか」

「まあ、先にこれを見てくれないかな」

八雲はそう言って横に置いてあつた10cm四方の木の箱を横島の前に出し中を開け、布にくるまれている中の物を見せた。

「……精霊石。しかも八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）……」

横島は中の物を見てそう言った。その勾玉状の石の中に何かが輝いてみえ、その物も石の様にも水晶の様にも見えた。

「やはり、知っていたのかい。これを見て精霊石と言ったのは、君が二人目だよ」

八雲はニヤリとしてそう言った。

「どうして俺にこれを？」

横島はこれを知っている。霊具として最高峰の代物だ。この勾玉は横島の見立てでは既に術式が組み込まれており、雨乞いの術儀に使用するためのものだと分かった。

八雲は語りだした。

「この価値は凄まじくてね、レリック（オーパーツ）とも言われている。特にこの八尺瓊勾玉は、魔法式を保存する機能があるとされているんだ。これ一つで世界では戦争が起こった事もある代物だよ……これはこの寺の物で門外不出なんだがね。」

実は、軍が最近これと同じようなものを手に入れてね。それをFLTと言う会社に解析複製依頼をしたようなんだけど、どうも警戒も警備もザルでね。全然なつてないんだよ。軍の危機管理の薄さときたらどうなんだろうね」

「で、それを俺に警備しろってことですか？それとも泥棒の真似事を？」

「いやいやいや、ボクは俗世にはあまり興味はないのだけど、そのFLTって会社は実は達也くんが所属しているんだよ。CAD開発者として……あ、正確には彼の実の父親の会社で、その上、上司に継母までいるんだよ……だから、多分だけど、達也くんは巻き込まれちゃうんじゃないかなー」

「まあ、あいつが巻き込まれても、本気出せばたいいは大丈夫じゃないですかね」

「達也くんが大丈夫でも、彼の周りはずうじゃないよ。だから、横島くんに警戒してもらおうと思ってるね」

「……なるほど、確かに。だったらその八尺瓊勾玉を破壊しますが」

横島は八雲の言葉に少し考え込んで出した答えがこれだった。

「えー……っ!!ちよつと待って、なんでそうなるのかな?」

八雲はその言葉に慌てる。

「達也が巻き込まれたら、学校の連中、いや、学校の友達が首突っ込むんでね。戦争になる様な代物が近くにあるだけで迷惑なんですけど、その勾玉のせいで、友人や知り合いが傷つくのは、いやなんで」

「た……たしかにそうなんだけど、アレの価値分かってる? 国家が奪い合う代物だよ?」

八雲は溜息を付きながら横島を見据える。

「国を一つ買える茶器だろうが、宝石だろうが、命には代えられない。ましてやアイツらが傷つくところなんて見たくもない」

横島の表情は真剣そのものだった。

「はーっ、わかったよ。最悪それでもいいや、出来れば奪っても……それは無しで、でも、問題が無いのならば、それはやめてくれないかな」

「わかりました。八雲さんにまた借りが出来ましたね。情報ありがとうございます」

「いやいや、ボクの方も、達也くんや深雪くんが傷つくのは見たくないからね」

八雲はホツと肩を撫でおろし、そう締めくくった。

一方丁度、達也はその問題の八尺瓊勾玉を軍経由で継母司波小百合から解析依頼を受けたのだ。

しかも、すでに、継母は八尺瓊勾玉を何者かに強奪されかけ、達也が救助したのだった。

強奪した人間は全員日本人ではなく、何れも手練れ、しかも達也に一旦は致命傷を付ける程の相手だったのだ。

波乱の予感しかない出来事である。

横島、花音から厄介ごとを押し付けられる!!

放課後の風紀委員会本部

「それでは、出動よー!」

新風紀委員長千代田花音の号令により、各風紀委員は校内巡回に向かう。

花音自身ようやく板についてきたようだ。

「横島くーん」

花音は引きつった笑顔をしながら、猫なで声で手招きし、風紀委員長デスクまで横島を呼ぶ。

「花音さん、なんすか?その気持ち悪い呼び方は……昨日まで、呼び捨てだったじゃないっすか?」

横島はデスクまで行くと、その花音をうさん臭そうに見やる。

「気持ち悪いって何よ!!……コホンー!」

花音は何時もの調子で言い返そうとするが途中でやめる。

そして、デスクの前に立つ横島にさらに手招きする。

横島は上半身をかがめ、花音は横島の耳元近くまで顔を寄せる。

「その、横島……くんは、……氷室家の、人なのよね」

花音の口調は何時も横島に接する態度ではなく、微妙によそよそしい感じになっている。

「花音さんまでなんすか?まあ、一応そうっすけど、末端すよ?気にするようなもんじゃないっすよ」

「……なーんなんだ。そうよね!!横島だもんね!!十文字先輩とかがやたら君を持ち上げるからビビっちゃった!!もう、脅かさないでよね、あはははははっ!!」

花音は何時もの口調に戻り、一人で何かに納得して横島の背中をバンバン叩く。

全く持って単純な思考の持ち主である。

「何なんすか?また、なんかやかまして先輩らに怒られたんすか?

まったくこの残念美人!!」

横島は花音と出会い3週間が過ぎようとしていたが、花音の行動や言動から、美人だけど残念度が高い人だという評価に至り。エリカと同じような扱いをしているも、お色気度が低く、許嫁持ちであるため、さらに扱いが雑(ほぼ女性あつかいされていない)になっている。横島に妹や年下扱い以外で、こういうポジションの女性は稀である。逆にいうと、色眼鏡無しで付き合える女性であるともいえる。

「誰が残念よ!!」

そういつて、横島の背中を思いつき叩く。

「はあ……で用事はなんすか?」

「まったくっ!!……本題に入るわ。これわかる?」

花音はデスクから一枚の細長い紙、古式魔法や陰陽術で使用される札を横島に見せる。

「古式魔法の術儀に使用するお札つすね。しよぼそうですけど」

「さすが氷室つてところからしら、話が早くていいわ。この札を使って、校内の模擬戦や術儀に使用して暴走事故が多発しているのよ。威力は大したことないからいいのだけどね。使用した生徒に確認すると、どうも、正規のルートではない所から格安で購入したものらしいの。一応先生方からも、粗悪品注意という事と正規店以外での購入は避ける事が近日に通達されるはず。」

一応、風紀委員の方にも、取り締まりの対象にしてくれて学校からも依頼がきているのだけど、

正直、私じゃさっぱりわからないし、そこで、あんなのよ!古式魔法なんて、風紀委員や生徒会で古式魔法の使い手っていないから、どうしようか迷っていたんだけど、昨日、先輩方から、横島が氷室家の人間だって聞いて、まあ、驚いたけど……下つ端ポイあんだでも一応氷室家なら古式魔法にも詳しいかなって思ったわけよ」

花音はどうだと言わんばかりのドヤ顔で横島に言った。

「で、俺は何をしたらいいんすか」

「あんたはしばらく、その粗悪品取り締まりをメインにやってちょうだい」

正直言って、花音の対応はかなり大雑把だ。完全に横島にこの件を任せるつもりでいるのだ。

「はあ？何言ってるんすか？そんなん持ち物検査しないと分からないっすよ。それこそ花音さんの仕事でしょう」

そんな花音の対応を見透かし、ため息をつきながら言葉を返す。

「えーっ、私ってほら、啓の、論文コンペ参加者の護衛っていう仕事があつて忙しいし、横島がやってよ!!」

「持ち物検査とかは、委員長が申請とかしないといけないんでしょ？生徒会やら先生方やらにも通達しないとイケないし」

「えーっ、じゃあ、持ち物検査なしでやってよ……あつ私そろそろ行かないと！後はまかせたわよ!!」

そう言つて花音はガタンと椅子から立ち上がり、いそいそと扉に向かい。

「……仕事から逃げたわけじゃないからね、今から護衛の仕事だから!!」

そう言つて扉をバタンと閉め、逃げる様に本部から出て行つた。

確かに、五十里啓の護衛は花音の仕事なのだが……どうも、花音はデスクワークが苦手の様だ。この前も達也に散々注意されていたよ
うなのだ。

「はあ、誰だあの人を委員長にしたのは？」

横島は花音が出て行つた後を見て独り言ちる。

横島は取り合えず粗悪品を売っている奴を突き止めることにしたのだが、横島自身自分で作成できるため売った事は在つても、札を購入したことが無い。普通はどこで買うのかなどは知らないし、正規販売店があること自体知らなかったのだ。

その辺の事を知つてそんな幹比古にレクチャーしてもらおうと、放課後幹比古がよくいるという実習室を訪ねることにした。

横島、術具の販売店に行く!!

バーン

「むはははははっ!!暗がりで、なーにやってるよ!!お二人…さ…!!?!」

実習室の扉を勢いよく開ける横島は何時もの冗談を言うのだが…

横島が実習室で見た光景は…冗談が現実になっていた…

幹比古が美月に覆いかぶさっていたのだ。

そして、二人は驚愕の表情で首だけ横島の方を向く。

「……………」

横島は無言で扉をそつと閉める。

横島は古式魔法用の粗悪品の札が校内で出回っている件について、取り締まるように花音に無理やり押し付けられたのだが、出回ったその粗悪品がどのルートで売買されているのかを調べるため、幹比古にアドバイスをもらいに実習室に来ていたのだ。

そして3秒後。

「うがー…!!幹比古が美月ちゃんとどー…!!ウラヤマ過ぎ!!いや、けしからー…!!」

廊下で雄たけびをあげる横島!!

幹比古は慌てて、実習室から出てきて横島の口を塞ごうとする。

「何言ってるんだよ横島!!勘違いだ!!」

「なー…!!勘違いだ!!あんな体勢で何がだ!!お前の右手は何処にあった!!もしかして、お前!!無理やり美月ちゃんをー…!!」

そう、幹比古の右手は明らかに美月の豊満な胸を鷲掴みにしていたのだ。

「ちがーう!!取り合えず話を聞いてよ!!」

幹比古はそう言つて横島の腕をとり、実習室中に引き込んだ。

ようやく立ち上がった美月が顔を真っ赤にして横島にモジモジと話し始める。

「……あの、吉田くんが悪いわけじゃないの、私が術儀の道具を倒しちゃったから、助けてくれようとして……その」

「そう、なんだよ!だから、横島の勘違いなんだって!!」

美月に続けて幹比古も弁明する。

「で、お前の右手は何処に……真っ暗な部屋で二人で何してたんだ!」

「右手はその偶然というか……何言わせるんだよ!!精霊魔法の訓練で、柴田さんに付き合ってもらっていたんだよ!!」

「なぬ!これが世に言うラツキースケベだど!!羨ましすぎるー!ー!ー!!俺には校舎から脳天から落下とか、頭やケツになんか突き刺さるとか、直撃するとか!!チカンと間違われてボコボコにされるとか!!アンラツキーナ事しか起きんの、なんでお前らばかり!!某国のい…陰謀じゃよ〜!」

横島は涙チヨチヨきらせながら、最後は酸っぱい顔になって叫ぶ、
そう、レオや達也、そして幹比古まで、ラツキースケベは訪れるのだが……横島には不運しか降り注がないのだ。

「よ、横島さんにもきつといいことありますよ」

美月は慰めにもならない、慰めの言葉を横島に掛ける。

実習室の明かりを付け横島が落ち着いた所で幹比古は質問をした。
「横島がここに来るなんて、はじめてじゃない?僕に何か用があったんじゃない?」

「そうだった。陰陽……古式魔法で使う札とか術具なんだが、あれってどこで購入するんだ?」

「えっ?横島も、一応古式魔法が使えるんだよね。どうやって調達しているの?……もしかして、氷室から直接手に入れるから買った事がないとか……なにそれ贅沢だよ!!」

幹比古はそう言って羨ましそうに横島を見る。

「一応自作」

「そうなんだ。僕も半分は自作だけど、やっぱ汎用術式は市販のじゃないと効力が上手く発揮できない事があるから、吉田家で購入するんだ。たまに氷室製が入ってくるけど、護符や札はいいよね。基本は僕は氷室製の墨とか、和紙買って、自作の札や護符を作っているよ」

幹比古はこの手の話になるとどうやら饒舌になるようだ。

「……」

「あつ、ごめん、どこで買うかって話だよ。明日の土曜日さ、学校午前中だけあるでしょ？その後古式魔法の術具の販売店に一緒に行かないかな。僕も久々に行ってみたいしね」

「おお、助かる」

横で、幹比古と横島の話聞いていた美月は申し訳なさそうに

「あのー、私もついて行っていいでしょうか？霊具とか興味あるから………と言うか、氷室のお札っていくらするんですか!!」

後半はやはりそういう事だったようだ。氷室マニアは健在である。

「うん。是非！」

幹比古は少し顔を赤らめながら了承する。

「たははははははっ」

そんな二人を見て苦笑する横島。

翌日の午後

幹比古の案内で、横島、美月そして、雫という珍しいメンバー編成で一緒に古式魔法の販売店に向かう事になった。横島以外は普段は大人しい組である。

雫はと言うと、いつも一緒に居るのかが午後から生徒会の用事があるため、横島を昼食に誘うつもりだったのだが、横島が出かけるという事で一緒に付いてきたのだ。

達也は論文コンペ、深雪は生徒会、レオとエリカは護衛と後二人で

コソコソ何かしているようだ。

八王子で軽く昼食を済ませ、電車に乗り、東京某所まで出る。

表通りはCADの販売店や魔法技術系の会社が立ち並んでいるが、その裏通りには古式魔法で使うアイテムショップなどがある。表通りに比べ人通りは少ない。

「結構普通の綺麗な店だな！」

横島が並ぶ店店をみて言う。

「どんなのを想像していたの？」

「いやーなんか骨董品屋みたいなもの」

横島は厄珍堂の様な店構えをイメージしていたらしい。

「そう言えば、横島が販売店を調べるのって、校内で事故が起きている粗悪品の札の件だよな、まあ正規店ばかりだから、そんなものを売っていたら自己回収してるはずだから、そういう情報がでてくるはずだよ。取りあえず一軒目行ってみようか」

幹比古はそう言っ、大きなビルを擁している店舗に入る。

「うわ、なんか、ブランドショップみたいだな」

横島は素直な感想を言う。

霊具や札、護符、はたまた大きな祭壇用の術具などいろいろなものが置いてあるが、スペースを大きく取って、バックなどの一流ブランド販売店のような様相だ。横島がイメージしていたものと大分違っていた様だ。

「すごいですね。これ全部古式魔法で使用するものなんですか？」

美月も初めてだったようで、驚いている様だ。

「うん、いろいろあるね」

横島の横にちよこんという雫も古式魔法のショップには始めてきたようだ。

「ここは関東最大の品揃えで、東日本有数の古式魔法の大家、六道家が経営しているショップなんだ。さっき聞いてみたけど、粗悪品はやっぱりここでは扱ってないね。当たり前だけど。二階には氷室家の製品のアンテナショップがあるから見て行く？」

幹比古はそう言っ、2階に案内する。

「あつ、お兄ちゃんだ!!」

小学生高学年位の少女が横島を指さしてそう叫ぶ。

「横島くんがここに居るわけないでしょ。また、適当な事を言って」

長い黒髪が綺麗な美少女が叫んだ少女をたしなめる。

「本当だって、なんか、かっこいい制服着てるよ!!」

二階に行くと横島にゆかりのある二人の姉妹がいたのだった。

横島、氷室姉妹と思わぬところで合う!!

「あれ？彩芽ちゃんに要ちゃん？」

横島は私服姿の氷室姉妹に声を掛けた。

「お兄ちゃん、おひさー!!」

氷室彩芽は横島に手を上げて挨拶をしてから、駆けつけて横島の横に並ぶ。

「あら、横島くんなんでここに？」

氷室要は驚いた顔をしたが、ツンとした表情に戻し横島に話しかける。

「いやー、学校の友達とちよつと調べものにね」

横島は雫と幹比古と美月を見やってそう言う。

「ふーん」

要はそう言って、幹比古、美月を一瞥してから横島のすぐ横にいる雫を見やる。

「誰？」

雫は横島の裾を引っ張りながらボソッと聞く。

「要ちゃん達はどうしてここに？」

横島がそう問いかけようとする

「彩芽、何を騒いでいるのかね？」

商談室から、インテリメガネイケメンが登場する。姉妹2人の実の父で、氷室15代当主の夫にして小説家の氷室敦信だ。

その後ろには、氷室家の家人、向井麻弥が付き添っていた。

「敦信さんと麻弥さん、こんにちは。こんなところで会うなんて」

横島が先に挨拶をする。

「おや、偶然だね横島くん」

「どうしてここに？」

「私は出版社に行く用事が出来てね。それに、要と彩芽が付いてきてね。お義母さんからも頼まれ事あって、ここのお店に届け物をしにき

「ただよ」

敦信はどうやら本業の小説家としての仕事のために上京しに来たらしいのだが、それに娘姉妹が付いてきて、護衛として麻弥が同行しているようだ。

「ご学友かい？」

敦信は幹比古たちを見て横島に質問した。

「そうです」

「!!……あ……あの……も、もしや、速水信彦先生で……でしょうか？」

美月は敦信の顔をまじまじと見て、急に顔を真っ赤にさせてしどろもどろに質問をした。

「いかにも、そうです。お若いのに私の事を知ってらっしやるとは……」

「!?はあ、はあ、%#@”” ふみゆあぁー」

美月は敦信があ的小説家速水信彦と知り、手が震え、息づかいが荒くなり意味不明な言葉を発し、興奮のあまり目を回して座り込んでしまった。

「柴田さん!!」

「これはいかん、ご学友の方々を奥の商談室にお連れしよう」

敦信がそう言って、商談室を案内する。

横島と幹比古が美月に肩を貸そうとしたが、麻弥さんが軽く持ち上げ、商談室に連れて行った。

奥の商談室はちよつとした会議室のようになっていた。計8人いてもまだ十分余裕がある。

横島と幹比古と雫が、対面には氷室家、敦信たちが座っている。

美月を横のソファに寝かそうとしたが、大丈夫と言って幹比古の横に最後に座った。

「横島くんのクラスメイトの吉田幹比古です」

幹比古から自己紹介をしてみた。

「し、柴田美月です。横島さんのクラスメイトで、い、何時も仲良くさせてもらってます!!」

美月は興奮冷めやまぬようで、しどろもどろになっていた。

「横島さんと同級生の北山雫です」

雫が何時もの無表情でそれに続く。

「私は、横島くんの家族を名乗らせてもらっている氷室敦信です。そちらのお嬢さんのおっしやる通り、速水信彦と名乗り少々物書きの仕事をしております」

敦信は自己紹介を行った。

敦信の自己紹介の間。美月は目をキラキラさせて、顔を赤くし両手を頬に当て敦信を熱い視線で見つめ、はあ、ふうやら溜息を付きながら、クネクネしていた。

「氷室敦信って……現氷室家当主の夫!!」

幹比古は立ち上がったって驚きをあらわにして言う。

「幹比古落ち着けて」

横島はそう言って幹比古の腕を引っ張る

「あつ、す……すみません。」

「ははっ、君は精霊魔法の吉田家の現当主のご子息だね。君の家も結構有名だとおもうのだがね。……横に座っているのは娘たちです」

敦信は軽く笑って幹比古の家に付いて言い当てた後、娘たちを紹介する。

「長女の氷室要です」

要はすました顔で名乗る。

「次女の氷室彩芽ですーす!小学6年生です!!」

彩芽は元気いっぱいに名乗った。

「#%&\$!!」

美月はまたわけがわからない言葉を発した後、顔を真っ赤にして鼻を抑えていた。どうやら興奮のあまり鼻血が出たようなのだ。

「えええ!それって直系の次期当主じゃないの!?!」

幹比古は暴走しっぱなしである。

幹比古と美月の態度に要は明らかに不機嫌な顔になり、それを隠そうともしていなかった。

「どうやら、こういう事はちよくちよくあるようだ。」

「落ち着けて、幹比古、なんかすみません。こいつ普段こんなじゃないんですが、ちよつとまいあがつちやつて、……お前も謝れよ。」

幹比古を強制的に座らせ敦信に謝る。

「重ね重ね、すみません」

最後に麻弥さんが自己紹介をする。

「向井麻弥です。氷室家家人を務めております」

自己紹介を終えたのだが、

「すまないね。横島くん私はそろそろ、出版社の方へ行かないといけないんだよ。何か調べものがあると行っていたね。このアンテナショップの工藤詩織くんは氷室家の関係者だから、いろいろ聞いてみるといい」

「すみません。引き留めちゃつて」

「お父さん、お兄ちゃんと一緒にいい!!」

彩芽は急に横島と一緒に居たいと言い出した。

「彩芽、父さんが戻ってくるまでここにいろようと……」

「いいですよ。どうせこの辺をうろうろするつもりでしたから」

「いいのかい?」学友が居るのに……」

「僕はいいよ!」

「うん、横島さんがいいなら」

幹比古と雫が了承してくれた。

美月は鼻を抑え首を上下に思いつき振り頷いていた。

「どうやら今も言葉が出ないと、鼻血が絶賛流出中らしい。」

「助かる」

横島は一言皆に言う。

「やったー!!」

彩芽はそう言つて喜びをあらわにし、横島が座っている椅子の後ろ

までくる。

「彩芽、横島くんに迷惑かけないように、要も一緒に行って彩芽を見てあげなさい。では失礼する」

そう言つて、敦信と麻弥は商談室を出て、出版社に向かつていった。

横島は早速、幹比古と共にアンテナショップの工藤詩織に話を聞いた。

すぐに答えが出た。本来他店のうわさ程度の話は客には言わないのだが、横島も氷室家の為話してくれた。

2か月前にで出来たばかりの古式魔法の道具を扱いつつCADも扱っている店が怪しいと言うのだ。

そのショップは、Yクラフトワークス言う名前で、ここから徒歩で行ける程度の場所にあるとの事だ。

その間、彩芽が雫に横島の学校での生活を聞いていたのだが、どうやら当たり障りのない事を言ってくれていた様だ。

まあ、雫の横島評価は高いため、元々そんなに問題ないはずである。これがエリカあたりになるとぼろくそになる。

要は相変わらず不機嫌そうに座っていた。

美月は胸にお祈りのポーズの様に手を当て、要と彩芽を言葉も発しないでキラキラとした目で眺めていた。やはり、口元はかなり緩んでだらしなくなっている。

横島は要の所にまでくると、彩芽もついてきた。

「要ちゃん、彩芽ちゃん、この近くの店に行かなくっちゃならないんだ。直ぐ終わると思うからここで待っててくれる？そのあと、どっか行こうか」

「お兄ちゃんについて行くー！」

「私も行くわ。他のお店にも興味があるし……」

彩芽も要もついて行くようだ。

「じゃあ行くっか」

横島はそう言って、商談室から出る。

横島が歩き出すと、彩芽はすかさず横島の右隣に行き、自然と手をつないだのだ。

「お兄ちゃんその制服に合ってるよ、なんかコスプレみたいだけどこっこいいね!!」

「たはははははっ、コスプレか、確かにね!!」

その様子を見れば無表情だがジトツとした目で見ていた雫は横島の左の位置を取ろうとするが下行エスカレーターに阻まれる。

その横で要も同じような行動をしていた。

そして、両者は互いを見るが、要の方が身長が頭半分高く見下げる形になっていた。

「ん」

「……」

そして、無言のままお互い視線を外し横島の後ろにスタスタとついて行った。

その後ろに幹比古と美月が続いていた。

「ああ見ていると、仲のいい兄妹みたいだね。あの氷室敦信さんが横島の事、家族だと言っていたし、養子とかなのかな?」

幹比古は横島たちを後ろから見、敦信の自己紹介を思い出し、美月に何気なしに聞いたのだが……

「!?家族!!という事は!!横島さんと結婚したら氷室家の家族に……15代当主蓮様と嫁姑関係!?あああ、なんて魅力的なお話なんですよ!!」

美月は暴走したままだった。

頬に両手を当てながら、顔を赤く染め目をキラキラと中空に漂わせ、体をクネクネさせながらとんでもない事を口走っていた。しかも

結構大きな声でだ。

「えーーーーー!?!」

幹比古は店内で思わず大声を出してしまった。

思わぬところからのライバル出現だった!!

雫と要は美月の言葉で同時に後ろを振り向き、目を細めキュピんと光らせていた。

美月は知らない。二人のメヒヨウを本気にさせてしまった事を……

横島、喫茶店で休憩する!!

六道家が経営する販売店を出て、氷室姉妹と横島一行は問題の粗悪品札を販売しているだろうYクラフトコーポレーションなる店に向かう。

先頭は横島とその右隣で手をつないで歩く彩芽。

その後ろから、横島の左側ポジションを狙う雫と要。

そして、幹比古と美月と続く。

「お兄ちゃん凄いね、体育大会みたいな所で優勝したって、ちっちゃいお姉さんが言ってた!」

彩芽は雫から、横島が九校戦の競技で優勝したことを聞いていたらしい。

「たははははっ、たまたま、たまたまだよ!」

横島は照れたように言う。

傍から見ると横島と彩芽は実に仲のいい兄妹に見える。

しかし、その後ろでは熾烈なポジション争いが繰り広げられていた。

横島の右隣は既に彩芽に制されており右手も奪われている。

残りは横島の左側と残った左手だ。

この争いに勝った方がこのポジションが手に入り、横島との会話と左腕の感触を味わえる栄誉が、

負けた方は、その光景を後ろから嫉妬と悔しさをかみしめながら見る事しかできないのだ。

雫と要は黙々と歩き横島の左を狙うが、通行人やら看板などが邪魔で攻めあぐんでいる。

しかも、雫と要は歩きながら相手より一歩前に出ようとし交互に前後する。すれ違う際にお互いの肩をぶつけ、顔を見合わせれば視線で火花散らしけん制し合う。雫は無表情、要はツンとした表情で一言も

しやべらず、まさに沈黙のデッドヒートを繰り広げていた。この二人の周りには黒々としたオーラが見えるようだ。

「な……なんか怖いね」

その様子を後ろから見ていた幹比古は黒々としたオーラを目の当たりにし冷や汗が出る思いをしながら、美月に話しかけるが……

「はあく、蓮様と嫁姑関係……蓮様に怒られたい!!」

美月は幹比古の言葉などまるで聞いていなかった。クネクネしながら妄言を口走り、まだ妄想暴走特急から抜け出していない様なのだ。

「はあく」

そんな美月の様子を見て深くため息をつき、肩を落とす幹比古。

そんな後ろの状況を知らない横島と彩芽は楽しそうに歩いている。

「あつープリンがおいしいってー!」

彩芽は喫茶店を指さし横島に食べたいアピールする。

「じゃあ、ここで休憩しよっか」

「やたっ!」

「ちよつとここで休憩……し……しよう……しませんか?」

後ろを振り返った横島は、その異様な空気にたじろいでいた。

「いいよ、横島さん」

雫は無表情ながら爛々とした目で横島を見つめる。

「横島くんが決めていいわよ」

要は口元は少し笑みをこぼしながら、鋭いナイフのような視線を横島に送る。

「ああっ、どうしましょう!?!お義母様（おかあさま）とお呼びすれば、それとも御義母上様（おははうえさま）とお呼びすればいいのか、迷っちゃいます〜」

妄想暴走特急が終着駅まで行きそうな美月。既に横島と結婚が前提となつて、姑である15代目蓮の呼び方をどうしようか悩んでいる様だ。

「はあく、休憩しよう。何もしてないけど疲れたよ」

幹比古は溜息を付きそんな事を言った。なぜか疲労の色が濃い様相だ。

「そ……そうか」

横島は理由は分からないが寒気がする。

一行はプリンが美味しいらしい喫茶店に入り

「買ってくるから、席で待っていてくれ、何がいい？」

横島は皆にオーダーを聞く。

「私も行くー」

「横島くんと同じもので」

「…私も」

「美月って呼んでください」

「…コーヒーブラック、濃いので」

彩芽、要、雫、美月、幹比古はそう言っただけでそれぞれ返事をした。

彩芽は横島について行き、レジの列と一緒に並ぶ。

要と雫はお互い視線を合わせ、火花を散らしていた。

美月はまだ妄想暴走特急に乗車したままの様だ。

幹比古は疲れ果てた顔をするも席を確保し、女性陣3人を誘導する。

横島と彩芽がレジに並び飲み物やらを買いに行っている間。

要は相変わらず不機嫌そうにし、幹比古、美月、雫を一通り見やつてから、キツイ言葉を発した。

「あなたたち、横島くんが氷室家の関係者だからって近づいたのだったら、やめてほしいのだけど、……迷惑だわ」

雫はその言葉にいち早く反論し、要を目を細め見据える。

「私は、横島さんが氷室だろうが、どこの家だろうが関係ない。横島さんは横島さん。そうじゃないと一緒に居ない」

口調はいつも通り抑揚が少ない平坦な言い方だが、語気が徐々に強

くなっていた。

「そう」

要は雫を見てそう一言返す。

要は雫が氷室家の事で驚いたり、騒いだりしていなかった事を見ており、その点については認めている様だ。

「ごめん。敦信さんや要さんや彩芽ちゃんに会って、氷室家の人だつて舞い上がっていたのは事実。僕も吉田家という事で、僕自身を見てくれなくて、いやな思いをしてきたのに……それが分かっていながら、君たちに不快な思いをさせちゃったね。本当にごめん。……だけど、横島とは氷室家の家人だと知る前からの付き合いなんだ。すでに仲良くなった後だったんだ。でもね横島ってアレじゃない。偉ぶらないし、いつも自然体だし、そんな事は言われないと忘れちゃうぐらいなんだ。横島も吉田家とか家格の事なんて、全く気にもしないし、だから、横島との付き合いは家柄の事を忘れて付き合い合える大事な友達なんだ」

幹比古は要に謝りつつも、横島に関してはそうじゃないと否定した。

「ごめんなさい。要さん、皆さんの迷惑も考えなくて騒いじゃって、私には要さんのお父さんが書いた氷室絹さんの伝記小説に憧れていて、ついその、抑えられなくなっちゃって……でも……横島さんのお付き合いは、横島さんが氷室家の人って教えてくれる前にもう仲良くなっていたし、吉田君が言うように、横島さんって普段アレな感じだけど、内向的な私にも気を使ってくれる。この学校で気軽に話しかけられる一番最初の男の子の友達だったの」

続いて美月も畏まって要に頭を下げたのだが、幹比古同様にその事に関して是否定する。

要は二人の話を聞いて、一度俯き、顔を上げ3人に謝った。

「……わたしの方こそごめんなさい。横島くんとあなた達の事を良く知りもしないのに、余計な口を出して……その横島くんといつも……」

不機嫌そうな顔は鳴りを響める。どうやら、氷室家の事もあるのだ

が、横島と一緒に居られる同級生に嫉妬心が入っていた様だ。その言葉を言い切る前に横島たちが戻って来た。

「じゃーん!!プリンだよ!!みんなの分もあるんだ!!」

彩芽はそう言つて、プリンの乗ったトレイを長方形テーブルの端に置く。

横島がテーブルに戻つてくるとさっきの変な空気が今は薄れていったため、ホツとし、飲み物が乗ったトレイを6人掛けの長方形テーブルの真中に置く。

「まった?」

横島はそう言つて幹比古の横に座ろうとすると、

「横島くんはここ」「横島さんはこっち」

要と雫はすかさず横島の袖やら服を持ち横島が座る場所を指定する

その場所は要と雫の間の席だった。

席順は対面6人掛けテーブルに右美月と真中幹比古と並んで座り、左が空き状態。

美月の対面は雫が座り、真中を空けて、左に要が座っていたのだ。

雫空要

テーブル

美幹空

そして、横島はその二人からプレッシャーを感じ素直に従い、雫と要の間に座る。

「は、はい」

「えー、わたしもお兄ちゃんの横がいいな。お姉ちゃん代わって」

彩芽は要に席を代わってくれようと言う。

「彩芽は私の前に座りなさい」

要は彩芽に冷たい視線を向けそう言った。

「お姉ちゃん怖っ……ふふーん、でもいいんだもん」

彩芽はそうやって、横島と要の間に割って入り、さらにそこから横島の膝の上に座ったのだ!!

雫は無言でその様子を羨ましそうに見てから、横島を冷ややかな目で見ていた。

「彩芽、横島くんの邪魔になるからどきなさい!」

要はさらに冷え切った視線を彩芽に送るが、当の彩芽はどこ吹く風か気にしていない。

「いいじゃんねー」

彩芽は横島に答えを求めない同意を得る言動を軽い言葉でサラツと言つてのけた。

小学6年生ながら末恐ろしい。

「たはははははっはっはっあ」

横島はその冷たい空気を肌と感じ、苦笑いとため息を同時に付いていた。

更に、彩芽の快進撃が続く。

「はい、あーん」

パク

横島はつられて、彩芽がスプーンですくったプリンを食べてしまった。

「おお、こここのプリン美味しいな!」

「うん、おいしいね。お兄ちゃん」

彩芽は笑顔で答える。彩芽は自然な形である定番の「アーン」をやったのだ。

雫はその様子を見てスプーンを持ったまま固まる。

要は冷たい笑みを浮かべていた。

そして、あろうことか彩芽はその二人を見やり、どうだと言わんばかりの顔をしていた。

「ん……」

雫は無表情だった顔が一瞬ムツとする。

「フフフフツ」

要は底冷えするような笑顔で小さく声を発し微笑む。

「横島さん、こっちのプリンもきつとおいしい。……はい」

雫はそう言って横島にプリンが乗ったスプーンを目の前に掲げる。

「横島くん、私食欲がないから代わりにたべてくれないかしら……どうぞ」

要もそう言って横島にプリンが乗ったスプーンを目の前に掲げる。

雫と要は同じことをし、互いに視線ががち合う。

「たはったはははっ、大丈夫自分のもあるから」

横島はそうやって断ったのだが……

「……おいしいのよ」

雫は悲しそうな目で横島を見つめる。

「彩芽のが食べれて、どうして私のは食べれないのかしら？」

要はツンとしながらそう言った。

「……頂きます」

横島はその空気に耐え切れず、二人が掲げたスプーンからプリンを直接食べる。

雫はその様子に満足そうに頷く。

要はその様子を見てからパイッと視線を逸らし、少し顔を赤らめる。

彩芽はそんな二人の様子を見て……

「うーん、二人共ダメダメだね」

ボソツとそう言った。

対面の幹比古は羨ましそうに、美月は顔を赤らめてその様子を見ていたのだった。

横島、怪しいおっさんと会う!!

プリンのおいしい喫茶店を後にし、Yクラフトコーポレーションにたどり着いた一行。

その間も、横島をめぐり沈黙のポジション争いを零と要は繰り広げていたが、彩芽はそんな事お構いなく、横島の右側を占拠している。そもそもそのポジション争いは、ナンバー2を決めるもので、ナンバー1を決めるものではない。

既に彩芽がナンバー1の座は最初っから得ていたように鎮座しているのだから……

結局最後まで2番手争いは決着はつかず、彩芽の一人勝ちになるのだった。

横島一行はYクラフトコーポレーションの前に立つ、6F建てのビルの1・2階が店舗の様だ。

「結構大きな店だな……なーんかいやな感じがするな」

横島はその店の前で感想を漏らす。

「そうね」

「そうですね」

それに要と美月が同意する。

美月は霊子放射光過敏症という現代では病気みたいな扱いだ、場に漂う霊気を見ることが出来るのだ。昔で言う霊能力者が霊気を見るのと同じである。

どうやら、横島同様霊気の動きでそう感じたようだ。

要は高い素養を持つ霊能力者であるため、感じる事が出来る。

横島は取り合えず店舗内で問題の粗悪品札の確認のみをするつもりでいた。

後は、学内でこの店から商品を購入しない様。メールで学内の端末機に配信。または放送や掲示板で告知するように算段をしていた。

店内に入ると、内装は宝石商の様な様相で、カウンターショーケー

スが沢山並んでおり、それぞれに店員が付いていた。

「いらっしやいませ、オープニングセールといたしました。年内まで特別価格でご提供している商品が多数ございます。また、学生限定の特別企画としまして、多数の商品を大特価でご提供しております」

女性定員はにこやかに一行に挨拶をし、お買い得品などの情報を提供した。

一行は取り合えず、学生限定特価商品とやらが販売されているコーナーに行くと、大きなワゴンの中に無造作に20枚ずつ位の束で各種札や呪符などが置かれていた。

横島はその束を一目見て、これが問題の札だと分かった。しかし問題はそれだけではなさそうなのだ。

横島が手に取って確認していると、この問題の札、の中には明らかに故意に無印の札に見せかけた他の目的で使用する札が混ざっていたのだ。

いつの間にか横にいた要もその札を見て……

「横島くん、この中の数枚に何か別の術式が刻印されているように感じるわ」

要も横島と同じ事を感じていたようだ。

「そんな感じかな、ちよつと様子を見とく」

横島は要にそつと答える。

にこやかな笑顔で店員が近づいて来て

「その制服は第一高校の学生さんですか、この札は品質は少々悪いですが大特価品となっております。通常の札の10分の1から20分の1の価格で提供させていただいております。練習にはもつて来いと人気を博しております、学生さんはこぞつて購入されます」

聞きもしないが、丁寧の説明をしてくれた。

確かに安い。20枚で無印札が1万円だ。ごく通常品質の物で1枚5千円〜1万円ほどする代物だ。

ちなみに氷室製の札は1枚5万円からの値段が付く。得意とする護符などは効力もあって1枚100万円以上するものもあるのだ。

横島は取り合えず、学生特価品の20枚束1万円の札を買ってみる

ことにした。

一応確認のため、他も見ることにしたのだが、店の奥の方から何やら説明している大きな声が聞こえてきた。

「そこのポインポインのお嬢さん!!第一高校の学生さんアルね!!この護符はかの安倍清明が鍛えたものアル!!もうどこにも手に入らない代物よ!!効果は抜群アル。呪詛はおろか、物理的な攻撃もロケットランチャー程度なら軽くはじき返すね!!今なら大特価2000万円アル!!お得よ!!」

背の低い大きなサングラスに、二本の長いひげを伸ばした銀髪のおっさんが怪しい中国人ポイ怪しい日本語を操り、美月の手を掴んでひと際高級そうな壁にかかっているガラスケースに入った護符について、セクハラまがいな事をしながら勢い良く説明していた。

「あの……その……」

美月は戸惑いを隠せずたじろいでいた。

横島はその様子を見て、スタスタとその怪しいおっさんに近づき、頭を叩く。

「何やってんじや、このセクハラおやじ!!」

「何するアルか!!あつ………札の小僧!!」

美月は怪しいおっさんから解放され、ホツとした表情をする。

横島は無言で、この怪しいおっさんの首根っこを掴んでひよいっと持ち上げて、勝手に店のバックヤードに入って行く。

「離すね!!」

横島は怪しいおっさんを掴み上げたまま怒鳴る。

「やい、厄珍なんでお前がこの店にいる!!」

そう、この怪しいおっさんは5代目厄珍堂店主であった。風貌は双子かと見間違うほど初代厄珍とそっくりなのだ。

「どこに居ようと勝手ね。ここはわたしの店アル!!」

「前にあったあの古い骨董品屋みたいな店はどうした!!」

「あそこは買い取り専門ね!!いい加減に離すね!!」

「おまえあのガラスケースに入った札は俺が売った護符だよな!!なーーにが安倍清明の護符だ!!」

「そうだった様な気もするが、気にすることないアル」

五代目厄珍はシレつとそんな事を言う。

「俺がお前に売った価格は覚えているか？販売価格の50パーセントで買い取るって言ったよな!!俺が売ったのは一枚10万円だ!!なーーーにが特別特価2000万円だ!!」

横島は東京に来てから、生計を立てるため札を買い取ってくれるところを探そうとしたのだが、厄珍堂を思い出し訪れたのだがところが初代厄珍と同じ風貌の怪しいおっさんが元気に商売をしていた。その時から数回厄珍堂に護符を下ろしていた。攻撃用の火炎や氷結などは悪用されるかもしれないため。護符だけ売ったのだ。

当初、横島は自分の札の価値がわからず、厄珍の言い値で売っていたのだ。

「そんな昔の事は忘れたね!」

五代目厄珍は平気でそんな事を言う。

「もう、札は売ってやらんからな!!」

横島はそう言ったのだが……

「フン、もう小僧から仕入れなくとも十分儲かるアル」

厄珍は余裕の笑みを浮かべる。

「……厄珍のおっさん、特売セール品の札とか、一階に飾っている他の商品もだが、あれどこから仕入れてきたんだ」

「企業秘密ね!」

「おっさんあれはまずいぞ。……おっさんなんか騙されてないか?」

「なな……何の事ね!」

「あの商品の中に結構まずいものが入っているぞ。……命狙われても知らんからな」

「……な、何の事アルか!」

厄珍は横島にそう言われて、少し不安に思ってきた様だ。

「精々、夜逃げの準備でもしておくんだな!!」

そう言って横島は売り場に戻って行く。

横島と要が見つけた特価セールの札の中に混ざっていた問題の札

には、明らかに別の用途で使用する札が混ざっていた。一見、無印の札の様に見えるが、符水（術儀に使用する水）か何かで、術式が刻印されており、しかも常時術が発動している様だった。普通の術者であれば見破る事が出来ないように工夫がされていた。

術式の内容は盗聴……しかも、人が発する声のみを拾うようなものだった。

明らかに何らかの情報を得るためのものだ。

市場に出回らせ、多くの術者がそれと知らずに携帯する。そこから欲しい情報だけ抜き取るのだろう。

学校でその札が使われ暴走したのは、最初っから術式が刻印されていた札に、それと知らずに新たな術を上書きしてしまい術が発現しなかったり暴走したりしたのだ。これが問題を起こす粗悪品の正体だった。

学生限定で販売させたのは、学生程度では見破られないだろうとの事なのだろうか？

若しくは、学生の中でほしい情報があるのかもしれない。

横島が売り場に戻ると、要があの問題の札に術式を入れ込んでいた。

「要ちゃんダメだ!!」

横島は要を止めようと叫ぶ。

要は問題の札に探知系の術式を掛けたのだ。

この札を常時発動させている術者をその術式を利用して見つけるための術、いわゆる逆探知する術なのだ。

術が見破られた事が分かった術者は、何をしでかすか分かったものじゃない。しかも要が行った術は、術者の位置まで特定できる代物だ。

これだけの仕込みが出来るという事は、複数人以上いる組織の可能性が高い。それこそこの前のブランチユの様なテロリストや他国の諜報員の可能性もある。

慎重に事に当たらなければ、まずいのだ。

本来横島はこのまま店に出て、とりあえず花音や学校には、販売店の特定をした事と、ここから商品を買わないように全生徒に徹底してもらおうようにした後で、八雲か九島烈に相談したうえで調べるつもりでいたのだ。

要は正義感からなのか純粹にこのいかがわしい札の状況を調べ、店に文句でも言うつもりでいたようなのだ。

横島が気づいた時には既に術は発動してしまっていた。

すると、この販売店全体から人避けの結界が発動したのだ!!

横島、囲まれる!!

Yクラフトコーポレーション建物全体が人避けの結界が張られた。

横島はいち早く異変に気付き、皆に指示を出す。

「みんな幹比古の周りに集まれ!!」

横島自身は近くにいた美月を抱きかかえ、一つ飛びで幹比古の前までジャンプする。

幹比古は窓が無い外周壁に面した場所に居た。

入口には既に店員が数人固まっている、数人いたはずの他の客はいつの間にかいない。

店員は何処かうつろの目をしながら、此方を囲む様に近づいて来ていた。

「幹比古!!壁を背に美月ちゃんを守れ、雫ちゃんは俺の後ろで待機CADを装着!!彩芽ちゃんも俺の後ろに!!」

横島は全員に指示を出す。それぞれが異変に気付き素直に従う。

「横島!任せて」

「うん」

「わかったお兄ちゃん」

幹比古、雫、彩芽は返事をする。

「横島くんごめんなさい」

要は自分の失敗に気付き、横島の横で謝る。

「大丈夫……」

そして店員が横島たちを取り囲む。店員たちは全員うつろな目をし、心ここに無いような状態だ。しかし全員がCADを装着していた。しかし、此方に攻撃してくる様子はない。

前衛横島、その少し離れ横に要。横島の後ろに雫と彩芽、その後ろに幹比古、最後方壁際に美月という布陣。

奥の方から、黒ずくめの10人ほどの一団が現れた。

一番前を歩く細身の30代ぐらいのリーダー各らしき男が要を睨んで言った。

「ふん、小娘の分際でよくもわたしの華麗な術式をみやぶったわね」

「自分で華麗とか、バカみたいね」

要は言い返す。

「要ちゃん!!」

横島は要を叱る。

要はシユンとなり、一步下がる。

すると厄珍が後方から出てきて、リーダー格の男とその後ろにいる大男に向かってまくしたてる様に怒鳴る。

「フェイ（飛）兄弟これは何事ね!!これでは商売ができないね!!」

するとリーダー格のフェイ兄は

「あんたは、用済みよ」

そうやって、厄珍を蹴り飛ばした。

厄珍は壁に激突しそのまま意識を失った様だ。

それを見た大男のフェイ弟は

「兄者、そいつが居ないと作戦が……」

フェイ兄は弟にそうやって

「フン、もう必要な情報はあらかた入手したわ、ここが潮時よ。……あんな達、私の華麗なる作戦を見破って、ただじゃ置かないんだから……」

横島たちに振り返り睨み付ける。

「作戦ってなんすか？俺たちはただの学生つすよ！」

横島はフェイ兄におどけた様に言う。

「フフフフフ、第一高校の横島ね。九校戦みたわよく私の部下に欲しいぐらいの手際よね、私のお人形さんにするのはもったいないわね」

フェイ兄は横島を見てそういう。どうやら横島の事を知っている様だ。

「人形ってあれか？その店員さんみたいにか!!」

「ふふふふ、やはり、貴方がいいわ！」

どうやら正解だったようだ。この男は店員を操り人形に仕立て上げた様だ。

横島の見立てでは、現在魔法や術が行使されているわけではない事がわかる。

人の心を操る手段は何も術や魔法だけでない。口による詐術、洗脳、薬物や痛みや恐怖によっても可能なのだ。横島は後者だと判断していた。

「あんた達、この子たちを拘束しなさい。但し、その元気のいい子と眠そうな目の子は傷付けないようにね。小さい子は好きよ。後で私の所に連れてきなさいウフフフツ」

そう言って、彩芽と雫をいやらしい目で見る。

「おっさんロリコンっすか!?まじ〜」

横島は挑発のつもりでそう言ったのだが

「そうよ!!私は日本で言うところのロリコンなの!!天使の様な綺麗な心を私色に染めていくのがとってもいい!!そしてその真っ平らな肢体!!とつてもいいっ!!……その後ろの眼鏡とツンツン娘みたいに胸にぶよぶよのぜい肉吊り下げているだけの下品極まりない存在とは違うのよ!!」

フェイ兄は体をくねらせながら、おネエ言葉を発し、自分はロリコン宣言を堂々としたのだ。

こんな奴しかこの世界には居ないのか!!

「兄者〜だったら、俺にあの抱きしめがある大人しそうな眼鏡の子と、大人しそうな美男子をくれよ」

フェイ弟がフェイ兄の後ろからそんな事を言った。

「あんた好きよね。大人しそうな子だったら男も女も関係ない物ね。でもその美男子君、吉田君だっけ?弟のを受け入れることができるかしら?」

フェイ兄はそう言って、幹比古を見る。幹比古の事も知っている様だ。

フェイ弟も大概だ。バイセクシャルいわゆる両刀使いだ。

思わず幹比古は札を構えていない手でお尻を抑える。

「ああ、優しい子が好きだ。そこのツンツンしただけの凶暴娘には興味が無い」

フェイ弟は要を憐れみの目で見てそう言った。

「フハハハハハ、そういう事で……覚悟はいい？では……お前たちや……」

ズビユウウー……ン!!

ジュユウウー

フェイ兄が部下に命令しようとした矢先、横島の後ろからレーザーの様な光の飛翔体が飛び、

フェイ兄の真横に在った大きなコンクリート造柱に、直径30cmの大穴を開け貫通し、さらにその後ろに合った壁等も見事に貫通していった。穴周囲はコンクリートがバターの様に溶けていた。

その場にいる全員がその光景に驚きの顔をする。

そうこれは雫の高等魔法フォノンレーザーだ。粒子を極限まで振動させ、熱線を生み出す魔法。

いわゆるレーザービームと同じような効果が表れるのだ。

「わたしはロリじゃない!!」

横島の後ろにいた雫が短銃型CADを構え、叫んだのだ!!目には涙をため、フェイを睨み付けていた。

そして雫は横島の袖を後ろから引っ張り握りしめ、

「ロリじゃない……わたしはロリじゃないのに……」

下向き加減になり、下唇をかみしめ、目には涙をいっぱい貯め、小さな声で嗚咽を漏らすかのようにこぼす。

雫は最初はロリの意味が分からなかったようなのだが、フェイ兄の発言と彩芽と一括りにされたことと、要と美月に対してのぜい肉発言で、理解したようなのだ。

「し……雫ちゃん……」

横島は雫を慰めの声を掛けようとするがその横で

ズバーン!!
パラパラパラ

要は自分のすぐ横にあるコンクリート造柱を横殴りにしたのだ。柱には見事なクレーターが出来、柱は全体的に大きなヒビが入っていた。

その場の全員が要を見て慄く。

「フッフッフッフッ！ぜい肉で悪かったわね。凶暴女で悪かったわね!!」

要は黒々としたオーラを纏い目にはどす黒い影を落とし、フェイ兄弟を睨み付ける。

「ちよっ、要ちゃんまで!!」

横島は要を抑えようとするが……

そして、フェイ兄が

「もういいわ!!全員、やっておしまい!!」

部下と操られている店員に命令を下した。

横島、フェイ兄弟と戦闘突入!!

「やっとおしまい!!」

フェイ兄の命令で黒服8人と操られている店員が横島たちに攻撃を仕掛けるために動いた。

「許さない……」

涙ぐみながら雫は小さな声で言い、腕をフェイ兄の方向に伸ばし、装着している汎用型CADを操作する。

「あなた達、後悔させてあげるわ」

要はフェイ兄弟両方を見据えていた。

もはや、二人の暴発は止められないと考えた横島は

「雫ちゃんはある兄の方をけん制、レーザー魔法（フォノンメーザー）とか大規模魔法はやめて!! 要ちゃんと彩芽ちゃん、幹比古は黒服連中を!! 要ちゃんはその後、弟の方だ!!」

皆に一息で戦闘指示をする。

「……もう許さない」

「フフフフツ、分かったわ」

「はーい!!」

「了解、横島!!」

雫、要、彩芽、幹比古はそれぞれ返事をし行動に移した。

横島は全体のフォローに徹することにした。しかし、雫一人ではフェイ兄は荷が重そうなため、雫のフォローも頭に入れ行動に移す。

札を出しその場に投げ捨て、雫、幹比古、美月、彩芽を囲う結果を張る。

黒服連中は接近戦を行うようだ。もともと接近戦が得意なのかもしれないが、この狭い空間ではヘタに魔法を放つよりも有効な判断だろう。

それぞれが、加速魔法と身体強化魔法を付加したようだ。

操られている店員たちは、此方に向かって空気砲や火炎魔法など小

規模な魔法を放つ、けん制の意図が見える。

しかし、すべて横島の結界に阻まれるためけん制の意味をなさない。

フエイ兄弟は取り合えず高みの見物を決め込む様だ。

前に出る要に黒服は3人がかりで攻撃をしてきた。先ほどの要の破壊力を目の当たりにし危険であろうと判断し真つ先に襲ってきたのだ。無手で迫っているところを見ると、武術の心得があるようだ。

要に対し一人目の男が鋭い右ストレート気味の拳打を放つ、要は少し前かがみになりそれを避け、その体勢のまま、相手の両肩の下方に両腕を伸ばし手のひらでトンと触れる様に押す。すると一人目の男は勢いよく吹っ飛び壁に激突した。一種の呼吸投げのようなものであろう。

二人目の男が要の横から鋭い回し蹴りを胴のあたりに放つが、要は先ほどの体勢から相手の近い方を軸足にして横回転し、相手に密着するように後ろを取り、肩を掴み相手の蹴りの遠心力を使い。次に迫ってきている三人目黒服に投げつけ、倒れたところを靈気を纏った当て身を足で放ち二人を気絶させた。

要は合気術のような体術を使い、流れる様に相手を次々と無効化していったのである。

「要ちゃん、右前方の店員たちに、拘束術を!!」

横島は要の右前方が空いたことで、店員たちの拘束の指示をだす。

要はジャンプし右前方の4人の店員たちの魔法攻撃を避けながら前まで近づき地面に右手を付き靈力を発する。

「ハの八二式、束縛術式改式」

そう唱えると、要の右手を起点に4人の足元に大きな術式が現れ、紫色のロープが術式から勢いよく飛び出し、店員たちを捉え地面に張り付けにした。

この術は氷室家独自の術体系だ。イ・ロ・ハに分かれた体系にそれぞれの系統術が振り分けられ、言霊として昇華させ、詠唱を簡略化させたものだ。

元は100年前、横島が絹の為に、元々あった古氷室家の術式を復活させ手を加えたものだった。それを100年の間、詠唱文の省略、術の性能向上などの改良を重ね練りに練ったものがこれだ。

要は次期当主として、これらの術の基礎体系をすべてマスターしていた。

ちなみに絹はこれをすべて、無詠唱でさらに一部は術式展開無しで行っていた。

要はその後、残りの店員も拘束しようとしたが、フェイ弟がその光景をみて、要に襲い掛かって来る。

一方、雫はフェイ兄に氷結魔法の氷の礫を放っていたが、ことごとく相手が無造作に放り投げる札に阻まれていた。

フェイ兄は古式魔法師として優秀な事がこれだけでもうかがえる。雫はもどかしく感じていた。雫が得意としている振動系魔法は建物内や狭い空間での使用は適していない。雫の振動魔法は広範囲または高威力の物が多く建物自体を破壊しかねないからである。人を殺めず拘束するなどという細やかで、正確性が求められる戦闘は、雫自身細やかな調整を苦手としているだけに、現状の様な戦いははつきり言って不得意なのである。

黒服連中が加速術式と身体強化を自身に掛けつつ、雫たちに襲い掛かって来た。

幹比古はまずは黒服連中に札を放ち小規模な雷光を走らせて2人に膝を付かせるが、無効化まで至らなかつた。2人は直ぐに立ち上がり、此方に向かつてくる。

幹比古は故意に威力を落としていたが、予想以上に黒服連中の耐久力が高かつたようだ。

黒服の連中は一人一人がかなりの練度を持った接近戦に特化した戦士、耐久力も一級品だ。

幹比古の攻撃を受けなかつた黒服連中を、雫は広範囲で氷結魔法を

放ちけん制する。3人に命中したが、耐えしのぎ行動が遅くなる程度である。

雫もそうだが、幹比古も近接戦闘が苦手である。相手に懐に入られる前に勝負を付けたかったのだが、現状は上手く行っていない。

「口の三三式、電光石火改参!!ビリビリしちやえー!!」

彩芽は雫がけん制した3人に追い打ちをかけるべく、右手を前に掲げそう詠唱すると、手のひらから術式を展開し前方広範囲に放射状に電撃がスパークしながら放出される。

3人は彩芽の電撃をまともに喰らい1人はノックダウン。2人は明らかに行動が鈍くなり、立ち上がるのがやっとだ。

幹比古はすかさず、その2人に札を放ち、先ほどより威力を上げた電光を放ち今度はノックダウンさせた。

その間、後方から2人が一気に雫の前まで迫っていたが、横島が割って入り、2人の顔に触れ霊気を送り気絶させる。

「横島さんありがとう」

雫は礼を言うが、横島はとつさに雫を抱きかかえ後方に飛び下がった。

フェイ兄がいつの間にか現れ偃月刀を振りぬき、横島が張った結界ごと斬ろうとしたのだ。

その偃月刀には術式が刻み込まれているのが見てとれ、振り切った場所の結界から解除されていった。

「さつきから、精神制御魔法を放っているのだけど、効果が無いと思ったら、結界を張っていたのね……なかなかやるじゃない。

でも、その結界も無い。これで司令塔のあんたが居なければこれでおしまいね。はいーはあっ!!」

そう言って、額に右手をやって、体をくねらせ悩ましいポーズを取り術を横島に向けて発動させた。

フェイ兄は横島に術が届いたと確信し

「ふふふふっ、これであんたは私の物……さあ、横島その子を渡しなやっ」

こう言った。どうやら精神コントロールの類の術だったようだ。

「……」

横島は無言で、雫を抱えたままフェイ兄に近づく。お姫様抱っこ状態の雫はギョツと横島の腕を掴み目を瞑る。それを見た幹比古と彩芽は叫ぶ。

「ダメだ横島!!」

「お兄ちゃん!!」

横島がフェイ兄の前まで来る。

「ありがとう、横島。ス・テ・キよ」

フェイ兄は余裕の笑みを浮かべていた。

「ブン!!」

ゴス!!

横島は雫を抱き上げたままフェイ兄に思いっきり頭突きをかましたのだ!!

フェイ兄はそのまま崩れる様に倒れるが、意識はあるようだ。

「な……なんで私の術が効かないの?」

横島はそつと雫を下ろし、フェイ兄に怒鳴る。

「知るか——!!よくも雫ちゃんを泣かせてくれたな!!」

横島の内包している霊力とその高い精神力に精神魔法など効果が出るわけもない。

そして、倒れたフェイ兄の両足を持って

「お仕置きじや——!!こうしてこうだ!!電気アンマの刑!!フハハハハー——!!」

ズダダダダダダ!!

フェイ兄の股間をマシンガンの様に連続で踏みつけたのだ。

「あうっ……あうっ……もう、やめて!!……あつ、なんかこれいいかも!」

フェイ兄は最初は苦悶な表情を浮かべていたが、途中から顔を赤らめていた。どうやら快樂に変わったようだ。

それを横で雫は冷たい目でフェイを睨み

「変態」

そう言つて、氷結魔法を至近距離で放ち、フェイ兄に氷の礫を容赦なく次々とぶつけていく。

「いい!!いいわ!!とつてもいいーいい!!」

フェイ兄はそう言いながら白目をむき、最後は気絶したようだ。どうやら、横島と雫のせいで新たな扉を開いてしまったようだ。

フェイ兄が気絶すると同時に、残った店員たちも倒れる。

一方、フェイ弟と対峙している要は……

フェイ弟はその大きな体の通り、身体能力を極限に高めた近接攻撃が得意なパワーファイター型のような。厄介な事に防御も硬く、加速魔法でかなりのスピードが出て、武術の腕も相当立つ様だ。

「フン、お前の様な凶暴な女は嫌いだ」

フェイ弟はそう言いながら、要に数々の打撃系の体術を放つ。

「奇遇ね。私もあなたの事が嫌いだわ」

要はそう言いながら、フェイ弟の技を両腕で相手の力を逃がすようにさばっていた。

そんな攻防のなか

「使いたくないのだけど、あなたならいいわよね」

要はフェイ弟にそう言った。

ズドーン!!

要は靈力を高め、拳を作り思いっきりフェイ弟を殴りつけた。

フェイ弟は危険を察知し腕で十字にブロックをするがそれごと吹っ飛んだのだ。

フェイ弟の防御魔法を相乗させた防御力は、マシンガンはおろか対戦車ミサイルさえ耐えられるものだ。

フェイ弟は壁に激突、それでも衝撃が吸収できずにコンクリート壁がへこむ。

その衝撃で前のめりになったところを要が追いすが、顎に拳を放

っ。

フェイ弟は上に吹っ飛び天井に頭が突き刺さりそこで気絶。頭だけ天井にめり込み、体はプラプラと中空で揺れていた。

「ふん」

動かなくなつたフェイ弟を一瞥して、要は戦闘態勢と解く。

要のとんでもない剛力は氷室家の技ではなく、前世の女華姫のあの剛力を引き継いだようなのだ。

この力が発現した際は戸惑い、いろいろと失敗をしていたが、この頃ようやく自分でコントロールできるようになっていた。

氷室家でも稀に見る近接パワー攻撃も可能な術者として成長していたのだ。

こうして、要たちの活躍で札を使って悪巧みをした連中を全員拘束することが出来た。

ただ、店は見える影もなくボロボロになっていたのだが……

横島、戦闘終了し事後処理をする!!

Yクラフトコーポレーションでのフェイ兄弟との戦いは終息した。

戦闘力皆無の美月はその場を見ていることしかできなかった。

しかし、霊子放射光過敏症、幹比古らは水晶眼と言われている場の霊気や人が内包している霊気が見える特殊な目を持つ美月は今回の戦闘全体を把握し見ることが出来た。

美月はその中でも要の戦闘には目を奪われていた。

今まで見て来た魔法師は霊気を体内からの出し入れし魔法を行使しているだけに見え、幹比古は古式魔法を使用する際、霊気は札を通して伝達し行使しているように見えていた。

美月が見た要の霊気の在りようは今まで見てきた魔法師とは一線を画していた。霊気自体を自由に操り、一体となり、攻撃や防御、術を行使しているように見えた。

どれも一分のズレも無く、まるで霊気と一緒に舞を踊っているように見え、その美しさに感銘を受け、これが本来の霊気と術者の本当の在りようではないかと思っただ位である。

ただ単に憧れているだけだった氷室家に対し考え方が変わっていく分岐点となった。

しかしその後見た横島の霊気は、美月の常識から逸脱するようなものであった。

間近で横島の戦闘を見たのはこれが初めてだったのだが、

場に漂う霊気は横島がとる行動に一切干渉していないように見え、横島が動こうが、術を発動しようが、霊気に動きが無い。まるで横島がその場の霊気に溶け込んでいるかのようであった。

さらに、美月はもう一つの事実に関頭の中で消化できないでいた。普段の横島は楽し気な雰囲気でも霊気もそれとない暖かに纏っているように見えていたのだが、戦闘中の横島の霊気が霞んで見え、良く見えなかったのだ。これまではそんな事は一度も無かったのに。

普段の横島は霊気を抑え調整している。調整をやめた本来の横島

の靈氣は余りに巨大なため美月にはよく見えなかったようだ。しかしこれでも封印状態である。

美月は戦闘が終わった後もしばらくボーっとその場を立ち尽くしてるのであった。

「おーい美月ちゃん大丈夫?」

横島は美月に遠くから声を掛ける。

美月はコクコクとうなづくことしかできない。

すぐ横にいた雫にも声を掛ける

「雫ちゃんも大丈夫?」

雫も頷く、さつきから黙って横島の袖をずっと握ったままである。

「みんな強くて助かった」

横島はそう言って皆を労い、慣れた手つきでフェイ兄弟と黒服全員何処から拾ってきたロープでぐるぐる巻きにしだし、一人一人、靈力が発揮しない様、要と共に札を額に貼っていった。

「彩芽ちゃん頑張ったね!!」

横島の作業の手伝おうと近づいてきた彩芽の頭を撫でる。

「フフーン!!彩芽も頑張ったでしょう!!ビリビリは得意なんだ!!」

彩芽は胸を張り嬉しそうに言う。

幹比古は横島の横まで来て、要が起こした戦闘の跡と、店員に拘束術を解き、睡眠を促す術を行使している姿を見やり、

「よ……横島、要ちゃんって凄いな………なんか、魔法科高校とか行かなくてもいいんじゃない?あの術は何?札無しで?あのパワーは何?……なんなの?あんな凄いの見たことないんだけど……」

呆けた様に横島に言う。

「たはははははっ、まあ、氷室次期当主だしな」

「彩芽ちゃんって、もしかして僕たちより強くない?術起動早くない?札使ってないよね?なんなのさ?なんなの?……氷室ってめちやくちやだ!!」

幹比古は目を白黒させ段々興奮しだして横島の襟首をつかんで前後に揺すりだした。

「く……苦しい……幹比古、やめ……」
「またもや暴走する幹比古。」

「要が店員を安静にさせた後、横島の所に来た。」

「横島くん終わったわよ」

「それに気が付き幹比古は横島を解放する。」

「ご、ご苦労さん。やっぱ要ちゃんは凄いね！あんなだけの事がもう出来るなんて!!」

「横島は要を笑顔でほめる。」

「そ、そうかしら」

「要は顔を赤くしていた。横島に褒められ照れている様である。」

「横島は皆に聞こえる様に話す。」

「取り合えずしばらくみんな待機で、このまま出て行くとやばいしね。ビル全体に結界も張ってあるから、外からはこの異変には気が付かないはずだし……この事態を何とかしてくれる人に連絡するから」

「そう言つて、横島は携帯端末を出し電話を شدした。」

「もしもし、じいさん？横島だけど、今大丈夫か？」

「横島君か、良い」

「九島烈が電話越しに答える。」

「あのさ、なんか犯罪者っぽいのを捕まえたんだけど、どうしたものかと思つて」

「うむ？どういうことかね」

「いや、なんか大陸系の奴らしいんだけど、フェイ兄弟つて奴なんだ。結構激しい戦闘になつちやつて、ビル壊しちゃつたし、あつ……死人とか重傷者は出てない」

「今なんと言つたか、フェイ（飛）兄弟と聞こえたのだが」

「珍しく九島烈は驚きの声を上げてた。」

「なんかそうらしい」

「大亜連合の工作員だ。我々軍も奴らの諜報活動に手を焼いていたのだが……まさかこんな形で捕らえることになるとは……腕の立つ名

の知れた本職のプロだったのだが……横島君ならさもあらん」

九島烈はフェイ兄弟を知っていた。そして彼を横島が捕まえた事に納得する。

「そこでさ、友達とか側において、そろそろここを離れなくっちゃならないんだが、事情聴取とか面倒だから、何とかならない?」

横島はそう言つて、今までであったあらましを説明する。

「わたしの手の者を直ぐに遣わす。少々待機していてくれたまえ……まさか、氷室の令嬢が関わったとは……」

「その事は内密にお願いだ!!なんか余計な事に巻き込まれそうだし!!なんていつてもまだ子供だし……」

「了承した。此方で後は対処するが、君には詳しく事情を聴くかもしれないが良いか?」

今回の事は九島烈にとって、この場の対処は軍や公安、警察の縄張りの問題で困難ではあるが、それは些細な事であった。何もせずに問題となっていたフェイ兄弟を拘束出来た事は大きい。軍内や十師族内での発言力が高める絶好の功績でもあるからだ。横島との良好な関係を築くメリットはかなり大きく、横島の願いは無下にはできない。

「ああ、ありがとな、じいさん!!」

「良い」

そう言つてお互い通話を切る。

「もうちよつとしたら人が来るからそれまで、俺が残ってるから、さっきのプリンの喫茶店でも行つて待つてくれる?」

横島はそう皆に言う。

「ふーっ、私は子供じゃないのだけど……」

要は横島を一睨みしておもいつきり足を踏む。どうやらさっきの会話を聞いていた様だ。

「……横島さんと居る」

雫は相変わらず、横島の袖を引っ張ったまま項垂れている。

「あつ、私もお兄ちゃんと一緒に居るー!!」

彩芽はいつでも元気いっぱいだ。

「うーん、幹比古と美月ちゃんはどうする？」

「ああ、僕も、最後まで見届けるよ。まだ今日の事、頭の中で整理できてないし、色々いっぱいいっぱいだしね」

幹比古もなんだかんだって残るようだ。

「……私も残ります」

美月は先ほどから何やら考え事しているような感じだ。

結局全員、この場に残る事になった。

横島、悩む仲間を知る!!美月そして雫…

横島たち一行は九島烈の使いの者なる人物が来るまで、半壊したYクラフトコーポレーションで待つことになった。

横島はフェイ兄に気絶させられた厄珍に靈気を送って起こした。
大した怪我はなさそうだ。

「厄珍、大丈夫か?」

「はっ……何事アルか?……あああああ!!わたしの店が……!!」

厄珍は目を覚ましあたりを見渡すと、店舗はボロボロで見る影もなくなっていた。

「まあ、どうせこの店は接収されるだろうし、いいんじゃないか?それより、今からいい弁護士探した方がいいぞ」

横島は厄珍に血も涙もない現実を突きつけた。

「どとどと……どういう事アルか?」

「ああ、お前……知らないうちに、あの兄弟に国家犯罪の片棒を担がされてみたいだぞ」

「あわわわわわっ」

厄珍は腰砕けになりながらも逃げようとする。

「ちよつと待て……まあ、洗いざらい話せば、見逃してくれるかもしれないぞ……逃げたら、もう日本の地を踏めんしな、あっちの店がまだあるじゃねーか、だから大人しくしとけよ」

そう言つて横島は厄珍の襟首をつかみ大人しくさせる。

厄珍はあきらめた様に項垂れ座り込んだ。

美月は疲れたような表情をして、その辺の椅子に座っていた。

幹比古はそんな美月に近づき

「柴田さん大丈夫?」

「うん、吉田君、守ってくれてありがとう」

美月は笑顔で答える。

「いいよ、そのくらい」

幹比古は照れながらそう言う。

「吉田君、私、皆に守ってもらってばかりで情けないよ」

美月は真剣な面持ちで幹比古を見る。

「柴田さんは仕方ないじゃない。元々魔法師の家系じゃないし、戦うためにこの学校に来たわけじゃないでしょ？」

「それでも、私は何もできない自分が情けない。皆と一緒に居たいのに……」

「柴田さんにはその目があるじゃないか……僕の練習にも付き合ってくれるし」

「でもそれだけではダメな気がするの……私にも何かできることないかな？」

美月は真剣だった。今日の戦闘に巻き込まれた事で再度自覚したのだ。このままだと自分一人がお荷物になる。何れ皆に迷惑が掛かるかもしれないと思ったのだ。

そこに横島達が美月たちの元に来る。

美月の声がいっつもより大きく出ていた事で、その内容を聞いていた様だ。

「あなた、その目、高度な霊視が出来る精霊の目ね」

要は美月にそう言った。どうやら氷室家では水晶眼の事を精霊の目というようだ。

「霊視？」

美月は霊視という言葉を初めて聞くようだった。

「うーん、美月ちゃん。その目の事、なんか自分で病気みたいに言っていたけど、それって個性的な能力だよ。霊能者はみんなその霊視を出来るようになるまで、訓練するんだけど、美月ちゃんは最初っから見えるなんてそれだけで十分凄いから自信もっていいんじゃないかな。何を隠そう俺だって最初は霊視すらできなかったんだから」

横島は美月が思い悩んでいる事に対し励ましている様だ。

横島自身、最初は霊視すらおぼつかかなかったのだ。

「えっ？訓練で見えるようになるの？」

幹比古は驚きの表情をする。

幹比古は霊気の流れ（吉田家では精霊の動き）を霊気の繋がりで体感的に感じているが、見ることはできないようなのだ。

「何言ってるんだ？霊能力者の必須スキルだぞ。まあ、古式魔法師は違うのかもしれないが、ある程度訓練すると見えるようになるな。素質とかもあるかもしれないが……」

「ほんと!!という事は横島も要ちゃんも彩芽ちゃんも見えたりするのかな!?普通の目をしている様だけ!!」

幹比古が興奮したように横島に迫る。

「うん、見える様になったよ!!」

彩芽は元気よく答える。

「そうね。私は最初から見えてたけど……。修行次第で性能は随分ちがうものよ」

要も答える。

「えええっ……本当に!!……横島!!訓練の仕方教えてくれないかな!!」

幹比古はまたもや暴走して横島の襟首をつかみ前後に揺する。

「く……苦しい、これで……何度……目だ」

「ごめん」

幹比古はパツと横島を離す。

「ふー、まあ、暇なときにでも、修練に付きあつてやるよ」

「本当!!ありがとう横島!!」

幹比古は感極まって横島に抱き着いてしまった。

「あーずるいんだ!!」

彩芽は声を上げる。

「離せ!!幹比古!!男に抱き着かれて喜ぶ趣味はないわー!!」

横島は無理矢理幹比古をひっぺがした。

「はあ、はあ、ったく。美月ちゃんも、一緒に、ね？」

横島は息苦しくしながらもそう言っただけで美月を見やる。

「その、私なんかと一緒にいいんですか？」

美月は申し訳なさそうに言う。

「あなた、もつと自信をもったら？」

要は美月に呆れた様に言う。年下が言う言葉じゃないのだがそこは次期当主という事で許してあげたい。

「まあ、時間が空いている時だけど、美月ちゃんにはいざという時のその目の活用方法もね」

「ありがとうございます!!私には元々この目をどうにかしたくて、この学校に入ったのですが、それを活用するなんて思ってもみませんでした。目から鱗が落ちる思いです!!」

美月は先ほど悩んでいたことが嘘の様に心が晴れ晴れしていた。

「横島!!ついでに、さっきの彩芽ちゃんとかの術教えてくれないかな!?!」

幹比古は調子に乗ってこんなことを言った。

「幹比古ーそれはさすがに無理だ。あれは氷室の秘術の一つだぞ」

横島は幹比古呆れた様に言う。

「別にいいわよ」

要はそう言った。

「え!!本当!!」

幹比古はキラキラと目を輝かせる。

「ただし、一生氷室家の門下の家人として過ごす約束してくれるならと条件はつくかしら」

「あつ……それは……」

幹比古は吉田家当主の次男で、状況次第では当主となりうる人物なのだ。それは不可能である。

「はあ、幹比古諦めろ、お前も吉田家の術を他に漏らせないだろ？」

「うん、ごめん。そうだった」

幹比古は素直に謝る。

「あの一、氷室家の家人というか、門人とか巫女になる事ってできるのでしょうか？」

美月は先ほどの幹比古に対しての要の答えを聞いて、質問をする。「私も詳しくは知らないけど、多分可能だわ。但し、適性審査とかは必要になると思うけど……。あなたのその目があれば大丈夫かもしれないわね」

「本当ですか!!」

美月は顔をぱあつと花開いたような笑顔で、要の手を取り上下に振る。

「わ…私では詳しくは分からないと言っているのだけど、本当にその気があれば一度氷室に来てみるといいわ」

要は美月の行動に戸惑いながらそう言ってから、パイと顔を横を向ける。どうやらこの行動は要の照れ隠しの様だ。

そうこうしているうちに、背広姿の男数人と軍服姿の人間が20人ほどビルの前まで来ていた。

どうやら、九島烈が言っていた。使いの者とここを收拾する軍人なのだろう。

横島はビル全体に張った結界を解除し、中に招き入れる。

横島は背広姿の男達と簡単に話をして、この場を引き継いだ。

九島烈に言い含められているのだろう。他のメンバーには一切質問等をしなかった。

横島たちはビルを出て、そのまま氷室家のアンテナショップがある六道家が経営する店舗に戻っていくのである。

「要ちゃん、彩芽ちゃんごめんね。こんな事に巻き込んで……。折角東京観光が出来る時間があつたのに」

横島はそう言って、隣を歩く要と彩芽に謝った。

「元々私たちが勝手についてきたんだし、その、私の失敗のせいであんなってしまったのだから、横島くんが謝る事じゃないわ」

要はそう言って、またもやパイと視線を外し横を向く。

「そうそう、お姉ちゃんが全部悪いから!!」

無邪気に笑いながら答える彩芽。

「彩芽、後でじっくり話し合う必要があるようね」

そう言っつて、要は彩芽の頭を掴む。

「痛い、痛いって、お姉ちゃんのはシヤレにならないから!!」

彩芽は泣きそうな顔をして、姉に訴えかける。

「たはははははっ、ありがとう二人共」

横島はそう言っつて二人にお礼を言う。

氷室家のアンテナショップに戻ると、敦信と麻耶は先に帰ってきていた。

横島は、二人に今回の事件に巻き込まれたことについて、あらましを説明し、謝罪した。

「そうか……二人共怪我はなかったかい？」

敦信は二人の娘を見て優しく問うた。

「大丈夫よ」

「うん、平気!!」

「敦信さん、すみませんでした」

横島は再び敦信に謝る。

「横島くん、何もなかったからいいじゃないか。まあ、君が居ればなんとでも出来たんだろうしね」

敦信はそう言っつて、横島を慰める。

「それでは、私たちはこれで氷室に帰るとする。……横島くん時間があつたらいつでも帰ってきなさい。蓮も、お義母さんも喜ぶ。もちろん娘たちもね」

敦信はそう言っつて、別れの挨拶をする

「バイバイお兄ちゃんまたねー!!あつ皆もまたねー!!」

「さようなら。横島くんは……そうね、今度はちゃんと東京案内してもらいたいわね」

彩芽と要もそうやって、皆と横島に挨拶をし帰って行った。

そして、横島一行も帰路につく。

「今日はなんか大変だったね」

「そうですね。でも氷室家の人にあえて感激です」

幹比古と美月である。

「たはははははっ、なんか巻き込んだじゃってごめん!!」

横島は皆に軽く謝った。

「いや、いい経験が出来たし、訓練の指針も出来たから充実していたよ」

幹比古は満足そうに言う。

「私もです。もやもやが晴れた気分です」

美月もそう感じている様だ。

そんな美月と幹比古と駅で別れた後。

ようやく雫が口を開き小さな声を発した。

「私は、何もできなかった」

雫はあのYコーポレーションの事件の事後処理から一言も発せず、後ろから俯きかげんで横島の袖をずつと掴んだままだったのだ。

「雫ちゃんだってちゃんとやれてたよ」

「そんなことない!!」

雫は語気を強くして横島を見上げる。瞳には涙が溜まっていた。

「…………でも…………」

横島はそんな様子の子の雫にハツとし、どうしていいかわからず何か声を掛けなければとするが…………。

「私は結局横島さんに助けられた!!役に立ちたかった!!でも…………あの子の様にできなかつた…………」

雫は涙目で横島を見上げ語気を強くし訴えかける様に言っていたが、最後は消え入るような声になり、地面に涙を落とした。

横島が敵の大凡半分を要一人に任せる指示を出し、要がその信頼に見事答え、強敵相手に圧倒して打ち勝った。

しかし自分（雫）は何もできずに横島にただ助けられるだけ…………。

そして、戦いが終わった後、横島が掛けた言葉…………。

自分（雫）には「大丈夫？」だった。

そして要には「ご苦労さん」だったのだ。

雫にはそれが信頼の違いの様に思えてならなかった。

横島の横に立つことが出来るのは、自分ではなく要に思えてならなかったのだ。

それが悲しくて悔しくて、こうして横島に感情を爆発させてしまったのだ。

横島はそんな雫にどう声を掛ければいいのかわからない様子でしばらく沈黙が続いた。

やがて雫に迎えの車がやって来る。

そして雫は、

「私は強くなりたい……。堂々と横に並んで歩けるぐらいに……」

横島にその内容が聞こえない位小さく震えるような声でそう言うて、車に乗り走り去った。

横島は雫を乗せた車を呆然と見送るしかできなかった。

横島、変だよ横島!!前

休み明けの月曜日の朝。魔法大学付属第一高校1年E組は異様な雰囲気にもまれていた。

第一高校では魔法の能力応じ、一科生と二科生と振り分けられる。魔法こそすべてであるという思想に染まった人間が多く集まるこの学校では、二科生は劣等生として蔑まされてきたのだ。二科生のクラスは諦めや卑屈感に苛まれ、重い空気が支配するのだ。

1年E組はその劣等生（二科生）のクラスだった。

だが、1年E組は、普段から騒がしく、ある時は雄たけび、時には大音量での泣き声、そして、呆れた声と女子の怒声に、ある特定の男子の悲鳴が飛びかい二科生特有の卑屈感や諦めムードなど微塵も感じさせない明るいクラスなのだ。

ほぼ特定の男子の仕業なのだが……

しかし、今日に限っては違っていた。

「はあ」

バンダナをした少年は自分の席に座り何か考え事をしながらため息をついていた。

「おい、なんか溜息を付いているぞ……」

「有り得ない……今日槍でも振るんじゃない？」

「どうしたんでしよう？」

「あつ、なんか頭抱えだしたよ」

「……………」

少年の悩んでいる様を見て……友人たちは近くでコソコソと話しながら、驚きと困惑を隠せないでいた。

しかし、この年頃の少年少女は青春真っ盛りである。悩みの一つや二つ抱えて当り前なのだが……

この少年に限ってはクラス全員が思う事は一緒だった。

「絶対おかしい!!」

この少年横島忠夫は悩んでいた。

先日の土曜日。

クラスメイトや実家の妹分たちとある重大事件に巻き込まれたのだが、その事で悩んでいる訳ではない。その帰り際に、仲のいい同級生の女の子を怒らせて、泣かせてしまったのである。

横島にはどうして怒らせて泣かせてしまったのかが全く見当もつかず、どう謝ったらいいのか? 何に謝ったらいいのか? それすらもわからず途方に暮れていたのだった。

しかしクラスメイトからは、横島の普段のとんでもない行動やら、ざつくばらんな性格に、悩みから一番縁遠い人間だと思われるのだ。

先ほどから横島のすぐ近くでコソコソと話し合っている横島の友人一団。

横島の友人の一人、快活そうな美少女千葉エリカは

「ちよつと横島に刺激をあたえてくる。これで何時もの横島に戻るはずよ」

そう仲間に告げて自信満々に横島の席に行くのであった。

絶賛悩み中の横島に向かってエリカは

「横島、今度温水プール一緒に行かない? 新しい水着買ったのよ。今度はビ・キ・ニ」

そう言って、横島が喜んで飛びつきそうな色っぽいポーズをとる。

しかし、横島の反応はエリカが予想したものとは違っていった。

「エリカか……、エリカに聞いてもな……」

横島はエリカの言葉を聞いてもいないかの様な反応だった。しかも後半は何やらブツブツと言っていた。

エリカは横島のその反応に驚き、脱兎のごとく、仲間のいる所に戻

る。

「ちよ…ちよつと、アレ本当に横島なの？水着とかプールとかビキニで反応しないなんて…：…ゼーったい、おかしいわよ」

エリカがコソコソと横島の反応を仲間に報告する。

仲間はそれにうんうんと頷いていた。

横島は自称健全男子と称すオープンスケベなのだ。

普段の横島だったら「まじ!!絶対行く!!ごっちつあああんです!!」なんてことを言うはずなのである。

「じゃあ、次は俺が行く」

そう言つて、横島の友人の一人、ガタイのいいイケメン少年、西城レオンハルトが横島に近づく。

「横島、らしくないな〜なんか悩み事でもあるのか？」

レオはストレートと真ん中で攻める。

「レオか…：…じゃあ聞くが、女の子が怒ったり泣いたりするのってどんな時だ？」

横島は顔をレオに向け質問した。

「そりゃあ…：…腹減った時じゃねーか？」

レオは少し悩んだ末にこんなダメすぎる答えを出した。

「お前に聞いた俺がバカだった」

横島はそう言つて、溜息を付き、再び顔を正面に向ける。

「……」

レオは沈黙のまま仲間の元へ戻る。

「あんだバカなの？腹減った時つてなに？」

エリカは戻つて来たレオに容赦なくダメ出しをする。

「でも、横島さんが何に悩んでいるかは少しわかったかもしれないよね」

横島の友人の一人、眼鏡の大人しそうな巨乳少女柴田美月はそう言った。

「確かに…：…誰か女の子を泣かしたり怒らせたりしたのかな？」

横島の友人の一人、草食系イケメン、吉田幹比古が美月の言に同意

して横島の言葉を精査する。

「……横島はスケベでバカだが、故意に女子を泣かせたりはしないだろう」

横島の友人の一人、万能イケメン少年、司波達也は抑揚のない口調で、幹比古の言を否定する。

「うーん。美月と幹は週末横島と一緒に居たんでしょ？なんかあった？」

エリカは美月と幹に聞く。

「色々あったけど、悩むようなことは無かったと思うけど」

幹比古はそう言っつて、土曜日に事件に巻き込まれた時の事をその場にはいない仲間に大まかに話した。

「マジかよ。その氷室の嬢ちゃんそんなに強いのかよ!!」

レオは幹比古の話聞いて、そちらの方も気になったようだ。

「うん、妹の方も僕より強いかもしれないんだ。姉の方はあれだねA級のプロでも最上級だね」

幹比古はレオの質問に少し興奮気味に答えた。

「……氷室家つて凄まじいわね。横島が普段あんなんでも強いって、わかる気がするわね」

エリカも驚いていたがどこか納得していた。

「話を戻すけど……横島さんと帰る時まで一緒だったんだけど、悩みを抱えている様な素振りもなかったんです」

美月は脱線しだした話を戻し、その時の横島の様子を思い出し話す。

「「うーん」」

答えが出ずに取り合えず様子を見ることにした何時もの面々。

授業中や昼休みも上の空の横島。

体育の時間にボールが頭に直撃しようが、食堂で頭からお湯を被ろうが反応が無いのだ。

そして放課後、何時ものメンバーは全員で話し合った結果、今日はそつとしておこうという事になった。明日もあの状態ならば無理矢理聞き出すつもりでいた。

横島は放課後いつも通り風紀委員会本部に行く。

横島はこう見えても学内に10人しかいない風紀委員の一人なのである。

横島は風紀委員長である千代田花音から無理矢理押し付けられた仕事、粗悪札が学内で横行している事件について、解決に至りその報告書を提出したのだ。

それは先週の土曜日にYクラフトコーポレーションで起きた事件の顛末でもある。

風紀委員長のデスクに座って報告書を手にした花音は読むにつれて、手がプルプルと震えだす。

「……………これは、どど、どういう事かしら？」

花音は冷や汗をかきながら、デスクの前でこの報告書を出した横島に問う。本人はボーっとして心あらずの状態だ。

「はあ、報告の通りです」

「ビ……………ビルを半壊!？」

「はあ」

「……………、国家犯罪者を摘発捕縛!？」

「はあ」

「なななな、なんでそこに九島閣下がでるのよ」

「はあ、なりゆきで」

花音はその報告の内容が余りにもことが大きくなっており、頭の中で整理が追い付いていない。

簡単に言くと、粗悪札を扱っていたのが、国家犯罪者で、それを大立ち回りでビルを半壊させながら捕縛して、九島烈麾下の者が事態を収束させたのだ。

「……………」

花音は頭を抱える。頭の中でそれらを整理している様だ。

「……では、巡回行ってきます……」

横島はフラフラと風紀委員会本部から出て行くとする。

「ちよ……まちなさいって!!横島ーーーー!!これどうすんのよーーーー!!」

慌てて横島を止めようと叫ぶ花音。

しかし、横島はそんな花音の悲痛な叫びなど耳に入っていないかの
ように、出て行くのである。

横島、変だよ横島!!後

横島は風紀委員会本部を出て巡回にでた。

普段、横島は風紀員の仕事で、事務員から修繕の依頼が来ていないときは校内を巡回し、不正がないかなど目を光らせていた。……という事はなく、違う意味で目を光らせていた。

巡回場所その1

武道場。見るのは剣術部と剣道部女子が稽古している風景。

素敵なうなじとポニーテールを見るためだ。

しかし、今日の横島は、それをぼーっと考え事をしながら眺めるだけだった。

「君!!そこどいて!!」

ブスッ

巡回場所その2

テニスコート。女子テニス部。エリカも所属している部活だがエリカ自身滅多に来ない。

横島はテニス部女子のスパッツとミニスカートの相性について日々考察していたのだ。

しかし、今日の横島は……

「あっ、手が滑っちゃった。……君、危ない!!」
ブスッ

巡回場所その3

第2体育館。新体操部

横島はここにいる時間が一番長いのだ。言わずと知れた。ちち、しり、ふとももを眺めるためだ。

しかし、今日の横島は……

「ありや、失敗!!あっ、そこの君、避けてー!!」
ブスッ

前生徒会長七草真由美は生徒会の様子を見に顔を出す途中、廊下で横島に遭遇した。

「あら、横島くん久々ね」

「……………」

無反応な横島

「横島くん？」

「あつ、真由美さんこんにちは…………いや流石に、先輩に相談とか…………では」

ようやく気が付いたようだ。慌てて挨拶をするが、後半は何やらブツブツ言い、あつさりと通り過ぎようとする。

「??」

真由美は何時もの横島らしくない行動に疑念を抱くが…………通り過ぎた横島の後ろ姿を見て驚愕する。

プランプラン、フリフリ、スールスール

「……………な!？」

その頃花音は横島が持ってきた報告書について、一人で処理できず、前任者の渡辺摩利に相談していた。

摩利の第一声はこれだ。

「花音!お前は、私たちの話を聞いていなかったのか!!」

「……………だって」

「横島は普段はアレだが、頭が切れる奴だ。普通の奴じゃ出来ないような仕事も難なくこなす。しかし常識がない分突拍子ない行動でいる!!十文字にも重々言われていたはずだ!!」

摩利はかなりお冠だ。まあ、当然の話ではあるが…………

「……………でも」

「それをまた、丸投げするなんて奴があるか!!しかもこれは重要な案件ではないか!!こういう案件は事前に生徒会や教職員と相談の上に

行うのではないのか？達也くんや他の連中にも言われなかったか!!」
「……横島にも同じこと言われました」

花音は摩利の怒りの形相に委縮しっぱなしだ。

「はあ……お前という奴は……わかった。お前を選んだ私にも責任がある。一緒に横島に詳細を聞き、生徒会、教職員にも相談する！いいな!!」

摩利は額を抑え怒りを通り越して呆れた様だ。しかしそこは摩利、花音とは違い筋を通すのだ。

「でも……今日の横島、なんか変なんです」

「それがどうした!!あいつは大概いつも変だ!!」

摩利の意見はもつともなのだが……今日の横島は一味違う。

そうして携帯端末で横島を呼び出すが出ないため校内を探すことにした。

摩利と花音は横島が行きそうな場所を巡回し探していると、そこには廊下の角で真由美が何やらコソコソと不審な行動をしていた。

「真由美?こんなところで何をしている」

摩利は真由美の肩に手を乗せ質問をする。

「わっ、びっくりした。脅かさないでよ摩利」

「いや、お前の行動がおかしかったからな、ところで横島を見なかったか?」

「ちようど良かった! そうなのよ! 横島くんの様子がおかしいのよ!! ちよつと見て……」

そう言って、摩利と花音を手招きして、廊下の角から向こうの様子を伺う。

横島が歩いていた。心何処かあらずの状態でぼーとした感じだったのだが……おかしいのはそこじゃない。もっと別の場所がおかしかった。

プランプラン、フリフリ、スールスール

摩利は横島の様子を見て

「……確かに、おかしいな……花音、奴が本部を出るとき指摘してやらなかったのか？」

「いえ……どうなったらあんな状態に？本部を出て行った時にはあんな事には……わたしがおかしいと言ったのは、その心どこかあらずで元気がないという事で……あんな……」

花音は摩利の質問にしどろもどろに答える。

すると十師族、十文字家の次期当主十文字克人が、対面から横島の方に向かって歩いてくる。

「横島か……なんだ、調子が悪いのか」

十文字は横島の様子に、気を使った発言をする。

「あつ十文字先輩、こんにちは、別にそう言うわけじゃないんですが」「うむ、ならいいのだが……ん？時にお前、なぜそのようなものが尻に刺さっているんだ？」

「へっ？」

横島は後ろを振り向き自分の尻を見る。

すると、何故だか

竹刀!!……ケツから生えプランプランと上下に揺れる。

テニスラケット!!……ケツに嵌りフリフリと左右に揺れていた。

新体操のリボン!!……ケツから伸びてスールスールと地面を擦っていた。

何故か吸い込まれるように全てケツに刺さっていたのだ!!

まさにギャグ体質がなせる技だ。刺さり方の詳細は……伏せておこう。

横島はそれに気が付かず、校内を歩き回っていたのだ。幸い放課後なため、目撃者は少ないはず。

真由美はその姿に驚き、横島にどう説明して、助けてあげればいいのか思いつかず、後を尾けていたのだ。

「たはったはははははっ、全然気が付きませんでした。何時刺さったんだろう?」

そう言いながら、横島はスポン、スポン、スポンと一つづつ抜いて行った。

そんな横島に十文字は肩に手をポンと置き。

「うむ、男だったらそういう事もあるう」

ケツに数々の物が刺さっている人間に対し平然と言いのけた!!

それを影で聞いていた女子3人は

真由美は思う。

(お尻に物が刺さる事が男の人だったら普通にあるのかしら?)

流石はお嬢様、常識が通じない。

摩利は思う。

(十文字、その慰め方はおかしいだろう?)

流石はこの第一高校きつての常識人、その指摘は妥当だろう。

花音は思う。

(キヤー——なにになになに? 十文字先輩も刺さるの? お尻に何が刺さるの?)

流石は校内きつての残念女子……頭の中もお花畑の様だ。

あの十文字の言動は十文字流の後輩に対しての気遣いの言葉だったのだが……あまりにも無骨すぎる。

摩利はそんな状態の横島をほっておけず、十文字が過ぎ去った後、横島を捕まえ、空いている教室に連れ込んだ。

「横島どうした? 何時もの元気がないぞ」

摩利はストレートに横島に聞いた。

「摩利さんまで……そんなに変ですか?」

「そうよ。何か悩み事でもあるんじゃない?」

真由美は横島を心配そうに見上げそう言った。

「……」

「ねえ、どうやってお尻にささったの？」

花音は興味本位にケツに刺さった状況を聞いた。

「花音、お前はだまってる！」

摩利の叱責が飛ぶ。

花音はシユンとする。

「横島、今のお前は酷い状態だぞ……お前の友人たちも心配していたのではないか？」

「横島くん、話をするだけでも楽になると思うの。その……家の機密とかだつたらしかたないのだけど」

摩利も真由美も横島に優しく接する。

横島は意を決した様に

「実は……その俺、先日、仲のいい女の子を怒らせて、泣かせてしまったんですが、その理由とか心当たりがさっぱりなくてどうしたらいいのか……」

「ふっ、お前もそういう事で悩むのか……いや、悪い意味ではない、年相応だなと思っただけだ」

摩利は笑みをこぼしてから、真面目な顔に戻りそう言った。

「もうちょっと詳しく聞かせてくれないからしら」

真由美は優しく横島に言う。

横島は帰り際の件を……雫の名前を出さずにぼつりぼつりと語りだした。

聞き終わった摩利の第一声は

「お前は、人の好意に鈍感すぎるのではないか」

「摩利、それは言ってはダメよ。それって……北山さんよね」

真由美は横島の話を聞いて雫だと確信していた。

「どうして……それを……」

「あの子を見ていたらわかるわ……よく一緒に居るじゃない。横島くん、彼女はあなたに怒っているのではないわ……だから、待っていてあげるのが横島くんの役目よ」

真由美は驚いた顔をした横島に続けて言う。

「怒ってないって……でも泣いてました」

「それは……まあいい、お前は北山が来たら、ちゃんと自分が思っている事を話せ」

摩利は何かを言おうとしたがやめ、横島にアドバイスをする。

「……………」

「時間が解決してくれる問題よ。グジグジ悩むなんて、北山さんはそんな横島くんを望んでないわ」

「お前は、いつも通り……いや、多少大人しくしている」

「フッフッフ、横島くんもちゃんと青春しているのね」

真由美は微笑みながらそう言う。

「そんなんでいいんでしょうか？」

横島はイマイチ納得していない様子だ。

「女の私たちが言うんだ。素直に聞いておけ……それとも何か？私を女扱いをしていないのか」

摩利は納得していない横島にそう言いながら、少し怒った様な表情をし冗談を言う。

「そんな事はないです……少し楽になりました。ありがとうございます。話しを聞いてもらって」

「どういたしまして」

真由美は上目づかいで可愛らしく微笑む。

「まあ、仮にもお前の先輩だからな。相談くらいのとってやる」

摩利も照れ臭そうにそう言った。

「あのー、解決したんなら、報告書の件を……」

和やかな雰囲気となった三人に横から花音が申し訳なきさそうに言う。

「そうだった。横島、悩んでいるところすまんがこの報告書の経緯を詳しく説明してくれ。これだと時系列でしかわからん。どうしてこれに至ったかを生徒会や教職員に説明しなければならぬからな」

摩利はそう言って横島に説明を求める。

横島は詳しい戦闘の様子などは省き内容と経緯、それと一応その場

に氷室姉妹がいたことを説明する。

何も知らない真由美はそれを聞いて驚愕を顔に浮かべ、摩利と花音も本人の口から聞き驚きを隠せない様子だ。

「なんと言ったらいいのか……横島らしいと言えばらしいが………なんにしてもわが校の生徒がケガなどしなくてよかった」

「警察や公安も形無しね……まあ、横島君はもつと慎重に事を進めるつもりだったようだけど……」

「それと、氷室姉妹が関わった事は、漏らさないでください」

「分かった。元をただせばこいつが悪いのだからな」

摩利はそう言って花音の後頭部を軽くはたく。

「イタツ………だってー」

花音は口を尖らせる。

「後は、こいつと生徒会、それと教職員との話し合いは私と真由美も入って行くから、任せておけ……北山の事は……さっき言った通り時間が解決する話だ」

「まあ、横島くんはもうちよつと女の子の気持ちを分かるように努力した方がいいかもね」

摩利と真由美はそう言って、花音を連れ、先に教室から出て行った。

「相談に乗ってくれる先輩……か……」

そう呟いていた横島はさっきまでと違いスッキリとした表情になっていた。

横島、雫の思いに戸惑う!!

「ほのかか……どうしよう、わたし横島さんに酷い事した」

親友のほのかが一人暮らしをしているマンションに訪れ、ほのかの顔を見ての第一声がこれだった。

目には涙がたまり、声は少し震えていた。

Yクラフトコーポレーション事件の翌日の日曜日だった。

雫はあの日、横島に感情を爆発させ、家に帰った後自室に引きこもり、一晩中泣いていたのだ。

しかし、自分がなんであんなことを言ってしまったのか、横島が悪いわけではない事は明白なハズなのに。そして、なんでこんなに悲しくて、苦しいのか、よくわからなかった。

ほのかは雫を部屋に入れ、落ち着くのを待ち話を聞き出す。

「酷い事って、雫……何があったの?」

ほのかは諭すように雫に聞く。

「昨日……」

雫はそうやってほのかに昨日起きた事をぼつりぼつりと話し出した。

横島と幹比古、美月と行動していた事。

途中で、氷室姉妹と会い合流した事。

その時、なぜか氷室姉妹を羨ましく思った事。

Yクラフトコーポレーションで戦闘に巻き込まれた事。そして、自分が何もせず、横島に助けられた事。

横島が要に優しげに話しているのを見ると、苦しくなった事。

そんな横島と要を見て……氷室に帰ってしまうのではないかと……それは自分が弱いせいだと。だから強くならなければと思った事。

悲しくて、苦しくて、悔しくて、しようがなかった事。

そして、横島に酷いことを言ってしまった事。

時間はかかったがゆつくりと、雫は昨日の事と自分の思いをほのかに話した。

「雫は横島さんの事どう思っているの？」

「一緒に居ると嬉しい」

雫の一時表情は明るくなる。

「昨日の横島さんは？」

「あの子と一緒に居る横島さんは嫌」

雫は下向き加減になり、声が小さくなり表情が曇る。

「……雫は横島さんの事、大好きなんだね……横島さんに恋をしている」

「私は……横島さんが……好き？恋をしている？」

雫は徐々に顔を赤くする。ほのかの言葉で漸く自分が横島の事が好きなのだ、ずっと一緒に居たい存在だと今理解したのだ。

今まで横島の横、正確には斜め後ろのポジションは雫の物だった。それを雫は当たり前前の様に思い。横島と出会ってこの数か月、誰にも邪魔をされずその心地よいポジションになんとなく収まり過ぎてきたのだ。

その間横島に好意を寄せ、雫のポジションを奪う脅威となる存在は皆無だった。

雫は誰よりも横島に近く、理解していると勝手に思っていたのだ。

一般的に横島は女子から嫌われていたのだから、逆に雫が圧倒的に少数派であるため当たり前前なのだが……雫の前で恋愛を意識するよきな相手はいままでいなかったのだ。

それが雫の前に突然、見も知らずの女の子、しかも横島と関係の深い人間で、明らかに横島に好意を寄せる存在が現れる。

その女の子は自分にはないものを多く持っていた。

見た目の女らしさ。

戦闘における圧倒的な強さ。

そして、横島から受ける信頼感。

それを目の前でまざまざと見せつけられた雫は、横島との関係が全て奪われると錯覚し、横島にあのような事を言ってしまったのだ。

自分が今までいた場所を要に奪われると思ったのだ。しかし、実際にはそんな場所など元々無かった。

「私は横島さんが好き！ずっと一緒に居たい!!……でも、今の私はあの子の足元にも及ばない」

雫は宣言するように、横島の事を好きだと言ったのだが、後半は要の事が頭にちらつき意気消沈する。

ほのかはそんな雫に

「私も横島さんが好きよ……」

雫はハツとした顔をしてから、悲しそうな表情でほのかを見る

「私がそう言ったら雫は横島さんの事諦められる?」

雫は静かに首を横に振る。

「私は横島さんの事好きだけど、なんていうかお兄ちゃんみたいな感じかな、でも雫は違うんでしょ?」

雫は力強く頷く。

「うん、私も最初はそんな感じだと思っていた。でも、違った。お父さんやお母さんと航（弟）とも違う。上手く言えないけど大好き」

ほのかはそんな雫に優しく微笑みかける。

「うん、頑張らないとね。その子に横島さんを取られないようにしなくっちゃ」

「あの子より強くないといけない!」

雫は声を大にして言う。

「うーん、それはちよつと違うかな?まあ、雫がそれでいいなら、でも、横島さんって意外と鈍感だからね。雫の思いを直接伝えないと……」

ほのかは雫の答えに戸惑ったが、せつかく元気になったところに水を差すわけにもいかず、完全否定はできなかった。

「うん。ほのかありがとう。でもそれはフェアじゃない気がする。私、あの子より強くなって、横島さんの横に相応しくなったと思ったら横島さんに告白する」

雫はほのかの家に来た時は一晩中泣いて、目も腫れ隈も出来、酷い

顔になっていたが、今は晴れ晴れとした顔になっていた。

「じゃあ、早速明日学校で横島さんに会って、まずは昨日の事謝らないとね。まずはそこから」

ほのかは雫に最初に行わなければならない事を伝える。

「横島さんにどうやって謝ろう……」

雫はまた新たな悩みが出てきた。今までだと、直ぐに謝罪の言葉が出たのだが、改めて横島が好きだと分かったため、どうも言いにくい様なのだ。

「取り合えず、横島さんに会えば何とかなるよ」

ほのかはそうやって雫を励ます。

「うん、頑張る」

翌日、週明け月曜日の放課後、横島は空き教室で真由美と摩利に悩みを打ち明けた後、その教室でしばらく一人で考えをまとめていた。

（取り合えず、雫ちゃんに謝らないとな……まずはそこからか）

ガシャーン

空き教室の扉が勢いよく開いた!!

「横島さん!!聞いて!!」

「し……雫ちゃん!？」

横島は考え事をしている最中、その相手である雫が急に現れたため面食らう。

「私は強くなりたい!!」

「へ?」

「私は強くならないと横島さんと一緒に居れない!!強くならないと、(あの子に)とられちゃう!!だから!!」

雫は勢いよく横島にこんなことを言う。普段の雫には考えられないくらい大きな声で訴えた。

「どどど、どどどという事?」

そんな雫の必死の形相に戸惑う横島。

「私は横島さんより強い人を知らない!!だから強くなる方法を教えてほしい!!」

「強くって……雫ちゃんは十分強いよ」

「そんな事ない!!強くなりたいの!!」

そう言つて、雫は横島にその華奢な体ごと体当たりする勢いで抱き着いた。

「ちよ、ちよ、ちよつと雫ちゃん?どうしたの?」

「ずっとこうしたいから、だから強くなりたい……横島さんに教えてほしい」

雫は顔を赤らめながらも止まらない。必死に横島に訴え続ける。

「……この前の戦闘の事、気にしているの?」

横島は少し考えてから、雫に優しく尋ねる。

雫は首を横に振り。

「戦いだけじゃない、私自身強くなりたい……(あの子に負けないように、横島さんの横に居られるように)」

「俺、雫ちゃんを知らず知らずの内に傷つけたのかな……よくわからなくて、ごめん」

今まで見た事もない必死の形相で訴える雫の姿を見て、横島は先日
の雫が怒鳴つて、泣いていた事を思い出し、やはり、自分が余計な事
をしてしまったのではないかとの思いにいたり、謝った。

「横島さんは悪くない。私が勝手に騒いで泣いたの、だから悪いのは
私、だから謝るのも私……酷い事言つてごめんなさい」

抱き着いたまま上目使いでそう言つて、横島の胸に顔を埋めて謝る
雫。

「落ち着いて、雫ちゃん。俺は魔法はあまりうまくないし、魔法の力を
高めるのだったら、達也の方がいい。あいつは魔法を扱う能力は低い
かもしれないが、知識は一級品、戦闘や魔法を使うセンスは抜群だ」

横島は雫の肩を持ち、雫を少し離して話す。

「私は、横島さんがいいの。魔法だけではダメな気がする。色々教え

てほしいの」

雫は顔を赤らめながら、上目遣いで必死に訴え続ける。

横島が、そんな必死な雫の願いを無下に出来るはずがない。

「……俺でよかったら。雫ちゃんと言っている強さって何なのかは分からないけど……丁度、幹比古と美月ちゃんの霊視の訓練にしばらく付き合う事になっているんだ。その時に一緒にいい？」

「うん……横島さんの都合に合わせて。でも、横島さんの時間がある時に私一人でもお願い」

「わかった」

「今日、横島さん風紀委員終わった後一緒に帰っていい？ 待ってるから……」

雫は顔を赤らめながら感情が読み取れる位嬉しそうな表情をしてそう言っ……

「また、後で」

雫は、教室を出て行った。

「ふー、これでよかったのか？ まあ、雫ちゃんが元気になってくれるんだったら」

横島は雫が出て行った後の扉を見つめて溜息を付き、雫が元気になった様子はいいのだが、雫の心情が良くわからず仕舞いで、この解決方法でよかったのか疑問に思いながら、一人ごちる。

雫は教室を出て行き、外で待機していたほのかに嬉しそうに頷き共に教室を離れて行く。

どうやら、ほのかは雫と横島の会話を外で聞いていた様だ。

しかし、聞いていたのはほのかだけではなかった。

横島の悩み相談をした先輩女子も教室の前にいたのだ。

慌ただしく、教室に入っていく雫を見て、こっそり外で横島たちの話を聞いていたのだ。

「北山さんやるわね」

真由美は感心した様に言う。

「いや、横島の奴、分かってなさそうだぞ」

摩利は横島の態度に眉を顰めそう言う。

「やっぱり、ストリートに言わないとダメね」

花音は偉そうに言う。

「いいなあ、私もいい人いないかしら？」

真由美はそう言って溜息をついていた。

横島、3人に修練をつける!!

翌日、様子が変わった横島はもうそこには居なかった。いつも通りの横島。

クラスメイトからは散々、何があつたのか等を聞かれていた。何時もの面々には、

「たはははははっ、なんか、すまん」

と横島照れ臭そうに謝っていた。

彼らはそれを聞いてホツとした表情をしていた。

放課後、横島は風紀委員を非番にしてもらい。

幹比古、美月、そして雫に修練をする事になっていた。

それぞれ、体操服に着替えてくるように言い、幹比古がいつも許可を取って使用している実習室で集まり、今は横島の前で3人並んでいる。

「楽しみだな、まずは何をしたらいい?」

幹比古は早く習いたくて仕方ない様だ。

「よ、よろしくお願いします」

美月は少し緊張している様だ。美月は何時もと違い、霊視を抑える眼鏡を付けていない。

「横島さん、私頑張る」

雫は少し顔を赤らめ横島を見つめている。

「まず、修練中は学校で勉強してきたこと、今まで習った事、全て忘れてくれ。魔法の事は何もかもだ」

「どういう事?」

雫は質問する。

「今から、修練しようとする霊視だが、これは多分、現代魔法で言う所の霊視に当たる部分と全く異なる。俺が現代魔法に手こずったのは、その辺をごっちゃにしたためだった。全く別物と考えるようにして、

達也から手ほどきを受けてからは、魔法が使えるようになった。だからその逆も一緒だ」

横島は自分の経験と学校で習った事と、自分の霊能力について考察しこう結論付けたのだ。

「古式魔法も?」

幹比古が質問する。

「そうだ……どうやら、幹比古が扱う古式魔法は現代魔法に近い。氷室で使っているものと似ているが、根本が違う」

「……うん」

幹比古はイマイチ納得していない様だ。

「だから、サイオンと霊気が同じものとしての認識は今外してほしい」

「え? 同じじゃないんですか?」

美月も質問をする。

「いや、存在は同じだが、考え方が全く違うから」

横島はそう答えた。

「それと、基礎体力と基礎身体能力は付けてほしい。霊視だけだとそれ程足りないかもしれない。ただ、霊気は健全な体から生まれる。そうやって鍛えられた肉体は霊気に馴染む。体力作りと身体能力の向上は自主訓練をしてほしい」

横島はそう言う。

幹比古に関しては体作りを普段からやっているようで、運動神経もよく体も動き、古武術もなかなかできるようだ。流石は古式魔法の大家、吉田家の跡取り候補と言ったところだ。

雫に関しては、元々運動神経がいい。部活でもある程度は体力作りを行っている様だ。

美月についてはそれらは一からやっていくしかなさそうだ。

「とりあえず、霊気を感じる事からかな……じゃあ、美月ちゃん、手を出して……」

「はい」

横島は出した美月の右手を握る。

何故か、幹比古と雫は羨ましそうにその様子を見ていた。

「今から、俺の靈氣を美月ちゃんに流すね」

「え？……何かが入ってくる……これが靈氣……とても暖かい……これが横島さんの靈氣」

美月は最初は不安そうな顔をしていたが、横島が流す靈氣を感じ、感動したような表情していた。自分の体を確かめる様に見廻し、何時もよりさらに場の靈氣、自分に流れている靈氣がクツキリ見える様な気がしていた。

そして、Yクラフトコーポレーションの戦闘の際に見た。要が纏うあの美しい靈氣を始めて見た時の感動を思い出していた。

「うん、やっぱそうか。美月ちゃんは感受性が非常に高い。これなら、きっといい靈能力者になれる」

横島はそう言つて、美月の手を離す。横島の見立てだと、美月は靈氣を見るだけでなく、体感で感じることも長けている様なのだ。

一口に靈能力者と言つても、戦える靈能力者は一部だ。本来は、儀式や術儀を取り行つたり、靈脈を感じ、土地の浄化や改善などを行う。それこそ氷室家の治療に特化した靈能力者もいる。それぞれいろいろな役割がある。

「あつ」

美月は名残惜しそうにしていた。

「次には雫ちゃん」

「うん」

そう言つて雫は恥ずかしそうに手を出す。

今まで、雫は横島の手を取つたりすることが多かったのだが、恥ずかしいなどと思う事は無かった。

横島に恋を自覚したからこそである。

「じゃあ、靈氣を流すね」

「ん！………何？横島さんを感じる……」

雫はくすぐつたい様な感覚が全身に陥り、思わず目を瞑っていた。その後その感覚が横島自身のもだと感じとる。

「雫ちゃん目を開けてみて」

「!!」

雫は目を開けると、何かがぼーつとしたイメージで視界一面に入ってきて来たそれが何かなのかはわからない。しばらく中空をぐるりと見渡す。

「よかった。なにか見えるようだね。それが霊気だよ」

「凄い、これが横島さんが見えている世界なの？」

そう言つて、横島を見る。

雫は横島が発している霊気が見えた。とても楽し気で優しい、そう感じた。

「じゃあ、離すね」

「あっ!!」

雫は横島の手を名残惜しそうに、手を前に出していた。

「美月ちゃんと雫ちゃんは霊気を感じられたようだね」

「はい、流れている霊気を体で感じれました。いつもより、場の霊気がクッキリ見える感じでした」

美月はそう答えた。

「美月ちゃんはその感覚を自分で出来る様に、自分の霊気を操り行う事が第一段階の目標かな」

横島は美月の訓練指針を打ち出す。

「雫ちゃんはどうだった？」

「なんかスゴい!!横島さんがいっぱい入って来た感じ!!……あとなんかぼーつとだけど見えた!!」

雫は興奮気味に横島に答える。

「雫ちゃんはとりあえず、体験してもらったんだ。まあ、霊気を見れるようになれば、相手の動きなんかも事前察知できるからね。それは一朝一夕で今の段階ではできないから、徐々にやっ行ってこう。あと、雫

「ちゃんは近距離戦が苦手そうだから、その辺もね」

横島は雫のこれからの訓練指針を示す。

「横島!!僕には!!僕には!!……北山さんが見えたって!!僕も早く見たい!!」

幹比古は横島が雫に靈氣を送り、雫が何か見えたと答えてから、そわそわと居てもたつてもいられない様そうだった。

「男の手を握る趣味は俺に無い!!」

横島はそう言つて袖にする。

「えー、いいじゃん!!減るもんじゃないし!!」

「断る!!俺の精神が減る!!」

「いいじゃん!!」

幹比古はそう言つて横島の腕を強引に取った。

「ええい、うつとおしい!!わかつた。手を出せ!!」

横島はそう言つて幹比古に手を出せ、幹比古の手の甲を掴み靈氣を流す。

「早く!!」

幹比古は何も感じていない様だ。

「やはりそうか」

横島は他の二人と同様に靈氣を流したのだが、幹比古の靈氣は全身にめぐりにくい様だ。

幹比古の普段の訓練や修練が影響している様だ。

「へ?どういふこと」

「幹比古……お前札を扱うときみたいに靈氣、いや指先に集中して見てくれ」

幹比古の靈氣は札を扱う際、指先に流れ込む。その流れが一方通行の様なのだ。

「うん?わかつた」

「ちよつと強引に行く」

横島は靈氣を強引に流し込む。余り強引に行くと、相手に作用し攻

撃となつてしまう。

何時も横島が、敵を気絶させるように。

「うわ!!ちよ……ちよ……何これ!!」

幹比古は強い靈氣の流れに不快感を感じた様だ。

「ちよつと我慢してくれ」

「あ!!ああ!!ああああ!!スゴイ!!ぼーっただけで何か見える!!僕にも見える!!」

どうやら幹比古も場の靈氣が見えた様だが、かなり興奮しているようだ。

「ぎつとこんなもんだ」

そう言つて横島は幹比古の手を離す。

すると、幹比古は

「横島!!凄いよ!!本当に見えるなんて!!」

そう言つてまたしても、感極まり横島に抱き着く。

「ぎゃー!!離れろ!!」

横島はそう言つて幹比古を無理矢理引っぺがす。

「ぐ……ぐめん。つい」

「はあ、はあ、つたく、何度も!!俺にはそんな趣味は無い!!……とりあえずは幹比古は靈氣を体に巡らせる訓練と感ずる訓練に靈視だな」

横島は疲れた様子で幹比古にそう言った。

「ありがとう!!」

「取り合えず、靈氣の流れと靈視の感覚だ。修練で、自分の靈氣でこれぐらいの事が出来るようになるのが取り合えずの目標かな、修練次第でもつと感じられるようになるし、ちゃんと見えるようになる。そして靈氣自体を自由に扱えるようになる」

横島は3人にそう言つてから、各人に個人指導と普段の訓練法を伝授していった。

そんなこんなで、1週間が経過する。

3人の修練も順調に進んでいた。

やはり美月の成長が著しく、たった一週間で、霊視の強度が上がり、自身の霊氣の流れを感じられるようになっていた。

幹比古も霊氣の流れが改善されていた。

雫は霊視、霊氣の修練に付けくわえ、近接戦と今ある魔法の有用な使い道についても訓練していた。

横島は帰宅後。

珍しく九島烈の方から電話が掛かって来た。

「横島君、良い知らせと悪い知らせがある」

「どうしたんだ？じいさん」

「まず、良い知らせだ。フェイ兄弟の傘下の連中から。彼らの狙いの一つが分かった。軍経由で司波達也がFLTで預かったレリック（八尺瓊勾玉）だった。君からも指摘があった件だが、やはり狙う連中が居たという事だ。嘆かわしいかな、今の軍はそのような当たり前の事も考慮しない愚か者が多い。この事実を突きつけ、レリックは回収させ、軍で厳重に保管する事にさせた」

横島は九島烈に九重八雲からの情報で、軍がレリックを達也と達也が所属している実家の会社（FLT）に検査と複製研究をするよう、預けている事を指摘し、やめさせるように忠告したのだ。

そのレリック一つで国が戦争を起こすレベルの貴重なものだというのに、軍はろくな護衛や警備もせずに一民間企業に預けていたのだ。

横島はその話を聞いて、ホツとした表情をする。

「まあ、当然だよな。で、悪い知らせって？」

「……君が捕縛したフェイ兄弟が脱獄した」

九島烈は一息つき話す。

「はあ？なんでそんな事に？」

横島は呆れた様に言う。

「我々の手の者で取り調べをした後に、軍の観察所から、移送している際に、襲撃され奪還されたのだ。襲撃犯は分かっている。大亜連合の作業員、ルウ・ガンフウ……人喰い虎の異名を持つ名の通った凄腕の作業員だ。奴一人で護送していた小隊を壊滅させたのだ」

「な……!!そいつが日本に来ていた事は把握していたのか？」

小隊を一人で壊滅出来、囚人を奪還したのだ。かなり腕の立つ奴だと思つて間違いないと横島は思った。

「いや……」

「きな臭いな……まあ、あいつらは軍人だから個人的な逆恨みで俺たちをわざわざ狙う事は無いと思うが……偶然出会ったら分かんない」
横島は氷室が襲われることは無いと確信している。もし襲われたとしても返り討ち確定だ。

問題は雫、幹比古、美月だ。特にフェイ兄弟は腕が立つ上に変態なのだ。

ロリのフェイ兄は雫を見たら間違ひなく攫うだろう。

バイのフェイ弟は、幹比古、美月を見かけたら、あの巨体の餌食にするだろう。

横島は訓練のペースを上げ、とりあえず逃げられるだけの事を教えるように心に誓う。

「すまない」

九島烈は謝罪する。

「いや、じいさんが悪いわけじゃないしな。情報ありがとうな。あとその件で協力出来ることが有ったら言ってくれ」

そう言つて通話を切った。

『何事も起きなければいいのだが』と思わずにいられない横島だった。

横島、特殊鑑別所に行く!!

放課後の風紀委員会本部

「横島戻りました〜」

横島は巡回から戻り風紀員会本部に戻って来た。

すると、花音と達也が何やら言い争っていた。花音の横で摩利はその成り行きを黙って聞いている。

「だから、許可は出せません」

「なぜですか？そもそも、風紀委員長には最終決定権はないはずですが」

「この際はつきり言うわ。司波くん、貴方が行くとかかと面倒事に巻き込まれるのよ!!そう、トラブルに愛されているといつていいわ。これ以上問題を作ってほしくないの!!」

花音は達也に論理的な答えではなく、感情論的な答えをだしてきた。

確かに達也は行くところ行くところで無用なトラブルに巻き込まれる印象がある。と言うか自分で首を突っ込んでいるきらいがあるのだ。

「ふはははははっ、言われてやんの!」

横島はそんな達也を指さしてチャチャを入れる。

「横島!!あんたもよ!!どうしてこんなにも面倒事をおこす問題児が二人もいるのよ」

花音はそんな横島をキツと睨んでからそう嘆いた。

「アレ?俺、この1ヶ月で2度トラブルに巻き込まれた覚えがあるっすけど、原因で俺でしたっけ?たしか原因って、アレ〜誰だっけ〜」

横島は花音にわざとらしくそんな言い方をした。横島が巻き込まれたのは間違いなく花音が原因を作ったものだった。その一つは粗悪札事件である。

「くっ、横島は黙ってて、今は司波くんと話しているの!!……ダメだからね!!」

花音は反論も出来ず、話を元に戻した。

摩利がようやく横から口を出す。

「まあ、いいじゃないか。丁度私と真由美も行く予定だったから、私たちと一緒にという事で」

「摩利さんがそう言うなら……いい!!くれぐれもトラブルだけは無用よ!!」

花音は不貞腐れたような顔をしてから、達也に強く念押しをする。

「わかりました」

達也はホッと息を吐き返事をする。

何をもめていたかと言うと、数日前達也がロボ研でプログラムを作成中に、同じ風紀委員の3年生関本勲が催眠ガスを使い、達也を眠らせ情報端末などから情報を引き出そうとする事件が起こったのだ。

達也は事前にそれを察知し、花音に連絡し関本を捕らえたのだ。

達也は自分を襲った理由を聞き出そうと特殊鑑別所に送られた関本に面会に行く許可を花音に求めていたのだが、花音が頑なに拒否をしていたのだ。結局摩利と真由美が同行することで事は収まった。

現時点では達也を襲った理由は恐らくは論文コンペがらみのスパイ活動だと予想されていた。

「摩利さんと真由美さんがいつしよか……達也精々頑張ってくれ。俺は帰って寝るわ、お先々」

横島は一瞬、摩利と真由美にデートと称して荷物持ちをさせられた苦い思い出を思い出す。

しかし

「横島お前も来い。いい機会だ。今から行く特殊鑑別所は校内で重大な犯罪行為や違反行為があった場合に勾留される場所だ。風紀委員も全く関係ない事もない。私も真由美も数度行っているし……いいだろ?花音」

摩利はそう横島に提案し、花音に聞く。先輩心から横島の為になると発した言葉なのだ。

「まあ、摩利さんがいるし、一人が二人になっただけの事だし」

花音はそう言つて了承した。

「あ!!ボクっ!!用事があるんだっ!……という事で!!」

横島は逃げようとする。

しかし、逃げようとする横島の襟首をつかむ摩利。

「お前がそんな言い方をするときには、何も無い時だ。いいからついて来い……それとも私たちと一緒に行くのが嫌か?」

摩利は横島の性格を把握している様だ。しかも、横島がこんな言い方をされると断れない事も把握済みだ。

「ううっ、摩利さん……卑怯な……」

「ははははっ、伊達にお前と半年は過ごしてない」

どうやら摩利の方が一枚上手の様だ。

八王子特殊鑑別所

魔法犯罪や魔法による重度の禁止要綱に抵触した未成年者の勾留、観護措置施設だ。

関本勲はここで現在勾留中の身となっていた。

本来、未成年者の面会はできないが、例外的に同じ魔法科高校の生徒ならば、学校側からの委任状があれば面会が可能だ。ちなみに十師族の名前を出せばフリーパスになる。十師族の七草当主の娘である真由美がいれば、委任状無しで入れるのだ。

やはり十師族は国の機関にかなり影響力があるようだ。

現在施設では真由美が受付を行っているのだが。

「どういふことですか?」

「現在、特別警戒中にして、十師族の方々も例外なくCADや武装をお預かりするよう上から通達を受けております……すみませんが、ルールですので」

受付の若い女性が申し訳なさそうに真由美に説明していた。

「仕方ないわね……分かりました」

真由美もしぶしぶ了承するしかなかった。

本来、十師族はこの施設に入る際、軍閥係者、政府高官、警察関係者同様、武装やCADの携行が許されているのだ。

「ではお一人ずつ、このゲートを通ってください」

施設内の勾留所入口に若い女性係員が真由美達をゲート状の感知器に誘導する。

真由美は難なくゲートを通り抜けるが……

キンコン、キンコン

摩利がゲートを通ると、感知器が作動した。

「チツ」

「手荷物の何かに反応してますね。お出してください」

摩利はしぶしぶ制服のスカートをまくり上げ、携行していた明らかに危険そうな刀状の武器を渡す。

もちろんその際、横島は摩利のスカートの中に興味津々である。

「たははははっ、摩利さんなにやってるっすか？物騒な!!ていうか摩利さんいつもそんなのフトモモに括り付けてるんすか？」

摩利はもう一度ゲートをくぐりなおす……今度は大丈夫なようだ。

キンコン、キンコン

次の達也がゲートを通ると、またしても感知器が作動した。

「……」

「あなたも手荷物の何かに反応してますね。お出してください」
そうすると達也ポケットから一枚のカードを出して渡す。

「これは何ですか？」

若い女性係員は達也に尋ねる。

「……CADです」

達也はしぶしぶと言った態度で答える。

「……こんな薄い！」

若い女性係員はそのCADの形状に驚きの声を上げる。

達也は自分が設計した試作品の超小型CADを持ち歩いていたのだ。

「くつくつくーっ、達也、お前もか!!完全に危険人物だな!!」

横島は意地悪く達也を笑う。

「……」

達也が再度ゲートを通り、クリア。

そして……

キンコン、キンコン

「アレ?」

「はあ、あなたもですか。出してください」

若い女性係員は呆れた様に言う。流星に3人続けばそうなる。

「クツ、横島。お前も同類だな」

摩利は珍しく笑っていた。

「人の事言えんな。横島……お前が一番危険人物だ」

達也もさっきの仕返しとばかり言う。

「アレ?おかしいな?」

横島はそう言いながら、財布やセキュリティカードなど、携行していたものをすべて出す。

横島には身に覚えがない様だ。

キンコン、キンコン

キンコン、キンコン

キンコン、キンコン

その後横島は何度ゲートを通っても感知器が鳴るのだ。

「あなたはこの横の部屋でボディチェックを受けて下さい。服も脱いでいただくかもしれません」

若い女性係員はニツコリした笑顔で横島に言う。

真由美はその様子を見て

「横島くん、先に行っているわね」

先に行くことを横島に伝え、男性係員先導の下、関本勲が勾留されている部屋に行くために廊下を歩いて行った。

残された横島と言うと……

「ボディー——チエ——ツク!!素晴らしい!!そんなサービスがここにあるなんて!!」

横島は何故か喜んでいた!!

若い女性係員が隣のドアを開け横島を先導する。

「どうぞこちらに」

「おねーさんっ!!よろしくお願いしま——スッ!!」

横島はスキップを踏みながら扉の中に入る。

しかし扉の奥の薄暗い部屋には……

2メートルは在ろうかという。ガタイのいい大男が2人並んで腕を組、仁王立ちしていたのだ!!

鑑別官の制服を着ていたのだが……何故か二人共制服の袖が無い。しかも、中に着ているはずのワイシャツは着ず、黒光りしたムキムキのボディーが袖の無い制服からピクピクと動きチラホラと見えるのだ!!

横島は余りの光景に顔面から血の気が引く!!

「ふっふっふーっさあ、ボディチェックから始めようか!!」

物凄い低い声で右のチヨビ髯マッチョ鑑別官が横島に言う。

横島はギギギと首を後ろに回し、先導した若い女性係員を絶望した表情で見る。

すると

「いゅっくっ」

カチャリ

その若い女性係員はニツコリとした笑顔でそう言って、外に出て扉の力を閉めたのだ!!

「さあ、力を抜いて!!」

物凄い高い声で左のスキンヘッドのマッチョ鑑別官が横島に迫る。

「iiiiiiiiiiiiいや—————」

!!!!

横島の絶望した悲鳴がどこまでも響き渡るのだった。

横島、取り調べられる!!

八王子特殊鑑別所、検査室。

横島は危険物を携帯していないか、マッチョ大男鑑別官達に詳しく取り調べを受けていた。

「おっさんら……苦勞したんだな……グスツ」

横島は目頭を熱くし涙が頬をつたう。

「そうなんです。この見た目で、交番勤務をすれば周囲住民に怖がられ……あつ上着脱いでください。……交通整備をすれば、邪魔だと怒鳴られ……」

物凄く声の低いチョビ髭マッチョ鑑別官はそう言つて、横島が脱いだ制服上着を受け取る。

受け取った制服上着は物凄く声の高いスキンヘッドマッチョ鑑別官が折り目正しく丁寧に畳んでいく。

そう彼らは、見た目に反し、はぐれ刑事ならず、人情派鑑別官だった!!

「同期の女性には力仕事を押し付けられ……その時は喜んでもらえるのですが、影でコソコソと悪口を言われる始末……あつ、シャツも脱いでください」

「おっさん!!わかる!わかるよ、そうだよな!女なんて女なんて……シクシクシク」

横島はマッチョ鑑別官と意気投合し、彼らの指示通り服を次々と脱いでいく、顔は涙でぐちゃぐちゃだ。

「ここに来ても、この顔や姿では受付や案内係も出来ず、ここに来た人達を導くだけ……ああ、イケメンに生まれたかった……そのズボンも脱いでください」

「イケメンめ!!許さん!!世の中のイケメン死すべし!!」

拳を握りしめ、そうやって雄たけびをあげる横島は、ついにパンツ(トランクス)一丁になっていた。

横島から受け取った。衣服を物凄く声の高いスキンヘッドマツ

チヨ鑑別官が棒状のセンサーで丁寧に危険物や盗聴器や機器が無い
か調べているが、どうやら無かったようだ。

「横島くん、ちよっといいかね」

物凄い声の高いスキンヘッドマッチョ鑑別官がそう言つてセン
サーをパンツ一丁の横島の体に当てて行く。

ピピッ、ピピッ

丁度ケツのあたりでセンサーが鳴った。

マッチョ鑑別官ズが目がキュピインと光る。

そして横島にズイツと顔を近づけて

「さあ、そのパンツも脱ぎなさい」

「さあ、さあ、さあ、さあ、さあー!!」

「え？おっさんら……何を？」

横島はさつきまでは人が好きそうではあったマッチョ鑑別官ズの
様相が急変し、その迫力に押され、後ずさる。

「パンツをぬぎなさいー!!い!!」

何も知らない人間が傍から見ているとタダの変態にしか映らない
が、彼らはセンサーに反応したからにはパンツを確保しなければとい
う使命感で動いている職務に忠実な鑑別官なのだ。

「いやー!!かんにんやー!!」

逃げ惑う横島にマッチョ鑑別官ズはついにそのパンツに手が伸び、
掴む。

それでも横島はジタバタとする。

すると、パンツの後ろゴム辺りに縫いつけられているメーカーロゴ
の布で出来たタグが取れる。

すかさず、スキンヘッドマッチョ鑑別官がそのタグにセンサーを当
てると……

ピピッ、ピピッ

センサーが反応を示した!!

スキンヘッドマッチ鑑別官がタグを無理矢理破き分解、すると「ぬ…なにやら、センサーの様なものが…横島くんこれに見覚えは？」

横島は全力で首を左右で振る。

しかし…そのパンツは、夏休み皆で行った南の島別荘で達也に横島のパンツを魔法で分解してしまったお詫びと称して、もらったパンツ10枚の内の一つだった。

実は達也はパンツのロゴタグに、深雪（正確には深雪のCAD）がそのタグに近づくと、達也に知らせが届くようにした超小型センサーを仕込んでいたのだ。シスコン達也は横島が深雪に手をだしたり、近づいたりしないよう見張っていたのだ。

「うむ、君の目を見れば、知らないと分かる」

「君は誰かに恨みを買うようなことは？」

マツチヨ鑑別官ズは横島に優しく尋ねる。

横島は漸くこのパンツが達也にもらった物だと思いつく。

「ふっふっふっ…!!あいつ…!!」

一方、地下にある拘留場のかなり長い廊下を進み行き止まりの手前の関本勲が勾留されてる部屋に到着した真由美達一行。同行していた鑑別官には外で待ってもらい、摩利は関本の部屋に、真由美と達也をその部屋をマジックミラー越しに見ることが出来る隣の小部屋に入る。

「渡辺か…何しに来た？」

「お前に聞きたい事があってな」

摩利が簡素なベツトに座っている関本の問いに答える。

「ここでは魔法は使えんぞ……」

関本は摩利が魔法で強引に聞き出すなどと思った様だ。

「いいや」

そう言つて摩利は手を後ろに回す。

すると関本は鼻を抑えて……

「な……何を……」

意識が朦朧とした様子になる。

小部屋でこの様子を見ていた達也は真由美に聞いた。

「これは、匂いによる意識操作？」

「そうよ、摩利は匂いを使った意識操作や催眠なども行えるの」

真由美はそう平然と言う。

摩利はどうやら、匂いを使って、関本を自白させるつもりらしい。魔法は確かに使っていないのだがこれは正当なのだろうか？

そして摩利は意識操作された関本に尋ねる。

「なぜ達也くんからデータを奪おうと？それで何を調べようとしていた？」

「……司波がもっている。論文コンペのデータ、それから、奴がもっているレリックの有りかだ」

関本は摩利の言うがまま答えるが……

予想していた論文コンペはいいとして、レリックと答えたのだ。

レリックは大亜連合のフエイ兄弟が狙っていた情報と同じなのだ。

小部屋でその様子を見ていた真由美は達也に戸惑う様に尋ねる。

「達也くん、レリックつて……なんでそんな貴重なものを……」

レリックは前にも語った様にオーパーツその物だ。それ一つで国が戦争を起こす十分な理由になりえる代物なのだ。

達也は答えに窮し、曖昧に答える。

「ええ……まあ」

すると突如として建物全域に緊急警報が鳴り響く!!

横島、人喰い虎と対峙する!!

八王子特殊鑑別所内で緊急警報が鳴り響く。

関本が勾留されている部屋の前で待機していた鑑別官が真由美と達也がいる小部屋に慌てて入り

「侵入者警報です。誤報かもしれませんが、念のため直ぐに避難してください。私が誘導します」

真由美達に警報の経緯を知らせる。

鑑別官は同じく関本が勾留されている部屋の摩利にも知らせる。

真由美、達也、摩利が廊下に出ると、遠くで悲鳴が聞こえていた。

鑑別官はそれぞれの部屋をロックし、先頭に立ち彼らを誘導しようとした。

廊下の先から、大男が現れる。この長い廊下には出入り口は大男が居る方向にしかない。

廊下突き当り付近に現在、達也はいる。

「な……手配書のルウ・ガンフウ」

鑑別官はその大男を見てそう声を漏らす。

大亜連合の人喰い虎の異名を持つ凄腕作業員だ。

先日、一人で軍の小隊を壊滅させ、護送中のフェイ兄弟を奪還したのは彼だ。

「……逃げられる状況ではないな」

そうやって達也は真由美と摩利の前に出る。

ルウ・ガンフウは魔法を発動させ、自身の体に暴風を纏わせる。

鋼気功。何重ものサイオン膜で体を覆い、対魔法、対物理攻撃をはじく。

猛烈な加速で一気に達也達に迫る。

鑑別官はその達也の前に出て、携行ライフルをルウに向かって放つが、全てはじかれる。

そして、鑑別官はルウが放った拳打で吹っ飛び、壁に激突し気絶。その間、達也は右手を掲げ、CAD無しで術式解体をルウに放つ、ルウの纏った暴風が収まり、鋼気功は解体された。

術を解体されたと分かり、ルウは一度後ろに飛び退き再び鋼気功を発動するが、その術は見るからに先ほどより強化されていた。

「デーモン・ライト……幾多の同胞の恨み、ここで晴らさせてもらう」

今の術式解体で達也が沖繩海戦の分解・再生魔法で修羅の如く、大亜連合の兵士を悉く屠ったあの悪魔だと感づいたようだ。

「先輩方少々下がっててください……」

達也はそう言っ、真由美と摩利を下がらせる。

ルウ・ガンフウは達也に的を絞らせないように、左右に独特の歩法で移動しながら、加速し再度突撃してきた。

達也は構えて迎撃する形をとる。

ルウはその体に似合わず、細かい拳打を達也に叩きつける。達也はそれを九重流の体術でさばくが、ルウの拳打に触れるたびに、腕の皮が切り裂かれ、骨は軋みダメージを受けて行く。しかし、それも一定の間隔で自己修復術式で回復していく。

ルウ・ガンフウ、大亜連合特殊部隊のエースにして、白兵戦では大亜連合随一の使い手である。

中国武術と魔法を組み合わせたその攻撃は、凄まじい威力である。

打撃の応酬では、終始達也は押され気味となっている。自己修復術式が無ければ、直ぐに決着がついていただろう。

達也は一度下がり、術式解体を発動させるが、今度は無効化できなかった。

ルウの鋼気功が勝ったのか、達也のCADが無いための威力調整が出来なかったのかは不明ではあるが……

いずれにしろ、CADが無い達也にとって非常に不利な状況である。

達也一人ならば、この場の撤退も可能だっただろうが、今はCADを持たない魔法師が二人後ろにいる。

達也は他者がいる前では人体分解は躊躇していたが、意を決して、分解魔法を右手に展開させ、直接手刀をルウに振るつたのだが、円を描くような動きで避けられ、手刀を繰り出した際の隙に、魔法を展開した蹴りを左腹に受けて奥の壁まで約20m吹っ飛ばされる。

蹴りを受けた左腹は内臓がグチャグチャになっていたが、達也は吹っ飛ばされる間も、自己回復術式で、一瞬で回復させる。中空で体勢を整えるも、威力を消すことが出来ずそのまま奥の壁まで激突する。

「達也くん!!」

真由美は叫ぶ。

その隙に達也に猛然と突っ込もうとするルウ・ガンフウに摩利が鑑別官が持っていた警棒を振るい立ちふさがる。摩利はこれでもエリカの実家である千刃流剣術の使い手なのだが何せ実力の差が大きすぎた。一太刀を防がれそのまま警棒をへし折られ、首根っこを掴まれたのだ。

中空で摩利が何とか逃れようともがくが首は絞まっていく一方であつた。

「くっ」

激突から達也は体勢を整えるのがやつとの状態だ。

「摩利—————!!」

真由美の叫びが廊下に響き渡る。

「まて—————い!!」

その声でルウ・ガンフウは摩利の首根っこを掴んだまま、後ろに振り向き一瞬動きが止まる。

その声の人物は廊下の向こうから猛スピードで走り込み、そのまま壁伝いに走り、ついには天井を走った。

そして逆さまの状態で摩利を掴んでいるルウの腕を蹴り飛ばし、そ

の勢いで摩利が空中に放たれたところをキャッチし抱きかかえ、1回転しながら真由美の前にカツコ良く着地したのだ。

そう、横島が助けに来たのだ!!

それは一瞬の出来事、まさにピンチに現れる80年代ヒーローものの様な登場だ!!

横島は抱きかかえている摩利に回復のための霊気を送りながら真由美の前に下ろす。

「摩利!!」

真由美は直ぐに摩利に縋りつく。

「……よし……にげ……ろ」

意識朦朧とした摩利は横島の手を弱弱しくつかんでいた。気道も潰され声も上手く出ない様だ。

その間も、横島はルウ・ガンフウを睨み付け、眼力でけん制しながら霊気を送って摩利を回復し続けている。

「大丈夫ですよ」

その間に体勢を整えた達也が横島の後ろまでようやくやって来た。

「CAD無いのによく持ったな、摩利さんと真由美さんを頼む」

横島はシリアス顔で達也にそう言った。

「……横島」

「ん?なんだ達也?」

今の横島はシリアス時の横島。キリツとした顔で達也に聞きかえす。

「なんでパンツ一丁なんだ?」

「……………お前のせいじゃ……………!!」

横島は肩をプルプルと震わせ、涙をチョチョぎらせながら叫ぶ!!

そう、今の横島は達也にもらったパンツ（トランクス）一丁なのだ！！

折角カッコ良く決めてもすべてが台無しになった！！

先ほどマツチヨ鑑別官ズにパンツ一丁にさせられ、それさえも脱がされそうになった。

なにもかもが達也が横島のパンツにシスコンセンサーを忍び込ませたせいだったのだ。

そして、達也がパンツに仕込みをしていたことが発覚したと同時に施設全体に緊急警報が鳴り、横島はそのままの格好で、達也達を探す羽目になったのだ。

真由美はぐったりしている摩利を抱きしめる様になっていたが、達也の一言でパンツ一丁の横島を改めて見て顔が真っ赤になっていた。

「摩利さんと転がってる鑑別官を俺が作る術式陣に運んで、真由美さんと摩利さんを守れ。そんでもって後で覚えてろよ！！」

横島が達也にそう言っただがらせる。地面に手を付き（イの一式、回復術式）と心で唱えると、廊下の突き当り付近床に直径2 m程度の回復術式が展開された。

「……わかった」

達也は摩利を抱き上げ、術式が展開された場所まで下がる。

摩利の完全回復まで、敵は待つてくれないための処置だ。

そして、ルウ・ガンフウの方から横島めがけて暴風を纏い真正面から突っ込んできた。

「貴様が、フェイ兄弟が言っていた横島か」

「おっさん！よくも摩利さんをいたぶってくれたな！！」

右手を前に突き出し半身になりルウ・ガンフウを見据え、迎撃態勢を取る横島。まさに主人公然とした雰囲気醸し出していてカッコイイのだ！！

……パンツ一丁じゃなきや。

第2ラウンド開始だ!!

横島、武術を使う!!

「貴様が、フエイ兄弟が言っていた横島か!!」

「おっさん！よくも摩利さんをいたぶってくれたな!!」

ルウ・ガンフウと横島の戦いが始まった。

ルウ・ガンフウが横島に猛スピードで突進し両手で下から突き上げるような猛烈な突き放つ。

横島はその突きが放たれるタイミングで半歩下がりに捌きながら、相手の鳩尾の位置に掌底をカウンターで叩きこむ。

ルウは突いた腕をそのまま上に折りたたむことで横島の掌底をブロックするが、鋼気功の上からでも衝撃を吸収できず、5 m程後ろにそのまま押し出される。

その衝撃で床にはルウの靴の摩擦による焦げ跡が2本尾を引いていた。

「なかなかやるな、おっさん!! 太極拳をベースに魔法と融合させたものかよ」

「ふははははははっ、フエイ兄弟の報告では古式魔法師とあつたが違うようだな!! こんなちっぽけな島に、これほどの武術の達人がおろうとは!! その恰好もその表れか!!」

ルウはわずかに攻防でそれを見抜きそして、強敵と出会い笑っていた。

最後のは大いに勘違いしているのだが……

ルウが扱う武術は太極拳纏絲勁と大陸系の古式魔法を融合したものだ。一つ一つの技の威力は凄まじいものがある。さらに鋼気功の組み合わせで防御力もすさまじい。

一方横島は、武神、斉天大聖老師の直弟子である。毎回臨死体験をするような激しい修行の中でありとあらゆる古武術を学んでいる。陰陽術や霊能力無しでもこれぐらいの事は、かるくしてのけるのだ。

「行くぞ」

ニヤリと笑い、そう言つて鋼気功をさらに強化させ、横島に突っ込んでくる。

「武術か、師匠の真似事でもしてみるか」

横島は先ほどの構えから重心を前にし、攻撃型の構えにする。

横島は武術同士の戦いは久々である。未だ霊力が100年前のピーク時に回復していないため、斉天大聖老師とは直に手合せはしていない。さらに小竜姫とはどうしても剣での修行となつてしまふからだ。

ルウは横島に近づくと横回転をし首筋を手刀で狙う。

横島はシュツ！と体ごと横にズレて最小に動きで避ける。

ルウは手刀の返す刀でさらに首筋を狙うが、これも上半身を軽くひねるだけで横島は回避。

その流れで正面に対峙した形になり、ルウは円を描くような拳打を複数繰り出す、これも軸足を少しづつ後方にズラし避ける。

横島は、ルウの攻撃を一つ一つ確かめながら、最小の動きで悉く避けていた。

お互い一度後方に飛びのき仕切り直しをする。

今度は横島から攻撃を開始する。

「せーのー」

ズウウウン！！

横島はコンクリートの床を踏み鳴らすのだが、その威力は凄まじい。

踏み鳴らした床に小さなクレータが出来、同時にルウに向かって衝撃波が走りまともに喰らう。

鋼気功の上からも十分に衝撃が伝わり、ルウは一瞬動きが止まった。

斉天大聖老師がその昔、無数に迫つて来た木っ端妖怪を一網打尽にするために使つた技だ。

本来の威力は、周囲5キロにわたって衝撃波が走り、半径一キロほどの大穴が出来る、近くにいた無関係な人も巻き込まれる物凄くはた迷惑な技だった。

横島に一度見せたことがあるのだが、そのせいで、修練場の一部が破壊され、小竜姫に怒られていた。

横島は次に床を踏み鳴らした足を軸足に、地面を滑るように下段に足払いを放ち、ルウは体勢を崩す。横島はそのままの斜め下からルウの腹部に両手の平で三角を作るようにして、掌底を放つ。気功技の一種なのだが、見た目とは違いすさまじい威力を發揮する。

ルウは体勢を崩しつつも辛うじて上半身は防御態勢を取っていたが、凄まじい力により、そのまま空中に吹き飛ばされる。

横島は空中後方に吹き飛ぶルウに目にもとまらぬ速さで追いつき、拳打のラツシユを喰らわす！

スガガガガガガガ!!

その拳打のラツシユは凄まじいスピードで放たれ、空中に吹き飛んでいたルウに対し、鋼気功の上からお構いなしに顔面や腹部、ありとあらゆる場所に横島の拳が放たれ突き刺さる。

余りにも速いため腕が何本にも見える!!

「いつもはやられる方だからな!!いつか師匠にも!!おりゃー!!」

横島は随分と余裕そうだ。そう言つて、最後は突き刺さる様な突きを放ち、ルウを大きく後方に吹っ飛ばす。

「ぐわ!!」

うめき声を上げながら廊下の入口まで吹っ飛ぶルウ。

横島は斉天大聖老師に何度このラツシユを喰らつて、臨死体験や幽体離脱をしかけた事やら……酔っぱらった老師は、横島が複数見えるとか言つて、全員修行を付けてやるとか言いながら、こんなとんでもない攻撃を放ってくるのだ。ほんと、はた迷惑もいいところなのだ。

最早、横島とルウ・ガンフウの実力の差は歴然だった。

それでも、ルウは立ち上がろうとし、横島に向かって来ようとする。

そうして、ルウ・ガンフウと横島の戦いは、横島の圧倒的な勝利で終わった。

達也は横島とルウ・ガンフウとの戦闘を見て、手は汗ばみ、腕は震えていた。

封印を解かれ全力状態となったとしても、横島と戦って勝てるのだろうか？

あの武術の切れ、魔法（陰陽術）発動速度、さらに、最後のあの高速移動に至っては全く見えなかったのだ。あれは、横島と最初に出会ったころ、ほのかの魔法を止めた時のものと同じだった。

まず接近戦では敵わないだろうと………達也は思う。

真由美はへなへなと座り込み。呆けた様にすぐ前に立っている横島の後ろ姿を見ていた。

何時も、おちやらけていて、バカ騒ぎが好きで、ちよつと頼りなさそうな弟の様な感覚でいた横島が、目の前で普段にはない真剣な顔を、強敵相手に圧倒的な強さで制圧したのだ。

真由美は頭の中で混乱が収まらない。

「ありや？やりすぎたかな？」

ピクリとも動かないルウ・ガンフウを見てそう呟く横島。

そして、横島は振り返り、座り込んでいる真由美に

「大丈夫ですか？真由美さん」

そう言って助け起こすために手を差し伸べる。

「あつ、うん」

何時もの真由美らしくなく、顔を赤らめたどどしく返事する。

その姿は王子様がお姫様を助け起こすしぐさに似ている。間違いなく男としてカッコイイシーンである。

しかし、思い出してほしい。横島はどんな格好で戦っていたのかを

……

その唯一装着していた物はなんであったかを……

そして、アレがどんな状態であったのかを……

アレはマツチヨ鑑別官に無理矢理引っ張られたり掴まれたりしていたのだ。間違いなくゴムは伸びていよう。そして、この激しく体を動かす戦いだ。

そんな状態のアレ（パンツ）は真由美の丁度目線位置で横島の大事な場所を隠す役目がまるで終わったかのように、スルツとズレ落ちた！！

「!?あ…ああ!?あわわわわあわわわあ」

真由美は目の前にある横島の大事な場所を直視し、ボンと音を立てるかのように、一気に顔を茹でタコのように真っ赤にし、あわあわ言つてその場で気を失う。やはりお嬢様にはまったく耐性が無かったようだ。

「真由美さん!!どうしたんですか?」

そんな真由美を横島は介抱しようとしたが……

「お、お前という奴は……下を履け……」

摩利は横島の回復術式陣の中で壁に持たれかかっていた。意識はもどっていたようだが、若干苦しそうにしながら、そう横島に指摘した。

「摩利さんもう大丈夫なんですか?つて下?……ああああ!?……」

ノーパン健康法です」

横島は自分のパンツがズレ落ちたことに気が付いたのだが、頭を掻きながら堂々とこう言つてのけた!!

「……バカ、せめて隠せ」

摩利も若干顔が赤らんでいた。

「す、すみません……たたた達也く、なんか履くものくれく」

横島は前を手で押さええながら、達也に懇願するように言う。

最後はやっぱり締まらない横島。

「凄い奴なのかバカなのか……分からん奴だ」

摩利は目を瞑りながらほんのり赤くした顔でそう言った。

横島、事件の事を達也と語る!!

ルウ・ガンフウとの決着の後。

スッポンポンの横島は、達也にパンツに代わるもんを要求するが、そのようなものを持っているハズも無かった。

結局、マッチョ鑑別官ズが横島の衣服を現場まで持ってきてくれたおかげで、ノーパンのまま制服を着用し、摩利に回復術を掛ける。

ルウはそのままマッチョ鑑別官ズに拘束された。

この後、鑑別所の会議室で事情聴取を受けることになったが摩利は最後まで残り、横島たちには真由美を連れ学校に戻るよう言う。

その間も横島の股間を直視した真由美は気絶から回復せず、無人タクシーが来るまで横島が背負っていた。

「おい、達也、なんで俺のパンツにセンサー仕込んだ?」

横島は真由美を背負いながら、隣にいる達也にパンツにセンサーを忍び込ませたことを問いただす。

「……何のことだ」

とぼける達也。

「とぼける気か? ネタはバレてるんだよ、さっきのマッチョズにはパンツ一丁にさせられ、隈なく調べられたからな……しかもそのセンサー、タグに偽装され、丁寧な縫い付けられていた。お前に貰ったパンツにだ……。流石にシャレにならん!!……いいのか? この事を深雪ちゃんに言いつけるぞ!!」

横島はマッチョ鑑別官ズに取り調べを受けていた時の事を思い出しながら、達也に強く文句を言う。

「……あのセンサーは深雪のCADに反応する。お前が近づくとセンサーが反応し、俺に知らせる様になっただけだ」

達也は観念した様子で喋りだす。

深雪に言いつけられたくなかった様だ。

「な!?!なんでまたそんな事を!?!」

「……お前が、深雪に手を出さない様に監視するためだ」

「はあ？お前どんだけシスコンなんだよ!!しかも俺は信用度ゼロかよ!!」

「信用していない訳ではないが……深雪はああ見えて世間知らずだ。お前の口車に乗って、もしやの事態にならないこともない。お前の変態行為を受け入れてしまう恐れもあると危惧をした。それと……お前を弟と呼ぶ事態だけは避けたかった」

「……それ、信用していないと同義なんだけど……。かぁー、お前の過保護っぷりは流石に引くぞ。そんなんしたらお前、深雪ちゃん一生結婚できんぞ!!この重度のシスコン兄貴が!!」

「俺の本当の意味での身内は深雪だけだからな……」

「そうやった達也は真正面を見つめていただが、目はどこか遠い目をしていた。」

「まあ、安心しろ俺は今の深雪ちゃんには手を出さん……2、3年後は知らんがな!!……で、俺になんか言う事あるだろ!!」

横島はそんな達也を見やり、おどけた様に言った。

「……すまん」

「他の事だったらぶん殴ってやろうと思ったが、深雪ちゃんの為、妹のためか……お前らしいな」

横島は呆れた様に言った。

「……すまん」

達也は二度横島に謝る。

「話かわるが……あのルウって奴がここに来た理由は分かるか？」

横島はしばらく沈黙が続いた後、今日の事件の真相について聞く。

「ああ、多分、関本先輩を消すためだ」

「またなんで、たかが学生を？」

「関本先輩はどうやらスパイだった。論文コンペの資料と……俺が預かっていたレリックを狙って……おそらく、捕まった事がわかり、証拠隠滅のために消しに来たのだろう」

達也はレリックの事を語る前に少し躊躇した。

「はあ、やっぱりそうか、大亜連合ってなんなんだ？そんなにそのレリックつてのが欲しいのかよ」

「……お前、レリックの事を知っていたのか？」

「ああ、フェイ兄弟も狙ってたからな……」

「達也、一つ忠告しておいてやる。大きな力を持つという事はそれだけで、知らず知らずの内に、周りからは脅威に見られるってことだ。

お前の力についてもそうだ。お前派手に暴れ過ぎなんだよ。そのレリックについても同じだ。レリック一つで戦争が起きるような代物なんだろう？」

横島は真剣な面持ちで達也にそう言って忠告する。

「レリックについては既に軍に返却している……。その忠告、気に留めておく」

「まあ、そうしてくれ」

無人タクシーが到着し、眠っている真由美を後部座席に乗せ。

達也と横島は前に乗る。

「……お前、武術も使えたのだな、一度手合わせしろ」

達也は先ほどの横島とルウの戦いの情景を思い出しこんな事を言ってきた。

「まあ、いいけど、あんま参考になるかわからんぞ……お前んとこのエロハゲ師匠（雲）の流派は暗殺や、影で動くために特化した流派なんだろう？俺のは真正面からの戦いが基本だからな。俺にはちよつと合っていないんだが、師匠がな……」

横島は達也の申し出を一応了承した後、そんな事を言う。

「ああ、助かる。……氷室にはお前のような奴がごろごろ居るのか？」

「俺みたいな奴つて、それ氷室終わってない？」

「違う、お前の様な変態的な奴という意味ではない。お前の様な強さを持ったという意味だ！」

達也はイラついたようにそう言った。この頃の達也は横島が絡むと少し感情を表に見せるようになっていた。

「なんか、お前に改めて言われると腹が立つな、この重度のシスコン!!
……ルウだったら、次期当主でも余裕で勝てたな」

「……次期当主はまだ中学生だろう……凄まじいな氷室というところは」

達也は平坦な口調でそうはいっていたが、目は真剣そのものだった。

「まあ、否定はしない。お前だってCADがあつたら余裕だろ。無くても、真由美さんらが居なかつたら何とかなってたんじゃないか?」

横島は、達也がああ戦いで、真由美や摩利、倒れていた鑑別官が居なければ、何とかなっていたらどうかを指していた。

「……………」

達也は沈黙を持って、肯定する。

「そんじゃ、とりあえず、学校帰って花音さんに報告するか……ブクククククツッ!花音さんが頭抱えて、えらく動揺している姿が見えるわーわー!!」

横島はそういつつ、悪そうな笑い方をする。

実は真由美は横島の背中に背負われていたところから既に目を覚ましていたが、あのシーンを思い出し、心の中で動揺し悶絶していたため、恥ずかしさと横島とどう接していいかわからず、寝たふりを決め込んだのだ。

(なんで私、今、横島くんの背中に?アレは何なんだったの?男の人ってあんなものが!!)

そして、達也と横島の会話を聞いていた。

(男の子の友情っていいわね。でも男の子ってパンツを友達に贈ったりするのかしら?)

やはり真由美は根っからのお嬢様だった。普通パンツを贈ったりしないだろう。

横島、つかの間の間の日常を!!

放課後に徐々に何時もの面々が、行きつけの喫茶店に集まっていた。

「放課後にこの面子がそろるのは久々だな」

レオは席に座り最初に口にする。

「そうね。10月に入ってそれぞれなんとなく忙しいしね」

エリカがそれに同意する。

「普段から顔を合わせているけど、全員ってなかなか無いよね」

幹比古も同意見のようだ。

クラスや個々では会ったり、昼休みの昼食で顔を合わせる事はあったが、

現在10月の下旬に入ろうとしている時期まで、1年E組と1年A組のメンバーが、このように放課後揃うのは10月に入ってからは無かったのだ。

深雪とほのかは生徒会。

達也は論文コンペの準備で忙しく、風紀委員会には顔出し程度だ。

エリカとレオは論文コンペの準備をしている達也の護衛と称しその周りをウロチョロとしている。それだけでなく、何やら二人でコソコソ何かやっている様だ。

横島は普段風紀委員会だが、なるべく時間を空けて美月、幹比古、雫の修練を見ている。

美月は修練が無いときは美術部。

幹比古は自主練。

雫は部活か横島にくっ付いている。

それぞれ、忙しい様だ。

「達也さん論文コンペの準備の方は順調なんですか?」

ほのかは達也に質問する。

「ああ、既に俺の役目はもう殆ど終わりだ。後は微調整や先輩たちの手伝いだな」

達也は淡々と現状報告をする。

「もう終わったのか、流石だな」

レオは感心した様に言う。

「しかも、論文コンペの資料を狙う奴も捕まえちゃったしね。結局私たちの出番はなしか」

エリカはそう言って若干残念そうな表情をしていた。

レオとエリカは論文コンペの資料やらを狙うやからから、達也達を自主警護をしていたのだが、肝心の資料を狙った3年の関本勲は花音と達也が捕らえてしまっている。

そして、その関本勲を裏で操っていた大亜連合、その工作員であるルウ・ガンフウの襲撃があったのだが、これまた達也と横島が捕らえ、結局レオとエリカの出番は無かったのだ。

「結局……僕たちを襲ってきたフェイ兄弟も大亜連合の工作員扱いし、今回の一連の事件はすべて大亜連合の仕業のようだね」

幹比古はフェイ兄弟と今回の関本勲、ルウ・ガンフウの件でそう結論付ける。

幹比古達はフェイ兄弟の事件の後、あの事件の前後関係など詳細は聞かされていない。公開できない情報が満載だからだ。

「なにか、話が大きくなっちゃいましたね。大亜連合なんて……もう、国同士の話ですし、私たちでは対処しようがないですよね」

美月は溜息を付きながらそう言った。

「まあ、でも、これで終わりってわけじゃないし、自主警備は続けるわ、達也くんもよろしくね」

エリカはまだ、自主警備を続けるつもりらしい。

「……好きにしてくれ」

達也はもはや、何言っても聞きそうもないためそう言った。

本来、他国家が関わる様な事件だ。一学生がどうにか出来るものではない、達也としても、エリカやレオが実力を認めていない訳ではないが、相手が相手だけに、本当はやめてほしいのだ。

達也はいざとなったら、自分が直接介入すれば問題ないはずだと腹

をくくる。

「そう言えば、美月と雫に、幹って横島から古式魔法の訓練してもらってるのよね。どうなの？」

エリカは横島を見ながら、思い出したように話題を変える。

「ううん、正式には古式魔法じゃないわ、エリカちゃん。教えてもらっているのは霊視、私はこの目のコントロールと霊視の強化、それと霊気のコントロールよ」

美月は嬉しそうに答える。

「霊視？霊気のコントロール？」

エリカはそう聞き返す。

「僕も霊視かな……なかなかうまく行かなかったけど、ちよつとは見れるようになったよ」

「私もちよつとだけわかるようになった」

幹比古と雫も答える。

横島との訓練で、美月の成長ぶりは目を見張るものがある。

幹比古や雫は幼い頃から純粹に魔法師として生きてきたため、魔法師としての固定概念が、霊視（霊能者）の訓練に邪魔になり最初はなかなかうまく行かなかった。

その点、美月には最初つからその固定概念がない。霊視に対する訓練もすんなり受け入れることが出来たため成長が他の二人に比べ、早かったのだ。

雫については、霊視以外にも接近戦について横島に教わっている。

「たははははっ、ちよつと教えただけなんだけど皆筋はいいよな」

横島は照れ笑いをしながらそう言った。

「横島が人に物を教えるね……なんかピンとこないわね」

エリカは横島が人に教えてる風景が想像できない様だ。

「横島さん、教え方がスゴク上手いのよ」

そんなエリカを見て美月はそう言うのと、雫もウンウンと頷いている。

「横島がねー、あんた……教えることをいいことに美月や雫にセク

ハラマガいのふざけた事してないわよね」

エリカは横島に向かいジトツとした目で見る。

「そ、そんなことするかー！ー！美月ちゃんや雫ちゃんに手をだしたら、完全に悪者やないかー！ー！！」

横島は叫ぶ。

「はあ!? 私はいいつてわけ? 私には散々セクハラマガいな事をやっておきながら!! どういう事よ!!」

エリカは憤慨して席を立って横島を睨み付ける。

エリカの怒りは当然であろう。横島は過去にエリカに対し、セクハラ及び変態行為未遂を数々行ってきたのだ。

「たは、たはははっ、そんな事もあった気がする」

横島は思いつきりとぼける。

そこに深雪が火に油を注ぐ様な発言をする。

「横島さん。そういうえば私たちの中でエリカだけ、呼び捨てなのは何故ですか?」

「そうよ!!なんで私だけ!!」

さらにヒートアップするエリカ

「なーんだエリカも、ちゃんづけで呼んでほしかったのか? エリカちゃん」

横島はとぼけたままエリカをちゃん付けで呼んだが、違和感が半端ない。

「おい、なんかそれ気持ち悪いな」

レオも、違和感を感じている様だ。

「ち、違うわよ!!」

エリカは横島にちゃん付けされ、何故か顔を真っ赤にしていた。

「いいな……わたしは呼び捨てにしてほしい」

雫は横島の隣でボソツとそう言っていた。

基本的に横島は、ちゃん付けしている女の子は、年下扱いをしている。

よって、エリカ以外の同学年のほとんどが横島的には年下扱いなの

である。

例外的に2年の新生徒会長中条あずさもちゃん付けで年下扱いをしている。

あずさにそれを何回もプリプリ怒られていたが、結局、あーちゃん先輩で落ち着いた。

エリカについては、どうやら男友達と同じ扱いの様だ。ただセクハラ対象ではあるらしい。

ちなみに年上については、その括りはなく、セクハラをやってもいか悪いかは、セクハラしても相手が本気にするかしないかで判断している節がある。まあそのこと自体本能と野生の勘で判別している様だが……

「いやー、なんていうのか、エリカって男友達みたいなんだよな〜」

「横島さん、エリカは女らしいわ」

深雪はエリカのフォローをする。

「深雪ありがとう、私のどこが男みたいなのよ!!」

エリカは深雪にお礼を言ってから横島に文句を言う。

「ガサツなところじゃねーか?」

レオは笑いながら話に入ってくる。

「あんたは黙ってる!!」

エリカは間髪入れずにレオに怒鳴る。レオに対しての突っ込みの威力が前より激しくなっていた。

「いや、そんなんじゃないよ、うーん、気を使わなくていい的な感じ?」

横島自身よくわかっていなさそうなのだが、まあ、男友達のように気安く付き合えるという感じなのだろう。

「なによそれ!!私にも気を使いなさいよ!!」

「いい意味でなんだが……じゃあエリカちゃんで!!」

横島は頭を掻きながらそう言っ、エリカの名前を言い直す。

「べ、別にいいわよ、今まで通りで」

エリカは若干顔を赤らめてそう言う。結局元の鞆に収まった様だ。

「そう言えば、レオとエリカ2人して最近学校休んでたけど何かあつ

た？」

今度は幹比古がレオとエリカに質問をする。

レオとエリカは同じ日に数日学校を休んでいたのだ。

美月はエリカに理由を聞いていたのだが……男連中は知らなかったようだ。

「なぬ!!お前らそう言う関係だったのか!!知らなかったく!!」

横島は二人の關係にゲスの勘繰りをするのだが、それさえもあつけられかんと言える男なのだ。

「ち、違うわよバカ!!」

エリカは顔を真っ赤にする。

「では、エリカはお休み中は西城さんと一緒ではなかったのですね」

深雪は聞きにくい事を平然とエリカに聞いてしまっていた。

「う……」

エリカは深雪の問いに声をつまらせる、

「まじかく、レオ……後でこっそり感想を聞かせてくれ」

横島はそのエリカの反応を見て、レオにコッソリ、いや堂々とこんなゲスな事を聞く。

「違うって言うってんでしょ!!」

エリカは横島にコップに敷いているコースターを投げつける。

「感想ってなんだ?……ああ、そういう事か、エリカに千葉道場で剣術の技を習ってだな……まあ、何とかなりそうだ」

レオは平然と答える。どうやら横島が言っている意味と、エリカが顔を真っ赤にしている理由がわからなかった様だ。やはりお子様脳である。

エリカとレオは千葉道場で攻撃力アップを図るために、修行をしていたのだ。

主にはレオがエリカに教わる形だったのだが、それなりに成果は出た様だ。

「そんな事だと思ってたけどね」

幹比古は、呆れ顔でレオをみて、そう締めくくった。

それは横浜で開催される論文コンペを9日後に控えた何時ものメ
ンバーの何気ない日常の風景であった。

横島、遠方に派遣される!!

「二週間後、横浜で開催される全国高校生魔法学論文コンペティションの会場警備に派遣する人員及び配置について最終決定をする」

十文字克人は集まった生徒達にそう宣言する。

論文コンペは基本的に生徒の自主性を尊重し、全国の魔法科高校の生徒自らが運営することになっている。受付からスケジュールおよび会場警備、それこそ広報まで全て生徒が行う。十文字はその中でも会場警備の全国魔法科高校の総隊長となっていた。

現在、第一高校から、警備に派遣する人員とその配置について会議を行っている。ここに集まっているのは、風紀委員会メンバーと全校生徒から募集した有志の生徒だ。

もちろんその中に横島と達也もいるのだが、達也は論文コンペの代表者であるため、警備人員からはおのずとはずれるのだ。

論文コンペ代表の達也の周りを自主的に半ば強引に警護しているエリカとレオはこれには参加していない。飽く迄も、達也の個人警護らしい。

十文字は、派遣する人員を次々と発表していく。

「風紀委員からは2年辰巳……………そして1年森崎、以上だ」

風紀委員ほぼ全員が呼ばれたが、横島の名前は上がらなかった。

横島は選ばれずにホツとした表情をしていたが……

十文字は続いて……

「京都国際会議場の警護にも派遣することになった。あちらは、横浜の中継を流すのみだが、企業関係者が多く参加するはずだ。警備規模は小さいため生徒からは少人数のみ派遣される……我が校からは一名……………1年横島……………行ってくれるな」

そう行つて横島に顔を向けて言う。

「えっ!?俺っすか?」

十文字の横に座っていた花音が席を立ち

「これは既に決まった事なの、異議は受け付けられないわ、いいわね」
横島に有無も言わせないような言い方をする。

花音は内心この決定にホツとしている。先日のルウ・ガンフウ襲撃事件で達也と横島達が巻き込まれた件について相当頭を抱えていたのだ。この2人が揃うとんでもない事が起きるのではと短絡的に考えていた時にこの決定だ。花音の心労の種が一つ軽減される思いだった。

「ちよつ、聞いてないっすよ!?!」

十文字は何故か申し訳なさそうに

「すまん。横島、お前なら一人でも対処できる実力も十分備わっていると思つての事だ。」

そう言った。

「……俺一人っすか…」

「他校からも1〜2名ずつ派遣される事になっている。そんなに畏まったものではない、気軽に行つてくればいい」

「……仕方ないっすね。旅費とかは出るんすか？」

横島はしばし考える様相をしてから了承した。

「ああ」

十文字は何故か苦い顔をしていた。

こうして、一週間後の論文コンペ当日、横島だけ京都に派遣されることになった。

前日の放課後

十文字と真由美は第一会議室で2人で話し合っていた。

この二人だけで話し合う話題は間違いなく十師族がらみの話である。お互い十師族当主の直系の息子、娘なためだ。

「横島が呼ばれたな……」

十文字から話題を切り出す。

「そ、そうね。生徒会にも教職員からも横島くんを派遣するようにと通達があつたみたいよ」

真由美は十文字から横島の名前がでると、何故か顔を赤らめる。

真由美はあの事件以降、横島を避けている。どうしてもあの例のシーンが思い出されて、まともに顔を見ることが出来ないでいるのだ。また、その事である事件で助けてもらったお礼も言えない状態になり、思い悩んでいる。

何とかしたいようだが、なかなかきつかけも作れずに日にちばかりが経過していた。

「横浜の論文コンペ当日に、魔法協会京都の本部で、十師族の会合が秘密裡に行われる。その議題の一つに間違いなく、『氷室家の人間』である横島についてが上がっている。もしかするとそれが主題なのかもしれない」

「十文字君は気が進まないようね」

「ああ、気分がいい話ではない。要するに氷室家の横島を品定めするつもりなのだろう」

「それと、横島くん、いいえ氷室家を十師族のどこか一家に取り込ませたり関係を持たせないため、お互いけん制する意味もあるのでよね」

「ああ、俺たちがその一端を担っていると思うとな……」

十文字は苦々しい顔をしていた。

横島について、当主である父親に報告をしている。十文字自身、横島の事を気にいつているため、余計に思うところがあるのだろう。

「……そうね」

真由美も同じ立場なのだろう、下向き加減で同意する。

大人たちの思惑に加担している罪悪感拭えないのだろう。

「二応、京都国際会議場の会場警護という事になっている。他校からも数人来る予定になっている。大々的なカモフラージュだな」

十文字はそう言っているが、実はその他校の生徒も十師族では話題になる人物が選ばれている。要するに、十師族の長が気になる若い

魔法師の担い手を秘密裡に品評するいい機会なのだ。今回は横島に集中しているが、毎年恒例となつている様だ。

「わざわざ、そんな事をしなくても、直接、横島くんに話を聞きたいと言えれば良いように思うのだけど」

「さあな、俺にもわからん。だが十師族が集まるとなると、世間にはあまりいいイメージを持たれないからな、論文コンペはいい隠れ蓑なのだろう。去年は論文コンペが京都で有つた際、関東支部が集まつた様だしな」

十文字は次期当主とあつて、真由美より下りてくる情報が多い様だ。

「横島くんに伝えられないのも心苦しいわ」

「ああ、当主おやしからも強く言われている」

十文字は憂鬱そうにそう言った。

「フッフッフツ、でも、普段の横島くんの態度を見れば、十師族の歴史の方々も面食らうかもしれないわ」

真由美は悪戯っぽく笑う。

確かに、横島の普段のおちやらけた態度や、とんでもない行動を見たら、どんな反応を示すのか楽しみではある。

一方京都行きを告げられた横島は

「これでよかったのかもな」

一人ごちる。

横島は自分が闘争の渦の中心にいる。自分がいる事で余計な厄介ごとが降り注ぐのではないかと未だに考えていた。

横島の過去を顧みればそう思つても仕方がない事なのだが……

今回の事は丁度いいと、一旦皆から離れ、それを見極めるいい機会

だと思い、京都行を了承したのだ。

横島、京都に行く!!

横島は論文コンペ前日に京都国際会議場警備のために、京都に発つた。

出発前、雫は横島と一緒にいいと、ついて行く気満々だったのを横島に説得され渋々断念するという一幕があったものの、その他は何事もなく無事京都に到着したのだが。

「きよ・う・とーとー!!フハハハハッ、京美人とレッツパーティーじゃー!!」

駅に下りた途端これだ。早速地元の方々と観光客に醜態をさらす横島。

しかし、そんな横島に複数の監視の目が光っていた。

そのうちの一人、七草家が使わせた諜報に優れた監視者がいた。

その様子を高級車の中からライブ映像で見ている中年の男が、七草家当主七草弘一、真由美の父である。

「……真由美の報告の通りだな」

監視者から送られる映像を見て、頭痛がするかの様な表情をする七草弘一。

真由美からの冗談の様な横島の普段の行動について報告を聞き、そんな奴はいるものかと、にわかには信じがたい思いをしていたのだが、実際見るとそのまんまだったのだ。

そこに九島烈が家人と共に駅前に現れる。

「よお、じいさん、久々だな!元気だったか?」

横島は気軽に九島烈に挨拶をする。

「うむ、君も元気そうぞ何よりだ。早速だが行こうか」

それに九島烈も何時もの様相と違い気軽に対応していた。

七草弘一は九島烈が現れると、念のため監視の者が気づかれないうに、彼らから大きく離す。弘一にとって、九島烈出現は想定内であつたのだが、

「老師と仲がいいとは聞いていたが、これ程とは。ため口ではないか

……九島家に既に取り入れられたか……今から密談か？」

しかし、弘一の考えとは違い、

近隣ホテルのレストランで昼食を取っただけで、出てきてそのまま別れたのだ。

話している内容は分からなかったが、彼らを見るに終始楽し気で笑いなどがまじっていた。

「どういうことだ？」

弘一には密談や何やら重要な話をしている様にはとても見えなかった。

実際に横島は九島烈とただ単に昼食を取っていただけだ。

ちよろつとフェイ兄弟の事件の話はしたのだが、ほとんどが世間話だった。

その後横島は、歩いて今日宿泊するホテルに一度入り、少しレトロな私服（Gジャン・Gパン）に着替えて出てきた。

そこから、ブラブラと四条木屋町まで歩いて行く。

そこで、またしても、弘一は衝撃の風景を目撃する。

「そこの着物が良く似合うおねーさん!!ボクとお茶しない?」

「そこの色の白い肌のきれいなおねーさん!!ボクとそこでお茶しない?」

八王子駅前では見慣れた風景だが、この地でも横島は懲りずにナンパをしていた。

横島は何時にもまして気合が入っている。実は横島は10月に入って八王子駅前でナンパを行っていない。妙神山に帰る回数が増えたこともあるが、この頃、常に雫がくっ付いており、美月、幹比古コンビが休日でも横島と行動を共にしていたからだ。

しかもめちやくちやナンパ下手な上、変に気合が入っているため、余計にダメダメなのだ。めげずに何度も何度もトライするのだが、成功率は未だにゼロパーセント。

「……これも報告通りだな……しかし、本当にこの小僧は氷室家の人間なのか?しかも真由美の最近の報告では、あのルウ・ガンフウをほ

とんど魔法を使わずに圧倒したとあるが……とてもそうは見えん」

弘一は額を手で押さえている。実際に頭が痛くなってきたようだ。真由美からの話のほとんどが、横島の普段の様子だったのだが、たまに受ける明らかに優れた能力を擁する報告にばかり目が行っていたため、この現実にかなりまいっている様だ。

「……しかし、氷室は氷室だ。真由美の報告でも優秀なはずだ……一度戻る。監視は続ける」

弘一はそう言つて、高級車を出し、宿泊先のホテルに戻った。

そしてナンパ成功率ゼロパーセントのゼロの横島は

「何故だ——!!この本の通りだったら、違う土地から来た空気を纏う男はモテるつて書いてあったのに——!!」

涙をチヨチヨきらせながら、そんなアホな叫び声をあげていた。

横島はどこに行つても横島なようだ。

弘一は七草家の情報網を駆使して九校戦後から司波兄妹を探っていた。その結果、四葉家の家人若しくは一族である可能性が非常に高いと判明、達也については沖縄海戦で勝利に導き、大亜連合から摩醯首羅、沖縄の悪魔などと呼ばれた人物と同一ではないかと疑っていた。

もしそうならば、四葉に力が集中するのではないかと危惧をしていた。これは奇しくも九島烈と同じ考えであった。

七草弘一は氷室の力を欲し、この折角のチャンスをも物にしたいと考えていた。

弘一は監視の者から報告を受けながら、考え込む。

自分たち以外の十師族も監視の者を送り込んでいる事とはわかっていていた。

しかし、そんな事は気にしてられないのだ。ただでさえ、九島家には先んじられている感があるのだ。

「車を出せ」

七草弘一は再び車に乗り、横島の元に走らせたのだ。

そして、夕刻に差し掛かる頃横島は

「うーん、舞妓さーん、グツとくるさーん!!着物もやっぱ素晴らしい!!」

携帯端末でパシャパシャと写真を撮りまくっていた。

そんな横島の姿を見た弘一は咳ばらいをして、気を取り直し後ろから声を掛ける。

「ん、んう、君、もしや第一高校の横島くんじゃないかね」

「ん?おっさん誰?」

横島は振り返り訝し気に弘一を見る。

「すまん、すまん、私は七草弘一、第一高校三年の七草真由美の父だ。真由美が世話になっている。偶然、君を見かけてね。真由美にも話を聞いていたし、九校戦の活躍の君を見ていたから……もしやと思いを掛けたのだ」

弘一は偶然を装い横島に接触を図る。

「え?真由美さんのお父さん!!いやー、俺の方こそいつも真由美さんに迷惑かけっぱなしですんません」

横島は笑いながら答える。

「どうだい、ここで会ったのも何かの縁だ、これから食事でも行かないかい?」

そして弘一は横島を夕食に誘う。

「え?いいんすか?」

「じゃあ、せっかくだいいいところに行こうか」

弘一は横島が釣れたことに内心ほつとする。

弘一は京都祇園の一見さんでは行けない老舗料亭に横島を連れて行く。

「舞妓さーん!!こっちにも笑顔よろしくさーん!!」

横島は大きな和室に通され、そこでは明らかに高級そうな料理と、

目の前には舞妓が踊っていた。

「はっはっはー、横島くん楽しんでるみたいだね」

「お父さん、素晴らしいっす!!あのゲームないんすか?おねちゃんの帯引っ張って、ぐるぐる回してっ、あーっれー——ってやる奴、そんで、いいではないか、いいではないか、っってお決まりのセリフを言うアレっすよ!!」

横島は弘一にこんなことを言った。どこぞの越後屋や悪代官のいかがわしい遊びの事を指している様だ。

「……はははっ、君は高校生だよね?それは流石にないね」

弘一は乾いた笑いをして答える。

ここまでは順調に行っているのはいいのだが、ますます、この横島という少年が、氷室家の人間で、真由美の報告にあつた素晴らしい能力を持った人間なのか、疑いたくなるのだ。

弘一は楽し気な横島に此方が聞きたい話題に引き込んだ。

「ところで横島くん、君は将来は魔法大学か防衛大学どちらに行くのかい?」

「いやー、まだ全然決めてないっす。大学もいければいいなーっと思っすけどね」

「将来は氷室に戻るのかい?」

「いや、全然決めてないんすよこれがまた。取りあえず高校卒業を目標っすかね」

舞妓さんの踊りに集中しながら軽く答える横島。

弘一は横島が将来を全然決めていない事に驚くが、それよりも、氷室家に戻る事自体未定だという事実には、注目した。

真由美の報告によると、横島自体、かなりの能力者だという事だ。その中でも治癒能力、弘一が今まで聞いたこともないぐらい高性能かつ高い能力だった。それが事実であれば、氷室家関係なしで横島単体でも十分価値があるのだ。

横島が氷室直系ではないにしろ、横島には相当価値がある。完全に取り込みつつ、氷室とのパイプを持つことが可能ではないかと頭を巡

らせる。

心の中では本当にこの少年なのか？と疑問があったものの、そんな葛藤を抑える。

そして、弘一は次の一手を出す。

「君は恋人はいるのかい？」

「いないっすよ！だって見てたでしょ？ナンパも上手く行かないっすからね」

横島はやはり舞妓さんに集中しながら軽く答えたのだが、弘一は内心驚いた。

横島に監視の目を見破られていたのだ。

弘一が付けた監視者は、七草家でも3本の指に入る者だった。それをいともあっさり見破り平然と言つてのけたのだ。弘一にとって横島の評価を見直すに十分な事柄であった。『本物だと』

弘一はとぼけながらも、さらに踏み込み攻勢を強める事にする。

「いや、よくわからないが、君は今特定の女性が居ないのか……君みたいな優秀な人間がもつたいない」

「そうすっかね？」

「ふむ、私には息子二人と真由美の他に君の一つ下に、双子の姉妹がいるのだ。どうだね？真由美とは仲がいいと聞いているが、付き合つてみては？」

弘一は核心に迫る。

「……真由美さんを道具にするつもりっすか？……にしても双子姉妹か、真由美さんに似て美人なんでしょうね、羨ましいっす」

横島は一瞬弘一を鋭い目つきで睨むが、直ぐに正面を向き楽し気に会話を続けていた。

弘一はその視線に寒気を感じたが、それよりも今のはこの少年にとって悪手であったことを反省する。

「まあ、当人がいいと言えはだがね。ははははははっ」

そうやって誤魔化すように笑う弘一。

「そんなわけないっすよ!!たははははははっ!!」

横島もそう返した。この頃の真由美は横島を見れば逃げ出すのだ。横島が声を掛けようとすると、そそくさとどこかに隠れるように行ってしまう。明らかに避けられている事に横島は横島である時の事を謝らなければと思っていたのだ。

当の真由美はいろんな意味で未だに横島が気が気でない様子なのだが……

こうして、七草弘一と横島忠夫のファーストコンタクトは終わる。

弘一は、

「流石九島烈に老師が見込んだ少年だ。なかなか手強そうだな、しかし、崩せない事はないか」

と横島攻略に手ごたえを感じていた様だ。

横島は弘一と別れ、宿泊先のホテルへ戻る。

そして、ホテルの前で……

横島は常闇に映える深紅のドレスを着こなしている女性とすれ違ふ。気にはなっていたがその時は歩みを止めずそのまま通りすぎた。

その女性はすれ違った後に妖艶な笑みを湛えていた。

「フフフフ、見つけたわ」

横島、十師族の話題にされる!!

横浜で全国高校生魔法学論文コンペティションが開催される当日
何時もの面々は横浜の会場に向いていた。

その頃横島は京都国際会議場で警備全般についてのレクチャーを受けていた。

横浜とは違って実際にここで何かを発表するわけではなく、横浜の発表映像を流すだけなのだ。よって産業スパイなどが入る可能性は少なく、取り合えずの名目上、各高校の生徒に警備の一部を任せているにすぎないのだ。

魔法科高校9校から、合計14人派遣されており、二人一組になり、会場を巡回することになる。

そして、横島とタッグを組まされるのが

「第四高校2年の香取小鳥です。ひさしぶりね横島くん」

髪を左右に三つ編みをくくっており、全体的に地味な印象の少女だが、顔立ちは可愛らしく愛嬌がある。

「ボク横島!!三つ編みが似合うおねえさん!!よろし……へ?何故俺の事をしってるんすか?」

横島は何時もの、ナンパまがいの挨拶をするのだが……

「私の事忘れちゃったんですか?九校戦の最終日、ダンス踊ってくれたじゃないですか?ちよつとショックです」

香取小鳥は横島に上目使いで言う。

そう彼女は、九校戦最終日、横島と知り合い以外でダンスを踊ったあの奇特な女生徒だった。

「ああ、あの時の!!すんません思い出せなくて、あの時はどうもつす!!」

横島は慌てた様に謝る。しかし、忘れていても仕方ないのである。あの時はお互い名前を名乗らなかつたからだ。

「フッフッフ、やっと思い出してくれましたか、でも、また会えて良

かったです」

香取小鳥は珍しい少女である。普通横島と接する女性は好感度が最底辺から始まるものだが、この少女は最初っから高いようなのだ。「なんでまた俺なんかと？」

「横島くんの九校戦の戦い、見ていてスゴイなって思ったの。皆は卑怯だ、とか魔法師らしくないとか言っていたけど、横島くん、相手になるべくケガをさせない様にしていたでしょ。だからああいう戦い方だったんだって」

小鳥の言う通りであった。横島と対戦した選手は全員大きなケガはしていない。精々擦り傷程度であった。

「買いかぶりっすよ」

照れた様に笑う横島。

「フッフッフツ、そんな事、有るよ」

横島は何故かこの少女と話すとき懐かしい気分になっていた。

香取小鳥、第四高校の九校戦代表選手、ミラーズ・バットに出場していたが成績は振るわなかった。

彼女自身の能力はそれほど高いわけではないが、とあるBS魔法が起因している。

彼女の家系はザ・ラックと言われている世にも珍しい特殊能力を有している。元々は母方の家系の能力だったらしいのだが……

ありとあらゆる事象の成功率を数パーセント引き上げるのだ。その範囲や上昇率は彼女の体調や精神状態次第ではある。

事象として証明されているが、どのようにしてこのような現象が起きるかは未だ解明されていない。

この能力があるからこそ、彼女もまた京都（十師族）に呼ばれたのだろう。

そう、彼女は100年前の横島がまだ高校に通っていた頃、隣に住み、横島に仄かな思いを寄せていた花戸小鳩の子孫である。どこことなく面影が残っている程度だが、そこに横島は懐かしさを感じていたのだろう。

横島も、小鳥もその事については今は知りようもないのだが。

十師族、日本最強の魔法師の家系であると同時に、日本国内における魔法師の頂点に立ち国に対しても高い影響力を持っている。

魔法協会京都支部十師族専用の会議室。

大きな重厚な円卓にその十師族の長が一堂に会し、それぞれの席にあるディスプレイに国際会議場で警備をしている横島が映し出され、その様子を見ていた。

「この少年が氷室家が寄越した横島くんか……どこにでもいそうな少年ではありますな」

三矢元（三矢家当主51才男、神奈川県厚木在住）は一同にそう言い、話が進みだした。

「入試試験結果を見ると、実技の魔法適性ほぼゼロ。いや、測定不能とありますね。筆記一般科目は優秀の様ですが、魔法関連は壊滅的ですね」

二木舞衣（二木家当主53才女、兵庫県芦屋在住 阪神・中国地方守護・監視）は手元の端末に映し出されている横島の入学試験結果の資料を見ていた。

「九校戦では随分ユニークな戦い方をしていましたね。十文字殿のご子息は同じチームメイトでしたが、彼の事をどう評していましたか？」

八代雷蔵（八代家当主29才男、福岡県在住、九州地方守護・監視）は十文字当主に聞く。

「……愚息が申すには、敵にしたくない相手だと言っておりました」

十文字和樹（十文字家当主42才男、東京都在住 伊豆・関東地方守護・監視、七草家と兼任）は息子である克人の話を一言で表した。「ほう、それはそれは」

三矢元は感心した様に頷く。

「七草殿のご息女も同じ学校ですが、何か聞いておりますか？」

二木舞衣は同じ話を七草弘一に聞いた。

「普段の彼は九校戦の戦い同様、非常にユニークな性格をしていると報告を受けてまして、その……何と言いますか、変わり者ですね」

七草弘一（七草家当主46才男、東京都在住伊豆・関東地方守護・監視、十文字家と兼任）はワザと横島の噂のマイナス部分を話す。

「昨日、わざわざ彼とお会いになったのでしよう？それはなぜかしら？」

四葉真夜（四葉家当主45才女 信州地方に在住 岐阜・長野方面守護・監視）は、昨日弘一が横島と接触したことを指す。妖艶な雰囲気ながら言葉は何処か冷えた様な言い方である。

達也と深雪の実の母四葉深夜の双子の妹である。達也達の叔母に当たるのだが、達也と深雪は出自を隠している。

昨日横島のホテルの前ですれ違った妖艶な笑みを湛えた女性が彼女である。外見はとも45才には見えない。30前後に見える美女である。あの言葉の意味するところは分からないが……

「真由美に……娘にとって悪い虫かを確認を取っていたのですよ」

弘一は真夜から声を掛けられたのをどこか意識したが、おどけたような返事をする。

弘一と真夜は元許嫁であった。

「それでどうでしたか？」

六塚温子（六塚家当主27才女、宮城県仙台在住、東北地方守護・監視）は四葉真夜に追従する。

「真由美の報告通り、少しヤンチャが過ぎる少年でしたね」

ワザとらしく弘一はそう答えた。

「七草殿……それは我々も確認している。持っている情報を共有したいのだが、どうですか？」

一条剛毅（一条家当主40才男、石川県金沢在住、北陸・山陰地方守護・監視）は弘一が意図的に情報を出さない様になっている事を指していた。

因みに、彼が第三高校のクリムゾンプリンス一条将輝の父である。

「それを言うなら九島殿はどうですか、御父上は横島くんと親密の様ですが」

弘一は矛先を九島真言に向ける。

「うむ、先代の個人的な付き合いなため、私どもは把握していないのだよ」

九島真言（九島家当主62才男、奈良県生駒在住、京都・奈良・滋賀・紀伊方面守護・監視）は無表情でそう返答する。実の父親である先代九島烈が余りにも優秀なうえ、技量ではとても敵わず、比較対象とされてきたため、若干卑屈な性格となっている。

「何れにしろ、今まで接触を拒んできた氷室、そこから来た横島くんをどう扱うか、これがもつとも重要な事ではないですかね」

五輪勇海（五輪家当主47才男、愛媛県宇和島在住、四国地方守護・監視）はそう言つて、こじれそうになっている会議の場を元に戻す。

「しかし、所々とつもない情報が流れるのだけど、事の真偽が分からない。フェイ兄弟を捕らえたとか、さらにあの人喰い虎ルウ・ガンフウを単独撃破したとかね、しかも肝心の内容が伝わってきていないわ、彼がどんな魔法を使えるのか、魔法適性すらわからない」

手元のディスプレイに映し出されている資料を一瞥しながら二木舞衣はそう皆に言った。

「九校戦では、ほとんど魔法を使っている様には見えなかった。しかしまあ、あれだけの策を弄すことができるものですな。九島老師が気に入るのも無理もない」

三矢元はそう言つて九島真言を見やる。

七草弘一は、話を聞きながらも、頭を回す。

実際弘一が知っている横島の情報は他の十師族と大きく違うのは、とてつもない治癒魔法を持っている事だけだ。

横島がルウ・ガンフウを圧倒した事実を真由美から聞いていたが、実際何をしたのかが見当もつかなかったからだ。真由美曰く、ルウ・ガンフウを武術で圧倒するも、よく見えなかったという事なのだ。

さらに、魔法を行使した様に見えなかったとまで言っていたのだ。対するルウ・ガンフウは高度な情報強化系、物質固定、身体能力強化

等の魔法を使っていた事は分かっていた。流石にそれに対し、横島が何も魔法を使わなかったとは思えないのだ。

結局、真由美の情報だけでは、横島が何をしたのかがさっぱりわからなかったのだ。

実際、横島は武術で圧倒していただけなのだが……

「氷室家が絡んでいいる事だ。確実に実のあるものにしなければ意味がない。情報も少なすぎる。今は下手に動かずに、静観すべきと思うがどうだろうか？」

九島真言は皆を見渡しそう言う。

ここで同意を得れば、十師族は手を出しにくくなる。しかし、父親である九島烈と横島は個人的なつながりがある。後はあの父親に任せれば、九島家と氷室家のパイプが時と共に出来るだろうと裏では画策していた。

弘一は九島真言の意図を十分理解するが、弘一としてもその策はチャンスである。弘一自身既に横島と面識が出来、真由美が横島と仲がいい事は承知済みだ。もしダメでも、来年には、双子の娘たちが第一高校に入学するのである。横島を取り込むチャンスは他の十師族に比べ、圧倒的に多いのだ。

しかし、四葉真夜がそれに異をとねえる。

「私は彼に直接会ってみたいわ。今、彼と接触しているのは、九島家、七草家、十文字家だけですもの」

そんな事を言った真夜だが、実際には四葉家こそ横島に対して、達也、深雪という強力なカードを持っているのだ。

しかし、十師族の中でも、四葉家と達也、深雪の関係については知らされていないのだ。

「どうなされるおつもりかな？ここに呼ぶわけにも行きませんで」

三矢元は真夜に釘をさす。

そもそも、十師族が今、京都に秘密裡に集結しているため公にできないのだ。

「彼に十師族の長と悟られない様接すればよろしいのでは？」

真夜は三矢元の指摘に対しそう提案する

「実際どうなされるおつもりで？」

弘一は真夜にその内容について聞く。

「彼、今の時代には珍しく、道行く女性を街角で声を掛けるそうですね。わたくしが、彼の前に出れば、きつと声を掛けてくれるはずですよ」
真夜が言った作戦は、要するに、横島の前に現れ、ナンパされるといふ事なのだ。

「……………」

会議室は沈黙に支配され、全員顔を強張らせていた。

(無理があるだろ!!)

全員思っている事は同じであった。

いくら真夜が絶世の美人だろうと、既に45才、一方横島はまだ、高校一年生。この年の差はいかんともしがたい。百歩譲って、真夜が30前後に見えるとしても、その年の差は優に1世代以上離れている。しかし、その事を本人に指摘するのは勇気がいる事だが、同性で年上の二木舞衣ならば、

「……………自信がお有りな様ですが、彼は警備任務中です。しかも彼の横には年相応のザ・ラック香取小鳥さんが居ます。……………四葉殿では流石に年の差があるのでは……………」

そして最後は皆が思っている事を代弁してくれた。

「香取さんの件は架空の呼び出しなどで何とでも出来るでしょう。皆さんはモニター越しで見てくださいいな。きつとわたくしが、彼とお話し、いろいろと聞いて見せますわ、それともわたくしでは不足ですか？」

何処からその自信がくるのだろうかかわからないが、引き下がらず真夜はそう返答する。

確かに、九島、七草、十文字以外の十師族は横島の新たな情報を欲しているが、流石にこの作戦は厳しいのではないか、失敗した場合の真夜の状態が気がでない。

しかし、彼らは横島の性格……………性癖を正確に把握していない。

横島は、相手が年上だろうが、後家さんだろうが、こぶつきだろう

が、地雷女だろうが、神だろうが、魔族だろうが、妖怪だろうが、幽霊だろうが、性別が女で美人であれば、誰でも構わず手を出せる男なのだ。全部未遂に終わってはいるのだが……

「……では御一同、六塚殿もご一緒にという事でどうでしょう？」

八代雷蔵はそう言っただけで六塚温子にも同行するよう提案する。

確かに、六塚温子なら年も近く容姿も整っている。

もし、失敗しても二人ならシヨックも薄いだろう。皆一同、同じような事を考えていた。

一同は渋々と言う感じだが、無言でうなずいていた。

「仕方ありませんね。温子さんご一緒に願えませんか」

真夜は仕方なしといった感じで六塚温子に同行を求めた。

「は、はい」

六塚温子は、四葉真夜のその美しさや強さに憧れを抱いているため、一緒に居るいい機会を得たと二つ返事をする。

「一旦この場は収めよう。一時間後再度集合という事でよろしいか？」

九島真言はそうして、午前の会合を終了させた。

横島、真夜と会う!!

現在、京都国際会議場の警備状況は、何のトラブルもなく順調そのものだった。

横島と香取小鳥の警備班は、14:00～15:30に休憩時間を設けられている。

「もう少ししたら私たちも休憩時間ね。横島くんお昼一緒にしましょ、私たちもこの会場のレストランを利用していいらしいよ」

小鳥はそう言って、昼食に横島を誘う。

「たはははははっ、そっすね」

横島は照れ笑いをしながら返事をする。

香取小鳥は、第一高校で横島と接する上級生女子では居ないタイプだった。

お嬢様風でも無し、気がやたら強いわけでもない。畏まった口調でもない。気さくで接しやすく、一言で言うのと、大人し目だが何処にでもいそうな普通の女子高生なのだ。

エリートやお嬢様が集まる魔法科高校では珍しいタイプと言えよう。

しかし、そこで小鳥の携帯端末に呼び出しが掛かり、内容を確認していた。

「私だけなんだか呼び出しがかかったみたい、要件は分からないけど、ちよつと行ってくるね。長引くかも知れないし、休憩時間が始まったら、レストランに先に行行ってね」

小鳥はそう言って横島に手を振り、小走りで駆けて行く。

「急がなくてもいいっすよ」

横島はそんな小鳥を見て返事をし、取り合えず、今いる会場のロビーで待つことにした。

そこに、二人の妙齢の女性が横島の前に現れる。

一人は真っ赤なドレスをゴージャスに着こなし、ウェーブのかかつ

た長い髪をふわふわとたなびかせている。色白で妖艶な笑みを湛える美女だ。

もう一人は、カーキ色のブランドスーツに身を固め、ショートカットでキャリアウーマン風の美女だった。

もちろんこの二人は、横島に声を掛けられるために現れた十師族の長、前者が四葉真夜、後者が六塚温子である。

十師族の長がこんな人が多いところに出て混乱を招くのではと思われるかもしれないが、秘匿性を重視し一般的に露出しない。それでも企業関係者や軍事関係者からは顔が知られているが、この二人に至っては殆ど知られていない。六塚温子は近年に長になったばかりであり、さらにオーナーをしている会社でも、対外的に接触する機会がない。四葉真夜に至っては、全くと言っても過言ではないほど表の世に関わっていない。半分世捨て人の様でもある。

まあ、軍関係者の上層部には流石に知られているのだが……

あと、もちろんではあるが、彼女らにはガーディアンと言われる彼女らの為の護衛が密かについている。

横島はその二人の女性を食い入る様にジッと見るが……それ以上のアクションを起こさない!!

妙齢の美女二人は、そんな横島の周りを何度も何度も意味もなくうろろする。

周りから見れば怪しいことこの上ない。

四葉真夜は笑みを湛えながら思う。

(アピール度が足りないのかしら?)

どうやらかなりズレた感性をお持ちの様だ。

六塚温子は内心、この羞恥プレイの様な状況に赤面する思いであった。

(は、恥ずかしい、早く終わらせて帰りたい)

その様子を魔法師協会京都本部で見ていた他の十師族の長たちは、

憐れんだ目で彼女らをディスプレイ越しに見ていた。

(この結果は当然なのだが……)

余りにも憐れな二人の姿に、同性の二木舞衣はハンカチを取り出し、目じりを拭いていた。

(あなたたちは頑張ったわ、もういいわ、戻ってきなさい)

男性陣も2人の憐れな姿が流石に見るに堪えなくなり、それぞれディスプレイから目を逸らす。

(見るに堪えん。流石にこれは……早く何とかしなければ)

そんな矢先、横島は何故かホツとしたような表情をして、一度下を向いてから、あの二人に近づき……

「ボク横島!!綺麗なおねえさん、カッコイイおねえさん!!ここで何をしてるんですか!?!よかったらボクとあのレストランでお茶しませんか!!」

ついに何時もの調子で声を掛けたのだ!!

真夜は嬉しそうに微笑みそれに答えた。

「まあ、わたくしたちも丁度、どこかで休憩をしたいと思いますの」

六塚温子も肩の荷が下りた様にホツとした表情をして答えた。

「そうですね。せっかくだからご一緒させて下さい」

ちよつと無理がある返答だが仕方がない。二人共お嬢様で世間知らずなのだ。

それをモニターしていた十師族の面々はその様子にホツとすると同時に何故今のタイミングなのか訝し気に思う。

真夜と温子が横島の前に現れてから、ゆうに10分は立っていたからだ。その間横島は何もアクションを起こさず、真夜達に目をやって

いただけなのだ。

会場に併設しているレストランに入り、横島は美女2人を席に促す。

「ボク横島、東京の第一高校から来て、会場の警備担当しているんです!!あれ?綺麗なお姉さんの方は昨日どこかであったような?」

横島は着ている制服を指さして、自己紹介をするが、真夜について昨日すれ違った事を思い出した様だ。

「ウフフフツ、そうかもしれないですね。わたくしは…真夜、此方はお友達の温子さん、横島さんとおっしゃるのですね。第一高校からとは魔法の腕も覚えがあるのですね」

真夜はそうとぼける様な言い回しをしていたが、横島と話す時は何故か嬉しそうにほほ笑みを絶やさなかった。

「その、警備担当と言ってたけど、私たちと居て大丈夫なの?」

温子の方は、真面目にそんな事を言ってしまったていた。

「綺麗なおねえさんが真夜さんで、カッコイイおねえさんが温子さん!!ちようにど休憩時間になったんで大丈夫っす!!」

横島は元気よく答える。

「綺麗だなんてありがとう横島さん。わたくし、あまりこういうところに来ないので、迷ってしまったの、だから声を掛けていただいで助かりましたわ」

真夜は終始微笑んでいた。

「こんな綺麗なおねえさん達が、こんな面白くもなんともしなそうなの所にどんな用事できたんですか?」

横島も楽し気な雰囲気醸し出しながら、美女二人に聞いた。

「え?面白くないって、これは魔法科高校にとって大事なイベントよ。私も卒業生だからその事はよく知っているわ」

温子は横島の言動に訝し気に思いながら真面目に答えた。

「温子さん折角のお話なのに、そんなつまらないお話はよしましょう」

真夜は温子にやんわりとその話題を止める様に言う。

「そこまでだ、二人共」

そんな話の間に不意に声が掛けた人物がいた。

九島烈が横島たちの席の前に現れたのだ。

真夜は、一瞬の不快な顔をするが直ぐに元の微笑んだ顔に戻る。

温子は明らかに狼狽していた。

「なんだよ、じいさん、せつかく美女二人と楽しいお話をしようと思っただのに!!」

横島はそんな九島烈に軽口を叩く。

「ふむ、横島くんも気がついておろう……ここでは人の目があり過ぎる、別室についてきたまえ」

そう言つて、横島たちを席に立つよう促す。

「あら、先生。若者同士でお話をさせていただけなのですか?」

真夜はおどけた様に言いながら九島烈を見上げる。

真夜はその昔、九島烈に師事していたことがあるのだ。

「若いか……まあいい、君たちも来たまえ」

「強引だな、じいさん」

横島は愚痴をこぼす。

「あら、仕方がないですね」

真夜もそう言つて席を立ち九島烈について行く。

温子もそれに習い真夜の後について行った。

京都本部の十師族の方々は、九島烈の登場で九島真言を苦々しく見るが、真言は首を横に振るだけだった。

そうして、国際会議場内にあるVIPの応接間に通され、高級そうなソファーにそれぞれ座る。

この時既に、魔法協会京都本部の十師族に横島の映像を送り届けることが出来なくなっている。

「で、じいさん、なんだよ話つて、この綺麗なおねえさん達と知り合い

みたいだけど」

「横島くん、彼女らは十師族の長だ」

「あら、先生、そんな事を言ってしまったていいのですか?」

真夜はワザとらしく驚いたような顔をして九島烈に言う。

「私は既に隠居の身だ……横島くんとは対等でいたいのでな」

九島烈は真夜にそう返答する。

「ごめんなさいね。だますような事をして、改めまして、わたくしは四葉家当主をしています四葉真夜よ。横島さん」

真夜はそう謝りつつ、自己紹介を改めて行う。その間も微笑を絶やささない。

「私は六塚温子、六塚家の当主よ」

温子はさっきの態度とは違い若干ツンとした態度をとる。

「へく、こんな綺麗なおねえさんたちが、当主なんだ!!俺、てつきりじいさんみたいな奴ばかりだと思ってた!」

横島はいつも通り平然と軽口を叩く。

彼女らが十師族の長を名乗ってもいつも通りなのだ。

普通気後れなどするのが当たり前なのだが……

「君は驚かないの? 私たちは十師族の長なのだけど」

驚きもしない横島に温子はそう尋ねた。

「十師族だからって、取って食われるわけじゃないでしょ……むしろ、おねえさん達にだったら喜んで食べられたい!!」

相変わらずの横島節だ。

「あら、まあ」

真夜は一瞬驚いた顔をし、その後は終始嬉しそうにしていた。

「あなたねー」

温子は呆れた顔をする。

「……帰って、十師族の面々に言うが良い、横島くん小細工は通用しない」

九島烈は珍しく語気を強くして、厳しく二人に言う。

「先生、小細工ではないわ、わたくしは純粹に横島くんと話したかった

だけ」

「君は気づいていただろ」

九島烈はそんな真夜の言葉を無視し横島に問う。

「流石におねえさん達が十師族の長とは知らなかったけど、大きな霊気が会場に接近すりゃ警戒せざるを得ないと言いますか……これでも一応この会場の警備を任されていたんで」

横島は九島烈の言葉に答える。

横島は真夜と温子がこの会場に来る頃からマークしていた様だ。

テロなどを警戒しての事なのだが、横島は京都に入ってからずっと何者かに監視されていた事からも、今回は何時もに増して警戒を密にしていた。

流石十師族の長、エイドス霊気の内包している量がやはり通常の魔法師に比べ段違いに高いため、それがあだとなり横島に気付かれていたのだ。

しかし、霊気の雰囲気で殺意や敵意が感じられず、会場に入り、目の前に現れてからも、それは変わらなかつた。一応殺意や敵意の偽装を警戒し、密かに詳しく霊視して調べていたのだが、彼女らが害する者では無いと判断。もしや目的は自分ではないかと、声を掛けたのだ。

もちろん真夜や温子のある程度の年齢はこの時に把握済みであつた。

「わたくしたちの事、気づいておられたのですね」

真夜はワザとらしく驚く表情をする。

「最初っから……」

温子は横島にそんな初期から気付かれていた事に驚きを隠せない。「京都に入ってからずっと監視されっぱなしだったし、さつきまでもね。」

まあ、迷惑なんでやめて欲しいんですが、他の十師族の方々にも言ってくれませんか？監視されるのはどうも……それと氷室家が狙いなら、俺に当たっても、意味ないですよ。そう言うことは当主通さない」と

横島は途中から口調を変え真夜達に、監視している事をやめるよう

言い、そして、氷室家に取り入るのに自分にアプローチしても意味がない事を伝えた。

この手の事は横島に簡単に見破られてしまい逆効果になってしまうのだ。

「監視されているって分かっていても、あんな行動が出来るのね」

温子はムスツとした顔で、京都木屋町でのナンパなど数々の行動の事を指して横島にこう言った。

「他の方々はどうか知りませんが、わたくしはあなたに会いに来たのですよ」

真夜は微笑みながらそう言った。

真夜の真の目的は横島に会う事にある。どんな形にしろ横島と顔を合わせる事だった。

十師族に情報を伝える云々は方便である。十師族の総意の前で堂々と横島と顔合わせが出来る様にする。これで、今後真夜自身が横島と堂々と会える土壌を作り、一度、認めてしまった以上十師族はそれを公に止めにくくなるのだ。

ナンパをされるなどと無茶もいいリスキーな提案をし、十師族を混乱させつつ、正常な判断が鈍っているうちに実行したのだ。まんまと、十師族全員が真夜の画策に嵌ったのだ。

今頃、弘一辺りはそれに気づき、悔しがっている頃だろう。

しかし、真夜はそれ以外にも理由がありそうなのだが、今は分かりようもない。

「綺麗なおねえさん達だったら、個人的なお付き合いならいつでも大歓迎っすよ!!」

横島は先ほどの軽い口調に戻っていた。

「まあ、お言葉に甘えようかしら、横島さんはわたくしの事をまだ、おねえさんと呼んでいただけなのです」

真夜は嬉しそうに声を上げる。

「今後は横島くんにこのような行いは慎みたまえ、友人に手を出されるのは気分がいいものではない」

九島烈は二人を批判しそう言い放った。

「はい、でもわたくしも、先生のように親しみを持って、おねえさんと呼ばれる仲になりたいですわ。横島さんにおねえさんって呼ばれるのはとても新鮮で嬉しかったのです」

真夜は九島烈の言葉に懲りもせずそう言い、色白の顔にはほんのり赤みがさしていた。

温子は横島に最初から自分たちの存在に気付かれていた事と、京都から監視者を付けていた事がばれていた事、そしてここまで九島烈に信頼されている事に警戒心を持つのであった。

「すみません人待たせているんで。昼ごはん一緒に取る約束していたんですよって、うわ!!休憩時間もう終わっちゃう」

横島は思い出したように、香取小鳥と昼食を一緒に摂る事を約束した事を言う。

「フッフッフツ、それなら大丈夫よ、お詫びに横島くんの休憩時間を延ばしてもらおうわ、もちろん、香取さんもね。わたくしもその席にご一緒させてもらっていいかしら?」

真夜は横島に休憩時間延期引き換えに昼食に同席させる様に言う。

「うーん、休憩時間延ばしてもらえるし、おねえさんならいいか」

横島は少し考えたが、了承の返事をする。

「私も、同席させてもらおうか」

九島烈は真夜を見やりながら横島にそう言う。

真夜を警戒しての事なのだろう。

「さすがにじいさん有名人だから、小鳥さんがびびっちゃうよ。また今度で」

九島烈は一般的に顔も知られている超有名人だ。流石にまずいだろう。

「ならば、今晚どうかね」

「ああ、いいぜ」

「先生ばかりズルいですわ」

真夜は拗ねた様な表情をする。真夜がやると何故か可愛らしい様に見えるから不思議だ。

「君は今から行くのではないのかね」

九島烈は呆れた様に言った。

そして、この後、真夜と横島、小鳥、なぜか温子まで一緒に食事をすることになる。

会議室の十師族の面々は、真夜から簡単に状況の知らせを聞き、横島に監視がばれていた事と今回の作戦についてもある程度バレていた事に驚き、その事で決定的な亀裂が生じなかった事に一同は一応はホッと肩を撫でおろす。

だが、弘一だけはその報告を聞き慄然とした顔をしていたのだった。

横島、急変する事態をまだ知らない!!横浜事変その1

横浜国際会議場では、全国高校生魔法学論文コンペティションが開催され、粛々とプログラム通り進行し、現在第一高校の発表が執り行われている。

第一高校は市原鈴音が作成した論文『重力制御魔法式熱核融合炉の技術的可能性』についてを発表している。

壇上で、鈴音が発表し、そのサポートで五十里敬と達也が壇上横で控えている。

横島の友人たちは劇場型のホール席の中頃に陣取り、鈴音の発表を聞いている。

しかし、友人たちは壇上の発表より、敵襲があるのではないかと警戒していた。

達也からの情報で、ルウ・ガンフウがフェイ兄弟の手引きによって護送中に脱走したと聞かされていたからだ。今回のルウ・ガンフウの護送は前の失敗を教訓に三個小隊を付けていた。

しかし、フェイ兄の先制の精神攻撃からの奇襲であっさり奪還されたのだ。人的被害としては少なかったものの、軍の失態は大きい。

第一高校の発表は終わり、大きな拍手の中鈴音たちは壇上を後にする。

そして、次の第三高校の発表の準備に入った時。

そして……ついにその時が来た。

「敵意が来ます!!」

美月は立ち上がり叫んだ。

それと同時にほぼ同時に会場の外から爆発音の様なものが響き渡ると同時に建物が揺れ、会場全体がどよめく。

何時ものメンバーは警戒体勢を取り、CADを装着した。

「8人がこちらに向かってます!!」

美月は続けて、周りの友人に警告する。

「吉田君、後方右2人!!」

幹比古は領き、後方扉に向かって走る。レオもそれに続いた。

「雫さん、後方左2人!!」

雫も領き通路に出て、左後方扉に構える。

ほのかも雫に続いていた。

そして、薄茶色の軍服を着用し対魔法戦用大型ライフルを構えた兵士2人が後方右扉から勢いよく入って来た。既に幹比古が札を放っており、間髪入れず雷光で無力化させた。

後方左扉からも同じ服装と兵装の兵士2人が飛び出してきたが、それと同時に雫が氷結魔法を放ち、即無力化させた。

「達也さん!!壇上横左右扉2人ずつ!!」

美月は壇上直ぐ下にいた達也に叫ぶ。

しかし、兵士の侵入を許してしまう。

「大人しくしろ!!ここは我々が占拠した!!抵抗する者は撃つ!!」

兵士は壇上脇の左右の扉から2名ずつ侵入し、観客席に向かって銃を構える。

兵士の一人は達也とその横にいる深雪に向かって銃を構えていた。

「動くな!!抵抗すると撃つ!!」

そして達也に向かいそう言い放つが達也はゆっくりとその兵士に近づいて行つた。

「チツ」

ダーン!!ダーン!!ダーン!!

兵士は警告を無視し歩みを止めない達也に、大型ライフル銃を3発放つ。

周りの観客席の生徒はその後の悲惨な光景を思い、そのほとんどが目をつぶる。

しかし、達也は、右手の平で弾丸全てを受け止めていた。

正確には右手の平に展開していた。分解魔法でライフルの弾を分解したのだが、辛うじてその光景を見ていた人間には、ただ単に弾を受け止めたとして見えていた事だろう。

達也はそのまま、右手で手刀を作り分解魔法を展開したまま、その兵士に振り下ろし、切り裂いた。兵士は多量の血液の噴出と共に倒れ軀となる。

達也の攻撃は、切り裂いたという言い方には少し語弊がある。分解魔法により、手刀が兵士の体に触れる瞬間にその部分は分解されていき、まるで柔らかいものに通した様な感覚であろう。

そして、達也は近くにいたもう一人の兵士も手刀で切り裂く。

それに気が付いた残りの兵士が達也に銃を向けるも、深雪が氷結魔法を放ち、無力化させた。

彼らの活躍でホール内に侵入した兵士は掃討され一応の安全は確保されたが、この急変にホール内は混乱し、あるものは爆発音やその振動に怯え、あるものは兵士の侵入に混乱し、あるものは達也の凄惨な所業に恐怖し、会場は恐慌の様相をきたしていた。

観客席のほとんどが、年若い魔法科高校の生徒である。この状況で正気を保てという方が無理がある。

その中で、第一高校前生徒会長、七草真由美は、その状況に呆けた表情をしている現生徒会長の中条あずさを叱咤する

「中条あずさ会長、貴方はあなたの役目を果たしなさい!!」

「七草先輩……でも」

「あなたの能力はこのようなときに使うのではなくて？」

真由美はあずさが持つ固有魔法、精神干涉系魔法の事を指している。

興奮状態にある集団をリラックスさせる効果させる効果があるのだ。

本来、強力な集団に使用できる精神干涉系魔法は使用を制限されて

いるが、あずさは、その魔法の特性上、特例的に学内での使用が許可されている。

「……はっ」

あずさは躊躇しながらも、胸のロケットを握りしめ、そこに刻まれている起動式を展開させる。

魔法の名前は、梓弓、その名の通り、弓の様な魔法を会場に撃ちあげ、会場全体に魔法の効力が発揮され、恐慌をきたしていたホールは落ち着きを取り戻した。

そして、落ち着きを取り戻した生徒達は各学校の代表生徒と教員たちに従い、避難準備を始める。

その間、達也や何時ものメンバーは既に、ホールから出て、会場入口付近のロビーで敵兵士と交戦していた。

達也による、分解魔法を駆使した手刀攻撃と、美月の指示の下、何時ものメンバーにより次々と敵を撃破していく。

先ほど同様、美月の横島によって強化された霊視及び霊気感知能力で敵の動きが丸わかりだ。

霊視による敵意や殺意の感知から、敵なのか、逃げ惑う人々なのかを素早く判断できるため、遭遇戦や乱戦ではいち早く対応が可能なのだ。

達也は分解再生魔法を得た副産物として、構造体の把握と特殊な知覚感覚が可能であり、周囲の構造や状況などお構いなしに、目視出来ない範囲でもかなり正確に物事が見えるのだ。

敵味方の判断は見えた人物の行動から行うためその部分では霊視に劣るが、物理的な構造や人の細やかな動き、敵の武装などの把握は達也の能力の方が勝っている。

この二人が居るため、敵が隠れていようが、どういう行軍をしようが、はたまた、人質を取っていようが丸わかりなのである。

美月やほのか、雫は達也の攻撃した相手の凄惨な姿に顔を顰めているが、今はそうは言っていられない。

十文字克人率いる学生による会場警備隊も、各方面で、敵を撃破していつていた。

会場に初期に侵入した兵士は大方撃破し一応の落ち着きを取り戻す。

通常回線が、回線混乱若しくハッキングか何かで使用が出来なくなっていたため、現状が把握しきれないメンバーは、雫の提案でVIPルームにある秘匿回線を使用することにした。

VIPルームに、達也達、何時ものメンバーに真由美、摩利、花音、桐原、壬生紗耶香、十文字率いる警備隊の一部が集まる。

雫は、北山家に救援へりを要請。

真由美も、七草家に救援へりと援軍要請。

達也も、独立魔装大隊の藤林にここにいる事だけ伝える。

知りえた情報として、横浜埠頭から多数の敵が押し寄せ、各方面で戦闘になっている事が判明していた。

真由美と十文字を中心に避難経路の打ち合わせをしている中。

「……横島さん」

雫は、何時も大事に胸元に仕舞っている横島からもらったお守りを目を瞑り両手で祈る様に握りしめていた。

横浜で事態が急変する少し前、京都では……

香取小鳥は、呼び出しを受け警備室に行き、何故かとても急を要するような仕事ではない雑務をやらされ、ようやく解放され横島の元に

行く。

横島ともども昼休憩を延期してもらえ、さらに横島もまだ昼食を取っていないと連絡を受け一度は沈んだ気持ちも上昇していた。

上機嫌で小鳥は待ち合わせのレストランに行くと、横島の席に何故か、とびつきりの美女が2人も同席していたのだ。

「小鳥さんこっちはです」

横島は小鳥を見つけ席から声を掛けたのだが……

小鳥はのろのろと横島たちの席に近づき、同席している美女をチラッと見て

「よ……横島くんのお……お知合いかな？」

横島に聞く。

「たはははははっ、その、なに？困ってそうだったから声を掛けたら、仲良くなっちゃったおねえさん方です」

横島は乾いた笑いをし、詰まりながらそう小鳥に説明した。

「え？……なんで」

小鳥は折角の横島と二人での食事と思い上機嫌だったのだが、ズンと気が沈んでいった。

「フフフフツツ、わたくし、横島くんに助けてもらいました。そのご縁で、……一緒させてもらってますの。もしかして、お二人は恋人同士かしら？お邪魔だったかしら、ごめんなさいね」

真夜はそう言って、妖艶な笑みを湛えながら若干わざとらしく言う。

「へ？恋人同士？……なな？、ち、違います、と言うかお邪魔じゃないです」

小鳥は真夜の言葉で顔を真っ赤にして、慌てた様に返答する。

横島は小鳥に横に座る様に手招きしてから

「小鳥さん、此方の綺麗なおねえさんが真夜さんで、カツコイイおねえさんが温子さん」

2人を自己紹介する。

真夜は微笑んで軽く会釈。温子の方は何故か慚然とした顔で会釈した。

「か、香取小鳥です。横島くんとこの会場の警備担当をしています」
顔を赤らめたまま、自己紹介をする小鳥。

「まあ、可愛らしいわね」

真夜はわざとらしくお世辞を言う。

小鳥は、横島と恋人同士ではと言われた事と、可愛らしいと褒められた事で、沈んだ気持ちが再度上昇していた。

この時横島は横浜で起こる事態を予想だにしていたなかった。

これが、横浜の論文コンペ会場に敵兵が侵入する10分前の事であった。

横島、封印を解く!!横浜事変その2

横浜国際会議場のVIPルームで達也と何時ものメンバーそして、真由美、摩利、十文字、花音、桐原、壬生紗耶香、五十里敬等が集まり、真由美と十文字を中心に現状把握と避難場所や避難経路の打ち合わせをしていた。

分かった事は敵が横浜港から侵攻してきたこと、現在埠頭付近のほとんどが敵に制圧されており、また、陸路も麻痺状態に陥っている。これは潜伏していたゲリラ部隊の仕業と推測。

そして、狙いはおそらく、魔法協会関東支部のデータバンク……

まず、十文字は警備隊で現部活連会頭の服部と風紀委員会の沢木に現在横浜地下街にあるシェルターへ退避行動中の生徒会長中条あずさが率いる第一高校生徒達を含む一団の支援へ向かわせ、自らは会場内に避難している一般市民の警護に向かった。

現在、多数の一般市民がこの会議場に避難しているのだが、ここもいつまでも安全ではない。

沿岸警備隊の輸送船での避難ルートを模索するも、既に沿岸で待機している市民でごった返しており、とても全員乗れる状況ではない。

結局、歩いて脱出を図る計画を立てる。

そんな中、突然、達也は何故か壁の方に向かい、目を凝らしていた。

その横で達也の様子を見ていた真由美はなんとなしに、達也が見据えた方向を知覚魔法マルチスコープを発動させ遠隔視覚でみると、横浜国際会議場入口に猛スピードで突っ込んでくる大型トラックが見え、その中には大量の火薬が詰まっているのも確認できた。

そもそもVIPルームから入口、さらに敷地外のトラックまで、かなり離れており、階層も違う上、壁や天井を幾つも隔てた先なのだが、達也はまるでそのトラックが見えているかのよう壁ごしに特化型CADシルバーホーンを構え、そして、分解魔法『雲散霧消』（ミスト・デイスパージョン）を放つ。

ターゲットとなったトラックは霧の様に蒸発して消え去っていつ

た。

その様子を唯一、一部始終見ることが出来た真由美はその見た事もない強力な魔法に恐怖にも似た驚きの表情で達也を見返していた。

「た……達也くん、今のは？」

しかし、それもつかの間

「誰か来ますが、敵意は在りません」

美月は誰かがこの部屋に来ることを知らせる。

そしてしばらくし、扉が開かれ、日本軍の軍人と思われる軍服姿の男女が入ってくる。その後一般市民の警備に向かった十文字克人と桐原が続いていた。

「特尉、情報統制は一時的に解除されております」

女性軍人は達也に向かってそう言うと、達也はその男性軍人に向かって敬礼をする。

その姿に、ここにいる達也の友人達を含めた学生全員が驚きを隠せず見つめていた。

そして、壮年の男性軍人は会議室にある低い壇上に上がり名乗る。

「国防陸軍少佐、風間玄信です」

そして生徒達は静かに次の言葉を待つ

「藤林、皆さんに現状をご説明差し上げろ」

そして横に風間少佐に同行していた女性軍人は藤林響子であった。「はい、侵攻してきた武装集団は、大亜連合とつながりがあるものと推測、現在、わが軍は保土ヶ谷駐留部隊が侵攻軍と交戦中、程なく鶴見と藤沢から各一個大隊が到着予定。魔法協会関東支部は独自で防衛を開始」

風間少佐は藤林少尉をねぎらい、達也を見据える。

「ご苦労。さて、特尉、現在特殊な状況を鑑み、国防軍特務規則に基づ

き、貴官にも出動を命ずる」

真由美や摩利が何か風間少佐に言おうとするが

「国防軍は皆さまに特尉の身分について守秘義務を要求する。本件は国家機密保護法に基づく、措置であることをご理解されたい」

風間少佐はそう言つて、ここにいる学生全員に達也が軍人であることを秘密にすることを義務付けたのだ。

達也は敬礼してから、何時もの友人たちに

「すまない。聞いての通りだ。皆は先輩たちと一緒に避難してくれ」
そう言つてその場を去ろうとする。

友人達や先輩たち、ここにいる学生全員が、啞然と達也を見送るだけで、声を掛けることが出来ない。達也が軍人であることに少なからずショックを受けていた。

そんな中

「お兄様、お待ちください」

深雪は達也を呼び止め、悲しそうな表情をしたあと、作り笑顔をし、達也の顔に手をやる。

達也はそれに合わせて膝を付く、まるで騎士に姫様が出撃の任を激励するかのようだ。

そして、達也の額にキスをする。

すると達也から溢れんばかりのサイオン（靈気）が漏れだし、発光と共にサイオンの嵐が吹き起こる。

その影響でその場にいる人間はその光と風にさらされ、皆よろめき、一步に二歩と後ずさる。

達也の封印が解かれたのだ!!

深雪は達也に

「ご存分に」

微笑みで別れを告げ

「行ってくる」

達也はその場を去った。

その頃、京都の横島は真夜、温子、小鳥と共も食事を済ませ、食後のティータイムを楽しんでいたのだが。

「なんか会場の方が騒がしいっすね？」

横島は会場が突如人の出入りが多くなっている事に気が付き、皆に言う。

「どうしたんだろう？ 私ちよつと聞いてくるね」

そう言っつて小鳥は席を立って、レストランから出て行く。

すると、真夜の家人が何処からともなく現れ真夜の後ろから耳打ちをする。

真夜は一瞬驚いた顔をするが直ぐ元の微笑んだ顔に戻り

「横島さん、緊急事態みたいなの、先ほどのVIPルームに来ていただけるかしら」

横島にそう言った。

「え？何があったんすか？小鳥さんどうしよう？」

「私が相手しておくわ」

温子もそう言いながらも、家人が横に待機していた。

「では横島さん行きましょう」

そう言っつて横島と共に先ほど使用したVIPルームに真夜の家人と共に歩いて行く。

VIPルームに入った真夜は横島をまず座らせてから話を切り出す。

「先ほどの会場の騒ぎは、横浜の中継が切れたからなの、理由は、横浜

に多数の襲撃者が現れ、今も軍が交戦中らしいのだけど、横浜港は一部を除き完全に占拠されたわ……」

「な!?それで、会場はどうなってるんですか!!」

横島は立ち上がり、普段見せない剣幕で真夜に聞いた。

「七草殿の息女から連絡があつて、今のところ大丈夫だそうよ。貴方のお友達たちもね。……あの子たちもいる事だし」

真夜は落ち着いて横島の問いに答え、後半は小声で言う。

もちろん真夜が言う。あの子たちとは達也と深雪の事だ、この時の横島には知りようもないが。

横島は真夜の様子に落ち着きを取り戻しソファーに座りなおす。

「無事……か、襲撃者は何者なんですか?規模は?」

横島がそう言う和家人がスクリーン衛星映像を映し出す。ジャミングされてところどころ画質が悪いが、仕方がない。

横浜国際会議場は無傷の様だが、街のビルなどは煙が出ている箇所が数か所見える。

どうやら町全体に戦闘が飛び火している様子が分かる。

「くっ」

下を向いたまま横島は席を立とうとしたが

「待ちなさい。既に戦闘が始まって30分たっているわ。今から行っても多分間に合わない。その頃には戦闘が終わっているし、軍の大隊が既に向かっているわ。あそこまで行く手段はないでしょう?良かったら、後で自家用ヘリを出してさしあげますわよ」

真夜はそう言つて横島を引き留める。

しかし、横島がコマ送りで更新される衛星映像に映ったものを見て、目を大きくする。

そこには二足で動く不格好な、兵器が数両目に入る。そう直立戦車が写っていたのだ!!

横島は学校で習っていた。直立戦車は機動力が高く、対人用に特化した兵器だ。4月に第一高校を襲ったテロリスト程度がこのようなものを数をそろえられるはずがないのだ。

横島は真夜の引き留めに応じず。VIPルームを出た後、窓から飛

び出し、森の中に身を投げる。

そして、森を走り抜け、山の中を高速移動をしながら額に手をやり唱える。

「我が名は横島忠夫……封印・解・禁!!」

横島の体から膨大な霊気が一気に膨れ上がり、青白い光と共に漏れ出し横島を中心に円を描くように青白い光の柱が形成され、霊気の嵐が吹き荒れる!!

横島はついに現世で封印を解いたのだ!!

そして、さらにスピードを上げ山々を飛び跳ねる様にして一路横浜を目指し進んでいく!!

横島、強敵再び!!横浜事変その3

真由美達と横島の友人一行は、横浜国際会議場に避難してきた一般市民を引き連れ陸路から、町中のシエルターに向かう事にした。

独立魔装大隊からは藤林少尉と後二人の隊員が護衛として同行してくれることになった。

途中で敵歩兵隊と遭遇戦を何度か行つたが、美月による霊視で事前に敵の居場所が特定できるため、深雪や真由美、雫、ほのかの遠距離魔法で悉く先制攻撃で撃退でき、順調に行軍することが出来たのだ。

「あともう少しでシエルターです。皆さん頑張ってください!」

真由美は一般市民に声を掛け、安堵の声が広がった。

その様子を藤林響子は見つ

「さすがですね。真由美さん」

真由美を称賛する。

しかし、角を曲がればシエルターの入口というところまで来たのだが、

「待ってください」

美月は先頭を歩く摩利とレオを呼び止める。

美月は集中し霊気を感じ状況を確認するが少し自信がなさそうだ。

「これ、多分直立戦車だと思えます、その角に2機います」

美月はまだ、生物以外のものに対しての察知は十分にはできないでいた。

今回も近距離で更に人が乗っていた事でようやく判断できたのだ。直立戦車、全高3.5メートルの不格好な二足歩行ロボットの様なシルエットをしている対人用兵器だ。

摩利と真由美は先行して確認。

直立戦車は目的のシエルター群の入口を攻撃していた!!

真由美は深雪と共に、氷結魔法を遠距離から繰り出し、直立戦車を

氷の礫で穴ぼこだらけにし、あっさり撃破。流星は高レベルの魔法師である。

シエルターに到達したものの、肝心のシエルターは直立戦車が攻撃した際に入口が破壊され、入る事が出来なくなっていた。

美月は真由美に状況を説明する。

「この周りの建物に大勢の人が隠れ潜んでいます」

あの直立戦車が来たため、シエルターに入る事が出来ず、周りのビルに隠れていたのだろう。

真由美はそれを聞いて、美月に確認をする。

「柴田さん？周りに敵はいませんか？」

美月ははつきりとした口調で断言した。

「はい、敵意は見られません。隠れ潜んでいる人の中に敵はいません」「凄いですね。その能力は、その目のおかげですか？」

「いえ、それだけじゃないんです。横島さんが鍛えてくれたんです。私の力を伸ばせるようにと」

「よ、横島くんかあ。ここに居てくれたらどんなに心強かったか……」
真由美はまだあの時の事を引きずっている様だが、今だけはそう思わずにいらなかった。

普段はアレだが、有事の際、どれほど横島が頼りになることかと

……

「そうですね」

「よし、そうは言ってもらえないわね」

そして真由美は覚悟を決めたような顔をして、

「皆さん、聞いてください!!歩ける方は、ここから、横浜市街からの退避を行います!!それに耐えられない方々はここに残り、救援を待ちましよう!!私たちが護衛いたします!!」

ビルに隠れている市民と、一緒に行軍してきた市民と生徒達に大きな声で叫ぶように呼び掛けた。

すると周囲のビルのあちらこちらから一般市民が出て真由美の周りに集まって来たのだ。

そして、藤林響子と摩利や花音、その他生徒と何時もの面々に向かつて、

「私はここで待機します。皆さんは歩ける人達を連れて、市外に退避してください。道中は敵に遭遇するかもしれませんが、くれぐれもお願いします」

そう言ったのだ。

それに摩利は噛みつくように真由美に言う。

「真由美!!いくらお前でもひとりでは無理だ!!」

「私は、十師族なの。これは私の義務よ」

そう言うてのけたのだ。

「先輩、私も残るわ」

「ああ、俺もな」

「僕も残ります」

「まだ残っている人が居るかもしれないので私も残ります」

「北山家の輸送へりもここに下ろします」

「私も皆と残ります」

「私も残ります」

エリカを筆頭に、レオ、幹比古、美月、雫、ほのか、深雪は真由美に残る事を宣言した。

「当然私も残るぞ!!お前ひとりだとポカするかもしれないからな」

摩利は真由美に微笑みながらそう言った。

「みんな……わかったわ頑張ります!!」

真由美は皆の意思が固いことが分かり、そう言った。

「藤林少尉、それでは、退避する方々をよろしくお願いします」

真由美は響子に頭を下げる。

「わかりました。やはりあなたは素晴らしい方ですね。健闘を祈ります」

響子は敬礼して、行軍可能な一般市民をまとめ始めた。

「花音、五十里、桐原、壬生……お前達、そっちの方は任せたぞ」
摩利は退避組のメンバーをそう言つて激励する。

「任せて下さい!!」

花音は元気よく返事をする。

「五十里、そいつの暴走はお前が止めてやってくれ」

摩利は花音を見やって笑いながら五十里に言う。

「わかりました。渡辺先輩」

五十里もそう言つて笑顔で返事をした。

退避組は横浜市外へ徒歩で脱出するため出発する。

そして、残ったメンバーは

「まだ、周囲に残った市民がいるかもしれないわね。柴田さん確認とれる?」

真由美は美月に尋ねる。

「いえ、私の知覚の有効範囲はそれほど広くありません。明らかに敵意や殺意があれば、かなり広く確認できますが、隠れている人を精密に感知しようとする半径50m程度です。少し移動できれば何か引つかかるかもしれません。それと生物以外の探知はまだ苦手です……」

美月は今自分が出来る事できない事を真由美に説明する。

「わかったわ、今のところこちらに敵が来る気配もないから、柴田さんと数人で周りを見てきてくれない?」

真由美は美月に残された市民の近隣搜索をお願いした。

「わかりました」

美月は快く了解する。

「じゃあ、深雪さんと摩利は残つて、後は周囲に気を配りながら皆で搜索してくださいね。くれぐれも無理しない様に」

真由美はそう言って深雪以外の一年生メンバーに探索を任せた。

「じゃ行きますか」

エリカがそう言って、司波兄弟以外の何時ものメンバーがそろそろとついて行く。

「美月、凄いわねその能力。たった3週間でそんな事が出来るようになるなんて」

歩きながらエリカは美月に靈視による探査能力について聞いた。

「横島さん、本当に教えるのが上手いのよ。横島さんが言うには、私は現代魔法よりこちらの方が相性がいいみたいなの」

横島が言うには美月は靈能力者寄りの力があるとの事だった。

「私も習おうかしら？」

エリカは軽くそんな事を言う。

「無理無理。お前、ガサツだし、横島だって教えるのきつと大変だぜ」

レオは何時もの様にエリカに軽口を言う。

「何よ!! あんただって、私が教えた奴、なかなか習得できなかったじゃない!!」

エリカもそれに反応して言い返す。もはやこの二人の罵り合いは日常化していた。

「雫はどうなの」

ほのかは雫に横島の修練の結果を聞いた。

「うん、今日戦ってみて、相手の動きが前より良く見えて先読みが出来るようになってたから、大分違う」

雫は手ごたえを感じていた様だ。

「みんな!!七草先輩たちの方に大きな敵意が速いスピードで向かってます。早く戻らないと……これは、まさか!」

美月は大きな敵意を持った靈気を察知し早口で皆に敵の存在を伝える。

そんな美月の警告に皆、臨戦態勢を取りながら、駆け足で真由美達

が居る場所に戻る。幸い、それほど離れていなかったため敵より先に戻れそうだ。

駆け足で戻った一行は迎撃態勢を取り、

エリカが真由美、摩利、深雪に早口で敵襲がある事を伝えた。

「美月がこつちに来る敵をみつけた。一般の人は北側の方に退避して!!」

すると、南側のビルの屋上から、

「あくら、直立戦車がやられたから、見に来たら、ウフフフフツ、あなた達だったの……」

あああー！ー！ー！ん！！マイラブリー彩芽ちゅー！ーわんはどうしたのよん！！会いたいわく！！

でも、あなた達不幸よね。こんなところで私たちに会うなんて、あの憎き横島と、ゴリラ女要はいないみたいだし、見たことない顔もいるみたいだけど、雑魚がいくらいようと変わらないし、ここであつたが100年目って奴よ。華麗な私の魔法を喰らって、まとめて死んじやつてく！！あつ、でもう、雫ちゃんはべ・つ・よ！あなたはわ・た・しと、刺激を与え続けるあつーい夜を毎日楽しみましよう！！

そう言つて、とんでもない変態がクネクネしながら雫に向かって投げキスをする！！

「ななななななによアレ！！」

「ななななななんだアレ！！」

エリカとレオは変態の様子に鳥肌を立たせ、混乱しながらも同時に思わず叫んでしまった。

「なに？そこのニューフェイスは、奇声なんて上げちゃって私の美しさにまいつちやつた？でもダメよあんた達趣味じゃないの！！この醜

い肉だるまどもが!!」

その変態はエリカとレオの反応を見てクネクネしながら言い返す。

「兄貴、やっぱあの抱きしめがいがある、あれ？眼鏡してないけど優しいな子と、あの気弱そうな男もらつていいか？……ん？あの子もいいな、胸の大きくて、かよわそうなお下げの子もついでにもらつていいか？」

その隣でゴツイ体の男が美月、幹比古を見て、相変わらずなことを言う。そして、ほのかを見て、新たなターゲットにしたようだ。

幹比古は身震いし思わず片手で尻の穴を抑える。

「な？なに？なんなのアレ？雫、ねーって？」

ほのかはその両刀使いのマツチヨ変態を見て狼狽する。

「あれは何なんだ!!」

珍しく摩利も狼狽していた。

「うーん、なんかおかしな人達ね」

「はい、何かのサーカスの途中で抜け出したのでしょうか？」

真由美と深雪、お嬢様の世間知らず2人組は若干の違和感を感じたのみだった。

雫は一言で答える。

「フェイ兄弟」

そうあの大亜連合の凄腕工作員フェイ兄弟が華麗に復活して舞い戻ってきたのだ。

そして、さらにパワーアップしている様だった……変態性が……

「あれが大亜連合の凄腕工作員？ただの変態じゃないの？」

エリカは明らかに疑いの目を向けていた。

「何だつてあんなのが!!」

摩利も雫の一言に驚く。

「フェイ兄弟、絶対許さない。そして今回は勝つ!!」
雫は前回の事を思い出し、燃えていた。

美月はそんな雫をおさえ、皆に指示を出す。横島が前回フェイ兄弟とやり合った時の様に。

「雫さん落ち着いて……、吉田君は横島さんにもらった護符で一般の方々に結界を!!雫さん、吉田くんとフェイ兄を、渡辺先輩とエリカちゃんと西城君、フェイ弟、ほのかさんはそのバックアップで、続いてくる戦闘員の対処と一般の方々の護衛と各員のバックアップを七草先輩と深雪さんでお願いします!!」

「うん」

雫と返事をしフェイ兄を見据える。

「わかった」

幹比古は一般市民が集まっている場所に横島からもらった4枚の護符の内の1枚を飛ばし、広範囲の結界を張り、雫の隣に行きフェイ兄の方を見上げる。

「まかせろ」「了解よ」「任せておけ」

摩利とエリカとレオもそう返事をしてフェイ弟を見上げる。

「わかったわ」

ほのかは丁度美月の前辺りで待機した。

「了解したわ」「美月、まかせて」

真由美と深雪も返事をし一般市民の前に立つ。

そして、

「みなさーっ!!行くわよーっ!!と——う!!」
「むん!!」

フェイ兄弟がビルの上から飛び降りてきた。

それに続いて来ていた黒服の戦闘員が8名もワントテンポ遅れて飛び降りてくる。

戦闘開始だ。

そして、一路横浜に高速移動している横島は……

シューウウー……シューウウー……

「くっ、俺の個人的な感情で京都を選んだばかりに………みんな無事でいてくれ」

自身の神にも勝る霊力が現世に与える影響を出来る限り抑えつつ、横島は木々の間を縫う様に風となり進んでいく。

その進む様子はまるで風の精霊のような印象だ。

優雅にもみえるが、山野山林の中で進むスピードは大凡時速400キロ近くは出ていよう。

横島、主役不在で戦闘開始!!横浜事変その4

フェイ兄弟と再び戦闘開始だ!!

「とーーーーーう!!」

「むん!!」

フェイ兄弟がビルから飛び降りてくる。

エリカは国際会議場から退避する際に兄の千葉寿和から渡された大刀、大蛇丸を構え、フェイ弟の着地際を狙って、奇襲、突進し秘剣、山津波（加重系魔法）を発動し大刀を振り下ろす。

フェイ弟はエリカの突進に気付き、魔法を発動させ、落下スピードを鈍らせながら、大きく横に回転し、エリカの斬撃を避ける。

エリカの斬撃に合わせるかのように、ワントンポ遅らせ突進する摩利は、三節刀——三節に分離する小刀——を振るって回避している最中のフェイ弟を薙ぎ斬るが、フェイ弟は空中で防御態勢を取り、その強力な身体強化と硬化魔法の前に阻まれる。

フェイ弟は横回転した遠心力を使いそのまま、摩利へ斜め下から顔にめがけて、蹴りを放つ。

摩利の後に続いていたレオが摩利を強引に引っ張り、フェイ弟と摩利の間に入り、

「ジークフリート!!」防御魔法を発動させ、フェイ弟の蹴りを受け止めた。

一旦3人は、フェイ弟から距離を取ろうとするが、加速するフェイ弟に追いつかれる。

しかし、フェイ弟の眼前に指向性の光が降り注ぎ、一瞬だが視界を奪い動きを鈍らせる。その間に、3人はフェイ弟の間合いから逃れ、距離を取る事が出来た。

ほのかの閃光魔法による援護だった。

「何よあいつ、めちやくちや強いじゃない!!」

エリカはフェイ弟を見据え大刀を構えながら愚痴る。

「エリカ、弱音か?」

摩利もフェイ弟を見据えながらエリカに軽口を叩くが、摩利も強敵を前に一筋の汗が額に流れていた。

「ち、違うわよ!!」

「こりゃきついな」

レオはフェイ弟の蹴りを受け、防御魔法越しに衝撃が走り、腕がしびれている様だ。

一方、雫と幹比古はフェイ兄と15m程距離を取り対峙する。

「フッフッフツ、雫ちゃんが相手してくれるの? また、あの快感を味あわせてくれるのね!! うれしいわ!! でも、先に邪魔者は消さないかね。あつ、吉田君は弟にあげるから死なない様にしてあげるわねん」

フェイ兄は、雫には顔を赤らめ話しかけていたが、邪魔者と言った時、フェイ兄弟の部下の黒服戦闘員を次々と氷結魔法で無効化していく真由美と深雪を見据えていた。

「うるさい!!」

ズビュウー————ン!!

雫は珍しく相手に怒鳴り、いきなりフォノンメーザーをフェイ兄めがけてぶっ放す。

「あらー…こわい! 焦らないの!!」

フェイ兄は腰をくねって、フォノンメーザーを避けた!! タコやイカ等の軟体動物の様だ!!

「北山さん落ち着いて、横島に習った事を思い出して!!」

幹比古は雫をなだめながら、幹比古は札を放ち、フェイ兄に向かって目くらましの霧を生成した。

「うん」

雫は横島の名を聞き、落ち着きを取り戻し返事をする。そして、空気振動による衝撃波を多角的に雨あられの如くフェイ兄に打ち込んでいった。それに続き幹比古も複数の札を投げ入れ雷光による攻撃を叩きこむ。

幹比古が生成した霧は、衝撃波と雷光の攻撃により、散り散りになり晴れたが。

「あーん！前に会った時より断然動きがいいじゃない！！いいわ！！あなたたち！！」

攻撃の的となっていフェイ兄は無傷、周りには護符による結界がすでに張られていたのだ。右手を額にやり、怪しく腰を振り出すフェイ兄。

そして、腰を激しく前後に振りながら左手で指をパチン、パチンと2回鳴らす。

「出でよ！！我が華麗なる鬼たちよ！！牛頭（ゴズ）！！馬頭（メズ）！！」
すると、フェイ兄の斜め前に、術式円陣が現れ二体の鬼が地面からスツと華麗に？現れたのだ！！

右の一体は牛の頭で体は人間、4メートルは在ろうかと言う巨人、マッチョな肉体の上マッスルポーズをとって現れた！！しかも何故だか黒光りしたブーメラランパンツを履いていた！！

「ウーッッッッッ！！」

左のもう一体は馬の頭で体は人間、此方も3メートル半はある巨人だが、肉体はマッチョの上女性の様だ、同じくマッスルポーズをとり出現！！やはり、上下派手なピンクのビキニを着用し、頭に真っ赤なりボンをしていた！！

「ポニーニー！！」

フェイ兄はとんでもないものを生成した。いや、見た目ではなく、その生成した式神はかなりの力を持っている。これだけのものを生成できるフェイ兄は香港をルーツとする高位の導師だったのだ！！前回は油断したのと、勝手に横島の前で大きな隙を作り半分自爆したよ

うな感じであっさりやられてしまったが、今回、油断はない!!

「フッフッフッフツ、私の可愛い子たち、雫ちゃんと吉田君を捕えなさい!!」

フェイ兄はそう言って、トンでも式神を二人にけしかけた。

そう言ってフェイ兄自身は真由美と深雪の方へ向かって行った。

幹比古は、唾然とした顔をしていたが、何とか気を取り直し

「し、式神!!北山さん、術者を倒すと式神も消滅する。式神と対峙した場合は高出力の攻撃で式神が持つサイオンを一気に削り落とすか!!サイオンに直接作用する魔法が有効だ!!」

雫にアドバイスをするが。

「逃がさない!!」

ズビユウーーーーーン!!

雫は既に、短銃型のCADからフォノンメーザーをこの場を去るフェイ兄に向かって放っていた。

しかし、馬頭が真由美達の方に気を向けているフェイ兄の身を挺して盾になり防いだのだがフォノンメーザーを喰らいお腹にぽっかりと穴を開けて、動きを止めた。

しかし、馬頭の腹に開いた穴はしばらくすると一瞬で修復していった。

その修復力に驚きの表情をする雫。

「ん!!」

「北山さんよく見て、今の攻撃であいつのサイオンは随分減ったよ、このまま攻撃し続ければ、式神は消滅する!!今は目の前の敵を何とかしよう」

幹比古は霊視を使って、相手の霊気量をサーチしていた。

そして、トンでも式神たちはそれを皮切りに素早い動きで雫たちに突っ込んできた。

「ウツシューー!!」ポニーーーーーー!!」

真由美と深雪は、一般市民の少し前から、フェイ兄弟の部下たちを魔法で遠距離から狙い撃ちしていた。

真由美も深雪も命中精度が非常に高く、魔法の威力も十分なため、8人いた部下達を次々と撃破していった。

「フェイ兄弟は強いわ。早く援護に行つてあげないとね」

真由美は隣にいる深雪にそう言った。

「はい」

「七草先輩、深雪さん、そちらにフェイ兄が向かっています!!一般市民に近づけさせないでください。人を傀儡にできる程の強力な精神魔法を持っています!!」

美月は大声で、真由美達に警告する。フェイ兄の精神魔法を警戒して、横島の護符を一般市民に使用したのだが、フェイ兄は結界を破る手段も持っているため近づけさせないに越したことが無いのだ。真由美達は少し前にでる。

そして…

「フッフッフッフツ、よくうちの部下を可愛がってくれたわね。コンパクト牛チチ!!あんたが七草の小娘ね。」

そんで、そのの…：…なんかくやしいわね。すました顔していい気にならないで!!絶対私の方が美しいんだから!!司波深雪!!その髪飾り似合っていないわよ!!この冷凍ミカン娘!!」

フェイ兄は凄腕工作員（諜報員）だけあって、二人の事を知っていた様だ。しかし、深雪の美しさについて負けを認めてしまったのが悔しかったようだ。

「コンパクト牛チチ!!うしちち…うしちち…」

悪口など言われたことが無いお嬢様育ちの真由美はショックを受けていた。

「お兄様に頂いた…：…お兄様が深雪の為に選んで頂いた髪飾りが似合っていないですって!!」

深雪は自分への罵りよりも、達也にもらった自慢の髪飾りが似合わないと言われたことに怒り心頭であった。既に怒りでコントロールを失い周りで事象干渉が起り、深雪が立っている周囲の道路が凍り始めた。

深雪は怒りのまま、氷結魔法で無数の氷の礫を生成し、フェイ兄に放つ!!

ズガガガガガガ!!

しかし、フェイ兄はそれを、イカやタコのように体中をクネクネと曲げたり回したりし、全て避けきった!!

「あぶないわね!!」

「深雪さん!!七草先輩!!落ち着いて!!」

美月は冷静さを乱している二人に落ち着くように声を掛けるが、どうも耳に届いていない様だ。

真由美は呆然としていたが、ようやく立ち直り、ドライ・ブリザード（ドライアイスを高速で射出する魔法）で深雪の援護をする。

「魔法師としてサイオン量も演算能力も一級品だけど、中身はお子ちゃまね。本当の華麗な戦い方を見せてあげるわ!!」

真由美と深雪の二人で放ってくる強力な魔法すらもクネクネと避ける。または札で防ぐなどして、回避し続けるフェイ兄はそう言つて、腰をまたもや怪しく振り出す。

深雪はその隙に高難易度魔法ニブルヘイム（領域内冷却魔法：領域を凍結させる魔法）をフェイ兄のいる一帯に放つ。

フェイ兄周囲は、一気に気温が低下し凍結していく。

しかしフェイ兄は全く影響を受けていない様だ。

「ふん、だからお子ちゃまなのよ、司波深雪、あんたが振動減速系魔法が得意だつてことは分かっているのよ、ならば、対策するのは当たり前でしょ?」

そう言つて、フェイ兄の掌にあった一枚の札が、燃え尽きる。

そして、腰の振り方が激しくなり、手を額にやり叫ぶ!!

「可憐に燃え尽きなさい!!火葬結果!!」

上空に術式が現れ、深雪と真由美を炎の柱が囲み、そして、内部で火炎の嵐が吹き荒れた!!

「フッフッフッハハハハハッ、あなた達は跡形もなく燃え尽きるわ!!憎き横島の悔しがる顔が目には浮かぶわ!!」

しかし、そう言つて高笑いをし勝利宣言をするフェイ兄がいる場所に一気に冷気が伝わり、空気が凍り付く。

そして、炎の柱が凍りつき、崩れ落ち、その後ろから深雪と真由美が無傷で現れた。

深雪が炎ごとこの一帯を凍らせたのだ!!

「フッフッフッ思つたよりも、やるわね」

フェイ兄は歪んだ笑顔をしていた。

「深雪さんありがとう」

真由美は深雪にその声を掛ける。

「一気にいきます」

深雪はフェイ兄を睨み付けそう言った。

一方達也は、独立魔装大隊の招集により、新装備を受け取りに行く。それは達也が考案した戦闘服ムーバル・スーツ、耐熱、防弾、緩衝、対BC兵器性能が盛り込まれ、簡易なパワーアシスト機能まで搭載されたものだ。

見た目は、真黒なマリンスーツの様にも見え、ヘルメットは少々儼ついで。

それと、飛行魔法を行使する。飛行デバイスを搭載されたベルトだ。

独立魔装大隊メンバー20名がこれを今から着用し、襲撃者たちを

迎撃に向かうのだった。

横島、恐るべしフェイ兄弟の実力!!横浜事変その5

牛の頭の巨人（但しブーメラパンツマッチョ）牛頭と馬の頭の巨人（但しビキニ雌？マツチヨ）馬頭、二体のトンでも式神が、雫と幹比古にドスドスドスと大きな足音を立てながら突進してきた。

雫は衝撃波の魔法を次々と打ち込むが、二体の式神は怯むことなく前進を止めない。

幹比古はその間、呪詛返し of 術を二体の式神にそれぞれ放ち、式神を使役しているフェイ兄に戻そうと（サイオンの還元）するが、フェイ兄の力の方が勝っているため、術の効力が発揮できなかった。

二体の式神は近づいてくると、猛然とタツクルを仕掛けてくる。雫と幹比古は身体強化と加速魔法を掛け、左右に散り攻撃をかわす。

馬頭は素早く方向転換し雫の方に追いつき、掴みかかろうとした。

「ポニ————イ!!」

雫はその間、横島が雫のために考案し、達也が実現させた魔法を發動させる。

周りにある空気を特定範囲内に限定させ振動を段階的に与える事で、分厚い空気の層を形成させ、雫を囲む様に空気による物理障壁を形成させた。

そして、馬頭の掴みかかろうとした手が、雫が形成した空気の物理障壁に触れる。

触れた馬頭の指先から細かい振動が腕に伝わり、徐々に振動は激しくなり馬頭の体中に回る。そして体中廻った振動は共振反応をおこし強烈な衝撃として馬頭の全身に走り、体の形成を維持できなくなり、サイオン粒子と化して分解したのだった!!

雫の必殺技ともいえる共振破壊の応用だった。共振破壊は相手の共振点を探さなくてはならず、発動まで時間がかかる上、近接に向いていない。ならば、触れた場所から衝撃を与え、相手の内部で共振させてしまおうというのがそもそもの発想であった。

この魔法、細かな調整が苦手な雫でも容易に強弱が調整可能で、軽

い衝撃や気絶させる程度の衝撃を与える事などもできる。

横島が近接戦闘の苦手な雫を守るために考えたものだが、マッドサイエンティスト^也の調整により、対物理防御兼カウンター攻撃が可能な、攻防一体型の強力な魔法へと変貌してしまった。

幹比古は牛頭と対峙する。

「ウツシツシーー!!」

幹比古は元々運動神経も良く、吉田家に伝わる体術も習得しているのだが、自信の無さから近接戦闘をせず、これまで遠距離からの戦闘をメインにしてきてしまっていた。

前回のフェイ兄弟との戦闘以降、思う所があつたのか近接戦、体術についても研磨し、家では門下と実戦さながらの訓練を行うようになる。

そして今、体術の体捌きで、牛頭の掴みかかろうとする攻撃をすべて避けきっていた。

幹比古は横島から習った霊気を見る事にも徐々に慣れてきており、霊気（サイオン）の塊である、この式神の動きが手に取る様に分かつていた。

しかし、札や精霊魔法などを使い少しずつダメージを与えているが、牛頭の霊気を削り落とすには程遠い。

幹比古は、横島同様絡め手を得意とし、必殺技と呼ばれるような、圧倒的な力を持つ術はない。

このような絡め手が効きにくい存在には相性が悪いのだ。

そして、幹比古は横島から渡された札を取り出す。

幹比古は横島から今回何かあつたら使えと、氷室家の最上級の札の護符を4枚、無印札を2枚渡されていた。（実際は横島自身が鍛えた札）

折角の氷室家の最高級札を使いたくはなかったが、そうは言つたられない。取り出した無印札を牛頭に向けて飛ばし、雷光（雷童子）を召喚した。

ズガガガアーーーーー!!!!

ドガーン!!

「へっ・うわっ!!」

札から超巨大な雷が召喚され牛頭に直撃し、その衝撃により半径5メートル程のクレーターがアスファルトに穿たれる。

近くにいた幹比古もその衝撃で足が浮き、後ろに転がって行った。

牛頭は跡形も無く霧散し、サイオン粒子に戻っていく。

「何これ?ひび……氷室の最上級の札って……えっ?えーっ!!」

幹比古は立ち上がりその光景を見て、自分で放っておきながら、その威力に驚きを隠せないでいた。

牛頭、馬頭は雫、幹比古の手で粉碎されたのだった。

そして、二人は、フェイ兄、真由美、深雪の元へ駆けつける。

フェイ兄と対峙していた深雪は、真由美の援護を受けながら戦闘をしていたが、攻撃が悉く避けられるか、防がれるのだった。

深雪自身、こうも自分の魔法が無効化されることが今までなかったため、イラつき始めていた。

「フッフッフッフツ 冷凍ミカン娘の攻撃なんて、効かないわよん!!
甘ーっい、甘々よ!!ミカンにハチミツを掛けて、生クリームを塗りたくるくらい甘いわ!!」

フェイ兄は深雪の攻撃を避けながら、執拗に挑発していた。

「ミカンにハチミツなど非常識です!!」

深雪はまともそんなフェイ兄の挑発に乗っていた。

「深雪さん相手の思うつぼよ、あの人の言葉をまとも聞いてはダメ」
真由美はそう言って深雪をなんとか落ち着かせ様とする。

攻防自体は一進一退で一見、膠着状態に見えなくもないが、精神的にはフェイ兄がこの場で上回っていた。

そこに、トンでも式神を倒した幹比古と雫が駆けつけてくる。

「先輩たち、お待たせしました!!」

「深雪お待たせ」

「フーン……私の華憐なる牛頭馬頭ゴズメズを倒すなんて、やるじゃない。雫ちゃんと吉田君、前は力を出し切っていなかったってわけね?」

2人を見据え感心した様に言う。

真由美は2人が合流した事にホツとし、フエイ兄に降伏勧告をする。

「これで4対1よ、降伏しなさい!!」

「牛子チ娘く、あんたね。数で決着なんてつかないのよ?脳みそまで鈍重な牛になっているのかしら?」

手に平を上へ上げ、首をすくめ、呆れた様に言う。

そして、フエイ兄は指をパチンと鳴らし、

「もういいかしら……五素怨縛結界!!」

唱える。

4人が立っている場所の地面に突如、五芒星を描いた円陣結界が現れ、皆を薄暗い光が包み込んだ!!

そして

「なに……これ……ううううう」

雫は耳を抑え座り込み苦しむ。

「ぐっ……ぐっぐっ」

幹比古は頭に手をやり、片膝を付き呻く。

「ううっ、これくらい……」

深雪は苦しみに耐える顔をしてCADを操作しようとするがまともな指が動かない様だ。

「ああっ……あああああっ!!」

真由美はこの攻撃に耐性がないのか額を両手で押さえ、叫び声をあ

げていた。

「フフフフフフっ、苦しいでしょう？辛いでしょう？これはね。音、触觉、平衡感覚、温度、視覚を不快なレベルで断続的に偏重させるの、魔法師とも言えども所詮人間。この中にはまともな思考も出来ないわ。勝つのは、天才でも、膨大なサイオン量でも、優れた演算能力でもないのよ、フフフフフフ!!ハハハハハハ!!苦痛に歪んだ顔!!いいわ!!あなた達!!」

フェイ兄は苦しんでいる4人を見やり、その顔から狂気を覗かせる。

フェイ兄は、深雪たちの攻撃を避けながら、小石などで五芒星を描く頂点を描き、腰を振り深雪や真由美の攻撃を避けながら足さばきで、術式を追記させ、術を完成させていたのだ。

この術は、結界内の人間の感覚を物理的に変化させる。具体的には音や振動、光、温度、湿度などで五感に不快感を与え、更にそれを断続的に変性させる事で不快度が常に最大になるようにする術だったのだ。一つの感覚だけならば耐えられるかもしれないが、ほぼすべての感覚が最大限に不快と感じるため耐えられるものではない。

魔法師であれば魔法が無効化され、精神もすり減り、体力も奪われ、動けなくなったりとところを捕縛される。下手をすると精神崩壊を起す危険な超高等術だった。

特に真由美はこの手の攻撃に耐性が無いのか、早くも精神崩壊を起こしかねないほど衰弱していた。

幹比古は何とか手を動かし札を取り出そうとする。

精霊魔法師である幹比古は横島の修練もあって、まだ辛うじて動くことが出来ていた。

「いいわ!!吉田君!!あがきなさい!!魔法師は脳で演算するの、こんな状況でまともな術なんて発動できるわけないでしょ、フフフフフツツ!!」

フェイ兄は幹比古が辛うじて動いて何か使用するのを見たが、そう言って捨て置いた。

「ぐぐう……よ……しま、こなくそ……」

幹比古が手にしていたのは氷室製の護符、実際には横島が鍛えた護符だ。幹比古はありったけの霊力を注ぎ込む。

ピカッ!!

そして、護符は周囲に一瞬で閃光をまき散らし、あたりを光で満たした!!

フェイ兄の五素怨縛結界は消滅し!!新たに4人の周りに防御結界が張られた!!

「な!?!……わたしの華麗でグレートな結界が破られるなんて!!何よその護符!!いくら出したらそんなめちやくちやな護符が作れるのよ!!何人の霊力を注いだらそんなものが出るのかしら!?!金持ちのボンボンはこれだから嫌よね!!」

フェイ兄は結界が破られたことで驚愕を顔に出していたが、直ぐに何時もの調子で毒づく。

フェイ弟と対峙している、エリカ、レオ、摩利、そしてその三人を支援しているのはかは、苦戦を強いられていた。

「なんなのよ!!こんなのを氷室の子は一人で倒したの?」

「まだ軽口が出るようなら大丈夫だな」

「でもよ、正直きついぜ」

エリカの軽口に答える摩利、そして、レオ、それぞれ疲弊しており、何か言っていないと心が折れそうなのだ。

フェイ弟は攻撃力も高いが、その防御力が厄介なのだ。とことん固い。対戦車ロケット砲すらも防げる防御力は攻撃手に何をやっても無駄だと絶望を植え付ける。

そして距離を取ろうとすると、突進力と、自ら砕いた瓦礫やコンクリート片が魔法により飛んで襲い掛かってくるのだ。

今のところ、要所要所でほのかに遠距離支援魔法でけん制しているおかげで、フェイ弟の攻撃をまともに喰らわずに済んでいた。

「俺、凶暴な女は嫌いだ。だから、お前ら嫌いだ。でも、その男、意外といい奴かもしれない。凶暴女の尻に敷かれている。だから俺にも尻を貸してくれ」

フェイ弟の訳が分からない変質的な解釈で、どうやらレオはフェイ弟のターゲット入りを果たした様だ。

「あんた良かったじゃない？モテて!!」

「……お前、後で覚えていろよ!!」

レオは身震いしながらもエリカに怒鳴る!!

一方、横島は漸く、京都、横浜間の中間地点まで来ていた。

「……達也、皆を守ってくれ……」

横島、つかの間の間の安堵!!横浜事変その6

独立魔装大隊が擁する達也を含む飛行部隊は2部隊に分かれ敵襲撃者の迎撃に向かう。

達也は侵攻する直立戦車を含む機甲部隊と対峙していた。達也は躊躇なく、分解魔法『雲散霧消』で直立戦車を次々と霧に変えていき、残りのメンバーは随伴する機甲化歩兵をライフル及び魔法で駆逐していく。

中隊規模2部隊による挟撃、集中砲火を受け、大隊のメンバーが傷つくも達也は再成魔法を使い一瞬で元の状態に戻す。まるで、死兵の様に、撃たれても撃たれても、達也の再成魔法で次々と復活していくのだ。

そして、敵兵士に情け容赦なく、分解魔法『雲散霧消』で消滅させていく。

再成により死ぬことは無い兵士。分解により、敵兵士・兵器が次々と音もなく消されていく。達也がいるだけで、一個魔法師団に匹敵するかもしれない。

遠方で、退避組だったはずの花音、五十里、桐原、紗耶香は敵と対峙し傷ついていた。五十里に至っては、致命傷であったが、達也はそれを確認し、降り立ち、致命傷の五十里の重傷を再成魔法で復活させた。

この再成魔法、リスクが無いわけではない、サイオンが切れると使えないのは当たり前なのだが、再成する際、対象者の受けた傷による痛みや苦しみを続けた時間分を一瞬に凝縮してその痛みを味わうのだ。普通の精神ではとても耐えられる代物ではない。

しかし、達也はそれを平然とやってのけていた。まるで痛みなど感じないかのよう……。……。

一方フェイ兄弟との戦闘。

美月は焦っていた。

どう考えても、分が悪いのだ。

フェイ兄と対峙している深雪、真由美、雫、幹比古は一見膠着状態に見えるが、フェイ兄は精神的に優位に立っており、余裕すら感じられた。

フェイ弟と対峙しているエリカ、レオ、摩利、ほのかは、明らかにエリカたちの疲弊が目に見える。均衡が崩れるのも時間の問題であった。

美月は状況を見ることが出来るが、やはり実戦不足のうえ、付け焼刃の知識だ。横島のようにフェイ兄弟を出し抜けるだけの指揮が取れようはずもなかった。

そして、遂に均衡が破られた。

フェイ弟との戦闘で、レオはエリカを庇って、ともに攻撃を喰らい、吹っ飛びビルの壁に激突したのだ。意識はあるようだが、防いだ腕があらぬ方向に曲がっていた。

「レオ!!」

エリカは叫ぶが、その隙にフェイ弟はエリカに迫り一撃を食らわさうとする。

しかし、そこに思わぬ声が掛かった。

「撤退よ!!」

フェイ兄がフェイ弟に大声で撤退の指示を出したのだ。

フェイ弟はそれに反応し、エリカに喰らわせるはずの剛腕を止め、フェイ兄を見る。

「兄貴?」

フェイ弟は明らかに有利に立っており、フェイ兄も特にダメージも喰らっていることもなく、不利な状況にも陥っていない。それどころか、戦闘事態も優位な状況であったはずだ。

なのにこのタイミングで撤退の指示を出したのだ。

「お遊びはおしまよ!!」

「う…分かった」

フェイ弟はしぶしぶそれに従う様だ。

深雪と雫はそんなフェイ兄弟に向かって

「待ちなさい、逃がさないわ」

「まだ」

そんな事を言っていた。

「はあ、本当に何もわかっていないわね。あんた達、このままやり合っていたら、あなた達全員倒れていたわよ、こっちは命令だから撤退するだけだし。命拾いしたわね」

フェイは呆れたような顔をして言う。

フェイ兄にはこの直前に達也達飛行部隊による味方形勢不利の報告と共に撤退命令が出されていたのだ。

美月はホツとする。このままやり合っていたら、フェイ兄の言う通り、間違いなくやられていただろうことは想像できたからだ。

「深雪さん、雫さん、落ち着いて」

「まあ、精々生き残りなさいなく、特に雫ちゃんはね!!」

フェイ兄はそう言っつて、雫に投げキスをし、兄弟とも何人かの部下を担ぎ、加速魔法であつという間にビルの向こう側に消えて行った。

「私たち…助かったの?」

真由美はそう言っつて、肩を撫でおろす。

その隣で、幹比古も疲労困憊な表情だが、ホツとした顔をしていた。

深雪と雫も下を向いていた。

深雪も雫もわかっていた。このまま戦いが継続していれば負けていた事を、そして、今回は運良く助かった事も。

フェイ兄弟と入れ替わる様に達也が上空から現れた。深雪たちの元に空から降り立ち、厳ついヘルメットを取る。

「深雪……大丈夫か」

「ええ、お兄様、フェイ兄弟を逃がしてしまいました。……いえ、お兄様の部隊がこちらに来られたのを察知し撤退したようです。不利だったところを助けていただきありがとうございます」

深雪は俯き加減で、達也にそう言った。

「無事でよかった」

しかし、離れた場所では

「レオ!!しつかり!!」

エリカが重傷を負ったレオを横にさせる。

「痛てて……耳元で怒鳴るなよ。流石に痛いな」

意識はあるようだが、自力で立ち上がる事は出来ないでいた。

深雪はエリカとレオの様子を見てから、達也を見上げ

「……お兄様」

と目配せをする。

達也はそれに頷き。

レオに近づいて行く。

「…よお、達也、なんだその黒づくめな格好は……」

達也に気が付いたレオは痛そうにしながらも達也の戦闘用スーツに突っ込む。

「た、達也くん?」

エリカは達也がレオに手をかざすの見て何をしようとしているのかわからなかった。

すると、レオのあらぬ方向に曲がった腕が元に戻り、傷だらけだった顔がスツカリ綺麗になっていたのだ。

「な?」

「え?」

その様子を見ていたエリカと摩利は驚きの声を上げる。

レオは立ち上がり先ほどまで重傷だった自分の体が元通りになっていた事に驚く。

「何ともないぞう？達也、これはどういうことだ」

達也はそんなレオの疑問に答えず。

「いま、俺たちの部隊が敵を押し返している。制空権も取っている事だ。この戦いももうすぐ終わるだろう」

そう言つて、ここに集まつて来ていた深雪と真由美達やレオの周りにいるエリカ達を見渡し、ヘルメットをかぶり、飛んで戦場に戻つて行つた。

深雪はそんな達也の後ろ姿を見て

「武運を……」

祈つていた。

「深雪……達也くんはレオに何をしたの？」

「そうだ、一瞬で傷が修復したように見えたのだが」

達也が去つた後、エリカと摩利は深雪に達也がレオをどうやって回復させたのかを聞いた。

「再成……兄は、再成魔法を使うBS魔法師です。兄は西城くんに再成を使つたのです。24時間以内であれば、エイドスを読み取り、人だけでなく物質をも再成できるのです」

深雪は躊躇しながらも達也のとてつもない能力について話し始めた。

「それって……物凄い能力なんじゃ」

美月は目を丸くしていた。

「その代わり、再成に魔法演算領域を殆ど使用しているため、通常魔法能力が著しく低下しているのです」

深雪は下向き加減で話を続ける。

「それで、達也くんの能力はアンバランスなのね」

真由美は、達也がすべてにおいて高い能力を有しているが、魔法演算能力だけが劣っている事を指していた。

「でも、そんなスゴイ能力があれば、他の魔法が使えなくても……」

幹比古はそう言った。確かに、分解及び再成能力があれば、大概の事は可能であると言えるのだが……

「何もリスクなしに再成能力が使えるとお思いですか？兄は、西城君が傷ついてからの2、3分の痛みを再成を施す一瞬ですべて受けていたのです」

深雪は自嘲気味に話す。

「……………」

その事実には、場は静まり返る。

「……と、とりあえず、脅威は去ったわ、みんな無事だし、一般市民の方々に被害も出なくてよかった」

しばらくして、真由美はその沈黙を破る様に、皆を見渡しそう言った。

「…………しかしあの兄弟、あそこまで強いとはな」

レオはしみじみとそれと無しに口に出す。

「大亜連合でも名の知れたプロの工作員だ。命があっただけでも、儲けものだ」

摩利は答える。

「なぜ、あのタイミングで撤退したのでしょうか？」

美月はフェイ兄弟が突如撤退したことへの疑問を口にする。

「達也さん達の空飛ぶ部隊が来たからじゃないかな」

それにほのかが何気なしに答えるが、美月はまだ疑問がある様な顔をしていた。

「何にしろ、私たちもまだまだって事ね」

エリカは自分の実力不足を自覚しさらなる向上を誓い、締めくく

「脱出用のへりも、もうそろそろ着くころだわ。戦闘も終息に向かっている様だし、まだ、付近に人が居ないか手分けして確認に行きま

しよう」

真由美のその提案に皆は頷き返事をし、それぞれ分かれて付近を捜索することにした。

既に戦闘の音はこの付近から大分と遠のいていた。

一路横浜に向かっていている横島は横浜状況を大まかに気配で感じていた。

その中でも達也を強く感じる事が出来た。それだけ達也の存在がそれだけ大きいという事だ。

大きな流れとして、戦線を徐々に押し返している様に感じ取り、焦りが和らぐ。

「このまま、戦闘が終了すればいいが……しかし、まだ何かある感じがする」

京都横浜間の道程3分の2を過ぎ、横浜まで大凡120キロまで迫っていた。

その頃横浜港から300キロ離れた海域、深さ200mを航行中の大型潜水艦が浮上を開始し始めていた。

その潜水艦に同乗している大亜連合、チョウ・ユンファ大佐は陰鬱な顔をし愚痴をこぼしていた。

「まだ、開発中の試作兵器の実践投入か、上も無茶を言う。試験結果報告を提出するのが早すぎたか、まあ、極めて実戦的なデータ収集が出来ると思えば気が楽になるがな……」

どうやら彼は兵器開発などを行う技術畑の将校の様だ。

潜水艦の艦長はチョウ大佐に声を掛けた。

「当艦は浮上開始しており、浮上後は作戦第2段階に移行します」

「了解だ。浮上後の他の艦とのリンク及び超高度ドローンの展開状況を確認しろ」

「予定では既に超高度ドローンは偽装艦から予定空域に到達しているはずですが、念のためにこちらからも、展開準備をさせます。艦内データ取り準備は整っております」

「沖繩の敗北からわずか3年で貴君らの努力の甲斐がありここまで来ることが出来た。しかし今からが実戦である。この艦は実験試験艦ではあるが、わが軍の最新鋭の設備と兵器が搭載され、実戦に耐えるものと確信する。では諸君らの健闘に期待する」

チヨウ大佐は、抑揚のない口調で艦内放送で激励の言葉を船員に掛ける。

横島、大亜連合超兵器の恐怖!!横浜事変その7

大亜細亜連合——通称大亜連合は魔法技術において、後進国である。

現代魔法においては日本に比ぶべくもない程であり、世界からも乗り遅れている状態なのである。列強4か国の一角とされているが、その内情は厳しく、他の3か国に比べ劣勢を強いられている。

そんな情勢下であるからこそ魔法先進国である日本の魔法技術体系を喉から出る程欲していたのだ。

現代魔法に後れを取っている原因として、50年前の南北分裂を機に魔法技術のそのほとんどを失わせられることになったからだ。

そこで生まれたのが魔法技術を科学で補おうとした兵器開発局第2分室。

大時代的であろうと思われる。兵器群について一から検証し、それを研究し続けてきたのだ。

彼らの粘り強い努力の結果が今、実ろうとしていた。

その兵器の一つが超電磁砲レベルガンであった。

21世紀初頭にUSNAによる開発研究が進められてきたが、魔法技術の拡大を受けて、開発が中止になったものだ。

それを50年の歳月をかけ、この魔法技術が台頭する時代で実用レベルまでに仕上げてきたのだ。

チヨウ大佐は目標値にはまだ達していないため、実戦投入には否定的であった。

しかし、3年前の沖縄海戦の敗北のきっかけに、日本の脅威に対して、対処が急務となり、この兵器の投入が決定されたのだ。

実用及び実用試作型のレベルガンの砲門は現在3種

100mm砲及び155mm砲は最終到達スピードはある程度実用レベルと言ってよいだろう。

340mm砲については、実戦にまだまだ耐えうるものではなかった。しかし、砲弾の仕組みを変えるなどの工夫で、魔法師の防御をかくぐることが出来るだろう。

100mm砲	有効最大飛距離440km	弾着速度5.8k/
s大凡マツハ17	1分間12発	
155mm砲	有効最大飛距離400km	弾着速度5.1k/
s大凡マツハ15	1分間12発	
340mm砲	有効最大飛距離250km	弾着速度2.6k/
s大凡マツハ7.6	1分間2発	

初速と着弾速度がほぼ変わらないのは古式魔法を応用し、空気抵抗や摩擦熱などを減らす術式を砲弾に刻印しているためだ。

現在の戦争形態を変えかねないといんでもないスピードを擁していた。

一発一発の破壊力はすさまじい。もちろん砲弾の大きさにより破壊力は違うが、発射する力（スピード）により、比較的小型の砲弾でも十分な破壊力を得られる。

近隣諸国には脅威になるうが、大国に挟まれている大亜連合にとって起死回生の兵器であった。

現在横浜に向け、レールガンによる艦砲射撃を仕掛ける試験艦群は4隻。

日本海上にオーストラリア籍の偽装タンカーに340mm砲2門
155mm砲4門 100mm砲4門

横浜湾から南南東230キロ海上に航行。

チヨウ大佐が乗り込んでいる大型試験潜水艦 155mm砲2門
横浜港から300キロ地点に浮上

従来型改良潜水艦 100mm砲2門 横浜湾から300キロ南
東に浮上

従来型改良潜水艦 155mm砲1門 100mm砲1門 横浜
湾から300キロ南西に浮上

チヨウ大佐は、沖縄海戦において、日本が使用した謎の大規模魔法及び陸上戦での沖縄の悪魔についても検証を怠っていなかった。

沖縄の悪魔が分解魔法と再成魔法を駆使していた事は大凡判明していた。

戦艦を轟沈させた大規模魔法はその派生ではないかとも検証していた。

今回は謎の大規模魔法を避けるべく、艦を一か所に固めずお互いの距離を離し艦の生存力を高め、さらに、多角からの目標攻撃により、都市防衛を困難にさせる。

そして……。

チヨウ大佐は最終確認をし、戦闘開始の合図をする。

「それでは砲撃開始だ」

まずは偽装タンカーからレールガン340mm砲を1発放つ。

230キロ離れた距離をマツハ7.6で飛翔する340mm砲弾は約90秒後に横浜に到達する。

そこから着弾時間を合わせる様に、各艦が艦砲射撃を開始する。

その頃達也は、独立魔装大隊、飛行部隊において、撤退する敵に対し掃討戦に移行しようとしていた。

すでに、ほとんどの敵を港に押し込めることに成功し、港で抵抗する敵を掃討し、後は港に停泊する偽装船の制圧をするのみである。

達也に緊急通信が入った。

「謎の飛翔体が南南東から急接近中!!迎撃されたし」

達也は直ぐにその方向に体を向け、シルバーホーンを構える。

超音速で迫る砲弾を確認し、『雨散霧消』を発動しその砲弾を消そうとしたが、それと同時に各方面から、さらにスピードの速い20発近い砲弾が同時に降って来た!!

達也は最初に確認した砲弾を分解させたが、他の砲弾はそのまま横

浜市内に降り注ぐ。

そこから、絶え間なく砲弾が降り注いできたのだ。1分間砲撃が続き、実に大小合わせて172発の砲弾が降り注いだ!!

達也は172発の砲弾そのうちの8発に対応し分解することに成功した。

達也の超人的な反射神経と動体視力、そして魔法による知覚の拡大があるからこそ。超音速の砲弾に対処できたのだろう。

それでも、全砲弾の4パーセントしか防ぐことが出来なかったのだ。

砲撃が終わった後の街は、ビルは砲弾や道路を穴だらけになり、大隊メンバーの数は巻き払いを喰らい生死不明。さらに、先ほど救援のために飛んできたと思われる輸送ヘリと攻撃哨戒ヘリが今の攻撃で撃墜。

地上は言うまでもなく、さながら地獄絵図と化した。

「み……深雪!!」

達也は地獄と化した地上を呆然と見ていたが深雪の安否が心配になる。

しかし、緊急通信で無情な命令が下る。

「大黒特尉至急、戻りたまえ、今のは艦砲射撃だ。沖合約南南東230キロで偽装艦を確認した。サードアイによる戦略級魔法で迎撃を行う」

丁度一分間で艦砲射撃を止める。

これは、艦砲射撃の効果や誤差修正のための初弾でもあるのだが、主には、高度8万メートルから超高度ドローンからこの状況を観測しデータを収拾するためのインターバルだ。

艦砲射撃にしては弾数は少ないが、データを正確に取るには丁度良いのと、レールガンによる破砕力は通常弾に比べ威力はすさまじく高い。

チヨウ大佐は次々と送られるデータを見ながらつぶやく。

「ふむ、味方の偽装船には当たってないな。弾着も誤差10m範囲内上々だな……ん？340mm砲が無効化されたか、もしや分解能力者？沖繩の悪魔か？はたまた、絶対防御の十文字か？何れにしろ、いいデータがとれたはずだ。帰ってじっくり検証するか」

チョウ大佐は初撃から1分間間隔で2射目からは3分間の攻撃1分間のインターバルで艦砲射撃とデータ収集を行う。そして、25分後には退却する予定である。日本側からの迎撃体勢が整う前に退却をするのだ。ミサイル攻撃が飛んできたとしても、タイムロス計算をせずとも、艦に到達するまでに30分はかかる。鈍重な偽装タンカーは最悪自爆させてしまうつもりなのだ。

これで陸軍や政府から回り回った上からの命令である横浜支援攻撃も敢行でき、貴重な実験データもとれるのだ。

そして、レールガンによる艦砲射撃第2射目が始まる。

艦砲射撃を受ける前。

真由美の提案で、シエルター付近で救援のヘリを待つ間。周囲に取り残されたり、ケガなどで動けない人々等が居ないか、再度搜索に向かっていた。

エリカ、レオ、幹比古のチームと深雪、雫、ほのか、美月のチームに、

美月は霊視・霊能で、幹比古は古式魔法で探知が使える二人を中心にメンバーを分け搜索に向かう。

シエルター周りで、一般市民と摩利と共に待機している真由美は、その間、知覚魔法マルチスコープで周囲の状況を確認している最中、ビルの中で隠れ潜んでいる一般市民の一団を見つけたことが出来た。方角的に、搜索チームが向かった先とは別の場所であった。

「摩利、ここから西側100m程でビルで隠れている人たちが居るわ。私が行って呼んでくるから摩利は待っていて」

「分かった、もう戦闘は無いと思うが気を付けることに越したことは

無いぞ」

摩利はそう言つて、真由美を送り出した。

ビルの2階に潜んでいた一般市民20人ほどを発見し、もうすぐ救援が来ることを伝え、ヘリが到着する予定の、シエルター付近まで案内をする。

真由美は一般市民の一团とビルを降り、道に出て角を曲がり、シエルター付近で一般市民が待機している場所が見えてくる。そして摩利を確認し手を振り小走りで向かう。

「摩利〜」

しかし、突如として回りで轟音と共に地響きが伝わって来た。

「なに?」

すると目の前で轟音と共にビルに穴が開き、地面にも穴が穿たれ、土煙や土砂が舞い上がる光景が目に入ってきた!!

一路、横浜に向かっている横島はジレンマを感じながら地表を高速移動をしていた。

早く横浜にたどり着きたいが、ここで、自分が霊力の限りを尽くし全力を出した場合、この世界にどんな影響が出るのか分かったものではない。この世界は横島が無理矢理分離させて出来た世界だ。最終結果を張る事は出来なかったが、現状は非常に安定している状況だという。

そんな世界に横島の霊気が反応し、何かしらの影響が出て、安定性が崩れてしまうかもしれない。それと横島は自分が起こした世界改変（分離）を行ったトラウマとが、頭から離れなかったのだ。

しかし……

突如として大量の人間の死のイメージが横島に流れてきたのだ。
方角は勿論横浜だ。

「何が……」

そして、ほのかと美月のお守りの中の水晶が砕け散った反応を強く感じた!!

皆に渡したお守り、その中に入っている横島が回復術式を付与した水晶の欠片が砕けたのだ!!それはほのかと美月が大きなケガを負った証拠でもあり、最悪のケースもあり得るのだ!!

「くっそっー!!」

横島は強く首を左右に振る。

横島自身から莫大な霊力が吹き荒れる。

そして葛藤やジレンマを全てを振り切るように叫ぶ!!

「超・加速っ!!!!!!」

横島、遅れたヒーロー!!横浜事変その8

横島は、横浜での大量の死と、ほのかと美月のピンチを感じ。全ての思いを振り切つて、靈気を全力解放する。

「超・加速っ!!!」

横島はこの場から一瞬で消えた。

超加速……韋駄天族の奥義、高位の龍神族など一部の神々にも使用可能な加速技。

物理法則などあらゆる法則を無視して、術者を加速状態にする術なのだが、実際には、この時空の時流から自身を一時的に分離する技、世界の法則を一時的に変えてしまう高難易度の術技なのだ。

そんなとんでもない技だけあって、靈気の消費量はすさまじい。長距離や長時間の運用にはまるつきり向いていない。また、スピード、持続時間、持続距離は術技者の靈力、靈気、技量による。

横島の今の状態で最大速を出した場合、大凡秒速14キロというところでもない速さ、今の場所から横浜まで大凡8秒で到達可能なのだ。その代わり、横島の靈力の3分の1以上を消費するだろう。

艦砲射撃による砲撃が真由美がいる地域にも襲い掛かって来た。

轟音と共に周りのビルに穴が開き、地面は抉れ大きな破壊を起こしていく。

真由美は何が破壊を起こしているのかがわからなかった。

魔法による攻撃なのかそれとも、ミサイルまたは爆弾なのか……

実際には砲弾による物理攻撃なのだが、そのスピードは目で捉えきれなかったのだ。

ただ分かっている事はこれが敵による攻撃だという事だけ

真由美は魔法で物理障壁を張りつつ、ここまで一緒に退避してきた一般市民20人ほどの元に戻ろうとするが……

突如真由美の目の前が轟音と共に真っ暗になり、衝撃が真由美を襲う。幸い物理障壁を張っていたため、吹き飛ばされずに済んではいたが、衝撃波と共に破壊された何かが無数に飛んできた。

周囲で先ほどまで鳴り響いていた轟音や破碎音が止み、嘘だったかのように静まり返り、真由美の周りを囲んでいた土煙が晴れて行く。そして、目に映ったのは、先ほどでそこにいた一般市民の姿ではなく、ビルと地面にポツカリ空いた大穴だった。よく見るとそこら中に赤い何かが飛び散っていた。

真由美は最初は何が起きたのか理解できなかったが……

「あ……あ、あぁう……」

それを理解した時その場にへなへたと座り込み、呆然とその様子を見ている事しかできなかった。

「真由美……！！立てっ、上だっ、そこから逃げろ……！！
真由美——！！」

そして後ろから必死に叫ぶ摩利の声が聞こえた……

真由美は呆然としたまま上を向くと、破壊されたビルが倒れてきたのだ。

真由美はもはや力が入らず、その光景をスローモーションのように見る事しかできなかった。

「真由美……！！」

しかし、ビルは真由美を押し潰すことは無かった。

上を見上げる真由美の視界には迫るビルの影と共に、人影が映っていた。

その人影は、うつすらと青白い光を帯びビルを片手で支え立っている。そして、第一高校の男子用制服を着ていた。

その人影は下を向き、目が合う。

「よ……よ……しまくん？」

そして、

「ふん……」

ビルを支えている手を振り上げると、ビルは元の位置に戻り、ズンと音を立て崩れる。

そして、視界が晴れ、その人影の顔がしっかりと見えた。

「真由美さん大丈夫ですか、掴まって」

そこには確かに京都にいるはずの横島がそこにいたのだ!!

ただ、真由美が知っている横島とは雰囲気違っていた。

大人びた雰囲気醸し出し、真由美に手を差し伸べる。

真由美は混乱し声も出ないでいた。なぜここに横島が居るのか、今何をしたのかと……

横島は半ば強引にそんな真由美を抱きかかえ、その場から消え、瞬間移動の様に、摩利の前に一瞬で現れる。

「摩利さん、真由美さんとあの結界の中に居て下さい」

横島は幹比古がフェイ兄弟との戦いの最中に横島の護符で張った結界を指しそう言った。その中にいた一般市民はこの惨憺たる状況でも無傷であった。

摩利も真由美を抱えている横島が突如現れた事に驚いたが……霧の気が違いすぎる。

「よ……よこしま?」

摩利の腕を掴み、結界の中へと一瞬で移動し、結界に手を当てる。

そして、呆然としている摩利をよそに、真由美を地面に下ろし、目の前から消えたのだ。

横島は、真由美のピンチを確認し、倒れるビル全体を巨大なサイキックソーサーで支え、元の場所に押し戻し、圧縮させ崩したのだ。そして、瞬間移動にも見えるスピードで真由美と摩利を結界の中に連れ、結界も強化し、そして、次なる場所へ超加速で移動していった。

艦砲射撃前

深雪、雫、ほのか、美月の搜索チームと、エリカ、レオ、幹比古の

搜索チームは成果の無いまま、広場で合流した。

「深雪、そっちはどうだった？」

エリカから深雪に話しかける。

「こちらには反応が無かった様よ、エリカたちの方は？」

深雪はそう答える。

「こっちも一緒よ、私たちはもうちよっと南の方に行くけど、どうする？」

「私たちももう少しこの辺を搜索しようと思うわ」

「それじゃまた後でね」

エリカはそう言って手を振って別れる。

お互い100m程離れた頃。

悪夢が始まった。

周囲で轟音が鳴り響き、あちこち土煙が上がっているのが見える。

「なんかやばい感じがするな」

レオは周囲を見渡しそう言う。

「取り合えず合流した方がいいよ」

幹比古は深雪たちと合流を提案する。

「そうね。その方がいいわ。行きましょ」

幹比古の提案に同意し、小走りで深雪たちの方へかけようとした瞬間。

大きな轟音と共に地響きが伝わる。広場の真中から土煙が上がっていた。

幹比古は咄嗟に結界を張る。

レオも咄嗟に反応し防御態勢を取り、エリカと幹比古の前に立つ。

その直後上空から無数の何かが猛スピードで突き刺さるスコール

の様に降って来た。

無数に振って来たものは流線型状の金属の弾だ。アスファルトやコンクリートに突き刺さり小さな穴が無数に出来て行き、3秒ほどでその脅威は去った。

幹比古の結果はそれらをすべて弾いていた!!

お陰でエリカ、レオは無傷で済んだ。

そして、近くのビル影に隠れる。

「助かった、幹比古!!」

「ナイス幹!!」

それぞれ幹比古に感謝の言葉を掛ける。

「何となく危険を感じたんだ。でもこれはマズイかもしれない。あのビルにでかい穴を開けた攻撃が直接飛んで来たら防ぎようがない」

幹比古はそれに返事をするが、眉を顰めていた。

スコールの様に降って来た弾丸は、レールガン340mm砲から放たれた、榴弾だった!!

前部ユニットと後部ユニットに分かれ。全部ユニットは徹甲弾の役割、着弾、1〜2キロ手前で後部ユニットが回転しながら分離、小さな流線型の弾が中から無数に飛び出し、あたり一面放に放たれたのだ。その為、前部ユニットとの着弾に時間差が生じていた。

明らかに対人用の広域弾、範囲は大凡直径100m〜300m。無機質に多人数を屠るための弾である。

しかし、深雪たちの方は

深雪は物理障壁を咄嗟に張り難を逃れ、丁度深雪の近くに居た美月も深雪の物理障壁のお陰で難を逃れていた。

雫はオリジナル魔法、まだ名前はないが、フェイ兄の馬頭を破った攻防一体の振動防御魔法を発動させ難を逃れた。この魔法、防御した弾を片っ端から、共振破壊で粉碎していくため、衝撃等を受けることが無いのだ。

しかし、少し離れて歩いてきたのは物理障壁魔法が間に合わず、脇腹に一発喰らったのだ。雫も直ぐにカバーに入ったが間に合わ

なかったのだ。

雫が倒れるほのかを抱き留め、悲壮な表情でほのかに叫び声を掛ける。

「ほのか!!ほのかしっかりして!!ほのか!!」

ほのかはわずかながら薄目を開けていたが、息も荒く、脇腹から地面へ血に濡れて行っていた。

直後、ほのかのポケットで何かがポウと光出し、ほのかの血が止まりだしたのだ。

美月は何が光ったのか霊視で見分かった。

「横島さんのお守りだわ。ほのかさんに霊的術式を送っているみたいなの、きつと回復術」

美月はそう言つて、自分のお守りをほのかの脇腹にかざし、霊気を込めると御守りが光りだした!!

そして、ほのかの荒かった息も落ち着きを取り戻し、ほのかの意識もしっかりしだした。

「わ、わたし?」

雫はほのかをギュツと抱きしめる。

「良かった!!ほのか!!」

深雪も御守りを渡そうとしていたが美月がもう必要が無い事を伝える。

「深雪さん、もうほのかさんは大丈夫みたい」

「よかった。でもここは危ないわ、今は静かだけど、いつまた、あの弾丸や広場のビルに穴をあけた攻撃が来るかわからない」

深雪はホツとした表情をし、皆にそう言つた矢先、また、周囲で轟音が鳴り響きだした。

艦砲射撃2射目が始まったのだ!!

そして、無情にも深雪たちの元に今度は100mm砲弾が多数迫る

!!

雫はほのかを抱きしめながら、そして、再度横島が考案した名前の

ない攻防一体振動魔法を展開する。

今はここにいない男を思い眩きながら……

「横島さん……」

「ぜいやあ!!」

目の前に京都にいるはずのあの男が深雪たちの前に突然現れたのだ!!

まるで瞬間移動してきたように……そう第一高校の制服をたなびかせた横島が!!

横島の気合の叫びと同調した様に右手からレーザービームが放たれ、次々と上空から迫る砲弾を消滅させていく!!

実際には、巨大なハンズ・オブ・グローリー（霊波刀）を伸ばし砲弾を高速で振りぬき切るようにして次々と消滅させていったのだ。

その間横島の周りの空間では、六角形の分厚い半透明の盾が次々と生成され、各方面に飛んで行った。

合計42枚の高出力のサイキック・ソーサーが生成され、各方面に散らばり砲弾を防ごうとしたのだ。

そして340mm榴弾がまたしても分解し無数の弾を降らしてきた。

横島は左手を上に掲げ

「ぜりゃー……!!」

広域に特大の霊波を放った!!その空間は一瞬直径300m程の光が弾けた様に見える!!

そして、榴弾はすべて消滅する。

そして横島淡い青白い光を纏い、その場に浮き上がりながらも攻撃の手を緩めない。右手には巨大なハンズ・オブ・グローリー、左手で霊波と霊弾を次々と放つ、そして、サイキックソーサー42枚による、防御コントロール。横浜に広域に降り注ぐ超高速の砲弾を次々と消滅させていった。

誰が見ても、もはや人間の所業には見えないだろう。

横島の戦いは神魔の領域。これが覚醒した横島、100年前の人類と妖魔との戦いのなかで見せていた本来の戦い方だ。これに今は使えない文珠が加わるのだ。どれだけの敵が来ようが、他を寄せ付けない。

しかし、横島は知っている。どれだけ一人の人間に力があるろうが、人の心を……平和な世界に変えられない事を。

その横島の戦う光景を後ろから見ている友人達4人。

美月はその姿を美しいと思った。

雫は来てくれたことにただただ涙する。

ほのかは雫に抱かれながら、ぼーっとその様子を見ていたが不思議と怖いとは思わなかった。

深雪は目の前に起きている現象に理解が追い付かず啞然としていた。

横島、防御に徹する!!横浜事変その9

達也はレールガンの一射目をしのいだ後、独立魔装大隊からの帰還命令が下っていた。帰還後艦砲射撃を行っている艦に対して、サード・アイによる戦略級魔法マテリアル・バーストでの攻撃準備に取り掛かれとの事だったのだが、深雪の事が心配なため、葛藤しながらも命令を無視し、深雪の元へと向かったのだ。

しかし、深雪の元に行く手前で、二射目の艦砲射撃により阻まれる。達也は迎撃しながらも深雪の元へと急いだのだが、京都にいるはずの横島が深雪たちの前に現れ、とてつもなく巨大な力で次々と砲弾を消滅させていったのだ。達也の目にはその光景はまさに鬼神が大地に降り立ったかのように見えた。

達也も深雪と同様その様子を唾然と見る事しかできなかったのだ。それは恐怖故なのか、極度の驚きのためなのかはわからない。

横島は横浜に降り注ぐレールガンによる超音速の艦砲射撃に対して、右手に巨大なハンズ・オブ・グローリーを振るい近距離を、左手で霊波・霊弾で近中距離の砲弾を次々と消滅、そして、42枚の高出力サイキックソーサーで、横島の攻撃範囲外の砲撃を防御していた、まさに神魔の如し獅子奮迅の応戦をしていた。

しかし、それでもこの横浜全域広範囲にわたって降り注ぐ砲弾を全ては捌ききれず、幾つかの砲弾は地上に降り注いだ。

横島は達也が直ぐそばにいる事を感じ、テレパスで達也に呼びかける。

『達也!!ボケつとするな、手伝え!!……いや、お前、遠距離攻撃でこれを撃ってきている大元を叩けるか?』

達也は急に横島の声が頭に直接響いてきたため驚くが、今の横島の鬼神の様な力に比べればどうってことが無いという思いに至り、先ほどまで、唾然と見ていただけだったのが却って冷静になることが出来た。

「……横島か……可能だ」

『流石だな、そつちは任せる。だったら俺はそれまで、ここを死守するだけの話だ』

「俺を信じるのか？」

『ここまでできて、それかよ。俺が勝手に信じているだけだ。ここには深雪ちゃんも居るしな』

「そうか、横島……深雪を頼む」

そう言つて達也は、先ほどまで居た独立魔装大隊の兵器受け取り場所まで行く。こんなとんでもない状況なのだが、達也は口角が自然と上がり、ニヤついたような顔になっていた。

達也自身はその事に気が付いていないのだが。

『任せておけ』

横島はこの艦砲射撃を厄介に感じていた。横浜という広い地域をそもそも一人でカバーすること自体無茶なのだが、そこは置いておこう。

弾数の問題でない。撃ってくる方角と角度そして、その数種類ある砲弾の超音速スピードだ。それを効率よく、防御が困難なタイミングと場所、必ず同じ場所には同じ砲弾は飛んでこないのだ。これを考えた奴は相当切れる奴だと。過去にもこのような戦術を立ててくる人間とも横島は対峙したことがあった。

横島は、遠見の術で、艦砲射撃元を確認した。

海に展開している4隻の艦……一番近い艦で大凡230キロ、それ以外は300キロと離れていた。

今の横島に打つ手はなかった。

全力での超加速は霊力消費が激しいため、たどり着く前に横島の霊力が切れる。

時間を掛ければ、通常加速、もしくは超加速を抑え気味に使えば、容易く撃破出来るだろうが、その間守りが薄くなってしまふ。此方のこの広大な横浜を守りながらという条件がそれを困難にしていた。

横島には達也の攻撃手段はどのようなものかわからなかったが、達

也が出来ると豪語したのだ。きつと成し遂げるのだらうと横島はその言葉を疑わなかった。艦砲射撃を行っている艦の攻撃は達也に任せることにし、この横浜の防御を厚くすることを念頭に次なる術を展開する。

「四神結界、青龍!!」

横島はそう唱えると同時に、横浜港湾岸200m先で、海が盛り上がり、高さ大凡100m横総長5kmの氷の壁が出来る!!

「……そして玄武!!」

続けざまに唱え。横浜の南側に、地面から土が盛り上がり、高さ大凡100m、横総延長2kmの土と瓦礫でできた巨大な壁が出来たのだ!!

これで、南東、南、南西から飛んでくる砲撃をある程度防ぐことが出来、横島自身の負担は軽減できたのだが、しばらくすると青龍・玄武両結界の上をかいくぐって、砲弾が飛んでくるようになった。

「やはり、厄介な相手だな、ならば、あれをやるしか……」

横島は横浜上空でハンズ・オブ・グローリーと霊波による迎撃の手を休めずにそう言った。

そして、艦砲射撃2射目の3分間が終わる。

大型潜水艦に乗艦しているチョウ大佐は、送られてくるデータを次々と確認していく。

「ほぼ、全て、着弾していない、横浜上空で防がれている……なんだあの光は？新手的レーザー兵器か？榴弾はすべて、あの巨大な光の球にかき消されている。新たな防御魔法？それらはすべて、ある一点から放たれたように見えるな。それ以外にも横浜全域に不可視な防御の痕跡も見える。あらたな防衛兵器か？あの氷と土の壁どうやら、太古の仙人が使用したと言われる四神結界に似ている様だが、あの巨大さはなんだ？日本は太古の術式すらも再現できる技術をもっているか？」

驚きながらも、冷静に判断していくが、四神結界以外、どのように防がれたのかが不明だった。

「しかし、これはこれで興味深いデータだ。3射目以降も継続だ」
そう言つて、レールガンによる艦砲射撃3射目以降の開始続行を宣言した。

横島は艦砲射撃が一時的に収まったのを見計らい、地面に降り立ちそれと同時に周囲に纏っていた淡く青白い光がスツと消える。
すると雫が涙しながら飛びついてきた。

「横島さん!!」

横島は振り向きざまに両手で受け止める、4人の顔をそれぞれ見てから

「ごめん。遅くなった」

美月は祈るように両手を組みそれに答える。

「ううん」

ほのかも地面に座った状態で横島を見上げ嬉しそうにそう言った。

「横島さん来てくれたんですね」

深雪は……

固まったかのようにその場で怯えた目で横島を見ていた。

明らかに恐怖していたのだ!!

大概の人間はそうなるだろう。もはや横島が起こした現象は人間の範疇をはるかに超えているのだ。

達也もすさまじい能力を持っているが、飽く迄も達也は尊敬する兄であり身内だから受け入れることが出来ていただけなのだ。他人である横島の人間とは思えないような力を見て、かつてない恐怖が深雪に降りかかったとしても仕方がない事ではないだろうか。

その反応に横島はこう答えた。

「ごめん、でもこれですべて終わらせるから……」

100年前においても、守るべき相手からもそのような目で見られ

ることは横島にとって日常であった。

横島は雫の両肩をポンと優しく叩いてから、
「たぶんまた攻撃がくる。でも、後は任せて」

そう言つて広場の中央に一飛びする。

比較的近くのビル影でその様子を見ていたエリカ、レオ、幹比古は、深雪たちがいる場所の上空で砲弾を消滅させていた人物が誰かがわからなかったが、ただ、その人物が光を明滅させて、砲弾を次々と消滅させていった事だけは理解できた。

そして、艦砲射撃が収まり、その人物が空中から下りてきて、ようやく横島だと分かったのだ。

「おいおい、まじかよあいつ!!」

レオは単純に横島が助けに来てくれたことに喜んでいた。

「え? よこしま? なんで横島がここに? つて氷室スゴ!! どうやってやるんだ!!」

幹比古は最初は横島がここにいるのを不思議に思っていたのだが、氷室だったらそれぐらいできるんじゃないかという思いに至ったのだ。散々氷室家の人間の非常識な凄さを感じていたため、感覚がかなり麻痺している様だ。

「……なにアレ、なによアレ!! まるで、伝承やおとぎ話にでる武神や魔神じゃない!! 有り得ない!!」

エリカは信じられないものを見たかのような驚愕の表情をし、かなり狼狽していた。

「おい、お前それは酷いんじゃないか? 横島だぜアレってよ」

レオはエリカに『何言つてんだこいつ』みたいな顔をしてそう言った。

「そうだよエリカ、氷室だったらできるんじゃない? しかも横島だよ、武神とか魔神とかマンガやアニメの見過ぎじゃない?」

幹比古はどこかずれていたが、エリカに注意的な何かをしていた。

「あ……あんたたち、こ、こ、怖くないの？だって、ビルを破壊するよ
うな砲弾を消滅させるのよ？動きがほとんど見えないし、手からなん
かビームみたいなのが出てたわよ？」

エリカは逆になんでこの2人が平然としているのかがわからない
様子だった。

「はあ？どう見たって横島だろ!!お前らしくないな」

「うん、横島だね。なんかちよつと大人っぽい感じするけど、横島は横
島」

レオと幹比古はそんなエリカに、当然だろうと言わんばかりに返答
する。

そんなレオと幹比古の様子に、

「……アレは横島、アレは横島、アレは横島……!!ああ!!なんか腹
立ってきた!!なんで私が横島を怖がらないといけないのよ!!アレは
間違いなく横島ね!!」

エリカは目を一度瞑ってなにかブツブツと言だし、しばらくしカツ
と目を見開き、何故か怒りだしたのだ。

ようやく何時ものエリカらしくなり、何か吹っ切れたような表情を
していた。

そして、3人は広場の中央に降り立った横島の元に走って行こうと
したが……

横島を中心に靈気の嵐が吹き荒れ進むことが出来なかった。

広場の中央に降り立った横島はスツと大きく息を吸い込む。

(太い霊脈が通っているここならば……今こそ……)

横島、『救済の女神』の再来!!横浜事変10終結 完

広場の中央に降り立った横島は

(太い霊脈が通っている(こ)ならば……)

「おキヌちゃん、術を借りるよ」

横島は小さく呟く。

横島は一度大きく息を吸ってから、吐き出すと同時に強力な霊力を発し、

指を器用に動かし術式を紡ぎだしていき、一気に複数の術式を展開していく。

さらに、真言や言霊と言われる。言葉による術式を次々と紡ぎだす。

横島の周りには多数の術式が次々と展開していき、繋げ合わせ、または、融合させながら、巨大な術式を完成させていったのだ。

そして……

「我が横島忠夫の名において、霊脈を解放する!!」

そうやって地面を右手の平を押しつける。

横島を中心に地面に青白く光る幾何学模様が円状にどんどん広がっていく。そして大凡半径30キロメートルの巨大な術式が完成したのであった!!

「はあああ!!」

横島の気合の掛け声と共に術式は横島を中心としたドーム状をした特大の結界が完成し横浜近隣一帯を包み込んだのだ!!

そう横島は、絹が50年前に東京で発動させた通称『救済の女神』と呼ばれる術式——一般には戦略級魔法の一つとされている——をさらに防御力を強化した形で再現したので!!

絹の場合、ネクロマンサー(現代でいうと精神系魔法の最上位)としての素養と治療師としての能力があったため、ここまでの術式を展開せずとも発動可能だった。しかも横島が昔生成した文珠3つを使ったため、広大な範囲で発動することが出来たのだ。横島には絹のような素養は無い、しかも現在文珠は使う事が出来ない状態だ。そん

な事も意に返さず自力で一から術式を組み合わせ作り上げたのだ。膨大な数の術式を次々に短時間で作り上げ、接合または融合し、その術式群を器用にコントロールしてのけたのだ!!膨大な知識と技術の研磨と超人的な精神力があったからこそなせる技なのだ。

この結界の能力は敵兵を一気に戦闘不能まで落とすマインドダウン、負傷者の回復、一般市民や味方の精神回復。そして、横島独自に追加したのはサイキック・ソーサーにも勝る防御壁だ。

そして、レールガンによる艦砲射撃3射目が始まったが、全て、この横島の超絶結界に阻まれ、横浜に落ちる事は無かった。

結界範囲内にいたすべての敵兵士や敵作業員、そしてレールガンによる艦砲射撃の巻き添えにならないために、偽装船まで一時撤退していた大亜連合の部隊は、一気に精神状態をマイナスに落とされ攻撃の意思が無くなり、戦意は落ち、さらには、体を動かすことすらままならなくなり、最後には全くの行動不能となるのだった。

この騒乱で横浜各地で負傷した人達は徐々に傷が癒え、混乱や恐怖、不安と言った感情は取り除かれていった。

深雪も例外ではなく、横島に対しての恐怖も一時的ではあるが、今は払拭されていくのであった。

そして、一般市民の中で、50年前絹が発動した『救済の女神』を体験していた人が、ぽつりぽつりと言葉を紡いでいた。

「救済の女神がまた、我々を守ってくれた」と……

そして、それが徐々に伝播していき、横浜の人々は口々にする。

『救済の女神』がまた自分たちを救ったと、そして救済の女神、氷室絹の後継者が現れたと!!

達也は高台で、狙撃銃型の特化型CADサード・アイを受け取る。

無線からは、風間少佐が

「大黒特尉、敵と艦砲射撃を行っている艦は現在砲撃の射線から少な

くとも、4隻あると判断される。現在特定している艦である偽装タンカーは距離は南南西230kmの位置だ。すでに、戦略級魔法マテリアル・バーストの使用許可も受けている。

今作戦は現行のサード・アイ運用において想定外の距離になるが理論上は可能だ。いけるか？」

達也に現状の報告と、最終確認を行った。

「問題ありません」

達也は自信を持って言う。

達也は横島が張つただろう凄まじい結界を感じながらも、サード・アイを受け取りに行き、高台から攻撃準備に入った。

既に、敵は4射目の艦砲射撃に入っていた。

達也は不思議と冷静さと高揚感が一体となった様な感覚に見舞われる。

横島が張つた結界の影響を多分に受けているのかもしれないが……

そして、戦略級魔法マテリアル・バーストを発動するため作成された長距離微細精密照準補助機能を搭載した狙撃銃型の特化型CADサード・アイを南南西に向け、230km先のタンカーに偽装した戦艦級の艦を狙う。

隣にはサポートの為に藤林響子が居る。

「衛星映像、サード・アイ、リンク完了」

「マテリアル・バースト発動」

達也は偽装タンカーに照準を合わせ、そう言ってトリガーを引く。

戦略級魔法『マテリアル・バースト』

質量をエネルギーに分解する究極の分解魔法である。

均一な物資であれば、それを起点にして、質量を分解することによりエネルギーに変換。

その分解する物質の大きさにより、威力が上がっていくのだ。事実

上、地球そのものを破壊する位の威力も出すことが可能なのだ。

射程距離に関しては、専用CADサード・アイに依存する。現状では100km前後を想定して調整されているが、成層圏プラットフォームや衛星などもリンクしているため、理論上ではかなりの射程距離が期待される。

そして、今回、サード・アイの調整不十分ながら230kmという。長距離発動を成功させたのだ!!

分解する起点にしたのは100gの金属、フレームをつなぎ合わせるための大きなボルトだ。その物質の質量を分解し爆発的なスピードでエネルギーに変換していき、破壊のエネルギーが膨れ上がる。

そして、偽装タンカーは凄まじいエネルギーに包まれ跡形もなく消滅したのだ!!

現在世界で正式に確認している。戦略級魔法及びその魔法師は13人、達也は正式に表明されていないため、13人の中に入っていない。その中でも達也のマテリアル・バーストは、発動スピード、破壊規模、射程、どれをとっても、他の追従を許さない。

「敵、偽装タンカー消滅を確認いたしました。成功です。次のターゲットは潜水艦です。一隻の居場所を特定しております。南東300kmです。

サード・アイ及び衛星とのリンクに少々時間を要します」

藤林響子はその状況を衛星で確認し報告する。

そして、次なるターゲットの準備に取り掛かっていた。

その頃、チヨウ大佐は偽装タンカーが消滅した事を確認し、状況を冷静に判断していた。

「うむ、横浜でのレールガンの攻撃は全く、効果を満たさなくなった。50年前の東京……未確認情報ながらすさまじい精神魔法と防御を兼ね備えた戦略級魔法と伝えて聞いている『救済の女神』と酷似している。そして、タンカーの消滅反応は、3年前の沖縄海戦時、巡洋艦

が消滅した時のデータとほぼ一致……

諸君撤退だ。他の艦にも、即時撤退を伝えたまえ」

そして、チョウ大佐は撤退を命じた。

沖縄海戦の巡洋艦の消滅は、各種データと検証から分解魔法ではないかと推測していた。また、沖縄に現れ、分解と再成を駆使して、大亜連合を撤退に追いやった沖縄の悪魔と同一人物と見ていた。

今回、沖縄の悪魔が現れる事を想定した布陣でもある。攻撃目標を超遠距離からの攻撃、そして、互いの艦の距離を大きく取る事だ。

一つ目の超遠距離からの攻撃で、相手の射程外からの超音速で攻撃、反撃されずに目的を果たす予定ではあったが、相手もあの超絶魔法をこの距離で発動出来た事は、見積りが甘かったと素直に受け止める。二つ目の互いの艦の距離を取った事はどうやら正解だったという事が今回の事で分かる。同時に二つ以上の目標は設定できない事がこの事から判明したのだ。

ここまではある程度想定し対策を取っていた。

しかし、最大の誤算は横浜にあの『救済の女神』の使い手が現れた事だ。50年前の使い手であった氷室絹は既に死亡が確認されている。噂の性能の魔法だとすると、彼女一代限りの専用魔法と考えるもおかしくないのだ。まさか、引き継いだものがいたとは想定外である。

しかも、光を明滅させながら、砲弾を確実に消滅させる魔法師、さらに太古の仙術をも使用する魔法師が少なくとも二人、全部で複数、少なくとも4人以上の戦略級に値する魔法師が横浜の防衛をしていると判断したのだ。（実際には横島一人がなしたのだが）

もはや、打つ手なしと判断し、チョウ大佐は早々に撤退の命令を下したのだ。

そして、潜水艦は静かに海の底に潜り撤退していった。

その頃、次のターゲットに向けサード・アイの調整準備が完了した

達也達だったが。

「目標ロスト、撤退しようです」

藤林響子は、そう告げた。

その頃には艦砲射撃も止んでおり、他の艦も撤退したことも確認が取れた。

「ご苦労、このような攻撃を仕組み、さらに撤退も鮮やかなものだ。相手の指揮官は相当な切れ者だ。厄介極まりない。大黒特尉超長距離狙撃、よくぞ成功させてくれた。これが無ければ、相手も撤退しなかったかもしれない……」

風間少佐は無線越しに達也と響子にそう言っていたが、その声にはどこか力が無かった。

風間少佐は無線を切り独り言ちる。

「横浜のあれは、やはり50年前13代目氷室当主が発動した有史以来の最強精神系魔法『救済の女神』か……発動者はやはり……彼か……私は夢でも見ている気分だよ。……彼は本当に……」

風間少佐はその後の言葉を口にださなかった『彼は本当に人間なのだろうか?』と……

そして、あのレールガンの砲撃を悉く消滅させたのも横島なのだろう。もし、横島が国防軍と対峙したら、勝てるのだろうかと瞬時に頭を回すが、とても答えを出す気にはならなかった。

横島は、偽装タンカーが急に凄まじいエネルギーで消滅した事を確認していた。

(……消滅!? 敵兵は……全滅か……にしても予想以上に速い、達也自身横浜から動いていない。遠距離魔法攻撃の類か……タンカーの中心から一瞬達也の霊気を感じたあと、凄まじいエネルギーが……どうやったんだ?)

達也が魔法で何かをした事は理解したが、どういう原理なのかはわからないでいたが、驚いたのは230 km離れていたタンカーをすさま

じい速さで攻撃したことだ。

(あれが達也の切り札か……凄まじいってもんじやないな、あいつ、周りの大人にいいように利用されなきゃいいが……)

そして、次々と潜水艦三隻が海に潜る。こちらに向かってくる殺意や攻撃の意思はもう感じられなかった。結界内にいる敵兵は言うまでもなく行動不能だ。脅威は去ったといっつていいだろう。

横島はホッと息を吐き。

霊気を送り続けていた結界の発動を止める。

「ふう」

そして、横浜全体を探知する。

(かなりの犠牲者が出てしまったな……俺がもうちよつとなんとかできれば……)

横島は自分の右手の平をジツと見る。今はどうやつても生成できなくなってしまった文珠、あれさえあればこんなことにはならなかっただろうと悔いていた。

しかし、老師や小竜姫には散々横島は言われていた。個人で出来ることなど限られている。それを全て背負うとするのは、間違っている……

「また、繰り返すか……」

横島はその場に座り込み、小さな声でやりきれない表情をしながら独り言ちる。

「横島さん!!!」

雫が勢いよく飛びついてきた。

「おっと」

横島は座りながらも両手で受け止める。

「横島さん!!ありがとうございます」

「横島さんやっぱり凄いですね!!」

「ありがとうございます」

そして、美月、ほのか、深雪達は疲れを残しているが笑顔でその後

について来ていた。

横島は深雪の顔をチラツとみる。しかし、先ほどの恐怖を向ける顔は無い。横島が張った『救済の女神』の影響で、恐怖や不安などのマインス感情は打ち消されているのだ。ただ、数日すると術の影響は消える。その間、深雪は横島の力の事を冷静に考える時間がある。突発的とはいえ、横島の人知を超えた力を目の前にし恐怖していた記憶は残るだろう。その後どう判断するかは深雪次第なのだ……

続けて、レオ、幹比古、エリカが駆けつけてきた。

「横島!!お前スゴイな!!まじで今回はやばかったからな。助かった!!」

「横島!!さつきまでの結界つてももしかしなくても……『救済の女神』だよね!!凄まじいってもんじゃないよあれ!!体感できるなんて……生きてて良かった!!」

「横島!!あんたのあれは何なのよ!!流石の私も最初はビビったわよ!!だから説明しなさいよ!!」

レオ、幹比古、エリカは何時もの調子で横島に口早に勢いよく言い寄ってくる。

横島はその様子を見上げ、何時もと変わらず接してくる3人に内心ホツとする。『救済の女神』の影響を受けている可能性も考えたが、そうじゃなさそうだと横島は感じていた。

「たはははははっ、流石に疲れた……今は勘弁してくれ、落ち着いたら話すさ」

そう言つて、屈託ない笑顔を皆に向けていた。

一方、達也は新たな任務でそのまま対馬要塞に向かう事になった。

(深雪を他人に任すなど、以前の俺には考えられない事だな……横島か……)

達也は自嘲したような顔をし、次の任務の為、高速輸送航空機に乗り込む。

そして今日あった事を振り返り。そして、数々の横島の人知を超えた力を思い出し。

(横島、お前は一体何者なんだ?)

そう思いながらも達也は以前の様な敵対心や警戒心といったものは、湧き起らなかった。

京都の四葉真夜は横浜の事態終息と横島が現場にいた事を聞き。

「フフフフフツ、やはり彼は私を救ってくれる存在。あの時見た……」

鏡に向かい、妖艶な笑みを浮かべているのだった。

そして、この横浜事変と言われる。大亜連合による侵略行為は横島と達也の活躍により、撃退し終息した。

横浜に直接乗り込んだ大亜連合の工作員は死亡または捕縛。レールガンを多数搭載したタンカーは消滅。潜水艦3隻は撤退。その後の消息は不明。

横浜の街は半壊し、死者は1万人弱に及んだ。

横島は皆の笑顔を見上げながら自身の今後の事を考えていた。

人知を超えた力を使用したことを、一部の人間には見られていただろう。見ていなくても気が付く者がいるだろう。

たぶん、学校にはいられなくなるだろうと……

ただ、今は友人に囲まれ、皆の笑顔を守れたことに一息付きその心地よい余韻に浸っていたかった。

横島喪失編（前）

103話 横浜事変その後 その1

横浜事変と各メディアに呼称される今回の大亜連合による横浜市の大々的な襲撃事件から5日が経ち、ようやく魔法大学付属第一高校も学校再開の目途が付き、本日から生徒は登校となった。

横浜は、大亜連合による強力な艦砲射撃により街は半壊し復旧のめどはまだ立たない。そして犠牲者は大凡1万人に及び、市民の多くは家族や親しい人、そして住む場所や職場を失い、何かしらの傷を負ったであろう。

横浜事変について、日本だけでなく世界中で注目され、各メディアは連日のように報道を行っている。大亜連合の新兵器や目的についての憶測や、日本の被害状況や防衛能力など……

しかし、この事件にはもう一つ大きな話題が付いて回る。今やそちらの方が日本国民の関心が高いと言っている。『救済の女神』

『救済の女神』再び現れる!!

連日の報道では、究極の戦略級精神魔法と言われている『救済の女神』が発動していなければ、犠牲者は数倍に膨れ上がり、横浜は壊滅していただろう事……、そして、その『救済の女神』の担い手は誰なのか……など、50年前氷室絹が東京で発動した『救済の女神』の記録や映像、当時と今回を体験した人のコメントや、当時との比較など、各局争う様に色々な企画番組を作りメディアに流している。

氷室神社にも多くの報道陣が詰めかけていたが、氷室家からは今の所コメントは一切無い。

午前の1、2時間目は横浜事変について全校集会があった。当時、全国高校生魔法学論文コンペティションに参加するために、第一高校からも多くの生徒が横浜の国際会議場に足を運び、あの事変に巻き込まれてしまったからだ。

あれ程の中、第一高校から犠牲者は出なかったことだけは不幸中の

幸いだった。

3、4時間目は構内の清掃に充てられた。横浜事変の2日後の夜半に富士山が一時的に何の予兆もなく噴火をしたのだ。しかも一時間程度で収まったのだ。それでも、噴火による火山灰は風に乗って各地に散らばり、ここ八王子でもわずかだが薄っすらと積もるぐらい降って来たのだ。

しかも、富士山だけでなく、同じような時間帯で予兆もなく日本各地の山々が噴火し、富士山同様一時間程度で収まったのだ。それは、全くと言っていい程鎮静化し、静かなものらしい。専門家も前代未聞の状況だと言っている。

一部メディアでは、大亜連合の秘密兵器だとか、日本の大々的な魔法実験の失敗などと取り上げられているが、真相は分ならず仕舞い。

そして午後から、ホームルームが各教室で開かれる。

横浜事変から、学校開始までの5日の間に日本列島の謎の火山噴火だけではない。

横浜事件の後、大亜連合高麗地区鎮海軍港が軍艦20隻と共に消滅、その威力は鎮海港湾の地形がクレーター状に大きく抉り取られ、陸だった場所は海になるほど。後に灼熱のハロウィンと呼ばれる事件だ。メディアは日本による何らかの戦略兵器による報復攻撃との見方が主流だが、この事について日本国は正式会見を行っていない。

その翌日には、メディアにも大々的に取り上げられていないが、大亜連合濟州島軍事拠点の一部損壊被害が起きていた。他の事件などに比べると人的被害などが殆ど無かったため、メディアの反応も薄いものだ。ただその際、上空で謎の発光現象があったとかないとか……小隕石や軍事衛星の墜落、日本の報復攻撃の失敗などいろいろと噂されるが、両国から正式な発表は無い。

濟州島は一大軍事都市ではあると同時に観光地でもあり、多くの市民も生活している。そんな市民などからのネット書き込みなどで漏れ聞こえる噂は、信憑性に欠けるような怪奇現象的な物ばかりだった。

そして、その二日後に大亜連合から日本へ停戦宣言がなされたのだ。

この5日間の時系列は……

10月30日横浜事変、大亜連合による横浜攻撃

10月31日大亜連合高麗地区鎮海軍港消滅、日本国による戦略兵器による報復攻撃か？

11月1日大亜連合済州島軍事拠点が一部損壊被害、真相は謎のまま。

11月1日深夜、日本列島で相次いで富士山を含む火山が一時的に噴火。

11月2日大亜連合から停戦宣言が発表される。

「横島の奴、今日学校に来なかつたわね」

「ああ、……そう言えばあいつ、今まで学校サボった事なかつたよな」

「氷室家に呼び戻されているのかも」

「……まあ、こんな報道されてれば有り得るかもね」

エリカ、レオ、美月、幹比古は学校再開の放課後に何時もの喫茶店で集まっていた。

因みに、他の面子は深雪とほのかは生徒会、達也は風紀委員会。零はいそいそと学校を後にしていた。

「横島……また軍に捕まっていたりして」

幹比古は横島が学校に来ない理由として軍が関与しているのではと言う。

「幹比古……それを言うなよ、一番有り得るんだからよ」

「幹は相変わらず空気が読めないわね」

レオとエリカは幹比古にそう突っ込んだが、どうやら二人も同じことを思っていた様だが、あえて口にはしなかつた様だ。

「だったら、達也さんに聞いてみては？」

美月は皆にそう提案する。

横浜事変の際、達也が軍属であることを知る事になったのだが、軍からは口止めはされている。

「それは、気まずいわね。ただでさえ、軍に所属している事は秘密だし……しかも達也くんなんだか元気ないように見えるし……」

「おう、お前もそう思ったのか？ そうなんだよ、達也の奴いつも通り見えるんだが、何となくだがそんな感じがする」

「そうですね。達也さんの霊気の波動が微妙に揺れてました」

「そこまでは思わなかったけど確かに僕もちよつと違和感あったかな」

達也は何時もの通り喜怒哀楽の無い表情やスマートな言動や行動だったのだが、友人連中からは少し元気がないように見えたようだ。

この喫茶店でも連日の報道の様子がモニターに映し出されていた。

「……でよ、横島、スゲー奴だったんだな。テレビとか見て改めて思ったぜ」

「はあ？ あんた本気で言ってるの？ あの横島見て、尋常じゃないことぐらい分かりなさいよ!!」

レオのボケた発言について声を荒げるエリカ。

「でもよ、横島だぜ？ あいつ見ているとスゴイとかいうイメージが無いというか……ああっ!! よくわからんが、横島は横島に見えるんだよ!!」

レオはどうやら、自分でもよくわかっていない様だが、いつも一緒にバカやっている横島のイメージと報道されている第三者的な目線でいう『救済の女神』（報道では横島とはばれていない）とのギャップの激しさを消化しきれていない様だ。

「横島がああ『救済の女神』の後継者だよ!! まあ、知っているのは僕たちだけだし、この感動は誰にも言わないけどね!! でもアレは凄かった!!」

幹比古もその話題になると興奮気味になる。

「…………『救済の女神』はいいわよ…………横島は氷室だし、出来るかも、つて思うじゃない……………そ・れ・よ・り・も！その前のアレの方がとんでもないわよ!!」

エリカがそう言ったのは、報道されていない部分についてだ。

大亜連合の艦船から放たれる艦砲攻撃を次々に迎撃していた事を指している。

実際の目撃者は横島の友人達と一部の軍の人間だけだろうが……………

「うーん、でも、横島さんの『救済の女神』発動も物凄かったけど…………」
美月は他の3人と違い比較的近い位置で横島の一部始終を見ていた。横島が砲弾を迎撃する様子は動きが速すぎて何をやっているのかわかりにくかったのだが、『救済の女神』発動時の横島が多数の術士を瞬時に組上げて行く様子が全てではないが見えていたのだ。

「美月！あれよ!!手からビームみたいのが出てたのよ!!しかも一発じゃないわよ無数によ!!もう何あれ!?映画でみる宇宙大戦の戦艦やロボットアニメみたいじゃない!!」

「エリカ、声大きいよ」

興奮し声が大きくなって行くエリカを幹比古が諫める。

「…………だって、達也くんと深雪も人間離れした魔法師だなんて思っていたけど、横島のアレは人間離れとか魔法師とか言うレベルじゃないわよ。報道でも新型の兵器だとか言ってるマツハ7とかで飛んでくる砲弾を片っ端から迎撃できるのよ?そんなの普通じゃ有り得ない…………一人で小さな国ぐらいだったら滅ぼせるレベルよ!?!」

エリカは声を小声にして、テーブルに体を乗り出し皆に顔を突き出し話す。

「まあ、そりゃそうだけどよ、横島だぜ。そんな事するわけないだろう?」

「そうだよ、横島がその気だったらとつくにそうしているし、もしそんな事になったら、変態の王様誕生だよ」

レオと幹比古がそんな事をするわけないだろうと呆れた目でエリカを見る。

「例えよ、私だって本気でそんな事するとは思ってないわよ……普段のあいつ見ればわかるわよ……そうじゃなくって……人間じゃなくて、何もんなのって?」

「何者ってなー、横島だろ?」

「うん、横島だよ。でエリカが言う何者ってなんなのさ」

「うう……神様とか? 悪魔とか?」

エリカは躊躇しながらも答える。

「お前流石にそれは……プククククク横島が神だ? あんなスケベな神いるか? クククククツ、よしんばスケベな悪魔だぜ」

レオはエリカの言いに笑いを堪えるのに精いっぱいだ。

「私だって自分で言ってる変だって分かっているわよ。でもアレを間近で見ちゃったら、どう表現するのよ」

「……うん、戦っている横島さんの霊気、ものすごく綺麗だった。人間が……あんなに清らかな霊気を纏えるんだって思っちゃいました……もしかしたら私たちをあの中で助けてくれるために使わせた神の使いなのかも?」

「へ? 柴田さんも何言ってるの? 横島、自分で昔は霊気を見る事が出来なかったって言ってたし、なんだかんだと修行をたくさん積んでるような話しぶりだったじゃない。だから、人間離れした修行をしてたんじゃないのかな?」

「……………」

「まあ、横島の奴、その内ひよっこり学校に顔を出すだろ。そんな聞けばいい、あいつも京都に戻る際に話してくれるって言ってたしな」

「そうなんだけど……」

エリカはまだ何かを言いたそうにする。

横島は『救済の女神』を解除し、真由美と摩利に合流した後京都に戻る事を伝え、横島が行った数々の術や『救済の女神』について黙っていてほしいと頭を下げ、時期が来たら話せることは話すと行って、走り去ったのだ。

しかし……横島は学校が再開して一週間経っても学校には現れな
かった。

104話 横浜事変その後 その2

横浜事変からの第一高校授業再開日放課後、真由美と摩利は十文字克人に呼ばれ、普段十師族がらみの密談を行う際、使用している空き教室に来ていた。

「七草、渡辺……率直に聞く、『救済の女神』を発動したのは横島だな」
「横島くんは京都に居たはずよ」

真由美は横浜に居た事を言わないでくれと頭を下げた横島との約束を守るべく十文字にそう返事を返した。

「七草、お前も知っているだろう。横島が京都から消えた事を……そしてあの『救済の女神』だ。それだけではない、俺はそれ以外にも凄まじい防御魔法を目撃した」

十文字自身あの横浜事変の大亜連合からの艦砲射撃を受けていた際、桐原、五十里、花音、紗耶香と合流し、防御魔法フアランクスを発動させ、レールガンの砲撃から4人を守り切っていたのだ。流石は十文字家次期当主と言ったところだろう。

その際、十文字は横島が発動した総延長2kmの瓦礫や土で出来た巨大な防御壁、四神結界玄武を目撃していたのだ。そして、あの『救済の女神』だ。

後日、十文字は父親から横島が横浜事変時に京都から消えた事を聞いている。十師族の主だったメンバーはその事を把握しているハズである。

「ごめんなさい。わたしからは何も言えないわ」

真由美は半ば十文字にはバレているだろう事も分かっていたが、そう言う事しかできなかった。

「うむ、分かった。俺も奴の事を誰かに言うつもりもない……奴は……、引き留めてすまなかった」

十文字は横島を普段から高く評価していたからこそ、その事を確信に近いものと感じ、真由美の言動でそれが確定へと変わった。そして、「奴は何者なんだ？」という疑問を口に出すことをやめ、真由美達に詫びを入れ、教室を出て行った。

十文字が出て行つた空き教室で椅子に座り、真由美は摩利と顔を合わせる

「はあ、摩利、これじゃあ横島くんと約束は守れていないわよね」「仕方がないんじゃないか？十文字は十師族でどうやら当日横島が京都にいなかった事を把握しているようだし、確認したかっただけなのではないのか？」

「うーん、それだけじゃないの、うちのタヌキ親父からも横浜の件と横島くんの事を色々と聞かれて、上手く誘導させられた気がするわ……わざわざ京都から駆けつけてくれて、助けてくれた横島くに申し訳ないわ」

「それにしても、あの場にいた横島が、本当に当校の横島なのかが疑わしく思える。何せあの時の横島の雰囲気は余りにも大人びていた。少なくとも年下には見えなかった」

「……うん」

真由美は若干顔を赤らめながら曖昧な返事をする。

摩利が言うあの時の横島とは、横浜事変の際、ビルの崩落から真由美を救った時の横島を指している。

真由美は真由美で忘れられないでいた「大丈夫ですか」と抱きかかえられ助けられた時に見せた凛々しい横島の顔を……

「しかし、まさか奴が『救済の女神』の後継者だったとはな。しかも真由美を助けた時のあのスピード、いや、瞬間移動なのかもしれん。私には全く見えなかった。ルウ・ガンフウの時でさえ、かなりのスピードだったのだが、あれを優に凌駕していた。さらにあの力だ。ビルを片手で支えていたのだぞ……」

摩利は何故か呆れた様に真由美に話していた。

摩利の常識が根底から覆る様な出来事が立て続けに起きたのだが、しかし何故かそれをおこしたのが横島であればありうるのではと思わずにいられない。今まで、数々のとんでもない行動や時折見せる底知れない力を見ていたからこそではある。もしあの力が横島以外の人間が目の前で振るっていたのだとすると、これほど落ち着いていら

れなかったであろう。

「……そうね。うちのタヌキ親父から聞いた話で京都から横島くんが消えた大凡の時間と、横島くんが私たちの目の前に現れた時間を差し引きして、大凡1時間で横浜に来たことになるわ。あの時交通機関はほぼストップしていたから、自力で来たのだろうけど、京都から横浜まで大凡直線距離で350 km離れているから、加速魔法で走って来たとしても、少なくとも時速350 km以上のスピードを維持していた事になるわ」

「もはや、人間の限界を超えているのではないか？そもそも奴は何なのだ？私はいつがますます分からなくなった。普段のとんでもない事をしでかす奴の姿はあの巨大な力を隠すためのフェイクなのか？……いずれにしろ悪い奴ではない事は確かなのだが……」

「あの力、十師族がそろっていても、彼には太刀打ちできないかもしれない……私も色々と横島くんの事を改めて調べてみたんだけど、何もわからなかったわ。でも、横島くんが力を振るうのは必ず私たちや誰かを守るため、自分の為には使っていないわ」

「そうだな……まあ、軍には目を付けられただろうが、正直言って、あの力があれば軍も容易には手が出せないだろう」

「……摩利、あのね……うちのタヌキ親父、横島くんと一対一で京都で会っていたらしくてどうも彼の事気に入ったらしいの。しかも今回の事で更に拍車がかかって……口ぶりから、どうも、私と横島くんをくっ付けようとしているみたいなの。理由は多分、横島くんの力と氷室家との繋がりを付けたいためだけの話なんだろうけど……」

真由美の父親であり、十師族七草家当主、七草弘一は横浜事変の前から横島を七草家に取り入れようと画策していたのだが、横浜事変に横島が大いに関わった事を考察し導きだしてからは、それに拍車がかかった様だ。

「……真由美はどうなんだ？私は普段の奴ならお断りしたいところだが……」

「あの……横島くんとはその、ルウ・ガンフウの事件からまともに話してないし……年下だし……」

真由美は顔を薄っすらと赤く染め、もじもじとしだした。

「おい、まだ、ルウ・ガンフウの時のお礼も言っていなかったのか？」

摩利は呆れた様に言う。

「……うん。なんだか言い出せなくて……」

「今日、横島は学校を休んでいるらしいから……次はちゃんと喋っておけ」

摩利は真由美が横島に何らかの好意的な感情を抱いている事は知っていたが、どうやらその感情は着実に育っているようだと感じた。

「……うん」

一方、1年A組では、一日中雫は落ち着かない様子だ。

ほのかはその理由を知っていた。

横島と連絡が付かないからだ。横浜事変の後、雫は何度も、横島の携帯端末に連絡をしたのだが、無機質な女性の声で、『電波が届かない場所か電源が入っておりません』と返ってくるのみ。

たまにこういう事があるのだが、横浜事変の次の日から4日続けてこの調子なのだ。しかも今日、学校にすら来ていないのだ。

横浜事変の当日と翌日は、雫とほのかはそれぞれの実家で無事な姿を見せ過ぎしていた。2日後に、ほのかが雫の家を訪ねている。

「ほのか、傷の具合は大丈夫？」

横浜事変の際、ほのかが艦砲射撃による榴弾の一部を脇腹に一発受けた事を指している。

「傷？あの時の……傷痕すらないよ」

横島のお守りの回復術式が発動して、傷を完全に治癒したのだ。

「よかった。横島さんのお守り凄い」

「横島さんのお守りというより……横島さん自身が凄くない？」

「うん、それは知ってる」

「あの時の横島さん。青白く光ってたし、しかもなんだか、大人っぽいよ、かつこよかったよ」

「もともと、かつこいい」

雫は誇らしげに言う。

雫の基準では既に横島は普段からかつこいい認定らしい。

「でも、横島さんのあの術って何なんだろうね？魔法じゃないって本人も前に言っていたけど、手から光線のようなものが沢山出てたし、盾みたいのや、光る爆発とか……横島さん一人で、国の軍事力に匹敵するんじゃないかな、もしかして横島さんって正義の宇宙人？」

「ほのか……それは映画の見過ぎ、凄くても強くてもカツコ良くても横島さんは横島さん」

「ああ、あの横島さんが『救済の女神』の後継者か……やっぱり氷室に帰っちゃうのかな？」

「!!……それは嫌、氷室にはあの子も居る……」

不意のほのかの言動で雫は気が重くなり、同じく横島に思いを寄せているだろう一つ下だが大人っぽい氷室要を思い出す。

雫は携帯端末を取り出し、横島に連絡するが、『電波が届かない場所か電源が入っておりません』と無機質な女性の声で返ってくるのみ。

「電話、つながらない」

雫はシユンとなる。

「横島さんたまにこういう事有るって言っていたよね。この時代で電波が届かないってどんなところかな？地中奥深く？何かの実験所？……やっぱり氷室かな？あそこには強力な結界が張ってあるって言う噂だし、一般の電波は届かないのかも」

たまに横島に連絡がつかないのは実際には、月に1〜2度、妙神山という異界に帰っているからなのだが、雫たちに知る由もない。

そんなほのかの言動で益々焦る雫。

「雫、冗談だって、そんな心配することないよ、直ぐに学校で会えるよ」
ほのかはその時はそんな雫を微笑ましく見ていた。

「うん」

しかし、いざ学校に來ると、横島は学校に來ていないのだ。
雫は、横島が氷室に帰ったままなのではないかと不安で一杯になっ
ていた。

そして、その後1週間、横島は未だに学校に姿を現さない。

105話 横浜事変その後 その3

横浜事変当日、氷室村奥氷室神社

14代目当主氷室恭子、15代目当主氷室蓮の娘、要と彩芽は奥氷室神社の恭子が住まう母屋に集まり横浜事変の速報をTVとネットを確認していた。

「お兄ちゃん、大丈夫だよね……」

彩芽はTVで流れてくる速報を聞き心配そうにする。

TVの情報では現場の映像こそ規制がかかり中継されていないが、アナウンサーや文字放送では横浜では大規模なテロ事件に発展している事が伝えられ、さらに横島が通っている魔法科高校の生徒が横浜国際会議場に取り残されていると報道されていたからだ。

「大丈夫よ。忠夫ちゃんは横浜に行つてないわ、一週間くらい前に自分は京都に行くことになったから土産は何が良いかってわざわざ電話を掛けてくれたもの」

恭子は二人の孫にそう言つて落ち着かせる。

横島は論文コンペの1週間前に恭子の家と蓮の家にそれぞれ電話をし、論文コンペ当日京都に行くことになった事と、11月の3連休には氷室村に帰る事を伝えていた。

当然彩芽も要もその事を知っているのだが……

「おばあちゃん……でも、横島くん電話がつかない……」

要は電話を何度もかけているが繋がらないため、横浜に居ないと分かっているけど心配そうである。

「要ちゃん、彩芽ちゃん、もし忠夫ちゃんが横浜に居たとしても、あの忠夫ちゃんよ、何があつても大丈夫。知っているでしょ？すごく強いんだから、ね」

恭子は片腕を上げ、ガッツポーズを作る様な仕草をし二人の孫に笑顔を見せる。

内心では横島が横浜に向かっているのではないかと思っている。あの優しい横島がクラスメイトのピンチに駆けつけないはずがないと……

TVやネットでは色々情報が出るが、詳しい状況は入ってこない。

しかし、その間、15代目氷室蓮、敦信夫婦は関東地方にいる氷室家の家人や、東京に拠点を置く六道家本家と情報のやり取りをし、情報を集めていた。

六道家は、横浜から近いこともあって、大規模な遠見の術と式神を飛ばし、横浜の状況をかなり正確に把握していた。

直前の情報では、遠距離砲撃のような物が行われ、横浜市街は壊滅状態との情報が入っていたのだ。

「!!」

恭子は急に立ち上がり、急いで奥氷室神社の本殿裏にある道場に行く。

今まで感じた事も無いとてつもない巨大な霊気が横浜の方角で現れた事を感じたのだ。

しかも、恭子は確信している……巨大ではあるが淀みなく澄み切った霊気、どこか懐かしさも感じるその霊気は間違いなく横島のものだと……

道場では、蓮と敦信夫婦以外にも氷室家家人が忙しなく、電話やネットなどを利用して、情報を収集していた。

「お母さん……この巨大な霊気は……」

道場に入ってくる恭子を視界に入れた蓮は、恭子を見据える。

「蓮……」

その蓮の反応に恭子は大きくうなずく。

蓮もこの巨大な霊気が横島の物だと感知したのだ。

そして……

横島の霊気が一気に膨れ上がるのを感じる。

横浜では今まさに『救済の女神』が発動したのだった……

「ああ……忠夫ちゃん、やはり、あなたは……」

翌日

下氷室神社では沢山の報道陣が詰めかけていた。

報道陣に対し氷室家当主として、蓮は一言そうコメントしたのみであった。

「ただ、ただ、遠方より傷ついた方々にお祈りを捧げるばかりです」「救済の女神』の発動及び発動者についてのコメントが欲しい報道陣はそのまま下氷室神社の境内の周りに居座ったままである。

今だに連絡がつかない横島に、要と彩芽は心配ではあるが、学校は普通に授業があるため登校している。

恭子は今朝、六道家当主と画像通信で最終的な情報交換を行っていた。

横浜の被害状況そして、巨大な霊気の主について……

六道家当主は自らの強力な式神で近づけるギリギリの範囲からその様子を一部始終見ていたとの事だった。

第一高校の制服を着た少年が巨大な霊気を纏い、その霊気を自在に操り、敵艦砲射撃を感知できないほどのスピードで次々と迎撃していた事。そして、失われた太古の術式を発動させた事。

そして、『救済の女神』を霊脈を使い発動させた事を……

六道家当主は代々12体の強力な式神を操る事が出来る。それは現代魔法では考えられない様な代物だ。その強大な力もさることながら、その式神は自らの意思を持っているからだ。

そんな式神を擁している当主の話だ。
通常では考えられない事象だが、まず間違いないと判断できるのだ。

恭子は一人、絹の墓の前で祈りをささげている。

恭子はずっと考えていた。

13代目の遺言通りこの氷室神社に現れた横島忠夫という少年。

霊力を自由自在に操り、古文書にも残っていない様な術式をも平然と使いこなすことが出来る。

氷室独自の術式をかの少年は知っていた。しかも、その性質まで知っているかのようにだった。

氷室村を覆っているこの強力な結界は、彼の霊気となぜ同じなのか………

そして今回の件……ついには自分では使いこなすことが出来なかつた『救済の女神』と呼ばれる最高難度の術式。実際には13代目独自の術で名前も無いものであった。

それを、発動させた。

氷室家中興の祖と言われる13代目氷室絹。その在位も長く大凡60年、しかしそれ以前の氷室神社は境内こそ広がったものの、さびれた地方神社と同じであったとも言われている。

それを一代で政府も無視できない程の日本屈指の名家までのしあげた。

本人はそのつもりは無かつたようだが、絹の行いが自然とそうしていったのだ。

その氷室絹は晩年には最後の弟子である恭子によく昔の話をしていた。

特に恋人の話になると顔を赤らめ、恥ずかしそうにしながらも、楽しそうに語ってくれたのだ。

それが横島忠夫であると恭子は確信する。

どうして、当時の絹の前から消え、今、氷室家に若い姿のまま現れたのかは分からない。

もし絹の恋人で、少なくとも同い年で有ったならば、120才である。どう考えてもあり得ない話だ。

さらに、横島忠夫の記録は氷室だけでなくこの日本の何処を探しても一切無いのだ。

他の人が聞いたら誇大妄想だろうと言われるかもしれない。

しかし、そこさえ目を瞑れば、全て辻褄が合うのだ。

そう考えると、この氷室の術式や今の氷室の基盤も、絹と共に横島が作ったものかもしれない。

結界の件や氷室独自の術式を知っていた件もそれで説明がつく。

「忠夫ちゃん……いえ、横島忠夫さんはあなた様の思い人だったのですね」

しかし、当の横島はその後連絡がつかないままであった。

106話 横浜事変その後 その4

横浜事変後、第一高校が再開して既に1週間経過している。

しかし、横島は一向に学校に現れなかった。それどころか連絡すらつかない状況である。

美月の提案で、何時ものメンバーは放課後、横島が住まうマンションに行ってみる事になった。

「……たく、横島の奴どこ行つたのかしら、連絡くらい寄越しなさいよね」

「ホントだぜ。でもよー、達也誘わなくてよかつたのか?」

「風紀委員会とかで達也さん忙しそうだし……それと、なんかこの頃……様子がおかしいですよね」

「確かにそうだね。達也が実技の授業で失敗するなんてこと今まで無かつたし、体育の時間もどこか心ここにあらずって感じだった」

「……うーん」

エリカ、レオ、美月、幹比古は横島が学校に来なくなつたと同時に達也の様子もおかしい事に疑問を持ちながらも、横島が住まうマンションの近くまで来ていた。

「やつぱ、軍で何かあつたのかな、横島が軍に捕まつてるとか……それが僕たちに軍規で話せないから、あんな感じに」

「……うーん、なんか聞きにくいのよね。深雪も達也くんの事心配そうに見つめているし」

「でもよー、ちよろつと話してもいいんじゃないか?達也の奴」

実はレオは既にそんな静止も聞かずに、3日前に堂々と達也に聞いていたのだが、本人は知らない趣旨の話をしていたのだ。その話しぶりはどうもレオには引つかかつていた。

「達也さん本当に知らないのかもしれないかもしれませんよ」

そして一行は横島の住まうマンションの前まで来る。

「……だよ」

「へー、古そうだけど意外とまともなところに住んでるじゃない」
「そう言えば、俺は初めて来るな。柴田と幹比古は何回か来たことがあったよな」

エリカとレオは横島のマンションに来るのは初めての様だ。

「はい、3回ほど吉田君といっしょに、霊力について聞きたかったので……」

「はあ、私も横島に習おうかなー、美月なんて凄い成長してるし。今は本人いないけどね」

エリカはそう言いながらエレベーターのボタンを押す。

エレベーターから降り、美月を先頭に横島の部屋の方へ向かうと部屋の前に見知った顔の人物が俯き加減で座り込んでいた。

「雫……あんた何やってるのよ」

「……横島さんを待ってる」

雫は座ったまま顔を上げ無表情でそう答えるが、どこか寂しそうだ。

「雫さんもしかして……授業終わって直ぐに帰るのはここに来るために？」

「……うん」

雫は毎日放課後ここに通って、こうして横島の部屋の扉の前に座り込んでいたのだ。

「横島やっぱり帰ってないのか？」

そんな雫にレオはぶっきら棒に聞く。

「……うん」

「あいつ、ホントどこ行ったのよ!!みんな心配しているのに!!」

エリカはそんな雫を見て、ここに居ない横島に憤る。

「あれ? 忠夫ちゃんのお友達かな?」

「あら、あなた達……」

「あ、眼鏡のお姉ちゃんと小さなお姉ちゃんだ、ひさしぶり」

「あつ……」

雫はその声に反応し、現れた40〜50代の女性と見知った顔の二人の少女の顔を見る。

「誰？」

レオとエリカは全く知らない顔である。

「久しぶり」

幹比古は気軽に挨拶を二人の少女にする。

「あつ、こんにちは、要さんに彩芽ちゃんお久しぶりですね……………!!!? ……まま？」

美月も二人の少女、氷室要と彩芽に挨拶をするが……………二人の前に居る女性を見て急に驚いた顔をして固まっている。

「その様子だと、横島くんは居ないみたいね」

要はそこにいた第一高校の制服を着ている横島の友人達を見てそう言った。

「こんなところでなんだから、部屋に入りましょ」

40〜50代の女性にはこやかな笑顔でそう言っつて横島の部屋のカギを開け、扉を開き部屋の中に入るように促す。

全員部屋に入ったところで、その40〜50代の女性は少し考えるそぶりをしながら

「氷室恭子です。忠夫ちゃんの……………うーん……………お母さん？おばあちゃんかな？をやってま〜す」

茶目っ気一杯の自己紹介をする。

その自己紹介を聞き当然の如く。

「え……………!!氷室家14代目当主っ!!きき、救済の女神、最後の直弟子!!」

幹比古はまたしても叫ぶ。本人の目の前で失礼極まりない。

「幹うるさいー!」

「ままさ、まさか……………きよきよっ恭子様!!」

美月は既に気絶寸前だ!

顔を見た時からわかつていたのだが、改めて憧れの氷室家当主が目の前で自己紹介をしているのだ、こうなつて当然だろう。

「おお!?!おい、大丈夫かよ」

今にも倒れそうな勢いの美月の背中を手の平で支えるレオ。

「相変わらずねあなた達、始めての人もいるみたいだから自己紹介するわ……氷室要、14代目の孫になるわ」

要は呆れた顔をそんな二人に向け、初顔のレオとエリカに自己紹介をする。

「私も孫の彩芽でーすー!」

それに続いて、要の隣で元気よく彩芽も自己紹介。

何時ものメンバーもそれに習って自己紹介を始める。

「俺は横島……横島くん?の友達で西城レオンハルト……この子がフエイ弟を一人で倒したのかよ」

レオは横島をくん付けにするのにかなり違和感を持ったようだが何とか自己紹介をするも、要の挨拶を聞いて、まじまじとその立ち振る舞いを見て感心した様にそう言った。

「私も同じく横島くんのクラスメイトで、千葉エリカです」

エリカはネコを被りきちんとした自己紹介をする。

「……北山雫です」

雫は元気なく自己紹介をする。

「吉田幹比古です!!お会いできて光栄です!!」

幹比古は興奮したまんま自己紹介をする。前よりは随分ましな対応だ。

「あ、あのあの、私、横島さんの友人で柴田美月です……あのその」

美月は何とか気絶を免れ、気力を振り絞って、恭子に挨拶をし、何か手を出して握手を求めた。

すると恭子はその手を笑顔と共に握り返した。

「!?きゆうううう〜」

「あら、あら、大丈夫?」

その様子に流石に心配する恭子。

美月は恭子の握手に悶えながら、意味不明な言葉を吐きその場でノックアウト。レオが倒れそうになった美月を支え、恭子とエリカが

リビングとなつている部屋の絨毯の上に取り合えず寝かせる。

「あの……横島さんはその後、氷室家に帰っていないの……ですか？」

雫は自己紹介が終わったと見て、恭子をじっと見据え、恐る恐るそう質問した。

先ほど、横島の部屋の前での要の言動と、ここに氷室の重鎮が来た事から、横島が氷室にも帰っていないのではないかと思つたのだ。

「そうなの、忠夫ちゃんは元々そんなに頻繁に連絡をする人じゃないのだけど、あんなことがあつたし、連絡してもつながらないし、学校に行っても居ないみたいだったから、私は大丈夫つて言つただけど、家のみんなが心配してね。それでこの子たちと様子を見に来たのよ。……どこに行つたのかしらね〜こんなみんな心配しているのに〜」

「そう……そうですか」

雫は俯き眉を顰める。

「私たち、横浜のあの襲撃に巻き込まれて、その時まで一緒に居たんです」

「ああ、俺たちは横島が来てくれたおかげで助かつたんだ。あいつわざわざ横浜まで助けに来てくれたんだが……」

エリカとレオは横浜のあの事件の時には横島と一緒に居た事を伝える。

「あなた達、横浜で……やっぱり横浜に居たんだ横島くん。その後はどうしたのかしら？」

要は『救済の女神』発動は横島が行つた術式だと知り、横浜に居たのだと理解したが、それでも半信半疑であつた。

「京都に戻る……そう言つて別れてから連絡が……つかない」

雫はそう言つて涙ぐんでいた。

「お兄ちゃん……どこに行つたのかな〜」

それにつられて彩芽も俯き涙をこらえる。

「大丈夫!!君たち、忠夫ちゃんと横浜にいたんでしょ?それだったら、忠夫ちゃんの強さが分かるよね?まあ、そのうちにひよっこり帰つて

くるわ〜」

恭子はそんな暗い雰囲気を払拭すべく元気よくそう言った。

「うーん、でも、横島、いえ、横島くん、軍に目を付けられてるみたいだし、何らかの理由で監禁されているのかもしれない。以前もそんな事有ったし」

幹比古は横島が戻っていない理由を自分なりに推測し簡単に説明する。

「そうなの？」

恭子にとつてそれは初耳であった。

「それはあり得るかもしれませんが」

「有り得るな」

猫をかぶったままのエリカとレオも幹比古と同じ意見だった。

「監禁?!横島くんを!!」

どうやから要は怒りがふつふつと沸いている様だ。

「忠夫ちゃんここにも帰ってないみたいだし……あんまり本人居ないのに長居しちゃうのも悪いから、どこか休憩できるところでお話ししましょ」

恭子は一通り横島の部屋を見回り、皆にそう言つて、一同部屋を後にする。

勿論、ダウンしている美月を起こし連れ出すのだが、美月のテンションはおかしい状態が当分続く。

この後、恭子達と横島の友人達は、近くの喫茶店で横島が行きそうな場所や姿を消した直前の状況を詳しく検証し話し合いをしたのだが、結局、横島がどこに消えたのか結論は出なかった。

恭子は横島の友人達に氷室の連絡先を教え、何かわかったら知らせてくれるようお願いし、その場は解散しそれぞれ帰路につく。

ただ、横島の友人達は漠然と軍（防衛軍）が関わっているのではと疑っている事が気になり、恭子もその線で横島の行方を捜すことになるのだが……

恭子達はこの後、九重八雲に会うために九重寺へ、そして、六道家本家に向かい横浜事変の件と横島の行方について聞くために訪ねる

の
だ
っ
た。
。

107話 真実が語られます。

九島烈は横浜事変当日から翌日に掛けて、流れてくるさまじな現場情報から、横島が横浜に向かい、『救済の女神』を発動させ、事態を終息へと導いたという結論に至った。

そこからは動きが早く、家人や伝手を最大限に使い横島が横浜事変に関わった事、さらには横島が『救済の女神』である事を表沙汰にならない様、全力で情報操作を行ったのだ。

九島烈は横島の性格上、表沙汰になる事を嫌うと判断し、横島に借しを作るべく先んじて動きだす。

『救済の女神』の使い手である横島の価値は最大限まで上昇した。今までは、氷室家の古式魔法、治癒魔法の使い手という狭い範囲での価値（それでも十師族が喉から出る程の価値はある）であったが、横島一人で国防の切り札として国家の勝敗をも左右する戦略級の価値が出てきたのだ。

『救済の女神』はここ50年で戦略魔法として認識されている魔法の中で、防御に特化した唯一の魔法。その性能はただ単なる防御だけでなく、精神系魔法、治癒魔法までも同時に発動され、その影響範囲は規格外の広さを誇り、戦線の劣勢を一気に、覆す事が出来る。

現に、50年前の東京襲撃は、最早首都が制圧され、敗北寸前であった日本は、軍事的な巻き返しが出来ただけでなく。攻め込んだ敵兵を無傷で全員無力化捕虜にすることにより、戦後処理の捕虜の解放条件などにより政治的交渉もかなり優位に進める事が出来たのだ。

横島との友好関係は継続し、繋がりを強固にする事は、九島家総出で事に当たってもそれだけの見返りと価値は十分にあるのだ。

しかし、肝心の横島から一向に連絡がこない。九島烈の見込みでは、2〜3日中には、横島から連絡が入り、情報操作や軍との仲介役などの相談をしてくるものだと思っていたのだが、横浜事変から3日たった後、しびれを切らして九島烈は自ら横島に連絡を入れたのだ。しかし電話も通ず、連絡がつかないのだ。

その後色々調べたが、学校にすら出ていない事が分かり、横島は何らかのトラブルに既に巻き込まれているのではと判断しなければならなかった。

九島烈は軍内部にも探りを入れる。横島がただ単に捕まるはずはないが、何か脅され、拘束若しくは軟禁されている可能性を視野に入れての事だ。

軍の内部の動きを探っているが、横島と接触、監禁しているなどの情報は皆無であった。しかし、意外なところから、横島の足跡を見つける事が出来たのだ。

九島烈はその真相を糺すべく、幕僚本部からの命令を実行に移したその部隊長風間玄信少佐の元に訪れる。

そして、そこで知った事実に関九島烈は大いに悔やむことになる。

「……時既に……遅し……」

国防陸軍第101旅団(達也が所属している独立魔装大隊はこの旅団の中樞を担っている)、旅団長佐伯広海少将は、珍しい人物から訪問を受けていた。そして本日予定していたスケジュールをすべてキャンセルし、その人物に会う事にしたのだ。

「これはこれは、氷室家14代当主がこのようなところに来られるとは……私の要請にはさんざ袖にきてきたいのに、どういう風の吹き回しですか？」

佐伯少将は訪問してきた氷室恭子を司令官室に通し、秘書官を退出させ、応接ブースで一对一で話し合う様相で、ソファに腰掛けると同時に皮肉じみた挨拶をする。

佐伯少将は自ら氷室家に対し、101旅団に協力するよう再三にわたり要請したのだが、14代当主氷室恭子はすべて即答で断ってきたのだ。

「無沙汰しております。佐伯さん」

そんな佐伯少将の皮肉など、気にも留めず普通に挨拶をする恭子。因みに恭子と佐伯少将は年は同じで、物腰は柔らかかそうな同じよう

なタイプの女性である。

恭子は軍が横島の失踪に関与しているのではないかと、面識のある佐伯少将に直接面会を求めたのだ。

「それで、どのようなご用件ですか？とお聞きしたいところですが、あなたが来たという事は……もう隠しとおせませんか」

「という事は、私がここに来た用向きはお判りという事ですね。……では、率直にお尋ねします。私どもの家人……いえ、家族である横島忠夫は何処にいるのでしょうか？」

「……私共も正確には答えられません。というよりも答えようがありません。経緯の説明と、まずはこの映像を確認願います」

佐伯少将はそう言って、応接セットのテーブルの上に映像を浮かび上がらせた。

恭子は佐伯少将の説明を聞きながら、映像を最後まで表情を変えず微動だにせず確認する。

「……………この映像が彼であれば、もう彼はこの世には……、本来此方からお知らせすべきなのですが、此方も確認作業やら、例の案件で人手が足りない状態なのです……………」

「機密情報を私のような一般人にお教えいただきありがとうございます」

恭子は映像確認し、その人物は横島だと認識したのだが、佐伯少将のその言葉を聞いた後で、恭子は先に頭を下げたのだ。

「なぜ……………あなたはよく冷静でいられますね。私どもに抗議などをしていないのですか？」

その恭子の対応に佐伯少将は訝し気に顔を覗く。

「……………事情は分かりました。あなた方の行為には賛同しかねますが、あなた方に非は無いようです。……………それと、何を勘違いしているのかは分かりませんが……彼がこれしきの事で倒れるはずがありません」

「……………そう思われたいのも分かりますが……………国家としても大きな痛み手なのです。『救済の女神』の使い手の損耗は、まあ、それ以上に彼の行動は我々にとっては厄介極まりないですが……………今回の事で、最悪の

事態は防げ、考えうる事態の終息の仕方の中で、2番目に良い結果となっておりません。意図をせずとは思いますが、日本及びその周辺諸国における軍事的緊張は、彼の犠牲のお陰で、しばらくは均衡を保つことが出来ます」

佐伯少将が言及している日本及び周辺諸国の均衡が保たれると言う話は大亜連合の停戦宣言の事を指している。これが無ければ、大亜連合との大々的な戦争状態、さらには、新ソビエトの介入など泥沼化することも懸念されていたのだ。

「何度も言いますが、彼は必ずやどこかで生きております。今回の事は彼なりに考えてやった事で、犠牲などとは思っていないはずです」
恭子はそう断言する。13代目が語った思い人の彼であれば必ず生きていると……

「……そうですか、恭子さんが、氷室家がそれで納得していただけるならかまいません。一応、此方でも情報収集は行っております。彼の事で何か分かりましたら、そちらにお知らせします」

佐伯少将はそう言って恭子との話し合いを締めくくった。

遡る事、11月1日横浜事変から2日後、深雪はこの日も広い自宅で一人、達也の無事を祈りつつ帰りを待っていた。

横浜事変の後、達也はそのまま軍の命令で次々と任務に就き、それ以来顔を合わせる事も声を聴くことも出来ていなかった。

深雪はこの二日間で唯一会話をしたのは四葉家当主、四葉真夜が深雪の無事を確認するために連絡をした時のみだった。

深雪は一人考えていた。

あの日の横島の事だ。

次々と超音速の砲弾を迎撃する横島の様子に、とても人間のなせる業には見えず。ただただ圧倒的な力に恐怖していた事を思い出す。

あの力は何だったのだろうか？横島は何者なのだろうか？なぜあの時恐怖したのだろうか？普段の横島は、恐怖の対象でも何でも無い。兄が気を許せる友人の一人として認識していた。

そんな思いがくるくると頭を廻るが答えは一向に出ない。

この場に居ない達也に早く帰ってきてほしいと祈るばかりであった。

兄の元気な姿を見て、思いつきり甘えたい、そして兄にこの答えの出ない悩みを早く聞いてもらいたいと……

この日も達也は帰ってこなかった。深雪は自室のベットに入り眠りに着こうとするがなかなか寝つけず、しとしとと降る雨の音が耳に入ってくる。

日本各地で起こった火山噴火の影響で日本列島は夜半から雨が降り出していた。

深雪は喉の渴きを覚え、キッチンに向かい、真つ暗のリビングの横を通り過ぎようとしたのだが……

「お、お兄様？……いつお帰りに？」

真つ暗なりびングのソファアに達也が前かがみ気味に手を組み、座っていたのだ。

深雪は慌ててリビングに明かりをつけ、達也の元に駆け付ける。

「帰られたのなら、深雪に声を掛けて下さい」

「そこでようやく達也は深雪に気がついたように」

「……深雪」

顔だけを深雪に向ける。

深雪は達也に近づくが、様子がおかしい。達也は全身ずぶ濡れで、雨に晒されて帰って来たの様なのだ……それだけでなく、全体的に影を落としたような雰囲気を出していた。

「お兄様、暖房もつけず、濡れた衣服のままでは体が冷えます」

「ああ」

そんな達也に深雪は中腰になり正面から達也の手を取ると氷の様

に冷えきっていた。

「お兄様、こんなに冷たくなってどうなされたのですか？今タオルをお持ちします。お風呂も入れますので、入ってください」

「ああ、すまない」

深雪はパタパタと急ぎ足でタオルを取りに行き、達也の上着を脱がし、顔や頭を拭くが、達也は一切抵抗せず深雪のなすがままとなっていた。

「お兄様……その、お仕事でなにかあったのですか？」

そんな明らかに様子がおかしい達也をタオルで拭き、躊躇しながらも質問をする。

座ったまま、深雪に拭かれるがままになっている達也は

「……俺はどうしたら良いのかわからなくなった」

ぽつりと小声でそう言ったのだ。

「お兄様……お仕事おやめになっては、深雪の為にそんなお辛いお姿になるのでしたら、深雪はそのような事を望みません」

深雪は、無表情の中ではあるがこんなに辛そうにしている達也を見るのは初めてだったのだ。

「深雪……俺は」

達也はタオルで達也の顔を拭く深雪を見上げるが、目には力が無い。

そして……何時もの威厳に満ちた声色は無く、苦しみを絞り出すかのように、擦れた声が漏れる。

「俺は……横島を……討ってしまった……」

108話 横島倒れる

横浜事変直後の10月31日、達也は日本国防陸軍第101旅団、独立魔装大隊、大黒竜也准尉として、次の任務を与えられ、日本国、北西の軍事拠点、対馬要塞で、大亜連合高麗地区の軍事拠点、鎮海軍港へのマテリアル・バーストによる破壊攻撃を実行したのだ。

鎮海軍港では、日本への攻撃を行うべく、高麗地区各地から軍艦が続々と集結しだし、明日未明にも出港すると国防軍はみていた。

国防軍は対応が遅れ、このままだと幾つかの都市は占領下におかれる可能性が高いため、幕僚本部は戦略級魔法師大黒竜也准尉による拠点直接攻撃を敢行したのだ。

達也が放ったマテリアル・バーストの威力は凄まじく、鎮海軍港は壊滅、軍港中心には大きなクレーター穿たれ、地形そのものが大きく変わってしまった。集結していた軍艦20隻を巻き込み消滅。完全に相手の出端をくじいたのだった。

これが後ほどメディアから灼熱のハロウィンと言われる軍事における魔法師の意義が大きく問われたれた事件でもあった。

日本政府はこれにより、停戦交渉のテーブルに着くことを望むが、大亜連合高麗地区は、対日本、新ソビエト軍事拠点濟州島のミサイル発射施設群などを日本に向け発射体勢を整え、最新兵器であるレールガンのような物を地表に設置し、攻撃態勢の準備が進めていた。またその他各軍事拠点でも、軍が集結しつつあったのだ。

幕僚本部は即、濟州島への戦略級魔法の行使を決断。

独立魔法大隊へ通達。

達也はその準備に入った。

破壊規模は濟州島の四分の一が消滅するだろう威力を指定されていた。

しかし、濟州島と鎮海軍港とは訳が違う。島自体各所に大型軍事施設を擁している大規模軍事拠点ではあるが、濟州島は観光地としても

栄えており、古くは日本が邪馬台国と言われていた時代には、独立した国家が存在し、その現地人そして、移民してきた人間が多数生活をしているのだ。現在では軍人も含め130万人の人々が生活しているのだ。

幕僚本部が指定してきた威力のマテリアル・バーストを放った場合。島民の殆どが死を免れないだろう。

達也は今までであれば、この攻撃の意義は日本にとって当然であると判断し、躊躇なく実行していただろう。しかし、横島と出会ってから達也は、一般市民を大々的に巻き込むこの作戦に自分でもよく分からないシコリが心のどこかに生じていた。

そして、11月1日夕刻、独立魔装大隊は対馬要塞から、濟州島軍港を中心とした戦略級魔法、マテリアル・バーストの行使に踏み切った。

達也はソード・アイを構え、衛星からの映像とリンクさせる。島全体の様相がみえ、街並みが見える。

そして、目標は軍港から海に突き出している監視台の上部監視台から屋根の役目をする鉄板の一部5kg

「目標、ソード・アイ、リンク完了」

藤林響子の声が対馬要塞作戦司令室に響く。

達也はリンク前に街並みが脳裏に一瞬映るが頭を振り、目標に集中し究極の分解魔法を発動させる。

「…………マテリアル・バースト発動」

同時刻、濟州島近海では、大亜連合の特殊実験部隊チヨウ大佐が率

いる潜水艦3隻が、濟州島軍港へ寄港すべく、海上へ浮上を開始していた。

横浜近海から、濟州島へ丁度戻っていた。その間、鎮海軍港は壊滅の情報とデータも送られており、横浜で味方タンカーが消滅した戦略級魔法と規模は違うが同じ魔法だと判断していた。

チョウ大佐は、この一連の作戦には最初から否定的であり、今回の横浜での結果からも、日本と対峙するのは時期尚早だと、判断を下している。

世界で認知されていない未知のあの戦略級魔法は、予想では沖縄の悪魔が使用した分解魔法の応用だと推測し、状況から行使した魔法師は短期間にあれ程の規模の破壊が可能な魔法を連続して放つことが出来る事になる。未だ、発動条件、最大射程、破壊規模の大小、なども詳しく分からない状況では、本土（元中国）にも放たれる可能性が十分にある。

さらに、横浜では未知の強力な魔法師を数人確認している。（実際は横島一人）そのうちの一人は、究極の防御魔法『救済の女神』の使い手である。

今回の鎮海軍港の攻撃は日本からの報復と同時に停戦交渉へのメッセージであろうが、高麗地区司令官は、日本への攻撃を強行しようとしていたのだ。

一刻も早く、日本との停戦交渉に移るべきだと、チョウ大佐は濟州島に戻り、高麗地区司令官及び軍部本部に濟州島から直接通話を訴え出るつもりでいた。

しかし、軍港近くまで潜水艦が進むと、突如実験計測用の計器類が異常な反応を示す。

チョウ大佐はあの戦略級魔法が濟州島に行使されたことを悟り、自らの目の前の死を冷静に見つめる。

「……………すべて終わった。我々の敗北だ。……………故郷と共に滅びるのもまた僥倖か……………」

潜水艦は衝撃波で激しく揺れ、艦内には叫び声が響く……
が、……一向に死は訪れなかった。

「静まれ、観測を続けよ!!」

チヨウ大佐は激しい揺れの中、席にしがみ付きながら、指揮官室で叫ぶ。

自らの死が確定だと思っていたがこうして自分が生きている。計器類の反応からかの戦略級魔法が行使されたことは間違いない。規模が小さく、我々の艦まで届かなかったのかもしれないと考えに至り、冷静に、部下たちに観測をするように叱咤したのだ。

そして、各種計器は既ば異常状態に陥り、正常に計測できなかったが、レンズによる直接望遠だけは生きていた。

そこに映し出されたものは、軍港が半壊している中、上空に直径50m程に見えるエネルギー体が周囲に衝撃波やプラズマ現象を含む破壊をまき散らし、さらに膨張せんとしていたのが確認出来たが、何かに抑えられている様にも見える。

そして、その莫大な破壊のエネルギー体の先端にそのエネルギー体を体全体で抱え込む人影が見えたのだ。

「!?……あの人影をアップにしろ!!」

そこにはアジア人の顔をした青年が必死な形相でそのエネルギー体に抵抗している様がまざまざと映し出されていた。

「!!……神は……我が故郷の神は我々を見捨ててはおられなかった!!」

チヨウ大佐のルーツは濟州島の古代耽羅にあった。

この状況に、神に祈らずにはいられない。

しかし、濟州島の他の各軍事拠点から、無情にもそのエネルギー体と必死な形相でそれを抑える人物に対して、次々と砲撃やミサイル攻撃はたまたまは、遠距離魔法攻撃などを加えられて行った。

エネルギー体が破壊をもたらしている事は他の拠点からは確認で

きたのだらう。しかしそこで必死にそのエネルギー体を抑えている人物が見えていない。またはその人物がこのエネルギー体を使い破壊をまき散らしていると誤認している可能性が高い。

「バカな!!直ぐにやめさせろ!!」

チヨウ大佐は珍しく怒気を放ち艦内の部下に怒声を発する。

「大佐……通信出来ません」

「なんてことだ……」

チヨウ大佐は見ている事しかできない自分に絶望する。

そんな無情な攻撃を受けながらも、エネルギー体を抑えていた人物は、気合と共に、エネルギー体を空高くに吹き飛ばしたのだ。

エネルギー体は成層圏付近で大きく膨らみ巨大な光を放ち膨張爆破した。

海は静寂へと戻るが、その間もその神を思わせる人物は、濟州島の軍部から攻撃を受ける。

そして、遂に力尽きた様に、海に落下したのだ。

「ああ………なんてことだ!!あの方は、我々を救った救世主だぞ!!何としてもお救いしろ!!」

揺れが収まった潜水艦内でチヨウ大佐の声が響く。

チヨウ大佐は心を落ち着かせ冷静に考えると、あの人物は大亜連合にも認知されていない、この土地で代々受け継がれた古代魔術師ではないかと希望的な推測をする。そういう伝承などはこの濟州島にはいくつも残っているからだ。

大亜連合が誇る戦略級魔法師、劉雲徳は先日、鎮海軍港の攻撃の際、巻き込まれ亡くなった。

しかし、あの戦略級魔法に対抗しうる人物がまだこの国家に存在することになる。これは国家起死回生の切り札となりえる。

そんな人物を自軍が潰してしまうなど有ってはならないのだ。

濟州島軍事拠点は、軍港施設は半壊したが、その他島の各地に点在

する軍事拠点（ミサイル基地）などは被害を殆ど受けず、居住地も窓ガラスが割れるなどの被害はあったものの、人的被害は殆どなかったのだ。

一方対馬要塞、作戦指令室では、マテリアル・バーストの成果を見るために、衛星からの映像を注視していた。

マテリアル・バースト発動時は映像が乱れるのだが、今回発動中でも映像が乱れながらも映し出されていたのだ。

そこには、マテリアル・バーストのエネルギー連鎖反応による膨張が止まっている様子が映し出されている。しかし止まっているだけで、エネルギーとしては拡大していた。

そして映像を近づけると、エネルギーを抑え込んでいる様に見える人影が確認できる。何者なのかは確定出来る程映像はクリアではないが……

「な!? ……しかし、いや……もしや」

独立魔装大隊、指揮官の風間玄信少佐は考えられない様な衝撃な映像の人影を見て、

あの島の四分の一を消滅させるぐらいの莫大なエネルギーを抑える事が出来る人間など存在……しない……いや、彼ならばもしや。

その様子を作戦指令室の誰もが呆然と見つめていた。

マテリアル・バーストを放った達也も例外ではない。

しかし、達也は漠然とその人物の名前を口にする。

「……………横島」

そして、マテリアル・バーストによるエネルギーは上空に吹き飛び、そこでエネルギー膨張を起こし爆破する。その間衛星の映像は映ら

なくなったが、直ぐに復旧して映し出された映像は、無情にも攻撃を受ける人影が、海に落ちる様であった。

作戦指令室の誰もが微動だにできず、沈黙がしばらく空間を支配するのであった。

作戦としてはかの人物の介入により失敗に終わったが、この翌日に、大亜連合から停戦宣言が出されることになる。

この様子を見ていたのは、チョウ大佐や、対馬要塞だけではなかった。

この状況を最も見てはいけない人物いや……女性……いや龍神の姫が、一部始終を見ていたのだ。

「……………お …… お …… お の
れ……………!! つ あ あ あ あ
あ……………!!」

その華奢な体つきから想像もできないぐらいの怒気を帯び、雄たけびを上げながら体全身が激しく光らせた。

小竜姫は本来の巨大な龍神の姿に変化したのだ!!

そして、建物を吹き飛ばしながら上空に飛び出る。

グオオオオオオオオ……………!!

一気に何処かへ飛び立とうとした際、

巨大な猿神が突如と現れ、その龍を殴りつけ一喝する。

「落ち着かんか……………!!」

しかし、龍と化した小竜姫は一向にひるまず、怒りのまま暴れだす。
グルルルルル……………!!

「暴走しとるか……………少々痛い目に遭ってもらうぞ小竜姫よ」

もはや、巨大生物による怪獣大戦争である。

その間、人界にも影響が出始め、日本列島の主だった山々が噴火をおこしたのだ。

1時間程戦いが繰り広げられ、ようやく、猿神、斉天大聖老師は龍を抑えつけ、無力化する。

そして、元の少女の姿に戻り気を失ったボロボロの小竜姫を手の平に乗せ、独り言のように語り掛ける。

「……あ奴は、何度も死闘を潜りぬけた英傑ぞ、あの程度で死ぬはずが
あろうか……」

横島が何故済州島に現れたのかは不明だ……マテリアル・バーストを止める前に既に靈気をかなり消耗している状態であった。

超加速を使った可能性も高い。

そして、海に落下した横島は……
気を失い海に漂う。

海面には目を瞑ったままの顔と呼吸と共にわずかに上下する胸上部が見える。

ただ、その額には一匹の蛍が寄り添うように止まっていた……

濟州島の怪奇事件とされたあの事件から数日後。

何も無い海原で黄緑色に何かが発光しているのが見える。確認するため近づくと……若い男が気を失ったまま海を漂っていた。不思議な事にその男の額には蛍が止まっており、黄緑色の光は、その蛍が発していた物だった。

女性は、その若い男を軽々と持ち上げ顔を改めて確認する。

「知っている……データに・無し・外部記憶領域に・無し……彼を・知っている……エラー・検出・無し」

横島喪失編（後）

109話 ヨーロッパの魔王見参!!

『ヨーロッパの魔王ドクター・カオス』、魔法師だけでなく世界中の人々にその人物は知られている。

○天才錬金術師

○世界でも十指に入る大富豪。

○数々の魔法を生み出し、又は復活させた世界きつての天才魔法師

○数々の魔法兵器や魔法を使った道具を開発。数々の特許を所有

○本人曰く御年1156才、錬金術により1000年以上生きている。

○人造人間マリアを有している。世界唯一の人工靈魂を作成に成功。

○どこの国にも属しておらず、彼自身が一つの国家扱い。

彼の主な偉業はこれだけではないのだが、世間で知られているだけでもこれだけあるのだ。

誰もが彼には畏怖の念を抱き、憧れの対象となる。

しかし、これだけの人物、国がほっておくわけが無いのだが、彼が何処の国にも属せず、国家扱いになるのは上記だけの理由ではない。

今まで彼を誘拐または脅そうとする組織や国家は多数があったが、その悉くが撃退されていた。

彼のそばには常に人造人間マリアが居るからだ。ミサイル等の直撃さえも耐えうる耐久力、魔法なども対魔法処理を施したボディーには一切効果が無い。精神系魔法も言うまでもなく効果はなさない。そして、その攻撃力だ。各種兵器が搭載されているだけでなく、数々の魔法をCADなどを介さずに行使できるのだ。それも演算能力、記録容量もほぼ無制限。サイオン粒子も大容量で内包している。勿論戦略級魔法をも行使できるのだ。

その力を使い70年ほど前には、一つの小国家を壊滅に追い込んだこともある。

そんな彼女が常に横に居るのだ。ドクターカオスを傷つけるような人物がいれば真つ先に滅せられるだろう。

彼女だけでなく、その他、彼独自の強力な魔法兵器も保有しており、ちよつとした国家級の軍事力を一人で有していると言つても過言ではない。

しかし、そんな白髪 of 紳士風の老人ドクター・カオス自称1156才だが、今まさに命の危機に瀕している。

ボコ、ボス、バキ

「やめ、あつ、やめんかー!!」

バキ、ボコ、バス

「まて、話せばわかる。ごあ!」

バス、ベキ、ボコ

「やめつ、マ、マリア、やめ!!」

ボス、バキ、ボコ

ドクター・カオスは何故か綺麗な顔立ちだが無表情な女性に剛腕を振るわれタコ殴りにされていたのだ。

「マリアー!!もうやらんから、許してくれ、この通りじゃ」

ドクター・カオスという老人は、涙をチヨチヨきらせながら、自らが作成し、850年間片時も離れず生活をしてきた人造人間マリアに手を合わせ、懇願しだした。

その懇願にマリアは暴力を振るう手を止める。

「ドクター・カオス、本当・ですか」

「ああ、もう小僧には手を出さん!!」

「イエス、ドクター・カオス・彼を・解剖・禁止です」

マリアはそう言つてドクター・カオスの掴んでいた胸倉を離す。「ふく、助かった、マリアの奴、あの小僧を拾つてきてからどうも様子がおかしいわい、わしに手を上げるなんてことをしなかったのじやがな、何かのエラーかいのう?」

ドクター・カオスはそう言いながら、自前のCADを操作すると、マ

リアにタコ殴りにされ、崩れかかった顔を一瞬で元に戻す。

ここは、ドクター・カオスが所有している各国にあるラボ兼自宅の一つで、USNAの郊外にある。

10日程前、ドクター・カオスはマリアと共に、自前の特殊潜水艇で、大亜連合の上海から、太平洋にある所有している小島を経由して、小型ジェット機でUSNAに戻って来たのだ。

上海から、太平洋の小島に行く際、突如マリアが特殊潜水艇を浮上させ、海上に飛び出し、その若い男を拾ってきたのだ。

そのカオスが小僧と呼んでいる若い男は、意識が戻らず今もこのUSNAのカオスの自宅で眠ったままだった。

不思議な事にマリアはこの若い男に執着し、甲斐甲斐しく世話をしている。

カオスが、知り合いなのかと聞いても、「データ・無し。でも、知っている」とどうも不可解な答えしか返ってこないのだ。データに無いのに、知り合いとは実に不思議である。そこでカオスは寝たきりのこの若い男を調査すべく、怪しげな機械を取り付けようとしたのだが……それをマリアに見られ、このような有様になったのだ。

カオスはマリアの今の状態を人工靈魂が摩耗しだし、正常な判断が出来なくなっているのではないかと考え出していた。

一度、100年ほど前のバックアップデータを呼び出した方が良いかもしれないと……

天才錬金術師の名をほしのままにしているこの白髪の紳士ドクター・カオスは、USNAの自宅に戻ったのには訳がある。

しばらく、大亜連合で、面白そうだという事で、レールガン作成のアドバイスや協力を行っていたが、今回の事件で何故か興味を失う。

そんな中、USNAからとある相談を受けたのだ。マイクロブラックホール生成実験にて副次的な現象が起こりその見解を求めたいという事だった。

ドクター・カオスはまたしても、何やらキナ臭そうな話だが、興味

津々に「面白い！」といい、その件に関して二つ返事をしてしまった。世間では天才錬金術師とか言われているが、面白そうとか、楽しそうとか、そんな事が出来たらいいなとか、そんな曖昧な理由でいろんなことに首を突っ込んで、事態を掻きまわす、飛んでもない人物としても裏では知られ、天災錬金術師とか迷惑錬金術師とか言われている。たりする。

しかし、生活能力がゼロの自分を世話してくれる人造人間マリアがこの調子では、USNAに要請された研究所に向かう事もままならないのだ。

「楽しそうな案件なのじゃが、このままでは出向くこともままならんわい、いっそ、あの小僧の肉体を乗っ取ると言うのはどうじゃろう、意外と鍛えてそうじゃし、顔は……後で整形すればよいか、では術式を作って……グボツ!!」

そんなカオスのボヤキを遠くから聞こえたのだろうか。マリアの有線式ロケットアームがカオスの左頬にさく裂した。

「うううっ、なぜじゃー！ー！ー！ー！！わし、主人なのに、小僧より下になつとる。理不尽じゃー！ー！！亡国の陰謀じゃよ〜！！」

ドクター・カオスは涙をチョキチョキらせながら嘆く。

マリアはそんなドクター・カオスを一瞥もせず、少年が寝るベット横の椅子に座る。

「うう、やはり、バックアップを呼び起こした方が良いかのー！ー」カオスは、CADを操作しながら、そう言っ、マリアの方を見やる。

そして、殴られた左頬は修復させた。

お判りだろうか、今のドクター・カオスは、ただの耄碌じじいではない、はた迷惑な性格は変わっていないが、知識や頭の回転は全盛期

に匹敵する。

そして、世界に8人しか確認されていないと言われている再成能力を有している。

達也のような高スペックなものではないが、脳の負担を減らすギリギリの能力値に抑え行使しているのだ。再成可能なものは基本的に自分のみと限定的だが、自らの脳細胞の復元やテロメアのコントロールも可能なのだ。それによって衰え行く脳細胞を維持しており、姿も若く出来るらしいのだが、何故か60才前後のままの姿である。

そして、例外なのは魂の再成が出来ると言われているのだが、真相は定かではない。

翌日、

ドクター・カオスはUSNAの依頼に応じ、早く現場へと行きたいのだが、肝心のマリアが拾ってきた若い男に付きっ切りで、動こうとしないのだ。

それを打破するために名案、いや迷案を思いついたようなのだ。

カオスは眠っている若い男を早く起こすために必要な物を買ってきてくれと、適当な品物をマリアに言いつけ、遠方の店へ使いを頼む。

若い男の事とあってマリアは二つ返事で、早朝から買い物に出かけたのだ。

そして、カオスは若い男が寝ている部屋に忍び込み一人高笑いをする。

「フハハハハハッ、これでマリアはしばらく帰ってこないだろう。たった一昨晚で完成させたこの精神入れ替わり装置!!流石わし、天才!!自分の才能が怖いわい、フハハハハハハッ!!」

では、説明してやろう。このヘルメットののような装置を、わしと、小僧に被せる。スイッチオンでわしの精神は小僧の肉体に宿るのじや!!まあ、時間限定じやがな。小僧の肉体を手に入れたわしは、マリアに徹底的に嫌われるような事をしでかし、マリアに愛想つかされ、小僧は家を追い出されるといふ寸法じや!!そうすれば、わしの地位が復

権し、マリアはわしと共に、USNAの研究所に行けるといふ事じゃ!!………はーはつはつはー、わしが嫌われることなく、小僧を追い出すことが出来る。わし、冴えてる!!」

誰に説明しているのかは、分からないが大きな独り言を自画自賛で行っている。作戦そのものは子供っぽい発想だが、精神入れ替わり装置なるものを一晩で作成してしまう才能は流石は天才錬金術師といったところか。

カオスはそう言つて、ヘルメットののような装置を二つ持ち、若い男が寝ているベットに近づくのだが……

「ん?なんじゃ?この蛍?」

寝ている若い男の額に蛍がくっ付いている事にカオスは気づく。

「まあ、なんでもいいわい、では早速」

バチツ

「痛ツ!!」

その蛍がカオスの顔面に飛んで突っ込んだのだ。

そして、若い男を守るように再び、額の上に止まり、カオスを見て、威嚇するように翅を羽ばたかせる。

「何を!!梯子状神経しか持ち合わせぬ下等生物の分際で!!」

カオスはその蛍に掴みかかろうとすると。

バチツ

カオスの手を阻む様に蛍と若い男を囲む結界が張られたのだ。

「フハハハハハハ、面白い!!昆虫の分際でわしに挑戦しようと言うのか!!」

カオスは高笑いをしながらCADを操作しだす。

「この程度の結界、こうじゃ!!、フハハハハハ、なぬ?、2重構造じゃと?味なまねを……このこの、これでどうじゃ!!フハハハハハハハ」

蛍相手に、一人芝居のような駆け引きをするドクター・カオス、既に初期目的を完全に忘れていた!!

しばらくそんな事を続けていたが、蛍がカオスに対し虹の様に多種多様な光を明滅させ浴びさせたのだ。

「何?……くっ色彩催眠だと……貴様ただの蛍ではないな……日本古

来の式神か？……………ふ…か…く」

ドクター・カオスは蛍の放った催眠効果のある光群を受け、その場で気を失う。

しばらくし……

カオスは目を覚ます。

「はっ、不覚を取った!! 蛍は？」

しかし、目の前には若い男がスヤスヤと寝ているだけで、先ほどまで、境界勝負をしていた蛍は居なかった。

「おおっと、初期の目的を忘れるところじゃった、蛍もおらんし、今の内に、小僧の肉体を頂くとするか……」

カオスは、ヘルメットのような怪しげな装置を持ちながら、若い男に迫る。

ガタン

「ドクター・カオス、何を…していますか？」

マリアがカオスの真後ろにいつの間にか立っていた。

「ママママママ、マリア？……………いや、お主が居ない間小僧の世話をしていたまでじゃ」

カオスは言い訳をするのだが、手には怪しげなヘルメットを持ったままだ。

マリアはカオスの両肩を掴む。

「ノー・ドクター・カオス、彼の…体…渡さない」

マリアの両目はキューピーンと光り、掴れたカオスの両肩はギチギチと音を立てる。

「マ…マリア？ 話せばわかる!! わ…わしが悪かった!!」

「ノー」

ゴキゴキ

「いいいいいいいいいやー…いいいいいい!!」

カオスの両肩は嫌な音がする。そして……その後カオスはゴミクズと化したのだった。

ゴミクズとなったカオスは床に転がされたままとなり放置。

その部屋ではスヤスヤと若い男が眠り。その横の椅子に座る人造人間マリアはじつとその男を見守る。

男の額にはちよつこりと蛍がいつもの様に寄り添っていた。

110話 横島Re：スタート？

(ヨコシマ、もう自分を傷つけないで……………あなたはもう十分やったわ)

!?:…………ルシオラ!!

(自分の為だけに生きていいはずよ……………)

あれ？君の名前が思い出せない。何故だ？

(思い出せなくていいの……………あなたは私に出会ったばかりに辛い目に……………)

でも、俺は…………君を…………

(またお別れね……………私はあなたとずっと一緒よ……………)

待って、待ってくれ…………

若い男は目を覚ます。頭上には見慣れない天井、そして何故かベツトに寝ていた。

「アレ？……何処だ？」

横を振り向くと薄い赤毛の女性が無表情で座っていた。

若い男にとつてよく知る人物だった。

「目が・覚めましたか」

「マリア？」

「あなた・私を・知っている。私・あなたのデータ・無し・でも・知っている」

「マリアどうかしたのか？故障か？」

若い男はベツトから起き上がる。

「故障・違う。あなたの・名前は」

「やっぱ故障かあ？横島だ。横島忠夫だよ」

「横島…………横島さん…………横島さん…………横島さん…………重大な・エラー・検出」

マリアの頭部からシュウーと煙が立ち登る。

「おおおおおつ？マリア大丈夫か？……おーい誰かいなのか？カオスのjeeさん？居るんだろ？マリアがおかしいんだけどー……」

「なんじゃ、騒々しい。日本語か……なんだ小僧、目が覚めたのか」

騒ぎを聞きつけ、白髪の紳士風の姿をしたドクター・カオスが部屋に入ってきた。

「カオスのjeeさんはまともそうだ。アレ？少し若返ってない？」

「なんのことでじゃ小僧？マリア？おおお？オーバーヒートを起こした。この100年こんな事はなかったんじゃが……小僧、マリアに何をした？」

カオスは真面目な顔で横島を睨む。

「なananもしてないぞ。マリアが俺の事を覚えてないからって、名前を聞くから、名乗ったらこんなになったんだ。故障してるんじゃないか？」

「……………」

カオスは顎に手をやり考えるしぐさをする。

「ところで、jeeさんここは何処だ？俺はなんでここに居る？美神さん達は？」

「小僧名前は？」

「何言ってるんだ？カオスのjeeさんまで？まさか、遂にボケたか？いいから、名乗れ」

カオスは真剣な表情をしていた。

「よ……横島忠夫」

「知らない……」

カオスはまたしても考えるしぐさをする。

「何言ってるんだ……この前、jeeさんが調整したロケットで俺はマリアと月に行ったところだぞ」

そんな横島の顔をカオスはまじまじと見る。

「なんじゃと……お主、生年月日と生まれは」

「な、1976年6月24日、大阪生まれだ。たくななんだ？」

「…………やはりか……もう一つ聞く、わしと最初に会ったのは何処で？何時だ？西暦で答えよ」

「やはりボケたか？1993年の東京だ、じーさんとマリアが俺の体に乗っ取んだよ」

「…………聞け小僧、わしは1993年には東京、いや日本にも行っておらん。それと今は2095年、ここはUSNA、旧アメリカ合衆国じゃ、これがどういう事かわかるか？」

「!!……冗談きついなー、カオスのじーさん」

「これを見よ、これが分かるか？」

カオスはそう言って情報端末を見せる。

「なんだそれ？」

横島は一般的に流通している情報端末を全く知らない様だ。

「じゃアレを見よ」

そう言って、ホログラム映像を見せる。

「なっ？」

横島は驚きを隠せないでいた。1993年ではホログラム映像など映画の中の想像の産物でしかなかったからだ。

カオスはホログラム映像で次々と現在のこの世界を見せて行く。そして今の日本がどういう風になっているかなどを……

横島は食い入るように映像を見ていたのだが……

「…………あはっ……これは夢だ!!きつと夢く!!そうじゃなきやいやー……!!お家に帰るうー……!!」

「落ち着いて聞け、お主は時空を超えて未来に来たのかもしれない。さらに、この世界とよく似た平行世界からじゃ、そうでなければお主の誇大妄想じゃ」

「なななな、何言ってるんだ、未来？平行世界？……はっ！もしや美神さんが俺に愛想つかして未来に飛ばした???

いい……やあ……みがみぎ……もうパンツ取らないから許して……!!、アレ？あれもバレた?!洗濯物をたたむふりして、ブラジャー持って帰ったのがバレた？もうしないから堪忍や……!!そんじゃアレ、アレっすか？文

殊使って、シャワーシーン念写したのバレてた？ごめ、んなさー！いい、もうしないからさー！みがみ、さっはさー！元に戻してさー！え！！」

横島は涙を縦横無尽に飛ばし、錯乱状態に陥っていた。

しかし、おかしい……この横島はどうもおかしい。自分でカオス達の記憶を消した事や、神に100年間神界の牢獄にとらわれていた事を忘れていたかのようだ。

さらに最近月に行つたと言っていた事から、アシユタロスと戦った事も覚えてない様だ。

「わし、超ラッキー——！！平行世界、過去から来たとな面白い！！小僧！！未来に飛ばすとかなんとか？もしや、時空制御魔法を使えるものが居ると言うのか？……面白い！！実に面白い！！誰じゃそ奴は!?!」

錯乱状態の横島を見てカオスは楽しそうにそんな事を言う。

その間マリアはエラー検出を延々と行っていた。

「横島さん……エラー・情報交換機能低下、感情ニューロン性能低下……横島さん……復元実行……エラー、限定的思考カット……」

横島は実際に未来に転移されたのでも、平行世界から来たわけでもない。どうやら、何らかの要因で、アシユタロス戦以前までの記憶しかないようだ。

さらに、眠っている横島にずっと寄り添っていた蛍の姿が見当たらない。そして、横島が目覚める前に見た夢……夢の彼女の言動から横島に何らかの封印の類が施されたのかもしれない。

マリアは、横島の名前を聞いてから、ずっと何らかのエラー検出を行っているが、復旧のめどが立ったようだ。

「緊急モード展開……一時復旧完了……再起動実行……」

ドクター・カオスは、横島が平行世界、しかも過去から来た人間だと結論づけ、面白い研究材料が目の前に現れたことに歓喜する。

「フハハハハッ、良いぞ！良いぞ！さすがはマリアじゃ、こんな面白

いものを拾ってくるとは!!小僧をどうしてくれようか!!」

そして、アシユタロス戦前の記憶しか残っていない、ほぼただの変態と化した横島は

「いいいややーーーー!!みがみ〃さーーーーん!もう下着は盗らないから、許してーーーー!!エロビデまだ見てないのにーーーー!!返却期限がーーーー!!」

錯乱状態のままだった。

111話 記憶喪失、過去の横島少年、煩惱と文珠

横島が落ち着いたところで、ドクター・カオスは軽い食事を行った後、話し合いを始めた。

先に横島の世界（正確には過去の世界）について語りだす。

「なんと!!幽霊に妖怪とな!!そんなものが存在しているのか!!その退治を生業にしていたと!!実に面白い!!……それで、お主の世界のわしも天才だが、ボケて落ちぶれていたとは!!くー、わしの癖に情けない奴じゃ!!」

カオスは横島の話を食べい入るように聞いていた。実に楽しそうである。

マリアもその横でジツと横島を見つめている。

「な……なんと!!神と悪魔が存在していたとは!!伝承とほぼ一致するではないか!!……わしも行ってみたいなお主の世界、実に楽しそうじゃ!!」

カオスは横島の話に興奮しつばなしである。

次にカオスが今のこの世界の状況を説明した。

「妖怪や幽霊、神や悪魔がない世界か……ピンと来ないな、でも、危険は少なそう……そうか、霊能力はあるけど、ゴーストスイーパーは必要ないし、それで魔法が発達したのかー」

横島は落ち着いてカオスの話を聞き、感慨深そうにしていた。

「え?第三次世界大戦?世界の冷却化?終わらない戦争?……魔法による殺し合い……」

横島はそんな世界の在りように顔をしかめる。

続けて横島はカオスに質問をする。

「jeeさん。俺の過去の世界にもマリアやjeeさんが居たんなら、俺の知り合いもこつちにいたのか?」

「おお、それじゃ、お主の世界とこの世界はかなり共通点が多い、わしが知っているだけで、お主の知り合いでは、美神令子と氷室絹は有名じゃ、その他もちよつと調べれば出てくるかもしれないな」

「美神さんとおキヌちゃん!!今どこに?」

「焦るな、ここは100年先の未来じゃぞ、すでに死んでおるわ……美神令子は辣腕魔法師として有名じゃったな、富豪の旦那と結婚してU S N Aに住んでおったな、結婚後は魔法師というよりはビジネスに傾倒し、その辣腕をふるっておったわい。」

それと氷室絹、あの者はわしほどでは無いが、世界でも有名人じゃ、世界唯一の防御系戦略級魔法師、『救済の女神』の氷室絹、わしもあの魔法の事が知りたくて、45年前かの、会ったことがあるのじゃ、あの魔法は知れば知るほど凄まじい。理論は現代魔法とはかけ離れていた事を覚えておるわい」

カオスは美神と絹の事を思い出すように語りだす。

「美神さんは相変わらずやなー、しかし結婚って、くそっどこのどいつじゃ!!あのチチ・シリ・フトモモは俺のものじゃー!!で………おキヌちゃんそんなことに………すごいな、結婚は?」

「いや、一生独身じゃったはずじゃ、今も、氷室家は日本でも有名な魔法師の大家じゃよ………そういうえば、マリアよ、お主、やたらと氷室絹を気に入っていたようじゃな」

「イエス・ミス・キヌ、横島さんと・同じ感覚」

マリアもカオスと一緒に絹に会っていた様だ。

「そうかあ………おキヌちゃん、あんなにいい子だったのに世の男どもは何をやったんじゃ!!………アレ?そう言えば俺は?………俺だけ、有名じゃない?ただの一般人………まさかの犯罪者に?」

いくら記憶が無いとはいえ、横島は言っではいけない事を口走る。絹に大変失礼な話だ。誰かが聞いたら噴飯ものである。ある意味犯罪者扱いされても仕方なからう。

「いや、わしはお主が目覚めた後、すぐに検索を掛けた。過去の記録をさかのぼってな、しかしどこにも存在しなかった。横島忠夫という人物は居なかった」

「はあ?なんじゃそりや?俺だけいない?」

「そうじゃ、お主の父と母と言っていた横島大樹と百合子という人物は存在した。しかしその夫婦には子供がおらんかった………フフフツ、ハーツハハハハツ、お主のいた平行世界とこの世界は余

りにも共通点が多すぎる。さらにお主じゃ、なぜお主だけおらん。フハハハハハッ、楽しげなことが起きる予感がするぞ!!面白い!!フハハハハハハハッ!!」

「ちつとも楽しくないわー！ー！ー！ー！帰らせてくれー！ー！ー！ー！ー！！」

実に楽しそうにしているカオスに横島は涙を飛ばしながら叫ぶ。

「ククククフフフフハハハハハッ、心配するな、きつと帰してやるぞ!!こんな楽しいことを他の連中にやらせてなるものか!!フハハハハハハハハッ!!」

カオスは実に楽しそうだ。

「本当だな!!帰してくれるんだな!!嘘だったら泣くぞ!!」

既に泣きが入っている横島はそんなカオスを見やり、失敗するかもと思わずに入られない。

「まあ、それまではお主はわしの助手扱いじゃ、どうせこの世界ではお主の身元はないのじゃからの、気長に待て」

「早くしてくれよー、ううう、仕方ないか、知り合いがいただけでもマシか……」

こうして、アシユタロス戦前までの記憶しか残っていない横島は、ドクター・カオスの助手として、行動を共にすることになった。

その晩、横島は、カオスの自宅で与えられたかなり豪華な部屋で

「そう言えば……文殊を使えば、過去に戻れるかも……文珠!!出ろ!!…、オエー、ゲホッ、頭がッ割れるく!!」

文珠を生成しようとした横島は強烈な頭痛と吐き気に見舞われる。

「ゲホッ、なう・なんで?」

横島は、続けて、ハンズ・オブ・グロリーとサイキック・ソーサーを発動させるが、普通に現れる。

再び

「文珠!!……うわっ、ぐっ、オエー……なぜだ?、くそっおおおおお、エロビデの返却期限がー！ー！ー!!、頭痛がなんだ

!!吐き気がなんだ!!おキヌちゃんに返してもらおうほど気まずいものはなーーーーい!!」

文珠を生成しようとする、激しい頭痛と吐き気がどうしても起り、生成できない。

生成できる気配は十分にある。さらに霊力も高まっている気がする。だが、横島の魂に刻まれたトラウマは、そんな記憶を消失している今の横島にも顕著に影響している様だ……………

しかし、この時の横島は、世界の事とか世の中の事と人類の未来とか妖魔と人間の戦争とか、そんな事は一切考えていない、真に自分の生きたいように生きていた横島なのだ!!

「文珠!!…………頭がツ!!くーーーーこういう時は!!煩惱全開!!!」

「いやっ、でもく横島くんくちよつとだけだったらく♡!!(冥子)」

【この頃横島くん、シャワー覗きに来ないわねく(令子)】

【ちよつとぐらい触ってもいいわけく(エミ)】

【帯を解くの手伝ってもらえませんか♡(小竜姫)】

あはっあははははっ!!みなさん!!ごっつあんでーす!!」

横島の真の力、煩惱パワー復活である。妄想100パーセントのお姉さま方の脳殺シーンにショートストーリー足した自家発電!!

そうして、手のひらに輝く珠が生成された!!しかし霊力はそれほど内包されていない様だ。

「はーっ、はーっ、はーっ　こ…………これは、キツイ、まあ、使える程度のものが出来たが、この分だと3日で一個を出ればいい方が、予定では過去に戻るには20個必要だから2ヶ月くらいはかかるかなく、でも文珠の頭痛の時に頭によぎる映像はなんだったんだ?まあ、煩惱で上書き出来たけど…………しかしあの映像は…………」

どうやら文珠生成時、過去のトラウマの映像が頭によぎるようだが、悲しいかな、17才の横島の煩惱パワーで相殺された様だ……………しかし、横島は疑問に思うあの映像は……………なんだったのだろうか……………

数日後、

ドクター・カオス、マリアと横島はUSNAの依頼を受けるべく、ダラスにある某研究所へと行くために、自家用ジェットで近くの空港まで行き、しばらく滞在するためUSNAが手配したホテルに荷物を置きに行った。

「ドクター・カオス、お迎えにお伺いいたしました」

ホテルに着いて早々、ドクター・カオスに依頼者であるUSNAから使いの者が来たのだ。

「なんじゃ、忙しないのー」

「ベンジャミン・カノーパスと申します。貴方の道中の護衛を私共が仰せつかりました。以後お見知りおきを」

そう言つて、USNA海軍風の服装をした偉丈夫が握手を求めた。

「フン、護衛などいらんわ。にしても、USNAが誇る精鋭部隊スターズがお出迎えとは、きな臭いのう」

「ご存じでしたか、流石はヨーロッパの魔王ドクター・カオス、無礼をお許しく下さい」

「世辞はいい、早速案内せい、マリア行くぞ……小僧は残っておれ」
「え？置いてけぼり？」

「小僧、とりあえずは様子見じゃが、場合によつては時間がかかるかもしれん。小遣いを渡してやる。観光でもしてこい」

そう言つて、カオスは横島にブラックカードを渡す。

「横島さんと、いっしょがいい」

「マリア、聞き分けてくれ。次はそうする」

「……イエス」

マリアは無表情ではあるがどこか残念そうだ。

「ま……まじっ…」

横島は不安で仕方が無かった。高級ホテルとは言え来たこともない異国の地で置いてけぼりにされるのだ。

「いや……これは、これで……OKじーさん、気をつけてな」

しかし……横島は一瞬何か考えそう返事をした。

カオスとマリアが、スターズの護衛と共に高級車でホテルを後にした後、横島はホテルの部屋に戻り、カオスから渡された情報端末を不器用に操作し、何やら調べていた。

しばらくし、何故かスキップをしながら部屋を出、ホテルから出て行く横島。

中心街の方へ向かって歩き出す。そして……

「I'm Yokoshima. Do you want to have some coffee? There's a cafe over there.」

(僕、横島 コーヒーでもどう？あそこの喫茶店で!!)

「I'm Yokoshima. Can I have your e-mail address?」

(僕、横島 メールアドレスを教えてください!!)

やっぱりと言うか、当然というか、下手くそな英語でナンパをする横島……やっている事はアメリカだろうが、日本だろうが、過去でも、未来だろうと一緒になのだ。

そして、当然のことながら成果はゼロ、ここでもゼロの横島を更新中だった。

「……なんでじゃー！ー!!このサイト『海外でも絶対成功するナンパ最強マニュアル』通りにやってるのにー！ー!!未来でもイケメン基準は一緒なのかー！ー!!」

横島は街中でいつも通りの雄たけびをあげる。どこに行っても横島は横島だった。

一方カオスはダラスのUSNAの研究所に着き、主任研究員からマイクロブラックホール生成、蒸発実験の結果やその工程について説明を受けていたのだが、急に立ち上がり、研究者たちに珍しく大声で一

喝していた。

「お主ら、それでも研究者か!!結果をも想定せずに実験を敢行するなどもつての外じゃ!!お主らは何がしたくて、このような大それた実験を行ったのじゃ!!」

この実験は、元をたどれば、『灼熱のハロウィン』で起こった大爆発を解明するため、もっと言うと、同規模のエネルギーを再現するために行った実験なのだ。要するにUSNAではまだ確認されていない未知の魔法に恐怖し、達也のマテリアル・バーストに対抗するために同規模のエネルギー反応をこの実験で確認し、それを解明し、あわよくば同じ規模の魔法を開発しようという事なのだが……あまりにも、希望的観測過ぎる理論の解釈の元行われており、偶然の産物に期待するようなお粗末極まりない実験だったのだ。あわよくばマテリアル・バーストと同じような現象が起きればいい程度の話で、このような大規模実験を行ったのだ。さらに失敗した時にリスクを考えていない様なとんでもない話だった。

しかし、カオスが怒っているのはそこではない。

研究者として、こういうものが出来ると計算しつつし、信念と確証を持って行った実験で失敗するのはいい。そんな信念も持たずに、ただの偶然を期待するだけの実験は失敗して当たり前だと言っているのだ。そんな実験失敗のケツ拭きをカオスに押し付けようとしたからなのだ。

「……お主らに言っても無駄じゃ……で、どのような副次的現象が起きたんじゃ?」

カオスは座りなおし、そう言っつて、本題のこの実験による副次的現象、要するに想定外の事象について何が起きたのかを聞いた。

「その、次元に穴が開いたことが分かったのですが……」

「ほう、それは面白いではないか……データをを見せてみよ」

カオスはタブレット端末に送られたデータを確認しだし、しばらく沈黙が続く。

「む……確かに次元に穴が開いたようじゃが、この実験ではこのような現象は起きんじやろう……確かに不可解だ。確かにエネルギー的

には可能なようには見えるようじゃが……ふむ……その時の映像
やらはあるか？」

「はい」

「……なんじゃ？この嫌な感覚は……以前にも感じたような……で
この穴は閉じたのだな？」

ドクターカオスは画像処理が施され、視覚化された次元の穴の映像
を見て、何故かこのように感じていた。

「……はい、開いたのは一瞬でして……それはそうなんですが」

「なんじゃ、はつきり言え！」

「それだけでは無く、この実験に関わったもの、護衛やまたは職員など
が、相次いで失踪しまして……」

「職員へのメンタルケアはしていないのか？」

「はあ、この施設には居ただけで、直接実験に関わっていないものまで
おります」

そんな曖昧な言い方をする主任研究者

「関連性がわからんと……失踪だけではわしを呼ばんじやろ、他にあ
るのだろ？」

「はい。失踪者には軍人も含まれており……その、失踪者が出た後、街
で相次いで不可解な殺人事件が頻繁に起こるようになり……もしや、
実験が人に悪影響を与え、その失踪者は何らかの理由で殺人行為をし
ているのではないかと……」

主任研究者は言いにくそうに話す。

確かに、この研究所に関わった人物が失踪して殺人鬼になっていた
なんてことが公になれば、とんでもない事になるだろう。

「ふむ、根拠は？」

「状況判断だけです」

「まあよい、次元の穴はワシもお目にかかりたいしの。そつちのデー
タは頂くとして、要するにわしへの依頼は、この実験が人間に如何な
る悪影響を与えるかを検証すればよいのだな。ならば、再度実験を行
う可能性があるがよいか？失踪者に対してはお主らで何とかせい」
「受けて下さるのですか？」

「よかろう、報酬はたんまり頂くがな」
主任研究者は今まで緊張した面持ちで話していたが、ようやくホッとした顔をした。

一方横島は

「アレ？……ここどこ？」

……絶賛迷子中だった。

112話 アンジー・シリウス登場!!

カオスと MARIA がとある依頼で USNA の某研究所に赴いているところ。横島は街の中心街に繰り出し下手なナンパを行い、当然の如く悉く失敗に終わり意気消沈しながらホテルに引き返していたのだが、……迷子になっていた。

貸し与えられていた携帯端末はあるのだが、GPS 機能の存在も知らず、ネット検索するのがやつとの状態だ。一応通話機能の使い方は教えて貰っていたが……MARIA とカオスに繋がらない。機密性の高い研究所内に居るため、電波はカットされているのだろう。

既に、日が暮れあたりは暗闇に包まれる。

「うううっ、なぜこんな目に！ナンパは失敗するわ！電話は繋がらんわ！迷子になるわ！こんなんだったらホテルに大人しくしてればよかった!!……MARIA っく助けに来てっく」

横島は街外れの大きな公園を彷徨い、大きな嘆き声をあげるがすべて闇に溶け込み誰にも届かない。

しばらく、彷徨っていると、暗がり二人が二人地面に倒れているのが見えた。

「なんだ行き倒れ？」

横島はその倒れている男女二人に近づき

「おい大丈夫っすかっ？……」

そう言いながら、意識の確認を行い、テキパキと脈や呼吸を調べる。

「ひえ!!……死んでる?……冗談だよな?……ち、近くに犯人はまだいる?……カオスっく MARIA っく助けてー……!!」

ガクガクブルブルと震える横島

そこに

「何をしている!!」

若い女性の声が横島を怒鳴る。

横島が振り返ると……

口元以外、顔を覆う異様な仮面を装着し、そこから覗いている両目

の瞳は金色、そして燃えるような赤い髪を獅子舞のごとく振り乱している異様な姿の女が横島を睨んでいたのだ。

「ギャーース!!でででで出たな!!妖怪変化!!このゴーストスイーパー横島忠夫がただでやられると思うなよ」

横島はその異様な姿の女性に驚き、足を震わせながらも、そう口上を垂れたのだ。流石は場数を踏んでいるだけはある。

しかも横島はこの異様な姿の女を先ほどの倒れている人たちを殺した殺人者だと勘違いをしているようだ。

「な?日本語?……そこの人達を……あなたが巷でうわさされている吸血殺人鬼ね!!大人しく投降しなさい。さもなければ、痛い目にあってもらいます」

異様な姿の女だが、口調はかなり若いしやべり方だ。どうやらこちらも、横島がこの死んだ人たちを殺した殺人鬼だと思っている様だ。

そんな誤解をしているもの同士だが、横島の方は女がしゃべる英語が理解できていないため意思の疎通も出来ようがない。

当然のごとく横島はいきなり猛然とダツシユをかまし逃げ出した

……

「逃げるが勝ち!!昔の偉い人も言ってたしな——」

「あ、待て!!」

異様な姿の女は突然の逃亡に出遅れるが、逃げる横島に魔法を放つ。

横島は不格好なジャンプをしてその魔法を避ける。

「待てと言われて待つ奴なんているか——!!うわっ!!グへく!!」

異様な姿の女はその間に魔法を放ちながら加速魔法で横島に追いつがるが、なかなか差が縮まらない。

「魔法を使っているように見えないのに、私が放った魔法をあんな訳が分からないよけ方で悉く避ける!なんて身体能力なの!しかも私の加速魔法でもまったく追いつかない。とても効率がいい走り方に見えないのに、なんであんなスピードが……なんなの!?!」

女は横島の無様に避けるさまとズドドドドドドと走る姿に困惑、

狼狽する。

しばらくそんな追走劇を行っていたが、異様な姿の女はしびれを切らして大規模な爆破魔法を横島に放つ。

「この、ちよこまかと!!」

「ギイヤ——!!」

横島は直撃を避けたがその爆風で吹っ飛び頭から地面に落ちた。

「ふう、手間かけさせて……やり過ぎたかしら、死んでないわよね。犯罪者と言え、一般人の様だし」

異様な姿の女は吹っ飛び頭が地面に突き刺さった横島に近づきながら、そんな心配を口にする。

「あく、死ぬかと思った!!」

そう言っつて横島は頭を地面からズボつと抜き平然と立ち上がったのだ。

「な?」

異様な姿の女はその元気そうな様子に面くらいながらも、攻撃態勢を再び取る。

「何するんじや——!!死んだらどうするんだ!死んだら生きられないんだぞ!!」

横島は訳が分からない突っ込みをいれる。

「ご……ごめんなさい……つて、殺人鬼のあなたに言われたくないわ、……きつと新手のBS魔法師ね!!ならば魔法を悪用した罪は重いわよ。死んでも文句言えないんだから」

そう言っつて異様な姿の女は横島に再び攻撃しようとしたのだが
……

ズシャ——ン!!ズン!!

横島と異様な姿の女の間から女性が勢いよく振って来たのだ。しかも、何故かその右手には目を回している紳士風の老人が無造作に掴まれていた。

「横島さん・いじめる人・許さない」

「ななな、なんなの？女の人が降って来た？」

「マ、マリアくっ!!怖がったよー!!」

横島は、空からドクター・カオスと共に降って来たマリアに縋りつく。

「うぷっ……マリア何をするんじや！突然飛び出してどうしたのじや？危なく軍の狙撃対象になるとこだったぞ……、小僧なぜこんなところ……」

地面に放り出されたカオスは、よろよろと立ち上がりながらマリアに問い詰めるが、縋りつく横島に目が行く。

「横島さん・大丈夫・マリアを守る」

マリアは縋りつく横島にそう言いつつ、異様な姿の女に、ロケットアームを構える。

「な、なに？あなたも、その殺人鬼の仲間？ならば容赦はしないわ」
そう言つて、異様な姿の女も、マリアに対し戦闘態勢をとる。

「横島さん・殺人鬼違う」

二人はにらみ合い対峙し、一触即発な事態となるが……

「待つんだ、総隊長!!」

そんな二人を止める声が入る。

そこには、ドクター・カオスの護衛役となっていた精鋭部隊スターズのベンジヤミン・カノープス少佐が部下2名を引き連れ現れたのだ。

「ベン、止めないでください!!連続殺人の犯人とその仲間です」

「アンジー・シリウス総隊長!!あなたは不用意に戦争を起こすつもりですか!!」

カノープス少佐はワザと、異様な姿の女の名前をフルネームで言い、叱咤する。

「……戦争!？」

「彼らはヨーロッパの魔王ドクター・カオスと魔女マリアです!!彼ら

を敵に回すつもりですか!!彼らを敵に回して勝つ算段があると言うのですか!!」

「……………ドクター……………カオス……………魔女マリア!!」

アンジー・シリウスと呼ばれた異様な姿の女はカノープス少佐からその名前を聞き、大いに狼狽し、血の気が引いて行くのが自分でも分かった。

ドクター・カオスとマリアを敵に回すリスクを十二分に理解している。彼らは歴史上の人物であり、数々の偉業や伝説が残っている。近年では70年前、ヨーロッパの国家一つをたつた二人で壊滅に追い込んだのだ。そして、国にとってこの二人にケンカを売る事はマイナスにしかならない。この二人と敵対することになれば、戦争になると言っても過言ではない。その圧倒的な力もそうなのだが……………彼らに勝ったとして、得るものはほぼ無いと言ってもよいだろう。彼らは世界各地にある拠点に逃げ、USNAを退去するだけであり、此方は戦争の代償として戦力を大幅に減らすことになる。よしんば研究所を抑えたところで、何らかの処置で資料など残すはずもない。

友好関係を結んでおけば、新兵器などの作成に協力してくれるだろう。さらに上手く行けば新たな魔法を生み出してくれる可能性もある。

敵対するなどもつての外なのだ。

「し……………しかし……………その若い男は……………」

「アンジェリーナ・シリウス少佐!!……………彼はドクターの助手です」

カノープス少佐は首を左右に振り、ワザと対外的な通名ではなく、部隊内で名乗っている本名で彼女を制する。カオス達の前でその名を出したのは彼らが敵ではないと認識させるためだ。

そして、カノープス少佐はカオスに深く頭を下げた。

「……………ドクター・カオスご無礼をいたしました。申し訳ありません」

「……………うむ。マリア、戦闘モードを解除してやれ……………で、その者、なぜうちの小僧と対峙していた

見た所殺傷力の高い魔法を使おうとされていた様だが、理由によって

は、今日の話は無しじゃ」

「それは……申し訳ございません。……総隊長、謝罪と経緯を……」

カノープス少佐は折角まとまった話が自分たちのせいで決裂しそうになり、気後れしそうになるが、改めてカオスに謝罪し、異様な姿の女、シリウス少佐にカオス達に謝罪とこうなつた経緯を話すように促す。

「……すみませんでした。そのドクターの助手の方とは知らずに……」

シリウス少佐は謝罪し始めたのだが……

「謝罪か……ならば、パレード（仮装行列）を解いて素顔を見せるのが筋じゃろう」

「!!……重ね重ね、し、失礼しました」

シリウス少佐はパレードという魔法を見破られたことに驚きながらも、謝罪し、対抗魔法パレードを解く。

パレードという魔法、無系統魔法に属するが、あらゆる対抗魔法を組み合わせたものだ。見た目の最大の特徴は、姿が変わる事なのだ。この異様な仮面に赤く獅子舞のような髪型はパレードによるものだった。

「申し訳ございませんでした。アンジェリーナ・シリウスと申します。その……彼が、向こうで倒れている人に触れていたのを不審に捉えたために……」

パレードを解いたアンジェリーナ・シリウス少佐。そこには異様な仮面に獅子舞の髪型の異様な姿の女性は無く、金髪・碧眼・ツインテール、三種の神器が備わつた絶世の美少女が現れたのだ!!

そう彼女が弱冠12才で統合参謀本部直属魔法師部隊スターズに正式採用され、現在16才にて総隊長を務めるUSNA最強の魔法師アンジェリーナ・シリウス少佐その人である。

軍の対外的な作戦行動中はパレードであるような姿になり、任務を遂行している。

因みに本名はアンジェリーナ・クドウ・シールズ、あの九島烈の弟

の孫にあたり、九島家の秘術である対抗魔法・仮装行列（パレード）が使用できるのだ。

その絶世の美少女が、俯き加減になり涙ぐみながら再度謝罪していた!!……していたのだが……途中で……

「僕！横島っ!!!超・絶ッ!!美人の君……!!僕とお茶しませんかっ!!」

その涙ぐんでしおらしく謝罪しているアンジェリーナ・シリウス少佐の両手を取って、横島は当然の如くナンパしだしたのだ!!

「えっ?ええっ?えええっ?」

シリウス少佐は目の前に急に横島が現れ、日本語で何やら、興奮しながら何やら訴えかけてくることに混乱する。

カオスとカノープス少佐とその部下2名はその様子に啞然とするばかりだった。

しかし、

「横島さん・その行為は・禁止です」

マリアはそんな横島にロケットアームを飛ばし襟首をつかみ、引き戻したのだ。

「マリア……!!離してくれ!!美人が!絶世の美人が目の前に居るんだ!!」

ジタバタと暴れる横島をマリアは羽交い絞めにし、ギリギリと絞め出した。

「マ?マリア?く、苦しい…苦しいって…:アレ?」

そして横島は完全に絞められ、ガクツと気を失う。

そんな一連の様子に、カオスは毒気を抜かれたの様に顔を和らげる

「まあ、良いじやろう。……そこの嬢ちゃん話してくれるな」

「は、はい」

カノープス少佐は、カオスと敵対することが無くなり、ギスギスしていた空間が奇しくも横島の突発的なナンパにより和やかな雰囲気

になつた事にホツとする。

113話 アンジェリーナ・シリウス

横島は今、絶世の美少女でUSNAが誇る精鋭部隊スターズの総隊長、アンジェリーナ・シリウス少佐と行動を共にしている。

「アンジェリーナちゃん！あそこの喫茶店で休憩とかどう？」

「横島さん、あなたは、殺人犯に狙われているのかもしれないのよ？」

アンジェリーナ・シリウス少佐は呆れたように横島を見る。

「どうせ現れるのが夜なんだから、大丈夫だって、一日中緊張しっぱなしだといざという時に力を発揮できないぞ」

「……それも一理あるわ。それと私の事はリーナでいいわ」

「俺の事も横島で、年近いし。そんじや、リーナ、喫茶店にレッツゴー！」

昨日、ダラスの郊外にある公園で、巷に噂される殺人鬼がその凶刃をふるい殺害した直後と思われる男女の亡骸に出くわしてしまった横島は、殺人鬼に顔を見られている可能性が高く、今まで目撃情報すら見当たらない犯人の用意周到さから、横島が付け根らわれる可能性が高いと想定された。ドクターカオスと MARIA が、USNA 某研究所の実験調査を行っている間、勘違いで横島を殺しそうになったアンジェリーナ・シリウス少佐がお詫びも兼ね直接護衛することになったのだ。

護衛のリーナとスターズ二等星級のニコラスという30代半ばの男と2名は、廊下での巡回監視又はホテル前に止めている車の中から監視カメラでの監視が主であった。

しかし、ホテルで大人しくしていればいいものの、護衛のリーナ達の目をまんまと盗んで街に繰り出し、成果の出ないナンパを繰り返す横島。いつの間にホテルからいなくなった横島を探すために右往左往させられ、結局街のど真ん中で、下手くそなナンパを見つけ連れ帰る。そんな事を3日続けていたのだ。

そこで、ホテルで大人しくしてもらおう事を諦め、あらかじめ年近いリーナが行動を共にすることになったのだ。

横島は絶世の美少女が直接護衛に付くとあって、リーナとうきうき気分です速街へと繰り出したのだ。

リーナはリーナで、どうせなら、横島が街をうろつく事で犯人をおびき寄せ、捕まえてしまおうと考えていた。

（神が与えてくれたチャンスなんや〜、美神さん以上の絶世の美女が文句ひとつ言わずについて来てくれるこのシチュエーション。逃したら次いつチャンスが舞い降りてくるか……しかもリーナちゃんは、どうやら世間知らずのお嬢様!!……生まれてこの方、これほどおいしいチャンスはあっただろうか？あんなの事や、こんな事、そして、キッスー!!やってやる!!やってやるでー!!）

今の横島の頭の中はいかがわしい事でいっぱいであった。

そんな横島の思惑なぞ知るわけもなく、横島について行き喫茶店に入るリーナだが、なぜかそわそわとしていた。

横島はリーナに席に付くようにいい。たどたどしい英語で二人分の飲み物を買って来る。

「横島は、なぜドクターカオスの助手を？」

「あ？あゝ、き、記憶喪失らしいんだが……なんかの実験の影響らしい、そんでなんやかんやでひろってもらった」

カオスは記憶喪失だという事にしておけば、この世界の世事に疎い横島が怪しまれることは無いだろうという事で、対外的にそういう事になっている。

「ご、ごめんなさい。悲壮感とかそういうものに無縁そうにみえたから、そんな理由が……」

「あはっあはははははっ、いいって、いいって。そんだから、俺は最近の流行りとか、この辺の事よくわからんから、この街で遊べるところってある？」

横島は携帯端末で何やら調べながらリーナに軽く聞いたのだが

「その……、よくわからないわ」

「ん？」

「その、私、友人がその……少なくとも……仕事もあるから、どこか出かけることがあまりないの」

リーナは俯き加減で寂しそうにそう言う。

幼少の頃から軍で訓練をし、12才ですでにスターズ入りしているリーナは同世代の友人は居ない。また、友人と遊ぶなどの行為をした事が無かった。

「……………つちこそ、ごめん……………じゃあ、折角だし今から、行くか！」

横島はさつきまでしていたワザとらしくカツコつけたような表情は曇り、何やら考え事をする仕草をする。

そして、明るい笑顔をリーナに向けた。

この時既に横島の頭の中に最初のスケベな企みは消えていた。

「え？どこに、なに？」

「まずは、その堅苦しい服から何とかしないと……………」

横島はリーナの格好を下から上へと見る。軍から支給されているだろう上下黒色のスーツを着込んでいる。

そう言つて、喫茶店からリーナを引つ張り連れ出し、しばらく中心街を歩き、高級そうな洒落な洋服店に入る。

「店員さん!!この子に似合う動きやすい服チョイスして!!」

横島はカオスからもらったブラックカードを片手に、手振り身振りと言の英語でリーナの服を用意してもらおう様に言う。

「かしこまりました!!」

店員全員が、リーナに集まってくる

「え？ええ？……………ちよつと横島？」

意気揚々とした店員さん達に囲まれ、メジャーなどで測られ、連れられて行かれるリーナ

そして、しばらくして……………恥ずかしそうに店員に連れられ横島の前に現れるリーナ

「……………いい!!」

淡い紺に白の花柄、短めのスカートに、上は白に近いグレーのニット、そして、黒色のブーツのリーナは少し顔赤らめて抗議の顔を横島に向ける。

「横島……………これはどういう事？」

「店員さー！ーん!!次よろしく!!」

「「喜んで!!」」

何故か日本の居酒屋のような返事が帰ってくるダラスの最高級店……どうも横島側の世界に引き込まれている様だ。

「え？また？」

次は、チエツクの短めのスカートには黒のトップスに白のハーフコート、そして、薄い黒のストッキング

「……フトモモが素晴らしい」

リーナは店員がなすがままに次々と着せ替えられる。

そして……

「横島！どういう事って聞いているの!?!」

リーナはどうとう横島に詰め寄って、思いつきり抗議をする。

「リーナ、どれが良かった？」

しかし、横島はそんなリーナの怒った顔など意にも返さず、ニコツとしそんな事を聞く。

「え？えーつと、うん、どれも素敵でわからないわ」

「じゃあ、店員さーん、最初ので!!」

「ええ？ちよつと、横島……え？」

店員さんにまたしても連れていかれるリーナ

そして、着替え終わったリーナと一緒に店から出てくる横島は元気よく声を上げる。

「うん、似合ってる!!やっぱりこうでない!!ではレッツゴー!!」

「ちよつと、横島、だから何なのよ!」

リーナは困惑しながらも、横島に引つ張られるまま、連れていかれる。

どうやらリーナ、悪意のない押しに弱い様だ。

そして……

テーマパークの前に到着。

リーナはその大きなアーチ状の門の前に立ち、少し顔を赤らめ口を開けたまま、その門を目をキラキラさせながらジッと見ていた。

「どうやら、来てみたかったらしい。」

ここはUSNA屈指のテーマパーク『魔法と剣の世界』、某キャラクターや映画の街のテーマパークに負けない集客力を持つ。そのテーマとは、中世の魔法のおとぎ話の国を再現、そして最大の魅力は、魔法を使った数々のアトラクションだ。実際に魔法師が何人もここで働いている。

そんなリーナを横目に横島はチケットを渡し。

「そんじゃあ、レッツゴー!!」

「……ダメよ横島、任務中なの……」

「うん?これ任務?、俺がここに来たかったからで、それにリーナが護衛としてついてきているだけ?、その服も、一般の人に偽装するための服装だし?、あんな服(軍配給のスーツ)では目立つだけだし、何より俺が嫌?」

「そ、そうんだけど……あなたがジッとホテルに居てればいい話でしょ!!」

「嫌だ……!!一日中お姉ちゃんも居ないようなところに引きこもるなど、もつての外!!しかもこんな美少女がついて来てくれるのに、出かない訳があるか……!!USNAに俺を束縛する権利もな……い!!」

屁理屈を横島に言わせたなら、リーナに勝てるわけが無い。

「でも……わ、わたし、こういうところに来たことが無いの……どうしたら」

「まかせなさい……い!!遊ぶ事に関してだけはこの横島!!最強だ!!」

何処からその自信が来るのかわからないが、胸を張って言う横島。

「でも、横島は英語がまともに……」

「何とかなるって!!心配性だなリーナは」

横島は英語をまともに話せないが、身振り手振りでも何とかしている。

まあ、コミュニケーションも難しい人外などを相手にしてきたの

だ。言葉の壁など、どうってことないのだろう。

そして、横島先導でアトラクションを回って行く。

「魔法と剣」と名を打っているだけあって、全体的に中性のヨーロッパを思わす町並みが形成され、アトラクションもそれに習って、その当時の雰囲気が出ている。また、巨大なドラゴンが空中に現れたりなどド派手なものまである。

魔法を使うアトラクションと言っても、攻撃魔法がドカドカ降ってくるわけでもない。そう言うのも一部あるが、簡単な視覚制御や加速魔法、重力制御魔法などを使い、高度の術式を必要としない。ほぼ大型CADを介して制御しているため、魔法師もそれ程の技量はいらないである。

リーナは横島の横で終始し楽しそうにはしゃいでいた。普段大人びた彼女だが本来の少女の顔を見せていた。

「横島！早く次行こ!!」

「ちよつ、リーナまつて、休憩、休憩だ……昼ごはんも食べてないし」「……いいわ、昼食が終わったらあれに行きましょう!」

「わかったって、はあく」

この頃、横島は既にリーナを妹のような扱いし始めていた、彼女の行動は見た目や言葉遣いと違い、明らかに幼いからだ。お絹よりも下、ヘタをすると、中学生上がった程度の見た目のシロと同じ位の扱いになるかもしれない。

終始楽しそうなりリーナと疲れ気味の横島は近くのレストランで遅めの昼食を取る事にした。

その頃このテーマパークの地下では、不審な人影が幾つも蠢めき出していた……

114話 リーナと横島

昼食を済ませた二人はリーナが昼食中にパンフを見て決めたアトラクションへと足早に向かう。

4Dアトラクション『世界紀行』

世界の秘境を体験できる体感型アトラクション。まるでその場に居るかのような感覚に陥る。

映像は実物を使用しており、見渡せば360度映像が見える。匂い、風、温度、湿度やその空気間まで味わえる優れものだ。シートに座り200人単位で360度見渡せる映画館のような作りになっており、まさに、魔法と現代技術が合わさってできた人気アトラクションの一つなのだ。

今の時期では、南極や北極、そして、氷山の海を過去の木造のガレオン船に乗ったかのような雰囲気味わえる。

リーナは目をキラキラさせながらその光景を見ている。

場面が切り替わる際

「横島！世界は広いわね!!」

リーナは興奮しっぱなしだ。

「しゅ〜!!他のお客さんに迷惑だ」

(はく、見た目は大人っぽいんだが……うくん)

横島は今日一日リーナとテーマパークまで遊びに来ているのだが……デートと言うよりは、年下の子の面倒を見るために連れてきたような感覚になっている。

しかし

プツン

急に映像が消え、変なノイズが走り、このホールは真っ暗になる。先ほどまで揺れや振動を伝えていたシート(座席)は大人しくなる。

「あら？終わり？」

「こんな中途半端なのは無いんじゃない？トラブルじゃないか、どうせ直ぐ復旧するって」

前方二つの非常口と、後方の入口、出口の四方から、何やら怪しげな一団が慌ただしく現れた!!

そして、非常電源が付いたのか、少し暗めの照明がこのホールを照らす。

同時にその一団はこのアトラクションの客達座っている200人を取り囲んだのだ。

しかし、その一団、奇妙な事に、全員着ているものがバラバラなのだ。警備員姿や、看護師姿。農夫やウエイトレス、漁師など様々な姿なのだ。そして一番異様なのは全員目元を隠すかのようなバタフライマスク（蝶々形をした目元を隠すマスク）しているのだ。

「!!アトラクションの続きね!!横島!!凄く凝っているわ!!」

リーナは興奮気味に喜ぶが……そんな空気は全くない。

「……………」

そんなリーナを呆れた目で見る横島、このパターンは危険な臭いしかない。横島の今までの経験がそう判断する。

ざわつき出す客

正面扉から何処かの暴走大統領にそっくりな60才前後の男がゆっくりと入って来た。

やはりバタフライマスクをしている。しかも全面金キラで宝石が散りばめられているゴージャスなマスクだ。

このホール正面、少し高くなっている場所に立つ。

「静まれー!!」

取り囲んでいる警備員の恰好をしたバタフライマスクの男がざわつく客達を一喝する。

暴走大統領そっくりな60才前後の男が右手を上げ一步前に出、何やら演説を始めたのだ。

「我々は世界の弱き人々の代弁者である人間主義思想『Ordinary People』の者だ!!魔法格差を撤廃を要求する者である!!そして究極には魔法師の排除を実現する者である!!彼らモンスターをこのままのさばらせていいものか!!奴らは、この国の中枢に位置し、自分たちの私腹を肥やし、我々一般人(ノーマル)を馬車馬のようにコキ使い家畜の如く見下しているのだ!!それでいいのか!!……否である!!我々、一般大衆こそが、この国、いや、世界の秩序を守るべきである!!」

そう彼らは、人間主義者を名乗る魔法排斥思想集団だが、その中でも過激派で知られ、魔女狩りと称して、魔法適正者や魔法師を殺害、誘拐し非人道的な実験を行ったり、人身売買を行っているテロリスト集団『Ordinary People』……日本語に訳すると『普通の人々』……なのだ。(この事についての突っ込みは私が後程お受けするとしよう)

その宣言が終わると、周囲を取り囲んでいる20名のバラバラのコスチュームだが顔にバタフライマスクを着用していた一団が一斉に銃やら、鉄球やら、ボーガンやら、ボールなどの武器を構えだした!!
観客は一斉に騒ぎ出す!!

「し……しまった。彼らはUSNAで最も危険なテロリスト集団の一つよ」

リーナはこそつと横島に耳打ちする。

「げっ、やっぱり……リーナ、魔法でなんとかならないか?」

「……CADをこのテーマパークに入る際に預けていて、上手くコントロールできないわ……それと、彼ら、全員アンテナナイトを装着しているわ……すでに何人かはキャストジャミングを発動している。魔法が使えたとしても暴走して、他の人達にも被害が出るかも……やられたわ、魔法は封じられた……」

リーナは悔しそうに横島にそう言った。

アンティナイトはエイドスをジャミングさせる事が出来る金属である。非魔法師でもサイオンさえ、注入すればキャストジャミング（魔法妨害）を発動できる代物だ。魔法を封じられたと言ってもいいだろう。

「どどどどどーするんだリーナ〜」

「落ち着きなさい横島、護衛の私が何とかしてみせるから、今は彼らに従いましょ」

リーナはさつきまでの、幼さはなくなり、キリつとしたスターズ総隊長の顔になる。

「静まれー！ー！！」

再び、銃を構えた警備員の男が客達に一喝する。

そして、暴走大統領はさらに演説を続ける。どうやら、この集団の代表者らしい。

「我々は断固として！！魔法を社会から抹殺する者である！！そう、君らは知らず知らずに魔法という甘い言葉に騙されているのだ！！我々の主張を聞けー！ー！！」

黄色いバタフライマスクを着けた普通のどこにでもいそうなおばちゃんが前に出てきた。

何故か鉄球を振り回している。

「一番、普通の主婦代表、オー○ドリー・ヘッ○バーン」
「嘘つけー！ー！！」

横島の激しいツツコミが聞こえる。どう見ても伝説のハリウッド女優には見えない平凡な中年の女性だ。

「最近、魔法師のせいで、野菜が高くなるし、電気代も高くなっているのよ、隣の奥さんなんて、魔法師の女に、旦那を取られたって、いやね〜魔法師って」

「……おばはん！！全然、魔法師関係ないやろー！ー！！」

横島のツツコミは切れ切れである。ちなみにリーナにすべて訳してもらっている上に、横島は日本語で叫んでいるため、相手にされない。

黒色のバタフライマスクを着けた、アフロヘアのラッパー風が次に出て来た。手には釘バットが持たれている。

「2番、普通の地元大学生代表、ライ○ネル・リッ○ー」

「……微妙……」

伝説のソウル歌手に似ているのは頭だけだ。

そのアフロは指を鳴らしながらラップで語りだした。

「ある日の散髪屋く!!俺の時、料金値上げ、なにすんだく!!次の客!スキンヘッド、魔法大学優等生くく奴半額!俺倍額!世の中不公平、奴、波平!!」

「……お前の髪型がな!!アフロはややこしいんじゃー時間も金もかかるんじゃー!!お前もスキンヘッドにせんかい!!波平はスキンヘッドちやうわくく一本残つとるわー!!」

横島のツツコミまたしても切れている。……魔法師関係ないじゃん客は全員思っているハズだ。

青色のバタフライマスクを着用した30代前半のパツとしないサラリーマン風の男が次に出てきた。何故か手にはチェーン・ソウ。

「3番、普通の地元営業マン代表、トム・ク○ズ」

「……どこに突っ込んでいいのやら、お前らよく恥ずかし気にそんな偽名乗れるな」

まったくもって、伝説の爽やか系ハリウッド俳優のひとかけらも似ていない。

そんな横島のツツコミなど聞こえないかのようにサラリーマン風の男が語りだす。

「彼女が生れてこの方出来ないんです!!……魔法師が居るからみんな彼らにとられるんです!!」

「あほかー!!魔法師関係ないやろー!!ナンパしろ、努力しろー!!」

しかし、横島のそのツツコミに返答が返ってくる。どうも日本語がわかるようだ。

「あなたは分かかっていない!!魔法師は生まれた時からのエリートコースにのり、将来を約束されている!!」

「エリート!! 将来が約束されている!!」

そんな言葉に食いつく横島!!

「そして、優秀な魔法師は、人工的に調整され、イケメンになるんです!! 僕も努力して、国立大学出たのですが、イケメンでもなく、エリートでもない僕は………魔法師なんて!!」

「………魔法師はんたーい!! イケメンはんたーい!! エリートでイケメンはんたーい!! イケメン格差社会はんたーい!!」

一瞬で30代男の前のでて、握手をし、涙をチョッキらせながら、魔法師反対を叫びだす横島!!

手の平を返すのも一瞬だ!!

そして、テロリスト達は横島の行為に称賛の拍手を送る。

「横島!! あなたがそっちに行つてどうするのよ!!」

「リーナ、だって、世の中の女の子がすべて魔法師に持つて行かれるんだ、きつとナンパがうまく行かないのはイケメン魔法師のせいだ!!」
涙を流しながらリーナに訴えかける横島。

「もう、別にナンパしなくてもいいじゃない」

そう言いながら横島の襟首をつかみ引つ張つて、客側に引き戻すリーナ。

暴走大統領そっくりな60才前後の男が間を置き、再び前に出る。

「フフフフフツ 我々の主張は十分わかつてくれだろうか!!」

何処に突っ込んだらいいのか分からない主張だ………こいつ等本当にUSNAが危険視するほどのテロリストなのだろうか？

続けて暴動大統領そっくり男はこんな事を言い出した。

「フフフフフツ、今しがた、この魔法を使った下らない下賤なテーマパークは我々『Ordinary People』がすべて掌握した!! このようなものは魔法を良く見せるため奴らの策略である。まんまと乗ってしまうとは全く持つて情けない………だが、そんな諸君らには更生の機会を与えよう!!………魔法師ではない者は、一人10万ドルで解放を約束する!! それがかなわないのならば、我々の目的の礎とな

り、消えてもらうか、一生鉱山で働いてもらうとしよう。……しかし、それではあまりにも一方的な要求となってしまう……諸君らが協力してくれるのならば……1万ドルで解放しようではないか……この中で魔法師や魔法適正者を見つけ、我々にしらせるだけでいい。……さらに、勇敢にも魔法師を捕まえ私達の前に引きずり出したのなら、タダで解放しよう!!」

やはりテロリスト、やる事がエグイ、危険なテロリストだという事だけある。

周りを囲んでいるバタフライマスクをかぶったテロリスト達は、再び武器を各々構え、客を威圧する。

再び騒ぎ出す客……

そして……客の中の一人の若い男が……ある人物を指す。

「そ……その女、入場ゲートで、CADを預けていたのを見た!!魔法師だ。こ……これで俺を1万ドルで解放してくれるんだろう?」

その指の先には……リーナがいた。

115話 横島対テロリスト

魔法排斥をうたう狂信的なテロリスト集団『Ordinary People』（普通の人々）はこのテーマパークを掌握し、客や従業員などから、命と安全と引き換えに高額な金額を要求。魔法師に対しては人権無視に捕縛を行っていた。

要するに、魔法排斥という主義を掲げながら、魔法師を高額取引される商品として扱い、さらに一般人からも金を巻き上げる。今回のテロ行為も、資金集めと、商品（魔法師）の確保を目的とされていたとんでもない連中だ。

そして、奇しくも、そんな事に巻き込まれとも知らずに遊びに来ていた横島とリーナは、とあるアトラクション内で、彼らに200人の客と共に囚われんとしていた。

「もうアカン!!みんな死ぬんやー!!」

横島は涙をちよちよきらせながら半狂乱に陥っていた。

そんな中テロリスト共は客の中から魔法師がいることを知らせる。またはとらえたものを解放すると宣言したのだ。

「あそこの女、魔法師です。入口でCADを渡していたのを見ました。これで1万ドルで解放してただけるんですよね」

客の中から若い男が声を上げ、リーナを指さし、テロリストにそう訴えかけた。

テロリスト共は、魔法師を見つけたものには、解放料として要求した10万ドルを1万ドルに減額、さらには、とらえたものはタダにする……

「……横島、落ち着いて、あなたは死なないわ。ジツとしていればいいだけ、貴方は一般人だしお金があるから解放されるはず……私なら大丈夫だから……」

リーナは横島にそう耳打ちしてから、客たちの中からテロリストの前に堂々と出る。

そして、キリツとした顔でテロリスト達に何か言いかけたのだが……
「あはっ、あのCAD……僕のなんです。その子に代わりに渡してもらったんだ。あはは」

横島がリーナの前に出て、テロリスト達に半笑いをしながらそう主張した。

「横島!?なにを……」

横島は何かを言おうとしていたリーナに、後ろを振り向き、足を震わせながらもグッドのサインをおくる。

そして、警備員の格好をしているテロリストが横島に向かって

「なんだ貴様、その女をかばうのか?お前のような、いかにも普通っぽい顔の奴が魔法師であるわけが無からう!!」

「そうだ!!そうだ!!」

それに呼応して、ほかのテロリストも賛同の声を上げる。

「普通で悪かったな……」

「いかにもモテそうもない、夜な夜な妄想でしか欲求を満たされない童貞面だ!!」

「三下の様な雰囲気な魔法師がいるか!!」

「お前のような明らかにギャグキャラ要員な奴が魔法師であるはずがない!!」

横島が抗議するも、テロリスト達は口々に横島が魔法師であることを、酷い理由(ある意味あっている)で、否定する声を上げる。

「お……お前ら……童貞でなぜ悪い!!モテなくてなぜ悪い!!どうせ毎日こき使われ、どうせギャグしか取り柄がない三下だ……ちくしょ……」

横島は涙をちよちよきらせながら、そんな雄たけびを上げる。
「……ま、まあいい、そいつは少し痛めつけろ!!」

暴走大統領にそっくりなのテロリストの主犯格の男は横島の雄たけびに引きながらも、他のテロリスト達にそう命令する。

そして、鉄球を持った中年の主婦。釘バットを持ったアフロの大学

生、デツキブラシを持ったウエイトレスの女性が一斉に横島に襲い掛かった。

「ななにを…お前ら、鉄球って何が普通の人々じゃ、普通の人はそんな物騒な武器なんてもってな…い!!い!!いや…!!お助け…!!」

横島の雄たけびもむなしくボコボコにされていく横島。

「な、横島!!…あなたたち、彼は一般人よ、私が魔法師よ!すぐにやめさせなさい!!」

リーナは暴走大統領そっくりの主犯格の男に戦闘態勢を取り、横島に行っている暴力行為をやめさせるように訴える。

「フフフフフ、魔法の使えない魔法師に何ができる。無駄な事を…うん? 貴様は…フフフフツ、これはこれは、アンジェリーナ・クドウ・シールズ。魔法師の名家のご令嬢ではないか…このリストによると、ほう、その年で軍に所属している様だな…」

暴走大統領そっくりな主犯格は、リーナの戦闘態勢構えを見て嘲るが…情報端末をリーナに向け、操作し、リーナの本名がばれたのだ。情報端末で顔を認識させ独自の魔法師リストとリンクし、検索できるようだ。しかし、リーナがスターズのしかも総隊長であることまでは、情報を持っていない様だ。

そして、残虐な顔になり笑いながら、テロリスト達に命令する。

「このご令嬢も徹底的に痛めつけてやれ!生きていれば手足が無くてもよい、死なない程度にな!フハハ!見せしめだ!!まずはこの女を血祭りに上げる!!フハハハハ!!」

リーナは暴走大統領そっくりな主犯格が、話を進めている間、戦闘態勢を取りながら、ジリジリと移動し壁を背にしていた。

他の客が巻き添えを食わないようにするためだ。

そして、銃や大型ライフル、マシンガン等を構えたテロリストが、リーナを囲む。

そして銃を持った警備員の格好をしたテロリストが

「まずは俺からだ、魔法師に裁きの鉄槌を」

そう言いながら、銃をリーナに向け弾丸を放つ。

リーナは銃口の方向から、弾道を予測し避けようと動くが、近距離のため、急所を避けるのがやつとだろう。

しかし……

「リーナ!!」

テロリスト共にボコボコにされていたはずの横島がリーナの前に立ち、左手を前に突き出し、弾丸を防いだのだ。その左手の平には六角形の半透明の盾：サイキック・ソーサーが形成されていた。

「横島!?!」

「なに!?!」

その光景にリーナ、そしてテロリスト共も、驚愕な表情をし驚きを隠せないでいた。

先ほどまで、ボコボコにされ血だらけだった顔面はもとに戻り、いつの間にか囲いを突破し、リーナの目の前に現れたのだ。

「キャストジャミングが効かない?! いや、出力を上げろ!!」

「かまわん、その男共々、血祭りにあげろ!!」

テロリスト共は今度は3人が、一発づつ、弾丸を横島とリーナにめかけ放つ、……しかし、横島のサイキック・ソーサーにすべて、遮られる。

「ええい、何をしている。一斉に撃て!! その男は死んでも構わん!!」

リーナを背にした横島に3人のテロリストは、銃、大型ライフル、マシンガンをそれぞれ連射し放つ。

「ぐわー!! 3人って卑怯だぞ——!!」

涙をちよちよきらせながら、横島は右手に光り輝く霊気の剣、ハンズ・オブ・グロリーを発動させ弾丸を切りつつ、左手のサイキック・ソーサーで弾丸を悉く阻んだ!!

「……横島!!」

むちやくちやな体裁きだが、動きは素早く、弾丸を防いでいく横島に目を丸くし驚くりーナ。

さすがの横島も、この弾丸の嵐には、そう長く持ちそうもない。

「あ……アカン!!………あつ、美人のねーちゃんがあんなところで生着替えを!!」

そう言つて、明後日の方向を顎で指ししめす。

この状況で、着替えをする美人は居るはずもない……

しかし、銃器を構えるテロリスト3人は、横島が示した方向を一瞬チラ見する。

……このテロリスト共、どこか抜けている。

その隙に、横島は次の一手打つ。

「今だ!!サイキック猫だまし!!」

三人がこちらに向き直った瞬間、目の前で眩い光がスパークし、目がくらむ。

目をやられたテロリスト達をよそに横島はリーナの手を引っ張つて、客が集まっているホールの真中に移動し気合を入れる。

「久々!!……防御のイメージ!!」

ストックしていた文珠を地面に叩きつける。文珠には防の文字が浮かび上がっていた。

すると、客全員を囲む大ききの半透明のバリアが展開されたのだ。

そんな横島の行動に気が付いたテロリストたちは、すぐに追撃を加えてくるが、すべて文珠のバリアが防いでいた。さらに、全員での攻撃で攻勢を強めるが、結果は同じであった。

何故だか、文珠を発動させた際も、横島は謎の頭痛と吐き気に苛まれる。そして、何時ものあのとてつもなく辛いイメージの映像が頭に流れてくるのだ。

「くはっ、オエー、グう」

横島の予想外の活躍に戸惑っていたリーナだが、苦しみだし、蹲る横島にしゃがみ込み背中をさする。

「よ……横島!しっかりして!!どこか怪我を、弾丸が当たったの!」

横島は悶絶しながらも、心配そうに横島の顔を覗くりーナを見やり

「………煩惱全開」

ボソつとつぶやく、横島苦しみを緩和するためにこの状況下で煩惱パワーを作り出した。

対象はしやがむリーナのスカートの中から見えるパンツとフトモモだった!!

「ふうく、ありがとう、リーナ」

痛みと吐き気が収まった横島は座り込みながら、一息ついてリーナにお礼を言う。

リーナは何のお礼なのかはわからないだろう……知らない方が本人のためである。

「よかった……横島……私何もできなかった。横島の護衛なのに、逆に助けられた。ごめんなさい。魔法がないと私、何もできないのね……」

そんな横島の様子にリーナは安心するが、俯き謝りだした。

「いいって、いいって」

「それにしても、横島も魔法師だったのね。しかも、キヤストジャミングを発動させても、暴走するエイドスを抑えるだけの技量と精神力を持っている……それに、この物理障壁……すごいわ」

リーナは顔を上げ話題を横島の先ほどまでの活躍移し、賞賛を送る。

「あはっあははっ、いやー魔法師じゃないんだけどなー、あと、このバリアも長くはもたない、こんだけ攻撃喰らってれば耐久力が追いつかないな……あいつらどんだけ武器持ってんだ？普通じゃないな……でも、もうそろそろだ。あいつらもお終いだ!!」

横島は屈託のない笑顔をリーナに向けるのだが、今は大丈夫だが、このバリアがなくなればピンチな状態に逆戻りである。それにもかかわらず、すでに助かったようなものの言い方をする。

お互い床に座り込み向かい合って、かなり顔が近い位置にあるが、今の横島は気にはなっていないが、リーナはそんな横島の笑顔に意識しだし、顔が赤らんでいた。

116話 天災錬金術師ドクター・カオス

文珠……

横島を最強たらしめていた必殺の術、100年以上前の魔神アシユタロスとの戦いで唯一対抗出来た術と言っていていいだろう。霊力をビー玉サイズに凝縮したもので、特定のイメージを漢字一文字で表現し封入させることで、様々な事象を再現できる術である。

今回は防御をイメージし漢字一文字『防』を文珠に封入し、防御結界を発動させている。

『力の方向を完全にコントロールする能力』と言われているこの術、まさに、文珠さえあれば、どんな技や事象も漢字一文字で表現できるものならば再現できてしまうのだ。

文珠で発動する事象は生成時の霊力の凝縮具合でも変わる。横島の霊力の上下により、同じ『防』の防御結界でも、耐久力が比例して変わる。

さらに、応用範囲も広く、文珠を複数コントロールし使用することで、強力な事象も再現できる。

横浜に瞬間移動などをしたものならば、転・移・横・浜と文珠4つ使用で可能だろう。

但し、複数を同時にコントロールするには超人的な精神力が必要とされ、17才の横島は2文字が限界であった。

何でもできるようでも弱点もある。一個生成するのに莫大な霊力が必要とされるため、多量生産できないのだ。それ以外もあるが大まかにはこのような感じである。

テロリストに襲われた200人の客と横島とリーナは、横島が文珠で生成した防御結界の中に身を隠していた。

リーナは横島の顔を覗き込むような座り方をし、お互いの顔が息がかかる位の距離にリーナは妙に横島を意識してしまい顔を赤らめる。

その間、テロリスト集団『Ordinary People』（普通の人々）はその防御結界に一斉攻撃を行っていた。あるものは、鉄球、あるものはマシンガン、あるものはチェーン・ソウと武器もバラバラであるが、何らかのカスタマイズされているのか威力が高い。そんな猛攻に文珠の防御結界が限界に近づきひびが入りだす。「もう少しだ!!攻撃の手を緩めるな!!魔法師に裁きの鉄槌を!!」その掛け声で更に、攻撃の威力がますます。

横島はリーナの肩に手を掛け、立ち上がり、相手の暴走大統領そっくりな主犯格の男に向かって崩壊寸前の防御結界中からこんな事を言い出した。

「おーい!!そろそろ逃げた方がいいぞ!!」

「フッフッフ何をバカな、その障壁はもう持たないではないか、無駄な抵抗をやめるのだな」

「あーあ、一応警告したからな……………穏便には……………ムリかく、巻き添えだけは勘弁してほしい」

「何をブツブツと、そくれ!障壁は崩れ……………」

ドガーーーーー!!!!!!

何かが発発するような音が聞こえたと思うと、暴走大統領にそっくりな主犯格の男は、その衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。それと同時に文珠の防御結界は崩壊した。

あたり一面、もうもうと砂埃が立つ。

ズシャーーーーーー!ズン!

「マ、マリア急に飛び出す奴があるか!!わしをもっと丁寧に扱わんか!!」

「イエス・ドクター・カオス、横島さんに・危害を加える反応あり・その要求は・優先順位下位」

そんな会話が、煙の中から聞こえてくる。

テロリスト達は、突然の爆発に慌てふためいていた。

「静まれー！ー！！状況報告を！！」

そして……………煙が晴れる。

「なんじゃ、小僧、またトラブルに巻き込まれておったのか？お主が大
人しくせんと、わしもじっくり検証実験が出来んではないか！！」

「横島さん・健康状態良好・良かった」

漆黒のコートを纏った紳士風の老人、天才錬金術師ドクター・カオ
スと薄い赤い髪の無表情な美人、魔女マリアがこの建物の天井を突き
破って、現れたのだ！！

「マリアくく、助かった！！」

「イエス」

「カオスのじいさん、こいつ等、『普通の人々』とか言うテロリストで、
魔法師の人身売買とかやっている連中なんだけど、このテーマパーク
を乗っ取ったうえ、リーナと俺を殺そうとしやがるんだ！！」

横島はカオスに近づいて行き、簡単に今の事態を説明する。

「何！！わしの貴重なサンプル（横島）を亡き者にせんと！！しかも、その
せいでわしの崇高な検証実験の邪魔を！！ゆるせんくくく」

「なな、なんだ貴様らは！！」

暴走大統領にそっくりな主犯格の男は埃をかぶりながらも、突然現
れたドクター・カオスとマリアに向かって怒鳴り上げる。

その後ろには、混乱から立ち直った、テロリストのメンバーが武器
を構え対峙する。

「先に、己から名乗るのが筋じゃろ……………まあ、よいか……………」

恐れ慄け！！数々の現代魔法を生み出した天才錬金術師にして、10
00年の時を過ごしヨーロッパの魔王とまで呼ばれたドクター・カオ
スとはわしの事じゃー！ー！ー！ー！！フハハハハハハハハハハツ
！！平伏せよ！！

……………折角じゃマリアも名乗ってみよ！！」

「……マリア」

「マリアはその一言だけ発する。」

「マリアそれだけか？面白くないのく、もつとこうないのかのく？」
「カオスは完全に面白がっている様だ。」

「な……な……なに……!!あの迷惑千万、変態錬金術師ドクター・カオスと魔女マリアだと……!!……!!……!!我ら、人間主義の最大の敵!!……!!ぐぬぬぬぬ、ここで会ったが100年目、皆の物、あのジジイと魔女を亡き者にしろ……!!」

暴走大統領にそっくりな主犯格の男は怒りをあらわにし、部下にカオスを殺すように命ずる。

「おーい、お前ら!!あのじいさんを刺激すんな……!!」

横島は遠くから、テロリスト達にそう注意を促すのだが……手遅れであった。

「フハハハハハッ面白い!!このドクター・カオスにケンカを売るとは!!久々に血がたぎるわ!!マリア!!遠慮はいらん。あ奴らを吹き飛ばせ!!」

「イエス・ドクター・カオス……デストロイモードに・移行」

「わ……!!、まったあ!!カオスのじいさん待った!!このテーマパークには一般人もたくさんいるんだ、しかもテロリストに捕まつて、人質になっているかもしれない。平和的に解決を……」

横島はカオスを慌てて止めようとするのだが

「そのような些末な事はわしゃ知らん!!あの奇妙な蝶のマスクの連中がテロリストなのじゃろ？それ以外は邪魔じゃ。面倒じやの……巻き込まれたく無くば逃げよ!!さもなくて、一緒に寝ておれ!!」

カオスは平然とそんな事を言っただけだ。もうこのテーマパーク全体がカオスのターゲットになり、一般客も巻き添え確定となった!!
「イエス・ドクター・カオス」

「あ……!!、そんなこつたと思つた……!!」

最早この二人を止められない。

この超展開にリーナは付いていけず、口をあんどりと開け、呆然とこの様子を見ているだけしかできないでいた。

横島はそんなリーナを引つ張り、全速力で逃げだした。

「り、リーナ、巻き添えを喰らうぞ!!逃げるぞー!!」

「フハハハハハッ!!動くものはすべて、叩きのめー!!す!!やられたく無くばジツとしておれい!!カオス式雷光じゃー!!」

そう言つてカオスは両手を上に上げる。

すると、両手から凄まじい光を発しながら稲妻が走り、この建物全体スパークし電流が走る!!

一般客も、テロリスト共に容赦なく電気ショックの餌食となり、ほとんどもが気絶する。

横島は逃げながらも建物に電流が流れる瞬間リーナを抱き上げ、ジャンプする。

「何するんじやー!!このじじいー!!」

何とかカオスの電撃をかわしたのだが……

「フハハハハハッ、さらにどうじやー!!」

カオスは雷の柱をそこら中に顕現させる。

「ふぎやー!!!!こんなばっかしく」

横島は必死に避けていたのだが、頭上から落ちてくる瓦礫が頭に直撃する。

リーナに当たりそうになったものをワザと避けずに喰らっているのだ。

その間、マリアは、手を上に掲げると、手から太く収束したビームのような光線が出し、建物の天井を吹っ飛ばし、そのまま、上空に向かうが、途中で止まり、細かなビームの雨となってテーマパーク中に降り、建物を破壊しながら、バタフライマスクをしたテロリストの連中を、次々に気絶させる。

「マ…マリアまで…！！めっちゃくちやだ…！！」

ドクターカオスとマリアは半壊した建物から飛び出すと、直立戦車が10両がカオス達を囲んだ。

真中には、明らかにあの暴走大統領が乗っている物だと分かる全身金ピカのゴージャスが外部スピーカーで叫ぶ。

「あの悪魔のじじいを殺せ…！！」

そして、一斉に直立戦車からマシンガンやらロケット砲が撃ち込まれる。

しかし、マリアが腕から魔法で強化されたマシンガンを展開させ迎撃し、ことごとくを粉碎。カオスは結界をはり、全くの無傷。

「もう、あかん、あんなものを出したら…！！」

横島はリーナを抱きかかえたまま涙をチヨチヨ切らせながら、今も全力でカオス達の攻撃を不格好に避けている。

そう、さつきからテロリストどもはカオスを刺激しているだけで、最悪な状況へと誘っているだけだった！！

「フハハハハハハハッ！！わしにメカ勝負を挑むとは…！！面白
い！！出でよ！！ビッグM！！ショータイム！！」

カオスはノリノリだ。最早誰も止められないだろう。

そして、地下からは…ズン…ズン…と奇妙な音が近づいてくる。

ドガ——ン！！

地面が割れ、メイド服を着たマリアがその割れ目から飛び出すように現れた！！

…縮尺がおかしい…20分の1マリアではない、20倍マリアなのだ。推定35メートル。

とんでもない物を作っていた！！しかし、メカというよりも魔法で動いている感じだ。

「ああああ！！やっぱ…！！もうダメだ…！！」

横島の嘆きはもはや誰にも届かない。

そして、カオスとマリアはそのビッグM（マリア）に乗り込み外部スピーカーで!!

「フハハハハハッ、魔法科学の粋をつぎ込んだこのビッグMそんな不細工なメカにやられわせん!!マリアー!!アレをやるぞ!!」

「イエス・ドクター・カオス」

「ダブル・マリア・コレダ——!!ポチつとな!!」

ビッグMいや、巨大なメイド服のマリアが両手・両足を放電させ、そのまま地面に突き刺し、凄まじい電撃を一気に放出したのだ!!そしてこのテーマパーク全体が電気の渦に包み込まれる!!

……どっちがテロリストなのか分かったもんじゃない。

テロリスト達の直立戦車はプスプスと煙を立て、崩れ落ちる。

テーマパークの建物すべてがプスプスと煙を立てながら崩れ落ちる。

横島の頭もプスプスと音を立て……煙が上がりアフロヘアに……そして崩れる様にその場に倒れる。

「よ……横島!!しっかりして!!」

リーナを庇うためにすべてその身に雷撃を受けていたのだ。

そして、

「ハーハーハッハッハーハー!!」

テーマパークには動く人影はなくなり、ドクター・カオスの高笑いだけがこだましていた。

幸いにも、客は無傷または軽傷で済んでいる。

テロリストも死亡者ゼロで全員逮捕された。カオスの関係者（横島）に手を出したのが運の尽き。

世界に厄災をまき散らすドクター・カオス、絶対関わっていないは行けない度ナンバー1の人物だった。

しかし、テーマパークはめちやくちやに崩壊し、再建のめどはたた

ない。

殆どがカオスが壊したのだが、何故だかすべてテロリストの所為になる。

大人しくテロリストに従っていた方が被害が少なかったのかもしれないが……

今回、一番重傷だったのは何故かドクター・カオスだった。カオスの行動で横島までもがまきぞいを喰らったため、マリアの折檻がカオスを命の危機レベルまで続いたからだだった。

時が経ち12月中旬……横島達は……

「タダオ、今日は何処に連れて行ってくれるのかしら？」

リーナは嬉しそうに横島の腕を取る。

「リーナ……いかん!!腕にアレが当たっている事は顔に出してはいかんだ!!とてつもなく気持ちいが!!クールに装わないと!!……アレ?マリアなんで絞める?ギブ、ギブ……!!」

横島はリーナに腕を組まれリーナのふくよかな部分が当たり、我慢をしようとしたが、つい声が漏れていた。マリアはそんな横島を見て反対の腕を取るのだが、何故かかなりの力で絞める。

どうやら横島は前途多難なようだ。

117話 日本政府が動く

横浜事変から約1か月半が経った12月中頃

日本政府はとある緊急事案について会議を設けた。

出席者は、官房長官、外務省長官、防衛省長官、内閣府情報管理局局長と各省の部長クラスと、日本国の政治の中心を担う錚々たるメンバーだ。そして、参考人として国防陸軍第101佐伯広海少将と風間玄信少佐が参加しているがこの二人は急な呼び出しで会議の詳しい内容は聞かされていない。

官房長官がこの場を取り仕切り発言する。

「佐伯少将、その横島忠夫という少年が本当に横浜で見せたあの『救済の女神』の使い手なのだな」

「はい、私共はそう確信しております」

「氷室家は何と言っている？」

「その件については黙秘しておりますが、14代当主氷室恭子殿は横島少年の事を家族だと言っております」

「ふむ、信憑性は高まるという事か……情報管理局の方ではそのことは？」

「情報管理局としても、横島少年が氷室家の人間であることは確認しております。但し、『救済の女神』であることは判明できません」

情報管理局局長は官房長官の質問に答える。

「横島少年は横浜事変以降行方不明だという事はこちらも報告を受けている。『救済の女神』の使い手が所在不明であることは、こちらとしても憂慮すべき問題である。さらに防衛省からの報告では、11月1日の戦略級魔法による濟州島攻撃の際に、現れ、阻止したとあるが、その後、死亡となっている。この件についての見解を求めろ」

防衛省長官がその件について答える。

「我が軍所屬の戦略級魔法師によるマテリアル・バーストを敢行したのですが、失敗に終わりました。直後の映像から、マテリアル・バーストを阻止したと思われる人物が映し出されておりました。しかし、

その人物は力尽き、海に落ちていったことを確認しています。画像の乱れが酷くその人物を確定するのは困難ではありますが、状況、その他要因から我々は横島少年だと判断しております。そしてその人物は死亡したと当方は結論付けております」

「なぜ横島少年が敵国である濟州島に現れ、作戦を阻止したのかね」

佐伯少将が答える。

「理由は分かりかねますが、氷室家14代当主氷室恭子殿も、この映像を確認し横島少年だと考えているようです」

風間少佐が挙手し、続けて答える。

「理由になるかどうかは分かりませんが、横島少年という人物は、私どもも独立魔法大隊と何度か接触しており、我々の作戦を妨害するような行為も行っておりました。情けない話ですが、彼一人に翻弄され、我々の作戦自体は失敗に終わっておりました。しかし彼の行動により結果的には日本国にとって当初予定していたよりも有益な結果を得ております。

今回も同様です。彼があので済州島攻撃を阻止したおかげで、結果的に大亜連合の北東方面防衛網は崩壊せずに済み、新ソビエトの介入も防ぎ、さらに我が国と停戦協定を結び、我が国と大亜連合、新ソビエトの軍事的緊張状態は緩和されました。

彼がなぜそのような行動をとるのかは全く持つて不明ですが、彼がどこかの組織のものであるとは思っておりません。彼、本人の思惑、いえ個人的感情により行動しているようですが、結果的にわが国にとって有益なものとなっております」

「少佐……我々はある意味、彼に救われたという事か……マテリアル・バースト……あれを阻止できる人間がいるとは………少佐、佐伯少将……もし、彼が敵に回っていたならば、止められたか？」

風間少佐は、佐伯少将に目配せしてから答える。

「………彼亡き今だから正直に申し上げます。彼と敵対すべきではありませんでした。彼が敵となり現れ我々と対峙するならば全力をもって対処いたしますが、こちらの被害は多大なものとなるでしょう。それこそ我が国の防衛ラインが崩壊するぐらいに。彼の能力は

『救済の女神』ばかり目が行っておりますが……それは彼の能力の一部だと考えております。本気を出し手の内を見せた彼がどれだけの能力を持っていたのかは今は知りようがありませんが……この場では不謹慎ではありますが彼が死亡したことにホッとしている次第です」

会場は風間少佐の言葉にぎわめきが始まる。

官房長官もその言葉に驚きを隠せない。

「……………うむ、それほどなのか」

そして、官房長官は次の言葉を出した。

「では、本題に入ろう……………横島忠夫少年と思わしき人物の情報が相次いで入ってきた。彼が生きている可能性が高い」

「なっ!!」

「……………!!」

風間少佐と佐伯少将は驚きの顔を隠せないでいた。

外務省の部長が挙手をし語りだした。

「その件については私から報告いたします。さる10日前にUSNAで起こった人間主義者たちによる大規模なテロ事件についてです。ダラス近郊にある『魔法と剣の世界』というテーマパークがテロリスト集団『普通の人々』に一時的に占拠する事件が起きた事はご存知でしょう」

佐伯少将が相づちを打つ。

「あのヨーロッパの魔王ドクター・カオスと魔女マリアの介入によって、解決した事件でしたね。あれほどの破壊を起こして、死亡者が出ないなど、私共もメディアの映像解析を行ったのですが……普通に考えてあり得ない。情報操作を行ったと判断いたしました……」

佐伯少将麾下でも数十年ぶりに表舞台に現れたドクター・カオスの戦闘シーンが映し出されたとあって、どのような魔法が使われているのかなど、興味をもって解析していたのだ。

通常では考えられないような魔法などの数々写しだされていたため、解析班は興奮しながら、徹夜で解析を進めていた。

外務省の部長は続けて

「我が国の邦人も、当時あのテーマパークにツアー等で40名ほど訪れていたのですが、幸い全員、無傷でして……その中の幾人かの証言で、日本人らしき少年を見たと言う者がありました。渡航記録などから、その少年について情報はありませんでしたので、当初は現地の日系人だと思っておりました。」

しかし、何やら大声で奇声を上げながら、テロリストから客を守っていたというものでした。しかも日本語で時折関西弁も混ざっていたとか……」

情報管理局局長がその後、挙手をし発言する。

「当時現場にテロリストの人質になっていた際、助けに入った少年は、連れの女性から、ヨコシマと呼ばれていたとの事です。さらに詳しくメディアの画像解析を行ったのですが、確かに少年らしき人影が連れの女性と共に、ドクター・カオス氏の攻撃を回避しているような映像が映っております」

「……………」

佐伯少将と風間少佐はその情報を聞き、驚きと共に背中に冷たいものを感じた。

風間少佐は関西弁で叫びながら、ドクター・カオスの攻撃をかわす少年……それを横島の姿とかさねるとしつくりくるのだ。しかし、マテリアル・バーストをまともに喰らって生きている人間など……………」

続けて外務省部長は発言する。

「外務省から人を派遣し、現地の調査を行っておりますが……今のところ、その少年の行方は分かっておりません、引き続き調査をしたいのですが、テーマパークテロリスト事件についてUSNAも相当重要視しているようで、現地は緊張状態で調査もままならないとの事です」

官房長官はこれらをまとめて宣言する。

「横島少年は生きていると判断する。しかも彼は何故か今USNAにいます。しかしそのような事はどうでもいい。彼一人で我が国が誇る国防軍の軍事力に匹敵し、さらにあの世界最強の防御魔法『救済

の女神』の使い手だ。USNAに亡命などされたら、我が国とUSNAの関係も崩れるやもしれん。現在USNAとは同盟関係であるが、物資ではUSNAが勝り、魔法技術は我が国が先んじているおかげで、対等な同盟関係を維持している状態だ。

すでに、彼がUSNAに亡命している可能性もあるが、そのような情報は今のところ入っていない上、彼に関する情報は一切USNAから入ってこない事から、USNAは、彼の存在を知らないと見た方がいい。『救済の女神』の使い手の情報は他国にわたっていないはずだ。速やかに、彼と接触し、我が国に戻ってもらわなければならぬ。しかし、彼はどうも我が国の国防軍には、良い印象を持っていない様だ。

彼を軍属にしなくとも、彼が日本にとどまっているだけでも、十分な価値がある。

!!
なんとしても、我が国に戻ってもらう様に各人、手を尽くしてくれ

そのために総理大臣からはこの件についての権限を官房長官である私に一任された。情報操作は許可するメディアの排除または、風聞の助長は、それ相応の力を使い最大限に利用してよい。ありとあらゆる手段を用いることを許可する。

我々の国の国防と同盟関係に関する危機的事案である」

官房長官がそう宣言した後、会議室は一時静まり返った。

静寂の中、内閣情報管理局局長が次のステージへとこの事案を進めて行った

「それでは……実際の動きと権限について今から打ち合わせを開始します。……各人この資料を見てください……………」

大きくは二つの事案である。

一つは横島忠夫の所在確定と現状の情報収集。

一つは横島忠夫を日本国に戻すための交渉材料を手に入れる事。

外務省部長などから横島の性格等、彼との交渉材料を得るための情報提供を風間少佐は求められたが、実際にわからない事が多い。

横島の能力ばかり目が行き、普段どのような生活をしているのかや心情などを詳しく考察していなかったのだ。

改めて、達也と響子から得た情報からまとめしていく。

普段はスケベでバカでクラスのムードメーカー、友人も多い。第一高校の風潮により、二科生は下に見られ不遇を得ることが多いが、本人は全く気にしていないとの事だ。一部の一科生からは目の敵にされている一方、十師族の子息をはじめ、学内有力な生徒との親交は極めて優良、二科生からも人気があるそうだが、女生徒からは不人気な上、嫌われている様だということだ。

勉強については魔法以外の科目は極めて優秀。魔法も徐々にできる様になったとの事だ。

妹以外他人に興味がない達也からもかなり信頼を得ていることも感じている。

さらに、九島烈とも友人関係を持つ。また、九重八雲とはナンパ仲間だと言う。

何とも、可笑しな人間関係を築いており、それが逆に魅力的にさえ写る。

それだけでは、彼がどんな考えを持っているのか、何を欲しているのかは分からない。

今、欲しい情報は横島忠夫という少年が、何を欲していて、何の条件を出せば日本に戻るだけの理由が出来るのかである。

達也の報告では、彼の行動について報告を受けているが、当然ながら心情や考え方などは受けていない。

その事について、今さら達也に尋ねるわけにも行かない状況だ。

四葉家から、達也の軍への協力と接触を凍結させられたからだ。理由は四葉家当主に断りなく、マテリアル・バーストを使用した事によるペナルティーだそうだ。特に横島の顛末を聞いた当主四葉真夜は、凍るような視線を1001旅団制服組担当者に向けたとの事だ。ここは素直に従うしかないのである。

現在、風間少佐達では現状これ以上の情報を取得するすべはない。

また、横島搜索チームに独立魔装大隊から藤林響子を派遣すること

になった。

結局現状では横島忠夫についての情報が少なく、交渉材料に何を
持つて行けばよいのかも見当がつかないため、本人について情報収集
を行う事になる。

まずは、氷室家、次に横島の友人関係からである。

警察省公安庁部長からの提案で、行方不明者の情報提供を願い出る
形で、第一高校に入り、横島の友人関係から、情報を得るとい
うものだ。幸いにも第一高校には公安庁の秘密捜査官が中に入っている。
1年E組のカウンセラーを行っている小野遥である。彼女の協力を
元に実施することが決定された。

118話 横島がいない第一高校

12月中旬第一高校

1年A組のホームルームで、担任教諭から放課後に会議室に来るよ
うにと、ほのか、雫、深雪の3名は言われていた。

何でも、警察から行方不明者について、聞きたい事があるとの事
だった。行方不明者とは勿論、横島の事である。

それを小耳にした心ないクラスの男子達は、嫌な笑みを浮かべなが
ら談笑していた。

「行方不明者ってアレだろ？アホの横島だろ？俺たち、横浜のあの事
件で生き延びたって言うのに、あいつ何にもない京都で行方不明つ
て、やっぱ所詮ウィード（二科生）だな」

「九校戦のアレはまぐれだったんだ。そうじゃなきゃ辻褄が合わな
い」

「行方不明って、もう1ヶ月半だろ？どっかで野垂死んでんじゃない
か？」

ガタン!!

「横島さんは死んでない!!」

雫は勢いよく立ち上がり、そんな男子たちに涙ぐみながら睨み付け
た。

普段おとなしい雫が感情を露わにし叫んだ事に、談笑していた男子
たちはビクつとし驚きの表情で雫を見ていた。

「男子、いくら何でも不謹慎よー」

ほのかは、雫のそばにより肩に優しく触れてから、男子に向かい抗
議する。

周りの女子もその男子たちに抗議の目を向けていた。

「わ、悪かったよ」

「冗談が過ぎた」

男子は居心地が悪そうに、そう謝り、教室をそそくさと後にする。

そもそも、この話は今の男子たちだけがしているものではない。

この頃学校では横島が既に死んでいるのではないかと実しやかに囁かれ、噂に尾ひれが付き、あちらこちらで流れていたのだ。

雫は噂が上がり出した頃、信じてはいなかったが、学校中にその噂が流れ、あちらこちらで耳にする。しかも本人が1ヶ月半も連絡がつかず、頼みの綱の氷室家にも音沙汰がない状態だったのだ。何時もすぐそばにいてくれた横島が生死も知れない今の状態が不安で仕方が無かったのだ。

我慢し感情を抑えていた雫は遂にたがが外れてしまったのだ。

「ほのか……横島さん……本当は……」

雫は涙を溜めながら上目使いでほのかにこんなことを言う。

「雫が横島さんを信じないでどうするの？知ってるでしょ、雫が好きなのは世界で一番強いんだから、きっと何か理由があって戻ってこれないだけなんだから」

そんな雫をほのかはガッツポーズを見せながら元気よく励ましていた。

「雫、気にしてはダメよ……」

深雪も眉を顰めながら、雫を励ますのだが、どこか説得力が無い。

深雪は知っていた。横島が既に死亡している事を……しかしこの事は誰にも言う事が出来ない。ましてや、雫には絶対言えないだろう。

深雪はあの日、横島を殺してしまったと、嘆く達也の姿が頭から離れないでいた。

このうわさ話や、横島の話を知った時にその苦しそうにする達也を思い出してしまうのだ。

達也の嘆き、雫の悲しみ両方を知る深雪も、その板挟みになり苦しんでいた。

3人は会議室に向かう。

会議室には、同じ理由で呼ばれたのだろう真由美をはじめとする新

旧生徒会メンバーと摩利達、新旧風紀委員会メンバー、そして、十文字克人、1年E組のレオにエリカ、幹比古、美月そして達也が集まっていた。

「あつ、深雪、雫、ほのか、こっちこっち」

エリカが深雪達が会議室に入ってきた事に気付き、手を振って、自分たちが座っている一带に誘う。

何時もの面々はそれぞれ適当に挨拶をし、深雪達も席に座る。

「ったくよー、今頃これかよ、横島いなくなってもう一ヶ月半だけ」
レオは苛立つている。警察が横島について本格的に動き、こうやって事情聴取を行うのは初めてなのだ。すでに行方不明になって一ヶ月半経っているのだ。文句の一つも言いたくなるのは当たり前だ。

「そうですよ。余りにも遅いです」

美月も珍しくプリプリとしている。

「横島みたいなの、すぐわかると思うんだけどな、どこ行っても声はデカいし、叫ぶし、泣きわめくし……やっぱ、軍とかが噛んでるんじゃない？」

幹比古の言い分は何となく棘があるが、それも心配の裏返しなのだろう。

「日本の警察は当てにならないわね。ああそうよね。うちの兄貴がキャリア組なんていわれてる位だから、そりやあてにならないわ」

エリカは警察と千葉家次期当主である自分の長兄を痛烈に皮肉っていた。

そんな中、スーツ姿の二人の男性と、第一高校のカウンセラー、小野遥先生が会議室に入り、壇上に立つ。

「げっ、寿和兄貴」

エリカはスーツを着崩した男性を見て悪態を付く。先ほどまで皮肉の対象としていた本人が登場したのだ。

それに気づいたのか、千葉家次期当主で警察官警部の千葉寿和が自分の妹であるエリカに向かって、ニヤケながら手を振った。

小野遥先生が集まった生徒に話し始めた。

20代中頃の地味目だが美人顔でスタイルが良く、明るく生徒受け

もいい先生だ。

彼女は正式な第一高校教諭として採用されているカウンセラーではあるが、警察省公安庁の秘密捜査官でもある。その他にも秘密のアルバイトしているのだが……

「皆さん集まってもらったのは、担任の先生に聞いていると思います。が、今、当校の生徒で行方不明となっている、1年E組の横島忠夫さんの捜索捜査に協力してほしいの。そこで皆さんから、横島くんについて、こちらに来られた警察の方に、知っている事を話してほしい。こちらが千葉警部と稲垣警部補です」

「警察省の千葉です。貴重なお時間を取らせてもらい、捜査に協力感謝いたします」

「同じく、警察省の稲垣です」

エリカの兄寿和とその部下の稲垣が簡単に挨拶をする。

「今日は3年生、2年生、明日は1年生という順番になります。1年生は今日は解散です。では一人ずつカウンセラー室で、お話をお伺いします。」

小野遥が事前に横島と親密な関係を持つ友人関係等をあらかじめピックアップしたのが今日集まったメンバーなのだ。

（七草真由美さん、横島くんと仲が良かったと聞いております。3年生で一科生のあなたと1年生で二科生の彼とはあまり接点がないように思われますが、横島くんとはどのようなお知合いで？）

横島くんと私？

私と横島くんと最初の関係は生徒会長と風紀委員補欠

手のかかる弟みたいな感じ……最初はそうだった。

でも彼は必ず私がピンチになると、颯爽と助けにきてくれて、何もなかったように笑顔を私に向けてくれる。

(横島くんとは普段どのような少年でしたか?)

横島くんは普段はおちやらけていて、皆を困らせるような事もするけども、皆を笑顔にすることが出来るムードメーカー。

それは、思いやりと優しさがあっての行動。

そして、圧倒的な強さと並外れた精神力を持つ戦士としての顔。あの時の彼の顔は私よりも年上に見え、その……素敵に見えた。

(横島くんは普段から、なにかその興味がある事とか何か言ってみせんでしたか?)

横島くん……あなたは誰なの?

私は横島くんに何をしてほしいの?

七草真由美は自宅のベットの所で、今日の学校で横島について警官二人と小野先生から事情聴取のような物を受けていた事を振り返り、横島との事を考えていた。

しかし、真由美は薄々横島が既にこの世にいないのではないかと感じており、何時も悲しい気分になるのだった。

それは、真由美の父、七草弘一は横島事変直後は横島と真由美をくつつけようとする話を盛んに行っていたが、横島が行方不明と判明してから、しばらくし、全く横島の話題を上げなくなったのだ。それは父、弘一が横島の何らかの情報を得て、横島の利用価値がなくなったという事だ。それは、存在していた価値が無価値になる。イコール、死んでしまった事を指すのではないかと……

真由美は横島と、ルウ・ガンフウの件から真面に口をきいておらず、逆に恥ずかしさのあまり、横島から逃げていたのだ。本当は助けももらったお礼を言いたいのだが……その前に衝撃的なトラブル(局部目撃)があつたためとはいえ、いまさらながら後悔している。

さらに、横浜事変の時の助けでもらった事についてもお礼を言っていない。あの時も一瞬の出来事で横島と真面に口をきいていない。

真由美は思う。

(横島くんに生きていてほしい……あの時の事、お礼を言いたい……もつと彼と会って色々話したい……)

もやもやする気分を変えるために真由美はシャワーを浴びに部屋

をでたのだが、リビングで帰宅した父、弘一と出くわした。

「……お帰りなさい」

「ああ、帰った。ん？真由美、この頃学校はどうだ？何かあったか？」
弘一は、真由美がこの頃元気が無いのを知っている。横島の件であろうとも推定していたが、ワザとこんな言い方を真由美にしている。

「…警察が来たわ、横島くんの事を今頃聞きに……いまさら、何をしたいのかわからないわ」

真由美は弘一に含みを持った言い方をする。弘一に対する小さな抵抗だ。

「……………真由美、その話を詳しく聞かせてくれ」

弘一は少し考えるしぐさをした後、真面目な顔つきになる。

真由美は弘一に、今日、警察が横島について聞いてきた内容を話し出した。

「横島くんの趣味や信条、将来の夢なんかも聞いていたのだな！」

弘一は真由美が話した後、声を大にして、質問をする。

「そ、そうよ」

「そうか、そうか、クククククツ、そうか！」

そう言っつて、弘一は自室に戻り、考えをまとめていた。

弘一は横島が行方不明になった後、早い段階で、横島が死亡したことを防衛省関係者から情報を引き出していた。

しかし、今、何故この時期に改めて横島の身辺調査をするのか？死亡が決定的であれば、する必要などないはずなのだ。そして、真由美に聞いてきた内容だ。交渉材料にするようなソースが幾つも混ざっているのだ。

弘一が導き出した答えは……『横島が生きている!!』……そして、何らかの交渉をしなければならぬ事態に陥っている。それは本人を脅すためか、懐柔するためかは、分からない。

横島の今の状況は分からないが、とりあえず生きている可能性がかなり高くなったのだ。

「クククククツ、まだ盛り返せるかも知れん。彼が生きてさえいればな、忙しくなるぞ」

弘一の目はギラギラとしていた。

真由美はそんな父を見送り、何か悪だくみをまたしているのだろうとこの時は単純に思っていた。

そして……真由美は今日も寝るその時まで、横島を思い出し答えの出ないこの感情に翻弄され続ける。

1119話 横島がいない第一高校、横島は何処に？

12月中旬、第一高校

エリカの兄、千葉警部と稲垣警部補の警察官二人とカウンセラー小野遥先生による、横島行方不明の捜査協力という名目の事情聴取が行われている。実際には、政府がUSNAに居る横島を日本に連れ戻すための交渉材料を取得したいがため、横島についての情報、特に、趣味嗜好や人間関係、将来の夢などを友人関係から聞き出すための物だった。

そんな事情は末端のこの3人には知らされてはいない。

そして、今日はその二日目、対象は1年生の横島の友人達だ。

1年A組から五十音順に一人ずつ、カウンセラー室で聞き取り調査が行われる。

そのトップバッターは雫だったのだが……

ボタン!!

カウンセラー室から勢いよく出て走りさる雫、俯き前が見えてない様だ。

それを追いかける、警察二人と小野遥先生。

エリカと美月は順番がまだの為、飲み物を買に行っている間にそれに出くわした。

エリカと美月は二人がかりで走り去ろうとする雫を体で抱き留める。

「雫!? どうしたの?」

「雫さん……」

雫は涙を流し声を出さずに泣いていたのだ。

そこに警察官と小野先生が追い付き。

「ナイス、エリカ……助かった……その子、足速いね」

警察官の片割れエリカの兄、寿和がグッドのサインをエリカに送りそう言った。

雫は嗚咽しながら、エリカと美月に体を預け小声で

「ウウツ……横島さんは死んでない……自殺何てしない……グスツ」

「雫さんに何を言ったんですか？」

美月は追いついてきた3人に強い口調で尋ねる。

すると、稲垣警部補と小野遥先生は、ジトつとした目で千葉寿和警部を一斉に見る。

「やっぱり寿和兄貴が何か言ったのね!!」

「いやー、その彼になんか悩みとか言っただけじゃなかった？ 自殺とかも考えないといけないからって言ったただけなんだけど」

寿和は苦笑いをしながらそう言った。

……この人をデリケートなこの現場に派遣する事、自体間違っている。

「この……バカ!!」

「エリカ？ 待て！」

エリカは寿和を殴り飛ばしていた。

「フン、デリカシーの欠片も無い人ね。しかも不真面目、少しは修次兄さまを見習ったら」

エリカはゴミを見るかのような目で倒れている寿和を見下ろす。

最初にそんなトラブルがあったのだが、以降はつつがなく、事情聴取は進んだ。

右目回りを青く腫らした千葉寿和警部はそれ以降、殆ど口を開いていないのが功を奏している様だ。

その後、エリカ、レオ、幹比古、美月、それに雫とほのか、そして達也と深雪で、久々に揃って何時もの喫茶店に寄った。

「ごめんね。雫、うちの兄貴がバカな事言っただけ」

エリカは雫に手を合わせ謝る。

「……うん」

雫は頷くもやはり元気が無い。

「あー、これ意味あったのか？ ほんと今更だぜ、捜査に関係なさそうな事も聞いて来たしな」

「そういえばそうですね。横島さんの趣味とか、目標とか……」

「ただのパフォーマンスかも知れないね。捜査をしましたって言う。氷室家から圧力がかったんじゃない？」

レオ、美月、幹比古は今日の事情聴取がとても意味のあるものと思えなかった様だ。

ほのかとエリカも頷き、その意見に同意の様だ。

「たくつ、あいつは何処にほつき歩いてるのやら……」

エリカはワザとらしく横島に悪態を付く。

「……………」

雫はうつむいたまま、達也は暗く、言葉を発していない。それを心配そうに見る深雪。

場は暗い雰囲気に含まれている。

普段だところで横島のギャグやエロ行動で重い空気が壊れ、明るい雰囲気に戻るのだが……………

「あ、そう言えば、ドクター・カオスが数十年ぶりに現れたアレ見た？」

幹比古はそんな場の雰囲気を察して、わざとらしく話題を変える。

「はい、USNAで起きたテロリスト事件ですね。私もお兄様も一緒にあの報道は見ておりました。ドクター・カオスが使っていた魔法はどうも、世界的に認知されていない新しい魔法らしいですね。お兄様」

ようやく深雪が口を開き、達也に話題を振る。

「ああ」

それでも達也は相づちを打つに留まる。

「魔女マリアも居ました。綺麗な人ですね」

美月もその話題に乗り、話を続ける。

「美月、魔女マリアは人じゃないわ、ドクター・カオスがゼロから作った人造人間って噂よ。しかもテレビ中継で出てたのは、魔女マリア本人じゃなくて、マリアを模した巨大ロボットらしいわ」

エリカが言っている事は正解である。テレビ中継でまともに映っていたのはビッグM（マリア型巨大ロボ）で、本人は映っているが、衛星カメラだったり、望遠カメラで撮っているため、画像が荒い。

「それにしても、あんな巨大ロボットが存在するなんて……、それと、魔女マリアがああの映像でまた脚光を浴びて、今色んな所で報道されてるみたいだし……なんか映画や、グッズの版權がどうのこうのっていう報道もされてて、マリアブームが来るかもって」

ほのかもそれに続く。

「にしても、教科書に載る様な人物だけどよ、中継見て、すげー派手だったよな、天才じゃなく天災錬金術師って言われるのも納得だぜ。しかし、あの破壊で、ケガ人無しって有り得るのか？」

レオは感心した様に頷いていたが、疑問を口にする。

「僕もそう思うよ。数日後のテーマパークの様相は廃墟だったしね。それと、吉田家や僕もただけど、ドクター・カオスや魔女マリアの魔法を解析してたんだけど、さつき司波さんが言ってた通り、新しいと言うか知られていない魔法だったり、強化したものだだったりしてるんだ。その中でも古式魔法みたいなのもあって、やっぱり魔法に関してはドクター・カオスは天才だよ。……あつ、そう言えば、みんなに見てもらいたい面白い映像を見つけたんだ！フッフッフッ！」

幹比古はレオの疑問に同意しつつ、吉田家でもカオスが使った魔法の数々を興味を持って解析していた事を話す。

そして、何やらその中で気になる映像を見つけたらしく、笑いながらスクロール型のタブレットを取り出し、皆の前に映像を出す。

そこにはドクター・カオスが派手に魔法をぶっ放し、数々の破壊を行っている映像が映し出されていた。

「これがどうした？幹比古、テレビと同じじゃないか？」

「ふっふっふー、そこじゃない、ここを拡大して、ちよつと映像をいじると……」

幹比古は楽しそうに笑いながら、画面の端っこの方を拡大し、画像修正を掛ける……すると

顔は分からないが何やら、派手に飛び回っている人物が見えるのだ。

達也と雫以外、その映像を見た瞬間、幹比古のタブレット端末にグイッと顔を寄せ、覗き込むように見る。

「これ、誰かさんに似てない？偶然だと思っけど笑えるよね。こんな不格好で攻撃よけるなんて」

幹比古は笑いながら、得意そうにそう言った。

しかし……皆の反応は違う。

「おい!!幹比古!!これ繰り返し見せろ!!まじかまじかよ!!」

「幹!!これもっと大きく映せないの!!画像が荒いわよ!!」

「おおおお、お兄様!!見て下さい!!」

「雫!!これ、早く見て!!」

「へ?映像はこれ以上は無理だけど繰り返し返せるよ、あともう一場面あるし」

幹比古は皆が興奮して詰め寄ってくる理由が分からないでいた。

雫と達也はほのかと深雪に引つ張られ、タブレット端末に近づく。

そして、その画像には、顔やつきりとした姿は分からないが、蛙飛びのような恰好やルパンダインのように電撃を避ける人物が映り、もう一場面では女性らしき人物を抱え、土煙を上げるような変なドタバタとした走り方で、攻撃をジグザグに避ける人物が映し出されていた。

「幹比古!!でかした!!間違いない横島だ!!!」

レオは幹比古の両肩を掴んで、バンバンと叩く。

「へ?だって、これUSNAだよ。顔とかわかんないし、画像も荒いし、似た人だよ」

幹比古は困惑顔でそう答える。幹比古は横島だとは思っていないかった。場を和ますだけのソースとして、この映像が横島に似ていたため、見せただけなのだ。

「何言ってるのよ!!こんな変な避け方と、こんなとんでもない走り方する奴、この世の中で他に居る?!?!しかも、カオスの攻撃避けてんのよ!!」

エリカは幹比古の胸倉を掴んで叫ぶ。

「えー、勘違いじゃない?」

「何言ってるんですか吉田君、横島さん以外こんな事しませんよ!!きつと顔は涙目になって、何か叫んでいるハズです。しかも女性を助

けている様だし!!」

美月も幹比古に怒ったような言い方をする。

「えーーーーー、柴田さんまで、なんで横島がUSNAに居るのさ」

雫はそれを見、タブレット端末を手に取り、再度映像をまじまじと見て……手が震えだしている。

そして、さつきまで、下を向きこの世の終わりみたいな顔をしていたのだが、目には光りが宿り、何かを決意したような顔つきになっていた。

「ごめん!私、先帰る」

そう言って、足早に喫茶店を出て行き、それをほのかが追いかける。

「ま、待って雫ー!!ごめん、皆先帰るね」

達也は雫が見終わった後、タブレットを取り、目を大きくし、何度も何度も映像を繰り返し見ている。

「……埒が明かないな……すまん、急用が出来た。先に引き上げさせてもらう」

さつきまで暗い雰囲気の達也だったが、活力がみなぎって来たかのように、今はシャキツとした感じになっていた。

「お兄様?……待ってください!! みんなごめんなさい、先に帰るわね」

そう言って、達也と深雪の兄妹は喫茶店を後にする。

「えーーーーー冗談のつもりだったのに、横島じゃなかったらどうするのさ」

「お前な!!そんな事を言うなよな!!でもよーーーーあれ絶対横島だつて」

「だったら、連絡位寄越してもいいじゃない?氷室家も知らない様だし……」

「なんか有るのよ!!連絡出来ない訳が!!幹はなんでそうマイナス思考なのかなー」

「そうですよ、吉田君の悪い癖ですよ」
エリカと美月に何故か責められる幹比古。

雫の父である北山潮氏は複数経営している内の一つの会社の現在社長室で、会議資料に目を通していた。

外が少し騒がしい事に気が付く。

バン!!

しばらくすると重厚な社長室のドアが勢いよく開く!!

「お父さん!!私、USNAに行く!!お願い手伝って!!」

「雫!?!」

北山潮は驚く。雫が無断で会社に来ることは今までなかったのだ。しかも、この頃の雫は暗く、ずっと沈んでいたのだ。それが急に仕事場に現れ、大声で何やらうったえてきたのだ。

一方達也は、自宅に帰り、直ぐに自室に引きこもった。

複数のディスプレイを見ながら、忙しなく、キーボードを操作していく。

達也はドクターカオスの事件の際、映像解析をしていなかった。いや、する気力が無かったのだ。

本来の達也ならば喜々として、解析を寝る間を惜しんでやっていただろう。横島の件からは、何をするのも気力がわき起らなかったのだ。

その達也が、今、一心不乱に作業をし、映像解析をし、横島らしき人物を見つけて行く。

そして、鈍っていた頭が、回転します。

なぜ、このタイミングで警察が動き、横島の事を聞き回るのか？

横島らしき人物の映像を見ながら、さらに考察を進めていく。

横島は俺が殺したはず。しかし、あの後誰もあの現場を見ていな

い。生きている可能性もあるのでは……

もし、これが横島ならば、USNAに亡命？または軟禁状態になっている？なぜUSNA？もしかするとドクター・カオスが関わっている？

政府は横島を取り戻すため、横島の情報を欲している。あの質問は横島自身と交渉するための材料では？

達也の中でいろいろな情報が一つにつながって行く。

「ククククククッ、ハハハハハハッ」

達也は自分でも気が付かないうちに笑っていたのである。

深雪は達也の自室扉の隙間からそんな達也の様子を見、元気になって行く達也にホッとすることも複雑な気分になっていた。

USNAダラスで第一高校時代の記憶を忘れていた横島は、今日もリーナと MARIA と一緒に……

「タダオ！いっしょに訓練しましよ、手合せ位、いいでしょ？」

「げっ、またっく、この前もやったばかりだ!!」

「いいじゃない、私の強さをタダオにわかってもらうまで……」

「えー……十分わかったって、いつも俺ボコボコじゃん」

「ボコボコなのは MARIA の所為、私じゃない」

「横島さん・必要以上に・女性と接触・禁止」

「MARIA、私でもダメなの？」

「イエス・ミス・アンジェリーナ」

「いいじゃない、タダオもいって言うてるし……」

「……リーナ、あまり MARIA を刺激しないで、ボコられるのは俺なんだから……」

のんきに日常生活を送っていた。

120話 記憶と辻褃

横島は、リーナに付き合い連続殺人犯を探すのが日課になっていた。

横島が狙われる可能性があるとしてリーナは踏んでいたが、一向に現れる気配が無い。

その間も、連続殺人犯による被害者が続発していた。被害者の殺害の経緯は様々だったため、最初は複数の事件だと思われていたのだが、一様に血液を失っている事から、同一犯または同一組織犯とされ、その様相から吸血殺人事件とも呼ばれている。

「リーナは一応俺の護衛って事になってるけど、前から聞こうと思っただけだけど、なんで、殺人犯も追っているんだ？それって警察の仕事だろ？リーナは軍人なのになんで？」

「今更それ？……その軍規に触れるから」

リーナは言いにくそうにする。横島の護衛と称し協力してもらっているとは言え、軍事機密なのだ。

さらに、マイクロブラックホール実験の影響で、失踪した人間が犯人の可能性が高い。さらに言うと、失踪した人間の中には、リーナと同じくスターズに所属している人間が居たからだ。

「まあ、言いたくないなら別にいいや」

「ううん、わざわざ危険を冒してまで、護衛と称して協力してもらっているし、ドクター・カオスも知っているらしいから、助手のあなただったら……実はその殺人犯、軍の人間かもしれないの……だから」

「ふーん、リーナはその尻拭いってわけか、大変だなく」

横島は指して関心がなさそうに答える。

その組織の総隊長がリーナなのだから、尻拭いではなく、当事者と言ってもいいだろう。

「ごめんなさい……タダオを危険な目に合わすかもしれない、でも私がタダオを絶対守るから」

「リーナ、いまさらだなく、まあ、逃げるのだけは得意だから、何とかなるって、あはははははっ！」

殺人事件を追っているはずなのに、なんの緊張感もかけられない横島。

「本当にごめんなさい」

「いいって、いいって、リーナも立場があるし、俺もリーナみたいな美人と一緒に居られるし、一挙両得？」

「それ、意味違うと思うわ」

「あはははははっ、そう？ ああ、腹減ったな、飯行こうかリーナ」
「付き合おうわ」

リーナは任務中にも関わらず、こんな日常がずっと続けばいいのになと思わずには居られないのであった。しかし、リーナは既に次の任務を言い渡されていた。横島と過ごす時間もあまり残されていない。

横島とリーナはこの街に多数あるファミリーレストランチエーンの店に入り、食事を取る。

「タダオって日本人よね」

「ん？そうだけどなんで？」

「記憶喪失って言ってたけど、日本に帰りたくないと思わないの？」

「……うーん、今は……いいかな、記憶戻ってからで」

横島は躊躇しながらもそう答えたのだが、日本に行くつもりはない。カオスの元で、文珠を生成して何とかするか、カオスが今の検証実験を終えてから、元の過去の平行世界に戻してもらおう算段をしているからだ。

実際には、横島はこの世界の人間で、100年封印されていたとはいえ、120年の時を生き、苦難の末この世界自体を作りあげた張本人なのだ。今は、その記憶さえも無い状態。平行世界の過去などというものは初めから存在しないのだ。

「……そう」

リーナは残念そうにする。

リーナの次の任務と言うのは、日本に行き、大亜連合の鎮軍軍港を地形を変える破壊をもたらした『灼熱のハロウィン』を引き起こした魔法師を探し出す命令を受けていた。最悪、抹殺もあり得るのだ。リーナは不安で一杯であった。もし横島が日本と一緒に来てくれて、

傍に居てくれたらと思わずにいられないのだ。

「ちよいとトイレに行ってくる」

横島は小用を済ませ、男子トイレから出ると、突然、東洋人の美女に日本語で声を掛けられた。

「あら、こんなところで偶然ね久しぶり!!元氣してた?」

「こ……これは逆ナン!!まじで!!僕横島!!ポニーテールが良く似合うお姉さん!!って、アレ?」

声を掛けたのはポニーテールに灰色のスーツ姿の藤林響子だった!!

横島捜索のためにUSNAに他数名と共に派遣されていた。

本来、高レベルの魔法師である藤林響子の渡航は困難であったが、日本政府はUSNAに対し、テマパークテロリスト襲撃事件で邦人が巻き込まれたことに、事情説明および現場検証を行わせると要求したうえで、裏取引をしたのだ。藤林響子以下数名をテマパークテロリスト襲撃事件の現場検証を行わせるための渡航許可と引き換えに、USNAはある条件を出したのだ。

条件というのはリーナを交換留学扱いで日本に滞在させることだった。

USNAは交換留学とはあくまでも名目で、リーナには『灼熱のハロウィン』を引き起こした魔法師の捜索、または抹殺という別の任務を与えているのだった。

両国の思惑が一致したための取引成立であった。

響子達は3日前、横島を発見し動向を調べ様としていたのだが、近くにはあの魔女マリアがべったりとついていたのだ。

得意の情報操作やハッキングなどをしようとすると、マリアが警戒するかのような動きを取るのだ。

それがどんな距離だろうとだ。よって、横島を発見してから横島に近づくことすらできないでいた。

そして、もう一人、これも知っている顔だ。実際には会った事はな

いが、血縁者だ。アンジェリーナ・クドウ・シールズ。彼女は九島烈の弟の孫にあたる。響子は九島烈の孫で、再従妹に当たるのだ。しかも、彼女は幼い頃から優秀で、今は軍属であるとも聞いていた。

横島だと確認できたが……状況は最悪だった。

ドクター・カオスの相棒、魔女マリアが横島のそばに、そして、USNA軍属であるリーナも一日中行動を共にしているのだ。

もしかすると、日本には居られないと悟った横島は、USNAに亡命したのかもしれない。さらに、魔女マリアだ。ドクター・カオスに庇護を同じ理由で受けているのかもしれない。

そうなってしまうと、手が出せない。

最悪、ドクター・カオスはUSNAに協力している可能性もある。

響子はこれ以上近づくとのは危険と判断し、追跡をやめて、本国に指示を仰いでいたのだが……今日に限って偶然レストランに入る横島とリーナを見かける。魔女マリアが傍に居ない。リーナと二人の状態だったのだ。

響子は念のため、CADも外し、一般客を装い。尾行を開始、横島が座った席の後ろに座ったのだ。

横島にはバレても構わない。そもそも横島なら、近づけば此方に気が付き、接触を凶つてくれるはずだと。リーナについては此方の顔を知られている可能性もあるため、そちらには注意をする。

そして、横島は響子がこれだけ近くに居ても気が付かない。いや気が付かないふりをしている可能性もある。そんな事を思いながら会話に聞き耳を立てると……

(横島くんが記憶喪失?!マテリアル・バーストの影響で?若しくはUSNAかドクター・カオスに記憶を操作された?)

意外な情報が入って来た。

響子は記憶喪失の裏づけを取るために、接触を図る事にした。

横島がリーナから離れて、トイレへと向かう。

チャンスとばかりに響子もトイレに向かい、出てきた横島にさりげなく声を掛けたのだが……

「……これは逆ナン!!まじで!!僕横島!!ポニーテールが良く似合う

お姉さん!! って、アレ??」

やはり、響子の事を覚えていない様だ。

もう一押ししてみる。

「私、藤林響子よ、覚えてない?」

「へ? あれ? ……こんな美人のお姉さんに一度でもあつたら忘れないのに、あれ? それってどこで?」

「八王子とか結構色々あつただけどなく」

「あれ?」

横島は混乱している様だ。

響子はそんな横島を見て、記憶喪失は確定したと判断し。

「ごめんなさい、知り合いによく似ていたから間違っちゃったかも、それじゃあね」

そう言つて横島から離れ直ぐにレジで会計を済ませ、レストランを出て行く。

しかし、残された横島は

「あれ? なんだこれ? ……俺、この世界の日本に知り合いなんて…
どう、いう…藤…林、あぐつ!! ぐつ!!」

頭を抱え苦しみだしたのだ。

そんな異変に気が付いたリーナが駆けつける。

「タダオ!! どうしたの!! タダオ!! さっきの女に何かされたの?」

リーナは横島から離れ足早に会計を済ませ出て行く女を見ていた。

「はあ、はあ、はあ、大丈夫リーナ、何時もの発作みたいなもん…だ」

「タダオ…」

そんな横島の様子を心配そうに見つめるリーナ。

「大丈夫…ふう、なんだか疲れたし…ホテルに戻ろっか」

ホテルに戻つた横島はベットに仰向けになり天井を見上げる。

今日、藤林響子にあつた…この世界では自分の知り合いなどいはいはず、彼女も間違いだと言つていた。しかし、その名前がどうも気になつて仕方がないのだ。

横島はずっと違和感を感じていた。

カオスの話では過去の平行世界から飛ばされたと言われていたのだが……何かが違う。

そうだと思いついていただけなのだ。

それでは実証できない事が幾つもあったからだ。

自分の肉体の変化……自分の記憶では、こんなに鍛えられた肉体では無かった。体も相当動き、力も出る。出せる霊力量はさほどかわらなかつたが、霊力の通りも良く、ちよつと霊力を込めるだけで数倍の力が出るのだ。

たまに、自分自身の霊力量がとてつもなく大きく感じる事もあった。

そして、背中のような大きな傷、こんなものは無かった。最初はこの世界に飛ばされた際に来たものだと思っていたのだが、明らかに古傷だった。

さらに文珠を生成する際に激痛と吐き気と共に頭に流れてくる知らない映像だ。

文珠を生成を重ねる毎に、映像が鮮明になって行くのだ。辛く、苦しい記憶の様に……

それはアシュタロスとの戦い以前の記憶しかない今の横島にはまだ味わっていない、今後起こる悲劇や苦しみの記憶だった。その傷もその強靱な肉体もその代償なのだが、今の横島に知る由もない。

「俺……いったい何もんなんだ？ 本当に横島忠夫なのか？……分らない」

その頃リーナは、一人ホテルの屋上で月を眺めていた。

「タダオに別れをちゃんと告げないと……、タダオは悲しんでくれるかな……だといいな」

121話 横島搜索網進展

藤林響子が横島と接触した翌日、日本政府が設置した横島対策室では緊急会議が行なわれていた。

藤林響子達、横島搜索チームから横島発見の報告を受けたからだ。官房長官は対策室の報告を受けていた。

「横島少年を発見したのだな、現所在は、ダラスの某ホテルだろうという事だが、はつきりした所在はわからないのか？」

内閣情報局長官は答える。

「横島搜索チームからの報告ですと、ダラス郊外で歩いている横島少年を発見したのが4日前、しかし、少年の傍らには常に魔女マリアが付き添っていたと、電子戦のエキスパート藤林響子少尉が、あらゆる情報網で監視を行おうとするも、全て魔女マリアに気付かれ、逆にマリアの監視網により、尾行及び追跡され監視が続行出来ないとの事でした。よって正確な横島少年の所在は分かりませんが、魔女マリア及びドクター・カオス氏が滞在しているホテルに同じく宿泊していると想定しております。」

さらに、USNAの軍関係者も横島少年に同行していたようです
「魔女マリアが……という事はドクター・カオスが関わっているという事かね」

「その可能性が高いと判断いたします。さらに最新の情報では魔女マリアが居ない隙を突き、藤林響子少尉が横島少年との接触到に成功したようですが、本人は記憶喪失との事です。少尉は横島少年と面識があり、顔を合わせても全く覚えていない状況であったとの話です。少なくとも、少尉と初めて接触した6月下旬以降の記憶はなく、その他八王子などの土地名にも疑問を持っていたようで、第一高校に入学以降の記憶が無い可能性が高いと判断いたします」

「何と、記憶喪失？その件については、どういう見解か？」

防衛省の制服組部長がその問に答える。

「正確な事は何も分かりません。藤林少尉が接触した時間も1分も満たない、ごく限られた時間でした。マテリアル・バーストの衝撃によ

る記憶欠落。ドクター・カオスによる記憶操作。若しくはUSNAによる記憶操作の可能性もあります。彼の意味でUSNA（ダラス）に滞在している可能性は低く、少なくとも、我が国に不快感をもって彼の地に亡命したという線は現時点で無いと判断いたします」

「そうか……しかし、ドクター・カオスにUSNAか……しかし監禁している様子では無いようだな……」

内閣情報局局长が再び答える。

「はい、藤林少尉によりますと、横島少年はリラックスしているように見えたそうです。USNAの軍関係者とも好意的に会話をしていたとの事です。まあ、記憶操作やマインドコントロールなどされている可能性があるので、正常な状態ではない可能性もありますが……いずれにしても、不自由な状態ではないようです」

「厄介な……ドクター・カオスとは接触及び交渉の余地はあるのか？」

外務省横島対策室室長が答える。

「ドクター・カオス氏は40年度程前に日本に来訪しておりますが、我が国と直接の取引や接触はありません。当時の記録によると氷室家と接触していたとあります」

「氷室家は横島少年の安否の確認は取れていないとあるがどういふことだ？」

内閣情報管理局局長が再び答える。

「はい、私共も、指示通り、内務省から氷室家と情報交換を行っているのですが、少年の安否を把握していないとの事です」

「……うむ、情報がまだ少なすぎるな。ドクター・カオスと接触するにしろ、USNAと交渉するにしろ、情報がまだまだ足りない。引き続き情報収集を行ってくれ」

次に警察省部長からの報告が上がる。

「先日から進めています。横島少年の交友関係などを当たり、横島少年の性格は奇抜なのですが、どうもこれと言った欲がないように見受けられます。学校にも毎日キッチンと出席し、風紀委員の活動も欠席せずに従事しており、交友関係も非常に良好だそうです」

「……横島少年は一人暮らしと聞いている……、それは学校生活そのものを楽しんでいるということではないか？」

「はあ……」

「少なくとも、学校にいる事を好んでいると判断した方がいいな……今後、日本に戻ってくる際は、横島少年には第一高校に戻るようにより最大限に配慮するように文部省に通達。」

そして、現地情報収集の強化、及びカオス氏の周辺を調査、USNAの動向に注視してくれ……既に先手を打たれている可能性もある。迅速に事に当たるように……」

こうして、今回の緊急会議は終わった。

横島の生存は確実となり、まずまずの進展具合だが、本人が記憶喪失の上、ドクターカオス、USNAが関わっている事が現実視された。それなのに、横島自信を他から隠そうとしないという不可解な状況であり、事態の見極めと判断が困難に陥っている。まだまだ、情報が少ないと言っているのだろう。

12月25日。八王子の街の装いはクリスマス一色になる。

何時もの面々が何時もの喫茶店に集まり、プチクリスマスパーティーを行っている。まあ、クリスマスに託けて、集まっているだけなのだが……横島の生存の可能性が高まったおかげでこのような行事も自然と出来るようになったと言っているだろう。

しかし、こんな雫の宣言からこの会は始まった。

「私、来年早々からUSNAに留学することになった」

「はあ？雫、そんなの聞いてないよ!!」

ほのかは困惑しながらも、大きな声で聞き返す。

「ごめん、昨日決まったの」

「なんで！……って、やっぱりそうだよね、横島さんを探すためだよね」

「うん」

「よく留学など出来たな、雫程の素質のある魔法師は海外に渡航など、

普通出来るものではないが」

達也は同盟国とは言え、貴重な高レベルな魔法師が海外に行く許可が出た事を意外に思い、雫に質問を返した。

「うん、お父さんが頑張ってくれて、交換留学という形で何とか行けるようになった」

雫の父、北山潮氏は政府とも掛け合い雫をなんとかUSNAにいけるように交渉していたのだ。最初は手ごたえはまるでなかったが、急に政府から交換留学という形なら了承すると言う通達が来たのだ。勿論これは、日本政府とUSNA裏取引で、リーナを日本へ留学させるための口実に丁度、合致したためだ。

「なるほど、交換留学、それならば可能かもしれないわね」

深雪は頷く。

「……そうか」

達也は無表情に答えるが、なんだか羨ましそうでもある。

「雫、それって期間どのくらいなの？」

エリカが雫に問いかける。

「1月から3月の間の3か月間、向うの学校のカリキュラムをクリアすれば、こっちの学校でも進級できる」

「やっぱり、ダラスですか？危なくないですか？あんなテロがあった後ですし、何やら不審な事件もあるようだし」

美月は横島を探すととなるとダラスに留学することになるだろう事と、現在ダラスは治安が良くないともニュースで流れているからの心配をする。

「うん、でも、速攻で横島さん見つける」

雫はそう息巻く。

「その方がいい、横島は確実にダラスに居る。ほぼ確定だ」

可能性だけの話しだったのだが、達也は確信しているようにそう言った。

「どういふことだ達也？」

レオは聞き返す。

「……ありとあらゆる手段を用いて、横島生存の可能性を探り、政府関

係を探った結果だ。日本政府は横島捜索チームを作り、ダラスに派遣した」

「おい、ちょっと待て、それどういう事だ？日本政府が横島を探しているって」

「考えてみる、この前の俺達に行った事情聴取、あのタイミングはおかしいと思わなかったか？それに聞いてきた内容もだ」

「確かにそうだけど」

幹比古はその意見には同意する。

「横浜事変で政府は横島を『救済の女神』の使い手だと把握している。そんな人間を放っておくはずがない、所在不明なら、秘密裡に捜索もするだろう。幹比古が見つ付けてくれたあのUSNAのテロ事件で映っていた横島らしき人物、当然政府の中でも気が付いた者もいたのだろう」

「おい、達也、そんな情報俺らにしゃべっていいのか？軍規違反とかじゃないのか？」

「今の俺は大黒竜也ではない、司波達也だ。軍からは情報を得てはいない。俺自身があの後、その辺を探ったのだが、見事に当たった」

達也は平然とそんな事を言う。横島を探しているのは軍の大黒竜也ではなく、友人としての司波達也だと言っているのだ。そして、自らの手でハッキングという非合法な手段で探し当てたのだ。

「……達也くん探ったって……それ犯罪行為じゃないわよね」

「……………いや比較的セキュリティが甘いところからだ、バレてもいいという事なのだろう。それに甘えさせてもらっただけの事だ」

「こわ、お前怖いわ……」

「達也くん、さらつと言ってるけど、やっていることマフィアのボスとかわらないから」

レオとエリカは達也にジトツとした目で見つめ呆れた様に言った。

「お兄様がマフィアのボス？……マフィアのボスのお兄様!!」

何故かそんな事を口ずさんで、嬉しそうに呆けている深雪

「さらつだ」

達也はそう続けたのだが……

「まだ、あんのかよ!!お前どんだけだよ!!」

「達也つて……………」

「ここからが重要だ。特に雫…………横島は…………記憶を失っているらしい」

達也は一瞬躊躇するような間を取ってこう言った。

「なによそれ!!」

エリカは横島のあまりの状態に思わず叫ぶ。

「だからか…………連絡を付けられ無かったんじゃない、連絡の付けようがなかったんだ」

幹比古もそんな横島の状態に複雑な表情をする。

「横島さん……………」

雫は悲しそうな顔で俯く。

「雫、横島に接触するには気を付けた方がいい、横島はどうやら、ドクター・カオス若しくは、USNAに囚われている可能性が高いらしい」
「!!…………私がドクター・カオスを倒して横島さんを連れ戻す!!」

雫は拳を作り、闘志を燃やすようにそう宣言した。

「えええええ!!」

「やめなさいって!!」

「無茶だよ!!」

幹比古、エリカ、美月はそんな雫をたしなめる様に叫ぶ。

「ダメよ雫!!無理無理!!…………だから、見つからない様に攫ってくればいいのよ」

勿論、親友のほのかも止めるような事を発言するが、何故かこんな事サラツとを言った。

「うん!!そうする!!」

雫は大きくうなずく。

この二人のコンビ、肝が座つて来た様だ。

「雫がそんな危険を冒さなくても、日本政府も動く様だし、任せればいいのでは?」

深雪はまともな意見を出す。

「ダメ!私が行かないと!!きつと横島さんも待ってる!!」

雫は自分で横島を取り戻したいようだ。

「……結構日本政府って頼りになりそうにもないし、北山さんに逢ったら記憶が戻るかも、横島なら自分で何とかして日本に戻ってきそうだし……」

幹比古も雫が横島に会う事事態に賛成の様だ。

「俺も幹比古と同意見だ。日本政府はUSNAとドクター・カオスの交渉で難航するだろう。しかし、横島が記憶を取り戻したらどうなる。奴の事だとしてもない手段で戻ってくるに決まっている」

達也も幹比古と同意見の様だが、その自信はどこから来るのかわからない。

「何にしろ、横島が生きている事が分かって良かったぜ。あいつの事だ、『あー、死ぬかと思った』とかなんとか言って、へっちゃらな顔して戻ってくるさ」

珍しくレオが真顔でこの場を締めくくった。

122話 ダラスの殺人犯

12月24日ダラス郊外にある公園、日が落ち公園の外灯に光がともる。

リーナは、対抗魔法『パレード』により、仮面をかぶったアンジー・シリウス少佐の姿で、男と対峙していた。出くわした当初、男は逃走を図っていたが今は、リーナ以外のスターズの魔法師5人が男を囲み逃げる事が出来ない様になっていた。

「……フレディ：一体どうしたと言うのですか？一等星のコードを持つあなたが脱走など……」

リーナは同僚であったアルフレッド・フォーマルハウト中尉にそう声を掛ける。

彼は11月初旬、ダラスの研究所で実施したマイクロブラックホール実験に居合わせたスターズのメンバーの一人だったのだが、その後から行方が分からなくなっていたのだ。

「……………」

しかし答えは返ってこない。

「この街で起こっている連続殺傷事件……炎で焼かれた被害者もいました。まさかあなたではないですよね」

リーナはフォーマルハウト中尉に声を若干震わせながら問いかける。

フォーマルハウト中尉は、パイロキネシス……炎を自由に操る超能力者、いわゆるBS魔法師であった。軍はフォーマルハウト中尉を連続殺傷事件の容疑者の一人ではないかと睨んでいたのだ。

「……………」

「フレディ！答えて下さいー！」

フォーマルハウト中尉はリーナに視線を集中させ目に力を入れ大きく見開く。

リーナは咄嗟に首に巻いていたストールを残し後ろに飛び、その空

間に残ったストールは火種が無いのに激しく燃え上がる。フォーマルハウト中尉のパイロキネシスの攻撃、それが、リーナの問いに対する答えだった。

リーナは、横島が珍しくカオスに研究所へ連れて行かれてしまい、護衛の任の必要が無くなったため、スターズの他のメンバーが行っていた連続殺人犯の捜索に参加していたのだ。

リーナは夕飯の約束だけはちやっかり取り付けていたのだが……運がいいのか悪いのか、このフォーマルハウト中尉を発見し、追い詰めていたのだ。

すでに横島と約束した時間はとうに過ぎていた。

リーナは再度放たれる炎の攻撃を避けると、フォーマルハウト中尉は身動きが取れなくなっていた。

困んでいたスターズ魔法師が、光を遮断し闇を作る魔法、空間に疑似的な牢獄を作り身動きがとれなくなる魔法、特定のBS魔法を封殺する魔法と次々に発動させていたのだ。

リーナは身動き取れなくなったフォーマルハウト中尉に銃を構える。

「フォーマルハウト中尉、連邦軍刑法特別条例に基づきスターズ総隊長権限により、あなたを処断します！」

リーナは悲痛に満ちた声で、そう宣言した。

そして、強力な情報強化により、一切の魔法干渉が無効化された銃弾が放たれる……

リーナは魔法『パレード』で表面上は冷静な顔に見えていたが、悲しみに満ちた顔をしていた。

しかし……弾丸は、フォーマルハウト中尉には届かなかった。

リーナと中尉との間に人影が割って入り、弾丸を止めたのだ。その左手には六角形の半透明な盾が見える。

「リーナ！やめろって！お前の仲間なんだから?！」

「……………タ…タダオ…邪魔しないで!!私は!!彼を処断しなければならぬ!!彼は殺人犯!!一般市民を恐怖に陥れた犯人の一人よ!!」

リーナは驚きはしたが、横島に邪魔しない様に叫ぶ。

「リーナ…つらいんだろ?」

「……………私は軍人なの!!だからやらなければならないの!!どいてタダオ!!」

そんな中、フォーマルハウト中尉は魔法で拘束されていたが暴れだす。

「そいつは自分の意思でやっていない!……………何かが憑いている」

「何を……………」

「俺がやる……………」

横島は暴れるフォーマルハウト中尉に向かい、右手を突き出し、手の平にビー玉サイズの玉『文珠』を浮かび上がらせる。以前生成し体内にストックしていたものだ。

「悪霊退散……………吸引!!」

文珠に意思を込め、吸の字が刻まれ、文珠は光り、フォーマルハウト中尉を吸い込むかの勢いで空気が文珠に吸い込まれて行く。

すると、フォーマルハウト中尉から何やらサイオンの塊らしきものが飛び出し、文珠に吸い込まれる。

横島が言う彼に憑いている何かを文珠で吸い取ったのだ。

それと同時にフォーマルハウト中尉は糸が切れた操り人形のように倒れた。

そして……………横島は

「ぐわーっ、くっ、くううううううッ!」

文珠使用による何時もの発作なのだが、今までになく、苦しみ、のたうち回る。

横島の術を驚きの表情で見ているリーナだったのだが、横島が苦しみだしたのを見て駆け寄る。

『パレード』を解き何時ものリーナの姿で……………

「……………タダオ!!しっかりして!タダオ!タダオ!!」

横島が次に目を覚ましたのはホテルのベッドの上だった。

ベッドの横にはマリアそして、リーナが椅子に座っていた。

「……俺はどうなった？」

「大丈夫ですか？・横島さん・ミス・アンジェリーナと・軍の人が・気を失った横島さんを・ここまで運びました」

「……タダオが不思議な術で彼をフレディを気絶させたの、その直後、タダオが苦しみだして、気を失って……タダオ、もう術を使わないで……タダオ前も術を使って発作を……、この前は何もないところで急に発作に……それもどんどんひどくなってる……一度病院に行っただ方が……」

リーナは心配そうに横島を見つめる。

実際に横島は文珠を生成を回を重ねる毎に、頭痛や吐き気等が酷くなっていたのだ。

「ノー・ミス・アンジェリーナ・ドクター・カオスの家の方が・施設が整っています」

「まあ、今は何ともないし、きっと大丈夫だって」

能天気な答える横島。

「横島さん・安静が・必要」

「そうよ、タダオ」

「もう、大丈夫だって、あー、あのリーナのお仲間の男はどうなった？」

「……今は医療施設のある鑑別所に拘束しているわ。…なんであんな無茶をしたの？」

「リーナ……処断って、お仲間だろ？それにリーナ泣いてたし」

「泣いてなんていないわ！軍務だから、それが私の責務だから!!」

「あと、あの男、たぶん自分の意思で殺人したんじゃない、操られていた……」

「タダオ……それどういう事？」

「まあ、何にしろ、もうあの男は多分大丈夫だよ」

横島はこの世界の人間に幽霊やら悪霊やらの話は混乱するだけだと思いきや、そう言うにとどめた。

横島は文珠で吸引したものの正体は悪霊の類だと判断している。

「……まあ、いいわ、……あのタダオ、明日空いてる?」

「横島さん・明日、ドクター・カオスと・マリアと・ダラスの研究所に行きます」

何故かマリアが代わりに答える。

「マリア、今日と同じぐらいの時間で終わるかな?」

「イエス・横島さん」

「夕方だったら大丈夫だな。というか、何の用事?今からでも良くない?」

「今もう深夜よ……それに心の準備が……」

リーナの声は最後は聞こえないぐらいの小声になる。

「おお?もうそんな時間か……」

「私、行くね。今日の事、報告に行かないと……一度、軍の屯所に戻らないといけないの」

「大変だな。じゃあホテルの入口まで送る」

リーナはホテルの入口に向かう途中で、

「タダオ……今日ありがとね。私の為にあんな事をしてくれたんでしょ」

「あはっあははっ、まあ、女の子が泣いていたらと思ったらつい、男だったら絶対やらん」

「……うれしかった、ありがと」

そう言っつてリーナは立ち止まり背伸びをして、不意に横島の右頬にキスをする。

「!!!……リリリリリーナ?!」

「また明日ね、タダオ」

そう言っつてリーナは横島を残し、恥じらう様なしぐさで足早にこの場を去って行った。

123話 侵入者

12月25日ダラス郊外のUSNA某研究所

横島はドクター・カオスとマリアに連れられて訪れたカオスの研究所にて実証実験の手伝いをしていた。

実際には、雑用をしているだけなのだが……

「そう言えば、カオスのじいさん、この世界に幽霊や悪霊の類はいないはずだよな」

「確認されておらんが、正確には居ないとも言え切れん。そうとしか思えない事象や事件が実際にあるでしょう。世界各地で伝承という形で多々残っておる。まあ、わしは出会った事は無いがのう、全く持つて残念じゃ」

「昨日の件、マリアから聞いたかもしれないが、あの男には悪霊が憑いていた」

「何じゃと！それは真か!!」

「俺は、その専門家って、まあ、見習いなんだけど、場数はこなしているから間違いない」

「ククククツ面白い！それで、悪霊が憑くとどうなるんじゃ？」

カオスは実証実験の作業の手を止め、横島に嬉しそうに詰め寄る。

「ああ、人格を変えたり、その体に乗っ取ったり、強力な奴になると、悪魔みたいな姿に変化しちゃう奴もいるな、まあ害が無いのもいるが、共生って奴か……厄介なのは人格をそのままに、乗っ取るタイプだ……一見では分かりづらい、まあ、専門家が見れば、霊力のズレや魔力を感じたりでバレるんだけどな」

「ほほう！実に興味深い……なるほど、となるとこの前、ここの研究所の奴らがマイクロブラックホールの実証実験を行った際、出来た時空の穴からそんな奴らが入り込んで、行方不明になっておる殺人を起こしている連中に、憑りついたという仮説が立てられるのお……もしや、お主の世界とつながったのか？」

やはり、ドクター・カオスその話から、即座に一連の殺人事件とマイクロブラックホール実験の関連性に仮説を立てた。

「へっ? そんな事になっているのか? カオスのじいさんなんで教えてくれなかったんだ?」

横島はこの実験と連続殺人事件との関連性について、カオスに一切聞いていなかった。

「……お主に言うの忘れておった、まあ、良いではないか!! 今から、行う実証実験では、前に出来た時空の穴よりもさらに大きな穴が出来るはずじゃ、時空軸も全く同じになるように計算済みじゃ、これではつきりしたことがわかるじやろ。お主もおるし、もしそ奴らが来ても対処ができるんじやろ?」

「とんでもないのが出てきたら、どうすんじや——!! お家帰る——!!」

「フハハハハハッ、飽く迄も仮説じやて!! この実験は飽く迄も、時空の穴をあけるための実験じや、まあ、悪霊が出るならばわしも大歓迎じやがな!! わしもマリアもおるし何とかなるじやろ!!」

「いいいや——!! 絶対分かってない!! タコ悪魔とかハエ悪魔とか出たらどうするんじや——!!」

「もう、遅い!! マリア準備は良いか!!」

「イエス・ドクター・カオス」

「フハハハハハッ、ポチっとな!!」

カオスは高笑いしながらマイクロブラックホール生成装置を稼働させる。

ズウウウウンと低い音の機械音が鳴り響く。

マイクロブラックホール生成装置内はモニターでしか確認ができない完全に密閉された大きな部屋となっている。そこから離れた研究室から遠隔操作で装置を動かしているのだ。

計器測定値を見ながらカオスは大声で言う。

「いよいよ、空間に穴が開くぞ!!」

モニター越しに何も無い空間が歪みだし、計器は目まぐるしく反応する。

空間の歪みは大凡直径5mに及び真中に小さな黒い点が現れ徐々に大きくなり、直径50cmほどまで大きくなった。それが時空の穴

だった。

「フハハハハハツ、成功じゃ!! やっぱわし天才い!!」

自画自賛のドクター・カオス実証実験は成功の様だ。

「計測結果も良好じゃー! ……ん? なんじゃ? サイオン粒子の塊が時空の穴から流れこんだような反応がするぞい」

そんな高笑いもつかの間、カオスは計器と生成装置内の映像を見ながら、新たな反応を確認する。

そして、横島は異様な霊圧を感じる。

「なんかヤバそうな雰囲気か……」

サイオン粒子の塊が生成装置から、この離れた研究室に一直線で壁などをすり抜け飛び、横島に向かってきたのだ。

しかし、それを察知したマリアが防御魔法を展開しながら、横島を庇う様に前に出て防御態勢を取る。

そのサイオン粒子の塊はマリアの防御魔法すらすり抜け、マリアに入り込んだのだ。

防御態勢を取っていたマリアが急に横島に向き直り。

「異物検知……脳機能浸食率、20、30%上昇、感情機能低下……記憶メモリー凍結……横島さん・逃げてくだ……さい」

マリアの全身が震えだし、何かに必死に耐えている様にも見える。

「マ……マリア?」

「仮初の体だがよくできておる。人間もなかなか面白いものを作る。この体だけでも中級魔族に匹敵するかもしれんな……魂も強い……まだ、我に抵抗しておる」

マリアは震えが止まり、正面に向き直って発した声色は何時ものマリアの声ではあったが、話し方が全くの別者であった。

「何を言っているマリア?」

カオスはそんなマリアに近づこうとする。

「ふむ、こうだな……ほほう、これは良い」

そう言っつてマリアは両腕から、マシンガンを展開し、周囲に乱射し

だしたのだ。

「何をするんじや！マリア!!」

カオスは防御障壁を展開しながらマリアを叱るのだが……攻撃は止まらない。

「うわわっ！こんなこつたらうと思つた!!ろくでもないことばっかしー!!」

研究室は異常警報が鳴り響き、他の研究者や近くのブロックの研究者たちも、避難をし始めていた。

横島もサイキック・ソーサーを展開し防ぎながら、カオスにそう叫んだ。

「じいさん！それはマリアであつて、今はマリアじゃない。何か憑りついた!!」

「何じやと!!」

「ななな何とかしてみる!……悪霊退散!吸引!!」

横島は昨日フォーマルハウト中尉に行つたと同様、文珠で悪霊をマリアの体から吸い出そうとした。

しかし……

「ふむ、文珠か……しかし弱い、はて?」

そう言いつつ、悪霊に乗つ取られたマリアは両腕のロケットアームを飛ばし、片方で横島が持っている文珠を握りつぶし、もう片方の手で、横島の顔を掴み引き寄せる。

「ぐあッ」

「小僧!!待つておれ!!緊急停止……」

カオスはマリアに顔面を掴まれ持ち上げられる横島を救出すべく、マリアを緊急停止、スリープモードに強制的に移行するための対マリア専用の魔法を展開する。

「ん?なるほど……」

マリアは一瞬止まるが、直ぐに稼働し直す。

「バカな!!緊急停止が発動しないなどと……」

カオスは珍しく狼狽する。

「致し方が無い!!」

カオスは魔法を展開し雷撃でマリアを攻撃する。

「ふむ、人間にしてはやるではないか、この体で無かったら、消滅したかもしれないな……ふむ、お主も知っているぞ」

マリアは防御結界を張りカオスの攻撃を悉く防いでいた。

「やはり、横島殿だが……それにしても霊力が……封印か……アシュタロス殿の眷属か、確かルシオラ、滅んだと聞いていたが……余計な真似を」

マリアは顔面を掴まれ文珠の発作で苦しんでいる横島に顔を寄せ、覗き込む様に見る。

「ぬん」

マリアが気合をいれると、横島の額に蛍が浮かび上がり、そして、その蛍は直ぐに消滅する。

「ががっああああああっ……うわ……！！」

顔面を掴まれたままの横島は発狂したかのように叫ぶ。

1か月前、横島の魂の一部となったルシオラが、霊力を極限まで消耗した横島の意識から離れ、一時的に顕現し、横島に封印を施していたのだ。

なぜ、そのような事を……アシュタロスとの戦いの際、ルシオラは自分の命と引き換えに横島の命を救うため、自分の魂と肉体を形成する霊気の大半を横島につき込み消滅した。しかし、横島の魂の一部にはルシオラの魂が今もなお息づいていた。ルシオラとしての意識は既に存在しなかったが、それでも、ルシオラの魂には横島が体験した事が記録として蓄積していたのだ。

一時的に過去の記録から顕現したルシオラは、自分の死後、辛く苦しい体験をしてきた横島を思うあまりに、辛い過去の記憶を、横島の霊気を使って封印を施したのだ。

今、その封印が解けた横島は、激流の様に過去の記憶が頭に流れ込んできていたのだ!!

横島はその記憶の苦しみを受けながら、記憶が戻って行く。
そして横島を中心に莫大な霊力が漏れ、霊気の嵐となり吹き荒れ
る。

「な…なんじゃ?」

カオスはその現象に驚き。

「フフフフフッ!」

マリアは不敵に笑いだす。

124話 魔神ネビロス

「ががっああああああっ……うわ……うわ……うわ……!!」

マリアに顔面を掴まれたままの横島は発狂したかのように叫ぶ。

横島の失われた辛くて苦しい記憶が激流の様に流れ込んでいるのだ。

ルシオラが施した封印が解かれた横島を中心に莫大な霊力が漏れ、霊気の嵐となり吹き荒れる。

叫び声が止み。

そして、横島は顔面を掴んでいたマリアの腕を握り、強引に外し地面に着地し、マリアに憑りついている何者かに怒りの形相で睨み付ける。

「……ネビロス……冗談にしては笑えないな……俺を怒らせるために来たのか?」

「まさか、横島殿と敵対するなど、多少の無礼は許してもらいたい」

ネビロスと呼ばれた存在はマリアの声でそう答えた。

「なぜ、マリアに憑依し、蚩を……ルシオラを消滅させた……」

しかし横島は怒りを発したままだった。

「私の器に耐えられそうなのはこの仮初の肉体を持った者、ルシオラについては……今も尚横島殿の魂に深く癒着したままであろう。我が滅したのは、横島殿の霊気を使って顕現した皮を消滅させたに過ぎぬ」

「……理由は分かっていたが気分がいいものじゃないな、で何をしに来た?」

横島は自分の胸に手を置き、ルシオラを感じようとする。

「我は未来を予知する悪魔、そして元この大陸の監視者にして、魔を統べる將軍、元が付くが、横島殿に会うチャンスだと思つてな、未来予知でこのタイミングしかないと判断したまで……厄介な事にこの世界は、神の最高指導者とサタン殿が結界を張って迂闊に入れん、中から偶然こじ開けられた小さな穴を利用してもらったまで……外からは硬いが中からは想定してなかった様だな」

「……神の最高指導者とさっちゃん（サタン）がか……だが、それは理由になってないぞ」

「率直に言うぞ。横島殿、私の主となれ……、三大悪魔である魔神アシユタロス殿を人間の身でありながら倒し、そのアシユタロス殿が成し遂げられなかった世界改変を別の形でお主が成し遂げた。有史以来、神や魔が誰もが無しえなかった事を……しかも誰もが損をしない形でだ。お主以外はな……」

「それは100年前にも断ったはずだが……お前、元はアシユタロスの部下だったのだろ？倒した俺を敵討ちとか思わないのか？」

「部下であって、主従の関係ではない。さらに言うとおアシユタロス殿がデタント派（神と魔の緊張緩和状態を意図的に作り、戦争を回避する）筆頭である三大悪魔の席から外れ、独自行動をとった時点から、我は部下でも何でももない。我は逆に迷惑したぐらいだ。この大陸の悪魔の統率など面倒でたまらない。我は軍団をまとめるだけで良いのに……」

このネビロスという悪魔、魔界の軍団を統べる権限まで持っている強力な力を持った魔神である。ただ、穏健派とも知られ、人間世界には全く興味を示さず。魔界の軍団をまとめ上げる事に奔走し、それに喜びを感じているのだ。本人曰く実際に戦闘を行う事よりも、軍団を築く事がいいらしい。さらに、アシユタロスを討伐した横島に興味を持ち、数度接触を図り、先ほどのように主従を結べというのだが、横島はその申し出はすべて断るが、無下に追い返すことも出来なかった。ルシオラの妹であるベスパを魔界の軍団に組み込む形で引き取ってくれたためだ。

「で、それだけの事で、神と魔のトップに睨まれるかもしれないのにわざわざ来たのか？」

「本題はここから、横島殿、我と共に来い。主が世界分離で作った今我が居る可能性の世界の王となれ」

「ちよつと待て、お前、魔界にいないのか？」

「ああ、魔界は退屈だからな、お主が世界分離の余波で偶然出来てしまった世界が確認されているだけで、3つある。そのうちの1つは我

ら魔界の者が自由に使ってよい事になっておる。まあ、人も妖怪もおらんしな、ただ、魔力もタツプリアある、そこで、暴れたい悪魔が自由気儘に戦っておる。我はその世界で最低限の秩序を保つために軍団を率いて滞在している。軍団を作る事こそ我の本望だ。戦闘狂の魔神どもはこの世界を手放して喜んでおる。しかし、やはり、秩序は必要だ。我は軍団を作るが統べるのはお主がやってほしい」

「なんだそれ？俺は聞いていないが……」

「まあ、100年も囚われていたのだから、ちなみにそのうちの一つは神の娯楽として、存在しておる。とある神が面白きものを作ったからの……そこには巫人や特殊能力を持った巫人に近い人間が少数いるが……、神々はござって、その娯楽に興じておる。結果的にお主が世界分離を行った結果、神と魔は闘争を持って決着はつけることはせず、若干の緊張をもって、お互いの区分を保っている状態である。まあ、言うならば、神も魔も平和状態だ」

「……………なにそれ……お前らめっちゃ楽しそうだな」

「クククク、せっかくお主が命をとって守ったこの世界を人間は愚かな理由で戦争を起こし同族を討つ。これは魔の者と何もかわらん。魔は闘争こそすべてのような連中ばかりだ、闘争の中に喜びを感じておろう。それに比べ人間はどうだ？闘争などまっぴらだと口にしなからお互いを傷つける。お主も報われん……こんな下らん世界から出で、我と共に行き、闘争の……可能性の世界の王にならんか？」

「俺はいちおう人間なんだけど」

「そんなのはどうでもよい、我はお主を気に入っておる。魔界の連中もそうじゃ、まあ、お主の事を殺してやりたいとか、戦ってみたいとか思っている魔神も山ほどおるが、大したことない」

「あほかー！ー！ー！！誰がそんなところに行くかー！ー！ー！！」

横島は何時もの調子が戻ってきたみたいだ。

この魔神、言葉は固いが中身はなかなか柔軟な思考を持っている様だ。

「ふむ、今回は残念だが、また誘いに来るぞ……この仮初の体の小娘、今も我に抵抗している。なかなかどうして見どころがあるではな

いか」

「もういい、来ないでいいぞ。……それと、お前の口ぶりからお前じゃないのがわかるが……1ヶ月前に同じ手口で悪霊か何か送り込んだ奴を知らないか？」

「ああ、その事か、我はそ奴を参考にして今回こっちに来たのだがな、まあ、我も100分の1の分身体ではあるが……送り込んだのはダンタリオンだ。奴はただその知識欲ゆえこの世界の情報を知りたかっただけだろうが、その裏には何者ががいるぞ、そ奴が何をしたいのかまでは知らんが……まあ、お主が居るし大丈夫だろ。ではさらばだ」
そうしてマリアに憑いていたネビロスの分身体は消滅した。

「二度とくんない!!」

横島は消滅したネビロスに向かって叫ぶが届いていないだろう。

マリアは崩れる様に倒れるが、横島がその前に200kgあるマリア体を抱き留める。

「……………精神干渉過多、精神一部損傷、記憶バックアップ完了……………8次元空間バックアップ自動起動」

「カオス、マリアが!!」

「お……………お主……………何者じゃ?」

ドクター・カオスは驚きの表情を隠せないでいる。

横島の凄まじい霊圧はさることながら、先ほどの横島とネビロスの超絶した世界の会話を全部聞いていたのだから……

「そんな事よりも、マリアの方が先だ!」

「大丈夫じゃ、精神の一部が損傷したようじゃが、わしが100年前に作った8次元空間記録と記憶が保存できる機能が起動した。しばらくすると元にもどるじやろ……………それよりもお主……………」

「俺はさっきまで記憶が一時的に喪失…封印されていただけ……………この世界の人間だ。平行世界の過去から来たわけじゃない。……………100年前、カオスのじいさんとマリアの仲間だった人間だ」

横島はホツとした表情をしてから、一度躊躇しそう言った。

「なんじゃと!? わしの記憶にはお主は居ない……………100年とな一体お主は……………」

「後でちゃんと話す……それよりもこれどうしよう?」

研究施設はマリア（ネビロス）の攻撃でボロボロになっていた。

しかし、よく見ると、ネビロスが攻撃していたのは、カメラや記録装置の様だ。

どうやら、ネビロスと横島の会話の記録されない様、あらかじめ破壊したようだ。流石は未来を予見する魔神といったところか。

「うむ、わしの方で誤魔化そう、というよりも、1か月前の事件も、あのようなどんでもない魔神とやらの仲間が関わっている様じゃのう、その悪霊やらがこちらに来て、殺人をしているという事じゃな」

「大体あっているが、ダンタリオンはネビロス程の強い意思を持った魔神ではない……」

「魔神か、わしの想像を軽く超えておる話じゃな……それも含めてお主には後でじーっつくり、全て話してもらおうからの!!」

「たはったはははっ!カオスのじいさん、お手柔らかに頼むよ」

125話 横島とカオスとマリア 横島喪失編完

ドクター・カオスは実証実験で元アシユタロスの部下だった魔神ネビロス呼び寄せてしまい、その結果研究所は半壊。

幸いにも研究者や職員は迅速に退避をしていたためケガ人等は出ていない。元々ネビロスに人間殺害の意思はないためではある。興味がないと言った方がいいのだろう。また、ネビロスがカメラ等の記録装置を攻撃し破壊したお陰で、ネビロスと横島の会話は一切残っていない。

ネビロスの配慮なのだろう。流石は未来を予知する魔神である。ただ、またドクター・カオスがやらかしたという不名誉な噂が流れるだろうが、いまさらそんな噂が一つ二つ増えたところで、本人は全く気にしていないだろうが…。

今回分かった事で、前回のマイクロブラックホール実験時、時空の穴が開いた際、悪霊の類が侵入した事は確定した。さらに、その後行方不明となった職員や軍事関係者、たまたま研究施設に居た人物などが、まず悪霊に憑依されたと考えていいだろう。

先日、拘束されたフォーマルハウト中尉もその一人であった。

また、ネビロスからの情報では、それは異世界の住人である。大悪魔72柱に数えられるダンタリオンが関わっているとの事であった。純粋な権力と力はネビロスの方が高いが、仮にも72柱の1柱であり、上級悪魔の中でも上位に位置する魔神である。しかし、ダンタリオン自身、争いや戦争には全く興味が無く、ただ、自分の右手に持っている書（通称：ダンタリオンの書）にすべての知識を書き込みたいと言う欲求だけで生きている様な悪魔である。よほどのことが無いかがり余計なトラブルを起こさない。今回の事も何者かがダンタリオンを手引きした可能性が高いという事だ。

カオスは、研究所の安全が確保された事を、責任者に伝え、今回起った事の報告と対処方法について話し合いを行っていた。

幸いにも、この研究室のみが破壊されただけであって、他の研究室や、他の棟、マイクロブラックホール生成実験装置自体は無傷であっ

たため、明日からはこの研究室以外は稼働が可能な状態らしい。

横島は研究施設の宿泊室を借り、未だ過去のバックアップを呼び出しシステム復旧を行っているマリアを寝かしている。

横島は既に自分に再封印を施し、第一高校に通っていた時の状態に戻す。

ただ、記憶を封印され、17才以前の記憶しか残っていなかった時に生成した効果が低い文珠が10個程手元に残った。

「ルシオラ……俺は今も心配かけっぱなしなんだな」

横島は自分の胸に手を当てそう小声で呟く。

横島は携帯端末を開けると、着信履歴とメールが多数送られていた。差出人を見ると全てリーナからだ。

「しまった。約束すっぱかしちゃった」

夕食の約束をしていたのだが、既に夜半を過ぎていた。

横島は慌てて電話を掛け様としたのだが……

「どう話せばいいんだ？記憶が封印されてた俺ってなんて言うか恥ずかしい時の俺だったし……うーん。まあ、なるようになるか」

取り合えず電話をするがつながらなかった。どうやら電源が切れている様だ。

リーナのメールを見ると、最初は、まだなのかという内容だったが、途中からはこの研究所の事故を知ったのだろう。安否を気づかう内容のメールがずっと続く。どうやら軍でも安否確認が取れたのか、大変だった事をねぎらうような内容だった。

しかし、最後のメールには……

別れの言葉が書かれてあった。次の任務に向かうため、既にリーナはダラスを発ったようだ。

長期間の任務のためしばらく会えない事、連絡も出来ない可能性が高い事、そして、横島に出会えて楽しかった事なども書かれていた。

「リーナ……」

リーナは本来、今日横島に会い。別れの挨拶を直接するつもりだったのだ。

ずっと横島と居たいという思いを告げたうえで……

横島は届かない可能性もあるがメールを返信した。無事である事、いつでも連絡をしてきて欲しい事、無事を祈っている事を伝える内容をリーナの顔を思い浮かべながら入力する。

この時、まさかりーナが日本に行き、ましてや第一高校に潜入捜査のため留学と称し在学するなど夢にも思っていない。

横島は改めて今日の魔神ネビロスとの会話を振り返る。

ダンタリオンと何者かが用意し、此方の世界に送り込んだ悪霊、昨日のフォーマルハウト中尉を見る限り、人格をそのままにして、思考のみを操る悪霊の類の様だ。送り込んだ際は簡単な命令しか実行できないう様な弱い存在だったのだろうが、憑りついた人格と記憶を利用し、思考を操り自分たちの都合の良いように動かすのだろう。わざわざ人を殺すのは、その人間から知識を得るまたは霊力を得る行為の可能性もある。

横島はこの世界にとっては完全に異物な侵入者である悪霊を排除しなければとならないという考えに至る。

悪霊や霊等の概念がないこの時代では憑りつかれた人間を元に戻す方法は皆無、現状出来るのは横島のみであろう。ならば、この事件を解決するまでUSNAに残ろうと決心するのだった。

しかしながら、今は12月25日、既に自分が日本から居なくなつてから2ヶ月が経過している。既に死亡扱いになつていてもおかしくない状態だ。

第一高校の友人達や氷室家に皆は心配しているだろうと思う。

しかし、今連絡するのは不味い、魔神が関わっている様な事件に友人や氷室を巻き込むわけにはいかない。特に友人連中は直ぐ危険に頭を突っ込む傾向がある。しばらく、死亡または行方不明のままでもいい方がいいのではないかと、事件解決してから連絡を入れる方がいいだろうと判断した。

ただ、日本の状況も知る必要がある。14代目氷室恭子には連絡を付けるつもりでいた。

しかし……よく考えると、数日前に会ったのは、藤林響子だ。あの

時は思い出せなかったが、今ははつきりとしている。もしかしたら、軍は自分の存在に気付いている可能性もあるが……その時はその時だ。

取りあえずは此方から、日本側にアクセスするのは恭子一人に絞ろうと考える横島。

そしてある重大な事を思い出した。記憶を封印されてた時に見たニュースでは日本の火山が次々と噴火した事が映像で流れていたのだ。何故か今その事が頭によぎり、靈感なのか嫌な予感がして仕方がない……横島程の霊力者ならばそのような靈感はほぼ当たると額から脂汗が滴る。

横島は慌てて、そこにあつたメモ帳を千切り、何やらスラスラと書き折りたたみ、術を発動させ、光の方陣を生み出し、折りたたんだメモ用紙を中心に置き、鳥の形をした式神を召喚させる。そして……式神に霊力を送り、窓から飛ばしたのだ。

そう、妙神山に無事を知らせるための式神を急いで送ったのだ。UNAからでも、1日あれば届くだろう。

横島は、あの日本の噴火は小竜姫が起こしたものだ判断した。となると妙神山の状況は見るに堪えない事になっている可能性が高い。さらに自分が妙神山に帰った時の事を考えると……身震いが止まらなかった。

再び、ベットに眠った様な体勢で修復中のマリアに目をやり、横島は思う。

この二人に本来合わせる顔など無い。

100年前、二人には協力を仰いでおきながら、あの時記憶を奪い。勝手に世界分離（世界改変）を行ったのだ。

カオスが横島とマリアがいる宿泊室に入ってくる。

「小僧、ホテルに戻るぞ。なんじゃ、マリアはまだ修復中か？何時のバックアップを呼び起こしているのじゃ？まさか850年分すべて

か?」

「カオスのじいさん……俺は」

「まあ、ホテルに帰って明日にしろ! わしや疲れた」

横島はマリアを担いで迎えの車に乗せ、カオスと共にホテルに戻った。

翌日、

ガタン!!

「ななな? なんだ?」

横島は大きな音に飛び起きると、隣の部屋とをつなぐドアが強引に開かれ、根元で折れていた。

横島が宿泊している部屋は廊下を通らずとも隣に行けるようにドアが隣の部屋との間に設けられている勿論隣の部屋はカオスとマリアが泊っているスイートルームだ。

そして、ドアを壊した主はゆっくりと飛び起きた横島に近づいてくる。

「マ……マリア? どうした?」

「横島さん」

マリアはそう言って、おもいつきり抱き着いてきたのだ。

「マ……マリア!! ギブ……ギブギブ!!」

「マリア・記憶戻りました。横島さん、ミス・おキヌ、ミス・美神の事も・全部・思い出しました」

「!? どうやって? 記憶は……俺が直接消したはず」

横島は驚きを隠せないでいた。確かに横島はマリアに直接文珠を発動させ記憶を消したはずなのだ。

「フハハハハハッ、小僧、詰めが甘いわ!! マリアのバックアップは1日毎に行っておる。100年前からじゃ!! しかもじゃ、あの当時マリアの記憶障害を止めるためと、自動バックアップどんな場所でもどんな状態からでも行えるようにするために、別次元、想定では8次元の時

空に記録をバックアップするスペースを確保したのじゃ、それでそこに、マリアの記録・記憶がすべてのバックアップが存在するというわけじゃ!!お主が、マリアの記憶を消したとて、そこまでは届いていなかったようじゃな!!どうじゃ驚いたじやろ!!流石わし、まさしく天才!!」

「じいさん……」

カオスはマリアに抱き着かれている横島の頭に拳骨をかます。

「痴れ者が!!お主……100年前……あの魔神が言った通り世界改変をおこなったようじゃな!!世界をコピーし……人間と妖魔の振り分けたのか?」

「カオスのじいさんまで記憶が!」

「いいや、わしは戻っておらん、しかし、マリアの記録した映像を一晚かけて確認した……大凡の事は理解した……で、どうじゃ?合っているのか?」

カオスはそう言って不敵な笑みを浮かべる。

「ほぼ正解だ……俺が行ったのは、世界分離だ」

「ふはははははっ!!世界分離とな?!わしの想像をはるか上を行っているではないか!!これでネビロスとやらが言っていた派生して出来た世界があるという意味がようやく分かったわい!!クククククッ」

「横島さん・マリア・役に立たなかつた?だから・記憶を消した?」

マリアは横島から体を離す。

「違うんだマリア。俺のわがままで巻き込んでしまったんだ。ごめん」

「まあ、100年前の状況を見た限り、あんな状況で人間が生き延びるとしたら、お主の方法が最善じゃろうしな……と言うか世界分離など、どうやってやってのけたのじゃ」

「カオスのじいさんにあの時に『世界の卵』を使った世界創造についての理論を聞いたよな?そんでもって、平行世界誕生の確率論なんかも、それと神界で手に入れた知識、アシユタロスを模倣した時の知識を使って、文珠を形代に行った」

「そうじゃったのかいの、それについてはマリアの記録には無かつた

が……お主、その為にボケておったわしの脳を文珠とやらで一時的に活性化させおったのだな、そのおかげでわしも細胞を若く保つ理論を生み出し、遂には魔法で成し遂げたのだがな……そうか、お主は相当努力したようじゃな知識が無ければ成し遂げられん」

「すまん……じいさんとマリアには協力を頼み、色々骨を折ってもらったのに……自分勝手に事を起こしてしまった。謝って済む問題じゃないかもしれないが……今の俺には……」

横島はカオスとマリアに深く頭を下げ、謝った。

横島は当時、マリアとカオスに知識だけではなく、妖魔と人間の戦いにおいても、仲裁などに協力をしてもらっていたのだ。

「ま、なんじゃ、そのおかげで今わしはボケもせず、若さも保っておる。しかも今じゃ億万長者で、自由気ままに生きておる。わしの方が得をしておるよ」

「横島さん・何も・悪くない」

「そう言ってもらえると助かる」

「しかし、お主100年の間、何をしておった？何故若いままなんじゃ？それも文珠の力か？」

「いや、世界分離なんて大それた事をやったおかげで、神界で罪を償うために魂の牢獄で100年間幽閉されていたんだ。この世界に降り立ったのは大凡1年前なんだ……年は、霊力が強すぎて……とらないかもしれない」

「そうか……小僧が一番、割を喰っているではないか……」

「横島さん・年とらない・マリアと一緒に」

「まあ、それも罪の償いの一つと思えば……」

「なんじゃ？お主のそのマイナス思考は？お主、いわばこの世界の創造主と変わらんのだぞ。もっと堂々としておれ」

「……………」

「フハハハハハッ、それともわしと組んで世界征服でもしようではないか!!それはそれで面白そうじゃ!!」

「俺は普通に生活したいんだよ!!」

「なんじやお主、真面目になりおって、記憶封印されたお主はもつとこ

う活力があつたのじゃが」

「悪かつたな、実際には20才で、精神年齢的には120才だ!!」

カオスは真面目な顔をする。

「横島忠夫、お主はようやった。これだけは言える」

「じいさん……」

「さて、お主今後はどうするんじや、わしはしばらく、ダラスに滞在するが、あの研究の後片付けもしなければならん……」

「俺もダラスに居るつもりだ。本当は日本の学校に通っていたんだけど……あの最初のマイクロブラックホールで出来た時空の穴からこつちに来た悪霊共をとっ捕まえないとまずい事になりそうだしな」
「そうか……お主に渡したブラックカード、今後も好きに使うがいい。このドクター・カオス、お主に協力は惜しまん……そういえば、なぜ、お主ほどの人間が黄海で気を失って漂っていたんじや?」

「いや、へまやらかして、ちよつとスゴイ魔法を喰らっちゃつてな……」

「まさか、鎮海軍港が消滅したというアレか!!」

「いや、それじゃないが喰らつた魔法は同じかな?」

「ほほう!という事は济州島で起こつた戦略魔法未遂の可能性があつた事案じやな?」

「多分それだ」

「フハハハハハツ、お主ほどの人間を窮地においやる魔法を放つ魔法師か!!実に面白い!!」

「まあ、しばらく厄介になる」

「マリア・また横島さんと・いっしょ・うれしいです」

「しばらくでなくともずつとでわしらの所に居ても良いのじゃぞ……」

「さすがに日本に戻らないと、学校も行きたいし」

「まあ、お主のお陰で楽しみが増えたわい、ククククツ、あの魔神とやらに対抗するためにビツクMを本格的に大改造を!!そして、奴らに対抗できるぐらいの力を付けた暁には、大量生産!!ビツクM軍団で奴らが闘争の可能性の世界とやらに共に殴り込みに行こうではない

か!!フハハハハハハッ、クークツクー、今の世界は張り合いが無くて
いかん!!やはり、こうではなくては、こうではなくてはならーん
ん!!」

どうやら、魔神の出現と横島の話しから、やる気と本気度がMAX
となったカオス、また、とんでもない発明をしそうで不安である。

「じいさん?人の話聞いている?俺は普通に人生過ごしたいんだが
……」

「フハハハハハハッ、長い時を過ごせる盟友ができたわい!!今日は祝
杯じゃ!!」

こうして、昼間から3人だけの宴会が始まった。

横島喪失編完

横島来訪者編

126話 横島、来訪者に戸惑う!!

USNAダラスの高級ホテルに未だ滞在している横島、魔神ネビロスの情報から、魔神ダンタリオンの手先である悪霊が人に憑りつきこの地に紛れ込んでいるという情報を得て、捜索をするが一向に見つからない。

悪霊に憑かれた人々は、1回目のマイクロブラックホール実験後に行方不明になっている可能性が高い、そして、ダラスで殺人事件を何度も起している疑いもあった。

USNA軍が誇る特殊部隊スターズもダラスの殺人事件を追っているため、スターズのカノープス少佐の協力を得て、マイクロブラックホール実証実験後に行方不明になっている人達のリストを貰うと同時に協力関係を築く。

カオスのマイクロブラックホール生成実験で得た結果から、USNA軍にはマイクロブラックホールで偶然空いた時空の穴から、サイオン生命体が侵入し、人々に憑りついたと説明している。

但し、魔神ネビロスや魔神ダンタリオンについてはさらに混乱をきたすため説明をしていないし、しない方がいいだろう。

横島は、クリスマス前にフォーマルハウト中尉から抜き出し封印した悪霊を調べる。

元々は本能のみで動くような低級な悪霊の様だが、その悪霊に憑かれた人間は悪霊に意識を乗っ取られるわけではないのだ。ただ悪霊が持っていた命令と目的をすり込まれるのだ。

憑かれた人間は自分の感情を持ち、自分の意思で自発的に悪魔から悪霊に悪霊からその人間にわたった命令を唯一の目的として動き出すのだ。傍から見れば、悪霊に憑かれているなどは到底思われない厄介極まりない存在だ。

もう一つ分かった事は、悪霊に憑かれた人間が、人を襲う理由だ。どうやら霊気を奪っている様なのだが、その手段として吸血行動をと

るらしい。悪霊や妖怪にありがちな行動だ。

そうやって得たエネルギーで悪霊自体成長するらしい。

しかし、魔神ダンタリオンから、悪霊がどういった命令を与えられたかまでは分かっていない。

未だ、悪霊の手掛かりすらわからない。また、悪霊自体の霊気が小さく、近づかなければ分からないレベルのため、広範囲に搜索しにくいのだ。さらに、12月25日のクリスマス以降、ダラスでは悪霊の仕業だと思われる不可解な殺人事件は起こっていない。

フォーマルハウト中尉が捕えられたことから、他の悪霊に憑かれた人間は既にダラスから逃げたのではないかと横島は考えている。

悪霊搜索が難航している間。

どうやら、藤林響子は横島へ接触を図りに来ている様なのだ。

横島がマリアやカオスと一緒に居る時は全く、近くに来る気配がなく。

横島が一人で行動しだすと、後を付けて来ようとするのだ。ただ、横島がその気配を察知して、事前に煙に巻くのだが……

日本政府が本格的に横島を取り込もうと動き出している様だ。

カオスの所にも別ルートで接触を図って来ていたが、カオスは何時もの調子で取り合わないでいてくれた。

そして、1月7日、横島の記憶が戻ってから2週間が経とうとしていた。

雫は3日前にUSNAへ渡航し、現在はダラス郊外にある大学付属高校に通っている。

因みにダラス中心地の高級マンションを借り、勿論付き人が同行している……ちなみに黒沢氏と若い女性の二人だ。黒沢氏がいれば、荒事になったとしても難なく処理できるだろう。

雫は学校の授業終了後、横島を搜索している。

渡米初日には達也に教えてもらったカオスが宿泊しているホテル

を来訪し……横島について聞くが教えてくれない。雫の父親潮氏の力を持ってしても話すら通してくれない様だ。

達也の情報ではカオスとマリア側の何かしらの理由で一緒に居るかもしれない。または軟禁、拘束されているかもしれないの事なのだ。

仕方なしに、雫は街を歩き回り、横島の行方を捜しまわっていたのだが、ある作戦を思い付く。

横島ならきつと、カオスとマリアの拘束から脱出し、この街のどこか、女性が多い場所に出没するはずだと……絶対成功しないナンパを繰り返しているはずだと……命がけで……

雫はマンションに戻り、付き人二人と相談し若い女性を通る場所をピックアップする。翌日の放課後、雫は公園近くのお洒落な店が立ち並ぶ通りに行く……

「マリアー……堪忍やー、離してくれー!!」

「横島さん・ナンパ・禁止・真面目に搜索・してください」

「これも捜査の一環、女性に憑いているかもしれないから、一人づつ丁寧に探してただけだ!」

「……横島さん・鼻の下伸びてます・目的と手段を・入れ違えています」
そこには漫才の様なやり取りをしながら、マリアに襟を捕まれ、引きずられる横島の姿があったのだ。

それを見た雫は遠方からいきなりマリアに向かって氷の礫を飛ばし魔法攻撃を仕掛けたのだ。

「横島さんを離して!!」

しかし、マリアは片手を掲げただけで、いとも簡単に雫が放った氷の礫を打ち消す。

雫は漸く見つけた横島がマリアに乱暴な扱いをされているのを見て、怒りのまま、いきなり街中で攻撃魔法を放ったのだ。

雫が短銃型特化型CADを携帯していなくてよかった。破壊力満点のフォノンメーザーなど街中で放った日には、とんでもない事件となっていただろう。流石に付き人二人に同盟国とは言えUSNAの

街中でそんなものを持ち込んだとバレればタダでは済まないというわけで特化型CADは取り上げられ、携行できなかつた様だ。

しかし、街中で魔法を放った時点それだけで十分事件である。

雫は達也から事前に横島は何らかの理由で記憶を消されカオス一派に捕まっている可能性がある事を聞かされている。そしてこの状況だ。瞬時に横島がマリアとドクターカオスにUSNAまで連れ去られ、ひどい扱いで拘束されていた所を、隙を見て逃げ出した横島を発見し、軟禁しているホテルへと連れ戻そうとしている最中だと勝手に妄想し、この暴挙に出たのだ。

マリアはマリアでその攻撃で雫を悪魔の手先が横島を狙っている
と

「横島さんを・狙う・悪魔の手先・排除開始します」

そう判断し、雫にロケットアームを構えたのだ。

「へ？雫ちゃん？なんでここに？って、わーーーーー、マリアまつたーーーーー!!攻撃やめーーーーー!!知り合い!!あの子は俺の知り合い!!だからやーーーーめーーーーてーーーー!!」

横島は30m先から腕に巻いているブレスレット型のCADを操作しながら走ってくる雫を一瞥してから、慌ててマリアを止めるべく、ロケットアームの前に立ちふさがるが……

しかし時はすでに遅し、雫が次に放った魔法、大きな氷の礫は横島のケツに突き刺さり、マリアが放ったロケットアームは横島の顔面にぶち当たったのだ。

「ぶふおっ!!やっぱりかあーーーーあ」

横島はきりきり舞いと上空に吹っ飛び、回転しながら無残な姿で地面に落ちてくる。

「横島さんに何をやるの!!」

「あなたこそ・横島さんに・危害を加える・悪い人」

雫とマリアはお互い無表情だが、睨みあう様な形になる。

「……ちよ……ちよつとま……つて……」

横島は血だらけのまま、地面を這いつくばり、二人を止めようとする

る。

「横島さん、こんなになつて、直ぐに病院に……」

「横島さん・直ぐホテルに・戻つて治療を」

二人は横島の状況に気が付き、横島を助け起こそうとするが……

二人は顔を突き合わせ、無表情だがいがみ合っているようだ。

「魔女マリア。あなたは横島さんを監禁して何をするつもり？」

「あなたこそ・横島さんに・何をするつもりですか？」

「私は、横島さんを日本に連れ戻すために来た！」

「マリアは・横島さんと・ずっと・いつしよにいる」

「横島さんは私の大切な人！」

「横島さんは・マリアの・大切な人」

「……」

「……」

二人が無言のいがみ合いをしている中、横島の怪我は既に治つていた。

「たはつたははははははつ、二人共落ち着いて……」

「横島さんは黙つていて！」

「横島さん・沈黙」

「……はい」

「無理矢理監禁しているのに！」

「マリア・そんな事はしない・横島さんの・嫌がる事はしない」

「……」

「……」

そんな重苦しい空気の中、雫は横島の左腕を抱き寄せ問いかける。

「横島さん、説明して……なんで連絡をくれなかったの……なんです

ぐ日本に帰ってきてくれなかったの……なんで魔女マリアと一緒に

いるの……私探したの……横島さんをずっと探していたの」

雫はマリアが横島を無理矢理監禁している様ではなかったため、さ

らに記憶喪失と聞いていたが、雫の事を覚えていた事で、横島に対し

悲しみがあふれ、遂に涙を流し横島に抱き着くのだ。

「し……雫ちゃん……ごめん」

横島は素直に謝る。

「マリア……ごめん、雫ちゃんは日本の学校に居た時の友達なんだ……二人で話す時間をくれる？」

「イエス・横島さんの友達・理解しました・帰りは遅くならない様」

マリアはそう言つて泣き崩れる雫を一瞥してから立ち上がり、ホテルへと先に帰っていた。

「雫ちゃん、ここではなんだから、公園のベンチに行かない？」

「……うん」

横島は雫を立ち上がらせ、すぐ近くの公園のベンチへと行く。

その間雫は横島の腕にしがみ付いたままだ。

横島は雫が落ち着くのを見計らつて、雫と膝を向けあい話し出す。

「雫ちゃん、ごめん。連絡しなくて……実は俺、去年の末まで記憶喪失だったんだ。この数年の記憶が飛んでいた……それで連絡が取れなかった」

「やっぱり、達也さんが言っていた通り……でもなんで記憶が戻ったのに連絡してくれなかったの？横島さん居なくなつて悲しくて悲しくて仕方なかった。皆も心配してる」

「……雫ちゃんをみんなを危ない目に合わせたくなかった。俺が記憶を取り戻したきっかけに、連続殺人事件が絡んでいるんだ。今その犯人を追っている」

横島は雫には魔神や悪魔、悪霊の事を話すわけにはいかないため、ここまでの話に抑える。

「……連絡欲しかった……でも横島さんが生きてて本当に良かった……」

雫は横島の手を握り涙ぐむ。

「ごめん」

「でも、なんでUSNAに？……横島さんその時の記憶が無い……なんで、魔女マリア、あとドクターカオスと一緒になの？」

「マリアとドクター・カオスは古くからの知り合いなんだ。俺が記憶をなくして倒れていた所を拾つてUSNAまで運んでくれたらしい。なぜ記憶をなくしたのは……分からない」

横島はマリアとカオスが100年以上前からの知り合いとは言えない。また、済州島で達也の戦略級魔法マテリアル・バーストを喰らった事を言うわけにはいかない。さらに記憶の封印についてはルシオラの魂が関与しているらしいが、詳しくはわからないため、このような答えとなった。

「魔女マリアと天才錬金術師が横島さんの知り合いなの？」

「学校に入る前からの」

「……横島さんやっぱり凄い……でもその前に記憶をなくす程の何かがあった……今は大丈夫？」

「今はこの通りピンピンしてる」

横島は雫に笑顔を向けてガッツポーズをする。

「でも雫ちゃんはなんで、ここに？」

「横島さんを探すため」

「雫ちゃん……ありがとう」

「魔法師は海外に渡航するのが難しいから、留学扱いでここに来たの、一応3月までの短期留学、でも、横島さんが日本に帰るなら、私も帰る」

「ごめん、雫ちゃんには一杯迷惑かけて……事件が解決するまで、ここに残る予定……だから、皆にはまだ、俺が見つかった事は内緒にしてほしい」

「それはダメ！みんな、みんな心配していた。みんな横島さんを探していた。達也さんなんて……横島さん居なくなって、元氣なくて、何時も下向いてた。私と一緒に。だから、連絡はして、学校とかにはいいから」

雫は力強く横島にそう言い聞かせた。

「みんなが……達也も……そうか、俺皆に心配かけっぱなしだな……分かった。決心付いたら連絡する。ちよつと数日まって……だからその間、雫ちゃんも……」

「わかった。でも私は明後日には連絡する。それまで待てない」

「……わかった」

「……横島さん、私も、横島さんが関わった事件、手伝う」

横島はこうして、雫のマンションで夜を過ごすのであった。

横島は必死になって自分を探してくれた雫や達也、日本の友人達に感謝しつつ、今回の事件には関わらせないでおこうと決意するのだった。

しかし、横島を訪ねる来訪者は雫だけではなかった……

127話 横島、恐怖の来訪者現れる!!

横島は雫と再会を果たした翌日の早朝、郊外の公園で人避けの結果を張り、日課としていた霊気を高める修練を行っていた。

意識を集中させこの地の霊気と一体となつて行くのを感じる。

しかし、何時もと違い、この地の霊気は何やらざわついていた。

「……なんだ？何かの予兆……ダンタリオンの悪霊が近くにいますか？」

横島は意識を自分の体に戻す。

「それとも俺の集中力が乱れているのか……」

横島は昨日、雫と再会は予想外ではあったが、嬉しく感じていた。自分の事を親身に心配し探してくれる雫に、そして日本にいる友人達がいる事に……しかし、そんな雫や友人達にどう答えればいいのか分からないでいた。

また、雫には、日本の友人に連絡するようにと言われているが、正直まだ迷いがある。改めて連絡するのが気恥ずかしいとかではない。やはり、魔神ダンタリオンの事だ。自分に関わる事で、日本の友人達を巻き込んでしまうのではないかと考えていた。

実際に、マリアとドクター・カオスを巻き込んでしまっている。横島に話をする為だけに異界から分身体を寄越した魔神ネビロスは、ドクター・カオスのマイクロブラックホール実験を利用し異世界から侵入を果たし、さらには、依り代としてマリアに乗り移ったのだ。

当のカオスとマリアは巻き込まれたなどと微塵も思っていないのだが、横島は自分と関わった所為ではないかと心のどこかで思っているのだ。

横島は自分の所為で周りの近しい人々、さらには無関係な人間をも巻き込むことを極端に恐れているのだ。

この傾向はアシユタロス戦以降から見られる。

だから、力を欲した。一人で乗り越えるために、だから、必死に修行した。誰も巻き込みたくないために、だから、一人で戦った。誰も傷つけないために……

未だに、ルシオラの死はすべて自分の責任であると思っただ。

横島以外誰もそんな事は思いもしていないのに……当のルシオラさえ、そんな事は思っていないだろうに……

そして、その結果、世界分離と言う暴挙を一人で成し遂げてしまったのだ。

横島は修練をそこそこに、ホテルに引き返そうとした時、急に雨が降って来た。

「あれ？今日の天気予報では晴れだったような……あのバインバインのお天気キャスターめっちゃ天気あたるのにな」

この時代、技術の発展により100%に近い確率で天気を予報できるのだが……その事は横島は知らない。ちなみにお気に入り、露出度が高く、胸の大きな美人お天気キャスターの天気予報しか見ていないため、他の局の天気予報など知らないのだ。

横島はそう言いつつ、公園の屋根のあるベンチに座り、携帯端末をいじりだし、ネットで天気予報を見ると晴れ、降水確率0%となつている。

ニュース番組に切り替えると、ニュースキャスターが淡々と原稿を読んでいたが突如として絶叫しだした。

『ダラス郊外は現在、突如として天気が崩れ、現在豪雨……いえ雹が降っています……新たに情報が入って来ました……え？、これ本当なの？……西海岸で突如として発生した巨大な竜巻がこのダラスに向け猛スピードで迫っております!!皆さま大きな建物に避難してください!!』

すると、横島がいる公園に物凄い突風が吹き荒れだし、刺さる様な強烈な雨……そして雹が降って来たのだ。

「なな……なんだ？」

そのタイミングで、横島の所に、燕が飛来し肩に止まり、ポンとい

う音共に、一枚の紙きれに変化した。これは斉天大聖老師の式神だ。
「こんな時に……老師からか……なんだろう？……!!!」
紙切れを読んだ横島の手が激しく震え、顔面から血の気が引いていた。

紙切れには短い一文が書かれていた。

(横島へ、抑えきれんかった。すまん。う。後は任せたぞ☆ミ) (>ω
o) (テへ)

これだけで横島はすべてを悟る。

横島は嵐が吹き荒れる中、正面を向く。

雨霰が降るなか、あちらから、巨大な竜巻が店の看板やら、ゴミ箱
や自転車、植木などを巻き込みながら、横島に一直線に迫って来たの
だ。

横島はそのとんでもない光景を見て、何故か一步も動こうとしない
……いや、動けないでいた。

横島の目には絶望という希望の無い未来しか映っていないかった。

「ふふふふふつ、よーこーしーまーきーーん、見——つけたー」

竜巻の中心から女性の声が聞こえる。

「あが、あがががっ」

横島はベンチから前に滑り落ち、両膝を付き、両手をだらんと脱力
する。目線は竜巻の中心から離れない、驚愕の表情で口を大きく開け
たまま、声が漏れていた。

「ふふふふふつ、なんのポーズですかー？！懺悔でもしようと
言うのでしょうかー？！」

竜巻は中心には、小柄な少女がゆつくりと歩んでくる。

そして、ショートカットの燃えるような赤い髪をした少女は物凄い
笑顔で横島に向けていた。

「それは決まっています。貴方を連れ戻すためです……もはや限界です!! 貴方を……貴方をこんな下界などに置いておくなど、我慢できません!!」

そう言った瞬間大きな稲妻が小竜姫の背後に落ちる。

「帰りますよ!!」

小竜姫はそう言って横島の手を引っ張り上げようとしたのだが……小竜姫は横島の手を持ったままその場で横島にしなだれる様に倒れてしまった。

「小竜姫様!?!……小竜姫様……!!」

128話 横島、小竜姫の来訪を受ける!!

横島は急に倒れた小竜姫を抱き上げ、こつそりホテルの自室に戻り、そつとベットに寝かせる。

因みに横島が宿泊しているホテルの部屋には寝室とリビングに分かれており、大きなベットが二つある。

外は大わらわとなつてゐる。小竜姫が起こした災害級の巨大竜巻の後始末で消防隊や軍関係者が忙しく駆けずり回つていた。

明らかに自然の力としては不自然な動きをする竜巻である上に、それに伴い巻き起こる霊圧（サイオン量）も凄まじい物があった。

何者かによる魔法テロと間違われてもおかしくない。

しかしながら、早朝という比較的人が少ない時間帯で起きた事もあり、今の所、人的被害はないようだ。

横島はホツと息を吐き、改めて、ベットの上で寝ている小竜姫を見る。

「無茶を……この世界の現世に出られるだけでも、大変だろうに、ここまで来られるとは」

小竜姫が倒れたのは無理もない話なのだ。

神は主に、現世に置いて、神界の掟（ルール）に従い。霊気供給を限定している。

信仰の対象となる神は、人々の信仰心により、霊気を供給する。

土地に括られた神は、その土地から霊気を供給する。その代わり他の土地に移動すると霊気供給が絶たれるだけでなく、霊気が他の土地に吸われてしまうのだ。

そのどちらでもない小竜姫のような特定の役目を負った神は、神界からの霊力の供給に頼つてゐるのだ。

滅多に現世に強力な神が顕現しないのはこの掟（ルール）があるためである。

逆に神が現世になるべく関わらない様にするためでもあるのだ。

因みに過去の小竜姫は日本における天界との橋渡しの存在であ

り、日本という土地からの霊気供給と、神界からの霊気供給を受けていたのだが……今は、神と人の接点もなく、日本という土地からの霊気供給はままならない。現在、神界からの霊力供給のみとなっている。

そして、神界から隔絶されてしまった今のこの世界において、神界から霊気の供給を得ていた小竜姫は、この地（現世）に降り立った時から、霊気を消費する一方で供給できなくなる。

現世に降り立った小竜姫は陸に打ち上げられた魚同然なのだ。

通常であれば、小竜姫の霊力レベルで有れば、何もしなければ数日持つだろうが、先ほど多量に霊圧をまき散らしながら、ここまで来た。一気に霊気を消費してしまい、気を失ったのだ。

横島は寝ている小竜姫の額に手を当て、自らの霊気を送り続ける。

しばらくすると、小竜姫はゆっくりと目を開け、体を起こそうとする。

「小竜姫様、まだ、十分な霊気を送ってません。そのまま……」

「……私は……活動限界で倒れたのですね」

小竜姫は体が思う様に動かない事に気が付き、体を元の位置に戻す。

「なぜ、こんな無茶を」

横島はすかさずズレたシートを元に戻し、小竜姫にそつとかぶせた。

「……貴方を連れ戻しにきました」

「俺は今、ここを動くわけにはいきません。手紙で説明したはずですよ……関係ありません。この世界がどうなろうと……それはすべて人間が自分で仕出かした事です。今回の事もそうです。自ら悪霊を呼び寄せたようなものです。貴方が手を差し伸べなくとも……自分達で解決すべきです」

「魔神は介入の機会を伺っておりました。それを利用されただけです

「……………それに俺も人間ですよ。小竜姫様」

「あなたは……………もういいではありませんか、貴方はもう、この世界に介入すべきではありません」

小竜姫は声を荒げるが、直ぐに冷静さを取り戻し淡々と横島に話を
する。

「貴方は100年前に十分に目的を果たしました。この世界には妖怪・幽霊などはいなくなり、それに神魔も容易に手が出せない様になりました。後は人間達自身で時代を作るべきです。それが破滅へと向かおうが……………」

「俺は……………俺のせいでの世界を作ってしまった。その責任がありません」

「私は……………もう、貴方が苦しむ姿を見たくないので……………私は貴方があの島で海に落ちる姿を見ました……………自らを犠牲にするような事ばかり……………私はもう見ていられないのです……………お願いです……………横島さん……………私と妙神山に帰り、私と一緒に居て下さい」

小竜姫はベットから上体を起こし、自分に額に靈気を送っている横島の手を握り、目を潤ませ、そう懇願したのだ。

「……………小竜姫様」

バタン！

「ふはははははっ小僧!!朝食に付き合え!!」

「ドクター・カオス・ノックを」

当然の如く、我が物顔で横島が宿泊している部屋に入るドクター・カオス、そして、それを諫めながら、後続くマリア。

「ちよい待った!」

横島は慌てて止めるが既に遅い。

「ぬ!?小僧に若い女だと!!……………貴様ついにやってしまったか、どこから攫ってきた!!」

「横島さん・遺言をどうぞ」

カオスとマリアはベットの上の小竜姫と横島を見て、カオスは横島がどっかからか、攫ってきたと勘違い。横島がナンパ成功し、合意の上連れ込んだなどは微塵も思っていなかった。

「マリアも同様だ。そして、ロケットアームを横島に照準を付ける。待て！お前ら……！なんで攫ってきた事が前提なんじゃ……！！」

横島は反論の雄たけびをあげる。

「？この小娘、どこかで見たことが……？」

カオスは小竜姫の顔を見て、思い出そうとしている。

「……ミス・小竜姫・久しぶりです」

マリアは勿論記憶に残っている。

カオスとマリアは過去、何度も小竜姫と会っている。小竜姫からの依頼も受けた事もあるのだ。

「マリアさん、それにカオスさんお久しぶりですね」

小竜姫はマリアとカオスに笑顔を向け挨拶をする。

「おおお!!肝心なところでいつも役にたたん、龍神の小娘か!!」

カオスは思い出したように言う。

マリアの記録や過去の映像から、小竜姫の事を知っていたのだが、自分が思った印象をそのまま口にしていた。……まあ、間違っていないのだが……仮にも神に対しての口の利き方ではない。

「じじじ……じいさん」

横島は焦ってカオスをたしなめながら、小竜姫の顔を伺う。

「……役に立っていないのですね……貴方もそう思っているのでしょうか……だから、帰って来てくれない……役立たずな神……小竜……肝心なところで」

小竜姫はズンと沈んだ表情をし俯き、後半はな何やらブツブツと自虐ともとれる言葉をつぶやいていた。

100年前のアシユタロス戦から、横島の世界分離まで、カオスは何かと横島に協力していたが、小竜姫は実際に何もできなかったのだ。

今の、小竜姫にとってこれほど堪える言葉はないのだ。

「そ、そんな事はありませんよ、何時も俺の修行にも付き合ってくれませんか……小竜姫様はあくまでも神界と現世をつなぐ管理

者であって、そうそうこの世界に関与できないんだ!!カオスのじいさん!!謝れ!!」

横島は小竜姫に慰めの言葉をかけ、カオスに叱咤する。

「なんかようわからんが悪かったのう」

カオスがなぜ自分が叱られたのかも分かっていないが、小竜姫の様子を見て取り合えず謝る。

「ドクター・カオス・デリカシーが皆無です」

マリアもカオスの言動に呆れている様だ。

「どうせ、私など……しがない管理人……力の無い神……暴れるしか能がない神です……」

小竜姫は沈んだ顔でブツブツと呪いの言葉の様に自虐を繰り返している。

「しよ……小竜姫様……食事をしてませんよね?何か食べ物を持ってきてもらいますね……マリアすまんがじいさん連れて、朝食に行つてくれ、俺はルームサービスでここで小竜姫様と食事をするから」

「イエス・横島さん」

そう言つて、マリアはカオスの襟元を無造作に掴んで、ズルズルと引つ張り部屋の外に出て行く。

「何をするんじやマリアアー!!」

ボタンと部屋扉が閉まる。

「小竜姫様、俺は小竜姫様が役に立たないなんて思っていますよ、何時も俺を励ましてくれますし、相談もたくさん乗っていただきました。俺がまだ、まともでいられたのは小竜姫様のお陰です」

「……そう思いますか?」

「はい……そうだ。小竜姫様どうやってこちらに来られたのですか?鬼門の瞬間移動ですか?」

「……はい……でも、霊力が足りず、アメリカ西海岸まででした」

「帰りはどうされるつもりだったのですか?」

「鬼門達に一旦妙神山に帰らせ、霊気を十分補給してから、翌日には……と思っていたのです」

「今日一日はここに居られるのですね」

「はい、本来直ぐにも戻らないといけないのです……役立たずな私が居ては迷惑ですね。貴方と一緒に居る資格もないです……しばらくしたら、瞬間移動した場所までもどります……」

小竜姫は完全に自信が無くなっていた。何時もの毅然とした姿は無く、俯いたまま、自嘲気味にそう告げた。

「小竜姫様……今戻るわけにはいきませんが、事件が解決したら、必ず戻りますので、それほど時間を掛けません」

「本当ですか？帰ってきてくれるのですか？こんな私の元に」

「こんな何て言わないでください。小竜姫様は俺の姉弟子なんですよ。それに俺のもう一つの家でもあるんですから」

「そ……そうですか」

小竜姫はホツとした表情をする。

「じゃあ、一日あるのなら朝食を取ってから街に出かけませんか？いつぞやのお約束も果たせますし」

「ほ、本当ですか！」

小竜姫はぱあつと嬉しそうな表情になる。

「はい……じゃあ、もうちよつと靈氣を送ります」

横島は小竜姫に元気が戻ってきたことにホツとする。

横島はそう言つて、ルームサービスの朝食を頼み、サラサラと手紙を書き、妙神山の斉天大聖老師に向け、小竜姫が来た事と明日には戻ってもらう事を式神を飛ばし知らせるのだった。

129話 横島、平穩は訪れない!!

自走タクシーに乗った小竜姫は窓の外の街並みを興味津々に見ている。

「100年前の東京と大きくは変わりませんね。若干建物の感じが違うぐらいですか」

「まあ、中心地のビル街ですから大きくは変わらないです。田舎の方に行くとは街並みは明らかに異なりますよ」

「横島さん、あの者たちは下を向いて何をしていますか?」

「あれが、この前言っていた、手軽に会話や映像を送る事ができる情報端末という機械仕掛け……からくりです。結局妙神山には繋ぐことはできませんでしたが」

夏休みに妙神山に戻った際、情報端末とネットについて老師と小竜姫に話たのだが、空間が異なる妙神山と電波はおろか物理的に線をつなぐことも出来なかった。もしかしたら、ドクター・カオスなら出来るかもしれないが……

「凄いですね。あんな小さなものなのですね」

「小竜姫様着きました」

横島はそう言って、自走タクシーを降り店に入って行く。

「きれいな服が色とりどり一杯です!!」

横島と小竜姫が入った店は、高級そうな洋服店だった。ちなみにリーナとよく来た店でもある。

小竜姫の今の格好は、妙神山にいる時の格好、古代の日本や中国の軍人の服装に似た格好をしているのだ。流星にこの格好で街中をうろつくと注目の的だろう。傍から見ればコスプレ美少女だ。

横島は、小竜姫の角は隠形の術で隠し、腕と頭の竜具は靈力の消費を抑えるためにも外してもらい。帯剣は陰陽術で札に変化させ持つてもらっている。

また、小竜姫は放つ神独特の神秘的なオーラも封印している。

「小竜姫様、好きなものをどうぞ」

「いいのですか？でも、沢山ありますね。私、どれを選んだらいいのか分かりません」

そこで、横島はいつも通り、店員さんのお勧めでコーデイネートしてもらおう。

少し大人な感じな花柄が入った白のワンピースにカーキのジャケット、靴は慣れていないので、ワンピースに合うようなおしゃれなカジュアルシューズ姿で試着室から小竜姫は出てくる。

そして、自ら、鏡の前で白い花の髪飾りを右耳の上に飾る。夏休みに横島からプレゼントされたものだ。どうやら肌身離さず持っている様だ。

「どうですか？」

小竜姫は何時もと違い少し恥ずかしそうに少女らしい笑顔を横島に向ける。

「よくお似合いですよ」

「ふふふつ、ありがとうございます」

嬉しそうにする小竜姫。

若い店員は支払い時に横島に余計な一言をいってしまふ。

「可愛らしい妹さんですね。横島様」

後ろで聞いていた小竜姫は

「……妹じゃないです。私が姉（弟子）です!!」

その店員をキツと睨む。

「たははっ、そうなんです」

「し、失礼しました横島様」

店を出た小竜姫は不満そうに横島に言う。

「私はそんなに若く見えますか？……横島さんよりずっと年上なのに……」

「小竜姫様が、それだけ可愛らしいという事ですよ」

「ほ、本当ですか？」

そう言いつつ、気分をよくする小竜姫。

「何処か行きたいところありますか？」

「私はよくわからないので……何か甘そうなおいしいものを頂きたいです」

小竜姫は何か思い出したように言う。それは、横島が第一高校で友人達と喫茶店やらで買い食いしているのを見ていた時に食べていたクレープやらアイス、ケーキなど思い出した様だ。

「では行きましょうか」

「今日は私が姉で横島さんは弟です。姉と呼んでください」

「え？さすがにそれは」

「実際に姉弟子と弟弟子です。姉弟もおなじです」

「小竜姫様？」

「違います。姉です」

「………姉………さん」

「!!………はい………良いですね」

小竜姫は少し顔を赤らめている。

因みに小竜姫は神なので、姉弟でも恋人同士にもなれるし伴侶にもなれると当然の如く思っているのだ。

この後、幾つか、甘いデザート系の店を回り、川岸の公園にたどり着く、ここでも、露店でクレープを購入する。

「おいしいですね！私いつも、見てばかりで羨ましかったんです。横島さんが女の子と一緒に甘いものを食べたりお茶しているのが」

千里眼のイヤリングで横島の日常を見ていた小竜姫は何時もやきもきしていたのだ。そんな中、横島に危害や、悪口を言う輩が現れると怒れ狂い、それを老師と鬼門達が諫めるのが日常化していた。

「あの、小竜姫様？それは語弊が……男友達も一緒に居たと思うのですが……」

「姉さんです！次行きましょう」

小竜姫はどうしても横島に姉と呼ばれたいようだ。そう言ってクレール片手に横島の腕を引っ張り歩き出す。

横島は100m圏内に雫の気配を感じる。先日雫とは夕方に会う約束をしていたのだが、今日は断るつもりでいた。どうやらこのまま行くと鉢合わせになるコースになりそうだ。まあ、会ったら会ったで、姉弟子が来ている事を告げるだけだと軽く思っていたのだ。

横島は小竜姫と雫が合う事に危惧を抱いていなかった。横島は雫の事を妹の様に思っている上、雫が横島に危害を加えることは無い。小竜姫からも雫に対し特に何やら怒りの文言は語られていなかったように記憶しているからだ。ちゃんと話せば誤解なく行けるだろうと踏んでいたのだ。

しかし、エリカやら達也、摩利さんに合わすと血の海になるだろう。小竜姫からは非常に印象が悪い様なのだ。

そして、小竜姫に腕を引っ張られるままの横島と雫は公園のメイン通りで出くわす。

「うっす、雫ちゃんこんなところで何してるの?」

横島は軽く雫に挨拶をする。

「……………横の女の人誰?」

雫は横島を見ずに、横島の腕を引っ張っている人物、小竜姫を見据える。

「えーつと」

横島は雫の迫力に言い淀む

「姉です……………そういうあなたは確か……………」

小竜姫は笑顔でそう言って聞き返す。

「横島さんにお姉さん?聞いたことがない。……………私は横島さんの恋人」

雫は何故かこんな爆弾発言をする。

「ええーっ!ちよっ、雫ちゃん何言ってるの??」

「フン?恋・人?どういふことか説明してただけませんか?」

小竜姫は笑顔だったのだが急に目の周りに影ができる。そして横島に首だけを回し、疑問をぶつける。

「たははっ、そ、それは、じよ、ジョーク、ちよつとしたジョークですよ」

「横島さん照れなくてもいい、順然たる事実……あなたは誰なの？横島さんに姉なんていないはず、無理やり横島さん引つ張つてどうするつもり？」

「フフフフフツ、私は彼の正式には姉弟子。妙神竜姫……姉弟仲良く、『逢引』を楽しんでいるところですよ。それで……誰が誰の恋人ですか？」

咄嗟に作つたのだろう偽名を名乗り、物凄い笑顔の小竜姫はとんでもない返答をする。なぜかその笑顔がめちゃくちゃ怖い。

「ちよつ？しよしよう…逢引？なにを……」

「……横島さんは嫌がつている。無理矢理付き合わされてる。私は北山雫、横島さんは学校でもプライベートでもいつも一緒に居てくれる」

雫は小竜姫を睨みつけながら、空いている横島のもう片方の腕を取る。

ピキ！

小竜姫のこめかみの上あたりの空気からそんな擬態語が聞こえてきそうな雰囲気だ。

「フフフフン、私は彼と一つ屋根の下で、一緒に寝食を共にしていたのですよ」

ピキキ！

雫の額の上の空気からもそんな音が聞こえそうだ。

「くっ……横島さんはいつも私の頭を優しくなでてくれる」

ピキキキ！

「うらや……たかが、半年程度しか一緒にいないくせに!!私は彼とどれだけ長い時を過ごしたか!!」

「ちよ！小竜姫様!?!」

「付き合いの長さは関係ない。横島さんの手は暖かいし、お姫様抱つ

こもしてくれる」

どうやら雫が優勢の様だ。雫は横島の腕を自分の頭に乗せ、無表情ながら余裕をかましている雰囲気を出している。

ピキキキキ！

「この……フン、でも彼の趣味にあなたは合致しないみたいですよ……ご自分の胸を見て胸に手を当ててみて下さい」

小竜姫はそう言って雫の胸元を見、目は笑っていないが口元をニヤリとさせる。

「くっ……そういうあなたもあまり変わらない」

雫は自分のちいさな胸に手を当てて悔しそうにするが、キツとした表情を小竜姫に向け言い返す。

「……そこに直りなさい!!」

小竜姫から暗い笑みが消え、遂に剣を抜いてしまった。

「……横島さんは渡さない!!」

雫もCADに手を取り戦闘態勢をとる。

「二人共こんなところで、わけわからない事で、争わないでくっ!!」

横島は両手を広げて二人の間に入る。

やはり手遅れだった。

小竜姫が抜刀した剣は横島の頭に直撃、雫が魔法で出した空気砲は横島の腹に直撃。

頭から血が噴き出し、その場に崩れる様に倒れる。

「ふぶはっー!!二日……続けて、こんなん……ばっかし……ガク」

「彼になんて事を!!」

「横島さんに酷いことを!!」

二人はお互い顔突き出しがみ合う。二人の視線は勝ちあいスパークしているかのような火花が散る。

もう、止めれそうもない。

しかし、

「横島さん・困っている・マリア・横島さん困らせない」

突如空からマリアが現れ、倒れている横島を抱き上げ、連れて行く

うとする。

「マリアさん待ちなさい!!私には彼とお出かけ中なのです!!」

「待ってマリア!!」

そんなマリアを止めようとする二人

「二人は・何しにここに・来たのですか?横島さんを・困らせるために・ここに・来たのですか?」

「……………」

二人はマリアに抱き上げられ、目を回し血を頭からどびゅどびゅ出している横島を見て俯き沈黙する。

マリアの言葉は重い。

100年前、最前線で横島の横で戦い、協力してきたのはマリア、そしてドクターカオスなのだ。

「すみません……………しようしよう大人気が無かったようです」

「ごめんなさい。私もカッツとなって……………」

お互い頭を下げ、意気消沈する。

横島は復活し、マリアから降り。

「マリア……………、二人を責めないでくれ、俺がみんなを心配させたのがそもそもの過ちだから」

「横島さん・悪くない・みんなを守りたいだけ」

二人はそんなマリアと横島の会話を聞き、罪悪感が募ると同時に、その関係を羨ましく思う。

その後、項垂れる小竜姫と雫を連れ、マリアと共に、近くのカフェに入り、改めてお互いを紹介をする。

小竜姫の事は、武術の師匠の姉弟子という紹介をする。名前はさつき、小竜姫が咄嗟に作った妙神竜姫（みようじん・たつひめ）として……………そして、明日には日本に帰る事も……………

雫の事は学校の友人として、普通に紹介した。

そして、一応この場は収まったのだが……………

その日の夜、横島が宿泊しているホテルの一室では、今も尚項垂れ自虐のような言葉を繰り返す小竜姫を一晩中かけてなだめていた。

翌日少しは元気になった小竜姫を送り届けるため、自走タクシーで時間をかけ、西海岸の瞬間移動で送られた場所まで来たのだが……所定の時間になっても、鬼門は現れない。

2時間待ち現れなかったのだが、代わりに斉天大聖老師の燕の式神が空から現れる。

そして横島の前で手紙へと変化する。

内容はこうだ。

(横島よ、鬼門達は無理が祟って、動けん状態じゃ、迎えは寄こせん。しばらく小竜姫の面倒を見てやってくれ(´ω´)b グツジョブ!!)

横島の手紙を持つ手がプルプルと震える。

……横島は胃に穴が空く思いがした。

昨日の状況を見た限り、小竜姫と雫は相性が良くない様なのだ。

幸いにも小竜姫は力を使えないため、大事には至らないだろうが

……

小竜姫はその手紙を横島から受け取ると……そんな横島の思いも知らず、

「昨日みたいな事はもうしませんから、しばらくよろしくお願いしますね」

嬉しそうに横島にそう告げた。

横島は小竜姫と共にホテルに戻り、しばらくした頃、ノックの音が部屋に響く。

横島は部屋の扉を開けると

「こんばんわ、横島さん」

雫が目の前で、上目使いで挨拶をしていた。

「雫ちゃん……どうしてここに？よく入れたね」

このホテルには、カオスやマリア、横島を訪ねても宿泊していない事にするように言っていた。

「うん、今日から私もこのホテルで生活するの、横島さんを困らせるこ

とはもうしない。だからよろしく」

雫は嬉しそうにそう言っ、廊下を挟んだ一室の扉を指す。

バスン!!

横島はその場で顔面から倒れ、ピクピクする。

「たはったははははっ、俺の胃もつかない」

こうして、USNAにおける横島の生活スペースのすべては、平穩から離れ試練が続くのであった。

130話 横島、まだ噂の留学生を知らない!!

2095年から2096年へと年号が変わり数日

八王子にある国立魔法大学付属第一高校では新学期（3学期）の初日を迎え、その放課後。

「噂の留学生、スゲー美人らしいぞ、お前こういう騒ぎが好きだろ、見に行かないか？」

「雫との交換留学の子よね。なんでわざわざA組まで見に行かないといけないのよ。人だからできてみたいだし、嫌よ、カツコイイ男子なら行くかもしれないけど、女の子でしょう？男連中で見に行ったらいいじゃない」

エリカはレオの提案をすげなく断る。

新学期早々に深雪やほのかが居るA組にUSNAから短期留学生が入って来たのだ。

しかも、金髪碧眼のかなりの美少女という事で、学校中の生徒がこぞってA組に行き一目留学生を見ようと人だかりが出来ていたのだ。「魔法科高校にとって留学生など想定外の出来事だ。この十年以上このような事は無かったんだ、興味はわからないか？」

達也はレオのフォローではないが、エリカを促す。

「まあ、興味は全くないわけでもないけど、うちだけじゃないし、他の魔法科高校にも留学生が数人USNAから来ているんでしょ？一応同盟国だし有り得るんじゃない？」

エリカは達也にこう答えた。

達也は表面上は普通の会話のようだが裏の意味はエリカに『わざわざUSNAから留学生など送り込むなど、きな臭くないか』と言っているのだ。

それに対し、エリカは『USNAは同盟国だし、他校や大学にも来ている様だから、別に特別な事じゃないんじゃない？警戒しすぎじゃないか』と言っていたのだ。

周りにいる美月と幹比古はこの会話の意味を理解していたがレオには全く通じていない様だった。

「USNAは常々、日本の魔法技術を欲しがっているしね。その線が濃厚だよ」

幹比古はやはり、二人の会話の意味を理解していた。

幹比古は『その留学生達は日本の魔法技術を奪取するために送られたスパイだろう』と言っているのだ。

「何か？お前ら、A組の留学生はスパイだともいうのか？」

レオも幹比古の言葉でようやく、理解が追い付いたようで、直接的な言い方をする。

「……レオ君、そんな直接的に言わなくても……みんな分かっていると思うのだけど、それにそう言いきつちゃうと、留学生と話しづらくなっちゃうですよ」

美月はそんなレオに軽く注意をする。

そうこのUSNAからの留学生は公然の事実として、日本の魔法技術を持ち帰るためのスパイだという事は学生ですら理解しているものなのだ。

勿論日本政府はそんな事は百も承知でいる。十分対策も取っている事だろう。

なぜ、留学生を受け入れたのか？

それは裏取引があったからだ。日本からダラスへ高レベル魔法師を含む数人の魔法師の派遣と行動の自由を交換条件としているのだ。高レベル魔法師とは勿論、独立魔装大隊所属、藤林響子少尉の事だ。目的は、横島忠夫を日本に連れ戻すためなのだが、USNAはまだそこまで把握していない。

一方USNAは留学生を派遣し公然の事実としてスパイ活動、魔法技術を本国へ持ち帰る事。日本政府もそう判断しているのだが、実際には、10月末に鎮海軍港壊滅した『灼熱のハロウィン』を引き起こした戦略級魔法師の容疑者を洗い出し、確認。そして、状況によっては捕縛または抹殺も想定されているのだ。この事については日本政府も把握していなかった。

しかし、十師族、四葉家当主四葉真夜は、その事に気が付いており、

既にUSNAから『容疑者』と認定されている自分の甥と姪である達也と深雪に注意勧告をしていたのだ。

さらには、USNAが誇る魔法師特殊部隊スターズが関与している事も探り当てていた。

達也も、留学生がスターズの一員である可能性が高く、また、自分と深雪を探りに来ている人物であることを把握していたのだ。

「でもよ、A組だろう？俺たちには関係ないんじゃないか？」

レオは自分だけ蚊帳の外に居るような気分になり、少し口を尖らせて、ふてくされた様な表情をしていた。

「あんたバカね。A組には深雪が居るじゃない、しかも生徒会副会長よ、どうせ、付きつきりで案内やら世話やらやらされるに決まっているんだから」

「必然的に私達とも交流することになりますよ」

エリカと美月はレオの顔を見ながら半ば呆れた様に反論する。

「そうなるだろうな」

達也は平然と言うが、内心、厄介の種に必然的に飛び込まないといけない事に何か大きな意思が働いているのではないかと疑いたくなるような気分になっている。

「じゃあよー、その留学生ってUSNAから来たんだろ？横島の事、知ってたりして」

レオは何気なしにそんな事を言ったのだ。

2ヶ月以上前から行方不明ではあるがUSNAに居る可能性が非常に高いと推測している、音信不通で所在も分からない状況である親友、横島忠夫の事を言っているのだ。

「やっぱあんたバカだわ、そんな都合のいい事あるわけないでしょ？……雫がきつと探してくれるって……」

エリカはレオの意見に反論しつつも、横島の事を気が気でないのだ。

達也はレオの適当な意見、いや勘なのだろうか、それは十分あり得る話だと思っていた。

達也の情報では留学生はスターズ、軍部の人間である可能性が高い。横島はドクター・カオスマたはUSNA軍に軟禁または拘束されている可能性が高いからだ。

さつそく厄介の種が達也に迫ってきた。

「みんな集まってどうなされたのですか？お兄様、風紀委員のお仕事はよいのですか？」

「こんにちは」

深雪とほのかがE組で話していた何時ものメンバーの前に現れるが、その後ろにもう一人いた。

「ああ、この後行くことになっている」

「深雪にほのか、ちよつとしゃべってただけ」

「こんにちは、深雪さんにはのかさん」

達也、エリカと美月は挨拶をかえす。レオは手を上げて挨拶、幹比古は軽く会釈して返していた。

「噂の留学生ね」

エリカが深雪とほのかの斜め後ろにいる金髪碧眼の美少女をみてそう呟く。

「みんな、紹介するわ、USNAからの留学生、アンジェリーナ・クドウ・シールズさん」

「はじめまして、アンジェリーナ・クドウ・シールズです。リーナって呼んでください」

その金髪碧眼の美少女は笑顔を振りまき、自己紹介をする。

そう、噂の留学生とは横島が記憶をなくしていた際、何時も一緒に行動していたあのリーナなのだ。

「俺は、E組の司波達也、深雪の兄だ。深雪と区別がつきにくいから達也と呼んでくれ」

「私は、E組、千葉エリカよ。エリカでいいわ」

「同じく、柴田美月です。美月って呼んでください」

「俺は西城・レオンハルトだ。レオって呼んでくれ。よろしくな」

「僕は、E組、吉田幹比古、……幹比古って呼んでくれたらいいよ」

何時ものメンバーはそれぞれ自己紹介をする。幹比古だけは少し顔が赤い。

「タツヤは深雪のお兄さんなの？」

「そうよリーナ、素敵なお兄様です」

多分深雪はリーナが言いたい事が分かっているだろう。

リーナは似ていない兄妹だと思っていたのだが……深雪には通じていなかった様だ。

「……と、エリカにミツキ、レオとミキヒコ……よろしくね」

そんな回答する深雪に戸惑いながらも、自己紹介したメンバーを顔を見ながら復唱していく。

「……ところでリーナ……アンジェリーナなのに、何故、愛称がリーナなんだ？普通であれば『アンジー』だと思うのだが」

達也はワザとそんな言い方をする。

「ああ、それね。学校で、アンジェラって子がいて、その子と被るから私の方がリーナになったの」

リーナは笑顔でそれに答える。

達也は知っていた。スターズ最高の魔法師であり戦略級魔法師アンジー・シリウスの名をそれでカマを掛けたのだ。リーナには動揺は見られない様だが……達也は疑っていたのだ。

「あと、さつきも言ったけど、リーナと交換留学したのは私の幼馴染でみんなとも友達、北山雫って子がいるの、とても可愛らしい子なのよ」
ほのかは達也の思惑などに関係なしに、話を進め、雫の名前を嬉しそうに言う。

「そう。こんどその子の写真見せてね」

リーナは笑顔でほのかのにそう答える。

実際リーナは達也にばれるのではないかと内心、ハラハラしていたのだ。

頭の中ではほのかに感謝をしている。

リーナの正体は、USNAが誇る最高の魔法師の一人、スターズの総隊長アンジー・シリウス少佐その人なのだから。

リーナは軍の任務で、『灼熱のハロウィン』を引き起こした容疑者である達也と深雪を潜入捜査で探るために、学生の身分でこの地に居るのだ。

そのターゲットにしている本人に自分の身元が初日でいきなりバレる事態は避けたいのは当然だろう。

しかし、既に達也にはほぼバレているだろうが……

「ああ、あともう一人居るんだがな、面白い奴で……」

レオはそんな事を言っていた。

「あんた、それは今言う事じゃない!!」

エリカはそんなレオの言葉に割って叱る。

当然の事だ、初対面の人間に行方不明の親友が居るんですなんてことは、言うべきではないだろう。空気が読めない事に定評があるレオならではのである。

「??」

リーナはそんなエリカとレオの会話を疑問に思うが聞き流す。

こうして、奇しくもリーナは横島の日本の友人達と出会う事になる。

これはリーナにとって良い事なのだろうか？

リーナは八王子内に借りている広々とした2LDKのマンションに戻る。

「お帰りなさい、リーナ」

「ただいま、シルヴィ、先に戻っていたのですか？」

リーナの帰りを待っていたのは20代中頃の女性、今回のリーナの任務を補佐するシルヴィア・マーキュリー・ファースト准尉であり、この部屋でリーナと寝食を共にしている。

「お邪魔しています。少佐」

もう一人、テーブルで紅茶をたしなんでいたのは、日系アメリカ人のミカエラ・ホンゴウ。愛称はミアと呼ばれている。

彼女は軍の魔法研究員なのだが、USNAの諜報員として、リーナ達より一足先に、日本へ渡り、USNA外資系の会社のエンジニアリング本郷美亜として魔法大学へ潜入しているのだ。

また、ダラスのマイクロブラックホール生成実験にも参加していた才女である。

因みに隣のマンションで今は住んでいるがこうして、年の近いシルヴィの所にお茶をしに来ているのだ。

「あら、ミアも来ていたのね」

リーナを紅茶を入れてもらい。その輪に入る。

その後、今日の出来事をシルヴィに報告をする。

特に達也にばれそうになった事について、偶然ではないかとシルヴィは言うのだが、リーナはそうは思えなかった。

リーナは自室のベットで……

「タダオの母国日本……タダオと話したい……今は任務中………もつとちやんと話せばよかった」

一方横島はこの頃、USNAでまだ、カオスとマリアと平穏な日々を過ごしていた。

131話 横島、友人達と留学生!!

リーナは留学二日目にして、すでに校内の有名人となっていた。その美貌は深雪に匹敵し、今や、第一高校内で深雪と双璧をなす美少女として認知されている。

また、魔法技術の高さも注目されている。第一高校内では今まで深雪に対抗できる人間は、同学年だけでなく、上級生でもいなかったのだが、リーナは魔法授業でそんな深雪の相手を務め、対抗しうる力を示したのだ。

放課後リーナは深雪とほのかに学内のクラブ活動の案内をしてもらっていた。

その後、何時もの面々と何時もの喫茶店で待ち合わせをしていた。「へへ、リーナって優秀なのね。校内敵無しの深雪と対等に渡り合えるなんて」

エリカはリーナと深雪との魔法授業での話題を話していた。

「そんなことはないわ、結局深雪には負け越しているし、ほのかには知覚系魔法は完全に負けてるし」

リーナは苦笑気味に答える。

「今まで、深雪さんに対抗できる人はいなかったのだから……」

美月もリーナを素直に感嘆していた。

「さすがは、USNAを代表して留学してきただけはあるな、深雪も、やりがいがあつていいんじゃないか?」

達也もリーナを褒めつつ深雪に話題を振る。

「お兄様、リーナ、授業は競技じゃないわ、あくまでもお互いの魔法力を高めるためのものだから、勝ち負けにこだわる事はないわ」

深雪はそう言いながらも、内心今までに無い手ごたえのある相手に出会い、うれしくも思っていた。

「競い合つてこそ、成長するものよ深雪、だから勝ち負けは大切よ」

リーナは少し悔しそうな表情を作りそう言う。

「勝ち負けか……まっ魔法授業はあくまでも、授業だし、実戦じゃない

「んだし、そんなに気にすることないんじゃない」

「エリカはそんなリーナにフォローを入れる。」

「確かに……しかし、実戦だったら達也かあいつだろうな」

「レオも領きエリカの意見に賛同しつつ、こんなことを言う。」

「達也は実戦だつら強いのか？ 深雪よりも？」

「リーナは驚いた顔をしながら深雪に聞く。」

「当然です。お兄様は私よりもずっと強くてかっこいいのですから」

「何時ものブラコンぶりを発揮する深雪。」

「達也は魔法の力はそれほどじゃないかもしれないけど、豊富な知識と、技術と応用力がそれを余りあるぐらい補っているしね。体術もすごいしね」

「幹比古はリーナの前で自分事のように達也を持ち上げる。」

「……………」

「達也は余計な事をすると思いつつも沈黙を守る。」

「……………そうなんです。深雪よりもなんて、すごい魔法師なのね達也は」

「リーナは一瞬目つきが鋭くなるが、すぐに戻る。」

「そうなの！ お兄様は凄くて素敵なの！」

「ブラコン無双をまだ継続中の深雪」

「はあく、そういえばレオが言っていた『あいつ』とは私と交換留学している雫の事なのですか？」

「リーナはそんな深雪を見て、呆れた表情をしつつ、レオがさつき

「言っていた『あいつ』の事を聞く。」

「違うの、西城君が言っているのは雫の事じゃなくて……………」

「ほのかは言わずにそうにする。」

「あんたが余計なこと言うから、まっ、いずれ分かる事だし、学校中噂になっっているからいつか……………本当はもう一人何時もつるんでいる奴がいるんだけどさういつの事よ」

「今はないってことは転校したの？」

「……………リーナも知っているとと思うのだけど、あの横浜事変以降行方不明になっっているの」

「ごめんなさい、余計な事を聞いて……」

リーナはそれを聞いて、もはやその友人は死んでしまっているのではと考えていた。

あの事件では、死者・行方不明者が1万人弱にも及んでいる。当然リーナもそのことを知っていて、第一高校の生徒が巻き込まれたことも知っていた。

しかし、周りを見渡すと彼らに、悲しみの色はない、逆に楽しげでもあった。

それに疑問を覚えるリーナ。

「いや、いい多分奴は何処かで生きている。そんな情報もちらほら出ている。別にリーナが謝る必要はない」

達也はリーナにそう言う。

「リーナ、昨日雫の写真見せてって言っていたし、彼もいつしよに写っているのもあるよ」

ほのかはそう言って、リーナの真横にくっ付いて座り、自分の携帯端末をリーナの目の前に掲げ、一緒に画面を見ながら操作する。

「是非、見たいわ」

すると一枚目の写真はほのかと第一高校の制服を着た小柄でどこか眠そうな目をした少女が写っていた。

「この子が北山雫、私の幼馴染」

そして次の写真を見た瞬間リーナは驚愕のあまり、目を大きく開きかたまってしまった。

そこには全くの予想外の人物が……リーナが今一番会いたくて仕方がない、よく知っている人物が写っていたからだ。

ほのかと雫に両腕を取られ、困ったような笑顔を向ける少年が……第一高校の制服を着、頭には彼が好んでつけていたバンダナをして……

次の写真は、ここにいるメンバー全員が写っている写真だ。その少年はレオに首に腕を回され、強引に写真の中に入れさせられたような姿だった。

その次はなぜか廊下で正座をさせられて涙を滝の様に流しているその少年の写真が写っていた。

リーナはその少年から目が離せない。

「ふふふふっ、横島さんって言うの、いつもおちやらけてるんだけど、いざとなったら頼りになるんだから」

ほのかはリーナに笑顔でそう言う。

(タダオ)

リーナは無意識に口ずさんでいた。

そして、平然を装いなおす。

「そう……そうなんだ。彼ってどういう人だったの？」

心の中ではリーナは混乱し続けていた。

(どうして、タダオが……なんで、タダオがこんなところに？記憶喪失？行方不明？わからない……わからない！)

「はっ！どういう人って？そりや面白い奴だよ！あんな奴、他には居ないぜ！」

レオは大きく笑いながら自慢そうに言う。

「いや、スngoイスケベだから、リーナもし会ったら気を付けた方がいいわよ、セクハラ大魔神なんだから、私なんかどんだけセクハラされたか！」

エリカはうんざりしたような表情をした後、何やら思い出したのか、こぶしを握り締め、怒りをあらわにする。

「あと、バカだよ。いつも突拍子もないバカなことするから、エリカや先輩方にしよっちゅう折檻喰らっていたよね」

幹比古も、楽しそうに言う。

「でも、優しい人なんです。人が好過ぎるくらいに」

美月も懐かしそうに言う。

(間違いないタダオだ……どうして)

「リーナ、どうかしたか？」

達也はリーナの動揺を見抜いていた。そしてわざとこう言う聞き方をしたのだ。

「……そう言えば、同居人に早く帰るように言われていたの。お先に失礼しますね」

これ以上ここにはいられない。もう、動揺を隠すことはできない。達也に問い詰められるわけにも行かない。一刻も早くリーナはこの場から離れることしか考えられなかった。

リーナは先に喫茶店をでる。

「リーナどうしたんだろう？今日は大丈夫って言うてのに」

ほのかは心配そうにリーナを見る。

「まつ、用事忘れてただけじゃない？」

エリカは軽く言う。

「……………」

達也はリーナが出て行った後を目で追っていた。

そして、横島の事を知っているのではないかと、疑いをかけていた。

リーナはマンションに走りながら帰る。その間も横島について思考していた。

（なんで？タダオが第一高校に？なんで、よりにもよって達也と深雪の友人なの？なんで？）

（タダオはもしかして私と同じで日本のスパイ？そんなはずはない。で記憶喪失だと言っていた。マリアもドクター・カオスもそれは肯定していた。カオスたちに嘘をつくメリットがない。しかもマリアがあんなに親身になってガードをしていた。……スパイで有るはずがない。……タダオがスパイで有るはずがないじゃない。なんでこんな嫌な事を考えちゃうの？）

（横浜事変から生死不明の行方不明、そして記憶喪失……タダオに何が起きたの？）

（タダオに会いたい。会って直接聞きたい）

（タダオは記憶が戻ったら日本に……達也や深雪たちの元にもどる？それは嫌！）

（タダオと敵対するのだけは嫌！）

（いつそ記憶喪失のまま……）

マンションに戻ったりリーナの動揺と混乱のありさまは目に見えてわかるが……

シルヴィはそのことを聞いたが答えなかった。

ただ、シルヴィには、第一高校の資料とターゲット(達也と深雪)の交友関係の資料を出すように命令した。

その晩、リーナはシルヴィが出した第一高校の資料と交友関係の資料をデータを改めて吟味する。

交友関係の資料には横島の名前は上がっていなかった。12月の時点の資料なのだろう。

横島忠夫15歳で入学、1年E組、現在16歳、風紀委員会所属。1月以降行方不明のままとなっている。成績は魔法関連は壊滅的。一般教養は優秀。東北の田舎町の普通科公立中学出身となっている。今、とある映像を見ている。

九校戦の映像だ。

涙をちよちよきらせながら、不格好に魔法攻撃を避けていた。

「タダオ、記憶があるうが無かろうが変わらないのね」

次にとんでもない方法で勝利していく様子が映し出されている。

「これは、タダオらしいわ」

リーナは必死な横島の姿が何故かほほえましく目に映る。

九校戦の結果を学内向けに学生が作った記事がある。

『あのスケベ・チカン・変態の魔法もろくに使えない最底辺野郎。第一高校始まって以来の問題児横島忠夫が九校戦で奇跡の優勝へ』

こんなタイトルの記事だ。

魔法をほとんど使わず、勝利をし、決勝では大ピンチを一人で切り抜けたことが書かれていた。

九島烈がその戦闘スタイルを大絶賛している様子を書いた記事と十文字克人のコメントが載っていた。

「当たり前じゃない、タダオは強いんだから!」

「でも、これタダオの本気じゃない。あの不思議なバリアと盾とあの珠を使っていないもの」

リーナは嬉しそうに映像や記事を読んでいたのだが……

急に暗くなる。

「タダオはなんでUSNAに、私の前に現れたの？……何が目的で……やはりスパイ？ただ単に、本当に記憶喪失のはず。だって、私をあんなになって必死にかばってくれたし、アンデイの事も助けてくれた。スパイだったら、カオスもマリアも多分タダオをそばに置かない」

そしてしばらく考え込む。

「あつ、あの時のレストランでタダオに何かした女!!」

リーナは何かを思い出しPCを操作し、何かの資料を出した。

藤林響子少尉……独立魔装大隊所属、諜報にたけ、別名エレクトロロン・ソーサリス名で呼ばれる。

そして、リーナの血縁者でもあった。

「タダオ……なに？日本の軍に狙われているの？それともタダオを攫いに来た？タダオの記憶喪失は日本軍が故意に？だとしたら許せない！タダオはUSNAで保護すべきだわ!!……情報が少ないわ、おじい様にコンタクトを取るしかないようね」

リーナはあの時の事を思い出す。記憶障害で苦しむ横島を思い出し、そう結論付けた。

「タダオに会いたい……タダオいっただいあなたは誰なの？」

132話 横島、遂に見つかる!!

学期が始まり、5日が経過し最初の休日。

達也は自宅のリビングでソファに深く腰かけ、この1週間リーナの言動や行動について、頭の中で整理し考察していた。

「お兄様、リーナの事を考えていたのですか？」

「ああ」

「まあ、よくもまあ、堂々と他の女性の事を考えていたなんて、お兄様は悪い人です」

深雪は拗ねた様に言う。

「ふー、深雪」

達也は溜息をつく。

「冗談ですわ、……リーナがスターズのアンジー・シリウスではないかと考えておられるのですね」

「……深雪は何でもお見通しなのだ、そうだ」

「深雪はお兄様の事をずっと見ていますもの、お兄様の事は何でも知っていますわ」

「しかし、リーナは諜報員としてはレベルが低すぎる。まるでUSNAはリーナの正体がばれても構わないかのようだ」

達也はリーナをそう評した。

先日、リーナは風紀委員会を見学したいと言い、わざわざ達也を指名し、構内を巡回している間に、いきなり攻撃をしてきたのだ。ちよつと実力を知りたかったという理由でだ。まあ、殺傷性のない攻撃ではあったが、こんなことを真正面から行う諜報員としては大失格だ。

逆に達也はカマを掛けリーナから情報を引き出していたのだが……

実はリーナはリーナで焦っていた。達也と深雪の白黒をはつきりさせ、任務を終了させたかったのだ。横島に会いに行くために……もはや猶予が無いと判断したのだ。このままだと横島が日本に、第一高校と達也と深雪にとられるのではないかという焦燥感がリーナを

支配していた。

「でも、アンジー・シリウスと言えば、USNAきつての魔法師、しかも戦略級魔法師ですわ」

「そうだ。俺たちを探るにしてはおかしな差配だ。他に何かあるのではないかと疑いたくもなる」

達也も深雪もアンジー・シリウスという大物をこんな杜撰な形で使うとは到底思えなかったからだ。

「それとだ……………」

「横島さんの事ですね」

「ああ、横島の写真を見たリーナは明らかに動揺していた。しかしそれ以降、横島についてカメラを掛けるが、一向に尻尾を出さない」

達也は平然と話しているが、深雪には少しイラついているように見えた。

「やはり、スターズが監禁などをしている可能性があるという事ですね」

「ああ、その後、雫からは連絡は……………」

「いえ……………ちよつと待ってください。ほのかから電話です」

そう言つて、深雪はソファから立ち上がつて、リビングの端で立つて携帯端末を操作する。

「……………ほのか？何言っているかわからないわ？え？……………え!!……………お…お兄様!!」

深雪は最初は淡々とほのかの容量のえない話を聞いていたのだが急に大きな声を出す。

「どうした深雪」

「雫が、雫が横島さんを見つけたそうです!!それでさっきまで一緒に居たそうです!!」

深雪は大きな声で、横島を見つけた事を達也に興奮気味に言い、そして携帯端末を達也の所まで持つて行き、テーブルの上に置き、スピーカーモードにする。

「!!」

達也は目を大きくし立ち上がる。

『達也さん！こんにちわ!!』

「ほのか、雫が横島と接触したとは本当か!!」

達也は珍しく興奮気味だ。

『はい、横島さんは元気だそうです』

「そうか、記憶喪失の方はどうだ？」

『その辺の事を詳しく、横島さんから話したいそうなんです。皆を明日の午前中に集めて、欲しいって、皆と画像通話を希望しているみたいです』

「わかった、セキュリティレベルでいえば、ここが一番いいな、俺と深雪で他の連中に連絡をしておく、明日の日曜日10:00でいいか？向こうのセキュリティレベルを聞いてくれ」

『わかりました』

「お兄様が時間決めてしまいました、ほのかは大丈夫？」

『勿論大丈夫。明日よろしくね』

そうやってほのかは通話を切る。

達也は額に手を当て、再度ソファーに深く座りなおす。

「横島と接触できたか……やはりあいつはあれで死ぬような奴ではなかった……」

そう言いながらも達也は口元が緩む。

「しかし、変ですね。横島さんが通話可能な状況は、USNAかドクター・カオスに拘束されていたのではなかったのでしょうか？」

「それは明日、奴本人に聞けばいいことだ」

無表情ながら達也はどこか嬉しそうであると深雪は感じる。

「でもお兄様……横島さんはお兄様の事を……」

深雪はそんな達也を心配そうに見る。

横島が達也の事を恨んでいるのではないかという事だ。

達也のマテリアル・バーストが原因で今の事態に陥っているのだ。さらに言うのと死んでいてもおかしくなかったのだ。

「大丈夫だ。何を言われようが覚悟は出来ている」

達也は何かを決意したような言い方をしていた。

一方、リーナは、焦っていた。

勿論任務の事ではない。横島の事だ。

最初は自分一人で何とかしようとしたのだが……限界が早々に来る。

九島烈の弟である祖父に連絡をするが、良い情報は得られなかった。九島烈ならば何か知っているかもしれないとの事だが、今は疎遠らしいのだ。一応コンタクトは取ってもらえる事になっているのだが、時間がかかりそうなのだ。

スターズの総隊長としてではなく、リーナ一人として補佐役のシルヴィに相談したところ、横島が第一高校の生徒だった事にシルヴィも驚きを隠せないでいた。

横島が第一高校の生徒であることを問題視したシルヴィは、早速、USNA本国で今もドクター・カオスや横島と接触しているだろうカノープス少佐に連絡し相談した。

横島のスパイの可能性について検討、考察したがその可能性は極めて低いと少佐も判断したようだ。

また、此方で動いている日本の使節団について、藤林響子を筆頭に、横島に接触を図ろうと動いているきらいがあるとの事、しかし、上手く行っていない様子である……カノープス少佐自身、藤林響子と接触をし、情報は引き出せなかったが、上手く行っていない雰囲気だけは掴んでいる様だ。

そして、先日、リーナを震えさせるほどの情報が本国から入ってきたのだ。リーナと交換でUSNAに留学している北山雫がドクター・カオスと横島たちが宿泊しているホテルに住み込みだしたというのだ。

明らかに、横島と接触するために違くないからだ。

達也が数日前言っていた。横島の所在の情報を得ているような事を……そして、友人達のリラックスしていた事、多分前から当たりを

付けていたのだ。

逆にこの事が、横島がスパイである可能性を否定し、記憶喪失であることを確定させた。

記憶の無い横島はマリアとカオスがガードするだろうが、雫と出くわした拍子に記憶が戻るかもしれない。リーナはますます焦燥感にかられる……

そんなリーナにさらに追い打ちをかける。

今しがた日本国内で政府関係筋を内偵を進めていた諜報員から、情報が上がってきたのだ。

重要度は低い情報と分類されていた物だったが、横島がスパイの可能性があるとという情報を一度通達しているため、そのフィードバックとして送られてきたのだ。

横島忠夫が氷室家の家人である可能性が高いという情報だ。

リーナは絶望に似た何かを感じ、背中に冷たいものが流れる。

氷室家と言えば、13代当主氷室絹が世界的に有名だ。世界最強の戦略級防御魔法『救済の女神』その能力を知れば知るほど、戦場を一変するほどの凄まじいものなのだ。

確かに横島が使っていた魔法は、CADも必要とせず、USNAでは全く見たことが無い代物だった。

氷室家の古式魔法ならば納得できる。

リーナは横島が氷室家の一員だろうと判断せざるを得ないでいた。

そんな横島を氷室も日本も手放すわけが無いのだ。

藤林響子はやはり、横島を連れ戻すために、接触しに来た可能性が高い。

しかし、氷室家は国防軍や日本の魔法組織とも折り合いが悪いとも聞いている。

リーナはもう一度考察する。

横浜事変から横島は行方不明、ドクター・カオスに記憶喪失の状態で拾われ、USNAに来る。

日本政府は横島と接触しようとしている。

第一高校の達也達友人は横島を探している。

そして、横島は古式魔法の使い手で氷室家の一員。
横浜事変では、『救済の女神』の発動が確認されている。

……リーナが見てきた横島の魔法はどれも防御系の物ばかりだ。
しかも、キャストジョギングが全く効果が無いという性能だ。

「タダオが『救済の女神』の発動者……であれば、その後何らかの形で追われ、記憶喪失に若しくは、その凄まじい力に耐えられずに記憶喪失に……そして、そのタダオを確保するために日本政府は裏取引までも使って、タダオと接触、日本へ連れ戻すために……」

リーナは考察しながら独り言を繰り返す。

「だとすれば、タダオがUSNAに亡命もあり得る。タダオが『救済の女神』発動者であれば、本国も喉から手が出るほど欲しい人材であることは間違いない。ネックはドクター・カオスとタダオの友人。ドクター・カオスとマリアが傍にいるため、強硬手段は取れない。それは日本政府も同じでしょう。……私も嫌、強硬手段でタダオに酷い扱いをしてほしくない。

その間にタダオの友人が、タダオと接触して、記憶が戻ったら……日本に戻ってしまう。

しかし、逆に言うドクター・カオスがいれば、誰もタダオに手出しができない。そうなればタダオが日本に戻ることは無い。最悪その形でも十分、私もカオスと面識が出来ているし、マリアとも随分親密になれたと思う」

「ならば、私がすべきことは一刻も早く、日本での任務を達成し、本国に帰る事。そして、タダオと話してUSNAに……スターズに、いえ、私の所に来てもらう事」

リーナは新たに決意し、ますます任務達成に強い意欲を見せるのだった。

133話 横島、友人達と話す前に!!

「マリアさん、気にならないのですか?」

「気になります。横島さんは・今の友人達と・だけ・話したいと思つてます」

今、雫の宿泊している部屋で、横島と雫は日本の友人達と、大きなTVディスプレイ越しに久々に顔を合わそうとしているのだ。

マリアは当然の如くそこに参加しようとした小竜姫を引っ張り、小竜姫の部屋に戻し、大人の対応を見せる。

小竜姫はこの頃、マリアに頭が上がらない。マリアの行動は同じ女性として、いや横島の姉的な存在として、明らかに、横島の信頼を勝ち取っていると感じていた。

横島はマリアに対しては、何かしてほしい事があれば、気軽に言うのだが、小竜姫にはそれをしない。当然雫に対してもだ。

小竜姫はそんなマリアを羨ましく思うが、自分に足りていなかった物が、今の横島に何が必要なのかを改めて考えさせられたのだ。

現在小竜姫とマリアは、小竜姫の部屋でお茶をすすっている。

実は、横島が初日こそ小竜姫を自室に宿泊させていたのだが、雫が猛抗議し、それならば自分も横島の部屋に泊まるまで言い出したのだ。

マリアもそれ程では無かったが、難色を示していた。

小竜姫は姉なのだから当然だと、言い張り、收拾がつかない状況になつていた。

当の横島は、頭とお腹あたりを抱え、部屋の隅っこでげっそりしているだけで、声も発しない。

横島にとって小竜姫が自室に泊まる事に全く抵抗がない。そもそも、100年前の妙神山での横島修行時代は襖を挟んで隣の部屋で寝ていたのだ。さらに、精神修行では斉天大聖老師が作った精神世界の中では老師と小竜姫、横島と同じ部屋で川の字になって寝ていたのだ。

その頃の小竜姫は最初の頃はここまで横島の事を意識していな

かったのも大きい。横島が何かしてきても、ボコボコにしていた。横島は横島で、小竜姫にギャグまがいのセクハラを毎度敢行していただろうが、小竜姫にその度にボコボコにされる。この男そんなことぐらいで諦めるような精神の持ち主ではなかったのだが……

しかし、いろんなことを経験し、精神的に大人になって行き、小竜姫自身に尊敬の念を抱いて行った事により、横島が、小竜姫にそういう行動に出ることは無くなったのだ。

今の小竜姫にすればそれはそれで、寂しくもあるのだが……

結局、カオスは面倒くさい状況を見かねて、横島の隣の部屋を強引に借り出し、小竜姫に与えたのだ。当然ながら小竜姫の抗議の声はやまない。

マリアは横島と小竜姫の部屋の間の壁にワンパンチをかまし、大穴を開けたのだ。

「これで・問題・ないです」

「おお、流石マリアじゃ、これで良いじゃろう」

マリアのとんでもない行動にカオスは納得顔で、直ぐに何やら人を呼び出し、大穴に小竜姫の部屋から直接横島の部屋に自由に入出入りできる扉を作ってしまったのだ。

小竜姫もしぶしぶ、了承し一応この騒ぎは收拾したのだが……

……結局、夜は横島の横の空いているベットで寝ている小竜姫がいるのだ。

小竜姫と雫を挟んだ騒ぎはこれだけではない。

話は戻る。小竜姫はマリアと共にソファーにちよこんと座り、お茶をしながらも、千里眼のイアリングで遠見の術を発動させ、脳裏には雫の部屋内：横島と雫そして、今から横島の友人達が映し出されるであろう大きなディスプレイが写っており、覗き見る気満々である。

マリアはマリアで、そんな事を言いながらも、横島の事が気になり、雫の部屋の大型ディスプレイとネットワークに既に自身とリンクさせており、双方の映像と会話を聞ける状況を作り、此方もスタンバっていた。

一方、司波家に集まる横島の友人達。

「お邪魔しまーす。って何気に達也くんと深雪の家に上がるの初めてじゃない?」

「おお、そう言えばそうだな」

「素敵な家ですね」

「うん、そうだね」

エリカ、レオ、美月、幹比古は駅で集まってから一緒に司波家を訪れるが、皆、司波家に来るのが初めてである。

実は達也が友人達を家に上げるのはこれが初めて、いや、友人と言うカテゴリーの人間が今まで居なかったと言った方が良いだろう。

司波家は閑静な住宅街の中でも大概豪邸と言ってもいい家のサイズだが、友人達も皆、名家、実業家の子息、子女と会って驚きは無い。

100年前の一般庶民の感性しか持ち合わせない横島が来たら、それは騒いでいただろうが……

皆は深雪に広いリビングに案内され、すでに先に来ていたほのかにそれぞれ挨拶をしソファアに腰を下ろす。

「随分早い到着だな」

達也が皆にそう言った。その横で深雪がお茶を出している。

今は、午前9時前、横島との通信は10時だが、20分前には集まる事になっていたのだが、随分早い時間に来ている。

「あたりめーだ。昨日の内にここに来たかったぐらいだぜ」

「あんだ。目にクマ出来てない?もしかして、興奮して寝れなかった口でしょ、まるで子供ね」

「んだと!…ふん、そうだよ」

「あら、あんだにしては素直ね」

「悪かったな。実際あいつに会うのは久々だしな。死んでいたかもつて噂になる位の状況からでのダチとの再会だ。嬉しくないはずがない」

レオはエリカの軽口に乗せられながらも、素直に心境を語る。

「そう言うエリカちゃんも、目の下黒ずんでいるわよ」

美月はエリカの顔をまじまじと見ながら言う。

「うそ？メイクで隠したのに？」

エリカは慌てて、携帯端末を取り出し鏡のように使い自分の顔をチエックする。

「…エリカ…眠れなかったんだね…」

幹比古はそんなエリカの様子に苦笑していた。

「何とも…はっ！美月！凶ったわねー！」

エリカもその意図に気が付き美月に抗議の顔を向ける。

「…エリカ」

深雪はそう呟いて、生暖かい目でエリカを見る。

「ち…違うのよ！横島に久々で会いたかったとか！そんなんじゃないんだからね!!」

エリカは大声で言い訳じみたような事を言う。

「なら、なんなのさ」

幹比古は疑いの眼差しでエリカを見ていた。

「その、いざ横島と話せるとおもったら、いろいろ考えちゃって、横浜事変の後からあいつ居なくなっちゃったじゃない？横島がいなくなっただのはそりゃ、張り合いが無くなって、ちよつとは寂しいと思っただわよ。

でも、あの時の横島って、何時もの横島じゃなかったじゃない。そりゃ、あのとんでもない力は正直ビビったわよ。でもそこじゃない。…大人っぽい感じだったし、なんと言うか…影があるというか、…らしくないっていうか…記憶喪失のあいつが、あの感じで出てきたらどうしようって思っちゃって…本来のあいつってどつちなんだろって考えてたら…朝になって」

エリカは横島事変の横島について、考えていた様だ。何時もバカやっている横島とは雰囲気有余りにも違っていたからだ。

「まあ、あの時の横島はちよつとカッコ良かったけど、エリカは考え過ぎだよ。多分どつちも横島だよ」

幹比古は軽く言う。

「エリカちゃんは知らないかもしれないけど、横島さんって、私達に霊

視や霊力のコントロールを教えてくれてる時って、なんだか年上に見えるえちやうんだ、教え方が旨いし、なんか人生経験豊富そうだし……だから私や幹比古君、雫さんはあまり違和感が無いのかもしれない」

美月は、横島から、霊視、霊力の修練を受けていた時の横島を思い出しながら語る。

「横島の本気の戦闘スタイルなんだろう。それだけ真剣だったってことだ。おちやうけ無し、ギャグ無し、スケベ無しの奴はあんな感じだろう」

レオは元々横島の本質を感じていた様だ。

「はあ、なに？わたしだけ？こんなこと考えてたの？なんか馬鹿らしくなってきたわ」

エリカは両手を上げ降参のポーズをとる。

「私もよエリカ……私も、あの時の横島さんを……」

深雪はエリカの意見に同意したのだがその後の言葉が出てこなかった。怖いと感じた事を。

「そろそろ通信つながるぞ……」

達也は手元のデバイスを操作しながらそう言っていた。

達也もあまり寝ていない。先日からセキュリティを強化していたのだ。過去何回か、司波家のセキュリティを突破されたことがあるからだ。

そして、リビングの大きなテレビがパツと明るくなり……映しだされたのは……

「フハハハハハハハハッ!!おう!!こやつらが今の小僧の知り合いとな!!良い面構えじゃ!!」

白髪の60絡みの紳士風老人の自信に満ち溢れた顔がドアップで高々と大口で笑っていたのだ。

「クククククツ、なんじゃあの小僧、やはり隅に置けないではないか、美女をそろえおつて、あの世である者達もヤキモキしておろうのう。」

クークツクツクツ!!」

横島が登場するものだとばかり思っていたのだが、突然、この人物が画面いっぱいに映し出され、しかも何やらわけわからないことを大声で言い、一人高笑いしているのだ。

何が何だかわからない何時もの面々は唾然とその老人を見ている事しかできない。

「ん!?なんじゃ、なんじゃ、そろいもそろって黙りおって!!クククククツ、致し方ないのう。……フハハハハハハハッ!!恐れ、慄け!!小童ども!!わしがヨーロッパの魔王ドクター——カオ……ブツ!!」

その紳士風老人は高笑いと共に居丈高と自己紹介をしたのだが、何故か拳が顔面にめり込んでいた。

「……ななな、何をするんじやマリア!!これからいいところじやのに!!グハッ!ブツ!はへ……や、やめ!!アツ、フゴ!!」

涙をチョチョ切らせた老人の顔に次々に拳が突き刺ささり、最後はボコボコになった老人の顔が画面に張り付き、そして、襟首をひっつかまれと若い女性にずるずると引きずられて行き画面から消えていったのだ。

一種の残虐ショーの様相である。

そして、画面が真っ暗に落ちピンポンパンとチャイム風の音共に

『お見苦しいところをお見せしました。しばらくお待ちください』

白字で画面一杯に表示された。

司波家のリビングのソファーに座っている何時ものメンバーはその余りに唐突で予想外の展開に固まってしまった。

「なんなのこれ……」

「横島……さんじゃなかったですね」

「……あのじいさん大丈夫なのか?」

「……死んだんじゃ……」

エリカ、美月、レオ、幹比古は呆然と画面を見ながら口々に言う。

「……間違いないドクター・カオスだな、データで見たことがあるが……」

「本当ですかお兄様、……でも今ので死んだのでは？」

司波兄妹も驚きを隠せないでいる様だ。

「……ドクター・カオスは世界初の再成魔法を使える人物でもある……死にはしないだろう」

達也はドクター・カオスが再成のBS魔法師である事を知っていた。

「なんか……こんな風景見たことがあるんだけど」

「おう、俺もそれ、思ったぞ」

「それって横島だよね……もしかして横島ってドクター・カオスの親戚？親子だったりして……」

エリカ、レオ、幹比古はこんな事を話している。

何時もの面々はこの風景を、ドクター・カオスを横島に重ねてしまっていた。

これはUSNAのドクターカオスがホテルの自室から、ネットに割り込み一足先に、司波家に集まっている横島の友人達を見定めようとしたのだ。

それを同じく、回線を盗み見しているマリアにバレて、部屋に突撃され、余計な事をしたカオスはボコボコにされたのであった。

134話 横島、友人と久々に顔を合わせる!!その1

横島の画面越しだが友人達との再会第一声がこれである。

『よおっ！久しぶり!!』

ニカつとしたいつもの笑顔で同窓会で久々に会う友人にするかの様な軽い挨拶する。

「まじ、久しぶりだなー！なんか数年もあってない気がするぜ。相変わらずそうだな!!」

レオが最初に男らしい笑顔で挨拶を返すも、これもまた、横島同様同窓会で久々に会う友人にする気軽い返しの挨拶だ。

「軽！あんた達、軽いわね。まあ、らしいと言えはらしいけど、まあ、あんたが無事でよかったわ」

エリカは横島とレオの会話で毒気が抜かれたようだ。そして、相変わらずの横島の態度にホツとしていた。

『まじ？エリカが俺の事を心配？熱でもあるんじゃない？』

「ふん、あんたが居ないと、クラスが静かでよかったわよ！」

エリカは横島の返答に半目見据え、語気を強くし言い返す。

「久しぶり横島、相変わらずでうれしいよ」

幹比古は嬉しそうに挨拶をする。

「横島……元氣そうだな……まあ、お前が簡単にくたばるタマだとは思っていないかったがな……」

達也も相変わらずの無表情ではあるが、若干嬉しそうにも周囲からは見えた。

「横島さんご無事で良かったです。お兄様も横島さんが居ないと元氣なかつたんですよ」

深雪は達也を見ながら悪戯っぽく微笑む。

「横島さん久しぶり、昨日雫から少し聞いていたけど、色々大変だったんですね」

ほのかも久々にみる横島の笑顔に嬉しそうに挨拶をする。

『いやー、今の方が大変かな……』

横島は、少し困った顔をして胃を抑える。

『横島さん。私が居るから大丈夫!』

横島の横にちよこんと座っている雫がそんな事を言っている。

横島が胃を抑える原因の半分は雫なのだが……

「横島さん、また、会えて良かったです。……でも、みんな、心配していたんですよ。学校の人はみんな横島さんがもう死んでいるんじゃないかって言っていたけど、そんなこと無いって皆でいろいろいっぱい探したんですよ……それでも見つからなくて……それでも諦められなくて……」

美月の目からは涙が溢れ、オーラカットコーティングの眼鏡をズラし、ハンカチで拭いていた。

『美月ちゃん……』

「まあ……ダチが急にいなくなったからな、しかもあの後だ。しかし、俺はお前が死んだなんて一度も思いもしなかったがな!」

レオも真顔で呟くように美月に続くが最後は笑顔でそう言った。

……

しばし、沈黙する。

『皆、すまん。心配かけた』

横島はすつと立ち上がり、真顔で頭を下げた。

「横島……」

達也は膝の上でグツと拳を握っている。深雪はそんな達也を心配そうに見つめていた。

「横島……」

エリカは真面目に頭を下げる横島に多少なりともショックを受けている様だ。今まで、こんな真顔で真剣な横島は見たことが無いからだ。だからこそ何かあったのではないかと勘繰る。

レオもショックまでとは行かないが、やはり、何かあったのだろうと思っていた。

「横島さん……頭を上げて」

美月はそんな横島を見て……

「横島さん……横島さんは何も悪くないよ」

ほのかは雫からある程度事情を聴いていた。

「横島……僕はほんとに、また、君に会えてうれしいよ。……でも、みんな本当に心配していたんだ事情を説明してくれるかな？」

幹比古はいつになく真剣な眼差しで横島を見ていた。

「横島さん記憶喪失ったという噂も……」

「しかもなんで、USNAに居るのよ」

美月とエリカも幹比古に続く。

横島は再度謝り、ソファアーに座り直し話し始める。隣では雫が心配そうに横島を見つめていた。

『本当にすまん。……美月ちゃんが言う通り記憶喪失だった。俺は1月25日まで、過去数年の記憶を失っていた』

「それ！あんな大丈夫なの！」

エリカは心配そうに語気を強めて聞く。

『今は大丈夫だ』

「だから……連絡を入れられなかったのか……いや、連絡を付けようがなかったんだ」

幹比古は独り言のように呟く。

「おまえ、その時点でなんで俺たちに連絡を付けなかった？」

レオは2週間前に既に記憶が戻っているのに、連絡を寄越さない横島に怒っている様だ。

「レオ……落ち着きなさいって」

『すまん。それも含め最初から説明させてくれ』

横島は語る。

全て話すことはできないため、話すことが出来ることだけを要約して話した。

ドクター・カオス達に気を失って、海に漂っている時に、助けられ、そのままUSNAに連れられてこられ、11月中頃から末にようやく目が覚めることが出来たが、数年の記憶が無かった事を……

その後、12月25日にとある事件に巻き込まれその結果、記憶が戻った事を……

「俺は記憶が戻ったが、その事件が余りにも特殊な上、事が大きくなる

とかなり危険だと踏んでいる。

俺はみんなを巻き込みたく無かったため、事件が解決してから連絡するつもりだったが、今だ解決の糸口も掴んでいない」

「連絡位してくれてもいいじゃないか」

幹比古は拗ねた様に言う。

「おまえ、俺たちを信用していないのか？」

レオは横島を睨んでいた。

『そうじゃない。この事件は俺の領分だからだ。俺の力と言うか能力でなければ多分解決できない』

「俺たちは頼りにならないってか？確かにお前の凄まじい力からすりゃ、ちっぽけかもしれん。だがな、協力ぐらいできるだろう。情報集めとかよ」

『……俺は、この事件のすべてに巻き込みたくなかった。……でも結局、雫ちゃんがこっちに来て巻き込んでしまった……俺が連絡しないばっかりにだ……』

「違どうぞ横島！そうじゃない！お前は何でもかんでも一人でしようとし過ぎだ！」

『俺は、皆が傷つくのを見たくないんだ……』

「いい加減にしろ！俺は別にお前に守ってくれなんて頼んだ覚えはない！！」

レオは立ち上がり、怒りの形相で横島に食いつかんばかりに怒鳴る。

レオと言う少年、心が真つすぐなのだ。だから横島に対し真剣に怒る。横島がすべて自分で抱えようとしている事に対しても、今の自分が無力であることも承知している。それでも、友として横島に何かしてあげたいのだ。

「レオ！落ち着きなさいって」

「横島さん……私も怒ってます。横島さん自分は傷ついてもいい様な言い方はやめて！今回の件でみんな、みんな横島さんを心配したんです。私たちも横島さんが傷ついたりするのが嫌なんです！心配なんです！！」

美月は涙を目に溜めながら、横島に声を振り絞って怒鳴っていた。

『レオ……美月ちゃん』

『横島さん、みんな横島さんの事が好きなの、だから心配。わかって……』

隣の雫は横島の手にとつと自分の手を乗せ、優しく言う。

「横島……家の事情とかで、事件を解決しないといけない事なんてことはよくある事だし、内容が言えないのは仕方ないよ。せめてさ、愚痴や相談だけでも、僕たちに話してくれてもいいんじゃない？友達なんだから……」

幹比古は横島に諭すような口調で話しかける。

『……心配……か、……………すまん。俺の一人よがりだった。師匠には毎度怒られている事なのにな………事件の内容は言えない。しかし、連絡は出来たよな………皆を信頼してない訳じゃないんだ。つい、一人で何でもしちゃう癖が抜けなくて………事情や相談位できたよな』

「まあな、怒鳴って悪かったな」

レオはぶつきらぼうにそう言った。

「次、こんな事を言ったら本気で怒りますからね」

美月は続いてそんな事を言う。

「え？美月、今の本気怒りじゃないの？もつと怖いの？」

エリカは美月の顔を見ながら引き気味だ。

「まあ、せっかくの再会なのに、レオも大人気ないよ」

幹比古はレオに軽く注意をする。

「うっ、すまん」

達也はこの輪に入る事が出来なかった。ただ、心には何か分からないが、来るものがあつた。

しかし、自分には入る資格もない。横島にとやかく言う資格もないと……

「湿っぽいのは終わり！終わり！

ところで……あんだ、なんで海に漂っていたのよ。あんだ程の人間

離れた人間が誰にやられたのよ！横浜の後、京都に戻ったんじゃないの？」

エリカはパンパンと手を二回叩き、この重い空気を一度リセットし、次の話題に移った。

カオス達に拾われる前の段階で、何故気を失って海に漂うような事態に陥ったのかを聞いていた。

「事件とかより、そっちの方が問題じゃない？あの状態の戦術級魔法みたいな攻撃を無制限に放つたり、『救済の女神』を発動できる横島を誰がそんな目に合わせたんだよ？」

幹比古はエリカに続く。

達也は心の中で、自分がやったことをバレるのを覚悟していた。

「くくっ、そう言えば思い出したぜ。横浜の時エリカの奴、お前の凄まじい攻撃をみて、なんて言ったと思う？」

真顔で武神や魔神だって言ったんだぜ？B級映画や、カルト雑誌の読み過ぎかよっ、くくくくっ！」

レオは楽しそうに、横浜事変の際戦っている最中の横島をみてエリカが漏らした妄言について急に言い出したのだ。空気読めないのは相変わらずである。

「ばっ！あんた!!なぜそれ今言う!!」

エリカはレオの胸倉を掴みかかって、思いつき揺らす。

『たはったはははははははははは、何その扱い一応人間なんだけど』

横島は内心少し焦りながらも、笑って誤魔化す。武神・魔神、一応人間だがそれに近い存在であることは確かである。

「海に落ちた原因とか、あんた覚えてないの？」

『記憶がさっぱり抜け落ちてるなくまあ、油断大敵って奴じゃないか？』

「あんなに強いのに、ですか？」

美月は横島の力をまじかに見ているだけにそう思う。

「横島さんの弱みを握られたとか？……横島さんの弱点……不真面目？……スケベ？……女性に弱い？」

ほのかはそんな事を言う。

「わかったわ!!ハニートラップよ!!ハニートラップ!!美女に言い寄られて、ホイホイついて行って、眠らされて、す巻きにされ海に突き落とされたのよ!!」

エリカは何かを閃いた様に言った。美人につられてついて行く横島が見えてるかのようだ。

「それだ!!」

「それだな!!」

「それですね!!」

「うん、きつとそれ!!」

『……横島さん知らない女の人について行ったらダメ』

幹比古、レオ、美月、ほのか、そして雫までもがエリカの意見に同意の様だ。

『バカにすんなー!!いくら俺でも流石にそんなのに引つかかる……うーん』

横島は勢いよく否定したのだが……自分でもありえそうだと考え直している様だ。

「七草先輩とか、渡辺先輩とか市原先輩とかに言い寄られたらどうなんだよ、ついて行くよね?」

幹比古は二つ上の先輩の美人どころを選び横島に問いかける。

『お願いしやす!!って……あれ?やっぱハニートラップにやられた?』

「あんだねー、仮にも戦略級魔法師なのよ?しかも世間では『救済の女神』の再来とかいわれているのよ」

呆れた様に言うエリカ。

「ははははっ、横島らしいな!」

レオは思いつきり笑っている。

「という事は、私でも横島に勝てるって事ね」

エリカは横島に対し、色っぽいしぐさをする。

『えーエリカかーうーん』

エリカを見据えて悩む横島。

「何よ私じゃ、不満なの?ふふん……じゃあ、また、あのブルマだっけ

「?着てみようかな〜」

『ブツ、ブルマ?!?...フトモモ!!エリカ———!!今すぐ着替えてくれ!!ものは試しだ!!』

「:...エリカにもやられるねこれは。横島の弱点見つけたりだね」

幹比古は呆れた様に言う。

「横島さんらしいと言えば、横島さんらしい」

ほのかは苦笑していた。

『ほのか、ブルマって何?』

「お兄様、ブルマとは何ですか?何かの服の様ですが」

そんな中、雫と深雪はこの会話に付いていけない様だった。

実際には横島は济州島で達也のマテリアル・バーストを阻止するために、まともに喰らい、この事態が引き起つたのだが、その事をみんなの前で言うつもりがないらしい。

達也はそんな横島を見つつ頭の中では感謝し、ホツと胸を撫でおろしたのだった。

135話 横島、友人と久々に顔を合わせる!!その2

「そういうえば、あんたと話す前に、欧風紳士の年寄りが挨拶なのかよくわからない事を言つて、ド派手に登場したわよ。ドクター・カオスつて名乗っていたけど……」

エリカは横島と会話をする前の出来事を思い浮かべながら横島に聞く。

『……なにやってんじや、あのじーさん』

「ド派手に登場して、ド派手に殴られて、ボロボロになつていたぞ。大丈夫か?あのじいさん」

レオはどうやら、真剣に心配しているようだ。

『大丈夫、大丈夫。直ぐ復活するし、あのじーさん体だけは丈夫に出来ているから』

「大丈夫つて、普通あれだけやられたら死んじやうよ?横島じやあるまいし」

幹比古はカオスのやられっぷりを見て引いていた。

「でも、やられ方とか叫び方とか何となく横島さんに雰囲気似ていましたよね」

美月もさっきの出来事を思い出し、クスッと笑っていた。

「お前の親戚か?」

達也は真顔でこんな事を聞く。

『いっしょにするな!!……あんな恥ずかしい親戚はいない!!』

「しかも、折檻していたのは女性でした。後ろ姿しか見えませんでした。が……もしや、魔女マリアですか?」

ほのかは老人を殴っていた人物について聞く。

「……ドクター・カオスつて、ヨーロッパの魔王といわれた天才錬金術師で、最強の魔法師の一角なのよね。しかも世界的な金持ちで……見た目は紳士っぽいけど、やってることはアンタとあまりかわらないのだけど?本当に本人なの?」

エリカは突如登場したドクター・カオスが世間一般で言われているイメージからかけ離れていたため、改めて聞き直し、周りの皆もそれ

に頷く。

『……間違はなく、そのじいさんは、世間で騒がれているドクター・カオス……それと、殴つてた女性は見ないでもわかる。マリアだ』

……

この場に沈黙が支配する。

それぞれ何やら考えている様だ。

カオスの本当の姿を見たショックなのか、それとも、カオスに出会えた事に驚いているのかは分からない。

「『本物のドクター・カオス!!』」

エリカ、レオ、美月、幹比古の驚きの声が見事揃う。

当然だろう。世界的な有名人であり、歴史上の人物でもある。1150年の時を生きた。まさに伝説の人物が目の前に現れたのだから……

「あれが……数々の現代魔法をつくり、生きた伝説とも言われているドクター・カオスなのか……」

達也は、先ほどとんでもない登場の仕方をした人物が、思い描いていたカオス像とのギャップが激しく、ショックを受けている様だ。

「本当に天才錬金術師？漫才師じゃなくて？」

ほのかは事前にある程度雫に聞いていたのだが、やはり驚きを隠せない。

深雪も驚いてはいたものの、口に手を当てる程度で済んでいたため直ぐに横島に質問をすることが出来た。

「横島さんは海に漂っているところを偶然にも、ドクター・カオスに拾われたのですよね？」

『まあ、その時の事は俺自身覚えていないんだけど、実際はマリアが助けてくれたらしい』

「らしいってあんた、軽く死にかけてるじゃない……しかもなんで、U S N A に連れていかれてるのよ？あんた何かされてない？」

エリカは驚きから復活し、語気は強めだが、心配そうに横島に聞く。

「横島がドクター・カオスかUSNAに拘束、監禁されているかもしれないという情報もあったんだ」

幹比古もエリカに続く。

『ああ、カオスのじーさんがUSNAで用事があったから、そのついでに連れてかれたらしい。もつとも俺自身、ずっと眠ったままだったから、どうしようも無かったしな……。なにかって、あのじーさんには実験台ぐらいさせられそうだが……。マリアが居るし大丈夫だろう。監禁？拘束？そりゃ勘違いもいいところだ』

「どういうことですか？勘違いって？」

美月は監禁、拘束などないと言っている意味を聞く。

『カオスのじーさんとマリアは俺の昔馴染みだからな』

横島はサラッとそんな事を言うのだが……

「待って、いま横島、昔馴染みって言った？」

幹比古は横島の何気ない言葉に酷く驚く。

『まあな、昔からの付き合いだしな……。まあ友達みたいなもんかな』
何気なく横島が驚愕の事実を口にする。

また、しばらく場は沈黙に包まれる。

……………

「……横島……魔女マリアにサインもらってくれないー」

「……横島さん……私もお願ひしますー」

「……横島……ドクター・カオスにサインもらえないかなー」

エリカとほのか、幹比古はサインをねだるも、目が死んだ魚の様に光を失っており、淡々と棒読みになっている。あまりの事に思考がぶっ飛び、現実逃避でこんな行動に出ている様だ。

「お前たち落ち着け……。横島……。本当にドクター・カオスとは友人関係なのだな」

達也はそんな3人を諫め、再び横島に問うた。

『？そっだが、何かおかしかったか？』

「「「おかしいわよ（だろ）！！」」」

エリカ、レオ、美月、幹比古の叫び声がまたもや見事揃う。

「……横島の交友関係って……氷室家の人達に家族だつて言われているだけでも驚きなのに、九島烈とか、あのドクター・カオスと魔女マリアとかを友達って言っちゃう当たり、普通じゃ有り得ないよね……」

幹比古はしみじみと、何故か疲れた様にそんな事を言い、それに皆は同意し頷く。

「横島……頼みがある……ドクター・カオスを紹介してくれ……今直ぐでなくていい。魔工技師を目指す身としては、是非会いたかった人物なんだ。現代ある数々の基礎理論はドクターが作ったと言っても過言ではない！」

達也は、徐々に語気を強くしていき、珍しく興奮気味だ。……どうやら、ドクター・カオスに憧れとまではいかないが、敬意を持っていた様だ。

「お、お兄様？」

何時もと様子の違う達也を見て深雪は戸惑っていた。

「雫……実際どうなの？ドクター・カオスと魔女マリアは」

ほのかは横島の隣に座っている雫にドクター・カオスとマリアと人となりと横島の関係性を聞く。

『うん、ドクター・カオスとは、まだ、ちゃんと会ってないけど、面白い人で横島さんと仲良さげ、マリアは優しい人で、お姉さんみたいな感じ』

雫はまだ、会ってそれ程日数は立っていないが、そんな印象を持っている様だ。

「……マジなんだな」

レオはそれを聞いてボソツと言う。

……
またしても、沈黙しそれぞれ、啞然としたような顔をしていたが

「なるほど、それで、USNAも横島に容易に手出しができないのだな」

漸く何時もの達也に戻り、冷静に話を進める。

「どういう事？」

エリカは達也にその意味を聞く。

「ああ、ドクター・カオスと魔女マリアはこの二人だけで、一つの国家級の軍事力を持っている様なものだ。その友人である横島を強引に何かをすれば、痛い目に合うどころの騒ぎではない……それは日本政府も同じことだろう」

達也は淡々と説明をする。

「でも、それってさ……そんなドクター・カオスと魔女マリアに横島が加わっちゃうと、誰も手だし出来なくなっちゃうような……それどころか、世界征服も可能とか……」

幹比古は苦虫を潰したような顔をしながらをそんな事を言う。

『世界征服か!!カオスのじーさんに言ったら、乗ってきそうだな!!』

「軽!!世界征服ってそんな軽いもん!?こんな奴に世界握られてる!？」

エリカは驚いたらいいのか呆れたらいいのかも分からない状態だ。

『ジョーダンだって、そんな事したって、疲れるだけだって』

「あはははっ、横島さんがそんなことするわけないと分かっているけど、冗談に聞こえないのが不思議です」

美月はもはや半笑いだ。

「……………」

そんな中、達也は何やら真剣に考えている様だ。

『あ、そう言えば、横島さんの姉を名乗る人が来ている』

雫は思い出したように不機嫌そうに言う。

『し……雫ちゃん』

横島はどうやらその話題には触れてほしくなかった様だ。

「姉だ?おまえ、家族いないのだから?どうということだ?氷室は皆、年下だぞ」

「レオ、なんであんたはそうデリカシーが無いのかしら……」

「横島さんにお姉さん、もしや蓮様!!」

レオの相変わらずのぶつきら棒な言い方に、エリカは注意をする。

美月はまたもや、勝手に妄想モードに入っていた。

『そう、なんでも、武術の姉弟子らしい。それで、横島さんに姉さんと呼ぶそうとして、私と横島さんとの間に邪魔してくる。エリカ似の美人だけど、性格はまるで深雪……』

雫はどうやら、その姉弟子に対して良い印象を持っていないようだ。

その姉弟子は、勿論、小竜姫の事だ。雫には妙神竜姫と名乗っている。

「ありがとう雫、ふーん、私似ね。もしかしたら、あんた、その姉弟子の代わりに私にセクハラしてるんじゃないでしょうね」

美人と言われ、悪い気はしないエリカだが、ジトツとした目で横島を見据える。

『ああああ!!アホ!そんな言い方するな!!聞こえたらどうする!!……ふうー、大丈夫そうだ』

横島は慌てて、エリカに注意し、周りをキョロキョロと見廻し、安心したのかの様に一息つく。

今のが小竜姫に聞こえていたらと思うと、横島は寿命が縮む思いがしていた。

……しかし、手遅れなのだ……小竜姫はこの情景を見ていて、こめかみをピクピクとさせていた。

やはり、お怒りの様だ。

「雫、性格は私に似ているという事は、慎ましやかで良い方なのですね。そうですよねお兄様」

深雪は雫に笑顔でそう言い、達也に同意を求めていた。

『……重度のブラコンに嫉妬深い』

雫は恐れ多くも直球ど真ん中の答えを持って来た!

雫の答えに、皆が凍り付く。

「……雫……それはどういう事かしら?私達一度よく話し合う必要があるようね」

深雪は笑顔を絶やしていなかったが、そこには、優しさや喜びなどと言ったものはない。ただ単に恐怖のみを与える笑顔だ。まさしく

小竜姫が湛える笑顔と同類のものだった。

そして、周囲に冷気が漂う。

『深雪、笑顔が怖い』

雫がさらに追い打ちをかける。

雫は、深雪だけでなく、小竜姫というブラコンの嫉妬狂いの二人を完全に敵に回していた。

.....

『たはったはははっ、この話題はよそう、お互いの為にその方がよさそうだ!!』

横島は冷や汗をかきながら、皆に向かってそう言った。

「そ……そうよね!」

「横島、たまには、いい事言う!!」

「お、おう」

エリカ、幹比古、レオは場の冷たい雰囲気を払拭するが如くそれに慌てて同意する。

「……ところで、横島、お前いつ日本に帰るつもりだ? 事件が解決するまでと言っていたが……学校はどうする?」

達也はそんな凍り付いた場の空気から見事に話題を変えた。

「あんた、2学期の期末テストも受けてないでしょ? もしや進級ヤバいんじゃない?」

エリカも達也の話題に続く。

『げ、それヤバい!……う……落第有り得る。出席日数もたりなさそうだ……どうしよう?』

横島は今頃そんな事を言っている。

「……横島、お前の行方不明も学校側の責任でもある。休学扱いになっっているはずだ。さらにそつちに藤林さんが居るだろう。何かしら交渉が出来るのではないか?」

達也は横島に淡々とこんなアドバイスをした。

『おっ、なるほど』

達也がそう言った事を横島は瞬時に理解する。

日本政府が何らかの交渉のために、横島に藤林響子を使って接近している事は本人も重々承知なのだが、今、横島は逃げ回っていたのだ。達也は横島にその交渉のテーブルに付き、裏取引で落第を回避せろと言っているのだ。

「……また、達也くん、不正や犯罪まがいな事考えてない？」

エリカは呆れ顔で達也を見る。

「お互い利害が一致すれば、不正や犯罪にならない」

達也は平然と言うが、不正は不正だろう。

「まあ、なんにしろ早く帰って来いよ」

レオは横島に男らしい笑顔を向ける。

「そうだね。霊視の修行もつけてもらいたいし」

「横島さんが居ないと、クラスみんなが寂しがってます」

「あなたには、帰ってからその、なに、横浜で見せたあの力について聞きたいしね」

「……横島そう言うわけだ」

幹比古、美月、エリカ、そして達也も同じく、横島には早く帰って来てもらいたいようだ。

ほのかは雫の事があるため、その辺は返事がしにくい。

深雪も、達也の事もあり、横島には恐怖こそ今はないが、えも言われない感情が渦巻いている。

『横島さんが帰るなら私も帰る』

雫はそんな事を平然と言う。

『そのなんだ、色々と心配かけたな、なるべく早く帰れるようにはする』

横島は照れ臭そうにそう言った。

この後、横島は今の携帯端末のアドレス等を皆に伝え連絡をいつでも取れるようにした。

学校にはしばらく横島が生きていて、USNAに居る事を黙っている事になった。

こうして、久々に何時もの面々が顔を合わせ、皆心行くまで話したのだった。

横島が行方不明になり、約2ヶ月半、期間で言えば短いように見えるが、何年もあっていないかのような感覚を皆は感じていた。

136話 横島、達也と久々に語る!!

横島と友人達は通信越しだが久々に顔を合わせ話に花を咲かせたのだった。

あつという間に時間が経ち、女性陣は話したりない様相だったが、お開きとなったのだ。

「……横島…すまん」

その後、1時間も経たずに達也は横島に連絡を入れていた。

そしてその第一声で達也は横島に謝罪の言葉だったのだ。

「なんだ？いきなり」

横島は達也からの連絡を受け、屋上に出て、電話をかけなおしていた。

部屋では、小竜姫や雫が何時部屋に入ってくるか分からない状況だからだ。勿論、屋上には人払いの結界を張っている。

「済州島の事だ。お前を窮地に追いやったあの戦略級魔法を放ったのは、俺だ」

達也の声は何時もの様に淡々としていたのだが、なぜかこわばっている様に聞こえる。

「知ってた」

「し、知っていたのか……」

達也は驚いている。横島がまさか、知っていたとは思っていないかったようだ。

「まあな、でもあれはお前の放った魔法に俺が勝手に間に入って介入したんだ。達也が謝る必要は無い」

「……いや、俺はお前を殺しかけたんだ。……それに、俺は、お前が死んだと思っていた……」

「ああ、流石に俺も久々にやばかったな。何なんだよあの魔法。島ごと吹っ飛ばす威力だったぞ……しかし、あれだろ、別に俺を狙って放ったわけじゃないし、お前の意思じゃないだろ？軍の命令だろ？」

「島の四分の一を消滅させる威力で放ったからな……島の軍事施設……」

島の人間を全て消し去るのが目的だった」

「……………そうか、俺はそれを阻止するために、立ちほだかったからな。まあ、結果的に島の人達は傷つかずに済んで良かった」

「……………あの島にお前の知り合いでもいたのか？」

「いいや、以前来た事がある程度だ」

「……………だったら、なぜだ。なぜ自らの死の危険を顧みずに島を守った！」

達也は横島の答えにイラつくように語気を強くしていた。

「まあ、なんだ、ノリかな？」

横島はおちゃらけた答えをだす。

「ふざけるな、お前は死にかけたんだぞ！」

「……………そこに助かるかもしれない命があるのなら、見捨てることはできん」

「……………俺は、俺に関係の無い人間がどうなろうと、知った事ではない……………」

「いや、お前…迷いがあつただろ」

「!?……………」

「俺はお前の戦略級魔法を喰らった際、そこから、お前が放った魔法だと分かった……………発動したお前は一瞬躊躇していた。そんなような感情がながれ込んできた……………」

「……………そんな事は無い」

「達也、お前は無意識に、予定の威力より抑えていたんじゃないのか？」

「……………」

達也はマテリアル・バーストを発動する際、何やら、自分でもよくわからない感情がうごめいていた事を感じていたのだ。

「まあ、そのおかげで俺も、何とか阻止出来ただけだな！逆説的にお前のお陰ってことになる？」

「なぜだ？それは結果論に過ぎない。もし少しでも予定の威力より高かったのなら、お前は死んでいたかもしれないんだぞ！」

「まあ、そうはならなかったし、いいんじゃないか？」

「……お前と言う奴がますます分らない。何故だ……知らない奴らの為にお前は、何故命を張る。それによってお前が死んだらどうなる。周りの連中は皆悲しむぞ」

「それを言われると痛いぞ。まあ、反省はするが、同じような事がおきたら、またやってしまいそうだな。これは性分なのかもしれない……しかし、まさか、お前に言われるとは思わなかったがな」

横島はにかんだ笑顔をみせていた。

「……俺には、お前の行動がわからない」

達也は横島の答えに納得がいかない様で、無然としていた。

「結果的に、大亜連合と休戦協定が結ばれたし、新ソビエトの連中の介入も防げたんだし、良かったんじゃないか？」

「お前、そこまで計算していたのか？……どうなんだ？」

濟州島を日本が壊滅させた場合。大亜連合は対新ソビエト防衛機能を大幅に低下し、新ソビエトが高麗地区に介入してくる可能性が高かったのだ。そうなると、朝鮮半島を中心とした泥沼の戦争が起こるだろう事は容易に想像がつく。日本もそれを承知で濟州島壊滅を決定している。日本本土の一部が直ぐに占領されるよりはましだと判断したのである。

「さあな、まあ俺としては、友人が130万人の人間を亡き者にした大罪人の汚名を着ずにホツとしている」

「……俺は既に何人も人間を殺している。鎮海軍港の消滅も俺の仕事だ。今さらそんなものはどうでもいい」

「あそこ（濟州島）は、何も知らない一般市民が多数生活をしていた。俺たちと同じように学校に通って学んでいる子供もいる。それでもか？」

「……」

達也は直ぐには答えられなかった。

やはり、自分は躊躇していたのだなど、気が付いたようだ。

「にしても軍もえげつないな……いくら戦略級魔法師だからって、まだ16歳かそこのガキにやらす事じゃないよな。……まさか、達也

の事をでくの坊とでも思っているのか？」

「……そう、達也は実際に16歳、成人に至っていない年齢なのだ。いくら大人びていようが、大人顔負けの冷静な判断が出来ようが、その事実は揺るがないのだ。」

「……誰がガキだ」

「お前だよ……まあ、俺も……だがな」

そう言った横島の声色は優しかった。

「……………」

「この話はどう、これでお終いにしようぜ」

横島は明るくそう言った。

「……すまなかった」

「たははははっ、そうか！」

横島のこの言葉で、済州島での横島と達也の遺恨は一応の決着を見る。といっても、横島はもともと何とも思っただけはなかったのだが。

その後、達也からの視点での、横島がいなかった11月、12月の日本や学校の様子等を話していたが、遂に横浜の話になった。

「横浜では助かった。深雪が世話になったな」

「いや、俺の方も助かった。まさか、あんな短時間で、あの距離の敵を撃破出来るなんて、予想外だった。流石だな。達也がいなかったら、相手が弾を打ち尽くすまで、我慢の勝負になっていたからな……お前のあの戦略級魔法、なんて言うんだ。いきなり、達也の気を感じたと思ったら、そこから急激に破壊のエネルギーが増大していった様を感じた。ありやなんだ？しかも、俺が吹き飛ばした後も増大していったんだが。……射程距離もすさまじく長いな、あの時はお前、対馬ぐらいに居たんじゃないか？」

「マテリアル・バーストだ。俺のBS魔法分解再成を応用したものだ。あれを真正面から止められるとは思ってもみなかったが、お前も相当ダメージを喰らった様だ、有効だという事だ……次はな」

達也は軍事機密に関わる事なのだが、マテリアル・バーストの名前

と自分のBS魔法の正体を話したのだ。

そして、達也は、通話越しにニヤつとしながら、横島を脅すような事を言う。ジョークのようなのだが、達也が言うと言われない。シャレにならない。

「かんべんしてくれ、まじでやめて〜」

横島はわざとらしく、泣きそうな声でそんな事を言うが、楽し気でもある。

「にしても、攻撃に触れただけで俺の場所や大凡の特性までわかるのか……サイコメトリーと言う奴か……そう言えばお前、横浜ではテレパスも使っていたな……BS魔法師として他に存在している事は知っていたが、両方使えるとは……いや、それどころじゃないな。お前、どうやって横浜まで来た？」

「ああ、加速魔法？みたいな奴で……全力疾走？」

「加速……魔法……まあいい、お前が、ただ単にそこにいるだけで、サイオン粒子の嵐が出ていたぞ……、あの時のお前はなんなんだ？」

「そういう達也こそ、横浜で会ったお前の、霊力が普段とは段違いに上がっていたぞ！」

「俺のBS魔法は分解・再成は危険度が高い。そんなものを野放しにできるわけがない。普段は深雪がストッパーの役割をし俺の力を封印している。」

「まあ、俺も同じもんかな。封印しとかなないと日常生活も困るしなっ」

「……封印か……本来の力は、横浜のアレなのか……エリカに武神や魔神と言われても仕方が無いな……正直いって、あの時のお前は規格外過ぎる。人間のカテゴリーに収まる力ではない。皆は国を亡ぼせるなどと言っていたが……そんな生易しいものではない、世界すら滅ぼせる……」

「……それは……というか、お前だって、地球丸ごと吹っ飛ばせるんじゃないのか？エーツと、マテリアル何とかだっけ？霊気自体多量に消費したようには見えなかったし、アレより大規模な事ができるんじゃないのか？まあ、コントロールとか難しそうだけど」

横島は達也の言った『世界すら滅ぼせる』が心に突き刺さる。滅ぼ

しはしなかったが、世界を分離を実行してしまったのだから……

「……………理論上はな」

「こわ！お前言っちゃったよ！さらっと地球吹っ飛ばせるって、言っちゃったよ!!」

「……………お前に言われる筋合いはない。あんな力を持っているくせに、のうのうと学生などやっている奴にな」

「俺は、学校で普通の生活をしたいんだ!!誰が好き好んで戦ったりするんだ！お前みたいな戦闘狂といっしょにするな！」

「好き好んで戦っているわけではない。深雪と俺の生活を脅かす奴らが多いだけの話だ」

「でた！この重度のシスコン!!……………達也、なんで軍に協力しているんだ？お前ぐらいの力を持って、理性を保っている奴がなんで？」

「……………力が欲しいからだ。俺の力は万能ではない。大きな破壊を起こすことは可能だが……………俺一人の力では、対抗できない物も多い。……………お前はどうかんだ？ドクター・カオスと魔女マリア、正直いつて軍よりも凄まじいカードだ」

「はあ？何言つてやがる。あのじーさんとマリアは腐れ縁つてただけだ。俺の方が迷惑掛ければなしな感じではあるがな」

「そうだなお前は違うか……………お前の人間性はすさまじいな……………俺には到底真似できない。九島烈とは友人とまで言わせ、あのドクター・カオスと魔女マリアとも友人。氷室家本家からは家族とまで言われている……………俺には深雪だけだ」

「シスコンも大概にしろよ!!お前の周りを見ろ!!レオもエリカ、幹比古や美月ちゃん、雫ちゃんにほのかちゃん、真由美さんや摩利さん。それで、1年の九校戦女子選手、俺が知っているだけだと、お前んところのエロリコン師匠もそうだろう。皆お前の信用している……………後俺もな！」

「……………俺の能力に集まっているだけだ」

「はあ、レオもエリカも幹比古も美月ちゃんはお前が力を発揮する前からだろ!!なに言つてんだ……………能力も個性だ。それもお前だ」

「……………」

「お前、そればっか、決闘しろって言わないだけましかな……そんなじゃあな」

「ああ、お前も、とつとつと事件を解決して日本へ戻ってこい」
「わかった」

こうして、達也と横島は話を終えた。

横島との会話を終え、自室から出てきた達也は、心なしか晴れ晴れとした表情をしていた様に深雪には見えた。

137話 横島、知人に連絡をする!!

達也達が横島とコンタクトを取っている間、

日本各地に派遣されているUSNA工員から上がってくる情報は、どれも達也と深雪どちらかが『灼熱のハロウィン』を引き起こした戦略級魔法師である可能性高い事を示していた。

リーナは確証を得るための方策をシルヴィア准尉を含むチームで検討していたのだが……

そんな時、リーナの元にUSNA本国から緊急連絡が入る。

現在もダラスに滞在中のベンジャミン・カノープス少佐からだ。

内容は、昨年10月に行ったマイクロブラックホール生成実験後、脱走者（行方不明者）となっていた軍関係者7名の新たな情報についてである。

脱走者の一人であるフォーマルハウト中尉は昨年末、横島の活躍によってダラスで捕らえたのだが、現在も病院にて意識不明のままであり、情報を得ることが出来ず、それ以降、脱走者たちの行方は分からないままであったのだ。

ドクターカオスの12月末に行った実証実験の結果、マイクロブラックホール生成で空いた時空の穴から異世界の未確認サイオン精神体が侵入し、生成実験の関係者に肉体若しくは精神に寄生し、操られている可能性が高いという恐ろしい報告を受けていた。古来からこのような事象は確認され、デーモン（悪魔）憑きや妖精憑き、パラサイトなどと呼ばれていたものに相当するとの事なのだ。

フォーマルハウト中尉と今だ行方不明の元USNA軍脱走者7名は、いずれもこれに該当するだろうというのが今のUSNA軍参謀本部の見解だ。

そのデーモンに寄生されていると思われる元USNA軍脱走者7名は復興が始まったばかりの横浜港から上陸し、東京に潜伏しているというのだ。

リーナもこの事実を驚きを隠せないでいた。

USNA軍統合参謀本部はこの事態を重くみて、直ぐに追撃隊を日本に派兵することを決定した。

しかも日本政府には通達無しに、内々に処理するつもりでいるのだ。

もし、日本国内で秘密裏に派兵した兵隊が、戦闘行為を行い市民に被害が出た場合。国交断絶もあり得るのだが、今回の事件による自国の失態を表沙汰にしたいくはないという意思がありありと伝わってくる。そんな事を言っている事態ではないのだが……

カノープス少佐はアンジー・シリウス少佐に任務内容の変更を通達する。

「総隊長、参謀本部からの通達です。現在遂行中の『灼熱のハロウィン』容疑者の捜索は優先順位を繰り下げ2番目とし、元USNA軍脱走者7名の処分を最優先に。日本政府に秘匿し、迅速かつ内密に処理をとの事」

「……了解、しかし、日本政府に通達無しに実行とは、危険を伴いますね」

日本政府と連携を取った方が速やかに対応が出来るのは分かり切った事なのが、それが出来ないとなると、難易度は格段に上がる事をリーナは言っている。

「それだけ、ペンタゴン(参謀本部)も事態を重く見ているのでしよう」

「……ベン、……ドクター・カオスにはこの事は？」

リーナは間を置き、カノープス少佐に聞きにくそうにする。

「いえ、知らせておりません。ダラスでこの件の協力者、カオス氏の助手である横島少年にも伝えておりません」

リーナの意図を的確に理解し、カノープス少佐はこう答えたのだ。

リーナは横島について直接聞きたかったのだが、こう言う言い方になるのは致し方が無いだろう。

今はスターズの総隊長アンジー・シリウス少佐なのだから。

「……そう」

リーナは心苦しそうな表情をする。

協力者である横島に情報を渡すことが出来ない事が、彼を裏切つて

いる様な気がしてならなかったからだ。

しかし、もし、情報を知った横島が日本に来てしまったら……。もし、第一高校の友人達に出会ってしまい、記憶が戻ってしまったらと思うと、これで良かったのだと心の中で自分に言い聞かすしかなかった。

リーナはまだ知らない。横島が既に記憶が戻り、達也達とコンタクトを取っている事を……

その頃横島は、次々と親交の深い人たちに連絡を入れていた。

その前に小竜姫には、散々お小言を言われていた。どうやら、友人達と達也との会話を聞かれていた様だ。「でも、貴方らしいです。世界が変わろうと貴方は貴方なんですネ」そう言っただけ最後はしぶしぶだが今は収めてくれていた。

まずは何より氷室家に連絡を入れる。14代目恭子とは12月末の時点には連絡をしていたのだが、要たちには内緒にしてもらう様に言っていたからだ。

彩芽には泣かれ、要はそっけない態度であったが、どこかホツとしている様子だった。

蓮には涙ぐみながらではあるが珍しく怒られ、それに敦信がフオーするという一幕もあった。

横島は何度も頭を下げるのと同時に、話せる範囲での現状と、しばらくUSNAにいる事、日本に帰ったら氷室にも一度戻る事を伝えた。

横島と先にコンタクトを取っていた恭子がこの後、娘や孫に色々と言われ責められていたのだが……

あえて、『救済の女神』発動について、要たちが横島に聞かなかったのは、恭子が事前にその事を、今は聞かないで上げてほしいと言っていたからだ。

要たちは横島が遠い親戚であることは恭子から聞いていたため、氷

室の秘術を使えるのはまだ、納得はいくが、『救済の女神』まで使えるとなると疑問が残る事になる。蓮は薄々何かに気付いているようだが、要は横島と氷室の関係がどのようなものなのかをしばらく考えふけることになる。

しかし、要はその程度で横島に対する思い(恋心)は揺るがない。その思いは横島が居なくなつてからある決心をさせ、秘密裡に行動に移していたが……この事はまだ、横島には秘密である。

次に九島烈に連絡を入れる。

九島烈は横島からの突然の連絡に大いに驚いていた。

死んでいたと思われる人物からであつたからだ。

九島烈は最初は、驚きのあまり口数が少なかつたのだが、段々と饒舌になり、横島を少々興奮気味に質問攻めにする。

やはり、横浜での『救済の女神』発動の事、濟州島での戦略級魔法マテリアル・バースト阻止についてがメインだったのだが、横島はその件を認める代わりに、生きている事やこうやってコンタクトを取っている事を秘密にしてほしいと頼む。

九島烈は横島と会話しつつも、今後の横島との付き合いをどうすべきかに思考を巡らせていた。いくら何でも、一個人の力としては絶大過ぎるからだ。

九島烈は、個人的な付き合いに今の所留めた方が無難であるという判断を最終的に下すのだが……

次に九重八雲である。

九重八雲は横島からの連絡に特段驚いた風には見えなかった。

ただ、八雲は、横島が行方不明になつた後、横島についての生い立ちなどを調べたのだが、まるでわからなかった。そんな人物は初めから居なかつたのではないかというぐらいに情報がなかつた事を本人に告げ、君は何者なのかと聞いてきたのだ。

横島はその質問には、「最初っから言つてるでしょ陰陽術師だつて」とだけ答えた。

八雲は、その答えに納得した様に「まさに、そうだ」と笑つていた。この時代に陰陽術師を名乗る事自体ナンセンスな話。しかも九重

八雲も自身を「忍者」だと名乗っている得体のしれない人物なのだ。すでに陰陽術師やら忍者やら名乗っている自体、自分は得体のしれない怪しい人物だと言っているようなものなのだ。

きっかけは、氷室繋がりではあったが、お互いの素性等関係なしの付き合いで、今さらな関係なのだから……

次に渡辺摩利にも連絡をする。

摩利は突然の横島の連絡にかなり驚き、初めは上手く言葉が出ないでいたが、無事を喜んでいるのがわかる。しかし段々と何時もの調子を取り戻し、一方的に横浜でのことなど質問攻めをしつつ、何故か説教が始まってしまう。『救済の女神』の後継者なら、普段からも真面目にすべきだやら、自覚が無いとかなどなど、しかし、最終的には横浜での時のお礼を言っていた。

そして、必ず真由美に自らの手で連絡することを強く進言するのだった。

横島は、真由美には避けられていると感じていたため、摩利から真由美に生存を伝えてもらうつもりであったのだが……真由美にも連絡をすることにした。

138話 横島、真由美と連絡する!!

横島は摩利から教えてもらった電話番号で七草真由美と連絡をする事にしたのだが、始めはルウ・ガンフウの事件以降、明らかに避けられていたため、個人的に嫌われているのではと思っていたため連絡しないで、摩利から生きている事だけを伝えてもらおうと考えていたのだ。

「もしもし、七草ですが、どなたですか？」

「ご無沙汰してます真由美さん。横島です」

「えっ……横島……くん……？」

真由美は摩利から先ほど、今から掛かってくる電話は私の知り合いだから必ず出る様にと訳が分からない連絡が来たのだ。その相手がまさか横島だとは全くの予想外だったのだ。

「はい、心配おかけしましてすみません」

「本当に、本当に横島くんなの？」

「横島です」

「……本当に？映像通信できる？」

生きている事を願いつつも、もうこの世にいないのではないかと思っていた人物からの連絡が入ったのだ。疑り深くもなる。

「たははははっ、なんか、恥ずかしいっすね」

横島は口調を何時もの調子に戻し、そう言いつつ映像通信に切り替えた。

「……横島くん……」

恥ずかしそうに笑う横島の顔を見た真由美は目に涙がたまる。

「そう言えば、真由美さんとうとうして連絡するのは、これがはじめてっすね」

「そ、そうね……」

真由美はそう言いつつ、流れそうな涙を慌てて端末から顔を逸らしハンカチで拭う。

真由美自身涙が出るとは思ってもみななかったが、こうして再び横島の顔を見ることが出来たうれし涙だと気づく。

「すみません。連絡が遅くなりました」

「いいのよ。横島くんが無事なら……」

真由美は、前々から横島に色々聞いてみたい事、話したい事、謝りたかった事が等があったのだが、いざ本人と話が出来る状況となり、頭が真つ白になり何を話したらいいのか次の言葉がなかなか出でこず沈黙してしまう。

……

「すみません。俺、気づかないうちに何か真由美さんに嫌われるような事をしたみたいで」

横島はこの沈黙は、やはり真由美に良い印象を持たれていないのではないかと、謝りだす。

「え？あつ違うの、横島くんの事嫌ってなんかいないのよ」

真由美は慌てた様に否定する。横島がまさか、そんな事を考えていたなんて思ってもいなかったのだ。自分の行動でどうやら横島を悩ませていた事に罪悪感が芽生える。

「えっ？だって、10月くらいからずっと避けてたでしょ俺の事、だから、なんかやっちゃったのかなと」

「ルウ・ガンフウの襲撃事件があったでしょ？あの時、助けてもらった事をお礼を言おうと思ったのだけど、その、あの、あんな事があったから……あの時の事を思い出すと横島くんの顔が恥ずかしくて見れなくて、つい逃げ出しちゃって、……ごめんさい。誤解を招くような真似をして、悪いのは私なの」

真由美は最初は早口でまくし立てる様に言っていたが、途中また思い出したようで、顔を真つ赤にしてしどろもどろになっていた。

あの時の事とは、横島にルウ・ガンフウから助けられたが、その後、パンツがズレ落ち横島の男性の局部を間近で見ってしまった事を指している。あの時は余りの衝撃的な出来事で気絶してしまったのだ。

「あの時の？……ああ！たははははっ、あれっすか……なんかすんません、不可抗力だったんで」

横島は最初、何のことか分からなかった様だが、ようやく思い出した様だ。

「いい、いいのよ、それはもう。……でも、ようやくちゃんとと言えるわ。あの時私を助けてくれて、そして、摩利も助けてくれてありがとう。横島くん」

顔を真っ赤にしていたが、居住まいをただし、改めて横島にあの時のお礼を言う。

「いや、いいつすよ。達也の奴も体張って頑張ってくれたし」

「横浜でも、京都から駆けつけて、私達を助けてくれてありがとう」

真由美は電話越しに頭を再度下げる。

「たははははっ」

「本当にもうダメだと思ったの、でも、横島くんが駆けつけて、来てくれて嬉しかった」

「いや、俺のほうこそ、もっと早く行けたらよかったですけど……」

「ううん……でも、あの時の横島くん、なんだか年上に見えたわ、凛々しくて落ち着きのある様に」

「そ、そうっすかね？」

「あの時の私を救ってくれた考えられない様な力を振るった横島くんが『救済の女神』の後継者としての本来の顔なのね」

真由美は不思議と、あの巨大な力を操る横島を怖いとは思わなかった。むしろ安心感さえ感じていた。

「いえ、俺はそんなんじゃないつすよ」

「横浜を救った本当の英雄さんが何をいってますやら……」

真由美は悪戯っぽくそう言う。

「ちがうんです。俺はもつとちゃんとやれたはずなんです。それなのに救えなかった……1万人もの人が亡くなったんです。英雄なんていいもんじゃないですよ俺は……」

「……横島くん」

横島の予想外の返答に心苦しくなる真由美。

横島は何時だったかと同じようにどこか寂しそうでいて、辛そうな顔していた。そんな横島をそっと抱きしめてあげたくなる衝動に駆られる。

「……あの後、横島くんは何処で何をしていたの？みんな……ううん、

私は心配したし、もう会えないと思っていたわ」

「今はUSNAに居ます。記憶をなくして倒れていた所を昔の友人が助けてくれて、それでUSNAに」

「記憶をなくして倒れていたって、それで音信不通に……今は大丈夫なの？」

「たははははっ、今はスツカリ大丈夫ですよ！」

元気よく答える横島を見て、ホッとする真由美

「横島くんのように力がある人が、そんな状態に？」

真由美は何気なしに疑問を口にする。

「たははははっ、油断大敵って奴ですよ。俺は弱点だらけの人間ですから」

頭を掻きながら、はにかんで笑顔で答える横島。

「ふふふふっ、横島くんは、あんなに凄い事を成したのに、何時もと一緒なのね」

真由美も自然と笑みがこぼれる。

真由美は十師族七草家の長女して育ってきた。

大人との接触の機会も多く、陰謀の渦にも巻き込まれやすい状況であった。処世術として、自然と外と内の顔を使い分け、相手の言動の裏を読んでしまうのだ。その最たるものとして、あの小悪魔的な笑顔と言動は、本人の性格によるところもあるが、相手の出方を伺ったり、相手との距離感を図ったりするものだった。

そんな真由美から見ても、横島は何時も自然体に見えた。

達也とは、どうしても大人たちと対峙する時と同様、化かし合いになる。結局いつも達也に一本持つて行かれるが……ある意味似たもの同士なのかもしれない。

横島は、何時も大騒ぎを起こす手のかかる弟のような感じではあったが、徐々に接する内に見せる沢山の表情があった。

時折見せる凛々しい姿。その雰囲気は年上にも見える時があった。年相応に悩む姿も見た。そして、ふとした瞬間見せる悲しい表情は切なくなり、抱き留めたくなる。

まだ、真由美の中でこの感情は何なのかは整理できていなかった

が、横島の無事な姿を見て、心の底から歓喜している自分に気がつく。横島に自分は好意をいただいているのだと……

「横島くんは、その……年上が好きだったりするの?」

真由美は自然とそんな事を質問していた。

「へ?えーつと、基本的に年上の綺麗なお姉さんが好きですよ!あつそう言えば、真由美さんは聞いているかもしれないけど、京都で、四葉真夜さんと六塚温子さんと会ったんですけど、二人共物凄く美人でした!!やっぱあれですね。美人のお姉さんっていいもんすね!」

横島は真由美にそんな事を言ってしまった。

真由美は驚くと同時に呆れていた。

父、弘一から、横島が、十師族当主たちと会っていた頃聞かされていなかったのだ。さらに、自分の親ほどに年が離れている四葉真夜をお姉さんというあたりは流石に呆れるとしか言いようがない。

「そ、そうなの……」

年上好きな事を聞き、心の中でホツとする自分がいる事に気が付く真由美。

「急にどうしたんですか?」

「あつ、なんでもないわ、ところで横島くんは、日本にいつ戻ってくるつもりなの?学校にも私の方から色々と手をまわしておくわ」

「あー、それなんですけど、ちよつとトラブルというか事件に巻き込まれちゃって、直ぐに日本に戻れそうもないんです。それと、学校とどうか、俺が生きている事を黙ってもらいたいです。まあ、真由美さんのお父さんにはもうバレているかもしれないけど。この事は達也とかいつもつるんでる友人には伝えてます。だから、真由美さんと摩利さん、達也にレオ、幹比古に、エリカ、美月ちゃんに、ほのかちゃんと深雪ちゃんは知ってます。それと、雫ちゃんがこっちで会いました」

「…わかったわ。そう、北山さんは会えたのね」

真由美は了解したものの、雫が横島に会っている事に胸がチクッと痛む。

「お願いします」

「横島くん、日本に戻る時は先に連絡入れてね。ちゃんとお礼も言いたいもの」

この後も横島とはたわいもない事を話していたが、こう言つて横島との約束を取り付け通話を終わらせた。

真由美は、横島との通話を終え、嬉しい気持ちと安堵の気持ちが緋い交ぜたような不思議な感覚に陥り、ベットの上で悶えていたのだが……横島を失神させ記憶喪失にする位の衝撃を与える相手について思い当っていた。今、東京で起きている謎の連続殺人事件の件だ。被害者はすべて外傷が見当たらず、衰弱死したような状態で発見され、例外なく血液の1割を失っているのだ。魔法師ばかり狙われ、事件の真相を探るために派遣した七草の家人も既に何人も返り打ちにあつていた。

もしや、横島もそのような正体不明の殺人鬼に狙われ、やられたのではないかと……

139話 横島、事態が動きだしている事をまだ知らない!!

「おはよく、達也くん、昨日のニュースの見た？」

エリカは教室に入ってくるなり、最初に目についた友人、達也に勢いよく近づく。

「ああ、『吸血鬼事件』の事か」

達也はエリカが言いたかったニュースの記事について予想し答える。

「そう、それよ、オカルトチックな事件よね。やっぱ魔法師絡みかな？でも血液抜いてどうするんだろう？」

昨日のどこのテレビもニュースサイトもこの事件について報じていた。

東京中心地での連続殺人事件。被害者は全員外傷が見当たらず、血液の一部が抜かれている事から、メディアは『吸血鬼事件』と名を打ったのだ。しかしこんなオカルトチックな事件なのだが、既に被害者は20人に達しているというのだ。

しかし、この事件が明るみになる前に、既に警察は動いており、七草家も秘密裏に動いていたのだが、犯人を未だ見つけられず。被害者ばかり増え、遂にはメディアにすっぱ抜かれる事になる。

「おはよう、達也、エリカ」

幹比古は教室に入り、一緒に居る達也とエリカに挨拶をかわす。

「幹は？と思う。あの吸血鬼事件？」

エリカは興味津々に幹比古にも聞く。

「うーん、正直分からないな、もしかしたらパラサイトの仕業かも知れないし、でもあんなの滅多に出ないし」

幹比古は真面目にその事について答える。

「寄生生物の事か？」

達也はパラサイトをそのままの意味に取り、幹比古に聞いた。

「いや、この場合は超常的な寄生生物と言ったものかな……でも、血液を

採取するなんてのは聞いたこと無いな……だから違うかも」

幹比古は達也の問いに答えるも、今回の事件とは関係なさそうだと認識している様だ。

「……超常的な寄生物」

「そう、悪霊とか妖魔とか、昔から伝承がある物の怪の類の事だよ」「ププププツ、幹も、マンガの見過ぎよ」

エリカはこの前の仕返しとばかりに幹比古を笑い飛ばす。

「エリカ、あのさ、真面目に答えているんだけど」

「幹比古、その様な物が実在するのか？」

「少なくとも古式魔法では共通認識としてあるよ。パラサイトについての研究発表何て言うのが世界的に行われているし」

「そうなのか……」

達也の知識の中でパラサイトと言う超常的な寄生物いや、悪霊や妖魔の類についての認識は無かったのだ。しかし、魔法でさえ、つい100年前まで超常の物としてとらえられていたのだ。悪霊や妖魔が存在してもおかしくないのではないかと、考えを改める。

「おっと、間に合った」

レオが始業ギリギリに教室に入って来て達也の前の席に座る。

「珍しいな、レオがギリギリとは」

レオは普段達也達より先に教室にいるためこのような聞き方をする。

「あー、ちょっと夜更かししちまってよ」

この時は何時もの、たわいもない日常的な会話だったのだが……

翌日、レオは学校に来なかった。

レオだけでなくエリカも来なかったのだが……

理由は早朝にエリカから友人達にメールで送られて来た。

レオが例の吸血鬼らしき人物に襲われ、病院に運ばれたとの事だった。

命に別状はないとの事だが……

横島との連絡を取り合った後、レオは気分よく何気なく夜の渋谷を徘徊していたが、たまたまエリカの兄、警部である千葉寿和に遭遇し、職務質問をされたのだ。

その時、寿和が連続殺人事件（後に『吸血鬼事件』）について口を滑らせたのがきっかけで、レオはその日から毎晩、何気なしに夜の街を徘徊し、その犯人をそれとなく捜していた。

偶然にも、若い女性が襲われているところに遭遇してしまい。若い女性を助けようとして対峙したのだが、レオも倒されてしまったのだ。しかし相手にもダメージを与えたらしく、犯人はその場を去った。

そして、その若い女性ともども、病院に運ばれたのだ。発見が早かったため、命の別状はなかったようだが、若い女性の方は今も意識不明である。

エリカはその事を寿和から知らせを受け、レオの運ばれた病院に駆けつけ、今も病室の外のベンチで座っている。

寿和と稲垣刑事コンビはレオに犯人又は犯人に関係する人物が接触する可能性を考慮し、レオと若い女性の病室を別室から監視カメラや盗聴器を使つて監視していた。エリカもそれに協力していたのだ。

昼前にそこには何故か、制服姿の七草真由美と十文字克人が現れた。

エリカは特に気にする様子もなく。ベンチに座ったままでいる。真由美はエリカに微笑みながら軽く会釈した。十文字は一瞥するのみ……

実は、若い女性の方は七草家の家人で、吸血鬼事件の犯人を追っていたのだが、振り返りにあつた所をレオに目撃されたのだった。

十文字家と七草家は共に関東を守護する身として協力体制をとり、今回の吸血鬼事件を解決に乗り出していたのだ。そして、直接吸血鬼と対峙しながらも生き残つたレオと若い女性に詳しい状況を聞きに来たのだった。

エリカはそんな二人の行動を無視し、寿和がいる監視部屋に入り、状況を聞く。

「兄貴、二人はレオに何を聞いているかわかった？」

「いや、監視カメラも、盗聴器も無効化された。流石は若くても十師族と云ったところか……」

「使えないわね。なら、何しに来たと思う?」

「魔法師絡みの可能性がある事件だ。大方、解決に乗り出したのだから」

「なに? 兄貴の組織とは協力しないわけ?」

「そんなわけにいかないだろ。あちらさんとうちは組織が違うからな、お互い見て見ぬふりをして、それぞれが動くしかできないんだ」
「面倒ね」

「エリカは学校あるだろ? 行かなくていいのか? 彼が心配か?」

「あいつ(レオ)は一応千葉の門をくぐった人間よ。曲がりなりにも私はいっつに剣を教えたわ。私の初弟子と言つてもいいわ。弟子がやられてハイそうですかとはいかないわよね。兄貴」

「……少しは女らしいところは無いのか? まあ、お前らしいと言えばお前らしいけどな」

「フン、どうせ、警視庁からも、千葉家に協力要請がくるんでしょ? だったら、私が動いても何にも問題ないじゃない?」

「はあ、色気のない事で」

千葉寿和はそんな妹(エリカ)を見て、溜息しか付くことが出来なかった。

夕方になり、達也と幹比古と美月がレオの見舞いに来た。

病院内でエリカと合流し病室に向かう。

しかし、病室には先客がいた。

レオの姉で大学生の西条花耶である。因みに魔法適性はなく一般人である。

花耶は挨拶を交わした後、気を利かせて席を外した。

「よお、なんだ。見つともないところをみせちまったな」

レオは何時もの笑顔でベットの从上から皆に挨拶をする。

「酷い目に遭った様だな」

「思ったより元気そうだね」

「大丈夫ですか？」

達也、幹比古、美月もそれぞれ挨拶を返す。

レオは今回の事の顛末を皆に話した。

犯人も素手であり、数度殴り合いになったのだが、犯人がレオの脇腹当たりに振れた瞬間、レオは全身に力が抜けたとの事、最後には踏ん張り、相手に一撃を与えたとの事だった。

犯人は白い覆面を被りロングコートで人物は確認できなかったが、殴り合った感覚では女だとレオは感じていた。

幹比古は、振れた瞬間力が抜けた事を訝し気に思い。レオの霊体を調べる事を提案し、札を使い古式魔法の術式をくみ上げ調べると精気が枯渇寸前状態になっていることが判明したのだ。

幹比古の見解では、犯人はパラサイトである可能性が非常に高いという事だ。

達也は霊体や幽体、精気などの言葉は知っていても実際どのようなものなのかは理解していなかったが、幹比古は説明しながら術を展開していたため、大凡は理解出来た様だ。

肉体と精神を繋ぐ情報体それが霊体であり、それを構成するエネルギー体が精気と呼ぶのだ。

パラサイトなどの悪霊や妖魔などは精気を喰らいエネルギーを得る。認識ではバンパイアは、血液と共に精気を吸い。食人鬼は血肉と共に精気を奪う。精気を全て喰われた人間は生命力を奪われたのと同義で、衰弱死する。

その辺の知識は世界分離前のGS時代の知識とほぼ同じである。

そして、その事が判明したことにより、エリカから寿和へ寿和から警視庁へ情報が渡り、吉田家にも協力要請が来ることになり、エリカと幹比古、そして千葉家門下と吉田家門下は協力して、吸血鬼を搜索することになったのだ。

その頃、USNAでは…

「横島さん、今から私に稽古つけて」

雫は学校から帰り、そのまま横島の部屋に訪れていた。

「今から、私と彼は、食前の修練に行くので邪魔しないでください」
何故か小竜姫は当然の如く横島の部屋でお茶をすすっている。

「私は、学校があるから、夕方前からしか横島さんと会えない。竜姫さんは一日中横島さんと行動できる。だから、今からは私が横島さんに稽古つけてもらう番」

「私は彼の姉弟子です。彼に修練を付ける義務があるのです」

小竜姫はそんな事を言っておきながら午前中は横島と、ダンタリオンが放った悪霊を探す名目で一緒に買い物を楽しんでいたのだ。そして、今からは横島と剣の修練に行こうとしていた。霊気が使えなくとも、剣の型合わせ位は出来る。

「姉弟子だからって、横島さんを無理矢理拘束する謂れは無いはず」

「……横島さん、わたくしと修練をするのが嫌なのですか？」

小竜姫はわざとらしく横島にこんな聞き方をする。

「……嫌なんて事は全然ないですが……」

横島は胃に穴が開く思いがし、二人の会話でドンドン肩身が狭くなって行く錯覚に陥る。

雫と小竜姫の言葉こそ丁寧なのだが、目は全く笑っていない。

「ほら、彼もそう申してます」

「私が先に稽古することを宣言したのに、横入りしたのは竜姫さん」

そう言って、雫は横島の右腕を取る。

「いいえ、彼の腕は鈍っています。だから私が付きっ切りで修練しないと」

そう言って、小竜姫は横島の左腕を取る。

「たははははははっ、だったら、しよური……姉さんが雫ちゃんに体術を教えていただくのはどうですか？」

横島はそんな二人にこんな提案をするのだが……

「嫌、私は横島さんじゃないと嫌」

「私もお断りです」

「たはったははははっ、はくあ……」

横島の精神はどんどん削られて行くのであった。

しかし、横島はこの頃、夜中に抜け出し精神集中の時間を作っていた。

(魔神ダンタリオンが放った悪霊はまだいい。ダンタリオンの裏に魔神ネビロス級の大悪魔がからんでいたら……今の俺では……やはり、文珠をつかうしか……)

現在もピーク時の3分の1も満たない霊力しか発揮できない横島は、まともに魔神級と対峙するのは危険なのだ。もし、ネビロス級の魔神が現れたのなら……とても対処しきれないだろうと……文珠さえ使えれば、今の霊力でも十分戦える。

横島は文珠が記憶の無くした時生成出来た事について、考察しながら、文珠復活の道筋を模索していた。

140話 横島、藤林響子と交渉する!!

「小竜姫様、老師から式神です。鬼門達が迎えに来れるそうですよ」
「……嫌です。貴方も一緒に帰ってくれるまで、わたくしもここに残ります」

「小竜姫様、本来の力を出せないではないですか……神が下界にこんなに長時間滞在しては何らかの影響があるかもしれませぬ。しかも、今のこの世界は神も魔も不加入の条約を結んでいるはずです。早めに戻らないと小竜姫様まで罰を受ける事になります」

横島は小竜姫に妙神山に帰るように促す。

現在のこの現世は神と魔のトップが不加入の条約を結んでいる。さらに、神と魔のトップがこの世界に異物が入らない様に強力な結界を張っている。ただ、内側からは弱いのと、ごく微細な力なら侵入が出来るようなのだが……

「……なら、貴方も一緒に帰りましょう」

「小竜姫様、ダンタリオンの放った悪霊を退治するまでは帰るわけにはいきませぬ。この件が終わったならば必ず、一度、妙神山に戻ります。ですから……」

「わたくしは何時まで待てばいいのですか？……わたくしは何時まで泣いていけばいいのですか？……貴方の事が心配なのです。また急に居なくなるのはもう嫌なのです」

「……小竜姫様。……必ず戻りますので、……申し訳ないです」

横島は小竜姫のその言葉に、ただ謝り、頭を下げるしかできなかった。

「……わたくしも分かっているのです。こんな事を言えば貴方が困る事も、……神とは言え感情は有るのです。それは分かってくれませぬか？……では、約束です。帰ったら言う事を何でも一つ聞いて貰います。無理な願いは言いません貴方が出来る事を……」

「分かりました」

「いつも泣くのは待つ身の女なのです。これは古今神も人も同じな

のですね」

小竜姫はそう言つて、渋々横島を残し妙神山に戻る事を了承する。そして、翌日の午前中に、西海岸まで送り届けたのだ。

こうして、小竜姫のUSNA来訪は2週間程で終わる。

齐天大聖老師も小竜姫来訪を神界の介入ギリギリの線で見守つていたのだろう。それがこの期間だったのだ。齐天大聖老師も小竜姫の心情をおもんばかつての事だったのだ。

横島にとっては、いい迷惑だったのかもしれないが、それもこれも、横島が妙神山にちゃんと戻らないのが悪い。

また、雫と小竜姫はなんやかんやといがみ合いながらも上手くやっていたような気がする。

まあ、ほぼマリアが仲介に入つてのお陰なのだが……横島も胃潰瘍を引き起こすまでには至らなかつたのも、マリアのお陰であろう。

横島は小竜姫を見送つた後、早速とある人物に接触する。

「久しぶりっすね。響子さん！」

「……横島くん……やっと会えた」

藤林響子は感慨深そうにそう言つた。半分涙目にも見える。

響子は政府から特命を受けてダラスにいた。横島との接触及び交渉の場を設ける事なのだが、この3週間、横島に接触どころか、見つけることも出来ないでいた。

横島が故意に響子を避けていたからなのだが、その間、政府からは一向に進展しない現状を憂いて、響子に圧力をかけていた様だ。

「あれ？そんなに僕に会えて、うれしいっすか？いやー！困つたなくたはははっ！」

「……記憶が戻っていたのね。そう……それでわざと私を避けていたのでしょ？」

「あれ？バレちゃってました？」

横島はわざとらしく茶化す。

「記憶が戻っている事は知らなかつたわ。でも、なぜ今になって私に会う気になつたの？」

「いや、日本か国防軍かが、俺に何か要求してきたんでしょ？」

「……そこまでわかって」

「ならば、今から、話し合いませんか？」

「今から？交渉人はあと二人居るのだけど……呼ぶわ」

「ダメつすよ！響子さんだけつすよ。では、レッツゴー!!」

そう言つて横島は強引に響子の腕を取つて、ホテルまで自動タクシーで向かい、自室に招き入れる。いや……ホテルだからっていかがわしい事をするわけではない。

そこには、何故かドクター・カオスとマリアがソファに腰を下ろし待ち構えていたのだ。

「え？……ドクター・カオスに魔女マリア……」

響子の顔から血の気が引く。罨にかかり、亡き者にされるのではないかと恐怖を感じた。しかし、自分の腕では、この3人から逃れるすべはない事も同時に悟る。

「うわつ、響子さん、そ、そんなに怯えなくても……別に取つて食つたりしませんよ。俺はそうしたいっすけどね！たはははははっ！」

響子は観念した様に、ソファに腰を下ろす。

「ふはははははっ、恐れ慄け!!わしが天才錬金術師ドクター・カオスじゃ!!」

「マリア」

二人は相変わらずの自己紹介をする。

「……日本政府から特命を受け、横島氏との交渉に参りました。国防軍少尉藤林響子です。かねがねお二方のご高名は聞き及んでおります」

響子は気を取り直して、自己紹介をする。一度は怯んでいたが、流石は日本代表として選ばれただけの事はある。何とかまともな挨拶が出来た様だ。

「あー、カオスのjeeさんは、呼んでもないのにここに居るだけだから、邪魔だったら追い出しますよ？マリアは記録してもらうために居てもらってます」

「横島くん。その、ドクター・カオス氏とミス・マリアとはどんな関係

なの？」

響子は横に座っている横島に小声で聞く。

「ふははははははっ！小僧とわしは……そうよのく、今風で言うともブダチじゃ！」

響子の正面に座っているカオスカ代わりに答える。全然今風では無い上に何故か居丈高だ。

「マリアは・横島さんと・ずっとお友達」

マリアもカオスと同時に返答する。

「は……はい、そうなんです。存じ上げぬとはいえ、失礼しました」

響子はカオスとマリアに頭を下げるが、内心焦っていた。横島が、カオスとマリアと知り合いの上、どうやら深いつながりがある事が予想外だったのだ。

ただでさえ、カオスとマリアが同席での交渉で難航を予想していたのに、さらに困難をきたしそうな予感がしてならなかった。

しかし、この時の響子はこの3人が集まっているこの現状の意味に気が付いていなかった。

国家その物を転覆させるぐらいの力が、今ここに集中している事を。

「まあ、昔から世話になってる二人なんだ。丁度その2人に拾われて、ここに居るって事、運が良かったのかなくく」

「そ……そうだったの……」

「で、日本政府は俺に何の用なんです？」

「日本政府から、横島忠夫氏に対する要求は一つです。日本に留まっていたいただきたい」

「なんでまた？俺って、なんか軍の人に目を付けられてたように思うんですが。まあ、原因作ったの俺だし！たははははははっ！」

「ほほう、経緯はわからんが、小僧を撃墜したのはお主らの魔法ではないのか？都合が良すぎんか？」

カオスは鋭い視線を響子に向ける。

「そ……それは、そうなんです」

響子は痛いところを突かれ言い淀む。

「じーさん、ありや、俺が勝手に戦略魔法に介入したんだ。俺を狙ったわけじゃないし。でも、あのまま魔法が完全に効力発揮したら、濟州島の人が全滅だったしな、止めない訳にはいかないだろう」

「まあ、お主だったらそうするわいな………そんな事より、小娘!!小僧を撃墜した戦略魔法を放った人間に会わせろー!!」

カオスは急に、体を乗り出し響子にそう言って迫る。

「へ?あの、その」

「会わせい!!それとも何か、このドクター・カオスのささやかな願いをも無下にするとこのじやな!!」

カオスは響子相手にぐずりだす。

「…マリア」

横島はマリアに目配せをする。

「イエス」

マリアはカオスの襟首をつかみ隣の部屋に連れて行く。

「何をするんじやマリアー!グハッ!ゴボッ!フベ!、わかった悪かった、邪魔はもうせん!バフツ!」

マリアが鉄拳制裁を行っている様だ。

そして……静まり返り、しばらくして……

マリアとボコボコになったカオスが戻ってくる。

響子はこの光景に啞然とし、冷や汗をたらたらと流す。

「黙っておればいいのじやろ、ふく酷い目にあつた」

カオスはそう言いながら、CADを操作すると顔の傷が一瞬で直る。

「じーさん、いつか会わせてやるから、大人しくしてくれ」

「本当じゃな!!おう!持つべき者は友よ!!……フンツ、前の小娘は何の役にも立たん」

カオスは元のテンションに戻る。やはり反省は無い様だ。

「………」

響子はこの一連のやり取りに、声を出すことが出来ない。

「たははははっ、すんませんね。では続きを……で、なぜ、俺を日本に留めようと?俺は一学生に過ぎませんよ」

「……『救済の女神』の後継者、さらにあのマテリアル・バーストを阻止できる力を持つ魔法師を一学生とは言わないわ」

「まあ、そうなるっすよね。でも、力は持っていて、俺は飽く迄も学生っすよ。……達也もね。それを日本の命運を任せるって事っすか？高々16、7のガキに」

「…そうよ。私達は君や達也くんに頼らないと、防衛もままならないのが現状なの」

響子の顔が苦しそうに歪みながら答える。

「はあ、まあ、何ですかね。どこの国も一緒かもしれないませんが、国内で権力の縄張り争いに力を入れるばかりで、本来の目的を忘れちゃってるんじゃないっすかね。自分たちのプライドや権力と国の行く末、どっちが大事なんすかね」

「私だって分かっているわよ！でも、今はままならないの……だから、君たちに頼るしかないの」

響子は感情的になっていった。響子自身もそれをひしひしと感じていたのだろう。

「小僧、その辺でやめてやれ、国とは、権力者とは概してそう言うもんじやて、わしが1000年生きてこの目で見てきたのじや、人間の本質は変わらん。この小娘を責めても仕方がない事じや……」

カオスは横島を制す。1000年と言う膨大な時間を過ごし、歴史を生で見えてきたカオスの言葉は、まさにそのものを意味している。

「すみません。言いすぎちゃいました」

横島は素直に頭を下げる。

「……その、私も感情的になってごめんなさい」

「交渉の件ですが、こっちの幾つか条件を飲んでくれたらOKすよ。そんな難しい事じゃないんで」

「その条件とは」

「俺が第一高校に復帰出来る事。あと単位は何とか誤魔化してください。皆と一緒に進級したいんで」

「それは可能だと思っわ。上には正式に確認を取る必要があるけど」

「次に、俺の事を調べ回るのをやめて頂けませんかね。九校戦以降、俺

……ホテルから出た響子はフラフラと歩き、道端でしゃがみ込んでしまった。

響子はぞつとする。先ほどまで、とんでもない場所に居た事に、そして、横島と言う規格外の人物を今まで独立魔装大隊は敵に回していた事を……

そして、横島と言う人物を、誰にも従わすことが出来ない事実にもはや、ドクター・カオスと同じ扱いにしなければならぬのではないかと……

その頃、日本では……

リーナは対抗魔法パレードで偽装したアンジー・シリウスとして、エリカと対峙していた。

先ほどまでリーナとスターズの一行は吸血鬼となった元スターズのメンバーの一人、チャールズ・サリバンを発見し、追い詰めていた。チャールズ・サリバン自身は、リーナの情報強化された銃弾で倒す事が出来たのだが、もう一体の吸血鬼が近くに潜んでいたのだ。

その騒ぎに、同じく吸血鬼事件を追っていた。警察組織の協力者としてのエリカと幹比古がわくわくしてしまったのだ。

幹比古は、もう一体の吸血鬼を追う。

エリカは、吸血鬼の一味だと思い込んだアンジー・シリウスと対峙したのだ。

赤髪仮面姿のアンジー・シリウスの異様な姿を見れば、吸血鬼一味と勘違いされてもおかしくない。

アンジー・シリウスのリーナはエリカを軽くあしらって、吸血鬼を追うつもりでいたが、近接戦闘に持ちこまれ、対処に苦慮していた。

たかが、高校生と侮っていたリーナだが、エリカの鋭い剣撃とスピードに舌を巻いていた。

リーナはエリカの動きに対処しだし、徐々に魔法戦での優位に立ち、エリカに致命的な魔法を放つのだが、達也が介入し魔法を無効化されたのだ。

リーナは達也の介入と魔法を無効化された事に驚きを隠せないでいたが、直ぐに立ち直り、この場を立ち去る。

幹比古が吸血鬼とアンジー・シリウスを発見した際に、達也に連絡をしていたのだ。

吸血鬼に押され気味だった幹比古も達也の介入で、難を逃れていた。

エリカも見た目ボロボロになってはいたが、深いダメージは無い様だ。逆にリーナは鎖骨をやられていた。

結局は、スターズと警察組織はお互い吸血鬼を追っていたのだが、足の引っ張り合いをし、吸血鬼一体を取り逃す羽目になったのだった。

141話 横島、吸血鬼事件を知る!!

リーナは学校を休んでいた。

病気でも怪我を負っていたのではない。

まあ、怪我はしているが、学校に行けない程ではない。

緊急性のある命令で動いているわけでもない。

マンシヨンの自室でふて寝をしていたのだ。

昨晚も、吸血鬼共を追っていたのだが、達也と深雪、そして達也達の師匠、忍術使い九重八雲に出くわしたのだ。

そして、達也に勝負を此方から挑みかけながら負けてしまい。その後、一対一で深雪と魔法による勝負を行い負けたのだ。

さらに、スターズのメンバーは九重八雲に無力化される始末。

完膚なきまでにこの3人にやられたのだ。

(グスツ、スターズの総隊長たる私が、たかが高校生二人に負けるなんて……しかも、一週間前もエリカにまで力で拮抗され……なんなの日本の高校生ってみんなあんなに強いのか？しかもあの達也の師匠とかいう忍者があんなに強いなんて聞いてないわよ)

リーナはシーツを頭からかぶり、涙目になっていた。

(タダオもなかなか強かったわよね。タダオ、あなたの友達はみんな強いからね。……でもなんだかタダオは他の第一高校の人達と全然雰囲気違っていた。なぜ？全然殺伐としてないし、フランクだし、いつも優しいし、私をいっつも立ててくれるし……タダオ、会いたいな)

シーツから顔上半分を出し、携帯端末から横島の写真を眺めていた。

「リーナ、いい加減に起きて下さい。学校をさぼるなど……先日の夜、何があったのですか？」

同居人でリーナの補佐官をしているシルヴィア・マーキュリー准尉がリーナの部屋をノックし、起きる様に言う。

リーナはのろのろとベットから出て、扉から寝間着のまま出てく

る。

「シルヴィ……」

「朝食を用意しましたので、まずは食べて下さい」

リーナはそのままの格好で食卓につき、朝食をとる。

「それで、リーナ……昨日の夜、3時間も音信不通になり、さらには、スターズのサテライト級を4人全員重傷状態で回収する始末、何があったのですか？彼らは全員病院で手当を受けておりますが、リハビリが終わるまで長い時が必要となります。本国に送還が妥当でしょう」

「やはり、本国からお咎めがあるのでしょうか？」

「そうでしょうね」

「うううっ、シルヴィ……スターズの総隊長の任を返上させて下さい」

「どうしたのですか、リーナ……いや、シリウス少佐らしくない」

そこでリーナは先日起きた達也達との事をシルヴィアに話した。

「シルヴィ、たかが高校生に負ける総隊長なんてあっていいのでしょうか？もう自信の欠片も残ってません」

「彼らは普通の高校生ではありません。あの『灼熱のハロウィン』を引き起こしたかもしれない容疑者なのです。その実力からすると、十分あり得るではありませんか……リーナが体を張ってそれを証明したわけではありませんか？」

「……そうよーあれは普通じゃないわ、達也も、深雪も！しかも達也あの魔法は分解魔法かも知れない！私は、吸血鬼を追って疲弊したところでの二連戦!!今度は負けないわ!!それと尻尾も掴んでやるんだから!!」

リーナはシルヴィの励ましの言葉に見事復活を果たす。

「……」

シルヴィは逆にこんな単純で大丈夫なのかと心配にはなるが、元気になった事で良しと思うのだった。

翌日、学校でエリカは非常に機嫌が悪かった。最早誰も話せる雰囲気ではない。

一昨日、警察組織側のエリカ、幹比古は、達也の協力のもとに、吸血鬼を追っていたのだ。

スターズとも出くわしたが、達也と深雪たちがスターズを引き受けてくれ、吸血鬼達を追う事に専念できたのだが、十師族側の七草真由美と十文字克人達とも出くわした上に、上手く連携が取れずに取り逃がしたのだ。

予め達也から、エリカ達だけでなく、十師族側にも吸血鬼の情報共有してしかるべきという事で、流してあるとは聞いていた。その事、自体に不満をも持っていた所に、いざ現場で鉢合わせし、しかも連携が取れずにターゲットである吸血鬼達を取り逃がす事態になり、さらに不満が募っていた。

その事で昨日の放課後、達也は気を利かしたつもりで、エリカ、幹比古、真由美、克人を呼びつけ、話し合い場を設けたのだが、主催者たる達也自身はとつと引き上げて行ったのだ。

残されたエリカは最初から真由美達に敵愾心丸出しで接しているため、真由美の対応も自然とそちらよりになり、話し合いはスムーズにならない。幹比古は二人の間を一生懸命取り持つが一向に良くなる気配は無い。十文字は黙して座ってその会話を聞いているだけだ。

そして、この達也が設けた話し合いの場はエリカの機嫌の悪さをさらに悪化させたのだった。

「幹比古大丈夫か？」

達也は教室に帰って来た幹比古に声を掛ける。

幹比古は1、2時限目の授業は保健室で過ごしていたのだ。

「達也…恨むよ」

幹比古は達也を恨めしい目で睨む。

「どうした。穏やかじゃないな」

幹比古はそんな達也に昨日の、エリカと幹比古、真由美と十文字克人での吸血鬼事件の連携の話し合いの場について話す。

結局話は進まずに、幹比古の胃痛が限界にきて終了したのだ。

その影響で、幹比古は今日の1、2時限目を保健室で寝ていたのだ。達也に恨み言の一つや二つ言っても仕方がないだろう。

「……大変だったね」

事情を知らない美月だが幹比古にそう声を掛けた事は幹比古にとって若干癒される気分になる。

その美月だが、昼休憩時間、皆といつも一緒に昼食を取るのだが後で行くと言って、校舎を出て、とある人物に連絡をしていた。

「あれ？美月ちゃんどうしたの？まだ、この時間学校でしょ？」

その人物はUSNAに滞在する横島だった。普段は霊視や霊気の訓練の事で夜に連絡をしていたのだが、今日に限ってこの時間帯だった。

「横島さん寝ている時間にごめんさい。あの、私、今日学校に来てから不安感が止まらなくて、それが時間が経つと共に大きくなるんです」

美月はそんな事を横島に言う。

「なにかあったの？」

横島は美月の霊力が徐々に高まっていたのは知っていた。横島がない間、真面目に訓練していれば、以前には感じられないような事も認識できるようになる。特に美月は感受性が非常に高いため、美月が言う不安感とは高まった美月の霊力中枢が危機を知らせているのだろう。虫の知らせと同じく危機察知能力の一つだ。

横島は美月の周りに良くない出来事が起こる可能性が高いと踏む。

「実は、皆には横島さんに迷惑かかるからと、口止めされていたのだけど、今東京で、頻繁に人が襲われる事件が……それが吸血鬼の作業らしくて……そのちよつと前にレオくんが吸血鬼に襲われて今も入院中なの……私には詳しい事は皆は言わないけど、みんな吸血鬼を追っているみたいなの、それとこの不安感が一緒なのかは分からない。でも、何か良くないものが、近づいてきている様な気がして仕方がないです」

「!!……あのバカ達は……美月ちゃんそっちは何時間目？それと学校内に不穏な靈気を感じない？」

まさにその吸血鬼は横島がダラスで捜索していたダンタリオンの悪霊たちだと横島はその話で判断した。

「はい、今は昼休憩です。今の所、構内で不穏な靈気を直接感じません。……だから、勘違いかもしれないのですが……」

「もしもの対処だ。全身に気を入れて、靈気を高め、自分の体内に巡らせるイメージをもつんだ。それで、吸血鬼は美月ちゃんを容易に憑り移ることも靈力を奪う事も出来ないはずだ。それと幹比古に連絡入れる様に言ってくれ」

「はい……」

「直ぐじゃない……だから、十分落ち着いてから、みんなに伝えて、吸血鬼にあつたら逃げろと」

「はい……横島さん」

「大丈夫」

そこで通話を切る。

美月は何時もであれば、エリカにまず相談するのだが、エリカは今話しかけられる雰囲気ではない。次に、幹比古に相談しようとしたのだが……どうやら、精神的に参っている様だった。しかし、このどんな広がる不安感に耐えかねて、横島に連絡をし相談したのだった。

横島は、美月にはまだ大丈夫と言っておきながら焦っていた。

カオスの部屋に緊急だとノックをすると、マリアに引つ張られながらカオスが出てくる。

「ムム、なんじゃこの夜更けに……」

「カオスのじーさんすまん。緊急事態だ。今すぐに日本に戻らないといけない。なんかいい方法は無いか？」

「……ククククククツ、あるぞい。丁度おあつらえ向けの物がな」

カオスは不気味な笑みを浮かべながら横島にそう言った。

その笑みを見て横島は嫌な予感しかしなかった。

142話 横島、吸血鬼の来襲!!

「夜分にごめん、雫ちゃん」

横島は雫を電話で呼び出して、横島の部屋に来てもらっていた。

「うん、大丈夫。どうしたの横島さん？」

雫は薄手のネグリジエ姿のままだったが、今は気にしていられない。

「第一高校がピンチのようなんだ。それで俺は今から日本に帰る」

「え？今から？私も帰る！」

雫は一気に目が覚めた様に、そう言った。

「雫ちゃんはここに残って、今はあっちの方が危険そうなんだ。俺が此方で事件を解決しようとしていたのは間違いで、どうやら知らないうちに日本で危ない事件が起こっているらしいんだ」

「え？そうなの？ほのかはそんな事を言ってなかった」

「たぶん。雫ちゃんに心配かけないでおこうとしたんだよ」

「俺もさつき美月ちゃんに聞いて初めて知った。しかも緊急を要する事態だ。多分、魔法師では対処が出来ない」

「……うん」

雫は横島の服の袖を掴み。しぶしぶだが了承の返事をするのだった。

「こっちで何か起こってもマリアが雫ちゃんを守ってくれる」

「今からってどうやって？」

「カオスのじーさんが何か用意してくれるらしい……まあ、それも不安なんだが」

横島がカオスに最速での日本行を頼むと、喜々として、マリアに「あれを用意しろ！フハハハハッ」何か準備をさせ、横島にはこのホテルの屋上に待つように言った。

横島は私服に着替え、屋上に行く。勿論服の中には各種札が用意されている。

雫も黒沢さんに付き添ってもらいながら、横島と屋上に行くとかオ

スとマリアが何やら持つて立っていた。

「じーさん、屋上からどうするんだ?」

「フハハハハハハハッ、取り合えずこれを着て見せよ」

横島はマリアに宇宙服のような物を着せられる。

そして、宇宙服の肩に何やら取り付けられた。

「フハハハハハハッ、見よ!!これが魔法技術の粋をつぎ込んで開発した。最新型のカオスフライヤーじゃ、その名も、マリア専用大気圏突破型〇〇(ダブルオー)カオスライザーX2じゃ!!」

カオスは自信満々に横島が来ている宇宙服のような物を紹介する

「……じーさん、名前に何か不吉な言葉が入っていたのだが?」

「なんじゃ?〇〇カオスライザーX2のどこが不吉なんじゃ?」

「いや、そこじゃない、もつと前だ」

「まあ、元々マリア用に開発したものじゃしな、しかたなかろう」

「いや、そこじゃない。真ん中」

「大気圏突破型、当然じゃろう。最速で日本に行くには大気圏突破ぐらいせんとな」

「あほか……!!生身で大気圏突破できるか……!!」

「生身じゃないぞい」

「宇宙服にホウキが二本、肩についているだけやないか……!!」

「何を言っておる。宇宙服ではないぞ。カオスフライヤーに軽量化を極限まで進めた結果、こうなったのじゃ、実にシンプルにして、すばらしいフォルムじゃ!!まさに天才の所業じゃ!!フハハハハハハッ!!」

「……どうなったら、戦闘機みたいのが、軽量化したら宇宙服になるんだ?しかもこんなので、飛べるのかよ。とても宇宙まで行けるとは思えん。しかもヘルメットの上にあるブレードアンテナはなんだ!」

「それはわしの趣味じゃ」

「……じゃあ、なんで魔法のホウキが背中じゃなくて、肩についているんだ?」

「それもわしの趣味じゃ」

「……無理!!絶対無理!!他なんかないのか!!もつと安全そうなの!!」

「なんじゃ、お主、早く着きたいと言ったではないか?これだと多分30〜40分で日本に着くぞい」

「……もうこれでいいです」

横島はヘルメットの中で涙を流し了承する。

「横島さん、かつこいいい!」

雫はそんな横島を目をキラキラさせて見ていた。

「横島さん・頑張つて・下さい・失敗しても・記憶喪失に・なるぐらいです」

励ましているのか脅しているのかイマイチわからないような不吉な事を言うマリア。

「うろうう、じゃあ、じーさんやってくれ」

「音声ガイドが入っておる。音声入力で操作可能じゃ……ふむ、小僧。達者でな。いつでもこのカオスを頼れ」

「ああ、じーさんありがとな。マリアもありがとう。雫ちゃんをよろしく頼む」

カオスとマリア、雫に黒沢さんが見守る中。発射の掛け声と共に大気圏突破型OO(ダブルオー)カオスライザーX2を着こんだ横島は凄まじいスピードで一直線に上空へとぶっ飛び、横島の絶叫と共に空のかなたへと消えて行った。

一方、

リーナは学校に行ったのだが、一昨日勝負で負けた相手であるクラスメイトの深雪とは顔を合わせにくかった。しかも、自分がUSNA軍スターズのアンジー・シリウスであることもバレたのだ。

しかし、深雪はリーナに普段と同じように挨拶をかわした……のだが。

「あらリーナ、おはよう。もう学校に来て大丈夫なの?どこか体調

でも悪かったの？何処か怪我でも？」

深雪は一見普通の挨拶の様だが、自分で倒した相手に対し皮肉一杯である。

「いえ、ちよつとした用事があったので、休んでいただけよ深雪」

リーナは引きつった笑顔で、こう言い返すのが手いっぱいだった。

深雪はスツとリーナの耳元まで口を寄せ

「次に、お兄様に無礼を働くようであれば容赦は致しません」

顔は笑顔だが、寒気がするような低い声色で脅していた。

「くっ……」

(このブラコン冷血女！)

リーナは言い返すことも出来ない。

司波兄妹には一昨日、完膚なきまでにやられたのだから。

そして、リーナの学校生活は始まるのだが……

(そう言えば、ミアがこの学校に来るって言っていたわね。挨拶に行つた方がいいかしら?)

ミアこと、ミカエラ・ホンゴウは、リーナと同じくUSNAの諜報員なのだが、スターズではなく優秀な魔法研究員でその経歴を活かし、今は外資系会社のエンジニアリングとして日本に潜入していたのだ。

今日は、その外資系会社から第一高校へ、魔法関連の測定器を納入にエンジニアリングスタッフとして同行。特に任務とは関係は無い仕事なのだが、会社の命令で来ることになっている。

一方、横島と連絡を終えた美月は横島の警告をみんなに伝えるべく、皆が集まっているだろう食堂に戻ろうとした時の事である。美月は異様な靈気、良くない靈気を学校近隣に現れた事を感じたのだ。美月は足早に、皆が居るだろう食堂に戻るがそこには、何時ものメンバーは居なかった。

深雪、ほのかは生徒会室で食事をしている事が多いため元々いない。達也もそちらに行っている事が多い。

レオは今、入院中でいないが、エリカと幹比古は食堂に居るはずなのだが……

エリカと幹比古は、達也から連絡があり、急いでCAD事務室の預かり所に向かい、CADの返却をしてもらいに行っていた。十文字克人も同様の用件でここに駆けつけていた。

CADは通常の生徒は登校時にここに預け、下校時に返却されるのだ。授業内容によってはCADはその授業の間返却される。よほどのことが無い限り、構内でCADを携帯出来ない様になっているのだ。達也からの連絡とは吸血鬼（パラサイト）が校内に侵入したとの事だったのだ。

達也は取り逃がした吸血鬼に発信機となる魔法式を打ち込み。それを元にこの数日吸血鬼を探していた。

さらに、吸血鬼が魔法師を狙っている事から、学校にも来る可能性を考慮して、学校には無断で、校内警備、防衛を行っている術式に発信機に反応するように細工を施していたのだ。

そして、今、その発信機の反応が校内で現れたのだ。この事は真由美から十文字克人と達也に、達也から、深雪、エリカ、幹比古に伝わる。

そして、CADの携行が許されていないエリカ、幹比古、十文字は急いでCADを取りに行ったのだ。

その頃、リーナは実験棟の入口まで行き、機材を運ぶスタッフの後ろに静々について行くミアに声を掛け、簡単な挨拶をしていた。

「ミア、学校で会うのもなんだか変な感じですね」

「そうですね。少佐」

「ここではリーナで」

「あつ、すみませんリーナ」

リーナは突如と戦闘の気配を感じ身構える。そこには猛スピードで此方に刀を構え突進してくるエリカが眼前にせまる。体術でさばこうとしたのだが、その鋭い剣撃の突きはそのままミアの胸元に深く

突き刺さったのだ。

「エリカ何を!!」

「ふん、白々しい」

エリカはミアに突き刺さった刀を抜き去り、今度はリーナに突きつける。ミアは声も出せずそのまま後ろに倒れる。

真由美が校内の監視カメラと発信機の反応から誰からなのかを確認し、幹比古が精霊魔法を使い、吸血鬼だと最終判断を下す。

その判断を行ったと同時にエリカは飛び出しミアを襲撃したのだ。

エリカはそのミアと話していたリーナを吸血鬼の一味と判断し、今こうして対峙している。

そこに深雪が駆けつけ

「エリカー！リーナは吸血鬼と関係ないわ!!」

エリカにそう叫ぶ。

その時である。致命傷を負ったはずのミアが倒れたままの格好でスツと立った状態に戻り、胸元の深い傷が見る見るうちに、ふさがって行くのだ。

「ミ…ミア？」

「リーナ、そいつは吸血鬼だ」

達也もその場に駆けつけ、リーナにそう言った。

その後には十文字克人が続く。

校内放送では、真由美の声で、実験棟に近づかない様にと警告の放送が流れている。

リーナはミアに振り向きながら、後ろに飛び離れ、

「ミア、なんで」

悲しみと驚きを無い混ぜたような表情をする。

そのミアの瞳は金色に輝き、手を前に突き出そうとした時。

ミアの全身は凍結し氷漬けになった。

深雪が凍結魔法を放ったのだ。

そこに真由美が遅れて現場に到着する。

「みんな、怪我はない？」

全員が戦闘態勢を解く。

「じゃあこの吸血鬼は私達が詳しく調査しますね。達也くんいいですね」

真由美は早速そんな事を言い出す。

「ちよつとまちなさいよーこれは私が最初に致命傷を与えたのよ！私たちが引き取るわ」

それにエリカがかみつく。この二人のいがみ合いが始まるのだった。

達也はこの時ばかりは幹比古に先日は悪い事をしたと心の中で謝るのだった。

その間リーナは小声で、シルヴィアに通信していた。

「ミアが吸血鬼だった。今、達也達に囲まれてます。此方に戦力を回してください。少々荒い脱出劇になりますが……」

この場からの脱出の算段をしていた。氷漬けにされたミアの回収も含めて。

幹比古はその間、ミアの所属していた会社が乗り付けたトレーラーを認識障害魔法で姿を消し、中のスタッフを全員無傷で無力化させ、実験棟周囲に結界を張っていた。

派手な裏で、ミアの仲間の可能性があるスタッフの確保と、生徒達がこれ以上近づかないようにするための結界を張っていたのだ。地味にいい働きをする幹比古がそこに居た。

美月は実験棟に急いでいた。校内放送の先に異様な靈気が膨れ上がるのを感じ、現場に皆がいる事も靈気で感じていたからだ。

そして、丁度、スタッフたちを無力化させた幹比古と出会う。

「柴田さん、なんでこんなところに……今、皆が吸血鬼を捕えた所だよ。司波さんが無効化したみたいだね。吸血鬼の所有権をめぐって、また、あの二人が言い争っているから、近づかない方がいいよ」

「幹比古くん！まだ！あの吸血鬼から異様な靈気がどんどん膨れ上

がっているの!!」

美月は不安そうな顔を幹比古に向け一生懸命に訴える。

「え?……そう言えば、あの氷漬けの吸血鬼から霊気が見えるような……」

幹比古は目を凝らし、霊気を感じ、再び、札を放ち精密に調べようとする。

しかし、調べるまでもなく幹比古の目をして、霊気が明らかに膨れ上がるのが見て取れたのだ。

「皆!…まだだ!!」

幹比古は実験棟のエントランスに居る皆に向かって叫ぶ!!

氷漬けのミアから異様な霊気が漏れる。

そしてミアの額から瞼が現れ黄金の目が開かれ、同時に凍結した体から、氷の礫が多数放たれたのだ。

全員、幹比古の声で防御態勢がとることが出来、魔法による物理障壁が間に合う。

ミアは俯いているが、額の瞳だけがギョロリと動き、周囲に居る達也達を見渡していた。

「なっ!!」

「なんだ!!」

皆それぞれ、驚きと恐怖の声を上げる。

ミアの異変はそれだけではなかった。

美月と幹比古だけには、ミアの後ろ上空に3mは有ろうかという人の上半身をかたどった様なドス黒い影が見えていた。

143話 横島、実習棟での攻防戦!!

ミアの額に大きな金色の目が開き、ミア本体はぐったりしているが、その目が本体であるかのようにミアの体は動く。

そして、幹比古と美月だけがミアの後方中空に見せる3mの人の上半身をかたどったドス黒い影が見えたいた。

深雪と真由美はすかさず、氷結系の魔法を、エリカも斬撃を加えるが、ミアは体中に穴が開こうが、腕が千切れようが、再生しだす。

「鬼化……悪魔落ち!!やばい、やばいよ」

幹比古はミアの異変をみて、冷や汗が出る。

幹比古は吸血鬼事件からパラサイトに関する資料を吉田家の古文書や研究書を引っ張りだし、色々調べていた。そして、特に古文書に出てくる。鬼退治の伝承は、人が鬼になると言った物語が多かったのだ。海外でも、パラサイトが力をつけると、悪魔落ちと言われる人が悪魔になる伝承や実際にそう言った事例も出ていたのだ。

その間、黒い影は周りの人間に太い腕のような影を3本伸ばし、皆に触れようとしていたが、周りの達也達は一向に気が付いていない。

「幹比古くん!!みんな見えてない!!」

美月は叫ぶ。

「みんな!!精神系防御魔法と無属性魔法が防御可能な魔法を!!」

幹比古は叫びながら皆の元に駆け付け、とっさに札を投げ防御結界を皆に付与させた!

その声に対応できたのは、十文字克人のみ、多重構造の防御魔法の使い手など数が少ないうえ、CADの操作も複雑になる。

幹比古の防御結界が間に合い、何とか黒い影の腕を防ぐ!

「どういうことだ幹比古!!」

「その吸血鬼の後ろに、巨大な影が攻撃している!!」

「何も無いわ!!」

「どいこ!!」

「いったん下がって!!」

そう叫ぶ幹比古だが……

ミアが攻撃魔法を絶え間なく広範囲にばらまき。

黒い影は腕を伸ばし皆に迫る。

幹比古の結界も黒い影の数度の攻撃で破壊される。

その間、真由美と深雪、リーナは多重構造の防御魔法を展開する。

しかし、そこでようやくわかったのか、その防御魔法に見えない何か干渉し、衝撃を与え破壊されて行くのを感じるのだ。

達也はその間、ミアが放つ魔法を片っ端から分解していつていたのだが、見えない何かの衝撃と脅威で、真由美、深雪、リーナ、十文字は防御で手いっぱいになっていた。防御魔法が展開出来ないエリカは真由美の後ろでその状況を歯ぎしりしながら見る事しかできない。

幹比古は、黒い影に対し、古式魔法雷童子：中空から雷撃を黒い影に放つ。黒い影はそれを嫌がり腕を伸ばしそれを防御していた。どうやら効果的な術の様だ。

古式魔法に分類されている魔法の中には今は忘れられているが、元々対妖魔用の陰陽術だったものもある。

幹比古は吉田家の文献から雷童子が鬼などに使われていたのではないかと推測していたのだ。

吸血鬼、黒い影との戦いは硬直常態が続いていた。

「達也、強いんですよ、何とかしなさいよ!!」

リーナは達也に叫ぶ。

「USNAが誇る魔法師様は何かないのか!!」

達也はリーナに言い返す。

「吉田!!その黒い影はどんな感じなんだ!!」

十文字克人は幹比古に叫ぶ。

「3mの人の上半身のような影です。それが腕を3本伸ばし、先輩たちを攻撃しているんです!!多分それに触れると、レオみたいに、精気と靈気を吸い取られ最悪死に至ります!!勘ですが!!」

幹比古は攻撃をしながらも説明をする。

「今までの吸血鬼とは全然違うわね!!」

真由美はそう叫ぶ。

「多分、人を襲って、成長したんですよ!!」

幹比古が返答する。

達也は硬直常態から脱するため、意を決して本体と思われるミアに分解魔法を放ったのだが、効果が現れない。黒い影がミアを包み込み、阻止したのだ。

見えない黒い影は、ミアを包み込むとミアからの攻撃が無くなった。

達也は警戒しつつも、何が起きているのか把握しようとしたが……今度は、黒い影本体から青い炎が放たれる。

達也達からは突然何も無い空間から青い炎が現れたとしか見えな
い。

「くっ、防御魔法が追いつかない！」

真由美は叫ぶ。

青い炎は防御魔法を容赦なく破壊していったのだ。破壊されると同時に、再度防御魔法を展開しなければならない。それも多重構造の……十文字家のフアランクスならそれらにもまだ対応できようが……

そして、黒い腕がその防御魔法をが破壊された隙について伸びてくる。

幹比古はその様子が見れるため、すかさず、防御結界を張る。

幹比古が防御に回ると攻撃の手はなく、防戦一方に追いやられたのだ。

そして、そんな中、黒い影は、向きを変え真由美と、エリカの方にゆつくりと近づく。

防御手段を持たないエリカに狙いを定めたのだ。

真由美の後ろで真由美の防御魔法で難を逃れていたが、現在、その防御魔法も差し込まれている状況だ。一気に、真由美とエリカに攻撃を集中させられると危険だが、今は皆防御で手いっぱいになっておりその場から一步も動けない常態だ。

そして、黒い影は真由美の防御魔法を青い炎で崩し、さらに青い炎と共にエリカに腕を3本とも伸ばしたのだ。

幹比古は危険を察知して叫ぶ。

「エリカ!!」

エリカの前に立ちはだかる影が飛び込んできた!!

そしてその影は青い炎をその身に浴びる。

そこに立っていたのは、美月だった。

黒い影を見据え足は震えてはいるが、エリカを背に庇う様に両手を広げ、仁王立ちをしていたのだ。青い炎を浴びても傷一つなかった。

「み……美月」

エリカは自分の友人の後ろ姿を呆然と見上げる。

「エリカちゃん大丈夫!!」

「美月…あ、あんたこそ大丈夫?」

幹比古以外の人間には青い炎を防いだとしか見えなかったが、幹比古には見えていた。

青い炎の他、黒い影の腕を3本とも跳ね返し、しかも腕の一部が溶けていたのだ。

美月は横島のアドバイス通り、全身に靈気を巡らせることにより、身体能力が上がり、体中の靈的防御能力を活性化させ黒い影の攻撃を阻止したのだ。それだけでは、この結果は生まれないだろう。友のピンチに靈力が一時的に爆発的に上昇したのだ。

美月は横島の言いつけ通り、コツコツと毎日靈視と靈気の訓練を行っていたその努力の賜物なのだろう。

「先輩たち、今の内に、逃げて!!」

それに、怒ったのだろう。黒い影は美月に集中的に攻撃しだした。しかし、美月の靈力上昇も一時的なもの、慣れない靈気コントロールで、体力や気力、靈気が一気に奪われる。

遂に、美月は防御ごと黒い影の腕に吹っ飛ばされたのだ。

「美月!!」

「柴田さん!!」

離脱に成功したエリカは加速魔法を使って、美月を空中で抱き留め二人して、地面に落ち転がる。

エリカのお陰で衝撃は大分吸収された様で、エリカは倒れながらも

グツトのサインを皆に送る。

美月の決死の防御のお陰でエリカは離脱に成功し、他のみんなは四散していた防御態勢を十文字克人を正面にした密集体勢に整えることが出来たのだ。

「何とかしたいわね。柴田さんが体を張って作ってくれたこのチャンスを」

「そうだな、報わねばな」

「お兄様!!」

「ああ」

「……」

「攻撃手段は僕だけか!!柴田さんの敵を僕が打つ!!」

真由美と克人、深雪は美月の勇気に触発される。達也も同様の様だ。リーナは沈黙する。

幹比古は燃えていた。

そして、ミアと黒い影は迫る。

しかし

「ほげーーーーー!!!がふん!!!」

ミア、黒い影と皆の間に何かが飛び込んできた。

物凄い轟音と情けない叫び声共に、実習棟の天井に穴が開き、床に何かがめり込んだのだ。

天井には見事な両手両足を広げたような人型の穴ができ、床にも同じものが空いていた。

全員が何が何だかわからないがその穴に注目する。勿論ミアと黒い影もだ。

しばしの沈黙がその場を支配する。

そして、穴から人の手がペタッと出てきて、

「ほ、ほ、ほ、あ————死ぬかと思った」

144話 横島、とりあえず帰ってきました!!

「カオスのじーさん。これをどうやって発射させるんだ?」

「フハハハハッ、焦らず聞くが良い!!OO(ダブルオー)カオスライザーX2はマリア専用じゃが、急遽お主のためにAIの登録をお主をマスターとして変更しておいた!!AIのガイダンスに従っておれば万事通常はOKじゃ!重要な場面ではAIが最適な行動パターンを2択提示し、どちらかを選ぶだけで良いようになっておる。高性能なAIじゃ、わからん事があればAIに聞け。では行くがよい!」

横島は耳元からカオス声が聞こえ、説明を受ける。

OO(ダブルオー)カオスライザーX2には高性能なカオス特製AIが積まれており、常にサポートしてくれるらしいのだ。

『マスター横島、発射いたしますか?』

AIの無機質な女性の声が横島の耳元から聞こえてきた。

「おお?ヘルメットの中におねーちゃんの声が聞こえる!これがAIか……発射OKだ」

『了解、OO(ダブルオー)カオスライザーX2発射シークエンスに入ります……3、0発射』

「おい!!2と1はあ!!ごわあ……!!」

横島は物凄い重力をその身に受け、OO(ダブルオー)カオスライザーX2は一直線に上空に飛び、空の彼方へと消え去った。

「ごおおおおおおお……!!」

『ごおおおおおおお……!!とは何ですか?質問の意味が分かりかねます』

「ばあああほおおおおかあああああ!!(アホか……!!)」

横島は重力の壁や大気の壁に悲鳴を上げている中、AIが訳が分からない事を言ってきた。

カオスが作ったAIだけあって、高性能なのか、ポンコツなのかよくわからない性能だ。

『当機はアホではありません。非常に優秀な機体となっております。』

訂正を要求します』

「ぶみわあつががでえええるじやっただだだだねか!!（意味わかってるじゃねーか）」

『人語を話していただく必要があります。いくら優秀な当機でもアミーバやゾウムシの言葉は理解できません』

「おぼおぼおえでががれ!!（覚えてやがれ!!）」

このAIかなり優秀のようだが、どうやら、マリアから主を横島に変更されたことが相当気に食わない様だ。完全に横島を毛嫌いし舐め切っている。

『まもなく、大気圏を突破し宇宙空間に入ります』

「ふう、まじ一瞬で宇宙まで来た。……流星はカオスのじーさんだ！ AIはポンコツだがな……」

『質問の意味が分かりかねます。当機は非常に優秀な機体となっております。ポンコツと言う言葉は非常に不愉快です。訂正を要求します。ポンコツマスター横島』

「なにこのAI、俺の事バカにしてるの?……まあ、あのじーさんが作ったメカだしな、仕方がないか」

『バカにはしておりません。アホだと認定しております』

「……こいつ……ちよつと声が美人そうだからって!!」

『バカな事を言っている場合ではありません。地球軌道上の軍事衛星からミサイル攻撃が此方に迫ってきております。分析の結果、最適な行動パターンは①無様に逃げるか②スマートに逃げるかです』

「どっちもいっしょじゃねーか!!」

『無様に逃げるをお勧めします。プクツ、マスターにお似合いです』

「こいつわあ!!絶対、後でぶっ壊してやる!!」

『後程、マスター横島の大气圏突破時の変顔と変態的な叫び声を世界中に動画配信いたします。変態に襲われ中ナウと』

「やめっ、やめてく!!世間的に終わってしまうく!!」

『マスターがアホな事を言っている間に、ミサイルは5秒後に当機に着弾します。……マスターと心中するのはごめん被りたいため、本気

でスマートに逃げます……魔法ハウキブスター臨界……魔法式トラ○ザム発動』

AIが術式を解放すると同時に、OO(ダブルオー)カオスライザーX2は赤い光を纏って、迫るミサイル群をぶちぎって、急加速する。『このまま、大気圏に再突入します。マスターは衝撃や摩擦熱に対し自己防衛をしてください。当機はマスターの命を保証するものではありません』

「なんでやねーん!! (やねーん、やねーん)」

ズオオオーン

『大気圏再突入成功……マスター横島、大丈夫でしょうか?』

「ふう、さすがはボケてないカオスが作ったものだ。思ったより平気だった」

横島は重力波と摩擦熱を感じたが、体には影響がなかった。元々が丈夫だからだろう。

『チツ……マスターがゴキブリ並みの生命力を持っている事を理解いたしました』

「……このポンコツ!!絶対分解してやる!!」

『マスターゴキ……ゴキマスター横島、日本防衛システム、成層圏プラント及び地上からのミサイル攻撃を確認いたしました。当機本体は防衛及び攻撃手段はありません。自力で何とかしてください』

「言い直しても意味いっしょだぞこんちくしょう!!……さっきの加速魔法は?トラ○ザムとかいうパチモン臭い名前の奴をとつと発動すればいいだろ?」

『先ほどの使用したばかりな上、大気圏突破の影響で現在冷却行動をとっているため、現在使用できません』

「使えないなら、どこが優秀なんだ?」

『10秒後当機に着弾……緊急保護モードというものが当機に搭載されております。このモードで対応可能です。その使用を許可願います』

意味がないはずだが、何故か空中で移動し、ちよつと減速していた。それよりも、封印を解いて本来の力を発揮すれば済むはずなのだが……

そして、実験棟にそのまま突っ込む。

「ほげー……！！がふん！！」

本来ならあのスピードで横島の質量の落下物が落ちれば、かなりの衝撃を受け実験棟自体が崩壊、または大きなクレーターが出来てもおかしくないのだが、なぜか、横島の形をした穴が出来るだけで、次々と天井を貫通し、エントランスの床にめり込んだ。……横島だからなせる業なのだろうか？

しかもドンピシャで、悪霊に取りつかれたミアと、対峙していた達也達の間で落下したのだ。

床にできた横島型の穴から、ゆっくりと這い上がり奴が現れる。

「ゲホッ、ゲホッ……あー死ぬかと思つた」

服はボロボロで上着とジャケットは途中までで破け、へそ丸出し。ジーパンはボロボロだったが、辛うじて原型をとどめていた……いや、後ろ姿はケツ丸出しだった。

そもそも、本人は無傷だ。まあ、霊力で全身を守っていたのだから……それにしてもこれで済むのも、奴が『横島』だからなのだろう。

……

突如降つたとんでもない展開に、まだ、誰もついて行けずに、一言もしゃべる事も動くこともできない。

「アレ？みんな？先輩たちも集まって、おしくらまんじゅうつか？……おお！リーナ？なんでこんなところに？」

横島はかたまつて戦闘態勢を取る達也、幹比古、深雪、真由美、十文字克人とリーナ、そして、遠方で座り込んでいるエリカと美月を見て、こんなことを何もなかったように言った。

「二「横島（くん）（さん）!!」三」

一斉に奴の名前を呼ぶ。

「タ……タダオ？」

リーナだけは反応が違い、横島がここにいることに半信半疑のようだ。

「うん？……三つ目の結構胸がボインで大人しそうな素敵なおねーさん!!ボク横島!!学校の喫茶店でパフェでもどうですか!!」

横島は後ろを振り返って、こちらを唾然と見ているミアのところまで一瞬で移動し、スチャツと両手を握り、いきなり当然の如くナンパをしだした。

面々は何時もの横島の行動に肩透かしを食らって、ガクツとなる。

ミアと後ろの黒い影はいきなりの出来事にかなりとまどつている様だ。

「横島のアホ——!!」

「横島——!!あんたって奴は!!」

幹比古の叫びと遠くからエリカの怒声が聞こえてくる。

「横島！そいつが吸血鬼だ！」

達也がそんな緊張感の欠片も無い横島に警戒を促す。

横島はいつの間にかミアの額に開かれた第3の目の上から浄化と書かれた札を張っていたのだ。

そして、その後ろの黒い影を見据えると。天井に術式方陣が形成され紫の紐が方陣から多数飛び出し、黒い影に絡みつき拘束する。

横島はミアの体から悪霊を追い出すために浄化札を張り、黒い影に対し、氷室術式ハの八式束縛術式を無詠唱で天井から発動させ動けなくしたのだ。

黒い影が見えない達也達には、紫の紐が何もない空間に絡みついてるようにはしか見えない。

ミアは浄化札の影響でぐったりし、横島にしなだれかかる。

ハの八式束縛術式は元々対魔術式だけあって、悪霊などに絶大な効果が表示れる。

美月と幹比古の目には、紫の紐で拘束された黒い影は苦しみながら

徐々にしぼんでいくように見える。拘束している紫の紐は黒い影の悪霊から靈気を奪い弱体化させているのだ。

そして、ミアの体と黒い影が完全に分離したところで横島はミアを左腕で抱き留めながら、右手で悪霊退散と書かれた吸引札を取り出す。

黒い影に向かい吸引札を掲げ

「悪霊退散、吸引」

と唱えると、空間ごと黒い影が勢いよく吸引札に吸い込まれていった。

紫の紐と、束縛術式の方陣はそれと同時に消える。

達也達はその様子を声も出さず、啞然と見ることにできない。多分何が起こっていたのか、横島が何をしたのかが理解できないのだ。

悪霊の状況や横島が行った術儀が見て取れた二人の反応は……

幹比古はその術儀の見事さ、見たことない術に興奮しつつも目を凝らしてみていた。

美月は、その光景の美しさにうっとりとして遠くから見つめていた。

横島が来てからほんのわずかな時間で、悪霊を倒してしまう。

横島にとって、いや、100年前この地で活躍していたゴーストスイーパーにとって、この程度の悪霊悪魔退治は日常茶飯事であった。特に難しい物でもない代物なのだ。

但し、こんなに短時間に解決できるゴーストスイーパーはごく一部だけだが……

「はー、終わった終わった。ここまでするのに酷い目にあつた」

横島は軽い口調でそう言いながら、ミアをその場に寝かし、胸元から取り出した札を、頭に3か所、体に5か所張り、何やら詠唱をしていた。

悪霊退散した後も、ミアの体は半悪魔化したままであったため、元に戻す修復術式とミアが精神崩壊しないように、強制的に睡眠状態を維持される術式を施したのだ。

横島はミアに術式を施した後、固まっている皆を不思議そうに見

る。

「あれ？みんな呆然として、どったの？」

「タダオー……会いたかった……」

最初に沈黙を破ったのはリーナ。

涙ぐみながら横島の胸に飛び込む。

「リ……リーナ？」

「横島くん、これはどういう事かしら？」

次にリーナの行動を見た真由美はニコニコ笑顔でこう言って横島に近づくが、何故か額に影が出来たように見え、雰囲気が怖い。

「そうよ、これはどういう事、横島！この女とどういう関係？」

エリカはストレートに不機嫌そうにリーナを指さし言う。

皆は横島がどうやってここに来たのか？今、何が起きたのか？ミアと黒い影はどうなったのか？本当にこれで戦いが終わったのか？という疑問と、目の前で起きた展開について行けず啞然とするしかできなかったのだ。

しかし、リーナの行動によって、頭の中で処理しきれない先ほどの戦いから、現実を理解が可能な、リーナと横島の関係性についての疑問に意識を持って行ける面々は漸く、口を開くことができたのだ。

おかげで場の雰囲気は大分軽くなる。

「横島、いつリーナと知り合った？まあいい……」

達也はうんざりした顔で横島に尋ねる。

「まあ」

深雪は手を口に当て驚いているようだ。

「横島ばかりずるくない？」

幹比古は口を尖らす。

美月は、たははと苦笑い。

十文字は黙って目を瞑る。

「やはり、生きていたか」

145話 横島、皆を説得したい!!

国立魔法大学付属第一高校、特別棟の会議室でとある話し合いの場が急遽設けられた。

10人で使用するには少々広めの会議室に口型に設置された会議用テーブルにそれぞれの派閥が座っている。

会議室壇上正面から右側に十師族側の七草真由美と十文字克人、その対面に警察組織側の不機嫌そうな千葉エリカと吉田幹比古。壇上対面に、中立を保っている司波達也と司波深雪兄妹と友人枠の柴田美月。壇上前に横島と、そして、唯一USNA側のリーナが何故か横島の腕を取り、ぴったりくっついて座っている。

そして、会議室後方に持ち込まれた簡易ベットでミアが寝かされていた。

「横島くん、来てくれて本当ありがとう。私たちではあの吸血鬼は倒せなかったかもしれないわ」

真由美は横島に向き直り、頭を下げる。

「いや、そう何度もお礼を言われると、こっちが困っちゃいますよ」
久々に第一高校の制服に着替えた横島は照れ笑いをしながらそう言う。

先ほどの戦闘の後、真由美からは散々お礼を言われていたのだ。

あの後、現場の後始末や引継ぎ、学校側への報告などを真由美が一手に引き受けていた。

十文字克人と達也と深雪、幹比古はその手伝いを行い、エリカと美月は軽症を負っていたため、横島が治療を施す。

学校はこの事件の影響で午後からは休校となる。

リーナといえば、本来スターズに連絡や報告をしないとイケないのだが、横島にぴったりくっついたまままだ。

ミアについては、横島が病院や保健室に連れて行く事を拒否し、自分が目の届く場所に寝かすようお願いする。

「横島くんにはいろいろと聞きたいことがあるのだけど……その前に、アンジェリーナさんはなぜ横島くんにくっ付いたままなのかしら

？」

「別にあなたに迷惑かけていないわ」

リーナは真由美を一瞥してパイッと視線を逸らす。

「横島……これどういう事よ」

エリカは明らかに不機嫌だ。

「どういう事って？たははははは、リーナ放して、流石に話しにくい」

「嫌よー」

リーナは駄々っ子の様に拒否する。

「たははは、たははは、俺がUSNAで記憶喪失の時にリーナに世話になっただけ……」

仕方なく横島はそのまま話し出す。

「横島、お前、そもそもドクター・カオスのところで世話になってたのではないのか？」

達也はその話疑問を持ち質問をする。横島がUSNAでカオスに世話になっていただけ聞いていたからだ。

「そうなんだけど、記憶喪失時の身分がカオスのじーさんの助手という扱いで、USNAでの滞在中の俺の護衛としてついていたのがリーナなんだ」

「経緯はわかったわ……なぜ、そんなことになってるのかしら横島くん」

「あの、真由美さん、なんか怒ってます？」

「怒ってません！」

真由美は両頬を膨らます。

「話が進まん」

十文字は横島をジロリと見据える。

「リーナ、そんなにくっ付いたら、あれが当たってるし、離れてくれないと……」

横島はそう言っ、リーナの腕を外しにかかるのだが……

「嫌ー」

リーナはさらに力を入れて横島の腕を離さない。

USNA時から何故か横島と居る時は子供っぽくなるのだ。

まあ、この場で味方になってくれるのは、横島しかいないため致し方がないのかもしれないが。

達也と深雪はいつも大人びているリーナがこのような子供っぽい行動や言動をしている事に、面食らっていた。

「リーナ、あんたいい加減に離れなさいよ！話が進まないのよ。横島もなんとかしなさいよ！」

エリカはイライラしながら、リーナと横島に強く言う。

「リーナ」

横島は少し語気を強める。

「……分かったわ」

しぶしぶリーナは横島の腕を解放するが、椅子はピタツとくっ付いたままだ。

「なぜ、学校であんな事になった？」

横島は先ほどの事件の経緯について聞いた。

「それよりも横島、あの吸血鬼女にとどめを刺すのを止めるの？あの吸血鬼のせいで被害者も多数……レオもやられた」

エリカは横島を睨んでいた。

先ほどの戦いが終わった後、エリカはミアにとどめを刺すためにと刀を突きつけようとしたのだが、横島に止められたのだ。

「エリカ、あの女性（ひと）は被害者だ。たまたま悪霊に取り憑かれてしまっただけだ。悪霊を完全に分離除去したし、もう、暴れることも人を襲う事もない。悪いのは取り憑いた悪霊だ」

「だからって！」

「エリカ、まずは、お互い情報出すことが先決だ。反論するのはそれからだ」

達也はそう言つてエリカを制す。

「フン、達也君はいつも冷静なのね」

エリカの不機嫌度はさらに増す。

そして、主に達也と真由美が中心に、これまで日本で起きた吸血鬼事件や出来事を開示できる範囲で話します。

因みに横島は、情報を交換する前に、この部屋から中の話が聞こえないように結界を張っていることを伝えていた。

「あー、既に1月初旬には、日本では被害者が多数出てたというわけですか、という事は12月の時点で、悪霊…みんなが言う吸血鬼は日本に来ていたのか…：下手をすると11月かも…：」

横島は達也と真由美の話を聞いてそう言った。

リーナは横島が話した言葉にピクッと反応する。

「横島くん、日本に来たとはどういう事？」

「…：タダオ、それは…」

まだ、USNAでは開示していない情報を横島が話そうとしていたため、止めたいのだが、リーナにはUSNA軍の人間でもない横島を止める事は出来ない。

「ああ、そうですね。元々その吸血鬼、USNAに居たんですよ。というか発生していたといった方がいいのかな。実は俺もUSNAでその吸血鬼を追っていたんですが…：とんだ見間違いだったのか、すでに俺が探し出した頃には、あいつ等のほとんどが日本に侵入していたという事だったようだ。どうりでダラスであれだけ探しても見つからないわけだ」

横島は考え込みながら話を進める。

「横島が関わったUSNAで解決したいって言った事件って、吸血鬼事件のことだったんだ。USNAでも同じ事があったんだ」

幹比古は横島と以前、映像通信で話し合った事を思い出していた。

「同じことはあった。1人は確保できたけど…：」

リーナはしぶしぶ答える。

「リーナ…：先ほどのミアと呼んでいた女性はリーナと同じUSNA軍の人間じゃないのか？」

達也はリーナに質問をする。

「…：言えないわ」

「多分そうだ。俺が探していた不明者容疑者リストには載っていないかったが、名前と顔は見たことがある」

「タダオ…：機密なの」

「リーナ、もうそんな事を言っている事態じゃないんだ。これ以上ほっておくと、とんでもないことになる。俺はUSNA軍ではないし、俺の口からだったら別にリーナにお咎めはないだろう？」

そして、横島は語りだした。

11月初旬に行ったUSNAで行ったとある実験により、悪霊がこの世界に侵入した事、その時から軍や実験関係者が行方不明になり、ダラスで人を襲っていた事を……そして、本名ミカエラ・ホンゴウはその実験関係者であった事、盲点だったのはミアが行方不明者とならずに、普通に生活していたことだという。

悪霊がこの世界に侵入したとう事実が判明したのは、カオスが12月末に行った実証実験でそのことが証明できたためだったが、ネビロスの事やダンタリオンについては説明をしていない。この世界の成り立ちや常識を丸ごとひっくり返すような事実だからだ。

「それで、リーナ達は秘密裏に吸血鬼を処分するために日本に派遣されたのね」

深雪はリーナの派遣は、『灼熱のハロウィン』を引き起こした達也を探すことだと、四葉真夜に聞かされていたが、このことを聞いて、そうではなかったとホツとする。

実際には真夜が言う通り、達也を探すことだったが、吸血鬼が日本に侵入したことが判明し、こちらが優先されただけの話なのだ。それを深雪や達也が知る由もない。

「USNAもとんでもないことを仕出かしてくれたわね。完全に国際問題に発展するわ」

真由美は事の大きさが国家レベルであることに、そしてUSNAに憤りを感じる。

「……だから、秘密裏に処理しようとしたのだろ」

十文字克人は淡々と受け止める。

「情報を提供してくれたらこんなに被害が出なかったかもしれないわ」

真由美は苛立ちを隠さない。七草家の家人や関係者が20人近くやられたからだ。

「……レオもね」

エリカはそう言ってリーナを睨み付ける。

「リーナ……少なくともその実験直後の行方不明者、いや、それだけではないのか、11月からUSNAから来日した人間がすべてが吸血鬼の疑いがあるという事か」

達也はリーナに行方不明者の人数を聞こうとしたが、ミアの例があるため、来日したすべての人間が容疑者になる事に考えがいたる。

「まあ、そう言う事なんだが、事はもつと厄介だ。悪霊の種類にもよるが、増殖する。多分今回のもな」

「……な!!」

「悪霊は、人に憑くがタイプがいろいろある。そのまま精神ごと肉体を乗っ取るタイプ。これは性格が急変したりして、よく伝承などに伝わっているわかりやすいタイプだ。次に精神支配するタイプと目的を刷り込ますタイプだ。性格とかはそのままだが精神支配するタイプは行動が一変することから、周りの人が気が付きやすい。目的を刷り込むタイプは、普段の生活をしつつ、悪霊が目的を果たすための行動をおこすため、一見わからない。多分今回のミアさんは目的を刷り込むタイプなのだろう……しかし、この目的を刷り込むタイプも悪霊が成長すると、その人間の行動や性格自体が悪霊そのものの考え方となり、ほぼ同化してしまう。今のミアさんはそんな状態だったのだろう。すでに肉体が悪魔化する一歩手前まで来ていたからな……」

「横島、お前やけに詳しいな」

十文字克人は横島を見据えそう言う。

「そうだよ、僕もそこまで知らなかったよ、文献やパラサイトの研究誌でもそこまでの事は書かれていないし、実証されていない」

幹比古も克人に続く。

「まあ、専門家なんで……先ほどの話の続きは……人を襲う理由は二通り、一つは靈気を奪うため、もう一つは仲間を増やすため。魔法師ばかり狙っていたのは、靈気・靈力が高いため、効率よく靈気を奪う事ができるからだと想定。……因みに靈気はサイオンの事です。血

液を奪うのは仲間を増やすための適性を見ているのではないかと考えられる。まあ、まだ詳しい事はわからないっすけどね」

主に古式魔法に詳しくない真由美や十文字克人にも分かるように説明をする。

「という事は、横島くん、日本で行方不明になっている人、もしくは襲われて無事だった人は既に悪霊に取りつかれている可能性があるということ?」

真由美は、横島の話聞いて血の気が引く。

「そう言う事、さすがは真由美さん話が早くて助かります」

「だから、一歩間違えれば、みんなも知らず知らずに悪霊に取りつかれていたかもしれない。彼女の様になり、人を襲っていたかもしれない」

エリカはこの事を聞いてハツとなる。もしかすると自分自身がミアと言う女性と同じ末路になる可能性があったことに、そして、先ほどまで横島が被害者だと言ってミアをかばったことに苛立っていたが、この事実複雑な感情が渦巻くような表情になっていた。

「横島、具体的に対処方法はあるのか?」

達也は現実的な話に戻す。

「あるにはあるが……達也はあのミアさんに憑いていた悪霊が見えたか?」

「いや、まったく見えていない。感じることもできなかった」

達也は正直に答える。

「……この話、先輩方も、みんなも降りてくれ、後は俺がやる」

横島は達也の答えを聞き、吸血鬼事件から手を引くよう皆に言う。

「そう言うわけには行かないの、こっちにも事情が」

「私も下りないわよ!」

真由美とエリカが同時にそれに異を唱える。

「……見えないのにどう戦う? 触れもしないのにどう倒す?」

「……………」

真由美もエリカも横島のこの言葉に反論が出来ない。

「……私は倒したわ」

リーナは苦しそうにそう言った。倒した相手は元同僚だからだ。

「リーナ、たぶんそれは倒していない。肉体を倒しても意味がない。本体が適性のある人間に、また憑くだけだ」

「!……私がやったことは……仲間を倒したことは……無意味……だったの?」

リーナは仲間を犠牲にしてまでも、やり遂げたことが全くの無意味であった事を理解したうえで横島に聞き直していた。

「そうだ……」

横島は残酷にもはつきりと言いきるが、項垂れるリーナの頭に優しく手を乗せ撫でる。

「はつきり言つて、今の魔法師では悪霊は倒せない。それどころか犠牲者が増えるばかりだ」

横島は皆に宣言するかのようにつづる。

「私達では、力不足だと言うの……その横島くんに比べれば私なんてそうかもしれないけど」

真由美は最初は語気を強く反論するが、最後は消えるような声になつていった。

「真由美さん、そうは言っていないんです。領分が違うんです。いわば、餅は餅屋にやらせればいいんです。悪霊やこの世のならざる者は、俺みたいな陰陽師や霊能力者にやらせればいいんですよ」

「横島……やはり、貴様は陰陽師だったのか……」

十文字は納得した様に頷いていた。

「陰陽師つてまた時代的な、陰陽師なんて現代に居るわけないじゃない……古式魔法師でしょ」

エリカは横島がふざけているのではないかと言わんばかりな言い方をする。

「氷室は霊能力者又は陰陽師の家系だ。それを今も脈々と受け継いでいる。氷室の術式は悪霊に絶大な力を振るう事が出来る。先ほど俺が術式を展開した術、紫の紐もそれだ」

「吉田家の古式魔法も元々は悪霊退治にも使われる術法が沢山有った

はずなんだ。パラサイトなんてものは滅多に出ない上に、時代は対人対兵器に特化する事が求められ今の形になって……だから、忘れられた術法や術式も多数あるはずなんだ。また本来の意味も分からず今も使っている物もあると僕は思うんだ」

幹比古は古式魔法と陰陽術について、自分なりの見解を話す。

「……確かに横島や幹比古の言う通りだ。現代魔法は古式魔法をベースに作られてはいるが、あくまでも軍事利用としての対人対兵器に特化し発展している……残念ながら、パラサイトや悪霊に対して効果が薄いと言わざるをえない……今のままではな」

達也は横島と幹比古の話聞いて、冷静に判断を下すが……何かを新たに決意するような目をしていた。

「……私はそれでも、国の命令でやらないと行けないの」

リーナは悲壮感を漂わせ俯きながらそう言う。

「だったら俺を雇ったらいいんじゃないか？そうすれば、リーナが危険な目に合わなくてすむし、協力者と言う形よりも、面子がたつだろ？俺がやったほうがスムーズに事が終わるし、俺は悪霊を退治さえすりゃなんだっていいし」

「え？タダオ……いいの？私はUSNA軍の人間よ？」

リーナの顔がパツと明るくなる。

「別にいいんじゃない？でも、情報はちゃんと出してくれよ。USNAのあのおっさん。俺に日本でこんなことが起きている事を一切言わなかったからな」

横島はUSNAでは吸血鬼事件の件でカノープス少佐と連携を取っていたのだが、日本で同じことが起こっていた事を知らされていなかった。

「……ごめんなさい……もうしない……タダオにはそんな事しないわ」

リーナは横島に日本での吸血鬼事件を知ってほしくなかった事を心にしまいながらも、横島には隠し事はしないと改めて誓うと同時に、この申し出に心から感謝をする。

「あれ？なんでリーナがあやまる？」

「ちよつと待つて！横島くん!!」

「待ちなさいよ！横島!!」

真由美とエリカは同時に席を勢いよく立ち横島に待ったをかけた。そして、真由美とエリカは一瞬お互い視線があうが、それぞれそっぽを向く。

「横島くん、他国に雇われるなんてダメよ。USNAはこんな事を仕出かしたんだから、きつと強制送還だわ。だ・か・ら、私達が、七草家が横島くんを雇います」

「かつてに決めないでくれる。横島は、私が!!千葉家で雇うんだから!!」

またしても、真由美とエリカはお互い鋭い視線をかわす。

「タダオは私の為だけに！協力してくるって言っているのだから。貴方たちはお門違いよ！」

そこに、さつきまで落ち込んでいたかのようにシユンとしていたリーナが自信満々にこんな事を言った。

「アンジェリーナさん？先ほどから貴方は何なの？」

真由美はどうやらリーナのその言葉にカチンときた様だ。

「何なのって何よ」

「横島くんの何なのか聞いているの？先ほどから人前でベタベタとくっ付いて、うら……はしたない」

真由美は横島にリーナがくっ付いている姿を恨めしそうにずっと見ていたのだ。

「よく聞きなさい。タダオは私のボーイフレンドよ!!USNAに居た時は、しょっちゅうデートしてたんだから!!遊園地に連れて行ってくれたり、服なんかも一緒に見て回って、プレゼントしてくれたわ!!毎日、食事を共にしたんだから!!」

リーナは真由美とエリカに対し、上から目線でこんな事を言っってしまった。

確かにデートと言われればデートだ。本来の目的は護衛と吸血鬼

探しだったのだが……しかも、半分くらいはマリアが同行していた。「ぐぐ、私だって横島くんとデートぐらいした事あるわ。荷物持ちしにくれたんだから!!」

真由美は対抗してそんな事を言っているが、摩利も一緒に居た上に、アレはただの荷物持ちであって、決してデートとは言わない。

「横島……あんた、私達が心配していたのに、この子とデートをしていたの……フーン、そう、あんなに人を心配させておきながら、デートね」

エリカは言葉こそ普通だが横島に殺意をにじませるような鋭い目つきで睨み付ける。

遂にこの3人は席を立ち上がり、顔を突き合わせ、ギャアギャアと言い争いを始めてしまった。

横島はそんな3人の仲裁を入ろうとするが付け入るスキがない。

「タダオは黙っていて!!」

「横島くん、少し待っていて!」

「横島、後で覚えておきなさいよ!!」

「……達也、僕、横島が少しでも羨ましいと思った事を訂正するよ……これってある意味修羅場だよね」

幹比古はボソッと達也にこんな事を言う。

「ああ、そうだな」

「お兄様……シユラバとは何ですか?」

それに聞き耳を立てていた深雪は達也に質問をする。

「深雪……世の中には知らない方がいい事もある」

「??」

「はは、横島さん大変ですね。でも意外です。七草先輩も横島さんの事好きだったなんて」

言い争っている3人の中の真由美の姿を見て美月は同じ女子として感じるところがあったのだろう。横の幹比古にこんな事を言う。

「そんな事無いと思うよ。ただ、あの人も負けず嫌いっぽいから、この1〜2週間でよくわかったよ。あとエリカの場合は完全に逆恨みだよ！うつぶんがよっぽどたまってたんだね…はあ」

幹比古はこの事件にかかわってから、真由美とエリカの仲裁に何度入った事か…：ため息が出るのも仕方がない事だった。

それにしても幹比古は色恋沙汰に鈍感なようだ。何時まで経っても美月にアピールが出来ないのも致し方のない事なのだろう。

「……………話が進まん」

そんな中、十文字克人は一人真面目な顔で目を瞑り呟いていた。

どうやら、日本に帰っても横島は修羅場は避けられない様だ。

146話 横島、しびしび提案を受け入れる!!

広めの会議室半分は、横島を雇う権利をめぐつて、リーナ、真由美、エリカの言い争いの場……いやある意味修羅場と化していた。

「横島、そいつらはほっとけ、話を進めるぞ」

十文字克人は会議が始まった時と同じで、何時もの威圧感のある雰囲気を保ったままだ。

「す、すみません。……エリカはいつも通りの気がするけど、真由美さんまでなんで？」

横島はこんな事を平然と言う。真由美が言い争いの中に入っている原因は横島にあるのだが、本人はそんな事は欠片も思っていない。「横島、我々でも、対抗手段があるような事を言っていたが、どういうものだ」

達也に悪霊が見えるか見えないかの質問をする前の横島の言葉を指して、十文字克人は質問する。

「見えなきや対抗手段も無に帰す可能性がありますが……：対霊障、対悪霊、対悪魔用の道具があるので、氷室には多数あります。東京だと六道家なんかは持っていると思いますよ。また、古い神社やお寺なんかにその意味も分からずに持っているかもしれないね」

「そんなものが存在するのか……」

達也は驚きつつ感心をする。

「なるほど、それを僕らが持つことによって対抗できるんだね」

「いや、多分難しい。お守り代わりや、防御が関の山だ。悪霊や……：特に悪魔に関しては知識が相当必要だ。悪霊、悪魔の種類やその属性を正確に把握していないと、手痛い反撃を喰らう。一つのミスがそのまま死に直結するんだ」

「……確かに。我々や、特に七草の家人は魔法師としてはレベルの高い人間が反撃も出来ずにやられていたからな。相手をよく知らずに戦うのは無謀という事か……：戦闘の基本なのだが、俺も少々焦って

いたのかもしれない」

十文字克人は横島の言葉に今までの十文字家、七草家の行動に反省している様だ。

「だから、俺に任せてもらえませんか？」

横島は再度皆に言う。

「……………横島さん、もし横島さんが居なかったら、私達はそのまま、何もできずに吸血鬼、いえ悪霊にやられていたということですか……………」
「いや……………六道か、氷室が内務省または宮内庁経由で依頼を受ける可能性が高い。しかし、まだ動いていない事から見るとなにやら、国内部で縄張り争いがあるのかもしれないですね」

「ん……………そうか。六道か……………横島、六道もやはり、陰陽師なのか？」

十文字克人は唸る。その縄張り争いの一角を自分たち十師族がかんでいるからだ。正確には軍閥とエリカたちの警視庁がかんでいる。しかも、六道と十師族含む魔法協会は犬猿の仲で、特に七草家とはいっつ小競り合いが起きてもおかしくない状況なのだ。

「はい、氷室より、ずっと昔から続く陰陽師の家系です。それこそ平安時代から続いているはずです。六道歴代当主は悪霊や悪魔に絶大な力を発揮します。今の当主には会った事は在りませんが、本気を出せば、誰も手が付けられない存在であることは確かです」

「でも、僕は六道は式神使いだと聞いているけど……………あれで悪霊を倒せるんだったら、古式魔法師の式神でも、警察組織が抱えている古式魔法に精通した部署もあるし、それで戦えるんじゃない？」

幹比古は、六道の事を噂程度は知っているようだ。

幹比古が言う古式魔法師が使用している式神は、陰陽術の簡易式神の一種に分類される。現代魔法師からは化成体と呼ばれ、サイオン塊と幻影魔法を組み合わせ、肉体を持っているかのように見せたものだ。勿論戦闘や偵察、尾行にも使われる使い勝手の良いものではない。が、六道家当主が使用している式神はそんなものではない。

「式神……………化成体が対抗手段となりえるのだな」

達也も化成体とは、何度も対峙している。

「確かに、簡易式神でも悪霊に対抗できる強力なものもあるが……………六

道家当主の式神は本物の式神だ……言い方を変えると本物の鬼を使役している」

「鬼ですか。お兄様そんなものが本当に存在するのでしょうか？」

「……俺にも知らない事がまだまだあるという事だ」

「深雪ちゃん、現存する本物の鬼の力はすさまじい。日本で言う鬼は、西洋でいう悪魔と同義だ。ミアさんが半悪魔化してあの力だ。本物の鬼の力はとてつもない。それが一体だけじゃない、複数存在し同時に操る事ができるんだ。ミアさんに憑りついてた悪霊程度なら一瞬で退散できる」

「横島……それ、冗談じゃないよね……鬼を使役って」

幹比古はその事実を知り、身震いをする。

「ああ、六道家当主は代々凄まじい霊能力者だ。あの本物の式神『鬼』をまともに扱う事が出来る人間はほぼ皆無だ。超人的な霊力と精神力が必要だからな……精神力が必要なハズなんだけどな……」

横島は幹比古にそう答えたのだが……最後は皆に聞こえないぐらいの小声でそんな事を言う。

何故ならば、横島が知っている100年前の六道家当主母子はとても強靱な精神力を持っている様にはみえず、その精神性は真逆であったからだ。

「……次から次へと、今日はなかなか刺激的な日だな」

達也はそう言いつつも、こんな状況なのだがどこか楽し気である。

「我々魔法師では、対抗手段は実質無いという事か」

十文字克人は腕を組んだまま顔を顰める。

「……」

「今回は横島さんが来てくれたから、横島さんが居てくれたから、今もこうして、皆と話すことができたけど、もし、横島さんが居なかったら……横島さんが行方不明のままだったら、私達は、いえ、第一高校の皆は、悪霊に殺されるか、悪霊に取り憑かれて悪魔になるかしていたという事ですよね……何もできずに、終わってしまうなんて、そう思うとゾツとします」

美月はモヤモヤしている胸の内を話す。

「横島……僕達にも何か手伝わせてくれないか？横島に頼ってはかりではいられないよ。僕自身でも対抗できる手段を持つておきたいんだ。この先パラサイトに出会う事が無いかもしれない。でも、今後会わないなんて保証はない。そんな時、自分が何もできないなんて嫌なんだ」

幹比古は自分自身でも、いざという時の悪霊と戦うすべを横島に協力しながら学びたいようだ。

「……横島、俺も幹比古と同じ意見だ。魔法師でも対抗手段を持つていた方がいいだろう。俺も協力させてくれ」
達也が幹比古に続く。

横島は美月の話、そして、幹比古と達也の申し出を聞き、ハツとする。

本来横島は、この世界、この時代に居るべき人間ではない。

今はいい、自分がここに居るのだから……しかし、ここにずっとといられる保証はどこにもないのだ。

今後、悪霊に友人、知人が遭遇しても、その場に自分が居る可能性は低いのだ。

そして、小竜姫にUSNAで言われた言葉を思い出す。この時代の人間が自分たちで解決する問題だという事を……

「しかし……」

横島の心は揺れる。確かに、この時代の人間が解決しなければならぬ問題であるが……魔神が関わっているのなら別の話ではないのかとも……

「なに勝手に話を進めているの？あと、タダオは私が雇うけど、私も一緒に戦うんだからー！」

「貴方こそ何をいつているの？横島くんは七草家で雇います。勿論私は横島くんと一緒に戦うのだけだ」

「横島……あなた、また一人で戦う気？それで一人でどっかに行つて、心配かけさすわけね。あなたを雇つて、私も勿論一緒に行くわ。あなたがどっかに行かない様に見張らないとね」

言い争っていたリーナと真由美、エリカが席に戻って来て、横島にそれぞれこんな事を言う。

横島を雇っても一緒に戦う気満々なのだ。

言い争いはどうやら一時休戦したようだが、誰が横島を雇うかは決着ついていないらしい。

「横島、皆も聞いてくれ……内輪で争わずにすむ提案があるのだが」

達也は皆がギリギリ納得する折衷案を提案する。

その日、達也が提案した折衷案を皆は一応了承し、話し合いを終了させた。

その後横島は直ぐに第一高校から無人タクシーで数時間かけ氷室まで寝ているミアを連れて行き預ける。

リーナをはじめ、真由美やエリカもミアを引き渡す様に言うが、横島は断固拒否した。

引き渡したところで、非人道的な検査や人体実験などをさせられるが目に見えていた。

本人たちにその意志がなくとも、組織にとってミアは調べるべく貴重なサンプルにしか見えないからだ。

回復したとしても、元の居場所に戻る事は無いだろう。

（結局、皆が直接かかわる事になったか……そうならない様にしたんだけどな……達也の奴……まあ、これはこれで有りかも知れないな……俺が居なかったらか……）

横島は学校の会議室での話し合いと、達也が最後にした提案を思い出す。

達也の提案とは、リーナのUSNA軍、真由美達の十師族側、エリカ達の警察組織は横島と契約を結び、横島を通じて事件解決をするというものだ。

契約内容は、横島が各組織の代表者数名に実地教導を行う事。各組織は事件解決のため横島の指示に従う事などが盛り込まれている。

横島一人で事件解決をするのではなく、この事件の最高指導者として横島を置き、横島を通じて各組織に指示する形で実質協力体制をとり、事件解決に乗り出すと言う事なのだ。

横島と契約を結ばなければ、戦うすべを得る事も、事件解決の功績も残らない可能性が高い。お互いの組織はけん制する意味も含め、横島と契約せざるを得ない。

横島はその方が都合がいいかもしれないとその時は思った。勝手にされて、悪霊を逃がしたり、手痛い被害を受けるよりも、自分の目が届く範囲で動いてくれるならその方が良いだろうと、さらに、実地指導や戦うすべを教えることができるのなら、今後、彼らだけでも対処できるだろうと考えたからだ。

もし、不測の事態になつたとしても、皆を逃がしやすいとも考えていた。

達也は最後に自分は横島のオブザーバーとして、三つの組織が公平に契約が満たされているかを常に同行して確認すると言い出したのだ。

達也はタダで、しかも三つの組織より優位な立場で、この件に参加しようとしたのだ。

横島はその意図を正確に把握し、「お前も、契約しろ。いいだしっぺだろ」と達也に呆れた様に言う。

達也も「いいだろう」とシレつと返答する。達也自身もあわよくばと言う程度だったのだろう。油断も隙もあつたもんじゃない。

大きな組織との契約のため。達也は横島の後ろ盾として、氷室はどうかと言ってきたが、横島はドクター・カオスの名前を出す。

USNAがこの件に難色を示すのは分かり切っていた。元々日本組織と協力する前提などないからだ。しかし、ドクター・カオスの名前が出れば別だ。

ある意味脅迫に近い。ドクター・カオスは現在USNAに滞在中だ。しかも、吸血鬼事件の発端であるマイクロブラックホール生成実

験とパラサイト（悪霊）との関連性をUSNAの依頼の元、実証させ、完遂させた人物でもある。USNAにとって不都合な情報を多数持っているのだ。

さらに、天災錬金術師ドクター・カオスと戦略魔法師魔女マリアがUSNAで暴れでもしたら……：……それこそ、吸血鬼事件の被害どころの騒ぎではない。国力をどれだけ消耗させるか分かったものではない。

とりあえず、リーナ、真由美、エリカには最終決定権が無いため、それぞれ持ち帰って検討するようだ。

リーナのUSNA軍は日本組織に今回の事件がバレてしまった上、ドクター・カオスの名前を出されたら、従わないわけにはいかないだろう。

七草家は、たぶん、当主の七草弘一が二つ返事をするだろう。まあ、策謀は巡らせるだろうが……

問題は千葉家だ。横島の事をよく知らない上に、エリカの話を父である現当主が聞いてくれるかである。普通に考えれば……この話に乗った方がいいのだが……

横島は一晩氷室に泊り、翌日には八王子の第一高校に戻る事になる。

氷室家では祝い事が好きな14代目当主恭子が急遽宴会を開く。

彩芽が横島にべったりしていたのを、恨めしそうに見る要がそこにあったとか……

147話 横島、レオに会いに行く!!

「よお、レオ意外と元気そうだな!」

「ふん、帰ってくるのがおせーんだよ」

横島はミアを氷室に送り届け、翌日の午後には東京に戻り、真つ先に未だ入院中のレオに会いに行っていた。

「まあ、よく無事だったな」

「まあ、体だけは丈夫だからな……ようやく、体が動けるようになってきたところだ」

レオは体をベットから起こし、ベットの縁に座る。

「ちよい見せてみる」

横島はそう言つてレオの額に手をやる。

「なつ、いきなり何しやがる!俺にはそんな趣味はねーぞ」

レオは横島の手を払いのける。

「霊的構造はだいぶ回復してきているな……体力もあるし、よし、お前一度ベットに寝ろ。今から一気に回復してやる」

「人の話を聞け!……回復?なんだ、治せるのか?医者も原因不明だと言つていたぞ」

「ああ、こんなのは病院で寝ても一緒だ。お前は体も魂も丈夫だから自然に回復しているが……本来はちゃんとした心霊医術を使わなないと回復できん」

「心霊医術?まあ、いい……エリカから聞いたぞ、お前、今回の件はやけに積極的だな、普段は争い事を嫌つたり面倒くさがるくせに……」

レオはそう言いながらも、再びベットに横になる。

「なに、お前、エリカと付き合っているのか?……だから、あんなにあいつ不機嫌なのか、お前がいないと、エリカが不機嫌で当たり散らしてくるから、とつとと復帰な」

そう言いつつ横島は寝ているレオの頭に手をやる。

「ふん、誰があんな跳ねっ返り、あいつは俺の事を出来の悪い弟子程度にしか思つてねーよ。つてなんだ、体が熱いぞ!」

「まあ、ちよつと我慢しろ」

横島はレオに靈氣を送り、靈的構造を修復していた。

「おお！なんか体が楽に……」

「終わりだ。ベットから下りてみる。体力があるからもう退院できるんじゃないか？」

「まじか？おお！体が軽いぞ、横島サンキューな!!」

レオはベットから降り、立ち上がり体のあちこちを確認するかのようには回していた。

「俺は、レオと一緒に入院している女性に会いに行く」

「ああ、未だ意識が戻ってないらしい。でもアレだぞ、七草家の人間が見張っていて、中に入れないぞ」

未だ眠っている若い女性は七草家の魔法師であり、吸血鬼いや悪霊に取りつかれたミアにやられた被害者だった。

「うーん。真由美さんに連絡するのもあれだし、レオ、囿やつてくれ、看護婦さんの尻を触って騒ぎを起こすってどうだ？」

「はっ、ばかか、お前のような真似ができるか！」

「なんだよ、せっかくリハビリがてらに素敵な感触をプレゼントしようと思ったのに」

「しやれならんぞ！せっかく治ったのに、病院から警察に厄介になって、復帰どころじゃなくなるだろ！」

「そこは、ギャグで切り抜けるよ」

「お前と一緒にするな!!」

「しやーない。普通に入るかってアレ？……真由美さんが来たな」

横島は隠形等を使い、黙って入るつもりだったのだが、真由美がこの病院に近づく気を察知したのだ。

「……お前、何でもありだな」

レオはどこを見るわけでもなく真由美が来ている事を察知している横島に、呆れている。

「真由美さん。昨日はどうも」

「うっす」

横島とレオは廊下に出て真由美を待つて挨拶をする。

「横島くんと、西城君こんにちはは、横島くんはなぜここに？……西城君のお見舞いね。……西城君は大丈夫そうね」

「たははははっ、真由美さんはお見舞いですね。俺も一緒にいいですか？」

「ん……いいわよ」

「じゃ、俺は戻るわ」

レオはそう言って部屋を戻ろうとする。

「なんで？」

「一応、エリカの所と、競争相手みたいだしな」

「レオ……お前空気読めたのか!!」

「お前にだけは言われたくないぞ!!」

「ふふふっ、二人は仲がいいのね。いいわよ、彼女は西城君が助けてくれたようなものだから」

横島とレオのやり取りを聞いて、微笑む真由美。

「じゃあ、おじゃまします。レオも来いって」

「わーかった。ひっぱるな」

横島とレオは真由美の後ろについて行き、黒服の男が二人控える病室に入っていく。

「お嬢様、見舞いに何度も来ていただき恐縮ですが、このようなところに、何度も来られなくとも……」

20代後半の女性が真由美に一礼する。どうやらこの女性も七草家の家人の様だ。

ベットには20代前後の若い女性が、生命維持のための装置を多数施された状態で寝ている。

「今日は飯田さんなのですね。いえ、いいのです。私達の落ち度でこのような事態になっているのですから」

「そうですか……青木は今日休みを取ってまして、それで私が代わりに……お連れ様ですか」

飯田と呼ばれた女性は、そう言って、真由美に続く、横島とレオを見る。

「そうなの、学校の後輩で…」

「かつこいいお姉さん！僕横島！よろしくです!!」

真由美が横島たちを紹介しようとしたのだが、それより早く横島はシユタツと飯田さんの前に出て、手を握り、相変わらざるの挨拶をする。

真由美は苦笑するしかない。

「おい、横島！病室で……」

レオは横島を注意しようとしたのだが……

横島は、彼女の手に靈気を直接流し込み、行動不能にし立ったまま動けなくする。

「悪霊退散、吸引」

そこから、流れるように吸引札を出し、彼女に掲げ、何かが彼女から飛び出し、吸引札に吸い込まれる。しかし、その何かは、真由美やレオには見えなかった。

飯田は横島にしなだれる様に倒れる。

「横島くん!?!」

「横島!!」

「ああ、飯田さんは悪霊に取りつかれていましたね初期状態ですが。俺も彼女に近づくまで分からなかった。これはこの悪霊の特性かな……厄介だな」

「悪霊？飯田さんが？そ……そうなの？全然わからなかったわ……」

「もう、大丈夫、飯田さんは、初期状態だから直ぐによくなる。靈的構造の変質もさほどないし」

「おい、横島どういうことだ」

レオはまだ状況を把握していなかった。

「レオは後で教えてやるから……」

「真由美さん、一度、七草家の人間を全員集めて下さい。あと、十文字家もかな……これはかなり悪霊に入り込まれているかもしれませぬね」

「わかったわ……十文字家には協力をお願いしたのは結構後からだから、まだ、被害は出ていないから大丈夫だと思うわ。でも念のため、捜

索を行っていたメンバーを集める様に伝えるわ」

「まずはベットに寝ている彼女の治療をしますね」

「……いいの？横島くん」

「ついでですよ。レオのついで」

横島はそう言つて、飯田をレオに預ける。

そしてベットに寝ている若い女性の額に手を掲げる。

「霊的構造がズタズタだな、そりや意識も戻らないし、生命力も無いわけだ」

「横島くん、治るの？」

「はい、霊的構造は今すぐ治せますが、後は本人の体力しだいで退院できるとしよう」

横島は札を2枚取り出し、彼女の胸と臍なりに張る。

そして再び額に手を置き、霊気を送り込んでいった。

30分程度、そうやって、彼女の霊的構造を直すため霊気を送りこむ。

その間、レオは表に居る黒服の男に、飯田女史を引き渡す。

「もう、終わりです。これで快復に向かいますよ。あとは普通に入院させてください。」

「横島くん……ありがとうございます」

「あー、ちなみに言っておきますが、さっきの飯田さんを調べても何も出ませんよ。初期だったし、本人も悪霊に取りつかれた自覚なんて持ってないだろうし。まあ、変なウイルスに感染した程度とと思ってください」

横島は、真由美に飯田女史に手荒な真似をしない様に釘をさす。

「横島、ほんとお前何でもありだな」

レオはそんな横島に、呆れたような感心したような顔を向けていた。

そして、病室から3人は退出する。

「レオ、退院手続きできたか？」

「いや、お前がさっきの治療の間に、担当医の所に行ったらよく、一晩様子見て明日もう一度検査するなんて言いやがって、どうやら退院は明日の午後になりそうだ」

「まあ、妥当だろうな」

「何にしても、助かった横島！また学校でな！」

レオはそう言って病室に戻り、横島と真由美は病院を出る。

真由美は病院を出た後、待っている車には乗らずに横島に話しかける。

「横島くん、今日もありがとう……何度お礼を言っても足りないわ」

「たはははっ、まあ、今日はたまたまつすよ」

「父が契約の話して、一度横島くんを家に連れてくるように言っているの……何時がいいかしら？」

「あく、俺今日でもいいっすよ。でも、家人の人集めなくっちゃいけないし、二度手間になっちゃいますね。真由美さんに決めてもらった方がいいかな？俺は基本放課後はフリーなんで……って、アレ？風紀委員会に復帰できるのかな？」

「フフフフツツ、分かったわ。決まり次第、横島くんに連絡するわね。」

「……それと……」

真由美はそんな横島に微笑みながら答えるのだが、何か急にモジモジしだしたのだ。

「なんすか？真由美さん」

「横島くんは、あの、その……アンジェリーナさんとは……恋人同士なの？」

真由美は不安そうな顔をして横島に聞いた。

「へ？違いますけど」

「そうなの？でも、ボーイフレンドって彼女言ってたわよ」

「あー、やだなー真由美さん。英語で男友達の事ですよ」

「でも、アンジェリーナさんは横島くんにずっとくっ付いていたけど……」

「あのメンバーの中で、リーナがすぎるのは俺ぐらいだったし、リーナ

は見た目美人だけど、子供っぽいし、しかも同年代の友達って俺以外いないみたいだから……よかったら仲良くして上げて下さい」

横島はそんな事を言うが、リーナが子供っぽく振舞うのは横島の前だけなのだ。

「そう……そうなの……恋人じゃない……子供っぽい、友達」

真由美はホツとした表情をし、なぜか笑顔まで出ていた。

「どうしたんですか？真由美さん？」

「な……何でもないの……連絡するわ。多分近いうちに可能だと思うわ。緊急性を擁する案件だし」

真由美は慌てた様子にして、お付きの車に小走りで近づき乗って行った。

横島はその車を見送って、帰りの途に就こうとするが、携帯端末に電話が入る。

「タダオ！今どこ？」

リーナからだ。

「ああ、東京に戻ってる」

「直ぐに来て!!私が今住んでるマンションに……住所はメールで送るから!!」

「何かあった？リーナ」

「いいから!」

「わかったよ」

横島は契約の件だろうなと思いつつ了承する。

148話 横島、USNA軍と交渉する!!

横島はレオが入院している病院で真由美と別れた後、そのままリーナが住まうマンションまで行くことになったのだが、最寄りの駅に降りるとリーナが待っていた。

「タダオ!こっち!」

リーナは笑顔で手を振っていた。

「あれ?わざわざ駅で待っててくれたの?」

「二人きりになれるでしょ」

「たははははっ、で、リーナは俺に聞きたい事があるってわけか」

「タダオにはお見通しか……タダオはその、記憶が戻っているのでしょ?」

「ああ、戻った」

「そう……でも、よかった。記憶が戻ってもタダオってあまり変わらなから……ちよつと落ち着いた雰囲気だけど」

「そうか?学校の皆にはいつも、落ち着きがないとか、うるさいとか、蔑まれているぞ」

「日本の学生は見る目が無いだけよ。タダオはこんなに優しいのに」

そう言つてリーナは横島の左腕に自分の右腕を絡める。

「たははははっ……リーナの任務先つて日本で、しかも第一高校だったんだな……」

「ごめんなさい。言えなくて……それと、あの時お別れの挨拶も出来ずに……」

「いいって、任務なんだろう?それに、俺の方こそ約束の時間に間に合わなくてごめん」

「タダオの方も、実証実験で大変だったんでしょ?」

「まあ、そうかな……リーナ日本の任務つて……やっぱりいいや」

横島はリーナの本当の任務について気が付いている。

USNAがマイクロブラックホール生成実験を行った経緯は、後からカオスから聞いた話だと『灼熱のハロウィン』に対抗するための実験だった事、スターズのエースであるリーナが第一高校に居るとい

事で明白である。リーナ達が『灼熱のハロウィン』を起こした達也を狙っている事を……………

「タダオ？」

「で、昨日の件で話があるんだろ？」

「上の人も来ていて、タダオと直接話が聞きたいそうなの」

世間話をしながら、マンションに着く。

「アンジェリーナ・シリウス戻りました」

リーナは先ほどとは打って変わって、凜とした佇まいで、スターズの総隊長の顔に戻っていた。

しかし、一般のマンションの玄関でする挨拶ではない。

「お邪魔します〜」

「ようこそ、ミスター横島。私はスターズのシルヴィア・マーキュリー准尉です。以後お見知りおきを」

シルヴィは玄関でリーナと横島を出迎えた。

「うわ、かつこよくて綺麗なお姉さん！僕横島!!よろしくお願いしま〜す!!」

そう言ってシルヴィの両手を取って何時ものナンパまがいな挨拶をする。

シルヴィはやはりと言うか面食らっていた。

「タダオ！そういう挨拶は私だけにすればいいの」

リーナは総隊長の顔が崩れ、一気に子供っぽい態度に戻っていた。どうやら横島がいると緊張感が持たないらしい。

シルヴィの案内でリビングに入ると。ソファに座っている30代前半ぐらいに見える女性が立ち上がり、横島に挨拶をする。

「USNA統合参謀本部情報部大佐、ヴァージニア・バランスです。始めましてミスター横島」

バランス大佐は横島に握手を求めると。

彼女は情報部の中でも実は監査部に所属しており、軍内の人事に大きな発言権を持っている人物でもある。彼女の報告次第では、将校と言えども、降格や退役、そして、軍規違反に問われる可能性もあるの

だ。しかし、このバランス大佐、リーナの日本での一連の失敗劇に対しては、逆に擁護の立場に回っていたのだ。

「えーと、肩書とかないんですが、横島忠夫です。爽やか系のお姉さん！」

横島は何時もと違い普通に握手を返していた。

「その年でお口が御上手なんですね。……お座りください」

そういつて微笑みながら、横島に席を勧める。

「たはははっ、いやー、大佐とかって厳ついおっさんとかがやるんじゃないんですか？それがこんな爽やか系のカツコイイお姉さんだったとは！」

横島はそんな事を言いながらソファアームに座る。

「少佐」

「はっ」

リーナは返事をしバランス大佐の横に座り、丁度シルヴィが紅茶をテーブルに出す。

「シリウス少佐から、この程の経緯と提案を聞きました。正式に参謀本部に確認を取らないといけないのですが、その前に貴方から直接話を聞きたくて、正式の場でなく、こんなところで申し訳ないのですがご足労いただいたのです」

「まあ、こっちからの一方的な提案ですからね」

「正直言いまして、この提案を我々は受けざるを得ない。脅迫に近いと感じております」

バランス大佐は後ろ盾にドクター・カオスの名前がある事を指しているのだ。

「やっぱり？でもメリットも大きいと思いますよ」

「例えばどのような」

「既に悪霊に取りつかれているだろう人間を俺だったら、探すことが出来ます。現在日本に居るUSNA軍関係者、下手をすれば渡航者全員、悪霊に取りつかれている可能性があるので、それを一手に集めてもらえば、俺ならば判別するだけでなく、その場で対処可能ですよ。」

さらに、リーナや他数名に、悪霊の対処の仕方と道具の使い方方を教

えます。但し実際に出来るかどうかは別ですし、対悪霊用の道具も安いものではないのでそこその費用もかかります。

最終的には俺が決着をつけますから、USNA軍は人に余裕が出来るだろうし、被害も最小にとどめることが出来るんじゃないでしょうか？

どうせ日本政府にはバレてるでしょうし、外交圧力かなんかで、今までの事をうやむやにするんでしょう？だったら、ここは今後の為に協力して一枚かんでいた方が良くないですか？」

「……確かに、しかし、参謀本部は元々我が軍単独で行う予定だったものを覆させなければならぬのです」

「単独で出来なかった。しかもこのままでは何もできない。被害が拡大するだけです」

「……………」

「そもそも、USNA軍は悪霊の知識なんて殆ど持ち合わせていない。悪霊はそちらの想像以上に厄介な相手です。それをどうやって倒して駆逐するんですか？」

「貴方ならばそれが実現可能なですね。しかし我々は貴方の実力を知らない。少佐から我が軍のミカエラ・ホンゴウに憑りついていた悪霊を、学生とは言えA級に匹敵する魔法師6名をもってしても倒せなかった物を、一瞬で倒したとは聞いております。……しかし、それだけでは不足なのです。貴方は世間ではまったくの無名です」

「まあ、そりやそうですね。たかが一介の学生を信用するのは難しいでしょうね」

「一つ確認です。少佐からあなたは古来の魔術師である陰陽師だと聞いております……………氷室家の人間ですね」

「そうです」

「やっぱり……………」

リーナは小声で呻く。

「横浜のあの究極の防御魔法は……………」

バランス大佐は『救済の女神』のことを指していた。

「(´)想像にお任せします」

「……タダオ……」

リーナは横島を色々な感情が蠢いた表情で見ている。

やはり、『救済の女神』の発動者にして、同じ戦略級魔法師だったことに嬉しさを覚えるのだが……それと同時に、不安も覚えたのだ。

リーナはUSNAの軍人、横島は日本人で……もし事が起これば敵味方となり対峙するかもしれないからだ。

「なるほど、そうですねか……ドクター・カオス氏が自らの口で助手と公言したのは、この100年で貴方だけです。此方もドクター・カオス氏と貴方の結びつきが強い事は確認しております。

さらに、貴方自身『救済の女神』の後継者。保証する人物も実力も申し分ない事が分かりました。

我々としては、もともと飲むしか無い提案なのですが……我が軍へのメリットや貴方の素性も分からずには上層部に話を通すわけにはいかず、さらに、納得もしなかったでしょう。なので、こうしてお話の場を設けさせて頂いたのです。」

「こんなんで納得してくれましたか？」

「十分です。本国からも良い答えが返ってくる事でしょう。しかし、貴方には何もメリットがないように思えますが……」

「俺は陰陽師なんで悪霊さえ倒せばなんだっていいんです。それに、同じ目的なのに争うのはばかげているし、ましては知り合い同士が争うなんてのは嫌なんです」

「そうですねか……ところで、ミスター横島は日本国防軍とは折り合いが悪いという噂を聞いておりますが……そして、氷室家も国防軍とは断絶状態だとか」

「たははははっ、まあそのなんていいいますか」

横島は笑って誤魔化す。

「……ミスター横島、私は貴方を、USNA軍に迎え入れたい。貴方の要求、いえ、国を挙げて最大級の厚遇をもってUSNA軍は貴方を歓迎しますよ」

バランス大佐はさすがUSNAに勧誘を掛けたのだ。

「それは、諦めて下さい。俺は何処の軍事組織にも入りません。勿論

日本国防軍にもね。俺は俺の矜持で動いているだけなんで」

「将来は……ドクター・カオス氏の元に行かれるのですか？」

カオスの拠点は知られているだけで、USNAにヨーロッパ、中東に大亜連合、オセアニアに新ソビエトにある。日本にはない。

「まあ、それもありませんけど、今の所考えてないですね。カオスのジーさんやマリアとは友達だし、まあ、お互いピンチになったら助け合いますけど」

バランス大佐は、この言葉に、ますますカオスに手が出せなくなる事実を突きつけられたのだ。

「また、お誘いしますよ。何時でも貴方のためにUSNAは門戸を開けております。……今日はじつに実のあるお話が出来ました、正式に決まり次第、少佐と実際の悪霊対策と技術協定についてつめて下さい。出来れば我が軍にえこひいきしてほしいものですが……」

バランス大佐はそう言つて、立ち上がり握手をもとめ、この会合の終わりを告げる。

「よろしく願います。……それと、一ついいですか？」

横島も立ち上がり、握手を交わす。

「何ですか？」

「司波兄妹も俺の友人です」

「……はあ、司波兄妹？……それが何か？」

バランス大佐はとぼけて見せる。

横島は、バランス大佐に達也を狙うなど忠告したのだ。

バランス大佐もその意図を分かったうえでとぼけたのだ。

「それだけです。では、ここで失礼します」

横島はそう言つて、お辞儀して部屋を出ようとする。

「少佐、ミスター横島をお送りさしあげなさい」

「はっ、了解しました」

リーナはそう返答し、横島の前に出て、一緒に外に出て行った。

バランス大佐は横島たちが出て行った後の扉を見据え、部屋の隅に控えていたシルヴィに声を掛ける。

「シルヴィア准尉、彼をどう思いますか？忌憚のない意見を言つてく

ださい」

「はっ、彼はとても16、7才の高校生には見えません。最初は年相応なのかと思っておりましたが、大佐と話している態度が余りにも堂々としていました。またその内容にも驚きを禁じえません。……しかも彼が『救済の女神』の使い手であることはこれで確定でしょう」

「……そうですね。彼は何者なのでしょう？ いずれにしても、ドクター・カオスをもって友人と豪語する人間です。ただものではないのは確かでしょう……しかし、あまりにも欲が無さすぎる」

「シルヴィア准尉、今後もシリウス少佐を導いて上げて下さい。また、横島少年の動向も逐一上にあげる様に」

「了解いたしました」

マンションを出て、横島とリーナは並んで歩く。

「タダオ……やっぱり氷室で、『救済の女神』の後継者だったのね」

「いや、後継者どうかは分からないけど、横浜の防御術式は俺の仕業かな」

「タダオ、さっきの最後に言った言葉……達也に聞いたの？ 私と達也と深雪がやり合った事を……」

横島がバランス大佐に言った「司波兄妹も俺の友人」という言葉を、リーナも理解していた。

リーナは司波兄妹と争った際、命令とは言え『灼熱のハロウィン』の容疑者として、また、スターズのアンジー・シリウスの正体がリーナであるとバレてしまい、達也を殺そうとしたのだ。

「いいや。あいつ、そう言う事をいちいち言う奴じゃないから」

「タダオ……敵にならないで……お願い。私、タダオとだけは争いたくない」

リーナは目に涙をためながら、訴える。

「何言ってるんだリーナ、俺がリーナの敵になるわけないじゃないか」

「……達也とは？」

「達也とも争わない。まあ、ケンカはするかもしれないけどな」

「なによそれ、…………でも、私は…………軍のスターズの総隊長なの、任務であれば遂行しなければならぬの、たとえ達也がタダオの友人でも…………」

リーナは俯き加減で苦しそうに言う。

「リーナって総隊長なの？へへ、まあ、そんな時は全力で止めるさ」

「…………なんで、私はタダオと同じ国に生まれなかったのかしら…………達也達が羨ましい」

リーナは横島の腕を取り、自分の胸に抱き寄せる。

「まあ、それを言ったらキリがないし、俺もなんでイケメンに生まれなかったんだと散々恨んだものだ！あつ今もか」

「…………私は、そのままのタダオが好きよ…………」

リーナは横島の腕を強引に下に引つ張り、頬にキスをする。

「リ…………リーナ??」

「またね、タダオ」

リーナはマンションへと走り去っていった。

横島はしばらくリーナが走り去った先を見据えていた。

「へへ、のぞき見とはいい趣味だ。俺ものぞきは大好きだけど、されるのは嫌いなんだー」

「!？」

黒羽貢は1キロ先にいる今の今まで監視していた人物が急に自分の後ろから現れ声を掛けてきたのだ。内心驚き、恐怖する。

黒羽貢の本来の目的はUSNA軍の拠点搜索と監視及びパラサイトの搜索なのだが…………USNAの大物が動き、スターズの拠点の一つと思われるマンションに移動した知らせを受け、しばらく部下と共に張っていたのだが、そこにたまたま現れた横島の動向を遠方から見ていたのだ。

「おっさんがどこの組織かは知らないけど、日本政府関連は、手を引く約束したんだけど……まあ、いいや、次おっさん見つけたらとっ捕まえて、警察にでも突き出すかな」

そう言っつて、横島は姿を消す。

「……………なんだ……………あれは……………まるで気が付かなかつた。横島忠夫か……………これ程とは……………まずつたな従姉殿にしこたま怒られるかな？」

149話 横島、千葉家に行く!!その1

「横島、話があるんだけど」

「何だエリカ、改まって?」

レオを治療した翌日、横島第一高校復帰初日の昼休みである。

横島が学校に現れた際、当然クラスメイトは驚いた。いや、横島復帰は一瞬で学校中に広まり、学内生徒全員が驚いた。

横島が行方不明となつて11月から、3か月半、横島死亡説はまことしやかに学校中で囁かれていたからだ。

それは不名誉にも新たな代名詞が付け加えられることになる。チカン、変態、ナンパ野郎……そして、ゾンビ横島と……

しかし、それだけではなかった。横島はこの後しばらく、男子生徒限定だが殺意の対象となる。

陰では「横島死ね!」「横島もげろ!」「横島呪殺!」「横島爆殺!」など、不吉な言葉が男子の間で何かの合言葉やキーワードの様に囁き続けられる事になるのだ。

「例の契約の件よ、ちよつと顔貸しなさい」

エリカは機嫌が悪そうだ。

「別にここでもいいんじゃない?まさか……いい返事がもらえなかったのか?」

ここには美月と幹比古とエリカ、横島が座つて昼食を取っているのだ。契約の話を皆知っているメンバーしかここにいない。特に不都合が無いはずなのだ。……しかし、何時ものメンバーとは異なる、この場に似つかわしくない人物がここで、エリカをイラつかせるような行為を堂々としていたのだ。

「……………ちよつとあんた!横島から離れなさいよ!!私はそいつと話があんの!!」

エリカは遂にその人物に怒りを爆発させる。

「嫌よ!エリカに言われる筋合いはないわ」

リーナが昼食中も横島の腕に嬉しそうにべったりとくっついて離

れないのだ。

いや、昼休みだけではない。始業前、さらには、授業の合間の休憩時間までも、一科生A組からわざわざ二科生のE組にまで来て、横島にこの時代にあるまじき過剰なスキンシップを行っているのだ。

男子達は涙を流しながら、その様子を見、横島に殺意を向けるのであった。

「横島!! あんたもニヤケてないで、どうにかしなさい!! うつとおしいのよ!!」

「何を言っているのかなエリカ君……決してニヤケて何て居ないぞ! 柔らかいものが当たっているからとか、そんな事ではこの横島! 心は動かない!! 桃が二つ、いや、マシユマロが二つ、当たって気持ちいなどとは決して思っていない!! エリカより、立派なものをお持ちで何てことは決して思っただい!!」

そう、リーナは横島の腕を取り、体ごと抱き寄せているため、胸部に突っっている立派なマシユマロが二つ、横島の腕に押し付けられ、少し動くだけで形が変わって行く状態だった。

勿論、横島は我慢しようとしているのだが、ニヤケ顔は隠せていなかった。

その横島の発言で、周りで昼食を取っている男子生徒は一斉に立ち上がり、横島に殺意がこもった視線を送り、あるものは呟き、あるものは嘆き、あるものは悲しみ、そして皆、呪いと殺意と害意のこもった言葉を吐き続ける。

「横島……!! そこに直れ!!」

エリカが切れて、横島に殴り掛かかる勢いで、怒鳴りつける。

「ちよ、エリカ! まった……!! リ、リーナも少し離れて」

「リ、リーナさん。さすがに、横島さんも困っているし、学校では秩序のある行動をしないと……一応、横島さんは風紀委員でもあるし」

「そ、そうなんだ。横島は風紀委員なんだ。だから、皆の手本とならないといけないんだ」

美月と幹比古はエリカの我慢の限界と、周りの殺意に耐えかねて、リーナを説得にかかる。

「郷に入っては郷に従えと言うものね。日本は堅苦しいところね」

二人の説得のいかにもあり、リーナはそう言って横島の腕を離すのだが、ぴったりと横に付いたまんまではある。

「ちつ、まあいいわ。今日の放課後、あんた家に来なさい。契約の件よ……当主があんたを見て決めると言っているわ」

「俺を見てって……なに？一昨日の内容と現状の説明をしたんだろ？」

「……説得しきれなかったのよ。千葉家ではあんたの事をよくわかっていないし……それに、私は……」

エリカはさつきとは打って変わって、自信なさげに横島に簡単に状況を説明し、最後は俯き様に小声になる。

エリカは現当主の妾の子だ。立場的にも弱いはずなのだ。

「わかった。取りあえず俺が行って、説得すればいいんだな」

横島はそんなエリカを見て、直ぐに返事をする。

「エリカの家って剣術道場なんですよ？私も興味あるからタダオについて行く」

リーナは当然の如くと言う感じで横島について行くつもりのようにだ。

「あんたは来なくていい!!」

「リーナ、流石にそれは不味い。今はまだ、協力関係に無い状態だ。今回は我慢してくれ」

横島は本日初の真面目な顔になり、リーナを説得する。

「……わかったわ。でも、タダオと今度、二人つきりで東京観光に行きたいわ」

「そ、そのうちな」

放課後、エリカは千葉家へと横島を連れて行く。

幹比古と美月、退院し午後から学校に顔を出したレオも状況が分からないまま連れてこられていた。

幹比古は、正式な協力者である吉田家の立会人としてという明確な立場がある。

レオは、一応千葉家の門をくぐった事のある門人扱いでエリカの同行者として……

美月は……

「エリカちゃん、やっぱり私なんか来てよかったのかな？ 場違いだと思う」

「美月、そんな事を言わずにお願い！ 一緒に来て、私の部屋に居てくれるだけでいいから……横島とこいつ等だけだと不安で仕方が無いのよ」

「ふん、頼りなくて悪かったな」

レオは無然とする。

「僕は吉田家からの正式な立会人だから、余計な事は言わないよ」

「たははははははっ、エリカく心配し過ぎだって、何とかなるって」

横島は頭の後ろで両腕を組、鼻歌交じりにそんな事を言う。緊張感の欠片も無い。

「特に横島!! あんたが一番心配なのよ!! 余計な事をしたり、言ったりしないよね!! ……なんでこいつにトツプ何てさせる羽目になったんだろ? 達也君め!」

エリカは何時もの調子の陽気な横島を見て、不安で仕方が無い様だ。ここに居ないこの協力体制の発案者である達也に恨み節である。

エリカは知らない。横島は交渉術も優れている事に……1000年前、ドロドロと欲望が渦巻く人間社会や、刹那的な考えを持つ妖魔の社会を取りまとめようと数多くの交渉を行ってきたのだ。結局は決裂してしまっただが……

「でか!! しかもひろっ!! エリカんち超金持ちじゃん!! 東京の一等地に何これ!! ぜったい悪い事している系だ!!」

エリカの家の前でその敷地の広さと巨大な門構えにはしゃぐ横島。

他のメンバーは何度かエリカの家に来ている上に、みなそこそこ金持ちなため、横島のようににはしゃぐことは無いのだ。

100年前の1990年代の日本の庶民感覚がしみついている横島とのギャップが激しいのは致し方が無いだろう。

「……」

エリカはそんな横島を澄ました顔でスルーする。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、エリカお嬢様」

「お客人をお連れしました。御父上様と兄上様方は、どちらに？」

「奥道場の客間でお待ちしております」

「ようこそ、お越しくださいました。吉田様、西城様、柴田様、横島様」
家人と思われる女性がエリカと挨拶と言葉を交わした後、横島たちに挨拶をする。

幹比古、レオ、美月は慣れた様に軽く会釈をするのだが……

「なに……！！エリカお嬢様!?お父上様!?兄上様!?ってなんだ……！！レオ!!エリカがおかしいぞ!!拾い食いでもしたんじゃないか!?!」

横島は何か得体のしれない物を見るような目で、お嬢様然と上品にふるまうエリカを見て、叫びだした!

仮にもエリカは東京でも大家である千葉家のご令嬢である。家ではすっかり猫を被っているのだ。

「横島、落ちつけて、エリカはああ見えて千葉家の次女なんだよ。そりゃ、作法もちゃんとして当然だよ」

「え……っ!!でも、アレ?その?え……っ!!」

エリカの余りの豹変ぶりに横島は混乱している様だ。

エリカは、上品にふるまっているが、口端をヒクヒクさせている。

美月は、その様子に苦笑するしかなかった。

レオは笑いを我慢しているが、完全に漏れている。目には涙まで溜めていた。相当ツボに入ったようだ。横島ナイスという声と潜み笑いが交互に聞こえてくる。

エリカを先頭にその後美月、幹比古、横島、レオと大きなお寺のような作りの家の長い廊下を歩くのだが、横島は先ほどのシヨックか

ら立ち直っていない様で、ブツブツと「エリカがお嬢様」と繰り返し、その後ろでレオが腹を抱えて、「横島、笑い殺す気か」と笑いをこらえている。

廊下の角に差し掛かると、剣道着袴姿の若い女性がお辞儀の体勢で待っていた。

「お客人。少々此方でお待ちください」

「私は着替えてくるから、そこで待っていて……美月行こ」

そう言つて、エリカはその女性を気に食わなさそうに一瞥してから美月を後ろに、この場から立ち去る。

若い女性はお辞儀を解き横島に気軽に声を掛けてきた。

「久しぶりだな。横島。元気そうで何よりだ」

「あれ？摩利さん？なんでここに？」

「私も千葉道場の門人なのでな、こうやって、出迎える役を仰せつかったのだ」

「摩利さんの袴姿めっちゃ似合ってますね！なんだろう？なぜか艶めかしい……」

若い女性は道着袴姿の渡辺摩利だったのだ。

「お前は相変わらずだな。まあいい、取り合えずその部屋に横島は入ってくれ。吉田と西城はちよつと待つててくれ」

「うーん、わかった！確か道着と袴の下つて、下着を履かないんだ！という事はパ、パンツも!?!……摩利さはーんく僕は僕はもう!!」

横島は摩利の話など聞いていない。久々の摩利、しかも道着袴という出で立ちに興奮し遂に暴挙にでる。ルパンダイブよろしく、横島ダイブで摩利に飛びついたのだ。最早摩利に対しての恒例行事と言つていいだろう。

「ちようどいい、お前はその部屋にでも入っている!!」

摩利はそう言つて、横島ダイブをかわしながら、襖を開け横島をその部屋に蹴り入れた。

「ぐへっ……この感覚久々っ!!やっぱり摩利さん!!」

横島は摩利に蹴られ6畳ほどの和室に放り込まれ、畳の上うつ伏せで潰れたカエルのような恰好になる。横島ダイブは摩利への挨拶

みたいなものだ。漫才のボケとツッコミの関係に近いものがある。しかし恒例はこれだけではなかった。

横島がうつ伏せ状態からふと上を見あげると、この狭い和室に、2mはあるかというガタイがいい大男が二人並んで腕組をし、仁王立ちで横島を見下ろしていた！

二人共この道場の家人なのだろう。道着に袴を着ている。しかし何故か道着は引きちぎられたように両袖が無く、そこからはムキムキの腕が……そして、どう見ても道着のサイズがそのガタイに比べ小さく、ピチピチなのだ。中にはインナーを着ていないため、ムキムキ黒光りした胸筋腹筋がピクピク蠢いているのが見える！

「たははははっ、部屋間違えちゃったかな？たはったははははっ、しつづれいしましたー！！」

横島は大男たちの怪しい威圧感に顔面から血の気が引くのを感じ、この場をうつ伏せのまま、カサカサとゴキブリの様に放り込まれた襦から逃がれようとしたのだが……

「ふっふっふーっ、どこに行かれるお客人。服を脱いでもらおうか!!」物凄い低い声で右のチョビ髯マツチョ家人がそう言いながら、逃げようとする横島の制服襟首をムンズと捕まえ、持ち上げられたのだ。

横島は襟首を掴まれたまま、ギギギと首を回し、襦入口先、部屋外にいる摩利に涙目で助けを乞う様に訴えかける。

「ままままま、摩利さん？こ、これは？」

「うむ、着替えが済んだら呼んでくれ」

無慈悲にも摩利は一瞬ニコツ笑い襦をぴしやりと閉めたのだ!!

「いいいいややー！！！！摩利さ——ん助けて!!もうしないから、横島もう飛びつかないからー！！！！幹比古、レオー！！！！助けてー！！！！」

数分後……

部屋は最初の頃は叫び声などが響いていたが、途中からは静かになっっていた。

幹比古とレオはただの着替えだと摩利に言われていたため、その場で苦笑しながら待つしかなかった。

再び、横島が放り込まれた部屋の襖が開く。

「しくしく、横島穢されちゃった」

涙を流している横島が立っており、その後ろに満足そうにマッチョズが仁王立ちしていた。

「ほう、馬子にも衣装だな……なかなか似合っているではないか」

摩利は道着袴姿に強制的に着替えさせられた横島を見て感心したように言う。

「グスツ、摩利さん酷いやーい！せめてその胸で泣かせてー！！」

部屋から廊下に居る摩利に横島ダイブで再び飛びつく。さつき自分でもうしないと云っていたが早速、破っている。

「いい加減にしろー！」

摩利の肘打ちが横島の脳天にさく裂。

「ぐへっ」

横島は廊下の床に叩きつけられる。

「……たく、お前は本当に、変わってないな」

摩利はそんな事を言いながらも、楽しげだ。

そこに、若い男の声が聞こえてきた。

「摩利、あまり当家の客人に手荒な真似をしないでくれよ。いくら仲がいい後輩だからといって」

そして、そつと摩利の肩に優しく手を置く。

「シュウ！その……これは、その」

摩利はその男の顔を見て、明らかに顔を赤らめて動揺している。

「!!……なんだこの爽やか系超イケメンは!!」

横島はガバっと起き上がる。

「横島!!騒ぎを起こすなって散々言ったのに!!………修次兄様……ちっ、渡辺摩利」

そこにこの騒ぎを聞きつけ、道着袴に着替えたエリカが戻って来た。

「エリカ、口が悪いよ」

摩利にシユウと、エリカに修次兄様と呼ばれた若い男は、エリカに注意をする。

そう、この爽やか系イケメンこそ、千葉家当主の次男、現在20歳にして、「千葉の麒麟児」「イリユージョン・ブレード」の異名を持つ、世界的にも名が通っている達人、千葉修次（なおつぐ）その人なのだ。そして、エリカの腹違いの兄にして、渡辺摩利の恋人でもある。エリカは兄修次を慕っており、摩利が恋仲であることに苛立ちを隠さず、摩利自身を毛嫌いしていたのだ。

「あの摩利さんがなんか乙女みたいになってるうーっ!! やい、そこ
のイケメン!! 摩利さんのなんなんだ!!」

「始めまして、横島くん。君には感謝を何度言っても足りないぐらいだよ。何度も摩利の窮地を救ってくれてありがとう。……僕は、エリカの兄で千葉修次……摩利とはその、恋人どうしなんだ」

修次はさわやかにそんな横島に頭を下げた後、照れ臭そうにそう言った。

「シユウ、皆まで……」

摩利は顔を真っ赤にして照れている。

「うが——!! 摩利さんがデレてるっ!! なぜだ——!! 摩利さんに恋人だと——ゆるるさん!!」

「横島、ちよつとは落ち着けて、修次さんは若くして、免許皆伝なんだ。指導者としても一流なんだ」

幹比古は横島を苦笑しながらも止める。レオは横でこの光景をみて笑いを我慢している。

「くそっ、やはり世の中はイケメンで回っているのか——!! なにか？ 指導者の立場を利用して、摩利さんにその毒牙を!! ゆるさ——ゆるる!!」

横島の雄たけびは留まる事を知らない。

「そうよー修次兄様を弟子の立場から誘惑するなんて!! この女は許せない!!」

何故だかエリカはそんな横島に呼応して、同じような事を叫ぶ。

「エリカ！摩利にそんな言い方は無いよ!!」

修次はエリカに間髪入れずに注意をする。

「だって、修次兄様……この女に騙されてます」

「落ち着け!!お前に許されんでもいい!!」

摩利は横島の頭に拳骨をかます。

「くっ、だって……イケメンがイケメンがオラの村から娘っ子を奪ってくださる」

もはや、收拾がつかなくなっていた。

「おーい、お前らくなにやってんだ？おやじ殿が痺れ切らしているぞ」

そこに、へらへら顔の20代中頃の男がやってくる。

しかし、そんな言葉は誰の耳にも届いていなかった。

「おーい、聞いてる？」

うだつの上がないこの男こそが、千葉家次期当主にして、現当主の長男。警視庁の警部千葉寿和なのだが……威厳が全くない。

「修次く、エリカく、摩利ちゃんに、幹比古君と西城君く、あとその君く、って……聞こえているよね……まさかの無視?!!」

まだ、千葉家に来て、少ししか経っていないのにこの調子だ。この先どうなる事やら……

この頃、ほのかは……

今回の事件の蚊帳の外に居た。

横島復帰を聞いていたのだが、この日も生徒会が忙しく、横島とまだ会えていなかった。

そして、不穏な噂を聞いていた。

横島は行方不明中にナンパをしまくり遂に恋人が出来たとか

……

さらに、クラス男子が全員、横島に殺意を持った言動を繰り返し、口にしていたのだ。

「横島さんに恋人？……調べなくっちゃ!! 雫があつちで頑張ってるのに、私も何とかしてあげないと!」

ほのかは張り切って、この件を調べようとしたのだが、翌日には早々に事の真相が発覚するのだった。

150話 横島、千葉家に行く!!その2

「……………貴様が横島忠夫か」

「そうっすけど……………」

「……………千葉丈一郎だ。エリカの父であり……………この千葉道場の道場主だ!!」

「あのみ、お父さん何か怒ってます?」

「貴様に父親呼ばわりされる筋合いはな……い!!」

現在横島たちは、千葉家敷地内奥道場の24畳はある客間で、筋骨隆々の偉丈夫、千葉丈一郎エリカ達の父親である千葉家当主と対峙していた。

上座に丈一郎がドカッと座っており、右並びに、長男、寿和と公私ともに寿和の部下をしている稲垣、そして吉田家の代表として幹比古。左並びに修次とエリカが座っている。

横島は下座で丈一郎と対峙する形で座っていた。

因みにレオは客間の外でマッチョズと一緒に控えている。

丈一郎は横島たちが客間に到着した時から既に眉間にしわを寄せ、明らかに不機嫌な雰囲気醸し出していた。

「ひえ〜、いや、そう言うわけじゃなくって……………ちよ、エリカ、何怒ってるんだこの親父は?」

横島は丈一郎の迫力に慄き、エリカに助けを求めるがエリカは目を瞑って沈黙を守ったままだ。

「貴様!…さっそく女に助けを求めるとは何事か!!この腐れ外道が!!」

「ひえっ、なぜその、怒っていらっしやるのにな〜と」

「おのれ!…知らんとは言わさんぞ!!」

丈一郎の怒りのボルテージがさらに上がる。

「そ、その、なにがなんだかさっぱり何ですが……………」

「貴様……………!!事をかいて、白を切るつもりか!!貴様の悪行の数々聞き及んでおるわ!!」

「へ?身の覚えが……………!!」

「ぐぬぬぬ!!まだ言うか!!寿和!!罪状を読み上げろ!!」

「あのく、おやし殿、罪状ではないんですが、一応、横島くんの内偵情報によるプロフィールなんだけど」

寿和は困ったように、頭を掻きながら、一応反論している様だ。

「どこが、プロフィールだ!!罪以外の何者でもないではないか!!いいから読め!!」

「へーへー、あく、横島忠夫1年E組二科生。最近まで行方不明となっていた。内偵による学内での噂をまとめた結果。」

①チカンの常習犯である。

②覗きの常習犯である。

③セクハラの常習犯である。

④ナンパを学内女子から女性職員まで全員に行い、校内でのナンパは禁止になる。

ついたたあだ名が、『チカン、変態、ナンパの横島』。第一高校始まって以来の問題児。

以上」

かなり偏った内偵結果の様だ。……ある意味間違いではないが千葉家の情報網は偏見の塊で出来ている。

「ちよーっつと!!なんじゃそら!!誰がそんな事を!!」

横島はそんな叫びをしていたが……エリカと幹比古はあちやーと言う顔をしていた。

「あく、これね。千葉道場に門人や練習生として通っている第一高校の生徒から聞いた話だから、ほぼ合ってると思うよ」

寿和はそんな事を平然と言い切る。これで刑事なのだから、日本の将来は暗い。

「父上。私が聞いていたのとは大分違うようです。確かに彼は変わり者の様ですが、人を傷付けるような行為をしないそうです。スキンスリップが少し過剰なだけです」

修次が横島を擁護する発言をする。

修次は摩利から横島について色々と聞いている様だ。

横島のうわべしか見ていない生徒とは違い、摩利は横島を理解して

いる数少ない人物である。

「イケメンくくく流石は摩利さんを落とすだけはある」

「すこし過剰!?何を言っている修次!!事もあろうかこの小僧!!同じクラスであることをいいことに、エリカにセクハラを散々行っていたと聞いているぞ!!しかも、脅し、屈服させているとか……この場でその首叩き切つてやるわ!!」

「えええくくく、ちよつと待つて!!」

「父上様、その、流石にそれは無いです。横島くんは確かにお調子者ですが、その様な事は致しませんし、今も友人として仲良くすごしております。……確かにたまにセクハラまがいな事をしようとしてはますが、私が撃退するので未遂で終わっております」

エリカも流石に父、丈一郎を止めめに弁明に回ってくれた。

「未遂だど!!エリカこんな奴にたぶらかされて……すまんかった。もっと早く内偵を入れ、お前を救わねばならなかった。不甲斐ない父を許してくれ。……そう言う事だ!!覚悟は出来ているだろうな?」

エリカの言動で余計に頭に血が上る丈一郎は、遂に刀を取り、抜きはらつてしまった。

どうやらこの父親、エリカを溺愛するあまり、他の事が全く見えていない様だ。もはや誰の言葉も聞く耳をもたない。

「ちよー！ー!!この暴走おやじなんとかしてー！ー!!」

「おやじ殿、こんなところで困ります。どうせやるなら、立ち合いの事故に見せかけないと……つて、あれ?なぜ殺人を犯すことが前提に?……待ったー！ー!!おやじ殿!!今日は本来、吸血鬼事件、悪霊の対処の協力体制についての話し合いの場ですよ!!なんでそんな事に!!」

寿和もようやく本来の目的を思い出し、丈一郎を止めにかかった。

「立ち合いの事故?そのために小僧に道着と袴をはかせたのだ!!吸血鬼事件??そんな事は後回しだ!!エリカの貞操を奪い!!蹂躪し、幸せな未来を奪つたこの腐れ外道を成敗してやるのだ!!」

丈一郎は止まらない。何故か、既にエリカが横島に蹂躪されている妄想まで入っている様だ。

そんな丈一郎を寿和と修次が体を張って止めにかかる。

「ひいえ〜」

横島は半泣き状態だ。

「父上様！私の友人を傷つけようとする父上様は大嫌いです！」

エリカがすつと立ち上がり、丈一郎を睨みつけていた。

「エリカ……う………ウオー……!! エリカが、エリカが、反抗期に

……エリカ——!!」

丈一郎は刀を落としガクツと両膝を付き、エリカの方へ向く。

「知りません」

エリカは継りつこうとする丈一郎から半歩下がり、体ごと丈一郎を背に後ろを向く。

そんなエリカの姿を見た丈一郎は動かなくなり、真っ白になっていた。

この後、丈一郎を寿和、修次、エリカで慰めたり、宥めたり、説得したりと大凡20分かかる。

「す、すまなかつた横島くん。少々取り乱してしまった。……エリカの事を今後頼む」

丈一郎はさつきと打って変わって、穏やかな表情になり、上座に座りなおす。

「あれ？まだ勘違いしたまんまじゃない？」

「横島くん……後で、僕達の方で話を付けるから、気にしないで話を進めよう」

修次も若干疲れた様子である。

そして、落ち着いた雰囲気です。丈一郎から横島に対して話を始める。「吸血鬼事件について、吉田家の協力の元、尽力してきたが解決へは一向に進んでいない。余りにも吸血鬼に対する情報も少なく、他組織との競合もあり、お互いに足を引っ張っていたのも分かっていった。」

そんな折のこの度の協力体制申し出は此方としても、魅力的に映

る。

ただ、我々にも、警察組織にもプライドがある。それを崩すまでの、効果や実利が本当にあるのかは疑問が残る。

何せ、旗頭である君は無名の一介の高校生だからな……」

「確かに、俺はただの高校生ですしね」

「千葉家では君の事を殆ど把握していない。エリカに聞いたのだが、なかなか要領が得なくてな……そこでだ。我々に君の実力を見せてくれ」

「えーとっ、どうすれば？」

「幸いにもここは剣術道場だ。君と我々の門人との模擬戦を行って見せてほしい」

「父上様、何度も申し上げましたが彼の实力は本物です。試合など無意味です」

エリカはどうやら、ある程度横島の实力を事前に話していたのだが、まともに取り合ってくれなかったのだ。まあ、そもそも横浜の封印解除状態の横島の件などのすべてを語ってないにしろ、信じろと言うのも無理があるような事ばかりなのだ。

「自らの目で確かめる」

丈一郎は頑として聞かない。

「ならば、父上様、私が彼の相手をいたします」

なぜかエリカが模擬試合の相手の志願をした。

「えー……！ちよ、エリカ？なんでそうなる？」

「一度、あんたとやって見たかったのよ。夏休み以降、はぐらかして、なかなか相手してくれないじゃない」

「少年、侮っては困る。エリカはこう見えても、千葉道場の荒くれどもを悉く叩き倒した実力者だ……エリカ、許可しよう」

丈一郎はニヤリとしながらエリカに許可をだす。

「ありがとうございます。父上様」

「あの、俺の意思は？」

この親子、最初から最後まで、横島の話など聞いてなどいないようだ。

この話し合いの場で、横島はまともな話など一度もさせてもらっていない。

横島とエリカと試合をするために、大道場へと場所を移す。

「エリカく、一番使いやすい武器使っていていいぞ」

「……横島、後悔するわよ。死んでも知らないから」

エリカは家人に愛用の日本刀とCADを持って来るように言いつける。

刀は横浜で使用した武装CAD一体型の大蛇丸ではない。ここで使用しようならば道場が破壊してしまうからだ。

家人からレオは日本刀とCADを受け取ってエリカに渡す。

「俺も一度、あいつとやって見たいよな。あいつは封印解かないみたいだから、何とかなるんじゃないか?」

「……何とかなる様な相手じゃない。今の私ではまだ勝てない」

「おい、おい、そんな弱気でどうするよ」

「でも……ちよつとは驚いてもらいたいわね」

エリカは実際に横島が、剣術や武術で戦っているところを見たことが無い。しかし、横浜の封印解除状態の横島を別にして、横島の剣術や武術に適したしなやかな肉体と、九校戦で見せた動きから、相当な使い手だと判断していたのだ。

「横島、あんたはまさか素手じゃないわよね?」

「まあ、陰陽師として来ているからこれだ」

横島は懐から短い木剣の柄のような物を取り出す。

カチツと言う音と共に、柄の内部から術式が刻まれた棒が伸び棍状となり、そして、術式の文字に光が宿り、棍の部分全体が青白い光に包まれる。

その光景に、丈一郎をはじめ、寿和、修次、稲垣も目を見張る。

「神通棍……やっぱり、あの時はおかしかったのよね」

エリカは入学して間もなくの頃、横島が神通棍の話をしていて事を思い出していた。

「お互い礼、……はじめ！」

修次が試合の合図をする。

エリカは加速魔法を使い一直線に横島に刀を突き入れる。

横島は、半歩斜め後ろに下がり避けるが、エリカはその刀を横に返し、避ける横島を薙ぐ。

横島は流れる様に円を描きエリカの後ろに回り、刀を避ける。

エリカも後ろに回る横島の反撃を予想し、そのまま前に受け身を取りながら、後ろに振り返り、刀を突きつける。

「エリカやっぱやるなく、実戦だったら、第一高校の大半の連中なんて足元におよばないんじゃないか？」

「褒めてもなにもでないわよ。……今のは私の最速の一撃だったのに……魔法も使わず軽々避ける」

「なに？俺を殺す気？」

「ふん、殺しても死なない様な男がよく言う」

エリカは上段の構えから、加速し横島に襲い掛かる。切り降ろすモーシヨンから、振り下ろすが、振り下ろすスピードを横島に肉薄するギリギリにさらに加速させる。一種のフェイントだ。

横島は後ろに急速に下がる。

エリカはそのまま斜め、上、下、横からの連撃を放つが、どれも剣先のスピードに緩急がついている上に途中で変化し、刀の切っ先を自在に方向転換させ、軌道を変えてくるのだ。細かい所だが、それも魔法を使っている様だ。さらに、その急激な変化に自身の体が行けるだけの鍛錬も普段から積んでいた。

「ふく危ない危ない、マジやっかいだな」

横島はそう言いながら、体捌きを大きくしエリカの連撃を避ける。

「なによ、反撃してきなさいよ！それともその神通棍はお飾り？」

エリカはそういつつ、大きく刀を振った後、間合いを取る。

大凡ここまで1分半。

「これって、退魔用の霊具なんだよな。だから、本来は悪霊とか悪魔用

……まあ、やり方はこうだ」

横島は神通棍に電撃の様に靈氣をスパークさせ纏わせる。

そして、横島はエリカに一気に迫りノーモーションで神通棍を振り下ろす。

エリカはそれを加速魔法を使って、後方に下がり避けるが、横島がそれに合わせ追撃。

エリカは神通棍を刀で受けるのだが……

神通棍に纏っているスパークした靈氣が刀を通しエリカに届き、エリカの体内に流れ込む。

「くっ!!」

エリカはその場で膝を付き、苦しそうにし、再度立ち上がろうとするが、膝が言う事を聞かない様だ。

しかし、表面上、エリカに傷やケガ等があるようには見えない。

「勝者、横島!」

修次は横島が勝利したことを宣言する。

その光景に、丈一郎は顔を顰めていた。

「ま、まだよ!!」

「ごめんエリカ……俺の攻撃はエリカの肉体にダメージを与えたんじゃないんだ。靈氣その物に作用させ、一時的に靈氣を……サイオン、そしてプシオンか……その供給と活動を阻止させ、感覚をマヒさせたんだ……悪霊や悪魔も同じ様な攻撃をしてくる。だから、魔法師では対処しきれない。……対人においてはエリカに敵う人間は少ないだろう。しかし、悪霊や悪魔に対しては正直言つて無力だ。……それはエリカだけじゃない。魔法師全体に言えることだ」

横島が行った攻撃は、その昔美神が多用していた神通棍で悪霊をスタン（行動不能に）させる攻撃だった。

横島は千葉道場の面々に悪霊や陰陽師の戦いを知ってもらったと同時に、エリカにも身をもって悪霊との戦いとはどういうものかと再度体験させたかったようだ。

この前のミアに憑りついた悪霊との戦いであの場でエリカは何も出来なかった事に、ましては、美月に助けられた自分の不甲斐なさに

悩んでいた。

最近のエリカの不機嫌さの大元はそこにあつた事と横島は見抜いていたため、このようなやり方で、エリカを諭そうとしたのだ。

膝を付いたまま悔しそうに項垂れるエリカに横島は手を差し伸べる。

「しかし、何とかする方法はある。エリカは魔法師である前に剣術家だ。太古の武士は鬼退治も行っていたんだ。剣術でも鬼を退治する方法があるって言う事だ」

「ふん、ちゃんと教えてくれるんでしょね？」

エリカはそう言つて横島の手を取る。

「……確かに、そう言う事ならば、魔法師には対処が難しいかもしれないね。……なるほど……しかし、君の剣術と体術も凄まじいものがあるね。エリカを手玉に取つていた。流石はあのルウ・ガンフウを魔法を使わずに圧勝しただけはある……次は是非僕と手合せしてくないか？」

修次は横島にそう言つて、試合を申し込んだのだ。

「なに!?それは本当なのか修次?聞いていなかったぞ!」

丈一郎は驚いていた。

横島がルウ・ガンフウを単独撃破をした事を知らされていなかったからだ。

「エリカとの試合で、分かつてくれたんじや」

「いいや、十分わかった。だからこそだよ。僕はね。摩利から君の事を、ルウを倒した事を聞いて以来、君と戦つて見たかつたんだ」

修次はさわやかな笑顔ではあつたが、目は真剣そのものだった。

その頃、四葉家では……

四葉家当主、四葉真夜は次の一手を思考していた。

(深雪さんからの報告で、横島くんが帰つて来たのは知っていたのだ

けど、まさか、USNAにも伝手があるなんて……しかも、あの天災
錬金術師ドクター・カオスとお友達とか……いいわ、彼)

(達也さんも余計な事を、USNA軍、七草・十文字家、警察組織の千
葉家に協力関係を持たすなんて、此方も動きにくくなるわ……まあ、
上手く行くとはい底思えないけど……)

これで、USNA軍も容易に達也さんに手が出せなくなったわけだ
し、結果としてはいいのかしら?)

(貢さんが横島くんバレちゃったから、東京で動きにくくなったわ
ね。

しかも彼、パラサイトについてかなり詳しく知っている様だし……
何か執念のような物を感じるわ……パラサイトの事で余計な手出し
をすると、嫌われちゃうかも

達也さんもその協力関係に入るようだし、達也さん経由で此方がコ
ントロールするのもいいのかも……でも、横島くん勘がいいし、バレ
ちゃうかしら?)

横島の介入で当初の計画が完全に狂ってしまったが、何故か楽
し気な真夜だった。

151話 横島 千葉家に行く!!その3

本人の申し出で、エリカの次兄で渡辺摩利の恋人である千葉修次と模擬試合をすることになった横島。彼はしかも『イリユージョン・ブレード』の異名を持つ世界的に名が通っている剣術家であり魔法師なのだ。

「シユウ頑張つて、無理しないでね」

「摩利は心配性だな、模擬試合だよ?」

修次は顔をほんのり赤める摩利と目を合わせ微笑みながら愛刀を受け取る。

傍から見ると美男美女カップルの微笑ましい一幕に見える。

「うがー!!摩利さんの目がハートになってるっ!!イケメンめ!!
見せつけやがって!!」

今、千葉家敷地内にある野天練習場の端で横島は対面端の摩利と修次を嫉妬の炎を目に宿し見据えていた。

修次の提案でこの野天練習場で模擬戦を行う事になった。この野天練習場は林に囲まれており、外部から見ることが出来ない。秘剣の練習などを行う際、外部に流出しない様にと作られた練習場だ。30m×20m程度の広さがあり、途中に何本か木がそのまま植わっている。

千葉丈一郎、寿和、エリカそして特別にレオが、併設している壁の無い8畳程の休憩所目的で作られた木造建屋に座り様子を見ている。

稲垣が練習場の中央で立ち、審判役をやるようだ。

「お互い中央に」

「横島くん試合を受けてくれてありがとう。陰陽師の力を存分に体験できるよ」

そう言つて修次はさわやかに横島に握手を求めぬ。

「ふっふっふっふ、それはどうも、イケメン兄さん。真の陰陽師の恐

ろしさを究極の術を持ってその身であじわうがいい」

横島はドス黒い笑顔で握手を交わす。

「……お、お手柔らかに」

「お互い、位置について」

稲垣が両者下がるように言う。

「……待った。お互いもっと遠くから始めませんかね、せっかくこの広さがあるんだから」

横島はそこで提案をする

「それもそうだね」

（かかったな!!イケメン!!）

「では、お互い位置に着いたら手を上げて下さい。両者揃ったところで開始の合図をします」

稲垣はルール変更に対応する。

横島は練習場内に幾つか生えている大きな杉の木に近づき、懐から蠟燭を二本取り出し火を付け、頭のバンダナに挿した。

そして、さらに懐から何やら取り出し、左手には奇怪な藁で出来た人形、右手には太い五寸釘と槌を持つ。

（ふははははははははははっ!!イケメンめ!!味わうがいい!!この横島が夜な夜な、呪怨を唱えながら呪術を一本一本に我が怒りと嫉妬の炎で煮えたぎる血を混ぜた墨で書きすり込みし藁!嫉妬に狂った男どもが夜な夜なその鬱憤を晴らし心の叫びを受け入れる専用井戸の水に浸した藁縄!出来ちゃった婚をしたアイドルファンの血と涙をしみこませた和紙で出来た呪いと書いた和紙を張りつけ完成させた究極の呪いの藁人形……横島嫉妬スペシャル呪殺王人形!!

そして、嫉妬狂いの龍神が吐いた炎で錬成した真鉄で出来た五寸釘、五寸釘怨我（オルガ）!!

完璧だ!!

さらに、7回妻に逃げられた工匠が作ったと言われる憤怒の槌で、

釘に槌を振るう。

しかし、そんな横島にうしろから爽やかに声を掛ける人物がいた。
「横島くん？何やってるんだい？」

「今、いいところだから!!あとでな!!ふはははははっ、このこの、イケメンめゝあそこを使えなくしてやる!!」

「おーい、って、試合中なんだけど？」

「何見てんだ、試合してんだろぅが!!……ってあれ？」

横島が再度声を掛けてくる人物にうっとおしそうに振り返るが

……

そこには爽やかな笑顔で此方を見ている修次がいた。

「あれ？あれれ？あれれれれ？あのゝ、股間痛くないっすか？」

「君、こんな時に何を言っているんだい？相変わらず面白いね」

修次は全く何ともなさそうだ……であれば、あの叫び声は……

横島はハツとして、木造建屋の方へ振り迎えると。

そこには、股間を抑え悶絶し白目をむいて泡を吹いている丈一郎と寿和が転がっていた。

そう、さつきからの叫び声は丈一郎と寿和の物だった。

そのすぐそばには、顔面黒々とした凶悪な笑顔でそんな二人を眺めているエリカがいた。

そして、その笑顔のまま目を光らせ、横島に視線を合わせてきた。

「ひいー」

横島は余りの恐ろしさに身震いをし、後ずさるが……

横島の肩に手が乗る。

「なあ、横島ゝ、これはなんだ？」

いつの間にか横島の後ろを取り、目が据わり怒りの形相の摩利が、五寸釘怨我が股間に刺さった嫉妬スペシャル呪殺王人形を片手に横島に問いかけていた。目が据わった状態で普段よりもゆっくりとした口調で話しかけてくるからよけいに怖い。

「あばばば……」

「何だと聞いているのだ？」

「はいいい!!あ、あれ?な、なんですかね。こ、この不気味な人形は?この道場のオブジェ?」

「ほーう?」

いつの間にか、凶悪な笑顔をしているエリカが摩利の横に居た。

「へへ、この釘をこうすると」

エリカは摩利が持っている人形の股間に刺さった五寸釘をグリグリと回す。

「はべべっ、ほごご!!」

遠方で丈一郎と寿和の悶絶声が聞こえてくる。

「ふーん。なるほど〜これ私でも使えるんだ〜」

エリカの凶悪な笑顔がさらに歪む。

「な、なんのことでせう」

「知ってるんだぞ〜、達也くんから聞いていたからな……九校戦閉会式のダンス前、一条将輝に使っただろ?」

そう横島は、九校戦の閉会式の際、第三高校一条将輝のイケメンぶりに嫉妬し、呪いの藁人形を使ったのだ。その際、その人形は摩利に見られていた。

今回の人形はその時の能力は比ではない。今回の人形は横島が陰陽術の粋を使い完成させた究極の呪いの人形だ。一般の人間でも効果が発現できるレベルの代物なのだ。

しかし、今回どこでバレた?

実はこの模擬試合前、エリカが試合で使用する道具の持ち物検査を申し出ていたのだ。

女の勘なのだろうか……いつもはそんな事はしないのだが……

横島は修次との試合を渋々受けたのだが……摩利といちゃつく修次を見て、究極の呪いの人形を使う事を決めていた。

横島は、神通棍と札類、そして呪いの人形セットをだす。

横島は人形について、使い方など誰も知らないだろうと高を括っていたのだ。

しかし、摩利が九校戦の後、達也にあの人形について、何気なしに聞いていて、達也も起こった現象を素直に話していたのだ。

横島がトイレに行っている間、摩利がたまたまエリカが横島の持ち物を検分しているのを見て、呪いの人形を見つけてしまったのだ。

そして、二人は呪いの人形からはみ出ている毛を見て、修次の物だと判断したのだ。恋人とブラコンの力なのだろう。

事もあるうか、エリカはその毛を呪いの人形から取り出し、丈一郎と寿和の毛を入れ込んだのだ。

そして、今……

「横島、観念しろ、お前の所業は既にバレている。それでシユウの……大事なゴニヨゴニヨ……を……」

摩利は最初は目が据わっていたが、途中から急に顔が真っ赤になる。

「修次兄様に何てことを……使えなくなったらどうする気かな？」

エリカは凶悪な笑顔のまま横島に迫る。

「……あのくエリカさん？お父さんと、髪の毛モジャ兄さんはいいの？」

「別にいいわよ、あんなのは……」

泡吹いて気絶している丈一郎と寿和は哀れにも、エリカにあんなの扱いをされている。

「横島、貴様をどうしてやろうか!!」

摩利は既に横島を殴る気満々である。

「……待ちなさい。もっといい方法があるわ」

エリカはそう言って摩利を制し、横島の髪を無造作に引っ張り10本程抜く。

「横島……この髪の毛をこの気色悪い人形に居れて、学校の玄関に置いてくんの……『この人形の釘をこの槌で叩くと横島は必ず呪われます』って書いて……もう一筆必要ね。『リーナを救おう変態から』って書いておこうかしら……ボーイフレンドの横島くん」

エリカが凶悪な笑顔で言った提案は横島最大のピンチを招きかねない。そんな事をしたら、嫉妬の力により何倍にも増した強力な呪詛が横島の股間にダイレクトに伝わる事間違いないのである。

「それはいいな、真由美からも聞いているぞ。なんでも金髪美女がお前に纏わりついて、全校男子の嫉妬がお前にむいてるとか……クックツ」

摩利もその提案に同意する。

「はががが……あがが、あの……、すいませんでした!!!!!!」

横島はエリカと摩利の言葉に学校で呪殺王人形が使われることを想像すると……死より恐ろしい拷問に遭う事を理解した。

横島はその場でジャンピング土下座を敢行する。

「ごめんですんだら警察いらさないよね」

「風紀委員も不要だな」

「もうしません!!ご勘弁を……!!」

涙をチョチョ切らせながら頭をコメツキムシの様にバツバツと下げ続ける横島。

「摩利もエリカも、もういいんじゃないか?横島くんも多分、陰陽師と悪霊の恐ろしさを教えてくれるために善意でやってくれたのだと思うよ。やり方は過剰だけど……」

修次は苦笑しながら、摩利とエリカを止める。

「イケメン……、やっぱいい奴だろゴメンよ……」

「修次兄様は甘い!!横島は修次兄様に悪意だけを向けていたのよ!!」

「シユウ、こいつはこれぐらいしないと懲りない奴なんだ!!」

エリカと摩利は修次に思いつき反論する。

「取り合えず、その、悪霊とか陰陽師の力はわかったから、目的は達成だよ。だから、もういいじゃないかな?」

修次はさらに説得をするのだが……

「兄様、私の気が収まらないの……」

「シユウ、私はこいつを先輩として少々指導しないとイケないのでな……」

そして、横島は肉屋に売られて行く子牛のような目をしエリカと摩利に引きずられ、林の中に消えていった。

その後、横島の断末魔が絶え間なく聞こえたとか……

今回の一部始終を啞然と見ていた幹比古とレオは……

「女の人って怖いね……」

「ああ、しかし、エリカの奴が特別だと思いたい……」

さらに、股間に最大級のダメージを受け、気絶している丈一郎と寿和はしばらく放置されたとか……

そして、翌日、協力体制について、エリカからOKの返事を聞く事になる。

丈一郎は布団の中で二つ返事で頷いたとかなんとか……

ここで千葉家との正式な契約がなされたのだが……釈然としない。

あの呪いの人形、横島嫉妬スペシャル呪殺王人形はジャンケンの末、渡辺摩利が大切に保管しているそうだ。

修次に……将来使われない様に……祈るばかりである。

152話 横島 ついに来たバレンティンデー!!その1

七草家のキッチンの前で髪型は異なるがそれ以外は瓜二つの双子姉妹が中の様子を訝し気にコソコソと覗いていた。真由美の妹達で、現在中学三年生、今年の四月から二人共第一高校に入学する予定である。

ボーイツシュで快活そうなショートカットの子が姉の香澄。大人しそうな雰囲気ですりより少し長めに髪を切り揃えている子が妹の泉美。

「お姉ちゃんがキッチンに入って鼻歌交じりに何か作ってる」

「香澄ちゃん、チョコみたいですね。明日バレンティンデーだから」

「あー!なんかクネクネしでした!!顔も赤くなってる!!ま、まさか特定の男に!!」

「落ち着いて香澄ちゃん。聞こえちゃいますよ」

「お姉ちゃん、ゼーったい、その男に騙されてるんだよ!!ボクたちが阻止しないと、泉美!」

「香澄ちゃん、落ち着いてください」

真由美はキッチンに入り、慣れない手つきで調理器具を扱っていたが、楽し気に鼻歌交じりにバレンティンチョコを作っていた。

香澄が言うように、時々手が止まり、何も無い天井を見つめて溜息をついたり、急に両手を頬に充てて、顔を赤らめクネクネしたり、拳を握りふっふっふつと暗い笑顔をしたりと、何も知らない他人が見ると情緒不安定で病院に行くことを勧めるレベルだ。

そして、思い出したように真由美は情報端末を取り出し電話を掛ける。

「もしもし、七草真由美です」

「夜分にゴメンね。明日の夕刻、例の件で家に来てもらっていいかしら?」

「風紀委員の活動が終わってからでいいわ。学校にお迎えの車も寄せ

ておくから……」

「ありがとう横島くん。では明日学校で……おやすみなさい」

電話の相手は横島だった。明日、対悪霊対策の協力体制の件で七草家で打ち合わせをするために連絡したようだ。

電話を終えた後、真由美は溜息をついてから、先ほどの様に情緒不安定な様相を繰り返しながら、チョコ作りを再開しだした。

明日はバレンタインデー、手作りチョコを誰かに振舞うのだろうか？

「泉美……横島っていう男を軽く半殺しだね……」

「香澄ちゃんダメですよ。そんな事をしたら」

「横島!!誰だか知らないけど、お姉ちゃんに触れてみる!!ただじゃ置かないんだから……明日、家に来るって言ってたね。……ボクが思い知らせてやる!!」

「香澄ちゃん……」

翌早朝、第一高校、駅からの通学路

「真由美さん、おはようございます!」

「あつ横島くん、おはよう、今日の放課後はよろしくね、それと……」
「どうしました?」

「なんで、貴方が朝から横島くんにくっ付いているのかしら?」

真由美は口元をヒクヒクさせながら言う。

「こうしていると暖かいからに決まっていますよ、特にタ・ダ・オは」
そう言っつて横島の腕にしがみ付いているリーナは頬を横島の肩にくっ付ける。

日本の2月は寒い、しかもこの100年地球全体の気温が年々下がってきているため余計だ。

いや、そう言う問題ではなかった。

今も、この風景を見ている通学中の男子生徒は、怨念のこもった視線を横島にそそいでいる。

「……アンジェリーナさん、著しく風紀を乱しておりますし、他の生徒にも示しがつきません。そう言う事は、学校ではしてはいけません……もちろん学校の外でもですけど」

真由美は冷静にリーナに注意をするが、最後は誰にも聞こえない程の小声で言っていた。

「今は学校の外よ」

リーナはシレっとそんな言い訳をする。

「通学中は、学校教育の一部です！」

「リ、リーナ流石に歩きにくいから、離して」

横島はこの頃、リーナの過剰なスキンシップに困っていた。……というよりも悪意のこもった男子生徒の視線に困っていた。そろそろ何やら行動にでられ、実害が出てもおかしくない状態まで雰囲気が行ってきていたからだ。

「うん……タダオがそう言うなら仕方ないわ」

リーナはパツと腕を離すが、肩と腕が触れ合った状態である。

「はあ〜」

真由美はその様子に盛大に溜息を付く。

「横島、リーナもおはよう……あ、七草先輩おはようございます」

「横島さんとリーナさんおはようございます。七草先輩おはようございます」

「横島、おはよ……七草先輩おはようございます。……リーナもね」

そこに、幹比古、美月、エリカが合流しそれぞれ挨拶をするのだが、エリカは七草先輩とリーナを見て、ワザとらしい挨拶をする。

「よっ」

「皆、おはよう」

「おはよう、みんな」

横島も軽い挨拶をし、真由美とリーナも笑顔で挨拶を返す。

「横島、昨日あれだけ痛めつけたのに、あんた傷一つないわね。流石ね……親父や、兄貴は寝込んでいるわよ」

エリカは横島に近づき、昨日の事を小声で話す。

「当然!!女性から受けた痛みなど、ましてや摩利さんから受けた愛の鞭など、いつでも、受け入れる準備がある!!傷など一瞬で治る!!……って、あれくく?お父上様、兄上様じゃないの?エリカお嬢様っ!」

横島は当然だと言わんばかりに、そんな変態な事を主張するが、その後ニヤつとしエリカに反撃をする。

「わっ、忘れなさい!!あれは私であって私じゃないの!!私のキャラじゃないのよくく!!美月くくそうよねくくく横島がいじめるく」

エリカは顔を真っ赤にして、横島に反論するが何時もの迫力が無い。美月に泣き真似をしながら胸に飛び込む。美月は苦笑するしかない。

「うっしっしっくくしかもく、修次兄・上・様あくくくくん!……全然深雪ちゃんの事が言えないくくく、はっはっははっはっは!!この重度のブラコン娘2号め!!深雪ちゃんと二人でブラコンシスターズ誕生じゃ!!」

「いーーーーーやーーーーー!!深雪と一緒にしないで!!私は違うの、あれは違うのよ!!」

「修次・に・い・さ・まっ!!」

横島はくくぞと声を大にして言う。

「深雪とは違う!!違うの!!……はあーはあー、……こうなったら、あんたを殺して!!私も死ぬーーーー!!」

エリカは羞恥心で顔を真っ赤にして、ゆでタコの様になり錯乱していた。

「ふはははははっ、その声を聞いたかったのだ!!」

横島はエリカがつかみかかってくるのをサラリと避けて、物凄く満足そうに大声で笑う。

「朝から騒がしいな横島」

「みんな、おはよう。七草先輩おはようございます」

達也と深雪が合流し挨拶をする。

各人が司波兄妹に挨拶を帰した後、深雪が

「なにやら、私の事を話していたみたいだけど、何かしら?」

こんな事を聞いてきた。

「よくぞ聞いてくれた。喜べ深雪ちゃん!!君に同士が出来たのだ!!」

「??」

「ちよつ横島!!やーめてーロー!!」

「実はエリカの奴、普段のは猫かぶりで……フゴフゴゴツ……ぷはっエリカ!息が出来んぞ」

エリカは横島の口を後ろから両手を回し思いっり塞ぐ……横島の鼻まで塞いで閉まっていたため、

エリカの手を強引に振りほどく。

「言わないで……」

エリカは涙で目を潤ませながら上目使いで弱弱しく言う。

ガガローーン!!

横島に衝撃が走る。横島はそんな姿のエリカを見たことが無かった。

(アレ?エリカってこんなに可愛かったけ?アレ?……なんだこれ?)

実際エリカは見た目は美人なのだ。学校内でも五指に入るだろう位の。

圧倒的には深雪と今はリーナがいるのだが、その2人の次には入れるだろう容姿を持っている。好みによっては快活なエリカの方に軍配が上がるだろう。

ただ、性格がアレなのと普段からつるんでいるため、横島はエリカをそんな見方で見たことが無かったのだ。

「あの、その、ごめんエリカ、調子に乗り過ぎた」

横島はそんなエリカの姿に戸惑いながら素直に謝ったのだ。

「グスッ、」

エリカは涙ぐみながら深雪に寄り掛かる。

「横島さん、エリカを泣かせるなんて、何をやらかしたんですか?」

「いや、その、なに?、うう、すみませんでした!」

話しの流れが理解できていない深雪にそう言われたのだが、横島は頭を下げるしかなかった。

エリカはそんな横島をチラッと見て、深雪の胸で泣きながら、美月に向かって舌をペロツと出す。

何処まで本当に泣いているのか、それとも最初から泣きまねなのか分からない。女の涙ほど怖いものは無い。

達也はそんな、横島とエリカ、深雪のやり取りを見て、何となく理解したのだろう。深く溜息を付く。

リーナは面白くなさそうに少し口を尖らせ、真由美はそんな光景を苦笑しながら見ていた。

校門前に近づくと、ほのかが此方に手を振って、近づいてくる。

「おはよう。みんな。七草先輩おはようございます」

それぞれがほのかに挨拶を返す。

「横島さんハイ、これバレンタインチョコです」

綺麗に包装された小さな箱を横島に渡す。

「え?……バレンタイン?……今日か……しかも俺に?いいの?」

「いいんですよ。横島さんにはいつも助けてもらってますから!」

ほのかはニコツと微笑みそう言った。

「うおおおおおお!!まともなバレンタインチョコを初ゲット——

——!!ありがとう、ほのかちゃん!!」

横島は大げさにめちやくちや喜び、ほのかの両手を取る。

「あの、横島さん、喜んでもらってアレですけど、一応義理チョコですよ?」

ほのかは、横島の喜び様に戸惑う。

「義理でも何でも嬉しい!!悲惨な思い出しかなかったから、ううううっ!」

そう、横島は過去、バレンタインには悲惨な目にしか合っていない。常人だと軽くトラウマになる様な……

ほのかはその後に、幹比古にも渡すが……小箱の大きさが、横島のに比べると半分くらいだ。

「ありがとう、光井さん」

それでも幹比古は素直にお礼を言う。

そして……

「た、達也さん、これ、受け取ってください」

緊張した面持ちで達也にチョコの入った箱を渡す。

「ああ、ありがとう。ほのか」

達也そう言っただけで受け取った箱は、軽く横島に渡したものの倍の大きさがあつた。

「それ、手作りなんです」

ほのかは顔を赤らめて言う。

「……………ほのか？それはどういう意味かしら？」

それに反応したのは、達也ではなく、深雪だった。

「どうって、達也さんには、九校戦のCADの調整から、いろいろとお世話になっているからよ……………深雪、なにかおかしい事でも？」

「いや……………ほのか、その箱の大きさが…手作りって……………その、深雪の前で堂々とよく平気ね」

エリカはほのかの行動に流石にビビっていた。

「ウフフフフツ、そう、ほのか、そういう事なのね」

深雪の笑顔が怖い。

「深雪程でも、ウフフフフツ」

そう言っただけでほのかは深雪に微笑み返す。

「どうやら、ほのかは前から達也の事が気になっていたのだが、好きな相手だと認識し始めた様だ。」

横島はどちらかと言うと兄枠、幹比古はもちろん友人枠

「美月、アレはどういう事？なんでバレンタインにチョコを渡すの？」

リーナはほのかの行動と深雪の嫉妬の理由が分からなかった。U S N Aではバレンタインに女性から好きな男性にチョコを渡す習慣がないからだ。

「リーナ、日本ではバレンタインデーに、女性から好きな男性へとチョコを渡して愛の告白とかもする日なの、一般的に手作りを渡すと喜ばれます。習慣的に、お世話になつていてる男性へも、義理でチョコを渡

したりするのだけど……」

美月はリーナに丁寧に説明をする。

「そ…そんなー!」

リーナは嬉しそうにほのかのチョコを手に持っている横島を見て、シヨックを受ける。

「ほのかさんのはたぶん、横島さんへは義理チョコだと思う。ちよつと大きめですけど」

美月はシヨックを受けているリーナに追加説明をする。

「こうしては居られないわ。タダオ!用事が出来たわ!!お昼休みには食堂に居てね!!」

リーナはそう言って、駅の方へダツシユして行ってしまった。

「おーい、リーナ学校は?…行っちゃった……」

ほのかと深雪がニコニコ?と向かい合っている中。

「まあいいわ後で渡そうと思ってたけど、あんた達、はい」

エリカは横島と幹比古、達也にチョコが入っている同じ包装の小箱を渡す。

「エリカありがとう」

「ありがとう」

「まじ!!エリカ!!俺にもくれるの?エリカ…いい奴だく、さつきはごめんよ」

幹比古、達也、お礼を言うが、横島は涙目でエリカに感謝している様だ。

「勘違いしないでよね。義理だからね。特に横島!!あんたはついで!」

エリカは顔を赤らめながらツンとそう言った。

美月も、ゴソゴソと取り出し、ここに居る男3人に綺麗にラッピン
グしているチョコクッキーの包みを渡す。

「いつも、お世話になってます」

どうやら手作りクッキーの様だ。

「ありがとう美月」

「美月ちゃんまでくっありがとう。この横島!!バレンタインデーを作った奴を恨んでいたが、たつた今、歓迎すべき日に変わった!!」

「柴田さんが僕にも……嬉しいよーありがとう!」

達也は淡々としていたが、横島はテンションが上がりっぱなしだ。幹比古は人一倍嬉しそうに、そのクツキーを見ていた。

深雪も一通り、ほのかと静かにニコニコ?と視線をかわしてから、横島と幹比古にチョコを渡す。

「吉田君も横島さんもありがとうございます。お兄様と今後も仲良くしてください」

「ありがとう、司波さん」

「ぐすん、ありがとう深雪ちゃん」

幹比古と横島は礼を言う。

「あと、これは西城さんに渡してくださいね」

そう言っつて、深雪は横島にこの場に居ないレオに渡すべきチョコを託す。

「横島さん、私の分もいい?」

そう言っつて、ほのかも横島にレオの分のチョコを託す。

「この横島!!必ずや、レオにチョコを渡す役目を果たしましょうぞ!!」

横島はテンションが上がったまま返事をする。

こうして、校門に入ってから、横島一行は、真由美と、そして、深雪とほのかと別れ、E組に向かう。

別れ際、真由美は何故かそわそわしていた。

リーナはどっかに行っただまだ。

しかし、E組の教室の前まで到着したテンション高めの横島を先頭にエリカ、美月、達也、幹比古が見たものは……

教室の扉から廊下にかけて人の列が並んでいる光景だった。

しかも全員女生徒……

153話 横島 ついに来たバレンタインデー!!その2

E組の教室の前まで到着したテンション高め横島を先頭にエリカ、美月、達也、幹比古が見たものは……

教室の扉から廊下に溢れんばかりに出来た人だけだった。

しかも全員女生徒……

「なんだ？」

「なんでしようね？」

横島と美月は疑問の声を上げる。

「これじゃ、教室に入れないわね……横島、様子を見に行くわよ」

「お、おう」

エリカは横島を引っ張り、女生徒の人だかりの中に入り込もうとするが、隙間が無い。

そこでエリカはとんでもない作戦に出る。

「横島が来たわよー！ー！！そこをどかないと知らないわよ!!」

横島を前にしエリカがそう叫ぶと、女生徒は一斉にこちらを見て、横島の前から女生徒達はサーッ引いて行き、そこに隙間が出来て行く。こうして教室の中まで道が出来上がった。

エリカは横島をモーゼの杖に、女生徒を海に例え、道を作ったのだ。題して「横島で女性の海に道を作る絵画」がここに完成した。

『ちかん、変態、覗きの横島』と普段から女生徒に恐れられている横島だからこそ出来る代物なのだ。

「エリカ……俺、普段からそんなに酷い？」

横島は涙を流しながらエリカに聞く。

「……それほどでもないけど、イメージはバッチリね!!」

エリカは横島にいい笑顔でグツトのサインを出す。

エリカと横島は並んで立った状態で固まったままだ。

始業時間の予鈴が鳴ったところで、女生徒たちが引き、ようやく、エリカと横島は再起動する。

「レオ!! あんた!! 何なのよ!! 何これ!!」

「レオ!! お前は俺の仲間だと思ったのにー!! イケメン組だったとは!!」

エリカと横島はレオに勢いよく迫り、叫ぶ。

横島の言動はおかし過ぎる。どこがどう見ても横島とレオは違うのだが……

「はあ? 何言ってるんだよ、チョコに決まっているだろ? バレンタインデーなんだからよ」

レオはそんな事を平然と当然の如く言ってくる。

「チョコの数よ!! 数!! あんた、なんでそんなにモテてるのよ!!」

「数? …… ああ、この一袋は、学校に来るまでになんか貰った。後の二袋はさっきの行列だ」

平然と言い切るレオ。どうやら、レオは第一高校に来る前、中学でも同じ状況だったのだろう。

レオがモテるのは何となくわかる。レオは快活なイケメンなのだ。人当たりも良く、面倒見もいい、誰にでも優しいし、しかも誰にでも気さくに話しかけ、屈託のない笑顔を向けるのだ。

それにときめかない女子は居ないのだろう。天然的に女性を引き付ける要素が満載なのだ。

エリカもそれに対なす快活美少女なのだが……性格がややこしいためここまでモテない。

「……………う、うううう、レオ……、お前なら俺の夢をかなえられるかも知れない。美女に囲まれて、爽快に歌を歌う事を……」

「はあ? 俺だけじゃないだろ。達也だって、幹比古だって……ほら、お前だって……」

レオは横島がしよげて泣いている姿を見て、そんな事を言う。

しかし、達也と幹比古はわかる、結局彼らも、紙袋1袋程度のチョコ

コを貰ったのだから……しかし横島は？

レオはその後、横島机を指す。

すると横島の席にも小箱やらなんやらが、山盛り一杯になっていった。

「げー横島まで？」

エリカはその山盛り一杯の物を見て盛大に驚くのだが……

しかし、横島の机の上の山盛りは何かが違う。

確かに小箱や包みが崩れんばかりに山盛りに置いてある。

レオ達が女生徒達からもらったチョコの小箱は綺麗な包装紙でラッピングされ、女の子らしい可愛らしいリボンが付いている。包みも同じくだ。

横島の机の上に置いてある小箱は……良く言えば和風、箱一面に漢字一文字でデカデカと書かれていたり、文字が書かれた白紙張られているものが多い。字もなぜか赤字で書かれていたりするものがほとんどだ。

悪く言えば不吉としか言いようがない。デカデカと書かれた一文字は「呪」が一番多く、次に「殺」その次に「爆」「死」「滅」「腕」等が続く、実におどろおどろしい雰囲気を纏った小箱や包みは、バレンタインデーのテーマである「愛」などひと欠片も無く、憎悪や悪意しか伝わらない物であった。

「……これは……」

その時、E組の生徒全員の情報端末と教室黒板風スクリーンに1限目が休講になり自習時間になる事を告げる。魔法訓練機器の故障が原因らしい。

横島とレオに幹比古、達也、エリカ、美月達は悪意と憎悪で出来た小箱や包みの山が置いてある横島の机を囲む。

「たははははっ、モテモテだなー……はっはっはーはあ」

涙チョコチョコ切らせながら乾いた笑いでそんな事を言う横島には同情の目を送るしかできない。

連日リーナに過剰なスキンシップを受ける横島への嫉妬心から来る嫌がらせだろう事は

中身を見なくても分かる。

そして皆は、その小箱の処分をどうするか決める。

取り合えず中を開けて、バレンタインチョコなのか、嫌がらせの呪い小箱なのかを精査することにした。

「みんな、すまん。こんな事に付き合わせて……ありがとう」

横島は心の底から皆に礼を言った。いや嬉しかったようだ。

横島は100年以上前の学生時代や私生活においても同じような事があったが、結局片づけや対応を一緒にしてくれたのは絹だけだったからだ。

「まあ、なんだ。こんな事もあーな」

「横島は普段の印象が何故か良くないからね」

「お前との付き合いだ。こんな事も想定済みだ」

レオ、幹比古、達也は呪い箱等を開けながらそう言って、横島を慰めている様だ。達也の言いようは余りにも不器用だが……

エリカも最初は気持ち悪がっていたが、呪い箱の一つ二つ開けてみて手紙を読み。シャレにならない事を痛感し、憤っていた。

美月も数個開けて、中身を確認したところで、バンと机を叩き立ち上がり。

「なんて、心ない事をする人たちでしょう！横島さんが何をしようのうのでしょうか！！陰険かつ矮小な行いを恥ずかしいとは思わないですか！横島さんに対する嫉妬をこんなくだらない形でしか表せないなど、こんな幼稚な行いを平然と行う人間が同じ校内に居るだけで腹立たしい！！クラスの皆もこれを置いて行った人を見たはずです！！なぜ止めなかったのですか！！」

美月は本気で怒っていた。

普段は温厚で大人しい美月がこれほど怒気をはらんでいる姿をクラスメイト。いや、エリカや勿論横島達さえ見たことが無い。

クラスメイトはその形相に恐れを無し、言葉が出ない。

勿論エリカもだ……

「み……美月？」

「美月ちゃん……ありがとう。俺のために怒ってくれて、まあ、俺も悪いところあるから、クラスの皆が悪いわけじゃないし……その辺で」「いいえー！言わせてもらいます!!横島さんにリーナさんが明らかに好意を持ち、過剰なスキンシップをしているのを気に食わないということで、こんなくだらない事をしているのです!!リーナさんは美人で魔法も勉強も優れ、普段は大人びた素敵な人です。男子は皆そのリーナさんに憧れや好意を抱くのは分かります。しかし、そのリーナさんがなぜ横島さんに好意を抱いているのかを考えもせず!!ただ自分の嫉妬心を稚拙な嫌がらせで横島さんに当たっているだけの事です!!」

リーナさんは横島さんがこの第一高校の誰よりも魅力的に見えたから!!素敵だと見えたからではないのですか!!ならば、横島さんより魅力的になる努力をし、リーナさんを振り向かせばいい事では無いですか!!そんな努力もせず、横島さんに嫌がらせする事だけを考えるなど、自分が既に負け犬だと認めていると同然です!!そんな輩にリーナさんが、いえ、心ある女性が振り向くとは到底思えません!!」

美月は肩で息をしながらこう言い切り、そのまま席に座り、再び呪い箱の精査を行いだした。

クラスの皆や、横島を含む何時もの面々はその美月の弁論に圧倒され、言葉が出ない。

しばらく、教室内は静寂で包まれる。

「……美月、怒らせるとやっぱ怖いわ、聞いている私でさえビビるし、しかもぐうの音も出ないぐらいの正論だし……」

エリカはこの普段は温厚で大人しい親友を絶対に怒らせまいと心で誓うのであった。

「そう?エリカちゃん、普通だと思っただけど……」

「柴田さん!カッコイイ!!感動したよ」

幹比古はそんな美月をキラキラした目で見ていた。

「おい達也、裏ボスはお前だと思っただけど、美月だなこれ」

「……そうだな、深雪より美月を怒らせない方が良いらしい」

レオと達也は耳元で小声でこそこそと話し、意見が一致したよう

だ。

「美月ちゃんごめん、嫌な思いさせてしまつて………そして、ありがとう」

横島は再度美月に頭を下げ、横島は感謝する。横島は涙が出そうだが我慢していた。ここまで言つてくれる人はかつて何人居ただろうか？思えば、ルシオラや絹、小竜姫ぐらいだろう。

「横島さんは優しいから……でも、ちゃんとリーナさんの事も考えてあげて」

「いや、リーナの場合、ちよつと特殊というか、友達が俺だけだし、USNAの時からあんなかんじだったから、マリアによく怒られていたよ」

「……横島、あんたそれ本気で言つてるの？」

「横島さん……鈍感過ぎるのはどうかと……」

エリカと美月は呆れた顔で横島を見る。

「あれ？なんで二人とも怒っているの？」

「こりやーアレだな、北山も大変だな」

レオも呆れる。

「なぜ、そこに雫ちゃんの名前が？」

「……そこまでくると病気だよ横島」

勿論、幹比古も呆れた顔をしていた。

154話 横島 ついに来たバレンタインデー!!その3

横島への陰湿な悪戯に美月の怒りが爆発。E組のクラスメイトは普段大人しい美月だけに驚きはひとしおでは無かったはず、

その後クラスの皆は、反省したのだろう。謝りにきたり、手伝うよと声を掛けてきてくれたが、大人数はいらなわとエリカはやんわり断りをいれる。

なかなか減らない横島の机の上にある呪い箱の選別処分作業。

バレンタインチョコなのか、呪い箱なのかを確認し、中身に危険物がないかを調べながら処分を進めていく。

爆発物などはなかったが、股間に釘が刺さった人形や、死体人形、どくろ人形や呪いの言葉が掛かれた手紙や、棺桶の模型が入っている物もあった。本物の死骸や汚物が入っていないだけまだましなのかもしれない。

「でも、横島も少し反省しないと、リーナとくっ付き過ぎだよ。まあ、あれがUSNAでは普通なのかもしれないけど、ここは日本でしかも、特に堅苦しい魔法科高校なんだし」

幹比古とこのような事になっている原因について横島に注意をする。

「いや、俺もそうは思うんだけど、なんていうか、なかなか言うこと聞いてくれないし、妹みたいな感じだし、叱るに叱れないと言うか……」

「はあ、あんたって人には言うくせに本当に自覚が無いのね。リーナも大変ね」

エリカは、呪いの小箱を精査しながら、横島の鈍感さに呆れ、頑張っているリーナに同情する。

「横島さん。リーナさんって、あんなに甘えた態度をとるのは横島さ

んの前だけですよ。普段はキリっとして本当にカツコイイ感じなんですよ」

美月も再度横島にリーナのギャップについて説明をする。「そっ・そーなの？」

そうこうしている内に、呪いの小箱の山が無くなって行き、ひと際大きな高級そうな箱が現れる。

その高級そうな木箱は漆黒で彩られており、錠前までが付いている。丁寧にこれまた高級そうな紫のリボンが括り付けてある。

さらに達筆で横島忠夫様と掛かれたメッセージカードと箱を開ける鍵がりボンに添えられていた。

「これはどっちでしょう。今までの全部、呪いの小箱だったのだけど……」

美月は対応に困っていた。

「そうね。本当にバレンティンチョコだったら、横島宛とはいえ、送った子に悪いし、幹、古式魔法で調べられる？」

エリカもどちらか判断に困っているため幹比古に頼む。

「さすがに教室で魔法をこんな事に使うのはヤバイよ」

確かに、構内で許可なしに魔法は一般生徒が使う事は禁止されている。

「開けてみるしかないか……横島、いい？」

エリカは一応横島に断りを入れる。

「別にいいぞ。見られて困るもんじゃないし」

「は、あんたのそう言うところがダメなのよ。じゃあ、男連中でこれ開けてみて」

エリカは横島の言動に呆れながら、高級感あふれる漆黒の箱を指さし達也達に言う。

「ならば横島自身に開けさせればいい」

達也は当然だと言わんばかりに言う。

「達也くん、察してあげなさいよ。横島は今、かなり精神的にダメージを受けているのよ。この大きさの箱にとんでもない物が入っていた

らどうするのよ。ここは男同士の友情を見せる時じゃないの？」

エリカは珍しく横島にかなり気を使っている様だ。まあ、誰でもこの惨状には同情はするのだが……横島は実際それほどダメージを喰らっていない。

100年前、人類の敵と蔑まれて嫌がらせなどを受けていた事に比べれば随分ましだからだ。

「よし、じゃあ、ここは恨みっこ無しのジャンケンで勝負だ！」

レオの提案で誰が呪い箱を開けるかをジャンケンで決めた。

そしてジャンケンで負けた達也が開ける事になる。

達也は自分が出したグーを見つめながらプルプルしていた。ここぞという所で負けたことが悔しかったのだろう。

「達也、向こうであけてほしいな。とんでもない物だったら見たくないし」

幹比古はそんな事を言う。ジャンケンに勝ったことが嬉しかったのだろう。本気で見たくない訳じゃないのだが、わざとこんな言い方をした。

「くっ、次は負けん」

そう言って負けず嫌いの達也は、自分の席にその漆黒の箱を持って行き、鍵を開け、箱を持ち上げると、大きなハート型の高級そうなチョコケーキが入っていた。きつとこれは本命チョコなのだろう。

しかし、達也はそのケーキを見て固まってしまった。

しかも息をするのを忘れるぐらい。

そして、自身の心臓の音が耳にうるさいぐらい入ってくる。

冷や汗が背中に流れる事も感じる。

上箱を持ったまま固まっている達也を皆は離れた場所から訝し気に見ていた。

達也はそれが横島に送られた本命バレンタインチョコケーキだったからその様な状態に陥ったのではない。

その大きなハート型のチョコケーキの上に乗っているメッセージカード状のホワイトチョコの板チョコに書かれている文字を見てそ

達也は全身から冷や汗が噴き出る。息づかいも荒い。

「達也くん、顔色が悪いわよ……」

エリカが心配そうに達也を見る。

「おい、お前、汗びっしょりじゃねーか、そんなにヤバいものだったのか?」

レオも心配そうにする。

「ああ、かなり、危険が危ない……」

「達也、なんか語彙が変だよ?そんなに?僕達が見たらヤバい?」

幹比古も心配そうにする。

「見、見るな!いや……見ない方がいい……今後の人生をふいにすることになる」

確かに見ない方がいいだろう。そこには四葉家当主の名前が刻まれているのだから……ヘタをすると、見た人物は四葉から消されるかもしれない。いや、達也に消すように命令を送られるかもしれないのだ。

「えええつ!達也くんにそこまで言わせるぐらいの物?横島には黙ってた方がいいかもね」

「おう、横島の奴には単にチョコじゃなかったと言って捨てた方がいいな」

エリカとレオも顔を顰めそう話をする。

「じゃあ、捨ててこよっか」

幹比古はそのチョコケーキの箱を取ろうとするが……

「幹比古……これは俺が責任もって処分をする」

達也は必死の形相でその箱を持ち上げ、幹比古が取るのを阻止する。

「達也、大丈夫?」

「ああ、問題ない……では、処分してくる」

達也はこの呪いにも似たケーキの入った箱を小脇に抱えて、脱兎のごとく教室を出る。

「達也くんなんかおかしかったわね」

「ああ、アレは尋常じゃないな」

「あの箱、物凄い事になってたんだよきつと、ジャンケンに勝ってよかった」

エリカ、レオ、幹比古は達也が走り去った後を見て口々に言う。

達也は、旧校舎に行き、人が無い部屋に入り、漆黒の箱の中身をもう一度確認する。

結果は同じ。

おねえさんから

ステキなあなたへ愛をこめて

四葉真夜

メッセージは変わらない。

よくよく見ると、表のメッセージカードの横島忠夫様と書いてある文字は真夜の自筆だ。間違いない。

達也は四葉真夜から、横島と接触したことを聞いていない。

もしかしたら、深雪なら聞いているかもしれないと思ったのだが、流石にこのチョコケーキの事は言えない。

真夜が横島と会ったとするならば、横浜事変が起ったあの日か前日の京都しかない。

達也は心を落ち着かせ、冷静に思考する。

これは何のための物かを……

四葉真夜は、自分の叔母は、無意味な事をしない。

策謀を巡らせ四葉に、しいては自分に有利な状況を掴むためだつたら何でもする女性だ。

これはもしかすると横島を四葉に取り入れるための策謀の一部なのかもしれない。

四葉は横島の事を知っているだろう。深雪が横浜での神魔の如く様相の横島を伝えているハズだからだ。

しかし、これはどういう策謀なのだろう。バレンタインデーにしかも、自分の名前が入ったバレンタインチョコケーキをわざわざ、学校の横島の席に置いておくとは……

普通に考えれば正気の沙汰ではない。

自分の息子程の年の男子に、告白めいたメッセージを書いたバレン
ティンチョコケーキを送るなど

……

しかも、自分の叔母がだ。母そっくりの叔母が横島に告白めいた
メッセージ付けてだ。

達也は思考しても、叔母が、四葉家当主がこのバレンティンチョコ
ケーキで紡ぎだす策謀がなんであるかを、考え付くことが出来なかつ
た。

達也は意を決して、携帯端末から極秘回線を通し、四葉家に連絡を
する事にしたのだ。

四葉家筆頭執事の葉山が応対し、四葉真夜に回線をつないでもらう
事が出来た。

『あら、めずらしい。達也さんからわたくしに連絡をして下さるなん
て、しかもこんな時間に』

ワザとらしく驚いた風で受け答える真夜。

「御当主様、申し訳ございません。火急の用件で、今は四葉家御当主と
深雪のガーディアンとしてではなく、甥として連絡した次第です」

『いいのよ、達也さん。わたくしは、貴方を息子の様に思っているのだ
から』

「ありがとうございます。それでは叔母上、第一高校横島忠夫の机の
上に何故あのような物を送ったのでしょうか？」

『達也さんにはれてしまいましたか……しかしあのような物とは、わ
たくしでも流石に傷つきますわよ。あれは横島さんに純粋にバレン
ティンデーの思いを込め、お送りしたものです』

「いえ、その様な事を聞いてはおりません。どのような狙いがあつて
あのような事をなされたのですか？」

『狙い何てありませんのよ。わたくしは、ただ、横島さんに親愛の情を
込めてお送りしただけですの。初めてですわこんなことは……わた
くしは胸の高鳴りを鎮める事ができず、気がついたらケーキなどと言

うものを焼いていましたの……あらいやですわ達也さん、わたくしに何てことを話させるのかしら……』

あの四葉真夜が若い乙女のような口調で恥ずかしそうに話していたのだ。

達也の思考は次元の向こうへ飛んで行ってしまった。

(もしや……本気か!?……しかし、横島とは30歳は離れている。横島は受け入れるハズが……あり得る!?すると……横島が俺の叔父に……なんだと!!)

四葉真夜がどんな手を使ってでも欲しい物を手に入れる魔性の女だという事を達也は知っている。

その結果……

【横島『たはははつ、今日から真夜の旦那になった四葉忠夫だ。真夜の物は俺の物、四葉も俺の物。甥っ子の達也!俺のために馬車馬の如く働くがいい!!ははははつ、そして、四葉の女性も俺の物、今日から深雪ちゃんは俺の第2夫人だ!!』

深雪『忠夫様、ステキ!!』

達也『深雪?』

横島『水波ちゃんは第3夫人じゃく、そして、第4、第5夫人と四葉ハーレムここに爆誕!!』

達也『横島!!何を言っている!?!』

『達也さん?急に黙ってどうしたのですか?』

その真夜の電話越しの声で達也は変な妄想から正気に戻る。

達也は何故か横島が叔父として目の前に現れ、四葉ハーレムを作る妄想をしまつていた。

どうやら、大分横島に毒されてきているのだろう。

「何を……いえ、申し訳ございません。少し通信状況が良くなかったようです」

冷静に対応したのだが達也は内心焦る。(まずい、横島が叔父で四葉を支配!?!根拠もないが否定できる材料もない)

『それで、達也さんがなぜ横島さんにお送りしたチョコレートケーキ

の事を知ったのですか？……まあ、いいでしょう。わたくしのバレン
ティンチョコケーキを受け取った横島さんの反応はどのような感じ
でしたでしょうか？』

真夜はそんな事を言い、達也に嬉しそうに訪ねる。

「……今、自分が所持しており、横島の手に渡っておりません」

『なぜ横島さんに渡らずに、達也さんが所持しているのですか』

真夜の口調が厳しくなる。

「たまたま、自分が先に発見し、クラスメイトなど複数の目にさらされ
る危険があつたため先手を打って回収したのです」

達也は今日クラスであつた事など余計な事は言わずに淡々と答え
る。

もし、真夜が本当に横島を気にいつていて、かまっているものであれ
ば、横島にあのような仕打ち（呪い箱）をした生徒達を許さないだろ
う。下手をすると、存在を抹消させられたり、廃人に追い込まれるま
である。

『わたくしの名前が入っていたとて、本人からなどと信じる人は居ま
せんよ。横島さんだけは分かつてくださるはずです。なので、ちゃん
と横島さんに渡してくださいな。せつかく私が丹精を込めて作った
手作りチョコケーキをなのですから』

真夜は元の妖艶な口調に戻り楽しそうにそう言った。

「叔母上は、横島と会った事があるのですね」

『もちろんですわ。そうでなくては、こんな、嬉し恥ずかしい事はいた
しませんわ』

「…分かりました。横島にはそれとなく渡しておきます。あまり悪戯
を過ぎませんように」

達也は冷静に再度思考する。やはり、有り得ない。あの真夜が一度
会っただけの横島に懸想するなど……達也は多少不興を買うかもし
れないが、このような言い方で真夜の反応を見た。

『悪戯だなんて……わたくしは彼にそのような事をいたしませんわ』

真夜の反応は相も変わらず、横島に気がある様な言い回しをしてい
る。

「では、自分はまだ、授業中なので、これで失礼しさせて頂きます」
達也はこれ以上問答しても、横島をネタにはぐらかされるだけで、
真夜の真意をはかる事ができないと悟る。

『達也さん。では横島さんのからのバレンタインケーキの感想を聞か
せてくださいましね。……いえ、聞かなかった事にして下さいまし。
きつと、ご本人からお礼の電話を下さるので大丈夫ですわ。今からお
話をするのが楽しみですわ』

そう言つて真夜は通信を切るのであった。

達也は最後の言葉で、真夜は横島となにか秘密裏に話をしたいがた
めに、こんな手段をとつたのではないかと推測する。それはもしか
この吸血鬼事件の協力体制についてのことではないかと、四葉が吸血鬼
事件に一枚かむための工作なのかもしれない。

……電話番号は多分この箱のどこか、またはケーキの中に忍ばせて
いるのだろう。

達也はそこで思考を停止させる。もはや、そう思わないとやってい
られない。

上記が目的ならば、なぜ危険を冒してまでこんな面倒な事をするの
だろうか？という最大の疑問が残るのだが……

横島が叔父になるなどという展開は考えたくもないからだ。

しかし肝心の真相は真夜本人にしか分からない。

何れにしろ、達也はこのチョコレートケーキを横島に渡さなければ
ならない難題が残つたのだ……

達也は疲れた表情で大きく溜息を付くのであった。

155話 横島 ついに来たバレンタインデー!! その4

昼休みに入り、皆で食堂に向かう。この頃達也は生徒会室の方で深雪やほのか達と昼食を取る事が多いのだが、今日はE組の皆と昼食を取るようだ。

まあ、早朝の深雪とほのかのやり取りを見る限り、今日は向こうに顔をださない方が良いだろ。う事は誰が見ても明らかなのだ。

その達也は、1時限目の自習時間に、横島の机に置いてあった呪いの小箱群の中で最も大きく、最も高級そうで怪しげな箱をジャンケン勝負に負け中身を確認してから処分しに教室を出たのだが、処分しに行ったときよりも、戻ってきた達也の顔はあきらかに憔悴しきっていた。

エリカ達は、箱の中身が直視できないぐらい酷いものだったに違いないと推測し、多くを聞くのをやめる。

実際には、達也はその高級そうな怪しげな箱は処分をしていない。その高級そうで怪しげな箱の中身が四葉家当主、四葉真夜が横島宛に送った本命チョコケーキだったのだ。

自分の母そっくりの叔母が同級生の横島にどうやら本気でバレンタインデーチョコを送ったという事実には驚愕と困惑をきわめ、そして現実逃避するしかなかった。しかも達也はその事実を誰にも言う事が出来ない。もちろん妹の深雪にもだ。

真夜は達也にその本命チョコケーキを再び横島の手へ渡すことを言い付かったのだが、一度危険物として処分しに行った手前、教室に戻ったタイミングで渡すことは、色々と誤解を招いたり、怪しまれるため、現在更衣室の個人ロッカーに置き、渡すタイミングを計っていた。

「にしても……世の中わからないわ、なんでガサツなレオがそんなにモテるの？」

エリカは同じテーブルで一緒に昼食をとっているレオの元に引つ切り無しに女生徒が現れ、バレンタインチョコを手渡している風景をだるそうに半目で見て、呆れたような声で美月に聞いていた。

「レオくんはカツコイイし、明るいし、爽やかだし、誰にも優しいから」「一応私たちも、あいつと一緒に食事しているんだけど……あの子らは私達なんて眼中にないの？普通は躊躇するもんでしょ？」

「ははは、まあまあ、エリカちゃんはレオくんと口喧嘩ばかりしているし、私は元々、その対象になってないから」

美月は苦笑しながら答える。

「私はそうだけど、美月は普段大人すぎかな。さつき見たいに怒った姿見せたら皆どっか行くんじゃない？……まあ、レオだけじゃないし、達也くんも幹もちよくちよく女の子来ているしね……うちの男共のどこがいいのだから？」

「エリカちゃん。レオくんたちは、女子が噂する学年でかつこいい男子5本の指に入ってるんだよ」

「……横島以外はね」

「わるかったなく、どーせ俺はイケメンじゃないしく、どーせ最底辺だしなく、クソツツ!!羨ましいー!!一度でいいから、あんなに女の子にちやほやしてもらいたーい!!」

「何いじけてんのよ横島。あんたは確かに達也くん達とは真逆の、女子が噂する学年で最低男ランキングぶつちぎりで一位だけど……あんたは貰えるでしょ本命チョコ……ほーら、おいでなすつたわよ」

エリカは面白くなさそうに横島の悔しそうな顔を見て、ボタンと開く食堂の入口を見やった。

「タダオ~~~~!!」

金髪碧眼ツインテール美少女が手を振りながら横島の元に駆け付ける。

「リーナ、朝、急に居なくなっただうしたんだ？」

「タダオ心配してくれたの？……フーン」

リーナは横島のその反応に嬉しそうにする。

「……タダオ、これ」

リーナは急にモジモジしだして、後ろ手から半透明のラッピングで包まれた小袋を差し出す。小袋はリーナの髪を括っている物と同じ色のリボンで閉じられている。

「リーナ、もしかしてチョココ?」

「うん。チョコクッキー…さっき作ったの…でも初めてお菓子を作ったから上手く行ったか分からないけど…開けて食べてみて……」

よく見るとリーナの色白の肌に、あちらこちらに茶色い物が跳ねてくっ付いていた。多分チョコだろう。

リーナは朝、美月に日本のバレンタインデーには好きな人にチョコを渡す習慣がある事を聞き、猛ダツシユでマンションに戻り、シルヴィと一緒にこのチョコクッキーを作っていたのだ。

リーナは料理などした事もない。シルヴィも料理は得意な方ではない上にチョコは作ったことが無かったため、シルヴィの記憶に微かにある小さい頃母親と作った事があるクッキーをベースに、チョコクッキーのレシピを見ながら、二人で四苦八苦し作っていたのだ。

「おお、焼き立ての匂いにする。初めてにしては上出来じゃないかリーナ…もしかして俺のためにわざわざ?…ありがとう…嬉しいよ」

ラッピングを開けて取り出したチョコクッキーは形は不揃いで、焼き加減もバラバラであったが…横島は気にせず口に入れる。

「心のこもった。いいチョコだ」

横島は二カつとリーナに笑顔をみせる。

美味しいとは言えないが、嬉しそうに次々と食べる横島。一生懸命作った事がわかるクッキーだ。

「タダオ……」

リーナは涙を浮かべ食堂の椅子に座っている横島の後ろから抱き着く。

リーナはこれまで、自分の意思で誰かのために何かを作り渡したことが無かった。

誰かのためを思って料理することが、こんなにもドキドキして、嬉しいやら恥ずかしいやら混ざった感情が溢れ、そして、出来た料理を大好きな人が嬉しそうに食べてくれることが、こんなにも幸福感を満たしてくれるものだという事を、今知ったのだ。

リーナのこれまでの幼少期から青春期は、ほぼ軍で過ごした。ただ、厳しい訓練と、上からの命令で自分の意思とは関係なく任務をこなして行くだけの毎日だった。青春や自己の感情とは、無縁の生活を過ごしていたのだ。

つい4か月前、横島と接してからは、リーナが今まで持っていた世界観や感情がどんどん変わって行った。

しかし、その弊害もあった。それが今のこれだった。リーナは横島の前では溢れる感情を上手くコントロール出来ないのだ。まるで幼い子供の様に。

そして、また、後ろからリーナに抱き着かれたままの横島に男子生徒からの嫉妬などの悪感情持った視線が注がられる。

「リーナ！いい加減にやめなさいよね！横島も困っているじゃない！」

エリカはその視線を感じリーナに注意をする。今日の朝の悪意ある呪いの小箱の事があつたばかりで、その遠因がリーナのこの行動にあるためだ。

「なんでよーエリカに……」

リーナはエリカに反論しようとしたのだが……リーナは忽然と姿が消えたのだ。

達也はそれにいち早く気が付き、何者かがリーナを連れ去った事を把握し戦闘態勢に入る。

横島は気が付いたが、戦闘態勢には入らなかった。

エリカも美月も忽然と消えたリーナに驚くが、横島が「緊急の用事で魔法使ったんじゃない？」などと言って誤魔化していた。

横島が平然としている様子を見て、達也も戦闘態勢を解除して、再び座る。

レオと幹比古は、バレンティンチョコの対応で全く気が付いていな

かった。

そして、今リーナは、人気のいない屋上に連れてこられていた。

「急になにするのよ！・マリア」

「ミス・アンジェリーナ・横島さんに・人前で抱き着かない様に・と何度も忠告したはずですよ」

何もない空間からスツとマリアが姿を現す。光学ステルス迷彩（透明化）を解除したのだ。

USNAに居るはずのマリアが横島に抱き着いているリーナを口ケットアームと光学ステルス迷彩の併用で捕らえ、誰もが目に追えない程の一瞬で連れ出したのだ。

「USNAからわざわざそんな事を言いに来たの？なんでマリアもみんなもそんな事を言うの？」

「……ミス・アンジェリーナ・横島さんは困っています・マリアは朝から・様子を見ていました」

実はOOカオスライザーX2を使ってUSNAから日本に早朝には着いていたのだ。マリアは光学ステルス迷彩を纏いながら上空から横島の様子を見ていた。と言うよりも、バレンタインチョコとカオスからの届け物を渡すタイミングを計っていたのだ。

「……それと、タダオと一緒に居ちゃいけない訳とどうい関係があるの？」

リーナは無然とマリアに聞く。

「一緒に居ては・いけない事はありません・横島さんも・ミス・アンジェリーナには・気を許しております」

「だったらいいじゃない」

「過剰な・スキンシップで・横島さんが・窮地に陥っています」

マリアはこの半日の横島と学校の様子を見て、細かく情報を集め、今の横島の状況をほぼ正確に確認したようなのだ。

「……どうい事、タダオが窮地って」

リーナは横島が窮地に陥っていると言われ顔を顰める。

「マリアは決して嘘をつかない。それはリーナも認識している事実だ。」

「マリアはそんなリーナの目の前で手を掲げ、空間プロジェクターを展開させ、今の食堂の様子を映像で見せる。」

「どうやら、先ほど食堂に5m程度の超小型ドローンを数機投下したようだ。」

「横島さんは・今男子生徒の悪意を・一身に受けています」

「……なぜ？知らなかった。どうしてタダオが？……タダオそんな事一言もいってなかった」

「リーナはマリアの説明と、食堂の男子生徒が横島に明らかに悪感情を持った視線を送っている様子を見て、驚きと戸惑いの声を上げる。」

「ミス・アンジェリーナが・横島さんに・過剰なスキンシップをする事により・男子生徒は嫉妬・しているのです」

「そう言っ、朝の横島の机の呪いの小箱の様子を写す。」

「タダオになんてことを!!許せない!!」

「リーナは怒りを爆発させ、食堂へ向かおうとするが……マリアに止められる。」

「ミス・アンジェリーナ、横島さんは・あなたに・楽しく学校生活を・送ってもらいたい・と思っています・だから・横島さんは何も・言わない・あなたと・学生が衝突してほしくない・と思っています」

「タダオ……マリア、どうしたらいいの？」

「リーナは先ほどの勢いがなくなり、シユンとする。」

「人前で・過剰なスキンシップは・避けるのが・良いでしょう」

「でも……タダオは私のせいで……」

「横島さんに・今思っている事を・伝えればいいです」

「タダオに謝るわ」

「では・ここに横島さんを・呼びます」

「マリアは内臓している通信機能で横島の携帯端末に連絡し、屋上に呼ぶ。」

「ありがとう。マリア」

「それと・一つ・忠告します・ミス・アンジェリーナの・横島さんへの」

好意は・好ましく思います・しかし・横島さんは・非常に心が疲れて
います・心の休養が・必要です・今は求め過ぎてはいけません・心の
支えが・必要です……………今の横島さんは……………自分に向けられる女
性の好意を・心のどこかで怖れています・だから今はまだ・そつとし
てあげて・下さい」

マリアは横島と過ごしたこの3か月間でこう結論づけたのだ。1
00年前の横島を見てきていたからこそ、今の横島の心のありようを
ほぼ正確に見抜くことが出来たのだ。

「どういう事マリア？タダオの心が疲れているって、女性の好意を怖
がっているって？……………タダオに何があったの？」

リーナは困惑する。いつも笑顔で楽しそうにしているイメージし
かない横島がそんな状態など想像もつかないからだ。

リーナはマリアにその事を聞こうとするが……………丁度屋上の扉が開
く。

156話 横島 ついに来たバレンタインデー!!その5

リーナはマリアが横島の心が疲れている、心の支えが必要だと言った事に対し、詳しくその事を聞こうとしたのだが、その前に屋上の扉がバンと開いた。

「マリア久しぶり、日本に来ていたんだ。リーナとなにこそこそと?」

横島が屋上に上がってきたのだ。

「横島さん・久しぶりです」

そう言ってマリアは横島に強く抱き着く。

「マリアく、ギブーギブー!」

横島の背骨が軋むところでマリアは横島を解放する。

マリアの毎度のこの行為は横島のバイタルチェックも兼ねている様なのだ。

「タダオ……ごめんなさい」

リーナは下向き加減で視線だけ横島に向ける。

「へ?どうしたのリーナ、急に謝ったりして」

「今、マリアに叱られたの。私がタダオに学校で抱き着いたりしたせいで……その男子に疎まれてる事を……」

「なーんだ、そんな事か。別にリーナが悪いわけじゃないだろう?」

「でも、私、気が付かなかった。真由美やエリカが散々注意してくれていたのに……タダオがそんな状態になっているなんて……ごめんなさい」

リーナは目に涙を浮かべながら、横島に上目使いで頭を下げる。

但し、真由美は嫉妬心からくるもので、エリカは単に目の前でいちやつかれるのが嫌だからであるのだが……

「いいって、リーナは、原因は俺にあるわけだし。美人で勉強もできる優等生のリーナと、学校最底辺の俺だからな。そりゃ、男共は嫉妬するよな」

そうやって、項垂れるリーナの頭を優しく撫でる。

「タダオ……タダオの事を皆わかってないだけよ。私なんて魔法が出来ても、実際に何も出来ないんだから……」

「リーナは努力して、USNA軍のエリートの中のトップになったんだろ？」

「井の中の蛙よ」

「まだまだ、若いんだしき、これから、これから」

「なんか、タダオって、ずっと年上に見える時があるわ。……でも暖かい……大好き」

リーナはそうやって、自分の頭に乗っている横島の手を両手で触れる。最後の一言は横島に聞こえないぐらいの声で発する。さっきの MARIA の言葉があったため……そうしたのだ。

「MARIAはどうして、日本に？カオスのジーさんに頼んでいた物を届けにきてくれたのか？」

「イエス・ドクター・カオスの届け物・後で自宅に・送ります。それと・ミス・雫からと・MARIAからバレンタインデー・チョコレートです」

MARIAはそうやって、横島に綺麗にラッピングされた大きな箱を二つ渡す。

「MARIA、ありがとう。家に帰ってから開けさせてもらおうよ」

横島は、はにかんだ笑顔を見せる。

「では・MARIAが・後で・荷物と一緒に届けます」

「俺は夕方から夜にかけて用事があるから、これ自宅の鍵。かなり遅くなると思う。忙しくなかつたら待っていてくれると助かる」

横島はMARIAに自宅の電子キーを渡す。

「分かりました・MARIA・横島さんの自宅で・待機しています」

MARIAは電子キーを受け取り、手のひらの上で解析をした後、横島に返す。

「……タダオ……タダオの家に私も行っていない？」

上目使いで弱弱しくリーナは横島に聞く。

「いや、今日は七草家に呼ばれているんだ。遅くなるし何時に帰れる

か分からないから、また今度の方が良いんじゃないか」

「私、待ってる……だから」

「でも、ほんと遅くなると思うぞ」

「横島さん・マリアが・ミス・アンジェリーナを見ておきます・大丈夫」
「……分かった。マリアよろしく頼む」

横島は明日が学校が休みだった事を思い出し、渋々了承する。

「イエス」

「マリア、あと一つ頼まれてくれないか、東京近郊の正確なマップデータと地下構造や空間、霊脈図もあれば助かる」

「了解・2時間程度で解析可能……ミス・アンジェリーナ・17:00に・迎えに來ます」

「ありがとうマリア」

「マリア、また後で……リーナ、食堂に戻るか、もう昼休み少ししか残ってないけど」

「でも、私が一緒に居ると、またタダオが……」

「別にいいって、いまさら気にしても仕方がないだろ？」

「……うん」

そう言っつてリーナは横島の腕に抱き着きたい衝動を抑え、静々と横島の後に続く。

マリアは再び光学ステルス迷彩を発動させ、姿を消した。

再び、食堂に戻った横島とリーナのだが……横島の後に静々とついて行くリーナの姿を見て逆に波紋が広がる。

そして横島は皆の席に座り、リーナも横島とくっ付かない程度に間を空け大人しく横に座る。

「横島！リーナに何かしたんでしょ!! もしや、遂に……!! あんたはセクハラまがいな事をするけど、本当にそんな事をする奴だと思っつてなかつたわ!!」

「横島……やっていい事を悪い事が有るよー!」

エリカと幹比古は横島に詰め寄る。

「へ？何の事？」

「隠しても無駄よ！リーナの態度がさっきまでと明らかにおかしいじゃない!!その……無理矢理リーナにいけない事をしたって事よ!!」

エリカはとんでもない事を言う。

美月はそんなエリカに苦笑する。

達也とレオは横島がするわけないだろうと、だんまりを決め込んでいる。

「何の事？エリカ？」

「エリカ……違うの、ごめんなさい。エリカや真由美が今まで注意してくれたのに気が付かなくて」

リーナがエリカに頭を下げたのだ。

「な……なに？」

リーナの急激な変化にエリカは驚く。

リーナは屋上でマリアに叱られた事、横島が自分のせいで酷い目に遭っていた事を知った事を簡単に話し謝ったのだ。

「まあ、分かればいいのよ」

エリカの場合半分以上、目の前でイチャイチャされるのがただ単に癪に障っていただけの事だったのだが……

「いや、俺が悪いんだけどな」

横島は頭を掻きながら、苦笑する。

「あの……マリアさんって、あの魔女マリア？」

「そうだけど」

「えー!!さっきまで居たの!?!」

「さっきのアレはそうだったのか……」

達也はリーナが何かに引っ張られるように姿を消した理由が分かったようだ。

「おい、USNAに居たんじゃないのか?どうやって来たんだ?」

レオは至極まともな疑問を口にする。

「うーうーん、多分大気圏突破かな」

「はあ……!?!」

エリカ、レオ、幹比古は素っ頓狂な声を上げる。

〇〇カオスライザーX2はマリアが装着することで、本来の力を十分に発揮される。

マリアの能力もあって、軍事衛星や軌道衛星に探知されることなく、日本に来ることが出来るのだ。

「その魔女マリアだが、何をしに日本に来た。まさかりナに説教しにきたわけではないだろう」

達也は淡々と横島に聞く。

「うーん。雫ちゃんとマリア自身のバレンタインチョコを直接渡したかったらしい。ついでにカオスのじーさんの届け物」

「はあ~~~~!?なにそれ、あんたにバレンタインチョコを渡したいがために、大気圏突破してくるの?」

エリカの疑問に、幹比古やレオも同意し頷く。

バレンタインチョコを渡すだけで大気圏突破してくるマリア達のスケールに、エリカ達についていけない。いや普通は誰でもついていけないだろう。ドクター・カオスとマリアに一般常識を当てはめてはいけない。

「まあ、マリア単体だったら余裕じゃないかな~~~~って思うけど」

横島はそんな事を平然と言う。この男にも一般常識は通じない。

「横島さん。愛されてますね」

美月は何故かその話を嬉しそうに聞いていた。美月もちよつとずれている。

「魔女マリアか、僕も会って見たかったな」

「私も会って見たいです。実物もきつと綺麗な人なんでしょうね」

幹比古と美月はそんな感想を漏らす。

「その内あえるんじゃない?」

横島はテキトーな事を言う。

「まあ、これで、横島に対する嫌がらせが減ればいいけど、今の態度だと逆効果の気がしないでもないわ……」

エリカはそう言ってこの場を締めくくった。

この後、教室で横島はレオに深雪とほのかに託された義理チョコを渡し、クラスの一部に好奇の目で見られ、あらぬ疑いを掛けられる一幕があったのだが。

放課後も、バレンタインチョコ攻勢が何時もの面々に押し寄せる。

結局最終的にはレオは紙袋五つ分　達也は二つ分、幹比古は二つ分弱と多量にゲットしていた。

横島と言うと、この後に、中条あずさに義理チョコと事務職員女性からの合同義理チョコと花音にチロルチョコ1個貰っていた。

後はもらえそうな3年の摩利や鈴音は志望大学も決まり、この時期に学校に来ていないため、もうう事が出来ない。

それでも横島は嬉しそうにしていた。ちゃんと青春を味わっている様だ。

昼休みの食堂で横島がリーナからチョコを受けとり、後ろから抱き着かれていた所を見ていた人物がいた。

「ま、まさか、雫に強力なライバルが!!雫がピンチだわ!!連絡してあげなくっちゃ!!」

ほのかから雫に事実が伝わるのも時間の問題だろう。

そして、達也はバレンタインチョコを持ち帰るために、テキトリーな言い訳をして、深雪に先に家に帰る事を告げるが……何故か、男子ロッカー室から出てくる達也を待ち構えていた。

「あら、お兄様その手に持っている物はなんですか?」

「ち、ちよつとな」

「わたくしがお持ちしましょうか?」

「いや、大丈夫だ。それよりも深雪、生徒会の方は?」

「先に、お暇させて頂きました」

そう言って深雪は達也から紙袋を受け取ろうとする。

「いや、いい俺が持つ」

「大きな紙袋3つもお持ちになって、一体何がはいっているのですよ

うか」

深雪はそう言つて、強引に左手に持っている紙袋2つを達也から奪う。

「み、深雪」

「フッフッフツ、あらあら、お兄様、随分おもてになるのですね。深雪は誇らしいですわ」

深雪は紙袋の中を覗きバレンタインチョコがびっしり詰まっている事を確認し、ニツコリとした笑顔を向ける。しかしその笑顔は何処か冷たく怖い。

「もう一つの紙袋は……何か大きなものが入っているようですが。一体何なんでしょう?」

深雪は冷たい笑顔のままもう一つの達也が右手で持っている紙袋に視線を注ぐ。

「こ、これは、違う」

そう今達也が持っている紙袋の中身は、四葉真夜が横島に送ったバレンタインチョコケーキが入っているのだ。まだ横島に渡すことが出来ていなかった。

「なにが違うんでしょうか?わたしは何も言っておりませんが」

「た、頼まれたもので、後で渡すために、早めに風紀委員を引き上げた」

深雪はそんな達也の右手に持っている紙袋をサツと奪う。

「深雪!ダメだ!!」

達也は焦る。あれの中身を深雪に見せるわけにはいかない。シヨックで寝込むまでである。

「まあ、随分立派なバレンタインプレゼントの箱……宛名は横島さん宛……申し訳ございません。お兄様、疑ってしまいました、本当に頼まれたものだったんですね」

「そうだ。横島に責任もって確実に渡さなければならぬ。自宅に持って行くつもりだ」

「一体だれが横島さんに?……わざわざご自宅に持って行かなくとも、学校でお渡しになればよろしいのでは?」

「いや、横島はこの後、七草家に行く予定らしい。このような大きな荷

物を渡すわけにもいかん」

達也は七草家にこれを持って行って、もし中身がバレてしまった時の事を思うと、この時点で横島に渡すわけにはいかないのだ。ある意味爆弾よりもたちが悪い。

「お優しいのですね。お兄様……………横島さんと何か？」

深雪はそう言いながら、達也は別の目的で横島の自宅に行くのではないかと察する。

「まあな、今後の事も話し合わなければならぬいな」

しかし、今回の達也は、本日中にこの爆弾より危険なブツを横島に確実に渡すことが、第一目的なのだ。

「深雪は羨ましいです。お兄様と横島さんの関係が」

深雪はボソッとこんな事を言う。

「別に大したことは無い」

「それよりも、ほのかから頂いたチョコ以外、どれだけ本命があるのでしようね」

深雪は達也にそう言つて悪戯っぽく微笑む。

「……………誰にも答える気はさらさらないがな」

達也はあの箱の中身をこれ以上詮索されない事にホツとし、結局深雪と一緒に家路につくのであった。

157話 横島 七草家に呼ばれる!!その1

「ごめんね。横島くん待った?」

「いえ、俺も今来たところですよ」

「そう、では行きましようか」

真由美は校舎正面玄関で待っていた横島に声をかけてから、校門外に待たせてある迎えの高級車後部座席に乗り込み、横に座るように促す。

本日夕刻から、七草家で対悪霊協力体制の契約打ち合わせを行う約束していたのだ。

車中ではやはり、今日の食堂での事が話題に上がった。

「そう言えば、今日も噂になっていたわ。横島くん」

「どんな噂ですか?」

「何でも、アンジェリーナさんが横島くんにその……バレンティンチョコを渡して、大胆な行動にでたとか……それで……そのあと、二人でいなくなって、あのその、えー、キスとか……」

真由美は顔を赤くし、なにやら言いにくそうにしていた。

「いや、なんか、尾ひれがついていますねそれ」

「そうなのね。やつぱり……いずれにしろ。あまり学内で羽目を外さない様にね。横島くん」

真由美は横島のその言葉を聞いてホッとした顔をする。

「す、すみません」

「謝られるようなことは無いの、あの、別に怒っているわけじゃないのよ」

真由美は慌てた様にこう言っ、困った顔をする。

そうこうしている内に、七草家に到着した。

広大な敷地に洋風の門。外から建物は見えない。

「うわっ、真由美さんの家も大きいですね」

横島は知り合いの家に行っ、驚いてばかりだ。

車は敷地内に入り玄関の前で車が止める。

運転手が後部座席のドアを開き、横島が先に降り、真由美が後から出てくるのだが、横島はそつと手を差し伸べる。

「あつ、ありがとう横島くん」

真由美は少し顔を赤らめて横島の手を取り立ち上がる。

しかし、その行動に異を唱える人物の叫び声が飛ぶ。

「こらーーーーー!!お姉ちゃんにさわるなーーーー!!この色情狂!!」

七草家の広い庭の木陰から、一人の少女が勢いよく駆けてきて、横島に向かいいきなり飛び膝蹴りを放ってきたのだ。

当然……

「ぐはっ!!なんで〜?!」

横島はその膝蹴りを顔面にモロに喰らい、鼻血をだしながら倒れる。

「横島くん!?大丈夫?……こらーーーー!!香澄!!お客様に何をすの!!」

真由美は倒れた横島を抱き起こそうとしながら、飛び膝蹴りを食らわせたショートカットの少女を叱りつける。

「あれ?なんで?寸止めのもりだったのに、魔法演算式にズレが?」

蹴りを放った張本人である真由美の3つ年下の双子の姉、香澄は、横島に本当に蹴りを当てるつもりは無かったようで、逆に蹴りが当たった事に驚いている様だ。

そう、女の子が横島に突っ込みを入れた時点で、それは意図せずとも、ほぼ100%おいしい場所にクリーンヒットする事が確定してしまうのだ。これも横島が持つギャグ体質がなせるわざなのだろう。

「なにすんだーーーー!!危ないやないかーーーー!!」

真由美が抱き起す前に、横島はガバッと立ち上がり、香澄に鼻血を垂らしながら、涙チヨチヨ切らせ抗議する。

「えええっ?モロに喰らったのに結構平気そう?」

香澄は元気そうな横島に困惑する。

「平気とちゃうわーーーー!!」

「香澄ちゃん、本当に当てるなんてダメですよ」

庭の方から、もう一人、髪を肩より長めに切りそろえた香澄に顔立ちがそっくりな、香澄の双子の妹、泉美が出てきてその様子をおどおどして見ていた。

この二人、予め庭の木陰で隠れて、此方を伺っていた様だ。

「香澄・横島くんに謝りなさい!!」

真由美は香澄を叱りつける。

「当てるつもりは無かったけど……そのご……ああ!?横島!?やっぱりー!!だまされてるんだよお姉ちゃん!!」

香澄は最初は謝ろうとしたのだが、相手が横島だと知って、真由美にこんな事を言う。

昨晚、真由美が作っていたチョコは電話の相手であった横島という人物に渡すものだと思っていたのだ。

「何を言っているのあなたは、横島くんは大事なお客様なんですよ。横島くんに謝りなさい」

香澄に再度謝るように叱りながら、真由美は横島の鼻血をハンカチでそつと拭く。

「こんな奴がお客様!?なんで?」

香澄は目を大きくし驚いていた。

横島の事をすでにこんな奴扱いをしていることから、事前に噂レベルで調べていた様だ。

どんな噂かは何となくわかるが、やはり、かなり偏った情報が横行している様だ。

仕入れてきてた噂は、間違いなく横島のマイナス面のみをピックアップしたもののだろう。

「真由美さん、ありがとうございます。もう大丈夫ですんで」

横島は鼻を拭いてもらっている真由美にお礼を言う。

すると、自然にお互い視線が合い。横島は照れ笑いを、真由美は頬を赤らめる。

香澄はその様子を見て、真由美と横島の間に入り、

「ああっ、この変態!!お姉ちゃんにくっ付くな!体をやらしい目で見な!!」

横島を怒鳴りつける。

「このおバカ!!」

真由美は横島に暴言を吐く香澄に容赦なく拳骨を頭に喰らわす。

「痛っ! だってー! だってー!! この男は噂で変態だって書いてあったんだもん」

「そんな事実はありません。お父さんが七草家当主として迎えているお客様なのよ。後でみっちり叱ってもらいますからね」

「え? お父さんのお客様? ……」

香澄は血の気を引く、事の重大さがようやく分かったようだ。肩をガクツと落とす。

もうこれは父からの説教は免れないだろう事を理解する。

そして真由美は香澄の頭を抑えつけ、横島に頭を下げさせようとする。

「ごめんね。横島くん。この子が失礼な事を言って……この子たちは私の妹たちなの」

「……申し訳ございませんでした」

香澄はしぶしぶ横島に頭を下げる。

「誰だそんな噂流した奴、香澄ちゃんだっけ、それは事実無根だから」

横島はそんな事を言っているが、火の無いところに煙は出ないという諺があるように、全くの無実ではない。と言うか、半分近く合っているまである。

「でも、お姉ちゃんは絶対渡さないから!!」

香澄は横島をキツと睨みつけて、庭の方へ走り去って行った。

「香澄ちゃん待ってください」

泉美は横島に一礼してから、香澄を追いかけて行く。

「何言ってるのかしらあの子は! ごめんね。横島くんうちの妹が迷惑をかけて」

真由美は顔を真っ赤にし慌てて口早に横島に謝る。

「いや、なんか真由美さんの妹にしては元気いいですね。香澄ちゃんって子は」

「そうなの元気すぎて困るくらいなの」

そう言つて、大きな玄関の中に入って行く真由美と横島。

横島の傷は既に完治していた。

庭の方に走り去つた真由美の妹達、双子姉妹は……

「香澄ちゃん。待つてください」

「泉美！ボクたちであの横島っていうとんでもない変態からお姉ちゃんを守らないと！」

「香澄ちゃん、でもお姉さまは横島さんという方に、随分気をお許しになつているご様子ですよ」

「お姉ちゃんは騙されてるんだよ！あんな、いかにもやらしそうな顔のしよぼそうな奴に騙されるなんて、お姉ちゃんも見ろ目が無い！」

「その横島さんなのですが、香澄ちゃんが調べた後、色々と私も調べたのですけど、今年の九校戦を一年生でありながら、モノリス・コード本戦に出場し優勝している実力者ですよ」

「はあ？何かの間違いじゃない？あいつ二科生で、『チカン、変態、のぞきの横島』つて、呼ばれている第一高校始まって以来の史上最低最悪の変態つて噂になつているのよ！」

「香澄ちゃん、落ち着いてください。それが事実だとしたら、とつくに退学になつているハズです。しかも、名誉職である風紀委員の一員でもあります」

「風紀委員？それつて戦闘にたけてないと出来ない役職でしょ？二科生なのに九校戦で、しかもモノリス・コード本戦で優勝？他の2人が優秀だったんじゃない？」

「それでも第一高校の中でも選ばられるぐらいの実力者という事ですよ。記事などを見ると、ひとりで予選本戦通じて6人倒しているそうですよ」

「嘘？あの変態が？いかにも弱そうな顔しているのに？」

「お父様が直々にお客様として、お呼びになつた事も氣になりますし……」

「くつ、少し強いからつて、お姉ちゃんに手を出すとは……」

「でも、お父様がお姉さまと、一般の家出身だと思われる横島さんの交際を認めるとは到底思えません」

「そうだよーお父さんが許すはずがない！でも、お姉ちゃんに強引に迫るかもしれないから、ボク達でお姉ちゃんを守らないと！いざとなったら、お父さんに横島の変態的な悪事を証言して、とつちめてもらえばいい」

真由美の妹達、双子姉妹はこんな会話を広い庭を足早に歩きながら、話していたのだが……

頼みの父弘一は、真由美と横島の交際に大賛成で、結婚前提で二人の仲をわざわざ進展させようとまで画策しているのだ。しかも、もし真由美がダメであれば、香澄、泉美も交際候補にとまで思っている。まさか、自分たちがこの時点で横島の交際相手候補に選ばれていることなど思ってもいない事だろう。

そんな弘一の思惑など知らずに、七草の双子、香澄と泉美は自室に戻り、あーでもない、こーでもないと言っていると横島撃退作戦を立てるのだった。

158話 横島 七草家に呼ばれる!!その2

「横島くん、久しぶりだね」

「久しぶりです。真由美さんのお父さん」

高級感漂う洋風の広い応接間に、七草家当主、七草弘一が一人座って待っていた。

弘一は横島とは3か月半前の京都で会っており、弘一の誘いで、高級料亭で夕食を共にしていた。

横島も真由美の父親とあり、畏まった口調ではなく、気軽な感じでお話していた。

「まあ、座りたまえ横島くん。真由美も横島くんの隣に座りなさい」

弘一は横島に高級感溢れるソファアールに席を勧め、その横に娘の真由美を座らせる。

本来なら、真由美はこの場では七草家側の人間であるため、弘一の横に座るべきなのだが……

それと同時に、家人が紅茶と洋菓子をスツと出し、応接間から静かに出て行く。

「あと、息子二人が出席する予定だったのだが、申し訳ない。どうやら到着が遅れている。重要な話はその時にしてもらっていいかな?」

「まあ、大丈夫ですよ」

「助かるよ」

弘一はそう言うって横島に軽く頭を下げる。

しかし、真由美はその父弘一の言葉に訝し気に聞いていた。真由美の兄次男の孝次郎はともかく、長男智一は真面目な性格で、決してこのような重要な場面で遅れてくるような事は考えにくいからだ。

「しかし、横島くん君は横浜事変後、行方不明と知らせを受けていたのだが、よく戻って来てくれた。真由美も君が行方不明の間、元気が無くてね。あまり、そんな事も顔に出さない子なのだけど……今回ばかりは、私も娘の父として気が気で無かったのだよ」

「お、お父さん!」

真由美は父弘一に顔を赤くし抗議する。

「いや、すみません。真由美さんや皆に心配かけてしまつて」
「私も、十師族の長と言う立場にあるからね。だいたいの方は此方も把握していてね……君が行方不明の間USNAに居た事も、記憶喪失だったという事もね。しかし『救済の女神』の使い手である君に何があつたのかね？」

弘一は横島が生存しUSNAに居た事を12月下旬に把握し、日本政府が躍起になつて、横島の搜索と懐柔を行つていた事や、USNA軍とドクター・カオスとどういふ関係かまでは分からなかつたが、接触していた事も確認している。

七草家は、日本国防軍の一部隊を動かすぐらいの影響力を持つており、当然、軍部の情報も弘一の耳にも入つて来る。11月初旬段階で、すでに横島が戦略級魔法を喰らい死亡しているという情報と共に事の顛末まで知つていた。まさかその横島が生きているなどは、その時は思いもよらなかつたのだ。

生存の可能性について気が付いたのは、12月中旬に日本政府主導で横島搜索、懐柔のための情報収集の一環として、第一高校に警部を派遣し、横島にゆかりのある生徒に、色々と聞き回つていた事を真由美に聞かされてからだ。

その後の弘一の動きは早く、国防軍から情報を引き出し、政府関連から手を回し情報を得ていたのだ。

その時に副次的に、国防軍からの情報収集の中で司波達也が戦略級魔法師、大黒竜也であることも知り、さらに、横島に戦略級魔法を放つた本人であると同時に、『灼熱のハロウィン』を引き起こした魔法師である事も分かつたのだ。そして司波兄妹が四葉家の人間であることも、弘一の中ではほぼ確定していた。

弘一の中で、もともと四葉の台頭で十師族のパワーバランスの崩壊は免れないと言う危機感があり、七草家を何とか四葉家に対抗できるだけの力を得なければという思いを常に持つていた。

司波兄妹と四葉家の関係を確認し、さらに、達也が放つた済州島と鎮海軍港に放つた戦略級魔法の映像を見てからは、思いはより一層強

くなっていた。

その切り札として、横島の取り込みが最も近道に見えたのだ。

本人は否定しているが、氷室家の重要なポジションにいるであろう横島は、最強の防御魔法『救済の女神』の使い手でもある。それだけでなく、京都から横浜まで、1時間弱で生身で到達する何かしら強力な魔法を持っていることも推定できる。さらに武術も凄まじいレベルで習得している。

しかも、人の手ではとても防げるような物ではないと思われるあの済州島で放たれた戦略級魔法を跳ね返せるぐらいの力を持っているのだ。

弘一はこの吸血鬼事件の協力体制による契約は横島を取り込むチャンスだと考えていた。

達也が関わってはいいるが、直接四葉が関わる事は無いだろうと判断。

幸いにも、娘の真由美がどうやら、横島に気がある事は見ているだけでも分かる。

そして今日、弘一は真由美と横島の関係を進めるべく大チャンスだと考えていた。

そこで、ワザと、二人の息子には協力体制の話し合いの開始時間を遅らせて知らせ、こうして、弘一、真由美、横島の席を作ったのだ。

「いや、不覚を取ってしまった。そんで海を漂っているところを、昔馴染のマリアとカオスのじーさんに助けられたんですよ」

横島は苦笑いをしながらそんな事を平然と言う。

「!!……君、ドクター・カオスと魔女マリアとは知り合いなのかね」

弘一は横島がサラッと云った話しに、衝撃を受け目を大きく見開く。

「まあ、昔からの腐れ縁で友達っすね」

「……腐れ縁……友達」

一瞬弘一の頭は真っ白になる。ドクター・カオスと魔女マリアを友人などと言う人間が目の前に居るのだ。

ドクター・カオスと魔女マリアと横島がそのような関係だとは全く考えていなかったのだ。

十師族の長たる弘一でさえ、その意味に驚きを隠せない。

十師族いや、上に立つ人間である弘一だからこそ、その意味に、真由美や横島の友人達とは比較にならない程の衝撃を受けていたのだ。

制御不能の天災錬金術師ドクター・カオスと世界最強の一角とされる魔女マリアを友人に持つ横島。口ぶりからするとかなり親密な関係に弘一は聞こえた。

USNA軍が横島に手を出せないのも、日本政府が横島の懐柔に手を焼いていたのも、これで納得がいった。

弘一の額に一筋の汗が流れる。

ドクター・カオスと魔女マリアはまずい

ドクター・カオスと魔女マリア、そのとてつもない戦闘能力は一般の人間にも知られているが、そこだけではない。1000年以上も生きていく生きた伝説にして、その天才ぶりは言うまでもないが、行動原理は誰も理解が追いつかないのだ。恩恵を受けた人間や国は多数あれど、その逆も同じぐらいあるのだ。

何処の国にも属せず、台風のように各国を荒らしまわり。まさに制御不能な厄災や天災のような存在なのだ。

しかし、実際のカオスは善性に近い人間である。逆に悪事に全く向いていないため、悪事を働こうとすると必ず失敗するのだ。近くにマリアが常にいるため、悪事など出来ようも無いのだが……行動は常に派手で、誰にも理解されない。厄災を被った人間や国はほぼ、その人間や国に問題があったのであって、自業自得なのだ。ただ、その様な事は記録は歴史に残りようもない。

普通に接すれば、大きな問題は無いはずだ……ただ、ちよつと建物が壊れたり、街が壊滅したり、大爆発が起こる程度ですむハズ。……カオスと接するにはリスクはつきものだろう……それにあまりある成果が得られるため、大国のUSNAや大亜連合などはカオスと接触していたのだろう。

日本の場合、歴史上ドクター・カオスとの交流は皆無なだけに、余

計に恐れている節がある。

弘一にとっても、今までの横島の在りようだけで、規格外な存在なのだが、さらにとんでもない付加価値が追加され、一つ間違えば、国が一つ滅ぶような事実を突きつけられたのと同義だった。

「よ、横島くん。カオス氏とマリア女史はどのような人物なのかね」

弘一は気を取り直して、横島に質問する。

「え〜つと、おもしろいじーさんと、やさしいお姉さんって感じっすかね」

「はあ?」

弘一は横島のその辺の近所の井戸端会議のような人物評に、つい間抜けな声が出てしまった。

「いや、普段はね。でもじーさんはいざとなると、めっちゃ頼りになるし、マリアもなんだかんだと世話になっているし、俺にはもったいないぐらいのいい連中ですよ」

「そ…そうなのか」

弘一はこの横島の意外な返答に戸惑うが、加味して考えると、横島が、あのドクター・カオスと魔女マリアを制御出来ていると言ってもいいのでは無いかと考える。

そうなると、横島がいれば、カオスとマリアの恩恵にあずかれる可能性も高くなる。

リスクはあるかもしれないが、十師族に対し、いや、日本に対し、いや、世界各国に対し、ある意味最強のカードを手に入れたことになる。その恩恵は計り知れないものがあるのだ。

いまさら、横島を取り込む路線変更も出来ない。いや、さらに価値が上がったと言ってもいいだろうと弘一は考える。

是が非でも、真由美、もしくは娘達の誰かを横島と結婚させなければならぬ。しかも両者が好きあってくれれば尚更いいのだが。

弘一は、最初の路線を進める事にする。

「君が行方不明だと気が付いたのは、大分後だったと思うのだが、早くに気が付けば、こんな大事にはならなかった可能性もある。周りの友

人や氷室家の人々はさぞ心配していたと思うのだが」

「そ、それは面目ないっす。ほんと皆には迷惑かけっぱなしで……」
「やはり、君には傍に誰かいてもらった方が良いのではないかと思うのだが、君は一人暮らしと聞いている。しかも、親戚は遠く離れた氷室家の方々だけと。男一人だと、普段の食事や生活も知らず知らずに乱れてくるのは仕方がないが、君は今回の契約の件もあり、こちらとしても体を大事にしてもらわなければ困る身だ」

「そ、それはそうなんすけど」

「今回の契約の件は後程話すが、七草としてもほぼ決定事項だ。ただ、君の健康管理について疑問が残るのでね。いつそう、我が家にしばらく逗留してもらい。衣食住の世話をさせてもらえないだろうか、そうすれば、君が言う、悪霊との戦い方の訓練や教育も我が家が保有している敷地内の訓練所や郊外にある大規模訓練所が何時でも使用できる。」

なんならUSNA軍や千葉家との合同訓練を行ってもいい」

弘一はグイグイと横島に攻めいる。

「いや、俺結構体は丈夫っすから」

「その君は、最近まで記憶喪失になっていたじゃないか、誰かが近くにいただけでも、違うとおもっただがね」

弘一は、横島が記憶喪失になったと思われる濟州島で受けた戦略級魔法については触れず、飽く迄も、健康管理が至っていないなどの理由にすり替え、横島を攻める。

「そ、それを言われると痛いっす。しかし、三者と達也のとも含めて四者は平等にしないと不満がでるので、七草家に逗留するのはどうかと……」

横島も、真由美の前で達也の戦略級魔法を喰らったなどとは言えず、押され気味だ。

「ふむ、一理ある。ならばせめて、君の健康チェックだけでもさせてくれ、君の家に、夕飯や日常生活の負担を軽減させる手配だけでもいいのではないかね」

「いや、わざわざ悪いっすよ」

「わざわざではないよ。今後吸血鬼退治に一緒に行動する真由美を横島くんの家に、学校から直接向かい、夕飯の用意をさせ、掃除もさせる。どうせ夜間の行動となるから、ついでだ。手間は一緒だろう」
「おおお、お父さんな…何を言っているの！私料理なんて…!!それに男の人の部屋に、横島くんの…」

真由美は顔を真っ赤にして、弘一に抗議するが、最後は消え入る声だ。

そこで、応接間の扉が勢いよく開く。

「ゼー……ったいダメ!!」

香澄が大声を出して、父弘一に叫ぶ。

「なんだ香澄、今は接客中だ。後にしろ」

「お父さん!!お姉ちゃんをこの男の家に行かすなんて!!変な事されるに決まってる!!とんでもない変態なんだこいつ!!」

「香澄ちゃん……」

泉美はその様子をオロオロと扉越しに覗き見ていた。

どうやら、この二人、何時からか分からないが扉の外から中の話を聞いていた様だ。

「香澄！お客様に失礼と、何度言ったら分かるの!!横島くんはそんな事はしません!!」

真由美は香澄を叱りつける。

「うむ。香澄の言い分も一理ある。若い男の所に真由美を毎回一人送る事は、負担であろう。……なら、香澄、お前も、真由美の手伝いをしなさい。真由美がいけない時は横島くんのお世話をしなさい」

「へ？なんでボクが？」

「お前が言ったのではないのか？真由美一人で負担させるわけにはいかない」と

「いや、そうじゃなくて……この男がお姉ちゃんを襲うかもしれないって」

「そんな事をするわけが無かろう。こう見えても、横島くんは氷室家

の重要なポジションにいる人間なのだぞ。責任の取り方も十分知っている。愚かな事はしないだろう。香澄、何度も言っているだろう。自分の発言にはしっかりと責任を持つようと、十師族に連なる七草家の娘なら尚更だ」

弘一のこの口ぶりは、どうやら、この双子姉妹が応接間の外から中に聞き耳を立てている事をしっていたのだろう。重要な個所は聞けない様に魔法で細工し、香澄が憤る場面のみ聞こえる様にしていたのだ。

そして、この展開に持つて行き、なし崩し的に横島を無言の了承させ、真由美を横島の家に行かせ。ついでに香澄も上手く行けば、行かす様に仕向けたのだ。

「えええ!!氷室ってあの氷室?この変態が?」

「香澄!あなたはまだそんな事を!」

真由美は既に、横島の家に行く事よりも、香澄の失礼な発言に気がなっていた。

「だつて〜」

「わかったな二人共」

弘一は姉妹二人が言い合いをしている間に、そう言っただけで強制的に横島の家に行かすことを決定した。

「え?俺の意見は?」

その家族の言い争いの中、横島が介入できる隙は無かった。

「と言うわけで横島くん。二人をよろしく頼むよ」

弘一はさも決まった事のように横島に軽く頭を下げる。

「アレ?なに?いつの間に決まったの?アレ?」

「仕方がないわ……香澄だけに任すわけにもいかないし……横島くん。しばらくの間よろしくお願いね。料理とかあまり得意じゃないけど、そこは許してね」

真由美はしぶしぶと言った表情でそう言っていたが、最後は顔を赤らめながら横島にニッコリとした笑顔を向けている。

「(こちら)そつて、……アレ?真由美さんまで……何を……」

「くつ、お姉ちゃんだけにさせるわけには……変な事したら、ただじゃ

置かないから……」

「いや、あの香澄ちゃんも何を？」

横島の意見や言葉など誰も聞いていなかった。

「そろそろ、息子たちが帰ってくるころだ。香澄は退出しなさい。これから重要な話をする」

弘一がこう言っつてこの場を締めると、タイミングよく誰かが廊下を此方に向かって歩いてくる足音がしてきたのだ。

香澄は横島を睨み付けてから、泉美と共に応接間から出て行く。

「ごめんね。横島くん。こんな事になって」

真由美は申し訳なさそうに横島に謝る。

「たははははっ、アレ？」

「どうやらこれで、この件はうやむやの内に決定事項となったようだ。」

弘一はそんな真由美と横島を見て、ニヤリとしていた。

「どうやら、ここまでの弘一の策謀は、途中イレギュラーな事項があったが、順調の様だった。」

159話 横島 七草家に呼ばれる!!その3

「七草家当主弘一が長男、七草智一です。いつも妹が世話になってい
るそうだね」

「同じく、次男の七草考次郎だ」

「第一高校、一年の横島忠夫です。いや、俺の方が真由美さんに迷惑
ばかりかけていますよ」

七草家の長男と次男が応接間に到着し、横島と挨拶を交わす。弘一
の右側に智一、左側に考次郎が座る。ちなみに真由美は横島の右隣り
に座ったままだ。

智一は現在25歳で既に既婚者だ。家を出て都内で夫婦で暮らし
ており、見た目もそうだが父親とは違い毒が無く真面目な好青年であ
る。

考次郎は23歳、大学を出て、七草家直属の魔法研究所で、研究に
没頭し、家に帰ってくることは滅多にない。勿論結婚はしていない。
父弘一と似て、眼光が鋭い。

「わざわざ俺を研究所から、呼んだのは何故だ？重要な案件は兄さん
と父さんと決定すればいい話だろ。しかも、今回の話は既に決定して
いるはずだ。俺はそれに従うのみだ」

考次郎は無然としながら、弘一を見据える。

「考次郎そう言うな。この横島くんは、我々が手こずっていたパラサ
イトの撃退方法を教えてくれるとの事だ。興味があるだろう？」

「本当なのか？君は氷室の人間と報告を受けている……しかもパラサ
イト（悪霊）を憑依した人間から分離させたとも聞いている。氷室で
も秘術だろうその古式魔法を教えてくれると言うのかい？」

考次郎は先ほどとは違い、横島に話しかける口調が柔らかくなつて
いた。どうやら魔法を教えてくれると言う話で一気に機嫌が良く
なったようだ。考次郎は魔法力が真由美や智一よりも高く、高レベル
の魔法も苦も無く行使できる実力者である。また、新たな魔法研究に
関して並々ならぬ感心を持っている青年でもあるが、どうも一つの事
に集中すると他が見えなくなり、それ以外の事はおざなりになる傾向

がある。

「いや、さすがに氷室独特の術式を教えるわけにはいかないですし、相当修行しないと扱う事もできないでしょうね。まあ、悪霊を対処する方法は他にも幾つかあるんで」

「そうなのか、……そう言う事ならば、俺がここに来た意味は十分にある」

考次郎は納得した様にそう言った。

「まあ、そう言う事だ。横島くん。先ほども言った様に、基本的に七草家と十文字家は横島くん達と協力体制をとるつもりだ。その契約の内容については今から幾つか確認したいのだがね。十文字家とは当主同士ですでにすり合わせ済みだ。後の細かいところは此方に一任されている」

弘一は改めて、協力体制について切り出す。

「了解っす」

「まずは、協力体制については横島くんと契約させて頂くとして、細かい内容なのだが、我々からは真由美と十文字克人君が君の悪霊退治に同行させてもらい、君からノウハウを大いに学ばせてもらうよ。」

また、大がかりな捕り物になる場合は横島くんの指示で真由美、克人君を通じて我々の組織の人間を動かしてもらって一向にかまわない。まあ、邪魔にならなければと言う前提が付くが……」

「今回の悪霊は厄介で、俺でも近くに行くまで判別が付きにくい隠密性に優れた悪霊の様なんです。」

皆さんの、霊視による判別ができないにもかかわらず、悪霊に取りつかれた人間をあぶり出し、追跡していた組織力は流石ですね。手伝っていただくと非常に助かります」

横島は先ほどより、若干丁寧な口調になり弘一の提案をありがたく受ける。

「重要なのはここからの話しなのだが、我々が一番危惧している事なのだが……」

具体的に、君は我々に対悪霊対策をどのように、示してくれるのかね。

今さら、新しい魔法を作る時間も無い、かと言って古式魔法を使えるわけではない魔法師である我々にだ」

「丁度それが届いたんで、持ってきました」

横島は一緒に持ってきた大きめのスポーツバックの様なものから、大小二つのジェラルミンケースを取り出す。マリアが横島の自宅に持って行く予定だったカオスからの届け物の一部であった。

真由美との待ち合わせの前、横島はマリアを呼んで、カオスの届け物の中身を精査していたのだ。

「これは霊視ゴーグル、これで霊視が出来ない人間でも、ある程度の霊気や霊力の確認が出来たりしますが、今回の物は霊的な存在や悪霊などの波動を感知するのに特化しています。それと、悪霊などが関わった霊的遺物や人間などでは到底なしえない様な形跡もこれで探すことができるしるものです」

小さなケースからはスキーで使うゴーグルのような物を二つ取り出す。

「霊気?……ああ、サイオン量を測定する機器という事か……」

弘一は一つを横島から受け取る。

「な!?……こんなコンパクトなものが……」

その横では考次郎は驚きの声を上げる。

「いや、意味合いが違います、……まあいいや。取りあえずかけてみて下さい。対象の人物の霊気の波動を測定する機器つすね。霊的な存在や悪霊に対してはその造形をクッキリ映します。どんな生物も霊気を帯びてますので、一応感知しますが感度を低く設定してます。霊気や霊力が大きい人や生物には反応しちやいますね。……丁度いいや、皆さん霊気……サイオン量も多そうだし、右のスイッチを押してください」

そして横島は隣の真由美にも渡しながら説明する。

「おお、ぼんやりと、人に色がついたように見えるな。考次郎が一番、色が濃く見える……これがサイオン量に比例するののか」

「ホント、凄いわねこれ……でも、横島くんには何も見えないわ?」

真由美はゴーグルを掛けたまま、隣の横島を見る。

「今は、霊力を抑え、霊気を隠しているので……」

そう言つて横島は少し霊気を解放する。

「え？……横島くん？全身が均一に強く光っているのだけど、しかもボヤツとじゃなくて、クツキリと」

真由美は急に横島が発光し、青白い光を帯びているように見えたのだ。

「そうですね。俺の場合霊気コントロールをしているので、全身に均一にね。だからそう見えるんです」

「……横島くん、君は何の補助もなくサイオンやプシオンさえも自由に乗れるのか……」

弘一もゴーグルを掛けた状態で横島を見据え、静かに驚きの声を上げる。

「意味合いは大分かわるのですが……まあ、現代魔法に翻訳すると、そういう事になりますかね。……悪霊も同じことをやってきます……と言うかそれそのものが本体のような連中ですから」

「なるほど……」

「凄いな……」

智一は漸くここに来て小さく声を上げる。

「父さん！俺にも見せてくれ！」

考次郎は新しいおもちゃを見つけた様に興奮気味に弘一から霊視ゴーグルを受け取る。

「横島くん。これは凄い物だ。悪霊搜索や悪霊との戦闘で大いに役に立つ……それだけではない。対魔法師戦闘でも、これは使えるかもしれない……場合によっては……」

弘一は悪霊対策以外の利用方法をどうやら模索している様だ。

「まあ、流石に本物の霊能者に比べれば性能は格段に落ちますが、無いよりはずつとましと言う程度です」

「霊視とは、なかなか凄まじい能力のようだね……君は魔法発動や魔法師の位置を事前に察知できるのかな？」

智一は横島に質問をする。

「そう言う事になりますね」

「……君の前では魔法師は丸裸同然というわけか……出来るだけ数が欲しい。用立てしてくれないか？」

弘一は考えをまとめるようなしぐさをしながら、横島に売ってくれるように言う。

この霊視ゴーグルに価値を悪霊対策以外にも見出しているようだ。「まあ、そのつもりですけど、それつて一部非常に貴重な物が使われているんで数は無いはずですよ。しかも、USNAや千葉家にも渡さなはいといけないから、それ程用意できないんで」

このような霊具に使われているクオーツと呼ばれる精霊石の一種は、ほぼこの世界のレリック（オーパーツ）と同じであり、非常に希少であるため、通常手に入れることはできない。しかし、この霊視ゴーグルに使われているのクオーツの部分は、実は横島が作成した水晶の欠片に、霊気を封入した物をコアとして代用されているのだ。

しかし、横島はあえてその事は伝えず、現状では多量に渡すつもりもない。特にこの霊具は、一般の人間でも調整次第では霊気を辿り、特定の人間を探るなどの事もできてしまう。それを特定の組織や人間だけに渡すことは、政治的要素や軍事バランスなどに影響しかねない代物だと、少なくとも横島は考えていた。特に弘一のような野心的な人間には危険だと……

後は多量生産や一般化できる用途が立てば、カオス作、六道家などから販売もやぶさかではないのだが……

さらに今回の物はカオス作だ。少数渡したところで、複製は難しいだろう上に、無理矢理分解しようとしても、とんでもないトラブルも間違いなくしこんでいる。また、コアとなるクオーツの代用品も現世では横島ぐらいしか作成できないだろう。

「そうなのか……出来るだけ此方に回してほしいものだ」

「いや、まあ、その内につすね。で、次、いいつすかね。これ」

横島は大きなジュエラルミンケースを開け中身を弘一たちに見えるようにする。

「これは銃の様だが……」

「……旧世代のショットガンの様に見えるね」

智一はどうやらこの形状の銃を見たことがあるようだ。

「ショットガンと同じ感じです。通常弾は使えないけど……特製の弾丸を打ち出すための銃で、あまり銃器に慣れてない方にお勧めですね。弾丸内には悪霊退散の破魔札が複数入っていて、発射された弾丸は途中で分解して8枚ほどの破魔札が放たれ、目標に向かって飛んで行くようになってるんですよ。古式魔法師なら、投げるだけで多分正確に目標に飛ばすことが出来るんですが……多分、通常の魔法師では難しいんでこちらの方が良いかと、射程は30m位と思ってください」

此方もカオス作の破魔札発射式のショットガン。中身の破魔札は横島自作の破魔札になる。氷室や六道も破魔札を扱っているが、売り物にはしていないため数も無いはずだ。実際に悪霊（パラサイト）など殆ど出くわすことが無いからだ。

弾丸自身にも術式が埋め込まれており、此方も横島が最終的に霊力を封入している。

「ほう、これがあれば悪霊にダメージを与えられるのかい？」

「そうっすね。勿論、人にとりついた悪霊にも効果がありますよ。威力と効果が異なる弾丸も数種類用意しています。実際には中の破魔札と弾丸の薬莖の効果の違いです。中身についてはおおいおい説明することになります、これならばそこそこ数は用意出来ますよ。まあ、買ってもらう事になります……」

破魔札ショットガンや霊視ゴーグルにしる、マリアの記録に設計が残っていたのだが、横島が要求する出力や効果を調整したうえで、この短期間で作成し、量産体制まで整えるとは流石はドクター・カオスと言ったところだろう。

「なるほど、これならば我々でも何とかなるかもしれん」

弘一はショットガンを手に持ち、唸る。

「それにしても、このようなものがあるなど聞いた事も無いな」

考次郎の知識の中で、退魔用の霊具が存在する事すら知らなかった様だ。

知っている方が稀である。日本では氷室や六道等、ごく一部でしか知られていないからだ。

「横島くんは本当に陰陽師なのね」

真由美も感心した様に横島の横顔をまじまじと見ていた。

「現代の陰陽師か……東北の氷室家、そして、関東では六道家か……時代に取り残された旧家だと思っていたが……そうではなかったという事か」

考次郎はどうやら、魔法師協会にも古式魔法の団体や国家にも所属していない氷室家や六道家を時代錯誤をしている旧家程度に思っていたのかもしれない。

「あと、護身用に護符も買ってくださいね。ちゃんと退魔用護符とかいてあるものを……これらの霊具も全部六道家のショップから買えるように手配します」

「六道家か……うーむ。横島くん……困ったな……関東の魔法協会……十師族、特に七草家と六道家は仲が悪い。お互い同じ縄張りを持つものだけにね。……君からか、氷室家から直接買う事は出来ない物かな？」

弘一がこういうのも仕方がない話である。六道家と関東魔法協会は何かと利権や縄張り争いでいがみ合ってきたからだ。

「うーん、一応、六道家を通すのは、氷室の商品も関東での販売は六道家からなのと……」

物を買う事によって、その縄張り争いに目を瞑ってもらおうかなと言う思惑もあるんですよ。あわよくば手伝ってもらおうって言う魂胆も持っていたりして……少なくとも六道家は心霊医療が出来るんで、悪魔に長期に取りつかれた人を治療してもらおうかなと思って……せつかくだから、この際、仲良くしてはどうっすか？」

特に六道家当主の式神の中には、治癒に特化した能力を有し、悪魔化がかなり進行した人間も治療が可能なのだ。

「なるほど、そういう事か、しかし、よく六道家が我々に物を売る気になったものだ。長年、お互いをけん制し、無視を決め込んでいたのだが……」

「いや、それはこれからなんですよ。まだ、俺も六道家の本部に行つたことが無いんで」

「まだだったのか、それは大丈夫なのかね？」

「氷室14代目が15代目が一緒に頼んだらきつと大丈夫だとは言つてたし」

「そ…そうなのか、それは横島くんにまかせるしかないのだが…」

「まあ、その辺は任せて下さい」

軽い感じで言う横島に弘一は多少不安を覚えるが、この件に関しては任せるしかないのだつた。

この後も、順調に協力体制の契約の確認を行い、短時間で同意に至つた。

そして、弘一達と横島は敷地内の訓練所へと移動する。

横島が真由美を通じて打診していた通り、七草家の家人を一カ所に集めてもらっていた。

悪霊に取りつかれている人間がいるのかをあぶり出すためだ。

160話 横島 七草家に呼ばれる!!その4

七草家敷地内にある訓練施設の第一訓練室はバスケットコートが2面作れる学校の体育館程の広さがあるが、様相は体育館とはかなり異なり、全面コンクリートで覆われ、窓も無いため圧迫した雰囲気醸し出していた。

七草弘一及び息子二人と真由美、横島は第一訓練室を一望できる高さに併設されている訓練管理室に入る。ここでは適切な訓練メニューの策定や訓練の指示、CADのテストなども行われる。

すでに第一訓練所室内には、吸血鬼事件にかかわった七草家お抱えの魔法師と十文字家の魔法師が全員集結していた。

七草家は60人弱、十文字家は12人、大凡男女合わせ70人が、5〜6人ごとの塊を形成し、集まっていた。

弘一は、今回の件は悪霊対策の新たな方策と連絡事項及び慰労の意を示すためにと言う名目で集合を掛けたのだ。

開始時間はまだだが、既に全員集まっており、意外とリラックスした雰囲気で各人情報端末をいじっていたり、隣と会話をしていたりしていた。

「あちやー、結構、悪霊に憑かれていますね。さっきの霊視ゴーグルで見てください」

横島は管理室からガラス窓越しに、訓練室を見下ろしながら言う。「……やはりそうなのか……こちらの動きが完全に読まれている節があったからな……吸血鬼（悪霊）に対し裏切り者がいるとも思えなかったのだが……体に乗っ取られるという現象があるとは」

弘一は、霊視ゴーグルを付けながら言う。「あつ、石田さんから、黒い影がクツキリと映っているわ……石田さんのチーム全員からも、黒い影が……」

真由美は霊視ゴーグル越しに、悪霊に取り憑かれた人物を判別出来た様だ。

「石田君か……最初期から吸血鬼事件にかかわっていた人間だ魔法力

も高く、今も対策チームのナンバー2の実力者だったのだが……」

弘一は、そう言つて、石田と呼ばれた30代中盤の精悍な顔つきの男性を一瞥してから、霊視ゴーグルを外し、隣の智一に渡した。

「全員で9名ですね」

横島は真由美のすぐ横に来て、その人物たちを次々に指で指し示していく。

「本当に凄いわね、この霊視ゴーグル。悪霊が取り憑かれた人物にチェックが入るようになってるわ……あつ」

真由美は感心した様にすぐ横の横島に顔を向け話しかけるが、ゴーグル越しとは言え、横島の顔を直ぐ近くにある事に気が付き、慌てて顔を赤らめ逸らす。

「9名か、ここまで悪霊に差し込まれていたとは……横島くん、石田君からは明らかに、他の取り憑かれた人間に比べ、強い反応が出ていたのだが、これは悪霊に長時間憑かれたためなのかい？」

「いえ、一概にはそう言えないんですが、とりあえず石田さんに憑いた悪霊は力をかなり蓄えだしている。この前のミアさん以上にね」

「そうなの……横島くん。彼は大丈夫なの？」

「そこが陰陽師の見せどころですよ。まあ、悪魔化をされる前に、抑えれば本人の体には大したダメージは残りませんよ。それでも霊的構造は改変されている可能性があるため、ちゃんと心霊医療を施さなければならぬですがね」

「この後の段取りをどうするかね。悪霊に取り憑かれた彼らだけ、別室に移動させると怪しまれる」

弘一は、横島に聞く。

「そうですね。この場でやりましょう。他の各種霊具の説明も兼ねられるんで、俺が一人で今から突入して、彼らだけ抑えます」

「なにを……他の魔法師もいるのだから、仲間がやられたと勘違いされて攻撃されるぞ」

考次郎は至極まともな注意を横島にする。

「……いや、だからちようどいいかなって、悪霊が取り憑かれたら、こうなるぞって、他の人にも分かるし……こんな場面で戦う事は

ざらですよ。下手をすると、沢山人間がいる街中でやらないといけない事も悪霊の性質によっても、あるんですよ」

「いや、そうじゃなくて、考次郎は君の心配をしているんだよ。七草家の魔法師は皆、実力者ぞろいなんだ。君にケガでもされたら……」

智一は考次郎の言葉を補足するように横島を諫めようとした。

「大丈夫ですよ。5秒も掛かないんで……」

「5秒だとーそんな短時間で何が出来るー!」

考次郎は横島に食ってかかるが……

「本当は5秒も掛かないんです……気が付かれない様に偽装して近づいて、だまし討ちするのが俺のやり方なんです、それじゃ皆さんに霊具の使い方を見てもらえないんで……ちよつとした戦闘を5秒間だけする感じですよ」

本来の横島の戦い方であれば、ギャグを飛ばしながら近づいて、油断しているところを、不意打ちをかますのだろうが……今回はギャグやだまし討ち無しで捕縛する様だ。

「考次郎、私が全責任を持つ、横島くんお願いしていいかい?」

「じゃあ、この部屋にある窓から突入しますね。使うのは破魔札と破魔札ショットガン、それとこの結界ロープ兼呪縛ロープです。最終的に封印札と吸引札言うものを使いますんで、見ていてください」

「横島くん……」

真由美はそう言った横島が一瞬真剣な表情をし凛々しい顔つきになっっていた事を見逃さなかった。

そして……

横島は腰に呪縛ロープ、右手に破魔札ショットガン、左手には破魔札を複数手に持ち、第一練習所室の高さ4m半程ある管理室の窓から弾丸の様に飛び出し、後方にいる石田氏がいる場所まで一気に飛ぶ。その間、ショットガンを一発を前方の女性に放つと同時に石田氏の集団に向かって破魔札を飛ばしていた。

石田氏も含め魔法師達の幾人かはそれに反応し、横島を確認しようとしたが、既に横島は石田氏の前に着地する。

石田氏や石田氏のチームメンバー全員に飛ばしていた破魔札が既に額に張られ、痙攣しだしており、横島はそこに封印札を石田氏には二枚他のメンバーに一枚ずつ流れるような動きで額や腹に触れる様に張って行くと、次々に痙攣が止まり床に倒れていく。

ショットガンで破魔札を複数頭から張り付けられた女性は床に倒れ痙攣し動けなくなっていた。

この間、突入から約一秒半、六人を拘束。

魔法師たちは横島の動きが見えずに、何が起こったのかがまだ分からない様だ。

横島はちよつと離れた場所にいた男性をショットガンを撃ち複数の破魔札が飛び出し彼に張り付き拘束する。

これで七人目

漸く、魔法師たちは横島を確認できたため、攻撃態勢を取り出したが、これだけの人数が一同に居る場所に容易に魔法を放つことは出来ない。横島は横島で棒立ちになり、半笑いをしながら両手を上に上げ降参の意を示す。

それと同時に、この練習所室の二カ所の扉付近で、それぞれ叫び声が聞こえた。

それぞれの出入り口扉を触れながら痙攣する男性と女性がそこに居たのだ。

そして、何処からか飛んで来た封印と書かれた封印札が、その二人の額に貼りつき、その場に倒れ大人しくなる。

この二人は、仲間が倒されたことに気が付き、それぞれ扉から脱出を図ろうとしたのだが、横島が既に、石田氏の真正面床に着地したと同時に呪縛ロープを操り、蛇の様に地面を這い、人をかき分け、両扉に巻き付かせていたのだ。

これで9人全員倒す。

大凡5秒弱で全員無力化したのだ。

「その少年は敵ではない！既に、我々の中に、吸血鬼に取りつかれた者がいた！彼はその人間を拘束したに過ぎない！彼は協力者だ！氷室

家の人間だ！」

弘一は、管理室から横島が出て行った窓から体を乗り出し、大声で戦闘態勢や何が起こっているのかいまだにわからず混乱する魔法師たちに叫ぶ。

魔法師たちは、その声に戸惑いながらも、横島と弘一を何度見ながら、戦闘態勢を解除し、驚きの声やら感嘆の声を上げていた。

氷室家の名前は古式魔法の旧家として知れ渡っているだけに効果が高かったようだ。

横島はその場でペコペコと頭を掻きながら、軽い口調で

「お騒がせしてすみません」

などと言いながら、ショットガンで倒した二人に改めて封印札を張って行く。

内心横島は、弘一の口から氷室家の名前を出したことに苦笑する。今の横島はドクター・カオスの後ろ盾で動いている事になっている。氷室家に迷惑を掛けないためにもそうしたので。

弘一は確かに、この場の魔法師達を落ち着かせるためにも氷室家の名前を出したのだろうが、七草家と氷室家の関係をおわす様にワザとアピールするためにもそう言っていたのだ。そうすることで、氷室家との関係を外堀から埋めて行こうと言う算段があるのだろう。

「横島くん、拘束した彼らをどうしたらいいか？」

「取り合えず、悪霊を分離しちゃうんで、離れて下さい」

横島はそう言って、倒れている悪霊に取りつかれていた人たちをテキパキと、一か所に運んでいた。

その間、魔法師たちは遠目で横島の様子を見ていた。

横島は懐から9枚の吸引札を取り出し扇状に開き持ち、彼らに向かってかかげる。

「悪霊退散、吸引」

横島が唱えると、空気の流れと共に、彼らに取り憑いた悪霊は身体を飛び出しそれぞれの札に吸い込まれて行く。

「あく、終わったんで、もう大丈夫です。皆さんを医務室か寝かせられ

るところに運んで上げて下さい」

「皆、彼の言うとおりにしてくれ」

周りの魔法師達は、何が起こったのか分からない様子ではあったが、弘一がそう言うと、訓練所室から彼らを運び出していく。

管理室では……

悪霊が自分たちの家人である魔法師に取り憑いていた事実より、横島の戦闘能力の高さに驚いていた。

「なるほど、これらの霊具とやらが、悪霊に有効だという事は十分に分かった。これなら俺達でも何とか使えそうだ。……しかし、なんなのだ？あの少年、魔法など起動していなかった。なのにあのスピードに身体能力……彼は人間か？」

考次郎は横島の一連の動きに啞然としていた。

「やはり、報告にあったルウ・ガンフウを魔法無しに倒したというのは事実のようだ。氷室家とは恐ろしいところのようだね」

智一も訓練室の魔法師達に愛想笑いをしている横島を見ながら、苦笑していた。

「そう言う事だ。彼は本物だ。七草家としても、彼とは常に友好関係を結んでおきたいのだ。他の連中に出抜かれる前にな。二人共わかったな」

弘一は二人の息子に言い聞かせる様に言う。

「……………」

真由美はその様子に顔を顰めていた。

真由美としては、弘一の発言は七草家としては、至極まともな意見だと思うのだが、個人的な感情では横島を利用し、裏切っているのではないかと胸に何か突き刺さる様な気持ちになっていた。

こうして、今夜、七草家での主な重要案件は終了した。

その頃、横島の一人住まいのマンションでは……

マリアは、リーナを連れ近所のスーパーで買い物をしてから、横島

の部屋に入るのだが……

持ってきた荷物を置くと、いきなり掃除を شدした。

部屋はそれ程、散らかっていないのだが……30分も経たないうちに、見違えるほどきれいになった。

そして、台所に立ち、何やら料理の仕込みを始めたのだ。

リーナはその間、キョロキョロとしながらソファに黙って座っていた。

マリアに動かない様に釘を刺されていた。

料理の仕込みをひと段落つけたマリアは紅茶を入れ、ソファに座っているリーナに出す。

「そう言えば、こうしてマリアと二人きりで話すのは初めてかもしれない……マリアはタダオと昔からの知り合いなのよね」

リーナは紅茶をすすりながら、斜め横に座るマリアに話しかける。

「イエス・横島さんとは・昔馴染みです」

「マリア、さつき学校で、タダオが、心が疲れているって言うってけど、どうということなの？」

「……」

「その、女の人の好意を怖がっているって……どういう事？タダオに何があったの？」

「ミス・アンジェリーナ・横島さん・今は・休養が必要です」

「それは聞いたわ。過去に何があったの？記憶喪失のタダオはそんな事は微塵も感じさせない……あっ、タダオ……力をつかおうとする」と苦しみ出した！それと関係があるの？」

「……それは……」

マリアは無表情ではあったが、何か躊躇するような口ぶりであった。

161話 横島 達也の心労を知らない!!

達也は深雪と共に自宅に帰った後、自室のデスクに例の漆黒の箱を置き、それを一人深刻そうな顔をし眺めていた。

(……今日中にこの箱を奴に直接渡すのが俺の与えられたミッションだ。かつてこれ程まで、困難かつ、精神的に追い込まれた事は有っただろうか？ある意味、吸血鬼事件やリーナ達スターズよりも手強い。奴の自宅も既に把握済みだ。ここから、どのルートを通つてもそれほど時間はかかるまい。奴の自宅に直接持つて行つて渡すだけだ。

しかし奴は今、七草家で吸血鬼、いや今は悪霊か……悪霊対策の協力体制について七草家当主と打ち合わせをしているはずだ。時間もかかる事だろう。俺の予想では、奴が自宅に帰るのは22時以降だろう。下手をすると、日付が変わつた後かも知れん………しかし、これをどう言つて渡したのか……)

達也は珍しく、有効な作戦を考え出すことが出来なかった。

この件に関して、達也が経験したどの事件や作戦にもまるつきり当てはまらないからだ。

漆黒の箱をターゲットに受け渡すだけ、この箱を狙う敵もターゲットを狙う敵もない。障害となるものは何もないはずだ。ただ単にその箱を自宅に持つて行き直接渡すだけ……一見、素人でも簡単にこなせそうな作戦なのだが………

漆黒の箱の中身と依頼者とターゲットその人がやばいのだ。

箱の中身は核兵器でも生物兵器などと言う危険な兵器ではない。かと言つて、レリックなどと言う国家間の争いの種になるぐらい極めて貴重なものでもない。

中身はただの手作りのバレンタインチョコケーキだ。

因みに毒などは入っていない……ハズ。

では何がやばいのか？

チョコケーキの上の板状チョコに書かれているメッセージがやばいのだ。

達也はもう一度、その漆黒の箱を上を持ち上げ開け、中身を確認す

る。

ハート型の大きなチョコケーキ。

上に乗っている板チョコに書かれたメッセージは……

おねえさんから

ステキなあなたに愛をこめて

四葉真夜

達也は大きく溜息を付く……何度見ても中身は同じであった。いつそ夢であつてほしいと願っていたのだが。しかし、現実とは厳しいものだ。

十師族の中で今一番力を持っており、アンタツチャブルと世界でも危険視されている四葉家。その当主、四葉真夜。達也の他界した母の双子の妹だ。ようするに叔母である。その真夜が特定の男のために自らの手で作った手作りバレンティンチョコケーキなのだ。

本人からも乙女のような言質も取っている。まず間違いない。

これだけでも、いろいろと十分悩ましい問題なのだが、渡す相手がさらに悪い。

渡す相手……ターゲットの名は横島忠夫

数少ない友人の中で、最も頼りになり、信頼もしている。達也にとつて親友と言つてもいいだろう存在だ。

戦闘力は非常に高く、達也が見てきた中では間違いなく最強であろう。

仲間思いであり、達也が唯一、深雪の命を預けておいても安心が出る相手でもある。

ただ、性格に問題があるのだ。

非常にスケベで美人であれば誰でも手を出すという欠点を持っている。但し成功確率は限りなくゼロなのだが……しかも、自分に向けられる好意にはかなり鈍感と言つた困りものでもある。

もし、自分の叔母、四葉家当主四葉真夜のバレンティンチョコケーキを横島が受け取り、その気持ちまで受け取ったならば……想像したくない結末がまつているのだ。

真夜がいくら美人とは言え45歳だ。横島は現在16歳。普通で

あれば、まず結ばれることはほぼ不可能であろうことは誰の目にも明らかなのだが……

真夜は欲しいものがあれば、どんな手段を用いても……人道に外れようとも涼しい顔をし、必ず手に入れる恐ろしい女なのだ。

さらに相手があの横島だ……スケベが服を着たような男なのだ。年が離れていようとも真夜の色香と誘惑に惑わされ、万が一という事も有り得る。

万が一とは、横島が叔父になるという事だ……そう言う事なのだ。達也は思い悩む。

しかし、当主直々のお達しでもあるため、このミッションの放棄などあり得ない。

……

「お兄様、夕飯の支度が出来ました」

達也の部屋にノックの音と共に深雪の声が聞こえてくる。

「ふう……今行く」

達也は深雪の声にホッと息を吐き、我に返る思いがした。

悩んでいても始まらない事だと思い直し、とりあえずは最愛の妹が用意した夕食をとる事にする。

「さあ、お兄様、召し上がれ」

深雪は夕食が用意されたダイニングテーブルの何時もの様に席に着く達也に満面の笑みを向ける。

「……………」

深雪が食事を用意し、達也と深雪は向かい合って座り、二人きりの食事……何時もの食卓風景ではあったのだが……何かが違う。

「では、頂きます。お兄様？どうされました？料理をじつと見つめられて……」

「……深雪……今日は俺と深雪は別メニューなのだな」

「はい、今日はお兄様のために特別にフルコースを用意させていただきました」

深雪は満面の笑みを崩さない。

「……いや、豪華だな……ただ……」

「ただ？」

「その、全て……甘い匂いがするのだが……」

達也の額に一筋の汗が流れる。

「はい、深雪が腕によりをかけ、たつぷり愛情を上書きしたチョコのフルコースです。あんなにもチョコを持って帰られたので……：全く食べないのも申し訳なく思うと同時に、不逞の輩が毒を混ぜていないとも限りませんでしたので、安全を確認した上で、お兄様のお口に合う様に不純物（他の女の思い）を取り除き、深雪の愛で包み込みました。さあ、召し上がれ」

そう言つて、ニツコリとほほ笑む深雪。

そう、達也の席にはチョコで出来た料理が所狭しと並べられていた。

チョコのフライや、焼きチョコ、チョコスープ、チョコケーキ、チョコ刺身風、チョコサラダ風、等々……

これらは全部、達也が第一高校で受け取ったバレンタインチョコの成れの果てだった。

深雪は目をギラつかせながら凶悪な笑みを浮かべ、少女たちの達也への思いがこもったバレンタインチョコを粉々に粉碎していき、そして、ドロドロに溶かし、かき混ぜ、元の形や食感や風味など一切残らない様にし、全くの別ものに調理されて行ったのだ。

「……夕食に流石にチョコ一色というのは……」

「なにか、問題でもあるのでしょうか？……それとも、深雪の愛情がこもった料理よりも、見ず知らずの女から頂いたチョコの方が良いのでしょうか？」

「……いや、何でもない。……では頂こう……」

もはや達也に、心安らぐ癒しの空間などと言うものはどこにも存在しなかった。

達也は恐怖にしか見えない笑顔を湛え続ける深雪の前では、この愛情……いや、強烈な嫉妬が籠ったチョコフルコースを残すことが出来ない……無理にも口に入れ、完食するしかなかった。

地獄のような夕食を済ませ、胃のあたりを抑えながら自室に戻る達也……

達也はバレンタインデーを作った人間を今日ほど恨めしく思ったことがない。

せめてもの救いは、後で分かったことだが、チョコフルコースにほのかのチョコが入っていないかった事だけだった。

深雪の理性は辛うじて残っていたらしい。

激しい胸やけに、甘ったるい感覚が体から抜けず、しばらくベットに横になる。

精神的ダメージと肉体的ダメージを蓄積していく達也。

しかし、達也にはまだ、今日やらなければならぬ事が残っている。

達也は時計を確認してから、重い腰を上げ、服を着替え、漆黒の箱を携えて家を出る。

いざ、横島忠夫宅へ……

マリアは答えに窮していた。

横島の過去について、リーナは真剣な眼差しで聞いてきたのだ。

あの時、横島の現在の精神状態についてリーナを諭すために要点だけをかいつまんで話をした。

横島は今、本当は精神的かなり消耗しており癒しが必要である事を……そして、女性の好意に恐怖感を抱いている事を……

横島は過去に大切な女性を失う苦しみを二度経験し、しかもすべて自分の責任だと未だに思っている。横島のそんな精神性と心のダメージをマリアはほぼ正確に把握していた。

マリアは周りに一人でも多く本当の意味で横島を理解をしてくれる人間がいてくれることを切に願ひ、リーナであれば、その一人になつてくれるのではないかという期待もしていたのだ。

何れは横島自身トラウマと向き合い克服しなければならぬが、一

人では難しい。

この状態の横島の事を知ったうえで、接してくれる人間が周りに多く居れば、横島の心の負荷が軽減され徐々にでも、和らいで行くのではないかと考えていた。

マリアはそして意を決し、リーナに現在の横島の状況と原因を告げるべきだと……口を開けようとする。

「ミス・アンジェリーナ……横島さんは……」

ピンポーン

このタイミングで部屋のチャイムがなる。誰かが訪ねてきたらしい。

マリアはリーナに頷いて見せた後、玄関に向かおうとする。

リーナは肩透かしを食らった様に、ため息を付いたのだが、横島が帰って来たのだと思い、勢いよくソファアールから立とうとしたのだが、マリアに制され、そのまま座っているように言われる。

マリアは既にこの横島の部屋を完全掌握している。チャイムを鳴らした人物をインターホンカメラを通して、確認済みであった。

横島が帰ってきたわけではなかった。来訪者は黒ずくめの服をきた若い男であった。

しかし、敵ではない。横島の学校での近しい友人の一人であると把握していた。すでにある程度のプロフィールも検索済みだ。

「こんばんは・横島さん・今は留守です」

マリアは扉をガチャリと開け、その人物を見据え対応する。

「!!……………!?……………そ、そうですか……」

その人物、司波達也は目を大きく見開きマリアを見つめ、言葉に詰まっている様だった。

達也は、横島が出てくるものだとばかり思っていたのだが、落ち着いた雰囲気的美女が扉から現れたのに驚いたのだが……それだけではない。その人物をよく見ると、あの世界を席卷するドクター・カオ

スの相棒にして、本人自身も世界最強の一角を担う魔法師である魔女
マリアだったからだ。

横島から友人だとは聞いていたが、まさか本人が横島の家にいると
は思いもしなかった。

「私はマリア・横島さんのお友達」

驚いた様子の達也を見て、マリアは安心させるためにも自己紹介を
する。

「……失礼しました。横島くんの学友で司波達也です。届け物を預
かっておりまして、本人に直接渡さなければならなかったのですが
……まだ、帰っていないようですね。……しばらくしたらまた訪ねま
す」

冷静に考えれば今日、第一高校で横島とリーナはマリアと会ってい
たと言っていたため、ここに居てもおかしくはない。

居住まいを但し、達也は若干丁寧な言葉遣いで、自己紹介と訪問し
た趣旨をマリアに伝える。

「ミスター・司波、上がって・待ってください。横島さん・いつ帰って
くるかも・わかりません」

「いえ……女性一人の所に上がるわけには」

「おかまいなく・横島さんの友人を・外で待たせるわけには・行きませ
ん。一人でもありません」

「……では、お言葉に甘えさせていただきます」

達也は断ろうとしたのだが、一人ではないと聞き、もしかするとド
クター・カオスもいるのかもしれないと思い、期待を膨らみながら、
横島の部屋に入る。

「マリア、タダオじやないの？誰だったの？……な！達也!!」

「リーナか……なぜここに？」

達也はリーナを見て若干残念そうな顔をする。やはりドクター・カ
オスに会いたかったようだ。

「こつちが聞きたいわよー！」

リーナはまさか、訪問者が達也だとは思ってもよらなかった。しか

も、リーナと戦った時と同じ服装でだ。とつさに立ち上がりCADを構えるが、マリアに止められる。

「ミスター司波も・横島さんの・お友達」

「……達也はなんで、こんな時間にタダオの家に来たの？」

リーナはしぶしぶ構えを解き、再びソファアに座る。

「俺は横島に届け物だ。本人に直接渡したくてな……リーナもなぜここに？」

達也はマリアにソファアに座るように促されリーナの斜め前に座る。

「私はタダオのガールフレンドだから、ここに居るのが当然よ。それで届け物って何なのかしら？」

「……とある人物から横島に渡す様に頼まれてな、どうやらバレンタインのチョコらしい」

達也はある程度の情報を出し、怪しまれない様にする。

「私がタダオに渡しておいてあげるわ。だから、もう帰ったら」

「そう言うわけにもいかない。直接渡す様に強く言われている」

「……怪しいわね。タダオに危害を与えるのならば容赦しないわよ」

「ミス・アンジェリーナ・大丈夫です。袋の中身は・ハート形の・チョコケーキの様です。女性の名前も・書かれております。毒物や危険物では・ありません」

マリアはそう言って、達也に紅茶を差し出し、リーナにも紅茶を入れなおす。そして、リーナとの間に入るように達也の横に座る。

どうやら、マリアは達也が持っていた箱の中身を搭載された各種センサーでスキャンしたようだ。

達也は一瞬驚いた顔をするが、あの魔女マリアであれば、箱の中身を開けずに見る事は造作も無いのかも知らないかと思うと同時に、名前を出さなかった事にホツとする。

マリアには完全にバレたが、敵対する意思は無い様だ。送り主の四葉の名前を知りながらも、リーナや達也に配慮し名前を出さなかった様に見える。

もし、敵対したとしても、達也がマリアをどうすることも出来ない

のだが……仮に戦っても勝てる見込みが薄いからだ。噂通りのスベックであれば、接近戦においても、魔法戦においても返り討ちにされるのが落ちだ。さらに横島と親交が厚い人物でもあるため、もしそうであっても戦闘は起こせなかっただろう。

「達也がここまでして持つて来るチョコ……まさか深雪なの？ いや有り得ない。あのブラコン冷血娘に限っては……じゃあ誰よ？」

リーナは達也にさらに突っ込んで聞いてくる。深雪に対しては容赦ない言いようだ。

「……本人の意思でな、他人には言えん」

「何よそれ？ 別にいいじゃない教えてくれたって」

「ミス・アンジェリーナ。慎みを持つのも・大切です」

　　マリアはリーナを諫める。

「……………」

マリアにそう言われて、リーナは無然としていたが、追及をやめ口を噤む。

達也は自分にフォローしてくれているマリアを横目でチラリと見、マリアに入れてもらった紅茶を一口飲む。

「!? これは美味しい……………」

達也はそのカップの紅茶を再度口にし飲み干す。何故だか疲れが取れる思いがする。

「ミスター・司波は、お疲れのようなので・精神を安定させる・ハーブを幾つか・ブレンドしました」

「マリアさん、何故それを……ありがとうございます」

　　達也は素直に礼を言う。

何故だか、精神的に疲れていた達也の心が温まっていく思いがしたのであった。

この頃の達也の周りの近しい女性は、達也の悩みの種であり、ストレス源で有り、このように達也の為に気を使ってもらえたのは久しぶりなのかもしれない。

　　しかも、マリアは達也の周りには居ないタイプの女性だ。

言葉数は少なく、表情はほぼ変わらないが、温かみのある言葉に、相

手を正しい方向に諫める度量もある。そしてこの気遣いだ。

世界最強の魔法師やら、魔女やら、物騒なあだ名が付けられているが、実際会った印象は180度違うものだった。雫が優しいお姉さんと評したのも納得が行く。

「この部屋は暖かいです・チョコケーキが・溶けると・いけない・冷蔵庫に・入れておきます」

「ありがとうございます。助かります」

達也はマリアの心遣いを素直に受け入れ、チョコケーキの箱を袋から出し、マリアに手渡す。

「…………達也、私とマリアとでは態度が全然違うんだけど…………ケーキは冷蔵庫に入れたし、達也は帰ってもいいんじゃない？」

マリアがチョコケーキの箱を冷蔵庫に入れに行っている間、リーナは達也に慥然としながら、帰るように促す。

リーナは達也の来訪によって邪魔をされていたマリアとの会話の続きを早くしたいのだ。横島が帰ってくる前に…………

「いや、直接横島の手に渡るまで見届ける義務がある」

達也としては、横島の手でそのチョコ箱がリーナの前で開けられる事も避けたいため、リーナが帰るまで、ここにいる事を決めていた。

台所から戻ったマリアは再び達也に紅茶を入れなおし、横に座る。

達也は横目で無表情なマリアを見ながら、紅茶を口にす。

やはり、心が温まる思いがする。

今の達也にとって、家に帰り、深雪の嫉妬の嵐の中に身を置くよりも、リーナと言う邪魔者がいるがマリアの横にいる方が癒しになるう。

162話 横島 自宅に帰る!!

「横島くん、ゴメンね。こんな事になって」

「いや、真由美さんが嫌だったら、言ってください。俺の方から、お父さんに断りをいれますよ」

七草家での用事を済ませた横島は、弘一の好意で、お抱えの高級車で送って貰っている最中なのだが、自宅前まで見送りついでに、今後、世話をするために家を一度見て来なさいと、弘一に言われ真由美も一緒についてきているのだ。

弘一の策略で、なし崩し的に真由美と妹の香澄まで、横島の普段の生活のサポートをすることになったのだ。

「その、横島くんが嫌とかじゃないの……私、料理とか普段からしないから、得意じゃないし……逆に迷惑じゃないかなって……」

「へ、意外っすね。真由美さんって器用だし、そつなく何でもこなせるものだと思ってた。でも、真由美さんは凄いいお嬢様だから、無理もないか」

「私だって、苦手なものぐらいあるわよ。でも、これからは料理もちやんと勉強しないとね」

「無理しないでくださいね。嫌な事は嫌って言った方が良くつすよ。でも、あのお父さんかなり強引だからなく……香澄ちゃんも巻き込んじゃって」

横島はその時の事を思い出して、呆れた風に言う。

「ご、ごめんね。でも……いい機会だし……」

真由美は謝るも、何故か顔を赤らめ最後は消えるような声でこんな事を言っていた。

「は、あの人、一度言ったら聞きそうもないしなく、真由美さんの立場からも断りにくそうだし……うーん。そうだ。別に料理とか世話するとかじゃなくって、遊びに来てもらう感じでいいんじゃないっすか？別に部屋を汚くしてるわけじゃないし、自炊もしてるけど、半分以上くらい外食だし、ぶつちやけ家に居る時間って寝てるか宿題してる時とか、短いんですよ」

「そうなの？……でも、そういうわけには」

「あつ、遊びとかいってる場合じゃないっすよね。真由美さんって大
学受験ってまだって言ってますよ。こんな事してて大丈夫なん
ですか？」

「来週末に受験だけど大丈夫よ。こう見えても、成績は学年一位なん
ですから」

「やっぱ真由美さんって頭いいんすね。俺はヤバいかも、せつかく分
かって来たのに、3か月もサボったからなく」

「だったら、お姉さんが教えてあげようかしら？」

「悪いっすよ。受験生にそんな」

「いいの、いいの。今から受験勉強なんて慌てても仕方がない事だし、
横島くんに教える事で復習にもなるから」

「それだったら、お願いしていいですかね」

「お姉さんに任せなさい！そう言えば、横島くんは普段は勉強をどう
してるの？」

真由美はさつきまでは申し訳なさそうに横島に話をしていたが、今
は何時もの元気で明るい感じに戻ってきていた。

「いや、実は学校で達也にたまに勉強見てもらってたんすよ。俺、魔
法学とかの魔法関係の科目は全然ダメだったんで」

「へ、あの達也くんが深雪さん以外にね。仲がいいのね。少し妬け
ちやうかしら」

真由美は悪戯っぽくそんな事を言う。完全に何時もの調子が戻っ
て来た様だ。

「ま、まあ、たははははははっ」

横島は笑って誤魔化する。

これは入学当初、ブランシユによる第一高校襲撃事件の後、達也と
勝負を行い。勝利した時の要求が、CADの使い方を教えてくれと言
うものだった。それに派生して、達也は横島の勉強もたまに見ていた
のだ。

弘一からは横島の身の回りの世話をしろという命令ではあったが、
真由美も横島の世話をするという名目よりも、横島の勉強を見てあげ

ると言う名目の方がやり易いだろうし、横島も同じくそう思っているだろう。

横島としても、そうする事により、横島の家には毎回行く必要もなくなり、真由美自身の負担も少なくなるだろうと思った。

弘一には直ぐにバレる話だが、実質、横島の近くに真由美がいる事になるため、弘一の横島策略から大きく外れないため、不問にするだろう。

横島の自宅マンションの前に、車が止まり、横島と真由美は車を下りた。

「真由美さんわざわざ送ってもらって、すみません」

「いえ、いいのよ……それと、ちよつといい？」

真由美はそう言つて大きく深呼吸をする。

「なんですか？」

「……はい、これ……受け取って」

真由美は綺麗にラッピングされた文庫本ぐらいの小箱をもじもじとし顔を赤らめながら横島に手渡した。

「えええ!!これって、まさかバレンタインチョコ? いいんすか俺みたいな奴に!?!」

「何時もお世話になってるし……それとね……」

「おおお!!真由美さんからチョコもらったぞー!!義理でもすごいうれしいっす!!」

真由美が続いて何か言おうとしたが、そんな声をかき消してしまうほど、横島は大声で嬉しそうにはしゃぎ、そして、こんな事を言ってしまう。

「え?あの……義理じゃ」

真由美は嬉しそうにする横島に顔を赤らめ上目使いでその様子を見ていたが、義理と言う言葉が出た事に焦る。

真由美が渡したものは、手作りチョコで、間違いなく大本命チョコなのだから……慌てながら訂正しようとする。

しかし、そんな真由美の声をかき消す声の上から降ってくる。

「タダオ帰って来た!!タダオーーー!!お帰り!!」

リーナが横島の部屋の窓から此方に手を振り、大声で嬉しそうに叫んでいた。

「え?」

真由美は目が点になる。

「遅くなるって言ったのに……今行く!!」

横島はそう独り言ちながら、リーナに部屋にすぐ戻る事を叫んで伝える。

「……………横島くん、これはどういう事かしら?」

「ま、真由美さん?」

横島は真由美の急に発しだした威圧感にたじろぐ。

「なぜ、アンジェリーナさんが横島くんのマンションに居るのかしらと聞いているんです!!」

真由美は横島に頬を膨らませ、抗議するかのように強く迫る。

「ええ?真由美さん何怒っているんです?」

「怒ってません!!……私も行くわ……………」

真由美は横島にそう言っつて、車のお抱えの運転手に、先に帰るよう言う。

「ちよ、真由美さん何を!!」

「私も、横島くんの自宅にお伺いするんです!!」

「でも、もう遅いですし」

「アンジェリーナさんが良くて、私はダメなの!」

「いや、そ、そう言うわけじゃないんですが……………」

「じゃあ、いいじゃない。さあ、行くわよ、横島くん!!」

真由美はそう言っつて強引に横島の腕を取り、マンションの入口に向かう。

横島の部屋の玄関がタイミングよくバンと開く。

「タダオお帰り!!」

リーナは扉を開け嬉しそうに横島を迎える。

「たははははっ、リーナただいまあ〜」

横島は苦笑しながら挨拶を返すのだが……その横には、横島の腕を取ったままの真由美は頬を膨らませ立っていた。

「なぜ、真由美がタダオの横にいるの?」

「そちらこそ、なぜ、貴方が横島くんの部屋にいるのかしら?」

「私は、タダオのガールフレンドだから当然よ」

「そう、日本語ではただの女友達って意味ですから」

「フーン……そう言う事」

リーナは横島が持っている先ほど真由美にもらったバレンタインチョコの箱を一瞥する。

「そう言う事よ……アンジェリーナさん」

真由美の目は、リーナを見据えていた。どうやら今回は、はぐらかさない様だ。

「あの、寒いんで、中に入りませんか?二人共」

横島はこの威圧感に恐縮しながらも、二人にこう提案する。

「フーン」

リーナと真由美はお互いそっぽを向く。

玄関から入り、先にリビングへ一足先に先に戻るリーナに、遅れて横島と真由美が入る。

靴を脱ぐ間から今に至るまで、真由美は横島の腕を取ったままだ。

「横島さん・お帰りなさい……それと・お客様は……ミス・七草ですね」
マリアは横島に挨拶しながら、真由美を見て、初顔合わせなのだが、データベースで検索したのだろう。真由美にも正確に挨拶を返す。さらに、来訪者がいた事も把握済みで既に紅茶を二人分用意をしていた。

「横島、じゃましてるぞ……なぜ七草先輩まで?」

達也はソファアに座ったまま首だけ入口に向け、挨拶をするが、真由美を見て目を細めていた。

「マリア、ただいまって……おい、達也なんでお前まで居る」

「え?達也くん?……はあ、アンジェリーナさん一人じゃなかったのね。えーとこちらの方は?」

真由美はリーナ以外にもう一人女性がいた事に真由美は驚くが、達也もいた事でホッとする。

「えっと、マリアなんですけど、……結構有名人」

横島は真由美にマリアを紹介するが、どう説明したらいいのか迷っている様だ。

「私は・マリア・横島さんのお友達」

「七草真由美です。横島くんの先輩になります。……え？マリアさんは、あの失礼ですが、ヨーロッパの魔王ドクター・カオス氏と共に行動されているあの魔女……、いえ、あのマリアさんですか？」

流石に真由美も驚きを隠せないでいた。自らも七草家の長女として有名ではある事は自覚し、いろんな有名人ともあって来たが、マリア程大物に出会った事は無かった。マリアはいろんな意味で世界で注目されている存在なのだ。

「イエス……コートを……そちらに・座ってください」

マリアは真由美に脱いだコートを渡す様にいい、ソファアに座るように促す。

「あ、ありがとうございます」

真由美は恐縮している様だ。

「タダオはこっち」

そんな中、リーナは横島の腕を取り、横に座らせる。

すると、横島の腕を掴んだままの真由美も、自然とその横島の横に座る事になった。

その間マリアは、横島と真由美のコートをハンガーにかけ、横島が真由美にもらったチョコを冷蔵庫に入れ、達也とリーナの紅茶を入れなおし、達也の横に座る。

その間、リーナは横島の腕に自分の腕を絡める。真由美は顔を赤らめながらそっと、横島の手首を掴んでいた。

しばらく沈黙がこの空間を支配する。

横島家のリビングのソファアは基本の形はL字に形成されている。リビング入口側に、二人掛けソファアに外側に達也、その隣にマリア、斜め前の3人掛けソファアにマリアに近い方からリーナ、真中に

横島、そして外側に真由美と座っている。

「たははははっ、えーっと、達也は何の用事だったっけ?」

横島はから笑いをしながらこの空気を打開しようとした。

「俺はお前に届け物があつてな、直接渡してくれて頼まれていたんだ。まあ、中身はバレンタインチョコだが、すまんが一人の時に開けてくれ、本人は相当シャイな人物でな」

その達也の言葉に、真由美とリーナがピクっと反応する。

「マジか?俺にバレンタインチョコ?何て奥ゆかしいん子なんだ!!まさかの深雪ちゃん?」

「……それは俺が許さん」

達也は何時にも増して語気を強めて言う。

まあ、深雪嫉妬フルコースチョコや、真夜チョコやら、横島叔父妄想などもあつたため、仕方がないだろう。

「何だよこのシスコン、だったら誰だろう?奥ゆかしい子って、学校に居たっけな?ああ!!鈴音さん!」

「違う。後で一人で確かめろ」

「まつ、いつか」

「達也はこれで用事が終わったわね。だから帰ったら?」

リーナは達也につっけんどんな言い方をする。

達也と敵対し、勝負に完膚なきまでに敗れたリーナとしては致し方ないだろう。

「そももいかない」

達也としても、真由美までこの場に居てはますます帰るわけにはいかなかった。

何かの拍子に、真夜チョコがばれでもしたら一大事だ。

「真由美もなんでここに居るの?もう、七草家とタダオの話は終わったんでしょ?」

リーナは矛先を真由美に向ける。

「……七草家との正式な決定事項で、今後、この件の契約の間、横島くんの健康管理のために、毎日身の回りのお世話をする事になり、その世話役が私になりました。なので、あなた達が帰るまで、私はここ

に居ないといけません」

真由美はすました顔で、そう宣言する。

「どういう事よそれ!!」

リーナがそれに噛みつく。

「ま、真由美さん? それ、さつきやめようって決めたじゃないですか」
横島も先ほどの送ってもらった車の中で、それを勉強をおしえてもらう。要するに家庭教師役に代替えしようと話し合ったばかりだったのだ。

「いいえ、私の一存ではやはり、当主の命令には逆らえません。横島くんもあの時、反論しませんでしたので、了解と取られていても仕方がありません」

真由美は平然と手のひらを返す言い分を出す。ここにリーナがいた事で、危機感を持ち、リーナを排除しようとしているのだ。この辺は弘一とよく似ているところだ。

達也は目を細めその話を聞いていた。

達也も思考を巡らせ、これは七草家の横島を取り込む策略だと判断をする。

「タダオ? 契約って……? どういう事?」

「いや、どういうこと? って俺も何が何だか?」

「……タダオ、私も毎日タダオの家に来るから、朝も一緒に学校に行く」

「えええ?」

「いいえ、アンジェリーナさん、横島くんの送り迎えも七草家がきつちりで行いますので結構です」

「真由美!! 横暴だわ。タダオのプライベートまで踏み込むなんて!!」

「貴方こそどうなの! 学校で横島くんにあのような態度をとるから、横島くんが大変な目にあっていたじゃない!」

「それは……その」

リーナは痛いところを真由美につかれ口ごもる。論戦ではリーナは真由美には到底勝てなかった。

そんな中、マリアはすくつと立ちあがり、なにやら綺麗に包装された箱を二つテーブルの上に出してきた。

そんなマリアの行動で二人の口論は止まる。

163話 横島 リーナ・真由美・達也に知られる!!

リーナと真由美は横島の身の回りの世話を行う事に付いて口論を始めてしまう。真由美がやはり優勢に立っていた。

その間、渦中の横島はあたふたとしているが、達也は冷静にその内容を聞き何か考えをまとめている様だ。

そんな中、マリアはすくつと立ちあがり、なにやら綺麗に包装された箱を横島の前に二つテーブルの上にスツと置く。

「横島さん・ミス雫の・バレンタインチョコレート・これはマリアからのバレンタインチョコレート」

マリアは二人の口論など目に映ら無いかのように、横島に話しかける。

流石のリーナと真由美もこのマリアの行動に口論を止めざるを得なかった。

「マリア？」

「横島さん・開けて・ミス雫からは・了解を貰ってます」

マリアは雫から預かっていたチョコを再度手に持って横島に渡す。

「今？」

「今です」

横島は包装を解き、厚さ3cm程のB5サイズの箱を上を開く。

するとそこには16個程の小さなチョコが並べられていた。形はハートやら六角形のものやら、アーモンドが乗っていたりと一つとして同じ形状のものがなく、どこか素人っぽい作りではあったが手作りであることがわかる。

立体メッセージ映像が箱の中央から飛び出す。

（大好きな横島さん、バレンタインチョコレート作りました。食べてください）

キツチンだろう所で、この完成したチョコを手前のまな板の上に置いて、可愛らしいエプロン姿の雫が映っていた。相変わらずの眠たそうな目をした雫の顔にはところどころ茶色い物が飛び跳ねてくつ付

いていた。

(お嬢様、他には?)

どうやら、撮影者の声が入っている。多分、黒沢さんだろう。

(私もこっちの、学校に慣れてきました。大丈夫です。横島さんも大変だと思いますが頑張ってください)

言葉数は少ないが、実に雫らしいメッセージであった。

ここで立体映像が切れる。

「雫ちゃん……」

横島はこの愛らしいメッセージをみて心温まる思いがする。

真由美もリーナもこの映像を見て、毒気が抜かれる思いがした。

本来、雫もこの二人のライバルのハズなのだが、そうは見えなかった様だ。

まあ、傍から見ると、大好きなお兄ちゃんのためにチョコレートを作っている風にしか見えないだろう。雫はこの二人とは別のベクトルの恋愛観を持って横島に接しているため、これはこれで有りなのだろうが……

マリアは次に雫のバレンタインチョコの箱と同じサイズの箱を横島に渡す。

「マリア・からです・開けて下さい」

横島はマリアに言われるまま、チョコの箱を開けると……

横島は一瞬息が詰まる。

茶色一色ではあるが、厚さに2cmほどだが立体写真のような造形で作られたチョコであった。そこに描かれていたのは……

横島の思い出の中の……美神事務所の面々であった。中央には美神令子、右に大きなバックを背負った横島、左には袴姿の絹、その後ろには小さく背景と共に、マリアやカオス、かつての仲間だろう姿と、背景には、もちろん美神事務所が描かれている。

額縁の四隅には蛍が写真を照らすような構図で作られていた。

他の人間が見ても、それが誰なのか、どの場所を描いたものなのかは分からないだろう。しかし、横島にははつきりわかる。間違いなく、17歳頃の横島……魔神アシユタロスと戦う前の様に見える。ま

だ、がむしやらだつたころの横島と、その仲間たちは、この頃の横島以降に出会った人物たちも描かれ、一様に皆笑顔を振りまいているように見える。

「……………これは…」

横島は苦しそうな顔をする。

「皆は・ずっと笑顔です・横島さんも・笑ってください」

「マリア……………」

横島はマリアを見上げるが、やはり苦渋に満ちた顔をしている。

横島は過去に見捨ててしまった大切な女性二人と、切り捨ててしまったかつての仲間たちが描かれているチョコは横島の心に重くのしかかる。

しかし、誰もそんな事を思っていない。

大切な女性二人は……………

ルシオラは横島にはただ生きてほしかった。

絹は横島に笑顔のままできてほしかった。

かつての仲間たちも、横島に感謝や称賛の声をこそ上げるだろうが、切り捨てられたとは思わなかっただろう。実際にマリアやカオスがそうだったのだから……………

「誰も・そんな顔を・望んでません・だから・笑ってください」

マリアは再度横島に諭す様に言う。

本来このチョコは、リーナ達に見せるつもりは無かった。

横島がこのチョコを見て、少しでも元気になってほしいと思っただのだが……………横島の精神状態が予想以上に悪い。

横島が記憶回復してから1ヶ月以上共に過ごしたが、横島は決して、カオスやマリアの前では弱いところを見せようとしなかった。

しかし、マリアはこの日本での、ありとあらゆる情報を検索し日本での横島の行動状況を把握し、自分なりに分析した結果、この答えに至ったのだ。

今も尚深刻なトラウマを抱えたままだと……………

横島の師匠、斉天大聖老師も小竜姫もこの事には十分気が付いている。斉天大聖老師は、時間と共に解決するしかないと考えており、今

は横島の好きにさせようと考えていた。

小竜姫も大まかにはそれと同じなのだが、なまじ恋愛感情があるのと、若い神であるため、人間の細かい機微には疎いのか、失敗が多い。

そして、マリアは二人の女性の口論を見ながらも……やはり、横島の事を知ってもらわなければならないと判断したのだ。

リーナも真由美もマリアのチョコを見て、それが何かの集合写真を象ったチョコだという事は分かったが、誰を何処を描いたものなのかは分からなかった。

しかし、横島の苦渋に満ち、今にも泣き崩れそうな顔に直ぐに目が行く。

「タダオ……どうしたの？」

「横島くん……」

「……………」

リーナも真由美も達也もこんなに苦しそうな顔をする横島を見たことが無かった。

そんな中マリアは意外な行動にでる。

「横島さん・飲み物と・デザートが・切れました・ここで・買ってきてください」

「え？マリア？ちよっ……え？」

マリアはそんな横島を強引に引っ張り、コートと買い物する場所を書いたメモを渡し、玄関から押し出したのだ。

玄関のカギを閉め、また元の場所に座る。

横島は苦しそうな顔から、狐につままれたような顔になり、何が何だかわからないうちに家から放り出されたのだ。

「マリア、タダオはどうしたの？なんであんなに辛そうなの？」

「マリアさん、あのチョコに描かれていた物は一体……」

「横島さんは・普段・元気に・見えますが・本当は・あのような状態で

す」

「マリアは横島がマンションから遠ざかって行くのを確認し話し出す。」

「マリアはあのタイミングでチョココを出したのは、横島の心の状態を皆に知ってもらうためだったようだ。」

「マリアさん、どういうことですか？」

「達也がマリアに改めて聞き直す。」

「横島さんは・昔からバカな・事をやっています・しかし・今の横島さんは・マリアには・から元気にしか・みえません」

「……………タダオ」

リーナはどうやら思い当たる節があるようだ。

「記憶喪失の横島を見ているリーナは、今の横島にほんのわずかだが違和感を感じていた。」

「確かに、バカなことをやっているのは一緒なのだが……………何か引つかかっていた。」

「あのチョココは・マリアも含め・横島さん・昔の友人達を描いた物です」
「なんで、タダオはそれを見て苦しむの？」

「横島さんは・心に大きな傷を負っています・それが元で・本来の力も・発揮出来てません」

「な!!あれでも本来の力ではないとでもいうのか!!」

「達也は驚きのあまり、思わず立ち上がってしまう。」

「あれ以上の強大な力があつていい物だろうか……………」

「……………あれ以上があるの」

「真由美も驚き口を両手で押さえている。」

「やっぱり……………」

「リーナは横島が記憶喪失時に、力を使おうとするたびに、苦しんでいる姿を見ていたため、驚きはそこまでは無かった。」

「しかし達也と真由美は横浜の時の横島の姿を見ている。それはリーナが想像するよりも遥かに上の力を振るった横島の姿だった。」

「ミスター・司波が言っている意味は推測ですが違います・横島さんの・力は・本来・攻撃手段で使う・ものでは・ありません。それと・

問題は・そこでは・ありません」

「心に大きな傷……横島くんは何があつたんですか？マリアさん」

「……タダオ」

「過去……いいえ・第一高校に入る前に……横島さんは・大切な女性・二人を次々に亡くしています」

マリアは具体的な内容は言わず、端的にその事だけを伝える。

内容はとても言えるものではない。

また、ここで言う二人とは勿論、ルシオラと氷室絹の事だ。

「え？……横島くんが……でも……そう、そうなのね」

真由美はその事に驚き先ほど同様に口を両手で押さえていた。いつも楽しそうに笑っているイメージしかないからだ。……しかし、時折見せる寂しそうな目をしている横島を思い出し、それがこの事なのだという答えに至った。

「タダオ……いつもはあんなに明るいの、女性の好意に恐怖しているってそう言う事だったの……」

リーナは今日マリアに言われたこの事の原因がそれだったのだと思ひ知る。

「……」

達也も3年前に母の死に直面したが、感情の薄い達也にとってはそこまでではなかった。しかし、もし深雪が死んだらと思うと、それは自分にも当てはまるのではないかと思ひ至る。

しかしながら、普段の横島はそれを一切感じさせない程、陽気で明るかった。

「それを自分の所為だと……彼女らは・決して・そんな事を思っていないのに・事実・横島さんの所為ではありませんでした。しかし・横島さんは・今も自分を責め・続けています」

「マリアさん。あれ程強い横島が守れなかったというのは……合点がいきません。それ程の抗争は最近の日本では佐渡島と沖繩の侵攻しか思い当たりませんが……横島があその力を振るえば、抗争自体終息し

てもおかしくありません」

「それは・いえません」

「タダオは……自分が辛いのに何時も、優しくしてくれる。自分が酷い目に遭っても、そんな事をおくびにも出さずに……」

リーナは自分のせいで、横島が陰険な仕打ちにあっていた事を今日まで知らなかった。横島はリーナの前ではそんな事をおくびにも出さなかったからだ。

「横島さんは・昔から・優しく・精神力が・非常に・強い人でした。皆の心を・かるく受け止められるぐらい。それでも・心には・限界があります」

「……それでも、人のために、私達のために助けに」

真由美は横島がピンチになると必ず助けに来てくれる事に、そして、時折見せる悲しそうな顔を思い出し、複雑な気分になる。

「横島さんは・二度と・仲間を・友達を・好きな人を・失いたくない・というある意味・呪縛のような強烈な思いが・心の中を支配しています。だから・無茶を・する・自分の事を・顧みずに」

「マリアさん。なぜこんな事を俺たちに打ち明けたのですか？」

「横島さんは・あなた方の事を・信用しています。あなた方も・横島さんに・好意を持っており・横島さんの・力になってくれると・判断したからです」

「横島くんの力に……でも私達の力ではとても横島くんの様には……」

「いいえ・そう言う意味では・ありません。横島さんは・いつか・自分の身を・犠牲に・しかねません・その時・誰かが・止めなければ・取り返しがつかない事になります。その役を・そばに居るあなた方に・担ってほしい。……今横島さんは・自分の命を・一番軽く・見ています」

「そんな……自分の命が軽いなんて……」

「タダオは間違っている。タダオの命が軽いなんてことは無いのに……」

「くっ」

達也には思い当たる節があった。横島がマテリアル・バースト受け止めた時の話だ。

一歩間違えば横島は木っ端微塵になっていたのだ。それを平然と、『助かったらいいじゃん』と言い切ったのだ。その一因は達也にもあった。達也に多量虐殺者になつてほしくないからだとも語っていたのだ。

達也は当時、たつたそれだけの事で命を懸けてしまう横島が全く分からなかった。しかしここに来て、その精神性は理解できないが、横島がなぜ、その様な事をしてしまうのかが分かった気がした。

「横島さんは・本来・戦いや・争いごとを・好みません。しかし・それは周りが・彼の力が・許してくれませんか」

……………

そのマリアの発言で、今の自分たちがまさに横島の力を利用していい様なものと、改めて思い知らされる。

「でも、横島さんは・周りが・困っていたら・見過ごさない・だから、ある意味・仕方がない事・だから・横島さんの・疲れた心を・癒してあげる必要が・あります」

「それを私達に?」

「イエス・特に・ミス・アンジェリーナ・ミス・七草の横島さんに向けて・好意は・好ましく思います。しかし・今の横島さんは・女性の好意に対し・恐れを持っています。だから・性急に・事を・進めてはいけません」

「マリア……でも、私はどうしたらいいのか分からない」

リーナは自分の気持ちを素直に伝える事は出来る。でも横島を癒すにはどうしたらいいのか分からなかった。

「マリアも・分かりません。ただ、横島さんが・心の内を・話してくれる・様になれば・と思います」

「横島くんの心をトラウマを癒してあげるか……」

真由美は何やら思いふけるように言う。

「具体的な対策が無いという事か……しかし、あの時のレオの指摘は的確ではあったな……」

達也は誰と無しにそんな事を言う。

あの時のレオとは1月中旬に横島との通信で再会した時の事である。横島が皆を巻き込まない様に黙って一人でUSNAで吸血鬼退治を行おうとしていた事に対し、レオが横島にちやんと話せと叱りつけた時の事だ。まさにマリアの指摘通りなのだ。

「私は横島くんに助けてもらってばかり何も返せていない。だから、横島くんには、色々とお返ししなくっちゃ」

真由美は何やら決意した様にそう言った。

「私は……軍人で……戦う事しかできない。どうやってタダオを助けてあげれば」

「ミス・アンジェリーナは・自然で・いいです。過剰な・スキンシップを・しなければですが・USNAに・居た頃の・記憶喪失の横島さんは・ミス・アンジェリーナ・と一緒に時は・実に楽しそうでした」
「ほんとうマリア!!」

リーナは先ほど間で思い悩んでいたのがウソの様に心が晴れ晴れとする。

「イエス」

「む……私だって、横島くんを楽しませてあげられるわ」

「真由美には無理ね。私はマリアのお墨付きだからいいの」

リーナは相変わらず直ぐに調子に乗る。

「……リーナと七草先輩、そういうのが良くないと言ってるんですよ。マリアさんは……」

達也は呆れた様に二人に注意をする。

「イエス」

マリアも呆れたように達也に同意する。

一方、家を放り出された横島は、マリアのメモを見ながら……

「マリア……どういうつもりで……やっぱダメだな俺。マリアにまで心配までかけさせて……なかなか吹っ切れるものじゃないな……って、どこまで買い出しさせるつもりだマリアは、こ

れもう八王子の外だ。うーん府中当たりの国道だな……はあ」
府中の24時間スーパーへ買い出しに向かっていた。

そして、七草家では、姉の帰りを待っていた双子姉妹は、車の運転手から、真由美を置いて先に帰るように言われた事を伝え聞く。

「えええー……!!お姉ちゃん帰ってないの!!なんで!?!」

「その、横島さんのお家に、お泊りなのでしょいか?」

「がー……!!お姉ちゃんの一大事だ!!」

「ど、どうしましょう……」

「あのスケベ・変態横島!!お姉ちゃんに変な事したらただじゃ置かないんだから!!行くよ泉美!!」

「待ってください香澄ちゃん。お父様達に伝えないと」

「泉美ダメだつて!!お父さんはあの変態横島とお姉ちゃんをくっ付けるつもりなんだよ!!」

「でも……」

「ボク達だけで、何とかしないと!!」

双子姉妹、七草香澄と泉美は姉、真由美を横島の魔の手から救うべく、勝手に家を出て、八王子にある横島のマンションに向かったのであった。

164話 横島 七草双子姉妹に再び会う!!

七草家の双子姉妹の七草香澄と七草泉美は、姉真由美を変態の魔の手から救うべく、横島の自宅に、親兄弟や家人に黙って家を飛び出し向かっている。

現状、移動手段として便利な無人タクシーは利用することができない。

22:00以降は、まだ中学生である二人だけでは運行制限が掛かり、乗る事が出来ないからだ。

そこで乗り慣れていない電車での移動を余儀なく無くされたのだが……

「泉美、ここ何処？」

「えーと、多摩動物園って書いてあります」

「あれ？八王子じゃないの？」

「香澄ちゃん、何処を調べたのですか？」

「これ」

「さっきの駅で乗り換えが必要だったみたいですよ」

「あれれ、間違えちゃった」

案の定、路線を間違えてしまった様だ。

「うーん、電車の数が少ない。こうなったら一直線で加速魔法を使って走った方が速そうだよ」

「香澄ちゃん。ここから横島さん宅までは10kmはありますよ。せめて、中央線、京王本線に出しましょう」

「駅についても、電車が直ぐ来るかわかんないから、このまま行こうよ。じゃあレッツゴー」

香澄は加速魔法を展開する、泉美はしぶしぶと言った顔で、香澄の後に続く。

二人は山手の裾を走り北東へと走り出し横島が住む八王子方面へと向かった。

しばらく走り、浅川にかかる橋を渡ろうとした際……

「香澄ちゃん、危ない！」

「うわっ！」

突如として氷の礫が二人に降り注ぐ、明らかに魔法攻撃を受けたのだ。

泉美がそれに気が付き、香澄を掴み、大きくジャンプして避けたのだが、そのまま、河川敷へと落下する。

二人は、魔法により軟着地に成功したが、既に、河川敷の暗がりでは4名の男に囲まれていた。

「あんた達、いきなり攻撃してくるなんて!!ボクと泉美じゃなきゃ、大怪我していた所だよ!!」

泉美は香澄を背にして、怯まずに男たちを睨みつける。

「香澄ちゃん……」

泉美は腕に巻いているCADに手をやり、構える。

男達は無言で、それぞれが攻撃魔法を二人に対し発動する。

起動が早く、とてもCADを操作している様にはとても見えなかった。

「何!?!速い!でもいくよ泉美!!」

「はい！」

二人は密着したまま、お互いが同じ魔法式の構築し高強度の防御魔法を展開する。

彼女らはお互いの魔法が全く干渉せず、魔法構築を分担し魔法を素早く展開することや、より強力な魔法を構築することが可能なのだ。

俗に乗積魔法と呼ばれ、高度な技術が必要なのだが、この双子はそれをいとも簡単に構築でき、二人が揃う事で無類の力を発揮する事ができる。

防御が成功すると、香澄と泉美は乗積魔法でドライアイスの散弾（ドライミーティア）を当たりにランダムにばらまき、反撃けん制する。

しかし、男たちは加速魔法や防御魔法でそれぞれ回避、防御を行っ

ていた。

「速い！やっぱりそうだ。CAD無しで魔法を発動してる!!」

「……お姉様が言っていた。吸血鬼かもしれないです」

悪霊に取り憑かれた人物の中ではCADを使わずに魔法を発動していた人物もいたことが確認されている。どうやっているのかは不明だが、ミアと同様に力を得た悪霊はそのような事も可能になるらしいのだ。

しかも、悪霊のターゲットは魔法師だ。

特にサイオン量が多い魔法師を狙っている。

そんな中、運悪く出くわしてしまった。

しかも、この双子、七草家の一族とあって、そこらへんの魔法師に比べるとサイオン量は多い。

悪霊にとつては絶好の獲物なのだ。

「吸血鬼って、お姉ちゃんや十文字さんでも、手こずっていたバケモノのこと?」

「はい」

「……逃げるよ泉美!」

そう言つて香澄と泉美は霧を発生させる魔法を展開、一気に周囲30mを視界を遮る程の霧を発生させる。暗い夜の戦闘で視界が悪い上に、これでは目視での確認は不可能になるだろう。

二人は霧の目くらましを発生させると同時に加速魔法を使い離脱をはかる。

しかし、霧を抜けた先に、既に男が一人待ち構えていた。

その男は目の色を金色に怪しく輝かせている。

男は霧の中、正確に双子の二人の位置を把握していたようだ。悪霊の能力なのだろう。

「な!?!」

「香澄ちゃん!」

金色の目の男は接近戦の構えをし、香澄と泉美に迫る。

香澄が防御障壁を展開しつつ、泉美が加速魔法で回避。

しかし、後ろからいつの間にか、他の男が魔法を展開し激しい風を起す魔法を展開させ、二人を防御障壁ごと、吹き飛ばす。

二人は吹き飛ばされながらも空中で軌道修正し地面へと着地する。そして、また、男たち4人に囲まれる元の展開に戻ってしまった。

「ヤバイ……勝手に出て来ちゃったのはまずかったかな」
「うん」

金色の目の男が近づいてくる。

「我々の同士に迎えるにふさわしい肉体だ……有効利用させてもらおう」

男は沈黙を破り、ここでようやく言葉を発した。

「この変態にロリコン!! 泉美には触らせないんだから!!」

「香澄ちゃん多分意味が違うと思う」

香澄は金色の目の男に威圧するように叫ぶがどうやら勘違いしている様だ。

泉美はこんな状況だが、さりげなくフォローを入れる。

そして、他の囲んでいる男たちもじりじりと間合いを詰めていく。

香澄と泉美は意を決して、反撃の構えをとるが……

正面から迫ってくる金色の目の男が、突如として勢いよく斜め上に吹っ飛ぶ。

「へ?」

思わず間抜けな声が出る香澄。

一瞬何かが、金色の目の男の横を通り過ぎた様にも見えた。

そして、周りを見渡すと、迫ってきた男たちも次々と吹っ飛んで行き、一か所に落下し4人折り重なるように倒れる。

「何が起きたの?」

「香澄ちゃんこれは……助かった?」

先ほどまで、二人を追い詰めていた男たちが何が何だか分からない

うちに、折り重なり倒れピクリとも動かない様子を呆然と見ていた。

後ろから不意に陽気そうな声で話しかけ掛かる。

「ん？あれ？なんで双子ちゃんがこんなところに？」

そこにはコート姿の男が何も無かったようにニヤケ顔で近づいてきていた。

香澄にとつて、大事な姉を盗ろうとする張つ倒したい男、この男を殴り倒すために、香澄たちは家人に黙ってここまで来ていたのだ。

「んん？……あああ!!横島!!」

香澄は暗がりの中目を凝らし、近づいてくる男を漸く確認出来た様だ。

「香澄ちゃん、先輩なんですよ。呼び捨てはダメです」

泉美も確認できたようでホツとした表情をする。

その男は横島だった。

マリアに自宅を放り出され、買い物を使い使った横島は、人目が付きにくい浅川の河川敷を走り、府中市と国立市の境目にある24時間スーパーへと向かっていたのだ。

そんな中、戦闘の気配を察知し、加速しここへたどり着くと、七草の双子姉妹が悪霊に取り憑かれた人間に襲われていたのだ。

そして、金色の目の男は霊気を纏わせた拳で殴り飛ばし、他の男も同様に蹴りや拳で吹き飛ばしたのだ。

勿論吹き飛ばした4人は一か所に集め、氷室の拘束術式でしっかりと、捕らえ、霊気を今も奪っている。

「子供は寝る時間だぞ。夜遊びは大人になってから!」

横島は軽い感じで二人に注意するが……

「なんでお前がこんなところに居るんだよ!!お姉ちゃんはどこ!!」

香澄は横島を睨み付け、こんな事を言う、

「ありがとうございます。横島さん、助かりました」

泉美はどうやら状況を理解し、横島が4人の男を倒したのだと判断

し、お礼を言う。

「へ？泉美どういう事？このバケモノたちを、こいつが倒したつていの？一瞬で？ウソだ！」

「たははははっ、バケモノじゃないよ。悪霊に取り憑かれた人達だ。一歩間違えば、香澄ちゃん達もこうなつてたんだ。……家の人に言われなかった？夜に出歩かない様につて」

「……申し訳ございません」

泉美は素直に謝る。

「えーつと泉美ちゃんだっけ、素直なのはよろしい」

横島は泉美の頭をやさしく撫でる。

「香澄ちゃんは、お尻ぺんぺんの刑じゃ!!」

そう言つて横島は香澄をすつと小脇に抱える。

「ボクにさわるな変態!!な……なに？え……やめ!!」

横島は容赦なく香澄のお尻を数度叩く。

「痛!!へんたー!!痛い!!やめてー!!」

泉美はそんな横島と香澄を手をフラフラと前に出し、オロオロとしながら見ている事しかできない。

横島は香澄を下ろす。

香澄はしやがみ込みお尻をさすりながら、横島を涙目でキツと睨み付ける。

横島は真剣な顔をし、そんな香澄に諭すように話しかける。

「香澄ちゃん、こんなところで本当に何やってたの？俺が来なかったら、本当にとんでもない事になつてたところだ。真由美さん……お姉ちゃんを悲しませたいの？」

「ううう……だつて……お姉ちゃんが取られると思つたから……」

香澄は俯き、涙をポロポロとこぼしながら、小声で話し出す。

「あの、横島さん……香澄ちゃんをあまり責めないで下さい。シスコンの香澄ちゃんは横島さんにお姉さまをとられると思つて、それで、帰つてこないお姉さまを心配して追いかけてきたんです」

「はあ、そう言う事か……お姉ちゃんをつて、そんな事あるわけない

じゃん。俺にはそんな資格もないし……香澄ちゃん……」

横島はそう言つて香澄の頭をやさしく撫でる。

「……ごめんなさい」

未だ涙目の香澄は小声で謝る。

「バカだな、香澄ちゃん。それと、真由美さんは俺の事、何とも思つてないと思うし……」

横島がそんな事を二人に言つてしまった。

「バカはそっちだ!!」

香澄はそれを聞いて、いきなり横島の腹にパンチを入れる。

「グボツ!……あれ?なんで?」

「……フンだ。鈍感……まあ、助けてくれたことで、チャラにしてあげる」

そんな香澄の行動に、泉美が代わりに何度も横島に謝る。

「はあ、まあ、いいや、香澄ちゃん、泉美ちゃん、お父さんに連絡して迎いに来てつて……でも、このまま置いておくわけにも行かないし……」

「ダメ!!それはダメ!!」

香澄は弘一からは説教を喰らうのがよっぽど怖いのか、慌てて横島を止めようとする。

まあ、どちらにしろ、説教は確定だが……

「まあ、ここからだに近いし、つれて帰るか……」

「連れて帰るつて……まさか!!ボク達にいかがわしい事を!!このロリコン変態!!」

香澄は顔を真っ赤にして、横島に噛みつく。

その横で、泉美はまたしても、頭を下げ、横島に謝っていた。

「あのなく、ロリコンでも変態でもないし、俺は年上派なんだよ!」

「やっぱ、お姉ちゃんを!!」

「は……話が進まん。……家には今、真由美さんが居るし、一緒に帰った方が、まだ、心強いだろ?……今俺の家には、マリアやリーナとか……」

他の友達もいるし」

「ほかに、女の人を連れ込んで!!何をしてる!!お姉ちゃんが可哀想だ!!」

香澄はそう叫んでいたが、先ほどとはどうやら意味合いが違う……何かの心境の変化か？

泉美は何故か顔を赤くし……

「お姉さまと他のお姉さま方が……」

ほっておいてあげよう。

「はあく、何も無いから……まあいいや、ここから6km位だけど、加速魔法についてこられる？おぶった方が良い？」

「だ、大丈夫です」

「ボク達を舐めてる？余裕だ！」

「はあく、じゃあ、ついて来て……」

横島は、ため息を付きながら走り出した。

その頃、横島宅では……

「マリア、その……昔のタダオってどんなだった？」

「記憶喪失の・横島さん・そのものです」

「そうなんだ。私だけ、昔のタダオに会っていたんだ……私・だ・け」

リーナはそう言つて、真由美を見据える。

「……横島くんはよく生徒会でお茶や紅茶を入れてくれたかしら……とてもおいしかったわ」

真由美はピクつとしながらも、平静を装い反撃する。

「フン……マリア、タダオは私の事をどう思っていると思う？」
「妹」

マリアは一言

「……いい、妹？どういうことよマリア？」

「クスツ、やはりここはお姉さんの出番のようね。横島くんは年上の

包容力で癒してあげるのが一番」

真由美は満足そうに頷く。

そんな、リーナとマリア、真由美で女子トークを繰り広げている横で、達也は身じろぎせず考えをまとめていた。

先ほどのマリアの横島の話は、色々都合がいくところがあった。なぜ、死を恐れていないのか……もしかしたら、自分は死んでもいいぐらいに思っているのかもしれない。

横島の死。それは今の達也にとって許容できることではなかった。マリア曰く、このままの精神状態だと、横島は常に自分の死を考えずに行動をとるといふことになる。

それを回避させるにはどうすべきか……

過去のトラウマが原因であることは分かっているが……その克服は困難だ……それは達也達が知らない過去の出来事だからだ。

横島は過去に囚われている……ならば……今を生きようとする力が必要……しかしどうすれば。

「ん？」

達也はふと声が漏れる。

深雪以外の事で、他人の事を真剣に考えている自分自身に気が付き、驚いたのだ。

(ふっ、これも奴の影響か……良くも悪くも人の心に入ってくる奴だ……しかし、自分だけ死に逃がれようなどとは、思わぬことだな……横島)

165話 横島 自宅で空気が読めない!!

横島は、七草双子姉妹を襲った悪霊に取り憑かれた4人から、吸引札で悪霊を取り除き封印し、とりあえず七草家に一報を入れ、4人を回収してもらい病院で見てもらおう様に言う。

その様子を香澄と泉美は見ていた。

「あの男の人達に何をしたのでですか？」

「悪霊を取り除いたんだ。これで彼らは普通の人間に戻れる」

「……それ魔法なの？」

「いや、陰陽術」

「おんみようじゅつ？……古式魔法の？」

「横島さん。やっぱり強いんですね。悪霊を倒した時の動きも全く見えませんでした」

「強い？あゝ、まあ、それなりに？」

「今の電話、ボク達がここに居る事をお父さんに言ったの？」

「そりやそうだ。家に女の子二人が居ないと気づいたら大騒ぎになるし、まあ、とりあえず、俺の家に連れて行く事は伝えておいたから……あと、謝る時は真由美さんにフォロー入れてもらった方が良さだろうし、まっ、どっちにしる怒られるけど」

「ううう……泉美ゴメン。ボクのせいで」

「私も香澄ちゃんを止めなかったのが悪いんです」

「どうやら二人共、事の重大さに横島の説教で気が付いたようで、自分たちがした事について素直に反省している様だ。」

「じゃあ、二人共行こうか」

そう言つて横島は、走り出し、双子の姉妹は加速魔法でついで行く。

横島の自宅マンションのチャイムが鳴る。

横島が帰つて来たと思ひ、リーナは玄関に迎えに行こうとする。

それに負けじと真由美もリーナの後について行く。

マリアは横島が帰って来たこと、また、客人が増えた事も把握し、紅茶の用意をする。

「お帰りタダオ」

「横島くん、お帰りなさい」

先ほどと違いリーナは何処かしおらしい感じである。マリアの話しの影響だろう。

「ただいま、リーナと真由美さん」

しかし、横島の後ろに同じ顔の女の子二人がぴったりとくっついている。

「また増えた！タダオ、誰後ろの子は？」

しおらしかったリーナはまたもや、招かざる客が増えた事で元のテーションションに戻ってしまったていた。

「…!?あなた達、なんで横島くんの家まで!!」

真由美は二人を見て最初は驚いた顔をしていたが、明らかに怒っている様子だ。

「いや、そのアレなんですけど……買い物に行ったら、途中で、この子たちが、その……えーっと悪霊に襲われちゃった」

香澄と泉美は横島の背中から部屋の中の様子を……いや、怒られるのではないかとビクビクしながら姉の真由美の顔を伺っている。

「なっ……香澄！泉美！なぜそんな事になっていたの!!」

「……、ごめんなさい」

「も、申し訳ございません」

「まあ、まあ、真由美さん。とりあえず、部屋に入ってからで、二人も反省している様だし」

「……後でちゃんと説明しなさい」

「はい」

リビングに戻り、真由美から皆に「おバカな妹達です」と紹介してから、元のポジションにそれぞれ座りなおしていたが、香澄と泉美は、フローリングに正座させられていた。

香澄と泉美は交互に悪霊に襲われた経緯を、しどろもどろに話し終えたと……

「香澄！泉美！横島くんが居なかったら、あなた達どうなっていたか分かっているの！！あなた達は悪霊に取り憑かれていたか、最悪死んでいたかもしれないのよ！！」

真由美は真っ赤になって二人を叱る。

「反省しています」

「申し訳ございません」

「真由美さん、俺の方からも、叱つといたんでそれくらいで……」

「ほう、横島が叱るとはな……」

「いいえ、横島くんこのおバカ達はそれぐらいじゃ反省しないの……あなた達は、なぜ、家に黙ってそんなところにいたの！！」

「それは……お姉ちゃんが心配になって……その男の人の家に行つて帰らないから……」

「ばっ！何をバカな事を言っているのかしら!!……私はちゃんと家に連絡入れて、了解の上でここにいるんです。あなた達は、勝手に家を出てどれだけ周りに心配しているのか分かっていないの?」

「だって、普段料理なんてしないのに、お姉ちゃん嬉しそうにバレンタインチョコ作ってたし……だから……」

「香澄ちゃんは、お姉さまが横島さんに盗られると思っただんです」

「ななな!!なにいつてるの、か、かしら?あ、あなた達は?」

真由美は違う意味で顔を真っ赤にして、かなり慌てている。

そんな真由美をジトつとした目でリーナは見据える。達也も澄ました顔で見ている。

「だから、さつき言ったじゃないか。そんなことないって、香澄ちゃんの勘違いだって……ね。真由美さん」

横島は苦笑いをしながら、香澄たちに言った後、横に座っている真由美に同意を求めてしまう。

「ええ?……あの、その……お手洗いを借ります」

真由美は慌てて、席を立ちトイレへ行ってしまった。

「あれ?真由美さんどうしたのかな?急に……怒り過ぎて、もよおし

た？」

そんな横島の鈍感発言に、周りは横島を呆れた顔で見ている。

「タダオ……流石にそれは……」

「横島、お前は馬鹿か？」

「横島さん・反省」

「この鈍感！」

「……お姉さま、おいたわしい」

それぞれそんな横島に一言。

「へ？俺また、真由美さんに失礼な事言っちゃった？」

真由美がトイレで、「鈍感！」「私のバカ」などといろんな感情を爆発させている間、マリアは棚や箱を土台に、シートなどをかぶせた簡易の長いすを双子が正座をしている場所に設置し、座らせる。

そして、二人の前に紅茶とおしぼりをテーブルにそっと出す。

横島は、お茶菓子を買いそびれていたため、冷蔵庫や台所をあさっている。

「暖かい……」

「おいしい……」

二人共ようやくホツとした表情になっていた。

改めて、周りにいる皆を見る。一応部屋に入る前、簡単な紹介をしてもらっていたが、先ほどまで真由美に怒られ、ちゃんと顔などを確認できる状態ではなかったためだ。

「あの、七草香澄です。……皆さんはお姉ちゃんのお知合いですか？」

「七草泉美です。皆さんにもご迷惑おかけいたしました」

「ああ、俺は司波達也だ。横島のクラスメイトで七草先輩の後輩にあたるな」

「司波……あつ、去年の九校戦で活躍していた司波先輩ですね」

どうやら泉美は九校戦での達也の活躍を知っていた様だ。

「私はアンジェリーナ・シールズ。一応、後輩になるわね。USNAからの交換留学生。それでタダオのガールフレンドよ」

「え？お姉ちゃんより年下？てつきり、大学生かと思った。大人びてるし……」

「はく、綺麗なお姉さま」

「い、泉美呆ける場合？お姉ちゃんに強力なライバル。って、なんであんなのがいいのかな？」

香澄はリーナを見てうつとりしている泉美に耳元で囁くようにそんな事を言っているが、今の泉美には聞こえていないだろう。

「私は・マリア・横島さんのお友達」

「……あの……どこかで、お会いした事が？……うーん」

香澄も泉美もどうやらマリアの顔に見覚えがあるようだ。

「マリアさんは、世界最強の魔法師の一角を担っている。あのマリアさんだ」

達也はそう言って、マリアの紹介を補足する。

ドクター・カオスの相棒や、魔女マリアと説明すれば分かりやすいだろうが、達也は、その表現での紹介はあえてしなかった。

魔女と言えば、恐怖の対象である。今日会ったマリアは恐怖とは真逆の存在だったからだ。

また、ドクター・カオスの相棒と言うのも、誰かのおまけみたいな言い方ではないかと、何か本人に失礼なような気がしてならなかった。

「ままつ、魔女マリア!! なななななでこんなところに？……あつすみません……」

「クール&ビューティー……美しいお顔に凜とした立ち振る舞い。クールな表情の中での暖かい心遣い……真のお姉さまに今出会いました!!」

香澄と泉美は大いに驚いていた。

泉美は何故か暴走ぎみだ。別の意味で、何時もとは様子がおかしい。

漸く落ち着いたのか、真由美が席に戻ってくる。

「お、お姉ちゃん。ま、マリアさんって、あの魔女マリアだよ!!」

お姉さんって感じだな」

横島は平然とそう言いながら、そのメッセージが書かれたホワイトチョコを横に避けて、ケーキを切り分けようとした。

マリアと香澄以外、皆固まっている。

「ん？どうしたみんな？、あれ？達也なんで白くなってるんだ？」

そう、達也は燃え尽きた様に真っ白になって固まっていた。

達也の心臓はこの間、確実に止まっていただろう。

達也は頭の中まで今、真っ白だ。

全力全霊を掛けて、今日一日守って来たチョコケーキの秘密を、最後の最後で、しかも渡した本人が開示してしまったのだ。

しかも、同じ十師族の七草家の令嬢3人と、スターズのリーナの目の前で。最悪のパターンだ。

これで、USNAにも、七草家にも達也が四葉家の人間だとバレてしまっただろう。

となると、七草家と四葉家の裏工作は激化することだろう。

USNAには達也が戦略魔法師だとバレる上に、また、抹殺の対象になるかもしれない。

「横島さん・空気を・読んでください」

マリアもわざわざこの件は今まで触れていなかったのだ。それを無にする行いであった。

「どういう事？マリア？」

「……四葉真夜……横島くん、これ本当に四葉家当主からかしら？……四葉家当主はお父さんより一つか二つ年下だけよね。そんな人が……横島くんにこれを……」

真由美の混乱も分かる。真由美は四葉真夜と横島が接触していた事を知っていたが、流石にこれは無い。父弘一の直ぐ年下という事は、45歳前後だ。その女性が16の横島にしかもこんなストレートなメッセージを書いて、わざわざ贈っているのだ。尋常ではない真夜の本気度が伺える。

しかし、当の横島はまったくもって、そんな事を微塵も思っていない。シヤレの聞いたギャグ程度にしか思っていないかったのだ。

「そうっすね。なんか高級そうだし、シヤレが利いている事が書いてあるし、後でお礼でも言っておくか……あれ？俺、真夜さんの電話番号知らないや、真由美さん知ってる？同じ十師族だし」

「横島くん……あなたね。知っているわけないでしょ！」

「ん？なんかホワイトトチョコ板裏に紙がくっ付いているな……おお？これ手作りらしいっすよ。ほく美人な上に、料理も出来るのか。旦那さんが羨ましい!!」

真夜には夫はいない。トコトンダメな横島。

「……これ、毒とか入ってないわよね」

真由美は横島の軽い対応に、本当にシヤレなのかもしれないと考え出したのだが、あの四葉家が無意味な事をするものなのかと言う疑問も残る。もしかすると、七草家と手を組んだ横島を抹殺するのではないかも……

「大丈夫です・構成成分には・毒などの・危険物は・入っていません」

「泉美……なんで、皆驚いているの？こいつがケーキ貰った事におどろいているのかな？」

「香澄ちゃん……四葉家当主ですよ。あのアントタッチャブル四葉ですよ。その当主が横島さんにバレンタインチョコケーキをわざわざ贈っているのですよ」

「四葉家当主だと何かまずい事が？」

「……香澄ちゃんは一度、お父様やお兄様たちに叱ってもらった方が良いと思います」

七草の双子姉妹は二人のこの状況について、話しているのだが、香澄はまったくピントがずれている。

「た……達也、これあなたが……」

リーナはマリアのこの発言でこのケーキが達也が持ってきたものだど気が付く。

もし、達也が四葉家の家人であれば、『灼熱のハロウィン』をおこした戦略級魔法師である可能性が高くなる。しかし、あの四葉家の人間

だ。世界でもアンタッチャブル四葉とまで言われた。恐怖の対象の一族なのだ。リーナの一存では容易に手が出せない事になる。

USNAとしては、リスクが高くなり、最悪、達也を放置しなくてはならなくなるのだ。

リーナにとっては達也と争わなくて済むため、その方がありがたいのだが……

「何のことだリーナ」

漸く達也は再起動する。

「これ、達也がタダオに直接渡すって持ってきたものでしょ？」

「え？達也くんどういう事？」

「俺も驚いている。まさか、四葉家当主本人の物だとは思わなかった。朝来たら横島の机の上にあったものだ。俺がジャンケンで負けて、開けて、質の悪い悪戯だろうと思ひ捨てようとしたのだが……それを頭を下げて、俺に、確実に横島に渡す様にと言う男が現れてな。多分、四葉家の家人だろう。余りにももの必死さに、俺はしぶしぶ了解したのだ」

達也はどうやら、シヨック峠を乗り越え、頭をフル回転して、このようなストーリーを一瞬で捏造したようだ。

しかし、達也は心の中で悪態を付いていた。

先ほどまで、横島の命を助けたいと思っていたのだが、今は真逆の心境だ。この男、この場で殺してやりたいと……

達也の気持ちは分からないでもない。空気が読めない横島が悪いのだ。

「……怪しいわね」

リーナは疑いの目で達也を見る。

真由美も同様だ。

「あつ、そう言えばそうだ。男子からの有り難くない箱の下に埋もれていた、あの箱だ！なんだ。真夜さんのだったのか」

横島もそう聞いて思い出した様だ。

それを聞いたリーナと真由美は達也が言っている事は本当の可能性が高いと考えを改め始める。

「タダオは……四葉家当主とも仲がいいの？」

リーナは達也への警戒心を一時解いて、横島に重要な質問をする。「うーんどうだろう。一度しか会ってないからなく、しかも六塚温子さんと一緒にな。それがなんで？」

「タダオは知らない様だから言っておくけど、四葉家って、世界でもいい噂が聞こえない魔法師の一族なのよ。何されるか分からないわ」

「そうなの？真由美さんも一緒の十師族なんですよ？」

「うーん……まあ、そうね。でも、あそこだけは、異質だわ」

「でも九島のじいさんとも知り合いそうだったけど」

横島が真夜が九島烈を先生と呼んでいた事を思い出す。

「横島、九島烈も前十師族の長だ」

「まあ、そうだろうなとは思ってたけど、まあ、俺にとつてあんまり関係ないし、じいさんは茶飲み友達だしな」

「タダオは……九島の大叔父様の友達なの？」

リーナはそれを聞いて、驚いたような表情をし、質問をする。

リーナは九島烈の弟の孫にあたるのだ。

「ああ、そうだ。じいさんには結構。助けてもらってたしな……あれ、リーナってじいさんの親戚かよ。知らなかった」

「私も驚いているわ……お爺様と大叔父様はあまり仲が良くないから、あまり親交はないのだけど」

「へー、だからリーナとも話しやすいし、相性もいいのかな？」

「タダオ」

リーナはそんな横島の発言に感極まる表情をするが、抱き着く衝動を抑え、横島の手のひらを握るに抑える。

真由美はそんな横島とリーナをこめかみを引きつらせて見ていたが、どうしようもない。

真由美の親族で横島と親交があるとすれば、弘一だが、とても友達と言うような立場には無いだろう。

「横島くん……どちらにしろ四葉には警戒はした方がいいわ」

真由美はそう言うのがやっとであった。

「まあ、とりあえず、おいしく頂きますか」

横島はそう言つて、真夜の手作りチョコケーキを切り分けて皆に配る。

達也は……

どうやら、自身が四葉家の人間だとバレなかった事と、真夜に対し横島がその気が全くない事に安心する。

また、一連の騒動のチョコケーキをまさか自分が食べる事になるとは思わなかった。

ただ……何となく懐かしい味がする気がした。

リーナは警戒はしたが

マリアが大丈夫だと太鼓判を押している事から、躊躇なく口にする。

リーナは口では色々言うがマリアへの信頼度は高い様だ。

真由美も警戒をしていたが……

皆が普通に食べているのを見て、口にする。

それが、かなりおいしかった。横島もおいしそうに食べているのを見て、自分もおいしいものが作れるように料理を勉強しなければと新たに決意する。

香澄は「おいしいこれ」とか言いながらのんきに食べていた。

泉美は紅茶を入れなおしてくれるマリアに「お姉さま」とか言いながら見とれ、チョコケーキを食す。

横島は……

「うま、やっぱ、作ってもらう料理って、うまい……昔もよく作ってもらってたな……」

チョコケーキを食べながら、昔の事を思い出していた。

氷室絹にごはんをよく作ってもらっていた事や、バレンタインチョコも作ってもらっていたことを……

もう100年以上前の事だ。

166話 横島 妙神山、氷室家と用事を済ませます!!

「師匠、色々と骨を折ってもらい、ありがとうございます」
「かまわんよ」

バレンタインデーの翌日、横島は妙神山に帰っていた。

居間にて、師匠である齊天大聖老師と姉弟子小竜姫とちやぶ台を囲んで談話を楽しんでいる最中であつたが、今はちようど小竜姫は台所にお茶を入れ直しに行っている。

「小竜姫様、今日は機嫌がよさそうですね」

「ふむ、昨日の夜までは、不機嫌じゃった……夜半から急に機嫌がよくなりおつて、なにやら年上がどうのこうの言っておつた」

「はあ、なんでしようね」

この二人が分からないのも無理もない。小竜姫は昨日、横島の身に起きたバレンタインデーの出来事を、この妙神山から、千里眼のイヤリングと言う霊具で、ずっと見ていたのだ。

最初は、ほのかや深雪にバレンタインの義理チョコを貰うシーンを見て嫉妬し、その後の、呪いの小箱やらが横島の机にたんまりと置いてあつたことに激高。

その事で、美月がクラスで声を大にして、横島のこの仕打ちについて怒り、代弁してくれたことで大分溜飲が下がったようだ。

昼休みのリーナの本命チョコに大いに嫉妬。この時リーナを完全に敵視していた。

その後は七草家では強引な弘一に対し、怒りをあらわにし、横島自宅での、リーナと真由美の修羅場には参加したくてうずうずしていた。

しかし、その後、七草の双子に対して横島が言った言葉で機嫌が一気に良くなったのだ。

「俺は年上派なんだよー」この一言でだ。

よく考えると、横島は実際は21歳になる。

となると、第一高校で横島に好意を寄せている女性はまず、横島の対象外になるハズ。途中、年増の女性（真夜）がどうやら本命チョコ

を送ったようだが……

横島は、魂の牢獄に囚われていた期間100年を計算に入れるとすると、大凡120歳。

となると、横島の恋愛対象は、自分とマリアしかいない事になる。マリアは、小竜姫でさえ頭が下がる様な存在だが、伴侶としてはお互い見ていない様だ。

となると……もはや、自分しかいないという結論に至ったからだ。そうになると、小竜姫のテンションは上がりっぱなしだった。

「老師、横島さん、お茶をどうぞ。神界で採れた黄金茶を使った玉露です。老師には後でお酒を一本つけておきますね」

小竜姫はそう言ってお茶を齊天大聖老師と横島、自分の分をちゃぶ台を置き、自分も座る。

「小竜姫様、何か良い事でもあったのですか？」

「ふふふつ、それは秘密です」

やはり、小竜姫は機嫌が良さそうだ。

「ダンタリオンの件じゃが、奴に関する資料も少ない上に、普段から魔界のどこに居るかもわからない様な存在だそうじゃ」

齊天大聖老師は横島に、ダンタリオンについての調査を頼まれている。

「俺の知っている範囲では、魔神72柱の1柱で階位は公爵、番付は71番目、36の軍団を率いているという事と、争いを好まないという事だけです」

「そうじゃ、それが一般的な奴の情報じゃ。しかし、奴自身もその軍団も、軍事行動を起こし、魔界、人界、神界に現れた事がないそうじゃ」「奴の居城もわからないのですか？」

「ああ、そうじゃ。わしはジークを呼び出し、聞いてみたのじゃが、魔界でも奴の姿を見たことが無いそうじゃ。その軍団すらもじゃ。ただ、調べてもらった結果、噂レベルの話じゃが、数百年前に一度奴の軍団が集まった事があるそうじゃ……しかし、何やら様子がおかしかったそうじゃ。軍と言うよりも、狂信者の集団の様じゃったとの

てやっているしのう……うむ……引き続き調べるとしよう」

「お願いします」

「横島さん無理はされなないでくださいね。何時でもここに帰ってきていいのですから」

小竜姫は心配そうに横島を見る。

「この件が終わったら一度、此方に帰ってゆつくりさせてもらいますよ」

横島は小竜姫に笑顔を向ける。

小竜姫も斉天大聖老師も心配なのは横島の精神状態なのだが……

「では、お暇させて頂きます」

「もう、行ってしまうのですね」

小竜姫は名残惜しそうにする。

「横島、神の最高指導者が一度訪ねてくるように言っておったぞい。ゆつくり帰ってくる機会に会いに行つてやれ」

「分かりました。今度お伺いする旨をお伝えください」

そう言つて横島は、その日の内に妙神山を後にした。

横島は妙神山から直接氷室村に向かう。

氷室家にある重要なお願いをする為である。

盛大な夕食に後にしたあと、上氷室神社の母屋で話し合いを始めた。

「蓮さんすみません。同行していただくことになりました」

「いえ、いいんですよ。たまには六道家にも顔を出しておかないと思つていた所なのです」

氷室家15代目当主氷室蓮は、柔らかい笑顔で答える。

「忠夫ちゃんが私達を頼ってくれるなんて、嬉しいんだから」

氷室家14代目当主氷室恭子は、屈託のない笑顔を横島に向ける。

横島はどうやら、六道家に七草家や千葉家、USNAスターズに特殊な霊具、悪霊退散用の霊具を販売して貰う為、氷室家に説得しても

らうよう協力を仰いだようだ。

そこで、氷室蓮が横島共に六道家との直接交渉を買って出てくれたのだ。

「悪霊ね……私も悪霊退散をした事は数度ある程度よ、滅多に出没しないんだから……絹さまの術儀は本当に見事だった。まるで悪霊が自ら従った様な感じだったな〜」

恭子は思い出したように話し出す。どうやら、恭子は14代目を継ぐ前に、絹とも悪霊退治を行った事があるようだ。

13代目氷室絹は特殊だ。現代魔法で言う所のBS魔法と同じカテゴリーの能力を持っていた。

それが『ネクロマンサー』（死霊使い）だ。絹の場合、死体や霊だけでなく霊気構造を持つ生命体をも操る事が可能なのだ。そして低級悪魔程度だといとも簡単に操る事も可能だったのだ。

それがもつて、精神感應系術式は大の得意としていた。

「お母さん。私自身は、2度しかありません。しかし、氷室の術式は悪霊に対して効率が良い術式ばかりですので、思いのほか容易に封印出来た様に感じてます」

「要ちゃんや彩芽ちゃんにも一度、経験させてあげないとね。でも、今は要ちゃんは受験だし……忠夫ちゃんは今回の山はかなり危ないつて言うし、今回は諦めるけど。今度こんな事があつたら、忠夫ちゃんにも手伝ってもらって要ちゃんと彩芽ちゃんをしつかり見てもらおうかな〜」

「その時は呼んでください」

「忠夫ちゃんから言われた、悪霊退散用霊具は一応最低限はそろえる事が出来たけど。流石に普段売り物にしてないし、これ作れるの蓮ちゃんと私と後二人だけだし大変だったな〜……こんなに数が居るという事はやっぱり結構な山みたいね」

「はい、かなり厳しいです。六道家も協力してくれればいいのですが」
「協力の方は期待しないでくださいね。元々縄張り争いでいがみ合う間柄でしたし、どうも話を聞くところによると七草家と千葉家の当主を毛嫌いしている様なんです。あの子、言い出したら結構頑固なところ

ろあるし、販売だけだったらきつと大丈夫だと思っけど……」

蓮が言うあの子とは、六道家の現当主の事を指していた。

「せめて、心霊医術が必要な患者の受け入れだけでもお願いしたいところですよ」

「まあ、それぐらいだったら大丈夫じゃない？もし、無理だったら、氷室まで連れてきてね。氷室でもちゃんと見る事が出来るから。後、あのミアさんも鬼化（悪魔化）も鎮静して、第三の目もようやく綺麗に無くなったよ。鬼化（悪魔化）の治療は氷室の術者でも経験があるのは数人だけだし、蓮ちゃんにもいい経験になった。要ちゃんにも今後の為に一応立ち合いしてもらったの」

恭子は横島を安心させるためだろう。軽い感じで氷室も受け入れる事を了解する。一番の問題は東京から離れている事だが……最悪、多量の悪魔化患者が出たら、バスやらを借りて、氷室に連れて行く事も視野に入れないといけない。

続いて恭子は氷室で現在、心霊医術を施している半悪魔化したUSNAの諜報員だったミカエラ・ホンゴウの経過状況を説明した。

「もうミアさんは元に戻りましたか、流石ですね……本人の状態はどうですよ」

「意識を取り戻してから、一応色々説明しましたけど。最初は混乱が酷くて、こちらの方が大変でした。本国にも家族の元にも戻れない事を伝えるのは、落ち着いてからにしようと思っています」

蓮はミアの状態を横島に説明する。

ミアはもう元の生活に戻れないだろう。半悪魔化した人間が、USNAや十師族や日本国機関に捕まれば、モルモット扱いは免れないからだ。

「その役目、俺にやらせてください」

横島はミアに元の生活に戻れないだろう事を伝える役目を買って出る。

「ダメよ忠夫ちゃん、それは蓮ちゃんの役目。氷室家当主の役目なのよ」

「蓮さんすみません。辛い役目を押し付けてしまい」

「これも氷室家の大事なお役目の一つですから」

横島は氷室家で一晚過ごし、翌日朝食後に蓮と付き人として向井麻弥と、共に六道家に向かう。

要と彩芽もついて行きたかったようだが、何故かあの温厚な蓮が強く止めたのだ。

因みに、またしても彩芽が夕食時も朝食時も横島にべったりだったため、要はそれを横目で物ほしそうに見ている事しかできなかった。

167話 横島 六道家再び!!前

六道家……日本魔法協会に属せず、古式魔法の伝統派とも一歩引いた立場であるが、東北の氷室家と並ぶ、隠れた名家として知られている。

実際どのような力を持っているのかを世間では知られていない。

その実は陰陽術、特に式神を扱う技術に秀でた一族である。その中でも歴代当主が扱う式神は古式魔法で言う式神とはまったく異なる異質のもの……本物の鬼を式神として従えていたのだ。その力は、他の式神の能力とは一線を画する。因みに鬼とは西洋で言う悪魔と同義である。

その歴史は氷室家よりさらに古く平安時代までさかのぼる。平安時代から現代まで、その技術と強力無比な式神を脈々と受け継いでいたのだった。

世間では六道家は古式魔法等の術儀で使用する数々の道具や霊具、札などを手広く扱っている業界最大手の製造メーカーであり、全国規模で展開する販社でもあることは一般的に知られている。

その他にも、日本有数のお嬢様学校の経営、氷室家など共に霊脈や風水を使った農業指導事業なども手がけている。

政府内部では、内務省、宮内庁、農林水産源食料資源省などに強い影響力を持っているとも言われている。

横島と氷室家15代目当主氷室蓮は昼過ぎに東京の六道家本家に到着する。

付き人の向井麻弥は途中で別れ、東京の六道家古式魔法術具販売ショップの中にある氷室家のアンテナショップの方へ向っていた。

蓮と横島は、今は広大な六道家の敷地を通され、中庭に設けられている洋風のティーハウスに通されていた。

六道家当主は少し遅れてくるとの事だった。

「忠夫さん、氷室村を出ると高校生らしくするために性格を改変するようにしていると聞いてましたけど、全然変わった様には見えませんね。要や彩芽は、明るい感じだと言っていましたけど……」

氷室家の人達には予め、横島が20歳であることは最初に伝えていた。そのうえで氷室村を出ると、高校生の振る舞いをするためにわざと性格改変し、高校生時代の自分の性格に戻している事を知らせていた。

「いえ、今も自制心で必死に抑えてるんです。蓮さんや麻弥さんの様にステキな方が近くに居ると、ドキドキが止まらなくて、今にも飛びついたりナンパしたくなるんですよ」

「あらあら、こんなおばさんに、嬉しい事をいつてくれます」

「いや、正直。蓮さんは20才そこそこと言っても全く違和感ないですからね。中学生の子がいるとは誰も思わないでしょう」

蓮は36歳だが見た目は一世代以上若く見える上に、色気むんむんの着物が良く似合う和風美女なのだ。容姿がよく似た要とは歳離れた姉妹と言っても違和感が無い。

しかし、今日は何時ものとは違い、パンツスーツのような動きやすい恰好をしている。それはそれで豊富な胸が協調されて色気がさらに溢れているのだが……

「ふふふふつ、ありがとう……それと、今の当主に会う際に、必ず身体強化の術と自身の防御を常に準備してくださいね」

蓮は微笑んでいたが、急に真面目な顔になり、横島に注意を促す。

「はあ〜」

横島は蓮が言ったその意味を十分理解していた。

溜息を付き、心の中では（やっぱりか）とつぶやいていた。

バタン！

大きな扉が大きな音をたて一気に開く。

「蓮おね〜〜〜さま〜〜〜!!」

舞踏会からでてきたかのような煌びやかなドレスを身に纏った若い女性が、いきなり蓮の胸に飛び込んできたのだ。

「芽衣、久しぶりですね」

「ああ~~~~ん!!お姉さま~~~~ん!!お会いしようございまして~~~~!!芽衣は芽衣は、一日千秋の思いでいつもお姉さまの事をお待ちしておりましたの~~~~お姉さま~~~~お姉さま~~~~」

かなり百合百合した空間がこの二人の周りで出来上がっていた。

間延びした口調で蓮の豊満な胸に顔を埋め、ほんのり顔を赤らめ、涙目で嬉しそうにしている芽衣と呼ばれた女性こそ、六道家54代目当主六道芽衣子である。因みにあどけない顔をし、一見横島とそれ程年齢が変わらない様に見えるが年はこれでも28歳……勿論独身である。

蓮は高校を卒業してから、しばらく東京の普通の大学で学んでいた。その時の六道家で下宿しており、芽衣子と出会っていたのだ。

横島は六道家の厄災が降りかかるのではないかと身構えていたのだが、この展開には流石に呆氣にとられるしかなかった。

「芽衣、今日は氷室家の当主としてきました」

「ああ~~~~ん。お姉さまの香しい匂い~~~~、このお胸の感触~~~~。 あ~~~~ん。芽衣は芽衣は」

六道芽衣子は蓮の胸に顔を埋めたまま、暴走しっぱなしだ。

どうやら六道芽衣子は蓮に対し、一方的に慕っている様だがその慕い方が尋常ではない。

要や彩芽を連れてこなかった事は正解だろう。

「芽衣!!」

「お姉さま??」

「芽衣、何時までも、その様な振舞をしているのですか?」

蓮は芽衣の体をそつと離す。

「クスン〜お姉さまに会えたのは久しぶりなんですもの〜」

「芽衣、あなたはもう、六道家の当主なのですよ。幼いあなたはもういないのです」

蓮は芽衣を優しく諭そうとする。

「だって、だって〜お姉さま中々会いに来てくれませんし、お電話して

も、なかなかつながらないし」

「用事もないのに毎日かけてくるからです。私もお役目もありますし、家族もいます」

「クスン、クスン、お姉さまは私よりもあのインテリメガネ（敦信）の方が良いのですね」

「当然です。夫なのですから」

「ク ス ン、 ク ス ン、 グ ス …… うあ、 うわー」

あー」

芽衣子は盛大に泣き喚き始めた!!

それと同時に芽衣子から強大な霊圧が膨れ上がり、同時に芽衣子の影から、とんでもない物が一気に現れたのだ。

ズババババツズウウウー」

六道家当主が代々、使役している本物の鬼……12! 神将と呼ばれる強力な式神たちだ!!

芽衣子が泣くことによって、精神コントロールが制御不可能となり、暴走しだしたのだ!!

一体一体がとんでもない力を持つ式神だ。毎度毎度この暴走で、建物や街の一区画を吹っ飛ばしてしまうのだ。だから、六道芽衣子は滅多に外に出ない。出たら困るからだ。

さらにタチが悪い事に近代最恐と言われた49代目六道家当主六道冥子と同等の霊力を内包しているのだ。

一度暴走したら、芽衣子の霊気、霊力が切れるまで、暴れまくる。蓮はそれを見越して、既に防御態勢をとっていた。

家人もそれを見越して、居住区や本館には招かず、広大な中庭にポツンとあるこのティーハウスに蓮たちを通したのだ。

勿論ティーハウス自体強力な結界を張ってあるが、激化した暴走に耐えうる事は出来まい。

しかし、凶荒に対し蓮は身構えていたが……暴走の嵐は訪れなかつ

ピカラと言う大きな体躯の式神に上半身を飲まれた状態だった。……口からはみ出して見えているボロボロの下半身はだらんとし、ピクリともしない。

「ああー！忠夫さん！」

「あらあら〜？あの子たち〜怒ってるのじゃなくて〜え、嬉しがってる？」

「芽衣！」

バサラは横島を床に吐き出すが、他の式神たちは横島を囲んだままだ。

吐き出された横島はビヨンと上半身だけ起き上がる。

「たははははっ、死ぬかと思った」

平気そうだ。

「忠夫さん、大丈夫ですか？」

蓮は横島を起きあがらせようと手を差し伸べる。

「たはははははっ」

引きつった笑いをしながら自ら立ち上がる。

しかし、式神たちは横島について、そばを離れようとしなない。

「蓮お姉さま〜この人はだ〜れ？……うー……うー……でも見たことがある様な〜」

芽衣子は首を傾げながら横島の顔を覗き見る。

「横島忠夫さん……私達の家族です」

「よ、横島忠夫です。よろしくお願いします」

蓮は家族と紹介。横島は顔を引きつらせながら、ここでは普通に挨拶をする。

ここで、何時もの様にナンパでもしようならば、また、式神が暴走するだろう。

「蓮お姉さまの家族〜!? インテリメガネと離婚されて、この方と再婚を?? そんな酷いですお姉さま〜芽衣を差し置いて〜グスン」
芽衣子はまた泣きだし、暴走しそうになる。いちいちたまったものじゃない。

「違います。敦信さんとは夫婦円満です。……そうですね。彼は従弟

「芽衣、先代様から聞いておりますよ。好きな人を作るわけでもなく。お見合いも悉く断っているそうじゃないですか」

「だって、お母さまが紹介してくださる方って〜、欲の塊のような殿方ばかりで〜、しかも私の事をいやらしい目で見るとは、それと、先代様は、もはやこの東京でいがみ合うのは大変だろうと、

せめて休戦協定をと、魔法協会や有力氏族と表向きだけでも、協力関係を結ぼうとしたのを、あなたがすべて破棄したと聞いてますよ」

「だって〜、あの七草弘一って言うおじ様と、千葉丈一郎っていうおじ様、いやらしい目で私の事を見るんですもの……しかも、七草家や魔法協会は私の事を利用してしようとしているのですよ〜。そんな男どもは信用できないです〜」

芽衣子は子供っぽいあどけない顔をしているが、気品は有るし、スタイルもかなりいい方だ。

「その点、横島さんはスケベに見えますけど〜野心などの欲が無いし〜、男の人は怖いけど、式神たちも仲良くしてくれそうだから〜」

「どうやらこの六道芽衣子と言う女性、見た目だけで判断すると痛い目に合う様だ。」

横島の事もかなり調べている。

「……分かりました。忠夫さんの件は先に言っておきますが、諦めて下さい。……本人がいいと言えば別ですが」

「横島さんから良いお返事を頂ければいいのですね〜。ありがとうございます〜」

「……………」

蓮は氷室家としてはつきりと断るが、一応、横島の意味も尊重する形を残す。

蓮は横島が芽衣の申し出など受けないだろうと思っていたからこそその言葉だった。

しかし肝心の芽衣子はそれをワザとなのかポジティブに解釈し、行動に移そうとしたのだ。

その神経の凶太さに蓮は呆れて言葉もでなかった。

非常に珍しい光景であった。

168話 横島 六道家再び!!後

「今日は氷室家15代当主氷室蓮としてお願いがあり、ここに参りました。六道家54代当主六道芽衣子さん」

蓮は改まり、本来の目的である悪霊対策の協力要請について交渉を進めだす。

交渉案件は主に3つある。

①七草家、千葉家、USNA軍スターズなど、今回の協力体制を築いた組織へ霊具等悪霊対策アイテムの六道家からの販売許可

②悪霊などに取り付かれ、心霊医術が必要な患者の受け入れ

③悪霊対策の直接協力体制

上記3つの上、最低限①は成功させなければならぬ。②については、最悪、氷室でも受け入れ態勢は取れる。③はあわよくば程度ではない。

わざわざ、六道家にこのような交渉をするのも意味があった。

現在、国内での省庁を巻き込んだ縄張り争いのため、この吸血鬼(悪霊)事件に六道家や氷室家が直接介入が出来ない状態である。それは、国防軍の後ろ盾がある魔法協会、十師族。警察省をバックにしている千葉家が、この件について、他者を排除して介入しているからだ。無論両者も元々仲たがいでいる。

そんな中、本来、宮内庁や内務省からこの件を受諾するはずだった。六道家や氷室家が動けない状態に陥っていたのだ。

さらに、この東京において、六道家は七草家や千葉家、そのほかの魔法協会、伝統派とも何かと、縄張り争いなどで衝突しており、お互いほぼ音信不通状態である。

それを、七草家、千葉家から折れたような形で、悪霊対策アイテムを六道から買うことによって、少しでも、関係改善すればという横島の思いがあった。

芽衣子はアンティーク調のおしゃれな丸テーブルを挟んで蓮の正面に笑顔を振りまきながら座っている。

横島はすぐそばに居るのだが、式神に懐かれ、囲まれたままでイスに座することもできない。

その式神なのだが、今横島に絡んでいるのは8体だけだ。本来12体いるはずなのだが……最初から見当たらない。

「お姉さま……、いつもの様に芽衣って呼んでください……」

「まずは……」

蓮はそんな芽衣子の言葉を無視して話し始める。

「お姉さま……、今東京で起きている。悪霊の件はお断りいたしますわ……」

芽衣子は蓮が言おうとした案件を先に口に出し、断ったのだ。

③の案件である。元々これについては、無理があるのは承知している。

「そう言われると思っていましたが、理由をお聞かせ願いますか？」

「政府から直接要請を受けておりませんもの。本来この件は六道家の仕切りのハズなのに……警察庁やら、十師族及び軍部が介入してあります……どつかの誰かさんが横やりいれているのですね……。直接火の粉が掛ければ、取り除きますが……」

「やはりそうですか。では、せめて、心霊医術が必要な患者さんの受け入れをお願いできますか？」

「うーん……どうしましょうか……。でも、なぜお姉さまたちが、こんな事をお願いされるのです……。氷室家としてもあの人たちの介入を快く思っていないはずではないですか……？」

「すみません。それ、俺のわがままなんですよ。このままだと、悪霊に好き勝手されちゃうんで、彼らをまとめたんです」

横島は式神に囲まれ、懐かれながら、手を上げて答える。

「という事は……お姉さまただけでなく、横島さんにも恩がうれるのですね……。……分かりました。いいですよ……。患者さんには罪は無いです……」

芽衣子は少し考えるしぐさをした後に了承する。

「ではこれは電話でも伝えていた件ですが……」

「七草家と千葉家とUSNAスターズに、氷室の商品を販売してほし

いという事ですね〜」

「そうです」

「うーっ、彼らが悪霊退治が出来ちゃうと、此方の存在価値が低くなりそうで嫌なんですよね〜」

芽衣子は難色を示す。

「その商品群の中に、ドクター・カオスの開発品が入っていたとしてもですか？もし、これが受け入れられない場合。私共の氷室村から直接販売することも可能なのです……それをわざわざ六道家に販売してもらおう意義もおわかりでしょう？」

「ドクター・カオス!!本当なのですか？」

「私が芽衣に嘘をついたことがありますか」

「なるほど〜魔法協会の方で、悪霊退治が出来たとしても、その為の霊具自身は此方が抑えておくべきだという事です〜さらに、ドクター・カオスの商品など、日本ではオークションに上がる位の物しか手に入れない。それを古式魔法、いえ、六道と氷室で独占するわけですね〜、氷室だけだと販売網が小さいし、六道と合わせれば、今後の事も考えれば……お姉さまもなかなかお人が悪いですね〜これでは、受けざるを得ないですか〜。しかも、先ほどの協力の件も便宜をはかれないのでしょ〜先はこちらを言っていただけば……」

「では、患者さんの受け入れと、七草と千葉、USNAスターズへの販売の許可。協力体制の便宜の件お願いいたします」

ここで、蓮は立ち上がり、芽衣子に頭を下げる。

「分かりましたわ〜便宜の件は直接協力はいたしません、氷室家を通して情報提供はいたしますわ〜……お姉さま〜、でもドクター・カオスとはどうやって繋ぎを結べたのですか〜？」

「それ俺なんで、カオスのじーさんは俺の古い友人なんで……それで」
またもや、式神になつかれ、巻かれたり上に乗っかられたりしている横島が、手を上げそれに答える。

「ドクター・カオスと友人!!……お姉さま〜正式に氷室家に要請しちゃいます〜是非とも横島さんを我が家の、いいえ、私のお

婿さんに〜」

「…………ダメです」

「ええ〜だったらお姉さまが私と結婚してくださいませ〜」

「…………女どうしでは結婚できません」

「お姉さま〜」

そう言つて芽衣子は席を立ち座っている蓮に後ろから抱き着くが、蓮はすました顔で、無視して紅茶を飲んでいた。

「ところで、芽衣、式神の数が少ない様ですが、どうしたのですか？」
しばらく、芽衣子の抱擁を好きにさせていた蓮は芽衣子に疑問を投げかける。

「それは〜、次期当主の子に今、メキラちゃん、サンチラちゃん、クビラちゃん、シヨウトラちゃんを預けているんです」

「次期当主の子…………芽衣には兄の和彦さんしかおりませんが、そうですか、和彦さんの娘さんですね」

「そうなんです〜」

芽衣子はそう言つて、テーブルに置いてあつた鈴を鳴らす。

すると、テーブル近くの何も無い空間から、いきなり巨大な虎が現れた。

メキラと言う、短距離の瞬間移動が可能な大きな虎の式神だ。

そのメキラの上に、ちよこんと巫女服に身を包んだ4歳児ぐらいの見たからに気が強そうな幼女が乗つかつていた。

「呼んだか、おばうえ」

「もお〜、お姉さまと呼んで〜」

「うむ、ではあねうえ」

「お姉さま〜、横島くん。この子が、次期当主になる。六道日向（ひなた）ちゃんです」

芽衣子はその幼女、六道ひなたを紹介する。

「うむ、ろくどうひなたなのだ」

六道ひなたはメキラの上からカミカミながらどこか横柄な口調で

自己紹介をする。

ひなたは、芽衣子の兄、六道和彦の娘なのだが、内包する靈気の量が非常に高いため、次期当主に選ばれたのだ。

ひなたは、父和彦が六道家の関西の拠点となる会社の経営をしていたため、最近まで、親子で京都に住んでいた。

今は、両親と離れ六道家本家で生活している。式神コントロールがある程度、安定するまで、両親と生活させるわけには行かないためだ。

「私は、氷室家15代目当主氷室蓮です。よろしくね。ひなたちゃん」
蓮は立ち上がり、ひなたに近づき、頭を優しくなでながら、ニコつとした笑顔をし自己紹介をする。

「よろしくなのだ。じゅうごだいめ」

ひなたは、気恥ずかしそうに軽く会釈する。

「俺は横島忠夫。よろしくひなたちゃん」

横島は相変わらず、八体の式神になつかれ、どう見ても拘束されるようにしか見えない状態だが、そんな恰好で挨拶をする。

すると、メキラがひなたを乗せたまま横島に覆いかぶさり、顔を舐め始めたのだ。

「グボッ！くすぐったい〜、もう、キスは大人になってから〜」

もはやムツゴロウさん状態の横島。

「こら、メキラ、おきやくさまにしつれないのだ。やめるのだ」

ひなたはメキラに言い聞かすが言う事を聞いてくれない様だ。

「ひなたちゃん。大丈夫、じゃれてるだけだから」

横島はメキラにのしかかれたまま、笑顔で答える。

「ヨコチマはひなたたちが、こわくないのか？」

「ヨコチマ？ああ俺の事ね。ああ大丈夫。慣れてるしな」

「……その、ひなたたちと遊んでくれるか？」

ひなたはもじもじとしながら横島にこんな事を言う。

勿論横島の答えは……

「じゃあ、遊ぼっか」

そして、横島はひなた相手に遊ぶことになるのだが、あの12体の

式神を相手をするようになる。並みの人間にはまず1秒と持たないだろう。

六道家直系の子女は生れた時から霊気・霊力が異常に高く、生まれながらにして式神使いの素質を持っている。

そして、幼い時から次期当主として育成がはじまる。

育成とは12体の鬼神ともいえる強力な式神を受け渡す事なのだ。

それを行う事によって、常に霊力の消費を余儀なくされ、霊力と霊力コントロールの訓練を常時行う事に等しい状態となる。

そうやって強力な式神使いを育成してきたのだ。

それには弊害がある。そんな子供を普通の人間が扱えるわけが無いからだ。暴走すれば、甚大な被害が出る。通常は子守をするだけで、沢山の死人ができてしまう。

歴代の当主は、受け渡した式神も、近くに居ればコントロールが可能なため、子供が自分のコントロール範囲にいれば、子供が原因で暴走することは無い。

ただ、そんな巨大な爆弾を抱えた子供に近づこうと思う人間はまずいない。友達も出来ようがないのだ。

よしんば、成長して式神コントロールを完全に掌握したとしても、恐れられ、怖がられ、気味悪がられるのが落ちだ。

六道芽衣子も例外ではなかった。

しかし、10歳の芽衣子の元に、大学生の蓮が現れたのだ。

式神を怖がらず。式神を暴走させても対処できるだけの力を持ち。

さらに、蓮は包容力を持った女性である。

アヒルのすり込み現象に近いなつき方になるのは致し方が無いだろう。

今の芽衣子が盲目的に蓮を慕うのも必然的であった。

今のひなたも同様だ。4歳という幼子でありながら、両親からも離れた暮らしを強要され、幼稚園にも通うことも出来ない。

いつも一緒にいてくれるのは式神たちだけ……寂しく無いわけが無いのだ。

今、横島は必死の形相で奇声をあげながら、ひなたと、そして十二神将たちと中庭で遊んでいた。

一つ間違えば大怪我では済まないが、そこは横島、十二神将の扱いには慣れたものだ。

100年前も同じような事をよくやっていたのだ。

しかし、あの式神たち十二神将の横島へのなつき方は尋常じゃない。もしかしたら、式神たちに100年前の記憶が残っているのかもしれない。……調べようはないが。

気の強そうな顔をしていたひなたも非常に楽しそうに、今は子供らしい表情をしている。

「あらあら」

「あらあら」

そんな横島とひなたたちの姿を、微笑ましそうに見ながら紅茶をすすする蓮と芽衣子。

六道家では和やかな空気が流れていた。

「ねえ〜お姉さま〜、やっぱり横島さんをお婿さんにくっださ〜い」

「ダメです」

「お姉さまのいじわる〜」

一方、七草家では……

「お姉ちゃんまた台所で何かやってる」

「横島さんに食べてもらうための料理の練習ですね」

「ああ!!顔を赤らめてクネクネしだした!!」

「香澄ちゃん声が大きいです」

「どうやら、真由美は台所で横島の為に料理の練習をしているらしい。」

それを香澄と泉美はこそつと覗き見ていたのだ。

「横島の奴、調子に乗って!!」

「別に横島さんが調子に乗っているわけではないですよ香澄ちゃん」

「お尻叩いた恨みも晴らさないといけないし、どうしてくれよう」

「横島さんはかなり強いですよ。私達ではとてもかかないません」

「そうなんだよ。いかにも弱そうな感じなのに、うーん」

「しかも、お父様に叱られて、ペナルティで学校の帰りに横島さんの家によってお姉さまのお手伝いすることになりましたよね……何か横島さんにしたら、またペナルティが増えると思います」

「ぐぬぬぬつ、卑怯だ横島！」

「あゝ、マリアお姉さまはいらっしゃるのでしようか？」

香澄、泉美の双子姉妹は相変わらぬようだ。

七草家の書齋では……

弘一は一人思考している。

「横島くんにはバレンタインチョコを实名で……四葉家当主……真夜殿は何を考えている。……」

いずれにしろ、四葉家が横島くんに手を出してきたという事だ。我々も、うかうかしていられない。一刻も早く。横島くんを七草家に取り込まなくては……やはり、一番早いのは真由美か……」

どうやら、真由美に四葉真夜が横島宛にバレンタインチョコを送った事を聞いたらしい。

まあ、驚くのも無理もない。

「魔女マリアか……、娘たちの話によると、人当たりの良い人物のようだが……いや、しかし。一つ間違えば、滅びかねない。横島くんが居たからこそその対応かもしれない。単独接触は避けた方が良さだろう。横島くんの家にずっと滞在するつもりなのだろうか？となるとやりにくい事この上ないな」

マリアの件は、真由美、香澄、泉美からも聞いているのだろう。

特に泉美の様子がおかしかったのだが……気にしても仕方が無い。

弘一はこうして次の一手を模索していたのだった。

169話 横島 女子会で噂される!!

横島が妙神山や氷室村で過ごしていた頃。

USNAダラスに滞在している雫の元にほのかから慌てたように連絡が来る。

「雫……落ち着いて聞いて……」

「何、ほのか?」

「学校で横島さんに本命チョコを渡した女の子がいたの……」

「!!……誰!?……あの子、要が学校まで来たの?」

「違うの、もつと強力よ。前も話したと思うけど、雫と交換留学できたアンジェリーナ・シールズさん。あだ名はリーナなんだけど、すごい美人なの」

そう言っただけのはリーナと一緒に撮った写真を、映像通信で改めて雫に見せる。

「……」

雫は何度か見たことがあったのだが……

やはり、写真の女性は大学生程度に見え、とても同年代に見えない。さらにモデル並みのスタイルに金髪碧眼の美女ときている。

横島だったら必ず手をだすだろう。しかし、何故か雫は冷静だ。

「リーナは勉強も優秀で、魔法力も深雪に匹敵して、人当たりもよくて、すでに学校の人気者になっているわ」

「ほのか、でも横島さんが日本に戻って1週間も経ってない、ほのかの勘違いではない?」

「私、見たの、学校の食堂で……リーナがお手製らしいバレンティンチョコを横島さんに渡して、それで、横島さんに後ろから思いつきり抱き着いていたのを……」

「!!」

「でね。私調べたの、そしたら学校中で横島さんとリーナが付き合っているのではと噂になっていて、『美人留学生アンジェリーナさんが

まさかの学校一の問題児ゾンビ横島と付き合っている？美女と野獣の誕生か』って学校新聞や噂サイトにも載ってたの」

「…………ほのか、でも、それおかしい。そんな短期間で横島さんの良さが分かるはずが無い。横島さん学校には3日しかまだ登校してないって言った。きつとほのかの見間違い」

雫はほのかの話に驚いていたが、じつとなにやら考えてから、冷静に話す。

話しぶりから、どうやら、横島と何度か連絡をとっているようだ。

「うーんでも、クラスの男子はみんな横島さんの悪口言っているし、『なんであんな奴にアンジェリーナさんが！』って。聞いたところによると、休憩時間や昼休みから放課後まで、リーナは横島さんにべったりらしいわ。なんでもずっと腕をからめているとか…………」

「ほのかは見たの？」

「…………私は見てないけど」

「たぶん、横島さんのことだから、その子にちよっとナンパしただけ。それを男子が面白おかしく、脚色して嫌がらせしてる。横島さん、一科生の男子になぜか嫌われてるから」

雫はほのかが聞いた噂をまったく信じていなかった。

ほのかが見たそのシーンも、見間違いだろうと一笑するほどだ。

「うーん。そうじゃなさそうなんだけどなー」

ほのかは雫にピンチであることを納得してもらえず。どう話したらいいのか悩む。

そこに、雫の元に深雪から連絡が来た。

「ほのか、深雪から連絡きた。せっかくだから、一緒に話す？」

「そうだね。深雪もその噂とか知ってるし」

雫は一度、深雪と二人だけの通信に変更して話す。

「こんにちは、雫、今いい？」

「うん。今、ちよつどほのかと話してた。一緒に話す？」

「…………ちよつどいいかもしれないわ」

映像でみる深雪は深刻そうな顔をしていた。

「?.....じゃあ繋げる」

「ほのか、こんにちは、お兄様にワザワザあのような物を頂いて」

「深雪、こんにちはは、いえいえ、私は好きで自分の思いを形にして達也さんに渡したのだから」

深雪とほのかの挨拶はどこかよそよそしい。

ほのかがバレンタインの本命チョコを達也に渡したことをまだ引きずっているようだ。

「??.....!」

雫は二人の挨拶が何故かよそよそしい事に疑問を持つが、雫はほのかが達也に本命チョコを渡すと前に言っていたことを思い出し、そのことだと気が付く。

「深雪は私に何か用事?」

「雫、魔女マリアとは仲が良いと聞いていたのだけど」

「マリアはとってもやさしいお姉さん。魔女って言うのは良くない」

雫のマリアへの好感度はかなり高いようだ。

「ごめんなさい。そのマリアさんと連絡つけたりできるかしら?」

「マリアとはすごく仲が良いけど、今はいない。もしかして深雪はマリアと会った?」

「いいえ、その.....会ったとはどういう事? USNAにいるマリアさんとどうしてかしら?」

「マリアは私とマリアが作ったバレンタインチョコを横島さんに渡すために、大気圏突破して、大陸間弾道飛行で現地時間で昨日の午前には日本に着いているはず」

「はあ? どういうこと雫? そんなことのためだけに大陸間弾道飛行? 本当にそんなことが出来るの?」

ほのかが、ここで話に入ってくる。

雫の話が信じられない様子だが、いたしかたがないだろう。誰でも普通は信じない。

「マリアは何でも出来る。ドクター・カオスの着替えの世話から食事まで、ドクター・カオスが暴走しても、鉄拳で止めることも出来る」
何故か雫が自慢そうにマリアのことを言う。

「それ、ドクター・カオスのことだけだよ。雫、しかもドクターカオスって介護が必要なの？」

ほのかは呆れた顔をする。

「マリアは凄い！」

雫は満足そうに頷く。

「……ということはお兄様が言っていたことは本当だった」

深雪は小声で申し訳なきそうに言う。

「深雪どういうこと？」

ほのかが達也の事とあつて、聞いてきた。

「……マリアさんに聞きたいことがあったのは、お兄様のことなの」

「達也さんがどうかした？」

「お兄様、マリアさんに会っていたようなの」

「え？どういふこと深雪。なんで達也さんとマリアさんが……」

「……実は……昨日……」

深雪は一瞬躊躇するような顔をしたが、昨日の出来事をゆっくり語りだす。

昨晚、横島宅から達也が朝方帰ってきた時のことだ。

深雪は気が気でなく。寝ずに玄関で待っていたのだ。

深雪は鬼の形相で達也に散々わけが分からない嫉妬心やら怒りをぶちまけていたが、達也がなだめ、何とか話が出来る状態に落ち着かせ。リビングで改めて話し合いをしたときの事である。

「お兄様が男色だとは知りませんでした……深雪の愛の力で元に戻してさしあげます」

「落ち着け深雪、何を根拠にそんなことになった」

「横島さんの家で遅くまで何をしていたのですか？……横島さんあての預かり物のバレンタインチョコレートとはブラフで、本当はお兄様

から横島さんに渡すためのチョコだったのではないのですか？私がお兄様からチョコの袋を渡していただいた（奪った）際の慌て様、何かおかしいと思っておりました」

「俺と横島は男同士だぞ。ありえん」

「クラスの友人達が、男同士でもありえると云っておりました。お兄様のような素敵なかたにそういう方が多いとも……。素敵なお兄様からダメな男性へとか、素敵なお兄様から、肉体がたくましい男性などは、……。よく分かりませんが、大好物だとかも言っていました。深雪もそのことを調べましたら、そんな情報は女子の間ではごく普通に噂されているということ……。また、USNAやヨーロッパでは正式に男同士の結婚まで認められているとまで……」

世事に疎く純粋な深雪はクラスのBL好きに半分洗脳されたのだろうか？

「何を馬鹿な……」

「いいえ、最近のお兄様はあまりにも横島さんと仲が良過ぎです。あのようなお兄様は今まで見たことがありません」

「……ありえん」

「年頃の健全な男子なら、女性の体に興味があると聴いております」

「誰からそんな事を……」

「八雲先生です」

「……」

達也は心の中で余計なことを悪態を付く。

どうやら、深雪は九重八雲に相談したようだ。

八雲が面白がつて、そんな事を言ったのだから目が浮かぶ。

「お兄様は、私の裸同然の恥ずかしい姿を見られても、平然とし、まったく反応を示しません」

「それは深雪が妹だからだ」

「では、私以外の女性の体に興味があるということですか？」

「そうは言っていないだろう」

「やはり、そうなのです。女性の体には興味が無いと……。夏休みのあの海の皆の水着を見ても、無反応でした」

「深雪、お前も知っているだろう。俺は感情の一部が欠落しているんだ」

「いえ、最近のお兄様は、喜怒哀楽を感じておられます。特に横島さんの事になると……」

「……深雪、横島の家には確かに長居していたが、そこにはリーナや七草先輩と七草先輩の妹たち、そして、マリアさんがいたんだ。深雪が思っているようなふざけたことにはならん。なんなら、マリアさんに聞いてみるがいい」

「……マリアさんとは誰ですか？なぜリーナや七草先輩ではなく、マリアさんという方を指名されたのですか？」

深雪の疑問はもつともであるが、昨日のあのメンバーの中で、真夜のチョコの件を気を利かせて、黙っていてくれそうなのはマリアぐらいだろう。

「マリアさんはあの世界最強の一角のマリアさんだ」

「魔女マリア……お兄様。いい加減にしてください。USNAに居る魔女マリアが日本にいるはずが無いではありませんか」

「いや、横島に会いに来たらしい。雫と自身で作ったバレンタインチョコを渡すために」

「お兄様、見苦しい嘘はおやめになつて観念してください。今ならまだ間に合います。深雪がお兄様を必ず、まともな道へ戻して差し上げます」

「深雪……なぜ、そこまで疑う」

「ならば、お兄様、横島さんにわたしたあのバレンタインチョコレートは誰からのものかお答えください」

「……それは言えん。本人たつての希望だ」

達也にはそれを深雪に伝えることが出来るはずが無い。あのバレンタインチョコレートの送り主が、四葉家当主、四葉真夜……自分たちの叔母であり、愛の告白が刻まれた本命チョコだということを……さすがの深雪も倒れ、寝込む事間違いない事実なのだ。

「実の妹の、私にもですか？……」

「……深雪、聞き分けてくれ、これは伝えることが出来ない物なんだ。

それと俺は横島に決して懸想などしていない。俺も男だ。素敵な女性を見れば心を奪われることもある。肉体も反応するというものだ……」

「本当なのですね。深雪は信じてもよろしいのですね」

「ああ、俺は深雪に嘘をつけないからな」

「肝心なことは、いつも、お話になさらないくせに………とところで、お兄様。お兄様の話しぶりから、短時間しか会ってないはずの魔女マリアを随分信用を置いている様子ですが……」

「マリアさんは、噂のような人ではなかった。非常にすばらしい女性だった」

達也はつい、しみじみとそんな事を言ってしまう。

それはいたし方が無いことだろう。達也は今日一日で一生分精神をすり減らされるような思いをしていた。しかも、身内（深雪と真夜）のせいで……

そんな時に、マリアが的確に達也をフォローし、癒しまで与えてくれたからだ。

「!?……まさか」

深雪は取り合えずそこでいったん話を終えたとの事だった。

「お兄様がもしかして、横島さんにバレンタインで愛の告白をしているのかも思ったのですが……でも、お兄様はそれは絶対無いといっていました。そうすると、マリアさんに興味がおありなのかもしれない。結局真相は闇の中………どちらにしても、知らなければ、私は気を病んでしまいそうで………それで意を決してマリアさんに直接お聞きしようと、伝のある雫に相談したの」

「そんな！達也さんがライバルなんて………でも負けない！」

雫が深雪の話を真に受けていた。

「……深雪、雫も、達也さんが横島さんにとって、どう見てもありえないから………どうしてそうなったの？」

クラスの子達が言っていたのは、ボーイズラブを見たいという願望だけで話しているだけなの……ただの妄想よ。妄想。そんな事をいちいち真に受けていたら、学校中、男子カップルしか居なくなるわよ」
ほのかは呆れながら説明する。

「そうなのほのか？でもみんな。レオ×幹か、達×横はありえるって……しかもベストはやはり達×横だって言ってました」

「妄想!!妄想に決まってるでしょ!!ただの言葉遊び!!」

ほのかは声を大にして、二人に言う。

「よかった。達也さんがライバルじゃなくて」

雫は心底ほっとしている様子だった。

「そうなんですか!!そんなことはありえないのね!!思い切って、二人に相談してよかった」

深雪は沈んだ表情だったが一気に明るくなる。

この二人のお嬢様は度が過ぎるほど、世間を知らないようだ。

「深雪は達也さんにちゃんと謝らないと、達也さんに呆れられて、そのうち嫌われちゃうんだから……私としては強力なライバルが減ってありがたいけど」

ほのかは友人らしくちゃんと深雪に言い聞かせる。ほのかはやはり人がいいようだ。

「深雪、ブラコンの嫉妬は良くない」

雫は思ったことをそのまま口に出している。

「でも……マリアさんには……」

深雪の顔がまた曇る。

「どうなの雫?」

ほのかはむしろそっちのほうに気になるようだ。

「うん。マリアは誰にでもやさしい。私もだけど、マリアと話をすると心が落ち着く。たぶん。達也さんもそんな感じだと思う。マリアに癒されたいとは誰もが思う」

「深雪が達也さんを追い込んだんじゃないの?達也さんバレンタインチョコいっぱいもらっていたから……だから、そんなマリアさんに癒

された……でもそれが恋に発展するかも……」

ほのかは深雪にダメだしをする。深雪のせいで強力なライバルが誕生するかも知れないからだ。

「……………私がお兄様を追い込む……………そのせいで」

深雪には心当たりが十分にあつた。【159話・161話参照】

深雪の顔が真っ青になる。自分のせいで他の女性に達也が恋をし
てしまうかもしれないと思つたからだ。

「よくわからないけど、違う気がする」

雫は根拠はないが、マリアを良く知る雫だからこそ、こんな感想を
漏らす。

「それは、マリアさんに聞いても、答えが出そうもない……………雫がそう言
うなら、そうかも知れないけど」

ほのかは雫が感じている事を、信じようとしているが、不安は残る。

「そうね。今後お兄様を注視しないと……………雫、ほのかありがとう。だ
いぶ楽になつたわ」

深雪も不安が残るが相談し始めた頃と比べると大分気持ちが楽に
なつていた。

170話 横島 雫に知られる!!

横島MAXな魔法科生 170

雫、ほのか、深雪の3人は映像通信で、お互いの顔を見ながら、話をしていた。

最初は、ほのかが雫に、横島に恋人疑惑について話をしてきたのだが、雫が一向に信じようとしなかった。

そこに深雪が相談事があるとの事で入る。

深雪の相談とは達也の横島へのバレンタインチョコによる愛の告白疑惑だった。

雫もそんな馬鹿な話を信じてしまっていたが、ほのかがそんなことはいらない事を説明し、深雪も雫も納得し、肩をなでおろす。

そして、いま、最初の話題。横島、恋人疑惑へと戻る。

「そうそう、深雪、リーナが横島さんと付き合っていて、普段からベタくっ付いていると言う噂を知っているよね」

ほのかは思い出したように、横島とリーナについて深雪に聞く。

「ほのか、それはほのかの見間違い」

雫はがんとしてそう言い張る。

「……雫、いいづらいのだけど、付き合っているかどうかは怪しいのだけれど、リーナが横島さんに付きまといているのは本当よ。横島さんの事をボーイフレンドだと言っていたわ。人目もはばからず、堂々と横島さんと腕を組んで離れないし……」

深雪は話しづらそうにはしていたが、映像越しに雫の目を見て話し出した。

「深雪まで……そんなこと……横島さんとその留学生のリーナという子は、会ったとしても間もないはず……だからそんなはずは無い……大丈夫」

雫は先ほどとは違い動揺を隠せないで居た。かなり踏み込んだ情報だったからだ。

「ほのかにも言っていないなかったけど、USNAで記憶喪失の横島さん

にリーナは出会ったと言ってたわ。その間ずっと一緒に居たらしいの、これは偶然としか言いようが無いのだけど。その時からずっと横島さんの事、好きだったみたいなの……」

深雪は申し訳なさそうにその事を言う。ただ、リーナがUSNA軍のスターズである事はこの二人には伝えることは出来ない。

「うそ……なんで!!深雪までそんな嘘を言うの!!横島さんそんなこと言っただけだった!!マリアも言っただけだった!!」

雫は深雪の言っていることは、本当の事だと理解しながらも、現実を受け入れられないようだ。涙目になり、錯乱しだしていた。

「落ち着いて聞いて、リーナは普段大人びているけど、横島さんの前では子供のようになわがまを言ったり、しぐさをするの。私も1ヶ月ぐらいいリーナの事を見てきたけど、その間そんな事は一度もなかった。それが横島さんの前では見ていられないぐらい変わるの。それには私もお兄様も驚いたわ。横島さんがリーナの事をどう思っているのかは、分からないけどリーナの横島さんへの愛情表現というか、なつきかたは尋常じゃないわ」

「深雪……そんなになの、そんなリーナ見たことが無い。……思ったよりも……これは……雫……」

ほのかは自分が思ってたよりも、状況が進行していることに驚き……雫の顔を伺うと、顔色は真っ青になっていた。

「……………横島さんに……知らない子が、そんなの嫌!!ぜったい嫌!!」
「落ち着いて、雫。横島さんがリーナと付き合っているとか、まだ決まったわけじゃないし」

「うん……でも……横島さんの隣に知らない子がいるのは嫌……………」

「……………雫、もうひとつ気になることが……もしかしたら、七草先輩も横島さんの事が好きなのかもしれない……………」

深雪はさらに雫にとってショックな話を切り出す。

「!!……………なんで!!どうして!!」

雫の頭はすでにパニック状態だ。

「雫……………ごめんなさい。その、横島さんが日本に帰ったとき、リーナが横島さんにずっとくっついて付いていたの、それを見た七草先輩はリーナと

言い争っていたわ……それと、お兄様が昨日、横島さんの家に遅くまで居たことはさつき話したわよね。その時も、七草先輩、それとリーナも横島さんの部屋にいたらしいの」

「……七草先輩が横島さんを……それは初耳でも、なんとなく分かるかも」

「……私、日本に帰る……」

涙目の雫はボソッとそんな事を言う。

「ちよつと、雫!!」

「日本に帰る!!」

そう言って、雫の通信が切れる。

「深雪、もつとソフトに言ってあげないと……さすがにそれは刺激が強すぎるよ」

「ごめんなさい。でもこういうことをどう言ったらいいのか分からなくて、雫を傷つけてしまったみたい……」

「うーん。雫もそうだけど、深雪もこういう方面の話はぜんぜんダメだよ。私が今から雫をフォローしておくから……深雪、またね」

ほのかはそう言って、通信を切るのであった。

通信を切ると同時に雫は慌てて、荷仕度を始める。

日本に帰るためだ。

雫のお付きの黒沢さん達が諫めるが、言うことを聞いてくれないようだ。

雫はスーツケースを持って、慌しく、宿泊しているホテルの部屋をでたのだが、そこで、日本から帰ってきたマリアにちようど出くわした。

「ミス・雫・どうしたのですか」

「マリア……リーナのこと教えてくれなかった!」

雫はマリアに涙目で食って掛かるように言う。

マリアはその一言でどういいう状況か大よそ把握した。

「雫……」

「私、日本に帰る!!」

「落ち着いて・話を・聞いてください」

「マリアは雫の両肩を掴む。」

「離して!!横島さんが横島さんが!!」

「雫はマリアに肩をつかまれた状態で暴れだす。」

「……」

「マリアは雫を強制的に、雫の部屋に引っ張り込む。」

「離して!!なんで!!リーナの事、記憶喪失の横島さんの事、知ってるはずなのに、なんで話してくれなかったの!!」

「暴れる雫」

「ミス・雫のため・横島さんのため」

「マリアはそう言って雫を強制的に椅子に座らせる。」

「なんで!!……このままだと、横島さんが取られちゃう!!」

「落ち着いて・ください・それは今は・絶対・ありません」

「なんでそんな事を言い切れるの!!リーナのこと黙っていたのは、リーナにかたいれしているから!!」

「違います・横島さんは・今は女性の・好意を・うけられない・恐怖している・といって・いいでしょう」

「どうということ!!……マリアの言うことなんて!!」

「普段の雫であれば、マリアの言うことを素直に聞いてくれるだろうが、リーナの事を黙っていたことに、マリアを信じる事が出来ないでいた。」

「ミス・雫・マリアは・雫の事も・大切に・思っています・妹のように・思っています」

「マリアはそう言って、雫から手を離し、やさしく微笑んだのだ。」

「マリアは今まで雫の前で、いや、誰の前でも微笑むことは無かった。横島の前でもめつたに無い。」

「雫はそんなマリアをポカーンとした顔をし、じっと見つめていた。」

「雫・落ち着いて・マリアの話・聞いてください」

マリアは雫を優しく抱き寄せる。

「……うん、ごめんなさい。マリアにひどい事言つた」

雫は落ち着きを取り戻し、マリアに素直に謝る。

「マリアも・ミス・アンジェリーナの事を・雫に・わざと言つてませんでした・すみません」

「ううん。マリアが妹の様に思つてくれて、すごくうれしい。私もお姉さんだと思つてる。……その、横島さんの事、リーナとの事話してくれる?……それと、横島さんが女性に恐怖していることも」

「イエス」

そして、マリアは雫に語る。

まずは、リーナと横島の関係についてだ。

まずは、記憶喪失の横島はドクター・カオスの助手扱いであつたため、USNAから軍の人間である年近いリーナが護衛として四六時中付いていたことを話す。

横島の行動で、リーナが横島に好意を寄せていった事も……

その間、雫は黙つて聞いていたが……悲しそうな顔をしていた。

そして、マリアは今の横島について話す。

「横島さんは・今・女性の好意に・恐怖しています。横島さんは・第一高校に・入る前・大切な女性を・二人・相次いで・亡くしました」

「え?……横島さん家族は元々いないって言つてた。氷室の人でもなさそう。昔の恋人……なの?……でも、横島さんそんなそぶりは無かった。いつも明るかった」

「今の・横島さんは・女性の好意を・受けることは・ないでしょう・雫が・横島さんに・好意を持っていることは・重々承知しています・でも・今は・まだ・時期では・ありません」

マリアは雫の疑問に答えず、そのまま話を続ける。

「……横島さん」

「横島さんは・今も・その事を・引きずつており・トラウマに・なっています。それが原因で・本来の・力が・発揮できず・さらには・自分とは・いつ・死んでも・かまわない・と思つているかも・しれません」

「!!……横島さんが死ぬ?死んでもいいと思つている?……そんな

「……そんなの嫌!!……どうしたらいいの MARIA?」

「横島さんは・表面上は・正常に・見えますが・心が・非常に疲れて・います・だから・今は・癒して・あげなくては・なりません。でも・MARIAも・そのすべてを・持ってません。だから・静かに・見守つて・います」

「横島さん……横島さん……会いたい」

雫は俯き、今にも泣きそうな顔で呟く。

「横島さんは・雫を・親しい人だと・思っています」

「ほんとう MARIA!」

雫は MARIA の言葉に顔を上げ、うれしそうに表情がほころぶ。

「はい、妹のように・思っている・でしょう」

「妹……」

雫の表情は一気に沈む。

「ミス・アンジェリーナの事も、横島さんは同じような感覚で、思っています」

「私も妹、そのリーナって子も妹、要もたぶん妹……」

「今は・それでいいと・MARIAは・思います」

「横島さんの・大切な人も・最初は・妹的な・存在でした」

「……で MARIA が言う大切な人とはもちろん氷室絹の事である。」

「それ本当!!」

雫はぱあっと一気に表情が明るくなる。

「イエス」

「あつ! MARIA は七草先輩とも会ったって聞いた! 七草先輩は横島さんのことをどう思っているかわかる?」

「ミス・七草は明らかに横島さんに好意を持っています」

「……そうなんだ。いつの間に……横島さんは七草先輩の事をどう思っていると思う?」

雫はまた、表情が暗くなる。

「妹のような扱いはしてるように見えません。どちらかと言うと、年上のように扱っている風に見えます」

「……七草先輩だけ……でも、横島さんは妹好き! だから、私のほうが

有利！……それだと、リーナも要もいつしよ……」

雫はマリアの一言一言に一喜一憂している。今も考えながら、表情が明るくなったり、暗くなったりしていた。

「……雫・横島さんの・心の傷は・深いです・あせらず・ゆつくりと・だから・今の雫の立場で・横島さんと・付き合ってください・ただ・心労を増やす・行為は・禁止です」

「うん……でも、具体的にどうしたら」

「雫は・今は・この地で・横島さんの・応援をして・あげてください。横島さんは・雫のチョコレート・を喜んでいました」

「本当！」

「イエス……横島さんは・雫を・日本の・悪霊事件に・巻き込みたくな
いという・思いが強いです・大切に思われています・その気持ちを・
無碍に・しないであげて・ください」

マリアは雫をUSNAに残るように諭す。

「うん、そうする。……でも、横島さんが心配」

「横島さんが・ピンチになったら・一緒に・行って・助けて・あげましょ
う」

「うん、マリア！そうする！ありがとう！」

雫は元気よくマリアにお礼を言う。

その頃、リーナは自室で思い悩んでいた。

「タダオ……大切な女性って誰だったの？……その人たちが亡く
なって……タダオは苦しんでいる。自分の死を軽く……死んでもいい
と思っているの？……タダオ……私をおいていかないで……」

リーナは情報端末を手にし、横島と写っている写真を映し出す。

「私はどうしたらいいの、タダオに何をしてあげられるの？」

マリアはいつもの私で良いって言っていたけど……どうしたら
……どうしたら……」

昨日のマリアの話聞いて、改めてその事について考えていたが、

答えが見つからない。

横島のトラウマを克服するすがまったく見えない。

こうしている間も、横島は自分の命を軽んじる行動をとっているのではないかと……そんな思いがぐるぐるとめぐり、何をするのも上の空になっていた。

一方達也は気持ちを切り替え、家を出、九重八雲の道場に行っていた。

その地下にある訓練所で一人、真剣な面持ちでCADを盛んに操作する達也。

「この魔法が完成すれば、奴にも有効だろう。横島……自分一人で簡単に死のうなど思わないことだ」

達也は前々から新魔法の開発を行っていたが、昨日のマリアの話を聞き、完成を急いでいた。

171話 横島 エリカに強力な霊具を渡す!!

週明けの月曜日、放課後の横島自宅マンション16:30。

この日、横島は風紀委員会を非番にしてもらい、本日から開始する協力体制下での悪霊対策、その準備をするために早めに自宅へ帰ったのだが……

「悪霊退治20:00からって言ったよな。お前ら何でこんなに早くから居るんだ？」

「はあ？そんなこと言ってた？……レオ聞いてた？」

制服姿のエリカはリビングのソファーにボスつと我が物顔で座りながら、隣のレオに聞く。

「昼休みに言ってたぞ」

「……なんでレオまでいるんだ？悪霊退治に関係ないだろ？」

「俺も参加するからに決まっているからだろ。俺も一応千葉家門下らしいからな」

レオはテレビをつけながら当然の如くそんな事を言う。

「……で、幹比古。お前まで何でこんな時間から居るんだ？」

「いや、横島が悪霊用の悪霊退散札を分けてくれるって言ってたから、つい居ても立ってもいられなくて……」

同じくソファーに座っている幹比古は苦笑いをしながら言い訳を言う。

「……ただじゃないぞ、今日はデモみたいなものだ。今後はちゃんと六道のショップで買えよな」

「も、もちろんだよ」

「……美月ちゃんまで……、まさか参加するなんて言わないよね」

横島は次に幹比古の横に座っている美月に顔を向ける。

「だ、大丈夫です。みんなに連れられて来ちゃっただけですから、ちゃんと帰ります」

「ほつ、まあ、本来美月ちゃんが一番悪霊退治に向いているんだけど、戦い方とか教えてないしね。それが良いよ。一応これ渡しておくね。」

美月ちゃんも霊力高いから、悪霊に襲われるかもしれない。この札は念のために、持ってて、それと、早めに無人タクシーで帰ること」

「ありがとうございます」

今度はリビングの入り口の方から声がする。

「横島く、人いっぱい掃除できないんだけど、と言うか掃除ってどうやるの？学校と一緒に？」

「香澄ちゃん。先輩に呼び捨ては良くないです」

中学の制服姿の七草香澄はジトツとした目で横島をみて文句を言い、双子の妹泉美は香澄の呼び捨てを注意する。

「なんで、香澄ちゃんがいるの？しかも泉美ちゃんまで……」

「勝手に家を出たペナルティだよ。来たくて来てるんじゃない！何か文句ある？」

香澄はなぜか偉そうにそんな事を言う。その横で、姉の横柄な態度に対して、横島に頭を何度も下げる泉美。

香澄たち双子姉妹は、七草弘一に勝手に家を出たペナルティとして、毎日横島宅に来て、横島の生活サポートを行うように言い付かったようだ。

「聞いてないんだけど……真由美さーん。どういうことですかー？」

横島は台所に向かって大きな声で聞く。

「ごめんね横島君。料理するの、まだ慣れてないから、ゆっくり待ってー」

キッチンから制服にエプロン姿の真由美が野菜やらを洗いながら大きな声で答える。

七草家の強引に決定した横島健康管理請負と真由美自身の横島癒し作戦の一環とし、手料理を振舞うようなのだ。

しかし、なれない料理に集中しているあまり、横島の質問の意図が伝わらなかったようだ。

「はあ、しかも、深雪ちゃんまで来て、いつしよに料理を手伝してるし」

横島は疲れたような顔をして、真由美の横で、手際よく料理の準備

をする深雪を見る。

深雪は、兄達也の監視のため動向しているようだ。先日達也男色疑惑は一応決着は付いたのだが、今後そうならないとも限らないのではないかと、考えたようなのだ。

「横島！ボクの話聞いてるの？どこを掃除すればいいのって」

香澄は頬を膨らませながら横島に詰め寄る。

「ああ！もう、人いっぱいだし、そこらへんで休んでるか、もう帰っていいよー！」

「お姉ちゃんを置いて帰るわけには行かない！」

「お父様にも言われているので、すぐに帰れません。……ところで、マリアお姉さまどこに行かれたのですか？」

そんな事を言い、七草双子姉妹は二人とも帰るつもりが無いようだ。

「はあ、もう好きにして」

横島はうんざりしながら、寝室兼自室に戻るのだが……

「……………達也、おまえ、人のコンピュータで何やってる」

「ほう、お前も直接入力とは驚いたな」

なぜか達也が自室で、勝手に横島の机の上に置いてあるパソコンを勝手に起動させて、なにやら作業をしている。

この時代、キーボードによる直接入力を行っている人間は珍しいが、横島は100年前の人間だ。このほうが、じっくりくるらしい。達也も、もちろん直接入力派だ。

「おい、人のPCでなにやってんだって、聞いてるんだ！」

「ああ、悪霊対策協力体制を円滑に進めるためのツールソフトを組み立てたものをインストールしておいた。これで現状使用している携帯端末のソフトと対応しているため、横島からの指令や連絡事項、悪霊の居場所のフィールドマップなどを簡単に共有できる」

「いや、勝手にするなよ！」

「そうか、ソフトの説明する」

達也は横島の注意など耳にはいらぬかの様に話を続ける。

「人の話聞け!!」

横島は達也に怒鳴る。

「達也、タダオの物を勝手に触るなんて常識が無いわ」

そんな達也の行動を批判するリーナの声が聞こえるのだが……

「そこ！人のベットにもぐりこまない!!」

リーナは横島のベットの上で横島の布団に包まっていた。

「日本は寒いし、タダオの布団はあったかいし、タダオの匂いがするし……」

何故か顔を赤らめるリーナ

「エアコンつけてるじゃないか!」

「い、いざという時にも眠気が出ないように仮眠をとるのも軍人の役目よ」

リーナは横島の布団に包まりながら、こんな言い訳を言う。

「……はあく、で、シルヴィアさんは何でここに?」

横島はあきらめ顔で、次にベットの横のクローゼットを勝手に開けているリーナの補佐官であるUSNAスターズのシルヴィア・マーカーリー准尉にたずねる。

「少……コホン、リーナにお着替えを持ってきまして、集合場所はここだとお伺いしました」

「リーナ！ちゃんと時間言ったよな20:00って、家に帰って着替えなくても十分間に合うじゃないか」

「だって、どうせここが集合場所だし、タダオと一緒にいたいから……、後真由美が余計な事しないか見とかないといけないし、今回はシルヴィもタダオと一緒に悪霊退治するから、ここに呼んだの」

「それはわかった……で、そのシルヴィアさんは、何でクローゼットの中を検査してるんですか?手に持っているファイルはなんですか?」

シルヴィは、何故かファイル状の情報端末を片手に、クローゼットの中身を見ながら何かをチェックしていた。

「リーナがお世話になるのです。横島さんの、趣味志向の把握……い

え、横島さん宅に危険物が無いか事前にチェックしているだけなので、お気になさらずに」

「気になるわー!!」

皆思い思いに横島宅で過ごしている。

もはや、横島宅に横島の居場所がなくなっていた。

はあ、うんざりした表情で、リビングに戻る横島。

「まあ、いいや、真由美さんたちがご飯を作ってもらっている間に説明するか……エリカとレオと幹比古ーマンションの屋上に来てくれ……まあ、美月ちゃんも一応見学する？」

そう言つて、エリカ、レオ、幹比古、美月をマンションの屋上に連れて行く。

もちろん屋上には横島が認識した人間以外入つてこれないように結界を張つてある。

「そんじゃ、悪霊退治の道具だが、まずはエリカから、この前エリカから預かった刀に悪霊退散用の術式を組み込む作業を行ったんだが……」

そう言つて横島はエリカの愛刀紅丸を返す。

横島が千葉家に訪れた際、古くからの剣術の名家である千葉家にも、霊刀の類のものがあるかも知れないと、千葉家が保管している刀を物色したのだが、それに類するものは無かった。

次の方法として、エリカが普段使用している刀と、そして、術式に耐えれそうな刀を何本か預かり、横島自ら術式を組み込み、霊刀を製作することにしたのだ。

「もしかして、うまくいかなかったの？」

「いや、術式を組込んだ霊刀は出来たんだが、ひとつ問題があつた。使用するだけで霊気……サイオンをかなり消費するんだ。対魔術式自体を組み込んでいるため、それ相応の霊気が必要となる。しかし、エリカは霊気……サイオン量が多くはないため……短時間しか稼働できない。すぐにサイオン欠乏症に陥る可能性もある……」

「……そう……でも、それはいつもの事よ。剣術や技術で補うから気にしないでいいわ。これで悪霊とも戦えるつてもものよ……それだけで十分」

エリカは一瞬悔しそうな顔をするが、すぐにいつもの表情に戻る。エリカ自身サイオン量が皆より少ないことは理解している。しかしそれを、剣術と技法で補っていた。

といってもエリカが特別サイオン量が少ないわけでもない魔法科高校に通っている生徒の平均に比べ少ないだけだ。

「いや、それは何とかなった。カオスのジーさんにカスタマイズしてもらったからな。起動自体に靈氣を必要としないようになった。刀自身でもある程度靈力を帯び、使い手の靈氣をマネジメントする機能も搭載している。また、斬った相手からも靈氣を奪う事もでき、術者の靈氣が少なくても、十分戦えるだけのものになった。エリカの場合。剣術や細かい技術が優れているから、かなり力になる。さらに使用者に対して防御術式も展開できるようにしているらしい。ただ……」

「ドクター・カオスにつて!!なによそれ!!防御術式も展開できるつて、なによそれ!すごいじゃない横島!!これさえあれば、今度こそ、皆に遅れをとることはないわ!!ありがとう!!」

エリカは珍しく興奮気味に横島にお礼を言うのだが……

「でもな……その扱いが難しいというか……カオス流つていうか……」

横島は何故か心苦しそうにこんなことを言う。

「さつきも言ったけど、扱いが難しいなんてものは技術で何とかできるわ。私は今までだつてそうやって来た。でも、これさえあれば、私でも十分戦える!!」

エリカはうれしそうに返つてきた愛刀を見る。

「……ま、まあ、その、ちょっと刀抜いてみればわかる」

横島は言い淀む。

横島は何か知っているのだろう。やはり、ドクター・カオスがカスタマイズしている時点で嫌な予感がする。

「ん？別に前と変わったところはないようよ」

エリカはその場で愛刀紅丸を抜くが、一見変わったように見えな
い。

「エリカ、血を一滴柄に含ませてくれ……それでその刀は起動する」

横島はエリカにそんな事を言う。

「なによそれ……まあ、いいわ」

エリカは手馴れた手つきで刀身の根元で、すつと親指の薄皮を切
り、血を一滴出し、柄にしみこみます。

すると……紅丸の刀身が一瞬淡い赤色に光る。

『んん？おい、この娘っこがマスターか？ どうなんでい横島の旦那

!!もしや旦那の愛人か?』

「か……か、刀がしゃべった!?!」

紅丸を構えるエリカは素っ頓狂な声を上げる。

そう紅丸から江戸なまりの男性の声が聞こえるのだ。

横島は頭痛がするかのように頭を抑える。

「ははっ！なんだそりゃー！」

レオはその様子に笑っていた。

「なにそれ、刀がしゃべってない？」

「しゃべる刀？もしやインテリジェンスソード？」

幹比古と美月はその様子に驚くが、美月はどうやらその刀の名称が
わかるようだ。

『刀がしゃべって何が悪い!!このべらんめえ!!』

紅丸は皆に悪態を付く。

「な、何よこれ!!よ、横島ーこれ、どうすんのよ!!」

「喜べエリカ……それが、新生紅丸……いや、本人曰く、紅鯨丸。新し
い相棒だ。美月ちゃんと言ったとおり、インテリジェンスウエポン。
意思のある武器、まあ、この場合は刀か……、カオス特製カオス式A
Iを搭載させ、さらによくわからん術式を放り込んだ擬似インテリ
ジェンスソードらしいんだ。自ら意思があるため、刀自身が霊力コン
トロールが可能になり、マネジメントを行う。エリカの血を与えるこ

とで、エリカとリンクし、数倍の力を発揮するらしい……………らしいが……………なんかすまん」

『おう、娘っこ！おめー、キレーな顔に似合わず、なかなかの使い手じゃねーか！まあ、気長によろしくな!!』

「ええー！ー!!どう扱えばいいのよこれ!!」

「プクククツ、お前、プクツ…扱いが難しかろうが、プクツ、技術でなんとかするんだろ？ダメだー！ー！我慢できん。はー！ー！はっはっはー！ー!!」

レオは笑いをこらえながらエリカの揚げ足を取っていたが、ついに我慢が出来ずに豪快に笑った。

「レオ!!あんた!!覚えてなさいよ!!……………横島ー!!紅丸に何てことするのよ!!」

「だから、すまんって……………でも、これでエリカもかなり手ごわい悪霊、いや悪魔も倒せるつてもんだ。実際その紅鮫丸と完全にリンクすると、紅鮫丸の能力がエリカにも使える。要するに悪霊を見ることが見分けることも可能らしい。カオス曰く、最高傑作らしいぞ」

『横島の旦那、褒めても何も出ませんぜ!』

「うううう……………これで、悪霊や悪魔を倒せるんだったら……………刀がしゃべるくらい……………」

エリカは紅鮫丸を携え、羞恥で顔を真っ赤にして、プルプルと震えていた。

「エリカちゃん大丈夫?」

美月は苦笑しながらエリカに労わる様に聞くが…………

「大丈夫じゃないわよ!!今、一生懸命自分に言い聞かせてるの!!」

まだ、大丈夫ではなかったようだ。

!!
さすがは世界の変態錬金術師ドクター・カオス!!期待を裏切らない

性能はすさまじいのだが、なにか、とんでもない副作用を待っているはある意味必然なのだ!!

この後、皆に霊視ゴーグルと呪縛ロープの扱い方を説明する。

レオにはとりあえず、破魔札ショットガンの扱いを教え、後日、レオに合ったものを用意することにした。

幹比古と一応美月には破魔札などの各種悪霊退散札の扱いを説明する。

幹比古は目をキラキラさせながら説明を聞き、そして札を手にする
と、子供のように喜び、試しに破魔札を適当な目標に向かって飛ばし、
発動させる。

さすがは古式魔法の名家吉田家の次男。札の扱いは手馴れたもの
だ。協力体制のメンバー中で一番、当てにできそうだ。

美月もちゃんと発動させることが出来たのだが。まあ、まともに飛
ばせはしないだろう……

172話 横島、リーナと達也に霊具を渡す!!

エリカにとんでも刀（擬似インテリジエンスソード紅鮫丸）を手渡した後。

なぜか、横島宅に集まっている全員で夕食を取ることになった。

真由美と深雪が食卓に出したものは、肉じゃが、豚汁、ほうれん草の胡麻和えと茶碗蒸しと意外にも和食だった。

しかし、メインに肉じゃが、そして汁物は味噌汁ではなく、食べ盛りの高校生に大人気がつり系の豚汁をチョイス。男心をくすぐるラインナップとなっている。何となく弘一のアドバイスが見え隠れしているようだ。

真由美の料理は深雪に手伝ってもらったとはいえ好評であった。練習した甲斐があったようだ。

横島宅は合計12人が一同に会したため、リビングには入りきらず、寝室にまたがり食事をとる。

横島もなんだかんだ不平を言っていたが、皆でとる夕食を楽しんでいる様だった。

食事を済ませた後、リーナとシルヴィと達也と深雪を屋上に連れて行く。

エリカ達と同じように、悪霊対策の霊具の受け渡しと説明をするようだ。

「タダオ、なんで達也と深雪と一緒になの？」

「うーん。まあ、このメンバーはみんな戦闘経験は豊富だし、渡す霊具も似たようなものだから、一気に説明しようと思ったただけなんだけど……」

「俺はかまわん」

「お兄様にお任せします」

「……タダオがそう言うなら」

リーナは不満そうではあったが、しぶしぶ了承する。

まあ、何度となく、煮え湯を飲まされた達也と深雪が一緒なのは、本意ではあろう。

「それじゃこれをみんなに渡す。すでに、真由美さん達やエリカ達には説明済みなのだが」

横島はそう言つて、ジュエラルミンケースから、スキーなどで使用するような重厚なゴーグルを皆に渡す。

「これは何だ？」

「霊視ゴーグル。霊能力者でもなくとも悪霊が見分けられる代物だ。霊気の波動を読み取る装置……まあ、簡単に言うると霊気……サイオン量もある程度視覚的に分かることが出来る。これで悪霊の判別と共に悪霊が持つ、霊力、霊圧……悪霊の強さや成長具合が判別可能なんだ。まあ、とりあえず装着して右のスイッチを押してくれ」

「こんなコンパクトなもので、サイオン量が測れるだと……霊力、霊圧とは……」

「サイオン量がこんな小さなものでわかるの？」

達也もリーナも同じ様に多少驚きながら、霊視ゴーグルを装着する。

「!!なんだ……人のシルエットにぼんやりと色が付いているように見えるぞ」

「お兄様が一番輝いて見えますー!」

「本当だ。達也が一番色が濃く見えるわね」

達也、深雪、リーナは装着し霊気を見ることが出来たようだ。

「それが、霊気、サイオンを見ている状態だ。達也が皆と比較して濃く見えるということは、内包しているサイオン量が一番多いということだ」

「!!」

リーナとシルヴィはそのことに驚く。

元々、リーナ達は達也を『灼熱のハロウィン』を起こした戦略級魔法師ではないかと疑いを掛けていたのだ。その疑いがますます深まるのはいたし方がない。

「……なるほど、……横島、お前は陰陽師で霊能力者だといったな、この装置無しでそれが判別できるのか……」

「ああ、俺が普段行っている霊視は、内包している霊気と霊気を持つそ

のもの力、靈氣を使って発揮できる力、靈圧と靈力もはつきりと判別が出来る。だから魔法を放つ前に俺は見る事が出来る」

「え？……タダオ……そんなことが……」

「……」

「そんなことが可能なんですかお兄様？」

リーナ、シルヴィ、深雪はその事に驚く。

「……やはりか、お前の前では、魔法師は丸裸というわけか……たまたまのものではないな」

「でも、横島さんは色が付いているようには見えませんが……」

深雪は靈視ゴーグルを装着したまま、横島を見ていた。

「それは故意に靈氣を調整しているから……よつ、これで俺のことがくつきり見えるんじゃないかな、悪霊もこれと同じような感じに見えるはずだ」

横島はそう言つて少し靈氣を開放する。

「何をした横島、全身が青白く強く光っている。ぼやつとではなく、くつきりとだ」

「靈氣をコントロールして、全身に均一に靈氣をまわし放出しているからな」

「……お前、サイオンを自由に、いやプシオンさえ自由にコントロールが出来るのか？」

達也は先ほどから驚きっぱなしだ。

その達也の言葉に呼応するように、リーナ、深雪とシルヴィも驚いた表情をしている。

「陰陽師を名乗る人間はこれくらいのは出来て当たり前……まあ、俺のことは後回しで、このゴーグルは靈的構造物や悪霊や悪魔に對して、その造形をはつきり映し出すように調整されていて、ターゲットマークが付くから、誰でも判別可能だ」

「陰陽師とはとことん規格外だな。氷室家が現在も独立した存在で居られるわけだ。……それとこれだ。……こんな物が存在していたとは……これを応用すると魔法師の戦術論が一変してしまう可能性があるな」

達也は霊視ゴーグルを外し、それを手にしながら、うなるように言う。

それを聞いたシルヴィは唾を飲み込む。シルヴィも達也と同じ意見だからだ。

日本にはまだ、知られていないすさまじい力を持った存在(陰陽師)が多数居ることになる。しかも、霊視ゴーグルなどというものが、日本にだけあると思うと……ますます、魔法関連について、USNAと日本では格差が生まれるのではないかと危機感を持ったのだ。

「いや、これカオスのじーさん作だし、貴重な物を使ってるから、渡すのはこれだけ」

「やはり……ドクター・カオスカ、なんて物を作るんだ」

「まあ、今は、悪霊退治用って事で考えてくれ」

「……………」

シルヴィは本国上層部にドクター・カオスと交渉し、この霊視ゴーグルを多量に手に入れるよう進言することを真剣に考えていた。

「これで、悪霊や悪魔が確認できるから……まずは第一階クリアつととこだ。次は攻撃手段なんだが」

横島はそう言つて、手に持っていた幾つかのケースをのひとつを取り出し、リーナに歩み寄る。

「そんじゃ、まずはリーナへこれ」

木製のケースからアンティーク調の装飾が施された短銃を一丁とりだす。

「私に？……大分古いタイプの銃ね」

「ああ、これはその昔に、対悪魔用に実際使用されていた銃だ。神々の聖なる力が宿るとされる銃で、俺も鑑定して見たが、かなりの力が宿っている。これと同じものを作れと言っても、もう無理じゃないかな。リーナは銃を扱えるから丁度いいかなと思って、大概の悪魔に効果が出る。通常弾でも効果を発揮するが、術式を刻んだ弾を数種類用意しといた。悪魔の種類によって効果が異なるため、使い分けること

で、さらに効率的に倒すことが可能だ」

「対悪魔用銃……こんなものが存在するんですね」

シルヴィは驚きと共に感心したように言う。

「ほおう」

達也もシルヴィと同感だったようだ。

「これは一点ものだ。限定的ではあるけど、いわばレリックに匹敵する代物。試してみたが威力は俺が知っている限り、最上級の対魔銃だろう。しかも霊力：サイオンを込めなくとも、使えるため、この銃で撃った弾が悪魔にあたりさえすれば、一般人が撃ったとしても、絶大な効果を発揮する」

「そんなに貴重な物、私にいいの？」

「ああ、リーナに使ってほしい。リーナだったらうまく使ってくれるだろう……知らなければただの骨董品の銃だし、どうせカオスのじーさんの倉庫に眠ってた奴だしな」

「ありがとう。タダオ!!」

リーナは思わず横島に抱きつく。

「シルヴィアさん、この弾なんですけど、俺が術式を刻んだ弾なんです。通常の銃で取り扱える代物です。リーナに渡した銃で撃つよりも効果は低くなりますが、それでも、十分効果的です。これがあれば、悪霊本体を取り逃がすことなく、捕縛することも可能です。術式起動に簡易的に俺の霊気を付与しているため、長期間放置すると、霊気が抜けてしまいます。霊気が抜けても弾は発射されますが、術式は起動しないため、悪霊に効果が出なくなりますので、注意してください」

横島は、リーナに抱き着かれたまま、シルヴィに向かって説明する。「……その、横島さんは錬金術師でもあるのですか？このような代物まで作れるなんて……」

シルヴィアは横島が差し出した弾を受け取りながら、驚いた顔を向ける。

「俺もこの弾を使えばいいのか？」

横で聞いていた達也はその弾を物ほしそうに見ていた。

「まあ、そう言うことになるが、さつきのリーナに渡した銃はあれだけだし、達也には別のものを用意した」

横島はもう一つのジェラルミンケースを開けると、近代的な形をした短銃が収納されていた。

「俺にも用意してくれたのか……これは短銃形状の特化型CADか？」

「半分正解だ、これはドクター・カオス謹製の対悪魔用最新型のCAD一体型銃だ」

「ド……ドクター・カオス謹製だ!!」

達也は先ほどよりさらに大きく驚きながら、銃を手にする。

「威力や攻撃力を重視したリーナの銃とはまったく別の使い方をする。銃という役割だけでなく、情報戦や戦略補助を重視したものだ……ただ……」

「ほう、俺向きだな……ただ、どうした？」

達也は珍しく興奮気味だ。

「扱いが非常に難しい……」

もはやカオスが関わった物は扱いが難しくなるのはいたし方がないだろう。

「ここで言う難しいとは、使い方が難しいというわけではないことは、お分かりだろう。」

「なんだ、そんな事か……使いこなして見せる」

「そ……そうか……」

「その対魔用CAD一体型の銃は、霊視ゴーグルとリンクさせる事で力を発揮する。CADで魔法式を解し、霊体や悪霊や悪魔の霊気の波長を探查するソナーを打つことが出来る。それによって術者の半径100メートルから500メートルの範囲で悪霊を見つけることが出来るらしい。俺には詳しい仕組みはわからないけどな。そのデータを下に敵をトレースしながら術式弾を選択し悪霊に放っていくという感じだな。さらに、他の霊視ゴーグルにもその情報がリンクされる。情報戦用の霊具とはよく言ったものだ」

「何だと！そんなことが可能なのか!!」

「すごいですね。そのような便利なものがあるのですしたら、私達にも提供してくれませんか?」

シルヴィもその対魔用CAD一体型銃の有用性を十分理解したように、早速横島に分けてもらおうように言う。

「いや、これ、カオスのジーさんが思いつきで一日で仕上げた試作品の上に達也専用調整しているんですよ。たぶんジーさんか、達也がいしか扱えない。もちろん俺もね。サイオンを多量に消費するんで……使いどころを選んじやうですよ。まあ、改良して汎用性を高めたら別ですが今はこれだけなんです」

横島はシルヴィに説明した後、じつと達也を見つめアイコンタクトをする。

「……………そう言うことか」

達也は小声でつぶやく。

横島の意図が分かったようだ。

この場ではいえないような事項で、カオスと自分ぐらいしか使えないような魔法式……そうなると分解・再成魔法が関わっているのだろうと……

達也は了解の意図を示すために、横島に見つめ返す。

横島と達也は短時間だけお互い見つめ合っていたのだが……

「ちよつとタダオ！達也となに見つめ合ってるのよー！」

「お兄様?……まさか!」

リーナは剥れた顔で横島に聞き、深雪はまたもやあらぬ疑いを掛けているようだ。

「まあ、あとはマリアが近日中に日本に来るらしい。細かいCADの調整はその時にするっていったぞ」

「マリアさんがわざわざ来て、調整してくれるのか……ありがたいことだ。そういえば横島、この対魔用CAD一体型銃は俺専用と聞いていたが、俺の生体情報等はどうしたんだ?」

達也は若干うれしそうな口ぶりを見せる。

「ああ、この前、マリアが来たときに、帰り際、マリアが別れの挨拶と称して、抱きつかれただろ。そのときに、お前の生体情報も同時に収集していたんだよ。その後マリア自身がこのCADを調整していたから間違いない」

「お兄様！どういうことですか？」

深雪がブラコン嫉妬オーラを噴出させる。

「い、いや、あれは別れの抱擁だ。ただの挨拶に過ぎん」

達也は慌てて、言い逃れをする。

「いいよなく、達也は優しく抱きつかれて、俺なんて、毎回さば折だぞ……」

「横島！余計なことを」

「へへ、達也がマリアをねへ」

リーナはニヤニヤしながら達也を見る。

「お兄様！帰ったらじっくりお話を聞かせてもらいます」

どうやら達也は今夜も、深雪の嫉妬説教を免れないようだ。

「……話を戻す……横島、扱いが難しいというのはサイオンを多量に消費するためだけか？」

達也は深雪の言葉をスルーし、話題を元に戻す。

「いや、そのなんだ……ま、まあ、とりあえず起動させてくれ……」

達也は対魔用CAD一体型銃を構え、起動させる。

「魔法式は理解した、これで探査ソナーを？いや、何か要求してきたぞ」

霊視ゴーグルから、なにやら不可解な要求をするメッセージが表示されていた。

「あつ……そのな、言いにくいんだが、一部サイオンを霊力に術式変換する機構になっているらしいんだ……霊気というのは感情によって大きく揺れ動く。術式変換をする際に、霊気の揺れ……が必要らしい」

「どういうことだ？」

「……達也が心に抱いている大きな感情を叫べということだ」

「なんだそれは？……どうということだ？」

「要するに言霊だ。特に愛憎などの言葉は揺れが激しい。効果範囲もこの揺れに大きく作用する」

「愛憎の言葉だと？」

「やはり達也にはそれがネックか……そうだな、うーん……達也だったらこの言葉だな……俺が言った言葉を気合入れて叫んでくれ、それで起動する……『深雪、愛してる』……だ」

この対魔用CAD一体型銃に備え付けられている悪霊探查機能は、自らの大きな感情を言葉にする事で起動するのだ。そして、その感情が大きければ大きいほど、探查範囲は広がる仕組みになっている。

横島は、達也が見せる感情のほとんどが妹である深雪に対しての愛情だと感じていたからこそ、この言葉をチョイスしたのだ。

「な……何だ？なぜそのようなことを叫ばなければならぬ！」

「シスコンのお前だったらこれが一番だ！」

「まあ、横島さんだったら……お兄様！是非、おやりになつてください！これも悪霊退治の一環です」

深雪は顔を赤らめながらうれしそうにもじもじしていたが、はっと何かに気が付いたかのように鼻息荒く達也に迫る。

「はあ……分かった。……『深雪、愛している』」

達也はCAD一体型銃を構えながら、あきらめた表情をし、棒読みする。

「!?横島、いうとおりにはやったが起動しないぞ」

達也の霊視ゴーグルには、言霊レベル起動値以下と表示される。

「気合がたりん!!」

「そうです。そのような事では伝わりません！」

横島と何故か深雪にまでダメだしを食らう達也。

「くっ、次から次へと……『深雪、愛している』」

先ほどよりは声も感情も入っているようだが……

またしても、達也の霊視ゴーグルには、言霊レベル起動値以下と表

示される。

「何をやってんだ達也、いつものシスコンぶりはどうした!!」

「そうですね、お兄様!いつもの通り、おっしゃってください!!」

「…………『深雪!愛しているぞ!!』」

達也は、うんざりしながらも、いつもより大きな声で投げやり気味に叫ぶ。

すると、CAD一体型銃を解して、達也から霊気の波動(ソナー)が円状に広がる。

そして、霊視ゴーグルには起動成功と探査範囲が表示される。

今ので約半径110メートルといったところだ。

「おお?起動したようだな達也!!」

「さすがです。お兄様!深雪への愛を感じます!」

達也は、明らかに納得の行かない顔をしていた。

「横島……もしや、毎回これをしなければ探査できないのか?」

「まあ、慣れれば、言葉にしなくても大丈夫だと思うが、最初の方はあきらめてくれ」

「いいえ、お兄様!まだ、足りません。横島さんは気合や感情で探査範囲が伸びるといっておりました。お兄様であれば、もっと出来るはずです!」

「ドクター・カオスもとんでもないものをよこしてくれたものだ……」

達也は頭痛がするが如く頭を抑える。

ドクター・カオスの試作品やワンオフ作品には注意が必要だ。何らかの副作用は必ずといっていい程、付随してる。

「横島さんありがとうございます!こんなにすばらしいものを持ってきていただいて!ドクター・カオスに是非、お礼を言っておいてください。お兄様も非常に喜んでいると!本当にすばらしい発明品ですわ!さすがは天才錬金術師!!」

喜んでるのは深雪ばかりだった。

シルヴィはこの一連の漫談を見て、やはりあの対魔用CAD一体型の銃は不必要だと考えを改めていた。

リーナはあきれた顔で深雪と達也を見ていた。心の中で、こんな二

人にどうして負けたのだろうかと思いつながら……

この後、上機嫌の深雪に横島は霊体ボウガンを手渡す。これは氷室家作の一品だ。

銃よりも射程が短く、威力は低いのが、取り扱いが容易で汎用性が高い。地面などに矢を突き立てることによって、結界なども張る事も出来る。

今の深雪にはそこまでの技量はないが……横島の見立てでは、深雪にも霊能者の素質があるようだと感じていた。

この後、達也は対魔用CAD一体型銃を一人で色々と『言霊』を試してたのだが……

一番、探査範囲が広がった言葉は『癒しをありがとう。マリアさん』だった事は深雪には内緒である。

173話 横島 悪霊退治順調。歩く厄災来襲!!

悪霊対策の協力体制を開始してから約1週間が過ぎる。

その間、思ったよりも連携がうまく取れ、順調に悪霊を捕らえる事が出来ていた。

しかし、悪霊の出没範囲はこの東京を中心とした広範囲に蔓延っていることが分かってきたのだ。

この東京から横浜に掛けて、1週間で悪霊に取り付かれた人間を捕らえた人数は50人にも上ったからだ。

横島は改めて色々と考えを改めなければならぬと感じていた。

悪霊たちは連携を取っているにも関わらず。なぜこれほどにも容易に捕らえる事が出来ているのか？目的もはっきりしない。さらに、ダンタリオンの配下と思われる青い眼の悪霊は、まだ一度も出くわしていないのだ。

そして……今晚も……

「俺のこの手が光ってうなるっ!!勝利を掴めと轟き叫ぶっ!!爆ー熱!!
ゴトオ!!ファイ○ガーーーーー!!!」

気合の掛け声と共に突進する。彼の左手をスツポリ覆う巨大な金属製の小手がグローブのような物の手のひらが真っ赤に輝き、そして、すばやく突き出した左手は悪霊に取り憑かれた人間(悪霊憑き)の顔を掴むように捉える。すると、その悪霊憑きは体中を痙攣させる。

「ヒートウ!!エンド!!」

さらにヒートアップし雄叫びのような叫び声あげると共に、悪霊憑きを捉えていた輝く手のひらが爆発するように激しく光り、痙攣していた悪霊憑きは断末魔と共にぐったりして動かなくなった。

どうやら、悪霊を憑依した状態でしとめることが出来たようだ。

「レオ!!うるさい!!あんたはいちいち叫ぶな!!」

「仕方ねーだろ!!この対魔用CAD一体型ブーストナックルは!!気合入れて叫ばないと霊力が発動しねーんだから!!」

どうやら先ほどの暑苦しいほどの雄叫びと、ド派手な攻撃を行っていたのはレオのようだ。

レオの霊具はドクター・カオス謹製、対魔用CAD一体型ブーストナツクルだ。達也の対魔用CAD一体型銃をレオ用に再構築したもののだが、発動するにはやはり、感情を大きく入れないといけないらしい。ちなみに、この言葉はカオス自身がチョイスしたものらしい。

この他にも、防御技で手のひらから障壁展開する『プロ○クトシエーリー○!!』あたり一体を巻き込む必殺技の『ゴル○イオンクラツ○ヤーリー!!光になれーリー!!』等がある。

ちなみに『超級○王電○弾』は無い。あれは人間をやめないとけないだろう。

『娘っこ、こちとらもうかうかしてらんねーな！おめーも、あのにーちゃんを見習って気合を入れろ』

エリカが構えている愛刀紅丸改めしやべる刀『インテリジエンスソード紅鯨丸』はそう言つてエリカに発破をかける。

「分かつてるわよ。紅公!!ここからよ!!」

エリカは自らが構えている紅鯨丸を紅公呼ばわりして、返事をする。

「はっ、お前も人のこと言えないな！傍から見ると刀に語りかけてる痛い女に見えるぞ!!」

「うるさい！あんたの方こそ、いちいち暑苦しいのよ!!」

「何を！」

「エリカにレオ！争っている場合じゃないよ！まだ、逃げている悪霊憑きを追いかけないと!!」

幹比古はこのチームのリーダー役を務めている。

実際、要所要所での幹比古の術や対魔札が大いに貢献している。

それだけでなく、二人の仲裁を毎度行っていた。気苦労が絶えないことだろう。

「2体目も仕留めたわ。悪魔化する前でよかった」

「ああ、しかし、かなり手ごわい相手だったな、被害者を六道家に一応受け入れ準備をしてもらおうか」

「そ、そうね。仕方が無いけど、その方が良さそうね……私達も大分、慣れてきたわね」

真由美は六道家の名前に一瞬ピクツと反応する。

「そうだな。この破魔札ショットガンとフアランスの相性もかなりいいようだ。確実にしとめることができる。10日間前には考えられないほどの成果だ」

「横島君のおかげね」

「孝次郎さんの方はどうなったか？」

「見失ったそうよ」

「そうか……」

こちらは真由美と十文字克人でコンビを組んでいたようだ。

真由美の兄孝次郎も先ほどまで一緒であったが、逃げた一体を追尾していたようだ。

「ふー、どうやら倒したようね」

リーナはほっと肩をなでおろす。

「ああ、悪魔化……基礎能力が人間離れしている上に、人間の機動とはまったく異なる動きをする。戦い方も変えなければならぬな」

達也は今の戦闘を振り返る。

「どうやら、悪魔化した人間……悪魔と対峙し勝つことが出来たようだ。」

「そうね。……でも何とかなった」

「ああ、そうだな。この対悪魔用CAD一体型銃が無ければ、危うかった。悪魔の性質を把握し、適切な弾丸を選択してくれる。さすがはドクター・カオスの装備といったところか……」

達也はすでに、愛の言葉を叫ばずとも、このCAD一体型銃の悪霊

探査ソナーを扱う事が出来るようになっていた。大分悪戦苦闘したようだが、毎回あのような恥ずかしい宣言をするよりはましだろう。それさえクリアすれば、かなり優秀な対魔用霊具なのだ。

「お兄様。横島さんが居なくても、私達だけで何とかなりましたね」
愛の言葉を叫ばなくなった達也に残念そうな表情をする深雪。

「ああ」

「こちらの被害状況は？」

リーナは副官であるシルヴィア准尉に確認する。

「無しです」

シルヴィはリーナの質問に、後ろに控えているスターズ隊員4名を見ながら簡潔に答える。

「そう、あれだけの攻撃を受けて、被害無し……このタダオの対魔防御用の護符はすごいわね」

リーナ達の前に、異形の人間が倒れている。額には第三の目が開かれ、露出した肌からは、刺青のような唐草模様に似た文様が浮き出ている。

そのものは人の形をしていたが、戦闘時には文様と第三の目を金色に輝かせ、CAD無しに青い炎や金色に近い炎の攻撃を無尽蔵に繰り広げ、さらには、空を鳥やこうもりのように飛び回っていたのだ。

霊視ゴーグルで確認すると、黒い悪魔のような翼が背中から生えており。さらに、長い尻尾を確認することが出来た。

まさしく、悪魔化した人間のなれの果てだった。

達也と深雪、そして、リーナ、シルヴィが率いるスターズ4人と共に、その悪魔化した人間を倒すことが出来た。

最初は、奇襲を受けた上、相手が人間とは思えない奇怪な動きをし、空を自由に飛びまわりながら攻撃を繰り返して出してくるため、戸惑いと驚きで、押され気味ではあったが、達也の指示の下、陣形を組みなおした。達也のCAD一体型銃で情報収集を行い。悪霊の行動パターンと弱点を算出。シルヴィ率いるスターズでけん制、及び防御を主体し、深雪の霊体ボウガンと達也のCAD一体型銃でダメージを与えつ

つ、リーナの対悪魔用の神聖銃で止めを刺したのだ。

既に、悪魔化した人間とはこの一週間、横島のフォローが入りながらではあるが2体ほど倒していたが、今回は横島無しで倒すことが出来たことは大きい。

さらに、奇襲を受けた際、スターズメンバーの二人は致命傷ではないかと思われる攻撃を受けていたのだが、終わってみると皆無傷であった。

どうやら、横島が悪霊退治に出動しているメンバーに渡している護符が効力を発揮したようだ。

肝心の横島というと……

「あのー……離してくれませんか？」

「ええ、どうしましょうか？……横島くんが……芽衣と結婚してくれたら……離してあげる……」

「え？……それは……」

横島は東京都心近くにある公園で、六道芽衣子のリュウの式神アギラに体を巻きつかれ、ベンチの上に座らされている。頭の上にはヒツジの式神ハイラが乗っかっており、ウサギの式神アンチラが横島のひざの上にちよこんと座っている。

もはや、横島は一步も動けない状態になっていた。

六道家54代目当主六道芽衣子は煌びやかなドレス姿でインダラというウマの式神に横乗りになって、笑顔で横島を見おろしていた。「でも……、まだダメですよ……、ダメージが抜けてないから……」

「何のことですか？」

「芽衣は……横島くんのことだったなら何でもお見通しなのよ……」

「……………」

「横島くんは……過保護過ぎね……でも……、そういうところは芽衣は好きよ……」

「……皆には言わないでください」

「ええええどうしようかなええええ、結婚してくれたらええええ良いわ
ええええ」

「勘弁してください。というか、芽衣さん。悪霊退治に参加しないん
じゃなかったんですか？」

「ええええええ？私はええええ横島くんとお話に来ただけよええええ」

「しかも、毎度こんなに式神を引き連れて、人目に入ったらどうするん
ですか？」

「大丈夫よえええ公園には結界を張ってるからええええ」

「あのえええ、そんな事をしたら、今悪霊退治に行っている仲間が、戻っ
てこないんですけど」

「いやえええ、芽衣はえええ横島くんと二人つきりがいいのええええ」

芽衣はずつと、にこやかな笑顔を絶やさない。

どうも横島は芽衣子の前では自分のペースを崩されがちになるよ
うで、うまく言い負かされるようだ。

「芽衣さん……なんで俺にかまうんですか？」

「だって、芽衣はえええ、横島くんの事を気に入ったんですものえええ男の
人でこんな事初めてなのええええ」

芽衣子はインダラから降りて、横島が式神に拘束されながら座らさ
れているベンチの横に座り、そつと横島の頭をなでる。

「はあ……まあ、いいです。結界は解いて下さいね」

「ええええええ？」

「いいですね！」

「クスン、横島くんの意地悪ええええ」

芽衣子はそう言って、パンと手を叩いて、公園に張ってある結界を
解く。

するとエリカたちが最初に戻ってきた。

「横島ー！今日は3人倒したって、げつ、六道家当主！」

「うわっ、式神もう出てるよ」

「横島の奴、すでに式神の餌食かよ」

エリカ、幹比古、レオは芽衣子と式神の存在に気が付くと、驚くと同時に一歩後ずさる。

「あらあら〜、皆さん〜ごきげんよう〜」

芽衣子は笑顔のまま挨拶をする。

「うっ、こ、こんばんわ。芽衣子…お姉さん」

エリカは苦虫をつぶしたような顔をし、挨拶を返す。

「エリカちゃん、よく出来ました〜やっぱりエリカちゃんはかわいいわ〜」

その間、幹比古とレオはさらに後ずさり、この場から離れていった。どうやら、この3人、前回芽衣子に遭遇し、式神の洗礼を受けたようだ。

そして……

「横島くん。ごめん一人取り逃がしたわ。……六道芽衣子……」

「うっ、六道芽衣子……歩く厄災……」

「六道家当主とその式神……」

真由美、孝次郎、十文字克人達もこの公園に戻ってきたのだが、芽衣子を見かけるとやはり、一歩下がる。

「あら〜、そちらは〜十師族の〜、夜なのに大変ね〜」

「これもこの地を守護する一族として、当然の勤めです。お構いなく」
しかし真由美は、一度は一歩下がったが、臆することなく近づいていく。

「あら〜、六道も〜守護する一族ですよ〜1200年前から〜
〜、どっちが先なんでしょうね〜」

「……横島くんを解放していただけませんか？本人も嫌がっていますよ」

真由美は横島と芽衣子が座っているベンチの前まで歩み寄る。

その間、孝次郎と克人はもちろんこの場を離脱する。

やはり、彼らも前回、六道家の洗礼を受けたようだ。

「ええ？そんなことないわよね〜横島くん？邪魔をしているの

は、七草のあなたよ〜芽衣は〜、今、横島くんに結婚を申し入れていたの〜」

芽衣子はそう言つて、式神で拘束されたままの横島の頭をなでる。「!!……………」の行き遅れ」

真由美は顔をひくつかせ、聞こえないぐらいの小声で言う。

「何か〜と言いました〜？お姉さんは〜もう、横島くんというフィアンセが〜いるから大丈夫よ〜」

「……………誰がよ!!」

そして、さらに…………リーナたちが戻ってくる。

「ああ!!あの年増!!タダオにまたちよっかいを!!」

リーナは横島の頭をなでている芽衣子を確認し、芽衣子に襲い掛かる勢いで加速魔法で一気に迫る。

「…………深雪!危険だ。即時撤退を」

「はい、お兄様」

司波兄妹は芽衣子を確認した瞬間離脱を図る。

「スターズは退路を確保、速やかに撤退を!」

シルヴィは他のスターズメンバーに迅速に指示をだす。

やはり、ここに居る全員が六道家の洗礼を受けたようだ。

六道家の洗礼とは…………もちろん式神暴走の事である。

3日前程、インダラに乗った芽衣子が突如横島達の前に現れた。

そして例の如く、皆の前で横島に強引に結婚を申し込んだのだ。

それを聞いたリーナと真由美が猛反発。

あろう事かリーナがストレートに、真由美がグチグチと芽衣子に突っかかってしまったのだ。

爆発物や危険物は慎重に扱わなくてはいけないのは世の常なのだ
が…………

当然、責められる芽衣子は、泣きながら感情を爆発させてしまい
…………式神暴走（百鬼夜行）が顕現されてしまったのだ。

当時集合場所だった街中にある大きな廃ビルが粉々になる大惨事
となる。

ちなみにこの廃ビルは、元Yクラフトコーポレーション(厄珍堂)である。

幸いなことに、横島の護符のおかげで、皆は式神暴走の巻き込まれはしたが、ダメージを食らわずに済んだ。

しかし、その恐怖は十分に精神に刻まれたことだろう。

式神に拘束されてベンチに座ったまま、これから起こることに悟った表情したあきらめ顔の横島と、その横に笑顔で座る芽衣子。

その前には、一応笑顔だが口元をヒク付かせている真由美と明らかに怒りの形相で芽衣子を睨んでいるリーナが立っている。

エリカは取り残されていたが……

『娘っこ！チャンスだ！巻き込まれないうちに撤退だ』

「わかったわ紅公！」

そうして、エリカとその愛刀紅鮫丸と共に、この場を脱兎の如く撤退したのだった。

174話 横島 達也に気づかれる!!

「あらあら〜、二人とも怖い顔をして〜どうしました〜?」

「どうしたも、こうしたも無いでしょ!タダオを開放しなさい」

「横島くんを放してください」

都心の公園のベンチで煌びやかなドレスを着た妙齡の女性、六道家54代目当主六道芽衣子が座り、その前に若い女性二人が立つ。

一人は金髪碧眼、長い髪をツインテールで束ねる美少女、USNAスターズの総隊長アンジェリーナ・シールズ、もう一人は身長は低いがスタイルがいい長い黒髪の美少女、十師族七草家長女七草真由美。それぞれ、芽衣子に突っかかっていた。

この口論の原因である少年横島は、芽衣子の横に座っているが……身動きがまったく出来ない。実在する動物を模したようなマスケットにも似た愛嬌のある姿をしている数体の式神に纏わりつかれていたからだ。

六道芽衣子が使役しているこの式神は、見た目に反してすさまじい力を内包している。

恐らく現存する本当の意味での本物の式神、自らの意思を持ち、自分の意思で動くことが出来る。その正体は強力無比な鬼……鬼神と言って良いだろう。

それが一体だけでもとんでもない存在だが、それが数体、今は自らの意思なのか、芽衣子の命令なのかは分からないが、横島に纏わり付いている。

「ええ〜?急に横から無料ですよ〜、今〜、芽衣は〜、横島くんとデート中なの〜」

「(このどこがデートよ!」

「式神で無理やり横島くんを拘束しておいて!」

「無理やり〜?拘束〜?式神達は〜横島くんが気に入って離

れないだけで……別に拘束してるわけでも……、拘束するように命令している分けでもないわ……」

芽衣子がそう言っている間も、ウマの式神インダラが横島に頼ずりしていた。

式神達はどちらかというと懐いているように見える。

「今は、悪霊退治に忙しいんです。邪魔をするなら帰ってください!!」

「そうよー！タダオは今、あなたに関わっている暇は無いの!!」

「グスン、そんなに怒鳴らなくても……、怖いわ……」

「……」

「このー!」

真由美とリーナもイライラが積もってきているのは、傍目でも分かる。

芽衣子の間延びした口調と、空気が読めないような発言は、人をイラつかせるのに効果的である。

わざとやっているのか、それとも天然なのかは分からない。

「でも、芽衣は……、六道家として……、横島さんと大事な話もしないといけないし……」

「大事な話ってなによ!」

「今、話さないといけないことなんですか?」

「はい……、横島さんと結婚式の日取りと場所の……相談を……、祝ってくださる参加者もちょうど、集まっていますし……、一石二鳥です……」

思案顔をしながらこんなことを言う芽衣子。

「誰が誰との結婚式よ!!」

リーナは思いつきり芽衣子に突っかかる。

「ふーん、芽衣子さん?何をいつているんですか?結婚は双方の同意を得ないと出来ないのですよ。どう見ても芽衣子さんだけで、横島さんにその意思はなさそうですよ?」

真由美は口をヒクつかせながら、反論する。

「横島さんと私の結婚式の段取りです……、氷室家当主からは……横島くんが良い返事をしてくれたら、好きにして良いって言ってまし

たから〜、もう決まりです〜。それで〜あなた方も参列して、祝福してくださいるのですよね〜」

芽衣子のこの言葉について二人は堪忍袋の尾が切れてしまった。「何を馬鹿なことを!!この若作りの年増!!タダオは私とUSNAに帰るんだから!!」

「横島くんはまだ16歳です。結婚できるはずがないでしょう!!これだから後が無い行き遅れは!!」

この時代、魔法師一族の子息子女の結婚適齢期は100年前に比べかなり若い。大学で学生結婚などはざらで、大学在学中に子供が出来た。何てこともあるなのだ。

早く、確実に優秀な子供を……優秀な遺伝子を受け継がすためである。

そこでは恋愛結婚は望むことは難しい。

十師族、七草家嫡子であった七草弘一も20歳そこで結婚しており、長男智一も24歳すでに既婚者である。

魔法師の大家ではないためこのカテゴリーに含まれはしないが、氷室家現当主、氷室蓮は恋愛のすえ、20歳で結婚している。

そこからすると六道芽衣子28歳はこの時代で言えば大年増とあってよいだろう。

「グスン、〜芽衣は年増じゃないです〜行き遅れじゃないです〜、横島くんが居るし〜、婚約で、事実婚でいいじゃない〜グスン、30歳までに、ぎりぎり間に合います〜グスン」
「タダオは、おばさんは好みじゃないの!!」

「二周りも離れた年下の男の子に何を言っているのですかね」

「グスン、グスン……酷いわ〜。芽衣は何も悪いこと言っていないのに〜、みんなしていじめるなんて〜、お母様も、結婚結婚言うし〜、みんな、みんな、芽衣をいじめる〜グスン」

横島は何も言わずに、この様子を悟り切った表情で見ている。もちろんすでに瞳孔は開いたままだ。すでに諦めたのだろう……何もかも……

「グスン、フエツ……芽衣はどうせ年増ですよ〜、みんな、みんな、

大っ嫌い〜〜!!フエー~~~~~ン」

遂に芽衣子が泣き出してしまった。

泣き声とともに、芽衣子の陰から、式神が一気に飛び出し、横島にまとわりついていたいいた式神もそのまま暴れだしたのだ!!

式神暴走(百鬼夜行) ……こうなってしまうと、式神が辺りを破壊尽くすか、芽衣子が泣き止むまで止めることは出来ない。

ついに歩く厄災の本領発揮である。

「ギャー~~~~ス!!ぐは!ぼへ〜〜!!」

横島はそのまま、式神の餌食に!!

リーナは暴れだす式神に対し、持っていた神聖銃で反撃を、真由美も破魔札ショットガンで対応しようとしていた。

公園の木々や、ベンチ、照明などが次々と式神達に破壊され、地面は抉れる。先ほどまで平和だったこの地はまさに激しい戦場跡地のように様変わりして行く。

幸いにも、先ほどまで芽衣子が結界を張っていたため、この公園には横島達以外の人は居なかったため、関係者以外無用に巻き込まれる事はないだろう。

退避していたそれぞれのチームメンバーは公園の縁でこの様子を遠目で伺っていた。

「ふ~~~~、危なかったな」

「悪魔や悪霊よりよっぽどやばいよね。アレ」

レオと幹比古は生垣の間から顔を出して、お互いの無事に安堵する。

「ちよつとあんたたち!なんで、私を置いて逃げたのよ!」

エリカがそんな二人に割って入る。

「いや、普通逃げるだろ」

「エリカって、なぜか六道家当主に気に入られているし……邪魔しちゃ悪いかな〜って」

「私だって、逃げたかったわよ!」

「今、無事に逃げれたからいいだろ？」

『ははっ、ちがいに、娘っ子。君子危うきに近寄らずだ』

紅鮫丸は、レオに同意していた。

公園入り口付近の大きな木の陰で、七草孝次郎と十文字克人は、式神暴走の様子を遠目で見ていた。

「十文字次期当主……アレをどう思う？」

「……まるで、災害だと」

「知りたくなかった事実だ。六道があんな力を隠していたなんてな……しかも性格がとんでもない。あんなのと、どう対話すればいいのだ」

「七草も……妹君も、アレに怯まないとは、なかなか大したものではないですか」

「ああ、それは同意だな。まさか、あの真由美がな……兄貴（智一）もあれぐらい度胸があればいいのだが」

「ちようどバランスがとれていいのでは？」

「嫁の貰い手が困るだろう……まあ、あの横島くんが引き取ってくれたら助かるのだが……」

「やはり、そうですか。十文字としてもそれは陰ながら応援させてもらいます」

「どうやら、十文字克人も真由美が横島に気があることをうすうす気が付いていたようだ。」

十文字克人も、魔法師一族の例に漏れず。優秀な遺伝子を残すことを良しとしているようだ。特に十師族はその傾向が強い。そう言う意味でも、真由美の相手として横島は最良の相手という事なのだろう。

「速やかに撤退をしたスターズは……」

「さすがは総隊長、あのビースト（式神）どもに、恐れもせず果敢に攻

めるとは……」

「前は、突然の事で何が何やらわからないうちに、吹き飛ばされてましたからね」

「ミスター・横島の護符とドクター・カオス特性の耐魔ジャケットが無ければ、死んでいた」

「ミス・六道はあんなに可憐なのに、あのビースト共が周りに居ては声もかけられない」

スターズの面々は、退避行動を取り、公園の外に止めてあった大型車に乗り込みこの様子を見ていた。

「厄介ですね。悪魔よりアレの方がよっぽど手強い……日本の戦術魔法師ばかりに気を取られていましたが、あんなのがまだ居たなんて……上に報告しなければ、日本にはまだ、未確認な戦力が多数ある可能性があるようです……願わくは、同盟状態を永続的に維持してもらいたいものですね」

シルヴィは式神暴走（百鬼夜行）を見ながら、日本には知られていない戦力が眠っていることに、驚きながら、自分たちと敵味方となり、戦うことにならないように祈らずにはいらなかった。

「お兄様、危ういところでしたね」

「ああ、あれに巻き込まれるのはたまらん。体術はもちろん、魔法も効果が薄いときている。この対悪魔用装備でやってやれないことは無いが、リスクが大きい上に、戦うメリツトがまるで無い」

「そうですね」

「しかし、七草先輩もリーナも良くやる。横島の護符とドクター・カオスの耐魔防御服で無傷とはいえ、精神的にダメージが大きいだろうに……」

達也は、今もなお式神に吹き飛ばされながらも、果敢に芽衣子に突っかかろうとする真由美とリーナを見ながら呟くように言う。

「お兄様、でも3日前の式神暴走時は、あの、横島さんがかなりダメー

ジを残していたようでした」

「あいつは爆心地にいるからな……ん？いや……なぜだ？……封印状態とはいえ、あいつの耐久力と回復力は桁外れに高い……なぜあいつだけ……ダメージを」

達也はそう言つて、式神の暴走を受け続ける横島を見る。

涙を撒き散らし、無様に叫ぶ姿はいつもどおりに見える。

「耐魔防御も結構傷みましたよね。西城さんの防御服なんて穴が開いてました」

「耐魔防御は傷が付く……しかしダメージがない……今日の悪霊の攻撃でスターズの二人も明らかに、致命傷を受けたように見えた。どういうことだ？あの横島の護符は肉体に対するあらゆる攻撃をガードするものなのか？いや、悪魔の攻撃はサイオンを奪っていく……精神そのもの……霊的構造体にダメージを与えてくる。それさえも防御している？」

達也は何気ない深雪の言葉に何か引つかかっていた。

なぜ、横島だけダメージを受けていた……達也は横島が明らかにダメージを受けている姿は、済州島で自分が放ったマテリアル・バーストを防御した横島位しか見たことが無い。

そもそも、皆に配った護符の製作者である横島が自らも護符を装備していてもおかしくない。

それなのにダメージを食らっている。

達也は探るように霊視ゴーグルを再び装着し、式神暴走の状況を見る。

式神の霊体はとんでもないレベルで構築されていることが、明らかに分かる。

今日対峙した悪魔化した人間など、比較にならないぐらい強力だ。

それなのに、三日前ビルが粉微塵になるような暴走の中、自分達は無傷だった。

今のリーナと真由美もダメージを受けているようには見えない。

やはり……横島の護符やドクター・カオスの耐魔防御服がとんでもない性能なのか……

達也はそう思考しながらも、横島を霊視ゴーグル越しに観察する。横島が纏う霊気の色と光は、強く均一に保たれている。

涙を流し、無様に式神の攻撃を受けても、霊気は一切ぶれることは無い。

表面上はあんな感じだが、ちゃんと防御しているようだ。

「……なるほど、奴が耐久力が高いのはサイオン粒子をコントロールして粒子そのもので防御をしているからなのか、または、それを利用して肉体強化をしているかだな……まあ、どういう仕組みなのかはわからないが」

達也は誰ともなしに呟く。

「そうなのですね」

深雪はそれに返事を返していた。

「!?」

しかしそんな横島だが、達也は今一瞬、横島の右肩辺りの霊気がぶれたように見えた。

(なんだ。一瞬ぶれたいや、その部分が薄くなった?)

達也は霊視ゴーグルによる観察を続ける。

するとリーナがビカラというイノシシの式神に腰辺りに体当たりをされ、吹っ飛んだ。

当然リーナは吹っ飛んだだけで、ピンピンしている。

しかし、達也は見逃さなかった。

「!!」

(まさか!!)

またしても、横島の纏う霊気に乱れが起きたのだ。

しかもリーナが体当たりをされた腰とまったく同じ箇所を……

達也は真由美、リーナ、横島の状況を同時に確認しながら観察を続ける。

(やはりか、七草先輩とリーナが式神に攻撃を喰らった同じ箇所が横島の霊気が乱れる……)

「……………」

達也はサツと対魔用CAD一体型銃を抜いて、自分の手のひらを撃ち抜こうとした。

「お兄様!!何を!!」

そんな達也の行動を見て、深雪は慌てて止めに入る。

「大丈夫だ。俺に自己修復術式がある」

達也は淡々と言う。

「なぜ!!そのようなことを!!」

「すまん。黙ってみていてくれ……」

達也は深雪の制止を聞かずに銃の引き金を引く。

しかし、達也の手のひらは穴をあくどころか、傷ひとつ付かない。

横島の状況を霊視ゴーグルで確認していたが、手に霊気の乱れは無い。

「この程度の攻撃ではダメだと言うことか……それは護符の効力なのか、横島の耐久力の問題か」

達也はぶつぶつと何かを言う。

「お兄様!？」

深雪は心配そうにそんな達也を見る。

「深雪……俺の右腕を魔法で粉碎してくれ」

「お兄様!!何を!!何を言っておられるのですか!?!急にどうしたのですか!?!」

「いや、自己修復術式があるから大丈夫だ。かまわないやつてくれ」

達也はある仮説を立証するために、こんなことを深雪に言っていたのだ。

「嫌です!!どうしたのですかお兄様!?!先ほどからなにやら考えておられるようですが……」

深雪は心配そうに、達也の顔色を見ていた。

「……すまん。わるかった……」

達也はそんな深雪の顔を見て、自分のうかつきに気が付く。

自分の腕を粉碎してくれなどと、いくら修復できるからと言って正気の沙汰ではない。

しかも、最愛の妹、深雪にだ……

達也はそう言って、深雪の頭を軽く撫でてから、横島と暴走式神の観察を継続する。

(横島……お前、やはり……)

しばらくして式神暴走が止まった。

芽衣子が泣き止んだからだ。

横島が耐えかねて、氷室蓮に携帯端末から連絡し、泣きじやくる芽衣子に蓮の声を聞かせたからだ。

蓮が何を言ったのかは分からないが、芽衣子は今も尚、蓮と通話し笑顔を振りまいている。

リーナと真由美はダメージが無いとは言え、体力の限界なのか、その場に座り込んでしまっていた。

しかし……式神暴走(百鬼夜行)の傷跡はすさまじい。東京都心の某公園は、公園の外縁を残して、何も無くなった……いや、穴ぼこだらけの荒地と化していた。もはや、誰もここがさつきまで閑静で自然豊かな、都民の憩いの場であった公園だとは思わないだろう。

「うわっ、めっちゃくちゃだよ」

「巻き込まれたらたまったもんじゃないな」

「これ、どうすんのよ。公園もう使えないじゃない」

幹比古、レオ、エリカは式神暴走が終わったのを見計らって横島の元に戻ってくる。

エリカの言うとおりだ、この公園を誰が直すのだろうか？

「隊長！大丈夫ですか？」

「さすがですね」

「リーナお怪我は？」

スターズの面々はリーナの元を集まる。

「真由美……お前をあまり怒らせないほうがいいようだな」

「七草、よく耐えた」

七草孝次郎と十文字克人は真由美にゆっくりと近づく。

達也と深雪も横島の元に歩む。

横島は……ボロボロであった。それはいつものことなのだが……すぐに起き上がってこなかった。

その場で苦笑いをしながら、座り込んでいる。

（横島……お前は俺達のダメージを肩代わりをしているのか？自分を犠牲にしてまで、なぜそんな事を……お前というやつは……お前は自分の事を知るべきだ。お前を心配し、気に掛けている人間が居る事を……言って聞く奴じゃない事は分かっている。……ならば……）

達也は横島から預かった護符も見つめながら思う。このどうしようもない位のお人好しに……思い知らせてやら無ければならぬ……いかに自分が馬鹿げた事をやっているかを……

175話 横島と達也とリーナ!!

「横島くん、私達は今日は4体捕らえたわ」

「横島、今日は3体ね」

「タダオ、スターズと達也達で5体捕らえたわ」

真由美、エリカ、リーナが横島の元に報告に来る。

「真由美さんお疲れ様です。エリカとリーナもお疲れさん。大分と手馴れてきたんじゃない?」

「そうね。これも横島くんのおかげだわ……でも、こんなに悪霊が蔓延っていたなんて……」

「2週間もやってればなれるわよ。……にしても、多いわね。これで150体ぐらい捕らえたわよね」

「結構多いけど、地道にやっていけばなんとかなるんじゃない?」

横島は今のままではまずい事を理解しながらも皆にはこう言った。

「タダオ、USNAで悪霊に取付かれ行方不明になった容疑者を日本で捕らえることが出来たのは5人。残りは2人。その他の日本への渡航者も一人一人、この霊視ゴーグルで確認作業も行ったわ。悪霊に取り憑かれていたのはリストの201人中4人、そして未だに所在不明の人間が13人居るわ。この13人は悪霊に取りつかれていた可能性が高いわね。こちらの搜索は今も日中、他のスターズのメンバーが取り仕切っているわ」

リーナがUSNA側の近況報告をする。

USNAは夜の悪霊退治以外でも、日本への渡航者の追跡調査を行っていたようだ。

「たはははははっ、みんなのおかげで俺は楽が出来る」

横島は笑顔とは裏腹に焦っていた。

未だ姿を現さない魔神ダンタリオンがこの世界に送り込んだハズの悪霊。

現在、対峙している金色の目をした悪霊と悪魔の主が何者なのかも

判明しない。

そして、その行動原理が一切分からないことだ。

既に四勢力の協力体制を整えてから本格的な討伐を行い2週間が過ぎようとしていたのだ。

その間、捕縛した悪霊の数、150を超え、悪魔化した人間とは8体も遭遇したのだ。

はつきり言って、流れが悪い。

魔神ダンタリオンを唆した金色の目の悪魔の主が何を目的とし、この世界に侵入し、何をなそうとしているのか、使い走りもいいところの、自らが生み出した悪霊共を多量に増やし、まるで見せ付けるように派手に動き回っているのが分からない。

なぜ、舞台をUSNAから日本に移したのかも分からない。

横島は悪魔、それも魔神との戦いをよく知っている。

悪魔との戦いで、先手を打たれるほど痛いものは無い。

しかも現状では何をしでかしてくるのかも、予想さえ立てられない。

特に魔神との戦いは、圧倒的不利をこうむる。

魔神とは……その名の通り、魔の神的存在という意味も含まれるが

……

まさに、神と同じ世界の理を行使できるのだ。

横島の前に現れた魔神ネビロス、圧倒的な力を持つだけでなく。未
来視という破格的な能力を持っている。

いわば、世界の理そのものを支配している力だ。

その特性を知らなければ、戦う前に負けることもある。

横島が特に注視するのは、圧倒的な霊力・魔力を内包していないの
に、魔神として君臨している悪魔である。

他の力がある魔神が手出しが出来ないほどの、何か特殊な力を持つ
ていると見てまずは間違いないだろう。

横島はダンタリオンがそれに当たると判断をしているからこそ、師
匠である斉天大聖老師に情報収集をお願いしていたのだ。

しかし、それももうまくいつていない。ダンタリオンの情報はあまり

にも少なすぎる。

そして、金色の目をした悪霊の主でダンタリオンを裏で操っている悪魔だ。

斉天大聖老師からはそれらしき悪魔をピックアップしてもらっていたのだが、横島はそのリストを見ても、ピンとこない。

横島の経験と勘では、リストには居ないと感じていた。

そして、横島は皆に内緒で独自に捜査を行っていたが、それでも尻尾を掴むことが出来ない。

捕らえた悪霊から情報を引き出そうにも、悪霊自身は元は意思を持たない生存本能だけで動いているような低級な存在だ。何か知っているようも無かった。

無理やりサイコメトリーなどで調べようものならば、存在そのものが消滅してしまう。この金色の目をした悪霊の主は相当したたかな悪魔のようだ。

深雪がエリカ達と話している間、達也はスターズと共に帰還しようとしていたリーナを呼び止める。

「リーナ、話がある」

「何？達也」

この悪霊退治の協力体制を始めてから、リーナと達也は大分打ち解けてきたようだ。

リーナ達スターズと司波兄妹は、お互いが使う霊具の相性がいいため、組む事が多かったのが幸いだっただけか、当初の敵対心丸出しだったリーナも、今は軟化し普通に会話をしている。

お互いマリアから知らされた横島の本当の現状を知る者としての仲間認識もあるのだろう。リーナ自身、既に遺恨は無くなっていた。

「横島のことだ」

リーナは達也からのその返事に、スターズのメンバーには先に帰るように言い。達也と二人で話せる位置まで移動する。

「タダオがどうかしたの?」

「あいつは今もかなり無茶をしている……このまま行くと、マリアさんが言っていたことが現実になる」

「ど、どういうこと?」

……

翌々日夜半、七草家関連施設の敷地内、悪霊退治に向かう前に、お互い顔を合わせ軽く打ち合わせをする。

こうすることで、元々バラバラであった四組織、少なくともこの場に出席しているメンバーは共通の目的、同じ敵を打ち倒すためと、お互いを認め打ち解けてきていた。

達也からの提案で、今日は横島と達也、リーナが組むことになる。

他のメンバーは……

シルヴィ率いるスターズと、千葉家から千葉寿和とその相棒、稲垣警部補。七草家からは孝次郎、ボディーガードの名倉氏のチーム

真由美、十文字克人、エリカ、レオ、幹比古と深雪のチーム

年長組みと学生組みとで分かれた。

搜索範囲は三鷹、武蔵境、調布、府中と都心から少し離れた場所である。

「横島……ちよつとこい」

「なんだよ。やぶからぼうに」

「いいから、付いて来い」

達也は横島にそう言って、魔法を使って移動する。

その後に、文句も言わずにリーナも付いて行っている。

しかし、どうもリーナの顔色が悪い。

「わーかったよ」

横島もしぶしぶ付いて行く。

そこは大きな公園の広場だ。

調布市の北部にある。広大な植物園の中だが、今は閉園時間で人は居ない。

「なんだよ。こんなところに何の用事だ？……おまえ様子が変だぞ？」

達也は横島に対峙するように正面に立つ。

リーナはいつもとは違い、達也の横に立ち、うつむき加減で苦しそうな表情をしている。

「横島、俺達に隠していることがあるな」

達也の目はいつもにまして鋭い。

「何のことだ？」

「言う気が無いか……お前、この護符は何だ！……この護符を通して、俺達が受けたダメージを全部お前が背負っていたな！」

達也は懐から護符を取り出し、横島に突きつけた。

「……………」

横島は沈黙する。

達也は六道芽衣子の来襲の折、それに気がつき、マリアに連絡をしたのだ。

そのようなことが可能なのかということを確認するためだ。

マリアの返答はこうだ。

「横島さん・ならば・可能です・呪いの・一種を・利用した・オリジナ
ル・呪札でしょう・・やはり、横島さんは……マリアが・横島さん
を・説得に・行きます」

マリアはすぐにも横島のもとに行こうとしたのだが、こう言って達也はマリアを止める。

「あいつは言っていて聞く奴じゃない。俺が何とかして見せます」

達也は自分の身を切るような行動をとる横島を許せなかった。

達也自身も今まで似たような事（傷ついた仲間への再成魔法による修復に伴う副作用としての受けたダメージの苦痛）を軍の命令で、効率を考え納得した上でやってきた。

しかし、横島のこれは何かが違う。うまく考えがまとめる事が出来なかったが……

ただ、達也は感情で横島のこの行動を受け入れる事は到底出来なかったのだ。

そもそも、再成魔法による苦痛と、横島のダメージ転化は似て非なるもの、まったく別物だ。

達也の再成魔法は、相手が受けたダメージを回復させる際に、エイドスを読み込む際に、相手の痛みの感覚をも一緒に読み込んでしまうがために起きる現象だ。肉体的にダメージを受ける事はないが、それでも相当の苦痛を伴うのは間違いない。

横島の場合は、相手が受けたダメージそのものをその身に直接受けるのだ。

横島自身が受けても霊的防御等でダメージにならないものも、同じ攻撃をその転化される相手が霊的防御もなしにまともに喰らって深いダメージを受けた場合。その深いダメージをそのまま横島が受けてしまうのだ。

横島自身だったらなんとも無い攻撃も、深いダメージとして受けてしまっていたのだ。横島の超人的な回復力が無ければ、すぐにでも身を滅ぼすような行動であった。

……六道芽衣子が来襲し、式神暴走で皆が受けたダメージをそのまま、横島は受けていたのだ。いくら横島でも、あれをまともに喰らえばただじゃすまない。

実際横島は、表情を変えていなかったが、相当なダメージを蓄積し、服の下……肉体には凄まじい傷を何度も受けていたのだ。

「タダオ……どうして！どうしてそんな事を!!私は知らなかった……また、知らなかった。タダオがこんな事をしていた事を！苦しんでいた事を!!……もう、やめて……お願い……もうこんな事はやめて……」

リーナは苦しみを吐き出すように叫び……そして、涙が頬を一度、二度と伝い、消え入る声で懇願する。

リーナは一昨日の悪霊退治後、達也に呼び止められ、この事実を聞かされたのだ。

リーナはショックでしばらくその場から動く事が出来なかった。横島がそのような事をしていたなどとはまったく思っていなかったのだ。

リーナは悪霊や悪魔、そして、六道芽衣子の式神攻撃を受けても、自分やスターズのメンバーがまったくダメージを受けていなかった事を思い出す……そのダメージがすべて横島に向かっていたという事実に今日まで思い悩んでいた。

「……悪霊を。悪魔と対峙するには、皆は余りにも経験が少ない。相手よりこちらが戦力や力でいくら優位に立っていても、奇襲を受け、もしくは特殊能力（呪い等）に翻弄され、一瞬で命を落とす事なんて事はざらにある。……悪霊退治……ゴーストスイープとはそう言うものだ。だから……保険を掛けていた。その護符で……」

横島は苦笑しながらゆつくりと語りだし、そしてその事を認めた。

横島の護符は護符の耐久を超える攻撃や特殊な霊的攻撃事象を受けた際、横島が一定範囲内にいた場合にダメージ転化するような呪いが仕掛けられていたのだ。

「俺達はそれを覚悟の上で悪霊退治を行っている！ なにか？ 俺達がそんな覚悟も無い臆病者だとも思ったか！」

達也は威圧感を高め、横島に食い付く。

「……悪魔に取付かれた人間がまともな死を迎えられない……俺は何度もそれを見てきている。お前らにそうなってほしくない。……そもそもこれは俺が一人で片付けるハズだった!!……俺はお前らを巻き込んでしまった……その償いだと思ってくれ……俺ならば耐えられる」

「ふざけるな!! 加害者意識もたいがいにしろ!! お前がUSNAにいた頃から、日本で起こっていた事だ。お前が関わる前に、既に俺達はこ

の件に首を突っ込んでいたんだ!!」

「俺は陰陽師だ。悪魔退治は俺の使命だ」

「やはり、言ってるわかる奴じゃないか……」

達也は腰のホルスターからシルバーホーンを抜き横島に構える。

「……どうするつもりだ」

「横島！勝負だ！……いや、殴ってわからせる！お前流で言う喧嘩だ！」

あの達也が啖呵を切った。

「達也……やめて……私……タダオとは戦いたくない……」

リーナは達也に弱弱しく訴える。

「戦いじゃない！喧嘩だ。こいつを今、わからせるチャンスだ」

「……タダオ……、私にはこうする事しか……戦う事でしか、タダオを救えないの……」

達也の叱咤でリーナは苦渋に満ちた顔をしながらも、戦闘態勢をとろうとする。

背中に背負っていた長い布地のケースから、なにやら金属性の杖を取り出した。

どうやら、達也とリーナは事前にこうなる事を想定し、準備をしていたようだ。

先ほどまで思い悩んでいたが、リーナもようやく決心が付いたようだ。

「……リーナまで……どうして今、戦わなければいけない……」

「戦いじゃない！喧嘩だ！喧嘩に時も場所も関係ない！」

達也が吼える。

176話 横島 新たな決意!!

「横島！覚悟はいいな！」

達也は横島に右手に持つシルバーホーンで魔法を放ちながら、一気に迫り、体術による接近戦を挑む。

「やめろって！」

横島は達也の体術を捌く。

リーナは横島の右側から後方に大きく下がる。

そして、背負っていた布状の長いバックから取り出した1.2メートルの円筒状の金属杖に取り付けられた十字にクロスするような取っ手を両手で掴み、まるで大型の対戦車ライフルを腰に構えるような格好で、横島に向けていた。

この金属杖の名前は、『ブリオネイク』

世界で公式に認められている13人の戦略魔法師の一人であるアンジー・シリウス（リーナ）が放つ最高峰の領域魔法、プラズマを全方向広範囲に撒き散らす戦略級魔法ヘヴィ・メタル・バーストを、このブリオネイクは指向性と収束性を持たせ、プラズマをビームのように打ち抜くための魔法兵器なのだ。

その威力は凄まじいものがあるが、使い勝手もよく、威力や発射距離までも調整できるため、街中でも行使が可能にする。

その発射速度は、理論的には音速の100倍にも達する。

リーナはブリオネイクを構えている手が震えていた。

いくら威力を落としていたとしても、普通に考えると、この攻撃を人がまともに喰らえばただじゃすまない。

自分が放った魔法で横島が下手をすると死んでしまうかもしれないのだ。

しかし、先日達也がリーナに打ち明けた話では……

横島は戦略級魔法を跳ね返す力を持っているという。

『救済の女神』なら可能なのかもしれないとリーナは思っていたのだが、

「あいつは、『灼熱のハロウィン』よりも高威力の戦略級魔法を『救済

の女神』なしで跳ね返した」と語ったのだ。

それを聞いたリーナは大いに驚く。そんな事が人の手で可能なのかと……後で考えると、達也が今までUSNAが必死に探していた『灼熱のハロウィン』を起こした戦略級魔法師の関係者またはその魔法師自身だと言ったのと同義であった。しかし今のリーナにはそんな事はどうでも良かった。

さらに、信じがたい事に、横島一人で、日本の全戦力に匹敵するまで言っていたのだ。

リーナはUSNAで記憶喪失の横島と練習試合を何度か行っていたが、自分より強いイメージは無かった。

「あいつを負かすには戦略級魔法師であるリーナの協力が必要だ。それでもまともにやれば勝てないだろう。しかし、奴は重大なミスをしている。そのせいで奴は死んでしまうかも知れない……それをわからさなければならぬ。それが出来るのはリーナと俺だけだ」

達也は困惑しているリーナにそう言って、説得をしたのだった。(タダオがこの攻撃に耐えられる……達也、嘘だったら、許さないんだから……タダオ……お願いだから分かって)

リーナは達也が横島から離れた事を確認し、ブリオネイクからヘヴィ・メタル・バーストを収束させたプラズマ粒子ビームを放つ。

横島は、まるで最初からその場所に攻撃がくるのが分かっているかのような機動で既に身を翻し、ビームの攻撃範囲から離脱する。

ビームを発射され、先ほど横島がいた場所に激しい光の束が一瞬で通り抜ける。

横島はリーナが魔法を撃つ場所をリーナが攻撃する際の霊気の流れて予想していたのだ。

しかし、ビームが通過した空間の周囲はその余波でプラズマが乱舞する。

横島はそれに巻き込まれるが、全身に霊気による防御障壁を展開し、しのぐ。

「あ、あれを避けるー！」

威力を落としているといえども、スピードは同じなのだ。

「……リーナ!! 達也!! もうやめてくれ!!」

横島は叫ぶ。

「やめるか! 喧嘩だと言った!! お前は何も分かっていない!!」

達也は、そういいながら、再び横島に迫り体術を放つ。

「何をだ!」

「お前は誰も傷つけないと言った! しかし、おまえ自身はどうだ!」

「……」

「俺達もお前が傷つくところなど見たくは無い! ましてやお前は死に急いでいるように見える!」

「……」

「なんだ? 反論しないのか? そうか凶星か? 反撃する気力も無いのか?」

達也は体術を放ちながらも饒舌に横島を挑発するような口ぶりをする。

「……」

横島は苦しそうな表情をしながら、達也の体術を捌く。

「そうだな、この護符があるからな。自分で自分の攻撃を受けるのは嫌か?」

「……」

横島の顔がさらに苦悶に歪んでいく。

達也は後方に下がり、横島から大きく間合いを取る。

「お前は間違っている。こんな事をして誰も喜ばない……リーナ!!」

達也の掛け声で、達也の後方でブリオネイクを構えていたリーナは、ビームを放つ。

「タダオ!!」

横島はビームの放たれる範囲からまたしても、霊気の流れを読み事

前に逃れる。

しかし、ビームは横島を狙ったものではなかった。

ビームは直接達也の下半身、腰の下辺りに当たる。

しかし、達也にダメージは無い。

そして横島の護符により、ダメージが無常にも横島本人の下半身に届く。

「ぐっ…ぐはっ！」

横島はビームのダメージをその身に受け、放電したかのように横島の全身がスパークし…痺れを起こしたかのように体がぐらつき膝を付く。

横島はビームをまともに喰らったのと同じ状況に陥ったのだ。

いくら、威力を落としているといえども、通常の間人であれば、体を貫通し焼きただれる。または、手足が吹っ飛ぶ威力なのだ。

横島だからこそ、かろうじてこれに耐えうる事が出来たのだ。

達也はそこで、腰にさしていたもう一丁の短銃形CADシルバーホーン・カスタム『トライデント』を取り出し、すばやく横島に向け、魔法を発動した。

常人では目視できない速さで何か横島のわき腹辺りを通り抜ける。

横島はビームダメージを負っているがため、それにまったく反応できず、達也の魔法を喰らう。

いや、かろうじて防御障壁を張ったようだが、貫通してしまったようだ。

そして、横島は崩れるように横に倒れる。

「タダオ!!」

それを見たりーナは、ブリオネイクを投げ捨てて、横島に一直線に駆け寄り、倒れた横島を抱き起こそうとする。

横島の右わき腹の服がこげ、そこから血が滴っていた。明らかに肉がこげたような臭いまでする。

「タダオ!!しつかりして!!……達也!!やりすぎよ!!早く再成魔法をタダオに!!」

どうやら、達也に事前に再成魔法の事を聞いていたようだ。致命傷を受けても修復する事が出来る事をリーナに伝えたのだ。そうでない、リーナもこの件を了承しなかっただろう。

しかし、魔法を放った達也も、持っていたシルバーホーンカスタムを地面に落とし、その手が丸こげになっていた。

達也は顔が苦痛に歪むが、すぐに自己修復術式で再成する。

達也が放った魔法は4月に横島に負けてからずっと構想を練り、F A E理論を物にし、新たな魔法を開発していたのだ。

新魔法の名前は仮に『バリオン・ランス』と名づけている。

物質を中性子レベルの素粒子(バリオン)に分解し、そのエネルギーで打ち出したのだ。

放射能汚染の心配はされるがそれは再成魔法で回収可能とした。

しかし、まだ未完成なため、威力も、スピードも予定のものよりもかなり弱い。

そして、魔法構築もまだ荒いたため、自身もダメージを受ける事になったのだ。

達也が出した試算では、秒速1万キロという超高速で発射される。

誰の目にも見えるものではない。魔法が放たれると分かっていたとしても、反応すら出来ないだろう。

「タダオ!タダオ!しつかりして!!」

リーナは横島の肩をがっちり掴み揺らしていた。

相当動揺しているようだ。そんな事をすれば傷口が余計に開き悪化するだろうに……

仰向けで倒れた状態の横島は憔悴仕切った表情で、

「……リーナ痛いよ……大丈夫だ」

涙目で心配そうに横島の顔をのぞいているリーナの頬をそっと撫でる。

リーナは横島を抱きよせ、自分膝の上に横島の頭を乗せる。

「大丈夫じゃない……達也！早く！」

しかし、横島のわき腹から染み出していた血は既に止まっていた。そこに達也が歩み寄っていく。

「直撃ではなかったか……」

「……いや、ほぼ直撃だ。防御が間に合わなかった……いつかの逆だな。俺の負けだ」

横島はリーナの膝に頭を乗せ寝た状態で、回復術式を自身に掛け、達也にそう言った。

横島は達也の魔法の気配を察したが、リーナのビームのダメージ転化によるダメージが相当大きかったため、反応しきれなかったのだ。達也の攻撃魔法バリオン・ランス（試作）のその凄まじいスピードと貫通力で、サイキックソーサーの展開も間に合わず、何とか身体表面に防御障壁を張ったのだが、貫通された。

張った防御障壁で一応急所をそらすことは出来たらしい。

「いや、お前は最初から負けていた。おまえ自身。この護符の危険性は十分理解していただろう。ダメージがお前の防御耐性を無視して、そのまま転化されるのだろう。なぜ、こんな事をした？」

「……ただ、みんなが傷つくのが見たくなかった。横浜の時は、ほのかちゃんが傷ついたと聞いた……あれではダメだと思った。確実にみんなが……傷つかない方法をと……悪魔の攻撃はただ防ぐだけでは困難なものがある。呪いが継続的にその地を汚染させるようなものまである。護符を持った本人は大丈夫でもそこから、別の人間に呪いや術が感染するようなものもある。それはただの護符では防ぎきれない。この護符であれば、受けたものを俺にすべて転化される。そうすれば誰も傷つかないと思った……俺は呪いや術に耐性があるからな……」

横島はリーナのひざの上で憔悴した表情ながらも、自分の思いをしつかりとした口調で語る。

「もし、お前の想定以上の強力な悪魔に出くわし、そのダメージ転化でお前が死んでしまえば……そんな敵では、間違いなく、その後俺達も

「……いや、ここら一体の人間は死滅する」

「……そ…それは」

「横島、それだけではない。お前は皆が傷つくのを見たくないのと言ったが、同様に、俺達もお前が傷つくのを看過できない。お前はお前が思っている以上に、皆はお前を思っている」

「タダオ…もう、やめて、こんな事…タダオが辛い思いをしているのは嫌なの」

リーナは涙をポロポロと横島の顔にこぼす。

「そう言うことだ。それにお前の過去の何があつたかは知らんが…そんな事は今の俺達には関係は無い」

「マリアが…何か言っていたのか？」

「ああ、お前が高校に上がる前に、大切な人を亡くしたと聞いた…その程度だがな」

「……そうか」

「……それだけ話せるならば、俺の修復は必要ないようだな……」

「ああ、久々に負けたな…お前の再成魔法か…あれを俺に掛けた場合どんな事象が起きるか分からない…やめておいたほうがいい…それに負けた痛みを感じておくのもいいかもな…直に回復する。リーナのあのビームの魔法のダメーჯ転化が効いているな。リーナがあんなすごい魔法を持っているなんて知らなかったよ…身体全身がまだ痺れて、うまく動かせない」

横島が再成魔法をやめておくようにいったのは訳がある。ダメーჯ転化は呪いの一種である。横島自身に呪いを掛けているのだ。それが再成魔法を行った達也にどんな影響が出るかは分からないからだ。

「ごめんなさい…ごめんなさい……」

リーナはポロポロと涙を横島の頭上に落とす。

「……いや、リーナを責めてるわけじゃないよ。褒めてるんだけど」

「あれをまともに喰らった状態で、その程度ですむのはお前ぐらいだ。…しかし、俺はこれでお前に勝つたとは思えない。お前は封印状態で、今回はお前の護符を利用させてもらったただだからな…自滅と

同じだ。……いつかは、封印解除状態のお前と戦わせろ……」

「お前…そればかりだな」

「タダオ……もう、あの札を使わないで、今すぐに解除して………お願い」

リーナは横島の右手を握り締め、ひざの上の横島に涙目で懇願する。

「……いや………わかった。でもあれは特殊な呪いをこめたものだ。遠隔で解除は出来ない。しかし、札そのものを燃やせば解除はできる………通常の護符も後で渡す………リーナ…心配かけてごめん………その…達也もな」

横島は最初は札の解除を否定しようとしたが、リーナの泣き顔と達也の真剣な顔を見て、しばし考え、ダメージ転化の札の解除を決意する。

そして、横島の表情は何か憑き物が落ちたようにも見えた。

「ふん。お前が素直に人の言うことを聞く奴だったら、こんな茶番はせずにすんだ。……深雪に連絡を入れるぞ。皆にあの札を外すようにと………ドクター・カオスの耐霊ジャケットだけでも、なんとかなるだろう。それに今日は人数に厚みを持たせているしな………」

「………すまない」

「それとお前は後で皆に謝っておけ。このことも深雪から皆に伝える様に言う。お前のバカな（ダメージ転化）所業をな………皆からは責められるだろう。……レオあたりは本気で殴ってくるぞ。……俺も後で殴らせろ」

達也はそう言って、リーナの膝の上の横島から視線を外す。

照れているようにも見えないこともない。

達也は携帯端末で深雪に連絡をする。

「ん？連絡がつかない？」

達也は若干困惑気味だ。

「どうした達也？」

横島はようやく上半身を起き上がらせる。

すかさずリーナが横島の後ろから座った状態で支える。

「深雪に連絡がつかん」

「……悪霊に出会って交戦中ではないかしら？」

リーナもようやく落ち着いたようで、会話に入ってくる。

「いや、そうかもしれないが……」

達也は歯切れが悪い返事をする。

実は深雪は達也の連絡があれば、どんな状況だろうが、即対応し、出なかつたことなど今まで無かつたのだ。

「相変わらずのシスコンだな……そんな心配そうな顔するなよ。今のところ、ダメージ転化はない。少なくとも深雪ちゃんは無事だよ……まあ、ちよつと強い敵に出会っているのかもしれんが、……大きな霊気も感じられないから、そんな強い敵が居るようには思えない。まあ、なんか合っても今はまだ俺にダメージが行くだけだしな」

「ダメよそんなの！」

リーナは支えている横島を後ろから抱きしめる。
「達也、早く行ってやれよ。深雪ちゃん達は三鷹方面だろ？真由美さんや幹比古達も一緒のチームだから連絡してみろよ。ほら、リーナも……」

「でも……タダオが……」

「俺は大丈夫だ。早く行つた。……俺も後で追いつく……それと、リーナと達也……心配してくれてありがとな」

横島は立ち上がり、達也とリーナに行くようにと……そして照れくさそうにお礼を言う。

「わかつた。先に行く」

達也は、そう言つてこの場を離脱する。

「うん、タダオは今日は、ゆつくり休んで……私達でなんとかするか
ら」

リーナは名残惜しそうに、振り向きながら、加速魔法を使い達也の後ろに続いた。

残った横島は……芝生の上で大の字になって仰向けに倒れこむ。

「くはーーーーー」、久々に効いたなーーーーー！」

大声でそんな事を言う。

身体にダメージも相当残っていた。それもあるが……

「いや……効いた、心に効いた……俺は100年前に死ぬべきだったと思っていた……罪を犯して100年たつて戻ってこれたけど、俺にはもう既に何も無かった……天界で無意味に過ごすぐらいしか……」

おキヌちゃんの遺言どおりに高校に通って……皆に会えて、良かった。……おキヌちゃんはこんな俺を見越して、学校に行けって言ってくれたのかな？

マリアとカオスのジーさんに再会して……友達も出来て……叱ってくれる奴も出来て……俺、今、良い思いしているよなーーーーー」

横島の表情は晴れ晴れとしていた。

(ルシオラ……おキヌちゃん……俺はこの世界で生きていくよ。……いいよな)

横島は身体を起こし、座禅を組む。

横島は靈気を集中させ、回復に勤しむ。

「あいつ等を、この世界を……守り抜く……」

横島は真剣な表情でそう呟く……その言葉には決意した意思が乗っていた。

177話 悪魔の謀略!!①悪魔の誘い

今日の悪霊退治は横島、達也、リーナが抜けた。年長組みと学生組みで別れて行動している。

今、三鷹駅前小さな広場で集まっているのは真由美に十文字克人、エリカ、レオ、幹比古に深雪の学生組みチームだ。

「お兄様……昨日から難しい顔をしておられました。急に今日になって、横島さんとリーナと組むとおっしゃって……」

「USNAとなんかあったんじゃない？作戦中の不具合とか、それで、横島立会いの下でリーナと話合いとか」

幹比古はそんな事を誰と無しに言う深雪に答える。

「だといいいのですが……お兄様この1週間ぐらい、なにやら考え事されていることが多くて……」

深雪は心配そうな顔をしている。ちょうど一週間前というと、達也が横島のダメージ転化に気がついた頃だ。その時、深雪に自分の腕を魔法で粉碎しろなどと、常軌を逸した言動をしていたのだ。

心配の一つや二つして当然である。

「ふーん。達也君、深雪にも何も言わないんだ。……深雪にも言いにくいことか、……実は、達也君、リーナが好きだーとかいって、リーナと横島カップルに別れろって迫って、修羅場になってたりして」

エリカは冗句のつもりでそんな事を言う。

「それはないわ、エリカ」

深雪はその冷え切った目でエリカを見据える。

「そうよ。大体、横島くんとリーナさんは付き合っていないわ」

真由美もエリカに頬を膨らまし突つかかる。

「ありえないよ。あの達也が恋愛関連の話なんて」

「さすがに無茶があるな」

幹比古もレオもエリカの冗談にまじめに答えている。その横で十文字克人が同意だといわんばかりにうなずく。

「な、なによ！みんなしてそんな目で見なくていいじゃない。冗談に決まってるじゃない！冗談よ！」

エリカは皆の真剣な眼差しにたじろぐ。

『娘っこ、おめー、思い悩むブラコン娘に言っつて良い事と悪いことがあるぞ。冗談やるなら、横島の旦那みたいにはチャケねーとな』

自分の愛刀紅鮫丸にまで、ダメだしを喰らう始末。

エリカの冗談はあながち間違っつてはいない。恋愛ごとの修羅場ではないが……達也とリーナと組んで横島と友情を掛けた喧嘩をしていたのだ。

「すぐ終わるようなことを達也君も言っつていたのだから、たいした用事ではないのではないかしら？それよりも、それまでに、私達が出来ることをしましょう」

真由美は年長者らしくこの場を納める。

「まあ、深雪もあんま考えても仕方ないでしょ？どうせ、横島となんだからしょうも無いことよ……で、今日は、誰がリーダーをする？うちのチームはいつも幹がやっていたけど」

エリカは未だ心配そうな顔をする深雪の肩をポンと叩いて、元気をだしそうとし、実際の自分達の事に話を移す。

「十文字先輩や七草先輩が居るから、お二人のどちらかにやってもらうのがいいな」

幹比古は二人の先輩を申し訳なさうに見ながらそう言う。

「吉田が適任だろう。サポート面も優れているという。横島から提供してもらった霊具以外で自分の術式で対応できるのは吉田だけだ。さらに、俺達は皆、前面に戦うのが性に会っている」

「そうね。吉田君に任せようかしら、古式魔法の使い手でもある吉田君の指示も見てみたいですし」

十文字克人と真由美は幹比古をリーダーに推す。

「決まりだな！頼りにしているぜ。リーダー！」

レオは幹比古の背中を力強く叩く。

「はくく、先輩が居るのに何で僕が……」

「それだけ、幹を頼りにしているって事じゃない。シャンとしたら？」

しかし、この光景は1ヶ月前では考えられなかった。真由美とエリカが何かにつけて衝突していたし、十文字克人も、われ関せずのスタイルで、まったく言っていないほどバラバラだったからだ。

今は、お互いちゃんと話をし、認めあっているようだ。

達也の提案した協力体制はうまく機能しているといっているだろうか。

これも横島効果の表れだろうか？

学生組みチームが行動開始と共に、早速、3人の悪魔憑きを発見し追尾を開始する。

3人の悪魔憑きもそれに気がつき、逃走を図る。

幹比古引き居る学生組みチームは、三鷹駅前から井の頭公園方面へと囲む様に追いつがる。

悪魔憑き達が公園に入る前に行動に出る。

「紅公、一気に行くわよー！」

『はっ、じゃ行くぞ娘っ！』

紅鮫丸を構えたエリカの瞳が赤色に変化すると同時に、3人の悪魔憑きの前に踊りでて一気に加速し、迫る。

3人の悪魔憑きは反撃をしようと魔法を放つがエリカは迫りながらもすばやい動きですべてかわす。

そして、一番前の悪魔憑きの男を紅鮫丸で薙ぎ払う。悪魔憑きの男は十字ブロックで防御体制をとり受け止めたが、紅鮫丸は霊気をスパークさせ、男を痺れさせ無力化させた。

その間、残りの二人をレオと十文字克人、真由美と深雪で後ろから奇襲し、それぞれ撃破していく。

幹比古は倒れた悪魔憑き3人に封魔札を飛ばし、額に張り付けさせ、

完全に無力化させたのだった。

「やったわね」

エリカは紅鮫丸を鞘に収める。

「ああ、連携もスムーズにいけたな」

「そうね。これなら、もう少し大胆にしてもいいかしら」

十文字克人も真由美をこの結果に納得しているようだ。

街中での戦闘ではあったが、被害も無くあっさりとは片付けることが出来たのだ。

「先輩方も大分、慣れたご様子ですね」

深雪は真由美に話しかける。

「倒した悪魔憑きをどうする?」

幹比古は倒れている悪魔憑きを見ながら皆に聞く。

「七草家のバックアップが近くに居るから、彼らに引き取らせる事にするわ」

「そうして」

真由美がそう提案するとエリカも素直にそれに同意する。

以前の二人はこんなことでも、いがみ合っていたのだが……今は、それからすると考えられないぐらいの関係改善がなされているようだ。

「それにしてもこんな夜半なのに井の頭公園は結構人が居るな。あの中にあいつ等（悪魔憑き）に入られていたら厄介だったな……それにしても何かのイベントか?」

井の頭公園の様子をふと見たレオはそんな感想を漏らし、幹比古に聞く。

「そうだね。……なんか、みんな今時に紙の厚い本を持っているし、やっぱり出版イベントかな?」

何気ないレオの質問に幹比古も疑問に思ったらしい。

電子書籍が主流の現代では、紙の本は、書籍ファンやマニア向けの

初版が出版イベントで販売されるぐらいなのだ。

「深雪ちよつと、どこ行くの?」

エリカは公園の方へ歩いていく深雪を呼び止める。

「小さい女の子が公園の中でうろうろしているのが見えたわ。迷子かも知れない。いってくるわ」

深雪はそう言って、人だかりの公園の中に入っていく。

「ちよつと!もう、私も行くわ」

エリカも深雪に続き公園に入っていく。

「十文字君、これ何かおかしくない?」

真由美は公園の中の人だかりを見て、考えるそぶりをする。

「何がだ?」

「こんな時間に、これだけの人だかりが居るのに。イベントなら照明を増設したり、派手に垂れ幕や、警備員が居てもおかしくないのだけど、何も無いわ。ただ人が集まっているだけ」

「確かに……吉田!あの二人を連れ戻してこい!」

「え?あ、わかりました」

「俺も行く」

幹比古とレオは十文字に言われ、深雪たちの後に続き公園に入っていく。

幹比古とレオが公園に入っていくのを見ていた十文字と真由美だったが……

「なんだ急に霧が出てきたな……」

「そうね。公園には池もあるし、それにしても……」

「!?いやなんだ。この霧の濃さは?いや、公園側だけだ!!」

公園を覆うように霧が立ち上っているが、公園の外側にいる自分達周囲には霧が無かったのだ。さらに、公園の内部が見えないぐらいに霧が濃くなる。

「!?皆を連れ戻しに行ってくる!」

「七草待て！」

真由美は十文字克人の制止を聞かず、公園の内部に入ってしまった。
「ぬかった！」

十文字克人は幹比古とレオを送り込んだことを後悔するが、すぐに気を取り直し携帯端末を取り出し、横島に連絡しようとした。

しかし、携帯端末は通話が出来ない状態になっていた。

「くっ、くそ」

十文字は珍しく慌てていた。

普段の戦闘ならば、冷静に居られるが、今起きている事象は明らかに悪魔が囁んでいるだろう。十文字にとって未知の領域だからだ。

公園の中心から円柱状に霧が発ち込める姿を、外側から十文字は見ていることしか出来なかった。

達也とリーナは横島と喧嘩をした植物園を後にし、三鷹駅へと魔法を使いながら加速して進んで行た。

達也は焦る。深雪に連絡が付かないだけでなく、幹比古やレオ、エリカ、真由美、十文字と全員に連絡をしてもつながらなかったのだ。

三鷹駅近くまで進むと、東の方（井の頭公園方面）では、なにやら煙のような物が円柱状に立ち上っているのが見えた。

「なんだ……リーナ行くぞ」

「わかったわ」

そして、井の頭公園方面に向かう。

達也達が向かった井の頭公園の前では、十文字が七草のサポート要員に忙しく指示を出していた。

「周辺の住民を近づかないように警告！誰か、七草と十文字、千葉、吉田の家に応援要請に直接駆けつけてくれ！」

「十文字先輩！これは？」

「司波か！急に井の頭公園に霧が立ち込めた。中には人が多数居る。お前の妹や、吉田達、七草も中に入ったきり戻ってこない」

十文字は、円柱状に発ちこめる霧を指差しながら、達也に怒鳴るよ
うに説明をする。

達也とリーナはその異様な霧を見上げる。

「くっ、連絡は付かなかったのですか？」

「ああ、どうやらこの付近は電子機器が通常に作動しないようだ！」

「タダオに知らせないと……」

「横島はどうした!？」

十文字は達也たちと一緒に居るはずの横島がここに居ないため聞
いた。

「先輩。横島はその……現在、休憩中です。ダメージを受けたので」

「横島がダメージ?……悪魔の攻撃か？」

「そうではないのですが……」

達也は言いよどむ。

井の頭公園を中心に半径600m程の円柱状に濃い霧が覆いかぶ
さっている状態であったが……突如として中から大きな雷鳴が外ま
で響き、雷などによる稲光や激しく光がスパークしている様が見えた
のだ。

「深雪!!」

達也はその状況を見たと同時に霧の中に突っ込でいった。

「待てー!司波!」

十文字は達也を大声で制止する。

「待って達也!」

リーナは勢い良く飛び出した達也を追いつき、止めようと腕を取
るが、勢いに負け、達也と一緒に霧の中に入ってしまったのだ。

「くっ、ここは……深雪!」

「達也!何でいきなり霧に突っ込むのよ!……冷静になりなさいよ!

このシスコン！」

リーナは達也の背中を思いつきり叩く。

「す…すまないリーナ」

「タダオに散々言っておきながら、自分はどんなのよ……そんなんじゃない失敗するわよ？」

リーナの叱咤で達也は冷静さを取り戻す。

霧の中に入ってしまった二人は改めて周囲を見渡す。

「視界は2メートルつてところか……」

「うん？達也、地面に本がたくさん散らばっているのだけど……」

リーナはそう言っつて、自分達が霧の中に突っ込んできた方向に歩く

……

「ツツ？なに……何も無いのに壁があるみたい」

リーナは何かにぶつかり、そのあたりを手で探る。

「結界か……」

達也もリーナの声で手探りで見えない壁に触れる。

「魔法で吹っ飛ばすわ！」

リーナはCADを構え魔法を発動するが……

「どうしたリーナ？」

「魔法が発動しない……」

「……」

達也もシルバーホーンを構え魔法を発動させようとするが、反応が無かった。

それだけではない。心なしか身体も重かった。

「キャストジャミング？」

「いや……わからん。しかしこの場でじっとしていても始まらない」

達也たちは、公園の中心に向かい歩き出すが、すぐに立ち止まる。

「なんだこの建物は？」

「なんだかヨーロッパの古い宮殿みたいね」

「こんな物が井の頭公園には無いはずだ」

雰囲気は厳かだが、そこには大きな中世ヨーロッパ調の大きな宮殿風の建物が建っていたのだ。

もちろんこんな大きな建築物が井の頭公園にあるはずも無い。

その頃横島は……未だ、調布市北にある植物園の中で、回復に勤しんでいた。

横島は井の頭公園に円柱状の霧の結界が現れたと同時に、この存在に気が付いたのだ。

「なんだー……急にどこから……いや……これは……魔界の瘴気……なぜ」

横島は立ち上がり、植物公園から勢い良く飛び出し、一気に井の頭公園へと向かったのだった。

178話 悪魔の謀略!!②悪魔の罠

「レオ、幹いる?」

「エリカも無事か?」

「僕も居るよ」

「みんな無事のようなね」

暗がりのなかエリカ、レオ、幹比古、真由美は声を頼りにお互いの無事を確認する。

「深雪は!」

エリカは、深雪の声が聞こえないことに気が付く。

「深雪さんは居ないみたいね……無事だといいいけど」

「それよりも自分達の心配したほうがいいのでは……これ、抜けないし」

「くそ、こんな縄!!うおー!!ダメだ。切れねー!!」

この4人は重厚感あふれる木製の椅子に座らせられた状態で、手首を手すりに縛られ、足首は椅子の足に縛られた状態で拘束されていた。

徐々に暗がりになると、お互いの居場所がおおよそ分かってきた。どうやら1メートル間隔ごとに、並んで椅子に拘束されているようだ。

「私達を離せー!!」

「こんなことをした奴、後で覚えて居ろよ!!」

エリカとレオは大声で叫ぶ。

「レオ、エリカ大声はまずいよ。敵を挑発してどうするんだよ」

「そうよ。こういうときこそ冷静に」

幹比古と真由美は二人に注意をする。

「……で、冷静な幹比古君はここがどこか分かるのかな?」

エリカは皮肉げに幹比古に聞く。

「うーん、この建物の中、本だらけだったから……図書館?」

「なんで、図書館が私達を拘束するのよ!!」

数分前……

深雪とエリカは、少女を追いかけ、井の頭公園に入った瞬間。公園ごと霧に包まれたのだ。

少女を見失うが深雪とエリカは霧の中を探しに歩きだそうとした直ぐに、幹比古とレオと合流。さらにしばらくし、真由美とも合流できた。

最初は状況も分からず、焦っていたが、霧があるだけで特に攻撃されるわけでも、眠くなるでもなかった。

しかし、公園の外に行こうにも、霧が濃く、さらに外縁らしい場所に行くと、見えない壁に阻まれたのだ。

そして、魔法を使おうとするがうまく使えない。身体もなんとなしに重い。

はじめは公園内に多くの人がいたのだが、いつの間にやら姿を消し、多数の本だけが地面に残っていたのだ。

その本は大きさもジャンルも様々でまるで統一感が無かった。

しかし、公園中に落ちている本が一齐に勝手にパラパラとめくれ、光を出したのだ。

良く見ると、本自身が光っているのではなく、本に書かれている特定の文字が複数光っていたのだ。その光は収束しレーザービームのように放たれる。

そして、その光は何も無い空間を駆け巡り、その光が通った後には徐々に何かが映し出されるように巨大な建造物が現れたのだ。

中世ヨーロッパの宮殿を彷彿させる建物……

この建物は『全世界図書館』と呼ばれる建造物だった。

宇宙の理から、一人一人の人生まで、書物として保管する図書館。

天上においては、天界図書館と呼ばれ、魔界においては大魔界図書館と呼ばれる物だった。

まさしく全世界の記録が集う図書館である。

強ち、幹比古の推測は間違いではなかった。

そして、地面の落ちていた多数の本はこの全世界図書館を召還する為の術儀だったようだ。

「なっ！なにこれ！」

「今まで無かったよね。こ、こんなの！」

「どど、どうなってるんだ？」

「ゆ、夢…夢よね」

エリカ、幹比古、レオ、真由美が目の前その建物と出現と次々の起こる事象に驚いている中……

深雪は……

「あの子、あんなところに……」

そう言っつて、何かを追いかけようようにその建物に走っていく。

あの子と深雪はそういつたが、深雪が見ている方向に人などは居ない。

「深雪…どこに！」

「深雪さん皆から離れてはダメよ！」

エリカと真由美はそれを引きとめようと叫ぶが……深雪はついにその建物の大きな扉から中に入ってしまった。

「……深雪どうしたんだろ？様子がおかしかった」

「そうね。どことなく虚ろというか……」

エリカと真由美は深雪が建物の中に入っていった方向を見つめていた。

「とりあえず、探しにいこうぜ」

レオは早速、建物の方へ歩みだす。

「でも、これって、もしかしたら悪魔の罫かもしれないよ」

幹比古はそう言っつてレオを止め様とする。

「そうね。なぜか魔法も使えないし……下手に動く危険だわ。横島君たちがきつと応援に来てくれるわ。それまで待っていきましょう？」

真由美も幹比古に同意する。

「わかったわ」

「じゃあないか」

エリカとレオもそれに付き従うのだが……

ギョエーーーーーッ！

上空でなにやら奇怪な動物の鳴き声がする。

皆は一同に上空を見上げる。

「なななな!!」

「ななんだ。ありや!!」

「き……恐竜?」

「……夢よこれはきつと夢…はつ、新手の式神かもしれない!」

エリカ、レオ、幹比古、真由美はその生き物を見て、一様に派手に驚く。

見た物は、体長20メートルはあろうかという。翼竜に似た生物だ。

その生物が3、4匹空をぐるぐると飛び回っているのだ。

「おお、おい?あいつ等、こつち見てないか?」

「た、たぶん……目つきが悪いだけよ」

「僕は美味しくないよ」

「……あれは式神、そう六道芽衣子の式神よ!」

そして、その翼竜はこちらに首を向け……大口をあけながら一気に降下してきた。

「うわーーーー!!逃げろーーーー!!」

「目つき悪いって言ったのごめんってーーーー!!」

「僕は美味しくないよ!美味しくないって!!」

「ほ、ほんもの?きやーーーーー!!」

皆は一斉にあの建物の、深雪が入っていった扉に逃げ込んだ。

「はあはあ、とんでもない目にあつたな」

「な、何よあれ、ここは何億年前なのよ?」

「ふっー、タイムスリップ？でもこの建物は中世っぽいし」

「はあ、はあ、冷静によ冷静に、真由美」

レオ、エリカ、幹比古、真由美は何とか難を逃れたが、結局深雪が入った建物の中に入ってしまった。

「ここはどこかしら？さつきまで井の頭公園にいたはずよね」

「先輩、井の頭公園に恐竜は居ませんよ。ましてやこんな建物無かったです」

「じゃあ、どこなのよ幹く」

「まあ、どこだっていいじゃねーか、司波妹を探さないとな」

真由美、幹比古、エリカ、レオは建物の中を見渡していた。

天井は高くに先が見えない幅広い廊下があり、扉がいくつも見える。

少々風変わりな風景に見える。それは廊下の壁には背の高い本棚がびっしり詰まっていたからだ。

皆は意外と冷静なのかもしれない。こんな状況でも、会話をすることができているのだから……レオにいたっては能天気すぎる。ある意味大物だ。

「そうするしかないわね。でもなんか、身体に力が入らないわね……」

エリカはレオに同意しつつ身体が思う様に力が入らないことに疑問しながら、廊下を歩き出す。

「お前もそうか……力が出ないんだよな」

レオも同様らしい。

「そう？・私は余り変わらないけど」

真由美は余り違和感が無いようだ。

「うん、魔法も使えないしというか、霊気がほとんど感じられない？あれ？僕たち死んだ？」

幹比古は歩きながら、霊視をしていたが、自分たちの霊気（サイオン）が異様に少ないことに気が付いた。まるで一般人並に……

「おい司波……!!どこに居る……!!」

レオは廊下を歩きながら、深雪を探すため大声を出したのだ。

「レオ……!しーっ」

幹比古はレオの口を両手で慌ててふさぐ。

「むぐ、何すんだよ幹比古」

「何すんだよはあんたよ……馬鹿なの?そうだったわね。あんたは大がつく馬鹿よ!」

エリカはレオに顔を近づけて、小声で罵る。

「西城君、ここは敵の中の可能性が高いのよ。大声はダメよ」

真由美はレオにやさしく諭すのだが……

ガシャガシャガシャガシャ

「ん?なんか来たわよ?……」

「騎士?西洋の騎士?フルメール?」

「おお!かつこいいな!」

エリカと真由美、そして暢気なレオが声を上げる。

廊下の向こうから、西洋甲冑の騎士の団体がガシャガシャ音を立てながら走り迫ってくるのだ。

「言ってる場合じゃないよ!!逃げよう!!」

幹比古がそう言うが早し、皆は既に回れ右をし、逃げ出していた。

そして、手近な扉を開け、部屋に入る。その部屋は本棚と本でびっしりと埋め尽くされていた。

扉の向こうでは甲冑の音が過ぎ去った。どうやら、見つからずに逃げお世話らしい。

「ふー、危なかった……レオはしゃべるの禁止だよ」

「わ、わるかった」

「あんたに巻き込まれる身にもなってよ」

「……………」

エリカ達はレオの天然に巻き込まれることに慣れているが、さすがの真由美は疲れた表情をしていた。

『よう、娘っこ、大分ピンチらしいな……こりや、お前らの霊気や気は今、一般人と変わらんみたいだぞ。魔法は使えんし、いつものように身体が動かないわけだあな……』

エリカの愛刀紅鮫丸が鞘に刺さったまま、話かけてきた。

「紅公！あんた何かわかるの？そういうえばあんた、霊気（サイオン）無しでも動けるの？」

『はっ、こちとら機械とのハイブリットよ！緊急電力供給モードがようやく作動したところよ……どうも、こりやよくねーな。詳しいことはわからんがどうやら空間が捻じ曲がっているぞ。それが影響してるんだらう……緊急SOS通信も途絶えてらーな』

さすがはドクター・カオスの作ったAIだ。癖はものすごいあるが、ピンチには頼りになる。

「空間がって……まあいいわ、深雪が居るところが分かったりする？」
『いんや、さっぱりだ。ただ、出口まではマップピングしているから、うまくいきや、脱出できるつてもんだ』

「そう、外にいったら行つたで、あの恐竜みたいのが襲ってくるし……」

「とりあえずここで、横島達を待つ？」

「そうね。敵をここでやり過ごしましよ、横島くんだったら必ず助けに来てくれる」

「しゃーねーか」

どうやら、ここで助けを待つ事で皆の意見が一致したようだ。

「紅公、あの追いかけてきた鎧はなんなの？」

『どうやら、リビンググアーマーっていう低級な悪霊や悪魔の一種らしい。マリア嬢のデータ集で確認できた』

どうやら、マリアは過去の記憶を元にいろいろなデータ集を作っていたようだ。もちろん、この世界が構築される前のデータもだ。

「鎧の悪魔か……まるで御伽噺だな」

レオは紅鮫丸の話聞いてしみじみという。

『魔術や魔法が効き難いとある。素手ももちろんだ。耐久力が持ち味

の奴だ。まあ、中身も空で、頭の中も空っぽな連中だ。命令に愚直に従うって特徴がある』

「ふーん。あんたと大違いね」

『べらんめえー！こちとら、悪霊退治のイロハを娘っこに教育する立場なんだ！こつちの言うことを素直に聞くつてのが筋じゃねーか！』

エリカの皮肉に、紅鮫丸は少々お怒りのようだ。

「ぐっ、なによー！」

「エリカ…自分の刀に言い負かされてない？……まあいいや、そのリビングアーマーに弱点とかないのかな？」

幹比古はエリカを哀愁漂う目でみてから、紅鮫丸に問いかける。

『あるにはあるが……おめーらには無理だな』

「無理つて、紅公……本当は知らないんじゃないの？」

『今は魔法もろくすつぽ使えない状態だろ！魔法が使えない魔法師が何言つてやがる！おとなしく逃げ隠れするのが吉だつてもんだ！』

またしても、エリカは言い負かされていた。

「そうね。その刀の言うとおりでわ」

真由美は紅鮫丸の意見に同意する。

『おう、ちっちゃいのにグラマーなねーちゃん。判つてるじゃねーか！』

「……………」

おっさん臭い……いや、人間臭い刀、紅鮫丸に、何故か呆れる思いがした。なぜ刀のくせにこんな人間臭いのだろうか？AIにこんなわけがわからない、めんどくさい人間性が必要なのかと……それは製作者であるドクター・カオスにしか判らない。

いや、たぶん。ただたんに面白がっているだけだろう……

『まずいな、さっきの鎧野郎共がここを囲んでやがる』

紅鮫丸は皆に警告する。

そして、エリカ達は、西洋甲冑の騎士、いや、中身が無い鎧だけで動いているリビングアーマーという悪霊、悪魔の一種に部屋に突入さ

れる。

エリカは剣術で、レオは素手でリビングアーマーを何体か叩きのめして抵抗していたのだが、多勢に無勢……あえなく捕まってしまったのだ。

そして今に至る。

「横島、早く来てくれないかな」

「きつと横島が助けにくれる」

「達也たちも居るし、きつと来てくれるや」

「横島くん……」

皆は椅子に縛られながらも横島が助けに来ることを信じていた。

しばらくし、甲冑のガシャガシャとこすれる音が近づいてきた。

同時に女性の声も聞こえてくる。

若い女がリビングアーマーに後ろで捕まれ連行されてきたのだ。

「離して、あんた達なんかタダオが全部倒してくれるんだから……」

つれてこられたのは、リーナだった。

リーナは必死に抵抗している。

達也とリーナは皆を探すため一緒にこの世界図書館の中に忍び込んだのだが、捕まり連れて来られたのはリーナだけであった。

どうやら、達也はまだ捕まっていないようだ。

「リーナさん？……なぜここに？」

「あんた、助けに来てくれたんじゃないの？」

真由美とエリカは、リビングアーマーに連れてこられたリーナに話しかける。

「どじ踏んでつかまったのよ。……皆無事でよかったわ。深雪の姿が見えないけれど？」

「深雪とは合流できてない。……この建物の中に私達より先に入ったのだけど、それからは……」

「そう……まだ捕まっていない可能性もあるわね」

「はあ、そうなんだ。そういえば、今日は横島と達也と一緒に来たはずだけど二人は？」

リーナは幹比古の問いに無言で首を横に振る。

そして、真由美の横に皆と同じように椅子に座らせられ、拘束される。

「まあ、そのうち来るだろ。あいつらのことだから」

レオはこんな時でも能天気だ。

実はリーナはただ単に捕まったわけではない。

達也とリーナは、霧の外に出られない以上、先に巻き込まれた皆と合流したほうが良いと判断し、彼らはこの建物（世界図書館）に逃げ込んだか、若しくは、捕まった可能性もあると見て、搜索のため、この怪しげな建物に忍び込んだのだ。

達也は霊気や気などを使えない状態でも、九重流の忍者が源流の体術を身につけており、気配を消し、音も立てずに忍び込むことを得意としていた。

一方リーナは、軍人としての基礎体術は持っていたが、このような諜報活動などのスニーキングミッションを得意とするほうではなかった。

達也の指示通りに後について行くことで、リビングアーマーが常に警備するように歩き回っている中でも見つからず搜索することができた。

そして、とある部屋で、争ったような後を発見する。

真由美が持っていた破魔札ショットガンや、古式魔法の札などが落ちていたのと、出血の跡などが無かったことから、彼らがこの建物内に入り、捕まったと判断した。

そこで、このただっ広い建物内を探し回るのはリスクが大きいと判断し、リーナに囮をさせてわざと捕まるようにし、皆が連行した場所まで連れて行かれるところを達也の忍びのスキルで見つからないよ

うに後を付け、隙を突いて助ける作戦に出たのだ。

人間の中での戦争や紛争ではそれは正解なのかもしれない……しかし悪魔相手には悪手もいいところだ。悪魔に人間の常識は通用しない。人間を出血させずに殺すことも出来るし、捕まえて閉じ込めるなどという発想がそもそも無い可能性もあるのだ。

今回は、悪魔が彼らに利用価値を見出し、捕らえただけで……見つけられたその場で丸呑みされることもある。たまたま運が良かっただけなのだ。

やはり、悪魔に対しては素人同然である。

達也は現在、捕まったりーナの跡をつけ、気配を消し、息を潜め、皆が捕まっている部屋の様子伺っていた。

(皆は無事のようにだ。……深雪はどこに……)

そして、皆が捕まっている暗かった部屋が、天井から釣り下がっている灯籠が徐々にポウッと灯りだす。

皆の視界が明かりと共に徐々に広がる。そこはかなり広い広間のようにだ。まだ壁が見えてこない。

天井もかなり高い。

ようやく、並んでいる皆の両側の壁が見えてきたのだが、そこにも天井に届くほどの高さの本棚が壁一面にあり、びっしりと本で埋まっている。

そして、前方も視界が広がっていく。すると、皆が並んでいる場所から10メートル程離れた右斜め前に、人影が見えてきた……

アンティーク調の赤い布地で木製の淵で出来た大きな高級そうなソファアーに一人の少女がポツンと座っていた。

ソファアーが大きいために、少女の足はまったく床につかない。

その少女は、青い目に真っ白の顔、真っ赤なカチューシャを頭にし、長い黒髪を後ろに垂らし、白色のフリルのついたゴシック調の黒

に近い紫のワンピースを着こなし、真っ赤な靴を履き、そして、白い手袋をはめて、重厚そうな本を開き、微動だにせずに持っている本に視線を注いだままの状態である……一見、人形にも見えるが、ゆつくりと本に注がれている視線が動いている。

さらに、視界が開けると、その少女の足元右側に、大きな大きなライオンが欠伸をして寝そべっており、椅子の後ろには、執事調の服を着た背の高い人型のものが、紅茶のポットとティーカップが乗った銀の盆を手にしていた。その執事調を人型と呼んだのは、とても人間には見えなかったからだ。顔があるべきところに、目や鼻や口が無いのだ。何か木のうろのような模様がついているだけだった……

皆は不思議そうにその光景を見ていた。一見場違いの様相に見えるが、何故かこの広間に溶け込んでいるかのようにしっくりくるのだ。

そして、どこからか、その余韻を遮る様に、よく通る低めの渋い男性の笑い声が響き渡る。

「ふふふはははははっ、はははははははっー、今日は実に気分が良
い！」

一方横島は……

霧で覆われている井の頭公園の前に来ていた。

公園から少し離れた場所で、十文字が忙しなく人々に指示を出していた。

「十文字先輩！」

「横島か！……すまん。俺以外全員この霧の中だ。司波兄とシールズも中に入ったきり戻ってこない。中の状態はまったくわからん。う

かつに中に入ることとは出来ないかと判断した。

周辺住民の避難は進ませている。各家の応援も駆けつけてくるはずだ」

「さすがです。十文字先輩。助かります」

「横島、これはなんなのだ」

「……間違いなく悪魔の仕業です」

「やはりか……」

「どうする横島！」

「助けに行きますが……ちよつと待つてください」

そう言つて、横島は霧の近くまで歩む。

（これは、相当やばい。中は魔界化している……なぜだ。この世界は、神の最高指導者と悪魔の最高指導者が外郭に結界を張っているはずだ。こんな大それた事を出来るはずが……いや……一つだけある。悪霊が霊力の高い人間から血を奪う行為……あの時に似ている……盲点だった！この世界にあんなものがあるわけがないと思いついでいた！……破壊され、機能していなかったためこの世界に残ったのか？誰かが修復したのか？くそつ、あれであれば可能だ！）

「くそつーやられた!!」

横島は夜の空に叫ぶ。

ようだ」

「ん？……あの嬢ちゃんの頭の上になんかないか？」

「なにか居るわね……」

「……何よあれ？」

「……うわー、なんか気持ち悪い」

「ゴルフボール？」

レオ、エリカ、リーナに幹比古、真由美はゴシツクロリータの少女の頭の上に何かを見つけたようだ。

ゴシツクロリータの少女の頭の上には……何かが飛んだりはねたりしていた。

目を凝らしてみると……

目玉にマツチ棒のようなひよろつとした体が生え、そこに、これまでマツチ棒のような手足が申し訳程度生えている。目玉が直径5センチ、体が5センチの全長10センチ程度の奇怪な生き物が居たのだ。……いや、まんま目玉のおやじ……しかも偉そうに真っ赤なマントを背中に羽織っている。

ただ……その瞳は黄金色に怪しく色づいていた。

「恐れおののけ!!余こそが魔界四大王の一角にして、この世のすべての頂に立つもの」

どうやら、渋い声の主はこの目玉のようだ。その良い声と偉そうな物言いと、この目玉にマツチ棒な体とのバランスが著しく合っていない。

「余の名は!!ベリア……ぶっ……ぶっ……!!」

その目玉がポーズを決めながら自ら名乗りを上げようとしたのだが……

「うるさい……です……館内では静かに……です」

ゴシツクロリータの少女が自分の頭の上で暴れるこの目玉を、抑揚の無い口調でそう言って無造作に掴み、壁に向かって投げつけたの

だ。

「ゴバツ!!」

壁に投げつけられた目玉は本棚の角に直撃する。

少女はそんな目玉に目もくれずに再び本に視線を戻す。

目玉は、ヨロヨロと立ち上がり、飛び跳ねて少女に怒り出す。

「グヌツ、……ダンタリオン!!何をやる。余の頭が割れるところではないか!!」

目玉は目玉のサイズと同じくらいサイズのタンコブがプクツと出来上がる。もはやどつちが本体か判らない。

さらにダンタリオンと呼ばれたゴシッククロリータの少女は自分の履いている赤い靴を目玉に投げつける。

「館内では静かに……です……」

ゴンツ

「イタツ!」

目玉は赤い靴が直撃し吹き飛ぶ。目玉のタンコブから、さらにプクツと目玉と同じサイズのタンコブが出来上がる。目玉にタンコブが二つ連なる姿は、もはや、みたらし団子。……どこかの団子三兄弟のようなのだ。

「ぐぬぬぬツ、調子に乗りおって、余がこの世界を手中に収めたら、見ておれよ。真っ先にあやつを、辱めてやる……」

目玉はその小さな身体で、目玉とタンコブを支える様にヨロヨロと立ち上がり、声を小さくしてぶつぶつと何か喚いていた。

そう、このゴシッククロリータ風美少女こそが、ダンタリオン。横島が危険視していた36の軍団をすべると魔界の公爵『魔神ダンタリオン』だったのだ!!

そして、彼女こそがこの『全世界図書館』管理者であった。いわば宇宙意思の一端を担っている存在なのだ。

なぜ、その管理者が悪魔の上、悪魔の最高位である魔神を名乗っているのか……

実は彼女自身は悪魔でも、ましては神でもない存在である。

彼女は『全世界図書館』の管理者として、宇宙にあるすべての情報を集め、この図書館に記録管理することが使命であった。

そのため、情報を集める事自体が、彼女にとって最優先すべき行為であって、その過程の善悪の考慮などはまったく無い。神の側からすると、時には規律違反になるような行為も行っていた。宇宙に存在するすべてを記録するために、そうでなくては遂行できないものも多々あるからだ。

そして魔神という立場であれば、彼女の行為は特に問題には問われない。何も知らない神に付け狙われる可能性もあるが、彼女自身、他者を害したり、破壊などの行為は一切行わず、めったに姿を現さないことから……穏健派の魔神として扱われ、討伐の対象外となっていた。

そんな経緯から彼女自身、自分が魔神などと言う立場に居ることも、さして興味が無い。ただ、『全世界図書館』に情報を記録するために、行動する……

さらに彼女は魔神として36の軍団を率いているとある……確かに、彼女の元に軍団にも見える規模の悪魔などが集まっているが……あれは軍団などではない……

彼女のそのゴシッククロリータ調の幼い姿、そして立ち振る舞いに心奪われた……その手のマニアが狂信的に付き従っているだけの話なのだ。いわゆるアイドルの私設ファンクラブみたいなものだ。

それぞれの集団（ファンクラブ）の名は、それぞれの趣味指向を掲げた旗を掲げている。靴跡をモチーフにした集団は、彼女に靴のまま踏んでほしいと願う集団。その下位集団旗は、顔に靴跡、尻に靴跡、手に靴跡などをモチーフにしたものがある。……そんなのが36集団あるのだ。

しかも、この連中、下手な軍団よりも結束が固いのだから困ったものだ……

彼女本来の支配下のものはまったく別物で、36の軍団はただのファンの集まりに過ぎない。

齊天大聖老師がジークに受けた報告にあったダンタリオンの軍団

いるようだ。

「……なんだあの目玉、偉そうに……魔王？魔界？何言ってるんだ？」
「なんか、誰かに似てない？……あつ！ドクター・カオスに似てるんだ！」

「そうよ！それよ！たぶん、紅公と同じで、きつとドクター・カオスが作った訳がわからない玩具よ！」

「よく、できた玩具ね。でも、好きになれないフォルムね。ちよつと気持ち悪いわ」

「……うーん。意外にストラップとかにすればいいかもしれないわね」

レオ、幹比古、エリカ、リーナ、真由美は魔王ベリアルと名乗った目玉に、全然恐れも絶望もしなかった。

目玉とゴシツクロリータ少女が織り成す喜劇を、啞然と見ていただけである。

しかも、あの目玉をドクター・カオスが作った悪趣味なおもちゃか何かと思っているようだ。

「ぐぬぬぬつ、何たる無礼！」

こんなエリカ達の態度に目玉はプンスカと怒り出す。

「いや、目玉の玩具に恐れろって言われてもね」

「目玉に魔王を名乗られても……」

「魔界とか魔王とか漫画やアニメの中だけにしてよ」

「かわいくない」

「なんで、目玉がマントしてんだよ？」

エリカ、真由美、幹比古、リーナ、レオは口々に軽口を言う。

「貴様ら……!!許さん!!」

目玉なので表情はわからないが、相当お怒りなのがわかる。

なぜならば、目玉だけなのに青筋を立てていたからだ。どういう構造なのか、実に器用である。

そして、目玉の頭部？から湯気が立ち上り、目玉の金色の瞳がより

いつそう輝きだし、ビームが発射されたのだ!!

ビームはエリカとレオの間を通る。

エリカ達の後ろにあった本棚はめちやくちやに破壊され、ビームの余波でレオの頬には一筋の傷が出来る。

その光景に幹比古と真由美は青ざめる。

「何すんのよ!!」

「いてーじゃねーか!!」

「あんたなんか、タダオがきたら一ひねりなんだから!!」

エリカとレオとリーナは逆に目玉に睨み返していた。

しかし

「本を傷つけるのは禁止…です…騒音も禁止…です」

そう言つて、ダンタリオンは容赦なく目玉に向かって、フォークやらティーカップにポットなどそこらじゅうの物を投げつけた。まあ、当然の結果ではある。

そしてそのすべてが目玉に直撃する。

「イタッ!何をやるダンタリオン。こやつらに教育していたまでだ!イタッ!うくくくつ、もうせぬ。だからやめろ!グボン!!」

目玉は言い訳を言うが、ダンタリオンには通じない。ついにはフォークが目玉に突き刺さる。

「カペペ…ペペ…ぐぬつ、覚えておれ、ダンタリオン。いつかはそのきれいな顔を羞恥と恐怖の色で染めてやる……」

目玉はダンタリオンに聞こえない位の小声でそういいながら、フォークを目玉からズボツと抜き放つ。

華奢な外見の割りに意外と丈夫な奴である。

そして、ぜえぜえと息を切らしながら、エリカ達を見据える。

「これでわかったか、余の恐ろしさを!」

……ビームの威力は分かったが、それ以上に、この目玉の恐ろしさより、ダンタリオンの逆らわないほうが良いことがよく理解できただろう……

「貴様ら、自分の立場がよく分かっているようだな。貴様らは捕ま

かろうじて理解しているのは、自分達がとられの身で立場的に弱い事だけだ。

「なんだ。その反抗的な目は……うむ、愚鈍な貴様らには、言葉だけでは理解できないようだな」

目玉はマツチ棒のような手をパンパンと2回鳴らす。

するとすつと暗闇から人間の男がすつと現れ、手のひらを上にする。

そして、その目玉がちよこんとその手のひらに乗っかり、エリカ達を見据える。

「このものはかつての貴様達の同胞よ。余の力で、この者は既に余の忠実なしもべにして余の手足となった。そして貴様らの未来の姿よ！……これで理解できただろう。クククククツ、貴様らをどう料理してやろうかと、今から血が滾る……しかしまだだ」

その男は目玉を自らの頭の上に載せる。

そして、ようやく、エリカ達に焦りの色が見え出してきた。既に先ほどのような余裕は一切見られなくなっていた。

特にリーナはかなり狼狽していた。

「ジョン？……ジョン少尉……」

その男はかつて、スターズでリーナの部下だった男だ。USNAの実験後行方不明になっていた人間のひとりだったのだ。

しかも、ジョン少尉の額には金色の第三の目が開かれていた。

そう、エリカ達はようやく理解しだしたのだ。今まで戦ってきた悪霊の親玉が、この目玉であることに……悪魔の長、すなわち悪魔の王と名乗ったのも、あながち、冗談ではないことを……

「貴様らが、今まで戦っていたのは、余が遣わせた下つ端悪霊どもよ。余はそやつらの主である!!……くくくくつふははははつ、その表情……ようやく理解してきたようだな下等生物ども。その顔よ。そう言う顔が余はみたかったのだ!!」

目玉はエリカ達の余裕の無い表情を見て、高笑いをする。

そして、目玉は改めて名乗りを上げる。

「余は貴様ら人間が遠く及ばぬ存在。貴様らが言う高次元生命体……数多の悪魔の頂点に君臨する魔神にして、魔界四大王の一柱!!ベリアルである!!この世界の王になり!!貴様らの主となる存在だ!!」

この目玉、ただの悪魔ではなかった。ベリアルと名乗ったのだ。

もしそれが本当であれば最悪だ。

ベリアル……あのルシファーに次ぐ墮天使であり、悪魔としても強力無比な存在。魔界では王の権限を持つ存在。……そして、人間が思い浮かぶ悪魔の所業をすべて行ってきた悪魔中の悪魔なのだ!

関わった人間をすべて犯し、辱め、蹂躪し、人としての尊厳を徹底的に壊し、それを自らの快楽とし殺していく。

ベリアルについて、こんな伝承が残っている。

自らの娯楽、快楽のために、とある村を獣姦だけしか出来ないように、精神コントロールをかけ、その村は子孫が残せず全滅。とある村は男同士でしか快楽を得られなくする精神コントロールを掛け、男色の村にし、子孫が残せず全滅させたのだ。もはやありとあらゆる目をふさぎたくなるような所業を積み重ねてきた最悪の悪魔なのだ。

しかし、本来のベリアルは一見美青年であつたはずだ。それがなぜ目玉だけに?

それはさておき、この魔王ベリアルがこの世界にダンタリオンを手引きしたのは間違いのないようだ。

ダンタリオンはこの世界の情報を欲していたのを利用したのだろうか。

しかし、この魔王ベリアルは、なぜダンタリオンを手引きしたのか?

どうやって、これほどの魔界化を起こす場を作ることが出来たのか?

なぜ、このタイミングで仕掛けてきたのか?

最終目的はこの世界の支配なのだろうか……なぜ、ダンタリオンを必要としたのか?

まだまだ、なぞが残る。

「ふふふふつ、困惑した顔、実に良い。徐々に恐怖を植えつけてやろう。……しかし、それはまだだ。今日は実に良い日である。貴様らはそれを目撃するギャラリーとして、ここにいるのだ。喜べ、貴様らにはまだ手だしはしない」

目玉：いや魔王ベリアルはジョン少尉の頭の上に乗る、エリカ達の正面やく12、3メートル付近の明かりがともっていない場所へ移動する。

そして、その場所に明かりがともりだす。

すると、石で出来た大きなテーブルの上に人影が仰向け寝かされている姿が見えてきた。

その人影は……深雪だった。

深雪は、石のテーブルの上で、足枷と手枷をはめられ鎖で引っ張られるように大の字状態で拘束されていたのだ。

「深雪!!」

「深雪さん!!」

「くつ、目玉野郎！司波に何をした!!」

「ふふふつ、くくくくつ、安心しろ、今は寝ているだけだ。……今はな」

目玉もベリアルは嗜虐的な笑い方をする。

「深雪をどうする気!」

「……くつ」

達也は先ほどから、この広間で繰り広げられる目玉とゴシツクロリータ美少女の喜劇に似た何かと、仲間の状況を、気配を消し、彼らを助ける算段をしながら様子を伺っていたのだが……

突如として思わぬところで深雪が見つかったのだ。

深雪は魔王ベリアルに意識の無い状態で皆とは明らかに異なる待遇で拘束された状態であったのだ。

達也は深雪のこの状態に憤りと焦りで今にも飛び出したい感情を

必死に抑えていた。

同じ広間で、ちよこんとソファーに座り、本を読んでいるゴシツクロリータ美少女、ダンタリオンは魔王ベリアルとエリカ達との会話にまったく興味がないのか、見向きもせず手元の本に視線を落としたままであった。

少し前……霧の外では……

(神と魔の最高指導者が結界を張り、封印を施したこの隔絶した世界で、魔界化が起こるなんてことはありえない。……が、実際起こっている。しかも、霊能力者の血と霊気を悪霊たちは奪っていた。あれはあの装置を機動するために必要なもの……間違いなく『元始風水盤』だ。あれであれば隔絶した世界だろうが、魔界化現象を起こせる。……100年以上前に、二度と起動しないように破壊されたはずだ。……そう思っていた。しかしどういいう経緯か分からないが修復され、日本にある……これは相当、手の込んだ準備と戦略が練りこまれている。……非常にまずい……)

『元始風水盤』

次元や時流、気の流れを変更できる古代遺跡のような巨大な風水盤状の装置。

宇宙の造物主が作成したとされる。宇宙創成に関わる装置といわれている。

100年前、一部の魔族の策略により、アジア全体を魔界化するために起動された事件があった。

当時の横島達の仲間やドクターカオスとマリアの活躍で事なきを得たのだ。

その後、元始風水盤は神の勢力によつて、封印または破壊されたはずだったのだ。

これを利用すれば、世界の理すらも書き換えることも可能なのだ。

但し、起動には霊能者の血と霊気が必要なのだ。

造物主は何をもってそれを起動キーとしたかは分からないが……

神や魔ではなく、人間のものが必要だったのだ。

霧の中で、エリカ達を拘束し、いろいろと暗躍していた目玉、いや魔王ベリアルが、元始風水盤を手にいれ、修復し、設置したことは確かだろう。

横島は目を瞑ってから、決心したような顔をし、携帯端末を取り出し、伝言を録音する

現在、この周囲は通信できない状態だ。横島は携帯端末を自らが作った式神に乗せ飛ばす。

通信可能範囲に式神が到達すると携帯端末から録音した伝言を誰かに発信するつもりなのだ。

そして、横島は夜空を見上げ、力いっぱい叫ぶ！

「小竜姫様!!見ておられるのでしょうか!!お願いします!!俺に力を貸してください!!俺はこれから、霧の中に入ります!!霧の外の事をお願いします!!」

その後、横島は十文字克人の下に歩み。

「十文字先輩、六道家にこの事を、緊急事態だと伝えてください。きつと助けになってくれます。それと、これを渡しておきます……この玉は、先輩の守りたいと思う心に、反応し……先輩の防御魔法を寄り強固にしてくれるでしょう。いざというときに使ってください」

横島はそう言って、記憶喪失時に作り、ストックしてあった劣化文珠の一つを十文字克人に渡す。

「わかった。横島……やはり行くのか」

「はい、皆を連れ戻しに行きます。後はお任せします……『解禁』」
横島は十文字にそう言うことから、静かに自らの封印を解く。

霊気の嵐が横島を中心に吹き荒れる。

「くっ……なんて気迫だ。……これが横島の……本当の力か……」

横島は劣化文珠を空に6つ飛ばす。文珠は霧の外郭を六芒星を描くような配置に飛んで行き、地面へと落ちる。霧が広がると起動する強力な結界陣を準備したのだ。

そして……

「行ってきます」

横島は霧の中へと消えていった。

180話 悪魔の謀略!!④悪魔の目的

最悪の悪魔。魔王ベリアル…ありとあらゆる悪行を行ってきた悪魔中の悪魔。

その悪魔が、エリカ、レオ、幹比古、真由美、リーナの目の前で深雪を辱めんとしていた。

……傍から見れば、その姿は、趣味の悪い目玉のおもちやにしか見えないのだが……

『全世界図書館』

宇宙中の情報が本として保管されている図書館。

宇宙意思の一部とあって良いこの図書館の中では、神や魔神さえ、力を振るうことが出来ない。

すべての生命は、霊力、魔力、気の何れかを纏い、それが力の源となっていた。その力の源を、この図書館内では著しく制限され、本を閲覧できる程度の力しか発揮できなくなるのだ。いわば、一般の人間と同レベルまで、引き下げられてしまうのだ。

例外は、この図書館の管理者であるダンタリオンとその配下、及び司書などの関係者に認められた存在だけだ。

エリカ達魔法師は、魔法を完全に封じられた状態であった。

エリカや達也など高レベルで剣術や体術を習得しているものはある程度、戦うこともかなうだろうが、それにも限界がある。

剣術や体術を習得していようと、気を制限されている状態では、それらも本来の力を発揮できない。

この図書館内では、達也も深雪も、エリカ達も力が発揮できない。そして、対峙している相手は力が発揮でき、人間とは比べ物にもならない力を持っている存在。

石で出来たテーブルに大の字に鎖で拘束され、気を失っている深雪

の前に、ジョン少尉の頭上のベリアルは、高らかに笑っていた。

「ふふふふつ、はーはつはー！ついに身体を手に入れることが出来る！この95年間、我が身はこの眼球だけになってしまったが、とうとう復活の礎を手に入れたのだ!!」

「深雪に何をやる気よ！」

エリカは椅子に拘束されたままベリアルに向かって叫ぶ。

「くくくつ、ギャラリー諸君。今日は本当に良い日だ。この娘の適正のある身体を手に入れ、余の身体とするのだ!!そして、余自身が子を孕み、完全な肉体として産み落とし、余は完全復活を果たすのだ!!」
ベリアルは深雪の身体をのっとり、一時的に本体となり、その深雪の身体を使い、ベリアル自身の肉体を産ますつもりなのだ。

ベリアルは深雪を使って肉体の完全復活をもくろんでいたのだ。
日本における吸血事件：悪霊の妙な動きは、血を奪うだけでなく、ベリアルの肉体の適正者を探していたのだ！

強力な魔法師の中に、ベリアルの肉体適正者がいるだろうと当たりを付け、支配下の悪霊に魔法師にわざと見つかるような動きをさせて、探していたのだ。

そして、深雪を見つけ、今日それを実行したのだ。

「なつ、やめろ！」

「なんて事を……」

エリカ、レオ、幹比古、真由美、リーナは木製の椅子に拘束されたままだ。ベリアルに対し何もすることが出来ない。

「貴様らは、その復活の第一歩であるこの娘の身体を奪う様をここで見ているがいい！33年前は思わぬ伏兵（あやつ）のために、失敗したが、今回は完璧だ。」

33年前、余に齒向かうだけの力を持つものが、この世界に居たのが誤算だった。

しかし！……くくくつ、元始風水盤を復活、この世界に魔界を出現させ、全世界図書館を召還をなし、そして、適正のある肉体までも、

手に入れた!!

完璧だ……まさに、穴などどこにも見当たらぬ!!

ふふふふふつ、はーはっはっはー!!

この図書館内では誰も余に手を出すことは出来ん!あの最高神と腰抜けのサタンすらな!!」

ベリアルは饒舌に声高らかにあげ、悦に入っていた。

ベリアルはUSNAの実験でこちらに来たのではなかった。

95年前に既にこの世界に来ていたのだ。

身体のひとつを失い、力もほぼ失った状態で……命辛々にこの世界に逃げおおせてきたのだ……

幸いにも、存在が小さくなったがために、この世界に偶然に潜り込めたといっただろう。

ベリアルは神も魔もない世界を好都合とし、自分をこんな姿にした神魔どもに復讐をはたさんと心に秘め、雌伏の時を過ごす。

50、60年掛け、ほぼゼロだった力がある程度まで戻す事ができたが、目玉の分だけしか力を戻すことがかなわなかった。

この世界を我が物にし、神魔に復讐を果たすには、本来の力を取り戻さなければならぬ。

そのためには器となる肉体が必要だったのだ。

人間の身体は脆弱で、ベリアルが憑依すると直ぐに崩れた。

ベリアルはそこで、適正のある肉体に憑依し、その身体で自らの肉体を孕ませ、復活を企てたのだ。

その間、台湾で悪霊を使い配下の物を増やし、さらに、有力な魔法師の一族を裏から操り、肉体の適正者を台湾中を探した。しかし、台湾中を探しても対象となる人間はいなかった。

しかし、33年前漸くそのチャンスが訪れた。

肉体の適正者が台湾に現れたのだ。

その肉体の適正者は……四葉真夜……少年少女魔法師交流会に参加するために台湾に来ていたのだ。

ベリアルは操っている魔法師一族総出で拉致を敢行し、成功した。四葉家は強力な魔法師であり、ベリアルが操っていた魔法師一族は悉く、屠られていった。

しかし、ベリアルは肉体すら手に入れば問題がなかったため、それらを見殺し、四葉真夜に憑依を敢行する。

肉体を完全に掌握するために、四葉真夜を崩壊させる必要があった。

三日三晩かけ、わずか12歳の真夜を、配下の者を使い、犯し、辱め、ありとあらゆる陵辱にさらしたのだ。当然ベリアルはその光景を悦に入り楽しんでいた。

そして、真夜の精神は崩壊寸前までに陥ったところ……寸前で計画が頓挫する。

誤算があった。

四葉家の魔法師が強力に居場所を突き止められたのもあったのだが……

それとは別に配下の物を一瞬で消滅させることが出来る存在が現れたのだ。

笛の音と共に現れ、そして……精神崩壊寸前の真夜の心を救い……その場を去っていったのだ。

その後直ぐに真夜は四葉の手で発見される。

ベリアルは配下の者一人と命からがら逃げ延び、また、雌伏の時を過ごす。

計画を最初から練り直し、元始風水盤とダンタリオンの全世界図書館を利用することを考え付いたのだ。

ベリアルはまず、元始風水盤の搜索、封印解除に修繕、持ち出しに成功する。

そしてUSNAに最初から悪霊を忍ばせ、大規模実験を誘発させ、ダンタリオンの配下の物を内側から呼び出すことに成功させた。

ミカエラ・ホンゴウ以下、USNAスターズの一部の人間は実験前から既に、ベリアルの悪霊に憑かれていたのだ。

今……

最後のパーツである肉体の適正者を手に入れた。

ベリアルが手に入れようとしている肉体は33年前に失敗した四葉真夜の姪……司波深雪であった。

四葉家の血筋はどうやら、ベリアルの代替肉体として、相性がいいようだ。

そして、ジョン少尉の頭上のベリアルは……

「貴様らよく見ておけ、これからこの娘を精神が崩壊するまで、陵辱する。くくくくつ、この美しい顔が屈辱に歪む姿を思い浮かべるだけで、実に愉快！……気を失っている間に自分が汚されたと分かったときの顔を見るのもいいな……そして、最中に目を覚まさせる。実に良い！ふはははっはっ！良い声で泣いてくれ!!」

操られているジョン少尉の手が深雪に迫る。

ギャラリーと化したエリカ達は顔を背けることしか出来ない。

しかし、深雪の服に手をかけようとしたジョン少尉は不意に攻撃を仕掛けられ、よろめく。

「深雪に手を出す奴は、ゆるさん！」

達也は一連の様子を心配を消して見ていたが、我慢が出来ずに飛び出し、ジョン少尉に飛び蹴りを放ったのだ。

「達也！」

「遅いわよ達也くん！」

「達也君！」

「ふん。虫けらが漸くでてきたか……」

ベリアルは余裕の態度だ。どうやら、潜んでいたことを知っていたようだ。

「深雪起きろ!!」

すると、ベリアルは目は達也に向かって怪しく光を放つ。

「くくくくくつ、これで、お前の身体は余の意のまま。精神はそのまま、残してやったぞ……くくくくつ、実に愉快だ」

「ぐつ、身体が勝手に……」

達也は自分の意思とは関係無しに、身体が勝手に動き、石テーブルの上に拘束されている深雪に覆いかぶさろうとする。

「では、こっちもだ」

ベリアルはそう言って、マッチ棒のような手をパンと叩くと、深雪が目を覚ます。

「お、お兄様!？」

深雪は目の前に達也の顔があり、驚く。

「深雪……す、すまん……身体が……」

達也は必死の形相で何かに耐えていたが、身体はまったく言うことを効いてくれない。

「娘よ。今から実の兄に犯されるのだ!どうだ!気分は!泣き喚くが良い!!」

ベリアルは目は悦に入ったような表情になる。

「え?お兄様がわたしを襲う?……いや……でも、こういうワイルドなお兄様も素敵」

何故か喜ぶ深雪。

深雪はもしかしたら夢を見ているのと勘違いしているのかもしれない。

「……ん?なぜ喜ぶ娘?……なんだ。めちゃくちゃ喜んでるぞ?どういうことだ?」

「お兄様!お兄様!」

「が……!……余はそんな物が見たいんじゃない!この変態妹が!!」

ベリアルは目玉を左右にフルフルとし、そんな事を叫びながら、ジョン少尉で深雪に覆いかぶさっている達也を蹴り飛ばす。

魔界一の変態に変態呼ばわりされる重度のブラコン娘深雪……さ

すがである。

達也はそのまま、床を転がる。達也はまだ自分自身の身体を動かすことが出来ないようだ。

一応助かったと言って良いのだろうか？

「はっ、ここはどこ？身体が…鎖で？お兄様…もしやそんなプレイを所望だったのですか…深雪は大丈夫です。そんなお兄様も受け入れて見せます!!」

「くっ…このど変態が！……これならどうだ！こい、余が作りし、魔人形28号!!」

ベリアルがそう叫ぶと。

後ろからのっしのっしと、3メートルぐらいの巨体の男が現れたのだ。

この巨人、身体のパーツがいろいろと歪だ。どうやら、人間の死体を継ぎはぎして作った魔造人間のようだ。

「パイルダー！オン！」

ベリアルはジョン少尉の頭から、ジャンプして、魔人形28号の額にぽっかり空いている目蓋だけある第三の目の穴に飛び移った。

「ふははははっ、こいつのビックマグナムは少々痛いぞ！」

そして、のっしのっしと拘束された深雪に近づいていく！

「……もうやめてー！」

真由美はこのとんでもない現実について悲鳴を上げる。

エリカ達はや、自分達が風前の灯であり、このベリアルがとんでもない悪党だと言うことを理解し、絶望に近い表情になっていた。

「痛めつけるなら、俺にしろ、深雪には手を出さないでくれ……」

達也は動かない身体で、ベリアルに懇願する。

「ふはははははっ、いいぞ、いいぞ、貴様らのその顔！」

ベリアルは逆に喜ぶ一方であった。

「タダオ……早く来て！お願い！」
リーナは祈るように叫ぶ！

181話 悪魔の謀略!!⑤横島到着

「くくくくくつ娘よ。この魔人形28号で、陵辱の限りをつくしてやる。良い声で泣いてくれ」

ベリアルは巨漢の額にある第三の目の中にスッポリ埋まった状態で、深雪に迫る。

「な、なに?…これは夢ではないのですか?…お兄様…、お兄様はどこに?」

深雪はこの事態に困惑しているようだ。どうやら先ほどまでは夢だとも思っていたようだ。

「くつ、深雪」

達也は床に転がったまま、身体を動かすことが出来なかった。

「タダオ!助けて!お願い!」

リーナは叫ぶ。

「横島!早く来て!」

幹比古も続いて横島が来てくれる事を願う。

ベリアルと魔造人間は、リーナと幹比古の叫びにピタッと動きを止める。

そして、ギャラリーと化したリーナ達を見据える。

「ふん、横島忠夫か…:確かに厄介な存在だ。人間の分際で、余の計画を悉く邪魔しようとする。まあ、今さら来たところで、何も出来んな。はーはっはーはっはー!」

「何よ!横島が来たら、あんたなんか!」

エリカはベリアルに向かって怒鳴る。

「くくくくくつ、まあ、しばらくは来る事はできんだろう。余はそ奴とこの娘が離れるタイミングを待っていたのだ。しかも、自ら傷つけるとはおろかなことよ。そのおかげで、時間が稼げ、この娘もうまく誘導することが出来た。運よく、この公園の近辺に居たものだ」

「どういうことだー！」

レオが聞き返す。

そのベルアルの発言で達也とリーナは後悔の顔がにじみ出ていた。達也とリーナが横島と対峙し喧嘩することで、ベルアルは深雪を誘導し、さらう事が出来たのだ。

「まあいい、……一つ言っておいてやる。奴は天界の大罪人よ……くくくくくつ、ざまあない！」

どうやらベルアルは横島のことをよく知っているらしい。

「お前、横島の事を知っているのか!？」

「天界?……罪人ってどういうことよ!」

レオとリーナはベルアルに叫ぶ。

「奴は必ず滅してやる!!ありとあらゆる苦痛と屈辱を与えてな!!そうでなければ溜飲が下がらぬ!!人間の分際で我らに抗う愚か者め!!貴様らの次は奴の番よ!!はーはっはー!貴様らを人質にすれば奴は必ず来る!!今なら、奴を屠るのも簡単だ。いくら策を弄しても無意味、ここでは力が使えないからな、しかも奴は今はどうやら文珠を使えない!!どうあがいても余にはかなうまい!!」

ベルアルは大声で叫ぶ!

「俺の事を知っている口ぶりだな目玉野郎、俺はお前を知らないがな」

このタイミングでエリカ達の後ろから待ち望んだ声があった。

「タダオ!!」

「横島!!」

「横島!遅かったわよ!」

「横島!助かった」

「横島くん……」

「横島……」

先ほどまで絶望の表情であったギャラリーと化した皆と達也は、喜びの声でその名を呼ぶ。

「ふん、意外と早かったではないか？ 貴様が横島忠夫だな……：……：こうやって、会うのは初めてだが……：余は昔から知っているような気がしてならんぞ」

「お前みたいなお目玉は知らんわ、素っ裸にマントってどんな変態だ。ゲゲゲハウスに戻って茶碗風呂でも浸かってろ！」

横島は、皆に声も掛けずに、ベリアルにいつもの口調で挑発する。しかしその目は真剣そのものであった。

「ふはははははっ、いくら挑発しても意味が無いぞ。貴様はこの図書館内では力を振るえないだろうに……：飛んで火に入る夏の虫とはこのことだ！ ダンタリオン!! こいつは侵入者だ!! 拘束しろ!!」

「……………」

ダンタリオンは本を読んだまま沈黙している。

「ダンタリオン!?!」

「残念だったな目玉野郎！ 俺はこのゲストなんだよ。昔、この図書館の常連だったんでな、俺はここをよく知っている。まあ、建物の形は随分違うがな」

横島は100年前、天界図書館（全世界図書館）に、齊天大聖老師の紹介で数度訪れたことがあった。

それは、世界分離を行うための知識を得るためであったのだが……：「ちっ、侮れん奴め」

「で、お嬢ちゃんがダンタリオンだったのか、図書館でよく見かける子だと思ったが……：なるほど、お嬢ちゃんがここにいてってことは……：天界図書館いや、全世界図書館の管理人というわけか……：」

横島はダンタリオンに歩み寄り話しかける。

本以外に興味を持たなかったダンタリオンは本を膝に置き、不思議そうに横島を見上げていた。

「そう……です」

「そうか、本を読んでいるのに悪いな。すまんが彼らを解放してくれないか？ 彼らは君やこの図書館を害する意思は無いんだ。ただ、迷ってここに来ただけなんだ」

横島は達也が飛び出すタイミングでここに到着し、様子を伺っている

た。

それまでは元始風水盤を探すために、霧の中とこの図書館の館内を駆けずり回っていたのだ。

しかし、元始風水盤を見つけることが出来なかった。直径15メートルはある石造りの大きな遺跡状の物なのだが……

そして、達也が深雪を助けるために飛び出したタイミングでここに到着し、気配をここの空間と同化させ、潜んでいたのだ。

「……………本を提供してくれたら……いい」

「だそうだ！目玉野郎！」

横島は振り返りベリアルを見据える。

「ぐぬ……ふはははははっ、ダンタリオンそれでは、契約が違う、余は魔界化を解く事になる。となると、全世界図書館は存在が維持できなくなり、この場に長く留まる事ができなくなるぞ。この世界の情報収集はそれ程手に入れてないのだから……それは困るのではないか？」

「……………困り……ます……………解放できなくなり……ました」

ダンタリオンは困った顔をして、横島にそう告げた。

「そうか……………だったら、君がこの世界に居られるように配慮するけど、それだったら、誰にも気兼ねなく君がしたいことがこの世界で出来るだろう？」

「ダンタリオン！奴に耳を傾けるな！！ブラフに決まっておる！！やつは人間だぞ！！人間にそんなことが出来るはずがない！！」

「目玉野郎！！俺は、誰かのためだったら何でもやる。俺の事を知っているのだったら分かるよな……………この意味を！！」

横島はベリアルに鋭い視線を飛ばす。

「くっ！！人間風情が！！ダンタリオン！！だまされるな！！」

ベリアルは知っている。この男なら本当にやりかねないことを……………なにせ人間と妖魔とを両方救うために、全宇宙の禁忌、世界分離を行ったのだから……………

「……………う……………う……………」

ダンタリオンは困ったように、横島とベリアルを交互に見ていた。

「今すぐに答えを出さなくていいよ。とりあえずゆっくり考えてくれ、その間、俺を自由にしてくれたらいいから……俺の本でも見て考えておいてくれ」

「本当？……いいの？……ゆっくり考え……ます」

「ダンタリオン!!何を言っている!!」

ベリアルは焦りをあらわにする。

ダンタリオンは横島に向かって本を取り出すために手を翳しだす。

しかし、先ほどの達也の時と様子が違う……

なぜか、本が沢山出てきたのだ……横島の人生はそれほど濃厚であつたのだろう……

いや、違う。本は全部39冊!!しかも全部コミックだ!!タイトルは何故か日本語で『GS横島極楽大作戦』と書かれている……

さすが横島!横島の歴史もギャグ仕様らしい!

「す……凄い!!凄いです!!……まだ、出てきそうです!!……」

表情の起伏がほとんどないダンタリオンが嬉しそうに横島の顔を伺う。

「続きは後で、先にそれをじっくり読んだらいいよ」

横島は優しい笑顔でそう言う。

「です……後でまた続きを取りに……来ます」

ダンタリオンは足元に居たライオンに乗っかり、39冊分コミックを器用に両手に積み上げ、「ベットのうえでゆっくり読む……です」と言ってどこかへ走り去ってしまった。

「ダンタリオー……ン!!どこに行く……!!」

「で、目玉野郎!!これで、この図書館のガーティアン（リビンググアーマー）は俺を捕まえることが出来なくなった!!どうやらお前はガーティアンを扱う権限が無いようだしな!!」

この事態において、横島はまず、ダンタリオンと交渉することから始めたのだ。最良はこのまま皆を解放することだが、うまく行かないだろう事は折込済みだ。次には横島を完全にゲストとして扱い。ガーティアンを仕向けないようにすることだった。これで、横島はこ

の館内で自由に出来る。

横島は、ベリアルとダンタリオン達をもつと観察していたかったのだが、深雪がピンチに陥ったため、出てきたのだ。その間の情報で、この事態の收拾をするために、横島はここまでの交渉は可能だと踏んだのだ。

「ぐつ、人間風情がー！ー！ー！！……まあ良い、貴様は、この図書館では能力は使えん、霊気も使えん状態だ。それで、余をどうするつもりだ？余には自身の配下が居る。まだ、余の方が圧倒的有利だぞ」

目玉のベリアルは目を血管を浮き上がらせカンカンに怒っていたが!!ふと冷静に戻り横島に余裕の態度を見せる。

横島はそんなベリアルを無視して、エリカ達の元に歩み寄る。

「皆、遅くなったー！」

横島はここで漸く皆い笑顔を向ける。

横島はダンタリオンとの交渉の際、飽く迄も、中立な立場を保つため、エリカ達とはつながりが無い程を装っていたのだ。

「横島!!」

「横島くん!!」

「タダオお!!」

「後は任せる……といたいところだがな、ピンチには違いない……」

横島はそう言って、床に転がり身体の自由を奪われている達也を引っ張り、エリカ達の方へ、床を滑らすように投げる。

横島はこの事態をどう打開するかを模索するが、どう考えても不利なのだ。

『全世界図書館』の影響でこちらは力をほぼゼロ近くに制限され、相手には、戦力がある上に、切り札である元始風水盤まであるのだ。

「ふん、貴様も捕まえてギャラリーに加えてやろう……、この娘が陵辱されるところでも見ておけ、そして余が身体を奪う様もな……魔人形ども!!そやつをひとつとらえろ!!」

すると、ベリアルが乗っている魔造人間（魔人形28号）の後方か

ら、わらわらと、身長2メートル程度の魔造人間が10数体現れ、横島に襲い掛かる。

「そうか、魔造人間が出てきた先に、元始風水盤があるのか……」

横島は、魔造人間の攻撃を体術でかわしながら、ベリアルと石テーブルにとらわれたまま深雪の下に歩んでいく。

さすがは霊気が一般人並に抑えられているとはいえ、斉天大聖老師の直弟子である。

パワーはあっても下級悪魔未満の魔造人間程度の攻撃はしのぐことが出来るのだ。

「ふん、元始風水盤を知っていたか、知っていたところで意味は無いがな」

「こんな出来損ないの死体に頼っているということは、配下の魔族を召還できないからのようだな、おまえ自身は力を失っているのか？……それともベリアルと名乗っていること自体が嘘か？」

横島はそう言っ、魔造人間の攻撃を捌きながら徐々に近づいていく。

「くくくくつ、さてな……どうだろうな？」

ベリアルは近づいてくる横島に余裕の態度を崩さない。

「深雪ちゃん、今、助けるから、ちよつと我慢してね」

横島は魔造人間達を突破して深雪が拘束されている石テーブルの上に飛び乗る。

「……横島さん？これは一体？卑猥なことばかり言うこの気味の悪い着ぐるみはなんですか？お兄様は？」

どうやら、深雪は今の現状がさっぱり分かっていないようだ。

横島は、リビングアーマーが先ほど落としていった剣で、深雪を拘束している鎖を鋭い斬撃で素早く斬っていく。

最後の鎖が切れたところで……

横島に激しい電撃が襲う。

「ぐっー」

「きゃーっー」

その余波が深雪にも届く。

「くくくくくつ、横島、貴様が立っている場所は、元始風水盤の端のパーツだ。今、風水盤を制御し、お主に雷を降らした」

「横島（くん）!!」

「ダダオお!!」

皆の悲鳴がその後続く。

横島の背中の一部が焦げ、プスプスと煙を上げ、ゆっくりと深雪に覆いかぶさるように倒れる。

「おーつと、こんなので死ぬなよ。くくくくつ、貴様にはいろいろと礼をしなければならぬからな……、とりあえず、この娘の身体を奪うまで、おとなしくしているよ」

魔造人間達が横島を捕らえようと近づいていく。

やはり罠だったのだ。深雪を助けようとする横島を狙っていたのだ。

しかもあの、石テーブルと思われた物は原始風水盤の外縁の一部だった。

原始風水盤の中心はちょうど図書館の中庭に当たる部分となり、外延部は部屋の中へとまたいでいたのだ。中庭への敷居はガラス張りのアコーデオンの扉となっている。

「……深雪ちゃん、ごめん」

覆いかぶさった横島は耳元で深雪に苦しそうな小さな声でそういった後、なぜだか深雪と唇を重ねる。皆やベリアルには見えない角度であった……

「ん!?!……横島さん……な、なにを!?!」

「それを飲み込んで……皆にはまだ最後まであきらめるなって言つて……」

横島はボロボロの顔で半目ではあったが笑顔を作り、深雪に微笑む。

深雪に何かを口移しで飲ませたようだ。

そして、横島は魔造人間に捉えられ、深雪からひつぺがされ、ベリアルの上に引きずられる。

らば、直接貴様の身体を頂戴し、我が身と出来る!!あの娘の身体を一時的に支配し、我が身体を産ませるなどと、まどろっこしいことをしなくてもいい!!我が計画が20年は早まる!!

しかも、この身体、うまくいけば文珠をもつかえるかもしれん!!あのサタンを滅し!!三界制覇も現実味に帯びて来よう!!

……いいだろう!!その娘も逃がしてやる!!但し……貴様の苦しむ様を見せ付けてからだ!!男だとギャラリーが居ないと、いまいち燃えないからな……」

どうやら、ベリアルが欲していた身体は魔の魂が混ざっているまたは、血が混ざっている人間を探していたようだ。四葉家は歴史の中で悪魔または半魔などの血がどこかで入っていたのかも知れない。

横島は魔の魂が混ざっている。それは魔族であったルシオラの魂だ……彼女は自分のすべてをなげうって死にかけて横島を助けたのだ。その時から横島の魂には彼女の魂が癒着した状態となったのだ。

そして、深雪は解放され、達也と共にエリカ達と同じように椅子に括られ、エリカと真由美、レオと幹比古の間に置かれ、ギャラリーと化したのだ。

そして、横島は元始風水盤の一部だった石テーブルの上に寝かされ、杭で手足を貫かれ磔にさせられる。

「貴様ら喜べ!!こやつを精神を崩壊させ、我が身となった暁には貴様らを解放してやろう!!その前にあの横島忠夫が精神崩壊する様を存分に楽しむが良い!!」

「いや!タダオを離して!!」

「横島!!」

「やめて!横島くん!!」

「横島……」

「くそつ、横島!!」

「くくくくくつ痛みでは無理そうだな……どうやって貴様の精神を崩壊させてやろうか!! 仮にも神の罰を受けて、戻ってこられた奴だ! その簡単にはいかないだろう!! くくくくくくつ」
ベリアルは楽しげに横島を見下ろしていた。

182話 悪魔の謀略!!⑥横島忠夫 その1

「くくくくくつ、横島忠夫、我らに刃向かったおろかな人間よ。絶望の淵に落ちるが良い」

ベリアルは魔人形28号を使い、石テーブルに磔になっている横島を容赦なく殴りつける。

「……………」

「もうやめて……………お願い、タダオにひどいことをしないで!!」

「横島ー!!」

「横島…すまん深雪の変わりに……………」

「もう…やめて」

「横島……………」

皆はその凄惨な状況に叫びを上げる。

「さすがだな、痛みでは声一つださないか……………ギャラリーは良い具合なのだがな……………こいつの弱点は……………ふん、せっかくこの図書館の司書などというふざけた地位を得たのだ、これをつかってみるか」
ベリアルは魔人形28号の額の目から、横島に向けてマッチ棒のような手を翳す。

すると、ダンタリオン時と同じ様に横島から、本が現れる。

しかし、先ほどのコミックとは違い、達也や深雪と同じような本だ。しかも3冊出てきたのだ。

横島の今までの歴史がすべて記載されている本だ。

「これが最近のやつだな……………ふむ、貴様、仲間に自分の過去を知られるのを恐れているな!」

ベリアルは横島の本を読みながらは目だけのくせにニタつとした顔をする。

「くつ」

「なんだ?表情が変わったか?はっはー、お前昔の女の事で、文珠が生成できなかったのか!……………くつくつくくーん?んんん?

これはあの時のことか、なるほどこれで合点がいくぞ」

「ギャラリ―諸君!!今からいいものを見せてやろう。横島忠夫の本当の姿を!!こいつは天界の大罪人!!大悪党だ!!はーはっはーはっはー!!」

「……やめろ」

「くくくくつ、横島、この本はな貴様の歴史が記されているだけではない、映像としても展開できるのだ。どういうことかわかるか?」

「……やめ……ろ」

横島は苦悶の表情で訴える。

「くくくくつひーひーひっひーひー、その顔がみたかったーひーひー!!」

ベリアルは笑い方が変わる。これがベリアルの本래の笑い方だ。先ほどまでは威厳を保つためのものだった。

「では、横島忠夫の罪の人生の開幕だ!!」

すると横島とギャラリ―と化した皆の眼前に映像と音声が流れる。実際には脳に直接映像を流しているのだ。

ビルが立ち並ぶどこかで見たことがあるような都心部が写る。

しかし、各所で煙が上がっているのが見て取れる。それはさながら大地震などの、大災害が起こった直後のようだ。

そして、明らかに異形の物達が人間を襲い。殺戮し、建物を破壊する様子が映し出されたのだ。

そこで、ベリアルは楽しげな声が入る。

「貴様ら、ここがどこかわかるか?……ここはな、1000数年前のここ東京だ!悪魔と妖怪が闊歩した魔都と化していたのだ!」

「何言ってやがる!悪魔が闊歩だと?そんな話は聞いたことがない

！」

「歴史上、悪魔や悪霊が多量に発生した記録は無い！」

レオと達也はベリアルに向かって叫ぶ。

「100年前の東京……確かに今は無い東京タワーがある……皇居も見える……」

「悪魔がこんなに……人が街が……襲われてる……」

真由美と幹比古はここが昔の東京の風景に酷似していることを認識していた。

「くくくくくつ、理解できんだろう。この現象は世界各国で起きていたのだ。数千万人単位の人間がたった2、3時間で死んだがな！」

場面が切り替わる。

明らかに人間とは違う風体の長身の威圧感がある男と、横島が禍々しい建造物を背景に廃墟の上で対峙していた。

それは100数年前、魔神アシユタロスとの最終決戦の映像であった。

『横島と言ったか……恋人を犠牲にするのか？目覚めが悪いぞ！』

『今お前を倒すには……これしかねえ……どーせ後悔するなら……』

てめーが!!くたばってからだ!!アシユタロス……!!』

『や、やめろ……!!』

横島は恋人であるルシオラの命をとるか、世界を救うか、究極の選択を迫られていたのだ。

この少し前にルシオラは、横島が瀕死の重傷を負ったがため、自分の全生命をかけ、自らの霊体構造や魂を横島に融合させ蘇らせた……自身は消滅してまで……

アシユタロスは消滅した彼女を蘇らせるキーを持っていたが、同時

にそのキーは世界を破滅させる物でもあったのだ。

そのキーを破壊すれば、世界は救われる。しかし、ルシオラは二度と戻ってこない。

そして、横島は世界を救う選択をする。

アシユタロスが自分のすべてをかけ作り出したそのキーを横島は粉碎したのだ。

そして巨大大爆発が起こり、禍々しい建造物と魔神アシユタロスが滅んでいく姿が写っていた。

世界各国で暴れていた悪魔や妖魔はそれと同時に消滅していった。

「ほう、アシユタロスは自滅したような物だな……策謀好きの甘ちゃんめ……もう少しというところで……まあ、あいつはあの程度か……くくくくくっ横島よ!! 恋人を自らの手で葬った感想はどうだ? ひーひっひーひー!!」

ここでベリアルの声が割り込んできた。

そして、映像は続く。

20歳前後の髪が長くスタイルの良い女性と横島は先ほどの大爆発から地下道まで逃れていた。

もちろんその女性は当時横島の悪霊退治の師匠であった美神令子だった。

『あいつは……ルシオラは俺のことを好きだって……命も惜しくな
いって……』

なのに……!!俺はあいつに何もしてやれなかった!!

俺はてめーのことばかりで!!

口先だけで惚れたのなんのって!!

最後には……見殺しにした!!』

『横島くん!!違うわ!!彼女はアシユタロスの手先で終わるはずだった人生をあなたにかけた……正しいことに使うことができたのよ!!』

それに、死んだのはあなたのせいじゃないわ!!』

『俺には……女の子を好きになる資格なんか……なかった!!……なのに

「あいつはそんな俺のために……」

『……横島くん』

『うわあああああああああああああああああああ!!!』

横島が泣き崩れいつまでも叫び声をあげる姿が映っていた。

そこで映像がいったん途切れる。

「ひーひーひーひーひーひー傑作だ!!こいつは敵、しかも人間にとって絶対交わることが無い敵であるはずの魔族の娘と恋人どうしだったんだ!!その娘!主を裏切り人間ごときに恋心など持つから死ぬ羽目になるんだ!!いわば、こいつがその娘をかどわかし!!利用するだけ利用して見殺しにしたんだよ!!ひーひーひーひーひー!!」

ベリアルの声がまたもや入る。

「タ……ダオ………なに……これ……なんなのこれ……タダオ……」

リーナは涙ながら呆然としていた。

「横……島くん?………マリアさんの話は………これだったのね………あまにも残酷すぎる………横島くんがかわいそう………」

真由美は目に涙を浮かべ、マリアの話がこれのことだと理解した。

「何だよ!!なんなんだ魔族つてよ!!魔神との戦いつてなんだ!!」

「そんなの聞いたこと無いよ!!どうして横島がそんなのと戦ってたんだよ!!」

「そうよ!!これは作り物よ!!だっておかしいじゃない!!横島が100年前にいないはずがないじゃない!!」

レオ、幹比古、エリカはベリアルに向かって叫ぶ。

理解しようにもあまりにも、違う次元の話で、現実感が沸かないのだ。

「くくくくくくつ、これは本来の100年ちよつと前の東京で起きた出来事だ!!まだ、魔も神もこの地に降り立つ事ができ、妖怪や霊が日常的に存在していた時代の話だ」

ベリアルは愉快そうにそれに答える。

「どういうことだ!!なぜ100年前の映像に横島が居る!!魔や神や妖

怪などと不可思議な存在するなど聞いたことが無い!!」

達也はそれに噛み付くように叫ぶ。

「くくくくくつ、目の前に余が居るではないか……まあ、あせるな。お前らの脳みそでも、そのうち分かる。横島忠夫は本来100年前の人間だ……そして100年前にこの世界は作り変えられた。神や魔、妖怪、霊が居ない世界にな!」

ベリアルは実に愉快そうに説明する。

「な!!」

「何よそれ!!」

「そんなバカな話があるか!!」

「そんな話聞いたこと無い」

やはり、皆はまだ理解が追いつけないでいる。

「おーっつと、当事者の横島くく? 貴様、恋人を利用し、自らの手で殺した気分はどうだ!?!」

「ぐうううううう」

横島の顔は苦しみ抜いた顔をしていた。

「くくくくくつひーっひーっひーっ、その顔、その顔だ!! いいぞ、実にいい。もう一つ言ってやる。元もとのアシユタロスは穩健派だったんだがな。余がすこーし、口利いてやってな。これに手をかしてやったのだ。まんまと口車に乗り、しでかしてくれた!! まさに魔界も神界も大あらわだったぞ……しかし、世界を作り変えることまでやろうとは思ってもみなかったがな!! ひーっひーっひーっひー!!」

「おまえかーっひーっひー!! アシユタロスこそそのかしたの
はーっひーっひー!!」

「そうだ!! 余があやつをそそのかした!! 余は得意だからな!! ひーっひっひーっひー傑作だ。穩健派? わらわせるな!! 神と人と手を結ぶだ
と!! 悪魔にあるまじき行為!! 余の策謀で邪魔なあやつは滅んだ!!」

「ぐっひーっひー!!」

再び映像が流れる。

横島が狭い自室で苦しみ、うずくまっている姿が映し出される。

『ぐう……これは罰だな、ルシオラを見捨てた俺への罰だな、この程度の痛みルシオラを失ったことに比べれば……』

横島はアシユタロスの戦い以降、激しい痛みで苦しんでいた。横島の霊体構造と魂が魔族であるルシオラのもものが組み込まれたためだ。いわば免疫抗体反応が出ているのと同じである。

一歩間違えれば、横島は魔物、魔族化してもおかしくは無いが、その精神力と未だ成長し続ける横島自身の霊力がそれを踏みとどまらせていた。

ただ、このことで横島の霊的ポテンシャルはぐんぐん伸びていくのであった。

そして……

横島が日常的に、何かと戦うシーンが数度流れる。どう見ても人ではない禍々しい存在と戦う映像。

時には人間と戦う映像なども見られる。

アシユタロスの戦い後、横島は魔界、さらに一部の人間からも危険視され暗殺されそうになる。または、その力を利用してようと近づいてくるやからが絶えず接触に来ていた。

このことはどうやら、美神令子や当時同僚だった絹には隠していたようだ。

横島が住んでいるアパートには、裏切り者などと落書きなどがされ、脅迫文や嫌がらせの手紙などが送られていた。

横島はアシユタロスとの戦いの中で、敵の情報を得るためにアシユタロス側の陣営にスパイとして潜り込んでいたことがある。その際、メディアにも露出されていたため、人類の敵として顔が知られていた。戦いが終わった後、正式にメディアで横島が作戦のため敵陣営に居たことを説明をしていたが、この件で日本では100万人単位の間が死亡していたため、納得のいかない人間もいたのだ。

『……せつかく平和になったのに……俺がここに居ることで美神さんやおキヌちゃんに迷惑がかかるな』

横島はそう言つて、書置き一つして、東京から姿を消したのだ。

「これは傑作だ!!人類をアシタロスの脅威から守った英雄が!!同じ人類に疎まれるとわな!!」

知っているか、当時魔界では、十中八九アシタロスが世界を滅ぼす事に成功するだろうと見ていたのだ。なぜならば奴は、まんまと神界と人界を切り離しやがった!!神の介入はなかった!!そして、戦っていたのは人間だ。アリが象に刃向かうようなものだ。

それなのに、このゾウリムシ以下の横島が象であるアシタロスに勝つたのだ!当時のこいつは貴様らよりも弱かったのだ!!

さすがの余も予想できなかつた。まさに奇跡!!当時の横島とアシタロスの戦力差は100万倍以上だったのにな……それが元でこいつは、人間にも悪魔にも、さらに一部の神にも敵視され、居場所を失う……恋人を失つても、人類を救つたのにこの仕打ち……ひーひっひー!!笑いが止まらない!!」

「なんで……なんでなの、タダオばかりひどい目に……」

「……いつもあんなに陽気なのに……その裏ではいつも……横島くん」

「横島…お前……」

「横島……」

「戦いなれていたのは……こういうことか……」

「100万倍の戦力差をどうやって?……横島は……」

「横島さん……」

皆はこの映像を見て、それぞれが横島の壮絶な過去に打ちひしがれる思いをしていた。

「この後だ。余が分からないのは……奴が消えてから何をしていたのかだ。再度現れて奴は……」

ベリアルは何か思考していた。

横島は苦渋に満ちた顔を……さらす。
今も尚、ルシオラを死なせた後悔と苦しみを引きずっていた。

183話 悪魔の謀略!!⑦横島忠夫 その2

「くくくくつ、いいぞ、いいぞ!その苦渋に満ちた顔!!第2幕と行くか!!」

ベリアルは実に愉快そうにギャラリーと化したエリカ達に声を上げる。

映像は横島が去った後の東京、横島がアルバイトしていた美神令子除霊事務所が映し出されていた。

『横島くん……こんな書置きをして……まったくどこいつちやったのかしら』

美神令子は、書置きを引き出しから出して、眩くように言う。

『横島さん、心配ですね。この頃いろんなことが起きているから……』

おとなしそうな巫女服姿の少女がそれに答える。

この少女こそが将来、『救済の女神』として名をはせることになる氷室絹の若かりし頃の姿だった。

『まあ、あの横島くんよ。ゴキブリ並みの生命力があるから、きっと大丈夫よ。それよりも、仕事よ!!仕事!!全然依頼がないわ!!』

軍が介入してきてから、仕事を全部搔つ攫っていくし!!

どうなってるのよ!!あいつ等、妖怪や霊を片っ端から捕まえてどうするつもりよ!!

あいつらのせいで、この辺の悪徳妖怪や迷惑霊が全部居なくなつて、全然依頼が来ないじゃない!!あああー!!むしゃくしゃする!!殴りたいときにあいつ(横島)が居ないし!!』

美神はかんしゃく気味に手をぶんぶん振っていた。

『まあまあ、でも、近所では、人間に友好的な霊や妖怪まで、軍に捕まわつたって聞いてます』

『ほんと見境ないわね。……もしや、いや、……ママが許す分けないわ。……ま、そういうわけだから!シロもタマモもなるべくこの事務所から出ないこと!』

『えー、散歩もダメでござるか?』

『近所に買い物ぐらいいいでしょ?』

二人の中学生ぐらいの少女がそんな美神の言葉に不満たらたらだった。

もちろん前者は人狼の少女シロ、後者は元大妖怪九尾の狐タマモだ。

『私がおキヌちゃんと一緒の時だけよ。単独は控えなさい』

『美神殿やおキヌ殿ですと、散歩が十分じゃないでござる。先生（横島）だったら、毎日軽く40キロ付き合ってくれるのに……先生……早く帰ってきてほしいでござる』

シロはジトツとした目で美神と絹を見据える。

『ランニングマシンを買ってあげたでしょーそれで我慢なさい!!私は走るとか疲れることは嫌なの!!』

『私、とろいから、シロちゃんについていけなくてごめんね』

丁度、横島が失踪して、3ヶ月がたった頃の様子だ。

本来、妖怪や霊については、民間組織であるゴーストスイーパー協会か、国家組織であるオカルトGメンがそれぞれ、対処していたが、横島が失踪した辺りから、日本国防軍、前自衛隊が介入しだしたのだ。

アシユタロスとの戦いの後、世界各国は気がついた。

あの戦いでは、軍のどんな装備より、通常兵器や核兵器よりも、霊能力や妖魔や悪魔の方が優れていることに……

そして、各国は競って、霊や妖怪、妖魔、悪魔などを、捕縛し実験し、そのものを兵器化又は兵器利用するために……

とらわれた彼らには悲惨な末路が待っている。彼らには人権などという概念が当てはまらない。

彼らの中には人間と同じように思考し、人間社会の中で生きてきた者もいる。

しかし、扱われ方は実験動物と同じなのだ。

霊能先進国である日本は先駆者として、大々的に行いだしていたのだ。

奇しくも、この流れは、この世界の魔法開発……人体を使った魔法開発につながっていったのだ。

場面は東京を後にした頃の横島に移る。

横島はとある山腹の修験場に赴いていた。

そこは人界と神界の狭間、神と人間が交わることが出来る場所『妙神山』

『小竜姫様……無沙汰してます!!相変わらずお美しい!!挨拶のキスを!んんん!!ひよえー!?!?!』

鋭い斬撃が横島をかすめる。

『相変わらずですね。私に無礼を働くと天罰が下りますよ』

見た目15、6歳の華奢で可愛らしい容姿の少女が横島に剣を振るつたのだ。

この少女こそが、後の姉弟子になる。妙神山の管理者、竜神、小竜姫だ。

『死ぬかと思った!……あのくもう剣を抜いてましたよね。小竜姫様』

『ところで横島さん、その霊力はなんですか?アシユタロス戦の時も凄まじい成長を遂げましたが……今のあなたは人間のそれを遥かに凌駕しております』

『あ……その……』

横島は言いにくそうにする。

『……私の内弟子になるって、おっしやってましたが……これは、老師についてもらったほうがよさそうですね。ちよつとした神レベルまで霊力が上がっています』

横島はアシユタロス戦後に何度か小竜姫とはコンタクトを取っていたようだ。

『……お願いします』

『横島さん、悩みでも……いえ、あなたは何か隠していますね』

小竜姫は横島の表情やその口ぶりを見てそう判断した。

その後、斉天大聖老師を交えて話し合う。

小竜姫が横島に言いよごんでいたことを執拗に問い詰めていた。

『実は俺の中にルシオラの魂があつて、それで……俺の霊体構造と拒絶反応が……』

『それは誰かに相談したのですか？』

『いやー、せつかくアシユタロスを倒して、平和に向けて復興しているのにこんな話を持っていくのもなんだなーと思ひまして』

『今は大丈夫なんですか？』

『今はこの通りピンピンしてます。3ヶ月目ぐらいから、拒絶反応は無くなりました』

『それで、その霊力か、それだけではないようじゃな』

ここで漸く、小柄な老人風の猿神、武神斉天大聖老師が納得したように声を出す。

『……その、アシユタロスを倒しちやつたのが俺だつて、ばれちやつて、悪魔やら、その……どこかの組織の人間やらに狙われて、戦う羽目に』

『……それも誰にも相談していないのですね。それでここに身を隠しに……』

『す、すみません。ここだったら、悪魔もどつかの組織も狙つてこないかなーつて思ひまして……』

『まだ、あるじやろ。おぬしの立ち振る舞いが妙に洗練されておる』

『その……一人で何とかしようとして、俺の前世が結構有名な陰陽師だつて聞いてたんで……前世の記憶を呼び起こして、記録として知識を得たんです』

『なんて、無茶を……そんなあなたの異変をあ的美神さんや隊長さんが見逃すはずがない……いえ、……すみません。それは、私達は言う資格はないですね』

『横島忠夫……すまなんだ。おぬし一人にそんな辛い目にあわせた。この通りだ』

斉天大聖老師は深く横島に頭を下げたのだ。

『私達が、力が及ばなかつたために、人間であるあなたに負担を……申し訳ございません』

小竜姫も横島に頭を下げる。

『やめてくださいよ、そんな、俺が自分でしでかしたことなんで』
『いや……本来なら、もつと前におぬしをここに呼ぶべきじゃった。
……気が済むまでここに居るがよからう』

そして……

『ひえーーーーー!!』『ぐぼーーーーー!!』『お助けーーーーー!!』『もう、死ぬーーーー!!』『もうあかーーーーん!!』

齊天大聖老師による死と隣り合わせの激しい修行風景が繰り広げられていた。

しかし、横島は横島のままだった。

「ちつ、あの暴力猿神のところに隠れていたのか!!あの猿野郎は絶対殺す!!俺をこんな目に、こんな姿にしやがったあいつだけは!!」

フヒツ ヒーヒツヒー!横島の身体を乗ったあとに、成りすましてだまし討ちをするのも面白い!!楽しみが増えたってことだ!!」

どうやらベリアルは齊天大聖老師にやられて、この姿になったようだ。

ベリアルの口調がさらに乱れる。

「……なんか、前半壮絶だったけど、修行風景はなんていうか……やっぱ横島だよな」

「ほつとしたというか……なに?この納得いかない感じは……」

「修行って、あれ、何回か死んでるんじゃないか?」

「武術があれだけのレベルで習得していたのも納得だな……」

「巫女姿のキヌと呼ばれた方、もしや『救済の女神』氷室絹さんでは?」

「あのお猿さんが横島くんの師匠……かわいいかも」

「タダオ……やさしすぎるわ」

幹比古とエリカとレオは何故かほつとした表情をしていた。

達也は横島の武術レベルに納得の表情。

深雪は絹のことに気がついたようだ。

真由美は何故か老師をかわいいと評価。

リーナは一連の横島の行動に、悲しみの表情を浮かべる。
まだ、この横島はアシタロス戦前とさほど変わらない。

「ん？貴様ら……なに緩んだ顔をしている！くくくくつ、これからだ。こいつの業の深さは！」

『ほとぼりさめたかなー。人の噂も49日って言うし……あれ57日だっけ？まあ、いいや、でも、美神さんめちゃくちや怒ってるだろうなく、勝手に出て行つたし、あんた誰？って言われそう。新しい奴雇つたし、あんたは用無しよつ、て言われるかも』

横島は1年半ぶりに東京に戻ってきていた。

『おキヌちゃんは今年大学受験か、もう決まったのかな、まあ、卒業まで間に合つてよかった。って、おれ高校卒業してない……おかにめっちゃ怒られるー！はあく』

横島は憂鬱そうな足取りで、とりあえず美神令子除霊事務所へと向かっていた。

『なつ！事務所がっ』

横島は事務所は事務所に近づいたのだが、様子がおかしかった。
煉瓦壁のビルの一部に破壊の後があったのだ。

横島は慌てて、事務所に入るが中に誰も居ない。
部屋の中はあらされており、いたるところに書類が散らばっている。

『人工幽霊番号！いるか？何があった!!』

横島はこの建物に取り憑き、管理していた渋鯨人工幽霊番号に呼びかけるが、応答がない。

横島は事務所を飛び出し、この事務所から程近いオカルトGメン事務所に向かう。

『西条！これはどうなって……』

『！横……ここは不味い、場所を移そう』

西条は横島を近所の公園まで連れて行く。

ビシツとスーツを決めているこの長身イケメン青年西条はオカルトGメン所属の凄腕霊能力者で、美神令子の母美智恵の弟子でもある。

『君は、いままでどこに行っていたんだ！』

『おい、事務所があんなことに！皆は無事か！』

西条と横島は同時に声を上げる。

『令子ちゃんは無事だ。2週間前令子ちゃんの留守を狙って事務所を襲撃された。シロくんもタマモくんも令子ちゃんと一緒だったためその場には居なかった。ただ、お絹ちゃんは……拉致された』

『拉致？どういうことだ。あの美神さんの事務所を襲撃なんて正気の沙汰ではないぞ!!それでおキヌちゃんは怎么样了。美神さんが助けにいったんだよな。それで襲撃者をとっちめて、とんでもないお仕置を……』

『横島くん、よく聞け！僕も今監視がついている状態だ。あまり外に居ると怪しまれる。先生(美智恵)と令子ちゃんは、今はここに居る』
そう言って西条は横島にメモを渡す。

そして……

メモの場所東京と山梨の県境にある別荘に行く。

『横島くん!!……あんたいままでどこほっつき歩いていたのよ!!』

美神令子は目に涙をためながら横島を殴る。

『すみません……』

『君が無事でよかったわ』

美神の母、美智恵は2歳になる娘ひのめを抱っこしていた。

『おキヌちゃんはどうしたんです?』

『……』

『おキヌちゃんはここには居ないわ……拉致されたまま……』

『そんな！美神さん、いつもの卑怯技でなんとかならなかったんですか?』

『相手が分からないのよ！……あんたが居ないから!!』

美神のいつもの強気の状態はなかった。涙目で横島に苦しそうに叫ぶ。

『……すみません』

『横島くんがどこに居たのか分からないけど……今、日本の……世界の情勢は、霊能者だけでなく、妖怪、妖魔、霊を金の卵か何かと勘違いしている連中が巨大な組織をバックに闊歩しているの……それぐらいあなただって知っているはずよね』

美智恵は横島に諭すように語る。

『そんなことに……知りませんでした。……俺は妙神山に籠ってました』

『やっぱりそう！何度も行ったのよ！小竜姫はここにはあんたは居ないって頑なに。それで門前払いよ!!』

美神は絹とシロ、タマモを率いて、横島を探しに何度から妙神山に訪れていたのだ。

『……懐かしい気を感じたのはそうだったんだ……』

『横島くん……これ、犯人が置いていった置手紙……』

美智恵はスツと横島に一通の封筒を渡す。

『な!!犯人の目的は俺……俺のせいでおキヌちゃんが……』

『たぶん犯人の目的は君の文珠よ……』

君には連絡がとりようがなかったから、おキヌちゃん奪還のために私達で指定の場所に行ったわ。唐巢先生や六道の力を借り万全のバックアップで。でも結局誰も現れなかった』

『隊長（美智恵）の権力で何とかならなかったんですか!』

『私はICPOオカルトGメン所長の権限を半年前に剥奪された。……なんでも、アシユタロス戦で私的に部隊を動かしたからってことらしいわ。完全に裏があって探ったのだけ……先手を打たれてこのざまよ。西条君が留まって何とか内部の情報収集をしてくれてるけど、今のオカルトGメンは既に日本の軍の管轄化に置かれたも同然よ』

『…………俺が行きます…………おキヌちゃんを取り返しに行きます』

横島の霊圧が凄まじい勢いで上がっていく…………

『よ…………よ、横島くん？』

『君…………その…霊圧は…』

二人は小竜姫を上回る霊力を身につけていた横島に圧倒される。

横島は文珠を一つ美神に手渡し…………

そして、その場から文珠を使って瞬間移動で指定の場所付近まで飛んだ。

184話 悪魔の謀略!!⑧横島忠夫 その3

「ヒーヒーッヒーヒー！ここからだ。ここから奴の絶望ぶりと、空回りっぷりが、傑作なのは！」

ベリアルはどうやらこの時代の横島を知っているようだ。

「ぐっ…」

石テーブルの上に礫にされている横島は苦しみ、何かに耐えるような顔をしていた。

映像の横島は、美神令子除霊事務所を襲撃し絹を拉致した連中が残したメモに書かれた人質交換の場所へと、都内にある郊外の公園前に文殊で瞬間移動する。

そして、指定場所の公園内にある噴水前に立つ。

しばらくすると噴水の池の水から声がする。

『横島忠夫だな、随分遅い到着だな。2週間も待ったぞ』

『……悪魔契約者か…来てやったぞ。おキヌちゃんは無事なんだろうな』

横島に声を掛けてきた者は池の水と同化していたが、明らかに人の気配であった。

悪魔と契約することで、いろんな能力を得ることが出来る。これもその一つなのだろう。

『命はある……変な真似をしなければ生きて会える。抵抗するならば屍と会う事になる』

『わかった』

『ここから見える交差点まで行き、路地に入れ、そこに車を用意している。車に乗る前にあのベンチの裏にある腕輪をしろ』

『わかった』

横島は、水男に素直に従い、公園のベンチ裏に貼り付けてあった腕輪をし、指定の車に乗る。

そこに乗っていた男に目隠しをされ、さらに手錠をはめられる。先ほどの腕輪は霊力を抑える霊具だった。

そして、二時間程車に揺られ、山間の何かの工場のような施設に到着した。

『歩け』

横島は目隠しを外され、施設内に歩く。

日本語でない言語、中国南方の言語があちらこちらで聞こえる。どうやら中華系の組織のようだ。

横島はそこで絹の存在を感じる事ができたが、反応がかなり弱い。それと、ここには悪魔の姿も見られる。……しかも魔族級の悪魔の気配もする。

この人間達は、悪魔と契約するだけでなく、行動を共にしていたのだ。

いや、こうやって悪魔が控えている自体が悪魔との契約なのかも知れない。

この施設には悪魔と魔族の反応が24、人間が300人程度の存在を感じていた。

そして、何かの実験施設のような場所に連れて行かれる。

ガラス張りの大きな箱部屋のようなものが何個も置かれている。

そこには、妖怪や霊、さらには、人だった何かが入れている。

そして、つれられた先に横島が見た物は……

横島はその場で膝を落とす。

『貴様が来るのが遅かったから、ここの男共で十分楽しませてもらっただぞ』

『治癒能力を持っているようだったからな、お前がもう来ないと思つてな、色々実験動物になつてもらった。まあ、次はお前がこうなる番だ』

『この娘も災難だったな、貴様の知り合いだったばかりに、このような目にあつたんだからな』

そこに居た男度もが口々に言い、横島に下卑た笑みを見せる。

そこにはボロボロになり、かろうじて息をしているだけの絹の姿が

あった。

治療能力の実験の跡なのだろう。ありとあらゆる箇所には裂傷、腫れ、火傷、骨折、穴などを身体中につけられ、無残な姿に…………

『あああ……ああ……ああ……』

『どうした？一応まだ生きてる間に会わせてやったぞ。まあ、死にぞこないだな。お前が来るのが遅いのが悪いんだぞ』

『う……うう……うわわわわあああああああああああああああああああああ
あああ!!!』

横島の抑えていた霊気が一気に開放される。

そして、この施設いや、山全体を覆いつくし、そこに居た悪魔や人間を飲み込み一瞬ですべてが消滅した。

そして

『おキヌちゃん……ごめん……ごめん……ごめん……ごめんよ……俺が逃げ出したばかりに……………』

横島は何も無い荒地と化したこの場所で、ボロボロになった絹を抱きかかえ、文珠で完全回復をさせる。それと同時に絹がとらわれてからの2週間程度の凄惨な記憶をすべて消したのだ。

『ん……あれ？横島さん。いつもどつたんですか？あれ？ここどこ？私なんで服がボロボロに？』

絹は目を覚めますが拉致される直前ぐらいからの記憶をすべて消され、状況がわからないようだ。

『おキヌちゃん……ごめん。ごめんよ。もう二度と放さないから……ずっと守るから……もう君をひどい目に合わせせないから』

横島は絹を思いつきり抱きしめる。

『横島さん？あの……その……なんで泣いているんですか？横島さん苦しいですよ。そんなに強く抱きしめなくても……その嬉しいですけど』

『……俺はずっとそばに居る……………』

「あの時は誤算だったな、横島がここまで力をつけていたとはな、あの猿神め!!……おい、横島!この娘を攫う計画はな!俺が仕掛けたんだよ!!ヒューヒツヒュー、あの娘、陵辱に耐え切れず何度気絶したか!!そのたびに針をさして、起こしてやったわ!!お前にも見せたかったよ!!ヒューヒツヒュー!!」

ベリアルはあの場所に居たかのように語る。

「おおおおお!くそおおおお!!お前は許さない!!絶対滅してやる!!」

「おー怖いことだ!ここでは何をしても無駄だ!そういえば、あの娘な、最中に何度もお前の名前を呼んでたぞ!!横島さーんって!泣きながらな!!ククククツ、ヒューヒツヒツヒュー」

「ぐううううううう」

「おお?俺とお前は穴兄弟ってことか?」

「ぐぐぐうううううううううううううううううううううううう」

「おい?あまりにの事で気でも狂ったか?意外と早く精神崩壊しそうだな!クククククツ…まあいい、続きいくぞ」

「くそ、この悪魔胸糞悪いぜ」

「……………なんてひどい事を…」

「横島……………」

「タダオ……………」

皆は目を背けるが、横島の苦しみの声がいっまでも耳に響いていた。

横島は美神たちの別荘に絹と共に瞬間移動でもどり、今後の身の振り方の話し合いをする。

美神一家は日本は危険だと判断し、アメリカに技術提供を餌に亡命。

アメリカは霊能で遅れているため、これはわたりに船だったようだ。

シロは人狼の村に帰り、タマモは横島についてきた。

横島は絹と共に氷室村に移住。

絹は氷室村にある学校に転校することになった。

横島は、氷室村に文珠を利用した村全体的に覆い半永久的に作動する強力な結界をはる。

横島はこの時、絹に正式に恋人になってくれるように告白し、絹もそれを受ける。

この時から、横島は人が変わったかのように、誰から見ても真面目な好青年になっていた。

しかし、その裏では、絹を攫った人間と契約した悪魔の主である72柱の魔神の1柱を魔界まで行き、滅している。

その様子も映し出されていたが……ベリアルさえもその圧倒的な力におののいていた。

横島は怒りと悲しみが混ざったような表情で、容赦の無い攻撃を繰り返す姿が映っていた。

中空に浮き、100もあるかという文珠を自身の周囲に不規則に周回させ、稲妻や空間を切り裂く刃、瞬間移動し直接相手に刺さる槍などを生み出し魔神を襲い狂う。その一つ一つが山を消し去り、地面を引き裂くなどと凄まじい威力であった。

そして自身は瞬間移動にも見える超絶スピードで自らの霊刀ハンズ・オブ・グローリーを振るい相手を切り裂いていき、追い込んでいく。

……その様相は、横浜の時に見せた横島の力など遥かに凌ぎ、圧倒的であった。それを躊躇無く相手が滅するまで続ける。

千の命を持つといわれたその魔神は、反撃をする間もなく滅んで行ったのだ。

もはや、この時の横島は神魔でさえ、容易に手出しが出来ない存在になりつつあったのだ。

「に……人間分際で……なんでこんな力を………フヒツ！この力も俺の物になる!!この力が手に入るのだ!!これならば、あのサタンすら倒せる!!ヒューヒツヒュー!!」

ベリアルは横島のこの姿に恐れおののくが……その身体が自分の物になる事を思い出し、強気な発言をする。

「……横島……本当に、魔神と戦っていたのね。あの力は魔神を倒すための力……」

「横浜の比じゃない。なんて破壊力だ。あれが横島本来の力……」

「横島お前………」

皆は横島の力に驚くが横浜の時の横島を知っているだけに、何とか頭の中で処理をすることができたようだ。

「横島くん……つらいのね。戦うことが……」

「タダオ……らしくない……らしくないよ」

真由美とリーナは横島が振るう力よりも、表情や行動に目が行き、横島の苦しみと悲しみを感じていた。

横島はその魔神を滅し、少しは人界の不穏な動きがマシになるのではと考えていたが、そうはならなかった。

人界での人間による霊、妖怪、妖魔、悪魔などの捕獲、兵器利用への流れは止まらない。

悪魔の手引きがあったのも事実ではあったが、根本的に欲していたのは人間そのものであり、悪魔の囁きが無かろうとも、本質は変わらなかったのだ。

そして、ついに、妖怪妖魔が反撃の狼煙を上げる事になる。

妖怪妖魔は元々は結束力が弱く。別種族とのつながりは、ほとんど無かったのだが、ここに来て、団結しだしたのだ。

アシユタロスとの戦い……その影響は計り知れない。

人界では、人間はより強力な兵器を求め、その結果、霊や、妖怪妖魔、悪魔を利用する。

魔界では、今まで抑えられていた急進派が活動が活発になり、己の欲するままに人界に赴く悪魔が増え、力を欲する人間と利害が一致し悪魔契約を行う……………

そして、妖怪妖魔は窮地に立たされた結果、結束力を高めることになった。そこを急進派の悪魔に利用される事になる。

神界では、アシユタロス後の事後処理に追われていたのもあるが、この流れは元々人間が作り出したものであり、魔界へ穏健派に急進派を止めるようにと通達する程度に収まる。

結局人界での活動は小竜姫などの管理者の裁量に任されたのだ。

また、横島の魔界での活動は黙認していた。

この流れは、人間と妖怪妖魔の戦争へと発展していったのだ。

これこそが、急進派悪魔が望む、混沌とした人界の姿であった。

横島は痛感する。

本質は人間の心にあることを……………悪魔はそれに自分の欲にあった人間に手を貸し、お互い利用しあっているだけのことだと……………

悪魔を滅したところで……………一時的な効果しかない。流れは何も変わらないことに……………

ベリアルはこの流れに乗った魔神であった。

しかし、表舞台にはまったく出ず、同族を利用したり、漁夫の利を得るような行動をとっていた。

得意な舌先三寸、虚偽虚構を論じ、強い物には諂い。弱い物は押さえつけて……………

横島は人界では、国や有力名家等を味方につけ、今の妖怪妖魔を利用した軍事力拡大を抑える活動にでる。軍や闇組織に対しては、生体実験等を行っている組織に介入し、捕まっている妖怪妖魔の救出などを行っていた。

妖怪妖魔に対してはバンパイア-halfであるピートと、元大妖怪九

尾の狐タマモの協力を得て、戦争を回避するために何度も有力妖怪妖魔の元に訪れていた。

魔界では、人界に介入している魔神達と話し合いをするというスタンスをとる。

妖怪妖魔と人間が争うように仕向けている悪魔を抑制するために……

元々悪魔は人界に介入していた。悪魔契約などはよく昔から行われていたのだ。

召還獣と呼ばれている物も、元々魔界の悪魔や魔神の分身体であることも多く、今までは大きく人間社会にまで影響は無かったのだ。

魔神との話し合いは最初は困難かと思われた。魔神には人間の常識が通用するわけも無いため、戦闘になることが多かったのだ。しかし、その戦闘は力比べ程度で終わることが多く。死闘を繰り広げるまでの戦闘に発展しない事がほとんどであった。

横島も魔神を滅するつもりも無く、理性ある魔神は飽く迄も力比べを楽しみたいのが本音だったり、逆にこの力比べ後に、友好的になる魔神や悪魔も多く居た。

横島の活動で一時は妖怪妖魔と人間との全面戦争は避けれるところまで来ていたのだが……結局、戦争の口火が切られることになる。

横島はこの頃から、斉天大聖老師の紹介で神界図書館へよく足を運ぶようになり、不必要に知り合いを巻き込まないように接触をさけてきたが、ドクター・カオスとは頻繁に会うようになる。

氷室村では、前々から自分も力になりたいと言う絹をやんわりと断り続けていたのだが、ここに来て絹に陰陽術の修行をつける姿が見られるようになる。

この時横島は絹のために、氷室家に伝わる陰陽術を改良し、術式体系を新たに作り、現在の氷室家の術式の基礎を作ったのだ。

そして、人間側が徐々に劣勢に陥り、大規模反攻作戦を取ろうとし

ている時期の映像が流れる。

天界では、人間側が敗れるだろうという意見がほとんどで、この事態に介入するかしないかを何度も論議を交わされていた。

結論は、不介入……これも歴史の一部だと……

横島はこの結論を斉天大聖老師から聞かされていた。

『……本当はお互い戦いたくない筈なのに、なぜこうなっちゃうんですかね師匠』

『人間は争いの歴史を繰り返してきた。最初は、人も妖魔もただ単に生き残りをかけ、食料をめぐる争っていた。だが、人間の欲は、衣食住だけでは済まなかった。……自分の身の丈に合わない欲は自らを滅ぼす。ただ、それだけの事じゃ』

『……俺は……』

『お主はよくやった。ただ、時勢がそうはならんだだけの話じゃ』
『……』

数日後……

横島は夜遅く、二人で生活している氷室家の敷地に建てた別宅玄関からでる。

絹も見送りに、一緒に玄関を出て少し歩む。

横島は当時20歳、絹は19歳だった。

『横島さん……不安でしかたがないんです。あなたがまたどこかに行ってしまうんじゃないかって……』

霊能者の勘なのか、絹は横島の顔を見て不安でたまらない表情をする。

『お絹ちゃん……俺は君をずっと守るよ……ずっとね……』

横島は絹を抱きしめて最後のキスをする……そして、後ろ手の文珠を輝かせ……横島忠夫に関する全記憶を絹から消し去った。

『いめん……でも、全部守るよ』

気を失う絹を抱き上げる横島は悲しげな顔をしていた。

横島は次々に自分とかかわりが深い人物の記憶を直接消しに行った。

美神令子から始まり、最後にドクター・カオスとマリア。

『おぬし、少々疲れておりやせんか？顔が暗いぞ？昔は元気とスケベだけが取りえの小僧だったのがのー、今じゃ、なんじゃ、三界を又にかけて、世界を救おうとしとる……情勢が悪いのはわかっておるが、休憩は必要じゃぞ。……どうじゃ！カオス特性酸素吸入リラックスマシン2号で疲れを癒さんか？フハハハハッ！肩もみアームと腰もみアームが絶品じゃぞ!!』

カオスはそう言つて、腕が沢山付いている見た目がおかしいリクライニングチェアを指差す。

『横島さん・心が・乱れて・おります。マリアが・何か・出来る事が・ありますか?』

マリアは横島を気遣う。

『ごめん、じーさん、マリア……本当に世話になった……』

横島はそう言つて、文珠を輝かせ、二人の横島忠夫に関する記憶を消し去る。

そして……

南極大陸に瞬間移動。

あらかじめこの日の為に設置した世界各国の文珠を起動し……
ついに始めてしまう。

横島が世界を救うために考え出した結論。

誰も傷つかずに人々を、妖怪妖魔を救う為の究極の方法『世界分離』
を……

この地球を人間と妖怪妖魔を分け二つの地球に分離してしまう方法。
法。

そして、神も魔も介入できない世界を創るための方法。
文珠があつてこそ実行できる方法なのだ。

横島は文珠を多量に頭上に浮かばせながら、南極大陸を覆うほどの巨大な術式を空高く、つむぎだしていく。

先ずは、神や魔神に気づかれぬようにと、分離の際にこの世界自身に負担を軽減させる為に、時流をほぼゼロにまで遅らせる。

そして強力な結界を張り、この地球をこの次元から一時的に分離。

宇宙の卵の理論を使い。無数の空の器を生成する。

その間、地球上にある知的生命体を二つの世界に振り分ける為に……マーキングして行く……

地球上に存在する。神・魔を強制転移送還……

あらかじめ、強力な神や魔が地球上に居ない事を確認していた。

歴史改ざんを行うため、人間の世界には霊や妖怪・妖魔が居ない世界を人々の記憶から記録すべて消去するための術式を埋め込む。

妖怪妖魔の世界でも同じく、人間が始から居ない世界となるように人間の記憶、記録を消去する術式を埋め込む。

最終的に世界分離を果たした際にこの術式が起動するのだ。

地球をスライドさせるが如く、分離していく……

分離の過程で副次的に、似通った世界が出来てくるがそれを消去する

横島は強靱な精神力と霊力を振り絞り……888個ある文珠をコントロールし『世界分離』を実現していく……

そして、メインとなる人間世界、妖怪妖魔の世界の分離はほぼ完了……まだ、残っている似通った世界の消去と、分離中の世界に残っている知的生命体の振り分けを行う。

その時、横島は感じた。最高神にこの事に勘付かれた事に……
横島は焦る。

知的生命体の振り分けを急ピッチに行い。

そして、この人間世界の地球と別次元に出来た妖怪妖魔の地球を神や魔にも絶対に干渉させないように、また、宇宙意思の修正に対抗するために、自らが二つの世界を覆う結界と化する術式を起動させたのだ。

しかし、ついに眩い光に覆われた姿の最高神が横島の前に現れる。

『俺にはこれしかなかった……皆が生き延びて、争わない世界。神も魔も干渉しない世界』

『……そこには君の居る場所がないではないですか』

『いや、俺は自らを結界化する。それで俺の役目は終わりだ』

『それはさせません……』

最高神は横島の術式に介入し止める。

横島には既に抵抗する力も残っていないかった。

『君は天界の規定で罪となる……君は自分のエゴだけで、世界の理を変えてしまった』

『……そうだとしても！争いなんて真つ平だ！皆が、大切な人が傷つくのはもう嫌なんだ!!』

『君は優しい……優しいが故に間違いを起こす。……君は魂の牢獄に長い間投獄されるでしょう』

『……この世界はどうなりますか？』

『これほど見事に分離されては元に戻すこともままになりません。……このまま歴史が刻まれていくことでしよう』

『そうですか……最後の結界を発動できなかったことが心残りです。俺の願いを聞いてくれませんか？二つの世界には、神も魔も介入をしないでいただきたいんです』

『それは……検討しておきましょう』

『ありがとうございます』

ここで映像が途切れる。

「何て奴だ!!人間の分際で人間の分際で!!人間のくせにー!ー!ー!ー!!ふざけるな!!なにが世界分離だ!!何が争いのない世界だ!!虫けらのくせに!!くせに!!くせにー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ベリアルは痲癩を起こしたように叫びをあげる。

横島が起こしたことを聞いて知っていたが、実際映像として見てもはや人間や神、魔の云々の話ではなかったのだ。世界そのものを作り変えたのだ。

元天使で元魔王のベリアルだが、どうあがいても到底真似出来る代物ではなかった。

「……………横…島が、この世界を創った?」

「……………横島が…神さま?」

「……………マジ…かよ」

「横島さんが創った……………この世界を?」

「……………あ、ありえない…しかし、あのままだと人間は確実に滅んでいた……………」

幹比古、エリカ、レオ、深雪、達也はあまりのことに呆然とするしかなかった。

「……………争いの無い世界を願って創られたのが今の世界……………横島くん」

真由美は横島が願った世界がこの世界ならば、報われないのではないのかと思う。

「……………タダオ…悲しすぎるよ」

リーナは横島の行動があまりにも自分を犠牲にする物ばかりなのに、悲しみに涙する。

185話 悪魔の謀略!!⑨怒りの鋼鉄女神

「この、この、人間の分際で!!この、この、この、この!!虫けらめーーーー!!こいつのせいで!!あとちよつとで、人界に介入できたものの!!こいつのせいで!!この!!この!!」

しかもあの猿の弟子だと!!こいつのせいでこんな姿に!!」

ベリアルは怒りのまま、魔人形28号を使って、うつろな目で反応が無い横島を執拗に殴り続ける。

「もうやめて!!タダオは十分苦しんだじゃない!!もうやめて!!」

リーナはそんなベリアルに力いっぱい叫ぶ!

ベリアルが横島を殴るのに集中している間、深雪は横島に助けられた時の言葉を皆に伝える。

「私に横島さんが最後まであきらめるなど、皆に伝えるようにと……」
「……横島がただで捕まるわけがない……何かしようと考えがあるのかも」

「そうよ。きつとそう」

「……横島くん、気を失っているのよ……あんなのを見せられ、言われたら気が狂ってもおかしくない……」

「いや、やつの事だ、絶対何かあるはずだ。まだ、準備が済んでいないのかもしれない。時間を稼ぐしかないか……」

「でも、どうやってだ」

幹比古、エリカ、真由美、達也、レオは深雪から伝えられた横島の言葉を聞いて話し合う。

いつもつるんでいるエリカ達は横島が何かしようとしているのだと判断したのだ。

リーナは既に横島の事で精一杯で聞いていないようだ。

そんな時……

「だめ……です。……その人間をいじめたら……だめ……です」

ライオンに乗ったダンタリオンがこの場にも戻ってきたのだ。

「今、忙しい!!このー!!こいつめ!!この!!この!!」

ベリアルは横島を殴るのに集中し、話しかけてきたのがダンタリオンドだと気が付いていない。

「だめです」

ダンタリオンはそう言って、執事が持っていたケーキ用のフォークとナイフを投げる。

「ぐはっ!!何をやるダンタリオン!!」

魔人形28号の額の目にスッポリ嵌っているはずの、目玉しかない目玉にブツ刺さり、漸くベリアルはダンタリオンに気が付く。

「その人間……良い本を持っています……だからダメです」

「うぐつ、殺すつもりは無い」

ベリアルは刺さったフォークとナイフをスポンと抜きさる。

「いじめるのはダメです。禁止です」

「いじめているわけではないぞ。ダンタリオン、こいつが何故か気絶してしまったので、たたき起こしてやってるだけに過ぎない」

ベリアルはこんな苦しい嘘をつく。

「本当…ですか?」

なぜか信じそうになっているダンタリオン

「おお、本当だ。親切心で行っているに過ぎん」

ベリアルがそう言うのと納得しかけるダンタリオン

「その目玉が言っている事は嘘だ!」

「そうよ!さつきから横島にひどい事をずつとしてたんだから!」

「横島の身体を奪うつもりなんだ!」

レオとエリカ、幹比古はダンタリオンに叫ぶ。

「あの人間達が言っている事は本当…ですか?」

ダンタリオンは急に叫びだしたエリカ達にビクツとし、ベリアルに聞く。

「何を言っているダンタリオン。人間の言う事など聞くものではない。奴らは嘘しか言わない」

「ダンタリオンさん聞いて、横島くんを傷だらけにしたのはベリアルよ。椅子に縛られたままで、私達は動けない。そんな事が出来るのは、この場ではそのベリアルだけよ!」

真由美もダンタリオンに訴えかける。

「ベリアルは横島の身体を我が物にするようだ。そうするとどうなる?この後、起こるであろう横島の人生の記述は、今ある本だけで終わってしまう。そうになると君は続きを読めないのではないか?」

達也は落ち着いた声色でダンタリオンを懐柔にかかると。

「!……それは、困ります」

「ダンタリオン、そんな事はしない。ほら、新たな本もこの横島なる人間から提供された物だ。続きを読みたいのだから。もって行ってゆっくり読むがいい」

「新しい本!……いいの?……でも、その人間いじめる?」

「いじめないと約束しよう」

「そんなの嘘よ!!」

「ダンタリオンさんだまされないで!!」

エリカと真由美は叫ぶ。

「うん……わかった」

ダンタリオンはベリアルの言葉を信じ、先ほどベリアルが横島から取り出した本三冊をもつて、また、どこかに走り去っていった。

「クククククツ、貴様ら無駄な足掻きよ!俺の言葉には強制力が働く。嘘も真実に写るようにな……それが俺の能力だ。貴様らにも試してやろうか?」

ベリアルはエリカ達に向かって余裕を見せる。

ベリアルの能力は言葉は明らかに嘘が混ざっていいようだが、それが真実に聞こえてしまうのだ。

それを使って今まで色々な悪事を行ってきた。

「では、こいつは、すでに物を言わん肉に成り下がった。どうやら精神崩壊したようだ。では身体をのつとらせてもらおうか……」

ベリアルは魔人形28号を使って、虚ろの目をした横島に手をのばす。どうやら、横島の片方の目を抜き取るうとしているようだ。

「やめろ!!」

「やめてくれ!!」

「タダオに手を出さないで!!」

「くそっ!」

しかし、そこでバンつと大きな音を立ててこの部屋の扉が開く!!

「なんだ?またダンタリオンか?」

ベリアルはうつとうしそうに、扉の方を向く。

「フハハハハハハッ!わし参上!!」

紳士風の服装にマントをたなびかせ、高笑いをする60歳前後の老人が堂々とこの部屋に入ってきた!!

「なんだ!このじじいは?」

ベリアルは訝しげにその老人を見る。

こんな登場の仕方をする老人は、いつもの自己紹介を行う。

「驚け!!そして、慄け!!数多の錬金術を体現し、天才の名をほしいがままにしてきたヨーロッパの魔王!ドクター・カオスとはわしの事じや!!ハハッハッ……いまい盛り上がらん……マリアよ、やはり建物をど派手に破壊しながら入ってきたほうが良かったのではあるまいか?」

……やはり、ドクター・カオスだった。しかも登場の仕方に不満があるらしい。

「」「ドクター・カオス!!」「」

皆は全員同じタイミングでカオスの名を驚きと共に叫ぶ。

「ドクター・カオス……このフィールドは・特殊です。何が起きるか・測定不能です・現状生命エネルギー・各種霊気は・制限されており……慎重に・事を・運んで・ください」

「うん……マリアの言うとおり」

その後ろから、マリアがカオスに注意をしながら大きな金属製の箱

を背負って入ってくる。

そして、なぜか雫がマリアの後ろにちよこんと着いて来ていた。

マリアは雫との約束を守ったようだ。横島がピンチの時は一緒に助けに行くという約束を……

「マリアさん!!」

「マリア!!」

達也と真由美、リーナがマリア登場にも驚く。

「雫!!」

「北山!!」

「北山さん!!」

そして、他の皆は眠たそうな目をした友人、雫が暢気そうな声を上げて登場した事に驚く。

「なんじゃ、おぬしら捕まっておったのか?」

「皆さん・大丈夫・ですか?」

「皆!大丈夫!」

カオス、マリア、雫は椅子に縛られている皆の下に行こうとするが……

「タダオが!!」

「横島が!!」

皆は石テーブルに拘束されている横島の方に視線をやり、カオスたちを訴えかける。

「ゆるせんなく、つぎはぎ人形の分際で、このカオスの同胞に手をだすとは……」

ボロボロの姿で気を失っている横島を見て、カオスは怒りをあらわにする。

「……横島さんを・いじめる・悪魔・滅ぼす」

マリアもボロボロの横島を見た後、ベリアルに向かい完全に戦闘態勢に入る。

「横島さん!」

雫は横島の状況に悲痛な声を上げる。

「ドクター・カオス！ここでは魔法の発動が出来ません。サイオンや霊気を制限されているようです。あの巨人は魔神ベリアルと名乗っている存在です。さらに横島の身体を乗っ取るつもりです。それとは別に横島は風水盤がどうか言っておりました。横島が倒れている石テーブルもその一部らしいです。」

達也はカオスに早口で重要な事を簡単に説明する。

「ほう、魔神に元始風水盤か、横島の予想通りか……それでこの霧、そして、この明らかに高次元体であるこの建物……わしは風水盤をどうにかする。マリア……存分にやっつけていいぞ。すべてのリミッターを解除を許可する」

「イエス・ドクター・カオス」

霧の中に入る前、横島が式神をつかって携帯端末で連絡した先は、ドクター・カオスだった。

あらかじめ、横島は魔神と元始風水盤が関わっている可能性があることをその時に伝えていたようだ。

そしてカオス達は00カオスフライザーX2とドッキングして運用する大型輸送ユニット、ダイカオスで大陸間弾道飛行で急行したのだ。

「待ってください。魔法が使えないんです。突っ込むのは無謀です」

達也はカオスとマリアに注意を促す。

「魔法が使えない？知らんなー、フハハハハハッ、わしとマリアにそんな物は関係ないわ!!」

「全リミッター解除・エネルギー供給・パラジウムリアクター変更」

達也の忠告もなんのその、そのままカオスとマリアは動き出す。

「なんだ。このじじいと女は？カオスにマリア……どこかで……クククククツ、まあいい、ギャラリーが増えただけの事だ。魔人形ども！そいつらをひつとらえろ!!」

ベリアルはカオスとマリアを認識せず、特に脅威に思わなかったよ

うだ。侵入者を捉えるように魔造人間達に命令する。

やはり……

「横島さん・いじめた・許せない・許さない・ダブル・ドリル・ブーストナツクル!!」

マリアは相当お怒りのようだ。

両腕のロケットアームを高速回転させながら発射。

そのロケットアーム一発で次々に4体もの魔造人間の体に大穴を開ける。

この図書館では霊気などの生体エネルギーは制限されるが、物理エネルギーはその範囲外なのだ。マリアはサイオン（霊気）も生み出す事ができるが、今は超小型原子炉をパラジウムリアクターを起動し電子エネルギーで稼動していた。

ダンタリオン自身がこのように物理や科学が脅威となる事を想定していない、または、そんな存在を図書館に招き入れる事自体を想定していなかったようだ。

「レッグ・ミサイル・アタック・ファイア!!」

マリアは続いて、高く飛び上がり、足の脛脛部分を開き、超小型のミサイルランチャーを複数魔造人間に向け発射。魔造人間共に全弾命中炎上する。

「ダブル・フィンガー・レーザー・ファイア!!」

戻ってきたロケットアームの指から多数のレーザービームが放射し、魔造人間達の身体を焼き斬っていく。

「ななななな？なんだ？あの女！なぜ力が奮える？機、機械人形か？

……これは？」

ベリアルはまさかの光景に驚きを隠せない。

マリアが戦っている隙に雫は達也たちを拘束しているロープを一つずつ切っていく。

「へ？攻撃できないんじゃないの？」

「すごい!!なによあれ!!」

「かつこいいぞ!!どうなってんだ?」

幹比古は変な声もれ、エリカは驚き、レオはロープを切る雫に質問していた。

「マリアは凄い!」

雫は自分の事のように嬉しそうに答えるが、答えになっていない。

「マリアさん……さすがです」

達也はその光景を関心したように見ていた。

「お兄様?」

深雪はそんな達也の様子をいぶかしげに見る。

「マリア!!タダオをお願い!!」

リーナはマリアに横島を助けるように叫ぶ。

「横島くん……まだ、大丈夫よね」

真由美も横島を心配する。

その間もマリアは魔造人間を次々と破壊していく。

「くそ、ガラクタめ!!魔人形ども何をやっている!!……あのじじいはどこ行った?な!?!元始風水盤の稼動石に向かっているだど?まさか!あのじじいを止めろ!!」

ベリアルはカオスが元始風水盤を稼動させるための石版に向かっていている事に気がつき、慌てて、魔造人間にカオスを止めるように怒鳴る。

カオスは自ら電子銃を構えながら、元始風水盤の制御版に向かっていったのだ。

「ちっ、こちらに気づきおったか。バロンZ バロンXいでよ!!」

マリアが背負っていた金属性の箱の一部が分離し、犬のような姿に変形し、カオスに迫る魔造人間に襲い掛かる。カオス特製の小型の犬型ロボットだ。探査能力と近接戦闘能力に優れる。

ちなみにバロンVは雫の護衛に回っている。

「横島さんの敵は・マリアの敵」

マリアは魔造人間を次々に屠りながら、ベリアルに近づいていく。マリアは無表情であったが、怒りのオーラが見て取れる。

「なんだ？なんなんだ？くそつ、ガラクタめ!!これでも喰らえ!!」

ベリアルはマリアに向かって目からビームを放つ。

「マリアフィールド！…あなたは・許さない」

ビームはマリアに直撃する前に、不可視なバリアに阻まれる。

「な？なんだとー？ならば、先にあのじじいを！」

ベリアルはビームが阻まれた事に驚きながらも、今度は、カオスに向かってビームを放つ。

「マリアフィールド！…無駄です」

ビームは明らかにカオスに到達する大分手前で阻まれた。不可視なバリアがマリアとカオスとの間で生成されたのだ。

マリアドライバー△、そのカオス作、謎の機構は物理エネルギーを放出し、何も無い空間にバリアを生成させる。

意思と感情でコントロールするため、バリア生成前後にどうしても言葉（言霊）が出てしまうのだ。

これは、レオや達也に提供したCAD一体型の霊具の霊力変更を機構を応用し、物理エネルギーにそのまま流用したものだだった。

マリアの周囲一定範囲で作動可能な攻防一体の物理エネルギー変換装置であった。

「な？なんなんだ？どうなってる！」

ベリアルは明らかに狼狽する。

「魔法ではないのか？あれが物理法則にのっつっているだと？……さすがはマリアさん」

達也はその現象に驚きの声をあげると同時にマリアに関心する。

それを作ったのはカオスなんだが……

そして、マリアは猛スピードで迫り、片手で3メートルもある魔人

形28号を掴みあげる。

「何をする！このガラクター！」

「命乞いなど・いらぬ・滅して・ください・マリア・コレダー!!」

そして怒りのマリアは魔人形28号とベリアルに激しい電流を流し込む。

186話 悪魔の謀略!!⑩再びのピンチ

「滅して・ください・マリア・コレダー!!」

マリアは魔人形28号を片手で掴み上げ、電撃を食らわす。

「ふんっ！緊急脱出！」

ベリアルは電撃を喰らう前に魔人形28号から、ジャンプし緊急脱出。

そのまま、空中をぐるぐると回転しながら、横島の顔に張り付き、横島の右目に取り付く。

「!!」

マリアはベリアルが目玉自身が本体だという事に気がつくのに遅れ。一拍遅れ、ロケットアームを

飛ばすが……

「フーン！」

一歩先にベリアルは横島の右目の眼球を力任せに抜き去り、開いた目に自分をスッポリと埋める。

横島はゆらりと起あがる。

「クククククツ、ついに手に入れたぞ!!横島の体を!!」

ベリアルの声は横島の右目から漏れていたのだが……徐々に横島の口から横島の声で言葉が出てくる。

横島の黒かった左目の瞳もベリアルと同じ黄金色に変化していき、横島の身体はついにベリアルに乗っ取られてしまったのだ。

「横島さんの・身体を・返して・ください」

「さすがの横島も精神崩壊を起こした後では抵抗できないか、クククククツ、凄いぞこの体は霊圧がグングン上がる!ヒューヒツヒュー」

乗っ取られた横島の身体から大量の霊気が漏れ出す。

「クククククツ、なんだ?ガラクター!この身体に攻撃できないのか

「?こっちは出来るぞ!」

横島の身体を使ってベリアルは巨大な霊弾をマリアに向かって飛ばす。

「マリアフィールド!・全開!」

マリアに不可視バリアを展開するが、バリアが攻撃に耐え切れずに途中で消滅。

マリアは十字ブロックをし何とか耐えるが……服がズタズタになる。

「ククククククツ、ヒーヒーヒッヒー!!すばらしい!!すばらしいぞ!!この身体は!!何て力だ!!おい、ガラクタ!!さっきの勢いはどうした?」

「横島さんの・身体を・返して・ください」

「そればかりだな?もうこの身体は俺の身体だ!そら、どうしたガラクタ!そらそらそら!」

ベリアルはマリアに霊弾を次々と放つ。

マリアはバリアを展開しながら、左右によけ、なんとか致命的なダメージを避けていた。

達也たちは、雫に全員解放され、一時退避するためにこの部屋を出ようしたのだが……

横島がマリアを攻撃する様子を目の当たりにする。

「な!?!ベリアルが横島の身体を乗っ取ったのか?」

「横島くん間に合わなかったの!?!」

「……そんなタダオ!!」

「マリア!!横島さん!!」

「ククククククツ、そうだギャラリー諸君。俺がベリアルだ!この身体は実にいい!!それでどこに行くつもりだ?扉は開けさせんぞ!!」

横島を乗っ取ったベリアルは皆が扉のほうへ行くのを目撃し、横島の声でそう言って、この部屋の扉を封印する。

「横島!!起しろ!!そんなやつに負けるな!!」

「そうよ!!あんた!!いつものギャグはどうしたのよ!!」

「横島!!過去にあれだけ頑張ってきたじゃないか!!いまさらそんな奴に!!この世界を創った神さまみたいなものなんだろ!!」

レオ、エリカ、幹比古は横島を呼び戻そうと必死に叫ぶ。

「横島さんから出て行って!!横島さんとマリアにひどい事しないで!!」

雫は横島が奪われる事と、横島とマリアが傷つく事がたまらなく嫌だった。

「横島、お前はその程度か!!お前はまだ何かしたかったんじゃないのか!!」

「横島さん!!お兄様の感情を戻してくれたじゃないですか!!先ほどの件!!うやむやにするつもりですか!!」

達也は横島がまだ、何かの策略をめぐらしていたのではないかと考え、必死に呼びかける。

深雪は、兄達也の感情の変化は間違いなく横島の影響だと、そんな横島が感情で負けるはずが無いと……それと、先ほどの口付けの件を説教か何かするつもりらしい……

「横島くん……あなたの過去を見たわ!でも、ルシオラさん、それと絹さんは、あなたを恨んだり絶対してないわ!!あなたが好きだったのよ!!だから!!」

「……タダオの過去なんて私には関係ない!!私は今のタダオが好きだから!!だから戻って来て!!今を生きて!!」

真由美とリーナは横島のトラウマ……精神が塞ぎ込んでいた理由をマリアからある程度聞いていた。そして、先ほど見た映像で、それを目の当たりにし痛感していたのだ。生半可の事では横島を救えない事を……

真由美は、ルシオラと絹の気持ちに共感していた。彼女らは横島を心から愛し、守りたいと思った事に。それを知らせてあげたいと。

リーナは横島の自分を責め続ける姿は、自分の事が許せないのだと、今の自分が嫌いなのではないかと、でもリーナは横島に今を生き

てほしいと、今の横島が自分は好きだからとそう訴えたのだ。

「横島さん・あなたは・英雄です・昔も・今も・早く戻ってきて」

マリアはボロボロではあったが、横島に訴えかける。横島がこんなところで破れるはずが無いと……

「クククククツッ！残念だな。もうこいつの心は消滅した!!この身体は俺の物だ!!そしてこの姿こそこれからはベリアルとなるのだ!!……ちよい整形は必要だがな ヒーヒーヒッヒーヒー!!

さて、この図書館も用済みだな……我が配下の者よ!!出でよ!!我が軍団の長どもよ!!」

ベリアルはそう言っつて、なにやら術式を唱えと……横島が先ほど拘束されていた石のテーブルの後ろ付近から、禍々しい姿の羊の角を持っつたものや、牛の頭など、いかにも悪魔らしい悪魔が……一体づつ一体とゆっくりとしたペースで召還されてきた。

「くそー!」

「そんな!」

「タダオー!!戻ってきて!!お願い!!」

「横島くん!!」

「横島さん!!」

「いや、まだだ!」

皆は悔しそうにするが、達也はまだあきらめない。横島は今まで言っつてきたことを違えたことがない事を知っつている。きつと何かを仕掛けるははずだと……

マリアは皆の前に立ち、ベリアルから守るような態勢で、じつと状況を直視する。

「霧よ瘴気の領域を広げよ!!」

ベリアルはそっついいながら横島の身体の靈力を高め、何かの術式を起動させた。

その頃、霧の外では、十文字克人及び、七草家、十文字家、千葉家、吉田家の門人や、軍、そして警察組織がこの霧を囲む様に待機していた。

ピリピリした空気の中、この場に似つかわしくない、ほんわかとした空気を纏った二人がベンチに座っている。

「おば様々々、芽衣と横島くんの結婚の仲人をしてくださいまし々々」

「あら？忠夫ちゃんが了承してくれたの？」

「これからです々々々々」

六道54代目当主ドレス姿の六道芽衣子と氷室家14代目前当主巫女装束姿の氷室恭子である。

六道芽衣子は十文字家からの連絡で、門人数十名とここに到着。

恭子は、霊能者の勘なのか、嫌な予感がして数名の門人と共に東京に向かい、先ほどここに到着したのだ。

蓮と要も付いていこうとしたのだが、何かあったときのために残したのだ。

この二人は、軍やら警察組織、十師族に囲まれていても、どこ吹く風か、まったく動じていない。

しかも、芽衣子は式神を数体出したまんまである。逆に周りがおっかなびつくりし、この二人から避けているようにも見える。

それどころか恭子に至っては、十文字克人などに世間話や、お茶を買いに行ってもらっていた。

今も十文字克人は近くで待機し、緊張感の無い二人を呆れたように見ていた。

「あら、これはいけないわ。十文字ちゃん……霊気が乱れてる。何か良くない物が出てくるかも知れない……私達より後方で、援護をお願い

いね。霊具をもっていない方は、退避したほうが良いわよ」

恭子からその言葉を聞いて、十文字は後方に仮テントを構え作戦本部として行っている場所に行き、その事を報告する。

そして、霧が広がりを見せる……

「あらあらあらく、今日はひなたちゃんから全部式神を返してもらったから全力だせますのくくでも、気持ち悪いのが出てきたら嫌ですわくく」

芽衣子はウマの式神インダラに乗り、式神を引連れ反対側へと駆け出す。

霧が広がりだした直後、何かの結界が作動し、霧の広がりを抑えたのだ。

「これは、忠夫ちゃんの結界……準備していたのね。中はどうなっているのかしら……!? なにか来るわね。みんな警戒して、なにか来るわよく!!」

門人数名と十文字たちに注意を促す。

すると、霧の中にいた、翼竜に似た20メートル程の空を飛ぶ魔獣が数匹飛び出してきたのだ。

「うーん。空を飛ぶなんてずるいわね。電光石火改!!」

恭子は氷室術式を省略詠唱して、広範囲の電撃攻撃で撃ち落とす。

門人もそれに習い、雷撃術式で翼竜魔獣を狙う。

「これなら……十文字ちゃん。あの恐竜みたいな魔獣はたぶん通常の魔法攻撃も効果的よ。だから思う存分やっちゃって」

恭子は手ごたえから、通常攻撃が効果があると判断し、十文字克人に伝える。

「……了解した氷室殿」

十文字克人は恭子の攻撃術式の威力に驚いてはいたが、恭子の話はちゃんと耳に入っており、直ぐに作戦本部に伝える。

最初の10匹ほどは氷室家と六道家でほぼ倒したのだが……

そこから、虎のような魔獣や、巨大な蛇の魔獣や、大きな蛾と人間が混じったような悪魔など多種多様な魔獣や悪魔がぞろぞろと飛び出してきたのだ。

横島の結界は霧を抑える事は出来るが、どうやら魔物を押さえるものではなかったようだ。

もしかすると霧を抑える事で、魔物や悪魔が出てこれないと想定していたのかもしれない。

「これは不味いわね。……数が……十文字ちゃん!!悪魔には霊具に慣れた人が対応、それ以外は魔獣を!!」

すると六道芽衣子が行った先で大爆発が起きたような衝撃がこちらに伝わってくる。

「……あそこは大丈夫そうね。逆に誰も近づかないようにしないとね」

どうやら芽衣子が暴走し、百鬼夜行を起こしたようだ。

すると、霧の中から地響きが伝わりだし、どんどんこちらに近づいてくる。

そして、3メートルはあろうかという巨大な亀の頭がこちらの様子を伺うように霧から出てきたのだ。しかも二つもだ。

その巨大な亀の物と思われる大きな前足を地響きと共に一歩霧から外へ踏み出し、口から青白い炎を猛烈な勢いで広範囲に吐き散らした。

「結界!!」

恭子はとっさに大きな結界を張り。炎の範囲にいた魔法師達を救護する。

「あなた達は下がって!!……これはまずいわ、こんなのと戦った事ないもの……まるで白黒映画のカメラね」

恭子は口では素晴らしいながらも、巨大な亀に対し、札を手に攻撃の構えを見せる。

そのときである。

猛威を振るっていた巨大な亀の首が切り落とされ、血しぶきを上げ、大きな音をたて地面に落ちたのだ。

その先には華奢な少女が古風な剣を構え立っていた。

「横島さんがわたしを頼ってくれるなどと……しかもあんな大声で」

赤い髪に、耳の上には髪飾りのような竜の角、そして、古めかしい服装をしている少女……

小竜姫が現れ、亀の首を一刀で両断したのだ！しかもなぜか顔を赤らめて嬉しそうだ。

「あの方は……確か絹様のご友人とかで……お亡くなりになる前に一度氷室にこられた……でも、あの当時のままの姿とは……一体」

恭子は小竜姫に一度会っていた。絹が命尽きる数日前に、小竜姫は絹に会いに氷室家に来ていたのだ。

そして、小竜姫は目にも留まらない速さで、次々と魔獣や悪魔を切り裂いていった。

全世界図書館の中では横島を乗っ取ったベリアルが次々と上級悪魔を召還していた。

「クククククツ、100年ぶりか？我が配下の軍団長よ。余は姿こそ変わったが魔王ベリアルである。漸く復活を遂げた。この場所から、この世界を征服する!!」

ベリアルは余裕が出てきたのか最初の頃の仰々しい口調に戻っていた。

9体の悪魔は横島を乗っ取ったベリアルに恭しく頭を下げる。

「ん？これだけか？神魔に駆逐されてしまったか？」

9体目が召還されたあと、パタツと現れなくなった。

「ふー、何とか間に合った。いやチョイ遅かったかいのー。おーいマリアー!!魔界化を止めたぞい!!」

暢気そうなカオスの声がこの広間内に響く。

カオスは元始風水盤を制御し魔界化を止め、悪魔を召還できなくなったのだ。

「な!?!いつの間に?あのじじいー!!」

ベリアルは驚きの声と共にカオスに振り向く。

「横島、起きおったか、寝坊も良いところじゃぞ……なんじゃこの悪魔どもは?」

カオスはバロンZ、バロンXの2体の犬型ロボットの上にローラースケートのようになり、こちらに戻ってきた。実に器用だ。

「ドクター!!そいつは横島じゃない!!ベリアルが身体を乗っ取ってます!!」

達也はカオスに警告する。

「なに言っておるんじゃ?おぬし?どう見てもこやつは横島じゃろて」

カオスは悪魔が膝を付いているなど気にせず横島に向き直る。

「ククククククツ残念だったなじじい!!もはやこの身体はベリアルが「待たせたな」いただいて……?」

ベリアルはカオスに横島ではない事を伝えようとしたのだが……話している先で、別の口調が混ざる……

左目の瞳は先ほどまでのベリアルを象徴する黄金色ではなく、黒々とし、生氣ある意思の籠った目をしていた。

187話 悪魔の謀略!!⑪横島復活!!

「ククククククツ残念だったなじじい!!もはやこの身体はベリアルが「待たせたな」いただいて……?」

ベリアルはカオスに横島ではない事を伝えようとしたのだが……話している先で、別の口調が混ざる……………

さらに……

「よう、ベリアル。さんざ面白おかしい事やってくれちゃったな!この落とし前、どうつけてくれようか!!」

ベリアルが乗っ取っていたはずの横島の残った左目の瞳は黄金色から元の黒色に戻り、声は横島のいつもの口調に戻ったのだ。

「な?なんだと?」

横島の右目に収まっているベリアル本体からベリアルの狼狽した声が漏れる!!

「横島!!」

「タダオ!!」

「遅いぞ横島!」

「横島くん」

「横島さん!!」

その口調で横島本人が乗っ取られた身体から戻って来たことがわかったのだ。

「お待ちせ!横島復活!!」

横島はニカつとした笑顔を皆に向ける。

「なぜだ!!貴様は精神が崩壊したはずだ!!しかも先ほどまで俺の意思でこの身体は動いていたはずだ!!」

ベリアルは狼狽しながらも大声をあげる。

「なぜかって？嵌めたんだよ！お前をな！……まあ、結構な綱渡りだったけど、まんまと嵌ってくれて助かったぜ」

横島は自分の身体の感触を確かめるように、身体の内を回しながら答える。

ベリアルは横島の右目から離脱しようとするが、離れる事が出来ない。

「脱出!!……う……くそっ！離れん！」

「だから、嵌めたんだっていったら？」

「くそっ……くくくくくつ、しかし状況はかわらんぞ!!この図書館の中では、お前は力を発揮できないだろう。軍団長ども、あの人間どもを人質に取れ!!」

ベリアルは前に傅いたまま状況がつかめないで居る上級悪魔どもに命令をする。

上級悪魔9体は……達也やエリカ達に向かって、動き出すが何故か動きが鈍い。

達也達は悪魔たちの攻撃に反撃の構えを見せるが……

深雪の身体から急激に大きな霊気が放出され、皆を覆うように強力な結界が張られ、悪魔達の侵攻を拒む。

そう、これは横島が深雪を助けようとした際に、口移しに飲ませた劣化文珠が発動したのだ。

「ななななな？どつど、どういうことだ？なぜ悪魔どもが鈍い？なぜ、結界が張れる!？」

「プククククツ、まだ、わかんないのか？この図書館のお前が持っている管理権限は俺がいただいた!!お前も、お前の配下の悪魔も、力は人間並みになったんだよ!!結界は……ちよつと仕組んだがな!!」

横島はどうやったかは分からないが、ベリアルの司書の権限を奪い取ったようなのだ。そのため横島は奪い取った権限でこの図書館内でも霊力を発揮する事ができ、深雪に飲ませた文珠が発動出来たの

だ。

そして、ベリアルは力を失い、横島の右目から脱出が出来なくなり、さらには配下の悪魔も力を振るえなくなったのだ。

「ばっ…バカな!!」

「プツ…プククプククツ、その狼狽っぷり、なにお前？勝ったと思ったの？プハツ、残念すぎー!!」

ベリアルのそんな姿に横島は笑いを堪える。

なぜ横島が身体を取り戻せたか？

これは、最初から横島の計画された策略だった。

横島はこの部屋に到着した際、皆が捕まっていたがしばらく様子を見ていた。

横島自身この図書館では力が発揮できない事を知っていたため、普通に出て行って戦った所で勝ち目が無い事は十分わかっていた。そのため、皆を救い勝つための算段をめぐらせるために状況の確認と情報収集を行っていたのだ。

どうやら、ベリアルという悪魔は、身体を欲していて、そのために深雪の身体を奪おうとした事がわかった。さらに、ダンタリオンとベリアルの関係だが、ダンタリオンの方が立場が上のようにだが、この魔界化を起こし、一連の騒ぎを起こしていたのはベリアルだということがわかった。

さらにベリアルは、この管理権限の一部を有し、力を発揮する事が出来ている事もわかった。

他にも色々と観察をし、元始風水盤の場所、ベリアル自身の能力を知りたかったのだが、深雪と達也がピンチになり、出て行かざるを得なかった。

とりあえずは、ダンタリオンから敵として認識されずに、この場から遠ざけることから始める。

幸いにもダンタリオンはベリアルの行動や人間には興味が無かったため、これは何とかする事が出来た。

次に横島はベリアルと話しながらもベリアル自身の能力を探りをいれたが、判明できず。それはあきらめる事にする。

ただ、ベリアルは深雪以外には手を出さないつもりである事がわかった。

これはいつ心変わりするかわからないが……当面は大丈夫そうだと判断。

元始風水盤の所在がわからない今となつては、この場で皆を救うにはどうしても、力を取り戻す必要があつた。

そこで、横島はベリアルから図書館の管理権限を奪う算段をする。ベリアルの目的は身体を取り戻し、自分をこんな目に合わせた神魔への復讐と世界征服だ。

なんにしろ、ベリアルは身体を取り戻す必要があるようなのだ。

ならば、自分が身体を提供することで、深雪を救う事ができる。

さらに、自分の身体に罫を張ることを考えたのだ。

霊気を生み出す事ができないが……術式をイメージとしてつむぎだす事は可能だ。

そうやって、術式を罫として、体内とイメージとして刻む。

ベリアルがこの身体を乗っ取り……さすればこの身体にベリアルの管理権限により霊気を通るようになる。

霊気を通ることで、術式が作動するようにしたのだ。

しかし、普通の術式ではない。

ダンタリオンからこの図書館の管理権限を一部譲渡されているという事は、宇宙の理の一部といって良いだろう。その管理権限を奪う術式なのだ。

横島が世界改変を行うために培った膨大な知識を利用して、宇宙の理の一部を書き換える術式だ。

横島だからこそ、作り出すことができた術式なのだ。

横島は脳内と魂で術式を次々と紡ぎ上げながら、ベリアルと対峙し、深雪を救う行動にでる。

ただ単にベリアルに深雪の変わりに自分の身体を使えといつても

警戒されるだけだ。

ならば、圧倒的に不利な状態で、抗えないとベリアルが判断した時に言えば良い。

横島は自身の身体は、悪魔にも最適である事を知っている。なにせ、ルシオラの魂の拒絶反応に耐えた身体だからだ。悪魔に対しても耐性が十分にある。

深雪を助ける事ができ、万が一の最後の劣化文珠も渡す事が出来た。

もちろん劣化文珠にも細工を仕掛けていた。

そして、横島は倒れ、ベリアルに自分の身体を使うことを提案しそれに乗ってきた。

ここまでは、横島の思惑通り進んでいた。

しかし、ここから、横島の誤算が3つもあった。

横島は痛みや苦痛に対しては絶対の自信があったのだが……まさか自分の過去を暴かれるとは思ってもみなかったのだ。それが一目だ。

横島は皆に自分の過去を知られる事はさすがにきつい物があった。

横島は思う。自分は精神的にこれほどまで弱っていたことを今更ながら痛感するのだった。

さらに、ベリアルは自分のトラウマである過去を穿り返す。

これ程辛いものがあるだろうか？

二つ目はベリアルの特異能力、嘘も真実に映る強制力だ。地味だがやりようによつてはとてつもない力になる。

横島は絹の凄惨な過去の話で、まんまとそれに嵌った。

頭の中では嘘だと理解する。過去のあの場にはベリアルは確かに居なかったのだ。

しかし感情ではそれが真実に見えてしまう。

特に絹の件はトラウマになる位なのだ。心の隙は大きく、怒りと苦しみに支配されていく。

横島は意識だけはしっかり持っていないくは罫にはめる術式は完

成しない。

しかし、横島は傷ついた心では容易には抗えなかった。
どんだん意識が深く沈んでいくのを感じていた。

そして三つ目は……

(ヨコシマ、何やってているの？あなたらしくない)

(ルシオラー……これは夢……でもいいか……俺は君を死なせてしまった。救えるのに見捨ててしまった。……俺もそっちに行くよ)

(なによそれ！私は大好きなあなたのために命を投げたの！それを見捨てるも何も勝手な事をいわないで!!)

(ルシオラー!?)

(これは夢じゃないわ。私はあなたの魂と同化したの……あなたとずっと一緒にいたのよ)

(ずっと?)

(そうよ。これからもずっと……なかなか話はできないけどね。それは仕方がないことよ。でも私の事を今も思ってくれている事は本当に嬉しいわ……でも、今を生きないと、私はあなたの未来をみたいの……生きている未来を……あなたの中でずっと一緒に……きつとおキヌちゃん……あの子も一緒よ。だから、こんな事でさっさとリタイアするなんて無しよ!)

(俺は!)

そして、横島は懐かしい笛の音が聞こえた気がする。

絹と過ごした1年……あの時良く聞かせてくれた笛の音だ。

(俺は!!)

横島の魂と同化したルシオラの魂の中の意識が横島の意識と混ざりあったのだ。それは横島の力が極端に弱まり、さらに魔界化の影響だろうか……なんにしろ、大いなる誤算。いや奇跡なのかも知れない。

そして、ベリアルは横島の肉体に自らの身体を埋め込み乗っ取る。

ベリアルは図書館の管理権限で、横島の肉体にも霊気を宿している。

それと同時に横島の張った術式が徐々に身体の中で展開し……そして、最後に、ベリアルが持っていた全世界図書館の司書の権限を奪ったのだ。

「さて、ベリアル!?次はどうする?」

「ぐぬぬぬ」

そこへダンタリオンが慌てたようにライオンに乗って、この部屋に戻ってくる。

「良いところに来たダンタリオン!この人間が無理やり、司書の権限を奪ったのだ!さあ、権限を戻してくれ!!」

ベリアルはこの期におよんで、ダンタリオンに頼ろうとする。

「魔界化をといた……です」

「あれはあそこのじじいがやったんだ!俺じゃない。権限を戻してくれたら、元に戻す」

「嘘をついた……です」

「いつ俺がお前に嘘を付いた?」

「この本に書いてあった……です!」

そう言って、ダンタリオンが見せた本は、ベリアルが渡した横島の本三冊の内の最新巻だ。

そこにはベリアルが付いた嘘などが克明に書かれていた。

ベリアルは自ら墓穴を掘ったのだ。ダンタリオンをこの場から引かせるために渡した横島から取り出した本、その最新巻には今起きている事象も書き足されていく、もちろんベリアルがさつきまで行った事もだ。

「そ、それはこいつに嵌められたんだ!」

「観念したらどうだ?ベリアル?……そうだ。嬢ちゃん。俺が最初に

言っていた。この世界にとどめさせてあげると話覚えている？」

「…うん」

「じゃあ、文珠!!ひさびさー!!」

横島の右手の平から文珠が浮かび上がる。

文珠の復活だ!ルシオラの言葉を得た今の横島に迷いは無い。

次元維持と4文字書かれた四色に彩られた文珠(四神文珠)が輝きだす。

「……………あ!図書館…大丈夫になった…です」

「だろ?」

横島はダンタリオンに笑顔を向ける。

横島は文珠を使って、高位次元の建物である図書館をこの地で安定化させたのだ。

「すごい…です!!この人すごい…です!!」

ダンタリオンは嬉しそうに横島の周りをライオンに乗りながら駆け回る。

「そ…そんな、バカな!!」

横島はさらに文珠を生成して、そこで呆然としているベリアル配下の9体の悪魔に向かって発動させる。

すると9体の悪魔は床に出来た大きな穴に吸い込まれていった。

そして、横島は右目に埋まっているベリアルを抜き出し。指で摘む。

それと同時に横島の右目は再生していく。

「ヒィー!!」

ベリアルは情けない声を上げる。

「さあ、ベリアル!お仕置きの間だ!!」

188話 悪魔の謀略!!⑫悪魔の最後

横島はベリアルが目玉しかない頭を指でつまみ上げる。

「さあ、ベリアル、お仕置き時間だ！」

「ヒィー！」

「おーい、お前ら。こいつどうしようか？」

横島は凶悪な顔つきになり、ベリアルを見据えながら、皆に聞く。しかし、皆は声も上げずに、首を横に振るばかりだ。

「どうやら、横島の顔つきが相当やばい事になっているようだ。」

「ふっふっふーじゃあ、こんなのはどうか？ベリアル？」

横島はゆつくりとした動作で、ベリアルに向かって手のひらを掲げる。

すると、ベリアルの前から一冊古めかしい本が現れる。

横島は奪った司書の権限で、ベリアルの本を顕現させたのだ。

「や、やめー！！！」

「ん？なんだ？知られたくない過去でもあるのか？」

横島の目が鋭くなり、凶悪な顔のままニヤける。

「ジジジ、ジード・ヘイグ!!助けるー！！早くー！！！」

ベリアルは慌てふためきながら、助けるように仲間か配下の名前を叫び

「なんだ？まだ、お仲間が居たのか？この空間に居ないぞ？」

横島はベリアルのお仲間らしき存在をこの図書館及び周囲にはいない事を霊気を使って確認する。

「ジードー！！！」

「うるさい奴だな。こいつがそんなに信頼してる奴か？」

横島はそう言いながら、ベリアルの本の最後の方を開ける。

「プククツ、お前、そのジードって奴、もう居ないぞ、お前裏切られたんだ。とつくに逃げてるぞ！」

本にはジードなる人物が、この場から既に撤退している事が書かれてあった。

「あいつー！ー！！裏切りやがって！！」

ジード・ヘイグはベリアルとの悪魔契約を行った人間であり、50年程前に出会って以来の配下であった。あの33年前の摩耶誘拐時に襲撃された際、ベリアルを抱え、脱出した唯一の生き残りでもある。ジード・ヘイグは先ほどまで霧の外側で何者かと戦っていたが、魔界化していた霧が消えていくのを見て、潮時だと感じ撤退していたのだ。

ジード・ヘイグはベリアルに忠誠を誓ってはいたが、それは飽く迄も、自身が力を手に入れるため、それが使えなくなつたと判断し見限つたのだ。そもそもジード・ヘイグ自身、ベリアルのこの世界の支配を望んでいない。あわよくば、自分がとって変わろうとまで思っていたのだ。

「ブククッ、じゃあ、改めて、お前の過去を暴いてやる！！」

「やめー！ー！！やめてー！ー！！」

ベリアルは元天使だった。

ルシフェル（後のルシファー）に次ぐ力を持ったといわれている。ただ、それでもルシフェルには遠く及ばない。

ベリアルはルシフェルを兄貴分と捉え、その威勢を笠に着て、他の天使に威張り散らし、ルシフェルが見ていない所では、すき放題やっていた。

強い物には媚び諂い、弱い物には居丈高な、典型的な小物であった。人界に降り立っては、人間に対しても神の意向だといって、自己の欲求を満たすために淫猥な事を平気で行っていた。

あるとき、突然ルシフェルが墮天し、魔界に落ち、悪魔になったのだ。

ルシフェルは争いの耐えない天界と魔界の関係に憂い、自らが墮天し悪魔の立場から、この争いを諫めようとしたのだ。

当然、ルシフェルの腰ぎんちゃくであったベリアルは肩身が狭くなる。すき放題やっていた事がすべてバレ、責められ、立場を失い、居場所も無くなっていたのだ。

天界の規定により、ベリアルは罪に問われそうになった際、ルシファーを追って自ら墮天し、魔界に落ち悪魔になる。

ベリアルは魔界でもルシファーの腰ぎんちゃくとなり、色々やり放題であった。

ベリアルの能力、嘘を真実に映る強制力は、悪魔的にかなり有用な能力であったのと、水があつたのだろう。強い悪魔には取り入り、弱い物は力で抑え、せつせと力をつけていった。

人界では相変わらず、とんでもない悪魔的な所業を繰り返すのだが……それには事情もあつた。

ある時はハエの王、魔神ベルゼブブから、もてなしを受け、勧めを断れずに人間や動物の各種排泄物のフルコースを食わされたりもした。

その後、悪魔のくせに下痢になり、痔に悩まされるベリアルが映し出される。

その腹いせに、人間界にスカトロを広めたとか……

「……おまえ、ウンコ食つたのかよ」

「うるせー！！当時あいつのほうが力が強かつたんだー！！仕方無かつたんだよー！！おうえー！！」

ベリアルは目玉から涙をちよちよ切せ、当時を思い出したのか、えずいていた。

時には、魔神アザゼルに鞭打ちにさせられ、三角木馬に乗せられ蠟燭を垂らされるベリアルが居た。それはアザゼル流の歓迎の証だったのだが……

そして、アザゼルにアーーーな事をさせられ、その後しばらく痔に悩まされ、痔のクツションを常に手にしているベリアルが映し出される。

その後、人間界に腹いせに、男色の村を作り、また、ある場所ではSMを広めたのだ。

「……おまえ、なに？魔界でいじめられてたの？で、その腹いせに人間界で悪魔の所業を……」

「し、仕方が無かったんだー、あ、あいつ、クセになる快感を味合
わせてやるとかいつて、部屋に連れ込んで!!
あー、あー、あー、あー、あー、あー、あー、あー、あー、あー!!」

ベリアルは目玉しかない頭は真っ青になっていく。

その後、次々に魔神たちに、ひどい目にあつていくベリアルが映し
出される。

魔神どもは、別に悪意があつてやっているわけではない。おもてな
しをしているのだが……

そして人間界では自分がやられた所業を、腹いせで弱い人間達にも
同じ目に合わせていたのだ。

そうやって、自分の立場を確立し、嘘を真実に映る強制力の能力を
フルに生かし、72柱の1柱と呼ばれ、悪魔の王の1柱までのし上
がったのだ。

「……なんか、昔の俺を思い出してきた……」

横島はポツリとそんな感想を漏らす。

すでに横島の目の前のベリアルは憔悴しきっていた。

そして悪魔の王の1柱となったベリアル。

当時、ルシファーと共に魔界を収める三大悪魔の1柱アシユタロス
が目障りで仕方が無かった。

ベリアルはアシユタロスに尻尾を振って、いつものように、媚び諂
うが、まったく取り合わない。それどころか邪険に扱っていた。

嘘を真実に映る強制力もアシユタロスには効果がまったく現れな
い。

さらに、ルシファーとは親密な付き合いをしていたため、弟分を自
称しているベリアルはそれが面白くなかったのだ。

ただ、アシユタロスには何一つ勝てる部分が無かった。

そんなアシユタロスが反旗を翻し、姿をくらましたのだ。

ベリアルはその間、悪魔の王の一角として、君臨するが、魔界では派手に動く事が出来なかった。

他の魔神に比べると純粋な力では及ばないため、常に緊張状態であった。

その腹いせなのか、たまに人界に行き、病気を流行らせたり、神の名を騙り、魔女狩りを広めたりと、人界では悪魔の代名詞となるぐらいの悪行を重ねる。

時が流れ、アシユタロスが遂に表舞台に現れ、神と魔界に対しても宣誓布告し、人界に戦争を仕掛けたのだ。

結果、アシユタロスは倒れる。

しかも倒したのは虫けらにも劣ると思っていた人間が倒したのだ。

ベリアルの受けた衝撃は計り知れない物だった。

あの巨大な力を持つアシユタロスでさえ倒れる……しかも人間に……

人間如きで出来るのであれば……うまくさえやれば、自分もつと上にいけると……

アシユタロスを超えられると……

ベリアルは欲がでてしまった。

その後の魔界ではルシファーやサタン、魔界の上層部はせわしくなり、人界でも悪魔の急進派が騒ぎ出していた。

人界では、既に不穏な空気が流れ、人間は自らを滅びへの道へと進みつつあった。

ベリアルはさらに人界を混乱させ、再び魔と神を争わせようと画策する。

両方の力が弱まっているうちに自分は力を蓄え、今はアシユタロス

が抜けた空席となっている三大悪魔の一角になろうと……

ベリアルは動き出す。

自分の手が付かないように、裏から手を回し、人間の破滅へと突き進むスピードを速めるため、他の魔神や悪魔そして人間自身を唆し、その後押しをする。

また、ベリアルはアシユタロスを倒した横島なる人物にも興味が出ている。

そして、その人間は文珠という特殊な術を操り、アシユタロスに決定的なダメージを与えた事を知る。

ベリアルは文珠の価値を見出し、横島を捕まえる事にした。

このときばかりは、自らの配下を使い横島を捉えさせようとしたのだ。

しかし、一向に姿が見えない。

人間を操り、人間の組織を利用し探させたりもした。

他の魔神を唆し、手伝わせたりもした。

それでも、見つからなかったのだ。

見つからないはずである。横島はこの時期、人界と神界の狭間である妙神山で修行の日々を過ごしていたからだ。

そして、人質（絹）を取る作戦を配下と人間の組織、人界での行動に協力関係にある魔神に指示する。

この際、人質となった絹に手を出したのは紛れも無く人間であった。

ベリアル自身は絹に手を出していない。先ほどのベリアルの言動は横島の精神に揺さぶりをかけるための嘘であった。

ベリアルはまだ、人界にすら来ていない。かなり慎重に事を進めたかったようだ。

魔界では穏健派（デタント派）のふりをし続け、他に怪しまれないように……

そして、横島が現れた事を聞き、直接見てみたい衝動に駆られるが、ぐっと我慢をする。

配下が捕らえ、協力関係の魔神には適当な事を吹き込む。横島を魔界に連れて行き、モルモットにする算段があつた。何れは会うだろうと……

結果的にこの判断がベリアルを救う。

絹を浚つた人間組織とそこに派遣した配下及び協力関係の魔神の配下の者が一瞬で消滅したのだ。

そして、協力関係にあつた魔神は、横島に滅ぼされた。

「……………」

横島はその様を黙つたまま睨みつける。

そして、ベリアルはさらに慎重になりながらも、裏からあの手この手で、人間と妖魔の戦いを後押しするさまが、書かれていた。

ただ、ベリアルの言つたとおり、ベリアルは大々的に何かしたわけではない。人間の欲を刺激し、ほんの少し力を貸しただけだ。妖魔にも同じく、人間との関係を破綻させるように、ほんのちよつと唆しただけに過ぎない。

それは元々人間や妖魔が持っていた欲や思いを少し刺激したに過ぎない。遅かれ早かれ、ベリアルが力を貸さなくても破滅への道に進んでいたのだろう。

そして、人界が破滅する様を魔界で高笑いをしながら見ているベリアルが映し出されていた。

「おまえか！裏で動いていたのは……完全にやられたな」

横島はベリアルを鬼のような形相で睨んでいた。

「ヒーロー……そ、そうだ俺だ！俺が裏から手を回した。ほんのちよつと背中を押しただけで、人間も妖魔もお互いを潰し合い！そして破滅への道へ進んだのだ!!ヒーーツヒツヒー!!」

横島の形相にベリアルは恐怖するが、開き直り笑い出す。

口舌三寸で魔界の王の一角までのし上がったベリアル、この手の工

作は得意なのだろう。

ベリアルは魔界で人間と妖魔がいよいよ大々的な戦争になる様子を、ほくそ笑みながら見ていたのだが……

急激な異変が起きる。

先ほどまで戦争ムードだった世界が一変したのだ。

まるで、何も無かったように……

横島の世界改変……世界分離が行われたのだ。

ベリアルはしばらく呆然としていた。

うまくいきかけていた物が急に崩れ去ったのだ。

後ほど、これが世界改変だと知る。しかもそれを行ったのが人間である横島だと知らされた。

ベリアルは、絹の誘拐以降、徹底的に横島を避けてきた。自分の身を一番に考え、横島が行動を起こす場所には手を出さず。介入しそうになると直ぐに計画を狂わしてまでも撤退したのだ。

しかし、その横島も天界に捕まり、罪人として収監された。

ベリアルは……ほっと一息つくが……

5年後、なぜか、人界への介入が発覚し、神と魔のデタント派に追い回される事になる。

そして、斉天大聖老師に追い詰められ……言い訳を言う間も無く木っ端微塵にされたのだ。

斉天大聖老師の怒は凄まじい物だった。

半分八つ当たりだった事は否めないが、横島があんな事になった一因はベリアルにもあった為だ。

「そうか……師匠がこのときにお前を……師匠が何も言わなかったのは……」

「う……う……」

ベリアルは青ざめガクガクと震えていた。

齊天大聖老師によって、当時よっぽどの恐怖を植えつけられたのだろう。

そして、目玉だけになり、命からがら人界に逃げ込んだベリアルは復活と復讐を果たすために、人界で、東アジア南部の闇社会を裏から操っていたのだ。

そして、33年前に真夜を手にかけ……今日に至る。

「ベリアル……お前が俺の事をよく知っていたのはこういうことか……悪魔としては優秀だったようだが……人界に介入した時点でお前はこうなる運命だった。過ぎた欲は身を滅ぼすとはよく言ったものだ」

横島はベリアルに睨みを利かせたまま、文珠を頭上に浮かび上げさせる。

「ヒィー……!!俺が何をしたって言うんだ!!頼む俺を見逃してくれ!!もう、力も何も無い俺は無害だ!!なっ、頼む!!」

ベリアルは横島につままれた状態で、無様に命乞いをする。

「運も悪かったようだな……俺の友人に手を出した時点でお前の運は尽きた」

「くそ……くそ……人間如きに……!!お前さえ居なければ!!お前さえ居なければ……!!」

「お前は人間を弄び過ぎた。人間への数々の行いを身を持って後悔するといい」

横島はベリアルに最後に静かにそう言って……頭上に浮かび上げさせた文珠を4つをベリアルにぶつける。

ベリアルは小さな水晶玉のようなものに覆われ……その中で苦しみ絶望し、のたうち回っている。

横島は、記録にあったベリアルの人間への数々の卑劣な行いをそのまま体験させているのだ。

延々と……………

「終わったか……いや……まだか」

横島は呟き、皆をちらりと見る。

その横ではダンタリオンが横島の服の袖を掴んで、そんな横島を不思議そうに見上げている。

皆は結界の中でその様子を緊張感のある面持ちで固唾を呑んで見
ていた。

皆はマリアを先頭にゆつくりと横島に歩み寄る。

横島は最初にマリアに声を掛ける。

「マリア、助けに来てくれて、皆を守ってくれてありがとう」

「イエス・今度は・横島さんの・役に・立ちましたか？」

「いつも助かっているよ。感謝しっぱなしだ」

「良かったです・・・ドクター・カオスが・迷子になると・いけません・探して・きます」

マリアは気を利かせて、この場を離れたのだ。

「みんな無事でよかった。なんか、とんでもないカルト集団だったよな！かなり真に迫っていて、さすがの俺も本物かよって焦ったぞ……」

そして、皆に向かってワザとらしく明るくふるまう横島

……

沈黙が流れる。

「つてな、訳に行かないよな……」

皆は沈黙を守ったままだ。

漸く終わった非現実から抜け出せていないのか？

それとも恐怖が終わった事への安堵か？

それとも横島とどう接すれば良いのかわからないためか？

「リーナと雫ちゃんちよつと離れてもらっていいかな？」

横島は真面目な顔になり：そう言ってリーナと雫をそつと離す。

「みんな、すまなかった。言い訳にしか聞こえないかもしれないが、俺は皆をだますつもりは無かった」

横島は頭を下げ、真剣な面持ちで話し始める。

「タダオ？なんで謝るの？タダオは何も悪い事してないじゃない!!」

リーナは悲壮な顔で横島に叫ぶ。

「そう、横島さんは悪くない」

雫だけは状況がつかめていないため、不思議そうに横島を見ていた。

「雫ちゃんは後から来たからわからないかもしれない。俺は皆をだましていたと変わらないんだ。俺は実際21歳だ。しかも100年前の人間だ。俺は15歳と偽って、魔法科高校に入学している。しかも自己暗示までつかってだ。皆に接していた俺は17歳以前の記憶の人格なんだよ」

「え？横島さんが21歳？100年前の人間？自己暗示？どういうこと？」

雫は横島を見やっってから後ろの皆を見る。

「すまない。この通りだ。しかもこんな事に巻き込んでしまった！」

横島は再度深々と頭を下げる。

「タダオ！そんな事を言わないで！」

リーナは何かに焦り悲しげな顔で横島に迫る。

「横島くん……いえ、横島さんって呼べば……」

真由美が最初に口を開く。

「真由美さん。いつも通りでお願いします」

「その、横島くん。なんていったらいいのか、今となっては現実味が無いというか……ここもそうなのだけど……今まで起こったことも……それと、あの映像は真実なの……？」

「本当に起こった事です」

「………そうなの……か……横島」

達也は改めてあの映像を思い出す様に呟く。

「すべて……真実」

「本当の過去」

「………妖怪が居た世界」

「神と魔が存在した世界」

「世界改変」

皆は改めて、それが真実なのだ……思い知らされる。

「俺達が知らないだけで、世界の外側ではあんなとてつもない力を持った存在が……居たと言う事か……」

達也は誰ともなしに呟く。

そして思う。これが世界の真実であればこの世界の争いなど微々たる物だと……

皆は達也の言葉を聞き……改めて、先ほどまで起きた事を思い返しているのだろう。

沈黙がこの場に流れる。

そして……エリカがこの沈黙を破り再び言葉にする。

「その……横島……さんはなぜ学校に？」

「エリカいつも通りで頼むよ」

横島は悲しげにそう頼む。

「わ、わかったわ」

そんな横島を見てエリカは慌てて返事をする。

「お絹ちゃんの遺言だった。俺は高校中退してるから……人生をやり直してほしいと……お絹ちゃんと、マリアだけは記憶が戻っていた。カオスのじーさんは事情を知っている」

「横島くんは、『救済の女神』氷室絹さんと恋人同士だった……そうなのね？」

真由美は確認するように、気になっていた事を聞く。

「はい、そうです。俺は結局彼女と最後まで一緒に居られなかった。約束をしたのに」

横島の目は悲しみに満ちていた。

「タダオ……」

「え？どういう事？」

雫はいまだに理解が及んでいない。

「横島さ……横島は、氷室家の基礎術式を作り、氷室家を守った。それ

で……横島が氷室の術式を使えるんだ」

幹比古は氷室と横島の関係に納得していた。

「幹、氷室の術式とか関係ないでしょ……魔法とか術とかのレベルじゃないわよ。世界自体を作り変えられるのよ！」

エリカは幹比古にいつものように突っ込む。

「その氷室家は横島くんのこととは？」

「氷室の人たちは、お絹ちゃんの遺言で、俺が現れたら家族として受け入れてほしいと書いてあったそうさ。実年齢は皆知っているが事情は知らせていない。それでも家族のように接してくれた」

「今の横島くんが大人っぽいのは実年齢に即しているのね。いえ……それ以上に感じるわ」

真由美は納得したような表情をする。時々見せる横島の顔が大人びて見えた理由がわかったからだ。

「横島、本当にお前がこの世界を創ったのか？」

達也は皆が確認したかった核心に迫る。

「創造したんじゃない。あつた物を分離しただけだ。俺の独断でだ。あの時はああするしかなかった……今になっては言い訳にしかならんが……それが元で俺は天界に100年魂の牢獄という名の魂の封印を受け、昨年ようやく現世に戻ってきた」

「タダオが何でひどい目に合わされるの!!人間を……今も私達を救ったじゃない!!」

リーナは必死だ。

「100年封印か……まるで、童話の浦島太郎だな……それで、横島が入学したての頃、CADや情報端末や機器の使い方がわからなかったのか」

レオは改めて、当時のことに納得する。

「世界改変は……宇宙の意思に背く行為だ。自然の流れを完全に変えてしまったから……それは仕方が無い」

「でも、横島さんが居なかったら、私達は今こうして生きていなかったんです」

深雪も横島の行為は正しかった事を伝える。

「後悔はしていない。ただ、当時の知り合いを裏切ってしまったのは確かだ」

「マリアもカオスも、タダオの事を今も好きよ。裏切ったなんて思っていない。だから!!」

リーナは必死に訴えかける。

「マリアもじーさんもそう言ってくれた。俺はそれでどれだけ救われたか……」

「横島……って、神様みたいなものなんじゃ？ エリカや柴田さんが言っていた事もまんざら嘘じゃなかったんだ」

「幹比古……俺は神じゃない。ちっほけな事に悩んだりする人間だ」

「でも横島の……あの映像を見る限りでは、神様より力があるみたいに見えた。後半なんて魔神を物凄い力でねじ伏せてたけど……」

エリカは幹比古の意見と同じようだ。

「力があるからと言って、何でも出来るわけではない。あの戦争を回避できなかった。力があるからと言って人々の心を変えることは出来ない。平和一つ守れない。大事な人をこんな形でしか守れなかった」

「でも、横島くんは世界改変をして、皆を救った。人間だけでなく妖魔も、神様でも出来なかった事なのでしょ？」

「真由美さん……世界改変は禁忌なんです。当時の俺は皆を救いたい一心で成してしまった。俺は妖怪にも友人、知り合いが沢山いたから……両方救いたかった。……でも、魂の牢獄で……自分が成した事の恐ろしさをようやく理解しました。」

時空に歪みを生じさせ、宇宙全体のバランスを崩したことを……また、自然の生命の営みを根本から崩してしまったことに……そして、本来あるべき姿……人間が滅んでしまった後に生まれるかもしれない新たな命の営みの可能性をも消してしまった事に……何度も言いますが俺はそれでも後悔はしていません。それでも皆に生きていてほしかった……」

この場にまた、沈黙が流れる。

横島の嘆きは、あまりにもスケールが大きすぎる。

そして、皆に生きてほしかったという横島の優しい心が胸に響く……

「……横島、映像を見る限り、お前の力を使えば、世界改変などしなくても、力づくで戦争を回避することはできたのではないのか？」

達也は横島に聞く。

「それは……」

「達也くん。横島くんはそれを良しとしなかったのよ。それをやってしまうと、その魔神ベリアルと変わらない事になるわ」

答えにくそうにする横島に代わり真由美が間に入り達也に答えた。

「横島は悪魔とは違う。力で世界をねじ伏せたとしても、独裁者にならないだろう」

「……俺はあの戦争で学んだことがある。人々の心は、一個人ではどうにもならない。俺は最初は裏で操っている魔神や過激な思想を持つ人間を倒していけば、収まると思っていた。でも違っていた。倒しても次から次へと現れる。その時代の空気やうねりはなかなか変えられない。対抗するには同じように平和を願う空気を作っていくしかないんだ。……結果失敗してしまい。どうにもならない所まで来てしまい。世界改変を行うことにはなってしまったが……」

達也は横島の答えに何か考え込む様に口を噤む。

「横島くんが命をかけて救ったこの人間の世界……でも、人間同士で今も争いを……」

真由美は悲し気な顔をし、そう呟く。

達也や真由美だけではない、皆も横島のその答えに考えさせられたようでしばらく沈黙が続く。

「でも、世界改変って言われても、今の自分たちには何が変わったのか全然わからないから、特に問題なかったんじゃないかな？だから……」

横島もそこまで悩む必要がある?」

そんな中、幹比古は軽い口調で横島に聞く。

「結果的にはうまく行っているだけなんだ。幹比古、下手をすると宇宙意思の強制力で元の世界に戻ろうとする力が働くことになる……幸いにこの世界はかなり安定しているそうだ」

「……たった100年前の世界には霊や妖怪、妖魔、さらには悪魔や神の存在があった。……今の世界ではどう考えてもオーパーツであるレリックが存在するのはそういう意味だったのか」

達也は自分が関わっていたレリックの異質さはそこにあったと改めて感じた。

「ああ、微妙につじつまが合わない物や歴史もあるが、それは人が勝手に解釈できる誤差範囲で収まっているようだ」

「世界分離して人間だけの世界が今の世界って事は、別の世界に、同じような地球があつて、妖怪妖魔だけの世界があるっていう事?」

幹比古は分離した先の世界について聞いてくる。

どうやら幹比古もそうだが、皆は落ち着いてきたようだ。

「そうなるな」

「横島……もう一度確認する。お前は……神でも魔神でもなく、人間なのだな?」

「ああ……ただ、100年前の人間だな」

横島はようやく余裕ができたのか苦笑するかのようではあるが、笑顔を見せた。

「まあ、何でもいいんじゃないか?世界に悪魔はいなくなつた?そんなもつて、今は一応うまくまわっているってことなんだろう?」

レオは軽い口調でレオなりの言葉にする。

「……本来は入る事が出来ない強力な結界が張られているんだ。悪魔や神などが介入できないように。ベリアルは裏技を使いこんなことを仕出かした。これでこの世界の結界の欠点もわかつた事だし改善されるだろう」

「だったらいいじゃねーか？明日からはいつもどおりだよ。横島は俺達のダチなだけだ。おおつと言い忘れてた。助けに来てくれてありがとなー！」

レオはいつも通りの口調で男らしいさわやかな笑顔でそう言った。

「レオ……ありがとう……しかし、俺は……」

「タダオ！それ以上は言わないで!!」

リーナは涙目で必死に訴えかける。

「俺はもうここには居られない。本当はこの世界に居るべき人間ではない。過去の人間が今生きる人間と接する事自体が本来許される物ではなかった。俺は自分の我侭でここに居させてもらったに過ぎない……」

横島はそんなリーナを見やり、言葉を続けた。

「嫌よ!!そんなの!!なんでタダオだけが居場所を失うの!!私は嫌よ!!」

リーナが先ほどから必死だったのは、こうなるのではないかと感じていたからだ。

「横島さんが居なくなる?……どうしてそんな事を言うの」

雫は何となくだが、横島と皆の会話で、横島が普通の人間ではない事を理解しだしていたが……横島が居なくなること容認できるはずがない。

「横島くんは今も私達とこうして過ごしている人間です!だから一緒に居てもいいじゃない!!この世界で!!」

真由美もそうなる事を薄々感じていたようで、必死に訴える。

「お前!また、勝手な事を言っつて!!」

レオは横島の言動に怒りだす。

「横島……」

「横島がいなくなる?」

幹比古とエリカはその言葉に現実味が無いようだ。

「……もしや、お前!俺たちの記憶から、お前の存在を悪魔の事件ごと消すつもりじゃないだろうな!」

達也は横島が成そうとしている事にどうやら気がついたらしい。

「……………」

横島は悲しい表情になり伏目がちになる。

「おいー！どういうことだ!!横島!!俺たちからお前の記憶を消すって事か!!」

「いや！そんなのいや!!」

「最初からいない人間なら……何も問題ない……今なら、それほど修正する必要もない」

「おいこら!!本気で言っているのか!!」

「横島！僕たちの思いはどうなるんだよ!!」

「そうよ！私はなんだかんだと、あんたとみんなと一緒にいる時間が今までの人生で一番好きだったわ!!それを消すの!?!」

レオに幹比古、エリカはそんな横島に猛反発をする。

「そんな……………」

真由美はその場にしゃがみ込む。

「……………私を連れて行って、…………タダオが行くところに私も連れて行って!!」

リーナは泣きながら横島に縋りつく。

横島は下を向いたまま下唇をかみ締め、悲しみに顔をゆがめていた。

そして…………

「みんな、ありがとう……………」

横島はすがりつくリーナの頭をやさしく撫で…………

右手には文珠を浮かばせる…………

「横島!!そこまでじゃ!!」

小さな影が皆の後ろから現れる。

190話 横島 横島と師!!

「横島!!そこまでじゃ!!」

文珠を発動させようとした横島を止める声が皆の後ろからする。

そして、その声の主である小さな老人が、皆の間を縫うように歩き横島の前に立つ。

「し、師匠!？」

「ばかもの!!女を泣かせるとは何事じゃ!!」

小さな老人は横島を見上げ、叱りつけた。

「いえ、これは……」

「すまんかったの、この馬鹿弟子がふざけた事を言いおって」

その小さな老人いや、猿人……いや、猿神は泣き崩れるリーナの頭を軽く撫でる。

「師匠、俺はもうここには……」

「おまえは少し黙っておれ!!」

猿神は凄まじい威圧感で横島に凄む。

「しかし……」

「横島……その文珠をわしによこせ……それと後16個渡せ」

「師匠何を……」

「……おまえは少し頭でも冷やして出て行っておれ!!」

「し、師匠?」

横島は突然現れた師匠である武神斉天大聖の意図がまったくわからなかった。

「早くしろ!!」

「わ……わかりました」

横島は合計17個の文珠を斉天大聖老師に渡し、皆を一度見渡してから、視線を落としバツが悪そうに部屋を静かに出て行った。

皆は横島と現れた猿神の様子を啞然として見ている事しか出来な
いでいた。

「さて、皆にはすまない事をした。……この通りじゃ」

武神、斉天大聖老師は頭を下げる。

「あの……横島くんのお師匠さんですか？」

真由美は頭を下げる猿神に恐る恐る質問をする。

「おう、これはいかん。わしは斉天大聖と申す。横島忠夫の武術の師をやらせてもらっておる。日本では孫悟空の名の方が通りが良いかのう」

「孫悟空？」

雫は知らないようだ。

「孫悟空って!!あの!？」

意外にもレオは知っていたようで驚きの声を上げる。

「かめはめ波と元氣玉!？」

「エリカそれは違うよ。やっぱりアニメの見すぎだよ!中国歴史文学の西遊記の孫悟空だよ!!」

エリカが相当勘違いをしているのを幹比古が正す。

「実在していたのか……斉天大聖孫悟空」

達也はうめくように言う。

「かわいらしい……この方が横島くんのお師匠さん」

一見年老いたメガネをかけた猿が地味な作業服を着ているような感じなのだが、普通はかわいいと印象は受けないだろう。真由美のセンスはよくわからない。

「どう見てもお猿さんですよね。お兄様」

深雪は不思議そうに斉天大聖老師を見ていた。

「タダオの……先生？」

リーナは涙目のまま呟く。

「という事は……神様？」

幹比古は大いに驚く。

「うむ、こんな事態になり、神を名乗るのはおこがましいが、一応神の末席におけるものじゃ」

老師は申し訳なさそうに答える。

「斉天大聖は武神……末席ではないでしょうに」
達也は唸る。

「横島があのような事を言った事を許してやってくれ……あやつは元来、とても人が良い奴なんじゃ、明るく、めげなく、うっとおしいぐらいにな……ただ、わしらが力及ばず、あやつをあんなふうにさせてしまったのじゃ」

「タダオばかり何で！いつもいつもいつも！大変な目に遭うの!?タダオがかわいそうよ!!」

「すまぬ。……あやつにいつも苦勞をかけさせておるのは師匠であるわしの不徳のいたるところが大きい」

老師は頭を下げる。

「リーナさん……責める相手が違うわ」

「でも!!タダオは!!タダオは!!」

リーナは悔しそうに涙ぐみ下を向く。

「あやつの事をそこまで思ってくれておるのか……あやつは幸せ者じゃのう」

「その横島の師匠が俺達に何の用なんだ？横島の記憶を消そうとしたのを止めてくれたみたいだけだよ」

レオは神である斉天大聖老師に臆することなくいつもどおりの口調で尋ねる。

「うむ、その事だな、話があるんじゃが……あやつがぬしらの記憶を消そうとしたのは理由があるんじゃ」

「だいたい察しがつきます。俺達の安全を考えての事でしょう」

達也は老師の言葉に答える。

「達也、どういうことだ？」

レオは達也に聞きなおす。

「ほう、なかなか頭の回転が速いのう。そうじゃ」

老師は達也に関心する。

「俺達はこの世界のタブーに触れたも同然だ。知る必要が無い事を知ってしまったんだ。神や悪魔の事、この世界の成り立ちについてもだ。これはある意味、世界をひっくり返すぐらいの情報を持ったに等

しいという事だ。そんなものを一個人が持っていたらどうなる？」
達也は先ほどの続きを語る。

「……どうなるの？」

「……わからん。達也もつたいぶるなよ」

エリカとレオはその答えがわからず達也を促す。

「そうね。そんな情報を持つていることが少しでも広まれば、まず間違いない、いろんな組織に狙われるわね」

思案顔をしている真由美が達也の代わりに答えた。

「七草先輩、でも、ここにいる僕達しか知らないから、そんな事にならないと思いますが……」

幹比古は真由美の答えに疑問を持つ。

「確かに、俺達しか知らない。しかし、まずこの霧の中に入り何かをしていた事は、周知の事実となった。当然霧の中の事を軍や警察、十師族等、不特定多数の組織に聞かれるだろう。そんな中、すべてを隠し通す事ができるか？」

「でもよく。こんな話は与太話にしか聞こえないだろ？うっかりしやべったとしても、笑われるだけで済むんじゃないのか？」

レオは自分の顎に手をやり達也に質問をする。

「中には頭がよく勘が鋭い人間もいる。ちよつとしたところから情報を集め、いくつもの想定と検証を重ね。真実に近づいてくる。……先ほどの横島がベリアルと戦った時に見せた情報戦の様いだ」

「だとしても、あんな話のどこに価値があるんだ？ほぼ神話だぞ？」

レオは達也の答えに納得がまだいかないようだ。

「……歴史の成り立ち、それ以外の高次元生命体の確認。別世界の存在。これだけでも国同士の戦争が起きてもおかしくないほどの情報量だ」

「そ……そんなに？」

エリカは漸く、事態の重さに気が付き始めたようだ。

「それはありえるよね」

幹比古も事の重大さに納得する。

「まじかー」

レオもエリカと同じく気が付き始めたようだ。

「だから、横島くんは私達の記憶を消そうとしたの……私達の安全を考えて、たとえば自分の存在が私達の記憶に残らなくなろうとも……」

真由美は悲しげな表情で語る。

「でも、なんで、タダオの存在自体を消そうとしたの!？」

リーナは苦しそうに達也や真由美に聞く。

「予想だが……横島は自分はこの世界にいる事自体が間違っていると思っっているようだ。自分がいる事自体で……争いが起こるのではないかと……横島は事あるごとに俺に言っていた。力を示しすぎると……力を示しすぎると、自分が意図しなくとも、争いの種が向こうからやってくる……要するに権力闘争や戦争に利用されるなどという事なのだろう。」

今思えば、横島の実体験なのだろう。それで奴自身がすでにその対象になったと認識しているという事だ。そんな人間の近くにいた俺達を巻き込まないようにするために、俺達の記憶、下手をすると、全世界の記憶から自分という存在を抹消しようとしたのかもしれない

「そんな……タダオは何も悪くないのに」

「……横島さん」

「うむ、その真面目そうな青年よ。なかなか鋭いのう。さらにもう一つ横島は恐れているのじゃ。この世界を作り上げた反動が来るのを……自分という存在がいる事で、宇宙意思の反動が来るのではないかと……今回のベリアルが起こした騒動もその一端だと思っておるのだろう。……実際はそんな事は無いはずじゃ、わしもその辺に詳しい神に確認したが、現在のこの世界は非常に安定している。宇宙意思の反動はまず、目に見えておこらないだろうと言っておったわい。……あやつは現世に復帰してからはどうも心配性が過ぎるようじゃ……まあ、事がことであったため、いたしかたがないのじゃが」

「それを横島さんに説明してあげれば良いのでは？」

深雪がここで漸く、会話に入ってくる。

「あやつはああ見えて頑固でな、口ではわかった風に言っても、ほんの

少しでもその可能性があると考えたと守ろうとする心が働き、動いてしまうようなのじゃ」

「確かにな、あいつ異様に心配性なんだよな、過保護というかなんていうか。俺達は子供扱いしやがる。俺の親かお前はって言いたいぜ！」
「……でも、横島から見たらそうなのかもしれないよレオ、特にレオは……」

「どういう意味だ？ 幹比古!!」

「あんたのそう言うところよ……」

エリカは呆れたようにレオに言う。

「ならば、あなたはなぜ、記憶を消そうとした横島を止めたのですか？」

達也は改めて老師が横島を止めた理由を聞く。

「うむ、あやつは失いすぎた。あやつが起こした世界改変で誰が一番辛い思いをしたと？……横島本人じゃ……世界が分離されたが、人々は何も無かったかのように今の世界を歩んでいった。」

しかし、あやつは魂の牢獄にとらわれ、100年何も無い場所で精神だけが覚醒したそんな空間じゃ、神であるわしらでさえ、気が狂うのではないかと……まさに魂そのものが囚われる場所なんじゃ……あやつはそんな中で、仲間を恋人を裏切った罪悪感をいだいたまま延々とすごしていたのじゃ……、自分自身を度外視し、自分が傷つこうが、人々を……仲間を守るためには、些細な事で気が気で仕方がないんじゃ、そして過剰な反応を見せてしまう。それは、そんな中で出来上がった心持のようじゃ……」

「……タダオ……」

「わしとあやつの姉弟子小竜姫は、ここでは、妙神竜姫と名乗っていたの……あやつの心を癒すには時間が必要じゃと……好きにさせようと人界に行かせ、今に至っておる。」

そして、おぬしらに出会い。あやつは大分救われたと思う。わしや、小竜姫では、出来ない事をおぬしらがやってくれたからじゃ……」
「え？ 竜姫さんって神様なの？」

雫は驚くのも無理もない。雫が知っている小竜姫は横島が大好きで、嫉妬深いのが、自分達と思いは変わらない乙女心をいだいている少女にしか見えなかったからだ。

「いえ、いつも助けてもらっていたのは私達の方です」

真由美は、老師の言葉を遮り先に答える。

「いいや、あやつが過ごせる居場所を作ってくれた。なんだかんだとあやつは楽しそうじゃった。わしらの所には月に1、2度顔を出すのじゃが、元の元気な姿が徐々に戻っていくようじゃった。……おぬしらには感謝しかない」

「いやー、横島の奴は面白いし、つるんでいて楽しいし、そんな大層なことはやってないぜ」

「まあ、セクハラまがいなことはするけど、一緒にいて楽しかったし」
「そうだね。魔法科高校に入って、横島に出会ってなかったら、毎日うじうじとしていたと思うし」

レオ、エリカ、幹比古は照れたように答える。

「あやつは自分の場所だというのにだ。自分の事など度外視し、また、おぬしらの気持ちも考えずに、安全を重視するあまり、今回のように、記憶を消そうとしたんじゃ……確かに、神魔やこの世界の裏側や、世界の外側を知るのは極めて危険じゃ……だからといってじゃ。わしはもう、あやつ自身、身を切り捨てるような行為を黙ってみておられんじゃ……それで、止めたんじゃ」

「お師匠さんは横島くんの事を家族のように思ってたらしやるのですね」

真由美は老師が横島のことを語る際、息子を心配するかのような目をしている事に気が付いていた。

「いずれは、わしの後継者にと考えておるからのう……」

「いつ？横島が神様に!？」

「まじかー」

「人間が神になる事が可能なのですか？」

達也の疑問はもつともだ。

「今の世界では神の介入がない限り無理じゃが、前の世界ではきつか

けがあれば、善行を重ねれば神に、悪行を重ねれば悪魔にもなれた」
「……それは嫌、そうになると、タダオと結婚できなくなる」

リーナは切実そうな顔でこんな事を言う。

「リーナさん？何を言っているのかしら？」

真由美はリーナのその言葉に直ぐに反応する。

「留学生はあつかましい。横島さんは私と結婚して、北山財閥を継ぐの」

続いて雫も、リーナに向かって抗議をするかのようにこんな事を言う。

「ふおっふおっ！あやつもなかなかすみにおけんな……まあ、いずれにせよ。わしは横島の記憶をおぬしらから消すつもりはない。ただ……この戦いや、この世界の真実に関する記憶は封印させてくれ」
「……妥当だと思います」

達也はほっとしたような表情をしていた。

今回ばかりは、あまりにも事が大きいため、何かの交渉カードとして使おうとは思わなかったようだ。

「まあ、しかたないよね」

「しゃーないか」

「まあ、過去の横島ってかなりシリアスだから……とつつきにくそうだし、しかも年上扱いも今さらってかんじだから、その方が良くもしれないわね」

幹比古、レオ、エリカはそれで納得する。

「うん……タダオがいてくれるなら」

「という事は、私にもまだまだチャンスがあるのかしら……いえ、スタート地点は一緒になるのだから」

「七草先輩、横取りは良くない。横島さんは私が最初に目をつけた」

リーナと真由美、雫もどうやらそれで良いらしい。

「横島さんの過去についての記憶はどうなるのですか？」

深雪は老師に質問をする。

「そうじゃのう、あやつの過去も今しばらく忘れてくれんか？いずれ本人から話すかも知れんし。過去を知られた事はそれなりにシヨツ

「くだったようじゃしの」

「そうですか……」

深雪は何か言いたそうだが口を噤む。

「ああ、その娘3人に言い忘れておったが、神と人間の恋は普通にあるぞい。わしも昔はブイブイ言わせておったしの。横島は人間ではあるが、将来はわしの後継者じゃ、かといって恋愛は自由じゃ。神に恋愛も結婚も年齢制限も人数制限もありやせん。自由に横島を捕まえるといい」

「いいのかよ。横島にそんな自由を与えて……」

「横島が本当に神様になってハーレムを？」

「でも、過去の横島って結構まじめだった。いや、今もかなり鈍感だけど……あのすけべっプリは自己暗示らしいし……」

「……………」

達也は一瞬、最近トラウマになりかけた記憶を思い出す。

妄想の中の横島が、真夜と深雪を両脇に抱きかかえて、四葉ハーレム爆誕!と叫ぶ情景を……

「私が一番ね!!私以外を見えない様にしないと、過去の女性の事も忘れるぐらいに!!」

「横島さんは私が横にいないと、他の女に騙される。妻としてずっと一緒にいる」

「いえいえ、リーナさんに北山さん?横島くんには癒しが必要な、年上が好みなのよ」

「なによ!真由美!タダオは21歳よ!!あなたも年下よ!!」

「年齢じゃないのよ!年上然とした態度で、包みこむような癒しが横島くんには必要なの!」

「癒し…私が正妻、マリアがそのサポートで……」

「マリア……一番の強敵ね。タダオがトラウマ解消されて恋愛自由とわかったら、たぶんマリアは仕掛けてくるはず!!」

「マリアが敵?うううん…マリアと一緒に横島さんと幸せになる!!それで、3人で……」

「マリアさんは確かに強敵だわ。七草家のありとあらゆるコネを使っ

て既成事実を……」

このリーナと雫に真由美の3人娘は……どうやら、既に恋のライバルとして認めあったようだ。しかし3人の共通認識では MARIA が一番の強敵であるようだ。

ただ、雫は MARIA も好きなので、一緒にとは思っている。

ここで忘れられているのは……小竜姫と、氷室要だ。この二人に関しては、家族としても付き合っているため。今の横島に対してはアドバンテージはこの3人よりも高そうだが……

そんな中3人が言い争っているのをじつと見ている視線がある。

深雪だ……何かを言いたそうにしているが……間に入る余地はなさそうだ。

「……なんか余計にややこしくなったような」

エリカは3人娘を見て呆れ顔だ。

「横島の奴どうするんだ？きつと、まだ気が付いてないぞあいつ！」

レオの指摘はもつともだ。たぶん横島は気が付いていないだろう。

「うん、リーナのあのアタックをスルーしてたしね。わざとじゃない。相当鈍感だよな」

幹比古は苦笑気味に言う。

横島はリーナについてはある程度自覚しているとは思いますが、雫と真由美に関して、特に真由美については逆であると思っているかもしれない。

「ふう……しかし、よくあの状況で、全員無事でいられたな……これも奴のおかげか……」

達也はそんな皆を見回し、深く息を吐きつぶやいていた。

一方、この部屋から追い出された横島は、廊下で小竜姫に出会う。「小竜姫様！来て下さってありがとうございます……霧の外はどうでしたか」

「横島さんもご無事で……、霧の外に魔獣や下級悪魔が飛び出そうとしましたが、すべて排除いたしました」

「助かりました。小竜姫様」

「ふふふふつ、どういたしまして。あなたが頼ってくれて嬉しかったですし……」

「小竜姫様は、なぜ師匠と一緒にではなかったのですか？」

「老師は後でこられ、この図書館の前で会ったのです。私は待つように言われたのですが……遅いので様子を見に来たのです」

「そうですか……」

「横島さんはなぜ一人で？老師とは会ったのでしょうか？」

「はあ、皆はベリアルルのせいで、この世界の真実に触れてしまったため、記憶を消そうとしたのですが……師匠に止められて……反省しろとか怒られ、部屋を追い出されたのです」

「……妥当な処置だと思うのですが、老師にも何か考えがあるのでしよう……記憶を消す？……横島さん……もしかして文珠が使えるようになったのですか？」

「ははっ、おかげさまで……俺の精神がベリアルルに追い詰められていた際に、ルシオラが心の中で現れたんです。魂は未だ融合したままなのはわかっていたのですが……叱られました。俺らしくないって……あれは間違いなくルシオラでした。……それと笛の音……お絹ちゃんの存在を感じたような……そっちは俺の気のせいですね」

「……そうですか。なんにしろ、良かったです」

小竜姫は一瞬ビクツとしたが、普段と同じ口調で答える。

「師匠は皆と何を話しているのだろうか？」

「……さあ、千里眼のイヤリングは老師にお貸ししたままですから……中を見る事はできないですし」

「小竜姫様、さすがの俺も、そんな恐れ多い事しませんよ……」

今の横島なら、文珠を使えば簡単に中の様子を見る事が出来るがそれをしなかった。

「そうですか？気になるじゃないですか」

小竜姫は悪戯っぽく微笑む。

「まあ、どちらにしろ、後で師匠にお聞きするので……」

横島は呆れたように小竜姫を見る。

「……無理しないでくださいね」

「何をですか？」

「皆さんとお別れするのはやはり辛いですよね」

「……顔に出てましたか？」

「わたしは横島さんのことは何でも知ってるんですよ」

そう言っつて小竜姫は横島の手を取り、手をつなぐ。

「はあ……あいつ等、俺にはもったいないぐらい良い奴らですから……」

「また、自分を卑下するような言い方をする。横島さんの方が素敵ですよ」

「それでしょうか……」

こうして、しばらく小竜姫と横島は廊下で斉天大聖老師を待つのであった。

191話 横島 戦いの終わりに安堵する!?

齊天大聖老師は横島の友人達の話し合いを終え、広い廊下の端で横島と小竜姫と合流する。

話し合いはかなり長引いた。

老師は横島に恋する娘3人に横島について質問攻めを受け、達也からは、武術や修行のやり方についての質問を受ける。レオ、幹比古、エリカも達也の話を横で聞きながら、間に入って、横島の昔の話やエピソードを聞いていた。

最終的には、皆は横島の話で盛り上がる。

ただ、ここでの話は、皆は記憶の封印を受け忘れるのだろうか……そんなことを承知の上で今を楽しんでいるようであった。

しかし、深雪だけは……その輪に入らず。何かを言いたそうにするが口を噤んだままだった。

「横島……すまんんだ。まさかベリアルが人界に下りて悪さをしているとは思いもよらんんだ。わしが粉微塵にし、その身体を壺に回収し封印したのだが……一部を見逃していた。この通りじゃ……」

老師は横島の顔を見るなり、二度頭を下げる。

「師匠……ベリアルはかなり頭の回る奴でした。もし自分が神や魔神に滅せられそうになった時の離脱方法もあらかじめ考えていたのでしょうか」

「ほんに、すまんんだ」

「では、ベリアルをお預けします」

横島はそう言って、水晶のような玉の中に封印された目玉だけのベリアルを老師に引き渡す。

「神界の収監所で厳重に封印をほどこされるじやろう。もうこうなれば奴も復帰は出来ん……元始風水盤の方も文珠で回収しておいた」

老師は受け取った水晶玉を一睨みしてから懐に入れる。

「ところで……皆とはどのような話をされたのですか?」

「世間話じゃ、たいがいはおぬしの事じゃがな」

「……そ、そうなんですか」

「おぬし、意外とホテルのう。女を泣かすのだけはいかんぞ」

「そうでしようか？……それは肝に銘じます」

「かーっ！おぬし！鈍感もいいかげんにせよ」

「ええ？」

「おぬし本当に気が付いておらんのか？」

老師はあきれたように横島を見るが、その横で小竜姫が老師を睨んでいた。

たぶん。余計な事を言うなよ的なことなのだろう。

「女子どもはおぬしの事を好いておったぞ！」

「老師！」

小竜姫は我慢しきれずに声を上げてしまった。

「うーん。リーナの事ですかね。あの金髪の子です」

「はー、だめじゃ、こやつ……小竜姫よ、おぬしも精進せよ。こやつは一筋縄ではいかんぞ」

「ろ、老師！何を言って!!」

小竜姫は顔を真っ赤にして老師に抗議をする。

「うーん」

横島は考え込むそぶりを見せる。

「それで、横島よ。わしがかの者達の記憶を封印してきたわい」

老師は横島から預かった文珠で、達也たちの記憶を封印したのだ。

「そうですか……お手を煩わせました」

「老師……封印？記憶の消去ではなく」

小竜姫は記憶の封印と聞いて疑問に思う。

記憶の消去は記憶その物を消し去るが、封印は記憶の中に残るがその記憶を呼び起こせないようにする処置なのだ。

「そうじゃ、……今日この霧の結界に入ってから記憶についてだけをな……」

「え？すべてではないのですか!?!」

「そうじゃ、昨日までのおぬしとの日々は残してある」

「なぜですか!？」

「なぜです!？」

横島と小竜姫は同時に声を上げる。

「おぬしは今しばらく、人界で過ごした方が良い。おぬしは自分ではわからぬようだが……現世に戻った頃は、ひどい有様であった。人界でかの者達と過ごし、おぬしの顔は目に見えて良くなっておったから
のう」

「しかし……」

「この件で、神、魔の最高指導者共は結界の強化を計るじやろうて……滅多なことで、今回のような事はおきんじやろうし、かの者たちにも影響はないじやろう」

「……」

「それとじゃ、皆、おぬしを好いておるし。急にお主の存在を消したら、変調をきたすかも知れんぞ」

「それは……」

「まあ、明日からはいつも通りに振舞え、おぬしがメソメソしていれば、何があつたか勘づかれるぞ」

「……ご配慮ありがとうございます」

横島はまだ、完全には納得はいつていなかったが、これは老師の心遣いだということはわかっていた。

小竜姫は納得は行かないが、横島のためだということは分かっていたため、何も言う事が出来ない。

「皆は?」

「うむ、眠っておる。しばらくは起きんじやろて」

「そうですか」

そんな中、ダンタリオンが通路の角から、ライオンに乗ったままこちらの様子を伺っていた。

「おっと、……えーとつ、ダンタリオンちゃん……こつちに来てくれな

い。こつちの方たちは怖くないから」

横島はそれに気がつき、声を掛ける。

「う……………」

ダンタリオンは返事をし、こちらにライオンに乗ったまま来るのだが、横島の後ろに隠れるように老師と小竜姫の様子を伺っている。

「ふむ、魔神ダンタリオンが全世界図書館の管理者であったとは、わたしも知らなんだ。……………最高指導者がなにやら言いにくそうにしていたのは、こういうことじゃったか……………」

「まあ、かわいらしい」

小竜姫はダンタリオンにそう言って笑顔を見せるが、ダンタリオンはビクつとし、横島の後ろに顔を隠す。

「ははっ……………ダンタリオンの件は俺に任せてくれませんか？」

「うむ、そもそも今回の件、神の上層部はお主にすべてを投げたのじゃ、好きにしてよかろうし、わしらじゃどう扱えばよいかわからんからのう。神、魔にも属せぬ存在ゆえ、存在基準が冥界の王と変わらぬのかもしれない」

「ダンタリオンちゃんはどうする？」

「この……………世界の記録を本に……………しないといけない……………です。ここに居たいです」

「どうやって情報を集めてたの？いちいち自分で人に手をかざして本を取り出さないといけないって事は無いよね」

「はい、……………わたしの……………意思を乗り移らせて、集めて……………ます」

「そうか……………分霊だね。ダンタリオンちゃんの分霊って、どんななの？」

「ものに息吹を与えます……………情報を集め……………ます」

「物なの？」

「生きているものには……………できないです。感情が入るので……………正確性に……………かけます」

「そうか……………それで、分霊の存在が感じられなかったのか……………それであの霧の中の多量の本はあれ自体が分霊が憑依した跡だったのか。

……………うーんどうしたものか……………物か……………おお？あれならいける!?まあ、

達也には適当な事を言つて……納得するかな？まあ、興味津々になるが、あいつは霊とかに疎いからな……大丈夫だろ？」

横島は考えをまとめ、第一高校のあるものを思い浮かべる。

そして、ダンタリオンに視線を合わせるようにしやがむ。

「分霊を行うのは限定させてね。変な連中に騒がれても困るし、無用な混乱はさげたいから。……ここで分霊が活動するのに、ダンタリオンちゃんもここに居ないといけないの？」

「……お……おにいちちゃんと……いっしょにいます」

ダンタリオンはそう言つて、横島の上着の裾を引っ張る。

「え？……」

「ダメ……ですか？」

ダンタリオンは首を傾げ上目遣いで聞いてきた。

「……う……ダメじゃないけど」

「ダメに決まっています!!」

小竜姫は思いつきり否定する。

ダンタリオンはビクつとし、横島の服に顔をうずめる。

「小竜姫、そう怒らんでもよかろうに。小さな子供じゃぞ」

「何を言っているのですか老師、全世界図書館の管理人なのですよ。下手をすると創造主と同じぐらい長い年月を生きていることになるんですよ!!」

「わかった……ダンタリオンちゃんその代わり、俺の言う事をちゃんと聞いてね。図書館は元の時空に戻すのと……姿を現すときは、人間らしく振舞う事、それと……この座標のこの次元に住める場所は作つて良いけど、それ以外はやめてね。たぶん神と魔の結界に阻まれちゃうから」

そんな小竜姫をよそに、横島はダンタリオンに幾つかの条件を付け了承した。

「わかった……です。でも……住むのは……お……おにいちちゃんと住むから……いいです」

ダンタリオンも概ねそれで了承したが、横島と一緒に住みたいと言いつつ出した。

「うむ、その方がわしも、たぶん神の上層部も安心するじやろう。横島、面倒をかけるが、ダンタリオンの事は頼む」

ダンタリオンについては、老師では扱いは難しいだろう。神の上層部も同じだろう。横島の言う事を素直に聞くのであれば、横島に預けた方が無難で面倒が無くてよいだろう。

「ちよ…老師!!私は反対です!!」

小竜姫は老師に抗議をするが……

「俺の家は狭いから……だったら俺の家と直結させるのでどう?」

横島はその横で、ダンタリオンと話を進めていた。

「……いいです……ありがとう」

ダンタリオンはホツとしたような表情をしたあと、うれしそうに横島を見上げる。

「ううう……」

小竜姫は悔しそうにダンタリオンを見るが、その容姿に怒るに怒れないでいる。

ダンタリオンはゆっくりとライオンから降り、左手に本を顕現させ、その本を開くと、今ここにある図書館が吸い込まれるように入っていく。

すると、そこは、元の井の頭公園に戻っていた。

皆は、公園のベンチで眠っているのが見える。

「……なにげに凄いな」

「……さすがは、元始から存在したといわれる全世界図書館の管理者という事じゃな」

「………な?」

横島、老師、小竜姫はその現象に驚きを隠せない。

ライオンも本の中に吸い込まれたようで、今は居ない。

ダンタリオンは本をパタンと閉じると、本はダンタリオンの左手に吸い込まれる。

そして、その手で横島の手をつなぐ。

「あああああ!!まだ見終わってないのにー!ー!ー!ー!!なぜ消えたんじやー!ー!ー!ー!!」

「ドクター・カオス・時空の歪みが・元に戻りました・あきらめてください」

遠くのほうで、騒がしいカオスの叫び声と、落ち着いたマリアの聲が響く。

「横島よ、先に行くが。落ち着いたら2、3日中には妙神山に帰ってくるんじやぞ」

「ううう、私も横島さんと一緒に住みたい……早く帰って来てくださいね!」

「わかりました」

老師と小竜姫はそう言って、妙神山へと瞬間移動で帰って行った。

「よ、横島!ー!ー!!本がわしの本が!ー!ー!!本が!ー!ー!ー!!」

ドクター・カオスは涙をちよちよ切らせながら、全速力で横島に迫る。

「じーさん落ち着け!」

「ドクター・カオス・落ち着いて・ください」

マリアはドクター・カオスの脳天に拳骨をかまし、大人しくする。

「カペペペペッ」

脳天を押さえ悶絶するカオス。気絶をしないのはさすがである。

「じーさんとマリア、本当に助かった。ありがとう」

横島はカオスとマリアにお礼を言う。

「イエス・横島さんの・役に・たてて・よかったです」

「いたたたっ……ふははははっ!ピンチに颯爽と現れるわし、かつこいいではないか!!」

相変わらずのカオスとマリアだ。

マリアはベンチで寝ている雫を見つけ、歩み寄ろうとする。

「マリア、雫ちゃんをよろしく頼む。今日の記憶は封印している。だから神魔の話やこの世界の成り立ち、俺の過去も覚えて居ないはずだ」

「了解・です」

「まあ、そのほうが、こやつらの為にも良からうて……で、その小娘がダンタリオンじゃな!! さっきの本……いや、図書館をだすんじゃ!!」

カオスはダンタリオンに唾を飛ばしながら我侷を言い出した。

ダンタリオンはビクつとして、横島の後ろに隠れる。

「おい、じーさん!!」

「グボツ!!」

眠っている雫を抱きかかえたマリアは、ロケットアームでカオスの顔を殴り飛ばした。

カオスは派手に吹っ飛び池に落ちる。

「混乱を・避ける・ために・USNAに引き上げます……横島さん……もう、迷わないですか?」

「いいや、たぶんこれからも迷ってばっかりだ。マリアにも助けてもらわないと」

「そうですか・では」

マリアは一瞬だが微笑んだ。

そして、池に落ちたカオスを引っ張り上げ、光学迷彩を発動させ消えていった。

「ふう……終わったか……さて」

横島は、皆が眠っているベンチに歩み、皆をしばらく眺めていた。

ダンタリオンは黙って、横島の服を掴んだままだ。

既に朝日が昇り始めていた。

「う……ん? あれ? ここは……井の頭公園? 霧は?」

エリカがまず起き上がりだした。

「ここは……あれ? 横島?」

「横島？いつの間に？」

「お兄様？いついらつしやって？」

「……ん？どういうことだ？霧は」

「……皆!?!……横島くん？」

「タダオ……いつ？霧が無い」

幹比古、レオ、深雪、達也、真由美、リーナと目が覚め、それぞれ状況がつかめていないようだ。

そして、霧の中での記憶は無いようだ。

「皆やっと起きたか！」

「女の子を追いかけて公園に……あれ？横島さんその子は？」

「深雪を追って公園に入って……急に霧が出てきて……あれ？それから思い出せない」

「公園に入って……んん？」

「横島!!霧は!?!」

「霧が濃くなって皆を追いかけて……そこから思い出せないわ」

「達也と霧の中に入ったのは覚えてるのに……そこから何が？」

「……朝か、それまでの記憶がない。気を失っていたのか……どうなった横島？」

「ああ……すべて終わった。なんか悪霊や悪魔どもが、次元に穴を開けて、こっちに悪魔や、魔獣を呼び出そうとしてたんだ。まあ、実際途中まで悪魔どもの予定通りだったみたいだが……あの霧は人を強制的に眠りを誘うものだった。一種の悪霊だな。それでもって俺が、その次元の穴と悪霊をすべて排除した。もう終わったんだ」

横島は皆にでつち上げた嘘をまことしやかに話す。

「そ、そっか、横島が全部解決したんだ」

「くそ、今回も役立たずかよ」

「……そっか、結局は何もできなかったのね」

幹比古とレオ、エリカはちよつと悔しそうだ。

「横島くん助けに来てくれて、ありがとう」

真由美は横島の顔を見てホツとし、お礼を言う。

「横島、お前……その大丈夫だったのか？」

達也は霧の中に入る前に横島と喧嘩し、横島に怪我を負わせたことを言っている。

「タダオ……きてくれてありがとう！……あれ？なんで勝手に涙が……嬉しいだけなのに」

リーナが最後に横島に飛びつくが、自分の意思とは別に涙が流れてくるのを止められない様だ。

どうやら、封印はされているが、魂で横島の過去の記憶を感じていたのだろう。

「横島さん……ありがとうございます。……？」

深雪は横島にお礼を言うが……深雪の中で何かが心を締め付けていた。

「まつ、皆無事でよかった。まあ、なんにしろ悪霊も悪魔も全滅これで事件はすべて終わり！ふー、漸く俺も解放される。達也が余計な事をするから、俺は結構大変だったぞ」

横島は今回の吸血鬼事件から始まった悪魔退治の終了を宣言したうえで、達也が提案した3者協力関係のトップに立たされたことに不満をぶつける。

「そうか、終わったか、なんにしろ横島ありがとな」

「やっぱ本物の陰陽師にはかなわないってことだね。今度術とか教えてよ」

「うん？あれ？紅公が反応しない？どうしたのかな？壊れた？」

レオ、幹比古、エリカは口々に言いながら横島の周りに集まる。

紅鮫丸は老師に封印を施され、起動自体出来ないうえに、記憶は完全消去されているようだ。

カオスに出せば良いように直してくれるだろうか……

「横島さんその子は？」

深雪は横島の後ろに隠れている子（ダンタリオン）について聞く。「ああ……この子は悪魔に捕まっていたね。無理やり何かをさせられていたらしい所を助けたんだ」

「そうだったんですか……お名前は？」

深雪は屈んで、おっかなびっくりしているダンタリオンにやさしく名前を聞く。

横島は焦った。ダンタリオンという名前を出されると厄介だからだ。

「……アリス……です」

しかし、ダンタリオンはアリスという名を名乗ったのだ。

実は、ダンタリオンとは魔神や神が勝手に名をつけていただけで、本人がそう呼ばれているから答えていただけなのだ。

アリスとは……その昔、図書館に何かの拍子に迷い込んだ人間がつけてくれた名前らしい。

「横島……助けにきてくれたのか……結構時間がたっているが……決着に時間がかかったのか？」

「いいや、悪魔と次元の穴をあける術式を潰すのはそれほどではなかったが、後始末に時間がかかった。次元の歪を直すのは大変だったな……カオスのじーさんとマリアが来てくれたから何とかなったかんじかな？」

「そうか。ドクターとマリアさんも来てくれたのか!? それで二人は？」

「もう帰ったよ。ここに居るとややこしいだろう？」

「……そうだな」

達也は残念そうな口ぶりだ。

よっほどカオスに会いたかったようだ。いやマリアにもだろう。

「リーナさんはなぜ、横島くんにくっ付いているの？ 離れなさい。話しくいでしょう？」

真由美は達也の後に続き横島に近づくが、未だに横島の左腕にしがみついているリーナに注意をする。

「いいじゃない。感動の再会に水をささないですよ」

「感動の再会って、半日も経っていないでしょ？」

「……なんか、一年以上会ってない気がしたの！いいじゃない、私はタダオのガールフレンドなんだから」

「……マリアさんに前言われたでしょ？」

真由美は横島に聞こえないようにリーナの耳元で小声で注意をする。

「なんか、もう大丈夫な気がしたの！タダオは!!」

リーナは開き直ってこんな事を言う。どうやら、本能なのかなにかで、そう感じたらしい。

記憶の封印といえども、奥底の感情まではどうにもならないのだろう。

「じゃあ、私も」

そう言って、真由美は横島の右腕を取る。

「ま……真由美さん？何をー」

「私もこうしたいんです!!」

真由美は頬を膨らませながら横島の腕に自分の腕を絡める。

「ちよ……真由美さん？」

「……お……おにいちちゃん……なんか……こわい……です」

ダンタリオン改め、アリスはそんなリーナと真由美を見て、横島の後ろに隠れてビクついていた。

「リーナに先輩、アリスちゃんが怖がってます。横島さんを離してあげてください」

深雪がアリスの様子をみて、二人に注意をする。

「……仕方が無いわ」

「ご……ごめんね。アリスちゃん」

リーナと真由美はパツと横島の腕を開放する。

「たはははははっ！えー！？たはははははっ！えー！？」

横島は老師の言葉を思い出していた。リーナの好意はなんとなく

わかっていたが……もしや真由美までと……今、色々と思いを巡らせていた。

「これって、雫が帰ったら大変よ……あれ？雫って？あれ？」

「だな、リーナはUSNAに帰るんだろ？となると七草先輩と北山の一騎打ちか」

「七草先輩がまさか横島をつて意外だよな」

「いや……リーナは横島にベタ惚れだからな……素直にそうは行かないぞ」

エリカ、レオ、幹比古はそんな様子を苦笑して見ていたが、そこに意外にも達也が会話に入ってきたのだ。

また、エリカは雫が先ほどまで居た事の記憶が無いが、違和感を感じているようだ。

「深雪もなんかおかしくない？いつもだったら、遠巻きに見ているだけで注意なんてしないのに」

「……まさか横島にね。司波さんが……うーん」

「幹比古!!冗談でもそれは許さん!!」

「達也……本当にシスコンを治せよ。妹が結婚できなくなるぞ」
最後はレオが呆れたように達也の肩をポンと叩く。

この後、横島は公園外延部に張っていた結界を解き、外に皆で出て行く。

周りはいかほどの騒ぎになっており、住民の避難まで行われていた。

軍や警察、各家が総出で、周辺を警備していたのだ。

「恭子さん……来ていたんですか」

「忠夫ちゃんご苦労様。終わらせたのね。……霊能者の勘ね。皆無事のようによかったわ。魔獣とか悪魔みたいなのとか色々出てきたけど、こちらにも犠牲者なしで、何とかできたわ。……どうやら、お絹様のお知り合いも助けに来て下さったみたいだし……」

氷室恭子はベンチでお茶をすすり、横島を待っていたようだ。絹の知り合いとはもちろん小竜姫のことである。

「そうですか、さすがですね……で、十文字先輩はなぜ恭子さんの後ろに付き人のように控えているんですか？」

「横島、皆も無事であったか、今回の作戦の補佐、参謀役をしてくださいったのが氷室殿でな、その伝令役が俺だったわけだ。その甲斐あって、犠牲者はゼロだ」

十文字克人は後ろ手を組んで、ビシツと立ったまま答える。

「そうなの、お茶も用意してくれるし、世間話にも付き合ってくれるし、十文字ちゃんの良い子ね。助かっちゃった」

恭子は微笑み十文字を労う。

「横島よ。途中で可憐な少女が剣を奮い。猛然と戦っていたのだが？お前の知り合いか？」

十文字は横島の耳元まで来てこんな事を聞く。

もちろんそれは小竜姫のことだ。

「……いいいや……その……」

「そうかお前も知らないか、一度話をしてみたいものだ。終わったと思ったら既に姿が見えなかったのだから」

なぜか十文字克人は遠い目をしていた。

「……………」

たぶん無理だろうと横島は思うため、黙っておく事にした。

ちなみに、六道芽衣子は霊気を使い切るまで暴走したため。ぶっ倒れ、六道家に担ぎ込まれている。

この後、軍や警察、十師族らが個々に横島達は質問攻めにされそうになるが、恭子が微笑みながらそれらの組織を説得し、全部の組織をまとめて同じ場所で説明を行う事になる。

恭子や六道芽衣子の活躍を見れば、従わざるを得ないだろう。

皆は記憶を失っているため、横島がでっち上げの話をする事になった。

とりあえずはそれでその日は終了する。
もちろんその日は学校を休む事にはなったのだが……

結局、吸血鬼事件から始まるこの一連の事件は終息を見るが……報道では色々、別次元からの侵略者説、宇宙人説、幽霊説、吸血鬼、妖怪説などと推論推測が横行し、しばらくは収拾が付かない事態となる。

今回の事件で氷室家と六道家の名前はさらに名声を得る事になる。
また、なかなか解決が出来なかつた政府組織や魔法協会などには不満の声が上がり、しばらく突かれる事になった。

政府内の正式な見解では、悪霊、悪魔がUSNAの実験にてこの世界に侵入し、それらが知性を得て、次元の穴を自ら構築しこちらに仲間の引き込みを試みたという事で各組織とも最終的に意見の一致を見る。

これにより、他次元生命体又はプシオン生命体を共通認識とし、パラサイトという名で呼ぶ事も決定している。

また、今回のような事が起きた場合は、内務省から、氷室家及び六道家に正式に要請を行うガイドラインが作られる。これにより、他の組織がパラサイト関連の事件に直接関わる事が難しくなった。ただ、要請があつた場合、軍や警察、魔法協会などもそれに協力しなければならぬ。

横島は、この際、藤林響子を通じて、政府には自分が関わった事を表ざたにしないように要求していた。

USNAでは今回の事件の発端が自国にあることを認め、日本へ補償金の変わりに鉱物資源の提供及び課税優遇などが取り決められた。

今回の事で日本は魔法技術で先に行っており、氷室家、六道家などという十氏族に匹敵する力を有する隠れた名家が存在し、さらに横島忠夫という規格外の人間が居る事が判明し、改めて同盟を強化する狙いがあったようだ。

そして数日後……横島は今日も学校に行く。

192話 横島 平和な日常!! (ほぼ最終話)

『お兄様……お慕い申しております』

達也は学校の昼休みになぜかメイド服の女性に豪快に抱きつかれていた。

何故かそのメイド服の女性は口調が深雪そっくりなのだ。

「おおおお兄様?……これは一体どういうことでしょうか?」

深雪は驚きと共に怒りのオーラを放つ。

「達也さん……ロボットに深雪を……そこまで実の妹の深雪を……」

ほのかは悲しげな目をして達也を見る。

「ピクシーにこんなプログラムを入れた覚えは無い?どうなっているんだ?」

未だメイド服の女性に抱きつかれたままの達也も驚いているようだ。

それは正確には女性ではない。第一高校のロボット研究会で作成された家事サポート用の女性型アンドロイド、名前はピクシーだ。達也はこのアンドロイド作成に力を貸していた。主にはOSを一から組んだらしい。ちなみにメイド服はロボット研究会の趣味だ。

「ほーっ、達也くん。そんなご趣味が」

エリカはいやらしい笑みを称えていた。

「達也……妹型ロボットとは、さすがの俺も引くぞ」

「達也つてやつぱり重度なシスコンだったんだね」

レオと幹比古はそんな達也を疑いの目で見ていた。

「……違う!何を言っている!?!おい横島助けろ!」

達也は欠伸をしている横島に助けを求める。

「おお?ありや?これ、パラサイトが入ってるわ」

横島は暢気そうに声を上げる。

「まじで?」

「なに?」

「ちよ……ちよつとやばくない?」

「お兄様!!今お助けします!!」

皆は横島のその言動で戦闘態勢を取る。

「たはははっ大丈夫大丈夫。悪霊じゃないから、どっちかというの良いほうのパラサイトかな？」

横島は陽気に笑い大丈夫だと言う。

「良いほうって、どういうことよ横島？」

エリカは訝しげに聞く。

「ああ、悪霊が悪い方……うんで、精霊かな、妖精っていえばいいかな？それが物に宿った。そんなもんだ。悪戯はするかもしれないが、特に問題ないって」

「えええー、そんなの聞いたこと無いよ？」

幹比古は新事実に驚く。

「昔の話とかに出るだろ？憑神って、それは大概そういうもんだ」

「まじかー、横島がそう言うなら問題ないな」

レオはそれで納得する。

横島の陰陽師としての実力と知識の高さを信頼しているからだ。

皆はホツとした表情をし戦闘態勢を解く。

「横島さん！なんで、その良いパラサイトは深雪と同じ口調と行動なの？」

ほのかは涙目で横島に食い尽き気味に質問をする。

「憑神ってさ、大事にされた人の思いが形になるんだ。だから達也は、ウシシシシッ」

横島はそう説明しながら、変な笑いを達也に向ける。

「やっぱりそうなんだ……達也さんの思いって。深雪への……妹への愛なんだ……でも負けない」

ほのかは悲しげな表情をするが、なぜか闘志を燃やしだすようにこぶしを握り締めていた。

「お兄様！やはり深雪を一番だと思ってくださっているんですね!!深雪はうれしいですわ!」

深雪は達也をチラツと見て、両手に顔をやり頬を染めている。

「深雪？ほのか？違う違うぞ……おい横島！何を吹き込んでいる!」

「ウシシシシッ、達也観念しろよ」

横島は変な笑いをしながら、達也を冷やかす。

実はこのピクシーには、ダンタリオン改め、アリスの分霊が憑いているのだ。

それは横島がアリスに勧めたこの世界の情報を集めるための分霊先で、動き回っても不自然ではないし、ネット接続で情報も集められるからだ。

深雪に性格やら口調が似ているのは、アリスが横島に人前では人間と同じ振る舞いをするようにといわれたことを分霊にも指示していたから。さらに、深雪から取り出して読んだ本を気に入る、やさしく接してくれた事もあったため、本の中の深雪を表現していたのだ。

そんなことは、もちろん横島は皆には内緒にしている。

そんなこんなで、日常生活が戻ってくるのだが……

大いに変わったことがある。

それは横島が住むマンションは……

「アリスちゃんかわいい！……横島!!まさかこの子に変な事してないでしょうね」

「するわけないだろ!つて、なんで香澄ちゃんと泉美ちゃんが俺の家で掃除してるの?」

「マリアお姉さま……いつ見ても素敵です」

「……聞いてないし、そこ!!お前らも、リビングで何くつろいでるんだよ!!」

「えー、横島の家って昔のマンガあるし」

「ここに来れば、うまい茶菓子があるしな」

「陰陽術を教えてよ。何か教則本とかない?」

「お、お邪魔してます」

「マリアもこいつらに茶菓子を出さないでいいから!!」

「横島さん・お客様は・大切に」

「……雫ちゃんもなんでここに?しかもほのかちゃんと何やってるの

「？」

「マリアについてきた……横島さんの写真を整理して、アルバムを作っているの」

「ここに来れば雪に会えるし、達也さんにも……」

「はくく、なぜか真由美さんも、台所で普通にごはん作ってるし!!深雪ちゃんもなに手伝ってるの!?!」

「横島くん、今日はハンバーグね」

「バランスを考えて、ほうれん草の和え物を作ってます。お兄様も好きなんです」

「……す、好きにしてください」

「パタン……」

「はあ、はあ、……おい、達也とそこのじーさん、そこでなに怪しげなものを作ってるんだ!!」

「横島、ドクターはやはりすばらしい!こんな発想はなかった!!」

「なに嬉しそうにしてんだよ!!」

「フハハハッ、なかなか筋が良いぞ!!小僧!!わしの弟子にしてやろう!!」

「おいーーーー!!やめろーーーー!!この部屋から、世界を破滅させる気か!!」

「……でそこ!リーナはなんでいつもいつも俺のベッドで包まってるんだ?」

「タダオの匂いがする……」

「……なぜかどんどん俺の知らないものが増えてるし」

「ミスター横島と少佐が快適に任務を遂行するために、子作りの……夜の事前準備を」

「何の準備ですか!?!シルヴィさん!あんたいい加減にしないと、住居不法侵入で警察に突き出しますよ!」

「お……おにいちゃん……」

「どうしたアリス?……リボンだらけに……」

「グスン」

「ああー!! 香澄ちゃんもアリスで遊ばない!!」

「だって可愛いんだもん」

「だもんじゃない!!」

ボン!!

「次はなんだ!? って達也!! じーさん!! 俺んちを燃やすつもりか!!」

ピーンポーン!!

ガチャ!

「誰だ? しかも勝手に鍵が開いたぞ?」

「ようこしくまくるん。結婚しくましようるん」

「なにそれ? 遊ぶのと結婚って同じ括りなの? あああ!! 芽衣子さん!! 式神出したまま来ない!!」近所迷惑でしよ!!」

「また来たわねこの年増!!」

「リーナ!! ここで刺激をしたらダメだって!!」

「ふう〜んだ。芽衣はそんな事でいじけないもん」

「いい大人なんだからそんなことで涙ぐまない!!」

「みんなく、ご飯できたわよ」

「「「はい」」」

「おいー、全員飯くってくつもりかー!! はあ、はあ、はあ
……」

しばらくはそんな平和なひと時を皆と過ごす。

だが、別れもある。

リーナは留学過程を終えUSNAに帰還することになった。
空港で見送りに来た横島とその一行。

リーナは涙ぐみながら、横島の唇にキスをする。

「タダオ……また来るから、私をもらってね」

そんな一言を残して……

そして、真由美も第一高校を卒業。

校舎の裏側では……

「横島くん……私は横島くんが好きよ、だから覚悟しておいてね！」

真由美は横島に告白し、笑顔で卒業していった。

しかし……

「リーナ……なんで、今日も俺の家にいる？USNAに帰ったはずだよな」

「マリアにお願いして来ちゃった！」

マリアが居れば、USNAも隣街程度の距離感になってしまいうのだ。

遠距離恋愛など、無いに等しい。

「来ちゃったって……で、真由美さんは今日も、俺んちの台所に……」

「横島くん今日はクリームシチューよ！」

真由美は卒業しても、通い妻をやめるつもりはない様だ。

結果……あまり変わらなかった。

いや、変わった。

「……あの〜小……竜姫姉さん？なぜここに？しかも、どうして味噌汁を作っているんですか？」

めちやくちや怖い笑顔で、真由美の隣で味噌汁を作る小竜姫がそこにいた。

「あれ？要ちゃんは、書齋でなんの札を作ってるの？え？女人禁制札？なにそれ？怖いんだけど」

春休みを利用して、氷室要が横島の家遊びに来ていたのだが……

その惨状？を見て、底冷えするような顔つきで、4畳半の書斎で綺麗な姿勢で正座をし、墨と和紙を取り出し達筆で凄い勢いで女人禁制札なるものを作っていた。

北山家では雫が留学を終え、お祝いパーティーを盛大に行った。

北山家の親戚、北山財閥ゆかりの人たちや会社の取引先から、軍関係者、政府高官までと豪華な顔ぶれ、そこに何時もの面々。

そして、最大の目玉はドクター・カオスとマリアが特別ゲストで呼ばれていた。

これには、政府高官や軍関係者は驚きを禁じ得なかった。ちやつかりリーナが変装して紛れているのはご愛敬。

「横島くん久々だね。いつも雫がお世話になってるよ。横浜の時もね。うーん夏に会った時よりずっといい顔になっているね。なにか吹っ切れた様だ」

ビシツとスーツを決めた存在感のある中年の男性が横島に声を掛ける。

「たははははっ雫ちゃんのお父さん久しぶりっす」

「妻を紹介するよ」

「あなたが横島くんね。雫の母の北山紅音よ」

そこには、スリットが切れ、胸元が大きく開いた大胆なドレスを着たプロポーション抜群の美女がいた。

北山紅音は現役時代は名の通った一流魔法師だった。それこそ十氏族に匹敵するとまで言われていたのだ。

「いつ!?雫ちゃんのお母さん?ええ!?お姉さんじゃなくて?」

「あら、お口が上手なのね。素直にうれしいわ」

「いや、まじでびっくりっす。ずいぶん若いお母さんだ。間違っつてナンパするところだった。なに?雫ちゃんのお父さんってロリコンだった?」

「ロリ……君、流石にそれは……」

「あははははっ、君、全然臆することないのね天然?私もそこそこの

年よ」

「いやー、雫ちゃんと並んだら完全に姉妹っすよ」

「君くちよつといいかしら」

「紅音…あまりいいじめないで上げてくれよ」

「へ？」

「君つてさ、横浜の…『救済の女神』の後継者なんでしょ？氷室の隠し玉って事かしら？」

「たはははははっ、いやーそんな大したもんじゃないっすよ」

「雫はね。君にお熱なの。君はどうなの？氷室から出ることができなの？」

「えー！?!たはははははっ、いやー、どうなんでしょう？」

「ふーん。雫も厄介な男に惚れたものね…君、相当天然入っているでしょ女たらしの」

「たはははははははっ、いやーナンパ成功率が今だにゼロに限りなく近いですか？」

「ふーん。そう。北山…いえ、私を舐めてもらっては困るわ。雫のためにあなを全力で奪うつもりよ」

「えー！?!」

「夫云々じゃなくて、あのドクター・カオスと魔女マリアの友人なんですよ、そのおかげで、雫も魔女マリアと姉妹の様に仲が良くなつて…：将来の身の安全を保障されたようなものだわ。貴方は自分では分かっていない様だけど、それだけの価値がある。だから、雫にとつても、北山にとつてもあなたは全力で奪う価値があるの」

「ちよ、ちよつと…あー！いかん！ここで気持ちいいなんて顔をしてはいかんだ！やわらかいマシユマロが!!やわらかい弾力が!!あつ！」

横島の顔はデレデレである。

紅音は横島の腕をとり、豊満な胸を押し付けていたのだ。

「お母さん!!」

「タダオに何をするの!!」

「横島くんは何をするんです!!」

雫とリーナと真由美は遠巻きで様子を見ていたが、我慢が出来ずに紅音に抗議をする。

「うん？あなた達は七草の子女と、ん？留学生だったスターズの子ね。……雫!!これくらいしないとダメよ！奪うなら全力よ!!全力!!恋は戦争なのよ!!」

「お母さん!!私は自分で何とかするから!!恥ずかしいからやめて!!」
「恋は戦争！そうよ！その通りよ!!」

「……北山家まで本気に、こうしてはいられない七草も戦争です!!」

4人が言い争っている中、横島は女性に引つ張られ、その場から脱出。

「横島さん・マリアと・ダンスを・踊って・くれませんか？」

「マリアく、助かった。ダンス？俺と？下手だけど良い？」

マリアはいつもの服装とは違い、チャイナドレスをゴージャスな中世ヨーロッパ風にあしらったようなドレスを着ていた。

「あつ！マリア、次私も横島さんと踊る」

「マリア！私が先にタダオを誘うはずだったのに」

「マリアさん……やはり強敵だわ」

今後さらに、乙女達の横島争奪戦は激化していくだろう……

今の日常は、横島が望んだ平和そのものだった。

「今って、いい感じだよな……でもアレだよな。やっぱりリーナと真由美さんに雫ちゃんって俺のどこがいいのかな？なぞだ？でも答えないわけに行かないし……どうしよう？」

などと贅沢な悩みを抱えている。平和な証拠なのだろう。

その3人娘だけじゃないぞ横島！

後6、7人……下手をすると10人位いるぞ!!どうする横島!!

世界を救った知られざる英雄……望めば世界を手に入れる力を持っている。……しかし、名誉、権力などは望まない。

ただ、願いは平和と仲間に囲まれる日々……ひと時ではあるがその

願いは今ここに……

そうして、日常が……春休みが過ぎていく……